

ベルがひみつ道具を使うのは多分間違ってる

逢奇流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ベルに不思議なポツケ的なスキルが生えたみたいなの、そんなおはなし

# 目次

プロローグ	1
マイナスからのチュートリアル	15
疑惑の少年	35
サポーター・一日体験	59
結論：ダンジョンに出会いを求めるのは	79
間違いじゃなかった	94
2階層の怪事件	117
冷たい現実	142
【憧憬一途】	158
怪事件の影響	181
神々の宴	199
彼のための武器	

女神のアソビ	215
モンスターたちは止まらない	231
闇派閥	248
神の刃に誓う	265
事件が終わって……	287
弱者の絶望	301
サポーター契約	316
アドバイザーとの相談	329
ハーフのちエルフ	350
闇の残り香	366
シン・サポーター・一日体験	382
相談・面談	396
リリルカ・アーデの奇妙な冒険	412

あいすぶれーく	426
地下水路探検隊	440
不協和音	455
怪魔強襲	468
赤髪の調教師	482
ココガアナタノカエルイエ	500
アイアム・ガネーシャ	515
パーティー結成	528
ごめんなさい	543
アドバイザーの悩み事	556
その出会いは早すぎる	569
力無き者たち	585
心の距離	599

魔法は試練を呼ぶ魔法	613
壁は分厚く聳え立つ	633
最強から逃げのびろ	646
揺れる心	665
秘密基地を作ろう！	679
霊体散歩	694
仮面の襲撃者	707
同行志願	720
リヴィラの街は危険でいっぱい	733
勇者と少年	746
悪意を呼ぶ風	758
水晶柱の挟撃	771
捕獲作戦	785

水面下の思惑	967
ICE BREAK	954
降りしきる雨に灯をともせ	934
灰被り姫抗争	919
どうかこの手を握って	901
君を呼ぶ声	886
無力の代価	873
霧に消えた絆	857
844	
FROM LILIT to BERU	
彼女の苦しみに彼の想い	826
酒神の忠告	813
穴が無いから沈めてた	798

ベルの弱点	1161
運命の分かれ道	1139
灰を切り裂く剣閃	1123
新装備試着	1108
男殺しの怪物は厄災へ	1089
歓楽街は危険地帯	1074
1060	
Revenge Of Smith	
ジャガ丸・ロワイヤル	1044
レベル2と課題	1028
ウラナイXパーティー	1013
不穏な街	998
Next stage	985

試練生誕

二属性回復薬……じゃない、何だコレ

……

黒衣の強襲

サンタインの誤算

ヘスティアの噂調査

蝶のように舞い、蜂のように刺す

1256

カノジヨノ悪夢

力無き者たちの切望

それは少女の小さな願い

それは少女の小さな決意

深紅が見つめる先は

1177

1191

1211

1212

1227

1243

1270

1286

1308

1331

1351

二つの勢力の動向

嵐の予感

闇の中の小さな戦い

妖精の加護

準備は整った

水面下で動き出した勢力たち

探索の途中で

アンチエイン

それでも、彼らは出会った

闘牛猛撃

逆転の兆し

換装！ 翔兎鎧！！

全ての勢力の勝敗を握る者たち

1373

1386

1402

1421

1438

1454

1472

1489

1502

1515

1534

1548

1563

電光雷轟	—————
物語のページ目	—————
思惑の行方	—————
ダンまちってどこにあるの？	—————
再会と一波乱	—————
何れ来る未来を識れ	—————
小さな出会い	—————
大☆暴☆走	—————
炎の少年と薪の少女	—————
主人公へ問う	—————
子供たちのプレゼントづくり	—————
ヒトの戦い、カミの戦い	—————
初めての神会は絶体絶命!?	—————

1769175317391725171016971682166716531637161515961579

異形のモンスター	—————
【英雄願望】	—————
次なる戦いへの予感	—————
ままごと	—————
現実からの侵入者	—————
ヴィトーとの再会	—————
もういない大好きな人たち	—————
時空の歪み	—————
起死回生の切り札はお前だ(震え声)	—————
1907	—————
英雄譚朗読	—————
意外な出会いは突然に	—————
迷子の妖精	—————

195919431927 18911878186518471831181918001784

野球をしたい!

野球でつながる絆

【延長戦】ベル・クラネル二つ名命名!! 【遊

び尽くせ】

プリズンブレイク2123

今、この幸せをカメラに

おとり捜査

悪意たちは嗤った

『PASSPORT Of SATAN』

――

真意を追う

箱庭の街

アブダクション

2126211320972083 | 20642050203620232011 | 遊 19921977

地下・北西・東

迷宮都市逃亡戦

精霊の魔力

デンジャ

彼はどうしてこの世界に来たのか

2201

大いなる一撃 小さな一撃

援軍・クレヨン

嫌な揺れ

汚穢の怪物

スキル×スキル×クリティカル

絶対勝利をもたらすモノ

これが今まで歩んだ物語

2302228522722257224422312215 | 2185217221562142



物語の終わりが始まる瞬間

それは人を殺すモノ

鐘の音と共に

初陣のヴィオラス

ノエルの願い

『穢れていた』精霊

望まぬ結末

それはなんてことは無い日常となった

幕

2436 2416239823842370235623422327



# プロローグ

「ううむ……」

「どうしたの、のび太君？」

日曜日の真つ昼間。

こんなに日差しがいいのに、いつもなら昼寝しているのび太が珍しく真剣な表情で考え込んでいた。

明日は槍でも降るのかしら、と少し失礼なことを考えながらドラえもんは声をかける。

「なにを考えているんだい？ どうせまたしょうもないことだろうけど」

「失敬な!!」

ぶんすかと怒り出すのび太。

だが、彼の前に広げられているのが教科書でも小難しい本でもなく、ただの漫画なのだから。

「なになに？ 『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？』？ 随分と長つたらしい題名だなあ」

内容は、英雄になりたい少年がオラリオと言う街で出会いを繰り返して成長する王道のもの。

あらすじを見る限り、のび太が頭を使うような複雑な内容には見えない。

「で？これがどうかした？」

「空き地で拾ってきて面白かったから読んでいたんだけど、ちよつと意味が分からない字があつて……」

「それで唸っていたのか……」

ふたを開ければ本当にどうでもいい内容だった。

なんで辞書を引かないんだろうかこの小学生。

「……辞書の引き方くらい分かるよね？」

「文字一つのために全ページ確認したら日が暮れちゃうだろう？」

なんで1ページずつ読むことが前提なのだろうか。

ドラえもんはロボットなのに頭が痛くなってきた。

「もういいや、どの字が分からないの？」

「……このページ」

渡された漫画を確認する。

……あれ？

「この漢字。娼館とか、娼婦とかなんのこと？」

のび太の言葉にドラえもんが飛び上がった。

（な、なんてもの見ているんだ！こんな如何にも少年漫画みたいな見た目でなんて破廉恥な!!）

憤りと羞恥で青い顔を真っ赤にしたドラえもん。

堂々と娼館通い？

こんな純朴そうな顔をしておいてとんだエロガキじゃないか！

ストーリーを見ずにそう判断したドラえもんは憤怒した。

こんな風紀を乱す漫画を許していいものか？いやいいはずがない！

「ねえ、ドラえもん。娼館って……」

「そんな言葉二度と使わないじゃありません！」

一人百面相をするドラえもんに話しかけたのび太だったが、今のヒートアップした猫型ロボットはまともに会話できない状態だった。

完全に置いてけぼりなのび太をよそにドラえもんはお腹のポケットをまさぐる。

22世紀の四次元ポケットには、今の技術ではあり得ない奇跡を起こすものがあった。

そんな規格外のアイテム——ひみつ道具を今こそ使う時だ。

「絵本入りこみぐつ」

絵本はいりこみぐつ。

その名の通り、本の中に入ることができるひみつ道具だ。

「教育ロボットとして、主人公が間違った道に行かないように矯正してくる！」

「ベルに会うの？僕も会いたい！」

なにやら興奮しているドラえもんを横目に、スベアポケットから同じ道具を取り出すのび太。

二人はベルがまだオラリオに向かっていない時間軸のページから、漫画の世界に飛び込んだ。



「お祖父ちゃん……」

祖父が亡くなった。

モンスターに襲われて、崖に落ちてしまったらしい。

遺体を探しに行くこともできない危険な場所だ。

ずっと悲しくて眠ることもできないから、夜空を見に来た。

星の輝きを見ている間は、落ち着けるから。

「この先どうしよう……」

僕に両親はいない。

お祖父ちゃんが見死んだ今、僕は天涯孤独の身となった。

このまま、農民として思い出の残る家に留まるか。

それとも、昔諦めた夢に突き進むか。

『オラリオには何でももある。富も名声も、別嬪べっぴんの女神にも会える。』

『英雄にもなれる。覚悟があれば行け。』

「僕は……」

まだ、何も決められない。

大切な家族を失った悲しみから立ち直れない。

白い髪の少年、ベル・クラネルの頬に何度目とも知れない涙が流れそうになった瞬間。

「いたああああ!!」

夜の静寂を引き裂く声にビクリと体を震わせた。

すっかり先ほどまでのシリアスな空気は霧散し、ベルは目を瞬かせる。

そんな彼に更なる衝撃が走る。

「あ、青い化け狸!? モンスター!?!」

そこにはずんぐりとした体形に真ん丸頭。





「なるほどね……ん？」

現在、ベルは自分を迎え入れてくれたヘステイア様の眷属になるために入団の儀式、『恩恵』の刻印を行っていた。

通常、【エクセリア経験値】を蓄積していない【ステイタス】は白紙から始まる。

だが、稀に最初からスキルや魔法を発現させることがあるのだが……

「神様、どうかしましたか？」

「………スキルが発現した。でも、これは？」

な、なにか不味いスキルなのだろうか？

スキルは基本的に本人にマイナスな効果なものではないが、何事にも例外はある。

「ちよつと特殊なスキルみたいだ。長々と考察しているとおじいさんに迷惑がかかるから、もう出ようか。」

そう、ここは「ヘステイア・ファミリア」のホームではなく街の古本屋。

最初の眷属は雰囲気あるところで迎えたいという神様の意向の下、神様の知り合いのおじいさんのお店を貸してもらっていた。

善意で貸してもらっているんだから、いつまでもこの場所を占拠するのは非常識だろう。

「おじいさん!!ありがとうございます！」



力：10 耐久：10 器用：10 敏捷：10 魔力：10

## 《魔法》【一】

ここまでは普通。

まだ、何の経験もないからステイタスは初期値のまま。

魔法がないのは残念だけどこれもいい。

問題はその下。

## 《スキル》【四】フォーエス・デイメンション・ポーチ 次元衣囊

- ・ ひみつ道具を具現化できる。
- ・ 使用可能な道具は一日三つ。
- ・ 一日ごとに内容は変化する。
- ・ 現在使用可能なひみつ道具。

【バイバイン】 【ビッグライト】 【スカートめくり用マジックハンド】

「……うん？」

「ボクも君が初めての眷属だから自信がないけど……ものすごい珍妙なスキルだね。」  
意味不明なスキル説明に目が点になるベル。

へステイアもボクも最初はそんな感じだったと頷く。

「えっと、ひみつ道具っていうのはドラえもんさんが持つ未来の道具だった気が……」

あの日、僕を慰めようとドラえもんさんやのび太君は彼らの冒険を話してくれた。

その中で彼らが使っていたマジックアイテムがそんな名前だったはずだ。

「異世界の道具ってことかい？ だったらすごいじゃないか！」

僕の言葉に神様が目を輝かせる。

たしかにすごい。

二人の話だと、本当に夢のアイテムばかりだから。

「ねえねえ!! さっそく試してみようよ!」

子供のようににはしやぐ神様をほほえましく見ながらスキルを試そうとする。

どれを出そうか？

流石に今日会ったばかりの神様がいる前でスカートめくり用マジックハンドを選ぶ  
勇気はない。

そうなると二択。

バイバインかビッグライト。

(そういえばビッグライトは二人の話によく出てた気がする。)

よし、ビッグライトにしよう。

そう決めた方がいいが、出し方が分からない。

名前を呼べばいいのだろうか？

「ビッグライト〜」

シン、と静寂が部屋を支配した。

神様の戸惑った視線が痛い。というか引かれてないか……？

右手に光が集まって筒状のアイテムが現れるが全く嬉しくない。

「……………え？どうしたんだい急に…………」

「か、勝手に口が」

万能すぎるスキルだと思っただ。

こんなバカみたいな副作用があるなんて…………

「へ、へえ〜これがひみつ道具かあ！す〜いなくかつこいいなく」

空気を換えようとしてくれる神様の優しさが痛い。

ちよつと布団にくるまっていたくなかった僕は、半分意識を飛ばしながら神様に同調した。

もう、なにも考えたくない。

「デスヨネ〜ワアイウレシイナー」

「こ、これはどう使うんだろうね!？」

「デスヨネ〜」

「な、殴るのかな!？」

「デスヨネ〜」

「そ、それともシーツを綺麗にするのかな?!? こうやってグリグリと!?!」

「デスヨネ〜」

「ん? なんかスイツチが……」

「デスヨネ〜……あれ?」

「ポチつと」

「……神様ちよつと待って!! それはっ

—————」

「うわあああああん!!ヘブアイストスヴヴヴヴウウツウ!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!」

「何!!?何!!?どうしたの!?!」

事務仕事を行っていた鍛冶神ヘファイストスの執務室に、突如ツイントールの幼女が泣きながら突入して来た。





# マイナスからのチュートリアル

「冒険者登録をお願いします……」

ズーンという音が聞こえてきそうな雰囲気でギルドの受付に来た少年。

完全に目の光が完全になくなっていて彼に引いて周りに人が集まらない。

「か、確認しますが、新規の冒険者の方でお間違いないでしょうか？」

「ハイ……」

眼鏡をかけたハーフエルフの受付嬢——エイナ・チュールは少年の様子に困惑しながらも、業務通りに羊皮紙に必要事項を記入させた。

「あの、顔色が優れないようですが……」

「すいません。ちよつと昨日困ったことがあって、まだ立ち直れていません。」

白い髪に深紅の瞳の兎のようなヒューマン。

普段は快活であろう少年がこんなにも落ち込むことは何なのだろうか。

少し心配になりながら少年の書いた登録申請書に目を通す。

名前はベル・クラネル。

見た目通り年端もいかない少年のようだ。



わけだ。

ダンジョンに出会いをとか言ってる場合じゃない。

早くお金を稼がないとホントに野垂れ死にだ。

「入団早々……僕って疫病神なんじゃ……」

神様はこれまででしていたじゃが丸くんのバイト以外にも2つ新しいバイトを始めたらしい。

過重労働もいいところだ。

こんなことになっても僕を見捨てずにいてくださることに感謝しかない。

(運命の出会いは今置いておこう。まずはお金だ。何とか稼がないと……い！)

しかし今の僕は装備も碌にない。

【<sup>ファ</sup>ル<sup>ナ</sup>の恩恵】のおかげでゴブリン程度には負けないけど、これでダンジョンなんて無謀だ。

(つていうかダンジョン探索ってどうやるんだろう?)

魔石ってモンスターはどこにあるんだ?

武器ってどこで売ってるの?

必要な書類はさっきのあれだけでいいのかな?

【ヘステイア・ファミリア】には先達はいない。

他の「ファミリア」の人に師事しようにも、対価として出せるものなんてないし……  
(やばい、考えれば考えるだけドツボに嵌っていく。)

だが思考停止はできない。

こんなになっても変わらず僕に笑いかけてくれる神様の為にも、少しでも力にならないと。

(武器もない僕が唯一頼れるのは「スキル」だけだけど、)

皮肉なことだ。

こんな状況に追いやった「スキル」が僕の最後の砦なんて。

思うところはあんだけど手段を選び好みしている余裕はないんだ。

やるしかない。

改めてスキルを確認する。

一日経ってスキルの説明文に変化があったのだ。

《スキル》フォース・デイメンション・ポーチ【四次元衣囊】

- ・ ひみつ道具を具現化できる。
- ・ 使用可能な道具は一日三つ。
- ・ 一日ごとに内容は変化する。
- ・ 現在使用可能なひみつ道具。

【くうき砲】「アンキパン」【とりよせバッグ】

使えるひみつ道具の内容が昨日と違っていた。

僕がこの段階で把握できるのは名前だけ。

ビッグライトはドラえもんさんたちの話に何度も出ていたから効果は分かったけど、今回は初見の名前ばかりだ。

一体何ができるのかまるで分からないが、何とかするしかない。

まず【アンキパン】は多分戦闘には使えない。

と言うか食べられるのだろうかこれ？

後で毒味してみても、問題なかったら夕飯に神様と食べよう。

次に【とりよせバッグ】。

これは……どうなんだろう？

好きなバッグをお取り寄せできると言うことだろうか？

僕にはピンと来ないが、女の人は高級バッグが大好きだってお爺ちゃんが話してたし、神様なら喜ぶかな。

最後に【くうき砲】。

うーん、武器なのかなあ……？

よし、今回のダンジョンではこれを使おう。



まさかのポカミスに先制のアドバンテージを完全に失ったベル。間抜けを晒した冒険者を放置するはずもなく、ゴ布林たちは一斉にベルに襲いかかる。

「ガアアアア!!」

「ほわああああああああああ!!」

慌ててゴブリンの爪を回避しながら、構成されたひみつ道具を確認する。

「え? ナニコレ?」

現れたのは右手を覆う鉄の筒。

スイツチもなにもない。

(ハズレだ……)

これのどこがひみつ道具だというのか。

たまに人気のない露天商に置いてある意味不明なアトじやないか。

(ど、どうやって使えばっ!?)

バカなこと考えてる場合じゃない。

雄叫びを上げながら迫るゴ布林から逃げ出す。

次から次へと対処しきれない。

一騎当千の英雄が何であんなに持て囃されるか理解できた。

数が多いって言うのは普通に強いからだ。

もの凄い当たり前のことが僕には分かかってなかった。

せめて、孤立したゴブリンを狙うべきだったんだ。

(こんなところで死んでたまるか！神様一人を路頭に迷わせる訳にはいかない！)  
必死に手を振り回してゴブリンを遠ざけようとする。

すると、大振りの右手がゴブリンの頭にクリーンヒットした。

ゴイーン!!と鈍い音がしてゴブリンは吹き飛ばす。

「ガアアア!」

(凄い吹き飛んだ!?)

貧弱そうな少年のまさかの一撃に足を止めるゴブリンたち。

ベルの生存本能は今こそ攻勢の時と悟る。

「うわあああああ!!!」

ケンカも碌ロクにしたことがない少年パンチ。

ベテランの冒険者が見れば失笑してしまうそれも腕の筒が鉄製であるために、ゴブリンにとっては十分な驚異だ。

(そうか！これは殴るための道具だったんだ!!)

考えてみればこんな武骨なデザインで精密なアイテムなはずかない。



まさに天啓とばかりにベルはその鈍器を思う存分振るう。

正直使い方を間違えている気はしないが、ベルはその筒でゴブリンの頭を連打した。

「ガア？ガアアア!？」

突然仲間たちを失った最後のゴブリンが狼狽える。

手に装着した鈍器から血を滴らせながら徐々にゴブリンに迫る姿は、この場において狩人と獲物の関係が入れ替わったことを如実に示していた。

心なしか目も逝<sup>い</sup>ちやてるように見える猟奇ウサギから全力の逃走を試みる。

連戦する気満々だったベルは虚をつかれる。

追わなければと考えた時にはゴブリンとの距離はかなり空いていた。

「あーもう、一匹逃がしちゃった。」

さつきまではどこかに行ってくれと思っていたけど、逆転したら惜しいことをした気がしてしまう。

「こんなとき魔法が使えたら、ドカーンって遠くのモンスターも一撃なのに……」

ポツリと呟いた瞬間。

鈍器……じゃなくてくき砲が突然爆発した。

いや違う、筒から衝撃波のようなものを放出したんだ。

「うわ!?これ、ここのうやつなんだ……」

まじまじと手を覆う鉄の筒を観察する。

ひみつ道具の名に恥じない能力だけど、もっと早くに気が付いてたらなあ……

「何で使えたんだろう?キーワードかな?魔法……ドカーン」

再びくうき砲が発動する。

「どうやら「ドカーン」って言うことで発動するらしい。

出来れば説明書もつけて欲しかった。

分かるわけじゃないじゃないかこんなの。

「今からあいつを……って、ああ!?!」

今も逃げ続けているゴブリンに照準を向けようとしたとき、とんでもないことに気が付いた。

「倒したゴブリンに当たっちゃってる!!」

眼下にはさらさらと灰になるゴブリンの死体。

聞いたことがある。モンスターにとって魔石は命の源であり、それが失われるとモンスターは体を保てなくなるって。

「今の一撃で体内の魔石を砕いちゃったんだ……ん?魔石?」

みすみす換金できる魔石を減らしてしまったと落ち込んでいたら、とんでもないこと



一日経って、昨日言われた通りにギルドに向かう足取りは重い。

一人で思い詰めて結果はあの様。

神様が汗水流して働いてる時に何をやっているのやら。

一日で向き不向きが分かるなんて思わないけれど、突きつけられた現実の味は想像以上で苦かった。

「お待ちしていました。こちらの相談室で詳しい説明をさせていただきます。」

受付に行く就先日のハーフェルフの女性が待っていた。

ダンジョンでの規則とかを教えてもらうのだろうか。

……ただ、他の職員の人たちの視線が気になる。

どうしてみんな僕を見ているんだろう？

ひよつとしてウジウジした気持ちの外に出ちやっっているのだろうか。

受付嬢さんはこの視線を全く気にしているそぶりを見せない。

というより、あえて無視している気もする。

何だか居心地が悪くて、足早に僕は相談室に向かった

「クラネル氏、まずはこちらをお受け取り下さい。」

相談室に入った僕は部屋に用意されていたバッグを受け渡された。

これ……中に何か入っている？

「これは初心者の方に向けてギルドから支給される初心者キットです。中にはライト・アーマー鎧やナイフ、ダンジョン1階層のマップが入っています。それと、こちらのバッグパックはこのレッグホルスターと合わせてダンジョン探索でお使いください。」

「え……いいんですか？こんなに頂いて」

「気にしないでください。これは支給品です。後払いでお金も払ってもらうことになり  
ますし」

これは凄い。

さっきまで頭を悩ませていた装備の問題が一発で解決してしまった。

「サイズは合っていると思いますが、念のために確認をお願いします。」

受付嬢さんに言われ、装備を身に着ける。

私服の上に軽い鎧。

間違いなく最低ランクの装備がこんなにも心強い。

「大丈夫そうです。ありがとうございます。」

「それはよかったです。それと、ご希望されていた迷宮探索アドバイザーの件ですが、私、エイナ・チュールが担当することになりました。」

迷宮探索アドバイザー。

ノウハウが全くない僕が申請した無料のサポート制度。

「この優しそうな人が担当してくれるのか。」

「よ、よろしく願います!」

「こちらこそよろしく願います。それで提案なのですが、話し方を砕けさせていた  
だいてもよろしいですか?」

「はい、大丈夫です。」

「ふふ、ありがとう。これからは二人三脚になるから、気安い関係を作っていきたい  
んだ。よろしくね?ベル君。」

「こちらこそ……チュールさん」

「エイナでいいよ。」

事務的な口調だった先ほどと違い、親しみやすい雰囲気になった受付嬢——エイナさ  
んとのやり取りで僕はすっかり真っ赤になってしまった。

この人はエルフの血を受け継いでいるだけあつて凄いい美人だ。

女の人とのやり取りなんて慣れないから、ついしどろもどろになってしまふ。

(考えてみれば僕、この人の前でアドバイザーの種族希望をエルフにしてたような……)

あの時は何も考えてなかったけど凄いい恥ずかしいことではないだろうか。

自分の性癖をバラしてるわけだから。

「明日から迷宮について勉強していこうと思うから、時間は空けておいてね。」



「すいま——」

「ねえ、ホントにいいのエイナ？あの子のアドバイザーになっちゃって」

受付に着いた時、不意にエイナさんを見つけた。

同僚のヒューマンと話しているらしい。

勝手に聞くのも良くないから離れようとしたが、その内容は僕についてらしい。

つい、足を止めてしまう。

「確かにあの子がいつ死ぬかで賭けをしているみんなは不謹慎だと思うけど、正直あの子が長生きできる気は私もしないよ……」

女性の言葉に目を見開く。

確かにギルドに来た時に他の職員の人たちから妙な視線を感じた。

暗い気持ち表情に出てるからだとあまり気にしてなかったけど、そんなことをされていたのか。

「……………私も売り言葉に買い言葉で熱くなっちゃったとは思っているけど、後悔はしてないよ。」

エイナさんは同僚の言葉に毅然とした態度で答える。

「私たちの仕事は冒険者の支援だよ？彼らの死を玩具にすることなんて、どんな理由があってもあっちゃいけない。私が担当になって、みんなの予想以上に彼が生きていれ



ば、金輪際あんな賭けはしないって約束を守ってもらわないと。」

「エイナのそういうところは凄いなと思うけど、いいの？ エイナ、今は怪物祭とか、次回モンスター・フェアの神会の資料作りとかやることいっぱいあるじゃん。初心者のアドバイザーなんてやってる暇ないんじゃない？」

「大丈夫だよ。どっちも余裕をもつて作業できるスケジュールにしたから、一人くらいなら担当冒険者を増やしても平気。」

同僚の人が言うエイナさんの多忙さに、僕は自分の考えの浅さを恥じた。

当然じゃないか。ギルドはオラリオの行政機関としてダンジョン以外の業務も行う。

冒険者のサポートだって彼女たちには大きな負担だったんだ。

「平気なわけないじゃん！ ダンジョンの講習だってエイナしかやってる人いないよ？」

「でも、必要なことだから。どんなに才能があっても、ダンジョンでは何があるか分からない。そういう時、対処法を知っているかいないかは重要だから。」

立ち尽くす。

悲劇ぶっていた自分が滑稽だ。

自分がどれだけ恵まれていたか気が付いてしまった。

「今まで色んな冒険者の人たちを見てきたけど、その殆どが帰って来なかった。……私  
はそれを無駄にしたくない。今生きてる冒険者のために、彼らが残したものを伝えたい

の。出会ってすぐお別れなんて嫌だから。」

「…………でも、バックバックとホルスターはやりすぎじゃない?」

「うっ…………確かにあまり良くないけど、彼には必要だと思ったし。」

「まぶた瞼が熱くなって視線が下がってしまう。」

自分の情けなさが嫌になる。

神様だけじゃない。こんな、今日会ったばかりの人にも支えられている。

普通の初心者以下の僕はこの人たちの足を引っ張ってばかりなのに。

「絶対に死なせないよ。私は夢に向かって一直線な冒険者たちを応援したいから。」

…………強くなろう。

才能があるかないかなんて関係ない。

こんなにダメな僕を支えてくれる人たちに応えるためにも。

ベルはあふれる涙にそう誓った。

「はい、じゃあ今日は大辞典5冊分覚えようか。」

「え?！」

「大丈夫、時計の針が12回回るまでには終わるから。」

「え?！」

そんなことがあつた次の日、受けた講習はとんでもなく過酷だった。

実はエイナさんは冒険者たちの間では超スパルタ教師と知られ、どんな冒険者でも耐えきれなくなつて逃げだすハードな勉強は妖精フェアリー・プレイクの試練と恐れられていると知つたのは少し後のことだ。

「はい、確認。多対一の状況での立ち回り方は?！」

「え、えつと…足を使つて一対一を心掛けること。」

「背中を見せずに正面から相手することが抜けている。やり直し」

僕、ダンジョンに行く前に力尽きるかも……

真っ暗になった窓に映る自分の顔が心なしか痩せてしまった気がした。

## 疑惑の少年

「ヘスティアちゃん。最近調子いいわねえ〜」

「ボクの『フアミリア』は冒険者の子も加わって今は勢いに乗ってるからね。おばちゃんも入らないかい？」

「あははっ、遠慮しとくわ。ヘスティアちゃんもしっこいわねえ」

ベルがダンジョンに潜るようになって数日経った頃、ヘスティアもヘファイストスに紹介してもらった『ジャガ丸くん』の屋台のバイトに勤いそんでいた。

始めたばかりだった時は屋台の機材を爆破して崇り神呼ばわりされもしたが、ようやく慣れてきた気がする。

ヘスティアの親しみやすい雰囲気もあって、客からの評判も悪くない。

「それじゃあ、今日も頼んだよ〜」

獣人の女性が手を振って離れていく。

仕事を始めたばかりの頃は先輩店員が付いていたが、最近は一人で店番をすることが多い。

仕事が生に思われるのは嬉しいが、やるが多すぎていつもフラフラに

なつて帰ることになる。

(でも今日はとつておきのひみつ道具を持ってきたんだ♪)

ニヤリ、とほくそ笑む。

ビッグライトの件から分かるように、ベルの【フオーズ・テイメンション・ポーチ四次元衣囊】から取り出したひみつ道具は他人でも使える。

今朝、ベルが取り出したとあるひみつ道具をヘステイアは職場に持ってきていたのだ。

「アラビンのランプ」

ベルがひみつ道具を取り出す際の特徴的な音程をマネしながら、ランプ型のひみつ道具を取り出す。

聞いたばかりの頃は驚いたけど聞きなれるとテンションが上がる。実に神好きな趣向だと思う。

見た目はただのランプだが、ヘステイアがランプをこす擦ると中から煙の魔人が現れた。

新しいホームでこのひみつ道具を使ったときは大騒ぎだったけど、この魔人は素晴らしい存在なのだ。

「はあい、ご主人様」

「ケムリ君。確認するけど、ボクのお願いは何でも聞いてくれるんだっただよね?」

「もちろんです。ご主人のお望みは何でも叶えることになっているのです。」

どんな仕事でも人手が足りないなんてザラだ。

しかし、このひみつ道具があれば簡単に働き手を増やすことができる。

この魔人に機能を聞いた時にヘステイアは思いついたのだ。これがあれば楽ができる。

元来、怠け者気質のヘステイアは思いついてしまったらその誘惑に抗えない。

そんなわけで今日もダンジョンに向かおうとするベルに頼み込んで持つて来させてもらったのだ。

「それじゃあ新しいジャガ丸くんを揚げてくれ、やり方は……」

「待つてください。つまらないことでご主人様を働かせたくありません。大丈夫です。」

「そうかい？なら頼んだよ！」

少し心配だが、厨房にはレシピが書いてあるから大丈夫だろう。

これでヘステイアは客引きに専念できる。

この仕事だけなら仕事が終わってもそう疲れることもない。

（体が二つになればいいのについていつも思ってたし、今日ぐらい構わないだろう。頑張ってきた自分へのご褒美だ。）

これ进行を思いついた自分を褒めてやりたい。

一日だけしか使えないひみつ道具だ。じゃんじゃん使っていかないと。

「むふふふふ……ん？なんか向こうが騒がしいな？」

テキパキと開店の準備をしていたヘスティアはストリートの向こうが騒がしいことに気が付いた。

何事かと野次馬根性全開でのぞきに行く……

「ご主人様がジャガ丸くんを揚げろとおっしゃるのだ。」

「何?! なんなの?! モンスター?!」

「揚げ方を教えろ。」

「助けてええええええ!! 冒険者様ああああああ!!」

なんと煙の魔人は獣人の女性を捕まえて厨房に引きずり込もうとしていたのだ。

どうみてもガラの悪いチンピラにしか見えない煙の魔人の悪行に、仰天したヘスティアが割って入る。

「待った待った!! 揚げ方ならボクが教えるって言っただろう?! おばちゃんを放すんだ!」

「こんなつまらないことでご主人様を働かせたくありません。」

「なら、やらなくていいから!」

「一度受けた命令は必ず遂行します。」





（ははあん？ベル君も男の子だなあ〜）

どうやらベルはヘファイストスの店の武器に憧れているらしい。

オラリオ有数の鍛冶ファミリアの武器となれば、駆け出しの冒険者の懐にはきついでろう。

——よし！ここは主神の威厳を見せる時だ。

ホームが壊滅したとはいえ、ヘステイアにも多少のヘソクリはある。

ベルにあの武器をプレゼントすれば好感度はうなぎ上りだ。

ベルはやがてシヨウウインドウから離れて帰路につく。

ヘステイアは十分に少年が離れたことを確認してコソコソと商品の値段を確認した。

「どれどれ……んげ!？」

ベルが見ていたのは飾り気のない短剣。

これならいけるかと期待した瞬間目に入る800万ヴァリスの値札。

「あ、無理。許せベル君……」

家一つ建てられる大金にヘソクリ程度が叶うはずもなく、撤退を決めこむ。

教会が崩壊してギャグみたいな額の借金のある「ヘステイア・ファミリア」に高級ブ

ランドを買う余裕はない。

（贅沢は敵だぜ、ベル君……）



「神様！今日の稼ぎです。」

「う、うん。」

ベルから渡されたヴァリス金貨を確認する。

最近のベルは妙に張り切っている気がする。

稼ぎも駆け出し冒険者とは思えないくらい多い。

ただ妙だ。

これは冒険者としてのやる気だけじゃない気がする。

何かを隠しているのではないか。

「むむむ……」

別に悪いことじゃなければ何をしようがベルの自由だ。

しかし自分に隠し事をされるのはムカつく。

(なんだいベル君。ファミリアなのに……)

出会ってまだ2週間もない二人だが信頼関係は確かにできていたはずだ。

少なくともヘスティアは最初の眷属がベルでよかったと思うくらいには少年に好感を持っていた。

しかし少年にとってはそうではなかったのだろうか。

思った以上にショックを受けている自分に驚く。



上着を脱ぎ、ベッドにうつ伏せになる。

ヘステイアはそんな彼の背中に指から流した血を垂らす。

ベル・クラネル

L v. 1

力：I51↓I59 耐久：I8↓I9 器用：I65↓I70 敏捷：I100↓

H111 魔力：I0

《魔法》〔一〕

《スキル》〔四〕フォース・ディメンション・ポーチ次元衣囊

- ・ ひみつ道具を具現化できる。
  - ・ 使用可能な道具は一日三つ。
  - ・ 一日ごとに内容は変化する。
  - ・ 現在使用可能なひみつ道具。
- 〔タイムふろしき〕〔ガリバートネル〕〔通りぬけフープ〕

ステイタス更新の先達であるヘファイストスによると冒険者の成長には個人差があり、一ヶ月で全ステイタスがH評価になれば優秀。Gが一つでもあれば出来過ぎらし

い。

どの程度上がれば成長が鈍化するかはまだ分からないが敏捷はこの調子なら一ヶ月以内にGに届くのではなからうか。

(最も耐久は全然成長していないけど)

ヒットアンドアウェイを忠実に行うベルの戦い方は耐久が上がりにくい。

そのため敏捷と両極端な数値になっているのだ。

……問題はしばらく上がりもしなかった耐久が上がっているということ。

(これはつまり、攻撃を何発か食らっちゃうくらいに無茶をしたってことだ。)

自分に内緒の何かのために。

ぐぬぬ……と不機嫌になるヘスティア。

やはり問い詰めねば。

「はい。これが更新結果だよ。今日のひみつ道具は【タイムふろしき】【ガリバートンネル】【通りぬけフープ】だよ」

「！【タイムふろしき】ですか!?それは知ってます。昔の卵を復元して育てる話が印象的だったので……それに【ガリバートンネル】かあ！良い物が二つも出てきましたね！」

この珍妙なスキル発現のきつかけとなったと予想される人物を思い出させるひみつ道具を懐かしそうに語るベル。何だかオーバーな反応すぎる気がする。また例の隠し

事が関係しているのか。

そうかーよかったねーと適当に話を合わせつつ、ヘスティアはベルの腕をガッチリとガードした。

「へ？」

「これで逃げられないぞベル君！さあ、隠し事を吐け!!」

そのまま少年を逃がさないように上体を倒すヘスティア。

ギューッと密着した女神の圧倒的なナニカの感触に赤面するベルを問い詰める。

「な、なんのことですか!?!僕はっ、隠し事なんて……」

「神に嘘はつけーん!!」

尚も隠し事を話さないベルにますます強情になるヘスティア。

そのまま我慢比べが展開されるかと思いきや。

「通りぬけフープ〜」

ベルが気の抜ける声を発した瞬間、ヘスティアはベルの感触を見失った。

気が付くとベッドには穴が開いており、そこを通過してベルは拘束を抜け出したらしい。

ひみつ道具・通りぬけフープをさっそく使用したベルはベッドの隙間から滑るようにドアに走った。





ナアーザとは「ミアハ・ファミリア」唯一の眷属シアンスロープの犬シアンスロープ人の女性だ。

その犬シアンスロープ人にベルがアクセサリーシヨップのことを聞いていた？

(まさか、ナンパか!?)

混乱しきつたヘスティアの脳裏にはたばこ型お菓子を啜えて女を侍らせるベルが浮かんでいた。

ガーン!と衝撃を受けるヘスティアには「それと店にあつた壊れた呼び鈴を持って行ったな」というミアハの言葉は入ってこない。

「ぐぬぬぬぬ!!くっそー!!」

「へ、ヘスティア?」

不満に近い感情が積もる中、ヘスティアが店の窓の向こうにベルを見つけてしまう。

そこでベルはハーフェルフの女性に箱を渡していた。

女性は箱を開けると何やらからかうようなことを言ったらしい。

女性におちよくられて真っ赤になるベル。

——ムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカム

カ!!!!!!!!

「○※◇ー&×▲!!!?!?!?」

「ど、どうしたのだヘスティア!」



毛布で体をくるみ、丸い小山となったヘステイアはベッドの上で悶々もんもんとしていた。たかが眷属が女性にプレゼントを渡しただけで何を大袈裟などヘステイアも思わなくもない。

自分がこんなに独占欲が強いと初めて知った。

この子はボクの子なんだ、君はボクだけ見てくれと駄々を捏ねる子供のようないで胸の中がぐちゃぐちゃになる。

「初めての眷属が君じゃなければ、ボクもこんなに執心しなかったんだろうなあ……」想像できる自分が悔しい。

これ以上考えていると頭がおかしくなりそうだからもう寝てしまおう。  
まぶた 瞼を閉じるとやがてヘステイアは微睡みに身を委ねた。

トントントン、とりズミカルに何かを叩く音が聞こえる。

どれだけ寝ていたのだろうか、体の節々が固まり怠さを感じる。

何とか首だけ動かしてみるとキッチンに白い髪の少年が簡単な料理を用意していた。「あ、起きたんですね神様。よろしければご飯にしませんか。」

「うん……」

のそのそとベッドから古ぼけたソファアーに移る。

配膳するベルの様子はどこかそわそわしていて、何か良いことがあったのだと察することができた。

……気に入らない。

こんな何でもない瞬間でも嬉しくなってしまうからこそ、ヘステイアは大人げなくそう思ってしまう。

「随分〱機嫌だね。何か良いことでもあったのかい？」

言ってから後悔する。

目を合わせることなく、こんなことを言うなんて嫌な態度だ。

ベルの前でだけは背伸びして立派な神様でいたかったのに。

「えっ？」

一方のベルは少し狼狽えた後、軽く頬を染めて頷いた。

どうやら先ほどのあれは上手くいったらしい。

自分で話を振って勝手に凹む<sup>へこ</sup>ヘステイアに気づくことなくベルは待つていてくださいね、と部屋を出ていく。

一人になり、心細さからうつむくヘステイア。

戻ってきたベルはそんな彼女に小さな小箱を渡した。

それはあのハーフェルフの女性に渡していたものと同じ。

「神様……これを受け取って下さい。」

「……………え？」

余りにも予想外の言葉に反応が遅れてしまう。

これはハーフェルフの女性へのプレゼントではないのか？

「前のホームがあんなことになって、神様の小物も満足に買えなくなってしまうけれど、少しでも神様に感謝を伝えたくて。」

「あ、開けていいのかい？」

「はい」

恐る恐る木でできた小箱を開いた。

カポ、と木製製品特有の耳心地の良い音と共に蓋が外れる。

その中に入ったのは一組の髪飾りだった。

上質な材料で作られたと思われるそれは、青と白の花弁のようだ。

そして、花弁の中央にある鈴は一目見ただけで高名な職人が作った代物だと分かる。

ふと、ヘスティアは気づく。

それはあの日、彼女が目を奪われた商品にそっくりだと。

「えっと、神様のお召し物が古くなっていたみたいだったので……」

（そうか、あの時見られていたのか……）

赤くなりながらしどろもどろに説明しようとするベル。

だがヘステイアはそれを聞くより先にすべてを理解した。

最近のベルの不審な言動は全てこのためだったのだ。

「こんないい髪飾り、高くなかったのかい？」

「いえ、実はその髪飾りは手作りなんです。ナアーザさんにアクセサリーショップを教  
えてもらって材料を集めました。」

「て、手作りだって!？」

仰天する。

言われてみれば高価な素材のわりに技術自体は粗っぽいのかもしいない。

「本当はちゃんとしたものを買ったんですけど、お金には余裕がなくて……安物  
じゃ意味ないですし、それなら材料を集めて作ってみようと思ったんです。」

「確かに材料代だけなら比較的安上がりかもしれないけど、これに使っているリボンだ  
けでもかなりの値段の上物だろ？ましてやこの鈴なんて何万ヴァリスとする代物だ！」

「リボンの方は頑張って稼ぎました。鈴についてはズルをしたんです。」

ベルは今朝のステイタスを写した用紙を取り出した。

少年は文字列の中でも目立つスキルの項目を指差した。

「今日使用可能なひみつ道具、【タイムふろしき】【ガリバートンネル】が役に立ちまし

た。」

「この二つが？どんな能力なんだい？」

「【タイムふろしき】は包んだ物の時間を巻き戻すアイテムで、【ガリバートンネル】はくぐったものを小さくするアイテムです。」

どちらもドラえもんなる存在の話に出てきたので覚えていたらしい。

でもそれでどうやって鈴を？

「実は、【青の薬舗】が借金を抱える前に使っていたらしい壊れたドアベルを譲ってもらったんです。」

心地いい音が鳴るようにオーダーメイドで頼んだ一品であり、かつては都市一番の薬剤系派閥【ディアンケヒト・ファミリア】ともしのぎを削っていたという【ミアハ・ファミリア】が大金をかけて用意した秘かな自慢だったのだとか。

生憎、破損してしまっていたので借金返済の足しにはならず、しかし捨てるのももつたいたいと物置の奥で埃をかぶっていたらしい。

ベルはナーザとの交渉の末、回復薬ポーション一か月分を買うことを条件に譲ってもらえたのだ。

そして入手した壊れたドアベルを【タイムふろしき】で修復。

鈴部分を取り外した後、ガリバートンネルで大きさを調整してアクセサリーにしたら



しい。

(今朝の更新でベル君がひみつ道具に反応したのはこれを思いついたからか……)

「これをつくるために、ダンジョンでダメージを食らうくらい必死に稼いでいたのかい？」

「えつと、……はい。情けないですけどそうです。」

「君は実に馬鹿だなあ……」

冒険者になってまだ一ヶ月も経ってない。

覚えることもやることも多くて、今でもたまに目を回しているのに無茶をして。

「それで僕のアドバイザーの人に同じ女性としての意見を教えてもらって、今日ようやく仕上げられたんです。」

それが真相。

全ては純真な少年の精一杯の真心。

さてはミアハは知っていたな？

教えてくれればこんなに恥ずかしい思いはしなかったのに。

でも、そんなことはいい。

「改めて言わせてください。僕は神様に返しても返しきれないくらいに感謝しています。ヘスティア様が僕の主神様でいてくれることは、僕にとって幸福なことなんです。」

自分で言つて照れてるのか、耳まで真つ赤なベルは顔が羞恥で下がりそうになるのをこらえながら思いを伝えた。

そんな少年がひどく愛おしい。

胸に広がる温かさが彼への気持ちを確認づけたのをヘステイアは感じた。

「なあベル君。つけてくれよ」

「え？」

「この素敵なプレゼントを君に着けてほしいんだ。」

今の自分は世界で一番幸福な神だ。

自信を持ってそう言える。

こんな素晴らしい眷属に、こんな素晴らしい贈り物をもらつたんだ。

この幸せを世界中に分けてやりたいくらいだ。

「し、失礼します。」

恐る恐るベルはヘステイアの艶やかな髪を束ねる。

黒瑪瑙オニキスのような気品ある色合いにベルの作った青と白の華は良く映えた。

やや非対称だが、ヘステイアのトレードマークともいえるツインテールが出来上がる。  
ヘステイアは鏡に映る己の姿を決して忘れないだろう。

「……なあ、ベル君」

「はい？」

「大好きだぜ。」

鏡の中の自分は頬を染めていた。

悠久の時を天界で生きてきた炉の女神は、今日初めて抱いた気持ちこそ少年に伝える。

言葉は何の飾り気もなく。一直線ストレートに。

ややあつて、ベルもヘステイアの言葉に嬉しそうに返す。

「はい！僕も神様が大好きです！」

少し照れてるようだがそれでもいつも通りの反応。

やっぱり気が付かないか。

予想はしていたがそれでも脱力する。

「……ま、いいか！」

この晴れ晴れとした気持ちの前にこれ以上の言葉は蛇足だ。

ボクの大好きの意味は後でじっくり分かってもらえばいいさ。

「ボクも君みたいな子が最初の眷属ファミリアで幸せだよ。これからもずっと一緒に頑張っていこうぜ。ベル君」

「はい！」

この日、薄暗い地下水路の一室から笑顔が絶えることはなかった。何でもない話題で盛り上がり、同じことで喜び合う家族の時間。

その中で時折少年が贈った髪飾りの鈴だけがリン、と澄んだ音色を奏していた。

## サポーター・一日体験

今日はギルドの資料室で勉強をしていた。

内容は現在の到達階層である3階層の復習と少し上の階層から現れる毒をもつモンスタースターの確認。

このあとに出題されるテストを何とかクリアしなければ、また帰る時には外は真つ暗だろう。

死に物狂いで参考書を読んでいるとエイナさんが山ほどの羊皮紙を持ってきた。

「ヒエッ」

思わず変な声が出てしまう。

テスト多すぎじゃないだろうか。

しかも単語を埋めるタイプじゃなくて文章を書く本格的なやつだ。

山ほどある紙の殆どは参考資料らしいが制限時間ないに纏められるのだろうか、僕。

お伽噺以外の活字なんて読んでこなかった僕には、あのびつしりと詰められた共通語コイネーたちが悪魔に見える。

うー、うー、と唸りながら何とかペンを動かす僕を時折資料室に訪れる職員たちは「ま

たチュールに捕まった冒険者か」と苦笑した。

やがて精魂尽きながらもなんとか答え終えたテストを採点しながら、エイナはベルに尋ねた。

「ねえ、ベル君。サポーターは雇えそうにないかな?」

「サポーターですか? ちよつと難しいです……」

サポーターは魔石やタンジョンを冒険者の代わりに回収してくれる非戦闘員だ。

ソロでやっているとそういった作業に時間をとられて満足な収穫を得にくいから最低でも一人欲しいのが現実。

しかしサポーターを雇うためには無視できない問題がある。

「サポーターとの契約の相場っておいくらですか?」

「うーん。契約内容にもよるけど前金10000ヴァリスは必要かな。」

「前金はつてことは仕事の後でまたお金があるんですね。やっぱり無理です……」  
前金の時点で今の僕の収入の大半が吹っ飛ぶ。

収入の中から自分の装備やアイテムを補充する余裕すらなくなるのは論外だ。

それならソロの方が稼げる。

「そつか。今は仕方ないけど、いずれさらに下層を目指すならサポーターの力は必要だよ。覚えておいて。」







階段を下りてダンジョン一階層に到着した「ヘステイア・ファミリア」一行。

ヘルメットを被り、いかにも探検家！といった様子のヘステイア。

なんでこんな衣装を極貧派閥ファミリアが持っているのかと言うと、今朝のステイタス更新で判明したベルの使用可能なひみつ道具の一つである「きせかえカメラ」のおかげである。

「せっかくダンジョンに行くならそれらしい格好をしたい」というヘステイアの要望により、動きやすい服を作ったのだ。

最も名前のおかげで効果はわかつても使い方がわからず、最初は着る服を決めずにひみつ道具の効果が発動してしまい、大変なことになった。

具体的なこととは思いつ返すとベルは探索どころではなくなるので省かせてもらう。

敢えて一つだけ言うなら祖父の「覗きは男のロマン」と言うセリフが頭のなかでグワングワンとリフレインしたと言うことだ。

そんな訳でダンジョンに行く前から疲れはてていたベルは、結局ピクニック気分のみま来てしまったヘステイアに気を配る。

（まだ出会って一ヶ月も経ってなくても分かる。こんな時の神様は必ず何かをやらかす。いざとなったら僕が神様を守るんだ。）

可愛らしいリュックを背負い、ほへと警戒心ゼロで通路を進むヘステイアをハラハラしながら見守る。

「神様、ダンジョンでは警戒を……」

「あ、ゴブリンはっけーん。イエーイ。」

「いつてるそばからなんて無警戒な!?危ないから離れてください。」

「おいおいベル君。ゴブリンだぜ?最弱のモンスターなんてーぐはあああああああ  
あ!!!」

「神様ああああああ?!」

嘗め腐った態度に腹をたてたのか、ゴブリンが放った大振りのピンタをまともに食らうへスティア。

ゴブリンを大慌てで倒したベルは地面に転がるへスティアに駆け寄った。

「な、なんて凶悪なんだゴブリン……!ベル君はこんな危険地帯にいつも潜っていたのか……?」

何やらワナワナしながら言っている神様の姿に脱力する。

生きた心地がしなかった。

その後も神様は凄まじい無警戒ぶりでアクセントを呼び寄せる。

通路の曲がり角を無警戒で突き進みゴブリンと鉢合わせたり。

僕がモンスターと戦っている間に魔石を見つけたとかで勝手に動き、モンスターの群れを引き寄せたり。



見渡した。

「しかし不思議なとこだねダンジョンは。まるで人口の迷宮みたいに道が整っているじゃないか。」

「二階層は特にその性質が強いみたいですね。上級冒険者の人たちもしたの階層に行くほどに巨大な存在の意思を感じるようになるみたいです。……時々怖くなることです。」

オラリオに来てから毎日のように潜っているダンジョンだけど、その実態は謎に包まれている。

偉い学者の人たちがあれこれ説を考えているけどはつきりとした答えはない。

そして、全てを知っている神様たちはそんな僕たちの疑問にこう答えてきた。

「ダンジョンはダンジョンだよ」

神々が降臨されてから千年近く繰り返されてきたやり取り。

答えは自分たちで探せということなのだろうか。

神様はそれ以上の問答は望まず、持ってきたリユックの中をゴソゴソとあさり、いつの間にか入っていたジャガ丸くんを取り出した。

「もうすぐお昼だし、腹ごしらえしようぜ。昨日おばちゃんから貰った賄いが残っていたんだ。」

差出されたジャガ丸くんを受け取り、少しかじった。

屋台で出された時のようなホクホクとした温かきはないけれど、しみ込んだソースの濃厚な味わいが口の中に充満する。

「こうやって休憩時間に食べる弁当は格別だ。」

「これを食べたらまた出発するかい？」

「いえ、今日は魔石の収集以外にもやりたいことがあるんです。」

「やりたいこと？」

神様の問いに持ってきていたメモを差し出す。

そこにはいままで使ってきたひみつ道具の名前と能力がイラスト付きで記入されていた。

「ボクのスキルフォース・ディメンション・ポーチ【四次元衣囊】は強力ですが博打の要素が強いものです。使いこなすためにはスキルの研究をするしかありません。だからいままで使ってきたひみつ道具をメモにまとめているんです。」

ベルの言葉にヘステイアはなるほど、と頷く。

ぶつつけ本番で使って思い通りの効果が出なかつたとなつたら悲惨だ。

ビッグライト事件のように取り返しのつかない事故につながることもあるのだから、ひみつ道具の確認は急務だろう。

しかしここでヘスティアの神としての勘が警鐘を鳴らす。

「ベル君。その作業は必要だと思うけど、かなり危険かもしれない。ひみつ道具の中にはボクたちでは手に負えないものもある……と思う。勘だけどね。」

神の勘は理屈こそないがかなりの確率で真実をついていることが多い。

ヘスティアは神託を司っているわけではないが、勘の精度はかなりのものと自負している。

その彼女がひみつ道具を無暗に試す危険性を説いた。

「そう、ですね。前に使ったくき砲も充分危険なものでしたし、それ以上がないとも限りません。だから、一般人のいないダンジョンで試そうと思っただけ……」

難しい話だ。

ベルも間違ったことは言っていない。

自分の手札を理解しないままできていいはずがない。

しかしヘスティアの言う通り、そのための実験でリスクを負うのも避けたい。

「まあ名前だけでも効果が分かりそうなものもあるし、ある程度データが集まれば効果も推測しやすくなるさ！ 気にしすぎても仕方ない。」

ヘスティアはそう切り替えるとリュックの中にしまったひみつ道具を書いたメモを取り出す。

今日のひみつ道具は「きせかえカメラ」「カドボール」「くうきクレヨン」。きせかえカメラは先ほど使い、効果も分かっているから他の二つの検証をしよう。

「どれからにする？」

「まずは二つ出してから決めましょう。」

周りを確認する。

冒険者のスキルは秘匿事項だ。

できるだけその存在は知られないほうがいい。

……そうでなくともあの副作用を他の人に見せたくはない。

まだそこまで吹っ切れていないんだ。

「それじゃあ……コホン、カドボール」

手の中に四角いガラス瓶が現れる。

中には緑色の液体だ。

おそらくは薬のような液体であろうそのひみつ道具。

ラベルには効能や使用方法が書いてあるようだが、異世界の文字なので解説はできない。

(「こういう異世界の言葉の解析もやるべきなのかな……」)

こんな風に使い方が書いてありそうなものもあるのなら異世界の文字も使えるよう

になった方がいいのかもしれない。

でも翻訳の仕方なんて分からない。

一応、ラベルに書いてある文字を後で写しておこう。

「カドボールか。これは名前の通りものを角張らせる道具かな？」

「もしそうなら即席の武器を作るにはいいかもしれないね。」

本当にそういう効果なのかは分からないが、もし想像通りに使えるなら応用次第では強力なひみつ道具かもしれない。

カドボールを神様に預けて再び フォース・デイメンション・ポーチ「四次元衣囊」を起動する。

「空気クレヨン」

現れたのは一見普通のクレヨン一式。

どんな能力かは分からないが、あまり危険そうな名前ではないから大丈夫だろう。

「謎の液体とクレヨンか。どっちからにする？」

「危険はなさそうなクレヨンからにしましょうか。」

とは言ってみたものの、本当にただのクレヨンにしか見えない。

何が空気なのだろうか。

ひよっとして空気に描けるとか？

試しに赤いクレヨンで空中に線を引くと、クレヨンの先から赤い線が引かれる。



「おお、面白そう！ボクにも使わせておくれよ！」

興奮した様子で空中の線を見たヘスティアは空気クレヨンをベルにせがむ。

いくつかクレヨンを渡すとヘスティアは空中に絵を描き始めた。

絵と言っても棒人間だ。

3体ほど色違いの棒人間を掻いた時、変化が起きた。

初めに描いた黒の棒人間が動き出したのだ。

続いてピンク、黄色の棒人間も動き出す。

「す、スゲー!!空気クレヨンで描いた絵は動き出すのか！」

喜んで棒人間以外の絵を描き始める。

鳥、魚、花と思いいいに絵を描き始めるヘスティア。

これ他の冒険者が見つけたら大変だろうな、と苦笑しながらベルはもう一つのひみつ

道具を見る。

「次はカドボール。……とりあえず何かにかけてみようかな？」

何かあっても大丈夫なように無害そうに使わないもの……ジャガ丸くんの紙袋で試

してみよう。

まずは数滴、油が付いた白い包み紙に緑の液体を垂らしてみた。

しかし何の変化もない。

量が足りないのかと少し多めに試しても結果は変わらず。

「物に使うものじゃないのかな？」

となると他にはどんな使い方が考えられるだろうか。

長時間液体につける？

もしくは他の道具と併用とか？

(いや、それ以外にも人間に使うものとか？)

人間が角ばったところで何の意味があるのか分からないが、そういう使い方なのかもしれない。

でも液体をかけるやり方の可能性は低い気がする。

もしかしたらアンキパンは食べられたし、飲み薬として使うのかも。

(ちよつと怖いけど、回復薬は十分に<sup>ポーション</sup>ある。)

幸いにも神様もいるし、致命的な毒じゃなければ大丈夫……だろうか。

ちよつと怖くなってきた。

お爺ちゃんやんは昔の人たちは味で毒の有無を確認してたって言っていたけど、何の訓練もしていないボクにできるものなのだろうか。

しばらく蓋の空いた瓶を眺めるベル。

好奇心と不安に揺れていたが、ここでエイナの「冒険者は冒険しちやいけない」と言

う言葉が思い出された。

(やめておこう。ここは冒険すべき場面じゃない。)

好奇心で身を滅ぼした冒険者は多い。

必要のないリスクは避けるのが賢明な判断と言うものなのだろう。

そう結論づけたベルはカドボールをしまおうとするが、その瞬間ヘステイアの書いた魚が空中を泳いできた。

完全に油断していたベルは、目の前に飛び込んできた真つ平らな魚に動揺してバランスを崩してしまう。

その拍子にカドボールは宙に浮かび、中身の液体が零れた。

バシヤ、と正面から緑の液体を被ってしまったベルに、ヘステイアは仰天して慌てて回復薬ポーションを持って駆け寄る。

「だ、大丈夫かいベル君!？」

「……はい」

「本当かい？今カドボールが口に入った……よう……な……？」

手で顔の液体を拭うベル。

そんな彼にヘステイアは違和感を抱く。

何だか妙に目が据わっているような気がする。

(これはあれだ。 仕事中に殺気立つヘファイストスやバイトリーターたちと同じ目だ。)

ベルらかなぬ表情に戸惑うヘスティア。

そんな女神をよそにベルは鋭い視線のまま口を開く。

「もう予定より長い時間休憩してしまいましたね。遅れを取り戻しますよ。」

「あ、うん……」

「さあ!! 早くいきましよう。時間は有限なんです。」

「は、はい……」

どう考えても普通じゃないベルに彼が握る空の瓶をちらりと見る。

ひよつとしなくともこれの影響なのだろうが今のベルは怖くて口をはさめない。

ヘスティアはあわあわと探索の支度を始める。

そこからのベルは凄まじかった。

どこかの軍人みたいにきびきび動き、まったく無駄のない作業で次々とモンスターを屠っていく。

「倒したモンスターは通路の隅に避けてください。戦闘の邪魔です。」

「魔石袋はしっかり口を締めてください。」

「僕がモンスターと戦っている間もブーツとしてないで、周囲の敵の確認と投石などによる援護をしてください。」

「とういかなんでその紐ダンジョンでもつけているんですか。外してください。」  
「言われたことや気が付いたことはメモしてください。忘れます。」

ヘステイアに対する態度も軍人みたいに厳しくなったが。

先ほどまでののんびりした空気が吹き飛び、もはやダンジョンを楽しむ余裕もないヘステイア。

「な、なあベル君？もうちよつと緩くやつてもいいんじゃないかな？」

「何をいつてるんですか。時間を正確に予定通り行動するのが労働というものです。」

「いやいや、このままだと体が持たないよ……」

「大丈夫です、しばらくしたら頭が温かくなって気になりません。現に僕はさつきから……」

「それダメなやつだから！まずは君が休めよ!!」

ヒイヒイ言いながらもなんとかベルのハイペースな狩りについていく。

やがてリュックがどつきりとなった時、ようやくベルは地上に戻るといふ決断をした。

(し、死ぬかと思った……)

重くなったリュックにふらつきながらもヘステイアは何とか足を進める。

ベルの性格が急変したあの薬。

カドバールつてもしかして人の性格を角かどばらせるひみつ道具なのだろうか。

お願いだから時間制限があってくれ、このままだと本気で持たないかもしれない。

「あれ？」

その時ヘステイアは黄緑色の鶏にわとりに気づく。

随分変わったモンスターだなくと呑気に見ていたヘステイアだったが、ベルはそのモンスターに目の色を変える。

「神様。あのモンスターを仕留めます。」

「え？あれってそんなにいいモンスターなのかい？」

「ジャック・バードと言つて最低100万ヴァリスのドロップアイテムを持つ希少レアモンスター個体です。僕は向こうの通路から回り込むので神様はこの通路を塞いでください。」

そう言うや否やベルは走りだす。

一方、完全に終了ムードだったヘステイアはまだこの流れについていけないかった。

「塞ぐって……空気クレヨンで？」

ヘステイアの持つているアイテムで広い通路を塞げそうなものなどそれしかない。

しかし、先ほどまでのハイペースな労働に体の節々が悲鳴を上げているヘステイアに通路一杯の絵を描く元気など残されていなかった。

(そうだ！さっきいっぱい書いた動物の絵たちをここに配置すればいいんだ！)

先ほどの休憩地点はすぐそこだ。

急いでヘスティアは記憶している地点に走り、自由に動き回る絵の動物たちを集めた。

心なしか数が減っている気がするが、気にする余裕はない。

「さあ皆！！ここに一列に並んでくれ！！」

ベルが現れる前に大慌てで動物たちの壁を作る。

反対の通路からベルが現れた。

ベルは通路を埋め尽くすヘスティアの絵に一瞬驚いたようだが、すぐに視線を鋭くしてジャック・バードを確認した。

その殺気に驚き逃げ出すジャック・バード。

1階層とは思えない足の速さだが、その先にはヘスティアの作った動物たちが待ち受けていて逃げ場はない。

そう、ないはずだった。

「やったか!？」

ヘスティアが喝采を上げた瞬間、絵の動物たちが一斉に姿を消した。

え、とヘスティアは間拔けな声を出すがジャック・バードはその隙に通路の奥に逃げ





結論：ダンジョンに出会いを求めるのは間違いないじゃない  
かった

ベル君が冒険者になってからの道筋は正に順風満帆じゆんぷうまんぱんと言っていいものだった。

勿論「ファミリア」に入団した直後のビッグライトホーラム事件は不幸な出来事だったし、最近あったカドバールによる一連の出来事は黒歴史だ。

それでも多くの幸運や出会いに支えられてベルは冒険者としての第一歩を踏み出している。

しかし人生とは海のようなものだ。

穏やかな顔を見せたかと思えば全てを飲み込む荒々しい一面もある。

それがベルには分かっていなかった。

昨日は上手く行ったから今日も上手く行く。

なんの根拠もない漠然とした慢心をダンジョンは見逃さない。

借金返済のために深い階層でより上質な魔石を採取しようとする欲を出したのがいけないかった。

まだエイナからは早いと言われていた5階層に進んでしまったのだ。

出てくるモンスターたちを何体か倒して案外行けそうだと思った瞬間、それは現れた。

通路の向こうに見える人型。

しかし大きさがおかしい。

人の身の丈以上の大型のモンスターは10階層位からのはず、と最近習った事柄を思い起こすベルはこれが異常事態だと気が付いた。

それが中層で冒険者に最も恐れられる牛頭のモンスター・ミノタウロスであるということも。

駆け出し冒険者では逆立ちしたって敵わない強敵に仰天したベルは大慌てで逃げ出した。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

しかしミノタウロスはその驚異的な身体能力で少年を察知し、咆哮ハウルを放つ。

人間の原初的な恐怖を呼び覚ますモンスターの雄叫びにベルは僅かな間、強制停止リストライト状態に陥る。

その僅かな時間の損失ロスが致命的だった。

身体能力で勝るミノタウロスの追跡を初動が遅れたレベル1のベルでは振り切れな

「ほわああああああ!!」

間抜けな絶叫と共に5階層を出鱈目に逃走する。

しかしこの階層は今日初めて探索を行う場所だ。

大まかな地図は頭にいられているが土地勘など有るはずがない。

あつという間に現在地が分からなくなる。

(不味い不味い不味い不味い!?)

ダンジョンに潜ってから初めてかもしれない命の危機に、パニックになりかけて停止しかける思考をベルは必死に押し留める。

迷宮の名の通りダンジョンは複雑に構成された迷路。

少しでも足を止めることができれば、ミノタウロスの視界から上手く消えることができる筈だ。

この状態を打破できる手段はベルには1つしかない。

ひみつ道具だ。

異世界の驚異的なテクノロジー、それを再現するベルだけの特権を行使する。

「おもちゃの兵隊」

今具現化できるひみつ道具の中から今の状況に対応できそうなものを選ぶ。

おもちゃと言うのが気になるが如何にも戦闘向きな名前。

このひみつ道具にベルは賭けた。

現れたのは手のひらサイズの人形たち。

軍服だろうか、派手な衣装に身を包んだ人形たちは陣形を組み、隊長格らしき個体の号令によって杖らしきものを構えた。

あれはなんだろうと思った瞬間、杖の先が火を吹く。

人形たちの遠距離攻撃だと悟ったベルは内心喝采を上げた。

よく見ればあの棒の先はくうき砲にている。

きつとあれは異世界の武器なのだ。

もしかしたら倒しちゃうかも……

そんな期待が過る。

しかしミノタウロスは圧倒的だった。

ベテラン  
熟練の上級冒険者の斬撃や魔法すら寄せ付けない分厚い筋肉がおもちやに劣る筈がない。

「ヴヴオオオオオオオ!!」

兵隊たちの一斉攻撃など全く意に介さずに踏み潰した。

頼みの綱のひみつ道具を無力化させたことに目を奪われるベル。

それが命取りだった。

無意識に進んだ分かれ道。

しまったと思つた時にはもう遅い。

目の前の道の先はない。行き止まりだ。

「あわわわわ……」

壁を背に情けなく狼狽えるベル。

どう考えても詰チェックメイトみ。

自惚れた冒険者はその対価を自らの命で購うことになる。

(ここで終わり……？これが僕の最期なの？)

ダンジョンに潜るのだ。

いつか、そこで死んでしまうのも覚悟していたつもりだった。

でもこれはあんまりじゃないか。

なんの脈絡もなく沸いたミノタウロスで死ぬなんてどう納得しろっていうんだ。

頭のなかでベルがこれまで生きてきた14年分の人生が浮かんでは消える。

これが走馬灯なのか。

生きたいと願うベルの本能の最後の足掻き。

この状況を打開できる情報をこれまでの記憶をひっくり返して探しだそうとしてい  
る。

——幼き日のお爺ちゃんを読む英雄譚

——星空の下で出会った異世界の住民たち

——苦しいこともあったけど多くの人に支えられたオラリオでの日々

泡沫の思い出が脳裏を過る。

しかし、ベル・クラネルはただの一般人。

その記憶の中に逆転の糸口など有りはしない。

よくある話だ。

夢と希望を抱き、オラリオにやって来た若者が道半ばに果てる。

世間話にもなり得ないほどにありふれた日常。

今度はベルの番だというだけ。

そう漠然と気が付いた時、走馬灯も終わる。

思考が現実に戻り逃れられない現実に直面する刹那、最後に脳裏に浮かんだのはへ

ステイアの顔だった。

「ツ！」

何を諦めようとしているんだ！

敗北を受け入れようとしていた弱気な自分を叱咤する。

僕はまだあの人たちになにも返せていない。

こんな所で死ぬわけにはいかないだろう、と怯える心を奮い立たせる。

この状況をどうにかできる方法なんて分からない。

でも絶対に死ねない理由を思い出した。

「うわあああああ!!!」

悲鳴混じりに喉から声を絞り出す。

眦に涙を貯めながら安物のナイフをへっぴり腰で振るう姿は御世辞にも格好いいものではない。

しかしベルはそんなことに頓着している余裕はなかった。

(絶対つ、絶対に神様の下へ帰るんだ!!)

お爺ちゃんが生んでしまったあの日の悲しみを忘れた時なんてない。

置いて行かれるあの苦しみを神様に味わわせてたまるものかとベルは滅茶苦茶にナイフを振り回す。

しかしミノタウロスとベルの力の差は歴然。

ナイフはその皮膚にかすり傷すら負わせることはできない。

それでも、こうやって少しでも逃げる隙を作れたらとベルは歯を食いしばって体を動かした。

「ヴウムウンツ!!!!」

「がっ—」

少年の何の痛痒つうようも与えない攻撃でも鬱陶じつめしくなってきたのか、ミノタウロスが乱雑に蹄ひづめで反撃してきた。

それはベルに直撃こそしなかったものの、地面を砕き、ベルは衝撃で尻をつく。

「あ、やばい……」

「フウ—、フウ—」

荒い鼻息がベルの白髪に吹きかけられた。

自分よりも大きな怪物の姿にベルは今度こそ絶望する。

こんな風に倒れてしまつてはもう逃げられない。

口から震えた吐息が漏れた。

諦観がベルから反抗する気力を奪う。

(神様……ごめんさい……)

ミノタウロスの蹄が振り上げられる。

モンスターの強靱な腕力はレベルの貧弱な体など見るも無残な姿に砕く。

血しぶきが上がり、そこでベル・クラネルの冒険は終わった。

「え？」

否、吹き上げた血はベルのものではない。







「それで、なんであんな格好をしていたのか説明してくれる？」

「あ、はい。えっと、今日は調子がいいので5階層に行ったら突然ミノタウロスが現れて……」

ベルの説明にエイナは頭を痛そうにした。

エイナの忠告を無視した階層への進出も問題だがそれはまあいい。

問題はミノタウロスだ。

中層のモンスターが上層に上がってくるなんてとんでもない異常事態だ。イレギュラー

しばらくは下層を活動範囲とする冒険者の応対でかかりきりだろうなあ、とため息をついた。

「ベル君、言いつけはちゃんとしてね。『冒険者は冒険しちやいけない』。これはダンジョンを潜る上での鉄則だよ。」

「ごめんなさい……」

ミノタウロスは15階層以下に出現するモンスターだ。

それが5階層に上ってくるなんて本来あり得ない。

しかし、そんなあり得ない事態が起こりえるのがダンジョンだ。

冒険者は臆病すぎるくらいでちょうどいいのだとエイナは諭した。

「それで襲ってきたミノタウロスからどうやって逃げたの？」

「[スキル]を使ったりしたんですけど結局逃げられなくて、[ロキ・ファミリア]のアイズ・ヴァレンシユタインさんに助けてもらったんです。」

「……………ねえベル君。私、ベル君がスキルを持っているなんて初耳なんだけど。」

「あ」

冒険者のステイタスの秘匿は当然のことだからいいけど隠すならもつと気を付けなよ？とエイナはベルの失言を見逃す。

ギルド職員としては追及しなければならぬ場面なのだろうが、冒険者にとつてステイタスは生命線だ。

ギルド職員である前に冒険者たちのアドバイザーたらんとするエイナは敢えてベルの零した言葉を聞かなかったことにした。

（それより気になるのは…………）

アイズの話をした時のベルの表情だ。

ベルは良くも悪くも表情に感情が現れる。

あの表情は完全に…………

「ベル君。ひよつとしてヴァレンシユタイン氏のこと好きになっちゃった？」

「……………はい」

羞恥と緊張で思わず逃げ出したという話など、ほほえましい限りだが難しい恋をした

ものだ。

アイズ・ヴァレンシユタイン。

都市の二大派閥たる【ロキ・ファミリア】の幹部と言う、駆け出し冒険者にとつては正に雲の上の存在だ。

対するベルは【ヘステイア・ファミリア】というできたばかりの新興派閥。

肩書が全然釣り合っていないのだ。

「ベル君。想いを諦めろとは言わないけれど……私はかなり難しいと思うよ。」

少なくとも、今は冒険者として並び立つ努力をする時だ。

言外に伝えられて少しへこむベルを見てエイナは困った顔をする。

その後、換金を済ませたベルを見てエイナは少し逡巡しゆんじゆんしてから職員としてではなく、

一人の知人として口を開く。

「あのね……さつきはああいったけど、女の人は強い男性に引かれるものだと思うから……」

がんばって、と。

エイナの言葉に少しへこんでいたベルの表情が明るくなっていく。

「エイナさん、大好きー!!」

「えうっ!？」



ドワーフ、ノーム、エルフ、獣人……市民の溢れる大通りを突き進む。

色鮮やかな人ごみの波の中で聞こえる喧騒けんそうを耳にしながら、ベルは決意した。

あの人に並び立てるような立派な冒険者にいつかなろう。

少年の中で可能性の光が瞬いた。

## 2階層の怪事件

「ざあー！今日から頑張っていこう！」

熱は一日経っても冷めることなくベルをダンジョンへと駆り立てた。

今までが気合を入れて探索してなかったわけじゃないけど、目標が見えると心意気も違ってくるのかもしれない。

今朝ステイタスを更新した神様が何やら不機嫌そうだったのは気になるけれど、まずは冒険だ。

アイズさんに並ぶためにも、借金を返すためにも、まずはダンジョンを攻略していかないといけない。

どれだけ時間がかかるかは分からないけれど頑張ろう。

そんなことを考えていた時、どこからか視線を感じた。

(……?)

思わず周囲を見渡す。

辺りにいるのは巡回する「ガネーシャ・ファミリア」の仮面を着けた団員、荷車を押す獣人、窓を開けている女の人に……後は飲食店だろうか、お店の開店準備をする店員



たち。

怪しい人はいない。

(僕の勘違いだったのかな。)

よく考えなくても僕に注目する人なんているわけがない。

多分、自分の舞い上がりようを自制する心が生み出した錯覚だろう。

気合いを入れるのは良いけれど、節度は守らなきゃいけない。

自分を戒めていると、またあの視線らしきものを感じた。

「！」

「あの……どうかしましたか？」

そこにいたのは灰色の髪をした女性だった。

メイド服のような制服を着ている彼女はどうみても一般人だった。

後ろに立たれたからといって過剰に反応した自分が恥ずかしい。

「す、すいません。ちよつとびつくりしちゃって……」

「いえ、私の方こそごめんなさい。驚かせちゃいましたよね。」

お互いに頭を下げ合う。

道の真ん中でこんなやり取りをしているから道行く人々の視線が集まっている。

僕より少し年上らしき彼女はさつき開店準備をしていた店員のはず、どうして声をか

けてきたのだろうか？

そんな疑問が伝わったのか、彼女は手に持った紫の石を見せた。

「これ、落とししましたよ」

「あれ？昨日全部換金したと思ってたんだけど……」

腰に着けた小袋の中を確認する。

記憶通りそのなかは空っぽ。

(でも一般人の彼女が魔石を持つ意味がないし、多分破片が残ってたのかな。)

お礼をいって魔石を受け取った。

「あの……こんなに早くからダンジョンに行かれるのですか？」

「はい。この時間帯ならダンジョンも空いているので、倒せるモンスターの数が増えるんです。」

それ以外にも使えるひみつ道具の性能の確認という目的もあるのだけど。

僕のスキルは神様いわく神々にとって最高の暇潰しになり得るのだそうだ。

つまりスキルが公おおよけになると地の果てまで追いかけられるだろうとのことだから慎重に確かめないといけない。

いつかバレるにしてもできるだけ隠した方がいい。

幸い僕は農民だったから早起きには慣れている。

この早いサイクルでの生活もさほど苦ではなかった。

しかしあまり話し込むと他の人の迷惑かも。

あと少し話したらこの人とは別れよう。

そう考えていたのだが空気を読まない僕のお腹がグウと情けない音を鳴らす。

音はびつくりするくらい響いて彼女との会話を途切れさせた。

「……………」

すごい恥ずかしい。

彼女はクスリ、と笑みを漏らした。

「お腹、空いてらっしやるんですか？」

「はい……………今日はちよつと神様が不機嫌そうだったのでつい朝食を食べずに出ちやいました。」

「なるほど……………ちよつと待っていてくださいね。」

彼女はいったん店内に戻ると、バスケットを持って戻ってきた。

その中にはパンとチーズが見える。

「よろしければどうぞ。」

「そ、そんな悪いですよ！それにこれは貴女の朝ご飯なんじゃ……………」

「このまま見過ごすと私が心苦しいんです。だから冒険者さん。どうか受け取ってください。」

「さいませんか？」

そう言うてはにかむ彼女はズルいと思う。

ヴァレンシユタインさんや神様みたいに目が覚めるような美人ではないけれど、気が付けば可愛さに引き込まれるタイプの女のんだ。

それでも、と渋る僕に彼女は少し意地悪そうな顔で僕の目の前に寄って来た。

「なら、こういうのはどうでしょう。冒険者さんは腹ごしらえできる代わりに今日の夜は是非当店で」

「もう……ずるいなあ」

この人は本当にすごい。

上手くやり込められたはずなのに、全く悪く思えないのはこの人の話し方が上手いからだろう。

最初にあつた壁みたいなのが気が付けば取り払われていた。

「それじゃ、後で伺わせてもらいます」

「はい、お待ちしております。」

バスケット片手にダンジョンに続く摩天楼施設に向かおうとするが、まだ彼女の名前を聞いてなかったことに気付く。

「僕、ベル・クラネルって言います。貴女は？」



れば否だ。

あんな危機的状況が上層でもまた起きてしまうかもしれないなら、せめて自分の手札の確認くらいはしようと思はれた。

今日はただモンスターを倒すのではなく、スキルの検証をしつつ探索を進めて行く予定だ。

（今日使えるひみつ道具は「くろうみそ」「アセツカキン」「具象化鏡」）

どれから呼びびだそうか。

この中で一番効果が分かりやすそうなのはアセツカキンだ。

名前からして汗がかきやすい体質になる薬だろうか。

ちよつと気になったからこれにしてみよう。

「アセツカキン」

手の中に光が宿り形を成す。

今まで全然気にならなかったけどひみつ道具を光が構成するのには少し時間がかかる。

今のところは5秒くらいしてひみつ道具が現れるみたい。

（声といい、光といい、本当に目立ちちゃうな……）

隠密活動が多いダンジョン探索ではなかなか大きなデメリットだ。

しかも手元にひみつ道具が現れるまでの5秒は、昨日のピンチではかなり長く感じた。

スキルを使いこなせるようになれば構成にかかる時間も短縮されるのだろうか。(でも練習しようにもひみつ道具を出せるのは1日3回までだし……)

一度呼び出したひみつ道具は任意で消すことができるが、消してしまったひみつ道具をもう一度呼び出すことはできない。

「ドラえもんさんみたいに僕のスキルも取り出し可能だったらなあ……」

自分のスキルに文句をつけても仕方がないが、つい思ってしまった。

ひみつ道具を出した後は仕方なくバックパックにいられているが、これが結構スペースをとるのだ。おかげで動きにくくて仕方がない。

バックパックに余裕がないということは入れられる魔石の数も少なくなるということ。

何度もダンジョンとギルドを行き来するのは効率が悪い。

「やっぱりサポーターがいてくれればいいんだけど。」

ないものはないのだから仕方ない。

スキルの検証を続けないと。

手に現れたひみつ道具を観察する。

アセツカキンという名前から勝手に薬系のひみつ道具だと予想していたけど、なんとアセツカキンはバンダナの形をしていた。

ただ額の部分には妙なマジックアイテムらしきものがつけられているけど。

「バンダナで汗かきき？確かにバンダナは汗を染み込ませるためのものだけど……」

これをつけると汗をかくなんで本末転倒ではないだろうか。

それとも別の効果があるのだろうか。

早速近くにいたゴブリンを捕らえて巻き付けてみる。

しかし変化は特にない。

「取り敢えず目に見えて悪い効果はないかな」

ゴ布林からバンダナを回収して止めを刺した。

ゴ布林からしたら意味不明な行動だったかもしれないが、いざ自分が使ったときに落とす穴に嵌まることを防ぐためには大切なことなのだ。

今度は自分で着用してみる。

絶対に合っていないだろうなと思いつつ頭に巻いても変化はない。

凄い汗が出ると思ったけどそれすらなくて拍子抜けしてしまった。

「もしかして動かないと効果がないのかな？」

そもそも汗とは動くか暑くなるかで出てくるものだ。



汗の量が促進されるだけでなにもせずに出てくる仕組みではないのかも。

ベルの推測通りなら非常に下らないひみつ道具だがベルはその使い方を探ろうと躍りになった。

「階層中を駆け回ってゴブリンを10体くらい倒せば汗も出てくるかな。」

そう考えたベルはゴブリンを探すために駆け回った。

ダンジョンの上層はしたの階層に比べてモンスター出現までの頻度が少ないと聞く。

オラリオに存在する冒険者の半数近くがレベル1で狩り場が集中しているためにモンスターの取り合いになることが多い。

モンスターはともかく人間と戦うのは怖いので、モンスターだけではなく同業者たちにも注意して探索を行った。

念のために15体ほどゴブリンを倒したベルは自身に変化があるか確認する。

（汗の量は特別変わってない気がする。結局何なんだろうこのひみつ道具？）

あちこち駆けまわったせいで喉が渇く。

飲み物が欲しいしちよつと一休みしようかな、なんて呟いていたら突如どこからともなく水筒が現れた。

「え？」

突拍子もなく現れた水筒に間拔けな声を出してしまうベル。

振ってみるとチャポチャポと中身があるのが確認できる。

(汗をかくと飲み物が出てくるひみつ道具なのか？便利と言えば便利だけど……)  
スツキリしないが分からないものにいつまでも拘っていても仕方ない。  
違うひみつ道具を試してみよう。

バンダナを巻いたまま次のひみつ道具の名前を言う。

「具象化鏡」

さつきより早く出せるように手に力を入れてみるが……ダメだ。

むしろ光がブレて構成が遅くなっている気がする。

出てきたのは……小槌こづちかな？

スイッチのついた如何にもマジックアイテムといった見た目のひみつ道具だった。

「具象化つてはつきりするって意味だよ。鏡は……どこが鏡なんだろうこれ」

名前だと意味が分かる様で分からない。

鏡に映ったものをはつきりさせるのだろうか？

とりあえずこのひみつ道具にはスイッチがあるし押してみよう。

「……なにもないかな？」

これも使い方が良く分からない。

アセツカキンもそうだけどころなると正解が見つけられないのに泥沼に落ちたよう

に悩んでしまう。

不意にベルは視界に違和感を感じた。

何だかさつきより天井が広くなっているような。

「いや違うーこれは!?!」

異変に気が付いたベルがあたりを見渡すと足元に今まで存在していなかった泥沼が生まれていた。

あたりが広くなったのではなく、泥沼に体が沈み込んで視線が低くなっていたのだ。

大慌てでベルは泥沼から脱出する。

(ダンジョンのトラップ? でも確かトラップがあるのは中層の後半からだっただけ)

こんなダンジョンの始まりに有っていいものではない。

ならこれはひみつ道具によるもの。

アセツカキンではない気がする。あまりにも名前と関連がなさすぎる。

「なら具象化鏡? 確かに具象化は分かりやすくするって意味だから、この泥沼は何か分かりやすくなっただけのこと?」

泥沼というとき頭の中で考えた言葉が浮かぶ。

泥沼に落ちたように悩む。

言葉の表現を現実に反映しているのではないだろうか。

そう考えた瞬間、ベルの頭から霧らしきものが吹きだし霧散した。

「えっ？ええっ？……あ、頭の中の霧が晴れたってことか！」

何に使うんだろうかこのひみつ道具。

技術に反して用途がくだらなすぎる。

ダンジョン探索にはあまり使いなさそうだ。

「最後は……くろうみそ〜」

今度は逆にリラックスしてみるが出せるスピードは最初と然程変わらないみたいだ。

ひみつ道具を出現させる速度に関してはいったん保留にしよう。

光が収まり、現れたのは片手で持てるくらいの壺だった。

なんだが極東っぽい雰囲気造りに感じる。

「中身は……なにこれヌルヌルしている」

中にあるのは茶色の物体。

触れてみると粘っている。

臭いは結構強烈だ。というか腐っているのではないだろうか。

「こつちが薬系のひみつ道具だったかな？じゃあゴブリンを捕まえて食べさせてみよう。」

ちようど近くに現れたゴブリンを捕まえて、指で掬い取ったくろうみそを口にねじ込

む。

噛まれないように鞘付きのナイフで口をがっしり固定しながらゴブリンの口に手を突っ込む僕は果たしてどんな風に見られるのだろうか。

客観的に考えてかなりやばい奴に見えるこの状況を心配しながらゴブリンの変化を待つ。

すると突然ダンジョンの天井から大きめの破片が落ちてきた。

「うわ!」

「グギャ!」

間一髪ベルは躲したが、ゴブリンは直前まで組み敷かれていたこともあって反応が遅れた。

ゴスツ、と鈍い音と共に破片がゴブリンにめり込んだ。

「うわっ、つてしまった!逃げられる!」

痛そうな音に引いていたベルだったがゴブリンを解放してしまったことに焦る。ベルの予想通り逃走を始めるゴブリン。

慌ててそのあとを追いかけてようとしたが……

「ガッ、ブギャ!?!、ギアアアアアアア!?!」

そこからひどかった。

ゴブリンは通路の窪みに足を取られて盛大にすっころんで顔面から叩きつけられ、その時運悪くドロップアイテム「ゴブリンの爪」の破片が鼻に刺さったらしく悶絶、フラフラしながら逃げた先には先ほどの泥沼の跡に足を取られて再び転倒。

これ追いかけていいのかな？

思わずそう考えてしまうくらいボロボロになったゴブリンはそれでも諦めずに足を進めた。

しかし現実は無常だった。

「邪魔だ」

「ペギヤツ」

通路の向こうから現れた猪人の冒険者に片手で吹き飛ばされるゴブリン。

壁に激突した最弱のモンスターは跡形もなく碎け散った。

一方ベルは絶句していた。

目の前の冒険者に心当たりがあったからだ。

正確にはその紋章に。

戦乙女の紋章——「フレイヤ・ファミリア」。

あのアイズ・ヴァレンシユタインさんの「ロキ・ファミリア」と双壁を成す都市最強。

（「フレイヤ・ファミリア」の猪人の冒険者ってまさか!?!）

都市最強の冒険者。

おうじや  
猛者オツタル。

冒険者なら誰でも知っているその名前に驚愕する。

しかし今のベルにあつたのは世界的有名な人に会えた感動ではなかった。

(よりによつて最強の冒険者と鉢合わせるなんてあのゴブリンついてなさすぎる……)

あの不運はくろうみそを食べさせた時から始まった。

つまりそれがこのひみつ道具の効果。

食べた者に次々と苦勞が押し寄せて来るといふ厄物。

人類にとつて不?ふぐたいてん戴天の相手だが今回ばかりはひどいことをしてしまつたと反省し

てしまう。

あれをベルが食べていたら無限に敵が湧くダンジョンだし、碌でもないことになつて

いたのは確実だ。

流石にそこまでして強くならなくていい。

「むっ………ほう」

自分のしたことにドン引きしていたベルをオツタルは興味深そうに見つめた。

な、なんだろうか?

たじろぐベルを僅かな間見ていたオツタルはすぐに視線を外すとダンジョンの奥に

消えていった。

「何だったんだろう？僕に変なところ……でも……」

ふと自分の格好を振り返り絶句する。

物凄くダサイバンダナ。

右手にはゴブリンの唾液だえきが付着した鞆付きのナイフ。

左手には何故か持つている壺。

そして腰で激しく自己主張する装飾品だらけの小槌らしきもの。

今のベルはまごうことなき不審者だった。

(は、恥ずかしい！)

ちよつと見た後に目を逸らしたのがなお恥ずかしい。

うわきつつ、とか思われてるよあれ!?

カアアアアアと顔から火が出るような羞恥心がベルを襲った。

「うわああああああ……つて熱っ!?!あちちちちちち!!!!?!!?」

違った。物理的に燃えていた。

突然自分を襲った炎にパニックになるベル。

必死に炎を手でかき消す。

すぐに火は消えて助かったが、ベルはこの原因であろうひみつ道具を睨みつける。



「今の具象化鏡のせいだよ。これ危なすぎない？」

絶対にもう使わないしもう消してしまおうか。

そう考えつつくろうみそをバツクバツクに仕舞っていると、通路のほうが騒がしいことに気付く。

何事かと様子を見るとモンスターの群れがこちらに迫っていた。

「え!?なんで!」

先ほどまでの騒ぎを聞きつけたらしいモンスターの群れに動揺しながらもナイフを抜刀する。

その数はおよそ十体。

ゴブリンだけじゃなく犬頭のコボルトまでいた。

「シヤアアア!!」

コボルトの先制攻撃を躲して次の攻撃に備える。

四方八方からベルを狙うモンスターたちを相手に迂闊うかつに手を出すのは危険だ。まずは攻撃を見極めるのに専念しよう。

「ガアア!」

「ギギアア!!」

なるべく背中は見せないようにモンスターたちを正面から捉える。

多勢に無勢だけど上層のモンスターは殆ど連携しない。

それどころか今も獲物<sup>ペル</sup>を奪い合って足を引つ張り合っている。

だったら攻撃の波にも隙はできるはずだ。

「うわあああああ！」

まず一匹。コボルトの心臓にナイフを突き刺す。

突然反撃したベルに動揺するゴブリンの喉笛<sup>のどぶえ</sup>を描き切ると、再起動しようとしたコボルトたちにボンと具象化鏡を投げ渡す。

「ギャ？」

思わず目を点にするコボルトたち。

具象化鏡によって文字通り点になった目は死角だらけだ。

流れるように三匹を切り倒した。

「グ、グオオオオオ！」

あっさりと半数が倒されたことに動揺するゴブリンが攻撃してくるが、破れかぶれの攻撃は通じない。

スライディングして回避し、ゴブリンの背後から足を引っかける。

倒れこんだゴブリンも仕留めるとその勢いのまま残りのモンスターたちも片付けようとした。

しかし、首筋に冷たいものが走る。

ベルが自分の直感を信じて横に飛ぶと、そこにはイモリ型のモンスターであるダンジョン・リザードが落ちてきた。

(危なかった……)

攻撃の熱に浮かれて奇襲に対する備えがお粗末だった。

冷静になると体の疲れを感じる。

おまけに汗もひどい。

汗もさつき走り回ったことも相まって、まるで滝のようにダラダラとダンジョンの地面を濡らしていたのが目についた。

「あ」

やってしまった、と気づいた時には遅かった。

具象化鏡によって言葉通りに滝のような汗がベルから流れ出る。

(ちよ、前が見えない！)

隙を見せたベルにモンスターたちが喜び勇んで向かってくる。

目が見えないからボコボコにされるベル。

滝のような汗で向こうも攻撃しづらいようだが、こっちはモンスターたちを視認すらできない。

「ガボガボ……」

おまけに汗が口に入ってしまったよっぱいし濡れそうだ。

割と切実に命の危機かもしれない。

（ああ、もう!!このひみつ道具だしてからこんなんばつか!）

流石に温厚なベルでもこれではフラストレーションが溜まっていく。

モンスターに殴られまくるし、体はびしょ濡れだしで本当に今日は厄日なのかもしれない。

「せめてつ、魔石がいっぱい手に入らないと割に合わない!」

その時、不思議なことが起こった。

アセツカキンが赤く光り出したのだ。

ベルの願いに反応するかの如く強い輝きを放つそれはやがて奇跡を起こす。

「え?」

「ギャ?」

「キャウン?」

ベルもコボルトもゴブリンもダンジョン・リザードも。

全員その光景に呆気を取られる。

そこにあつたのは紫の海。

数えるのもばかばかしくなるような魔石が突如彼らの目の前に現れたのだ。ベルの願い通りに。

（具象化鏡？ いやあれはあくまでも言葉を形にするもの。願いを叶えるものじゃない。）  
ベルの思考が加速している。

そう、魔石は彼らの目の前にあつた。

夥しい量の魔石は戦場となつていた広間<sup>ルーム</sup>に収まりきららず、洪水のようにベルたちの前に迫つてきていたのだ。

（と言うことはアセツカキンかな？ あれは汗を掻いたら飲み物をくれる道具じゃなくて、汗を掻くことをすれば願いを叶えてくれるひみつ道具だつたのかも……）

人間もモンスターも迫る魔石の前に立ち尽くしていた。

最近知つたのだが、人間と言うものはいざという時に頭の回転が速くなるものらしい。

さつきまで全く分からなかつたアセツカキンの能力がピースの嵌つたパズルのように分かる。

……なんかパズルが出てきた。こんな時まで仕事しないでいいよ具象化鏡。

（そう、具象化鏡。あれによつて僕の汗は正に滝のように流れていた。汗の量に応じてよりアセツカキンの効果が大きくなると思えるのならこの結果も納得できるかな。）



## 冷たい現実

「確か、ここだったよね……」

今朝の約束通りシルさんの働くお店「豊穰の女主人」にやって来た。

あんなことがあったばかりなのにいいのだろうかという思いはあるが、神様が「約束は大切だからいつてきていいよ」とお金を持たせて行かせてくれたのだ。

神さますぐに布団に入つてふて寝を始めたけれど。

何度も迷惑かけてすみません。

「た、足りるよね？」

想定外の事故で魔石はバックバックから溢れるほど集められたが、あんな大惨事でギルドの窓口が通常通りに行われるはずがなく、換金することができなかつた。

だから今持っているお金は今まで貯めたなけなしの貯蓄の一部。

神様に不自由な思いをさせているのに、こんなものを使って外食なんて心苦しいけど、「気分転換は大事だぜー」と半ば追い出された。

(多分、僕を心配してくれているのかな。)

あんな大失敗をした僕はかなり落ち込んでいたみたいだから、外で美味しい食事をす

ることで気を紛らわせようとしているのだろう。

本当に神様には頭が上がらない。

(ヴァレンシユタインさんに追い付こうって決心してすぐこれだもんなあ。)

つくづく僕はかっこよく決められない。

あの人はレベル5で僕はレベル1。

一体何年かかれば追い付けるのか。

(いつか、今より強くなれたら……)

きつとランクアップへの道も見えてくる。

今はそう信じるしかない。

「失礼しま〜す……」

「あーベルさん！来てくださったんですね。」

かなり敷居の高そうなお店だったから躊躇ちゆうちよしていたけど、いつまでもお店の前に突っ

立っているのも迷惑だ。

意を決して入るとすぐにシルさんが気がついてくれた。

「良かった、来てくれたんですね」

「あはは……来ちゃいました。」

お店のなかには色々な種族の冒険者たちが思い思いに料理を食らい、お酒を飲んでい



た。

そのほとんどは僕なんかじゃ足元にも及ばないベテランばかりなんだろうな、なんて考えるとその先に進むことに躊躇してしまう。

店のなかに入っただけで今さらだと僕も思うけど、如何にも冒険者たちの酒場といった雰囲気なのまれそうだ。

そんな僕に構わずにシルさんは僕を店のカウンターに案内した。

ドワーフの女将さんや様々な種族のウェイター服の女性たちが、腕を奮って美味しそうな料理を生み出す過程が見れるこの席はなかなかいい場所ではないだろうか。

席に座ると男勝りな女将さんが声をかけてきた。

「あんたがシルの言っていた冒険者の坊主かい。案外可愛らしい見た目してるじゃないか！」

カラカラと笑う女将さんに僕は苦笑いを返す。

男に可愛いは誉め言葉なのだろうか。

「見た目によらずかなり食べるそうじゃないか。たんまりお金を落とすとしていってくれないか」

「え？」

「ばつ、と咄嗟にシルさんを見る。」

さっ、と彼女は顔を反らした。

確信犯だこの人！

「ちよつとお!? 僕が大食漢なんてぼく自身初耳ですよ!？」

「……………えへへ」

それで誤魔化されてたまるか。

今朝言いくるめられた時から薄々察していたけど、この人やっぱりとんだ悪女だ。

「応援しますよ?」

「まずは誤解を解いて!? 貧乏ミアミアなんだからそんないっぱい頼めませんよ!」

「うー、オナカガスイテチカラガー」

「めっちゃ棒読み!! っていうか卑怯ですよ!」

「冗談です。ちよつと奮発してくれるだけでいいので、ごゆつくり」

シルさんはそう言って仕事に戻ったようだ。

僕はメニューを確認する。もちろん、中身より値段を気にして。

高い。一番無難そうなパスタでも300ヴァリスはする。

腹を満たすだけなら50ヴァリスで足りる。こんなに高いのはそれだけ手間がかかっているということだろうか。

(うん、確かに美味しい)

美味しいけど……

やっぱり僕だけこんな料理を食べているのはちよつと心に引つかかる。

神様もつれて来たかったな。

「楽しんでますか？」

「圧倒されてます……」

パスタが半分くらいになったところで、シルさんが声をかけてきた。

休憩時間なのだろうか、エプロンを外して僕の隣に座った。

「えつと、とりあえず、今朝はありがとうございました。」

「いえいえ、こちらこそ頑張つて売り込んだ甲斐がありました。」

「ここ、色んな人たちがいるんですね」

店内を見渡すと本当に色んな種族の人たちが思い思いに料理やお酒に舌鼓を打っていた。

「そうですね。こうやって沢山の人たちと触れ合うのは楽しいです。……心が疼くというか、趣味になつていいるというか。」

「すごいこと言うなこの人。」

でも、僕もオラリオに来てから新しい発見に毎日興奮している口だ。

これは、世界中から人が集まるダンジョンの下で繁栄してきた迷宮都市の特権なのか

もしれない。

シルさんと話していると店の中がざわつき始めた。

なんだろうとあたりを見渡したら、今日見たばかりの金の長髪が目に入った。

「あつ——」

アイズ・ヴァレンシユタインさんだ。

彼女だけじゃない。ヴァレンシユタインさんと一緒に色々な種族・年代の人が店に入ってくる。

彼ら彼女らのエンブレムが「ロキ・ファミリア」のものだと気が付いた冒険者たちは畏怖を込めたささやき声で、ひそひそとざわめきを広めていく。

僕も冷静ではいられない。

憧れの人を前に顔が熱くなっていく。

「ベルギー人？」

シルさんの困ったような声が聞こえるけど応える余裕はない。

飛び跳ねる心臓を抑えながら「ロキ・ファミリア」を……アイズさんの動向を伺う。

カウンターに隠れて目だけひよっこり出している僕は完全に奇人変人の類だが、この情動はこうでもしないと抑えておけない。

ジョッキをぶつけ合い、騒ぎ出す「ロキ・ファミリア」の中で彼女はマイペースに料

理を口に運んでいた。

「【ロキ・ファミリア】さんはお得意様なんですよ」

シルさんは「ロキ・ファミリア」に興味津津な僕に顔を寄せてこつそり教えてくれる。ヴァレンシユタインさんの一挙一動に翻弄されているから返事はできなかつたけど、ここに来ればヴァレンシユタインさんに会えるのか、これから頑張つて稼ごうと心に決めた。

「そうだ、アイズ!!あの話をしてやれよ!」

「あの話?」

獣人の青年がヴァレンシユタインさんに何か話をせがんでいるようだ。

お酒に酔っているのだろうか、顔を赤くして上機嫌に話しかけている。

「あれだつて!帰る途中で逃げ出したミノタウロス!!5階層で最後の一匹を始末しただろ!?!その時いたトマト野郎!」

（——え?）

今までポカポカと温かい気持ちだった頭が打つて変わつて凍り付く。

ニヤリ、と意地の悪い笑みを浮かべた獣人の青年は言葉を続けた。

彼の話をもとめると。

深層への遠征帰りだった【ロキ・ファミリア】は、遭遇したミノタウロスの群れを仕

留め損ねた後、大慌てでそれを追いかけてヴァレンシユタインさんが止めを刺した。

その時、その場にいたのは――

「いたんだよ！いかにも駆け出しなひよろくせえ冒険者<sup>ガ</sup>が!!」

――僕だ。

真つ青になった僕に気が付いたシルさんが声をかけてくれるけど、口が動いてくれない。

「あいつ、アイズが細切れにした牛のくつせー血を全身に浴びて……真つ赤なトマトになったんだよ！アイズ、アレ狙ったんだよな？くくくつ、腹痛ええ」

「……」

あの人は不快そうに眉をひそめて獣人の青年を見ていた。

それが、尚更僕を追い詰める。

他のメンバーは失笑し、別のテーブルの冒険者たちも釣られて笑いそうになるのを嘯み殺している。

「それで、そのトマト野郎は叫びながらどつか行っちゃって……」

「アハハ、そりや傑作やあー！冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ可愛いー!!」

「ぶふつ、ごめんなさい、アイズつ、ちよつと我慢できない」

「……」

アイズさんの反応が面白かったのかどつと笑いに包まれる【ロキ・ファミリア】の人たち。

僕の胸に広がる冷たさとのギャップにあちらとこちら、世界が分断されてしまったようだ。

いよいよ様子の可笑しい僕の肩にそつと手を置くシルさん。

……情けなさが加速する。いつそ夢だったらしいのに、ぐつと絞められた拳の痛みがこれが現実なのだと告げていた。

「しかしまあ、野郎のくせに泣くわ泣くわ。見ていて胸糞悪イ奴だったぜ。だったら最初から冒険者になつてんじゃねえよ」

「……うわあ〜」

「ドン引きだぜ。なあアイズ?」

「……」

頭の中が削れているみたいだ。

苦しくて、苦しくて、吐きそうだ。

「いい加減その口を閉じろベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ。そこに巻き込んでしまった少年に謝罪することはあれ、酒の肴さかなにするなどあつてはならない。恥を知れ」

「ゴミをゴミと言って何が悪い。手前エの自己満足に巻き込むんじやねえよ」

「……これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」

視界がおかしい。

フィルターが変わってしまったように、さつきまで心を弾ませた光景が色褪せる。

「アイズはどう思うよ？あの情けないトマト野郎が俺たちと同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

「……あの状況じゃ、仕方なかったと思います」

ギシッ

砕けてしまうのではないかと言うくらい、強く歯が噛み締められた。

「いい子ぶりやがって……ならあのガキと俺、ツガウならどっちがいい？」

「……ベート、君、酔っているんじやないかい？」

「黙つてろよフィン。ほら、アイズ選べよ。お前はどっちの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？ああ？」

腹の底が熱い。

その熱さが少しづつ凍った頭も湯だたせる。

「……ベートさんとだけはごめんです。」

「無様だな、ベート。」





言い返せるだけのものがベル・クラネルにはなかったから。

激情のまま向かったダンジョンの封鎖は解除されていた。

あんな大量の魔石はもはや影も形もない。

オラリオの有する上級冒険者のステイタスは、常人とは比べ物にならない速度でダンジョンの整備を行うことを可能にしたのだろう。

そのこともベルを苛立たせる。

上級冒険者と下級冒険者。隔<sup>ぐ</sup>たれた絶望的な差を感じてしまったから。

(何が、いつか追いつけたらだー！いつかじゃ遅いんだー！)

脳を殴られたかのように青年の言葉はベルの意識を一変させた。

時間は待つてはくれない。

漠然とした意識で過ごすものに道を開くだけの時間など初めからありはしないんだ。

ダンジョンに現れるモンスターたちを次々倒していく。

いつもの臆病さは鳴りを潜めて、持っていた護身用のナイフはモンスターたちの魔石を粉々に砕いた。

迷宮に漂うモンスターの消えゆく灰。

どれだけ狩ってもベルは満足できなかつた。

——もつと強く。もつと強く。

気が付けばベルの足はダンジョンの下層に向かっていた。

ダンジョンを降りればより難易度は上がる。

自分を鍛えるにはもってこいだ。

冷静さを失ったベルは自殺紛いのダンジョンアタックに身を投じる。

すぐにその報いを受けた。

碌な装備も持っておらず、モンスターの攻撃に頓着しない冒険が長続きするはずがない。

追剥に会ったようにベルの体はボロボロになった。

本来ならここでベルは冷静さを取り戻せたのだろう。

だが、ベルに発現したスキルが彼に更なる過酷を歩ませる。

「……回復薬」  
ポーション

ベルの望む必要なアイテム。

アセツカキンはそれをベルがダンジョンアタックによって生み出された彼の汗の量に応じて与える。

本来、少年を足踏みさせるはずだった負傷は簡単に回復し、少年は熱を冷ますことなくさらに下層へと向かった。

ダンジョン6階層からダンジョン7階層へ。

それは冒険者になってまだ半月ほどのベルには自殺行為、にもかかわらずベルの暴走した思考はとんでもない方向に進んでいった。

「もつと、これじゃ足りない。」

バックパックから取り出すのはくろうみそ。

その名の通り、服用者に苦難を与えるひみつ道具をベルは口に含んだ。

ビキリ、

破滅的な音がベルの周りから響いた。

これはくろうみその効果なのか。ベルを囲むように罅が広がる。

モンスターの誕生。

ダンジョンは生きている。多くの冒険者が主張する根拠の一つにモンスターの存在がある。

どう見ても無機物でできているダンジョンの壁。

そこから現れるモンスターたちは様々な姿、能力、生態を持っているが一つだけ共有しているものがあつた。

それは人類への殺意。

共存は絶対に不可能と言われる天敵が突如生み出され、またはその音色に招かれてベルを囲む。

アリ型のモンスター・キラアアント。

初見の相手だがベルは躊躇ちゆうちゆうせずナイフを振るった。

銀の刃はキラアアントの赤い皮膚に向かい……甲高い音と共に弾かれる。

「!?」

想像以上に固い装甲に目を見開く。

その隙をモンスターたちは見逃さない。

一斉に襲い掛かってきたモンスターたちに防戦一方になる。

「くっ!?!」

キラアアントの牙を躲したベルの腕に赤い三本の線がかかる。

黒い人型モンスター・ウォーシャドウの凶爪はナイフと変わらない。

ベルとほぼ同じ体躯のモンスターが二体同時に迫る。

攻撃を受けた拍子にナイフを失ったベルの回避行動は間に合わない。

咄嗟にベルは頭を抱えて亀のように丸くなった。

ガギイツ、と固い感触に今度はモンスターたちが動揺する。

「具象化鏡……やつと少しは使えたかも」

ベルを覆うように現れた甲羅がモンスターたちの攻撃を防ぐ音を聞いて、ようやくベ

ルは冷静さを取り戻す。

ウォーシャドウにキラート。

どちらも駆け出し冒険者には絶対に倒せないとされるモンスター。

理由は簡単だ。単純にステータス不足。

まともにもやり合っているのは、先ほどのように絶対に勝てない。

(今、この場をどうにかできるのはひみつ道具しかない。)

冷静さを取り戻すと今の自分がどれだけ危険な状態かよくわかった。

エインさんからあのモンスターたちの情報を教えてもらっていなかったら、あのまま殺されていたかもしれない。

早くこのダンジョンから出ないとベルは命を落とすだろう。

アセツカキンでアイテムを整える。

ポーション回復薬で腕の傷を治し、もう一本ナイフを手に入れて二刀で戦うことにする。

正直、盾のほう欲しかったが、汗の量が足りないらしい。

冷や汗は出てるのに、これではアイテムはもらえないらしい。ちゃんと働けということか。

馬鹿な冗談が出てくるくらいには余裕も出てきた。

「うわあああああ!!!」

甲羅から飛び出して一体のウォーシャドウの魔石を突き刺す。

消失するモンスターの断末魔が戦いの合図だった。

ベルは両手のナイフを振り回してキラアアントたちを威嚇しながら、先ずは残りのウオーシャドウに狙いを定めた。

体のバネを存分に使い、ウオーシャドウに接近する。

具象化鏡によつて現れた鋼のバネを足に纏い、強烈な蹴りを放った。

ゴキヤ、と首が折れたウオーシャドウの爪をナイフで切り取る。

即席だが、これを投擲武器として使おう。

キラアアントがなぜ下級冒険者たちに恐れられているか。

それは固い装甲と攻撃力によつて冒険者の命を容易く奪える存在だからだ。

(僕のステイタスは一般的な駆け出し程度……耐久に至つては無いに等しい。近づかれ  
たら防ぎ切れない。)

ドロップアイテムを使った牽制はキラアアントを苛立たせるが決定打ではない。

元々そう多くはなかった爪はすぐになくなり、モンスターたちはベルに殺到する。

あつという間に追い詰められたベルは、キラアアントに押し掛かれて食われるのを  
二振りのナイフで必死に防ぐ。

だが元々のステイタスが違う。

【豊穣の女主人】に行く前にステイタス更新を行つていれば多少はましだっただろう

が、日替わりで内容が変わる【四次元衣囊】フォース・ディメンション・ポーチの特性上、戦力確認を探索前に行う必要のある【ヘステイア・ファミリア】では冒険に行く前に更新を済ませていた。

つまり、今のベルは情けなくアイズから助けられたあの頃からステイタスはほとんど変わっていないのだ。

「ぐっ、おおおおお!!!!」

ベルは押し掛かれながらもなんとか左腕を自由にすると、くろうみそにナイフを突っ込んだ。

そして、みそだらけになったナイフの刀身をキラアートの小さな口に無理やりねじ込む。

その瞬間、キラアントに異変が起きる。

たまたまナイフの当たったところをこの前の戦いで切っていたのだ。

絶叫して頭をのけぞらせるキラアント。

ベルを襲おうとしていた他の個体たちはその様子に冷や水を浴びせられたように止まった。

「今だ!!」

暴走しないようにスイッチを切っていた具象化鏡を発動させ、アリたちに文字通りの冷や水を浴びせさせる。



ひみつ道具の常識外の能力に混乱するキラアト。  
その隙をベルは見逃さなかった。

「ふっ!!」

足のバネを再び活用し、稲妻のように素早い動きでキラアトに一閃する。  
当然弾かれるがベルの狙いはナイフによる攻撃ではない。

具象化鏡によって言葉通りにベルの周囲に現れた稲妻である。

「ギイイイイ!?!」

電気をよく通す水によって黒焦げになるキラアトたち。

終わった。

勝てない相手にひみつ道具で何とか勝てた。

そしたらここにいつまでもいられない。

早く脱出しないと。

安堵してしまつたベルは思考を戦闘から逃走に切り替えた。

だから、それを見逃してしまつたのだ。

「?.....」の音は

暗い迷宮に響く音。

カサカサと生理的嫌悪感をもたらすその音の正体はすぐに分かつた。

さつきまでうんざりとするくらい聞いた音だったのだから。

「キラアアント!?!しまった……!」

思い起こされるのはエイナによる講義で教わったキラアアントの習性。

キラアアントは命の危機に瀕すると仲間を集めるフェロモンを分泌する。

初めにナイフを突き刺した個体が絶命する直前にそれを発していたのか。

現れたキラアアントにもう一度稲妻のような一閃を放つ。

先ほどと同じ速度。

先ほどと同じ光景。

しかし、先ほどと違い稲妻は現れない。

「!?!」

驚いて腰の具象化鏡を見ようとするが、そこには何も無い。

否、具象化鏡だけではない。

くろうみそもアセツカキンもその姿を消していたのだ。

(まさか日付がこの瞬間変わって、ひみつ道具がリセットされたのか!?)

この状況での抛り所をなくして絶望するべし。

新たなひみつ道具もヘステイアにステイタスを更新してもらわなければ名前が分からない。

ベルに許された反則は消えて、少年は唾棄すべき弱者に逆戻りする。冒険者たちの笑い声が幻聴となってベルの脳裏に響いた。

「あぐっ!?!」

キラアアントの横風がベルを襲う。

咄嗟に二刀でガードするが、貧弱な力のアビリティでは対抗できない。

あっさり吹き飛ばされるベルは衝撃で武器を落としてしまう。

（――）

キラアアントの牙が迫る。

ベルを食べるといふのか、人のものとは違う昆虫の口は唾液を垂らしていて嫌悪感を感じた。

緩慢になった時間の流れの中でベルは残されるヘスティアを思う。

（死ぬのか？あの女神ひとになにも返せずには？）

そんなの認められるか。

拳を握り締めてキラアアントとの距離を逆に詰める。

ベルの力がキラアアントに通用するはずがない。

それでも知ったことかとキラアアントの顔を殴りつける。

当然のように壊れたのはベルの拳だ。



夜が明けて、朝になっても姿を見せないベルに不安が募る。

(まさか、何かに巻き込まれたんじや……)

近辺を探し回っても特徴的な白髪頭を見つけられなかったヘステイアは、もしかしたら帰ってきているかもと言う希望に期待したが、やはり少年の姿はなかった。

汗が噴き出す。居ても立ってもいらなくなり、再び捜索に行こうとしたヘステイアの目にベルの姿が現れた。

「あ!!ベルく——」

無事を望んで止まなかった少年の姿に安堵し、涙ぐむヘステイアは柱の陰から現れたベルの姿に言葉を失った。

純白の髪は血に染まり、質素な私服はボロボロに損傷していて、破けた肩口から青くはれ上がった肌が見えていた。

顔中傷だらけで、すでに流血が固まり黒くなっていることが彼がかなり前から怪我をしていたことを告げていた。

「ど、どうしたんだい!?!」

「……ダンジョンに潜っていました」

「ば、馬鹿っ。何考えているんだ!そんな恰好でダンジョンなんて!!ひみつ道具があるからって無謀だぞ!」

「……すみません」

浅慮、愚行もいいところだ。

しかしそれをしたということはそうするだけの理由があったのではないか？

「どうしてそんな無茶を……」

ヘスティアの疑問にベルは答えなかった。

今のベルを叱りつけるのはきつと良くない。

そう考えたヘスティアはそれ以上の追及はしなかった。

「わかった。何も聞かないよ。先にシャワーを浴びておいで。そのあと治療しよう」

「はい……ありがとうございます。」

そこからベルは無言になった。

もう喋るのも億劫なかもしれない。

「ベル君。今日はベッドで寝るんだ。いいね。」

「ごめんなさい……」

「ここで君をソファーに放り出すほど悪神あくにんにはなれないぜ？」

怪我には休息が一番だ。

すこしでもいい環境を用意するのは当然だろう。

そう考えた時、あるいたずらを思いつく。

ニヤリ、と子供っぽい笑みを浮かべたヘステイアはベルを見る。

「とは言えだ？ボクもベル君を探すために走り回つてへとへとだし？ここは同じベッドで寝ようじゃないか？ふふふ……まさか断らな……」

「そうですね。じゃあ、一緒に寝ましよ……」

「……なんですと!?!」

冗談にカウンターを決められたヘステイアは大いに慌てた。

畜生、慌てるのはベル君の役目だろう……!!

しかしこれはチャンスだ。

思う存分少年を堪能してやる。じゆるり。

「神様……」

「な、なんだい!?!」

邪な企てを見透かされたのかと少々裏返った声で返答するヘステイア。

ちよつとドキドキしながらベルの次の言葉を待った。

「……僕、強くなりたいたいです」

その少年の言葉に、女神は何を感じ取ったのか。

ベルの横顔に息をのみ、「うん……」と少年の憧憬ねがいを真摯に受け止めたのだった。

## 【憧憬一途】

お互いの疲労もあり、泥のように眠った二人は何時よりも少し遅い時間に目を覚ます。

目覚めた瞬間隣に眠るヘステイアの顔を見てベルが絶叫する珍事はあったものの、落ち着いたら何時ものように朝食を取ってステイタスの更新を行う。

「……」

そして絶句するヘステイア。

ベルの背中の刻印が示す神聖文字ヒエログリフを額を擦り付けながら凝視する。

そして見間違いないと確認すると大きく溜め息をついた。

(確かに大変な目に遭ったみたいだけど……それでも数字が大きすぎる。)

ひみつ道具という切り札があり、多少の無茶ができるとはいえこの数字はあり得ない。

ステイタスが簡単に上がるのは最初だけ。

I からH にアビリティの値が上がれば途端に成長が難しくなる。

例え適正階層以上の修羅場を潜り抜けたとしても20近く成長ができたら上等なの



だ。

それが常識。だがヘステイアの目の前の光景は、その常識を嘲笑うかのように超えて見せた。

ベル・クラネル

L v. 1

力：G 2 4 5 耐久：H 1 3 2 器用：G 2 3 4 敏捷：F 3 3 2 魔力：I 0

《魔法》【一】

《スキル》【四】フォーエス・ディメンション・ポーチ 次元衣囊

- ・ひみつ道具を具現化できる。
- ・使用可能な道具は一日三つ。
- ・一日ごとに内容は変化する。
- ・現在使用可能なひみつ道具。

【ハツメイカー】【しゅん間リターンメダル】【こけおどし手投げ弾】  
リアリス・フレゼ  
 【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

だからこんなステイタスはあり得ない。

どんなに才能があったとしても神の恩恵は生易しいものではないのだ。

(この異常な成長の元凶は……)

リアリス・フレージェ  
憧憬一途。

5階層で起きた異常事態から生還したベルが発現した新しいスキル。

スキルの効果は早熟する。思いが続く限り効果は持続し、思いの丈により効果は上昇する。

むむむつ、とベルの背中を睨み付ける。

スキルが現れたタイミングから推測するとベルの想い人とは……

(おのれつ、おのれええええ!!ヴァレン何某なにがし!!)

ヘステイアは都市の超有名な人をおかしな呼び方しながら歯噛みする。

ベルを巡る恋敵ライバルになりそうな女子など精々ハーフエルフであるベルのアドバイザーくらいしいかないかつたはずだった。

なのに今まで接点ゼロだったぼつと出に横から愛しい少年の心を奪われたのだ。

これにはヘステイアも穏やかではいられない。

(なんだい一目惚れって!そんなの不意討ちじゃないか!)

「か、神様?」

「背中の上で不穏な空気を撒き散らすヘスティアに気が付いたベルが恐る恐る聞いてくる。」

ちくしよー、好きだつて先に伝えたのはボクなのにベル君は気がつかないし、これならあのときもつとガンガン行くんだつた！

少年の成長速度 Ⅱ ヴァレン何某へのlove度なわけだから心穏やかで居られるはずもなく、ヘスティアの機嫌はドンドン悪くなる。

(この凄まじい成長速度……ベル君に伝えるべきか?)

下界の子どもは変わりやすい。

善人だったはずが権力を手に入れたとたん横暴になるなんてよくあることだ。

ベルに限つてそんなことはないと思いたいが、この数値の情報をそのまま伝えるのはいいことなのだろうか。

ダンジョンは非常にシビアな戦場だ。

適正レベルの範囲ならばよほどの不運ファンブルがない限りは長生きできる。

逆に言えばレベル以上の階層に進出した冒険者の寿命は短い。

周りにおだてられて調子に乗った新米冒険者が先輩やアドバイザーの忠告を無視した結果、帰つてこなかつたといった話はオラリオに来てそう長くはないヘスティアでも飽きるほど聞いてきた。

ベルにはステイタスの数字を誤魔化して伝えたほうがいいのではないか、そんな思いがヘステイアに芽生える。

少なくとも今の数値なら2階層で死ぬことはないと考えていい。

(それに神々の反応も気になる。)

この世界に関しては全知の存在である神々もしらない異世界のひみつ道具を呼び出す【四次元衣囊】フォース・ディメンション・ポーチ。

それだけでも玩具確定だというのに、それに前代未聞の成長促進スキルだ。

このことが知られたら、歓喜のあまりに心臓を止めて強制送還される神もいるのではないか。

使うところを見られなければいいひみつ道具と違い、成長促進はすぐにバレてしまうだろう。

絶対に他の神々に知られてはならないが、ベルに隠し事は無理だ。

ならば初めから彼に知らさないといいのは一つの手段として考えられる。

(でもそうすればベル君は実力にあった階層で経験を積めない。)

格下を倒しているだけでは冒険者は成長できない。

実力に応じた冒険をしなければ神の恩恵はその冒険者を決して認めることはないだろう。

数十年、ゴブリンを延々と狩っていてラクラク成長！なんて甘い話はないのだ。少年の成長は間違いなく阻害される。

ベルの夢を、ベルの願いを、ヘステイアは踏みにじることになる。

(……ああ、もう！)

悩んでいても答えはもう決まっているのだ。

ヘステイアはあの瞬間、ベルの決意を聞いている。

それをなかつたことになどできない。

きつとヘステイアはベルの背中を押さだろう。

(あんなスキルをよりにもよってボクが発現させたなんて、いつそ悪夢だよ。)

だから心の中で愚痴を言うくらいは許してほしい。

背中を押した結果、ヘステイアが少年の心を手に入れるのは絶対に難しくなるのだから。

女神はステイタスを更新し終わると、少年に口頭で更新の結果を伝える。

……【リアリス・フレゼ憧憬一途】を隠すくらいはいいだろう。

なんか超凄い成長期だよーって言えば誤魔化せはするし、懸想がどうのこうのなんて説明したくないし、説明したことで何某のことを想って赤面するベル君なんて見たくな

いし！



言った後で気づいた。神様には嘘は通じないんだった。

案の定、日付が変わってひみつ道具が消えたことに気が付かれてジト目で見られる。

更新直後なので半裸の格好のまま説教される僕は身を小さくした。

「……まあ本題に入ろう。ベル君、今の君はなぜかは分からないけど、恐ろしい速度で成長している。成長期と言える。」

成長期……

いや、あの数字はそれで片付けていいのだろうか。

釈然としないが神様の話はちゃんと聞こう。

「ベル君。君には才能があると思う。今回の飛躍的な数字の増加だけじゃなく、冒険者に必要な才能、センスとでも呼べるものが君には確かにある。」

ただの農民であったはずのベルが、先達の指導も受けずに今日までダンジョンで成果を上げてきたことがその証明なのだと言はう。

才能か。正直、ヴァレンシユタインさんを見た後だとピンとこない。

比較対象が悪すぎるのは分かっているけども。

「君はきつと強くなるだろう。でも約束してほしい、無茶はしないって。こんなことは繰り返さないって誓ってくれ」

目を伏せがちにして吐露した神様。

でも、それじゃ……

「ぼ、僕は……」

「君の意思は尊重したいし、応援も、手伝いもする。力だつていくらでも貸す。……だから、お願いだからボクを一人にしないでくれ」

その言葉はずつしりと響いた。

ベルはうつむいて目を閉ざした。

何かを思い出すように、少年は沈黙する。

「……はい」

やがてベルは顔を上げた。

強くなるために回り道なんてしたくない。

ひみつ道具があれば多少の無茶は通るのかもしれない。

だけど、そうやって目の前の女神の潤んだ瞳を蔑ろにするのは違う気がした。

だから、約束しよう。

きつと、この約束は僕をきつと繋ぎ止めてくれる大切なものになる。

「無茶しません。頑張つて強くなりたいけど……絶対に、神様を一人にはしません」

「……そっか。なら、安心かな」

ヘステイア様の穏やかな笑みを見て、その選択は間違っていないと確信できた。



やがて神様は一つ頷くと何やら食器棚の引き出しをひっくり返し始めた。なんだろう？と僕は着替えつつも神様の探し物を見る。

あれは手紙だ。招待状だろうか、中々上質な封筒にガネーシャの文字が見える。

〔ガネーシャ・ファミリア〕って確かオラリオでも3つしかないSランクのファミリアだったはず)

僕たちみたいな零細ファミリアと関わりはなさそうだけど、どうして神様がそんなものを持っているのだろうか？

「ベル君っ、ボクはしばらく友人のパーティーに顔を出そうかと思う。何日か留守にするよ。」

「え？あ、分かりました。昨日は僕が外食させてもらいましたし、楽しんできてください。」

「ありがとう。ベル君は今日もダンジョンに行くのかい？」

「だ、ダメでしょうか？」

あんな約束したばかりで、やっぱり自重は必要だろうか。

ひみつ道具の確認もしたいのだが。

しかしヘスティアは顔を振って笑った。

「いいや？引き際をわきまえるのならいいよ。君はまだ怪我してるんだから気を付ける



半殺しで勘弁してもらえないだろうか。

身から出た錆とは言え、怒られに行くとなると気が滅入る。

入る時なんて声をかけよう……と少し悩んでから、意を決してドアをくぐる。

「あの……すいません。シル・フローヴァさんはいらつしやいますか？」

「ああ！ あん時の食い逃げ白髪頭ニヤ！ シルを貢がせておいて、用が済んだらポイ捨てした鬼畜兎ニヤ！」

さっそ飛んでくる罵倒に心が折れそうになった。

全面的に僕が悪いから受け止めるしかないけど。

「貴女は黙っていてください」

「ブニヤ!？」

「失礼しました。すぐにシルとミア母さんを連れてきます」

エルフの店員さんの手刀が速すぎて見えなかった。

意識を飛ばしたキャットピープルの店員さんをズルズルと引きずって彼女は店の奥に消える。

あの強さで制裁食らわせられたらもうどうしようもないな。

諦めて二人が来るのを待とう。

「ベルさん!？」

階段から駆け下りてくる音が聞こえた後、シルさんが現れた。

あの後、僕がかけた迷惑を考えると自己嫌悪が止まらないが、腹を括って前に出る。

「昨日はすいませんでした。これ、払えなかった分です。足りないようでしたら、色を付けてお返しします。」

「……いえ、大丈夫ですから。ベルさんにこうして無事に戻ってきてもらえただけで嬉しいです。」

その言葉に泣きそうになった。

多分、この人は僕があの後ダンジョンに向かったことに気が付いているはずだ。

そんな真似をした理由も。

でもそれには触れずに温かく包み込んでくれるこの人は本当に優しいのだろう。

シルさんは僕をほほえましそうに見つめた後、「ちよつと待っていてくださいね?」とキッチンに戻り、大きなバスケットを持って戻ってきた。

「よろしければ、また、もらっていただけませんか?」

「えっ?」

「今日はシェフの作ったまかないものですから、味は保証します」

でも、なんで……、そう言おうとしたところで、シルさんは照れ臭そうに笑った。

そんな表情を見て、あまり鋭いほうではない僕でも分かった。

元気付けようとしてくれているんだ、シルさんは。「すいません……いただきます」

バスケットを受け取ると、シルさんは少し頬を染めて笑みを深めた。

「坊主が来ているって？」

そこに、ドワーフの女将さんが出てきた。

ドワーフの中でも大きいほうだと思える女将さん……ミアさんは凄いい笑みで僕の胸をつついた。

うん、すごい笑みだ。神様が言っていた「笑顔とは本来攻撃的うんぬん……」という言葉が思い返される。

「わざわざ金を返しに来るとは感心じゃないか。シル、あんたはもう仕事に戻りな」

「あ、はい。分かりました」

お辞儀してシルさんが戻っていく傍ら、ミアさんは「あと少し遅れていたらこっちからケジメをつけに行った」とか、「さっきのリユウなんて真剣を持って出ていくところだった」と話す。

本当にちゃんと謝って良かった。

割と命の危機だったらしい。

「シルには感謝するんだね。殺気立つウチの連中を宥めたのはシルだよ。あの後あんた

を追いかけたようだったけど、会わなかったんだらう?」

(そっか……僕を、追いかけて……)

オラリオに来てから僕はもらってばかりだ。

いつか、ちゃんと恩返しできたらいいな。そう、僕は思った。

「……坊主」

「は、はい!」

「冒険者なんてカツコつけるだけ損だよ。まずは生きることだけに必死になればいい。無茶したっていいことないんだ。」

突然の言葉に目を見開く。

そういえばカウンターの近くにはミアさんがいた気がする。

あの時のことを見られていたんだらうか。

「生きてればそれでいいのさ。みじめでもね。そんな奴がアタシの料理や酒をたらふく食える。ほら、勝ち組だらう?」

「……はい。」

「さあ、行った行った。もう店の準備を始めるからね」

背中を押されて外に出される。

ドン、という衝撃でちよつと息が苦しかったけど、感謝の念が尽きなかった。

少し残っていたしこりは消えた。

もうあの獣人の青年の言葉も燃料として、憧憬に向かつて一途に走り続けられる。  
(今できることを、必死に、最高速度で、でも無茶はしない)

神様やミアさんの言葉を胸に刻み込む。

「坊主、ここまで言わせたんだ。半端なとこでくたばるんじゃないよ」

「はい！ありがとうございます！行ってきます！」

勢いよく駆けだす。

つい大通りで大きな声を出してしまったことに赤面しつつも、風を切ってダンジョンを目指す。

「……ああ、そういえば2階層で大量に現れた魔石は闇派閥イヴイルスの残党の仕業らしいから気を付けるんだよ！」

「フアツ!?!」

……はずだったが盛大にズッコケてしまった。

なんでそんなことになってるの？

## 怪事件の影響

いきなりだが、僕は今話題の2階層の魔石大量発生したあの異常現象の犯人だ。

いや、わざとじゃないんだけどね？

色んな人に迷惑かけちゃって悪かったなーとは思っているんだ。

まあ、それはいいとして。

なんでそれがイヴイルス闇派閥イヴイルスの仕業ということになっているのだろうか。

(闇派閥イヴイルスって確か10年前くらいにオラリオを騒がせた邪神の眷属たちのことだった気がする。あまり詳しくはないけど、もう壊滅したんじゃないやなかつた？)

数年前に疾風っていう一人の冒険者によって止めを刺されたらしい。

「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」との抗争で衰退していたとはいえ、

幾つものファミリアを一人で壊滅させるなんてすごい人だ。

やり方が過激すぎてギルドからブラックリストに指名されたらしいけど。

なんでこんなことを僕が知っているかと言うと、ダンジョンで探索する傍らに冒険者たちから情報収集を行っているのだ。

もう一度言うけど今回の事件の犯人は僕だ。



あの事件が闇派閥イツイルスによるものだと思解されたまま僕イツイルスのことがばれたら、最悪の場合は僕が闇派閥イツイルスの残党と言うことになって「ガネーシャ・ファミリア」の御用となるだろう。

だからいつもより必死になって情報収集に努めている。

ダンジョンの中では相互不干渉が原則だが、こうやって冒険者同士で情報交換することもよくあることではあるのだ。

僕はいかにも駆け出し冒険者な見た目だからか、意外と同業者たちからの感触は悪くない。

結構、色々なことを聞くことができた。

それに思わぬ再会もあったんだ。

「しかし、あの時の坊主とダンジョンでまた会うとはな。面白い縁もあったもんだ。」

顔に大きな傷をつけた男性が豪快に笑う。

体に装備した重厚な鎧と言い、がっしりとした体躯と言い、いかにも冒険者つて感じの見た目。

僕なんかと違って明らかに大ベテランなこの人はハシャーナ・ドルリアさん。

神様たちから「豪拳闘士」の二つ名を授かったレベル4の冒険者だ。

なんでこんな人と話せたかと言うと、僕がオラリオに来た日に少しこの人のお世話になったことがあったのだ。

それから会ってはいなかったのだが、さつき偶然見かけたので情報収集もかねて声をかけさせてもらったのである。

「それで、例の事件と闇派閥イツイルスとのつながりだったか？単純な話さ」

ハシャーナさんはオラリオの憲兵とも呼ばれる「ガネーシャ・ファミリア」に所属するだけあって、オラリオで起きた事件には詳しいらしく、快く教えてくれた。

「あの魔石の大量発生の後、ダンジョンには何の変化もなかった。ダンジョン由来のイレギュラーイレギュラー異常事態は次々と畳みかけて起こることが多いからな、その時点でギルドはこれが人災だと結論付けた。」

ゴクリと喉を鳴らしてしまった。

確かにあれは人災だ。

真相はひみつ道具という規格外の力に振り回された、何の変哲もない新米冒険者による陰謀も何もない事故だが。

それがどうして闇派閥イツイルスの仕業ということになったのか。

「こうなつた時、最もやばいのは闇派閥イツイルスによる陰謀だった場合だ。疾風によってポロポロのあいづらは見境がない。あの時代を知らないお前にはピンとこないだろうが、あいづらは狂信者と言つていいからな。これが奴らの仕業ならば早急な対処が必要だとギルドは闇派閥イツイルスとの関係を疑われたファミリアを徹底的に調べなおした。」

……いや、徹底的に調べなおしたっておかしいのでは？

そんな調査もつと時間かかるんじゃないの？

大量の魔石が跡形もなくなっていた昨日の出来事を考えると自信がなくなるけど。

多分、正規のやり方じゃないんだろうな。

公にならないギルドの隠し玉。

噂でしか聞かないそれが動いたのかもしれない。

「そしたらなんと、奴らが怪物祭りに乗じて大規模なテロを引き起こそうとしていることが分かった」

「えつと？怪物祭って……」

「おつと、お前はまだオラリオに来たばかりだから知らなかったか。要はモンスターと冒険者がコロシウムで戦う見世物だ」

そう言うとおシヤーナさんは鼻で笑った。

「大方、魔石を撒き散して陽動をかけたつもりだったんだろうが、それが原因で計画が露呈するなんざお笑い草だな」

すいません。

多分、闇派閥の人たちも予想外だったと思います。

どうやら僕の起こした珍事件が巡り巡って闇派閥の企みを日の目に晒してしまった

らしい。

それで、ハシヤーナさんみたいにギルドの偉い人も魔石の大量発生もイツイルス闇派閥によるものだと勘違いしてしまったのだろう。

(べ、別にこれに関してでは悪くないよね？イツイルス闇派閥の企みなんて失敗したほうが良かったわけだし)

だからこの件に関してはフアインプレーなのでは？

……無理があるよなあ。

結局、やらかしていることには変わりないし。

なんだかすごい憂鬱な気分だけど、ハシヤーナさんにはお礼を言わないと。

「ハシヤーナさん。色々と教えていただきありがとうございます。」

「いいってことよ。」

「何かお礼をさせてください。」

そう言っつて僕はバックバックに仕舞っていたひみつ道具を取り出す。

このひみつ道具、便利だけどスペース取りすぎなんだよなあ。

「うん？さつきから気になっていたがその中身はなんだ？」

「ハツメイカーって言らしいです」

(よし、あらかじめ出してたからあのバカ丸だしな声を聞かせなくていい。)

バックパックから取り出したのは両手で抱えるほど大きな箱状のひみつ道具。いろいろなメーターやら角やらがくつついた変な形なひみつ道具なので、地味に運びにくい。

「……なんだ、それは？」

「これは欲しい道具を言おうと注文に応じて道具を発明して、設計図を作ってくれるひみつ道具……マジックアイテムみたいなもので……」

「まてこら」

さつき試して分かった能力を説明していると、ハシャーナさんが頭が痛そうな表情をして僕の説明を止めた。

「なんでそんな物を持っているんだとか、それをダンジョンに持ち込むのはおかしいだろとか、色々突っ込みたいが、まず一つ聞かせてくれ。……それ、俺が聞いても大丈夫な奴か？」

「あ」

神様に散々口止めされてたのに普通に話しちゃったよ。

いくら恩人とは言え迂闊うかつだった。

「えっと、その……」

「やっぱり口止めされていただけだろ？<sup>ペルセウス</sup>万能者も真つ青なアイテムだからな。」

ハシャーナさんは呆れたようにため息をついた。

ど、どうしよう……

「まあ、いい。今の部分は聞かなかったことにしてやる」

今回ただけぞ？とハシャーナさんは僕に釘を刺した。

確かに注意が足りてなかった。反省しないと。

「それで、ほしいアイテムの設計図だったか。どこまで作れるか分からんが……そうだな……」

少し考えるそぶりを見せた後、ハシャーナさんは何かを思いついたように笑みをこぼす。

「坊主。前にあった時にお前に言ったこと、覚えてるか？」

「え？えっと、冒険者にとって一番大切なものですよね」

「そうだ。俺はお前の質問に対して、最も重要な資質は“運”だと答えた。」

オラリオオに入学するときに僕は初めて会った冒険者であるハシャーナさんに、冒険者にとつて一番大切なものはなにか、という質問をしていた。

それに対してハシャーナさんは、いい神おや仲間おに巡り会い、ダンジョンで僅な可能性を掴めるができる運だと答えたという出来事があったのである。

「アレの続きになるが、運と言うものはブレちまう。どんなにツイている奴でもな。だ

からこそ、冒険者は常に最悪への対策を講じる必要がある。」

ハシャーナさんはこの後、仕事のために下層へ潜ることになっているらしい。たった一人で。

ハシャーナさんは適正階層だから問題はないといっているけど、実力的には問題なくともアクシデント一つでそれが覆るのがダンジョンだ。

「魔剣を用意したりして今は準備を進めているが……坊主にも俺が生き延びる可能性を少しでも高めてもらおうか」

つまり、ダンジョンで生き抜くうえで重要なアイテムの設計図。

これはハシャーナさんによる遠回りなレクチャーだと僕は気づいた。

違うファミリア同士、簡単に師事することができない僕に、依頼と言う形で冒険者に必要なものを教えてくれている。

「それで、どんなアイテムが必要なんですか？」

レベル4という熟練の冒険者による教えだ。

次の一言だけで値千金の価値がある。

聞き洩らさないように僕はハシャーナさんの言葉に集中した。

「そうだな。俺が欲しいのは逃げるためのアイテムだ。」

「逃げるため……ですか？」

「ああ、次々とモンスターが湧くダンジョンでは必ず逃げなければならぬときがくる。武勇伝だと省かれがちな部分だがな」

いや、エイナさんも言っていたことだ。

『冒険者は冒険してはいけない』。

不要な消耗を避けるために退避することは決して恥ずかしいことじゃない。

僕はハシャーナさんの言葉を心に刻んだ。

「それと、一つ注文を追加させてもらうなら補給がないダンジョン内でも簡単に修理できるアイテムがいい」

なるほど。ダンジョンでの応急修理も考えなきゃいけないのか。

そうなると複雑すぎる物や素材が手に入りにくい物だとダメかも。

ダンジョンで簡単に手にはいるもの……魔石はどうだろうか。

ドロップアイテムみたいに運に左右されないで確実にモンスターから手にはいる。

『魔石でできた、修理しやすい、逃走用のアイテム。』でハツメイカーに注文する。

起動し出したハツメイカーをハシャーナさんは半信半疑で見ている。

確かに希望通りの道具を発明してくれるマジックアイテムなんて聞いたこともないし、その反応は当然だろうけど。

やがて、一枚の設計図が現れた。



「これは……想像以上に単純だな。本当に大丈夫なのか？」

ハシャーナさんの言葉通り、設計図は子供のおもちゃレベルの簡単なものだった。

必要なのは紐と瓶と魔石。

紐は色々なことに使えるから冒険者にとっては必需品だし、瓶は小型でいいみたいだから空のポーションでいいだろう。

早速作ってみよう。

(ええと、魔石を二欠片用意して……片方の魔石を紐で結んで……瓶の中に順番に入れて……後は紐を設計図通りに手首に結んで……)

「おお、結構器用だな坊主。」

「お祖父ちゃん……祖父に色々と教えてもらいましたから」

雑談しつつ出来上がったアイテムを見る。

手首に紐でくくりつけられたポーションの瓶と言う、とても原始的な仕掛け。

正直、ひみつ道具と比べるとすごく格落ちする見た目だけどころちゃんと機能するだろうか。

「これはどう使うんだ？」

「説明書には魔石を光らせて逃げるみたいです。」

「光か……確かに魔石灯のように光る魔石製品は山ほどある。なら出来ないわけではな

いだろうか」

説明書の図だと二重に巻かれた手首の紐を引っ張ることで発光するらしい。

(なんだか……地味だな……)

いや、工夫はされてると思う。

でもひみつ道具の規格外さを何度も見せられた身としてはなんだか肩透かしな気がする。

「おお、これはいいな。」

しかし熟練冒険者のハシャーナさんは違う感想を持ったらしい。

「一度見ただけでもなんとなく作り方がわかる程度の単純な構造はかなり広まりやすいだろう。本当にもらってもいいのか？これを特許申請するだけで中々の額になるぞ。」

物凄いい評価だ。

僕なんかより断然経験があつてダンジョンに詳しいこの人が言うなら、多分その評価は正しいんだと思う。

でも、ひみつ道具に作ってもらった発明でお金儲けなんていいのだろうか？

「あれはそもそもお前のものならお前の力だ。何も躊躇ためらうことはないと思うがな」  
中々魅力的な話だ。

今の「ヘステイア・ファミリア」の財政は完全に火の車だし、安定して稼げる副次的

収入源があればかなり安心できる。

……いつもバイトでくたくたになりながらも、ホームで僕を迎えてくれる神様だつて楽をさせてあげられる。

(でも、ほんとにいいのかな。)

問題はこのアイテムの作り方を独占することで、救えたはずの命を見殺しにすることになるのではないかという疑問だ。

もし、ハシャーナさんの言う通りにこのアイテムがダンジョンで有用なら、広めるべきじゃないか。

そうするためには僕の利益なんて考えるべきじゃないと思う。

(どっちがいいんだろう。)

あくまで現実を見てお金を稼ぐか。

綺麗事のために利益を放棄するか。

悩んで、悩んで……結局僕は冷徹になれなかった。

首を振った後、ハシャーナさんを真っ直ぐに見つめた。

「いえ、お金はいりません。もし、このアイテムが有用なら遠慮なく広めてください。」

「……お前が特許を取らなくても別の奴がとるかもしれないぞ」

「それでも、それまでに多くの人に伝われば、きっと助かる命があると思うから。」

ハシャーナさんは僕の答えを聞くと呆れたように……でも、どこか眩しそうに苦笑いをした。

「まあ、これはお前の発明だ。お前の好きにすればいいさ。だがな、ベル。「ガネーシャ・ファミリア」の一員として、都市の憲兵として言っておかなければならない事がある。」  
空気を一変させてハシャーナさんは話を切り出した。

さつきまでのどこか緩んだ雰囲気は霧散し、歴戦の強者としての顔を纏う。

当然の変化に戸惑う僕に向かって、ハシャーナさんは厳しい現実を突きつけた。

「今までの人類の歩んだ歴史を見れば一目瞭然だが、偉大な発明は必ず何者かに悪用される。お前のその優しさなど気にも留めないクズによつてその発明が悪用される覚悟はあるか？」

思いもよらなかつた言葉に目を丸くする。

ハシャーナさんはハツメイカーが作り出したアイテムの有用性は犯罪でも大いに発揮できると警鐘を鳴らした。

例えば犯罪者の逃亡のために、例えばダンジョンにおける闇討ちのために、例えば愉快的な快楽のために。

都市の治安を守る【ガネーシャ群衆の主】の眷属としての経験に裏打ちされた推測は、まるで目の前で起きてるかのような現実味を帯びた内容だった。

このアイテムを公表すれば救える命はある。

しかし、奪われる命もあるかもしれない。

そう気がついた時、頭の中が真っ白になるのを感じた。

「ベル、何か行動を起こすということとはな、誰かを犠牲にしてしまう可能性があることなんだ。」

ハシャーナさんの言葉が深く、ベルの中に響いた。

ベルは命の大切さは良く知っている。

大切な人の命を奪われて、残される悲しみを知っている。

(このアイテムが、誰かの大切な人を傷つける?)

そんなことない!と叫びだしたい。

しかしベルは決して頭の出来は良くないが、言われた言葉を何も考えずに否定するほど馬鹿ではないのだ。

ハシャーナのいった未来はきつと訪れる。

動揺に呼应して激しく脈打つ心臓が酸素を欲している。

目の前の光景がちかちかと点滅している気がして、涙があふれそうになるのを懸命にこらえた。

ここで泣き出して、全てを投げだすのは簡単だ。

でも、それはダメだ。

自分で何も決めれずにいることは恥ずかしいことだと、お祖父ちゃんは言っていた。だから、しっかりと自分で考えないと。

(そんなの……でも……僕は……)

先ほどよりも長い沈黙。

ハシャーナさんはどれだけ待たされても静かに僕の決断を見守っていた。何度も拳を握っては開いてを繰り返し、歯を碎かんばかりに噛み締める。

どれだけ時間が経ったのか、やがて僕は頷いた。

「それでも、救われる命があるなら……お願いします。」

言った後に後悔が襲った。

さっきの決意とは違う、後味の悪いものが胸に広がっていく。

とんだ偽善者だ、僕は。

ハシャーナさんを上手く見れずに項垂れる僕の肩を、ハシャーナさんはポン、と叩いた。

「悪かったな。意地悪な質問をしちまった」

さっきまでの厳しい顔から、また先輩冒険者としての優しい表情に戻っていたハシャーナさんはそう、僕に謝った。

「坊主の優しきは得難いものだと思う。冒険者なんて基本は自分本位だからな。」

俺だつて金払いの良い、当たりの依頼を見つけたら独占するぜ？とハシャーナさんは言う。

ベルのように他人のことを考えられる奴は、だからこそ、この人の欲望が渦巻くオウリオでつぶれていくとも。

「お前の性格じゃ、いつか思い悩む時が来る。その時、今のうちにある程度覚悟を決めておけば、少なくともその場でパニックになることはないだろう？」

いらんお節介だろうがな、とハシャーナさんは笑った。

でも、彼の指摘は事実だ。

これで本当にいいのか自信が持てない。

「お前が今悩むものは答えのない難問だ。俺でも何が正しい選択かなんて分からん。だからベル、矛盾と向き合え」

「矛盾と……向き合う？」

「そうだ、いつまでも考え続ける。変に小賢しくあろうとすれば、楽なんだろうが……お前の優しきは失われる」

ある意味、ひどいことを言われている。

安易な冷徹さを身に着けずに悩み続けながら綺麗事を貫けなんて、潰れてしまえと

言っているようなものだ。

「別に忘れちまってもいい。無茶苦茶言っている自覚はある。ただ……」

——できればお前はお前のまま成長してほしい。

ハシャーナさんは続きを言わなかったけれど、そんな風に続けようとしたのではないかと僕は思った。

それに頷くことはできない。

そうなればいいのだろうけど、僕には神様やエイナさんと言った支えてくれる人たちがいる。

あの人たちまで危険にさらすような真似はしたくない。

それでも、今日のハシャーナさんとの会話は強く僕の中に残った。

「……まーこれが言うほど良いものかは試してみないと分からんがなー」

重苦しくなった空気を吹き飛ばすようにハシャーナさんは手首のアイテムを突いた。

まだいろいろ考えたいけど、僕もいったん切り替えよう。

ハシャーナさんの言った通りこれは答えのない問い。

なら、長い時間をかけて答えを見つけないといけない。

僕は今のままでいいのか、その疑問を持ってただけで今は満足しよう。

「さて、どこかに手軽なゴブリンは……」



しかしちよつとゴブリン相手に試し過ぎてる気がする。  
いや、すごく便利なんだ。

ハシャーナさんも自然とそういう思考になるくらいには。  
(いつか、手痛いしつぺ返し食らいそう。)

何か予感めいた思いが芽生えたが、走行している間にハシャーナがゴブリンを発見した。

「よし、じゃあ使ってみるぞー」

早速手首の紐を引っ張るハシャーナさん。

いや小さい魔石だし、この距離じゃ効果薄そうだけど……

なんて、油断したのがいけなかった。

パアンツ、と軽快な破裂音が鼓膜をちぎれんばかりに揺さぶる。

そして、突如太陽が出現したのかと錯覚するほどの閃光がダンジョンの通路を照らした。

精々こけおどし程度だと高を括っていた僕たちはまともその光を直視してしまつた。

「「ほぎやああああああ!!!!?!!!?!?!」」

僕とハシャーナさんとゴブリンは目を抑えて絶叫する。



噂のことだけじゃなく、この人には色々とお世話になってしまった。

またちゃんとした形でお礼を言いたいな。

(なんだか最近、恩人が増えているな)

僕が未熟者である証なんだろうけど、こんなにたくさんの恩を返せるか不安だ。

「じゃあ、俺はもう……そうだ坊主、このアイテムに名前はあるのか？ないと広めにくいんだが」

「え？」

確かに考えてなかった。

説明書に描いてあるのかもしれないけど、生憎異世界の言葉は読めない。

作るだけなら図でどうにかなったんだけども。

「か、考えてないです」

「なら、次会うときまでに考えてくれ。この依頼が終わったらまたこの辺りの階層に顔を出す」

「そんな!!そこまでしていただかなくても……」

「いや、これは俺の為でもある」

「え？」

アイテムの名前を聞きに来ることがどうしてハシャーナさんのためになるのだろう

か？

頭に？マークを付けていると、ハシャーナさんは得意げに笑った。

「坊主、最後のアドバイスだ！深い階層に潜る前には、必ずその後の予定を入れておけ！生きて帰る理由は冒険者の力になる！」

そう言うのとハシャーナさんは歩き出す。

僕は遠ざかる先達の冒険者に姿が見えなくなるまで頭を下げた。

そして再び探索を始める。

だいぶ長いこと話し込んでしまったから、予定よりも成果が出ていない。

神様が数日間ホームを開けている間、できるだけ稼いでおきたい。

先日の事故で大量の魔石を確保したとはいえ、まだまだ借金返済には程お遠いのだから。

（さあ、魔石集めもひみつ道具のチェックもまだ済んでない。急がないと。）

急いでハツメイカーをバックバックに仕舞う。

それにしてもハツメイカーはすごいひみつ道具だった。

無限の可能性と言っても過言ではない応用力を秘めている。

ずっとあれが使えればな、なんてどうしようもないことだけどっつい考えてしま  
う。

(でも説明が十分に読めないのは問題かも。おかげでさつきはひどい目にあつたし、もう二度とあんな光見たくない)

おっと、思考がそれてしまった。

そうだなまずはひみつ道具の確認をしよう。

残るひみつ道具は「しゅん間リターンメダル」と「こけおどし手投げ弾」。

どっちもよく分からないから適当に決めよう。

ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な・か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り……

よし、こけおどし手投げ弾にしよう。

「こけおどし手投げ弾」

その後、背後からとんでもない光と音が発生したことで、なんか嫌な予感を感じたハシャーナによって見事にこけおどし手投げ弾により自爆して目を回らせていたベルは回収された。

「イマイチ格好がつかないやつだ」と苦笑いしながら、ギルドまで白髪の少年を背負っていく【豪拳闘士】の姿が目撃され、街のちよつとした話題になったという。

## 神々の宴

下界に降りた神々は娯楽に飢えている。

その身一つでファミリアを結成して、神アルカナムの力を封じた不自由な生活を樂しめるのは初

めだけだ。

生活が安定しだすと天界で感じていた退屈が神を襲う。

そうやって暇をもて余した神の起こすはた迷惑な騒動は「神話」と呼ばれ、度々下界の住民を振り回してきた。

幸い、今回の「ガネーシャ・ファミリア」のホームで開催されるパーティーはそんな神々の暇潰しのなかでも比較的穏やかな部類である。

あくまでも比較的、という但し書きがつくが。

自由奔放な神々は下界の不自由さを楽しみはするが、下界の秩序を尊重している訳ではない。

自身の「ファミリア」を使い、政治ゲームに興じるためにこの和やかなパーティーの裏にも様々な陰謀が張り巡らされていた。

主催者であるガネーシャの挨拶など聞きもせず、談笑の体を成した腹の探り合いが行

われていた。

しかし、一言に神といってもそのあり方は多種多様。

そんなドロドロした陰謀劇とは無縁の神も少数派ながら存在していた。

自身の「ファミリア」の貧乏っぷりを他の神々にかわかれ続けるのが嫌になり、壁の染みに徹するタケミカツチと、周囲の狸どもなど知ったことかとタツパーに料理を詰め続けるヘステイアは正にその少数派な神物だ。

「いや、何やってるんだお前」

「言ってくれるなタケ!! 見栄じゃお腹は膨れないんだ!!」

「それでも最低限の羞恥心は持つべきじゃないか……?」

黒い和服を着るタケミカツチは他の神々の視線を一切気にせずに、熟練の主婦がごとき鋭い眼光でテーブルの料理を吟味するヘステイアにある意味尊敬の念を覚えた。

間違ってもああなろうとは思えないが。

「君こそこんなパーティーにくれば暇を持て余した神どもに集られるのは分かり切つて

いただろうに、なんできたんだい」

「そりゃあ、ただ飯が食えるからだ。」

「なんだ同類じゃないか」

「それでもお前ほどガツガツはいけん。それにタツパーに詰めるのだって誰も見ていな



いところでやる。」

いや五十歩百歩だろ、という聞き耳を立てていた給仕の突っ込みは届かない。

それどころか迂闊に近づいた給仕は、体格の問題でテーブルの奥の料理に手が届かないヘステイアの代わりにタッパーに料理を詰めさせられる羽目になった。

「愛する眷属こどものためならば神の体面なんて惜しくはない！ベル君の負担を減らすこの行為のどこにも恥ずべき点なんてないんだ！」

「むう……一理あるか……？」

(ねえよ)

おバカヘステイアの寝言を真に受けてしまった天タケミコツチ。然はヘステイアからタッパーを借り受けて自らもテーブルの料理を詰め始めた。

……比較的安そうな料理を選んでる当たり中途半端に理性によるブレーキがかかっているのかもしれない。

「何やつてるのよあなたたち……」

そこに深紅のドレスに身を包んだ赤髪の女神が、眼帯に隠されていない左目に多分な呆れを含めながら声をかける。

「あつ、ヘファイストス!!」

「久しぶりだな、ヘファイストス」

「ええ、久しぶり。久しぶりに見たあなたたちの姿がコレじゃなければ素直に喜べただけだね。今の都市の状況が分かっているのかしら？」

「俺は分かっているからこそ……という一面もあるがな」

タケミカヅチとて本来はこのようなことをするつもりはなかった。

しかし先日イヴイルスの魔石の大量発生と潜伏していた闇派閥の一斉検挙によって明るみになった大規模テロの計画。

祭り好きな神々の前に突如として投げ出された極上の餌は、このパーティーに多大な影響をもたらしていた。

ただでさえうんざりする神同士の腹の探り合いの加速である。

「そういった騙し合いが好きなら連中は好きにすればいいが、俺の性には合わん。下手に近寄って大火傷するくらいなら初めから我関せずを示したほうがいいだろ」

ただのからかいなら流して終わりだが、この手のパワーゲームは「タケミカヅチ・ファミリア」のような弱小派閥には荷が重すぎる。

巻き込まれる前に距離を取るのも立派な処世術だろう。

「？」

「まあ。お前はそういう反応だろうな」

「……」の子もそう言ってくれたら安心できるんだけどね」

タケミカツチと違い、まるでパーティーの裏に気が付いていないヘステシアの反応にタケミカツチは肩をすくめ、ヘファイストスはため息をついた。

流石は天界でもマスコットキャラが定着していたヘステシア。

一目で裏がないことが分かる見事な顔だった。

「え？ なにか事件でもあったのかい？」

「……例の闇派閥イウイリスによる2階層の魔石大量発生は知っているわよね？」

「ナニソレシラナイ」

「あなたたちよつとは情報網を持つ努力しなさいよ。今やオラリオのトップニュースじゃない。」

ヘステシアの知らないはそういうことじゃないのだが、普段のヘステシアの世間知らずっぷりをよく知っているヘファイストスはその意味を取り違え、2階層の魔石大量発生から闇派閥イウイリスによる大規模テロの計画発覚までの流れを簡潔に教えた。

フムフムと相づちを打って聞いていたヘステシアは難しそうな顔で唸り、何事か考えた後に口を開いた。

「ボクは闇派閥イウイリスだった……？」

「今の話のどこからその結論に至ったのよ。」

ヘステシアの奇行になれているヘファイストスとタケミカツチは幼女の戯言をス



(それ闇派閥イツイルスじゃないよ！ウチだよ！ベル君だよ!!)

先日ベルが起こしていた珍事件。

当初は頭を抱えさせたそれも、いつか時間が経てば「あの時あんなハマしたね」と笑い話にできると思っていた。

そしたらなぜか闇派閥イツイルスと絡められて笑い事では済まない事態になっている。

(だからこんなに神がいたのか……!!)

正直さつきまでヘスティアは「流石大派閥の主催するパーティー。やる事が派手だなー、スゲー」としか思ってた。

だってガネーシヤはいつも通り意味不明なポーズジグしながら「俺がガネーシヤだ！」を連呼しているだけだし、そんな大ごとになっているなんて思わないじゃん。

こうなると周りの神々がいつもの1, 2割増しで胡散臭く見える。

……割合少ないんじゃないかって？神はいつもスゲー胡散臭いぞ。

自分たちをみて「ロリ巨乳きてんじやーん」「相変わらず貧乏くせーな」「どこかで見たしけた顔だと思つたらタケミカツチ君じゃないか……フヒヒ」と好き勝手言っているあいつらも何を考えているかわかつたもんじやない。

(不味い、不味いぞ……)

この状況で「あの事件の犯人ボクたちです」なんて言ってしまうはこの異様な熱に

侵された神どもが何をするかわかったものではない。

十中八九碌なことにならないだろうが。

(あわわわわわわわ)

キヨロキヨロとあたりを見渡す。

成金趣味全開の格好で高笑いするディアアンケヒト。

なにやら給仕に怪しい視線を送る変態<sup>アホロ</sup>。

いつも通りになっているように見えて、よく見るとあの二人ですら時折探るような言動を見せていると気が付いた。

もつともその視線がこちらに来ることはない。

もし、ヘスティアに疑惑の視線が向けられていけばヘスティアもすぐにパーティーの裏で進められている探り合いに気が付いただろう。

しかしヘスティアを知るものは一様に「こいつが闇派閥<sup>イヴイルス</sup>とかナイナイ」と初めから容疑者として見ていかなかったのだ。

出来ればそのまま気づきたくなかったが。

(うわ……あのデメテルの貼り付けたような笑顔、あれ真剣<sup>マジ</sup>になってる時のだ)

豊穡の女神の恐ろしさを知っているヘスティアはその表情を向けられている神にご愁傷さまと声をかけたくなる。

今のデメテルの相手をさせられている可哀そうな神に目を向けると……

(ん？デイオニユソス？)

金髪の貴公子然とした青年の姿をした神が目にも留まる。

ヘファイストスやデメテルと同じ同郷の神。

かつて十二神の座を譲ったその相手が浮かべる笑みをヘステイアは目の当たりにする。

(……………わい)

他の神のように何を考えているかわからない笑み。

しかし、ヘステイアは昔からデイオニユソスに対してその笑みの裏に潜む何かがあるのではないかという疑惑があった。

バイト中に聞く「デイオニユソス・ファミリア」の評判はとてもよく、下界に降りて『病気』も治ったのかと安心していたのだが……

(あの笑みは不味い。そんな気がする。)

ヘステイアの神の勘が最大限警戒を鳴らす。

それが何を意味しているのかは分からない。

考えをまとめる暇もなくフラフラとデイオニユソスに近づこうとするヘステイア。

ヘステイアの口から何か言葉が出てこようとした時。

「相変わらず仲がいいわね」

そこに一柱の女神が現れた。

容姿の優れた傾向にある神たちの中でも群を抜いた美の持ち主。

黄金律に整えられたプロポーションは、同性のヘステイアやヘファイストスですら魅了されかねない。

美すら魅了する神、フレイヤは長い銀髪を揺らしてヘファイストスとタケミカツチの会話に入ってきた。

「あ、ああ、フレイヤ。久しぶりだね。」

「ええ、久しぶりねヘステイア。……あら？どうかしたのかしら？」

「なんで君がここに……」

「さつきヘファイストスと会ってね、一緒に回ることにしたの」

フレイヤもヘファイストスも大派閥の主神だし、最近下界に降りたばかりのヘステイアにはわからない付き合いもあるのだろうか。

二柱ふたりの立場を考えると面子とかいろいろありそうだが、唯我独尊なフレイヤはもちろ  
ん、ヘファイストスもこういう面では軽いところがある。

「お邪魔だったかしら。」

「そんなことはないけど……ボク、君のこと苦手なんだ」



「あらあら。貴女のそういうところ、私は好きよ?」

清純な処女神であるヘステイアは美の女神であるフレイヤとは相性が良くない。

嫌いではないのだが、やたらと周りに色気を振りまくのとちよつと腹黒いところが受け付けられないのだ。

「まあ、もつと嫌いな奴がいるんだけどね!」

「おーい! ファイたん、フレイヤー、タケミカツチー、ドチビイーラー!!」

大きく手を振つて新たに現れた朱色の髪 of 女神。

狐のような細目が非常に胡散臭い。

「なんだロキじゃない」

「何しに来たんだよ」

「かーっ、理由がなきゃ来ちゃあかんのか? まじKYやん、このドチビ」

「あ、?」

「おいおい落ち着けヘステイア。ロキも来て早々煽るなよ……」

出身は離れているヘステイアとロキだが、その仲の悪さは神々の間でも有名だった。

二人の一触即発な空気を察した神たちは、野次馬根性丸出しでトトカルチョを始めるくらいには名物なのだ。

原因は一目瞭然。ロリ巨乳とロキ無乳である。

傍から見ている分には面白いのかもしれないが巻き込まれるのは迷惑だ。

タケミカツチは双方を宥め、ヘファイストスが話題を変えるためにロキに話しかけた。

「ドレスなんて珍しいわねロキ。いつもは男物の服なのに」

「フヒヒ、それはなファイたん。どつかの貧乏神がドレスも着れないのに大慌てでパーティーお準備してるって小耳にはさんでな……思いつきり笑ってやろうと思つたんやあ、なあ？ドチビィ？」

（うわ、ウツザ!!）

腹立たしいニヤニヤ笑いに女神がしちやいけな表情になるヘスティア。

いまにも「そもそもダンジョンに潜るのは間違ひ……」とか言いそうな顔になる神友しんゆうをみて、話題選ぴを間違えたと悟つたヘファイストスはこのげんかが長くなると確信した。

「そのためにわざわざ笑いものになるとは滑稽だ。なんだい？その見ていて悲しくなる

絶壁は!!」

「グフツ!!!!」

「おまけに登場の仕方もフレイヤの二番煎じだったじゃないか？」

「ゲハアツ!!!!」

「ひよつとしてパーティーを盛り上げに来たお笑い芸人さんなのかい？ならチツプは期待するといいさ!!君の存在自体がギャグだからね!いるだけでネタを振りまいているんだから!」

「うがあああああ!!!!」

半泣きになりながらヘスティアの頬を掴み、引つ張るロキ。

あちこちに伸ばして蹂躪する。

「ふんみゆううううう!!!!」

抵抗するヘスティアだが、残念ながら一部を除いて幼児体型の体では手も足も出ずに抵抗は空を切った。

ロキの手が縦横無尽に動き、ヘスティアも手足をバタバタと暴れさせる。

その衝撃で幼児じゃない一部が揺さぶられる。

揺れて、揺れて、揺れた。

「コヒュツ!……ヒュ、ヒュ、き、今日はこの辺にしてやるわ……」

(めつちやダメージ食らつてるな)

(ヘスティアの抵抗全く届いてないのにな……)

(ふふ、可愛い喧嘩ね)

持つ者と持たざる者の格差をまざまざと見せつけられたロキは既に瀕死だ。

ワナワナと体を震わせてその場を離れる敗北者の姿は、とてもオラリオ有数のファミリアの主神とは思えない。

「今度会うときはその貧相なものを視界に入れるんじゃないぞ！」

「うっさいわボケエ……」

覚えておけよー！、と小物臭全開で退散するロキに追い打ちをかけるヘステイア。

ついに会場から飛び出したロキの目元にはとめどない涙があった。

「丸くなつたわね、ロキ……」

「あれは丸いって言っていていいのか？」

「ただのやられ役にしか見えないんだけど……」

フレイヤの眩ぎに突っ込むタケミカヅチとヘファイストス。

フレイヤはその反応をくすりと笑った。

「天界では神々に殺し合い仕掛けていたくらい凶暴だったのよ？危なっかしくなくなつたわ」

（危なっかしい……か……）

ロキに気を取られていたがふとあたりを見渡すとディオニュソスはもういなかった。釈然としないが今は仕方ない。

また今度話しかけてみよう。

「ファミリア」を結成して丸くなる神は多いわよね。」

「ああ、不変の俺たちと違って眷属たちは些細なことでも成長し、その在り方を変える。そんなあいつらから学ぶことも多い。」

「ボクもわかるかもしれない。ベル君の前だどついつい背伸びしちゃうんだよね。この子に恥じない主神であろうって思ってた。」

パーティーでは何も化かし合いかしていかないわけではない。

自分たちの眷属の成長を我がことのように自慢しあうというのも、神々の宴ではありふれた光景だ。

今までのパーティーだとファミリアを作ってなかったヘステイアは肩身の狭い思いをしていたが、念願のけんぞくを手にいれた今、遠慮なく話に加われる。

「……ベル?」

すると意外なことにフレイヤがヘステイアの言葉に反応した。

「ああ、フレイヤは知らないわよね。ヘステイアもようやくファミリアを結成できたのよ。白髪で赤い目のヒューマンの男の子だったっけ?」

ヘファイストスがヘステイアの眷属であるベルについて簡単に補足した。

笑みを浮かべてそれを聞くフレイヤ。

「……おい、ヘステイア」

「ん？なんだいタケ？」

「なんかフレイヤの様子が変じゃないか……？」

その様子に違和感を感じたらしいタケミカツチがヘスティアに耳打ちする。

「そうかなあ？とヘスティアもフレイヤを観察するが、フレイヤが内心を悟らせない笑顔を張り付けているのは何時ものことなので普段との違いは分からなかった。

「……それじゃあ、私はもう行くわ。」

「え？もう帰るの？まあ！まだ来たばかりじゃない」

「ええ、今日は探し物に来たのだけど、もうそれは見つかったみたい。」

フレイヤはそういうと目を細めてヘスティアを見た。

話の流れがうまく飲み込めないヘスティアはその銀の視線にたじろいだ。

「それに……例の闇派閥イヴイルスの計画のせいで最近アレンたちがうるさいからね。早めに帰ってあげないといけないの。」

「闇派閥イヴイルスとはいえ神殺しはしないでしようけど、万が一はあるから用心に越したことはないわ。」

「魔石をバラまくななんて意味不明なことをやる連中だからな。油断は禁物だろう。」

（やべえ）

タケミカツチがまたあの事件を掘り返そうとしているのを見て慌てるヘスティア。

別にやましいことはしていないのだがどうしても過剰に反応してしまう。

ミアハと鈍感の双璧を成すタケミカツチならともかく、都市有数のファミリアの主神であるヘファイストスとフレイヤは誤魔化せる気がしない。

(一、二、三、こうなったら)

ヘファイストスの機嫌のいいタイミングで切り出すつもりだったがやむを得ない。

ちよつと強引でもヘステイアの精神衛生を守るためにここで勝負を仕掛ける。

ぶつちやけこんどこそ見放されそうなくらい凶々しい内容だがやるしかない。

過去にヘファイストスの家に居候した時、あまりにもだらけすぎて追い出された過去がよぎるが時間は巻き戻らないのだ。

「へ、ヘファイストス!!」

ちよつと声が裏返った。

覚悟をイマイチ決め切れていないからしたがうまく動いてくれなかったようだ。

3柱の『なんだコイツ』みたいな視線が刺さる。

しかしヘステイアはそれに怯まずに本題に入った。

「き、今日は君にお願いがあつて来たんだ!」

その瞬間、空気が凍つたと後にタケミカツチは語った。

そばにいたタケミカツチはもちろん、周りにいたヘステイアとロキの小競り合いを野

次馬していた神たちも、あの根っからの女王様気質のフレイヤすら無言で冷気ヘファアイスの発生源から距離を取る。

(べ、ベル君……僕に力を貸しておくれ……)

そして予想通り絶対零度の視線に一柱さらされたヘステイアは、涙目になりながら愛しい眷属のために気力を振り絞る。

一歩間違えば絶縁状が叩きつけられそうだが、やるしかないのだ。

ヘステイアは意を決してタケミカツチ直伝の土下座を繰り返すのだった。



## 彼のための武器

薄暗く、狭いダンジョンの中で響くゴブリンたちの声は小さい頃に見た臃おぼろげな悪夢のようだと、ベルは心の中で呟いた。

広々としたフロアでゴブリンと1対1で戦るベルは壁際に追い込まれないように注意して戦う。

目の前の獲物に涎よだれを垂らしながら襲い掛かるモンスターを観察しながら、ベルは振り回される腕の回避に専念していた。

(来てるな……)

チリチリと首筋に視線を感じる。

視線の出所は天井。

トカゲ型のモンスターであるダンジョン・リザードがベルを狙っているのだろう。

こんな時はダンジョン・リザードの間合いに入らないようにするのが鉄則だが、目の前のゴブリンはなかなか執念深い個体らしく、上手く距離を取れない。

そろそろ攻撃してくる。

そう判断したベルは咄嗟に空になったポーションの瓶をゴブリンの顔に投げつけた。



とはいっても、アクションゲームがあるとすぐに崩れてしまう程度の慣れだが。  
(こんな時ひみつ道具が使えたら違ったのかな。)

ふと浮かんだ考えを首を振ってかき消す。

ヘステイアがホームに戻ってこないことでステイタスの更新ができず、今使えるひみつ道具が分からないということに気が付いたのはヘステイアが出かけた後だ。

【四 次 元 衣 囊】フォース・タイムンション・ポーチの思わぬ欠点だった。

ただ、そのおかげで自分の戦い方を見直せた気がする。

ひみつ道具は物にもよるが基本的に強力だ。

そのせいで知らないうちに依存しかけていた。

さっきの思考なんて正にその証と言えるだろう。

「ダンジョン・リザードの接近も、もっと早くに気が付けたはずだった。」

前にボロボロになった7階層への突撃。

本来なら駆け出しの冒険者が生還なんてできない、あの状況を何とか出来たのはひみつ道具のおかげだった。

実際、無くなった途端にボコボコにされたわけだし。

(ひみつ道具に頼らない強さも必要だ……)

アイテム頼りの冒険者がアイズさんと対等になんて成れるはずがない。

僕が目指すべきはひみつ道具に使われる冒険者ではなく、ひみつ道具を使いこなす冒険者。

それを再確認できただけでもこの空白の期間は意味があった。

「それはそうと……一度地上に戻ったほうがいいかも。」

ダンジョンからは空が見えない。

それ故に時間の感覚が曖昧になりがちなのだ。エイナさんは言っていた。

ずつしりと重くなり始めたバックパックの感触に気が付いた僕は、自分が思っていた以上に長くダンジョン探索をしていたことに驚く。

「こんなに重いと戦う時に邪魔になるかな……」

まだ魔石を詰め込むスペースはあるけど、「まだ行ける」は「もう危険」の合図だ。神様と「無茶はしない」と約束したのだから大人しく引き返そう。

来た道に戻り、何事もなままダンジョンの入り口の大階段『始まりの道』にたどり着く。

太い円筒型にぐるりと沿うように設けられた螺旋の階段を上っていく。

僕と同じく帰路についている冒険者の数は多い。

こうやって見るとパーティーを組んでいるのは同じファミリアの仲間同士がほとんどだ。

(いいなあ……。)

団員数が1の「ハステティア・ファミリア」だと、あんな風に仲間内で冒険はできない。ああやって同じエンブレムをつけて凱旋する光景には憧れるけど、現実には厳しいものだ。

(それに、あの装備かつこいいかも。)

色んな冒険者たちが集まるこの場所だと、あちこちに目移りしてしまう。

多分、他の冒険者たちにはおのぼりさん丸出しに見えるんだろうな、今の僕。

いつか、僕も新米の冒険者からこんな風に思われる時が来るのだろうか。

「あれ?」

空高くそびえ立つ『バベル』の塔。その地下一階で奇妙なものを見た。

巨大なカーゴだ。確か大きなファミリアが遠征時に使う奴だっけ?

ふわふわした知識を頭の片隅からひつつぱりつつ見ていると、ガツとカーゴが一人で動いて仰天してしまった。

「いつ?」

その時は気が付いた。

この中身は荷物じゃない。モンスターだ。

(ひよっとして……ハシヤーナさんが言っていた怪物際?)  
モンスターファミリア

モンスターは基本的にダンジョンの外に出してはいけない。

人類の天敵。絶対悪であるモンスターは人間社会に悪影響しか与えないからだ。

そんな常識を無視して行われるお祭りとはいったいどんななのか。

『今年もやるのか?』

『パンと見世物であろう……神はくだらんことが好きらしいからな』

『【ガネーシャ】の所もそんな役割だよな……市民に媚び売りなんぞさせられて』

少なくとも、僕と同じようにカーゴを眺める冒険者たちからはあまり好意的には見られてない。

まあ、この中にはモンスターに傷つけられた人は沢山いるし、そういう感想も多いのだろうが。

【ガネーシャ・ファミリア】のハシャーナさんも、内心は納得はしてないように感じたし。

(あ……エイナさんだ)

見覚えある姿に僕の担当アドバイザーの姿を見つけた。

ギルドの職員達同士でなにやら入念な打ち合わせを行っていた。

(ギルドも関わっているんだ……いや、オラリオの経済とかにも関係しそうだし、当然かも)



な男の人には憧れてしまう。

「時にベルよ。ヘスティアへのプレゼントは上手くいったのか？」

「はい！あの時はありがとうございました！」

「構わん。我らには使い道がないものだからな。必要としている者の手にあつたほうがあれも本望だろう。」

神様への贈り物の時は本当にお世話になった。

ミアハ様は多くは性格があまりよろしくない神様の中でも珍しい。善良な神様だ。

じんかくしや  
神格者と言うのだろうか、この場合は。

裏表のない性格もあつて、「ヘスティア・ファミリア」とは親密な関係を築いている。

「しかしベルにあんな技術があつたとはな」

「はい？」

「あの大きな鈴をヘスティアの髪飾りに合わせて小さくしていただろう。ヘスティアにベルからのプレゼントだと教えられて驚いたぞ。鍛冶の心得でもあるのか？」

「……あつ、えつと……あははは……」

親密すぎてボロも出やすいが。

よく考えたらこの人たちから見れば怪しすぎる出来事だ。

譲つた鈴が次の日には明らかに小さくなつてゐるなんて気になるだろう。



……  
ミアハ様は僕に鍛冶技術があると納得してるけど、ナアーザさんは怪しんでそうだな

「あ、あの、ミアハ様。ヘスティア様の居場所を知りませんか？ご友人のパーティーに参加されてから二日ぐらい帰ってきてなくて……」

「二日……と言うとガネーシヤの宴か。すまない。私は出席していないから見当がつかん。」

なんでもその日はナアーザさんと商品調合に勤しんでいたらしい。

役に立てない代わりにその時調合したポジションをやろうと渡されてしまった。

「そ、そんな、貰えません！」

「良き隣人への胡麻すりだ。今後もわがファミリアを御贖員にな？」

片手を振ってミアハ様は雑踏に消えていく。

僕はぺこりとお礼をして、左腿のレッグホルスターにポジションをしまった。

(しかし、僕が鍛冶師か……)

すごい勘違いをされてしまった。

鎚を振るって剣を鍛える自分を想像したけど、笑えるくらいに似合っていない。

いつも商品を眺める武具屋のショーウィンドウに映る自分は中性的で細かいし、職人どころか冒険者にも見えないかもしれない。



丸一日床に額をこすりつける幼女神の姿を、ついに無視できなくなったヘファイストスはため息をついて羽ペンを置く。

「自慢じゃないけど、私の『ファミリア』の商品は最高品質なの。簡単に譲るなんて論外よ。」

ましてやオーダーメイドなどもつてのほかだ、お金をためて出直してこい、とヘファイストスは先日の宴ではつきりと突っぱねた。

しかしヘステイアは宴が終わった後も何度も頼み込んできた。

その度に追い払ってきたヘファイストスだが、流石に根を上げてしまう。

仮眠後に目覚めてもずっとこの格好だったのは、もはやホラーだ。

今まで散々頼ってきたヘステイアだが、怒られるのは怖いのか一度ヘファイストスが突っぱねれば案外素直に引き下がってきた。

だが、今回は勝手が違う。

今回はなぜかしつこいほどに頼み込んでくる。

(ベル・クラネルがそうさせるの……?)

一度、ヘステイアの紹介で会ったことがあるヒューマンの少年の顔を思い出す。ヘステイアの初めての眷属。

駆け出しながら妙なスキルを持つらしく、入団初日にホームを破壊したという。

話を聞く限り悪い子ではないのだろうが、トラブルメーカー。

それがヘファイストスの印象だった。

室内に差し込む夕日の光が2柱を照らす。

夜が近い。放っておけばヘステイアは倒れるまで動かないだろう。

このままでは埒が明かないと、ヘファイストスは姿勢を正してヘステイアに問いかけた。

「どうしてあんたがそうまでするの?」

「……あの子の力になりたいんだ!」

これが最後のチャンスだとヘステイアも感じている。

あらん限りの思いで言葉が続けた。

「高すぎる目標に怯まずに、あの子は変わろうとしている!それを手助けしてやりたいんだ!あの子の神として、ベル君の望む未来を切り開く武器が必要なんだ!」

「あんたの子どもにはスキルがある。又聞きでも強力だと分かるスキルが。それで十分なんじゃない?」

「……そうかもしれない。でも、ボクはあの子になにもできないのは嫌なんだ!」

ヘステイアが脳裏に浮かべたのはベルの血塗れになった姿。

あの時ほど無力な自分を呪ったことはなかった。

あの日、ベルに何があったのかは分からない。

分かるのは激情に駆られるほどの何かがあったということだけ。

「あの日からずっと思っている。もし、ボクがちゃんとした神様だったら、ベル君があんなに傷つくことはなかったんじゃないかって……」

神の恩恵はどの神が授けても同じだ。

眷属の素質・努力に合わせて効果を発揮する。

鍛冶の神の眷属が冒険者のスキルを発現することがあるし、葉の神の眷属が魔導のアブリティを得ることだってあるのだ。

だが、それは神の存在が全く眷属に影響を与えないわけではない。

ステイタスは眷属が何を感じ、どう学んだかで千差万別に変化する。

大きなファミリアが有望な人材を育成しやすいのは、そうした人材を作る環境・ノウハウが蓄積されているからだ。

例えばヘファイストスのファミリアが鍛冶のアブリティを発現させる眷属が多いのは、そうした教育環境が整えられている証といえる。

そう考えるならば成長に必要な素材を集める神の力量によって、眷属のステイタスの発展は左右されるといって外れではない。

「ベル君には絶対に才能がある！誰よりも速く、強く、高く飛ぶための資質があるんだ！

……でも、僕はそのために必要なものを何も集められない……」

考えたくも無い仮定だが、もしベルが「ロキ・ファミリア」にいればベルのステイタスは今よりもっと伸びていたのは間違いないだろう。

もっと上質な装備に身を包み、同じ仲間と共に深い階層へ行つて、サポートしてくれる先輩の下で良質な経験値を稼いでいた。

あんなに頑張つて夜まで勉強しているベルなら、先人たちの知恵も水を吸うスポンジのようにどんどん吸収していたはずだ。

なんなら、ひみつ道具だつて使いこなせる助言を貰えたかもしれない。だからヘステイアは感じていた。

そんな環境を用意できない自分が、ベルの成長を妨げているのではないかと。あの子の枷になるのは嫌なんだ！もう、何もできないのはいやなんだよ……」

喉を震わせながら出た、ヘステイアの本心。

ヘファイストスはこれを見無視することはできなかった。

甘やかしていると自覚しつつも、今の彼女なら手を貸したいと思つてしまっている。

「……わかつたわ。作つてあげる。」

「ヘファイストス!! ありが……とと……」

立ち上がり、お礼を言おうとしたヘステイアだったが、長時間の土下座の影響で足が

上手く動かずにフラリとよろめいてしまう。

それでも頬を染めて笑顔を見せるヘスティアにヘファイストスはくすり、と笑みを漏らした。

「ただし、ツケは払ってもらわよ。何百年かかってもね」

「う、うん……わかつてるさ！ボクのベル君への愛さえあれば借金なんていくらでも……！」

「あんたヒモに引つかかるタイプね。」

借金の多さ＝愛ではないと後で注意しておこう。

そう考えながら、ヘファイストスは壁に貼り付けられたショートハンマーを取る。

「あんたの子の武器は？」

「え……？ナ、ナイフ」

それを確認すると『ミスリル』を取り出す。

「もしかして……ヘファイストスが作ってくれるのかい!？」

「なに？文句ある？」

「あるわけないじゃないか！ヘファイストスの作る武器ならきつと最高だ！」

神の力を封じられた以上、ヘファイストスにできること等限られている。

技量はともかくそれ以外は自分の眷属にも劣るのだが、ヘスティアは無邪気に喜ん

だ。

(ことういうところがあるから縁を切れないのよね……)

悔しいが、悪い気はしない。

「あ、でもヘファイストスの作る武器とかどんな値段なんだろう……?」

「なに? やつぱりやめる?」

「い?! ばばばばバッチコイさ! ……ベル君への愛をお金に変えるひみつ道具とかないかな……」

「それやったら値段十倍だからね」

軽口をたたきながらヘファイストスはこれから作成する作品を思い描いていた。

ただ性能がいいものでは駄目だ。それではベルは成長しない。

しかし粗雑品を作るとは鍛冶師の誇りが許さない。

ヘファイストスの名を背負う以上、情けない作品を作るのは自分を慕う眷属たちへの裏切りだ。

駆け出し冒険者に作る第一級の武器。

ひみつ道具なんて規格外なアイテムを持つ少年に見劣りしない神の武器。

なにより、大切な神友しんゆうのための武器だ

与えられた難題にヘファイストスは静かに笑みを浮かべた。



# 女神のアソビ

「おーい、待つニヤ白髪！」

「え？」

モンスターファイリア

怪物 祭当日。

想像以上に人がごった返すメインストリートに面食らっていた僕は聞き覚えのある声に呼び止められた。

あれは……シルさんのお店の同僚さんだったはずだ。

キャットビープル

猫 人特有の猫のしっぽを揺らめかせて、僕を呼んでいた。

「あ、おはようございますニヤ。」

「お、おはようございます。それで、何か僕に？」

なんだろう。

今日はシルさんがいないみたいだけど。

「はい、これ」

「え？……財布？……え？」

はい、と言われてもどう反応すればいいのか。

全く話が見えないぞ。

「アーニヤ。クラネルさんが困っています。ちゃんと説明しなさい。」

「リユーはアホニヤ、仕事サボったシルが祭りにいったのに店に忘れていった財布を届けてほしい、なんて説明しなくてもわかるニヤ。」

「そういうことです。……ただ、シルはサボった訳ではなく休暇です。」

「ああ……なるほど」

「ニヤ？」

エルフの真面目そうな店員がアーニヤさんの言いたいことを代弁してくれた。

シルさんはモンスターフィリアにいったらしい。

結構荒々しい感じの祭りだと聞いていたから、シルさんが見に行くのは意外だ。

冒険者たちには評判は良くなかったからあまり行く気はなかったけど、面白いのだから。  
うか。

「僕、最近オラリオに来たばかりだから詳しくなくて……怪物祭モンスターフィリアってそんなに人気があるお祭りなんですか？」

「年に一回のつかいお祭りだからニヤ、屋台の質も数もすごいし、メインのモンスターの調教なんて一般人は早々みれニヤイし。」

「え？ちよ、調教？」

あの凶暴なモンスターを？

困惑していると、エルフの店員さんが口を挟んだ。

「ガネーシャ・ファミリア」は調教師テイマーを多く抱える派閥です。自分を格上だと認識させ、モンスターを従順にさせることに關しては彼らの右に出るものはいません。」

そうやって凄腕の冒険者がモンスターを飼育できる状態にするのを見世物モンスターフィリアにしているのが、怪物祭なんだとか。

僕はモンスターは敵だという先入観があつたから、モンスターを飼いならすすなんて考えたこともなかつた。

（そういえば、のび太君の話にそんなひみつ道具があつたな……）

確か、ももたろう印のきびだんご。

のび太君の故郷に伝わる英雄譚をもとにした道具で、鬼殺オーガスレイヤーしが道中で色々な動物たちを家臣にしていく物語だつたと思う。

あのひみつ道具なら僕でも調教テイムできるのだろうか？

（いやでもなあ……あれ、動物限定かも……試してみたいなあ……）

「クラネルさん？」

「あ、ごめんなさい。ちよつと考え事を」

思考に沈んでいるとエルフの店員さんから声をかけられた。

いけない、いけない。ひみつ道具のことはそれが出てきたときに考えよう。

「ニヤ？もしかして白髪頭はタイムが嫌いニヤ？」

「いい、いいえ。そんなことはないですけど……」

「人類モンスターの天敵を殺さずに利用するタイムマーに対して良い印象を持たない者もいます。口さがない者の中には彼らを「怪物趣味」と中傷することもある様です。」

【怪物趣味】。

多くの人間が無条件に嫌悪を感じるモンスターに欲情する異常者。

モンスターとの戦いなりわいが生業の冒険者にとつては最大級の侮蔑になる言葉だ。

（やっぱりひみつ道具を使ったタイムはやめておこう……）

確立されている技法ですらこうなのに、未知の方法でモンスターを従えたらどんな陰口叩かれるかわからない。

オラリオの憲兵として絶大な信頼を得ている「ガネーシャ・ファミリア」すらこうなら、信頼ゼロの弱小ファミリアが簡単にやっていいことじゃない。

団員不足の「ヘステシア・ファミリア」の人手を補ういい案だと思っただけ、よつばどこのことがない限りはしないほうがいいかもしれない。

「いろいろ教えてもらってありがとうございました。闘技場に向かえばいいんですよね？」



あの子はどんな反応をしてくれるのだろう。

無邪気に喜んでくれるのだろうか、それとも尊敬の目を向けてくれるのか、もし抱き着いてきてくれでもしたらもう最高だ。

「にしても今日は随分と人が多いな？……あ、怪物祭か!!」

引きこもりだったヘステシアには縁のない祭りだから忘れていた。

そういうえば、パーティーで今年の「ガネーシャ・ファミリア」の力の入れようをヘファイストスが話してた気がする。あの時はどう話を切り出すかばかり考えていたから、興味もない神々の世間話など耳を素通りしていたけど。

「オラリオに來たばかりのベル君なら絶対食いつくはず!つまり、ボクも怪物祭に行けばベル君に会えるということでは!」

大混雑している会場で、待ち合わせもしていないベルを見つけられる可能性は低いはずだが、徹夜明けのテンションに身を任せるヘステシアは頓着しない。

感動の再開を頭の中で妄想しながら、ホームから闘技場までのルートを思い出し、ベルが今いる可能性が高いと考えられる東のストリートに向かう。

「……ん？フレイヤ？」

その最中、ショートカットのために薄暗い裏道を通っていると紺色のローブで全身を隠した女神が猫<sup>キャットヒール</sup>人の青年と何やら話し込んでいた。

何やら真剣に話し込んでいるみたいだし、こちらから話しかける必要はないだろうとヘステイアは先を急いだ。

「……闇派閥はこの東のメインストリートにて活動している様子です。御身の安全のためにもこの地区から退避します。」

「駄目よアレン。我慢できないもの」

「フレイヤ様……」

「そんなに怖い顔をしてダメ。ふふつ、ちよつと遊ぶだけだから大丈夫よ。」

少し聞こえてきた会話に護衛君は苦勞しているんだろろうなくと同情する。

フレイヤの奔放ぶりは有名だ。

遠征で殺し合いになるほど仲の悪い「フレイヤ・ファミリア」の幹部たちが会議の際に全員集まるのは、フレイヤの男漁りで大惨事が予想される時だけなんだとか。

（またフレイヤの悪癖が始まったのか……）

フレイヤにとっては小競り合いなのかもしれないが、弱小所の「ヘステイア・ファミリア」にとっては巻き込まれるだけで死活問題だ。

できるだけ自分の関わらないところで穏やかに収束してほしい。

割と切実にヘステイアはそう願った。

裏道を抜け、日の光が差すメインストリートにでた彼女は、早速特徴的な白髪頭を探





なるほど、と頷いたヘステイアは早速先ほど通った裏道にベルを連れ込んだ。

ステイタスの更新時には背中を露出する必要がある。

往来でそれをやると闇派閥への警戒でピリピリしているガネーシャの皆様のお世話になることになるだろう。

だから人が少ないこの場所でステイタス更新をしたのだが……

「うわっ、上昇値トータル600オーバー……」

「神様？」

「す、数値はまた今度で……えーと、今使えるひみつ道具は〔名刀電光丸〕〔ウマタケ〕〔たずね人ステツキ〕だね。最後の〔たずね人ステツキ〕はちょうどいいんじゃないかい？」

「ありがとうございます。……？？どうかしましたか？」

「なんでもないよ」

ステイタス更新のついでにヘファイストスの武器の用意も済ませてしまう。

いざ渡したときにベルならばすぐに試したいというはずだから、早めに終わらせたほうがいいだろうとチャチャツとナイフにステイタスを同期させた。

「たずね人ステツキ」

更新が終わったところで早速ひみつ道具を構成する。

現れたのは持ち手の所が変わった装飾のあるステツキ。

人を探すための地図とかはないみたいだ。

「これ、ひよつとしてあれじゃないかい。ステッキを転ばせた先に探し人がいるついで……」

「そうなんでしょうか……?」

用途ははつきりわかっても使い方が分からないのはきつい。

とりあえずステッキを立てて転ばせる。

なんか裝飾がピコピコ光ってるけどこれでいいのだろうか？

いいということにしておこう。ダメで元々な提案だったわけだし。

「さて、終わったからデートにいこうか!」

「いや、行きませんよ! シルさんを早く見つけないと!!」

「まあまあ、ひみつ道具があれば楽勝だし、ひみつ道具を使いながら屋台を冷かそうじゃないか。」

「あ、お金は使わないんですね」

「いやー、ちよつと最近奮発しちゃったから……」

シルを探すことを放棄するわけにはいかなないので、たずね人ステッキでシルを探しつつ、面白そうな屋台を見物するということでベルは妥協し、二人は怪物祭モンスターの祭を回ることにした。

(お使いをすつぽかして神様とデート(？)なんて、なんだかな……)

簡単に流されてしまったベルは、クレープ屋を見つけて食欲の悪魔と葛藤しているへスティアをみて眉を下げてしまう。

結局、欲望に負けたへスティアが屋台でクレープを注文している間に、シルを探すために再びたずね人ステッキを倒す。

さつきとは反対方向に倒れるように力を入れて倒したけど、結果はさつきと同じ方角。

(この先にシルさんがいるかは分からないけど、ステッキが偶然向こうを向いたわけじゃないみたいだ。)

少なくともこのステッキがただのステッキというオチはないらしい。

まだ、予想が正しいかは分からないけど少しほっとしてしまふ。

「ベルくん。お待たせ！」

そんなことをしていたら、へスティアが二つクレープを持って帰ってきた。

その様子はあんまりにも可愛らしくて、やっぱり神様は美少女だと再認識する。

普段と違うへスティアは魅力的で、ふとした瞬間にドキリとさせられる。

不敬もいいところだ。相手は神様なのに。

「ベル君。ベル君。はい、あーん」

「へあっ!? 神様!？」

「へへへ……一度、やってみたかったんだ。」

カアアアアと顔が熱くなる。

お祭りで神様がすごい大胆になっている……!!

『今だ!! やれえいベル!! 据え膳食わぬは男の恥だぞ! 目指すはハーレムルートよおおお  
お!!』

どこからかお祖父ちゃんの声が聞こえてきた。

煩惱まみれのその思念を首を振って打ち消す。

「神様相手にそんな恐れ多いことはできません! 代わりに僕のを食べてください!」

「逃げたな……ま、いつか」

あーん。とヘステイアは口一杯にクレープを頬張った。

そこでベルはヘステイアの頬についたクリームに気が付いた。

拭おうと指を伸ばしたが、これはアウトなのでは? と考えてしまい、途中まで伸ばした腕を止めてしまう。

「取って……ほしいな」

「……」

頬を染めてそういつた神様の言葉に、僕の腕はノロノロと再起動を果たす。



組織の構成員を壊滅させてしまったのだ。

(駄目ね。しばらく見守るつもりだったのに。……ベルにちよつかいを出したくなってしまう。)

フレイヤは知っていた。

ベル・クラネルのことを。

ベル・クラネルが急成長……否、飛躍し続けていることを。

ベル・クラネルの魂が既に光を放っていることを。

フレイヤは知りたかった。

ベル・クラネルのことを。

ベル・クラネルが戦場でどのような顔を見せるのかを。

ベル・クラネルの透明な魂が冒険を超えてどのような変化を見せていくのかを。

(まるで子供みたい。)

気になる相手にちよつかいをかけて気を引き、その反応に一喜一憂する。

神ともあろうものが一時の感情に身をゆだねるなど失笑モノだ。

しかし、止まらない。

理性の歯止めなど、胸を焦がす情動の前には塵芥ちりあぐたに等しい。

ちよつど利用できる闇派閥おもっちゃも近くにある。我慢する必要はないだろう。

「……あなたがいいわ」

女神が手を伸ばしたのは野猿のモンスター『シルバーバック』は、その名の通り銀色の頭髪が尻尾のように伸びている。

フレイヤと同じ色の頭髪をいたわるように撫でるフレイヤはふと、ベルが悪戯の末に死ぬのではないかという考えが浮かぶ。

(まあ、どうでもいいことね)

神の前に人の生死など大した問題ではない。

ベルが冒険に敗れたとしても、フレイヤの愛が揺らぐことはない。

彼が天に召されるならばフレイヤもその後を追うだけのこと。

二度と下界には戻れないが些細な問題だ。

その瞳には慈愛と優しさが確かにあった。

一方で隠し切れない嗜虐の色もフレイヤは滲ませる。

(大丈夫、あなたが死んでもその魂を追いかけて、抱きしめてあげる。)

両手で包み込まれたシルバーバックはその体を震わせる。

凶悪なモンスターすらも、彼女の前ではその意思を保てない。

ダラン、と腕から力が抜け、女神の抱擁を甘んじて受ける。

『小さな女神<sup>わたし</sup>を追いかけて』

フレイヤはモンスターの額に唇を落とした。

全身から歓喜を噴出させるシルバーバックは大きく咆哮する。

(だから)

倒れ伏せる冒険者を無視してモンスターたちは光の下を目指す。

己の闘争本能のためではない。

母なるダンジョンの願いのためでもない。

ただ女神のアソビのための駒として、彼女の寵愛の欠片に応えるために。

——待っていてね？



## モンスターたちは止まらない

怪物モンスターフイリア祭はその成立に極めて特殊な経緯をたどったイベントである。

始まりはギルドが提出した一件の意見書。

モンスターを地上に出して見せ物にするという、地上の守護者たるギルドの存在意義を揺るがしかねないこの意見書は何故かギルド内で十分な議論を行うことなくデナトウス神会に提出された。

神々によって開催されるオラリオの最上位機関が型破りなこの案に乗らないはずがなく、怪物モンスターフイリア祭はトントン拍子にオラリオの名物行事となった。

そして例年、言い出しつべであるギルドはこのイベントの裏方として参加してきた。冒険者のサポートとは無関係なこの業務に、内心思うところがありながらも従事する職員たち。

しかし今年は今までにはない緊張感に包まれている。

「エイナ……闇派閥、来るかな……」

桃色の髪が特徴的な同僚の不安気な声。

いつもならすぐに大丈夫だよ。と言えるエイナも今回ばかりは声をつまらせてしま

う。

先日の魔石の大量発生。

そして、そこから明らかになった闇派閥の暗躍。

ギルドと「ガネーシャ・ファミリア」はこれに対し、選択を迫られた。

すなわち、怪物祭の開催か中止か。

怪物祭を標的にしているのならば中止すべきという意見もあれば、ここで闇派閥相

手に屈すると相手を勢いづかせるという意見もでた。

最終的にはご覧の通り開催されるに至ったわけだが。

エイナは神会デナトウスによる介入があつたのではないかと予想している。

あの暇神たちは厄介事が大好物だし、多分これが正解なのだろう。

「ガネーシャ・ファミリア」も例年以上の警備をしているし、色んな大ファミリアも独

自に警戒態勢を整えているから闇派閥イザイルスもきつと出てこないよ。」

心にもない考えだ。

ここは世界の中心たるオラリオだ。

エイナも同僚たちもこの街に何年も住んでいたのだから争いの臭いを嗅ぎつける嗅

覚は自然と身についてしまっていた。

その嗅覚が告げていた。今日、なにかが起きると。

（装備を身につけている冒険者も多い。みんな不穏な空気を感じているんだ……）  
ギルドに戦力はない。

様々な迷惑の入り乱れるオラリオで中立性を保つために、創設者である神ウラヌスの方針で職員には恩恵ファルトが刻まれてはいないのだ。

実際に闇派閥イヴェルスが暴れても職員の仕事は避難誘導くらいだが、危険なことには変わりない。

自然と職員たちの口数も少なくなる。

空気のひりつきを肌で感じるほどの静寂。

それを切り裂いたのは一つの知らせだった。

「モンスターが現れたぞー！」

ギルドが想定した中でも最悪の展開。

現れたモンスターは上層の対処しやすいモンスターばかりだが、それは決して朗報ではない。

何故ならそれらは「ガネーシャ・ファミリア」モンスターファイリアが怪物祭用に捕獲し、厳重な管理をされていたはずのモンスターたちなのだから。

「ガネーシャ・ファミリアが闇派閥イヴェルスにやられたのか!？」

「出てきたのがよりによってダイダロス通り……!」



我先にと走りだし、モンスターの進行方向とは逆方向に逃げ出す。

迫るシルバーバックの腕から辛うじてヘスティアを守ったベルは砕かれた道路に息をのむ。

(シルバーバックって確か……!)

9階層から出現するミノタウロスと同じ大型のモンスター。

駆け出しの冒険者が間違っても1対1を挑んではならない上層の強豪モンスター。

「それが何で神様を狙ってるんです!? 知り合いですか!？」

「そんなわけあるか! ボクだって初対面だよ!」

神様にちよつとおかしな質問をしてしまう程度にはテンパっているベルにあのミノタウロスの姿がフラッシュバックする。

(最低ランクの僕の装備じゃ戦えない! 神様をつれて逃げないとなのに……!)

きつと逃がしてくれない。

普通とは様子の違うあの狂気じみたあの眼光がヘスティアを見逃すことはないだろう。

まるで何かに取り憑かれているかのように息を荒げるシルバーバックの姿に気圧されるベルは、何とかモンスターの視界から外れようとヘスティアを連れて街を逃げ回る。

「待つんだベル君!!」

しかしオラリオに来て日が浅いベルとヘスティアに土地勘などあるはずがない。

あつという間に追い詰められて、気がつけば年期の入った建物たちが並ぶストリート、ダイダロス通りまで逃げてきてしまった。

もう一つの迷宮とも称される貧民街。

奇人ダイダロスの悪意があるとしか思えない設計により、毎年行方不明がでるこの住宅街に逃げ込むなんて自殺行為だが、もう逃げ場はない。

「っ！戦います！神様はこれを持って逃げてくださいー！」

たずね人ステッキを神様に渡し、シルバーバックに突撃する。

たずね人ステッキでミアハ様でも探せば、この街からは抜けられるはず。ならばベルのすべきことはこのモンスターの足止め。

正直すぐに逃げ出したいけど、戦うしかない。

臆病な心を奮い立たせる。

そう、ベルはただの新米冒険者ではない。

彼には規格外のスキルがある。

「名刀電光丸」

使用可能なひみつ道具のうち、たずね人ステッキは戦闘向きではない。

ウマタケはよく分からないけど、馬も竹も戦闘で大活躍はできないと思う。ならば残っているのは名刀電光丸のみ。

わざわざ名刀とついているのだし、一発逆転の性能を秘めていると信じて具現化する。

現れたのは黄色い刀身の刀。

奇抜な見た目のものが多かったひみつ道具の中では地味な部類だが、今は関係ない。持っていた短刀ではどうにもできないシルバーバックを相手に、牽制できるだけの間合いがあるこの刀は今のベルには心強かった。

(ひみつ道具があつて良かった)

もしベルにひみつ道具がなければ、ベルとヘスティアは為すすべなく倒されていただろう。

そう考えるとギャンブル性が強いが、起死回生の手段を手に行ける  
フォース・タイム・シジョン・ポータ  
【四次元衣囊】は強力すぎる能力だ。

「……いくぞっ！」

あくまでも一番は神様だ。

勝てはしなくても、負けなければ神様が逃げる時間を稼げる。

ベルは決死の覚悟で戦いに臨んだ。



「ベル君!!」

咄嗟に伸ばした手は虚しく空を切る。

レベル1とはいえベルはステイタスを刻んだ冒険者。

一般人以下に能力を制限した神に反応できない素早さでモンスターに向かっていく。

ヘステイアにはベルの気持ちは伝わっていた。

痛いほどに。

彼はヘステイアが無事に戻ることを最優先にして、自分が犠牲になる覚悟をしてしまった。

本来は誰よりも臆病なのにあんな顔をさせてしまった。

恐怖と絶望に溺れながらも、それでもヘステイアを怖がらせまいと貼り付けた、心の底から絞り出した小さな勇気を纏った顔。

そんな決意をさせてしまったことがたまたまなく悔しい。

(でもこのナイフなら……!!)

天界の神匠たるヘファイストスが鍛えたこの武器ならあのモンスターを倒せる。

そう確信するヘステイアはベルの決死行を止めようと声を張り上げようとして……

「へ？」



ありえない光景に思考を停止させてしまった。

そこにあつたのはベルとヘステイアが予想していたワンサイドゲームではない。

いや、一方的ワンサイドと言う意味では正しかった。

ただ圧倒していたのがベルであるという点が予想とは決定的に異なっていた。

「ガアアアアアアアアアア!?!」

この場で最もその事実一度肝を抜かれたのはシルバーバックだっただろう。

モンスターの殺戮生命としての本能が目の前のヒューマンを格下と判断していたのに、その判断を容易に覆す超常的剣技を披露しているのだから。

異常事態の原因である少年は目を白黒させながらも何とか刀を握る力を強めた。

「ぐっ……!!くっくっ……!!」

(ベル君が力んでいるのはモンスターを斬るためじゃない。滅茶苦茶な動きで敵を自動的に斬ろうとするあの刀に振り回されないように必死に握っているんだ!)

ヘステイアがそう理解した瞬間、ベルは腕を振り下ろそうとしたシルバーバックの懐に一直線に飛び込んだ。

その動きにモンスターは意表をつかれる。

それは決してベルの動きが急激に早くなったわけではない。

鋭くなったのだ。

今まで刀自身が勝手に動き回っていたところに、ベルの滑らかな体捌きが加わった。少し離れたところからそれを見るヘスティアはそう感じた。

その感覚は正しい。

刀に振り回されるだけだった先ほどまでと違い、ベルは名刀電光丸の動きに合わせて体を動かすことで剣を振る速度を僅かに上げていたのである。

無論、ベルはこのひみつ道具の動きに完全に適応したわけではない。

しかし、何度も剣が振られるうちにある条件を見つけ出していた。

それはカウンターである。

名刀電光丸は相手の繰り出す攻撃の威力によって返す刀の威力を決めているとベルは感じていた。

ならば、シルバーバックに大振りの一撃を振らせることでこちらも強力な斬撃を放つのではないか？そう判断したので。

大振りの一撃を誘発させるためにベルは敢えて大きな隙を晒した。

名刀電光丸が自動的に防御することが前提なほどに大きな隙は、予想外の抵抗に苛立つシルバーバックは簡単に釣られてしまう。

名刀電光丸の動きにベル自身の体も合わせる。

腕だけではなく、足、腰、手首……体全体を連動させたほんのわずかな後押し。

それは劇的なものではないがシルバーバックの予想を上回る斬撃を生み出した。  
「ガアツツ!!」

左切り上げの一撃は特性の拘束具をバターのように両断し、そのままずりりとシルバーバックの体内に侵入すると、胸元の魔石を切り裂いた。

流れるような一連の動作にシルバーバックは信じられないといった表情でベルを見る。

斬られた実感がないまま魔石を失ったシルバーバックは灰となった。

「か、勝っちゃった……」

ベルの呆然とした声が人のいなくなった住宅街によく響いたがヘステイアはそれ所ではない。

(あれ?このままでと僕の武器の存在感かすまね?)

この後でヘファイストスが作ってくれたナイフを渡すとする。

ベルはきつと喜んでくれるだろう。

しかし、内心思うのではないか。

『ぶつちやけあの刀のほうが強くない?』と。

(ひ、ひみつ道具は今日だけだし……毎日使えるこのナイフのほうがいいに決まってるし……)

だが今回の活躍は良すぎる。

なんだあの動き超カッコよかったじゃん。惚れ直しちゃったぜ！

……あの後に渡さなきゃいけないの？

例えるなら星が付いたレストランに行った後に、レシピ本片手に作った自分の手作り弁当を彼氏に渡すみたいなものだぞ。

絶対比較されるじゃん。

何かある度に『あーあの時のひみつ道具があつたらな』って僕のナイフを持ちながら思われるとか超嫌なんですけど!?

「せ、せつかく2億の借金までして……」

「? 神様、何か言いましたか?」

「な、なんでもないよっ! 借金とか言っていないから!!」

「いや、その反応は絶対不穏なことと言ってましたよね。借金……う?」

なんだか悲しくなって開こうとしていた包みを丁寧に戻していく。

このまま封印してしまいたい。

とうとういじけて地面にのの字を書き始めたヘスティアにベルが困っているのが見えた時、ヘスティアはあることに気が付いた。

(住民が出てこない……?)

ダイダロス通りの窓という窓が閉められている。

その間から僅かに覗く人影はこちらから確認できていた。

そんな彼らに見ているのに誰も助けてくれないなんて薄情だな、なんて軽口を逃げてるときに思い浮かべていたし。

彼らはモンスターから逃れるために家に隠れているという予想が正しければ、もう出てきてもよさそうだが。

(つまり、まだ終わっていないのか?)

辺りはまだ騒がしい。

さっきまで逃げるのに夢中で気にしてなかったがかなりの大騒ぎだ。

「ベル君……これが例の闇派閥イツイルスが絡む一件ならここにいるのは危険かもしれない。」

「そうですね。シルさんのことは気がかりですけど、一旦ホームに戻ったほうがいいかもしれません。」

「そもそもこの騒ぎの中で呑気に祭りに参加してる奴なんていないさ。」

財布を忘れたらしいウェイター君には申し訳ないが安全第一で撤退するべきだ。

闇派閥イツイルスなんて組織の陰謀なんて、絶対に「ヘステイア・ファミリア」の手に余る。

そう考えてホームに引き返そうとするベルとヘステイアだったが、その判断は遅かった。

「!!なんだ……あのモンスター」

人口の迷宮の奥から姿を現したのはモンスター。

しかし、シルバーバックとは違う種類のモンスターだ。

それは道に溢れる洪水のように何体・何十体も現れた。

それは芋虫の様な見た目で嫌悪感をあおる音を立てながらゆつくりと前進していた。

それは極彩色のモンスターだった。

エイナの講義の中に該当するモンスターを見つけられなかったベルは、それを新種のモンスターと判断する。

「新種があんなに……!?!」

「ま、まずいぞベル君!?!」

「逃げましょう!失礼します!」

「うわあ!」

ヘスティアを横抱きに抱えてベルは走る。

錯乱したのか「こんな状況なのにボクは心から幸せを感じてしまっている……つ」と意味不明なことを言っているヘスティアを連れ、安全な場所を求めて登った屋根から周囲を見渡すが……

「だめだ……あたり一面新種のモンスターばかり……」

ダンジョンでもないのにどうしてこんなにいるのか。

そこから中に芋虫型のモンスターがいる悪夢のような光景にめまいがする。

「これじゃどこに行けば安全なのか……あつ」  
ある。

この状況でも確実に安全な場所。

都市最高の剣技を持つあの人。

(……また情けないところを見られるなんて、死んでも嫌だけど。)

今は意地を張っていい状況じゃない。

使えるものは何でも使わなければ。

「神様、たずね人ステッキを使ってください。」

「え?」

「アイズ・ヴァレンシユタインさんを探してほしいんです。」

「!!」

ヒューマンの中では最強なのではないか、なんていわれるヴァレンシユタインさんならこの状況でもきつと楽勝のはずだ。

なら、たずね人ステッキでヴァレンシユタインさんと合流できれば神様の安全は確保できるのではないだろうか。





——金の髪の少女はモンスターとそれを操っていると思しきティマーたちに囲まれ、戦場で孤立していた

——芋虫型のモンスターと同じ極彩色の肌を持つ異形。

顔のない蛇に花卉が付いたかのような不自然なモンスターの姿。

——そして、その前で倒れ伏す腹部から大量の血を流す妖精の少女。

『前座は終わり。さあ、あなたはこうするの?』

立ち尽くすベルの耳に妖しげな女の声が聞こえた気がした。

ベルは自分たちが大きな運命の流れに巻き込まれてしまったことを本能で感じとる。場違いな修羅場に来てしまった哀れなウサギをモンスターたちは見逃さない。

あつという間に囲まれて逃げ道を見失う。

絶望的状况。

シルバーバツクを葬った時にはあんなに頼もしかった名刀電光丸も、今のベルには棒切れのように軽かった。

## 闇派閥

何から何までフレイヤの掌の上と言うわけではない。

怪物 モンスター 祭から逃がしたモンスターを誘導すること

でベルをあの手でベルをあの戦場に引き込もうとしたのは確かだったが、ベルの力はフレイヤの計算を超えており本来は為すすべなく敗れるほかなかった格上のモンスターを摩訶不思議なアイテムで完封勝利してしまった。

どこか物足りないものを感じながらも、予想以上のものを見ることができたフレイヤは今回はこの辺りで満足すべきかと納得はしていたのだ。

だから、あの見たこともないモンスターがベルたちを襲ったのは本当に驚いた。

「あの量のモンスターをギルドが見逃すなんてありえない。……もう一つ、出入口があるのね」

神々も認知しないダンジョンのもう一つの出入口。

それは闇派閥イッイッルスにとつての切り札だったはずだ。

むぎむぎ露呈するような手を使ったということは、先日のギルドによる徹底的な取り締まりは予想以上に彼らを追い詰めていたらしい。

もはや彼らに出し惜しみする余裕はないのかもしれない。

「私が何もしなくても、ベルは何かに導かれるようにあの戦場に辿り着いた。」

まさか自分と同じようにベルにちよつかいをかけている存在がいるのだろうか。

そんな疑問が湧くが神の勘は即座に否定した。

ベルの参戦は誰の意思によるものでもない。

偶然と必然によって辿り着いた彼の運命なのだ。

「ああ、本当に面白いわ」

彼の中に見える魂を初めて見た時は衝撃だった。

何せ彼の魂には色がないのだ。

あるのは無色の中から微かに漏れる暖かな光だけ。

無数の人間たちの魂を見たフレイヤですら初めて出会ったその魂に、興味を持つのは

当然の帰結だったといえる。

(あの子の魂が輝く瞬間を見る前にあの子を見つけられなかったのは残念だったけど、

あの子の魂はまだまだ発展途上。楽しみはまだまだあるわ。)

あの魂はどのように移り変わっていくのか。

久々の下界の未知にフレイヤは心躍らせる。

「前座は終わり。さあ、あなたは どうするの?」

この戦いがベルに何をもたらすのか。



腹に空いた傷からドボドボと流れる血。

体をくねらせる花のような、あるいは蛇のような極彩色のモンスター。

その近くから生えている黄緑の触手の一つが血に濡れていることから、あのモンスターにやられたのだと理解する。

彼女の下にモンスターが集まり始めている。

彼女を助けられる他の冒険者たちは、テイマーらしき集団や芋虫のようなモンスターに囲まれて分断されてしまっている。

動けるのは……

(駄目だ!!考えるな!!)

ベルが動いたところで何になる。

肉壁にもならないレベルーが出しやばる場面じゃない。

大人しく逃げて「ガネーシャ・ファミリア」にでも知らせればいい。

あの少女は間に合わないだろうが他の冒険者はそれで充分助かるはずだ。

そう頭でわかっているのに動けない。

あの少女から流れる血がベルからそんな冷徹な判断を奪う。

霞んでいる蒼眼に浮かぶ諦観がベルの胸の中をかき乱した。

(止める、危険な思考だ。)

十中八九あの戦場に飛び込んだベルは死ぬ。ヘスティアを道連れにして。

だから心を鬼にしろと、ベルは自分に言い聞かせる。

モンスターが花卉を開く。

牙の並んだ口の中に存在する魔石が妖しく光る。

何本もの触手をエルフの少女の付近につき立たせ、蛇のように体を這わせた。

——喰おうとしている。

モンスターの狙いに気づいたベルは顔を青ざめさせる。

モンスターの壁の奥からエルフの少女に必死に声呼びかけるアマゾネスたち。

アイズも止めようとティマーたちを突破しようとしているが、防御に徹した彼らを破

るには時間が足りない。

少女の未来は確定した。

これを覆せる僅かな可能性を持つのはこの場に一人。

ダメだダメだダメだダメだダメだダメだ……

「——っ!!ごめんなさい!神様ッ!」

「ああ!行くこう!」

名刀電光丸を握り飛び出すベル。

ヘスティアを左腕に抱え、巨大な花のようなモンスターに向かう。

「うわあああああッ！！！！」

悲鳴じみた声を上げながらモンスターに飛び掛かるベル。

今にも妖精<sup>エルフ</sup>を捕食せんとする極彩色の巨大花に、名刀電光丸が導く通りに腕を振るう。

ゴイイイイイン……、と鈍い音が響いてモンスターが動きを鈍らせる。

その隙を見逃さずに少女をヘスティアが掴むとベルは勢いを殺さずに近くの建物に飛ぶ。

後先考えない大ジャンプだった故に着地などまともにとれるはずもなく、ベルは盛大に屋根にぶつかった。

何とか二人を庇ったベルが衝突の痛みをこらえて立ち上がり、屋根の下をのぞくとそこには獲物を横から奪われて怒り心頭なモンスターの姿があった。

ゴクリ、と唾を飲む。

もう覚悟を決めろ。

ベル・クラネルは彼女を見捨てられない。

(だったら今更怖がるな！やってみせろ！)

震える手で刀を握り直す。

頼りはひみつ道具だけだ。







「ウマタケ」

なんか突然現れたと思ったら、エルフを掻つ攫つて奇声を上げる僕に馬鹿を見る目が殺到する。

でも構わない。

この発音はドラえもんさんと同じもの。

決して恥じるものじゃない。

……だから顔が赤くなっているのは気のせいだということにしてください。

若干現実逃避しながらも手に現れた物体を確認する。

うん、狂ってる。

まさか名前の通りに馬と竹が合体しているとは思わなかった。しかも生きてる。

これを作った人はどんな精神状態だったのか。

こんな珍妙なものを左手で握る僕を見る目がいよいよやばいが気にしないようにしよう。

「あの子は……？」と呟いているヴァレンシユティンさん以外の冒険者たちからすら不審な目で見られているのはちよつと堪えたけど。

(これ……どう使うんだろう?)

多分振り回すものじゃない気がする。

まさか乗るのだろうか。馬だし。

乗馬はお祖父ちゃんに基礎は教わったけどあまり経験はないんだけど。

「ブルルルッ……」

しかも気性が荒そうだ。

手の中で滅茶苦茶に暴れている。

これは少し癖があるひみつ道具かも。

「お願いウマタケ。僕に力を貸して。」

意思を持つひみつ道具ならしつかりとお願いしたほうがいい。

のび太君から聞きたいいくつかのひみつ道具での失敗話でそう判断した僕は、手の中で

荒ぶるウマタケに語り掛けた。

大きすぎず、小さすぎない。穏やかな声色を意識して慎重に言葉を選ぶ。

「神様とこの人を守りたいんだ。お願い。」

「……」

誠意を持つて対応したのが功を奏したのか、暴れるのをやめるウマタケ。

僕が手を離すとウマタケはピョンピョンと僕の前に来て背中を見せた。

「乗れってこと?」

「ブルル……」



あのモンスターを倒せなくても足止めできさえすればそれでいい。先ほどもまでの戦場は膠着状態だった。

だがあのモンスターを自由にしなければ「ロキ・ファミリア」と思しき冒険者たちはかなり楽になるはずだ。

攻撃を食らったら即死の威力の触手もウマタケの機動力ならヒットアンドアウェイを行える。

流れは冒険者たちに向いている。

「あのガキを止めろ！<sup>ツイオラス</sup>花の邪魔をさせるな！」

それは相手も分かっているからかこちらに矢を射かけてくる。

しかしウマタケは驚異的な大ジャンプの連続で矢の雨を躲し続けた。

(まずいつ、名刀電光丸だとカウンターであの人たちを殺しかねない……)

ベルの推測が正しいならば名刀電光丸はカウンター用のひみつ道具。

その威力は相手の攻撃威力によって変化する。

ただの喧嘩ならばたんこぶを作るだけで済むが、あの矢はどう考えても殺しに來ている。

ならば名刀電光丸の威力も相手を殺してしまうほどになるのではないか。

そう思い至ったベルは積極的に彼らと戦えない。



かつて闇派閥が恐れられたのはその力だけではない。

彼らの常人とは思考回路からして異なるとすら言われる理解不能な行動原理も原因の一つ。

絶え間なく響く爆音に飛びそうになる意識を必死に保ちながら、ベルはオラリオの昔話として語られるそれを身を持って理解させられた。

「行け!! 芋虫!!」  
ヴィルガ

更にテイマーたちは新種のモンスターをベルに囁ける。

なんとか闇派閥の自爆を回避していたベルはモンスターたちならと刀を振るった。

「っ!? 駄目!!」

だがそれは悪手だった。

アイズの警告も空しく名刀電光丸はヴィルガに叩きつけられた。

雷光を纏った一撃はモンスターにも衝撃を与え……ヴィルガは爆発した。

「な!? 刀が!？」

「そのモンスターの体液は溶解液よ!! 触れたら装備ごと溶かされるわよ!!」

グズグズに溶けた刀身。

半分ほどになってしまった刀の無残な姿に絶句する。

そして長髪のアマゾネスの言葉に耳を疑った。

(モンスターによる武器破壊!?)

頼りの切り札ひみつ道具を無効化するまさかのモンスターに動揺する。

その瞬間、ベルはこの場で最も警戒しなければならぬモンスターの存在を忘れた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」

「しまっ」

ヴィオラスの触手が急接近することに気が付いたベルは刀を構えるが遅い。

刀越しにレベルにはあまりにも理不尽な衝撃が襲い掛かり、ビキリツと不吉な音が右腕の骨から響いた音が聞こえた。

もしウマタケが攻撃を受ける瞬間に後ろに飛んで衝撃を和らげていなければ、ベルはそのままミンチになっていたただだろう。

「うっ……!!」

「オオオオオオオ!!!!」

触手は一本だけではない。

いくつもの触手がベルに叩きつけられた。

それを名刀電光丸で防いでいくが、破損しているからかそのキレは先ほどより鈍い。

なんとか名刀電光丸のオートガードで一命はとりとめているが、与えられる衝撃がベルの腕をぐちゃぐちゃに破壊していく。



限界はすぐに訪れた。

叩きつけられる触手はベルの周りのヴィルガたちにも平等に降り注いだ。

それにより起きた溶解液の破裂が名刀電光丸を握るベルの右手の甲とウマタケに僅かに付着したのである。

途端にベルたちを激痛が襲う。

「ぐうっ~~~~~!!?」

「ベル君!」

脳を揺さぶられたかのような痛みになり墜落するベル。

早く刀を握らなければと手放した名刀電光丸に手を伸ばすが、ベルの手は全く動いてくれない。

ヘスティアの悲鳴が遠くに聞こえる。

(あ—————)

ヴィオラスの触手が頭上に迫る。

終わりだ。

ベル・クラネルは無謀の代償を払うことになった。

黄緑の触手は少年の頭蓋を容易くはじけさせる。

実力通りの順当な結末。

「アルクス・レイ」!!」

そんな未来を一条の光の矢が打ち砕く。

魔法を使えないベルでも分かる莫大な魔力。

深層のモンスターすら屠るであろうその一撃はヴィオラスの触手を吹き飛ばした。

ベルは光の魔法が飛来した方向に目を向ける。

そこには先ほどベルが助けたエルフの少女が血を吐きながら手を伸ばす姿があった。

## 神の刃に誓う

レフィーヤ・ウイリデイスは〔ロキ・ファミリア〕の次期幹部候補と噂されるほど才気あふれたエルフの少女である。

オラリオ随一の魔導士であるリヴェリア・リヨス・アールヴに師事し、その後継者として最高の環境でその実力を存分に磨いてきた。

誰もがうらやむ出世街道を歩む彼女だが、自身の自己評価は低い。

それは先達が余りにも偉大過ぎるからだ。

〔ロキ・ファミリア〕の幹部たちは全て第一級冒険者。

ダンジョン攻略の最前線で戦い続ける彼らは数々の偉業をなし、既に英雄として歴史に名を残すことが確約された存在たちである。

その後釜として期待されるレフィーヤの重圧は大きい。

これまでの冒険者人生が幹部たちに守られた順調すぎる道のりだったこともあり、レフィーヤには自分の実力に対する自信が欠けていた。

いつか、あの人たちに追い付けたら。

そう自分に言い聞かせて鍛錬に励んでも彼女は悩みを吹っ切ることができなかった。

自分は強くなかない。きつといつものようにあの人たちに助けられる。

最近動きが活発になっているといふ闇派閥イヅイルスの対策のために警備として配属されたときもそんな考えが離れなかった。

アマゾネスの姉妹であるティオネとティオナが呑気モンスターフィリアに怪物祭に行けなかったことの愚痴を言っている間も、レフィーヤはいつ現れるかもわからない闇派閥イヅイルスを恐れてビクビクしていたのだ。

そして現れた蛇のような極彩色のモンスターにレフィーヤはあっけなく敗れた。

闇派閥イヅイルスの奇襲によりアイズたち分断されたレフィーヤは為すすべなく致命傷を負わされたのだ。

ああ、やっぱり自分は彼女たちに並び立てる器じゃない。

そう絶望し、近づくモンスターの顎あぎとに反抗する気力すら失った彼女の前に少年は現れた。

(何をやっているんですか……!!私……!!)

見るからに戦闘の心得のない動き。

身にまとう装備はギルドから支給されるといふ最低品質の初心者セット。

刀は比較的業物のようだがあくまでも比較的、第一級冒険者すら手を焼く極彩色のモンスターたちを相手にするには心許ない。

そんな少年が命を懸けて戦っているのに自分は何をしているのか。

無駄にレベルを3まで重ねていながら心の強さはレベル1の、それも年下の少年にすら劣っているではないか。

(力が及ばないからなんですか！そんなの何の言い訳にもなっていない！)

それは初めてレフィーヤが覚えた感情だった。

迷いも悩みも全部を薪にして燃え上がる想い。

それに呼応して熱を帯びる道化師の恩恵の疼きが彼女に立ち上がる力を与えた。

「解き放つ一条の光。」

先ほど攻撃を受けた際に杖は手放してしまっている。

だからレフィーヤは伸ばした腕に最大限の魔力を溜めた。

魔法の心得のある者ならば、深層の竜を想起するような超濃密度の魔力はウィーシェの血を引くエルフの代名詞。

「聖木の弓幹。汝、弓の名手なり。」

戦闘が始まって真っ先に詠唱を行ったレフィーヤに反応したことから、このモンスターには魔力を発する者を優先的に攻撃する習性があるとレフィーヤは予想していた。

ならば彼女が再び詠唱を始めればモンスターモンスターの敵意ヘイトは魔力を練るレフィーヤに向き、

あの少年を助けられる。

そう考えていたが少々誤算が生じた。

モンスターが反応しない。

予想が間違っていたのか、あるいは自分に纏わりつく少年への敵意ヘイトが本能を凌駕しているのか。

(なら限界まで魔力を込めて……っ!!)

「狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢!!」

当初の作戦が崩れてもレフイーヤは狼狽えない。

燃え滾る心とは裏腹にその思考は冴えていた。

己がこの場でできる最大限のことを見据え、その他の雑事を切り捨てる。

先達に囲まれて危機を乗り越えることを知らなかった少女は、救わなければならない少年を前にそれまで欠けていたもの。

師であるリヴェリアが言うところの『大木の心』を土壇場で会得したのだ。

モンスターの花弁が限界まで開き、中の醜悪な牙の群れから涎を垂らした。

体中が傷だらけで、五体満足なことが不思議なくらいな有様の少年の動きが止まる。

絶望的な戦力差を前にもはやこの状態でできることはないと悟ってしまったのか、生きる気力がその体から消えていくのが分かった。

——させません!

「アルクス・レイ」!!」

だがその不条理を少女は打ち破る。

レベル3の第二級冒険者。

壁外ならば有数の実力者に数えられるその位階は、モンスターと眷属の蟲毒であるオラリオではありふれたレベルでしかない。

そんな彼女が何故、都市に大派閥たる「ロキ・ファミリア」の次期幹部と目されるのか。それはこのバカげた魔力の量である。

【妖精<sup>ス</sup>追奏<sup>キル</sup>】の存在も相まって、破壊力だけならば現段階でレフィーヤは第一級に届く。

打ち出されるのは光りの矢。

追尾属性があるだけのシンプルな魔法だが、レフィーヤが使えば城壁すら崩す一撃となる。

「アアアアアアアアアッ!?!」

絶叫を上げて吹き飛ばされる極彩色のモンスターを確認したレフィーヤは、自らの成果に喜ぶ時間すら惜しんで新たな詠唱を唱え始める。

「ウィーシエの名のもとに願う——」

「ナイス!!レフィーヤ!!」

「私たちも続くわよー！」

「……っ！」

後輩の奮闘に呼応するようにアイズたちもダンジョンで培った実力を存分に発揮する。

テイオナは武骨な大剣を振るう。修理に出している両双刃ウツルガとは勝手が違うのか、時折首をかしげているがそれでも一振りするごとに芋虫が何体も吹き飛ばされている。

テイオネは投げナイフを使って闇派閥イヴェルズたちを牽制しつつ、モンスターを殴り飛ばして連鎖的に破裂を引き起こした。

アイズは戦姫と恐れられた絶対的な剣技で戦場を華麗に舞い、モンスターの屍の山を築き上げて見せた。

「森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい」

徐々に巻き返し始めた少女たち。

しかし、冒険者としての勘が告げる。

まだ足りない。

現状は膠着状態がやや優勢になっただけ。

ほんの少しのほころびで簡単に勢いは止まるだろう。





に握れば、釘を刺されたかのような痛みを感じた。

(ちくしょう……)

守ろうとした女の子に守られて、自分は何をやっているんだと腹が煮えたぎっている。

一度は振り払った言葉が再び脳裏に浮かんだ。

——雑魚じゃアイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ

唇をあらん限りに噛む。

強くなるって誓ったはずだ。

あの人に並び立てる立派な冒険者になるって、そう言ったはずだ。

「こんな、体たらくで……!!」

余りに呑気な言葉で自分に自分で腹が立つ。

このままじゃダメだ。やれるかどうかなんて関係ない。

ベルが激情のまま戦場に再び飛び込もうとした時。

「ベル君」

「……神様？」

いつの間にか隣に来ていたヘステイアがポン、と肩をたたいた。

血の臭いが漂うここには余りにも不似合いな気安さ。

ホームに戻ってきてしまったのかと思うくらいに自然なヘスティアの手は、ベルの暴走していた思考を簡単に落ち着かせた。

「凄すぎるね。君が目標にしているヴァレン何某なんて相手が可哀そうになるくらいに圧倒的だ。ボクたちは飛んでくる破片だけで命取りなのにさ。」

ヘスティアがアイズたちを呆れた顔で見る。

<sup>フルナ</sup>恩恵の昇華には試練が必要だ。ましてや第一級冒険者に至るためにはどれ程の苦労が必要か。

怠け者のヘスティアはその過酷すぎる人生にウンザリしながら言葉を続けた。

「ベル君。君には才能がある。でも、それはまだ開花してないんだ。今の君はレベル1でまだ何もできない初心者だ<sup>ニュービ</sup>ってことは受け入れよう。」

ヘスティアの言葉に俯くベル。  
分かつている。

あの人たちだつて初めからあんな強かったわけではない。

それぞれ相応の冒険をしてあの器を手に入れたのだ。

それでも、うらやむ心は否定できない。

空回る想いが身を焦がすのだ。

「その気持ちは尊重しよう。……でも、約束してくれただろう？ボクを一人にしないっ

て。」

「……………」

その言葉に目を見開く。

忘れてはならない約束だった。

「神様……………僕、は……………」

「ああ、参ったな。そんな顔をしないでくれよ。ボクが言いたいのには文句じゃないんだ。」

ヘステイアはそういうと背負っていた包みを解いた。

その中に入っていたのはナイフ。

黒塗りで上質な素材を使ったのだと一目で分かる武器。

そこで僕は、鞘に刻まれたサインに絶句する。

「これ、ヘファイストスの……………」

「ああ、そうだ。天界の巨匠ヘファイストスが生み出した。オーダーメイド。ボクの血を与えた、ベル君のための、ベル君だけの武器だ。」

ホントはもっとロマンのある渡し方を考えていたんだぜ？とヘステイアは満面の笑みで言う。

ベルはヘステイアが柄でもないパーティーに参加し、ホームに何日もヘステイアが

帰ってこなかった意味を理解した。

「この武器ならあのモンスターを倒せる!……つて展開なら格好良かったんだけど、流石に今はまだ無理だ。」

「今は……?」

どこか含みのある言い方にベルは引っかけかりを覚え、聴き返す。すると、ヘステイアはベルの前でナイフを抜いて見せた。

(あれ……?)

そこにあつたのは刀身が死んだナイフ。

ヘファイストスの銘を刻んでいるとは思えないほど粗末なそれが、先ほどベルを惹きつけた武器と同じなのか確認しようとヘステイアの手から受け取り注意深く観察しようとする。

「!?!」

ナイフが息を吹き返した。

ベルがその手に握った瞬間、棒状のガラクタが業物に変化する。

美しい紫紺色光を発するその刀身には、びつしりと【ヒエログリフ神聖文字】が彫り込まれていた。

「このナイフの銘は『ヘステイア・ナイフ』。君のステイタスと連動して位階が変動する

……簡単に言えば、君と共に成長する武器だ。」

「僕と成長……でもっ」

「ああ、今のナイフの力は君のステイタスに釣り合った程度しかない。このナイフを手に入れたところで君はまだあの戦場には不相応だ。」

けど、とヘステイアは言葉を続ける。

「それでいいんだ。突然得たチート能力で無双するのも悪くないけど、ボク達には似合っていないだろう？泥だらけになりながらコツコツ積み重ねるのがボクらのやり方だ。」

ヘステイアの両手がベルの左手を包み込み、神の刃を握らせた。

その時、感じた衝撃を忘れることはないだろう。

今のナイフ以上の性能を誇る武器などこのオラリオには掃いて捨てるほどあるに違いない。

だが、直感したのだ。

このナイフは生涯にわたってベルを支えてくれるパートナーになるだろうと。

「どんなに現実に打ちのめされても自暴自棄にならなくていい。辛いことがあっても、君は一人じゃないってことをこのナイフを握って思い返してほしいな。」

「っ……っ!!」

ヘステイア・ナイフを握り締める。

なんて馬鹿なんだ僕は。

たった一人で絶望して、終わるところだった。

思い出せ。自分が何で戦えるのか。

それはこの女神ひとのおかげだ。ヘステイア様の血が今日までのベル・クラネルを支えてきていた。

今まで散々支えられてきて、女神ヘステイア・ナイフの分身まで授けられて。

まだここで腐っている気なのか。

「くっ……!!ぐ……」

ヘステイア・ナイフを握り締めた手に力を込めて、上体を起こす。

よく磨かれた漆黒の刀身に反射したベルの目には、諦念を超えた溢れんばかりの激情が燃え盛っていた。

「すいません。神様、敵わないって分かってます。でも、行かせてください……」

「きつと何もできない。今度は死ぬかもしれないよ?」

「それでも、戦いたいです!」

勝算なんて投げ捨てた子供の戯言。

きつと多くの人がそんな彼を見たら身の程知らずを笑うか、眉を顰ひそめるかのどちらかだろう。

だがヘステイアは神だった。

ベルに無茶をしてほしくはないという思いは確かにある。しかし同時にそんな戯言の先にあるベルが見せるであろう新しい可能性の光に惹かれる気持ちもまた真実だ。

「……ホントは怪我してほしくないんだぜ？」

「……ごめんなさい」

「でも止まらないんだろう？」

「はい。」

ハア、とため息をついてヘステイアは胸元の青い紐を外す。

そしてその紐でベルの力が入らなくなった右手に名刀電光丸を括りつけて固定した。

「さつきドロドロになっても動いていたし、この刀はまだ必要だ」

「……ありがとうございます！」

「あくあ。本当に惚れた弱みっていうのは厄介だ。」

ベルはアイズに惚れてこんな無茶をして、ヘステイアはベルに惚れてそんな彼を見守る。

どっちも面白くないことばかりなのに、恋と言うのはつくづく合理的ではない。

ベルは目の前に広がる戦場を視界に入れた。

そこには華奢な少女たちが繰り出す攻撃で、モンスターが吹っ飛ぶという現実離れし



た光景が広がっている。

その空気に飲まれないように目を鋭くしていると、ヘステイアの手が背中に触れた。

「大丈夫だ。ベル君。」

「……はい。」

「どんな道でも君と一緒にボクが……ヘス<sup>ボ</sup>テイア<sup>ク</sup>・ナイフ<sup>分</sup>が歩いていく。」

信じてくれるね？

きつとそう続くのであろう言葉にベルは無言の笑みを浮かべる。

目指すはあの花のような極彩色のモンスター。

他は眼中に入れるな。

名刀電光丸を左肩に当てた奇妙な姿勢になりながら、ベルは呼吸を整える。

「つ行きますー！」

「ああ、行つておいで。」

ヘステイアに力強く押し出され、ベルは一本の矢となつて怪物に向かい疾走する。

敵も味方もベルの無謀としか言いようのない突撃に気づき、驚愕した。

しかしベルの目には巨大なモンスターの姿しか入つてはいない。

その手に握られたヘステイア・ナイフは、主の決意に応えるように紫紺の光を放つ。

『その身を形作るのは、真実の銀、ミスリルの輝き。真の光は、他の誰もが手にしたとこ

ろで、その輝きを曇らせる。心せよ、刃を抜くことが出来るのは、汝が認め、汝と血を分けた使い手ただ一人。』

タイミング的には完べきな奇襲。

だが遅い。

この戦場において少年は、滑稽なほどに遅かった。

触手がベルの四肢を引き裂かんと振り下ろされる。

溶解した刀身と小ぶりなナイフで受け流すことすら出来ない。

ヴィオラスは次の瞬間に少年から飛び散る脳みその感触を思い浮かべた。

だがそれをベルは急加速で回避する。

「!?速い!温存していたの!?!」

「違う、あの刀の発する雷で無理矢理身体能力を引き上げている……」

テイオネの疑問をアイズが否定する。

原理は付加魔法エンチャントと同じ。

しかし、体に電気を流すという行為は本来は自殺物の無茶。

紛いなりにもエンチャントの体を成しているのは、この状態が奇跡的なバランスで成り立っているからだ。

「あんな滅茶苦茶な方法で体を強化するなんて……一体どれだけ練習したら」

まるで魂が分かつていたように行つた愚行に魔導士であるレフィーヤは対抗心を刺激されて魔法に込める魔力をさらに投入する。

「あの雷……アルゴノウトの雷霆らいていの剣みたい……」

そしてティオナは少年のもたらす光景に在りし日の宝物英雄譚を思い出した。

『鍛冶の主へファイストスがオリンポスの盟友へステイアの武器を鍛える。ファルナが刻まれし汝もまた我らが愛する神の眷属、神の刃。女神へステイアの名のもとに命ずる。同じ血を分けた眷属に力を貸し与え、栄光を献げよ。汝の主の名、それはベル・クラネル。主の半身となり共に笑い、共に怒り、共に泣き、共に傷つき、共に走り、共に苦難を乗り越え、共に育て。経験を糧とし、刃を研ぎ澄ませ。主と共に至高を目指せ。』  
上級冒険者たちに匹敵する身体能力というレベル1としては破格の強化。

だがこの強化は諸刃の刃。

絶対に長続きすることはない。

モンスターでは埒が明かないと闇派閥イグイルスたちが群がるが、ベルのひみつ道具は名刀電光丸だけではない。

「お願い!!ウマタケ!!」

「ヒヒーン!」

「うわっ」

「なんだ?! コイツ?!」

ベルの呼ぶ声に呼応して異形の馬は闇派閥イヴァイルスに襲い掛かる。

今度は自爆戦術に掛からないように、存分に立体跳躍を駆使して闇派閥イヴァイルスを薙ぎ払った。

そして背中 of 突起部分にベルが足をかけると、ウマタケは投石機のように勢いよくベルをヴィオラスに投げ飛ばした。

『汝は女神ヘスティアの分身なり。闇を切り裂く焔の炎を宿し、主人の路を切り拓け。永遠の伴侶となつて、主人を守れ。』

「あああああああああああああああああああッ!!」

突撃槍となつてヴィオラスの開かれた口にナイフを伸ばす。

凄まじい剣幕で飛び掛かる兎の姿に、巨大な食人花は僅かにたじろいでしまう。

ヘスティア・ナイフの切っ先はモンスターに叩きつけんばかりの勢いで突っ込み、ヴィオラスの魔石に衝突し――

ガキーン……

あつけなく弾かれた。

どれだけ反則を重ねようとベルにこの戦場は早すぎる。

レベル1の力で闇派閥イヴァイルスの怪物兵器は崩れない。

至極当然なこの結末に闇派閥イヴァイルスは安堵のような呆れたようなため息をつき、ヴィオラスは自分を一瞬でも恐れさせた子兔に怒り心頭で捕食しようとするが。

【目覚めよ】  
テンベスト

モンスターも闇派閥も少年に意識を引かれた僅かな時間。

それこそ少女たちが欲していたものだった。

息をつく間もないほど連続で襲い掛かってきていた攻撃の波にできた秒単位の乱れ。それを劍姫は見逃さない。

【エアリエル】

アイズの超短文詠唱。

砲撃型の魔導士たるレフィーヤの詠唱とは比べ物にならない短さで起きた奇跡は桁違いだった。

金の髪の少女の周囲に風が吹き荒れる。

風の付加魔法。  
エンチャント

その魔力を感じた瞬間。この場にいたすべての人間が戦いの終焉を理解した。

【リル・ラファール】  
!!

暴風に乗って放たれる神速の一撃。

先ほどのベルとは比べ物にならない破壊力でヴィオラスの魔石を粉碎する。



ま、まずは自己紹介から……

「あ、えつと……あわわわわ」

だが、一度テンパった思考は簡単には戻らない。

口から出る言葉は意味をなさず、瞳が紐のようにぐちゃぐちゃになっていく。

やがて脳のキャパシティを超えたベルは。

「ほわああああああああ!!」

「へばにゃ!!」

「ヒヒーン!!」

ウマタケに飛び乗って逃走した。

左手にヘスティアを無意識に抱えたままオラリオのかなり高い家々を飛び去っていく。

「「ええええええええええええ!!」」

まさかの行動にレフリーヤたちは仰天し、アイズはガーン、と割とガチ目にシヨックを受ける。

慌てて追いかけるがその時にはもうベルの姿は見つからず、他のメンバーと合流するために4人はホームに帰還するのだった。

実はその途中で通りがかった行きつけの酒場の裏手口で、いきなり飛び乗ったことに

腹を立てていたウマタケにベルがヘステイアから教わった土下座で謝り倒していたのだが、アイズたちがこの日ベルを見つけることはなかった。



# 事件が終わって……

怪物モンスター祭フェスティバル開催中に起きた闇派閥イヴイルスによる大規模テロ。

闘技場で管理されていた調教用のモンスターや極彩色の新種のモンスターを利用した大胆な犯行は未だ闇派閥イヴイルスの脅威は健在であると世に知らしめた。

一方で今回のテロによる人的被害は驚くほど少ない。

ギルドや「ガネーシャ・ファミリア」の初動の早さが、市民の迅速な避難に繋がったのだと瓦版は大々的に報じ、賞賛した。

これを闇派閥イヴイルスの使ったモンスターの出所を追求されるのを嫌がったギルドによる報道操作だと批判する声もあったが、一般人には精々転んだ際のかすり傷程度の怪我しかなかったという。

唯一の重傷者は、運悪く激戦区に迷い混んでしまった白髪頭の初心者冒険者がポロポロになってひどい目にあつた位だそうだ。

死者が出なかったことは批判のしようがない快挙であつた。

「まあ、ここからやろうな。この事件は。」

人々がモンスター掃討に多大な貢献をした「ロキ・ファミリア」を称えるなか、当の

【ロキ・ファミリア】の幹部たちは気を緩めてはいない。

執務室の机に腰かけてケラケラと笑う主神の言葉に異を唱える者はいなかった。

「しかし、疾風による襲撃を受けてからさっぱり音沙汰がなくなっていた奴らが、今になつてあれほどの勢力となつて現れるとはもう。」

「闇派閥イヴイルスの傷もそれだけ癒えたということだろうが……」

ドワーフの偉丈夫であるガレスが蓄えたひげをいじりながらため息をつく。

ハイエルフのリヴェリアも主神とは違い、険しい顔だった。

ゼウス・ヘラのファミリアがこの地を去つてからタガが外れたように犯罪が横行した当時のオラリオを思い出し、歴戦の冒険者である二人は再び来るであろう休む暇もない日々を予感する。

「あれだけ大規模な作戦を指揮できる人材はそうそういないだろう。……そうするとヴァレッタが生きている可能性が高いかもしれない。」

そして【ロキ・ファミリア】団長であるフィンはかつて幾度となくぶつかり合った女の顔を思い出していた。

かつては命を失つたと思われていた凶悪な闇派閥イヴイルスの頭脳役ブレイン。

都市全体を騒がせたテロなど彼女くらいしか指揮できないだろう。

厄介な相手がこの件に関わっているのか。

非常に気になるが、フィンにはそれ以外にも引つかかる物があつた。

(あの魔石の大量発生の意図が分からない。いや、それだけじゃない。「ガネーシャ・ファミリア」からモンスターを解放したことも、謎のモンスターの大量出現も、ヴァレットが立案した作戦にしては余りにも雑過ぎる。)

一連の流れは魔石の大量発生によつて生み出された。

人々は陽動に惑わされずに闇派閥イウイリスの本命を防いだと評しているが実際は違う。

フィンたちは気が付いてなどいなかった。

魔石の大量発生が起きて、その原因究明のために調査をしていたらたまたま過去に闇派閥イウイリスとの関係が疑われたファミリアの動きに気が付いただけだ。

魔石の大量発生は陽動どころか闇派閥イウイリスの企みを日の下に晒すきっかけになっている。

闘技場のモンスター脱走騒動もそうだ。

対処しやすいモンスターから市民を守ろうと動き出したタイミングで新種のモンスターが現れて、その瞬間にすぐ動けるようになっていただけのこと。

(闇派閥イウイリスの首を絞めていたのは闇派閥自身だった。)

完全にギルドが管理するダンジョン外へのモンスターの流出をあれほど大量に行つていながら今日までそのことを隠し通せていた緻密さが見える一方で、極彩色本命のモンスターを出現させる一手前の余計な騒ぎでこちらの初動を早める迂闊さ。

本当に同一人物による作戦なのだろうか。

(作戦に一貫性がない場合に考えられるのは……頭が二つあるのか、あるいはイレギュラーの出現。今回は恐らく両方。)

仮に今回のテロの首謀者をA(ヴァレット)とする。

Aの目的は『オラリオに深刻なダメージを与えること』だとすると、切り札であるは都市の警備が手薄な状態で発動させるのが理想的なはず。

目的が市民ではなく警備に駆り出されるであろう上級冒険者と言う可能性もあるが、それにしたって冒険者が殺気立つ瞬間よりも気が緩んでいる瞬間のほうが効果的はずだ。

しかしそこに目的が違うB(仮称フレイヤ)の企みが混じる。

Aとは違い弱いモンスターを流出させたBにオラリオへの敵意はない。

さらに次々討伐されるモンスターを見ても何の動きも見せなかったことから、Bの目的は恐らくモンスターを解放した時点で終わっている。

フィンがBの目的を『愉快犯』と仮定し、Aの計画に便乗した別人だと考えた。

この作戦でフィンが感じた一貫性のなさはAとBの目的が交差したために生まれたのではないだろうか。

(……)これ以外にも、『オラリオに深刻なダメージを与えること』という目的は共通して

いるけど、的確な箇所にダメージを与えようとするヴァレッタとは違う。無差別に破壊を振りまこうという3つ目の頭があるような気もするな。）

さらに深読みしそうになる思考を一度止める。推測に推測を重ねるのは厳禁だ。

この考えは後で再度検討すればいいもの。

今考えても答えは出ないだろうと、フインはもう一つの可能性について思考を切り替えた。

AとB、2つの頭の目的では説明できないものがある。

それは魔石の大量発生である。

Aからしてみればむざむざ警備を強める愚行。

愉快犯的なBの可能性は却不是だが、事件を起こす目的が見えない。

人を害するモンスターと違い、魔石が大量発生したからなんだというのだ。

魔石の波に飲み込まれた白髪頭の初心者冒険者はいたようだが、誤差のようなものだろう。

（この魔石の大量発生については首謀者の顔が見えない……いや、いないのか？）

誰も得をしない異常事態。

当初は闇派閥の陽動だと深く考えていなかったが、今回の件で捕らえたテイマーたちはテロや極彩色のモンスターについては「神の導き」だの「腐った下界を断罪するため

の僕」だの、聞いてないことまで答えてきたが、魔石の大量発生については理解していないようだった。

これまで様々な相手と頭脳戦を繰り広げてきたフィンや、人間の嘘を見抜けるロキはその反応が嘘ではないことを見抜いている。

そうなるのであれば純然たる事故。

このイレギュラー（不特定名称ベル）はどここの陣営のコントロールも受けていない、誰から見ても想定外の存在ではないだろうか。

そう考えた時、彼の親指が小さく疼いた。

「市民の賞賛に浮かれないよう私から団員たちに釘を刺しておこう。我々は直前に至るまで閻派閥イヴァイルスの動きを察知できなかった。」

「それがいいだろう。儂は若い者を連れてモンスターが発生した地下水路を調べるとしよう。」

「……頼む、ガレス。僕は僕で今回の件を調べなおすよ。ちよつと気になることがあるんだ。」

（イレギュラーを詳しく調べる必要があるな……結果次第では閻派閥イヴァイルスに対するアドバンテージになるかもしれない。）

フィンも清廉潔白な冒険者とは程遠いが、閻派閥イヴァイルスに対する義憤を持つ程度には人の心

はある。

自分の野望……小人族バルウムの再興のための深層攻略という目的を置いてでも、この一件により今後起こるであろう惨劇を捨ておくわけにはいかない。

都市の二大派閥たる「ロキ・ファミリア」の名に懸けても閥派閥イギリスを今度こそ根絶してみせようと戦友たちと意思を確認しあつた。

「……おつし!!話し合い終わり!!ちよつとウチ用事あるから出かけて来るわ〜」

パアン!、と手をたたき机から飛び降りるロキはそのまま執務室から出ようとする。

「今の状況分かつてるかいロキ?出かけるなら護衛くらいはつけてほしいんだけど

……」

「大丈夫やて、すぐ近くのお店に行くだけや。こつからは神同士の話し合いやし、眷属ことどもは来ないほうがええで〜」

フィンの苦言を飄々ひょうひょうと躲すロキは道化師のようにフラフラと部屋を出る。

閉められた扉の向こうからは「見ておれあんの色ボケ〜クヒヒ……」と小物全開の主神の声が聞こえる。

「……駄目だなあはは。」

「ああ、察するに相手はあのフレイヤだろう。ロキが振り返りに遭う未来しか見えんわ。」





慌ててなにやら口走ろうとしているが、こうした人物の言い訳の中身のなさはよく知っているアイズは手刀で男の意識を刈る。

「ありがとう！冒険者様!!」

するとヒューマンの幼い少女はお礼を言う。

こうした状況でどう対応すればいいのか分からないアイズはとりあえず頷いておき、避難所まで連れていくことにした。

「ねえ、冒険者様ってこの間もモンスターを倒してくれた人？」

「……うん」

「もしかして【ロキ・ファミリア】なの!？」

「う、うん」

「二つ名はあるの!？」

「えっと……【劍姫】」

「すごいすごい！あのね！ここにも冒険者様が来てくれたんだよ！白い髪の兎さんみたいなヒューマンのお兄さんなの!!」

「！」

子供の溢れる活力による質問攻めに戸惑い、簡単な返事しかできていなかったアイズだったが、少女の発した言葉に目を少し開いた。

「白い髪の冒険者？」

「うん！兎みたいなお兄ちゃん、白のおっきな猿を倒しちゃった！」

（白い猿型モンスター……シルバーバック？）

あの日、涙を浮かべて闇夜の街に消えていった少年の背中を思い浮かべる。

ベートの言葉は陰湿で、厚顔こうがん甚だしいものだったが事実でもあった。

いかにも駆け出しな冒険者。いまだ本当の意味での冒険を超えていないであろう彼の適正階層は精々5階層。それが今までのアイズの認識。

（あの子がシルバーバックを？）

だからこそ少女の言葉に驚く。

アイズの知る少年ではどう足掻いても敵わないはずのモンスターを彼は倒したというのだ。

そして、アイズたちの戦場では非力ながらも戦う意思を示した。

ミノタウロスに怯えるだけだったあの時とは違い。

「それでね！黒い髪の女の子を守りながらモンスターの鎧を黄色の剣でズバーって斬っちゃったの！！すごいカッコよかったなあ〜」

「そっか……」

少年の武勇伝を興奮して手をぶんぶん振りながら話す少女に、アイズは小さく笑みを

浮かべる。

やがて、時計塔が印象的な広場に作られた避難所に到着すると、そこに設置されたテナントの一つから少女の母親らしき女性が駆けだしてきた。

涙を浮かべながら駆け寄ってくる母親の姿に、少女も緊張の糸が緩んだのかポロポロと泣きだしてしまう。

(さつきまで無理して元気に振舞っていたんだ。)

そう理解してもアイズはどうすればいいのかわからずに立ち尽くしてしまう。

最強の女性冒険者と畏怖され、できないことは何もないと一人歩きする評判に反して、今のアイズから凜然とした「剣姫」の雰囲気は失われ、オロオロと少女に出そうとした手を伸ばしては引つ込めを繰り返した。

嗚咽を繰り返す少女を母親は優しく抱きしめると少女の背中を優しく撫で始める。

それでも泣き止まない少女に母親は困ったように笑い、アイズはいよいよどうすればいいのかわからず混乱を深めてしまう。

ふと、何かを思いついた母親はそつと耳元に口を近づけた。

「兎さんみたいなお兄ちゃんに笑われちゃうよ」

すると、少女の鳴き声はピタリと止んだ。

まだまだ大粒の涙は流れているが唇をぎゅつと縛り、顔をリングゴのように真っ赤にし

ながら泣くのを我慢している。

(……)

ミノタウロスの前で泣きそうになっていたあの少年が、泣いてる少女の涙を止めた。

この幼い少女だけではない。

少年の戦いはモンスターに怯える人たちに確かに勇気を与えていたのだろう。

その場にいなかった第一級冒険者<sup>わたくしたち</sup>よりずっと。

ここにいるのに自分には何もできなかったことを、ここにいないのにやってしまった人物にアイズは不思議な感情を覚える。

心地いい。透明な感覚を。

よくやったね。と泣き止んだ少女を褒めていた母親はゆっくりとアイズのほうを向き。

「困らせてしまつてすいません。……この子を助けていただいて、ありがとうございます。……」

そうお礼を言った。

アイズは軽く会釈すると、再びパトロールに戻る。

ばいばい、と手を振る少女にアイズも小さく手を振った後、二人に背を向けた。

今日はよく晴れている。

目が覚めるような青空は、メレンの美しい海がそのまま写し出されたようだ。

「怪物め！その子を放せ！」

「グオー」

巡回のルートに戻る途中、冒険者ごっこをしている子供たちを見かける。

大人たちが微笑ましそうに見守る中、少年少女らは木の剣と風呂敷のマントを身に着けて思い思いに遊んでいるのが分かった。

きつと、彼らが思い浮かべているのはあのベルという少年なのだろうと思ったとき、アイズの胸に温かなものが広がっていく。

街角の英雄。

アイズたちに比べればはるかに劣るはずのその存在が、彼女にはとても尊いものに思えたのだ。

(…………おめでどう)

あの日、周りに馬鹿にされ、悔し涙を流していた少年がどのようにシルバーバックを倒し、闇派閥イヴェルリスに立ち向かう勇気を手に入れたのか。

興味は尽きないが、それ以上に頑張つて成長した少年を祝福してあげたかった。

(いつか…………)

あの日、たくさん傷つけてしまったことをちやんと謝れたら。  
色々なことをお話ししたい  
アイズはそんな想いを抱いた。

## 弱者の絶望

突如現れたモンスターたちにより破壊された街。

オラリオの人々は力を合わせて復興に励んでいた。

いがみ合うことも多い種族間でも今だけは協力し合う。

何時か、街が元通りになれば美談として語り継がれるであろう人々の姿。

だがそうでないものもある。

物資に困る市民の足元を見て価格を引き上げる商人。

倒壊した家から金品を盗みだす火事場泥棒。

巡視の目が十分に届かないのをいいことに弱者を虐げる者たち。

小人族バルムの少女。リリルカ・アーデもそんな卑怯者の一人であった。

モンスター襲撃の混乱の最中、下級冒険者にはふさわしくない装備に身を固めた冒険者から貴重なアイテムをかすめ取ったのだ。

元々は用心深く、金払いも良くない冒険者とのサポーター契約はリリにとってはうまいがなかったたので適当なところで切り上げる予定であったが、新種のモンスターに襲われて動揺した隙を上手くつくることができた。

(これだけの収穫なら間違ひなく目標金額に届く。そうすればリリは自由になれる。)

リリには纏まった金が必要だった。

彼女の所属する〔ソーマ・ファミリア〕の団員管理はかなり杜撰だ。

リリのような役立たずのサポーターなど、金さえ払えばすぐにも放り出すだろう。

(酒に溺れた冒険者の相手をするのはこれで終わり。やつとここからリリの人生を始められる。)

ひたすら手を汚し続けて第二の人生を得たところで何になる、一体何処の誰が罪にまみれた偽りだらけの自分の手を取ってくれるのか。

浮かぶ自嘲から目を背けながら今まで必死に金を溜めてきたのだ。

全ては背中に刻まれた忌まわしき恩恵のろいから解き放たれるためだ。

今まで奪われてきたものだ。これから奪おうとする冒険者たちから先に奪って何が悪い。

悲願が達成されようという喜びに隠れた空しさにリリは気づかないふりをし続ける。

これでいい。

後はソーマに直接掛け合つて背中中のステイタスを消し去ればおさらばだ。

あの神の眷属に対する興味のなさはよく分かっている。

必ず成功できるはずだ。



「駄目だなアーデ。団長としてお前の脱退は許可できない。」  
そのはずだった。

誰にも気づかれることなくソーマの居室に赴き、脱退の了承を得ようと試みていたりに粘着質な男の声がかけられるまでは。

【酒守】ガントルヴァ ザニス・ルストラ。

【ソーマ・ファミリア】の団長にして、このファミリアをオラリオ有数のごみの掃き溜めに変えてしまった張本人。

最も出会いたくなかった男は大げさな手ぶりで話を続ける。

「ああ、アーデ。私たちは欠け替えのない仲間じゃないか。なのにどうしてそんな悲しいことを口にするのだ。私は悲しみで今にも胸が張り裂けてしまいそうだよ。」

(……………心にもないことを！)

ニヤツキを張り付けたままザニスは薄ぺらな言葉を重ねる。

リリはそれを忌々し気に睨みつけるが、いつも貯まった金を数えるので忙しいこの男が突然リリの前に現れてこんなことを言い出したのか分からない。

「……………リリのような役立たずは必要ないでしょう。冒険者様方もいらないと常々仰っています。身の程をわきまえた職を選ぶのはあなたたちにとっても問題にはなりません。」

「そんなに自分を卑下するなアーデ。彼らの言葉は単なるスキンシップさ。真に受けることはない。」

一体なぜこうもしつこくりりを引き留めるのか。

額面通りの理由ではないだろう。

【ソーマ・ファミリア】で献納金を渡して脱退したものなどいくらでもいる。

それらはザニスが役立たずと判断した者たちばかりだ。

(つまりリリはこの男にとって利用価値があると判断されたということ。)

最悪だ。

ザニスがリリに価値を見出していればこのワンマンファミリアからの離脱は困難になる。

どれだけ大金を積もうとザニスが否と言えばファミリアの脱退などできないのだ。

こうならないためにリリはファミリアの中で何もできない無能として影に徹し続けていたのにその苦勞が全て水の泡となった。

「私はお前を評価しているのだよ。これから始める商売に是非とも協力してもらいたい。」

「……随分とリリを買ってくれますね。」

「当然だとも。お前には希少な『魔法』があるだろう?」

「!」

誰にも教えていないリリの切り札を知る彼に目を見開く。

そんな彼女にザニスは唇を吊り上げた。

「今までうまく隠していたようだったが、先の一件で思わぬ臨時収入が入ったからと隙を見せたな。」

あの日、リリが冒険者からアイテムを盗み出したときに行使した魔法をファミリアの誰かに見られていたのか。

目標金額に届き、浮かれて周囲の確認を怠った自分に齒噛みする。

「気になってソーマ様に聞いてみれば随分面白い力に目覚めているじゃないか。隠すな  
ど水臭いと思わないか?」

あの神ソーマならリリのステータスを知っている。

そして聞かれたならば簡単に話すだろう。

ファミリアに何の愛着も持たず、杜撰な管理しかしていないソーマがリリの個人情報  
など考慮してくれるはずもない。

「……確認だが、お前はモンスターに成り済ませるのか?」

「だから何ですか」

その返事にザニスは舌なめずりでもするような暗い喜びを見せた。

十中八九碌なことを考えていない目の前の男に警戒を強めるリリを見下ろし、満足そうに頷く。

「ソーマ様。リルルカ・アーデは我々の大切な仲間です。今は少々気の迷いが生じているのでしよう。脱退をする必要はないかと。」

「つーソーマ様！リリは!!」

「……うるさいぞ」

ザニスの余裕の態度を横目にはリリはなんとか了承をソーマに食い下がるが、ソーマはそれを煩わし気に撥ね退ける。

その目には何の感慨もない。

まるで路傍の石ころを見るようにリリに興味を見せず、乳鉢を取り出して酒造りを始めようとしているこの神は本当に眷属に興味がないのだと実感した。

「ソーマ様！」

「アーデ。ソーマ様はお忙しい。ここから先は私が話を聴いてやろう。」

いやらしい表情でザニスはリリの声を遮る。

不味い。

理知人を気取ったこの男の本性は「ソーマ・ファミリア」の団員ならば周知の事実。

闇派閥との関係すら噂されるザニスの下で働くとなればどのような末路を辿ること

か。

今までリリが行ってきた悪事など霞むような泥沼に引きずり込まれる。

「ザニス様！リリをファミリアから脱退させてください！お金なら十分払えます！」

「……」

頑としてザニスの誘いに乗ろうとしないリリに苛つき始めたのか男の目元がピクリと動く。

しかしリリにはここで引く猶予はない。

ここでザニスの提案を受け入れて「ソーマ・ファミリア」の暗部に深く関われば絶対に抜け出せなくなるという確信がある。

この瞬間が最後のチャンスなのだ。

「もうこのファミリアにいたくないんです！お願いします!!」

「……ハアアア」

決して引かないリリに大きくため息をつくザニス。

男は感情を留めるように目元を抑える。

しばらくしてニコリと笑みを見せた。

「そこまで言うなら仕方がない。寂しくなるが団長としてお前に無理強いはできんよ。」

そう言ってポンポンとリリの肩をたたく。

余りにもあっさりとその男が脱退を認めたことをリリが訝いぶかしんでいるとザニスは舞台役者のように大袈裟な動作で腕を広げた。

「そうだ！送別の品をお前に送ろう！あいにくうちはロキヤガネーシャのような大きなファミリアではないからささやかなものになるが、これまでファミリアに貢献してきた礼だ。」

そしてザニスは嗤った。

「最後にソーマをやろう。本来は献上品の上位者に送られるものだがこれが最後になるのだ。多少の規則破りには目を瞑っておこうじゃないか。」

その言葉に今度こそリリは絶望する。

あの日のことを忘れたことはない。忘れたくても忘れられない。

目の前の男が団長になったあの日。

派閥の発展を願うという名目でリリのような下位構成員にもソーマが配られた。

そして、その魔力に抗えなかったリリは……

「止めてください！分かりました！分かりましたから！もう脱退するなんて言いません！だから……っ！あの酒だけは……」

「おお!!考え直してもらえたか。うれしいぞ?アーデ。」



パーティーの良し悪しはサポーターの質で決まる、そんな意見もある縁の下の力持ちたちだ。

「荷物を運ぶ程度で何ちんたらしてるんだ。能無しが。」

もつとも、多くの冒険者はサポーターを見下しているが。

冒険者とは万能オールマイティの技能が求められる職業だ。

戦闘についていけずに専門職に逃げたサポーターなど嘲笑の対象でしかない。

彼らにとってサポーターは仲間ではなく荷物持ちだ。

「碌に仕事もこなせねえ足手まといにくれてやる金なんざねえぞ！」

ゴンツと頭を殴られる。

いつも通りの言動にいちいち反応するのも億劫だ。

こいつらにはもう少しボキャブラリーはないのかと内心嘲る。

「つち、モンスターに囲まれた時くらいはしっかり仕事をしろよ役立たず？」  
サポーター

堂々といざとなったらリリを囿いすると宣言するこの男は馬鹿なのだろう。

そんなことを面と向かって言ってしまうが最後、サポーターの反感を買ってあの手この手で足を引つ張られるとは思わないのか。

そんなことすら分らない冒険者たちを見下して悦に浸る。

見下している冒険者たちすらモンスターを殺せるのにそれができない自分は何なの



かという苛立ちも感じるが。

ゴブリンやコボルト程度しか倒せないリリはこの7階層のモンスターなど手も足も出ない。

非力なサポーターは戦う力を持つ冒険者様に寄生するしかないのだ。

ゲルドというこの男はこの程度の階層のモンスターに脅威を感じることはない実力の持ち主。

いつものようにすぐにこの階層を抜けてしまおうだろう。

そのはずだった。

「な、なんだこいつは!」

狼狽えるゲルドは目の前のモンスターに叫び声を上げる。

それはこの階層に相応しくないモンスターだった。

その名はゴブリン。

ダンジョン上層の雑魚モンスター代表格である緑の小鬼がこんな下層まで上がっているのは稀なことだ。異常事態イレギュラーと言ってもいい。

しかしそれだけならばゲルドはここまで動揺しなかつただろう。

所詮はリリですら殺せるモンスターだ。

しかしこのモンスターは少し、いや大分勝手が違った。

(なんなんですかあの速さは!!)

経験値が0の状態でも恩恵フェアルナを刻めば簡単に倒せるはずのゴブリン。

それが目にもとまらぬ速さベテランで熟練の冒険者を翻弄する。

「がっ、ゲハア!？」

剣を弾き飛ばされ、平手打ちでベチベチと叩かれ続けるゲルド。

これは個体差や強化種なんてものではない。

かつてリリが遠目に見た上級冒険者の戦鬪。

その時よりも速いのではないかと言う動きを見せるゴブリン。そしてそれに為すべなく圧倒される冒険者の姿に啞然とする。

「ち、畜生……っ！あいつらああああ!!」

順調に階層を下っていた時。

妙にあたりが騒がしいかと思ったら血走った目でこちらに向かつてくる冒険者の一団が現れた。

不味いと気が付いた時にはもう遅い。

冗談みたいな速さで走ってきたゴブリンを擦り付けられてしまったのだ。

ゴブリンの力は弱いままなのが幸いだっただ。

そうでなければゲルドは今頃原型もなくなっていたことだろう。

「つがあああ!!」

「!?」

追い詰められたゲルドは信じがたい行動に出る。

全力で後ろに跳ぶと立ち尽くしていたリリの胸倉をつかみ、ゴブリンに向かって思い切り投げつけたのだ。

異様な速さを持つゴブリンからすれば遅すぎる動きだが、リリの持つ大きなバツクパツクが邪魔でゲルドの姿が一瞬隠れた。……ゲルドにはそれでよかった。

「ごほっ、ごほっ…何を——」

咳込みながら振り返るとゲルドはリリとゴブリンに背を向けて走り出していた。

先ほどの宣言通り、彼は躊躇なくサポーターを使い捨てたのだ。

「……は、ははは」

地面に倒れながらリリは笑った。笑うしかなかった。

やはり冒険者は信用ならない。

「グアアア!」

ゴブリンはゲルドの狙い通り、リリに目を付けたらしい。

ゴブリン周辺の時間だけ加速しているような奇妙な動きでリリの腹をけり上げる。

ズキリ、と鈍い痛みが走る。

ひどい話だ。こんなに弱い攻撃しか繰り出せないのにリリには反応不可能な速さ。

この分では長い時間甚振り続けてようやくやくリリは衰弱死する。

殺すならば一思いに殺してほしい。

それとも騒ぎを聞きつけた別のモンスターに殺されるのだろうか。

(……もう、どうでもいいかなあ)

どうせ「ソーマ・ファミア」からは逃げられないのだ。

ならここで死んだほうがいいではないか。

一度、神様たちのもとに還れば次のリリはましになるかもしれない。

やけっぱちになって向かった先がダンジョンなのはこうなることを無意識に望んで

いたのだろうか。

「やつと……死ねる」

リセットできる。

大嫌いな自分とはお別れだ。

ある意味望み通りになったではないか。

やつと自分のはあのファミアから逃げられる。

……意識が朧げになってきた。

思考も乱れに乱れて自分が何を考えていたのかも分からなくなってくる。

視界もダンジョンの薄緑の壁がぼやけて白い光に包まれ始めた。

(……………ああ、でもリリは……………)

最期に何を思おうとしたのか。

リリには分からなかった。

思考が形になる前にゴブリンは灰になったのだから。

「……………え」

地面に倒れ伏す少女はあの理不尽なゴブリンを倒した新しい冒険者の存在に気づく。

冒険者は青い錠剤をのんだ後、満足に動かない少女に温かな液体がかかる。

それが回復薬ポーションだと気が付いたのは体中の重さが消えてからだだった。

「……………ごめんなさい！大丈夫ですか!？」

泣きそうな顔で自分に謝る少年。

心の純粹さを表すような白い髪に兎のような赤い瞳。

どこかの惨めな小人族バルツムとは全く違う。底抜けにお人好しなことが分かるヒューマン

が懸命に自分を手当てしているのを他人事のようにリリは見ていた。

これがリリルカ・アーデとベル・クラネルの出会い。

灰被りの少女の世界にちよつとだけ光が差した瞬間だった。

## サポーター契約

僕が彼女に出会ったのは先日の戦闘の怪我がようやく回復して、ナアーザさんからダンジョンに復帰する許可がようやく下りた日のことだった。

底辺の零細ファミリアとしてはお金もないし、早くダンジョンに潜りたかったのだが、結託した神様とエイナさんに猛反対にあった。

特にエイナさんの剣幕は凄かった。美人は怒らせるなどというお祖父ちゃんという言葉の意味が理解できた気がする。知り合いが死にかけていたのだし、当たり前反応ではあるんだけど。

結局、勝手にダンジョンに入ったら勉強量を3倍にすると脅されてしまったので大人しく休養を取り、回復を待った。

ナアーザさんによるお高めの治療と有給をつぎ込んだと言う神様による監視の効果は絶大で、あつという間に僕の体は元通り。

冒険者の体の強さとアピリティによって作られるアイテムの凄さがなければ一生ものだったであろう怪我は、もはやどこにも感じさせないくらいに回復している。

それまでの疲れも一緒に取れたのか体が軽い。

……ついでに財布も軽いが。

そんなわけでようやくダンジョンに潜れた僕はこれまでの分も稼ごうと気合が入っていた。

なにせ第一級冒険者の戦いを間近で見れたのだ。

学ぶことは多かつたし、僕の憧憬はさらに燃え上がっている。

(途中で逃げ出したのを思い出すとへこみそうだけど、今度会えたらちゃんとお礼を言える様にならないと。)

他派閥の僕がアイズ・ヴァレンシユタインさんと会えるとしたらダンジョンくらいだろう。

一日でも早く追いつくためにもっと頑張らないと。

意気揚々とダンジョンに赴いた僕だったが、ある失敗をしてしまう。

薬型のひみつ道具をゴブリンに試したところ、なんとゴブリンを活性化させてしまったのだ。

先に試した青い錠剤がゴブリンを鈍化させたのを見て油断していたのかもしれない。

もう一つのピンクの錠剤も能力制限効果だと思ひ込んだ僕はその対応が遅れてしまう。

そのゴブリンは突如凄まじい速さで僕のことを突き飛ばし、そのまま興奮した様子で

ダンジョンの奥に走り去ってしまったのだ。

起きた超常現象に目を白黒させながらも慌てて後を追うがあつという間に引き離される。

少しすると通路の奥から悲鳴や怒号が聞こえてきた。

異様な速さのゴブリンが暴れまわっているらしいと言う話が聞こえてきた僕は、ゴブリンを高速化させてしまったひみつ道具「クイック&スロー」を取り出す。

ピンクと蒼。二つの錠剤のうち、ピンクの錠剤を一つ含むとんでもない活力が体中に漲った。

あのゴブリンのような素早さを手に入れた僕はそのまま闇雲にダンジョンを走り回る。

……後になって冷静に考えればあの時、他の冒険者の話を聞いて回ればもっと早くゴブリンに追いつけたはずだがそんな考えは全く浮かばなかった。

早く追いつかなければという強迫じみた焦りで視野が狭くなっていたのだ。

それにしたって不自然な心理状態だったから、あれもひみつ道具の効果だったのだらうか？

「……………いた！」

ゴブリンに甚振られる大きなバッグを背負う少女を見つけると、僕は即座にナイフを



抜刀。胸の魔石に突き刺した。

モンスター<sup>の</sup>心臓部である魔石を失ったゴブリンは苦し気に呻いた後、仰向けに倒れてサラサラと灰になっていった。

「……………めんなさい！大丈夫ですか!？」

青い錠剤<sup>ス</sup>で赤い錠剤<sup>ロ</sup>の効果を打ち消し、慌てて倒れ伏した少女に駆け寄った。

僕が来るまでの間に傷だらけになった少女を急いで手当てする。

不幸中の幸いと言っていいのか、クイツクで素早さは増していても力は変わらなかつたらしい。

僕が持つ回復薬<sup>ポーション</sup>でも十分に治療できた。

栗色の髪を持つ小人族<sup>バルム</sup>の少女はチラリと僕を見ると、何か言いたげにした後にそれを飲み込んでお礼を言ってきた。

「……………ありがとうございます。」

「い、いえ！うまく言えないけど、このモンスターは僕のせいで……………すいませんでした！」

ひみつ道具のことは他言無用にするように神様に言いつけられているけど、何も言わずにマッチポンプでお礼を言われるのは違う。

そう考えた僕は彼女に謝罪した。

ぼやかした言い方で向こうからすれば訳が分からないだろうけど、しつかり謝りたいと当時の僕は思ったのだ。

「?よくわかりませんが気にしないでください……」

そう言った少女はどこか投げやりな気がした。

「あの、まだ痛みますか……?」

「いえ、もう大丈夫です。」

まだ回復しきれていなかったのかと焦ったがそう言うわけではないらしい。

じゃあ、どうしてそんなにっらそうなんだろう。

「あの、良かったら貴方のファミリアのホームまで送らせてもらえませんか?……いえ

!嫌だったらしいですよ!」

「……」

栗色の少女は何も言わない。

何かまずいことを言ったのだろうかと気まづくなり、僕も口を開きにくくなる。

嫌な静寂がダンジョンを支配した。

「……ところで、良いナイフを使っていますね。」

すると彼女は露骨に話題を切り替えた。

少し強引な気がしなくもないがこの空気が嫌だった僕はそれに飛びつく。

「はい！実はこれ神様が僕のためにご友人から譲り受けた物らしくて……僕には全然不相応なんですけど、宝物なんです。」

ヘステイア・ナイフ。

神様の名を持つこのナイフに込められた祈りを今更、再度語る必要はないだろう。

ただ、神様が僕のためにこのナイフを手に至るまでの苦労を考えると、僕ももつと成長して神様の恩に少しでも報いられるようにならなきゃと気合が入る。

「いい神様ですね」

この時の彼女はどんな顔だったのか。

その時、ナイフを見つめていた僕にはわからない。

ただ、後になって思えばこの時が彼女の気持ちに気が付く最初のチャンスだったと思う。

「はい……僕にはもつたいたくないくらいに素晴らしい神様です。」

噛み締めるように呟いた。

オラリオに来てから決して順風満帆と言うわけではないけど、神様と出会えたことは間違いなく幸運だったと思う。

「そうですか……羨ましいです。」

「え？」

「……そんな神様は滅多にいませんよ。」

少女は僕に語った。

ファミリアの主神によっては退屈のぎで眷属の人生を狂わせることもあるのだということ。

ファミリアの眷属同士でも仲間意識の欠片もなく足を引っ張り合い、時には殺し合いに発展することもよくあるのだということ。

それは少女の布石だった。

僕が彼女の望む選択をするように誘導するための技術だった。

「荷物持ちなんて神様にとっても冒険者にとっても興味のない存在です。リリはファミリアの中でいない者として扱われています。」

「な……」

「いえ、語弊がありましたね。大半にはいない者として扱われています。中にはリリのような貧乏人から雀の涙ほどのお金を巻き上げようとする方もいらっしゃいますから。」

それは僕が知る世界とは余りにもかけ離れたもの。

僕にとって「ファミリア」とは家族だ。

僕がお祖父ちゃんが亡くなった後、オラリオに來たのは夢を叶えるという目的以外に

も神様がくれる恩恵。<sup>ファルナ</sup>そこから得られる「ファミリア」という繋がりを欲してのことだった。

神の血で結ばれた神と眷属おやこの関係は、時に実の親子よりも強い絆で結ばれる。

「ヘステイア・ファミリア」にはまだ僕と神様しかいないけど、いつか新しく入ってくる団員もそんな関係になれると思っている。

そんな「ファミリア」が同じ眷属を虐げる？

僕には余りにも縁遠い出来事に頭がくらくらしめて気持ち悪い。

ヘステイア・ナイフの話からいつの間にかファミリアの話にすり変わっていることに気が付かない僕は、そのまま彼女の話に引き込まれた。

「……冒険者様。ソロで潜っているところを見るに、ひよつとして今の貴方には契約しているサポーターがいらないのではありませんか？」

「え、ええ。僕のファミリアは眷属が僕一人しかいなくて……」

それを聞いて少女はニコリ、と笑う。

……それが僕には空虚なものに見えてならなかった。

「でしたらお兄さん!!是非ともここにいるサポーターに声をかけていただけませんか？」

「え？」

突然のサポーター契約の申し出に動揺した。

確かにアドバイザーのエイナさんからサポーターの必要性は常々教わったけど、現在僕にサポーターはいない。

今の生活費を稼ぐだけでやつとの僕ではとても専属のサポーターなんて雇えるはずもなく、何とかしなきゃと思いつつも一人でダンジョンに潜る毎日だ。

「えっと、別の『ファミリア』間で繋がりを持つのつてあんまりよくないんじゃない？」

「はい。ですがリリは御覧の通り小人<sup>バルム</sup>族です。体は小さいですし、腕つぶしだつてありません。そんな役立たずには皆愛想をつかしているんで、誰もパーティーを組んではくれないんですよ。」

「……」

「流石にリリもそんな状況でホームにいるのは肩身が狭いので……今も格安の宿を回つて寝泊まりする毎日です。」

こんなことを聞かされて平静ではいられない。

間違つても同じファミリアの眷属同士でパーティーを組めなんて言えなかつた。

僕自身サポーターは欲しいと思つていたし、この提案は渡りに船だろう。

ただ、僕にはバレてはいけないスキルがある。

簡単に決めるわけにはいかず、どうしても慎重になつてしまう。

「実は先ほどもとある冒険者様のパーティーに入れていただいていたのですが、見捨てられてしまいました。ここで契約できないとリリは明日の宿泊代すら怪しく……」

「うっ……」

そう言われるとあまり考えることに時間をかけられない。

その見捨てられた原因は僕が実験したゴブリンだし、このまま無責任にサヨナラするのもおかしいというか間違っている気がする。

いやでも……、と迷いを捨てきれずにいると彼女が口を開く。

「ではこういうのはどうでしょう？しばらくお試しでリリと契約して頂いて、気に入っていただけなのならそのまま契約を継続してください。」

最初に大きなことを言っただけで相手を悩ませて、次に本命の目的を言っただけで妥協して見せることで相手の心理的なハードルを下げて目的を達成する。

そして、答えを急かして他の人と相談する時間を与えない。

よくよく考えてみれば詐欺の手口そのものだったけど、この時の僕はなんの疑問も抱かずに少女の手管にまんまと乗せられてしまった。

「じゃあ、よろしくお願いします。こういう場合って契約金とかは……」

「お試し期間ですし、ダンジョンの収入から分け前を貰えばいいですよ。3割ももらえればリリは飛び上がって喜んでしまいます。」





この世界は優しくなんてないということ。  
なら、もういいだろう。

屑は屑らしく。今日もまた仮面を被ろう。

無邪気な子供を装って、間抜けな冒険者を騙してやる。

次の獲物は決まっている。

モンスターから自分を庇うという余計なことをした、駆け出しのヒューマンだ。  
こんな小人族バルウムを庇って何を企んでいるのかと思えば何も考えていない。

(随分と恵まれた生活をしていたようで)

馬鹿馬鹿しい。

そんな間抜けは初めて見た。

このオラリオは強欲の都。受け身でいればたちまち全てを奪い取られるのに。

あんまりに馬鹿すぎて笑えない。

純朴そうな雰囲気から感じるのんびりとした田舎の空気。

都市に来たばかりであろう世間知らずからは警戒と言うものが感じられない。

碌に痛い目を見たこともないのだろう。

(なら、リリが教えてやる)

世界は優しくなんてないのだと。

弱ければこの都市の汚さに、非情さに押しつぶされていくのだ。

神に恵まれなければ一生その地獄は続く。

それを分からせてやる。

そして汚れてしまえばいい。

その無垢な心を存分に曇らせて。

自分の鏡写しのように歪めてやる。

絶望してしまえ。

裏切られて、泣き叫んで、それでもどうにもならない現実を知ってしまえ。

二度とその間抜け面を浮かべることができなくしてやる。

それがみつともない八つ当たりだと分かっている。

それでも、彼女の激情は止まらなかった。

少女の世界には光が差し始めている。

だが、泥を見続けている少女はまだ。

その微かな光に気づかない。

## アドバイザーとの相談

「ななあかあいそお〜？」

「ご、ごめんなさいっ!？」

サポーターであるリリを地上まで送り届けた後、ベルは戦利品の換金を行うためにギルド本部へ向かった。その際にアドバイザーであるエイナに顔を見せたのだが馬鹿正直に到達階層を増やしたことを報告し、鬼の形相になったエイナに相談室に叩き込まれたのである。

「ちよつと前に5階層で死にかけたことを忘れたの!?! 迂闊うかつすぎるよー！」

「ひい、……」

涙目になっているベルを見ると心が痛むが、ここでなあなあにして流してしまうとそれこそベルのためにならない。

冒険者になって半月程度の新米が5階層以上にソロで足を踏み入れるなど自殺行為だ。

5階層より先はまずモンスターの出現頻度が増す。

難易度の低い階層は退屈だろうが、まだ得物に馴染んでいないであろうベルは今も簡

単な階層でダンジョンでの動きを体にしみこませる段階なのだ。

おまけにモンスターも質も段違い。

コボルトの群れと一匹のキラーアント。どちらが恐ろしいかと問えば冒険者は誰もが鋭い牙と固い防御力を持つキラーアントを選ぶ。

(そんな所でミスをサポートしてくれる仲間もなしに探索!? 自殺願望でもあるの!?)  
冒険者は冒険してはいけない。

矛盾しているようだがこれがエイナの持論だ。

ダンジョンと言う次から次へと状況が変化する魔境で自ら危険を背負い込むようでは遅かれ早かれ自滅する。

無論、命を懸けるからこそリスクを負わなければならないこともあるだろう。

だがそれは慎重に状況を分析し、優先順位つけた上でのことだ。

今回のベルのようにその階層に関する勉強が不十分なうちに行うことではない。

「君には危機感が足りない! 今日と言う今日はその心構えを矯正して、徹底的にダンジョンの恐怖をたたき込んであげろ!!」

現在進行形でアドバイザーの恐怖をたたき込みながら分厚い本の山を取り出したエイナにベルは情けない悲鳴を上げる。

エイナの教えはベルの中で大きな武器だ。

しかしスパルタ的教育にハイヨロコンデーと快諾できるかは別。

最近は覚える量が増えてきて日をまたぐことも多いのだ。

怒り心頭の妖精の試練など絶対に耐えきれない。

慌ててベルは言い訳を始める。

「で、でもっ、僕っ、あれから結構成長して……っ、アビリテイがいくつかEに上がったんですよ!」

「アビリテイ評価E? 嘘をつくならもっとなしな……」

「ホントなんです! 最近成長期らしくて伸びがすごいんです!」

「……本当に?」

ベルは嘘が苦手なヒューマンだ。

知り合って日は浅いが、そんなエイナでも少年の嘘をついている時とそうでない時の見分けは簡単につく位には分かりやすい。

その経験則から判断するに、恐らく今の少年は嘘を言っていない。

聞き間違いだろうかと聞き返してみても結果は変わらず。エイナは混乱してしまう。

ステイタスのアビリテイ評価が上がりやすいのは最初だけ。

その後は成長するにつれ緩やかな上昇になっていく。

それがエイナの知る常識だ。

半月程度の経験ならば相当才能がなければ得意不得意関係なくHにすらいかない。

一つでもGに到達していたらもう天才だ。

Eなどそれこそありえない。

「ベル君。冒険者になる前は何をやっていたっけ？」

「は、はい？ただの農民ですけど……」

「うん。そうだったよねえ……」

これが戦闘に関する職種なら多少は説得力もあつたのだが、そうでないことはよく知っている。

これでベルが嘘を言っていないとなると考えられるのはベル自身が勘違いしているのではないか。

神ヘステイアの間違った情報を鵜呑みにしている可能性をエイナは考えた。

「ねえ、ベル君。君のステイタスを私にも見せてくれないかな。」

「えっ!？」

「あまり良くないことだけどちゃんと確かめたいの。半月程度でHやGならともかくEは間違いでしたじやすまされないから。」

エイナの言葉にベルは葛藤する。

当然の反応だ。冒険者にとってステイタスの中身は機密事項<sup>トップシークレット</sup>。

レベルならともかく細かいアビリティやスキル、魔法は彼らの生命線なのだから。

「今から見るものは誰にも話さないよ。もしベル君の『ステイタス』が明るみになったら私は相応の対価を支払うよ。……奴隷はオラリオだと認められてないけど、その時はキミに絶対服従を誓う。約束する。」

「奴……っ!?!……そ、そもそもエイナさん【神聖文字】ヒエログリフ読めるんですか?」

「うん。アビリティを読むくらいならできるよ。」

「これでもエイナは学区に通った秀才だ。」

その際に専攻が総合神学だったこともあり、下界の住民の中では珍しい神々の言葉を読み書きできる優秀な人材である。

「……分かりました。お願いします。」

「……言い出しつぺの私が言うのもなんだけど、いいの?」

「はい。元々エイナさんには僕のスキルについて相談しようと思っていましたから。」

ベルのスキルと言うとこの前にポロリと漏らしていたあれだろうか。

ヘスティアと相談した結果、スキルに関する情報が集まるギルドの職員であるエイナの意見を聞きたいとの事だった。

(ギルド側の私に伝えたらそのまま公表されてしまう可能性もあるのに……それだけ厄介なスキルってこと?)

下界の可能性であるスキルには時折持ち主のデメリットになるものもある。

ベルにもそうしたスキルが発現してしまったのだろうか。

ベルが部屋の隅で服を脱ぐ中、エイナはそう考えて身構えた。

呪いじみたスキルで破滅した人物と言うのは決して少なくない。

少年がそうならないようにしっかりと力にならなければと決意する。

すつかり元の<sup>アベリテイ評価の確認</sup>目的を忘れているエイナは服を脱ぎ終えたベルの背中を確認する。

意外と鍛えられている上半身に長耳を赤くするが、そんな羞恥心はベルのステイタス

の中身を見た途端に吹き飛んだ。

ベル・クラネル

L v . 1

力：E 4 3 8 耐久：F 3 1 6 器用：E 4 4 3 敏捷：D 5 5 7 魔力：I 0

《魔法》【一】

《スキル》【四一◇※】

・ひ：つ y 具 ○ c y ^ f 樹 g。

・使用 + p 道ウ、一 ☒ \* u。

・? # f z 内? は v b h る。

・ g \$ 使? i 能 > ; み y h c。



【%〔破壊／＼〕〔未りへ?〕☒〔#〕ツクゝス@〕  
 【撞?・途】

・早0? gる。

・: @が続? r p 効 n 〔・〕。

・懸―の) 4より#? イ上。

(信じられない……)

こうなる可能性も頭の片隅にはあったが、いざ見せつけられると呆然としてしまう。  
 魔法がないゆえに魔力が0なのは当然だ。

しかしそれ以外が高すぎる。

特にベルの戦闘方法スタイルであるヒットアンドアウェイでは中々貯まらないであろう耐久ですらF評価なのは明らかにおかしい。

先日の戦闘で死にかけたことを加味しても異常だ。

この速度で成長するならば都市の大半の冒険者は数か月でランクアップを果たせるだろう。

少年の憧れる冒険者がヒューマンと言う凡庸な種族でありながら、身の程をわきまえない速度で世界最速記録……1年でのランクアップを果たしていると言えはこの異常性が伝わるだろうか。

(……十中八九発現しているスキルが関係している。)

アビリティ評価とは違い、妙に読みづらいスキルの項目にその答えがあるとエイナは確信する。

高度な【ヒエログリフ神聖文字】の羅列はエイナでは読み解けないがそうであろうと当たりをつけた。

「……確かにこのステイタスだと7階層進出を許可しないわけにはいかないか……」

「ホントですか!?!」

エイナの言葉に勢いよく振り向いたベルだったが、すぐに自分の格好に気づき恥ずかし気に目を背けた。衝撃のあまりベルを半裸のままにしていたエイナは慌てて謝罪し、服を着させる。

いそいそと着替えだすベルにエイナは再度心の中でごめんねと呟いた。

(よく考えたらこの光景ってかなり不味いんじゃないか……)

突然担当の冒険者を密室に連れ込み服を脱がせるハーフエルフ。

一歩間違えれば事案である。

そう考えるとかなり恥ずかしくなり、ベルから目を背けてしまう。

「お、終わりました。」

「う、うん……」

お互いに頬を染めながらぎこちなく会話する。

「そ、そうだ！スキルについて相談が……」

この空気に耐えられなかったのかベルがスキルの話を切り出した。

エイナもフルフルと頭を振って切り替える。

「僕のスキル……【フォース・タイムシン・ポチ四次元衣囊】って言うんですけど結構特殊なスキルで……エイ

ナさんにアドバイスをもらえたらっ、て思いました」

「どんなスキルなの？」

「えっと、なんていえばいいのかな……ひみつ道具っていうアイテムを生み出せるんです。」

「んん？」

早速とんでもないことを言い出した。

無から物を出すスキル？

世界の色々な法則に喧嘩を売ってないだろうか。

「このスキルは絵本になっている僕たちの物語に入ってきたドラえもんさんっていう猫型ろぼつと？とのび太君っていう子に出会ったことが多分原因で」

「うんうん」

「こう、ピカーツと手が光るとドラえもんさんが22世紀から持ってきたって言うひみ

つ道具によく似たアイテムが作られて」

「うんうん」

「ひみつ道具は3つだけ使えて……毎日内容が変わるんです」

「わけがわからないよ」

頑張って最後まで聞いてみたけど情報量が多すぎる。

知らない単語だらけでついていけないのだ。

まずドラえもんさんとのび太君で誰だとか。

猫型ろぼっとなって何とか。

22世紀って何とか。

この世界って物語だったのとか。

物語にドラえもんさんやのび太君はどうやって入ってきたのとか。

突っ込みどころが多すぎる。

(そもそもなんで二人(？)に会うだけでその世界のアイテムが使えるの?)

ファルナ 恩恵はそんなお手軽なものではないはずだが。

ベルセウス 万能者に会うだけで万能者の発明品が使えるスキルが生えたと言っているようなモノ

ではないか。

ベルが余りにも説明下手過ぎるのでステイタスの説明文を教えてください。

そうすることでまだ色々疑問は残るが効果は理解できた。

しかし肝心のひみつ道具と言うものが良く分からない。

「えっと。今日のひみつ道具はこれでした。」

バッグパックから取り出したのは二種類の瓶と先端に丸いものが付いている棒だった。

「この3つがそうなの？」

「正確にはこの瓶はクイック&amp;スローっていう一つのアイテムとして項目にありました。もう一つはちょっと危なそうな爆弾だったのでその場で消しました。」

「ば、爆弾……？」

「はい……両手で抱えるほど大きくて、これは消したほうがいいなって」

ひみつ道具の中にはかなり危ないものもあるらしい。

恐る恐るエイナは棒型のアイテムを手を取った。

「これはどう使うの？」

「【もどりライト】って言うらしいです。効果は丸い部分から出る光を当てると当てたものが分解されるんです。」

「ちよ……!?!危ないよコレ!?!」

「生き物には効果ないみたいなんです。ゴブリンにも効きませんでしたし。」

(本当に名前だけだと効果が分からないなあ……)

確かにこれは大変だ。

ベルの話だと出せるひみつ道具の種類は毎日変化するのだし、いつ危険なひみつ道具が紛れ込むか分かったものではない。

「あれ？ゴブリンに効かなかったのなら何で効果が分かるの？」

「……バックパックに当たっちゃって」

「うわあ……」

皮の材料であろう牛や金具の金属が散乱して大変だったらしい。

中に入れていた魔石もばら撒かれて慌てて回収したんだとか。

「少し経ったら元のバックパックに戻ったんですけど。何だか脱力してしまっ……次  
のひみつ道具を試すときに集中が切れていたんです。それで、油断した隙にクイツクを  
飲んだゴブリンがすごい勢いで走り出して……」

「ちよつと？」

さつきまで受付を騒がせていたゴブリンの強化種騒動の元凶がここにいた。

あれのせいでエイナたちは騒ぎ立てる冒険者たちを宥めたり、調査のために有力な  
ファミリアに依頼を出したりと大変だったのだが。

「ベル君……仕方ないけどもうあんな騒ぎ起こさないでね？」

「……ええつと」

「ベ・ル・君？嫌な予感がするんだけど君、初犯だよね？」

ベルの妙な様子に突っ込むと出るわ出るわ。

巨大化したベッドによるホーム倒壊。

性格が変わって神ヘスティアをダンジョンでこき使ったり。

しまいには……

「ま、魔石の大量発生……」

オラリオを騒がせたあの事件すらこの少年の仕業だったのだ。

(じゃあ、あの事件と闇派閥イヴイルスは無関係？)

そして気が付いてしまった真実に顔を青くする。

つまりベルがあの騒動を起こさなかったら、ギルドも「ガネーシャ・ファミリア」も闇派閥イヴイルスの動きに気が付かなかったはず。

ならあのモンスターたちは碌に警戒態勢が整ってないオラリオで暴れまわっていたのだ。

(ギルドも「ガネーシャ・ファミリア」も、あのフィン・ディムナを有する「ロキ・ファミリア」すら気が付かずにあれほどの戦力を？)

そんなのまるで暗黒期の闇派閥イヴイルスではないか。

ベルがうつかり魔石を作っていないければ今頃どうなっていた？

(ああ、もう！それを今は考えている時じゃない。)

良くない考えを強引に打ち消す。

それはエイナの考えることではない。

オラリオのトップは誰もが優秀だ。

今回の勝利に浮かれて足元をすくわれることはないだろう。

そう自分に言い聞かせ、握っているひみつ道具に目を向けた。

「……えっと、これはどう使うの？」

「え？あ、はい。それはこのスイツチを……」

魔石の大量発生についてもっと追及されると思っていたベルは少し面喰ったが、自分の失敗談などあまり触れられたくないのだから幸いと説明を始める。

使い方はどうやら簡単なようだ。

試しに本に光を当ててみる。

「うわっ」

すると本がいきなり木に変化した。

幸いそこまで大きくないので個室の中でベルとエイナが生き埋めになることはなかったがかなり窮屈だ。



「ご、ごめんねベル君！」

「いい、いえ！」

ベルがアクシデントを起こしたのを注意しておいて自分もこれとは情けない。

「確かに扱いが難しいスキルだね……上手く使えば強力だろうけど……」

正直、劇的な解決策は思いつかない。

月並みな考えだが、数をこなして慣れるしかないと思う。

（データをまとめることかならず力になれるから……でも毎日ひみつ道具を聞くのはちよつと現実的じゃないし）

エイナとて一人の人間。

いつもギルドにいるわけではない。

休暇や出張などもある以上、アドバイザーとは言えスキルの状況を毎日チェックするのは大変だ。やっても不自然過ぎて注目されてしまう。

報告書を書いてもらって後でまとめて読むことも考えたが、デスクにでも置いたままにして万が一にでもこれが他者の目に留まったら不味い。

ベルの話では失敗談が多いが、どれも強力すぎる効果を持っている。

闇イカイルス派閥などに見つかればどんな使い方をされるか分かったものではない。

（できるだけ情報は口頭で……でもアドバイザーであつてもあまり頻繁に会うのは怪し

まれる。」

少し強引なやり方だが方針は決まった。

「ベル君。明日、予定空いている?」

「はい……何ですか?」

「アドバイザーはあくまでも困った時のサポートが役割だからね。毎日会ってひみつ道具を聞いていたら流石に怪しまれちゃうと思うんだ。」

「確かにそうですね。」

「だから、私とベル君が普段からちよくちよく会う関係だつてことにしちゃえば怪しまれないんじゃないかな?」

「ええ!?!」

ベルの仰天は当然の反応だろう。

冒険者とアドバイザーが私的に付き合うのはあまり良いことではない。

優等生然としたエイナからの提案にしてはかなり意外な提案だ。

「大丈夫。君がヴァレンシユタイン氏のことが好きなのはわかつているから。あくまでも友人関係だよ。キミの恋路を邪魔する気はないから。」

「フア!?!ええつと……」

「ふふつ、今更照れなくてもいいんじゃない?」

顔を真っ赤にする少年に思わず笑ってしまう。

恋人関係だとそう言った経験が皆無なベルとエイナには荷が重いが友人関係なら問題ない。

今でも気安い関係を築けているし、自然体のままその関係でいられるはずだ。

……外野に二人ほど騒ぎそうな冒険者がいる気がしなくもないがあえて無視する。

「それに7階層に進出するなら君の装備をそろそろ買い替えたほうがいいと思う。私なら色々アドバースあげられるけど、どうかな？」

「……すみません。よろしくお願ひします。」

そうと決まれば明日の予定だと打ち合わせるエイナとベル。

北側のメインストリートに面する広場の銅像前に朝十時で集合することを決めた。

「さあ、明日の予定も決まったから後は思う存分勉強」

「ヒエツ」

「……と思つたけど、さつき本を木に変えちゃつたから勉強できないし、今日は上がつてこいよ。」

「あ、ありがとうございます……」

あからさまにほっとするベル。

現在、エイナの脳内では急成長に合わせてスパルタ度が5割ほど上がったスケジュー

ルが組まれているのだが、知らないとは幸せである。

そのままベルをエントランスまで見送るとエイナは自身の作業机デスクに戻った。  
(あつひみつ道具返し忘れてた。)

普段はしないミスに思わず苦笑する。

自分で考えていた以上に動揺していたらしい。

だからあんな約束をしてしまったのだらうか。

すると妙にニヤニヤした同僚……ミイシャが休憩時間中に買って来たであろうチョコレートを持って近づいてきた。

「やるじゃんエイナ」

もぐもぐとチョコレートを頬張りながら絡みつくミイシャ。

この状態のミイシャは面倒くさい。

何でもかんでも恋愛に関連させるのだ。

「エイナの好みはああいう子なんだ。一時期はどうなるかと思っただけで5階層まで行っているらしいし、超有望なんじゃない？」

「そんなじゃないよ。ただ防具とかを初めて買うからアドバイスするだけ」

そう、本当にエイナはそんなつもりはない。

ベルとの関係は姉弟きょうだいのようなもの。

そこに恋愛感情が存在する余地はない、はずだ。

あまり考えたことはないが自分の好みは冒険者とは真逆の性質の人だろう。

世話焼きな性質だし、ぐいぐい引つ張るような精悍な人よりはちよつと頼りないくらいがいい。

困つた時はまず一人で頑張つて、でもギリギリになつても出来なくて、最後の最後にトボトボと自分の下にやってくるような、兎みたいな人物。

二人で協力し合いながら一つ一つ進んでいく関係が理想だ。

(そっだよ。あくまでも私の好みはベル君みたいなの……)

そこまで考えてエイナは顔を赤らめた。

勝手に自爆したハーフェルフの表情をミイシヤは見逃さなかつた。

「わー赤くなつた。可愛いわ」

ケラケラと笑う同僚を拗ねるように睨みつけるエイナ。

ちよつとはやり返しても許されるのではないだろうか。

(よし……ちよつと悪戯しよう)

顔の火照りをごまかすようにエイナは悪巧みし、眼鏡を光らせた。

一頻りからかつて満足したミイシヤはそのまま自分のデスクに座り、残っていた事務作業を再開しだす。持っていたチョコレートを脇に置いた瞬間、エイナは密かにもどり

ライトを照射する。

(えい)

光はチョコレートを照らし、その原材料に変換してしまう。

そして現れたカカオと砂糖がミイシャの机に盛大に散らばった。

「ええ〜!?なんでも〜!?」

「フロット!今度は何をやらかした!?!」

「わ、私じゃないですよ〜」

怪現象にちよつとした騒ぎになり、犯人探しが始まる。

一時の気の迷いで大ごとになってしまったことにエイナは少し罪悪感を覚えて自白しようとしたが、ここからさらに事態は混沌となった。

「お、おい!木の実と砂糖が合体してチョコレートになったぞ!」

いよいよ説明が付かない怪現象に阿鼻叫喚となるギルド職員たち。

タネを知っているエイナも説明するとなるとベルのスキルの情報を開示しなければならぬので沈黙するしかない。

「きつと幽霊フアントムの仕業だよ!ギルドの幽霊が私たちを呪おうとしているんだよ!」

噂好きのミイシャはギルドに長く伝わるうわさ話と関連付けてとんでもない仮説を言い出した。

いつもなら鼻で笑われる与太話も今は皆冷静さを失っているのか、「まさか……」「いや、本当に？」とぼつりぼつりと信じるものが出る始末。

集団パニックってこうやって起きるんだーと軽く現実逃避するエイナを置いて混乱は加速していった。

結局その日は皆怖がって仕事にならず、『ギルドの怪奇チョコレート』はオラリオの新たな都市伝説として市民に広まった。

そして唯一答えが分かってしまったベルの前でエイナは謝り倒したという。

## ハーフのちエルフ

次の日。

約束通り僕は広場でエイナさんを待っていた。

(こ、ここれってまるで……)

いやいや、そんなんじゃない。

あくまでもこれはエイナさんの親切によるものであつて、断じてデートではないはずだ。

ないはずなんだけど……広場にはカップルらしき男女が何組もいて、イチヤついているのを見ているとどうしても意識してしまう。

(もつといい服着たほうが良かったかな?)

お祖父ちゃんも『女子おなごと会うときは身だしなみを整えろ』つて言っていたし、デートじゃなくてももつとカツコイイ服のほうがいいのだろうか。

お金がないから無理な話だけどいついついそう思ってしまう。

「おーい、ベルくーんー」

「ー」



落ち着かず、辺りをきよきよろしていた時、心なしかいつもより少し弾んでいる気がする彼女の声が聞こえた。

小走りで近づいてきたエイナさんの服装はいつもと少し違う。

普段は眼鏡をかけてギルドの制服を通していているけど、今日は可愛らしい白いブラウスに丈の短いスカートという軽い感じの衣装だ。

いつも仕事のできる女性って感じだったから、今の可愛い雰囲気は凄く新鮮だ。

これが神様たちが良く言う『ぎゃつぷ萌え』？という奴だろうか。

「おはよう、早かったんだね？そんなに新しい防具が楽しみだった？」

「あつ、えつと……」

「まあ、私も楽しみだったんだよね。ベル君の買い物だけどちよつとワクワクしちやつてさっ」

言葉遣いも心なしかいつもより砕けているエイナさんを前に上手く言葉を返せない。

ギルド職員の中でもエイナさんは1・2を争う人気受付嬢だ。

そんな人と二人きりで買い物なんてこの後刺されるんじゃないだろうか、僕。

「……それでベル君？私の私服姿に何か言うことは無い？」

悪戯っぽい笑みを見せながら上目遣い。

子供っぽい動作を見せる彼女に顔を赤くしてしまったのはおかしいことではないだ

ろう。

「……その、すごく……いつもよりっ、若々しいです!」

「若々しいく? 私はまだ19だぞおっ!!」

「うわわわっ!?!」

エイナさんが僕の首の付け根に腕を絡ませる。

そのままガツチリ脇に抱え込まれて、む、胸が……

「ほらほら、謝れー!」

「や、やめっ!?!」

許してくださいさあああいつ!?!と僕は情けない悲鳴を上げた。

「誰かと買い物なんて久しぶりだなあ」

「そうなんですか? エイナさんなら誰も放っておかないと思いますけど……」

「ふふ、ありがとう、ベル君。でもギルドに入ってから仕事一筋だったからね」

現在、僕たちはダンジョンに向かっている。

デートに行くのに何でそんな血なまぐさい場所なんだって思うかもしれないけど、正確にはダンジョンの上にあるパベルの塔にある商業スペースが今回の目的地だ。

冒険者である僕にとってはダンジョンの蓋というイメージが強い摩天楼だけど、エイ

ナさんによるとオラリオの中でも有数の商業施設でもあるんだとか。

モンスターの蔓延るダンジョンの真上、万が一ダンジョンへの【祈祷】が途切れたら真つ先に大損害を被る場所なのに色々な施設が集まっているのは、バベルの塔がある位置が歴史上始めて神様が降臨した場所だからじゃないかとエイナさんは言っていた。

……こう言うくと神聖な場所みたいだけど、実際は必死の思いでダンジョンに蓋をして、大喜びする下界の住民の前に『暇だから来た』と突撃したただけなんだけど。

ちなみに今のバベルの塔は二代目らしい。一代目は神様たちの突撃の余波で吹っ飛んだとか。

（よく今みたいに神様と人間が共存できるようになったな……）

フェアルナ 恩恵の有用性を考えれば当然だけど、それが証明されるまでは下界の住民の目は厳しかったんじゃないかろうか。英雄たちの繋いだものを台無しにする登場だったわけだし。

神様たちは全く気にせずいつも通り好き勝手してたんだらうけど。

「因みに、あのバベルの塔を造った人はダイダロスって言うんだよ。」

「え？ それって……」

「そう、この前君が戦ったダイダロス通りを造った人だね。建築学上の偉人なの」

オラリオの象徴的建物は神様たちからも絶賛されたすごい物だ。

ステイタスを刻んだ眷属でもあつたらしく、ダイダロス通りは彼一人で造り上げたら

しい。

一体どのくらい強かったのだろうか。

「ダイダロスの凄いところはステイタスの強さだけじゃなく、『発展アビリティ』の存在もあるんじゃないかな？」

「『発展アビリティ』？」

「うん、ランクアップをすると追加されることがある特殊なアビリティ。『鍛冶』とか『神秘』みたいな作るものに特殊な効果をつけられるものから、『狩人』や『耐異常』みたいに探索の役に立つものまで色々あるんだ。」

有名な冒険者は大体この『発展アビリティ』を持っていろいろらしい。

自由を選ぶわけではなくて、発現は積み重ねた経験に左右されるらしいけど。

中には「デア・セント聖女」みたいにレベルが低くても、第一級冒険者並みにチート反則だと神様たちから称えられる人もいるんだとか。

「ベル君の特殊な「スキル」にも役立つ『発展アビリティ』もあると思うよ？」

「た、例えば？」

「『耐異常』はひみつ道具のデメリットを相殺できるかもしれないし、『神秘』のアビリティならひみつ道具の強化ができるかも……」

もちろん憶測だけど、と付け加えるエイナさんだが、それでもすごい参考になる。

これからはアビリティ取得も視野に入れて活動しようかな？

『耐異常』はパープル・モスのまき散らす毒鱗粉どくりんぷんを浴び続ける冒険者が発現しやすいんだとか。『神秘』はそれ専門の勉強が必要らしい……神様の難しい本でも貸してもらえばいいかな？

「あ、ひみつ道具と言えばベル君が契約したっていうサポーターにはひみつ道具のことは話すの？」

「はい、でもスキルのことを話すにはまだ信用しきれないと神様に言われたので、そういう道具を持っていると伝えるだけですけど……」

「うーん、ひみつ道具の存在だけでも危険かもしれないよ？」

「そうでしょうか……でもいざという時に使えないのも……」

「そうだよねえ……」

パーティーを組むことを推奨してきたエイナさんも【フォース・デイメンション・ポーチ四次元衣囊】を知るとかなり慎重になっているようだ。

「ベル君のスキルが生み出すひみつ道具は制限も多いけど、使う人次第では危険な使い方はいくらでもできると思う。それこそ、闇派閥イヴェイルスみたいな人たちに目をつけられたら何をされるか分からない。」

冒険者たちの起こす、様々な事件を見たことがあるというエイナさんの言葉は決して

無視して良いものではない。

確かに僕の起こした事故も見方を変えれば、アレを意図的に引き起こせるだけのスベックがあるということだ。

「フリーのサポーターに初めから何もかも見せるのは違うと思う。……少なくともひみつ道具発現の瞬間は絶対に見せないほうがいい。最近では泥棒を働く小人族バルウムの噂もよく聞くし。」

「え!?!」

「その小人族バルウムは男性らしいけど……複数人のグループで噂もあるから気を付けて」  
初めての仲間バルウムに少し浮かれていたけど……注意したほうがいいかも。

僕が表情を硬くしたのに気が付いたのか、エイナさんはそこで手を振りながら、気を張りすぎだよと声色を軽くした。

「でも、そんなに固くなりすぎなくてもいいよ。疑いすぎるとサポーターとの関係も悪くなるし、あくまでもフラットな態度を意識してね。」

フラットな態度と言われても……

腹の探り合いなんて得意じゃないし、結局なるようにしかならないのかな。

「ベル君。そろそろバベルにつくよ。本命の店に行く前に、まずは「ヘアリストス」の高級な方の武器屋を見てみようか。」

「いつ!？」

「大丈夫。ちゃんとベル君のお財布のことも考えてあるから。さあさあ、行くよー!」  
エイナさんは気まぐれな妖精のような笑みを浮かべて、僕の手を引く。

周りの男性の目から殺気を感じるがどうしようもない。僕はされるがままバベルの中に入る。

いくつか存在する台座。そのうちの一つに乗ると浮き上がり始めた。

どうやらこれは上の階に行く昇降設備らしい。

「!？」

「初めて乗るとそんな反応になるよね〜」

驚愕する僕をみてくすくすと笑うエイナさん。

次から次へと変わる彼女の表情はきつとギルド職員ではない、私人としての姿なのだろう。

そう考えると少し恥ずかしくなって、僕は顔を背けたのだった。

「さ、3000万ヴァリス……」

案内されたヘファイストスのお店に飾られている剣の値段に思わず眩暈めまいを感じる。

僕がよくみていたショーウィンドウの商品ですら800万だったのにいきなり桁違

いだ。

これが店の一番商品じゃ無いなんて冗談みたいだが、それ以上の値札があちこちに見えるこの現実は否定できない。

「あの、もしヘファイストスの人にオーダーメイドを頼んだらどうなりますか……?」

「ん?人にもよるけど、上級鍛冶師ハイ・スミスなら下手したら億まで届くかもね?」

エイナさんの言葉が怖い。

確か「ヘステイア・ナイフ」ってヘファイストス様直々のオーダーメイドだったはず。

一体、いくらしたんだ……?」

「いらつしやいませー……え」

「……なにやっているんです、神様」

明るく話しかけてきた店員さんのスマイルが引き攣る。

店員さん……神様は汗をダラダラ流して目を泳がせていた。

(最近忙しそうだと思っただら……ここでバイトしていたんだ……)

これあれだよ。絶対に借金だよ。

腰に護身用としてかけているナイフが急激に重くなった気がする。

「えっと、ベル君。もしかしてこの方が?」

「……はい。僕の、神様です。」



「そー言えば例のスキルの件でアドバイザー君と会うって言っていたね……なんでよりもよつてここに来るんだい……」

「クラネル氏の刺激になればと思つたのですが……申し訳ありません……」

「ええい！謝るな！余計ボクが惨めになるじゃないか！」

エイナさんと神様は初対面だけど、色々察したらしく困つたような表情を浮かべている。

「こらあ！新入り！とつとと働けえ!!」

「はいただいまー！」

「ちよ、神様?!」

ピューンと店の奥に走つていった神様はあつという間に見えなくなる。

「えーと……いい神様だね？」

「……は？」

神様のことは気になるけど今の僕は一人じゃない。

エイナさんを置いてけぼりにするわけにはいかないし、一旦神様のことは忘れよう。

帰つたらちゃんと納得のいく言い訳を答えてもらうけど。

その後、僕とエイナさんは再びあの昇降盤に乗つて、更に上の階に上つた。

そこは先ほどの階より飾り気の少ないフロアで、装備もシヨーウインドウではなく木

箱に入れられている。

言い方は悪いけど少しグレードの落ちたお店って感じた。

その分値段もリーズナブル……とは言えないものの僕の持ち合わせでも買えるくらいには安い。

それに格式高く、どこか上品な雰囲気があったあちらとは違ってここは活気にあふれている。

エイナさんによると下積みたちが自分をアピールする場だと言うから当然だが、絶対に買わせてやろうという意思をすごく感じる。

こういう空気は結構好きかも。

「ん？」

手分けして良い装備を探していると、アーマーのボックス群の中に気になるものを見つけた。

隅っこに追いやられているということは、ファミリアからの評価は高くないみたい。

命を守るためのものだし、こういう訳あり品は除外したほうが賢明なのだろう。

しかし、ある防具の塊が僕の足を止める。

純白の金属。なんの装飾もない武骨な姿。

あまり大きな装備ではない。ライトアーマーという奴だろうか。

サイズは問題なさそう。重さは木箱ごと持ちあげてもなお軽い。それでいて固そうだ。

「ベル君!! あつちによさそうな……ベル君?」

エイナさんが声をかけてきて、初めて自分がこの装備に見入っていたのだと気が付く。

時間を忘れる、という感覚を初めて知った。

こんなにも物に惹かれることがあるんだ。

「……もう、決めちゃった?」

「ごめんなさい。僕、これにします!」

「謝らなくていいよ。こういうのは本人がいいと思うものが一番なんだから。」

ちらりと防具に刻まれた名前を確認する。

ヴェルフ・クロツゾ。うん、覚えた。

まだヘファイストスの名は許されていないみたいだけど、僕を魅了する防具を造った人。

カウンターで支払いを済ませるとエイナさんと一緒にバベルの塔を出る。

買い物が始まった時には晴天だった空も、今は茜色あかねに染まっていた。

「ベル君。はい、これ」

「……………へ？」

おもむろに手渡されたのは緑のプロテクターだ。

小さめの盾としても使えそうな籠手こてを見て僕は戸惑いの声を上げる。

「プレゼントだよ。ちゃんと使ってね。」

「う、受け取れませんか！そんな!!」

普段からお世話になりっぱなしなのにこんなものまでもらうなんてできない。

あまりにも情けないじゃないか。

「私は受け取ってほしいな……………キミのために」

そんな反応は予想通りだったのか、エイナさんは静かに語りだした。

「冒険者はね？いつ死んでもおかしくないんだ。特に君には特別なスキルがある。いつか、誤魔化せない日が来るくらいに強力なものが。」

「……………」

「君には生きていて欲しいなあ……………」

アハハ、これは自分勝手だね。とおどけて見せるエイナさんはその間もずっと僕を見つめていた。

逸らすことなく。緑エメラルド玉色の瞳で。

「……………駄目？」

「ありがとうございます……ございます」

「どういたしまして」

ズルい。

そんな言い方されたらどうしようもない。

夕日に照らされて赤くなっているように見えるエイナさんを直視できず、前髪で顔を隠し、受け取ったプロテクターに目を落とす。

エイナさんの瞳と同じ色の防具の温もりを僕はギュつと抱きしめた。

「遅くなっちゃったな……」

エイナさんを家まで送ってからどんどんと日が落ちていくのを見て、僕はホームまで近道のためにメインストリートを外れて路地裏に入った。

さつきまで感じていた鼓動をごまかすために、小走りになる僕は「僕はヴァレンシユタインさん一筋僕はヴァレンシユタインさん一筋……」と呟きながら暗くなり始めた道を通る。

それが良くなかったのだろう。僕は質たちの悪い同業者につかまった。

「おい、ガキ。お前の持つているそれをよこせ。」

複数人のパーティーの一人、大きな剣を背負った僕より背の高いヒューマンの青年が

嫌な顔をしながら近寄ってくる。

男はエイナさんから貰ったプロテクターを指さし、見せびらかしように剣をゆつくりと抜いた。

「素直に渡せば半殺しで済ませてやるぜ?」

「おいおい結局半殺しにはするのかよ」

「容赦ねえなゲド」

同じように歪んだ笑みを張り付けた彼の仲間と思しき冒険者たちが道を塞ぐ。

僅かな時間を惜しんで路地裏に入ったことを悔やみながらベルはヘステイア・ナイフを構える。

(体が震える……)

人にナイフを突きつけているという事実が、僕から冷静さを奪う。

カッコ悪く足を震わせる僕を見て、男たちはいよいよ醜悪な表情を隠さなくなった。

ヤバい。やられる。でも、黙って渡すわけにはいかない。

あの人の祈りを無駄にはさせない。

なけなしの勇気を振り絞って瞳を吊り上げる。

そして男から発せられる殺気が膨れ上がった時。

「止めなさい」

凜とした声がそれを霧散させた。

振り向いた僕たちの目に映ったのは、大きな紙袋を抱えたエルフの少女。

エイナさんよりも鋭い耳から彼女が純血のエルフだと分かった。

エルフ特有の整った顔は無表情のまま冒険者たちを真っ直ぐ見る。

(確か、『豊穡の女主人』のリユースさん?)

「何か用か? 女」

「貴方が今、手を出そうとしているその人は友人の伴侶となる方です。手出は許しません」

ナニイッテルンダコノヒト

## 闇の残り香

「何訳わかんねえこと抜かしてやがる！」

獲物を前に水を差されたのが気に入らなかつたのか、ヒューマンの青年……ゲドと言  
うらしき冒険者は声を荒げる。

剣を見せびらかすように振り、威嚇する彼はさながらモンスターのようなのだ。

「吠えるな」

しかしそんな彼の敵意は少女が発する圧の前にかき消される。

大声で喚き散らしていたゲドも、舌なめずりをしながら状況を見守っていた彼の仲間  
も、その威圧に目に見えて硬直した。

目を細め、そんな冒険者たちを見下ろすリユーさんは一歩、こちらに近づく。

それだけでより強くなる途轍もない威圧感。

直接それをぶつけられていない僕でも冷や汗が流れるんだ。その圧力の対象になっ  
てしまっている彼らが、顔面蒼白になって震えているのは決しておかしくない。

「っ……!?!」

「手荒なことではできるだけしたくない。私はいつもやりすぎてしまう。」



僕より年上であるとはいえ、少女と言ってもおかしくないエルフが大の大人に向かつてそれを言う光景は本来は奇妙な光景であるはずだ。

だが、きつと、そうなるのだろうか。

それが真実なのだと思わせる凄みが彼女にはある。

次の瞬間、リユーさんの手元がブレた。

風を切るような音が耳の奥で弾けた後、いつの間にかその手には小太刀が握られていくことに気が付く。

(見えなかった……!?)

冒険者は恩恵を授けられることで超越者となる。

全アビリティが0であってもゴブリン程度なら倒せるくらいには強化されるし、感覚器官も一般人とは比べ物にならない。

そんな彼らがその動きを察知できなかった。

これが意味する事柄はただ一つ。

(この人もどこかの眷属ファミリア。それも僕みたいな駆け出しとはワケが違う、神々から称賛二つ名を与えられるような、レベルの壁を超えた眷属!)

本当の意味で冒険を超えた存在。

半月程度の経験でも察せられる格の違い。

しかし、多数の仲間に囲まれている状態で逃げ出すことに抵抗を感じたのか、ゲドはそんな本能の警告を無視してしまう。

「や、やれ！ やつちまえ teme エラ!!」

「おおおー!!」

雄叫びを上げて迫る冒険者たちにベルは怯える心を奮い立たせる。

やるしかない。

覚悟を決めてナイフを握る力を強くするが……

「戯け」

ベルの目の前に迫っていたドワーフの男が突然宙に浮く。

リユーが小太刀の柄で思い切り殴ったのだと分かったのは、聞いているだけで痛そう  
な鈍い音と、いつの間にか彼女がベルの前に立っているのを確認したからだ。

「なっ……」

「嘘だろ……」

リユーがしたことは単純だ。

走って殴っただけ。

技術の欠片もない攻撃。

なのに、この場の誰も全く反応できなかつた。

力自慢のドワーフをエルフが力で圧倒する。

種族間の特性を無視した眼前の光景は、ランクアップを果たした者とそうでない者の差を如実に示している。

「くっ……この女ア！」

「囲め囲め！いくら強かろうがこの人数に勝てるはずかねえ!!」

一斉に抜刀し、仲間を瞬殺した少女に切りかかる冒険者たち。

そんな彼らを前に青空の様な蒼眼は冷たく細められた。

そして疾風が吹き荒れる。

リユーは刀を鞘に収め、腰を低く姿勢をとると言う奇妙な構え。

それが戦意喪失を意味するのではないことは、彼女の身体から迸る剣気から分かる。

「技を借ります、カグヤ。」

刀身が鞘の中を滑る。

刀という特殊な形をした武器を最大限に生かした型。

それは、あらゆる剣術の理想である一撃必殺の一つの答えだった。

極東の地にて独自の進化を遂げた武の奥義。

居合い斬り。

煌めいた、としか感じ取れない一瞬の斬撃。

気が付けば冒険者の剣の一つの刀身がズルリ、とこぼれ落ちた。

「はっ?？」

冗談のように甲高い音を立てて転がる刃を、どこか現実味の薄そうな表情で見ると、  
シアンスローフ  
 犬人。

(剣を斬った……!?)

斬鉄という言葉がある。

第一級冒険者ならば世界最硬の鉱石であるアダマンタイトですら、その身に宿す恩恵フェルナのみで破壊してしまうという。

人々が好き勝手に流す噂のひとつ。それを思い浮かべてしまう規格外ぶり。

「言っただけです。やり過ぎてしまう」と。

顔を引きつらせる冒険者たちに最後通告とばかりに小太刀を向ける。

意地を張るのも馬鹿馬鹿しいほどに圧倒的な力の差を見せつけられた彼らの心が折れるのは当然の流れだった。

「こ、こんな化け物相手にしてられるか!!」

「俺は関係ねえ!!あのガキに関わったのはゲドだけだ!!」

背を向けて一斉に逃げ出す冒険者たち。

「お、おい!お前ら!?!」

一人取り残されたゲドの声が裏路地に空しく響く。

ゲドはワナワナと剣を握る手を震わせると、憎々し気にベルを睨みつけた。

「ふざけやがって……っ!? テメエさえいなけりや……!」

破れかぶれになって標的をベルに移したのか、剣の切っ先をベルに向ける。

リユートの無双劇にすっかり気を緩めていたベルは慌ててナイフを構えなおす。

正直このままリユートが一人で全部終わらせられる気がするが、だからと言って何もやらないのはいくらなんでも格好が悪すぎる。

対人戦は怖いがやるしかない。

(ちようど対人戦で役に立ちそうなひみつ道具もある。やってやる!)

【四 次元衣囊】を起動する。  
フォー・ス・ディメンション・ポーチ

初心者冒険者でも、時に格上殺しすら達成させるひみつ道具を具現化する。

今回呼び出すのはまさに対人戦のためのもの。

名前も分かりやすく、どんな効果なのか想像しやすい。

正にこの状況にうってつけなひみつ道具だ。

「けんか手袋」

「……………なんだテメエふざけてんのか」

「違うんです!」

いつもの調子でひみつ道具を具現化するための声を出していたら、心なしかゲドの殺気が増大した気がする。

……苛立った口調とかじゃなく、素らしきトーンだったのが印象的だ。

き、気を取り直して具現化したひみつ道具を確認しよう。

予想通り現れたのは手袋……否、これはグローブだろうか。

思っていたより大きくて面食らったが、これはこれでいい。

大きくてとても頼もしいことだ。

(……あれ?でもこれだとヘスティア・ナイフ使えない。)

両手を覆うグローブをつけていては十分にナイフは使えない。

そうなるとナイフは鞘に仕舞うしかないけど……

いや、使わないほうがいいだろう。

僕まで刃物を出していたら殺し合いになっていたかもしれない。

あくまでも喧嘩レベルに収めるべきだ。

「テメエさえいなければああ!!」

襲われたのは僕であり、完全に八つ当たりだ。

こんな理不尽ないがかりをそのまま受け取るつもりはない。

人と傷つけあうのは嫌だけど、無抵抗に攻撃を受けるならやり返してやる。

「ああああああああああ!!」

なけなしの気合を振り絞って、けんか手袋に包まれた右腕で殴り掛かる。

ゲドの顔に目掛けて強烈な右ストレートは、最近急成長したベルのステイタスに合わせ驚異的な力を発揮し。

その拳は何故かベルの頬に刺さっていた。

「……………アレ?」

「何やってんだ……………」

今度こそ、左フックを決めてやる。

再度力を蓄えてゲドに狙いを定め…………

やはりベルの反対の頬に突き刺さっていた。

「へブツ!!んつきや!!ゲハア!!」

そしてとうとう腕が勝手に動き出し、ベルが勝手に叩きのめされていた。

(まさか…………けんか手袋って喧嘩が強くなるひみつ道具じゃなくて…………)

名刀電光丸のような自動戦闘を期待していたのだが、現実は甘くなかった。

自分で自分をボコボコと殴る異常事態にベルは、ようやく今回のひみつ道具の用途が理解する。

これは、自分と喧嘩するための手袋だ。

……何の需要があるんだ？

前のウマタケのほうが奇天烈な見た目だけど、まだ使い道がある。

「……なんだコイツ」

頭のおかしい奴を見る目でベルを見るゲド。

羞恥心で死にそうだ。

「フツ!!」

「があっ!?!」

目の前の異様な光景に気を取られて、無防備になったゲドを峰打ちするリユー。ゴギヤツ、とすごい音がしたが死んではいないだろう。

結局リユーだけで終わらせてしまったが、今のベルはそれどころではない。

(こ、これ、いつになったら終わるの……?)

冒険者たちがいなくなっても自分を殴り続けるけんか手袋。

自分の敵は自分自身とでも言う気だろうか。ふざける。

いい加減、顔中が痛くて泣きたくなる。

「……失礼します。」

リユーはそんなベルに対して小太刀を振った。

斬られたかと思いきや身を固くするが痛みはない。



けんか手袋のみが切り裂かれ、地面に落ちていた。

(僕を傷つけずに手袋だけ斬った!?)

今日何度目の驚きか。

余にも高い熟練度であろう『器用』のアビリティ。

滅茶苦茶に動いていたのに、あっさりと目標だけを斬るなんて、まるでヴァレンシユ  
タインさんみたいだ。

「無事ですかクラネルさん」

「えっ!?!えと、あのですね!?!」

あまりの絶技に半ば放心していたが、リユーに声をかけられてふと現状の自分がただ  
の変質者なこの状況に気が付き、大慌てで釈明を始めようとする。

「クラネルさん。あの呪詛<sup>カースウエボン</sup>装備はどこで?」

「へ?カ、カース……?」

「所謂<sup>いわゆる</sup>呪いの装備です。使用者にデメリットを与える悪質な武器が出回ることは、稀で  
すがあります。」

なんだか勘違いされている。

けど、都合が良かったのでその話に乗らせてもらおう。

助けてもらったのに勝手だとは思うけど、さつきエイナさんにあんな注意を受けてお

いてペラペラとひみつ道具のことを話すほうが問題だ。

「こ、これは貰い物でっ、どこで買ったかは……」

「そうですか……故意かどうかは分かりませんが、その人物には注意してください。」

「は、はい！」

「恐らくこのグローブは使用者に対して自動的に攻撃させる呪いが付いていたのでしよう。呪いの解呪には大金が必要ですから、思い入れがない限りはこのグローブは破棄すべきかと。……あの光もこのグローブの効果なのでしょうか？」

「じ、実は光を出すアイテムがあります!! 目くらましに使ったんです! 発光瓶フラッシュボトルって  
言いまして……」

自分でも分かるが嘘の出来が酷い。

しどろもどろだし、リユールの疑問に過剰反応しすぎだ、

「そうでしたか。昔と違ってそんなアイテムがあるのでですね。」

しかし、ベルの動揺を襲われたことに対するものと思っただけらしいリユールは、特に違和感を覚えることは無かった。

「気を付けてください。先の一件以来、あのような冒険者による事件や曰いわくつきのアイテムによる被害が急増しているようです。」

「そ、そうなんですか?」

確かに最近妙に街を巡回する「ガネーシャ・ファミリア」の団員たちがピリピリしていると感じたが。

「……クラネルさんはまだオラリオに来たばかりですから、暗黒期と呼ばれるあの頃を知りませんでしたね。」

「はい。一応、話だけは先輩の冒険者の方々に聞いたんですけど。」

「あの大規模テロの後、闇派閥イウイルスに関与していると思われる者たちによる活動が活発しています。その様はまるで暗黒期のように。」

そう言つて、どこか遠くを見つめるリユ。

「じゃあ、また闇派閥イウイルスは何かを企んでいるんですか？」

「闇派閥イウイルスにも次の計画はあるのでしようが……恐らく、今都市を賑わせている騒動は末端構成員による暴走です。」

よく分からない。

闇派閥イウイルスは今回、直前まで尻尾を見せないくらいに統制がとれていたはず。

どうして今になって末端の構成員が暴走しているのだろうか。

「まず、闇派閥イウイルスとは単一のファミリアではありません。犯罪行為を行う者たちが所属を超えて互助しあう寄り合い所帯に近いものです。」

「よ、寄り合い所帯？」

「はい。明確なトップが存在せず、組織自体も実体が無い故に大きな力はありませんが、それ故にいくら検挙してもキリがなく、根絶が難しい。」

あれだけのことをしてかした組織に大きな力がない？

にわかには受け入れがたい評価だ。

「闇派閥イツイルスが大規模な作戦を展開する際は、必ずその背後に強大な後ろ盾が存在しています。……死の7日間と呼ばれるあの時もそうでした。」

かつて起きた正義と悪の『大抗争』。

そこにどんな思い出があるのか、彼女は目を閉じた。

「今回もそうした支援者スポンサーが付いたのでしよう。そうでなければあの規模の戦力は説明できない。……しかし今回の黒幕はエレボスとは違う点がある。」

「……それは？」

「これは私の推測ですが、独断専行をあの手より行いがちなのでしよう。あの時の闇派閥イツイルスの動きにはちくはくな点がありましたから。そのことが組織全体に影響を及ぼし、末端構成員の管理ができなくなっているのかと」

独断専行の結果、作戦が成功していたのならこうはならなかったのかもしれない。

だが、あの作戦の被害者は0。明らかに赤字だ。

現在の闇派閥イツイルスでは幹部や支援者スポンサーによる責任の押し付け合いによる分裂が始まってい

るのだとリユーは語る。

「もとより利害によつて成り立っていた関係です。利より害が大きくなれば容易く決裂するでしょう。彼らは家族ファミリアではないのですから。」

闇派閥イヴイルスが弱体化していくのはいいことだが、そのせいで末端による暴走の被害が増えている。

一体どれだけ力をため込んでいたんだと言いたい。

千年以上の歴史を持つ、オラリオの闇なのだから当然と言えば当然だが。

末端の暴走の影響を受けて一般の冒険者すら素行不良が目立つという。

「失礼ですが、貴方にそのグループを与えた者もまた、闇派閥イヴイルスと関係のある人物かもしれません。」

「い、いやーそれはないかと……」

「物事に絶対はありません。よろしければ私がその人物を調査して……」

「いえいえいえいえ!?そこまでしなくても大丈夫ですよ!」  
不味い。

このままだとウソがばれてしまう。

「あ!!僕この後に用事があったんだった!」

強引に話を断ち切つて逃げるしかない。



あの日を思い出させる話をしたことで少し、感傷的になっていくようだ。「時間をかけすぎてしまった。ミア母さんに叱られてしまう。」

買い出しの袋を抱えて人々が行きかう道を歩む。

向かう先は「豊穰の女主人」。

そこが彼女の今の居場所だ。

## シン・サポーター・一日体験

ダンジョン上層部。

オラリオを統括する大神ウラノスがダンジョンを封じるために行う『祈祷』。

その影響を最も受ける場所なだけあって、世界三大魔境に数えられるダンジョンの中でも事故が起こりにくい易しいエリアである。

それこそパーティーを組んでいれば、まず死ぬことは無い。(ソロの場合は運悪くモンスターたちに囲まれてやられるケースもあるようだ)

しかし、それは5階層から一変する。

モンスターの出現頻度の増加やダンジョンの構造の複雑化、更には状態異常を引き起こすモンスターなど冒険者を追い詰める要素が増え始めるのだ。

ある程度探索に慣れ初めたために、注意が疎かになった初心者が迷宮の悪意に対応しきれずに起こる死亡事例はここから爆発的に増加する。

ここを生き延びられるかどうか、冒険者としての最初の試練。

エイナがベルの迂闊うかつな下層進出を咎めたのはそう言った事情によるものだ。

駆け出し冒険者はこの階層到達前には、地道な力の蓄えが必要不可欠。



ソロならば尚更能力を向上させるために、4階層で足踏みする期間が必要とされる。常人以上の成長速度を誇るベルであっても、装備の一新などの用意が必要なのだ。

「ふっつ!!」

「ギシヤアアツ!?!」

苦戦はまぬが免れない。

そんな覚悟とは裏腹に、ベルはモンスターの大群を前に大立ち回りを演じていた。

「ギギギギギギツ!!」

「はあああああ!!」

神の刃が初心者殺しの細い胴を捉える。

短刀が上空から下降したパープルモスの羽を断つ。

ヘステイア・ナイフを賜ってから必死に練習したダブルナイフ二刀流は、その手数の多さによる殲

滅能力を遺憾なく発揮して見せた。

「——ガツ……!?!」

断末魔を上げるキラアアント。

同時にダンジョンの壁が崩れる音が耳に入り、新たなモンスターの出現を察知する。

ベルは新たに現れたキラアアントにもヘステイア・ナイフを見舞おうとするが。

(抜けない!?)

先ほどの刺突が深く刺さりすぎたのか、キラアートの固い甲殻に引っかかりを感じた。

その隙を逃さず襲いかかる新たなキラアント。

するとベルはヘスティア・ナイフを離し、左腕の緑のプロテクターで迫り来る鋭い爪を防いだ。

敏腕アロバイザーのエイナが選んだだけあり、ヘファイストスの銘こそないがプロテクターは正面から凶爪をぶつけられてもびくともしない逸品。

迷宮に映えるエメラルドグリーンの色彩の頼もしさは、悪意に満ちたダンジョンでベルに勇気を与えてくれた。

攻撃ばかりに意識が向いて隙だらけな頭部に白刃を叩き込むと、ベルはちらりと自身の後方で活動する新たな仲間を確認した。

「ベル様、お強い！」

先日仮契約した小人族バルウムのサポーターであるリルカ・アーデ。

実を言うと、「ソーマ・ファミリア」の団員だという彼女を連れてくることは少々不安だった。

リリ（リルカさんと言うと嫌がられた）の話し方だと「ソーマ・ファミリア」の団員たちが彼女を除け者にしていて、パーティーを組んでももらえないということだった。

が、それはあくまでも彼女視点での話。

もしかしたら単に腕が悪くて組んでももらえないだけかもしれない。

少々失礼な考えだがそんな可能性も考えていた。

だが、リリの仕事ぶりはベルのそんな考えが見当違いだったことを悟らせる。

(戦いやすい)

ソロの時とは比べ物にならないくらいに。

まず、バックバックがいらなくなかった。

ウエストポーチに最低限の回復薬ポーションこそ備えてあるが、その他のアイテムや獲得した魔

石をベル自身で持たなくなっただけでかなり動きやすい。

倒したモンスターの死骸をどけてくれるのもありがたかった。

いつもならモンスターの死骸が邪魔で、時間が経つごとにエイナに常々言われている

1対1の状況による、正面からの戦いに持ち込みにくくなる。

しかし、今日はリリが倒したモンスターを戦闘領域から避けてくれるので、いつもよ

り広くフロアを使って戦うことができた。

足の速さを使った『ヒットアンドアウェイ』こそベルの真骨頂。

ベルはここに来て初めて自分の戦い方が嵌はまっていると感じていた。

(仲間が一人いるだけでここまで違うのか！)

仲間を呼び出すキラーアントを優先的に倒してから、足元のニードルラビットの突進を躲す。

今まではその流れをつくるために全力で取り組まなければならなかったが、サポーターが雑事を引き受けてくれるおかげでその他のことに気を配れる余裕が生まれた。

なら、一つ試してみよう。

思い浮かべるのはあの日握った刀のようなひみつ道具【名刀電光丸】。

今日のスロットにあのひみつ道具はない。

あの超常的防御を使えるのはずっと未来のことだろう。

だが、あの剣技はしっかりと体で覚えている。

「キュウウウウウツ!!」

「……っ、せえー、のっ!!」

再び助走をつけて飛び込んでくるニードルラビット。

それを正面からベルは迎え撃つ。

額の鋭い角がベルの胸元に迫る。

武器の材料にもなる突起は、当たれば確実にベルの命を奪うだろう。

己の命を脅かす殺意を前にしながらも、ベルの心臓は規則正しいリズムを奏で続けた。

ヘスティア・ナイフをその角に滑らせる。  
弾くのも、防ぐのでもなく、受け流す。

最小限の力で直線を捻じ曲げたベルにニードルラビットの武器は届かない。

「キュツ!?!」

胸を扶る勢いそのままダンジョンの壁に激突したニードルラビットは、首をあらぬ方向に曲げて沈黙した。

その成果にベルはほっと息をつく。

(名刀電光丸の防御の再現。 まだまだ十分じゃないけど、少しはできてきたかも)

明らかに格上な極彩色のモンスター。

その攻撃を受け流す技術は正しく規格外だが、あの戦いの後にベルは考えた。

名刀電光丸が動かししたのはあくまでベル自身の身体。ならば、あの剣技を再現することとは困難だろうが不可能ではないのではないかと。

一度ベルの身体は最適解を経験している。

答えを知ってその過程を積み重ねると、答えを知らずに模索していくのでは成長速度に大きな差があるはずだ。

そう考えてあの瞬間の動きを真似てみたが、想像以上に上手くいった。

(力に無理に対抗するんじゃないやなくて、その方向性を誘導する。名刀電光丸を使ったとき

みたいにスムーズな受け流しじゃなかったけど、形にはなってきた)

とは言え、もしもう一度あのモンスターへの攻撃を受け流せと言われても無理だろう。受け流すと言ってもベルはその力の全てを逃しているわけではない。

ナイフを握る手に残る衝撃は、名刀電光丸を使っていた時にはないものだった。おまけに関節が鈍く痛む。身体に負担がかかるやり方だった証拠だ。

改めてひみつ道具の凄さを感じた。

ベルがああ領域に辿り着けるまで一体どれだけかかるのか。

「焦っちゃダメだ……一歩ずつ、確実に」

サポーターの恩恵は凄い。

冒険を支援してくれる存在がいることで生まれる余白。

それを有意義に使えば成長の足掛かりになる。

今まで苦勞をするだけ成長できると思っていたけど、こうやって樂ができるっていうのも人が成長するうえで大切なのだとベルは理解した。

(まだ【フォース・タイムシジョン・ポーチ四次元衣囊】は明かせないけど、本契約してもらうのもいいかも)

この先さらに下層に潜るのなら、ソロではいられなくなる時がきつとくる。

そうなる前に腕は確かな彼女と専属契約を結ぶのはおかしくはないだろう。

勿論、ヘステイアやエイナと言った第三者の意見を聞く必要はあるが。

問題は僕がサポーターのお眼鏡にかなうかに尽きる。

サポーターは自分では戦えない。つまり、その収入は冒険者の働きに依存している。それにダンジョンは命がけ。弱い冒険者があつさりやられたら次はサポーターの番だ。

実力のない冒険者について行って道連れになるなど絶対に御免だろう。

ベルの実力がこの先の階層に相応しくないとリリが判断すれば、話はここま

で。  
フォーンス・デイメンション・ポーチ

【四 次 元 衣 囊】について隠しておかなければならないベルは、せめて実力だけでも認められなければならないのだ。

今回の仮契約はベルがリリを見定めるためのものだが、同時にリリもベルを評価する機会でもあるのだとベルは考えた。

これはサポーターと冒険者のアピール合戦。

ベルがリリをサポーターとして雇いたいと思つたように、リリにもベルと契約したいと思わせなければならぬのである。

「あああああああ!!」

そう考えたベルは、残存するモンスターの群れに飛び込む。

ルーム内の戦場を完全に掌握したベルを止められるものなどおらず、モンスターたちは





両腕で二つのナイフを自在に操り「初心者殺し」キラーアントを次々と切り伏せる。

この光景を他の冒険者が見たらどう思うのだろう。

やるじゃないかと褒めるのか、まだまだだと告げるのか、少し嫌な性格ならこんなことで手間取っているのかと嘲るのかもしれない。

オラリオの冒険者の中ではまだまだ中堅にも至れない未熟な立ち回り。あの程度の冒険者はいくらでもいる。

だが、少年のキヤリアが半月だと言ったら？

おそらく一様に顔を引きつらせるだろう。

『まだオラリオに来たばかりで……恩恵を貰ってから一カ月もたってないですから、ダメなところも多いかもしれないけどよろしくお願いします』

仮契約を結んだ時、そう言ったベルに嘘はなかったはずだ。

人を騙せるような性格には見えなかったし、こんな無茶苦茶な設定を騙る意味もない。

(半月？あれが？何の冗談ですか……っ)

14

この数字は今日ベルが葬ったモンスターの数だ。

1体ならば容易く葬れるだろう。キラアアントはともかくパープルモスやニードル

ラビットなど武器があれば容易く殺せる。

だが、たった一人でこの数を立て続けに相手取ることがどれだけ難しいか。

これだけの連戦ならば、運が悪ければ前衛が複数いるパーティーを組んでいたとしても万が一はあるものだ。

「ベル様は本当にお強いですね。本当に駆け出しなのですか？」

魔石を回収しながら周囲を警戒するベルに問いかける。

するとベルは『強い』という言葉にキョトンとしながらこう返した。

「そんなことないよ。僕より強い冒険者なんていくらでもいるでしょ？」

謙遜などみじんも感じさせない表情。

彼は思った通りを口にしただけなのだ。

なるほど、今のベルの実力はそこらへんにいる冒険者Aと言ったところだ。

エキスパートには至れない普通の冒険者。

そんな彼らと肩を並べていることに彼は何の違和感も持たないのだろうか。

(……いえ、持たないのではなく、持てないのかもしれない)

ベルの所属しているのは「ヘスティア・ファミリア」という名前も聞いたことがない、団員がベルだけの新興派閥だという。

閉鎖的な「ファミリア」という制度では、リリのようなよつほどの事情がない限りは

他派閥の冒険者と交流せず、パーティーも内輪で組む。

先達を持たない「ヘスティア・ファミリア」で一人冒険者を行うベルには、一般的な冒険者の強さが分かっていないのだ。

恐らく、彼の中の冒険者像は子供の頃に読んだ御伽噺の英雄か、街の酒場で耳にするような武勇伝がもとになっている。

だから自分は強くないと自然に口にできるのだ。  
ナチユラル

それはリリが何年かけてもたどり着けない世界だと気が付かずに。

(羨ましいですよ。一人でも何でもできる力があつて)

きつとベルは天才なのだろう。

他人の努力を嘲笑うように駆け上がる可能性の塊。

リリのような底辺で這いつくばる者には、ただ見上げるしかできない。

卑怯だ。

その才能が欠片でもリリにあれば、きつとリリはこんなリリじゃなかった。

「……まあ、ベル様の強さは武器に寄るところも大きいのでしようが」

「そうだよね……ちよつとナイフに頼りすぎかも」

「失礼ですがそのナイフはどちらで手に入れたのですか？ 駆け出し冒険者であるベル様

では……」

「うん。不相応かもしれないけど、僕の神様から頂いたんだ。友達に無理を言っ  
てもらったんだ」

「……いい神様ですね。」

リリの神様と違って。

酒造りに没頭して眷属こんじゆを蔑ろにする神様ソーマにはない、眷属をまっとうに愛する神様なの  
だろう。

リリの嫉妬が膨れ上がっていく。

綺麗な心を持っていて。

冒険者の才能に溢れていて。

いい神様と巡り合うことができて。

この差はなんだ。

未来に溢れた少年ベールと未来の潰つぶえた少女リリ。

絶望の淵に落とされたときに現れたのがこの少年なんて、もし運命とやらがあるのな  
ら、それはきつとリリを嫌っている。

「……」

「リリ? どうかした?」

「いえ、何でも。それよりベール様、良かったらこれからリリを雇ってくださいね」

「うん、神様たちに相談するけど、いい返事ができるようにしておくね」

こんなに恵まれているなら、もう少し不幸になってもいい。

惨めな思いをして、歪めてしまえ。

この少年を貶めたらどうするか。

みつともなく泣き喚させてもいいし、怒り狂わせるのも悪くないだろう。

ひよつとしたら激情のまま手を出してくるかもしれない。

そうなればリリの勝ちだ。彼はもう二度と輝けなくなる。

どの道未来がないのなら、好き勝手やって破滅させてもらおう。

「はい、リリはいつもバベルにいますから。ゆつくりお考えになってください。リリは

決して逃げませんよ！」

ベルを決して逃がしもしないが。

リリは湧き出る悪意を仮面に隠し、見た目相応の子どものような、満面の笑みを浮か

べた。

## 相談・面談

ダンジョンから帰還した後、ギルドの換金所でベルは今日の収入を受け取る。

リリには「今日の分はベル様がお納めください。」と半ば強引に魔石袋を押し付けられてしまい。返そうにも彼女はさっさといなくなってしまった。

ベルの信用を買うためだとは言っていたけど、これで良いのだろうか。

(次の探索の時は赤字でもちゃんとお金を払おう)

ここまでされて彼女と契約しないという選択はベルには取れない。

他のサポーターは知らないが腕も悪くないだろうし、そろそろ魔石を入れる袋が小さいために、何度もダンジョンに潜るといふソロの弊害にはウンザリしていたところだ。

おかげで到達階層が増えて、魔石の質も上がっているのに階層を往復する手間でプラスマイナス0なのが現状である。

それが今日の探索では大きな黒字に変わった。

サポーター一人加わるだけでここまで違うのかと驚きを隠せない。

(やっぱりサポーターは絶対欲しいけど……スキルがなあ……)

本来なら一も二もなく飛びつくべきなのだろうが、ベルの【フォース・デイメンション・ポーチ四次元衣囊】の存在

が短絡的な契約を躊躇させる。

ひみつ道具を使えばどんなことだってできるのだ。それこそ人を貶めることだって容易なもの。これまでもいくらかでもあった。

疑いたくはないが万が一はあつてはならないのだ。

「ベル君。お待たせ」

色々悩んだ末、一人で考えてもしようがないと恒例のエイナへの相談をしに来たわけである。

すっかり慣れてしまったギルド本部の面談用ボックスを借りて、【フォース・ニイメンション・ポーチ】四次元衣囊を知る数少ないこの人に意見を求めた。

「うーん、サポーター契約かあ……」

「やっぱり、不味いですか?」

「ベル君はその子のことはどう思うの? ファミアリア間でもいい関係を築けているパーティーはあるし、ベル君自身は自分と合うと思つた?」

「はい、良い子でした」

ベルのリリへの心証は悪くない。

迷惑をかけてしまったという罪悪感もあるし、もしかしたら憐憫みたいな感情も含んでいるのかもしれないけど。あの子のことは放っておけない。そう感じるのだ。

「……あの、「ソーマ・ファミリア」ってどんな所なんですか？」

「基本的には探索系ダンジョンのファミリア。でも、商業展開もしているところがちよつと独特かな」

「商業？何か売っているんですか？」

「うん、お酒をね。結構評判良いみたいだよ。それくらいかな……情報が少ないんだよね、あのファミリアは」

「ソーマ・ファミリア」の主神である神ソーマは他の神とは違い、物静かな神らしい。

大昔に人々がイメージする孤高の超越存在。

全く周りに関わらないから、情報も断片的なものらしい。

だから出てくる情報を見る限りは超無難なファミリア。

友好的でも敵対的でもない。故に判断に困るファミリアのようだ。

「ただ、これは私の主観なんだけど、何ていうか「ソーマ・ファミリア」の冒険者は、普通の冒険者より必死な気がする。みんな死に物狂いというか……仲間同士でも争っていることもあるし」

喋っているエイナ自身困ったような表情だ。

何かがおかしい、でもそれをはつきりと言葉にできないもどかしさ。

リリの事情はファミリア内のいじめとか、そんな単純なものじゃないのだろうか。



「神ソーマの事情を考えたらファミリア間での問題はおきにくそうだけど、問題になるのはベル君のスキルかな……」

「やっぱりそこが問題ですよね……」

「うん、死に物狂いつてことは何をするか分からないつてことだから。ベル君の希少なスキルを知ったらどう反応してくるのか、想像できないからね」

「ソーマ・ファミリア」が何を目的に、そんなに熱心な活動をするのかもよく分からないのだ。

ベルのスキルを見て悪用する危険性は考えなくてはならない。

それこそ自身が直接悪用しなくても、情報を他の誰かに売ればいいだけなのだから。

「サポーター間のネットワークは馬鹿にできないからね……よくサポーターを蔑視する冒険者はいるけれど、彼らも弱者なりにこのオラリオを生き抜く知恵はある。油断していると足元を掬すくわれかねないよ」

「……エイナさん。サポーターって冒険者に差別されているんですか？」

「そうだね……特に専門のサポーターはかなり身分が低いかもしれない。オラリオは実力至上主義な所があるから」

リリの言葉の端々から滲にじみ出ていた彼女に向けられた悪意。

本当にそうだったのかと、ベルはショックを受けた。

「サポーターは基本的に弱い人になるものなの。その階層には適さない下っ端とかね」  
考えてみれば当然だ。

サポーターの仕事は戦闘に直接関与しない。

強いなら後方で遊んでないで前線に行けとなるだろう。

「勉強のために先輩冒険者についているならともかく、専門職つてことは冒険者としての道を諦めたつてことだから……」

冒険者からみればサポーターは落ちこぼれの集まり。

人は己より劣る相手にはどこまでも冷酷になってしまふ。

神フアルナの恩恵を持つていても全ての人が平等に強くなれるわけではない。

素質だったり、モンスターに怯えずに戦える精神性だったり……そうしたものが欠けていたり、可能性が芽吹く機会に恵まれなければ強くなれないのだ。

ベルが急成長できているのは彼に元々そうした素質があつて、たまたま出会きっかけいがあつたからだ。

子供の頃から憧れていたオラリオの冷たい一面にベルは言葉を失った。

重苦しい空気が相談室に立ち込める。エイナの表情を見る限り、彼女もこのことを快くは思っていないのだろう。

自分のことじゃないのに、やり切れない思いが胸をかき乱す。



ヘスティアの懸念はもつともだ。

ベルのスキルもそうだが、他のファミリアの眷属とパーティーを組むこと自体リスクーな行為。

些細なトラブルがドンドン大きくなって、最終的にはいくつものファミリアを巻き込んだ抗争に、なんてこともぎらにあるのがファミリアの恐ろしいところだ。

「初回だからって魔石を全部譲ったっていうのも気になるんだよ」

「ご、ごめんなさい」

「いや、ベル君を責めているんじゃない。金に余裕がないって話だったのに妙にサービスしてるっていうか……ちよつと食わせ者かもしれないよ。只より高い物はないって言うし」

どうやらヘスティアは、リリが困窮していると言っているにも関わらず、初回の魔石を全部渡したと言うところが引かかっているらしい。

果たしてベルはそこまでして契約する価値のある人物なのかと。

成長性は凄いが、はつきり言ってるベル程度の冒険者ならばゴロゴロ転がっている。

本人は信頼を買うためと言っていたが、コストと得られる物が釣り合っていないのではないかとヘスティアは言う。

「それだけ信頼関係を重視しているのか、あるいは本当の目的は別にあるのか……」

「でも僕とリリがあつたのは事故みたいなものですし、初めから僕を狙っていたとは思えません」

「確かに狙つて会うのは無理だろうなあ」

リリと出会つたそもそものきっかけはベルにある。

ひみつ道具の実験に失敗して超高速で動くゴブリンを追っていたら、たまたま襲われていた彼女を助け出しただけなのだ。

これが予想できていたのならもはや超能力だ。

ヘステイアもそう思うからこそ、確信を持つてリリを黒だと断定できない。

「無所属のサポーターはいないのかい？」

「エイナさんも探してくれてはいるんですけど、流石に見つかからないみたいです」

「それもそうか、恩恵<sup>ファルナ</sup>抜きで探索する奴なんていないだろうし」

そもそも冒険者からのドロップアウトした人が多いサポーターは、大抵の場合はそのままそのファミリアの眷属として所属し続けるものだ。

フリーの人っていうのは自分の所属するファミリア探し中って人が多い。パーティーを組むのだからその冒険者の所属するファミリアの雰囲気を知るためというのが大きいだろう。そんな人が心惹かれる条件を「ヘステイア・ファミリア」が出すのはちよつと無理がある。

「他をあたるとっていうのは流石に難しい。となるとそのサポーター君をベル君は信頼できるかという事を話してはいかがか」

「すごく気が利いていい子なんです。それに、ちよつと放っておけないと言うか……」

「ちよつと聞きたいんだけど、その子、女の子だったよね」

ベルが今日感じたリリの印象についてヘスティアに話していると、ヘスティアが話を遮った。

「?ええ、小人族バルウムの女の子です。こう、髪は栗色でどこか栗鼠リスみたいな……」

質問の意図が分からず、リリの容姿を思い出してヘスティアに伝える。

するとヘスティアの表情がドンドン険しくなっていく。

「また女の子……!? ついこの間まで全然だったのにいつの間にか増えている、だと……」  
なにやらぶつぶつと呟くヘスティア。

こういう時は何かおかしなこと考えているのだろうと、半月ほどの同居で理解しているベルだったが、鬼気迫る様子で考え事に没頭するヘスティアの圧に押されて話しかけにくい。

「ええい、某なにかしだけでも厄介だというのにこれ以上増えたら厄介なんてものじゃないぞ

!!」

某なにかしというのはヘスティアがアイズを指している名詞だが、なぜここで彼女の名前が出

てくるのか。全く心当たりのないベルは首をかしげるばかり。

一人ヒートアップするヘスティアはやがてピコン！とツインテールを立たせる。

「そうだ！ベル君!!君とサポーター君にクエストを出そう！」

「ク、クエ……?何ですか?」

「クエストだよ!冒険者への依頼!そのサポーター君に直に会ってその子の性質を見極めるんだ!」

「そんなことできるんですか!?!」

「まあ、一応神だし」

ヘスティアによると、ビッグライトで教会が壊れてから引越した今の地下水路のホームでゴロゴロしていると、時々妙な音が聞こえてくるらしい。

初めは気のせいだと思っていたが、何度も聞こえてくるので気になっていたようだ。

そこでベルとリリにその調査と、同行するヘスティアの護衛を依頼することにしたんだとか。

「名付けて『地下水路に響く謎の声を暴け』!」

「聞こえている音って声なんですか?」

「響きすぎてよく分かんないけどそうじゃない?」

そうやってクエスト形式でレクリエーションを行うことで、ヘスティアが実際にリリ





「ぼ、冒険者様たちのものですよっ」

「分かってんならしつかり恩返ししないとなあ!!」

この男がこうして暴力を振るい、リリから搾取するのは今日が初めてではない。

いい金蔓かねづると目をつけられたリリは何時ものように、この時間が過ぎ去るのを待った。

そう、いつものようにその日も過ぎると思っていたのだ。

「止めたまえ、カヌウ」

「ああ?……だ、団長!?し、失礼しやしたー!」

今、最も見たくない男の顔がリリの視界に入った。

先ほどまでの横暴な態度が嘘のように小さくなるカヌウは、慌ててザニスに頭を下げ  
る。

「いやいや、これが君のアーデに対する愛の鞭だという事は理解している。よく理解  
しているとも。」

紳士然とした笑みを浮かべる眼鏡をかけた細面のヒューマン。

しかし、その本性をしるカヌウは冷や汗を流しきりだ。

「だが、アーデは我々の大切な仲間だ。やりすぎは良くない」

「はっ!」

思わず漏れたカヌウの声にザニスの目が細まる。

慌てて口を閉じたカヌウだったが、その反応も無理はない。

何年間もリリに対する暴行を放置してきた男とは思えない台詞。

時にはこの男の目の前で今以上の暴行を加えてきたのだ。誰だってこんな反応になる。

そんな男がこう言い出した意味を理解できないほどカヌウは愚かではなかった。

「……つち。いくぞ、テメエら」

取り巻きの冒険者たちを連れてその場を離れるカヌウ。

「また新しい鴨を探さねえとな」と仲間たちと話しながら離れる彼を鼻で笑いながら、ザニスは覗き込むようにリリを見た。

「大変だったなあアード。ケガはないか？今後の仕事に響いてしまう」

「……何の用ですか」

「そろそろお前の仕事を説明してやろうと思つてな、様子を見に来たんだ。これからは冒険者に関わる必要はない」

「……サポーターはもうやめろと？」

「んん？そんな必要はないとも」

リリの言葉をザニスは笑みを持って否定する。

「やりがいを持って行えることとは素晴らしいことだ。是非とも最後までやり遂げたま

え」

その瞳が嘲りを含んで細められたのを見て、リリは悟った。バレている。

自分の情けない八つ当たりが、この男には筒抜けなのだ。

どうせ、その程度しかできないと嗤っているのだ。

「では、その仕事が終わったら早速取り掛かるぞ。悔いの残らないようにすることだ」  
そう言つて男は去つていった。ポロポロのリリを放置して。

大切な仲間と宣のたまつておきながら、随分と雑な扱いだ。

リリはそう皮肉を言おうとしたが、体中がだるくて口も満足に開けない。

しばらく、仰向けになつて空を眺めた。

日はとつくに落ち、星々が輝いている。

しかし、リリが見ていたのは星々ではない。その間に存在する暗闇だった。

綺麗なもの陰でぼんやりと存在するもの。

誰もが輝く光に注目して、その傍の闇には目もくれないのだ。

「……馬鹿馬鹿しい」

随分と感傷的な思考を自嘲し、リリは立ち上がった。

そして、体中の傷を無視して計画の調整に没頭する。

それは現実逃避だった。

ザニスが見通したように。リリにはそれしかできないのだから。

(感触は悪くなかった。お人好しのベル様なら絶対にあの条件を受けるはず)

現在宿泊している安宿に向かうリリは、確かな手ごたえを感じていた。

無償の善意などと言うものを信じているであろうあの少年なら、確実にその好意を無碍にできずにズルズルと仲間入りを認めるだろう。

サポーターに困っていたことも本人の口から確認済み。パーティー入りは決まったも同然だ。

(ここで気を緩めてはいけない。しばらくはベル様の信頼を得るために地盤を固めない  
と。)

笑顔を振りまいて。

悩みを聞いて。

失敗しても、大丈夫ですと寄り添って。

時には贈り物を送り。

親愛をこめてベル様の名前を呼ぼう。

そして、

そして、最後の最後で見捨てるのだ。

汚物を見るように、嫌悪と非難を込めて睨みつけよう。

それまで与えた好意を全て反転させて彼にぶつけるのだ。

そうすれば、心は簡単に壊れる。

私がそうだったのだ。

雨の音が聞こえた。

周りを見てもどこも濡れていない。空はあの星々の自己主張が今も続いている。

だが、リリには聞こえていた。見えていた。

いつかの日のような体も心も冷やす雨が、彼女の歩みを重くするのだ。

その重みは少年の絶望で誤魔化せると信じて、彼女は暗いオラリオの闇に消えた。

## リリルカ・アーデの奇妙な冒険

翌日、バベルの塔の前でリリを見つけた僕は、神様の考えたレクリエーションを彼女に伝える。

神様と地下水路を探検して判断するという、型破りすぎる提案には目を丸くしていたけど、リリは快諾してくれた。とは言ってもいきなりレクリエーションを行えるわけないのでリリと相談して3日後を予定日にしたが。

「ベル様のことをよく見てくれるいい神様ですね！」

彼女はそう認めてくれたが、お前のことを信用できないと面と向かって言われたようなものだ。

嫌な思いをさせてしまった。

ごめん、と頭を下げるとリリはカラカラと笑いながら「それより今日はどうしましよう？」と聞いてきた。

(あ……リリはお金がないって言ってたっけ)

神様はその言葉自体を疑っていたけど、もしそれが本当なら大変だ。

昨日の収入は僕に譲ったせいで皆無だった訳だし、流星に今日もお金がないのは不味

いだろう。

その事に頭が回らなかった自分が情けない。

少し考えれば分かったはずなのに。

「そうだね……まだ本契約じゃないけど、今日も一緒にダンジョンに行こうか」

「本当ですか!？」

「僕もお金を稼いでおかないと結構つらいし」

慎重にサポーターを決めるとは言ったが、だからと言って決定まで何もしていない

余裕は「ヘスティア・ファミリア」にはない。

固めのパンと安価なジャガ丸くんが主な食事メニューな駆け出しかつ、新興派閥の唯

一の冒険者の生活は苦しいのだ。

「今日はどの階層まで潜る?」

「そうですね……本契約をしていないのにあまり深い階層に行くのは、ベル様の主神様が  
いい顔をしないでしょう。今日は5階層辺りでどうでしょうか。安全性が高く、魔石  
の質が良いのはその階層でしょうし」

すらすらと答えるリリ。

つい最近ダンジョンの勉強を始めた僕とは違い、何年もオラリオでサポーター業をして  
いただけあって上層の事情もよく分かっているのだろう。

「5階層なら潜るのにそんなに時間もかからないし良いかもね。今日はどれくらい潜る？」

「そうですねえ……」

神様やエイナさんの言う通り油断は禁物だと思う。

僕は騙し合いなんて苦手中の苦手だし、そんな奴は悪い人の格好の餌食何だってことはよく分かっている。

でも、こうやってリリと話していて、初めてパーティーらしい会話をしていると信じていたいと思うのだ。

簡単に絆<sup>ほだ</sup>され過ぎなのかもしれないけれど、リリを疑うのは心にくる。

今だって、簡単にダンジョンに潜るなんて決めるべきじゃないんだろう。上層であっても、命の危険に溢れたダンジョンで信頼しきれない相手に背中を預けるなんて馬鹿のすることだ。

(駄目だなあ、僕)

分かっているけど徹底しきれない。

もし、本当にリリが困っていたら。そう思って流されがちな自分を自覚する。

でもやりすぎれば誰ともパーティーを組めなくなるじゃないか。なんて、誰に向けているのか分からない言い訳を心の中で零した。





神の忠告を上回る信頼を得てしまえば、多少の粗は誤魔化せる。

何ならベルと周囲の分断をするのもいいかもしれない。

そうしてベルから選択肢を削いでいき、最終的にリリの思う通りの道を提示するのだ。

ベルはそれを自分が考えて選んだものと錯覚し、自らこちらの思惑に乗ってくれるだろう。

(前回の探索でベル様はかなりリリに気を許している。今回で更に距離を縮めるのは難しいことではないはず)

正直に言えばもつと早くにベルの信頼を得るのは達成できるとすら思っていた。

それほどまでに少年は無防備だ。

今もリリを信頼しかけているのに慎重なのは、よほど周りからの教育が良かったのか。

人の人に向ける感情はほぼ第一印象で決まるといふ。

そう考えるとベルとの出会いは幸運だった。

リリが捨て駒にされたところを見ているおかげで、ベルの中でリリ＝弱者の構図が無意識のうちに出来上がっているのだろう。

その同情を利用すればベルはリリに疑心を抱きにくくなるはずだ。

「今日はじっくりと潜りたいですね！実を言うともう持ち合わせがないんです」「ええ!?や、やつぱり昨日の分もちやんと払うよ……」

「いいえ。サポーターに二言はありません。条件を簡単にひるがえに翻すサポーターなんて誰も相手にしなくなります。リリのためにもベル様を持つていてください」

そう言うのとベルの眉が困ったように垂れ下がった。

分かりやすい人だ。こちらに引け目を感じている。

人間は自分のために損をしてくれる人を嫌いにはなりにくい。今、自分が困窮してもベルのために、ベルの得になる行動を取ったりリリの印象はきつと良いものはずだ。

こうした小さなことを積み重ねればいい。

その積み重ねの分、ベルが心を開くのも早くなる。

ダンジョン上層はもはや己の庭のようなもの。

どのルートが効率的か、どこに気を付ければいいのかと言う、初心者が欲する情報はいくらでもある。

(今日の探索でリリのサポーターとしての腕をアピールして、後はベル様の自尊心を満たす発言をすれば十分でしょう。)

多少障害物が増えたからなんだというのか。

リリのこれまで相手にしてきた冒険者様方の悪辣さに比べたら、ベルなど葱ネギを背負つ



魔石袋はそこまでして用意しなければならぬ物でもない。ソロならばともかく、サポーターを雇っているならばあれば便利程度の物なのだ。

だからわざわざ手間をかける必要はない。

そう伝えようとベルの後を追うリリだったが……

「あれ？ベル様？」

通路の曲がり角でベルを見失ってしまった。

影も形もない、とはこのことだ。

少年の足の速さは昨日理解していたつもりだったが、ここまでとは。

（仕方ありません。少し待ちましょう）

あのベルならば、常識外れな時間をかけてまでリリを待たせたりはしないだろう。

5階層のモンスター程度ならサポーターであるリリでも負けることは無い。

降ってわいた休憩時間と思うことにした。

（ずっとソロだったとはいえ、リリがいるのに袋を取りに行くと言った失敗……上手く利用できませんかね？ベル様も失敗にはすぐに気が付くはず。そこにリリが失敗をうけ）

「のわあああ!!痛っ!!」

「わっ!?!べ、ベル様!?!何で!?!」

悪巧みをしている最中に突然背後にドスンと物が落ちる音。

何事かと振り返れば何故かベルが悶絶して倒れていた。

「つゝゝゝ!! あ、あれえ? 使い方間違った?」

混乱している様子のベルだが、リリの方が驚いた。

ベルがいらないと思いついでいて、悪巧み中の不意打ちだったので心臓がバクバクいつている。

なんで先に行つたはずのベルがリリの背後に落ちてきているのだ。

上層に穴でも開いたのかとも思つたが、見る限りそんなものは見当たらない。

というかそんなものがあつたら大問題だ。ダンジョンの難易度再調整レベルである。

「ベベベベル様? ど、どうして上から落ちてきてるんですか?」

動揺のあまり、従順なサポーターの仮面が剥がれかけてしまつていることをリリは自覚する。

ひよつとして何かに勘づいて、蜘蛛がごとくダンジョンの天井に張り付いていたのだろうか。などと馬鹿げた妄想をしてしまう。

「あつ、えくと。あはは……」

そんなリリを見てベルはどう説明しようかと迷つた後、誤魔化すように曖昧に笑つた。

(誤魔化されてなるものですか！)

その態度にムツと来たリリは追及を強めようとした瞬間、ベルは脱兎のように逃げ出す。

「ごめんリリ!!今度こそちゃんとするからあああああ!?!」

「今度こそつて何ですか!?!ちゃんと説明してくださいあああ!!」

流石と言うべきか、あつという間に見えなくなるベル。

何やら身の丈ほどの木の板を抱えながら走っているにも関わらず、とんでもない速度だ。

(つて、なんで木の板を抱えているんですか……)

というかあれは木製品のドアだろうか。

ツツコミどころが次から次へと出てくる。

完全にペースを崩されたりリリは息を切らしながら、思考が落ち着くのを待った。危なかった。

不意を突かれたとはいえ、素の態度になってしまった気がする。

後でベルに不審に思われなければいいが……

その時、通路の向こうから音が聞こえてきた。

誰かが走る音とジャブジャブという水の音。

その音を聞いた途端、猛烈に嫌な予感がリリの中に駆け巡る。

「……その、ごめんね？」

「今度は何をしたんですかあああ!!」

やはり足音はベルの物だった。

そして彼を追うモンスターに卒倒しそうになる。

レイダーフィッシュ

ダンジョン下層『水の都』に生息する魚型モンスター。

水生のこの怪物は世界各地に存在し、度々下界を騒がせている。

そう、水生なのだ。

今リリたちがいるのはダンジョン5階層。土の壁に囲まれた簡素な迷宮。

魚が泳ぐための水などどこにもない。

しかしレイダーフィッシュは泳いでいた。

地面から背びれを覗かせ、スイスイと土の中を泳いでいるのである。

「……嘘お」

リリの中の常識が崩壊していく音が聞こえた。

ひよつとしてこれは夢なのでは？と現実逃避しそうになるが、地面から飛び出したレ

イダーフィッシュの顎あごがそれを許さない。



「くっ！」

黒いナイフでそれを弾くベル。

ベルはリリを己の背後に庇うとダブルナイフを構え、応戦の体勢になった。

水しぶき（土しぶき？）を上げて襲い掛かるレイダーフィッシュの群れを何とか捌き続ける。

（レベルーのベル様が対応できているという事は、このレイダーフィッシュたちはダンジョンの外で劣化したモンスターということでしょうか？）

そんな存在がどうしてここにいるのかは気になるが、今考えなくてもいいだろう。ついでにどう見ても魚じゃない奴も飛び跳ねているがそれも無視だ。

どうせベルが答えを知っているのだから。

後で絶対に問い詰めると誓いながら、リリはサポーターとして頭をフル回転させる。

ベルが攻勢に移れないのはレイダーフィッシュの動きが見えないからだ。

レイダーフィッシュはどういうわけか地面を移動している。そのせいで泳ぐ姿が地面で隠されて、ベルはレイダーフィッシュが飛び出す瞬間にようやく動きを知覚できる。これでは後手に回るのも無理はない。

「ベル様!! 発光瓶フラッシュ・ボトルを使います!! 目と耳を塞いでください!!」

「分かった!」

ベルの返答を確認すると、リリは手首に巻き付けていたアイテムの紐を引っ張った。ベルに教えてもらった時、なんて優秀なアイテムだと思ったものだが、早速頼りになる場面が来たようだ。

地面を泳ぐレイダーフィッシュに光は届かない。

しかし、発光瓶フラッシュボトルの破裂音は別だ。

レイダーフィッシュの周りの土が水しぶきのように飛んでいるのを見たりりは、何故かは分からないがレイダーフィッシュの周りの土が液化化していると結論付けた。

液体は音をよく通す。

小人族バルムの目の良さを活かし、レイダーフィッシュの背びれの動きを予想したりりは、紐を引っ張ったばかりのアイテムをその背びれに向かって投擲する。

背びれ辺りの液化化した地面に落ちたアイテムは、そのまま地面に潜り込む。

ボンツ、と破裂音が響くと同時にモンスターたちが一斉に浮かび上がった。

水の中の通り過ぎる爆音は生き物を失神させる。

リリの予想通りモンスターを無力化することに成功したのだ。したのだが……

「あの、ベル様？」

「……なんででしょうか」

「なんでゴリラもいるのですか？」

プカリと浮かぶレイダーフィッシュたちに紛れている森の賢者。  
そう、ゴリラである。

断つておくがシルバーバックというモンスターではない。真正正銘、ゴリラだ。

「ええーと、何ていえばいいか、これも一応レイダーフィッシュと言うか……」

「こんな4足歩行の魚がいますか！何やつたんですか！モンスターがダンジョンを泳いでいるのは分かりますよ?!いえ、正直意味不明ですが、それでもギリギリ納得できます！でもダンジョン全く関係ないゴリラまで泳いでいるのはどういうことですかあああ  
!!!!」

「ご、ごめんなさあああああいい!」

その後、怒涛の勢いで質問するリリだったがベルは逃走。

結局、謎の疲労感を抱えて、リリは安宿に帰還したのだった。

……こんな滅茶苦茶な冒険でも換金した魔石の額は良かったことが何となく腹立たしい。

ひよつとしてリリはとんでもない問題児に目をつけてしまったのではないかと、ベッドの中で一人考える夜を過ごす少女であった。

## あいすぶれーく

薄暗い道に二組の足音が響く。

かつて頓挫した都市計画の名残である地下水路。

そんな場所を歩くなんて滅多にない経験だろう。

リリは前を歩くベルの背を追いながらキョロキョロと物珍しげに辺りを見渡した。

(こうしていると年相応の女の子みたい……っていうのは失礼かな)

出会ってからまだ数日しか経っていないが、今のリリが見せている表情は珍しいものなんだろうなと感じる。

何時もは大人びている少女の浮かべる無邪気な笑みに少年も頬を緩めた。

「それで『地下水路に響く謎の声を暴け』でしたか？ベル様は目星をつけているのですか？」

「それがさっぱりでさ。風の反響なんじゃないかと思っていたけど、怪物祭モンスターフライアであんなことがあったわけだし、もしかしたららって思っちゃうよね」

「こんなことでレクリエーションをしようなんてベル様の神様は変わっていますね。」

「あはは……」

恐らくヘステイア的にはリリの見極めはついでで、主目的は探検したいだけなのだろう。

この日のためのしおりをわざわざ作っている辺り、ヘステイアも娯楽好きで神の柱なのだとベルは感じた。

一般人にとってみれば下水道など精々工事中にチラリとみる程度の物だ。

中に入る機会など、そう言った仕事をしていない限りほとんどない。

だからこそ、稀有な経験を得てオラリオの地下水路に足を踏み入れた者は、想像するような汚水の臭いがほとんどないことに驚く。

地上に比べれば違和感はあるかもしれないが、オラリオが誇る魔石製品の一つである浄化柱によって、下水道とは思えないほど衛生は保たれていた。

それでもなければベルたちは地下水路にはとても住めなかつただろう。

「しかしこのダンジョンのような雰囲気……まるでダイダロス通りですね」

「ダイダロスは都市計画に深く関わっていたらしいし、影響を受けているのかもね」  
奥から聞こえてくる水流の音にかき消されないよう、ベルとリリは普段より大きな声になる。

「ここに引越したばかりの時は音がうるさくてなかなか寝付けなかつたものだ。

「そろそろ着くよ」

「ベル様はよく迷いませんねえ……」

「毎日のように行き来しているからね。最初の頃は迷って大変だったよ」  
特に引越し初日が大変だった。

地図を渡されても複雑に入り乱れた構造のせいで、自分たちの現在位置が分からなくなり、半泣きで地下水路を彷徨ったのである。時々襲ってくるレイダーフィッシュから逃げ惑いながら。

……本当に、あの時の僕を見捨てなかった神様には感謝しかない。

「先日ベル様がレイダーフィッシュの群れに襲われた時、あんなに的確に対処していたのは普段からこのレイダーフィッシュを相手にしていたからですか」

「うん。……このレイダーフィッシュは土の中は泳がないけどね」

「本当に何をしたんですかベル様」

リリのジト目がベルに刺さる。

それを曖昧に誤魔化しながら、「ヘスティア・ファミリア」のホームに向かう。

ホームと言っても簡素な扉があるだけだが。

その前で仁王立ちして待ち構える幼女。

「待っていたぞ！サポーター君！」

『リリルカ・アーデ君 大☆歓☆迎!!』と書かれた大きな紙が、扉の上で強烈に自己主

張している中、応援団のように声を張り上げるヘスティア。

(それ止めてくださいって言ったのに……)

リリを迎えに行く前に恥ずかしいからにはがしておいたはずなのに、復活している用紙にベルは顔が赤くなっていることを自覚する。

明らかにヘスティアの身長より高い位置にあることが、ヘスティアの気合の入れようを物語っていた。きっと脚立を持ち出してギリギリまで準備をしていたに違いない。

リボンでゴツテゴテにデコレーションしてあることと言いい、神特有の行動力の高さは恐ろしい。

「神様!? 恥ずかしいからやめてくださいって言いましたよね!? リリが呆気に取られているんですけど!!?」

「いいや、ベル君!! こういうのは最初が肝心なんだ!! 舐められたらお終いだぞ!」

「どこのマフィアですか!」

「【ファミリア】なんて大体そんなもんだ!」

とんでもない爆弾発言がヘスティアから飛び出す。

確かに【ファミリア】には神々の代理戦争的な側面と言う物騒な所もあるが、それと言ったらダメだろうに。

ポカーンと言った表情をしているリリの次の反応が怖い。





「やるべきこと?」

「自己紹介でしょうか?」

ベルとリリは困惑したように声を上げる。

「サポーター君は惜しいね。正解はアイスブレイクだ!」

「アイス……なんですか?」

「ア・イ・ス・ブ・レ・イ・ク!何かを始める前に、メンバー同士で交流することさ!僕とサポーター君は初対面だし、まずは緊張をほぐすことから始めよう」

ヘステイアの言葉になるほどとベルは頷く。

このままレクリエーションをしてもぎこちない進行になりそうだとは思っていたし、場を温めることも必要かもしれない。

(場を温める。だからアイスブレイクなのかな?)

これからは共にダンジョンに潜る仲間になるのだし、仲良くなつて損することもないだろう。

心の氷を打ち砕く。確かに必要なことだ。

こういうことに気が回らないのもまだまだだな、とベルは反省する。

「ベル君の持つアイテムの紹介ついでにちよつとしたゲームをしようか」

「ゲーム?」

「うん。この【雪製造機】を使ってね！」

ホームを出る前に出したひみつ道具をドーンと出すヘスティア。

探索には使えないから置いていこうとベルは思っていたのだが、こういった使い方があつたのかと感心する。

戦闘だけがひみつ道具の使い道ではない。もっと頭を柔軟に働かせるべきなのだろう。

「さつきあそこに雪を用意したんだ。この雪を使ってそれぞれ絵をかいてみよう。」

「せっかく雪を用意したんですから雪合戦とかにはしないんですか？」

「ふつ、そしたら怪我をしてしまうぜ。……ボクが」

下界において神々の身体能力は一般人以下。

ファルナ 恩恵を授かっているベルたちとスポーツなどすれば、一方的にボコられるのが目に見える。

タケミカヅチのような武神ならともかく、グータラ引き籠り女神なヘスティアには荷が重い。

「……」

「あれ？リリ？」

そこで、余りにも反応がないリリを心配して、ベルが声をかけた。

リリはギギギ……ときこちなくベルを見る。

「ベル様。なんですかコレ」

「雪製造機だけど?」

「雪製造機だけど?じゃないですよー!!」

あたり一面に広がる雪景色。

何かの間違いじゃないかと言うほど現実味の薄い光景に停止していた思考が再起動を果たす。

「明らかに性能おかしいですよね?なんでそんなマジックアイテムをベル様が持つているんですか!?!」

「えーと、実はある知り合いに貸してもらっていて……」

先にハスティアと考えていた言い訳を出す。

正直苦しすぎる言い訳だが、ベルのスキルによるものとはリリも思わないだろう。

「これ、しかるべきところに売り払えば一財産築けますよ」

「貸してもらったアイテム一日しか使わせてもらえないから……もらえるアイテムも日替わりだし」

「どんな条件ですか……」

やはり納得していない様子だ。

ブツブツと文句を言っていたリリだったが、ふと、あることに気が付く。

「待ってください。もしかしてこの前の怪奇現象って……」

「ごめんね」

「ああああ!! やっぱり!! 何がどうなったらあんなことになるんですか!」

やはりと言うか、当然と言うべきか気付かれた。

前日にあんなことがあったのだから仕方ないが。

「えっと、まず魔石の袋を忘れちゃったから【どこだかドア】でホームに取りに戻ろうとしましたけど……」

「戻ろうとしたって……え? ひよつとして瞬間移動していたんですか?」

「うん。ドラえもんさん……僕にひみつ道具を貸してくれている人(?)に効果は聞いていたんだけど、上手く使えなくて」

もしかしたらドラえもんさんが言っていたのは別の道具だったのかもしれない。

最初に名前を見た時にあれ? こんな名前だったけ? ってなったし。

「1回目はリリの真上で、2回目はこの地下水路に繋がっちゃったんだ」

「レイダーフィッシュはこのモンスターでしたか……」

「うん、汚水ごと流れてきて襲い掛かってきたから、咄嗟に手に持っていた【ドンブラ粉】と【動物ライト】を投げつけたら……」

「ダンジョンの地面を泳ぎだしたと」

タネが分かればくだらない失敗談だが、あの時のリリからすればホラー体験のようなものだ。

帰る時も泳ぐレイダーフィッシュとゴリラが出てこないかびくついていたというのに。

「アイテムの名前に考えて、レイダーフィッシュがどこでも泳いでいたのがドンブラ粉、あのゴリラは動物ライトとやらの仕事ですか？」

「投げつけたライトをレイダーフィッシュが噛んだら誤作動して……何匹かゴリラになった」

「ひどい真相ですね」

まだ何もしていないのに体が怠い。

そんなリリにヘスティアはニコニコと話しかける。

「……いやー、傍から聞いている分には面白いね」

「巻き込まれると全然面白くないですけどね」

「分かる」

「か、神様！ 絵って何を描くんですか？」

アイスブレイクまだしていないにも関わらず、打ち解け始めているリリとヘスティア



大したことの無い話題でも穏やかな表情で、時には笑い声すら含む二人の会話を静かにリリは聞いていた。

「……」

「リリの絵は凄いな。幹も地面も塗りつぶされていて」

「……え？そ、そうですか？」

「僕なんて適当に線を引いただけだし、ちゃんと塗っておこうかな？」

「おっと、パクリは厳禁だぜ」

そんなことをする奴はおしおきだー、と言って枝でベルをつつくヘステイア。ベルも口ではやめてくださいいよーと言っているが、本心ではこのじゃれあいを楽しんでいるようだ。

「でもリリは枝とか葉っぱは描かないの？」

「ええ、形だけしつかりしていれば木に見えます」

しかしこのままでは見た目が寂しいのも事実。

適当に草もはやしておく。

「あんまり適当にしないようにねー。後でボク的に最下位だった人には今日一日このマントを着けて貰うよ」

「ちよっ、神様それって」

「使い方が分からなかったひみつ道具」

「厄ネタじゃないですか!」

既にひみつ道具の厄介さは身に染みているリリは冷や汗を垂らした。

(しまった、適当にし過ぎた)

これでは罰ゲームは確実だ。

チラリと對抗馬ベルの絵を見してみる。

ベルの絵はよく言えばまとまっている。悪く言えば無難な木だった。

(微妙、ですね。神様的には尖ったデザインのリリの方が受けはいいかもしれません)

「はいしゅーりよー」

「直前であんなこと言うなんてひどいですよ神様」

「いやーびつくりする君たちの顔は面白かったぜ」

あははと笑うヘスティアに脱力しながら同じように笑うベル。

そこには新興で最小単位の家族ファミリーの姿があった。

リリの知る者とは違う。神おやと眷属この温かな絆の形。

(……ここが、ベル様ホムの家)

すぐ傍にいるはずの二人が何故か遠く感じられて、リリはその光景から目を逸らした。



自分が情けなくて、リリはすぐに従順で物わかりの良いサポーターの仮面をつける。  
そんな彼女をヘステイアは何も言わずに見ていた。  
少女の心を覆う氷はまだ砕けない。

ちなみに最下位はベルだった。  
ヘステイア曰く無難すぎて面白くなかったかららしい。

## 地下水路探検隊

地下水路と言つても、暗くて全く見えないと言うワケではない。

通路には年季の入った魔石灯が存在し、薄つすらとベルたちを照らす。

時折、光が途切れ途切れになっていたり、弱まっているような年季の入ったものも混じっているが、そのおかげで探検ごっこもあまり苦勞しない。

だから今、ベルが憔悴しやうすいしているのは探検の疲れが原因ではないのだ。

安物の魔石灯を片手に死んだ目で歩いているのには違う理由がある。

「あはは!! 似合つてる、似合つてるよベル君」

ヘステイア  
元凶の笑い声が聞こえる。

心の底から敬愛している神様ではあるが、今だけはその声が憎い。

ヘステイアに振り回されることが決定した日から、ある程度の心的ダメージは覚悟していたが、これはひどくないだろうか。

アイスブレイクで突如明かされた罰ゲームの存在。

時間終了間際の衝撃発言に対応する間もなく、ベルは無難すぎる絵を完成させてしま

当然、面白いことが大好きなヘステティアにそんな中途半端な絵が評価されることなく、ベルは罰ゲームを甘んじることになってしまったのである。

「これが似合ってるって誉め言葉じゃないですよ!？」

罰ゲームの内容は、使い方が分からなかったひみつ道具を身に着けること。

この時点で地雷臭がすごい。

なにせ、どんな効果があるのか分からないのだ。

ヘステティアは「大丈夫、大丈夫、勘だけど」と言っていたが、正直気が気でない。

どんな事故が起こるのか分かったものではないではないか。

ここまですりもなかなかに酷い罰だと分かるだろう。

しかし、ベルの精神をガリガリ削っているのはそのことではない。

いや、それも無いことは無いが。ぶつちやけ気が付いたら素っ裸くらいは覚悟している。  
る。

そんな『たられば』よりも現在進行形でベルを苛んでいるモノ。

それは……

「玩具オモチャじゃないですかこれ!？」

羞恥心である。

現在のベルは主神命令によってマントを身に着けている。背中にひらひらと。

これが上質な装備ならちよつと格好つけているですんだが、このひみつ道具は何と言  
うか安っぽい。子供のごっこ遊びで使われてる布のような、見るからに大量生産しまし  
たと主張しているチープさである。

絶対に知り合いには見られたくない。

「だ、大丈夫ですよベル様。似合ってます似合ってます。……ふふっ」

「氣遣いが口から洩れていつているよ、リリ……」

罰ゲームを逃れたリリは呑気にこの状況を楽しんでいるようだ。

非常に上機嫌な少女の笑みがベルを見上げている。

この様子ではアイスブレイクは大成功だったようだ。

リリとヘスティアの距離は縮まったと言える。ベルの心に甚大なダメージを残して。

「……それで？どこを調べるか見当はついてるんですか？」

少し不機嫌になりながらヘスティアに今後の予定を聞くベル。

オラリオ全域に広がる地下水路を一つ々風潰しらみつぶしにしていたら、どれだけ時間がかかるか

分かったものではない。

言い出しつぺのヘスティアはどのあたりを探索するか考えているのか、それをまずは

確認する。

「もちろんある程度絞り込んではいけるよ。」

ヘステイアはベルのマントを弄りながらそれに答える。  
歩きながら何かをするのは危ないのだから止めてほしい。

「何度も声は聞いているから大体の方向は割り出せだし、ちようどその方向に気になるものがあつたから、そこを調べていこうか」

「気になるもの？」

「ほら、覚えてないかい？前にここで迷つたときに見た鉄の扉だよ」

前に迷つた時と言うとビッグライトで教会が壊れて、その日のうちに引越すことになったあの日だろうか。

確かに迷っている最中に鉄の門があつたのは覚えている。

「今まであんな鉄の扉は他で見たことなかったし、何かあるんじゃないかと思つてね」

ちようどいい機会だし、そこを探検してみよう！と思つたらしい。

一応モンスターがいる場所なのだから、そんなピクニック気分で来るのはどうなのだろうか。

レイダーフィッシュは大した強さではなくても、地上での神の身体は人間以上に脆い  
のだから、攻撃を受ければ危険なことに変わりはないのだ。

「結構、大雑把な理由ですね……」

「元々行つてみたかつた場所だからね。収穫はなくても構わないさ」

古ぼけた下水道の中にポツンとある分厚い扉。

なるほど、確かに中は気になるだろう。

機会が巡ってくれば、娯楽好きのヘスティアが飛びついたのも頷ける。

「ボクだつて冒険はしてみたいんだよ。こんなチャンスは見遇ごせないさ」

「……モノ好きですねぇ」

呆れたようにリリは首を振った。

ヘスティアの樂觀的過ぎる考えは、リリには理解できないものなのだろう。

「もちろん。こんなことを言い出したのは遊びのためだけじゃないさ。君を見定めるという意味もある」

「！」

「そう……君がベル君を誑かす泥棒猫じゃないかをね！」

「……はあ？」

（何言ってるんですか神様？）

クワツ、と。目を見開いて訳の分からないことを言い出すヘスティアに、再び警戒を強めようとしていたリリは困惑し、ベルは内心絶叫した。

本当に神々は時折妙なことを言い出す。

「えつと……ヘスティア様？リリとベル様はあくまでも契約関係でして、ヘスティア様

が思っているような感情は……」

「ああそうだろうね！今は！！」

てつきりサポーターとして信頼に足る人物かどうかを見極めるために、わざわざ呼んだと思っていたのだが、予想外の理由に調子が狂うりり。

ベルとりりの間に恋愛感情などないと弁明するが、ヘステイアはそんな弁明など気にも留めずに続ける。

「分かつてるんだからな！そういう風に言っている奴に限って、きつかけがあればコロッと転んじゃうんだ！おのれ、あざとい事を……っ！ベル君はボクんだからなあああああ！！！！」

（あ、これ聞く気ありませんね）

がおー、と全く怖くない威嚇をするヘステイアにりりの目が遠くなる。

こういった手合いは自分の中に答えがあるので、言い訳など求めない。

りりは聞き手に徹するしかないのだ。

ヘステイアの暴走を前で聞かされているベルの耳はもう真っ赤だ。

今回ばかりはご愁傷様です。とりりは密かにベルに同情した。

仲間の前でこれは恥ずかしい。

（しかし、ずいぶんと愛されているのですね。上手く話を合わせればこの神様の警戒を

下げれるかも……)

ベルの愛されっぷりにリリは内心苛立ちを感じたが、それを隠して笑顔でヘステイアの話に同調して見せる。

恋愛感情こそ持っていないがベルに好意的なサポーターを装うのだ。よそお

そうすることでベルとヘステイアのリリに対する印象を操作できる。

「ベル君はなあ!! いい子なんだ! いい子過ぎて、危ないことにいつも巻き込まれるから心配なんだよ!」

「ええ、分かります。ベル様は本当にお優しいです。リリもベル様なら信じられると思っただけ声をかけたんですよ」

「お金がないのにリボンを作ってプレゼントしてくれたり、ボクみたいな駄女神にはもつたない子なんだ!!」

「いい人なんです。羨ましいですよ」

突然始まったヘステイアとリリによる褒め殺しに、ベルの顔はいよいよ茹蛸ゆでだこのようになる。

そんなベルを見てリリは己の企てが成功したと確信した。

「実を言うとリリにはファミリアでの地位が低くて、お金もなくて。だから近づきやすいベル様に目を付けたわけでして……」



だがここで油断はしない。

ヘステイアは神だ。下界の住民の嘘など簡単に見破る。

どうしても取れる言葉で相手を勘違いさせつつ、こちらの本音は悟らせないように振舞わなければならない。

「君も大変だったんだな〜」

ヘステイアはあつさりと同情した様子を見せる。

ベルと言ひ、随分とお人好しなファミリアたちだ。

大丈夫ですよ。貴女の眷属にこの鬱憤は晴らさせてもらいますから。

心の中で呟きながら、リリは非対称な笑みを見せる。

「か、神様もリリももうその辺にしてください……」

消え入りそうな声で二人の会話を止めるベル。

もうマントをそのまま頭に被ってしまいそうだ。

「……照れてるベル君も可愛いね」

「神様あ……」

ヘステイアの追い打ちにベルはいよいよ目線をこちらに合わせない。

「さて、そろそろ着く頃だね。ベル君はサポーター君に用意しておいた簡易的な地図を渡しておいてくれ」

「よくこんなもの用意できましたね？」

「ん？前にヘファイストスに頼んでもらっていたんだ。ここに引越せばかりだった時に」

ヘファイストスは「絶対にアンタは迷うから、暫くは肌身離さず持つていなさい」と言っていた。

子供じやあるまいし、迷ったりしないぜ。と行ってホームに置いてきた日にバイトの帰り道が分からなくなり、遭難しているヘステイアをベルが大慌てで探すという事があり、今は言いつけ通りに地図を持ち歩いている。

「……この地図は貰っても構わないでしょうか？」

「どうして？」

「この先、ベル様のホームに向かう時に迷わずに済みますから」

「ああ、それなら……」

「ごめんねサポーター君。これ、一応部外秘らしくてさ。勝手に渡すとヘファイストスに紐を絞められる」

ヘステイアがリリの申し出を断ると、リリは素直に引き下がった。

どこか、リリが不機嫌になったように見えたベルだったがそのことに思考を向ける前に、水をかき分ける音が聞こえる。レイダーフィッシュだ。

「つモンスターです！神様は下がってください!!」

モンスターによる襲撃だと理解したベルは、ヘステイア・ナイフを構えた。

数は二匹。今のベルならば十分に対応できる。

魚型のモンスターが牙をぎらつかせながら同時に飛び掛かる。

狙いは最前列のベル。

こういう時、憧憬ならどう対応するのか。

「ふっ!!」

あの日見たアイズ・ヴァレンシユタインの動きを参考に、レイダーフィツシュを迎撃する。

まず一匹、確実に魔石を砕く。

そして残る一匹を返す刃で切り裂いた。

(浅いっ！)

二匹目のレイダーフィツシュも完全に倒すつもりで放った斬撃は、モンスターを派手に切り裂いたが、魔石は傷一つついていない。

狙いを外した。レイダーフィツシュはまだ絶命していない。

モンスターの持つ人間への敵意がなせる業か、瀕死の状態でありながらもベルに噛みつきこうとするレイダーフィツシュ。

それに対してベルはあらかじめ用意しておいた3撃目を繰り出した。

レイダーフィツシユの眼前を赤いマントが覆う。

極彩色のモンスターとの戦いで得た教訓。

それは、モンスターとの戦いでは、決してベルの都合のいいように流れないという事だ。

相手が自分の知らない牙を隠していたり、戦闘の最中に新たな脅威が現れたり、些細なアクシデントでこちらの攻撃が阻止されることもあるだろう。

そんな時、必要なのは次の動作に移るための素早さだ。

第一級冒険者ともなれば反射的にそれが出来るのかもしれないが、ベルには無理だろう。

想定外のことと起きるとパニックになってしまうのは、ミノタウロスの時に分かった。

だからベルはあらかじめ第二、第三の手を用意しておかなければならない。

口で言うのは簡単だが、実際にやるのは難しい。だから、この地下水路の弱いモンスターたちは格好の練習相手なのである。

今回用意したのはマントによる弾き飛ばしだ。

布ではモンスターを絶命させられないだろうが、一時のしのぎにはなる。

面積の大きさから目標を外してしまうということもないだろう。中々いい考えではないかとベルは自画自賛する。

レイダーフィッシュはマントに触れ、ベルの思惑通りに弾き飛ばされた。

……ベルの想像していた以上の勢いで。

ベルに突っ込んだレイダーフィッシュはマントに触れた途端、逆方向に吹き飛んでいったのである。

ナイフで裂かれた傷から血を流しながら、レイダーフィッシュは暗闇に消えていった。

「え?」

「は?」

「あれ?」

ヘステイアもリリも現実味の薄い今の光景に目が点になる。

最も混乱しているのはベルだろう。

マントで払ったというのは何の感触もなかったのだ。

「……レイダーフィッシュってあんなに軽いのか?」

「比較的軽量ですけど、アレはあり得ないです。後ろから糸で思いつきり引つ張られたみたいな勢いでしたよ」

ベル自身もそんなわけないだろうと思つた呟きにリリが答える。

まだ突然起きた現象を整理しきれしていないようだが、その原因は分かっているようだ。

「ベル様、ひみつ道具を使うなら最初に言つてください」

「い、いや。こんな効果だとは思わなくて」

「なんで説明なしにアイテムを渡されているんですか！あれ下手したらさつきまでマン  
トで遊んでいたヘステイア様があなつていましたよね!？」

リリの指摘にヘステイアは慌ててベルから距離を取る。

反射的にそういう行動を取ってしまうのは分かるが、ベルの心が少し傷ついた。

「【ひらりマント】のひらりつてこういう意味だったんですね……」

「ひらりとしたら相手が吹っ飛ぶマントだったのか」

「分かる様で絶妙に分からない名前ですね」

ひらひらしているだけの外れひみつ道具だと思っていたら、とんでもないアイテム  
だ。

防御で言つたら名刀電光丸以上ではないだろうか。

「リリ使う？」

「い、いいです。何かの拍子に自分が吹き飛ばされそうですし」

「神様？」

「ボクもいいかなーって。渡されたときにひらりされそう」

すごい道具だけど誰も触りたがらない。

そんなひみつ道具を背中につけていたベルは冷や汗が止まらなかつた。

すぐにでも外したいが、外すときに何が起こるか分かつたものではない。

その時、風切り音と共にベルの後ろの壁が爆ぜた。

「……どこのどいつだ？ 血塗れの魚なんぞ投げつけてきた馬鹿は……アア？」

聞き覚えのある声に全身が固まってしまふ。

コツコツと複数人の足音が近づいてくる。

(どうして、この人たちが……っ!?)

牙を模した刺青が特徴的な狼<sup>ウエアウルフ</sup>人。

髭を蓄え、全身を鎧で包む土人<sup>ドワーフ</sup>の老戦士。

紅い髪を持つ、中性的な細目の神。

そして、見覚えのある山吹色の髪<sup>エルフ</sup>の妖精。

「【ロキ・ファミリア】……っ」

リリの驚愕した声が地下水路に響く。

ダンジョン攻略の最前線を張るSランクファミリア。

こんな下水道には似つかわしくくない、世界中に名を轟かせる巨大派閥の幹部たちがそこにいた。



## 不協和音

地下水路で偶然鉢合わせたベルたちと「ロキ・ファミリア」。

双方の主神は早速、恒例の喧嘩を始めていた。

「なんでドチビがここにおんねん」

「それはこつちのセリフだ!!こんな眷属<sup>こども</sup>たちをぞろぞろ引き連れて何のつもりだ!まさか……ここに住むボクを笑いに来たのか!」

「アホウ。そんだけのためになんな薄暗いところに来るわけないやろ」

額がくつつきそうなほどに顔を近づける両者は険悪な空気を隠さない。

以前のからの知り合いなのだろうかと困惑する眷属を置き去りに、喧嘩はヒートアップしていった。

「ジャガ丸くんの屋台をぶつ壊した次は自分のホームか?まじで貧乏神やん、ドチビ」

「うるさいやい!そもそもどうやってここまで来たんだ!ここは関係者以外立ち入り禁

止だぞー!」

イヴィルス

「闇派閥のクソ共の調査や。オラリオの情勢考えればすぐ分かるやろ。脳に行く栄養全

部胸にいつてるんか」

「どうやって入ったかに答えて無いぞ！さては不法侵入だな!? 調査はギルドの仕事だろ  
う!! 胸だけじゃなく常識もないのか君は!?!」

「あ、あ、ん?! 闇派閥イヴイルスの容疑者としてしよっぴくぞコラ」

「上等だ裁判で賠償金巻き上げてやるぞコラ」

一体いつ息継ぎをしているのだろうかと心配になるほどにポンポン出てくる罵倒。

「ロキ！いくらなんでも失礼です！」

「神様！急にどうしたんですか!?!」

レフィーヤとベルがそれぞれ己の主神を引き剥がす。

確かに「ファミリア」の主神同士、牽制しあうくらいがちょうどいいのかもしれないが、これはいくら何でもやりすぎだろう。

（神様ってアイズ・ヴァレンシユタインさんの主神様とこんなに仲悪かったんだ……）

ファミリア 眷属にとって主神は絶対的なものだ。

故に神の我儘で苦勞する眷属は多いという。

ファルナ 恩恵という強力な加護を得られるにもかかわらず、ファミリアに入団しようとし  
ない人が多い理由の一つは、こうしたトランスメーカー 神々たちの起こす騒ぎに大半の人は巻き込まれたく  
ないからだ。

【ファミリア】の主神の意向は、時に人間の色恋すら捻じ曲げる。

愛し合う二人がそれぞれ対立する「ファミリア」の団員であるために結ばれない。そんな悲恋は神々が降りてきた時代から変わらずある創作の題材だ。

ヘステイアとロキの仲が悪いという事は、その眷属であるベルとアイズも良好な関わりが持ちにくいという事。

これでは憧憬と恋人になることなど不可能。

それどころか、もしアイズがロキの熱心な信者ならば、ヘステイアと一緒に敵視されかねない。

未だにお互いを威嚇しあう女神たち。

ベルとレフィーヤの懸命の説得により、なんとかその場は収まった。

「あーまじ最悪や。なんでこんな辛気臭いところでドチビと会わないかんねん」

「じゃあ帰ればいいだろ」

未だにブツブツと文句は言っているが。

「止めてくださいロキ。彼は私の命の恩人なんですから」

「……つち」

「【ロキ・ファミリア】の皆さんにはミノタウロスの時に助けていただいたんです。あま  
り、悪く言うのは……」

「……分かったよ」

ベルもレフィーヤもお互いに悪く思っているわけではない。

いや、レフィーヤは前のアイズを前にしたベルの反応はむむむ……となっている気がするが、彼が良いヒューマンなのだろうという事は分かっている。

(会ったらちゃんとお礼を言いたかったのに……)

主神二人が大喧嘩した後では中々言いづらいものだ。

レフィーヤは闇派閥との戦闘の後、ずっと探していた少年を見つけ出したというのに暗い気持ちだった。

そしてベルは別の意味で居心地が悪い。

ヘスティアとロキの喧嘩も見ていてあまり気持ちのいいものではなかったが、それ以上に対応に困る人物がここにはいたのである。

「……何か用か」

「い、いえ……」

「……………」

先頭を歩く狼ウエアウルフ人である。

数週間前に「豊穡の女主人」でベルのことを嘲った第一級冒険者。名はベート・ロー

ガ。

ヴァナルガンド

【凶狼】の二つ名はオラリオに来たばかりのベルでも知っている。

敵を食いちぎるかの如く屠ることからその二つ名をつけられた彼は、ベルとは比べ物にならない本物の冒険者。

そんな相手だ。緊張して仕方がない。

先の一件で、ベルに友好的な人間ではないと分かっているからこそ尚更だ。

一方でベートも表情にこそ出さないが、内心戸惑いを感じていた。

ダンジョンで無様を晒した雑魚。それがベートの知る少年だ。

だが、レフィーヤの語る少年はその記憶とはかけ離れている。

ミノタウロスどころではない。ベートたちですら手を焼く極彩色のモンスターに立ち向かったと言うではないか。

(どうなっついていやがる……)

人は自分で見たモノこそ信じる。ベートの中でベルはまだ戦う覚悟もない雑魚のまだ。

だが、レフィーヤが嘘を言っているようにも感じない。少なくとも、あの戦場で最も過酷な戦いを生き延びたのは確かなのだろう。

故に迷う。一見何も変わったようには見えない少年はただの弱者なのか。それとも己と同じ冒険者なのか。

(人間そう簡単に変わるもんか?)

自分一人で考えて解決する疑問ではない。

にもかかわらず考え続けてしまうことに苛立ち始めるベート。

その不機嫌さにベルが怖がり、その冒険者らしくない反応にさらに不機嫌になる悪循環。

恐らく、この場にいる物の中で最もストレスを感じていたのはベートだっただろう。

「このままでは埒が明かん。神へスティア、それとベル・クラネルとリリルカ・アーデだったか。少し聞きたいことがあるのだが構わんか？」

お互いに気まずい空気が流れ始めた時、空気を吹き飛ばすような重厚な存在感が言葉を発した。

言葉を発したのはドワーフのガレス・ランドロックである。

「ロキ・ファミリア」でも最古参の幹部であり、エルガルドム重傑の名は世界中に轟いている。

巨大派閥を纏め上げる立場なだけあって、場の空気を変えることにもたけているのか、先ほどまでの重苦しい空気は彼が喋るだけで消え失せた。

「はいはいはい！何でも答えますよ！この空気が変えられるなら！」

完全に蚊帳の外の状態で居心地の悪さを感じていたりりは、その質問に飛びつく。

「ソーマ・ファミリア」の団員たるリリからしてみたら、他派閥の主神であるヘスティアとロキの因縁などまるで興味がない。

どうぞ二柱でござん勝ちにと言う話だ。

「今、儂たちは先日イツイルスの闇派閥によるテロに利用されたモンスターを調査しておく」

「あの極彩色のモンスターですか？」

リリの問いかけにガレスは黙って頷いた。

極彩色のモンスター。突如オラリオの街に現れたあのモンスターの残した傷跡は深い。

被害が大きかった区画では未だに復興作業が進められているくらいであり、バベルの塔と言うダンジョンの蓋に守られた一般市民たちに改めてモンスターの恐怖を思い出させた。

冒険者たちも今回の一件では被害者は出なかったが、あのモンスターに対応できたのは「ロキ・ファミリア」がダンジョンで同種のモンスターと遭遇した経験があったからだ。

あれがイツイルス闇派閥によって人工的に産み出されたモンスターならば、その脅威は計り知れない。

「ダンジョンではあるまいし、あのモンスターたちは街に突然生まれ落ちたわけではあるまい。必ず保管されていた場所があるはず」

「……それが、どこだと？」

「オラリオ全域に広がりながら、ギルドすら全貌を把握しきれていない地下水路。うつつつけとは思わんか？」

ガレスの語る仮説にベルは背筋が凍るような恐怖を感じた。

その考えが正しければ、ベルとヘスティアはずっと闇派閥イヴイルスの傍にいたという事だ。

あんな恐ろしい事件を引き起こした存在が、自分たちのホームの近くにモンスターを隠していたとなると穏やかではいられない。

「この辺りに住んでいるならばちようどいい。何か心当たりはないか？」

「……実はリリたちは今、レクリエーションをしていますが。この地下水路で時々聞こえる声を調べていたんです」

「声か……件くだんのモンスターである可能性があるな」

ガレスは髭をいじりながらリリからの情報を頭の中でまとめる。

ヘスティアたちが地下水路に住み着いたのはつい最近の話だという事から、どれほど前からここにモンスターが運び込まれていたかは定かでない。

地下水路に暮らしているヘスティアですら、それだけの情報しかないと考えると、ほんの最近の話なのか。それともヘスティアたちに悟らせないほどに統率がとれていたのか。

（後者ならば凄腕の調教師テイマリーが闇派閥イヴイルスに存在することになるが……【ガネーシャ・ファミリ



「ア」のタイマーですらそんなことができるとは思えん。あるとすればレアスキル持ちか、あるいは強力なマジックアイテムを有しているか」

「なんで自分から危険に飛び込んでるねん。アホか」

「ぐぬぬぬ……」

「ロキ。そうやってすぐに挑発するのはやめてください!!」

「神様、落ち着いて……」

再び喧嘩になりそうな二柱とそれを抑える二人を横目に、ガレスは闇派閥の手札の一つに勘づき始める。

(もし、話が本当なら。ベル様たちはよほど運がいいのですね)

そしてリリもこれまでの話の断片から、ベルの現状の危うさに気が付く。

何かに利用できないかと考えるが、闇派閥の目的すら分からないのに接触など馬鹿げている。

そもそも闇派閥を巻き込めば、ベルは容易くどん底に落ちるだろうがそれでは意味がない。リリ自身の手でベルを絶望させなければ、リリの心が晴れることは無いだろう。

利用できれば利用するが、絶対に必要と言うワケでもない。

リリは頭の片隅に闇派閥の情報に刻み込むと、そこから先の思考を閉じた。

「すみません……いつもはこんな喧嘩腰な方ではないんですけど……」

「いえ、あんなに挑発するロキが悪いんです」

リリがそんな不穏な考えを巡らせていることなど露知らず。

ベルはこの場で唯一自分の気持ちを共有してくれるレフィーヤに謝っていた。

あんなに仲が悪いなんて天界で何があったのだろうとため息をつくベル。

(どうしましょう……今、お礼を言ったほうがいいんでしょうか)

レフィーヤはレフィーヤで完全にお礼を言うタイミングを見失っていた。せつかく探していた恩人に出会えたというのにも関わらず。

今、この場で言っても誠意がこもったお礼とは受け取られずに、やつつけない印象を持たれてしまうのではないか。また、「ロキ・ファミリア」の団員であるレフィーヤが「ヘスティア・ファミリア」の団員であるベルにこの場で礼を言うことは、ロキにとって気分のいいことではないはずだ。これではけんかの火種になりかねない。

(ただお礼を言うだけなのに何でこんなに言いづらく……恨みますよロキ)

後の言葉が続かず沈黙する二人。

「あ、あの」

「な、何でしょうか」

沈黙を先に破ったのはベルだった。

「お腹の怪我はもう大丈夫ですか？ 回復薬ポーションを使いましたが、あくまで応急処置でしたし

……」

あの後からずっと気になっていたことを聞く。

腹部を触手で貫かれるという大怪我はベルの使う安物の回復薬ポーションでは治しきれない。

痕が残っていないかと心配だったのだ。

「ええ、あの後、最上級回復薬エリクソサで治療させてもらったのですぐに完治しました」

唐突な質問に少し面食らったが、優しい少年なのだたとレフィーヤは少し顔を綻ばせながら傷の状態を伝えた。

既に地下水路の探索をできる程度には回復している。

少年が心配するように傷痕が残るということもなかった。目の前の少年の適切な応急処置のおかげだ。

(あつ、今なら自然にお礼が言える?)

レフィーヤはこの会話の流れならば、お礼が言えることに気が付く。

ロキがあれこれ言うかもしれないが、この流れでお礼を言わないほうがおかしいだろう。

「あ、あの時は……」

「無駄話はそこまでにしておろ雑魚ども」

勇気を振り絞ってお礼を言おうとしたレフィーヤだったが、ベートの声に遮られる。

少し不満げにベートを見るレフィーヤは、彼の表情の中に僅かに含まれる緊張感を感じ取った。

「例の声とやらだ。この耳障りな汚ねえ音は間違はなくモンスターだな」

「やはりか、神ヘステイアたちはここで……いや」

「遅えよ」

ベートの言葉と同時に暗闇の中から、下水道とミスマッチな極彩色のモンスターが現れる。

前方に10体、後方に13体。

「囲まれた!?!」

「っ、神様!! リリ!!僕から離れないでっ!」

驚愕するヘステイアとリリ。

再び出会うことになった異形のモンスターの姿に冷や汗を流しながら、ベルはひらりマントを構える。

(随分と大盤振る舞いやな?それだけ向こうに余裕がない…か……?)

そしてロキはこのタイミングでこれだけの攻勢を仕掛けてきた闇派閥イグイルスの焦りを感じ取っていた。

「来るぞ!!」

ガレスの言葉と同時に飛び掛かる芋虫<sup>ウィルガ</sup>。  
ベルは再び大きな世界の流れに巻き込まれた。

## 怪魔強襲

「ロキ・ファミリア」にとつて今更芋虫は脅威ではない。第一級装備すら溶かす溶解液は注意しなければならぬが、既に能力が判明しており、先日の事件で嫌というほど葬ったモンスターだ。接近戦を主とするベートやガレスとの相性を考慮しても、厄介ではあるが危険な存在ではない。

例え退路を塞ごうが「ロキ・ファミリア」が脅かされることはないはずだった。ここが地下水路でなければ。

「ベート！ 奴等を破裂させるな！ この水に溶解液が混ざってはコトだ！」  
地下水路に巡る汚水は浄化柱で濾過され、再びオラリオの生活用水として利用される。

しかし、いかにオラリオの誇る最新鋭の魔石製品と言えども相手は深層のモンスター。その力は人類の英知を結集したところで対抗するのは難しい。

ウィルガ芋虫の溶解液が浄化柱によつて対処ができない可能性が以上、迂闊に破裂させてしまうのは賢明とは言えない。

「ロキ・ファミリア」は本来脅威ではないモンスターを相手に苦戦する。

それこそ敵の狙いと知りながら。

(極彩色のモンスター……っ！神様が聞いた声はこの新種！)

つい最近見たばかりの新種のモンスターに動揺するベル。

自分たちが今まで住んでいた地下水路に闇派閥イグイルスが潜んでいたショックで、思わず体を固くする。

前回の戦いでベルが立ち回れたのは、名刀電光丸とウマタケと言う最高に戦闘向きなひみつ道具が使えたこと。そして、ウマタケの機動力を存分に生かせる広い空間が戦場だったからだ。

対して今回は下水道と言う狭い空間。

レベル1の冒険者など容易く殺せる溶解液が飛び散るであろうこの戦いにおいて、この地下水路は致命的な地形だった。

ひらりマントは相手の攻撃を受け流せる強力なひみつ道具だが、同じ防御系の名刀電光丸と決定的に違う点があるのだ。

それは自動防御機能オートガードの有無。

ベルは第一級冒険者の戦いにまるで反応しきれていない。それは前回の戦いで理解している。

それでもあの戦場でレフイーヤを救出できたのは、名刀電光丸やウマタケが自動で相

手の攻撃を迎撃していたからだ。

しかし、ひらりマントにはそれが無い。今回は飛んでくる脅威全てをベルが認識し、守らなければならない。

(厳しいけど、やらなきゃ……っ！)

防御のイロハは名刀電光丸で学んでいる。

刀とマントの違いはあっても、全く応用できないということは無いはずだ。  
気を引き締めて、ひらりマントを握る手に力を籠めるベル。

「……違う」

そんな彼の背後から、ヘステイアの声が聞こえた。

「え？」

「この声じゃない。似ているけど、ボクが聞いていた声はこれとは違う」

これとは違う？

神様が聞いた声はこの極彩色のモンスターじゃないのか？

この芋虫以外のモンスターもいる？

芋虫以外の極彩色のモンスターと言えば……

ベルは己が出した結論に顔を青くすると同時に、破裂音が神と冒険者たちの鼓膜を揺さぶった。



「オオオオオオオオオオオッ!!」

ベルの前方の壁が吹き飛び、その中から黄緑おうりよくの体皮が現れる。

大蛇のように長い体軀をくねらせて、現れるモンスターにベートは舌打ちした。

「花か、面倒くせえな!!」

ベートの怒号にそのモンスターはブルリと体を震わせると、先端部分を開花させる。

毒々しい花卉の中から現れる醜悪な牙の群れ。

自身の考えが正しかったことをベルは悟った。

「ヴィオラス……」

イヴィルス 闇派閥の構成員が口走っていた名前が唇からこぼれる。

建物すら容易に破壊する巨大なモンスターが、下水道の狭い空間にいることに眩暈を覚えながら、ベルは飛んでくる破片をひらりマントで防ぐ。

「ギツ!?!」

飛び散った破片のうち、大きな破片が芋虫ウィルガに突き刺さる。

潰れた耳障りな悲鳴に冒険者たちは時を凍らせた。

ブクリ、と不自然に膨れ上がる芋虫ウィルガの身体。

ベートも、ガレスも、レフイーヤも。そのモンスターに対処するには離れすぎている。

突如現れた花ヴィオラスに注意を向けていたことが仇となってしまった。

黄緑の身体を突き破るように、溶解液が飛び散ろうとした瞬間。

「間に、あえっ!!!!」

すぐ近くにいたベルが芋虫ワイルガに向かい疾走。

目の前で今にも破裂しそうなモンスターに、ひらりマントを見舞った。

モンスターは飛び散り、水の中に入ろうとしていた溶解液ごと壁に叩きつけられる。

「いつ!?!」

ドロリ、と石造りの壁が溶けていくのを見て思わず声が出るヘステイア。

下手したら自分たちのホームがこうなっていたとは笑えない。ヘファイストスに泣きついてまた新しいホームを紹介してもらおうと心に決める。

ほっとしたのも束の間。

今度はベルの後方の壁が粉碎され、二体目の花ウイオラスが現れる。

咄嗟のことに反応できないベルに狙いを定めて、顎あごを開くが。

「よくやった小僧!!」

いつの間にかベルの背後に現れていたガレスが食人花を殴りつけた。

悲鳴を上げながら倒れる巨大モンスター。

それによって発生した大きな波から、ベルはヘステイアとリリを連れて逃げ惑う。

(え? 速い!?! ドワーフなの!?)

全身を鎧で包み、見るからに鈍重そうな見た目だというのに素早かった。

ドワーフは力や耐久に秀でている代わりに、敏捷が育ちにくいにも関わらず。

足に多少の自信があつたベルだったが、どう考えてもタンク専門なガレスが自分とは次元違いの速度を出してみせたことで、ちよつとしたプライドがへし折れる音が聞こえた。

（あれが、ランクアップした冒険者の力）

レベル1の敏捷など歯牙にもかけない。器が違う。

ステイタスの数値をコツコツ上げきるより、ランクアップしたほうが楽という言葉の意味が実感を伴って理解できた気がした。

「よし。小僧、儂たちは今からあの花擬きを叩く。お前は芋虫どもを壁に叩きつける!!」  
「あの、ものすごい壁が溶けているんですけど、大丈夫でしょうか……?」

「あの程度では地下水路はびくともせんわ! 修繕費を心配しているのなら、後でロキがポケットマネーで出すから問題ないわい!!」

「ちよつ、おまつ」

突然のガレスの裏切りに声を上げるロキ。

ガレスは「さつきまで不快な思いをさせた詫びだ!」と豪快に笑うとグツタリとして  
いる花に追撃をかけた。  
ツイオラス

（気持ちのいい人なんだな。僕もあんな風に頼りになる冒険者になれるかな……？）  
ドワーフの大戦士。

オラリオのファミリアでドワーフが人気なのは、どんなピンチでも頼りになるあの存在感がダンジョン探索で有難いものだからなのだろう。

偉大な先達の姿に、いつか、自分もあんな冒険者になれるのだろうかと不安になるべ  
ル。

「いや、今は悩む時じゃないか……今は新種の対処が先!!」

ベルはひらりマントを振るい、芋虫たちを弾き飛ばしていく。

強い衝撃を与えれば簡単に破裂する分、倒すのは簡単だ。

しかし、破裂と同時に飛び散る溶解液を下水道に流さないために、マントを溶解液が  
飛び散ろうとした瞬間にもう一度振らなければならぬのが手間だ。

花と（ヴィオラス）「ロキ・ファミリア」の戦闘で飛び散る破片の対処もしなければならず、芋虫（ヴィルガ）の

駆除が全く進まない。

（ヴィオラス）（花が邪魔すぎる！ベートさんやガレスさんが僕たちの方に来ないように戦ってくれ  
ているけど、この狭い空間じゃ限度がある。こうなったらあのひみつ道具で……）

「……なあ、少年」

リリに預け、バックバックに入っている最後のひみつ道具を使うことを検討するべ

ル。

ひらりマントも十分超技術だが、最後のひみつ道具は色んな意味で規格外だ。

あまり人の目に触れたくないのだが……

そう考えていると、ちやつかり安全地帯ベールの近くに避難していたロキが話しかけてきた。

「自分、あの花どもをもつと遠ざければ芋虫は楽に始末できるか？」

「え？は、はい……」

「……しゃあない。ドチビと協力とか死んでも御免やけど、レフィーヤの恩人の顔を立てるわ」

「遅くなったけどこの前はサンキューな」と礼を言うロキ。

ヘスティアとの仲の悪さから、自分もあまりいい印象を抱かれてないと思っていたべルは、その言葉に戸惑う。

そんなべルを尻目に、ロキはレフィーヤを呼び出した。

「どうかしましたかロキ？」

「あの趣味の悪い花どもを遠くにやるための魔法のアイテムや。ベートとガレスに渡して」

ロキは携えていた布袋を二つ、レフィーヤに渡す。

中身は紫紺の輝きを放ついくつもの結晶。魔石だった。ベルの普段の稼ぎとは比べ物にならない高純度な魔石。

「これは……分かりました！」

魔石をこの場でどう使うのか分からなかったベルだが、レフイーヤは理解したらしい。

二つの布袋を持ってベートとガレスの下に向かう。

「なるほどのう！考えたな、ロキ!!」

「つたく……本当に食えねえ」

レフイーヤから魔石を受け取ったベートとガレスもロキの意図を受け取る。

二人は布袋の紐を解くと、中身の魔石をモンスターに見せつけた。

「！」

その効果は劇的だった。

今まで無軌道に暴れまわっていたモンスターは目の色を変えて（どこに目があるかは分からないが）二人に突進する。

どの動きの変わりようにベルとヘスティアは瞠目した。

（魔石に反応した？……いや、魔力？）

そういえば、とベルは思い出す。

この前に襲われた時、あの極彩色のモンスターは魔法を行使するレフィーヤの魔力に反応している素振りがあった。

あの時は魔法に反応するなんて奇妙な習性だと思っていなかったが。

「やっぱり、遠いなあ……」

同じものを見たはずなのに。

そんなものかと思いを終わらせてしまった自分と、それをどう利用できるかに思考を進めた「ロキ・ファミリア」の冒険者たち。

ステイタスだけじゃない。

冒険者として、自分は何もかも彼ら彼女らに劣っているのだ。

(ひみつ道具反則に頼らなくても、この状況は切り抜かれた)

ひみつ道具に使われる冒険者ではなく、ひみつ道具を使いこなす冒険者に。

あの日の誓いの言葉のなんて難しいことか。

アイズ・ヴァレンシユタインに並べる冒険者になる。そんなの今のままではただの夢物語だ。

「でもいつか、必ずあの場所へ」

もうベルは力の差を見せつけられても腐ると事はない。

腰に着けるヘステイア・ナイフがベルの想いに呼応して脈打った気がした。

そう、胸を焦がすこの燃えるような想いだけは誰にも負けていないのだから。

「あああああああ!!」

想いを原動力に、防御の必要がなくなったベルは芋虫<sup>ワイルガ</sup>たちを駆逐する。

鈍重で、衝撃で簡単に絶命するモンスターなど、ひらりマンントの格好の餌食だ。

瞬く間に地下水路に蔓延る芋虫<sup>ワイルガ</sup>たちは一掃される。

流れは完全に冒険者たちにあつた。

しかし。

(足りない)

力が無い故に傍観者で居続けたリリはこの戦況の違和感に気が付いた。

(これは恐らく「ロキ・ファミリア」を陥れるための罠。それは状況的に見て間違いない)

<sup>イウイルス</sup>闇派閥にベルやヘスティアを狙う理由はない。

ひみつ道具狙いとも思えない。それならばひみつ道具の在り処を知るベルは生け捕

りにすべきだ。少しの衝撃で溶解液をまき散らすモンスターなど使わないはずだ。

(でも、この戦力だけで「ロキ・ファミリア」を倒せると考えるのは甘すぎる。今、「ロキ・ファミリア」が苦戦したのは地下水路だから。でも、あくまでも戦いにくいだけで、彼らの命はまるで脅かされていない。彼らを打倒する最後の一手が足りていない)

ひらりマンントを使うベルと言う計算外はあつたにせよ、この戦力で「ロキ・ファミリ



ア」の屈強な冒険者を殺せるとはリリは思えなかった。

(なら、他に狙いがある?)

まず、こんな地下水路に潜んでいる時点で陽動の可能性はない。陽動は目立たなければならぬのだから。

ならば溶解液を地下水路に流すことかと言えばそれもないだろう。それなら極彩色のモンスターなど用意せず、素直に溶解液だけを流せばいい。

他に考えられるのはここで「ロキ・ファミリア」が失敗して、溶解液がオラリオに流れたという事実を作ることだろうか。

(それも考えられませんね。そんなことで下げられる評判は僅かなもの。こんな大量のモンスターを使うことではないでしょう。コストパフォーマンスが悪すぎます)

ならば考えられる可能性で最も高いものは時間稼ぎ。

モンスターは芋虫<sup>ウィルガ</sup>、花<sup>ウィライオス</sup>がそれぞれ前後から現れた。まるで冒険者たちを挟み込み、身動きを封じるように。

(なら、足止めされた状態で来るであろう、次の策こそ必殺)

さあ、何が来る。

新たなモンスターの群れか。

それとも例の自爆する闇派閥<sup>イウィルス</sup>の狂信者か。

あるいは地下水路を崩したり、大量の溶解液を流し込んでくるのかもしれない。そんなりりの予想を超えるものが閻派閥イザイルスの切り札だった。

(視線?!)

最初に気が付いたのはベル。

オラリオに来てから頻繁に感じる無遠慮な銀の視線により、オラリオに来る前より警戒心が増していた彼が真つ先に気が付いた。

自分を突き刺すような視線。

「まず一匹」

それが殺意だと気が付いたベルは、咄嗟に視線の方向にひらりマントを振るう。

視界には赤い影がブレて見えた。

(襲われていた!?)

まるで気が付いていなかったベルは、命の危機を自覚した瞬間、鳥肌が立ったのを感じる。

なにか不味いことが起きたのだ。

そう気が付いたベルはヘスティアとリリ、そしてロキを背に庇ってひらりマントを構えた。

ベルに襲い掛かった影は壁に激突し、めり込んでいた。

芋虫ウイルガとは違う激突音に「ロキ・ファミリア」も異変に気が付く。

そこにいたのはモンスターではない。

血のように赤い髪に緑色の瞳の女だった。

白い肌に、切れ長の瞳は暗闇の中でぼんやりと輝いて見える。

絶世の美女、と形容されるであろう美貌を見てもベルの警戒は解けない。

むしろ、彼の本能は目の前の女と自分の隔絶した力の差に警鐘を鳴らし続けている。

(これが闇派閥イウイルスの切り札……)

——「ロキ・ファミリア」を屠る必殺。

## 赤髪の調教師

痛いほどの静寂が暗闇に広がる。

突如現れた赤い髪の女。

彼女が冒険者たちの援軍だと思ふ者はいない。

ベルに向けられた殺気はととも味方に出していいものではないのだから。

「マジックアイテムは直接触れずとも効果を發揮するわけか……面倒な」

壁にめり込むほどの勢いで叩き付けられたにも関わらず平然と話す女。

面倒、という言葉は本心からのものなのだろう。

反応できたのは偶然。もう二度と防げない。

「ああ、これだから冒険者の相手は嫌なんだ。有象無象でも妙な牙を隠している。エニユオも迷惑な指示をよこしたものだ」

「べらべら話しているところ悪いが貴様は何者だ？」

女が現れてから置物のように動きを止めた花を警戒しつつも探りを入れるガレス。

その表情は険しい。

誰も女の出現に気が付くことができなかった。

世界最悪の魔境たるダンジョン。その最前線で戦う「ロキ・ファミリア」の幹部及び幹部候補生の3人の誰も、である。警戒しないわけがない。

「どうでもいい。私の素性など、これから始まる殺し合いに何の意味がある？」

「あるとも。貴様の口ぶりからして背後にいる黒幕に心当たりがあるようだ。……ひっ捕らえた後、フィンが貴様に関係する組織を洗いざらい調べる手間が省ける」

「……随分な自信だな」

ガレスの挑発に言葉の上では応じているが、表情はあくまでも無反応だ。

まるで死体が動いているようだ、などと不気味なものをガレスは感じ取る。

「はっ、随分な自信はテメエだろ。真っ先に雑魚に飛びついておいて、その雑魚にいいようにされた間抜けが、俺たちを殺せる気なのかよ。……冗談はその存在だけにすんだな」

ベートも目の前の女からだならぬものを感じていたが、闘志を滾らせて挑発した。

しかし、女はその言葉に取り合わずにベルから視線を外さない。

「そっやって私を激昂させて足手纏いから目を逸らすのが狙いか？」

女は冷静に状況を理解していた。

恩恵持ちが五人、神が二人。恩恵持ちの内、二人は昇<sup>ランクアップ</sup>華を果たしていない。

力の格差がある、明らかにバランスの悪いパーティー。おまけにランクアップを果た

していない二人は上級冒険者と碌に連携を取っていない。

そのことから、この場において標的である「ロキ・ファミリア」以外にも巻き込まれてしまったファミリアがいることを理解してしまったのだ。

「生憎だが、まずはお前からだ」

妙なマジックアイテムを持ち、自身の初ファーストアタック撃を阻んだ不確定要素。

放置すれば戦いをかき乱されることを予想するのは難しくない。

ならば、とつとと始末しておくに限る。

何より、近くには「ロキ・ファミリア」の主神と思しき神がいる。

黒髪か赤髪かは分からないが、どちらも捕まえてしまえばいい。

主神を失った「ファミリア」ほど脆いものはない。どんなに屈強な冒険者も恩恵がなファルナければただの人だ。簡単に「ロキ・ファミリア」は滅ぶだろう。

上級冒険者ならばともかく、レベル1では地力は決して強くない。

力押しで十分に片が付く。

「させると……」

「させてもらう。やれ、モンスターども！」

ガレスとベートが女の前に立ちふさがろうとするが、それより早く女は号令をかけた。

途端に彫像のように固まっていたモンスターたちが活性化する。

「オオオオオオオオオツ!!」

ウイオラス

雄たけびと共に襲い掛かる花。

ウイエルガ

そして、再び闇から這い寄る芋虫。

視界を覆うような巨躯と悍ましい害虫の群れに邪魔されて、第一級冒険者たちはベルの救援ができない。

「ちっ、また調教師か鬱陶しい!!」

テイマー

(このままだと何もできずに負ける……っ)

ベルの脳裏に様々な選択肢がよぎる。

戦う——論外。ベル・クラネルは赤髪の女の挙動に反応もできずに殺される。

逃走——足の速さで勝てるはずもない。なにより前方も後方もモンスターだらけ。不可能だ。

時間稼ぎ——遅滞戦闘は困難。そもそも戦闘にならない。

……ならば戦闘以外の方法ならば……?

(リリが今バックバックに入れているひみつ道具が欲しい……一瞬でいい。隙ができればっ)

「妙なことをする前に終わらせる」

知恵熱が出そうなほどに頭を回転させるベルだが、当然、神がかり的アイディアなど簡単に浮かんでくるはずがない。そして、ベルが良案を思いつくのを相手が黙ってみている道理もない。女は素手で壁を砕くと石の破片をその手に握った。

「そのマジックアイテム。跳ね返すには振らなければならんようだな」  
「！」

女の言葉を聞いたベルは、女が次に何をやる気かを理解し青ざめる。

女の作戦は単純だ。

石を投げる。ただし、連続で。

余りにも原始的なこの作戦こそ、ひらりマンントの弱点だった。

一つ目の石をひらりマンントで跳ね返したとする。

すると、その時点でひらりマンントを持つ位置とは反対方向から、女が死角に移動して攻撃するなり、モンスターに攻撃を指示するなりしてしまえばいい。

レベル1ではこの切り替えに致命的なロスが生じる。

その僅かな隙でベルは殺せるのだ。

（ひらりマンントは僕の身体全体を覆えるわけじゃない。どこかに必ず守り切れない箇所が出てくる。相手はそこを突こうとしている……！）

相手の切り替えの早さが恐ろしい。



触れてもいないのに吹き飛ばされる、などと言う異様な体験をしておきながら、まるで動揺せずに淡々とひみつ道具を分析して弱点を見破ってきた。

(不味い、何か、時間を稼げる何かはないのか!?)

ひらりマントを構えるベルの呼吸が荒くなる。

ダメだ、もう女は投石しようとして……

「まあ、待ちいや」

緊迫した空気に似合わない、気の抜けた声がベルの背後からかけられる。

声の主はロキ。

まるで喫茶店で親しい友人に話しかけるような声色。

戦場と言う非日常の中に現れた日常の空気に、つい意識が引つ張られる。

振り向くとロキはぶんぶんと木の枝を振っていた。

「……何をしている」

(ホントに何をしているんだろう……?)

先ほどのレクリエーションで使っていた木の枝。

あのまま地下水路に捨てるのはまな一違反?と言ってヘステイアが自身のバッグに入れていたはずのものだ。

どうしてロキはそれを振っているのか。

「面倒なアイテム持つ少年を狙うのはいいけどなあ……ちよつと考えなしやで？自分」  
貼り付けた笑顔で道化師は女を嘲笑う。

人の感情を逆撫でするその表情に、女は微かに不快そうな声を出す。

「どういう意味だ？」

「いやいやいや、まさか自分、このドチビやその少年のファミリアがただ巻き込まれただけやと、本気で思つとるん？」

（本気で巻き込まれたんですけど）

ベルは内心突つ込むが、女の様子がおかしい。

苦虫を噛んだかのような表情でロキを睨みつけている。

「もしかしてやくけくどく？知らんかったん？ウチとドチビんとこのファミリアは同盟結んでるんやで？」

「……そういうことか」

（どういうことですか？）

女は何やら納得しているが、全く話が見えてこない。

リリは凄いジト目でロキを見ていた。

ヘスティアはロキに何かを聞かされていたのか、苦々し気な表情だ。

「リリ、話分かる？」

「とりあえず黙っていたほうがいいですよ。あまり動揺もしないで平然としていてください」

「ここそことベルはリリに確認を取ると、リリは短くそう言つて黙つてしまふ。

クエスチョンマークを浮かべるベルだったが、リリの忠告通りロキと女のやり取りを見届けることにした。

「つーか知らないん？あの少年は前にもそのレフイーヤたちと一緒にイウィルス闇派閥撃退して  
るんやで？」

「何？」

「こーんな地下水路で？イウィルス闇派閥を追つかけるウチらと合流したファミリアが？たまたま  
前に共闘経験があつて？たまたまそんな時のメンバーがパーティーにいて？たまたま  
イウィルス闇派閥と戦うのに有効なアイテムを持つとつた？……あほ抜かせ、どんな確率やねん」

（全部、たまたまなんだよなあ）

事情がすべて分かっているベルとしては白々しい限りのセリフだが、女にとってはそ  
うではないらしい。

投石の構えを解き、ロキの挙動に警戒を払う。

「今日、ウチらがここに来たんはアイテムを受け取るためや。この……なんやつけ？（小  
声）」

「ひみつ道具!!」(小声)

「そう!! ひみつ道具を受け取るためになあ!!」

バーン、と木の枝を突き出すロキ。

しかしそれはひみつ道具ではない。ただの木の枝である。

「……そんなもので一体何が」

「見てくれはアテにできんぞ? 少年のマントなんていかにも安物やろ?」

しかし、それは当事者だから言えること。

ひみつ道具について何も知らない女にとってみれば、ロキの一連のセリフは「まさか?」と考えざる得ない。無視できない言葉だ。

彼女はガラクタとひみつ道具の見分けなどつかないのだから。

(普通に考えれば、「神秘」のアビリティも持てないレベルが、どうやってこんなものを用意しているんだとか。同盟相手を地下水路に呼び出すとか何考えているんだとか。おかしい点はいくらでもあるんですけどね)

その違和感を感じさせないのはさすがは都市最強派閥の主神と言えなくもない。

天界きつてのトリックスターの名は伊達ではないという事か。

「さあ、問題や。このアイテムはどんな能力があると思う?」

「……」

ただの木の枝が、言葉を弄するだけで怪物の足を止める武器になっている。  
凄まじいハツタリ。

だが、所詮はハツタリだ。

このまま膠着状態が続けばいつかはバレル。

(切り札があるんやろ?)

ベルの挙動から、正確に彼の意図を見抜いたロキはベルに視線で合図を送る。

隙を作るから用意して見せろと。

「答えはな……………ただの木の枝でした〜ぶぶつ、こんな棒切れになにマジになつとるん?可愛ええ〜」

「!」

ロキのカミングアウトに一瞬、凄まじい殺気を放った女はすぐさまベルに飛び掛かるうとする。

しかし、そんな彼女の前に一条の光の矢が突き刺さる。

「【アルクス・レイ】!!」

レフィーヤの攻撃魔法だ。

ロキの道化劇に隠れて、密かに詠唱を完成させていたレフィーヤの基本攻撃となる魔法【アルクス・レイ】。その能力は必中の光の矢。

どんなに無理な体制でも、的確に相手を撃ちぬく妖精の一撃はこの地下水路で存分に効果を発揮する。

目標である赤髪の調教師テイマーを狙う光の魔力は、分断しただけで阻めるものではない。

「小癩な……っ」

それを素手で受け止める女。

出鱈目な耐久力。それこそモンスター並の固さにレフイーヤの目が見開かれる。

(でも、隙は作れた！)

魔法に対処する女は身動きが取れない。

最後のひみつ道具を使うときは今だと、ベルはリリからひみつ道具を受け取る。

それは弓矢だった。

一見するとなんの変哲もない弓矢。

しかし、これこそがこの状況を打開するための秘策。

力いっばい弓を引く。

「行っけえええ!!」

放たれた矢の標的は女ではない。

ガレスが相手にしている花ワイオラスだ。

第一級冒険者の攻撃を受けてもピンピンしているモンスターに、下級冒険者の攻撃な

ど通用するはずがない。

矢はモンスターに深く刺さったが、その巨体になんの痛痒も与えていないのは明白だった。

しかし、矢を受けた花は行動を停止する。

今まで激しい戦闘を行っていた相手の急激な変化に、ガレスは怪訝な表情でモンスターを眺めた。

花はそんなガレスを気にも留めず、バルを凝視する。

「もう一体のヴィオラスと戦って!!」

「オオオオオオツ!!」

ひみつ道具の効果が現れたと判断したバルは、花にそんな指示を出す。

すると、花は敵であるバルの指示通りに、ベートと戦っているもう一体の花に襲い掛かった。

「!!?!」

「オオオオオオツ!!」

同胞のまさかの裏切りに動揺するもう一体のヴィオラス。

ベートも目を見開くが、すぐに切り替えて花を速攻で屠るべく、魔剣を装備するメタ

ルブーツ「フロスヴィルト」に炎を充填した。

「焼ける!!」

緋色の曲線を描いたベートの蹴りは、轟音と共にモンスターを爆殺する。

モンスターを焼き焦がした炎の熱を感じながら、ベルはさらに指示を出す。

「他のモンスターもお願ひ!!ただし、飛び散る溶解液を水に入れないように!!」

「オオオオオオ!!」

ベルの指示の下、ツイオラス ヴィルガ花は芋虫を殲滅し始める。

ツイオラスひみつ道具ありとは言え、ベルでも倒せるモンスターに第一級冒険者を苦戦させる花ツイオラスが負けるはずがない。

溶解液を水に入れないよう、確実に一体ずつ仕留めているために少し遅いが、最早この場のモンスターたちは冒険者の脅威足りえなくなっていた。

すなわち、「ロキ・ファミリア」は赤髪の女に専念できるようになったと言うワケだ。

「……調教ティムとは違うモンスターの従え方か。本当に冒険者お前たちは厄介だ」

ひみつ道具「キューピッドのや」。

効果は矢の当たった相手の心を驚掴みし、好意を持たれるというもの。

魅了に近い効果を発揮するこのひみつ道具こそ、今回のベルの切り札だった。

やはり初撃でお前を葬るべきだった。そう語る女の表情は変わらない。



まるでこの襲撃が成功しようが失敗しようがどうでもいいかのようだ。何かの義務感で動かされているように、億劫そうな仕草で剣を構える。

「まだやる気か？ 形勢は逆転したぞ。何が貴様を戦いに駆り立てる」

「……さあな」

深層のモンスタードロップアイテムをそのまま武器にしたような、飾り気のない長剣。

鈍い光を放つその切っ先をガレスに向ける。

次の瞬間、ガレスと女は激突していた。

大気を引きちぎるかのような剣撃は、ガレスの鎧を容易く切り裂くだろう。

しかし、第一級冒険者の強さとは数値で測れない『技』と『駆け引き』だ。

ガレスは普段の豪快さからは想像できないような繊細な技で女の攻撃を受け流す。

スルリと暖簾のれんを押ししたかのような手ごたえのなさに、女の目が見開かれる。

「くたばれ」

その隙を見逃すベートではない。

未だ炎を纏った蹴撃は狼の牙を幻視させる。

咄嗟に長剣でガードする女だったが、あまりの衝撃にその足は地面から離れた。

「ぐっつっ!」

しかし、驚異的な耐久タフネスで反撃を行おうとする彼女に光の矢が襲い掛かる。  
レフィーヤの魔法だ。

自動追尾する魔法を回避するのは不可能。

女はすぐさま光の矢を腕で叩き落した。

だが、次に放たれた攻撃に僅かな間、思考を停止させる。

魔法の次に跳んできたもの、それは芋虫ワイルガだった。

極彩色が特徴的なモンスターが勢いよく飛んでくる現実味のない光景。それが女の思考を奪う。

(例のマジックアイテムか！)

それがひらりマンントの効果だと即座に気が付くが、遅い。

反射的に長剣で迎撃してしまった女は、ドロリと溶かされる己の獲物を見て苛立ちを見せる。

「貴様っ」

「よそ見とは余裕だのう」

ベルに怒りを向けようとする女だったが、彼女が今相手にしているのは都市最強の一人。  
迂闊な行動の代償はすぐに払うことになった。

振りぬかれた剛腕が頬に突き刺さり、女は吹き飛ぶ。

かつて、ガレオン船を一人で持ち上げたというその力は、ひらりマントで飛ばされた時以上の勢いで女を壁に叩きつけた。

「……」

「どうした、ジジイ」

「あやつ、人間か？高純度のアダマンタイトを殴ったかのような感触だ」

「!!」

「やはり第一級……レベル6あたりか」

頬に殴打の跡を見せる女は、しかし、それだけのダメージしか見せずに再び立ち上がる。

冒険者にとって未知が一番の脅威だ。

凄腕の眷属では説明できない打たれ強さは正しく異常事態。イレギュラー

無警戒に追撃を始めれば、逆にカウンターを食らいかねない。

再び、膠着する戦況。

そこに仮面をつけた新たな人物が現れる。

「……レヴィス。時間切れだ」

「何の用だ。エニユオの狗」

「……ガネーシャが騒ぎに勘づいた。すぐにやつてくる」

「……オラリオの憲兵とやらか」

赤髪の女との会話内容から、仲はよろしくないようだがあちら側だと推測できる。

どうやらこの戦いが「ガネーシャ・ファミリア」に気付かれたらしい。

こんな地下の戦いが始まってすぐに気が付くとは、流星は都市の憲兵と言ったところか。

「……さつきから覗いていやがる宝石臭せえフクロウはガネーシャかギルドの駒ってワケか」

「？」

ベートは狼<sup>ウエアウルフ</sup>人特有の鼻の良さで何かに気が付いたらしいが、言葉の意味はベルには理解できなかった。今の戦いを誰かが観察していたのだろうか。

そう考えていると、女……レヴィスは凄まじい速さでこの場を離脱する。

(え?に、逃げた!?)

「デメエ、逃がすか……」

「待て、追うなベート!!」

【ロキ・ファミリア】一番の俊足であるベートが追跡しようとするが、それをガレスは止める。

形勢逆転と言つても未だベルたちが危険なことに変わりはない。

そのベルたちから向こうが離れてくれるのならば、無理に追う必要はないのだ。レヴィスに話しかけていた謎の仮面もいつの間にか姿を消している。

この戦いはここまでだと。ガレスは冷静に判断した。

冒険者たちと闇派閥イヴィルスの戦いは人知れず終わった。

## ココガアナタノカエルイエ

「んで？キツチリ吐いてもらうで？ドチビイ」

「うぬぬぬ……」

イウイリス  
闇派閥を倒してめでたしめでたし……とはいかないようだ。

ひらりマントにキューピッドのや、常識はずれな二つのひみつ道具を見たロキはその詳細を追及してきた。

「ファ、ファミアリアのことを根掘り葉掘り聞くのはマナー違反だぞ!!」

「自分でも無理だと思つとる言い逃れは止めえやアホ。あんな出鱈目見せられておずおず引き下がるわけないやろ」

ファミアリアの手札についてとやかく言うのは無粋。

それが神々のスタンスだ。

どんなファミアリアでも隠し札の一つや二つは持つてしかるべきであるし、そうしたものを駆使した駆け引きも下界の楽しみだろう。

ロキとしてその辺りは弁えている。

しかし、ひみつ道具は余りにも逸脱し過ぎている技術だ。

「まさか力使ったんやないやろうなあ?」

「そんなわけないだろう!!」

ヘスティアの不正が疑われる程度には規格外なのだ。

特にキューピッドのやは見逃せない。

下位のモンスターを惑わせる程度のアイテムなら下界でもなくはない。しかし、深層に生息するようなモンスターを魅了するなどというアイテムは、いくら【神秘】のアビリティを磨いていても異常だ。

間違っても駆け出しが持っていて良いものではない。

……最も、ヘスティアがルールを破ったとは口キも思っていない。大方何かの拍子にたまたま手に入ってしまったのだろう。

調教師<sup>テイマー</sup>を嵌める際にはたまたまなどあり得ないと言ったが、ここは不自由で不完全な下界。あり得ないことなど日常茶飯事だ。

「ならあのアイテムの出どころを言ってみいや」

「……黙秘だ!」

だから今、ヘスティアを問い詰めているのは単にヘスティアが困るであろうからだ。

ケケケと嫌らしく笑う道化師にヘスティアはぐぬぬと歯を食い縛る。先の共闘を得ても犬猿の仲なことに変わりはないらしい。

「ヘスティア様。私からもお願いします。闇派閥イツイルスから皆さんを守るために状況を把握しておきたいんです」

レフイーヤもひみつ道具の詳細を開示するように求めた。最も彼女はロキと違い純粋な善意からだが。

闇派閥イツイルスとの抗争に巻き込まれたことで、「ヘスティア・ファミリア」は間違いなく敵に注目されてしまった。自衛能力すらまともにならない新興派閥であるにも関わらず。

このままでは闇派閥イツイルスによって二人が潰されるのは火を見るよりも明らか。レフイーヤはそれを黙って見過ごせる性格ではない。恩人なら尚更。

そうならないために「ロキ・ファミリア」による後ろ盾を得るべきだとレフイーヤは考えた。

図らずもロキのハツタリ通りになるが、「ヘスティア・ファミリア」は闇派閥イツイルスへの抑止力を。「ロキ・ファミリア」は未知のマジックアイテムを得ることができる。win-winの関係だ。

「いやっ、駄目だ。信用できない」

だというのに。ヘスティアが頑なに「ロキ・ファミリア」に情報を渡すことを拒否しているのは、神ロキをヘスティアが信用できない。これに尽きる。

都市最強派閥を率いるロキが、今更闇派閥イツイルスと組んでいるという事は無いだろう。



しかし、それはイコールロキが信用できるといふ事ではない。

今でこそ落ち着いているが、ロキは退屈を持って余して神々に殺し合いを吹っかけていた危険な神だ。娯楽のためならば何をしてもおかしくない怖さがある。

そこにベルのスキルは不味い。異世界のアイテムをランダムに具現化するというギャンブル色の強いスキルは、実に神好みの能力だ。

神の琴線に触れた冒険者は玩具にされる。

レアスキル・レアアビリティを発現させたことがばれた眷属ファミリアの末路は悲惨だ。

面白がってストーキング程度ならまだいい。中には試練と称して過酷を強いる者も存在する。

そうやって神々によって潰された才能は山ほどいた。

そして、ロキは自分のファミリア以外には神らしいはた迷惑な態度で接する。数多の人生を娯楽で潰してきた他の神々と同じように。

閻イツイルス派閥から身を守るために迂闊にひみつを口にして、遊び好きな神々に潰されてしまつては意味がない。

故にヘステイアは「ロキ・ファミリア」の要請を拒む。

「いかなれば三十六計逃げるに如かず!!」

「いや、逃がすわけないやろ」

ベルとリリを連れて脱兎のごとく逃げ出そうとしたヘステイアだったが、力を封じた神と冒険者では地力が違いすぎる。あつという間にベートに先回りされた。

「ああ!?!第一級冒険者なんて卑怯だぞ!!」

「やかましいわ。とつとと観念せえ」

しかし、ヘステイアは諦めない。

確かに状況は不利だが、このままロキにスキルのことを知られてしまえば絶対にいように遊ばれる。

「うおおお!!こんな時こそひみつ道具の出番!!頼んだぞキューピッドの矢!!!!」

ヘステイアは花から回収しておいたキューピッドの矢をベートに向かって放り投げる。

刺されば美の女神の魅了の如く、相手に好意を植え付ける規格外のひみつ道具だが

……

(いや、当たるわけねえだろ)

ベートは「ロキ・ファミリア」最速の冒険者。

一般人以下の腕力で投げられた矢など止まって見える。

無意味な抵抗で余計な手間をかけさせられることに苛立ちながら、このまま躲してどこかに紛失しても面倒だからと矢をつかみ取ろうとした。



が。……花から矢を抜いても様子に変化がなかったから、やっぱり駄目かもしれない。

ヴィオラス

そういえば一緒に逃げてきたけど、このモンスターはどうしようか。凄腕の調教師テイマーがそろえられている「ガネーシャ・ファミリア」に預けるべきだろうか。

「いやー見事な機転だったよサポーター君」

「いえいえ、お役に立てて光栄ですよ」

さわやかな顔で笑い合う二人が怖い。

ベートさん。正気に戻っていたら絶対に黒歴史になっているんじゃないだろうか。

「今日は大変なことに巻き込んでしまつて悪かつたね。ベル君と話し合つて結果は後日伝えるから、今日はもう休んで疲れを取つてくれ」

「はい。いいお返事を期待しますね。それではさようなら。ベル様、ヘステイア様」

「あ、送つていくよ」

「いえ、ベル様はヘステイア様の傍にいてください。闇派閥イヴィルスがまだ近くににいるかもしれない

ませんし」

リリはそう言うともと来た道を帰つていった。

……なら、リリも危ないのに。そう訴えようにもリリはあつという間に地下水路の暗闇に消えてしまった。

「あ……行つちやつた」

「まあ、彼女なら大丈夫だろう。ものすごく機転が利く」

確かに今日のレクリエーションの中でリリは頭がいいんだな、と感じる場面は多々あった。

そんな彼女が一人で行くなら心配しすぎることはない……のかな？

やっぱり、危ない目にあってないか気になる。

「しかし、あのサポーター君……」

「神様？」

リリが見えなくなると、それまで普段通りの様子だった神様は一転、何か深刻そうに考え出した。

「何か気になることでもありましたか？」

「……こういうことを言いふらすのはあまり良くないんだけどね」

少し考えた後、神様はこのレクリエーションを通して感じた少女の印象を僕に伝えた。

それは、僕が想像していたものとは大きく異なっている。

「まず初めに言っておくと、あの子はかなり追い詰められていると思う」

「……ええ？」

追い詰められている？誰が？

「追い詰められているって……お金のことですか？」

「いいや。心だよ」

そんな様子あつただろうか。

僕たちとの会話でリリは常に笑顔だった。

初対面の神様ともすぐに打ち解けていたように感じていたんだけど。

「……ベル君。最初にアイスブレイクで木の絵を描かせたのは覚えているかい？」

「はい。それが何か？」

「あれはバウムテストと言つてね。人は木に自己投影しやすいという性質を利用して、その人の無意識の領域を調べることができるものだったんだよ」

人の無意識。

漠然とした言葉に戸惑う。

それじゃ、木の絵を見ただけで神様はリリの心を理解できたというのだろうか。

「あの子が描いた木を思い出してくれ。枝や葉のない丸裸の木が塗りつぶされていた。周りには草も生やしてあつたね」

枝を描かない——変身願望。自分に不満がある。

葉を描かない——孤独。今の自分に仲間はいない。

塗りつぶされた地面——人間不信。手助けが無いという感じ方。

明らかにされていくリリの内面に絶句する。

朗らかな笑顔を見せる小人族バルウムの少女とはつながるように思えない要素が次々と浮かび上がる。

「でもつ、このテストだけで決めつけるのは……」

リリに心を許し始めていた僕は神様に反論する。

こんなもので人の心全部が分かるはずがない。

誰にだって心に問題はあるだろう。そこだけを見て拒絶するのは違う。

「うん。これはあくまでも心理テスト。参考以上の意味はない。でも、こうした要素を考えてみると彼女の奇妙な点はいくつも浮かんでくる」

例えばヘスティアとの会話。

ベルへの惚気話に一見同調しているように見えて、実のところ中身のある返答はしなかった。リリの目的は神様の警戒を解くこと。話の中身は何でもよかったのだろう。

例えば闇派閥イウィルスとの戦闘後の態度。

あんなことが起きたら契約はチャラにしたくなるものはずだ。ベルと組むことはもはやデメリットの方が圧倒的。人間不信の少女が善意で契約を続行しているとは考えにくい。

「どれもこじつけじみた意見だ。ただ、それもこういくつも出てくると警戒したほうが

いいとボクは思う」

安全を考えるならば、リリルカ・アーデとの契約は結ぶべきではない。

それが神様の結論だった。

「……」

多分、それが一番賢い選択。

反論していた僕だけど、こうもリリの怪しい部分を並べられたら流石に呑気で居られない。

どんな目的かは分からないけど、リリは何かやましいことがあるのかもしれない。

僕は探偵じゃない。

それが真実かどうかは分からない。

でも、怪しいと言うのは立派な判断材料だ。

パーティーの仲間は運命共同体。怪しいところがある人物に背中など預けられない。

それが当たり前。

だけ。

「僕が発した言葉を聞いて。」

神様は一瞬驚き、すぐにやっぱりこうなったかと苦笑した。





改めて自分の貧弱さを思い知らされる。

久しぶりに感じる倦怠感。

ダンジョンに潜り始めたころに戻ったようだ。

早くベッドで泥のように眠りたい。

きつと今日は何の夢も見ることなく、快眠できるだろうから。

気を抜けばトロンと垂れそうな<sup>まぶた</sup>瞼に力を入れる。

少し遠のきかけている意識のまま、安宿に近づいた時。

「ここにいたのかアーデ」

この世で最も聞きたくなかった声がりりを強制的に覚醒させた。

「ザニス……様」

「おやおや、どうしたアーデ？ そんなに驚くことは無いだろう」

いやらしい笑みを浮かべた細身の男は、癩に障る口調で話しかけてくる。

りりは少し不快気に眉をひそめた。

「……何か用ですか」

「いや、大したことではない。団長として団員の様子を見に来ただけだ」

随分と殊勝なことだ。

今までりりのことなんて気にも留めてなかったくせに。

内心毒づくリリだが、この男の前で迂闊に口は開くべきではないと言葉にするのを我慢する。

早く終われ。耐えていればこの男はすぐ離れていくはずだ。

「しかし良くないなアーデ」

「何がですか」

「あんな安全性の欠片もない安宿で生活していることがだ」

少なくとも「ソーマ・ファミリア」に比べたらました。

あんな人の悪意に満ちたところにいるくらいなら、防犯意識皆無でも外で寝泊まりする。

……ああ、でもそれも今日で終わりなのだろう。

リリの聡明な頭脳はそう結論を出した。

ここ男が話題に出したということはそういうことだ。

リリの逃げ場所を奪いに来た。

「大切な団員をあんなところで寝泊まりさせるなど言語道断だ。ホームに戻ってこい、

アーデ」

「……っ」

俯き、歯を食いしばる自分を見て、あの男はどんな顔をしているだろうか。

はいとは絶対に言わない。抗うことができなくとも、せめてもの意地を張った。そんなリリの内心を手取るように把握しているであろうザニスはひとつ頷いた。紳士面の奥に弱者への嘲笑を滲ませながら。

背を向けてホームに歩き出すザニスから、今すぐにも逃げ出したい。あそこは檻だ。リリを決して逃がさない悪夢。

この男は現実を突きつけているのだろう。決してお前を逃がしはしないと。どうしてこうなのだ。

ベルとヘステイアのホームは貧しくても、あんなにも温かかったのに。リリのホームは冷たくて、残酷だ。

二人は安宿から離れ、「ソーマ・ファミリア」のホームに帰還する。

石造りの大きな建物。オラリオでも特に多くの団員を抱える「ソーマ・ファミリア」らしい、質素だが大きな建物。

まるで監獄のようだとリリは思った。

背中に刻まれた恩恵めぐみは冷たく啜う。

ココガアナタノカエルイエ。

## アイアム・ガネーシャ

「俺がガネーシャだああああ!!」

象の仮面を被った褐色の偉丈夫が暑苦しく叫ぶ。何やらポーズを取りながら。

僕は至近距離で発せられた大声に目を白黒させ、神様はゲンナリした様子だった。

見た目も行動もツツコミどころだらけだが、この方も超越<sup>デウス・デア</sup>存在の一柱だ。

その名は彼が今叫んでいる通りガネーシャ。

群衆の主の通り名で知られ、民から敬愛される偉大な神格である。

神様らしく奇行も大分目立つが。

「ガネーシャ、今日も元気だね」

「俺はガネーシャだからな!」

会話のキャッチボールが成立していない気がする。

ガネーシャ様の独特なコミュニケーションは有名で、オラリオに来たばかりの僕でも知ってはいたけど、本当に自分の名前を事あるごとに叫ぶ。

護衛で来ている眷属の疲れ果てた顔からも、ファミリアの団員の苦勞が伺えた。

しかし、ガネーシャ様はただのエキセントリックな神様ではない。

群衆の主の名に恥じず、そのファミリアの力は大きい。

ギルドによるファミリアの評価は最高ランクのS。あの「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」と同等なのである。

なぜそんな大派閥の主神様と零細派閥の僕たちが対面しているかというところ、先日イヴイリスの闇派閥の件で相談をしに来たのだ。

ロキ・ファミリアの提案は突っぱねたが、「ハスティア・ファミリア」が危機的状況にあるというレフイーヤさんの指摘は事実だ。僕は内心、スキルの存在を明らかにしても「ロキ・ファミリア」の庇護下に入るべきじゃないかと思っただけで、神様は初めから「ロキ・ファミリア」ではなく、「ガネーシャ・ファミリア」を頼る気でいたらしい。

曰く、「犯罪者に襲われたら獵師会じゃなくて警察に行くだろう？」との事だった。

オラリオの憲兵として知られる「ガネーシャ・ファミリア」は、確かな実績と実力がある。

実力が最高峰でも肝心のロキ様を信頼できない「ロキ・ファミリア」より、この派閥を頼るべきだというのが神様の考えだった。

実際に奇行を目の当たりにするとこれで良かったのかと不安になったが。

「それで？なんで君がここにいるんだい？零細ファミリアの被害届を受けとるのは団員の仕事だろう？」

何か裏があるのではないかと勘ぐる神様。

神格は折り紙つき。しかしガネーシャ様も神だ。腹の内では良からぬことを考えている可能性も限りなく0に等しいが言えないとは言えない。

愛しいファミリアを守るために幼女神は警戒心を見せるが。

「ウム・ヘスティアのこどもが闇派閥イックグスに襲われるのはこれで二回目と言うからな！心に傷を負っていないか心配で見に来たのだ！」

存分に頼つていいゾウ!?と暑苦しく僕に迫るガネーシャ様。

子の心を思いやる神の鏡と言うべき考えだが、当のベルはガネーシャのハイテンションに若干引き気味だ。

「で、でも【ガネーシャ・ファミリア】の神様ですし、忙しいんじや……う！」

「団員たちに余計なことはするなと怒られてな！仕事が回つてこないのだ！ぶつちやけ暇だ!!」

（あ、コレ裏ないや。いつものガネーシャだ）

威風堂々とファミリアにハブられている現状を語るその姿に謀の影はない。

脱力しながらも、ヘスティアは疑い深くなりすぎた自分を反省する。

世の中には数こそ少ないが善神とて存在している。

ひねくれた目で周りを見すぎないようにしなければ。

「しかし成る程！ひみつ道具とは珍妙なものだな！眷属ことどもたちの可能性にガネーシャ超感動！」

これから庇護下に入ろうと言うのに闇派閥イツイルスとのいざこざについて詳細を説明しない訳にはいかない。ヘスティアはガネーシャならば言いふらすことはないと感じ、ベルのスキル【四次元衣囊フォーエ・ディメンション・ポーチ】を教えた。

正直かなりドキドキしながらの説明だった。だが、全てを聞いた後の発言がこれである。

ひみつ道具自体よりもそれを開発した異世界の人間たちに興味津々らしい。

やはり彼は群衆の主。

神々の中でも特に下界の人間たちを愛し、守護する存在だ。

人々の平和を脅かす闇派閥イツイルスと戦う上でこれほど頼もしい存在はいない。

「少年の状況は理解した！ヘスティアと少年の安全は【ガネーシャ・ファミリア】が保障しよう！！まずは闇派閥イツイルスに特定される危険がある今のホームから、俺たちのホームに移るがいい！！快適な引越越しライフを約束するぞ！！そして俺がガネーシャだ！！！！！！」

（なんで最後自己紹介したんだろう……）

（多分意味ないから気にしなくていいぜ）

至れり尽くせりとはこのことだろう。



精々パトロール範囲内に、ホームの周りを入れる程度の対応だと思っていたへステイアは飛び上がって喜んだ。

家賃の安さからどう考えても事故物件な前のホーム二つとは違い、Sランク評価のファミリアのホームに泊まれるのだ。どう考えてもこちらの方が快適だ。

最も、「ガネーシャ・ファミリア」のホームである「アイアム・ガネーシャ」は団員たちの間では超不評なのだが。なにせ彼のホームは30Mメートルもの、胡坐をかいたガネーシャの巨人像だ。しかも入り口は股間にある。

そんなものに彼はファミリアの貯金からとんでもない額を溶かして建築したらしい。そして経理を担当する団員は、ブチギレてガネーシャの仮面を空にスパークキングしたんだとか。

「お前たちの情報提供に感謝する！此度の闇派閥こたび イヴィルスによる侵攻はオラリオ全域を揺るがすものだとは俺は確信している。今や市民たちは危険を察知してひきこもり、冒険者たちの間にも緊張が走っているという。第一級冒険者ですら今回の件では死を覚悟している者がいるというしな」

「……ええ？」

第一級冒険者が死を覚悟？

憚れの人

劍姫と同格、或いはそれ以上の冒険者たちが？

予想だにしていなかった情報に僕と神様は仰天する。

怖い人たちだと思っていたけど、闇派閥イヅイルスとはそこまで危険な存在なのか。

「断言はできません。だが、そうとしか思えない行動を取った者もいた。……ベート・ローガという【ロキ・ファミリア】の幹部なのだが……」

「あ」

何か嫌な予感がしてきた。

「ギルド本部の真ん前で黒髪ロリ巨乳への愛を叫んでいたらしい。日も暮れた時間帯に、探索から帰ってきた冒険者たちの目の前で想いを天に吠えたいらしい。きつと心残りを残したくはなかったのだろうか!!」

「……」

ベートさんの奇行が耳に入ってくるが、青ざめる僕の意識からスルリと情報は通り過ぎてしまう。

キューピッドの矢だ。

御伽噺のように射られた相手の心を奪うあのひみつ道具で、神様への恋愛感情を植え付けられたあの人の醜態が思い起こされる。その後、アレを大衆の前で……？

チラリと横を見ると、犯人の神様も顔を引きつらせていた。

一時のテンションで矢を投げた後、これヤバいんじゃない？と遅まきながら思ってい

たらしく、ベートさんの様子を心配していたけど、ここまでひどくなるとは……

これまで積み重ねてきた偉業を彼方に放り出すがごとき行為は、世の男性の尊敬を集め（でも間違つてもこうなりたいとは思えない）、女性に白い目を向けられ（もとから低かった評価は底辺を突き破つてマイナスと化したらしい）、そして神々は賞賛の声を上げた（そして彼女らの軽い口が噂を爆発的に広めた）。

「しかし【凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼】にそんな秘めたる願望があったとは……普段の態度からは想像つかん。あの男が性癖を隠さなければならなかった理由……」

そこでガネーシャはふと、ヘステイアを視界に入れた。

絶世の美女、そう表現できる彼女の姿を頭に入れて考える

黒髪……ロリ……巨乳……

「……………ふっ」

「その笑みなんですか!？」

「絶対勘違いしてるだろガネーシャ!!」

「なるほど! 【凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼】がこれまで公にできなかったわけだ!! ヘステイアと犬猿の仲であるロキの眷属としてこれまで想いを封印していたが、来るべき戦いを予感したことでの自らの戒めを解き放つたのか!!」

絶対違います。

不味い、シリアスな空気が完全に吹き飛んだよ。

まさかここでベートさんがここまで存在感を放つとは思わなかった。

このまま勘違いさせていたら、いつかとんでもないことになる。

オラリオに来てから……スキルを発現させてから磨き上げられた直感がそう教えてくれた。

僕はそう思い、ベートさんの奇行はひみつ道具によるものであると訴えたが。

「なるほど……つまりガネーシャだな!？」

「どういうことですか!？」

「俺に任せろ!!」  
「アイアム・ガネーシャ」ほど大きく造るのは、シャクテイに小遣いを握られた俺では困難だが、ギルド前に銅像を建てるくらいならば何とかなる!!」

「何を言ってるのか分からないですけど、絶対に誤解解けてませんよね!？」

銅像ってなんだ。

まさかベートさんが愛を叫んだ場面を銅像にする気なのだろうか。

止めてあげてください。多分、もう元に戻ってます。

人の黒歴史を善意で掘り起こさないで。

結局、ちゃんと誤解を解くまで30分くらいかかった。



「そうか勘違いだったか！ガネーシャ超反省!!」

ガハハと笑う浅黒い肌の偉丈夫に脱力するベルとヘステイア。

なんとかギルド前にベートの銅像が建つのは阻止できた。

「しかし第一級冒険者を惑わすアイテム……ひみつ道具か。確かにヘステイアが今まで秘匿していた事も頷ける」

困難ではあるが【おうじゃ猛者】にキューピッドの矢を刺すことができれば、それだけでレベル7が都市の敵となった死の七日間を再現できるという事だ。

出てくるひみつ道具がランダムで、計画的に使うことができないというのは弱点だが、アドリブでその弱点を克服してしまえば何でもできるスキルだと言っても過言ではないだろう。

「しかし例の魔石の大量発生が少年のスキルによるものとは……」

「ご、ごめんささい」

「いや！あまり気にするな！故意ではないのだから!!」

流石に都市を賑わせた騒動の真相にはガネーシャも神妙な顔にならざる得なかった。

闇派閥イグイルスにとってみれば、あの騒動こそすべての歯車が狂った原因。血眼ちまなになって真相

究明に動いていることは想像に難くない。

そう簡単に暴ける答えではないが、ベルの存在が気づかれる恐れもある。

（情勢に与えた影響が大きいひみつ道具のことは何時までも隠すのは不可能。対応を誤ればヘステイアたちは闇派閥イヴィルスの格好の餌食となってしまう）

【ガネーシャ・ファミリア】は正義の組織とは言え、構成員はあくまでも人間。

ふとした気の迷いで重要な情報を漏らしてしまう者もいる。

ガネーシャの頭の中では、誰にベルの特異性を打ち明けるべきかピックアップが始まっていた。

「ガネーシャ。色々考えこんでいるところ悪いんだけど、もう一つお願いがあるんだ」

「ム？」

「ほら、キューピッドの矢で調教テイムしたモンスターだよ」

「おお!!例の極彩色のモンスターか！」

「うん。あの子を君たちのファミリアで預かってほしいんだ。オラリオで唯一調教師テイマーを

有することを許された【ガネーシャ・ファミリア】にね」

キューピッドの矢による効果でベルたちの味方になった花サイオラス。

こちらの勝手な都合で操ってしまったこともあり、用が済んだら処分などという酷い扱いはしたくなかった。

とは言え、この巨大なモンスターを隠しながら飼育するのは「ヘステイア・ファミリア」には不可能。

そこで、巨大なモンスターの飼育スペースを所有している彼らに引き渡そうと考えていたのだ。

……最もそれはガネーシャとあることについて話し合うための口実でもあるのだが。「ベル君。ボクはこれからガネーシャをあの子の下に連れていく。君はその間にひみつ道具の詳細をこの用紙に書いておいてくれ。いやー突然こんなこと言いだして悪いね」「は、はい」

ベルを適当な理由でホームに留める。

それを見てガネーシャも他言無用の話と察し、護衛を残した。

護衛たちはかなり渋ったが、ホームを魔改造するという脅しに屈したらしい。

ヘスティアとガネーシャの二柱はホーム近くの広い空間に向かう。

広い、といっても下水道の中にしてはといった感じでヴィオラスは窮屈そうだったが。

「これは……」

それを見た瞬間、ガネーシャの顔色が変わった。

仮面に覆われていない口元に浮かぶのは驚愕。

「……これを他に見た者は？」

「ロキがちらっと見ただけ。ボクをからかうのに夢中だったからあまりモンスターは意

識してなかったみたい。……それでも、もしかしたらとは思っていると思う」

咄嗟に他の目撃者を確認するガネーシャ。

これがバレたら下界を揺るがす一大事だと理解しているヘステイアは素直に答える。

「やっぱり分かるよね、この異常性」

「ああ……これは、ガネーシャだ……」

「ホントに分かつてるんだらうな？」

「スマン、間違えた」

いつもの口癖に思わずジト目になるヘステイア。

だが、ガネーシャの様子がおかしい。

驚いているのだが、モンスターに向ける視線は未知に対するものではない。

どうしてこれがここにいるのだという既知に対する驚きのような……

「そうか、恋心を植え付ける矢。心を持たないはずのモンスターに人間的な感情を植え付けた結果、人間の心を学習したのか……」

「ガネーシャ？」

「……これは隠し立てできんな」

いつも奇行に走る彼が減多に見せない。偉大なる神の顔となった。

それはつまり、目の前にいるありえない存在はそれだけ危険だという事だ。



「ヘステイア。お前には話しておこう。このモンスターを知ってしまったお前にはその権利がある」

「……いいのかい？これ、不味い奴だろ」

「お前が邪な企てで動く神ではないことは知っている。ウラノスには後で俺から説明しよう」

ウラノス。

都市の最高神の名前にヘステイアは身体を固くした。

間違いない。これは閻派閥<sup>イヴイルス</sup>以上の厄ネタ。

可能性が蔓延る下界が生み出した特大級の爆弾だ。

「このモンスターは通常のモンスターではない。理知のあるモンスター……異端児<sup>ゼノス</sup>だ」  
物語の流れが変わる。

もう、引き返せない。

## パーティー結成

ダンジョンに潜る時、ベルはいつも一人だった。

団員が一人しかない新興ファミリアの定めなのだ、現状に不満を抱くことは無かったが、それでもダンジョンに潜っている時に連携してモンスターを倒すファミリアや、探索でヘトヘトになった帰りに見る他のパーティーの冒険者たちの様子を見るたびに、羨ましいという思いはあったのは否定できない。

他のファミリアに助力を求めようにも、ベルには実力がない、お金がない、人脈がない。

ないない尽くしの新米冒険者。生活が懸かっているダンジョン探索にそんな奴を連れていくことは無いだろう。

命を預ける仲間と同じファミリアの方が信用できるに決まっているし、ファミリア外の冒険者と組むならば、そのファミリアの団員に勝るものがなければならぬ。

ベルがこれならば勝っているだろうと自信を持って言えるのはひみつ道具のみ。

他言無用とヘスティアに釘を打たれている以上、強力なひみつ道具を交渉材料に加えることもできない。

何かほかに有益な魔法なりスキルなりがあればいいのだが、そんなものそうポンポンと生えては来ないだろう。

だからパーティーのメンバーを見つかるまでは、一人でやるべきなのだろうとも思っていた。

彼女と出会う幸運がなければ、僕のパーティーデビューはずっと先だっただろう。

「ベル様、改めてリリを正式に雇っていただいてありがとうございますとございます」

燐光を宿すダンジョンに入ったリリは、振り向いてお礼を言う。

ありがとうは僕のセリフなんだけだな。どう考えても闇派閥イヴイルスに目を付けられた僕との契約なんて打ち切られたっておかしくない。

「今日はどのくらいまで潜りましょうか？」

「えっと、とりあえず7階層でまた粘ろうと思ってるんだけど、どうかな？」

念願のパーティーを組めたのはいいけれど、それで調子に乗って階層を下げればエインさんに怒られるのは火を見るより明らかなことだ。

一歩前進したら急がずに地盤を整える。冒険は最小限に。

「ベル様がそうお決めになったのなら。ですが、いいのですか？リリは戦うことができませんが、このパーティーにはもう一人冒険者様がいます。もつと下の階層も目指せるかと」

そう言いながらリリが視線を向けるのはヒューマンの青年。

彼の名はモダーカ。

【ガネーシャ・ファミア】から派遣された僕の護衛。

「えつと……モナカ様でしたか？」

「モダーカだ」

「失礼しました。モダーカ様の實力ならば下層のモンスター程度敵ではないでしょうし、もう少し強気の階層を目指してもいいのでは？」

「確かにモダーカさんなら下層のモンスターくらいわけないだろうけど、モダーカさんはあくまでも閻イヴァイルス派閥に対する護衛で、僕たちのパーティーってわけじゃないから」

「大体、俺がこいつに掛かりきりでいられるわけじゃない。上級冒険者が下級冒険者の探索に首を突っ込みすぎると、下級冒険者は育たないからな。俺はヤバくなった時だけ手を貸してやる」

彼の言う通りだ。

神様の受け売りだけど、僕たちの恩恵ファベレは倒した敵の数じゃなくて、その人にとってその行動がどんな意味があるかが重要だ。

先輩のお零れにあやかる様な人間を神の刻印は評価しない。

努力しない冒険者は行き詰まる。

どんなに強力な魔法を持っていても、どんなに希少なスキルを発現させても、持って生まれた才能に胡坐をかいているだけの冒険者がランクアップを果たすことは無いのだ。

「それより、リリは大丈夫？ 魔石とかドロップアイテムとかで凄く重くなると思うんだけど」

リリの背負うバッグバックを見る。

小人族バルツムの彼女よりも大きなそれは、確かに僕が持っていた支給品のバッグバックよりは多く収納できるのだろうか、あんなにたくさん入れたら重量がすごそうだ。

「ご心配なく。スキルの補助で荷物が負担になることはありません」

「重量に対する能力補正か？」

「はい。運搬作業で足手まといになることはありませんよ」

物を運ぶときに補正をかけるスキル。

そんなものもあるのかと驚く。

ひみつ道具は色々な種類があるけれど、冒険者のスキルも多様性は負けてない。

「あと、本当に契約金とか前払金とか払わなくてもいいの？」

もう一つ、気になっていたことを確認する。

僕とリリの契約に前金やら契約金なんてものはない。報酬はその日の探索でダン



普通の少年だと思つた。

物腰が丁寧で、思いやりもできる。荒くれ者ばかりの冒険者には正直向いていない。だから、精々半月程度の経験で7階層キャリアに向かうと言つていた時は呆れたものだ。

新米冒険者が陥りがちな慢心だと。安全な上層に満足できなくなつて、十分な積み重ねをせずに到達階層を増やす愚行だ。

それでもモダーカは何も言わなかつた。

ファルナ恩恵を授かつて全能感を堪能しているうちは、そんな先輩の正論など鬱陶しいだけだ。

恥ずかしながらモダーカにも覚えのある心理。

こういった場合は無理に論すのではなく、一度痛い目にあつて学ぶべきだ。

ランクアップを果たしているモダーカにとつてみれば、こんな上層のモンスターから冒険者を救ふことなど訳はない。闇派閥イツイルスも暗黒期ならばともかく、【ガネーシャ・ファミア】イツイルスがいるこの状況で襲つてくる可能性は低い。先の敗戦は闇派閥から大幅に力を奪つたはず。下級冒険者のために力を割く余裕はないだろうとモダーカは思つている。横やりはないだろう。

最も、この世に絶対などないので、気を抜くつもりはないが。

そうして7階層でのベルの戦いぶりを見た。

なんだコイツ。

まず現れたのはパープルモス。

自身の最大の武器である毒鱗粉をばら撒こうとするが、パープルモスの応戦距離に入った途端、ベルは勢いよく飛び出した。

パープルモスの毒鱗粉に即死性はないとはいえ、放っておけばボディブローのように徐々に体力は削られていく。だからこそパープルモスを見かけたら即対処。これが冒険者の常識だ。

これを見た時はまだ冷静でいられた。

よく勉強しているなど、お手本通りの行動を取ったベルを賞賛する余裕もあった。

しかしこの次が問題だ。

少し進むとキラアアントの大群に襲われたのだ。

その数5体。【新米殺し】とも呼ばれる凶悪なモンスターが、大量に現れる事態にモダーカは舌打ちした。

どこかのはた迷惑な冒険者がキラアアントを仕留め損ねたらしい。その証拠にベルの前に立つ一体は今にも死にそうだ。

キラアアントは死にかけると特殊なフェロモンで仲間を呼ぶ。

このままでは次々とキラアアントが階層中から集まってくるだろう。



(これは流石に新米には荷が重い)

痛い目に合うどころか一瞬でなます切りだ。

少し考えた後、モダーカはそう結論付けた。

これは自分の助けが必要だと、得物を抜こうとするとそれより早くにベルは動いていた。

「な、馬鹿！」

駆け出し冒険者の余りにも無謀な突貫に、思わず叫ぶモダーカ。

パープルモスへの対処から、よく勉強している新人だと思っていたからこそ、ベルがこのような自殺紛いの行動に出ることが予測できなかった。

脳裏によぎるこれから起こるであろう惨劇を阻止すべく、モダーカはベルの下に向かうとして、目の前で展開された光景に足を止める。

宙にキラアアントの首が浮いていた。

人類に仇を成すモンスターでありながら、呆然としたその顔はどこか間拔けに思える。

恐らく己も似たような面を晒しているのだろうとモダーカはぼんやりと考えた。

斬ったのだ。

鎧のように体の表面を覆う甲殻の隙間を狙い、奥の肉を断つ。

駆け出し冒険者には困難な、対キラークラントのセオリーをあつさりこなす。

(あいつ、立ち止まっていなかった……)

モダーカが驚いているのはモンスターを倒したことはない。

倒すだけならば、ステータスが低くても研究を万全にしていれば可能だ。珍しいがあり得ないことでもない。

しかし、ベルの倒し方が問題だった。

通常、経験の浅い冒険者がキラークラントと戦う時は足を止める。熟練の冒険者からすれば敵の前で立ち止まるなど失笑モノだが、甲殻を斬るステータスも、急所を的確に狙う技術もなければ必然的にそうなる。

そして棒立ちになった冒険者の中には、時折キラークラントの爪を無防備に食らってしまうものもいるのだ。キラークラントが「新米殺し」と恐れられる理由は、堅固な防御力に凶悪な武器<sup>爪</sup>を併せ持つから。この組み合わせに初期の頃は誰でも苦戦する。

「ガネーシャ・ファミリア」の先達として、新人のお守りをさせられることもある青年はよく、そのことを知っていた。

だがベルは止まらなかった。

キラークラントに反撃の隙を与えないように、スタートダッシュの勢いのままにキラークラントの首を跳ね飛ばしたのだ。

立ち止まって攻撃するのと、走りながら攻撃するのでは、後者の方が圧倒的に難易度が高い。

体が揺らされて腕がブレがちになり、タイミングよく腕を振るわなければ力も中途半端にしか入らない。おまけに高速で動くほど目標の目視が困難になる。人間は並行してアクションを起こすことが難しいのだ。

しかしベルはその難易度の高い行動を成功させた。

ステイタス頼りの強引な攻撃ではなく、確かな技を感じさせる精密さで。

まるで自分の体をどう動かせばいいのかが最初から分かっているようだ。

「お前………初心者だよな?」

「?はい。まだ半月くらいしか経ってません」

「俺の知っている初心者は、キラーアントをナイフ一振りですべて同時に葬ったりしないんだがなあ」

あつさりとキラーアントを全滅させたベルは自分の異常さに気が付いていないようだ。

こいつヤベエ。

ぶっちゃけモダーカはリリのことを胡散臭く思っていた。

将来性に期待して契約金なしとかあるわけねーだろとも。



にも関わらず、常識はずれな成長速度。

前回の探索の時よりも動きが鋭くなっているようにすら感じられる。

(それに、成長しているのはステイタスの上昇だけじゃない)

キラアートの爪を回避すると同時に放った蹴り。

純朴な少年らしくない野性的な動きには見覚えがあった。

先のレクリエーションで、偶然その戦闘を見る機会があった【凶狼】<sup>ヴァナルガンド</sup>のものだ。

威力は比べ物にならないが、あの超攻撃的な姿勢をベルは取り入れ始めている。

同じく敏捷性にもものを言わせたスタイルが共通しているからか、その動きに違和感はない。

モダーカもベルの一連の動きが今日初めて取り入れたモノとは思わないだろう。

(冒険者としての可能性は底知れない……でも人間的には未熟。付け入るスキがある

……そう、思ったんですけどね)

チラリと群衆<sup>ガネーシャ</sup>の主の紋章のついた装備を身に着ける青年を確認する。

先の闇派閥<sup>イギリス</sup>との一件で、ガネーシャ・ファミリアが少年の護衛についてしまったのは

想定外だ。

護衛が付くのはしばらくの間だけだろうが、小悪党としては非常に不味い。

第三者から見て自分の胡散臭さは自覚している。

ベルの知人に指摘された程度ならどうとでも誤魔化せる自信はあったが、「ガネーシャ・ファミリア」はダメだ。

公的な治安機関である彼の言葉の信頼は絶大。

お人好しのベルでも無視できない影響力がある。

それどころかりりのこれまでの悪行に勘づかれる可能性もある。

「ガネーシャ・ファミリア」の悪行に対する嗅覚は有名だ。どれだけ隠していても、彼らはその隠そうとした行為から真実を探り当てる。

これ以上ベルの近くに居るのは危険。

身の安全を考えるのなら契約などすべきではなかった。

しかし、リリはベルが正契約の話を持ち掛けた時、一も二もなく飛びついた。

「ガネーシャ・ファミリア」を騙し通せる自信があつたわけではない。

リリはそんな確証のない賭けなどやらない小人族だ。

それでもこの契約を引き受けたのは現実逃避だ。

もはや「ソーマ・ファミリア」は自分を逃さない。この少年との契約関係が切れれば、ザニスはリリを使いつぶすだろう。聡明なリリの頭脳はそう理解していた。

新しい契約相手を探す時間などない。リリはベルとの契約に縋るしかないのだ。

「皮肉ですね……」

呪縛を忘れられるこの時間は、嘘と悪意で造られた偽りの関係。きつとすぐに終わりが来る。

【ガネーシャ・ファミリア】が気づくか、少年が気づくか、リリが終わらせるか。短い付き合いのつもりで造った歪な空間がリリの最後の寄<sub>よ</sub>る辺<sub>べ</sub>とは、天の神々が見たらきつと大笑いしていることだろう。

自分の滑稽さを自嘲しながら、それでもリリは現実逃避を止められない。

あの男に会いたくない。

あの家<sup>ホーム</sup>に帰りたくない。

【ソーマ・ファミリア】を少しでも忘れていたい。

「リリ、そろそろ行こう」

無意識に魔石集めを修了させていた少女に少年は話しかける。

何も知らない眩しい笑顔。

その温かさは少し、心地よくて……

リリは心を氷で覆う。

知ってはいけない。溺れてはいけない。

心を許せば後がつらくなる。

「はいーベル様!!」

小人族バルウムの少女は、従順な少女の仮面を被って素顔を隠す。

仮面の奥の自分の表情に気づかないふりをして、リリはダンジョンの奥へ足を進めた。

「……」

そんなリリを見てベルは少し悲しそうに表情を歪めた後、頭を振って彼女の後を追うのだった。



## ごめんなさい

オラリオの観光名所。その多くは有力ファミリアのホームなのだど誰かに聞いたことがある。

ホームとはファミリアの誇りであり、帰るべき場所。だからこそ、神々はありつたけの資金を持つて最高のホームを作ろうと躍起になる。

派手好きならば絢爛とした宮殿のようなホーム。職人肌ならば仕事のためにとことん効率化したホーム。あるいは下界の人間たちにはまだ早すぎる先鋭的なデザインのホームなんてものもあるかもしれない。(アイアム・ガネーシャとか)

何れにせよ、有力なファミリアとなればホームにとんでもなくお金をかけているものだ。ヘタにいいホームを作ったせいで貯蓄がない……なんて笑い話もよく聞く。

今、僕の目の前にそびえ立つホームも、そこで暮らすS級ファミリアに相応しいお金がたっぷり込まれているのだろう。

僕たちのホームはタダ同然の事故物件だから、こんな立派なホームの前に立つと緊張する。

最も、この緊張はそれだけが理由じゃないけれど。

「ベル様？本当に行くんですか？」

リリが心底嫌そうに聞いてくる。

正直僕も嫌だ。でも、あれを聞いて行かない訳にはいかない。

「迷惑かけちゃったし、ちゃんと謝らないと……」

そう、僕たちが「ロキ・ファミリア」のホームである黄昏の館の前に立っているのは、決して観光している訳じゃなく、先日の騒ぎについて謝りに来たのだ。

特に、ベートさんに。

あの人がキューピッドのやによつて植え付けられた恋心の暴走は、今やオラリオ中に知れ渡り、神々によつてあることないことを脚色されている。

秘めていた欲望を解放したあの、いや、もともと冒険者たちに厳しかったのは年増（ロリコン基準）ばかりだからだの、好き勝手言われている。

中にはギルドの幽霊ゴーストによるロリコン化の呪い、なんてオカルトな噂もあったりするから大変だ。明らかに愉快犯神様たちが引つ掻き回しただろうと想像できる。

「いいと思いますけどねえ……道を塞いだあっちも悪いですし」

「どつちが悪いって話じゃないよ」

神様も「ロキと関わるだけ疲れるし、いかになくていいよ」とは言っていたけど、人の心を徒に混乱させるようなことをしたならやっぱりナアナアにしちゃいけない気がする

る。

今まで忙しかったから来れなかったけれど、今日こそちゃんと謝らないと。

「まあ、【まあまあ棒】がありますし、怒っていても大丈夫ですな」

「……」

はい。ウソ言いました。

確かに忙しかったけど謝りに来るくらいの時間はありました。

でも怖いんだもの。

割と殺されても仕方ないことしてると思いますよ神様。

行かなくちやいけないのは分かっているけど、中々踏ん切りがつかなかった時にスロツ

トに現れたのがまあまあ棒だ。

その名前から怒りを鎮める効果があるのではないかと考えて、今日行動に移ったとい

うわけだ。

さつき神様に「ジャガ丸くんって色んなソース出してますけど、節操がなさ過ぎてぶつちやけ迷走してますよね？」とジャガ丸くんを侮辱(?)する発言をしながら口元をまあまあ棒で押さえたら、「ジャガ丸くんを馬鹿にするなー！」とキレていた神様の怒りが引つ込んでいたから間違いないだろう。

ふつつつと腹の底に煮えたぎるものを感じると言っていたので、時間稼ぎにしかなら

ないだろうが。

怒りを鎮めるひみつ道具を持っていくなんて誠意が足りないと自分でも思うけど、あのままだと怖くて無駄に時間を浪費してしまうと思っただのだ。

(神様に持たされた菓子折ジャガたん神の合巻せりは潰れてない。謝罪のセリフも暗記している……)とは言え、いざその時が来るとなるとウダウダしてしまうもの。

服装に失礼はないかな?とか、アポイント取れなかったけど大丈夫かな?とか。今更考えても仕方のないことを考えるフリをして時間を稼いでしまう。

(ああ!もう!考えていると一歩も動けない!)  
パンパンツ、と自分の顔を叩いて気合を入れる。

まあまあ棒はただのお守り。誠心誠意謝罪しなければ意味はないのだ。  
勇気を振り絞って、男女二組の門番に声をかけようと一歩踏み出した時。

「あっ」

「……」

目的の狼ウエアウルフ人が入り口から出てきた。

突然現れたベートさんに僕とリリは思わず声を出してしまう。

それに対してベートさんは無言。無表情。

感情が見えないのが逆に怖い。

虚無、とでも表現できそうなほど伽藍洞がらんどうな印象を与えるその顔は、極東の芸に使うという能面のように不気味だった。

まるで感情が抜け落ちたような生気のないその冒険者が、あの日、地下水路で出会った冒険者とは到底思えない。

「……………テメエら」

ベートさんは僕たちを見ると初めは静かに見つめるだけだったが、やがて全身の毛を逆立たせる。

どうやら感情を失ったというのは気のせいだったらしい。

色を失ったかのように消失していた生気がどんどん増大しているのが分かる。……それを人は怒りというのだろう。

「ノコノコホームに来やがって……………」

噂モンスターレックスにきく階層 主のように、殺気だけで空間が振動する。

狼王の怒りを察知して、黄昏の館近くで食べ物を啄つばんでいた小鳥たちが一斉に逃げ出す。

あ、駄目だコレ。

第一級冒険者の威圧感にランクアップも果たしていない新米が抗えるはずもなく、ベールの足は自分のものではないかのように動かなくなつた。

リリも圧倒的な覇気の奔流のせいで顔を青くしている。

そして、なにしたんだ！という無言の悲鳴を門番はあげていた。

ごめんなさい。

「ベル様!? あれを!?!」

「まあま……………」

「させるか! オラア!!!!」

まあまあ棒を取り出してベートさんに向けたところで世界がグルンツと回った。

雲一つない青空だ。

まるで鳥のようにその中に浮かぶ僕は、視界に移る景色に混乱する。

(あ、あれ? ……どこ?)

時間が引き伸ばされたように遅く感じる中、僕は景色の隅に鋭利な建物を見つける。

あれは……黄昏の館だろうか?

先ほど見た物より短く感じるそれを確認した時、自分が空中に蹴り上げられたのだと

分かった。

痛みすら感じない早業。

全く予備動作を知觉できなかった僕には、辛うじてまあまあ棒を突き出す動きにカウ  
ンターで合わせられたのだろうと推察できただけ。



かったし。

今だけは恨みまずよ神様。

「アーリリガワルカツタデス。ベートサマゴメンナサイ」

「そのガキの誠意の欠片もない謝罪もむかつくけどな……」

そしてリリの棒読みによる謝罪もひどい。

薄々感じていたけど、リリつてももしかしなくても冒険者が嫌いなんだろうか。

冒険者を見る目が時々厳しいと言うか……今ほどじゃないにしても、リリの様付けには複雑な感情が見え隠れしているような気がする。

出だしは最悪だ。

これ、喧嘩売られてるって思われてもおかしくない。

「本当にごめんなさい……あの、これよろしければ」

ロキ様には会いたくなくても、一応悪いとは思っていたベートさんに何もしないのもどうかと思っていたのか、神様が僕に持たせたジャガ丸くんの詰め合わせを入れた袋を手渡す。

「……なんでジャガ丸くんなんだよ」

「神様がこれが最上級のお詫びの品だって聞かなくて」

これに関しては本気で言っていたような気がする。



稼ぎが少なく、バイトの賄い物のジャガ丸くんでお腹を膨らませていたことが悪かったのだろうか。神様は立派なジャガ丸くん中毒者ジャンキーだった。

「お前、もつと自分の意見言つとけ。神なんざ手綱を握らねえと際限なく暴走するもんだぞ」

「……はい」

「ヘステイアさまはのんびりした性格ですけど、そういう神様でもこだわる時は妙にこだわりますからね」

ベートさんやリリの言っていることはよく分かるんだけど、相手は神様だし、中々難しい。

神様もちゃんと考えがあつて、同行に拒否したように見えたり、あまり口出しすべきじゃないと思つただけ。

(でも二人に言われるつてことは、あまり良くない状況なのかな)

取り敢えず帰つたらちゃんと二人で話し合おう。

「それで？ ベート様は今、どんな状況なのですか？ 市中だと噂に尾ひれはひれついていますが」

流れを変えないと脱線し続けると思つたのか、リリがベートさんにあの後どうなったかを聞いた。僕は怖くて聞けなかつたのに凄いで胸だ。

するとベートさんは露骨に嫌そうな顔をした後、舌打ち一つして教えてくれる。

「別に大して変わらねえ。雑魚どもに目の敵にされんのは今に始まったことじゃねえ」

「フン、と鼻を鳴らすベートさんだったが、そこには虚勢もあるだろう。」

その台詞には彼らしい傲慢さが欠けていた気がした。

「うちのファミリアの連中は、今はゴタゴタしてそれどころじゃねえしな」

「? ? なにかあつたのですか? ?」

「闇派閥だよ」

なんでも先日の大規模テロで使われたモンスターの出処<sup>でいころ</sup>を調査しているらしい。

僕たちと地下水路であつたのも、その調査の一環であるんだとか。

「フィンの指示で18階層<sup>リツイラ</sup>に何人か行くんだと」

「<sup>アンダーリゾート</sup>迷宮の楽園ですか。確かにダンジョン内で運営されているあの街なら、ダンジョンで

起きた何かしらの痕跡を発見できるでしょうね」

（ダンジョンの中に……街?）

気になる言葉があつたが話の腰を折るわけにもいかない。後でエイナさんに聞いてみよう。

リリが言うには上級冒険者の集まるリヴィラならば、深層のモンスターを地上に降ろそうという動きに全く気が付かなかつたとは考え難いのだという。

それこそ、ダンジョンにもう一つ入り口があったということがなければ。

「今は18階層に降りるための準備をしてるんだとよ」

「【ロキ・ファミリア】なら中層程度、その日のうちにでも行けそうですよ」

「ああ。だがフィン親指が疼くらしい」

親指？何かの暗示だろうか。

分からないことだらけの僕は今まで会話に入れなかったけど、一つ気になることがあった。

「あの、ベートさんは行かないんですか？」

「ホームを開けとくわけにはいかねえだろ。遠征でもなけりや幹部全員が出払うことな  
んぞねえよ」

「……アイズさんは行くんですか？」

「ああ」

リリは言った。「【ロキ・ファミリア】ならば中層程度、その日のうちに行けると。

遠い。僕の目標はとんでもなく遠い。

今の僕は上層でやつとなのに、あの人たちはその上のランクすら散歩気分で踏破できるんだ。

改めて突き付けられた現実に、しかし、僕の心が揺らぐことは無かった。

(必ず……僕もその場所へ)

心の中で再度決意を固める。

ふと、ベートさんから視線を感じた気がした。

何かと思つて彼の方を向くが、ベートさんはリリの方を見て「うざつてえのはこの騒動が終わつてからだな。面倒な噂流しやがつて」と話していた。……気のせい、だったのかな。

「……」

「……」

「……」

話すことがなくなると、気まずい沈黙が漂う。

あまり長話するのも失礼だし、この辺りで区切るべきなのだろうか。

でも、謝罪する側からそれを切り出すのは失礼なような気もする。

悶々としていると、ベートさんは舌打ちを一つし、僕からまあまあ棒をひったくつた。

「あ、あの……っ？」

「こいつを口につければ怒りを抑えられるんだな」

「は、はい」

まあまあ棒の使い方を確認したベートさんは、自分の口に白いバツ印を当てた。

驚き、目を見開く僕たちを尻目に、ひみつ道具を外したベートさんは僕を真っ直ぐ見た。

「お前を意気地なしだと見下したことは謝る」

「……………え？」

「ミノタウロスから逃げるお前を馬鹿にして、嘲笑ったこともあった。だが、この前の戦いでこつちの目が節穴だったと分かった。……………悪かったな」

突然言われた謝罪にどうすればいいか分からず、あたふたとしてしまった。

それを見て、ベートさんは不機嫌そうになり、もう一度まあまあ棒を口に当てる。

「……………じゃあな、精々くたばるんじゃねえぞ」

そう言うと、ベートさんはまあまあ棒を僕に放り投げて踵きびすを返した。

(……………何だったんだろう)

粗暴な冒険者というイメージだった青年の予想外の行動で、未だに戸惑い続ける。こうして僕の謝罪はよく分からないまま終わってしまった。

## アドバイザーの悩み事

ドラえもんとおび太から様々な大冒険を聞いていたベルは、その話に度々出てくるひみつ道具に心を踊らせた。

どこでもドア、タケコプター、タイムマシン……

子供の空想を形にしたような夢のアイテムを不思議なポケットから取り出す瞬間は、成長して、必然的にお伽噺を読む機会が減ったベルであってもワクワクする。

スキルを手に入れて沢山のひみつ道具を使っていると、毎日行っているステイタス更新の時に、スロットに聞いたことがあるひみつ道具の名前がないか胸を高鳴らせる。

今日はそんなドラえもんたちから直接聞いたことがあるひみつ道具の名前をスロットから見つけ、意気揚々とダンジョンに潜っていた。

「見ててよりりり！このひみつ道具はすごいんだ」

「りりにはタダのお団子にしか見えませんが……」

りりの訝しげな反応も当然だろう。

今、僕が持っているのは網状の袋に詰められた丸い団子たち。安っぽいし、とてもすごい能力を秘めているようには見えない。

だが、このひみつ道具にはこれまでの常識を覆す力がある。

「これはお尻印のきびだんごっていうひみつ道具で、このきびだんごを食べた動物は食べさせた人の言うことをなんでも聞くようになるんだ」

「ティマーの存在意義を全否定するアイテムですね」

最近分かってきたけどリリって結構毒舌だ。

隣にギルド公認のティマーファミリアがいるのに。

「……モンスターに効くのか？あれを動物と一括りにするのは抵抗があるんだが」

今日はモダーカさんが外せない用事があるということで、その代役としてイルタさんが来てくれている。

ティマーとしてモンスタアの調教を何度も行っている彼女からすれば、おやつ一つでモンスターが言うことを聞くのはなかなか信じにくいのだろう。

「キューピッドのやは効きましたから、これも効果があるのかなって思ったんですけど」  
「ああ、あの花だか蛇だかよくわからん奴か」

ヴィオラスは市民の混乱を避けるという理由で、一般には伏せられて飼育されている。  
る。

イヴァリス

闇派閥の手札として利用されている謎多き新種だから、ギルドもその研究の必要性に理解を示して黙認したらしい。

とは言えあのヴィオラスを見る目は、今のイルタの吐き捨てるような表情と言葉から読み取れる通りかなり悪い。

唯でさえ人間にとって天敵と言っているいいモンスターなのに、つい最近オラリオの街で暴れまわったのだ。

都市の憲兵たる「ガネーシャ・ファミリア」としてはこれ以上ない怨敵だろう。

ヴィオラスを見る視線には殺気すら含まれていた。

「凶体はデケエし、餌はたんまり食うし……」

必要な情報を抜き取ったら始末すべきだ。

イルタは言外にそう言っている。

多分、それは正しい。

コストから見ても、危険性から見ても、ヴィオラスを生かし続けるのは間違いだ。

それは理解している。理解しているけど……。

「……ベル様？どうかしたのですか？」

「えっ？な、何でもないよ」

危ない危ない。

ダンジョンであれこれ考え込むなんて集中力が足りてない証拠だ。

今のモヤモヤはまた今度改めて考えればいい。



「取り敢えず、このゴ布林で試してみましようか」

例の如く捕まえたゴ布林にきびだんごを食べさせる。

「ところでベル様。躊躇なくゴ布林の口に入れましたね」

「どういふことだ？」

「ひみつ道具の中には意地の悪い使い方な物もありますから、いつもならもつとあれこれ考えてから使用します」

確かにリリの言う通りだ。

食べ物型のひみつ道具といえども、その使い方は様々。

他者に食べさせて効果が出る物もあれば、自分が食べて効果を発揮する者もある。

場合によってはあのクイツクのような騒ぎのもとになりかねない以上、僕がこうした食べ物型のひみつ道具には特に気を付けていたことはリリも知っていた。

だからこそ、迷いなくゴ布林に食べさせた今の行動に疑問を感じているのかもしれない。

けど、今回は例外なのだ。

「実はこのひみつ道具の話聞いた時、モンスターに効果があるのか気になってドラえもんさん……このひみつ道具を貸してくれる人？……いや、猫？に実際に使ってもらったから見た目で覚えてたんだ」

「きびだんご」という異国情緒あふれる名前のお菓子はひどく印象に残っていた。

だからこそ、スロットに「お尻印のきびだんご」の文字を見た瞬間、あの時のひみつ道具だと喜んで具現化した。

「……………あれ？でも何か名前が違うような？」

「……………あの、不穏なこと言うの止めてもらっていいですか？」

きびだんごというワードで浮かれていたから、よく考えずにダンジョンに来たけれど、前半こんな名前じゃなかった気がする。

確か異世界の英雄譚が元になっていると聞いたはず……

お尻という人が英雄なのだろうか向こうは？

袋のマークもよく見たら違うような気がしてきた。

「まあ、使ってみれば分かるかな？」

「ベル様、その楽観で地面を泳ぐゴリラが生まれたのをお忘れですか？」

「す、すいません……………」

(どういふことだ?)

リリの最も過ぎる指摘に言葉が詰まった。

あの日の出来事を知らないイルタさんは分かっている様子だったけど。

「と、取り敢えず一旦吐き出させて……………あ、背中叩いたら飲み込んだやつた」



「……は？」

どうも中途半端にひみつ道具の知識があったことによる弊害らしいが、それでも普段の慎重さがあれば探索を中断するほどの大惨事は防げたはずだ。

最近、ひみつ道具を使うことに慣れ過ぎたのだろう、気が緩み始めている。

ベルの沈んだ顔を見るのはつらいが、ここはしっかりとやっておくべきだ。

「君のスキルは色んなことができる。良くも悪くもね？そのことをしっかりと自覚してスキルを使おう？」

ベルがスキルを試しているのは、いざという時に使える能力を把握するため。

しかし、試してる瞬間に大きな事故が起きるようでは意味がない。

今回は被害はベルのパーティーで済んだが、次はどうなるか分からないのだ。

「あまり言いたくないけど、こんな事故が多いとスキルの使用を制限しなきゃいけないかもしれない」

エイナにとってそれは最終手段だ。

命の危険があるダンジョンでわざわざスキルを封印するなど自殺行為だ。

先達がすっかりフォローしてくれる環境があるならばともかく、「ヘステシア・ファミリア」はベルしか団員がいない。「ガナーシヤ・ファミリア」の護衛も探索には余り関わらないそうだし、そもそもそんなに長くベルに掛かりきりと言うワケでもないだろう。

そんな中でスキルに制限がかかると、いざという時に動けなくなる。

そうやって悩む僅かな時間が冒険者の生死を分けるのだ。

もしベルのスキルを制限したとして、それが原因で彼が死ぬようなことがあればそれはエイナが殺したも同然だ。

「ごめんなさい……もつというんな可能性を考えてから試すべきでした」

幸いなことにベルは素直な少年だ。

自分が悪かったと思えばすぐに反省して、次に生かせる。

これならば今回は注意だけで制限を加える必要はないだろう。

(まあ、気が緩んじやうのも分かるしね)

ベルの成長速度は異常だ。

本来、半年近くかけなければならぬアビリティ評価に半月で辿り着いているのだから。

そうなるも器や技量に比べて心構えが不十分になるのも頷ける。

更にベルは「ロキ・ファミリア」との戦いに巻き込まれてしまった。

レベル1では異次元ともいえるその戦いを経験してしまったことで、上層のモンスターに対する危機感が麻痺してしまっていたのかもしれない。

きつと何とかなるといふ漠然とした慢心。

それが今回の事故の原因だ。

今後の勉強では単なる知識以上に、冒険者としての意識を向上させる必要があるだろう。

「二人にはちゃんと謝った？」

「はい。……どっちもカンカンでしたけど」

それはそうだろう。

汚い物を見せつけられれば怒る。

モンスターに下剤を食べさせるなんて、故意でなくともいい気はしない。

とは言え、悪意を持って行ったことでないことにいつまでもこだわる二人でもないだろう。

ベルの人間関係に致命的な亀裂が入ることは防げた。

……リリは暫く団子を見ると過剰反応するようになったらしいが。

「それで……例のサポーター。リルルカ・アーデ氏とはうまくやれてる？」

「はい……とは言えないかもしれませんが。まだ、リリは僕に心を開いてくれてないかもしれないですから」

エイナの頭を最も悩ませるのは、最近ベルが契約した小人<sup>パルゥム</sup>族だ。

神ヘステイアによれば少々怪しいところがあるという少女と、目の前の少年はあつさ

りと本契約を結んでしまったという。

その理由は少年らしい、好ましいものだったが、専属アドバイザーとしては気が気でない。

「アーデ氏と契約を結んだ君の理由はともやさしいと思うし、尊重もしたい。でもね？少しでも危険だと思ったら、それに固執しちやいけないよ。冒険はあくまでも君の安全が第一なんだから」

リリの怪しい部分も多感な幼少期に暗黒期を生き延びた故と言われればそれまでだ。しかし、リリルカ・アーデという少女について何も分からない状況で無視して良い情報ではない。

ベルの優しさは美德だが、オラリオではそう言った人物が食い物にされてきたという悲しい現実がある。

エイナとしては見ず知らずのサポーターより、まずはベルの安全を確保したい。

「分かっています。決して無茶はしません。神様と約束しました」  
冒険者は冒険してはいけない。

エイナの教えをしつかりと守るベルはそれを忘れてなどいない。

ならばいい。やると決めたことにこだわりすぎて、自分を危険にさらさないように線引きするのも冒険者の技能だ。

「うん。ならいいかな」

「はい。今日はありがとうございました」

「気をつけて帰ってね」

近況を報告したベルはヘステイアの待つ「アイアム・ガネーシヤ」に帰っていった。少年がいなくなっても、エイナを悩ませる種は消えない。

〔ソーマ・ファミリア〕……〕

良くも悪くも一般的な冒険者たちのファミリア。

それが今までのエイナの印象だった。

しかし、最近ソーマ所属の冒険者の素行が気になる。

（ベル君がソーマ・ファミリアの団員と組んだから、過剰に反応してるだけかもしれないけど……）

換金口の職員は口々に言う。

「ソーマ・ファミリア」は妙に金にがめつい。

何かに脅迫されているようにダンジョンで多くの魔石やドロップアイテムを収集し、換金口で少なすぎると怒鳴りつけて来るという。

受付嬢であるエイナも何度かそういった場面を目撃している。

荒くれものが多い冒険者のファミリアだし、珍しくもないと最近までは気にしていな



かったのだが、少し観察してみると違和感がある。

(あまり一つのファミリアに肩入れするのは良くないけど……)

調べてみる必要があるのではないか。

ベルが付き合っている団員のファミリアだ。

本当に信頼できる場所でなければ、彼がこの先どんなことに巻き込まれるかわからない。

完全にアドバイザーの領分を超えている気がしなくてもないが、このまま見過ごしてベルに何かあればエイナはアドバイザーの資格を失う。

これはベルの自己責任で済む話ではない。「ソーマ・ファミリア」の団員との契約時に、正しい情報を渡せなかったエイナにも責任はある。

(素行不良なファミリアの行動の原因が分かればギルドのためにもなる……つていうのは流石に厳しいかな)

もしかしたらこの行動の結果、クビが飛んでしまうかもしれない。

それなら仕方ないだろう。エイナは冒険者に少しでも長生きしてほしいのだ。

(もし、ギルドを首になったら「ヘスティア・ファミリア」に入れてもらおうかな?)

残念なことにエイナは戦闘などには笑えるくらい才能がないが、サポーターくらいならできるだろう。

そうなるとヘステイアが不機嫌になって、ベルは慌てて機嫌を直してもらおうとして空回りし、あたふたする。そんな光景が脳裏に浮かんできて、エイナはクスリと笑った。

## その出会いは早すぎる

神の刃が紫紺の光を瞬かせる。

ベルのステイタスが反映されたナイフは本来、上層のモンスターなど然したる抵抗なく切り裂けるはずだ。

しかし、ニードルラビットの首筋に叩き込んだ時に感じた抵抗が腕にのしかかる。

ニードルラビットが固いわけではない。

「ヘステイアナイフ」が突然なまくらになったわけでもない。

ただ、ベルの振る腕に力が十分に籠らなくなっていた。

ゼエ、ゼエといつの間にか肩で息をしていることに気づく。

喉が熱い。

痛いくらいに喉を行き来する空気が少年を苛んでいた。

(なんだか……体が上手く動かない……)

規格外の強さを持つ個体と出会ったわけではない。

常識はずれな数のモンスターたちと戦ったわけでもない。

あくまでもいつも通りの探索。

なのはどうしてこんなにも息が切れているのか。

「キチキチキチッ」

口を鳴らしながらキラアアントがベルに迫る。

本来ならば、ここ数日何体も倒した問題のないモンスターだが今は不味い。

体の疲労によって万全のポテンシャルを発揮できない今のベルは反応しきれていない。

不吉な光沢を放つ爪が、少年の体を引き裂かんと風切り音を発しながら線を描く。

「ベル様!」

少女の焦燥に満ちた声が遠くから聞こえた気がした。

このままではやられる。

そうベルは判断し、今日使える反則ひみつ道具を使用した。

「つ……ああああああああああああああ!!!!」

ベルがあらん限りの力を振り絞って大声を出すと、ベルの口から大きな文字のような塊が飛び出す。

固体は音速の勢いでキラアアントにぶつかり、攻撃を防いだ。

「コエカタマリン」。

その名の通り、服用者の声を固体にする効果があるらしい。

叫んだ内容によって形は異なるので、恐らくこの形はドラえもんたちの世界の文字なのだろう。

残念ながらベルには読めないが。

「はあ、ぐっ……かはっ」

しかし、それは悪手だった。

ただでさえ酸素が不足した体で、力を振り絞って叫んだのだ。

当然、ベルの体内から酸素はなくなり、体が悲鳴を上げる。

ぐらりと揺れる体。

それはすぐに立ち直れる程度のものであった。

ニードルラビットが追撃をかけてこなければ。

「——キイツー！」

人によっては可愛らしいと感じるかもしれない兎の鳴き声。

しかし、額から生えている赤黒い汚れが見える突起がそんな呑気な感想を許さない。

体がよろめいたことで、全体重を乗せる形になってしまった右足。

それが標的になっていると気づくベルは、腰を捻って無理矢理モンスター突進を回

避した。

その代償にベルは重力に逆らうことができず、無様にダンジョンの地面に尻餅をつ

く。

「ジャアアアアアアッ！」

そんな致命的失敗を犯したベルをモンスターたちは見逃さない。

コエカタマリンによって吹き飛ばされていたキラアアントが再び襲い掛かる。

咄嗟に左腕のプロテクターで鉤爪を防ぐが、体勢が不味すぎた。

押し潰すように全体重をかけてもたれかかってくる。動きを制限しようというのだらう。

生半可な刃を弾く甲殻に包まれたキラアアントは超重量のモンスターだ。細身の少年が押し返せるものではない。後は動きを封じてその凶悪な爪で獲物を引き裂くのみ。

ベルはエイナに散々叩き込まれた、新人殺しの有名な攻撃パターンに自分が見事にはまってしまったのだと気づいた。

(あ———)

終わった。

ミノタウロスの時と同じ、詰みの状況。

キラアアントがあざ笑うかのように口腔を開ける。

粘着質な唾液が滴る光景に、ベルは嫌悪を感じてもどうしようもない。

時間が止まってしまったかのような錯覚。視界の隅に懐から剣らしきものを取り出

そうとした姿勢のまま、表情を凍らせるリリの姿が見えた。

「おっと」

だが、ベルにとっては絶望的な状況も、この男にとっては違うらしい。

全く気合の入っていない声で、モダーカは蟻型モンスターを蹴り上げた。

すると、ベルがいくら腕に力を込めてもピクリともしなかつた巨体が嘘みたくにあつ

さり宇宙に浮き、ダンジョンの天井に激突したのだつた。

一瞬だけ何が起こったのか分からずに混乱していたベルだつたが、キラアアントが再び

自分に落ちて来る前にその場から飛びのく。

同時にベルが先ほどまでいたところにズドン、とキラアアントが落ちてきた。

「うわああああああ!」

キラアアントが体勢を立て直す前にその首を「ヘスティア・ナイフ」で切り飛ばす。

そして振り返ると今、まさにベルを貫かんと跳躍したニードルラビットに対して、短

刀をカウンター気味に見舞つた。

既に力強く空中に跳躍していたニードルラビットはその勢いのまま刃に頭を突つた

ませた。

当然即死である。

落ちていて対処すれば、今のベルなら問題なく倒せる程度のモンスター。





それに加えてヴァレンシユタインさんに追いつくために、ダンジョンに潜る頻度を増やしていたことが重なってしまった。詰まる所過重労働だ。

「……そうだよね。そもそも大怪我をしたのもついこの間の話だし、もつとボクが注意するべきだった」

「そんな、神様は悪くありません」

これに関しては、自分の体調すら把握できていなかった自分が悪い。

モダーカさんにも「自己管理もでないようじゃまだまだ」だと叱られてしまったし、リにも「今のは意地悪な状況ではありませんが、ベル様も迂闊過ぎます！」と怒られてしまった。

「そんな体調で息を切らしながらコエカタマリンを使ったことが不味かったみたいで……」

「便利そうなひみつ道具だと思ったけど、そう甘くはなかったか……」

そんなコンデイションで大声で叫んだわけだから、立ち眩みくらいする。

そんな簡単なことに気付かなかった自分が恥ずかしい。

【四 次元衣囊】フォース・ディメンション・ポーチをそれなりに使うことができる気がしていたがこの様だ。知らず

芽生えていた自信のようなものはポツキリと折れてしまった。

「ベル君。ちよつと言いつらいけど……」

「分かっています。モダーカさんやりりにも、明日の探索は中止するように言われてしまいました」

収入が僕の探索の結果に依存するりりのことは心配だったけど、本人が「そんなこと気にしなくていいですから!!」と強引に押し切るものだから言葉に甘えてしまった。

勝手に自滅してパーティーに迷惑かけるなんて、情けな過ぎて穴があつたら入りたい

……

「うん。それがいい。明日は早朝の鍛錬も休んで体を労わるべきだ」

「え? 鍛錬もですか?」

「ちよつとした体操くらいならともかく、汗をダラダラにするような運動をしたら休暇の意味ないだろう」

鍛錬を休む、かあ。

一日でも休んでしまうと腕が上がらなくなりそうだが、しょうがないと受け入れる。

それもこれも、結局自己管理できなかつた自分が悪いのだから。

(でも、何をしよう?)

降って湧いたような休暇に僕は戸惑いを隠せない。

オラリオに來たばかりの頃はファミリア探していっぱいだったし、最近はずモダーカさんやりりに指摘される通り、ダンジョンに潜りっぱなしだった。



かった。

それは荒れ果てた街並みの広がる北西区画の路地裏。

一度しか訪れなかった「ヘスティア・フアミリア」の元のホームがあった場所だ。

壊れた景色のまま放置されたこの場所には人が来ることは滅多になく、存在を秘匿しなければいけないひみつ道具を試すにはうってつけの場所だから、ちよつと感慨深い気持ちになりながらスキルを発動する。

「石ころぼうし」

何だか久々な気がする掛け声とともにひみつ道具を具現化する。

最近は大ダンジョンにリリと一緒に行くから、スキルの秘匿のために予め具現化してから持って行っていた。

そんなことを考えながら手の中に現れた物体を確認する。

これは……名前通り石のような見た目の帽子だ。

正直格好悪いが、ひみつ道具の見た目に関しては今更過ぎるので気にしない。

(これは簡単だな)

石ころ帽子なんて名前だ。

きつと被ると石頭になれるひみつ道具に違いない。

つまりは頭突き威力を底上げしてくれるのだろう。

これは分かりやすい能力だし、すぐに検証に移ろう。  
見た目がかなり恥ずかしいのでもう一度辺りを確認。

よし誰もいない。

すぐに頭に被って近くで折れている太い柱に近づく。

今までのひみつ道具の力から考えて、このくらいの柱は粉碎できるに違いない。

やるぞ！

ふんツツツツツ  
!!!!

気が付いたら僕は石畳に倒れ伏していた。

全く整備されていないので、石ころがゴロゴロと転がっていて痛い。

いや、痛いのは顔だけじゃない。

額もガンガンと揺さぶられるように痛い。脳が震えているみたいでぶつちやけ吐きそう。

(つ、使い方違った?)

割と自信をもって出した答えだったが、見事に外したらしい。

未だに痛む頭を押さえながら太陽を見た。

位置的に今はもうお昼時だろうか。

結構長い間気絶していたらしい。

(確かモダーカさんが見守ってくれていて話だけど、こうなっても来てくれないのかな?)

護衛をする上で僕の知らないあれこれがあるのかもしれないが、護衛対象が街中で気絶していても放置はするものなのか。……違う気がする。

常識的に考えてそんなわけないし、モダーカさんの性格的にも考えにくい。

呆れはしても、放置はしないと信じたい。

(つていうことはこれが石ころぼうしの能力?)

石ころのように誰にも気にもされなくなる能力。

隠密行動が多いダンジョンでは重宝するかもしれない。

(それにしても見当違いな答えを出してたんだな、僕)

ひみつ道具の名前というのは本当に難しい。

コエカタマリンのように分かりやすいものもあれば、具象化鏡のように名前だけでは効果が想像できないもの。

そして、石ころぼうしのように勘違いしやすい名前まである。

「あつ、でもこれを使えば!!」

ダンジョンに潜らない今日は必要ないかと具現化を解除しようとしたとき、ある使用方が思い浮かんだ。

早速、実行してみる。

「タケコプタ〜」

タケコプター。

それはドラえもんさんやのび太君から聞かされた冒険の中で、何度も出てきたひみつ道具。

空を自由に飛べるという正に夢のアイテムだ。

早速スイッチを押して飛翔する。

「おお〜凄い！」

ふわりと体が浮かぶ感覚に思わず声を出した。

青空に向かって真つすぐと飛ぶタケコプター。

オラリオの街並みが足元でドンドン小さく見えるのが快感だった。

天界の神様たちは皆こんな風僕たちを見てるのかな、なんて不敬な感想が出てしま  
う。

空を飛ぶ冒険者なんて、当然誰かに見られたら大騒ぎだ。

世界の最先端であるオラリオにも空を飛ぶすべはない。

すごい魔法道具マジックアイテムメイカー製作者なら違うかもしれないが、空を飛ぶことは全人類が未だ果たして

いない夢なのだ。

そんな体験ができたことに胸がいつぱいになる。

石ころぼうしの効果で騒がれる心配もないから、今日は思う存分空を楽しもう。



「それにしても腕、疲れてきたな……」

現在の僕はタケコプターに両腕でブラさがっている状態だ。

タケコプターは存在は知っていても、使い方なんて分からない。

フェルナ 恩恵を持たないのび太君でも使えたなら、こんな使い方ではないのだろうか。

「……ん？ あれは、南東区画？」

オラリオに来て一度も訪れたことのない場所の上空を通る。

そこは僕の知る華やかなオラリオとは少し違う、寂れた街だった。

なんだろう、神様は「南東区画だけにはいくな」って置いていたけど。

行くなといわれると興味があるもの。チラリと視線を下に向ける。

ほとんどの建物は窓や扉を閉めているが、ぽつぽつと空いているらしい店もある。

……そのなかではおとこのひととおんなのひとがあーんなことやこーんなことを

……

「いいいいいい！！？ あっ」

お子様な白兔には衝撃的すぎる光景に、思わず両手で顔を隠した。

タケコプターを手放して。

「ちよ……ああああああああっ!!？」

タケコプターなしで人が飛べるはずもなく、ベルはそのまま極東風の建物へ落ちてい

く。

ドガンツ、ガラガラ……

派手に天井を突き破ってしまったベルは顔を青くする。

(やつちやった！これ、弁償しない!?)

ここで逃げるといふ考えが出ないところが少年の美德なのだろう。

衝撃で脱げた石ころぼうしを慌てて手に取る。

その瞬間、視線を感じた。

恐る恐る振り返ると、そこには憧憬を想起させる光沢を帯びた金髪と翠みどりの瞳。

耳と尻尾の形状から、彼女は狐の獣人であると分かる。

細い首に着けられた黒いチョーカーが淡く光沢を放つ。

その美しさと、瞳に宿る見覚えのある感情に僕は時を止めた。

それは最近、間近で受け続けた眼差し。

何の呪縛もない僕に対する、羨望と憧れ。

僕たちはこうして早すぎる出会いをした。

## 力無き者たち

止まっていた時を動かしたのはいくつかの足音。

突然ホームに衝突音が響いたわけだし、敵対派閥の攻撃かと焦るのは当然だ。

足音以外にもガチャガチャと金属の音が聞こえるのは、その人たちが武装しているからだろう。

(あ、謝って許してもらえるかな……?)

幸いなことに部屋にいた狐人ルナールに怪我はない。

とは言え、これだけの騒ぎを起こしたのだから、何のお咎めもなく釈放ということは無いはずだ。

せめて神様に迷惑が掛からない形で収められるように交渉しよう。

敵意が無いことを示すために武器類は外したほうがいいだろうか？ 護身用に短刀を持つてきただけだが。

そんなことを考えていると、狐人ルナールの女の人に袖を引っ張られた。

「は、早く逃げてくださいませ……!!」

極東にごく少数存在するという希少種族の彼女は、その神秘的な美貌を青ざめさせて

いた。

腕を引つ張つて僕を部屋から出そうとする。

そんなに怖い人が来るのだろうか？

「ご、ごめんなさい。こつちの不注意で騒がせてしまつて……今からくる人たちにも謝らないと……」

「いけません!?!あの人が貴方のような殿方を見たら……っ」

何だろう。何かが食い違っている。

どうして彼女は僕を逃がそうとこんなに必死なのだろうか。

疑問に思い、彼女の言葉の意味を問おうと口を開きかけたその時、ドスンツと部屋が揺れた。

「……」

少女は表情を諦観に染め、少年も致命的なナニカが近づいていることに気が付く。

ドスンツ、再び部屋が揺れる。

それが一人の人間による足音なのではないかと僕は感じた。

(この足音だけ他の足音たちよりこの部屋に近い。さつきまでの何人かの足音が完全に掻き消されている)

先ほどまでの少女の慌てようが僕の嫌な予感を掻き立てる。

ここは直感に従って逃げるべきなのか。

いや、でも謝罪もなしにいなくなるのは非常識すぎるし……

直感か常識か。揺れ動く間に足音はすぐそこまで来ていた。

こうなったら仕方ない。誠心誠意謝ろう。

僕は覚悟を決めて足音がする方向の襖ふすまから足音の主が来るのを待ち。

「若い男の臭いがするよぉ〜！」

現れた巨体を見た瞬間、僕は石ころぼうしを深く被った。

(え!? あの、なに? モンスター?)

2 Mメートルを超える体躯。

露出の多い服から覗く浅黒い肌の色が、彼女がアマゾネスであることを教えた。

(アマゾネス……アマゾネスだよね?)

僕の知るアマゾネスとは妖艶な色気を放つ美女だったはずだが。

目の前の存在は筋肉で横幅がずんぐりとしていて、手足と胴体のつり合いもアンバランス。

正直、本当に女かどうかも疑わしい。

「フ、フリユネ様……」

「ああん? ここらに旨そうな雄の気配を感じた気がしたんだけどねえ? 気のせいだった

か？」

「おい！フリユネ！！」

ギョロリと蠢く目玉で部屋を見渡すモンスタのようなアマゾネス。

そこにおくれて何人かのアマゾネスたちが現れた。

幸いというのも変だが、彼女たちは普通のアマゾネスだ。

「お前、今度は何しでかした！春姫の部屋をこんな滅茶苦茶にしてどうする気だ！」

「やかましい不細工どもだねえ、アタイは何もしてないよ！」

リーダー格と思われる長髪のアマゾネスが、フリユネと呼ばれたそのアマゾネスに抗議している。

どうやら僕が落ちてきた穴をフリユネさんの仕業だと思つたらしい。

誤解を解いたほうがいいのだろうが、説明のために石ころぼうしを脱いだ最後に、碌なことにならないだろうと僕の第六感が告げている。

「アタイはただ、この部屋から旨そおくな雄の臭いがしたからいたただけだって言うのにい、顔も頭も悪い不細工どもの嫉妬で言いがかりつけられて……アタイはなんて可哀そうなんだろうねえ！！」

「何わけわかんないこと言っているんだヒキガエル」

ギシギシと空気が軋んだ気がした。

そんな中、明らかに非戦闘員の狐人の女の人があわあわと右往左往する。

(この人たち……同じファミリアじゃないの?)

余りにも険悪な様子に動揺してしまう。

僕にとつてファミリアとは家族だ。

主神という柱をもとにした絆で結ばれた家族。

けれど、この人たちからはそんなつながりは見えてこない。

むしろ敵対的な様にすら見える。

「ゲゲゲゲゲッ……いいのかい? 美しさだけじゃなく、強さでもアタイに敵わないお前らがアタイとやり合おうってのかい!? ええ!」

フリユネさんの挑発に他のアマゾネスたちから殺気とも呼べる怒りが発せられる。

間違つても仲間に向けるようなものではない視線を受けても、フリユネは飄々とした

まま。

いよいよ我慢の限界にきたアマゾネスたちがぶつかろうと思われたが。

「つち。止めだ止めだ馬鹿馬鹿しい。フリユネの騒ぎに一々付き合っていられるか。春姫、とりあえず穴は適当なカバーで塞いでおく。業者が来るのは少し遅くなるだろうか  
らね」

「それはこつちの台詞さあ、良い雄がないなら、こんな辛気臭い不細工のどこにいる意

味がないねえ。春姫、いい男を見つけたら教えるんだよ!!」

お互いに吐き捨てるように言葉をぶつけ合うと、アマゾネスたちは部屋から出ていった。

足音がドンドンと遠ざかっていくのを聞いて、僕はほっと胸をなでおろす。

流石にあの空気の中出ていく勇氣はなかった。

(とは言え、謝らないわけにもいかないし……)

この部屋の持ち主らしい狐人の少女に何も言わずに出ていくのは失礼だろう。

さっきの人たちがいなくなったら、この人とこのファミリアの主神様に謝らないと。

そう考えた僕は石ころぼうしを脱いで話しかける。

「あの、すいません……」

「はうっ!？」

ぎよっとした様子で目を丸める少女。

やっぱりすごいひみつ道具だ。

天井を突き破った不審者なんて怪しき満点の存在すら、このひみつ道具なら忘れてしまおうのか。

「驚かせてごめんなさい。その、天井のこと謝りたくて……」

「い、いえ。少し驚いただけです……どうして今の今まで忘れていたのでしょうか



「？」

彼女は僕のことを忘れていたことを疑問に思っているようだ。

神様にはひみつ道具のことを口止めされてるけど、どうしてこうなったかを説明するのに上手い言い訳が思いつかないから、僕の持つアイテムによる効果とだけ教えた。

スキルで具現化していることさえ言わなければ問題ないはず……だよな？

「気配を消す帽子に、空を飛ぶマジックアイテム……そんなものがあるのですね」

「元々は知り合いの持ち物なんですけど、一日だけ貸してもらってるんです」

嘘は言っていないけど、誤解させる言い方がスラスラ出るようになってきちゃったことがちよつとシヨックだったが、決して顔には出さない。

「これから、そちらのファミリアの神様にも謝りたいんですけど、どちらにいらつしやいますか？」

「それは……お止めになったほうがよろしいかと」

少女だけではなく、主神様にも謝りに行きたいと告げたら、何故か断られてしまう。ひよつとして神様に危害を加えるかもしれないと思われているのかもしれない。

「武器を持つてるから信頼できないって言うならそちらに預けます。だから……」

「いえ……そう言った問題ではないのです。わたくし 私たちの主神様……イシユタル様は少し、

怖い神様なのです」

「……どういふことですか？」

少女の含みのある言い方が気になって質問するが、彼女は困ったように微笑むのみ。具体的なことは言えないという事だろうか。

「幸い、大きな騒ぎにもなつてはいませんし、お気になさらず」

「いや、でも……」

こんな迷惑をかけておいて何もしないのは違う、でもしつこく言つてこの人を困らせるのもダメだ。

悶々していると彼女は代案を出してきた。

「どうしても気になるのですら……代わりに日が落ちるまでの少しの時間、お話をし  
て頂けないでしょうか」

「それだけでいいんですか？」

「はい。私はこのお店の外には出ることができませんから。外の人と話す機会は貴重な  
のです」

羞恥を感じているのか、頬を赤らめながら彼女は僕に提案する。

貴重、という言葉に嘘はないのだろう。少女が僕を見る目はまるで御伽噺の人物を見  
るかのようだ。

僕はその提案を快諾した。人に中々会えないその境遇に違和感はあるが、今は彼女

がしたいと思うようにさせてあげたい。

尻尾を揺らして破顔する彼女を見れば、その選択はきつと間違つてないと思えた。生まれ故郷を問われれば、オラリオの北にある山奥の名前のない村だと答える。

どんな人たちがいるのかと問われれば、北にはヒューマンが多いのだと答える。

どんな景色が広がっているのかと問われれば、畑を照らす夕焼けが好きだったと答える。

質問に答える度に少女は表情豊かに反応を返した。

落ちてきたときや、同僚らしきアマゾネスたちが言い争っていた時は暗い雰囲気だったのが、打つて変わつて好奇心旺盛なお嬢様の顔になる。

きつと好奇心旺盛なあの表情こそ、少女本来の顔。

何かによつてそれが抑圧されているように感じた。

もし、ボクが感じた通りなら、彼女は何に苦しんでいるのだろう。

疑問は湧くが、踏み入つた話をするのは気が引け、こちらからは当たり障りのないことしか聞けない。

「あ……も。申し訳ありません。私ばかり聞いてしまつて」

僕ばかりが喋つてしまったことを気にしたのか、少女が謝つてきた。

恥じる年上と思しき少女に僕は苦笑した。

「気にしないでください。貴女はやっぱり極東出身なんですか？」

「はい。ここより四季がはつきりとした島国でした」

「ひよつとして、貴族の方なんですか？」

「ええ!!何故お分かりになられたのですか？」

話し方や立ち振る舞いが僕たち庶民とは違いすぎるからだけど……

あれだけあからさまなのに気が付かないのはなんだかなあ。

「おつしやる通り、私は神事を司る家系でした。……もつとも、私は5年前に勘当されてますが」

え、勘当って……親子の縁を切られたってこと？

詳しく聞くと神様への献上物を寝ぼけて食べたことが原因らしい。

話を聞く限り妙に話がトントン拍子に運んだ気がするが。

沈んでいる少女を見ているとこちらもやるせなくなる。

その後、商人に引き取られたが、道中でモンスターに遭遇。

足手まといな少女を囚に商人は逃げ出したらしい。

その後、盗賊団に奴隷としてこのオラリオに売り飛ばされたのだという。

あまりにも壮絶な話に絶句する。

そもそもオラリオで奴隷は違法だ。

にも関わらず、巨大派閥の「イシユタル・ファミリア」が堂々と人身売買を行えるのは、ギルドがその行為を黙認しているからに他ならない。

冒険者の街、オラリオは世界でも有数の力を持つ眷属が数多く存在する。一般人では手も足も出ないほどに強力な存在だ。

そういつた荒くれ者たちが犯罪に走らないようにするための捌け口。それが歓楽街なのだという。

その機能の維持のために、彼女のような存在は数多く都市外から運ばれている。頭がぐらぐら揺れているような気がする。

優しかった自分の周りの世界の歪みに直面した少年は思考が追いつかない。

こんなこと知りたくなかった。

なんて言えばいい？

「ここから逃げましょう」なんて妄言は口にできない。

思い知らされる。僕は力のない、無力な子供なんだって。

「……日も落ちてきました。楽しい時間でしたが、これで終わりでございますね」

どこか寂し気に微笑む少女はその思いを振り払うように笑みを浮かべた。

「どうかお気になさらないでください。私は娼婦です」

「……」

「日銭のため、何人もの殿方と一時の夢を共にしてきました」

無意識に目を背けようとしていた現実。

この人が置かれている境遇を思い出す。

間違つてる。こんなの絶対おかしい。

でも、その思いは言葉となることは無く、それまでの間に霧散する。

「貴方のような優しい人に気にかけていただけの身ではないのです」

綺麗に、儚く。

笑い続ける彼女と僕はこんなに近いのに、途方もない断絶があつた。

その隔たりを乗り越える力は彼女にも、今の僕にもなかつた。

「さあ、もうすぐお客様が来店される時間になります。そうなれば、見たくないものも見

てしまうでしょう」

でも、このまま別れてしまつていいのだろうか。

彼女の自由を求める視線。

それを感じ取つていながら、無視してしまうのか。

確かに何の力もないけれど、それでこの出会いを終わらせたくない。

出会いにはきつと意味があると信じたいから。

「……あ」

なにか、なにか言うんだ。

僕と彼女の関係を一時だけのものにしてはいけない。

繋がりが途切れれば選択の余地すら失う。目を背けることしかできなくなる。

「えつと、な、名前！」

「え？」

「まだ、名前を聞いていませんでした。貴女を何て呼べばいいですか？」

これは意思表示。

ここで終わる関係ならお互いの名前を知る必要はない。

それでも聞くのは、今後あなたにかかわり続けるという表明だ。

どうやって関わり続ければいいのかはまだ分からない。

何もできない間は彼女の苦しみを知りながら放置するしかない。ある意味、今以上に

少女を苦しめることになる。

でも、考えるより先に僕の口は動いていた。

「……」

あつげにとられる少女は僕の問いにすぐに反応できない。

意表を突かれたというのもあるだろう。

けど、それ以上に葛藤があるはずだ。

僕とかかわりを持っていいのか、その葛藤が返事を送らせている。

お願い、名前を教えてください。

貴女に拒絶されれば、僕は繋がりを持つなんてできない。

どくどくと心臓が暴れる。

痛いほどの静寂の後、少女は口を開いた。

「……………サンジヨウノ・春姫です」

「僕はベル・クラネルです……………また来ます」

僕はそう言い残し、石ころぼうしを被り直す。

店の外を出ると歓楽街には徐々に人や神の姿が見えた。

華やかな夜の街。男たちに一時の夢を見せる楽園。

その裏にあるありふれているであろう悲劇。

この選択は賢くない。

白とも黒とも答えが出せない僕の情けない現状維持。

自分の無力に打ちのめされ、痛いくらいにこぶしを握り締めた。



## 心の距離

組織として既に崩壊しているも同然の「ソーマ・ファミリア」だが、荒くれ者ばかりの団員たちが遵守している決まりが一つある。

それは月の報告会。

団員たちが課されたノルマをこなしているかをチェックする、面白みのない集会。堅苦しいことを嫌う傾向のある冒険者はこうした会議などは軽視しがちだ。

ファミリア内の規範がいいわけではない。むしろ底辺に近い。

そんな派閥でありながら、毎回の報告会が欠席者ゼロを記録している理由。それはソーマだ。

団員たちを狂わせる魔性の存在。

神々にすら敬意を払わない、野蛮な冒険者たちが信仰する唯一絶対のそれのためにオラリ才有数の団員数を誇るファミリアはホームに勢ぞろいする。

ヒューマン、獣人、ドワーフ、エルフ、アマゾネス……

様々な下界の住民たちが自身の成果を報告し、与えられる報酬に熱狂する。

ある者は涎をまき散らしながら報酬にむしゃぶりつく、ある者は少ない報酬に激怒し

て半狂乱で配布した者に掴み掛る、そして、ある者はノルマを果たせずに他の冒険者に泣き継やかまった。

喧やかましいといえるほどの雑音。

その中で、小人族バルウムの少女は周囲とは真逆に、静寂を纏まとっていた。

表情を消し、一步離れた距離から同じ恩恵のゑいを持つ者たちの醜態を見ている。

無様で、滑稽。

そう嘲うことができればどれだけ楽だったか。

リリは知っている。

魂を狂わせるこの世非ざる神の奇跡を。

悪夢に侵された人々の狂気を。

(リリにソーマは与えられない。だから早く終わってください……つ)

盗賊紛いのことをして稼いだ金を献金すれば、リリもノルマ達成とみなされるだろう。

だがリリはそんな真似をするつもりはない。

良心の呵責などという真つ当な理由ではなく、その末路を知っているからこそ。

酔いから覚めたリリは、このファミリアの団員としては珍しい成果の秘匿を行う。

(煩い、黙れ……お願いですから他所で勝手に騒いで……)

周りの熱狂についていけないリリは、耳を抑えたくなる衝動を必死に抑える。周囲との温度差で半ば発狂した彼らが遠く感じる。

こんなファミリアの眷属の子どもとして生まれるなど、冗談ではない。

報告会の度に頭がおかしくなるような狂気の渦を見せつけられるリリは、こんな場所で自分を産んだもう顔も碌に覚えていない両親を恨んだ。

眷属の子どもは基本的に両親が所属するファミリアに強制加入させられる。

リリは生まれた時から「ソーマ・ファミリア」の眷属なのだ。

それが許せない。

自分の意思でこのファミリアを選んでいたのなら、自己責任だとまだ納得はできた。

だが、生まれた時からこのファミリアの呪縛を受けるのは我慢できない。

そんなのインチキだ。自我が芽生えたその時から、リリの人生に未来などなかったのだ。

「おい！荷物持ち！」

必死に壁と同化していた努力も空しく、リリは団員の一人から呼びつけられる。

それに対しリリは、若干の驚きをもって反応する。

(この人は今のリリの状況を理解してないのでしょいか?)

今のリリはあのザニスの手駒。

全く嬉しくない話だが、自分の背後には「ソーマ・ファミリア」の団長が付いているのだ。

リリに手を出せば、ザニスに睨まれる。

あの男はこのファミリアの頂点。支配者だ。

彼らが一喜一憂している報酬も、ザニスの胸三寸でどうとでもなるのに。

考えられることは二つ。

団長の怒りを買うことを全く恐れていない大物か。

ファミリアの人間関係の変化にも気が付かないほどに情報弱者なのか。

「おい、役立たず。お前の持つてる有り金全部出せ」

「リリの所持金ではノルマには届きませんから……」

「うるせえ！とつとと出せつつつてんだよ！腕の一本もおられなくちや分かんねえのか

!？」

恐らく後者だろう。

目の前の団員のことは知っている。

つい最近まで頭角を現していた団員だ。

上納金が多く、報酬もたくさんもらっていたことを自慢げに周囲に触れ回っていた。

それが自分の首を絞めることになるとは予想できない頭の悪さだったが。

こんな団員間の仲が悪いファミリアで新人が目立ちすぎればどうなるか。大方の予想通り、出る杭は打たれたのだろう。

仲間同士の足の引つ張り合いは「ソーマ・ファミリア」の名物だ。

団員たちはありとあらゆる手段でそのルーキーを妨害したのだろう。

そして、以前のような成果を出せなくなり、焦つて弱者から搾取しようと考えたと

言つたところか。

よくある光景だ。

リリが冒険者として芽吹かなかつた時から、飽きるほど繰り返された一場面<sup>ワンシーン</sup>。

勘の良い者は露骨にリリから距離を置くようになった今では、少なくなつていたが。

「……なんだその目は……お前も俺を馬鹿にしているのかあ!!」

どうやらリリの眼差しが気に入らなかつた様子。団員は、逆上してリリを殴りつけ

た。

身体能力<sup>ステイタス</sup>では圧倒的に劣るリリは、抵抗する間もなく吹き飛ばされる。

口の中が切れ、鉄の味が校内に広がるのを感じ、リリは顔をしかめた。

そんな光景を見て、カヌウたちはニヤニヤと笑つていた。

(成程、リリを攻撃させて、この団員に対するザニスの心証を悪化させようというわけ

すか)

余りにも下らない真実にうんざりする。

そんな縄張り争いにリリを巻き込まないでほしいと心の中で呟いた。

どっちが勝とうが負けようがリリには関係ないのだ。どちらも等しく無価値なのだから。

こんなファミリアが嫌だったからこそ、リリは必死に脱退のためのお金をかき集めていたのだ。

口に出さないリリの考えが団員に伝わるはずもなく、団員は興奮収まらぬ様子でリリを睨みつける。

それを見てもリリの心は動かない。この後の結末なんて分かり切っているからだ。

「この……っ」

「良くないなあ、そういうのは」

その声を聞いた瞬間、団員は冷や水を浴びせられたかのように真っ青になった。

慌てて振り返った団員の視界に痩せ庫気味の男が目に入った。

「ザニス団長……っ」

「アーデは大切な家族じゃないか。これから私の仕事を手伝ってもらうことになっていく。その振り上げた手を下ろしてくれないだろうか」

「はい……」

「それと、カヌウ。今後こういうことがあつたら先達として止めるように。アーデが傷つく所など見たくはない」

「はいはい、分かりやしたよ」

眼鏡の奥にある細目を怪しく光らせながら、ザニスは優し気な口調で語り掛ける。

内容は暴力を振るつた団員と、彼を誘導したカヌウの釘をさすものだったが。

(随分と都合のいい登場ですね。まるで陰から見ているようです)

先ほどまであれほど熱気に包まれていたホームが今は静かだ。

ザニスという絶対権力者の登場で、この空間は完全に支配されてしまった。

「この場にいる皆も聞いてくれ、アーデは私の仕事を手伝ってくれるほどに仲間思いな娘だ。そんな娘が寄つてたかつていじめられるのは私には耐えきれない。どうか、優しくやってくれ」

この言葉を額面通りに受け取る者は「ソーマ・ファミリア」にはいない。

要はリリはザニス直々から仕事を与えられるという事である。

自分の今の状況の不味さに静止した団員はみつともなく狼狽している。

リリを依怙<sup>エゴウ</sup>鼻<sup>ひな</sup>負<sup>ま</sup>しているような内容だが、団員たちからの反発は薄い。

まず、ザニスに逆らうことの恐ろしさは全員が分かっているから。

そして、ザニスに気に入られるという事は決していいことばかりではないと知ってい

るからだ。

「アーデも慣れない仕事で戸惑うこともあるだろう。そんなときのために皆は彼女のことを気にかけてやってくれ」

続く言葉で、団員たちはリリが特大級の厄ネタに巻き込まれたのだと悟る。

リリを気に掛ける。

これはつまり、監視の指示だ。

リリが決して逃げないようにファミリア全体で見張れと命令している。

ちよつとした犯罪ならばここまでやらない。

にもかかわらずやるといふのは、それだけ重要な案件がリリに課されるということだ。

つまり、「ソーマ・ファミリア」の暗部。酔っ払いでも関わろうとはしない、ザニス団長の悪事。

当然、それに関わった者は知ってはいけないことを知りすぎる。

その末路は想像に難くない。

リルルカ・アーデはこの日からアンタツチャブル不可侵な存在となった。

新しい首輪がつけられた気がして、リリは思わず首元を触れる。

このおぞ悍ましいホームはより、リリの檻としてその姿を変えているように感じてしま





なってきたているが、ベルはあくまでも自身の鬱憤うっぷんを晴らすための八つ当たり相手。

そんなことを今思い出したことに驚く。

（肝心の嫌がらせも碌に行つてない……いえ、当然です。連日のファミリア内での立ち位置の変化にリリは疲れているのですから、はかりごと謀を一々考える余裕のないだけのこと）

今が特別忙しいだけだ。

落ち着けばいつでもベルを嵌めるために動き出せる。

情に絆された、なんて甘い考えは即座に否定した。

「ベル様の方こそ、どこか疲れているですよ？休日疲れをダンジョン探索で癒すなんてあまり褒められたやり方ではないです」

リリの指摘に言葉を詰まらせるベル。

大方、冒険者になって日も浅いベルは、休日中に遊び過ぎて疲れているのだろう。

冒険者になったばかりの者にはよくあることだ。

中には歓楽街にのめり込んで財布の中身までボロボロになるものもいるが……まあ、少年はそんなことは無いだろう。あんな世界とは縁遠い人物だ。

「ベル様はオン・オフが下手そうですね。休日もおかしな事件に首を突っ込んでないか、リリは心配ですよ」

「?!?ベベベ別にそんなことは無いよ?!?」

「いや、分かりやすすぎですよ。一体今度は何をしたんですか」

ちよつとした冗談ジョークのつもりだったのだが、どうやらまた何かやらかしたらしい。

はつきり言つてベルはトラブルメーカーだ。

本人に悪意はないが、そういつた運命を司る神様に愛されているのかと思うくらいには厄介事の方から飛んでくる。

金払いはいいが、今までのリリだったら関わろうとしないタイプ。

ただ、今は離れようという考えが浮かばないくらいには心地いい。

言葉では責めるようなことを言つてはいるが、その顔には笑みが浮かんでいる。

そのままやり取りを楽しんでいたリリだったが。

『アーア』

再び浮かぶ先日の光景に再び心が凍る。

嫌な男の声。

あの報告会の時に言われた言葉が再生される。

今この場にはないにも関わらず、リリを束縛する呪い。

『趣味を持つことはいいいことだが、そのせいで実生活を疎かにすることは良くない。何事も節度というものを持たなければな』

遠回しにいつまであの獲物と遊んでいるのかと聞いている。

どれだけ時間が経っても罨にはめるところか、罨を用意しようとすらないリリに対する警告。

早く仕事に掛かりたいザニスは、リリの遅々として進まない準備に苛立っているのだろう。

『怠惰でいることはよくない。人は勤勉でなければな』

潮時だ。

いい加減、あの冒険者と縁を切れ。

言外の言葉を正確に理解したりりは、しかし何も言えなかった。

歯向かえばザニスはあれを使う。そうなればリリはまた餓鬼に堕ちる。

ザニスもそれを理解している、醜悪な笑みを張り付けて狼狽えるリリを見下ろしていた。

そう、この逃避は長くは続かない。

ベル・クラネルとの別れ決別も近づいているのだ。

そしてリリは完全にソーマの呪縛に囚われ、あのホームから出ることができなくなる。

現状が仮初であることを、ザニスの言葉で再度理解させられたリリの言葉が途切れる。

それを見たベルは心配そうに眉を下げ、ポケットからある物を取り出す。

「リリ、これを持ってて」

「……これは？」

「多目的お守りって言うひみつ道具。今日、ダンジョンにいる間はリリに持って欲しいんだ」

そう言つて極東にあるという、厄除けのアイテムに似たひみつ道具をリリの首にかける。

それがリリを労わつてのことだと理解し、リリは顔を背けた。

「……厄除けなら、厄そのものなベル様が持つていたほうがいいのではないですか？」

「あ、あははは……」

口から出た嫌な言葉にも、ベルは気にする素振りはなく、困つたように笑うだけ。

そんな言葉を出した自分が嫌になりながらも、リリは少し心が軽くなった気がした。

その後、リリはお守りに『金運』『交通安全』『恋愛運』『受験合格』4つのボタンがあることに気付き、なんのボタンか分からなかったが、何故か惹かれた『金運』のボタンを押してしまったことでその日の探索は強引なものになり、護衛役のモダーカに怒られた。

結局、疲れは増したばかりだったが、今までとは違ってどこか気持ちの良い疲労感に

リリは微笑むのだった。

## 魔法は試練を呼ぶ魔法

そう、また強くなったのね。

世界の穴を塞ぐバベルの塔。

その最上階からオラリオを見下ろす女神は、硝子越しに見える白い影に熱い視線を注ぐ。

「それでいい。貴方はもつと輝いて？あなたにはその義務があるのだから」

その瞳に宿すのは深い愛。

母のように慈しみ、女王のように支配的な絶対愛。

フレイヤはベルの魅せる魂に夢中になっていた。

彼の持つ淡く輝く透明な魂。

悠久の時を生きたフレイヤですら見たことがない、その魂がどんな変遷を辿るのか、興味が尽きない。許されるのなら、些事を一切投げ出して彼だけを見ていたいと思わせるほどに。フレイヤは倒錯的な慈愛のまま、蠱惑的に唇を曲げる。

「あら？……また気が付いたのかしら？」

視線の先の少年が不安げに顔を振っている。

ジツ、と見つめているといつも勘づかれてしまう。

ファミリアの眷属ことどもたちに比べて才能は乏しいと感じていたのだが、その予測を上回る彼の成長にはいつも驚かされる。

こうして遠目に見守っている現状に思うところがないと言えば嘘になる。

見初めたその瞬間に取り込むことも容易だっただろう。

既に恩恵ファルナを授かつていようと関係ない。

ロキやガネーシヤのファミリアならばともかく、新興勢力のヘステイアなどフレイヤにとつては何の脅威にもなりえないのだ。

それをしなかつたのは興味が湧いたから。

フレイヤが直接かわると、どうあつてもその影響を受ける。彼女アレイのように。

彼を自分色に染め上げるのではなく、彼自身がどんな色を纏うのか。

自分のものにするのはその後でいい。

……後は、彼の無邪気な笑みにその気をなくしてしまつたからだろうか。

ああいった少年に欲望全開で迫るのは粹ではないと、気まぐれな女神は思つたのだ。

(とは言え、何もしないのも面白くはないわね)

気まぐれであるが故に、ちよつとだけ手を出すことにした。

彼の物語に大きく干渉する気はないが、僅かばかりの手助けならば構わないだろう。



既に彼の中で芽生えかけている可能性を引き出すだけの話だ。

「最近はおちよつと魂が曇つてきているし……ね？」

周りを見る余裕ができたのか、近頃は色々なものを背負い込むようになっていとう。  
う。

悪いことではないが、今の彼の器を考えると頼りなくもある。

不可思議なアイテムを使えても、自力がないものが生き抜けるほどこの都市は甘くない。  
い。

魂を見るフレイヤの瞳は、他の神によるステイタスを見抜けるわけではないが、今の彼に決定的にかけている物があることくらいは見破っていた。

そろそろ『魔法』は使えていいだろう。

このまま、あの素晴らしい色が霞むのは彼女の本意ではないのだ。

部屋の隅にある本棚の内、中段の分厚い書物の背表紙に指を引っかける。

その本はそのまま彼女の手の中に落ち、重厚な重みをフレイヤに伝えた。

いくつか頁ページをめくり、中身を確認した後、女神は満足そうに頷く。

(これをオツタルに……いえ、止めておきましょう)

突然、大柄な偉丈夫が本を持って会いに来たらベルはどう思うか。

きつと怖がつて震えながら委縮してしまうだろう。



シルさんが用意してくれた昼食のバスケットを返却しに行ったとき、僕は突然問われた。

質問の意図が分からず、困惑していると、シルさんは言葉が続ける。

「なんだか最近、思い詰めているようでしたので……」

心配そうに彼女は僕を見つめた。

そんなに僕の様子は変だったのだろうか？……変だったかもしれない。

何せ考えることが多くなり過ぎた。

リリのこと。

ヴィオラス

花のこと。春姫さんのこと。

それに今もどこかで暗躍している

イヴェルス

闇派閥も。

立て続けに悩み事が増えて、容量越えキャパオーバーの気味になっている気がする。

リリにもこの前気付かれたし、エイナさんも心なしか勉強量を減らしているように感じ

じた。

もしかしたら僕が自覚していた以上に参っているのかも。

「休養はちゃんと取られてますか？」

「はい……この前もお休みを貰いました」

まあ、その休日は柱に頭突きして気絶して、娯館に空からダイブするという休息とは程遠い日になったけど。

というか悩みの種増やしちゃったし。

「うーん。そうなると思えば普段から気を緩める時間が必要かもしれませんね。趣味とか」  
「趣味……ですか……」

特にこれといったものはないが。

強いて言えば英雄譚を読むことだろうか？でも、今は手元にないし……

神様の本でも貸してもらおうかな？難しそうだけど。

「あ、そうだ！」

うんうんと唸っていると、シルさんが何かを思いついたようにポンと手を叩き、壁に立てかけてあった白い本を手を取った。

「これなんてどうですか？」

「え？これってインテリアじゃ」

「いえ、どうやらお客様のどなたかが忘れた物らしくて」

「……いいんですか、そんなの読んで」

「ちゃんと返していただければ大丈夫。ミアお母さんはこれが店にあることをよく思っていますから、預かっていただければむしろ助かります」

ここは冒険者の客が多いし、冒険者の持ち物ならいい刺激を受けられるかもしれない。

いや、でも、人様の持ち物を勝手に持ち出すのはなあ……。



子供の頃から英雄たちが繰り出す必殺の魔法に心惹かれた身としては興味深い。  
これ幸いと内容に没頭する。

ふむふむ、先天系とはエルフや狐人ルナールといった魔法種族マジックユーザが発現する種類らしい。

『その潜在的長所から修行・儀式による魔法の早期習得が見込め、属性に偏りが見られる分、総じて強力かつ規模の高い効果が多い』

つまり彼らは勉強しまくることで魔法を発現してるのだろうか。

エルフは博識というイメージはここからきているのかもしれない。

ところで一文一文の間<sub>ナ</sub>に走っている数式の羅列は何なのか。

いや、気にしなくていい。

僕が気になるのは先天系ではなく、後天系。

魔法種族マジックユーザではないヒューマンフアルナは、魔法を勉強で覚えることは難しいのだ。

『後天系は恩恵を媒介として芽吹く可能性、自己実現である』

……よく分からない。

経験値エクセリアによつて変化するという事か。

具体的に何をすればいい？

分からない。分からない。だからより文字群に意識を向ける。

視線をぶつけるように、或いは引き込まれるように。

ページをめくる。

『何事に関心を抱き、』

文字の海に埋没する

『認め、』

他に視界に映るものはない

『憎み、』

意識に上ることもなく、ただ思考の声も文字の羅列をなぞる

『憧れ、』

これは文章なのか、思考なのか、

世界が広がるいや自分がぼやける？違う境界が溶け込んだ

『嘆き、』

分からない数式は何時の間にか思考の裏に張り付いて

それはここから学んだものなのか自分の内にあつたものか

混乱する内心の声は意味なんてなくてそれでも脳は文書の意味を分かっってしまうん

です

『崇め、』

認識が大きくなって文字群が絵になった

めはなくちみみ

ぐにやりと歪んだ数式がそんな要素を纏め上げる輪郭に

いつ頁をめくったかもわからない。きっと僕はこの内容は観て見ていないのだ

『誓い、』

違う、そうじゃない、間違った

これは絵じやなく顔でした

うんちよつと違つて【僕の顔】

見切れた絵画の顔面体

いいやそれでもなくて【仮面<sup>僕</sup>】

僕も知ら<sup>良</sup>ないも<sup>く</sup>う一人の僕

『渴望するか。』

本から意味が溢れた

氾濫する知識を僕は全て飲み干して

否否否否否否

ぼちやんと逆に飲み込まれた

引き鉄は常に己の中に介在するけど、心は広がりすぎて意味不明

そんな僕を恩恵<sup>フェルト</sup>は常に己の心を白日の下に抉り出すのでした



欲するなら問え教えろ 欲するなら砕壊してしまおう け 欲するなら刮目をてらす 目せよ  
虚偽を許さない鏡はここにある

じゃあ、始めよう

僕にとって魔法って何？

きっと強い物、モンスターを倒す英雄の神秘

起死回生の一手

僕にとって魔法って？

力

弱い自分だって倒せる偉大な奇跡

立ちはだかる全てを倒して未来を切り開く力

僕にとって魔法はどんなもの？

炎

全てを燃やして、飲み込んで、温かくて、消えない

不滅ヘステイアの炎

魔法に何を求めるの？

雷のように速く、速くあの人に恥じない存在に

あの人の隣へ、その瞳に……

それだけ？

いや

叶うのなら届くのなら手を伸ばしていいのなら

英雄になりたい

たった一日だけの友達たちのように、冒険を超えて英雄に

誰も取りこぼさない英雄に

あの人認めてくれるような、彼らが笑ってくれるような英雄になりたい

子供だなあ



・ ひみつ道具を具現化できる。

・ 使用可能な道具は一日三つ。

・ 一日ごとに内容は変化する。

・ 現在使用可能なひみつ道具。

【ヤセール】 【夢たしかめ機】 【強力うちわ】 【風神】

リアリス・フレッセ  
【憧憬一途】

・ 早熟する。

・ 懸想おもいが続く限り効果持続。

・ 懸想の丈により効果向上。

「つつ……」

思わず早朝から騒ぎそうになる口を懸命に噛み締めた。

魔法っ……僕にも魔法が！

早速試したい！

「神様!!行つてきますす!」

「ちよ、ベル君!?!」

浮かれるベルはそのままダンジョンに向かった。



ダンジョン一階層。

幅の広い一本道に現れたゴブリンが僕を見つける。

唸り声をあげて迫るモンスターに右腕を真つ直ぐ突き出す。

イメージはくうき砲だ。

「ファイアボルト」!!」

手のひらから発射された炎雷はジグザグに進み、ゴブリンを貫いた。

そして爆光。オレンジの火華が咲く。

ゴブリンは断末魔の叫びすら上げる間もなく黒焦げになった。

「すごい……」

サポーターとして同行したリリの掠れるような声が聞こえる。

後ろから見守っているモダーカさんも驚いたような気配だ。

(よしッ……い！)

ステイタスの数値とは違う、目に見えた変化に僕は拳をぎゅつと握った。

近づけた。

この魔法があれば、もつと先に……

——でも、僕が弱いことに変わりはない。

「……」

高揚していた頭が一瞬で冷めた。

魔法だ。目に見えた進歩だ。

だから何なのか。

これでリリの心は開けるか？

ワイオラス  
花の現状を変えられるか？

春姫さんを救えるのか？

ただ手から炎が出てても何も変わらないのだ。

(念願だった魔法なのに……こんなにも心が重い)

自然と握っていた拳から力が抜けた。

ダメだ、全然心が整っていない。

考えれば考えるほど袋小路に入ってる。

「……ありがとうございます。魔法は試せました。さあ、予定通り今日は8階層へ……」

その時、ベルは視線を感じた。

無遠慮な銀の視線……ではない。

もつと荒々しい攻撃的な視線だ。

「!?ベル様！前からモンスターが！」

同時に通路を覆い尽くすようなモンスターの群れが迫りくる。

決してモンスターの出現頻度が多くないはずの一階層で。  
しかし、その内容が妙だ。

知らない。エイナさんに上層のモンスターの情報は叩き込まれている。

にもかかわらず、いま迫りくる群れにいるモンスターたちは見たことがないものばかり。

「おいおい……なんで中層のモンスターがいるんだ?」

答えたのは歴戦の冒険者であるモダーカさん。

それは余りにも絶望的な異常事態。イレギュラー

ミノタウロスが数匹出たあの時に匹敵する窮地。

「ベル!!リルルカ!!決して俺から離れるな!どう考えても人為的だ!」

剣を構え、僕たちを背中に庇うモダーカさん。

大丈夫、モダーカさんは上級冒険者。あのモンスターたちは倒せる。

問題はその後、これを引き起こした何者かによる次の手だ。

イヴェルス  
(闇派閥か!?珍しいマジックアイテムを持つだけの新米相手にここまでするか!?普通  
!?)

モダーカさんが警戒しているのは、モンスターに対処している隙に僕が不意打ちされること。



だから全神経を集中して周囲を警戒する。  
それは間違いじゃなかった。

「眠れ」

「な!？」

相手が強引にその上を行っただけで。

警戒していたにもかかわらず反応できない速度で接近、それでも辛うじてガードをした剣の上から腕力だけで吹き飛ばす。投石機で打ち出されたかのような勢いで壁に激突したモダーカさんはガクリと意識を失った。

一連の流れをまるで認識できなかった僕とリリはその存在の大きさに圧倒された。

あの時の女の人じゃない。

あの怪物的な威圧とは違う、王者の威風。

顔はヘルムに隠れているが、その視線は真つ直ぐと僕を見据えている。

マントで体を覆っているから、どんな体形かは分かりにくいメドルが優に2Mはある。

背に背負う大剣は僕の身長よりも大きいかもしれない。

「……なんたる脆弱。なんたる情弱」

その言葉は動けずにいた僕に向けられたものか。

慌ててナイフを構える。

「その情けなく震える腕はなんだ。その曇った眼まなこはなんだ」

イヴィルス  
闇派閥じゃない。

あの狂気の狭間にいる者たちとは違う、強烈な自我を見せる声色に僕はそう判断する。

ならこの人は何で僕を襲う。

僕に対して何故怒りを向けるんだ。

「あの御方に見初められたというなら示せ、お前の可能性を」

ズン、と大剣がダンジョンの地面に刺さる。

それだけで辺りが揺れた。まるでダンジョンが悲鳴を上げてるみたいに。

「出来ぬのなら……ここで死ね」

意識が途絶しそうなほどの圧力。

リリなんてもう腰を抜かしてしまっている。

自分の顔が引き攣っているのを自覚しながら、僕は振り下ろされる大剣をみつともなく悲鳴交じりに回避した。

## 壁は分厚く聳え立つ

あれはダンジョンについてそこそこ理解できるようになった頃だろうか。

モンスターの種類を覚えて、ダンジョンの地形も活動範囲なら分かるようになった時に受けたエイナの講習。それはいつもと少し、毛色が違った。

用意された資料の多くは、ダンジョン内で実際に起きた事例を纏めた物。

しかし、その中にモンスターは殆ど出てこない。

『ベル君。今日話す内容は、君にとってはショッキングなこともかもしれない。でも、決して見ぬふりをしていいものではないから、ちゃんと覚えて』

エイナは常に全力でベルに知識を授けていた。

それでもこの日のエイナはいつもよりピリピリしていたと思う。

内容を考えれば、当然かもしれないが。

『今日勉強してもらおうのは、ダンジョン内における闇討ち』

そう、その日学んだのはモンスター以外の脅威。

ダンジョンでこれまで起きた人間による冒険者への攻撃だ。

『地上から隔離されたダンジョンは一種の無法地帯。ギルドや「ガネーシャ・ファミリ

ア」も頑張つて対処はしてるけど、そこで起きていることを全部把握できるわけじゃない』

ある日、どこかの冒険者が死んでも、その死体はすぐにモンスターが処理してしまう。そうなれば地上から分かるのは、その冒険者が行方不明という事実のみ。

それを悪用する者は多いという。

『かつて暗黒期に活発に活動していた闇派閥イヴァイルスもそうだし、ファミア間でのいざこざが爆発して、ダンジョン内で暗殺をしよう、なんてこともある。あるいはダンジョンで横行する犯罪の現場を目撃したことによる口封じの可能性だってあるの』

用意された資料はそんな闇に葬られるはずだった真実。

ギルドの懸命の捜査の賜物だった。

憧れのダンジョンの血生臭い裏の顔に絶句するベル。

そんな彼にエイナは苦々しそうに言葉を続けた。

『こんなことは言いたくないけど……ダンジョンでは人間だって敵になる。嫌なことから目を背けるんじゃないかって、ちゃんと向き合って心構えをしておくことも大切だと思う』

エイナはもう何年も探索アドバイザーをしているという。

その中には、人によって殺されてしまった冒険者もいたのかもしれない。

……その推測が正しいか、聞く勇氣はベルにはなかったが。

『今日教えることは忘れないで。モンスターへの対処と襲撃者への対処は違う。明確な殺意を持った彼らは、もしかしたらダンジョンの中で一番怖いものかもしれない』

忘れろと言われても忘れることはできそうにない。

資料から読み解ける当時の情景は凄惨なもので、圧倒的な現実感リアリテイをもってベルの中に刻まれる。

『もし、ベル君がダンジョンで襲撃を受けたら、できることは二つ。応戦するか逃げるか。アドバイザーとして言わせてもらえば逃げる方がいいと思う』

『どうしてですか？倒せるなら倒した方が……』

『同じ襲撃でもモンスターと人間では決定的に違うものがあるの。何だか分かる？』

エイナの問いにベルは少し考えてから答えた。

『えつと……武器でしょうか』

『うーん。それも間違いじゃないけど……私は情報だと思う。モンスターが人を襲うのは本能的なもので、ダンジョン内の襲撃も偶発的遭遇ランダムエンカウターでしょ？』

確かにそうだ。

モンスターが人を襲うのは怪物としての本能に従っているに過ぎない。

明確な意思をもって個人を狙うモンスター何てものはないのだ。



その威力に、ではない。

そこに秘められた技巧にである。

(こつちを見てなかった……!? )

オラリオに来てから度々向けられる銀の視線によって、ベルは感覚が鋭くなっている。

その感覚は襲撃者の視線が自分に向けられていないことを告げていた。

視線は気絶するモダーカに注がれている。

今ナイフを持った少年より、器を昇華させた冒険者の方が余程手強いということなのか。恐らくは、モダーカによる不意打ちを警戒している。

一方で少年に対する注意は全くない。男にとってベルなど驚異足り得ないのだ。

……そして、それはベルが一番よく分かっていた。

一度、ひみつ道具名刀電光丸で剣技というものを体験したからこそ分かる。

あの一見無造作に振られただけのようない撃に込められた技術の難易度が。

ステイタスだけではない、技の冴えを感じ取った。

(無理だ、勝てない……)

あんな存在と戦闘なんて自殺行為だ。

逃げるしかない。

しかし、逃亡も恐らくは困難。

相手の超高ステイタスに加えて、モダーカは先ほどの攻撃で気絶。リリは腰が抜けていて動けない。ベル一人でも逃げ出すのは困難なのに、他二人を助ける必要があるのだ。

（モダーカさんは僕の後方の壁にうずくまっている。リリは僕のすぐ隣。回収できないわけじゃない……けど……）

確信がある。

僕が二人を回収しようと動き出した瞬間、あの襲撃者の理不尽な敏捷はやさであつという間に距離を詰められるであろうという事は。

僕たちはダンジョンに入ったばかり、入り口となる階段まで逃げれば、流石にこの襲撃者も撤退するはずだ。

ダンジョンで闇討ちなんてしてくる以上、人目につきたくないと思っっているのは明白なのだから。

つまり、この絶望的な状況を切り抜けるためには、絶対にダンジョン入り口に繋がる階段に辿り着かなければならない。それが僕たちの勝利条件。

どうして逃げられるリスクが高い入り口付近で襲撃してきたのか疑問はある。

もしかしたらこの位置でも確実に仕留められるという自信だろうか。



それにしたって無用なリスクを背負い込むような判断だと思うが。

(もしかして、敢えて逃げ道を作ることによって僕の思考を誘導しようかと?……この力の差でそんな小細工するかな?)

相手の思惑が分からない。

鉄仮面に覆われた襲撃者は、何の種族なのかも曖昧だ。

この出鱈目なパワーでエルフはないと思いたいが。

態と逃げ場を用意したかのような違和感に、迂闊に逃走の選択肢を選べないベル。

襲撃者は悠長に熟考する余裕など与えない。

「考えている暇はあるのか?」

「なっ!?!」

気が付けば男は目の前にいた。

振り上げられた大剣に仰天するベルは、慌てて男の持つ大剣の動きに注視し……腹部に走る鈍い痛みにも肺の空気を思わず吐き出した。

(がっ……な?、え?、足!?)

大剣の振り下ろしと思わせて、意識外からの蹴り。

典型的なフェイクにまんまと引つかかったベルは、空隙に白黒の点滅を瞬かせる脳の叫びに屈するように膝をついた。

不味い、追撃される。

そう気づいてもベルの体は、思考と切り離されてしまったように動かない。続けて放たれた二発目の蹴りでベルは勢いよく吹き飛ばす。

「がっ、!!、リリ!、モダーカさん!」

ゴロゴロと地面を転がった。

体中が痛みを訴える中、少しでも酸素を取り込もうと荒い呼吸を繰り返す。

何とか体のコントロールを取り戻して、二人の下へ駆けよろうとするが、ベルの前に襲撃者は立ちふさがる。

(っひみっ道具を!!)

今日使用できるひみっ道具の実験のために、ひみっ道具は手元に呼び出してある。

竦みそうになる心を無理矢理奮い立たせて、ベルは異世界の言語が刻まれた扇形のひみっ道具を取り出す。

夢たしかめ機も、ヤセルも、戦闘に使える物ではないだろう。

だが、この強力うちわ「風神」は恐らく強い風を起こすもの。

どこまで強い風が起こせるかは分からないが、今の状況を打破するにはこれしかない  
「ついに出したか……」

「!」

その時、襲撃者の視線がようやくこちらに向いたことに気が付く。

今まで全くベルの挙動に注意を払ってはいなかった男は、ひみつ道具を出した瞬間、モダーカから僅かに注意を逸らした。

(この反応……ひみつ道具を知っている?)

ついに、と襲撃者は口に出した。

それはベルがひみつ道具を使うこと自体は分かっていたという事に他ならない。確かに闇派閥ならば、あの赤髪の女から情報を貰っていても不思議はなかった。

ひみつ道具は圧倒的な格上すら撃破可能な異世界の技術。

これまで数々の格上と遭遇し、生き延びてこれたのは相手の意表をつけたからだ。

しかし、今回の相手はベルが格上殺しの手段を持っていることを理解している。

「……」

無言で男は立ち位置を変える。

ベルとリリが直線となるようなポジショニング。

それを見て、ベルは襲撃者が慢心していないことを悟る。

これは脅しだ。

そのマジックアイテムを使えば、あの少女も巻き込まれるぞという脅し。

能力が日替わりで、強力うちわ「風神」の詳細はベルでも把握していないのだから、あ

の男もどんな能力が飛んでくるかは分からないはずだ。

それでも、なにかを起こすと分かっているだけで、こうもやりづらい。

(ひみつ道具を使わなきゃこの相手は突破できない。何とかリリが正面にいるこの状況を……っ!?)

思考を深めた一瞬。

それが相手には致命的な隙と映つたらしい。

凄まじい勢いで襲撃者は接近し、横風の斬撃を放った。

大剣が振り下ろされただけで地面が抉れた光景が、頭の中で再生される。

防ぎきれぬ訳がないと理解しながら、反射的にひみつ道具で受け止めようとするベルは、うちわと接触しようとした大剣がすり抜けた光景に思考を停止させた。

「え……っつ!?!」

思わず間拔けな声を漏らす、右肩に走った痛みでベルは気づく。

フエイク  
虚撃だ。

先ほどと同じ、斬撃と見せかけてベルの防御を誘導し、がら空きになった反対側から返す大剣の腹で殴りつける。

重厚な鉄の打撃に全身が焼けるような痛みを味わいながら、ベルは相手に殺意が無いことを理解した。

(普通にやっつていればもう何度も殺されている)

どうしてかは分からないが、相手に敵意はあっても殺意はない。

それなら逃げ出すチャンスはある。

(斬撃はきつとフェイク、そう弁えて対処すればひみつ道具を使う余裕もできるはず)

みたび 三度男はベルと距離を詰める。

まずは初撃と同じ振り下ろし。

これはフェイク。ブレているようにしか見えない腕の動きに注視すると、次撃につなげようという意味が見え隠れしている。

続けて横風の一閃。

これもまたフェイク。落ち着いて対処すれば問題ない。

今度は袈裟斬り。フェイクに違いない。今までと同じように距離を保とうとして。

ヘルムの奥から見える野獣のような眼光を見てしまった。

(……!?)

ゾクリ、と背筋に冷たいものが走る。

慌てて大きく回避する。予想通り、フェイクだったにもかかわらず、無茶な回避でベルは大きく姿勢を崩した。

しかし、襲撃者は攻撃の手を緩めない。

四撃、五撃、六撃……重ねられる斬撃。

全てはフェイク。しかし、攻撃の度に男から発せられる威圧で、ベルはそれがフェイクだと気づけない。

何が虚で、何が本命なのか。

混乱した頭はまるで見抜けない。

(頭では分かっているけど、あの心臓が凍るような恐怖で冷静に判断できない。惑わされている……っ)

「……いいのか？仲間から遠ざかっているぞ」

「っ!？」

男の言う通り、ベルは無意識のうちに後ずさっていた。

その事実には歯を噛み締める。

「うわあああああっ!!」

破れかぶれにうちわを振ろうとするが。

「遅い」

それより先に襲撃者の拳が顔面に減り込んだ。

グラリと意識がブレる。

まるで土の壁が起き上がってくるかのように、目の前に地面が迫る錯覚。

少しの間の気絶。次に意識が覚醒した時には、ベルは前のめりに倒れ込んでいた。「がっ、ぐ……っ」

「まだ立つ気か……」

無様に身を悶えさせながらも、懸命に起き上がろうとするベル。

それを見て、襲撃者はどめの一撃を与える気か、ゆっくりと少年に近づく。

「……やはりお前は俺に似ている」

何と言ったのか、ベルにはもう聞こえていなかった。

立て、立てよ、立ってくれ。

力の籠らない腕に必死にそう呼びかける。

男の腕が振り上げられる。

最後まで藻掻こうとする少年の意識を刈り取らんとするその時。

王者の背後に炎の魔法が走った。

見ることもなく大剣で掻き消した襲撃者は、ゆっくりと振り返る。

「まさか、動けるとは」

視線の先には、震えながら小剣の切っ先を向ける小人族バルッムの姿があった。





「ファイアボルト」!! 「ファイアボルト」!! 「ファイアボルト」!!

三条の炎の矢が襲撃者に殺到する。

詠唱破棄という対魔法の根幹を破壊する炎雷は、規格外の襲撃者に対しても有効だった。

無詠唱故に威力は低く、大したダメージは与えられていないが、視界一杯に広がった火の華が男の動きを止める。

その隙にベルは滑り込むようにリリの前に移動した。

「リリ、大丈夫!?!」

「……」

「リリ!?!」

「え、あ、まだ腰が抜けてて……」

呆然とした様子で魔剣らしき小剣を見つめるリリは、僕の声に弾かれるように反応する。

こんなリリは珍しいと思いつつ、あんな強い相手に攻撃することがそれだけ勇気のいることだったのだらうと納得する。あれがなければ無詠唱とは言え、魔法すら撃つ隙ができなかっただろう。

「戦っている時に強力うちわ「風神」を警戒しているみたいだった。多分、ひみつ道具を

知ってるのかも」

「すでに何度も使っているんです。地獄耳の持ち主なら把握していてもおかしくないですが……」

炎を形作る魔素が分散し、襲撃者の姿があらわになる。

やはり無傷。分かっていたけど、改めて力の差を感じてしまう。

「無詠唱か……あの方も喜ばれる」

……あの方？

「ベル様……分かっていいると思いましたが……」

「うん……遊ばれてるよね」

目の前の男と僕との力の差は歴然だ。

ダンジョンの奥深くで待ち構えているという階層 ダンジョン・レックス 主とゴブリンが戦うことになっ

ても、こんなにひどい差にはならないだろう。

それほどの格差がありながら、僕がまだ息をしていられる理由なんて一つしかない。

遊ばれてる。いや、あの戦いの中でこちらの出方を伺い、評価するような態度から推測するに試練のつもりかもしれない。

どちらにしても相手に何らかの思惑があるのは確かだ。

まあ、相手の攻撃は所々致命的なものも混ざっているので、積極的に殺す気はないが、

うっかり死んでも仕方ないとは思ってるかもしれないが。

「向こうが何を考えているかは分かりませんが、格下の相手に対して手加減をしている……これがリリたちの活路になります」

「殺しも気絶させるのも積極的じゃない……ひみつ道具を警戒しているけど、こつちを無力化させようとはしてないみたいだし」

ならば強方うちわ「風神」を使うチャンスはある。

そのためにさつき以上の隙を作るんだ。何か、相手の予測を上回る一撃で。

「……」

問答は済んだかとはばかりに圧力を増す襲撃者。

少し体が揺れたと思つた瞬間には、風を伴つてベルの目の前に現れた。

「リリー！」

動けない少女を左腕に抱えて横に跳ぶ。

先ほどまでベルがいた地点は大剣によって粉々に碎かれる。

飛んでくる地面の破片が当たると感じるながら、ベルは空いている右腕を突き出し砲声した。

「【ファイアボルト】!!」

宙に浮いた状態でも放たれる炎の魔法は、雷の軌跡を描いて男の顔に迫る。

だが、襲撃者はそれを僅かに体勢を落とすことで回避する。

(至近距離の速攻魔法を避けた!?)

それも最小限の動きで。

たった一度の行使で魔法の特性を理解した男は、そのまま地を這うようにその巨体の重心を倒し、拳を握る。

「……っ!」

リリを身体で庇えるように、上半身を振じる。

下から衝撃が来るぞ。耐えろ……っ。

歯を食いしばると同時に脇腹が燃えるように痛む。

内臓を直接殴られたかのような衝撃を感じるが、それに悶えてる暇はない。

続く第二撃がベルの頭を狙って放たれていることを確認したベルは、言う事を聞かない鈍い体を無理矢理動かして、その軌道上に右腕を入り込ませた。

ガツンッ、と途轍もない重みが腕の骨に罅を入れる。

そして、踏ん張りの効かない空中で受けてしまった僕とリリは仲良く吹き飛ばされた。

「ぎっ!?!」

「あうっ!?!」

直撃を喰らった僕だけ伝なく、庇ったはずのリリにすら伝わる衝撃。

苦痛に歪むリリの顔を見て、今更ながら感じる喉を込み上げてくるような異物感を食い止めようと必死になる。

女の子の前でそんな無様なものは見せたくない。なんて、この状況に似つかわしくない馬鹿なことを考えたベルはどうやらお祖父ちゃんのお教えは根深いらしい、つい笑いそうになった。

「足手まといを抱え込むとは余裕だな」

淡々とこちらを挑発するようにかけられる言葉。

それに怒りを覚えるが、腕の中の少女の鼓動が、辛うじて僕の冷静さを保たせる。

感情に惑わされるな。冷静に現状を分析しろ。

僕たちが今、武器として使えるのは強力うちわ「風神」とファイアボルト、後はリリの魔剣。

ただし、先ほど攻撃を防いだ右腕は動かすたびに激痛が走る、ファイアボルトの命中精度はやや落ちる。あまり精密な攻撃はできない。

「リリ……魔剣はあとどれくらい持つ？」

「はつきりとは分かりませんが、あと数度が限界でしょう」

おまけに魔剣には耐久限界というものがある。



「……来るか」

こちらを真つ直ぐと見つめる真紅ルベライトの瞳が、薄暗いダンジョンの中で淡く輝く。その顔はオツタルがよく知るものだ。

圧倒的不条理に抗うための、人間の意地。

覚悟を決めた戦士の証だ。

それでいい、とオツタルは口には出さないがベル・クラネルの選択を認めた。

何やら抱え込んで、その重みに押しつぶされそうになった様だが、人がそんなに器用に立ち回れるわけがない。

プレイヤー勇者ならばともかく、神ならざる眷属たちには目に映るものすら重いものだから。

故に、必要なのは三昧の意識。

まずは一つ、次に一つ、やるべきことを片付けていけばいい。

そんな単純シンプルな答えこそベルに必要なものだった。

(どう出る？ 足手まといの少女を連れて何が出来る？)

オツタルが試練で手を抜くことは無い。

相手のレベルに合わせて加減はしても、手心は加えない。

乗り越えることができないのなら、男は容赦なくその刃を振り下ろす。

「【ファイアボルト】！」

ベルの速攻魔法が再び咆声する。

フレイヤが送った魔導書グリモアはしっかりと己の役目を果たしたようだ。

無詠唱ノータイムの一撃は威力こそ低いノが、厄介ではある。

モンスターよりは対人向けの魔法なのだろう。

(しかし……少し乱れているな)

先程の攻撃よりも狙いが荒い。

恐らく、腕の負傷が効いているのだろう。

オツタルではなく、地面に着弾する魔法すらある始末だ。

最も、ベル自身も予想していたように驚きはなかったが。

(焦りの感情も見えない。つまりこれは本命ではなく陽動か)

九魔姫のように詠唱を連結していくタイプの可能性も考えていたが、そうではないら

しい。魔剣などでオツタルは倒せない。ならば残る攻撃手段は簡単に絞り込める。

(ベル・クラネルが持つ不可思議なアイテムか)

フレイヤがベルを見初めた日から、ベル・クラネルの成長は逐一報告されている。

その中に度々出てきた既存の技術を明らかに超えているアイテム。名はひみつ道具

……と言ったか。

レベル1が剣姫たち第一級冒険者の戦いについていけるほどの力を持つ規格外。



その時その時で使用するアイテムは異なり、詳細は謎に包まれた未知。

オツタルはベル・クラネルとの戦いにおいて、このひみつ道具こそ最大の危険要素と考え、現在判明している限りのアイテムを頭に叩き込んでいる。

(最も警戒していた刀型のひみつ道具はここに来ても出さない……というより出せないか。あまり自由度は高くなさそうだな)

無論、出したところで正面から突破できると確信はしていたが。

オツタルにとつてひみつ道具が危険要素である理由は、どんな力を秘めているか初見ではわからないからだ。

そういった意味では、能力が判明している刀型のひみつ道具よりも、情報がない扇形のひみつ道具の方が恐ろしい。

ひみつ道具をサポートに持たせ、オツタルを足止めせんと魔法を連射するベル。

レベル1の精神力マインドがそう長持ちするはずがない。

無詠唱による燃費の良さを考慮しても、そろそろ精神疲弊マインドダウンを起こす頃合いだ。

現に今のベルは精神疲弊マインドダウンの典型的な症状、酩酊感を感じている様子。

しかし、オツタルはベルが自滅するまで待てるかと言えばそうでもない、魔法による連射は薄暗いダンジョンを照らし、音は狭い空間によく響く。

他の冒険者が異常を感じるのも時間の問題だ。

そうなれば、他派閥の目に晒される危険がある。

そして、万が一にも襲撃者の正体がオツタルと知られれば、大なり小なり女神の名に泥を塗ることになる。

故に、オツタルはベルを無視できない。

速やかにベルを無力化させる必要がある。それがベルたちの狙いと知りながら。

狙ってやっているのかは定かではないが、良くできた駆け引きだ。

しかし、それを実行できる力があるのか。

「試させてもらう」

炎の弾幕を大剣で打ち払い、強引に出る。

ベルはオツタルの頑強さに瞠目するが、すぐさまぎつしりと緑色の薬が入った瓶を投げける。

(これもひみつ道具か)

薬入りの瓶を投げたという事は爆発する可能性がある。

ベルセウス バリスト・オイル  
万能者の爆薬を想起するオツタルは、瓶に衝撃を与えないようにつかみ取った。

その僅かな隙を狙う。

「やあああ!!」

リリの持つ強力うちわ「風神」が颯風を引き起こした。



ベルも、リリも、速すぎるオツタルの追撃に反応しきれない。

背を追いかけるように滑る大剣の凍るような気配に戦慄しながら、とどめの一撃を待ち。

「させつ、るかああああ!!」

前方から飛び出した影がその一撃を受け止める。

「モダーカさん!?!」

「悪い、さつき起きた!」

器の昇華を果たしている上級冒険者は、ベルやリリでは反応できなかつたオツタルの攻撃にも辛うじて対応できた。

後先考えず、全力で突進して勢い任せにオツタルの大剣を止める。

だが、あくまで止めただけ。モダーカは全神経を注いだ一撃で止めたのに対し、オツタルは即座に立て直せるほどの余裕を持っている。

だが、一拍置いた後ならばレベル1の反応も間に合う。

リリはボウガンによる射撃を試みる。

小人族専用装備である「リトル・バリスト」はそのサイズに見合わない威力を持つが、あくまでも上層の範囲ではのこと。

レベル7に至っている猛者には通用しない。

それが通常の矢であれば。

「!?」

防いだ大剣が爆発したかのような手ごたえ。

吹き飛びそうになった得物を反射的に強く握りしめる。

この戦いにおいて、初めてオツタルは裏をかかれた。

（魔剣か！）

振るだけで奇跡の力を再現する神秘の武器を、矢の代わりにボウガンで撃ち出したのだ。

ひみつ道具に警戒を置くあまり、魔剣の力を軽視したオツタルのミス。

高価な魔剣を使い捨てにすることによる高火力。

それによってできた大きな隙。

「……いつけええええええ!!」

ボウガンを撃つために、リリの手から離れた強力うちわ「風神」を空中で掴み、ベルは渾身の力で振った。

リリ以上のステイタスを持つベルによる一振りには、先ほど以上の威力を伴ってオツタルを襲う。

「くっ」

咄嗟に防御の姿勢を取るが、地面にしっかりと足を付けた先ほどと違い、体勢が不安定になったオツタルはズルズルと風に押されて後退していく。

「失礼します!」

「痛てててて?!」

前のめりに体勢が崩れていたモダーカを夢たしかめ機で捕まえる。

頬を掴つかられながら、後ろに引っ張られるモダーカの叫びと共にベルたちはダンジョンの出口に向かった。

「……追いつかんか」

5 Mメドルほど後退したオツタルは、ベルたちが既にダンジョンの出口に到達したと悟り、追撃を断念する。もとよりそういう試練だ。

「曇りは未だに晴れず……しかし、あの様子ならば」

フレイヤが次に標的ターゲットとしてしている少年を知った時。

あの日、ダンジョンですれ違った少年と気づき、驚きと共に納得した。才能は名だたる英傑たちに劣るだろう。

血筋も、それまで歩んだ人生も、きつと見劣りするはずだ。

しかし、そんなことはオツタルにはどうでも良かった。

才能はあくまでも強くなりやすいだけ。

その芽が開花しないこととてあるだろうし、成長を運命が待つてくれるわけでもない。

現に、オツタル以上の才能などいくらでもいるが、今、都市最強なのはオツタルだ。今日までにそう至ったのは、自分が特別だったからとはオツタルは考えない。

むしろ逆、自分が無様に壁にぶつかり続け、泥にまみれたからだ。オツタルは確信する。

人はその泥を飲み干して、冒険することで成長する。

その原動力は心だ。

「そうだ。壁にぶつかり泥を飲み。お前には、それでも抗い続ける想ちからがある」あの少年が特別だとすれば、溢れんばかりの想いを持つていることだ。

一目見ただけであふれ出していると分かる原動力。

打算も何もない、純粹無垢な衝動がオツタルの目に留まった。

「賢しくあろうとするな。それはお前の想いを鈍らせる」

故に、その魂に曇りがあるとフレイヤが言った時、オツタルにはその原因がすぐに分かった。

想いを見失いかけている。

次々と背負ってしまった事情に、原初オリジンを忘れ始めていた。

だからこそ、試練を与えることでそれを呼び起こそうとしたのだが……  
「余計な世話だったか。あれなら直に吹っ切れる」

絶望的な戦力差を理解しても仲間のために立ち向かう愚かさ。

あの少年は賢くあろうとしても、できないだろう。

良くも、悪くも。

拳句の果てに自らの未熟を思い知らされるのだから、世話がない。

「まだ青い……」

普段の彼を知る者がいたら、苦笑いを浮かべる彼に驚いただろう。

やはり、己は人を導くことは苦手なようだ。

「己の未熟を棚に上げて言う。いつか、冒険しろ。ベル・クラネル」

美の女神に見初められたお前にはその責任がある。

勝手な言い分だとは思いますが、オツタルにとっては主の願いこそ全て。

なればこそ、少年の超克を望む。

そして、願わくばその果てに、主の神の願いが成就されることがあらんことを。

人知れず、女神の従順たる眷属はそう願った。



その後、勝手な行動をとったオツタルは、それはそれは美しい笑みを浮かべたフレイヤによって、持って帰ったひみつ道具の中身を食べるように命じられ、数日間食事にありつけなくなった。

フラフラになったオツタルに、普段から仲の悪い「フレイヤ・ファミリア」の眷属たちはここぞとばかりに一斉に襲い掛かったという。

最終的に、空腹と絶え間ない襲撃にキレたオツタルによって団員たちがフルボッコに

されたと言う噂が都市に流れ、ベルは「怖いなー」「フレイヤ・ファミリア」には近づかないでよ」と他人事のような感想を持ったという。

## 揺れる心

「暫くはダンジョンには行くな」

「ガネーシャ・ファミリア」のホームである「アイアム・ガネーシャ」に逃げ帰った僕たちが治療を受けていると、団長であるシャクテイさんからそんな指示が下った。

明らかに第一級冒険者並みの相手に襲撃を受けたわけだし、正しい判断だと思う。

あれが闇派閥イウイルスだったかは分からないけど、もう一度襲撃してくる可能性がある以上、ダンジョンにはしばらくは行かないだろう。

（早く強くなりたいのにままならないな）

あの戦いでモヤモヤがちよつと晴れた気がした身としては、早く体を動かしたくて仕方ないのだが、勝手な行動をして「ガネーシャ・ファミリア」の人たちに迷惑をかけるわけにもいかない。

暫くは自主練習で何とかするしかないか。

経験値エクセリアって訓練でも稼げるのかな？

「聞けば聞くほど絶望的な状況だったようだな……よく生きて帰ってくれた」

「自分もあっさりと叩きのめされちゃいましたからね……面目ないです」

モダーカさんは頭にぐるぐると包帯を巻いたまま項垂れている。

あの襲撃で僕が怪我をしていることを悔いているらしい。

「……上級冒険者一人で十分だという判断を下した私の落ち度でもある」

申し訳なかったと二人で僕に頭を下げて来るのを慌てて止める。

今回は本当に相手が悪かったただけだ。あんな強い相手がレベル1を襲うなんて想像できるわけがないし、それを止めるなんて無茶を言うつもりはない。

「いや、どんな理由があれば、守るべき存在を傷つけさせてしまったことに変わりはない。窮屈な思いをさせてしまうが、今しばらくの辛抱だ。協力してほしい」

ダンジョンに行けないのは残念だけど、こんな真剣に僕のことを考えてくれているのを無碍にはできない。

また体を休めることができると思えばいいか。

「リリもごめんね？変なことに巻き込んで」

「いえ、ベル様が庇ってくださったおかげでリリには大した怪我はなかったですし」

それでも命の危険があったわけだし、恨み言の一つも覚悟していたんだけど、リリは気にした様子がない。

というよりは他のことが気になっているみたいだ。

時折何か考え込んでいるのが気になる。

「そういえばサポーター君。ファミアリアには連絡を入れたのかい？」

「いえ……色々ごたごたして忘れてました」

「なら、俺が行ってくる。このまま何もしないのも申し訳ないからな」

モダーカさんの言葉にリリは曖昧な反応をするだけだった。

……ファミアリアには伝えてほしくないのかな。

リリと「ソーマ・ファミアリア」の関係はあまり良くはないみたいだし。

「……君にも色々あるんだろうけど、流石に伝えない訳には行かないからね」

「分かっています」

神様もそんなリリの心情を考えてフォローしているが、効果は薄いみたいだ。

どこか、諦観のようなものを浮かべている。

(……ダンジョンだけじゃなくて他の店もダメだよね)

話し合う二人を横目に僕はあれこれ考えていた予定を変更する。

シルさんに借りていた本はどうしようとか、春姫さんに会いに行けないとか。

女の人に会うために外に出させてくれっていたら、絶対に怒られるよね。

特に春姫さんは娼館だし。

(一度、春姫さんには会っておきたいんだけど……)

あのまま時間が経つと関係が自然消滅しそうだし、どんな形でも会っておきたかった

んだけど。

しよ、娼館に通うお金がどのくらいかかるか分からないからとにかく稼ごう！って思ってたんだけど。

や、やましいことは考えてないから。春姫さんに会うだけだから。

(物語の中で僕が娼館通いしてるってドラえもんさんは言ってたけど、どうなんだろう) ヴアレンシユタインさんと出会ったときはそんな訳ないって思ってたけど、なんか自信がなくなってきた。

春姫さんつてとんでもなく美人だし、つい手を出しちゃった可能性も……っ。

いやでものび太君が僕に内緒でストーリーを教えた後、ドラえもんさんは勘違いだったって謝ってきたし違うか。

なんにせよ、娼館に通うのは難しいかもしれない。

この状況で娼館行くんですとか言う勇氣はないです。

(どうやって娼館に行くか、誰かに相談したいけど……)

神様、リリ、イルタさん、シャクテイさんは論外だ。

そんなことを「ガネーシャ・ファミリア」のホームでした日には、僕の寝床が客室から牢屋に変わる。

モダーカさんはそういうところ行くのかな……真面目そうだし行かないかも。

ガネーシャ様？あの独特なガネーシャ語を解読しきる自信がない。

(ハシヤーナさん……早く戻ってこないかな……)

あの人なら聞ける気がする。

なんか女の人にホイホイついて行ってそうだし。

僕に会った日についていた依頼クエントはまだ完了してないらしい、ファミリアの人たちも知

らないかなり極秘の内容らしいけど……

ここの音沙汰がないと不安になる。

僕が作った発フラッシュ・ボトル光瓶、役に立ったかな。

「あーあのさーベル君？」

再開の約束をした恩人に想いを馳せていると、ツンツンと神様が指を僕の背中に当ててきた。

物凄く言いにくそうな顔でこちらを上目遣いしている神様。

猛烈に嫌な予感がしてきた。

「借金……増えちゃったみたい……」

「えっ」

遠い目で爆弾発言を告げる神様。

「ちよっと聞いておきたいんだけどさ、グリモア魔導書って聞いたことは無いかい」

「な、なんですか？グリモア？」

「うん。これ、ただけだよ」

そうして出てきたのはシルさんから借りた白い本。

あれ？これ、僕がやらかしちゃった……？

「簡単に言っちゃうと魔法を強制的に引き出すマジックアイテム」

やらかしちゃった……

ダラダラと汗を流しながら、処刑宣告を待つ罪人のような気持ちで神様の言葉を待つ。

「分からないとは思うけど、これをつくるためには【魔導】と【神秘】って言う二つの発展アビリティが必要で……」

分かっちゃいました神様。

二つの発展アビリティが必要という事は、最低でもレベル3の人が作ったという事。

眷属の平均レベルが高いオラリオでも、かなり希少な人たちによるマジックアイテム。

という事はお値段も相応に……

「い、いくら位なんですか？」

「上級鍛冶師の中でも、さらに一握りの巨匠の作品並、下手したらもつと」





しかし、今の状況をザニスが知れば必ずあの男はリリから引きはがすだろう。

何せ、件の冒険者は現在、「ガネーシャ・ファミリア」の保護下に置かれているのだから。

その傍にいるなど、いつ「ソーマ・ファミリア」の暗部が彼らの目に留まるか分かったものではない。

それが分かるからこそ、リリはザニスに今回の件が知られるのを嫌がった。

事情を知らない「ガネーシャ・ファミリア」が、ファミリアに所属する眷属の保護を無断で行うわけにもいかないだろうから、仕方のないことだと分かっているのだが。

(きつと、「ガネーシャ・ファミリア」の保護が終わった後、リリはベル様たちから距離を置くように指示を受けるでしょう。もう、この人たちと会うのも残り僅か)

元々少しの間だけの関係のつもりだったはずだ。

騙して、裏切って、そしたら姿を消して二度と会うことは無い。

過程こそ思い描いたものと違ったが、予定通りの結末を辿ろうとしているだけ。なのに、どうして心がざわつくのか。

初めは八つ当たりのためだった。

それが「ソーマ・ファミリア」の呪縛からの逃避のための居場所になり。

気づけば仮面の内から笑みがこぼれ落ちていた。

（いつからだろう、彼の真つ白な笑みに苛立ちを感じなくなったのは。いつからだろう、彼の前で従順なサポーターを演じなくなったのは）

あの時、どうして魔剣を抜いたのか。リリには分からない。

自分のことだというのに、あの瞬間、己の行動に最も驚愕していたのはリリだ。

自分の最大の武器は誰にも頼らず、卑怯な手で裏切れることだったはず。

あんな自殺行為、リリはするはずがないのに。

ベルに刃が迫る瞬間、リリは本当に何も考えていなかったのだ。

目まぐるしく動く状況に、蚊帳の外だった少女は置いてけぼりを食らっていたのだから。

そして魔剣を放ったところで無意味だった。

襲撃者は強大で、ダンジョン上層なら切り札足りえる炎の魔剣も、あの男には何の脅威にもなりえない。

そんなの分かっていた。

頭のいいリリなら分かっていたはずなのに。

どうしてあんな無意味なことをしたのか。

あの行動の結果、一体何をリリは手にした。

ただ、襲撃者の眼中になかったはずのリリの存在を晒しただけで終わったではない

か。

(リリは……)

否。

本当は分かっていた。

気が付かないフリをし続けている。

(駄目、気が付いちゃいけない)

思考を閉じる。

繋がりそうになった真実に蓋をした。

それに向き合える純粹さはとうに失っている。

それを信じるだけの勇氣は今のリリにはない。

なにより、気が付けば向かい合わなければならないのだ。

それはリリの抱いていい感情ものではないと。

本心こたえに行きつく前に、疑問は放り投げろ。

自覚などするな。

(ベル様は冒険者なんです。いつか、いつか……)

そうだ、知っているはずだ。

何年この都市で生きてきた？

奴らが餌に群がるハイエナの群れだと、あの日、あの人たちに見放された時から理解していたではないか。

きつとベルは裏切る。

冒険者である限り、荷物持ちとの力関係は歴然。

リリ、と自分を呼ぶ裏で弱者である自分を嘲っているに違いない。

なら、そうだと弁えて対応しろ。

あんな奴ら、深く関わるだけ損なのだ。

だから、思い出すな。

ダンジョンの地面を粉々に砕く大剣。

飛び散った偽りの大地の破片が、少年の真っ白な髪を汚す。

それでも彼は少女の小さな体を抱き込んでいて……

密着した耳は、少年の鼓動をリリに伝える。

バクバクと破裂しそうなほど高まるリズム。

その体が、恐怖で竦んでいることもリリには分かっていた。

それでも少年は決して少女を離さないように、固く、強く、その体を抱きしめて。

(違う、違う、違う！)

必死に頭からその情景を追い払う。

それは毒だ。リリルカ・アーデという灰被りの少女を溶かす、致命の毒。

自分の心に気が付けば、リリは苦しむことになる。

だったら、気が付かなくていい。いいのだ。

「……」

ふと、少年の顔が見たくなかった。

きつと気の抜けた顔で借金に斃つなされているベルの顔が。

物語の住民のようにコロコロと表情を変えるあの白兔が自分の中で、どんな存在になったのか分からなくなつたからかもしれない。

彼らの傍にいれば、自分も、大嫌いな自分を変えれると思つてるのだろうか。

「馬鹿馬鹿しい……」

呟いた声は弱弱しくて、リリの感情を逆撫でさせる。

散々裏切られて、裏切つて、それでも何かを期待しそうになっている自分。

滑稽だ。こんな道化劇。

「サポーター君」

自分の想いに気付かず、気付こうとせず。

再び仮面を纏いなおそうとするリリにかけられる声。

少年をベッドに寝かしつけた女神ヘステリアは、リリの内心を見透かすように声をかける。

「自分の心は騙せないよ」

「……なんの話でしょうか」

「未来の話。その誤魔化しはいつかきつと限界が来るってことを言ってるんだ」

何を言っているのか。

分からないし、分かりたくない。

「……今すぐその想いを受け止めろって言うのは難しいかもしれない。けど、いつか君は、あの子の本心を知ることになるだろう」

これだから神様と話すのは嫌なのだ。

いつも、何かを分かったかのように話して。

だったら、どうして神様はリリたちに何もしてくれないのか。

指先一つであらゆる不幸を消し去れる力があるくせに。

「失礼します」

これ以上ヘスティアの前にいると、いよいよ後戻りできないくらいに自分を暴かれそう。

リリは無礼と知りながら、話を強引に断ち切ってその場を離れる。

ヘスティアはリリの行動を止めようとはしなかった。

ただ一言、投げかけたただけだった。

「あの子はこの出会いをなかったことになんかしないよ」

その一言がずっとリリの中で繰り返し返される。

濡れる氷の心に走る小さな罅。

決して大きいと言えないそれは、しかし、確かに現れ始めていた。



## 秘密基地を作ろう！

黄緑の触手に手を伸ばす。

上級冒険者すら脅かす怪物の鞭は、そんなことを忘れさせるほどに怯えていた。

モンスターが怯えているのは、目の前の人物が恐ろしいからではないだろう。

手を伸ばす少年のレベルは1。

怪物の脅威になどなり得ない、弱い存在だ。

それを哀れなほどに恐れるモンスターの姿は、下界の常識から逸脱していて、世界が滲んでしまったような錯覚を与える。

拒絶しないで。

恐れなくて。

受け入れて。

そんなことをモンスターが考えるはずなのに、そうモンスターが訴えているようだ。

子犬の様に狭い檻の中で震える姿を見ると、虐待、なんて人類の天敵に相応しくない印象すら感じられる。



ベルの言葉にヘステイアは唖る。

ベルがああヴィオラスに情を移し始めていることは何となく気が付いていた。

少年はああのモンスターにもつといい環境を整えてあげたいのだろう。

しかし、それは茨の道だ。

モンスターと人類の確執は深い。もし、ベルがモンスターと友好的な関係を築いていると分かれれば、下界の住民たちは一斉にベルのことを非難することは想像に難くない。

そうならないためには秘密裏にヴィオラスを匿うことになるが、ヴィオラスはデカすぎる。隠ぺいなどどう考えても不可能なほどに。

そんなこと「ヘステイア・ファミリア」ではどうにもできないから、「ガネーシャ・ファミリア」を頼ったのだ。

彼らのやっていることに口を挟むべきではない。

……主神としてはそういうべきなのだろう。

眷属わが子を思うならば、それ以外に対しては鬼になるべきだ。

だが、ヘステイアは孤児たちの神。

ああのヴィオラス……感情を持ってしまった異端児ゼノスのことを知ってしまった以上、慈愛の女神たるヘステイアは知らぬ存ぜぬを決め込むのは無理な話だった。

（ヴィオラスの今の境遇は酷だ。ベル君には言っていないけど、ああのヴィオラスには心が

ある。話はしないけど、暴れることのない温厚な性格なのは今までの様子から見ても間違いない)

ならば、通常のモンスターとは違って相互理解の可能性があるのだ。

一方的にサイズの合っていない、小さな檻に閉じ込めている現状は決して好ましくない。

(ただ、「ガネーシャ・ファミリア」にそれを頼むのは……)

だが、そんな対応になるだけの理由がある。

まずはモンスターとしての能力値<sup>ポテンシャル</sup>。

ダンジョン攻略の最先端たる「ロキ・ファミリア」の幹部が数人がかりで鎮圧したその力は、警戒されてしかるべきものだ。

だから、今のヴィオラスは劣悪な環境下で徐々に弱らせている。

二つ目は感情の問題だ。

ヴィオラスはもともとと言えば闇派閥<sup>イヴィルス</sup>の手札だったものだ。

何故かひみつ道具でベルに懐いたとは言え、悪の手先であったことは変わらない。

そうなる前に何人殺していたか分かったものではない。

そして、これはヘステイアが勝手に感じているだけのものだが、未知に対する拒絶も理由なのではないか。

このヴィオラスは明らかに他のモンスターと違う。ガネーシャが真実を知らしている眷属は、団長のシヤクテイのみであるが、それでもヴィオラスに関わった団員は大なり小なり違和感を覚えるはずだ。

神は未知を愛するが、眷属ことどもは時に異常なまでに未知を嫌悪する。

今回も、理解できないモンスターへの反発が、ヴィオラスへの対応を過激にしているのではないかとヘステイアは考えた。

(統率のとれたガネーシャの眷属すらこうなんだ、やっぱりモンスターとの確執は根深い)

ガネーシャならばベルの頼みを聞いてくれるだろう。

しかし、ガネーシャの冒険者は別。

主神権限で強引に通そうとも、カリスマ性が溢れるガネーシャであっても、必ず不満が残る。

他派閥のベルがそんなことを言った日にはどんな反発があるか、想像もしたくない。

「ガネーシャ・ファミア」にお問い合わせするのは大変そうだし……ひみつ道具に頼るくらいしか思いつかないかな……」

結局、答えになつてない答えしか返せなかつた。

馬鹿げた返答をした自分に嫌気がさすヘステイアだったが。



物だ。

こんなもの持っていても仕方ないが。

「えっと、この本棚の裏ですよね？」

「うん。地下室はもう、見るに無残って感じだけど」

元は階段だったと思われる空間の先には、不自然に空いた大きな穴。

ヘスティアが用意していた生活空間は今や立派な廃墟だ。

「ええっと……【みちび機】によると、ここで二番目のスロット……じゃなくて、えっと、もう一つのひみつ道具を使うんだそうです」

手に持った小さな紙を確認しながら、ベルは持ってきていたひみつ道具を取り出した。

スキルのことを知らないリリを誤魔化すための言い回しに苦戦しながら、ベルは用意していた二つのひみつ道具を取り出す。

一つは鳥居のような形をしたみちび機、もう一つは四角い箱に線が繋がったポンプのようなものがくっついていている道具、【ポップ地下室】である。

「使おうってどうやってだ？」

「ちよつと待ってください……『ポップ地下室はどうやって使うの？』」

みちび機のスイッチを押して、ベルが質問をすると鳥居の額塚がくづかから出現した紙に書か

れた指示を確認する。

これこそ、みちび機的能力。

その名の通り、使用者に助言し、導きを与えるひみつ道具らしい。

「ふん・ふん……分かりました。ちよつと離れていてください」

そう言うのと、ベルはベッドで滅茶苦茶になったかつての地下室に降り立った。

レベル1とは言え、そこは恩恵フアルグナで力を高めた冒険者。

結構な高所から飛び降りたが、着地の瞬間に足がジンとなっただけだった。

ベルはポップ地下室を地面に埋めると、埋めたひみつ道具から距離を取り、一気にポップを押し込む。

するとポップ地下室は爆発し、その地点に小さな穴が残された。

爆発によってできたとは思えない、綺麗な四角形型だったが。

「か、階段?」

おまけに鉄でできているらしい階段が付いてくる始末。

やはりひみつ道具とは摩訶不思議だ。

「さ、驚くのはいいけど降りようか」

ヘスティアの言葉に従い、一行は梯子を滑って地下に向かう。

そこには妙に金属質メタルリックな部屋が大きく広がっていた。



「本当に地下室が出来ている……」

ポップ地下室と言う名前からある程度の推測はしていたが、実際に見ると度肝を抜かれる。

家どころか、何かの倉庫にもなりそうなほどに大きな部屋が、あんな小規模な爆発で生まれるとは。

これなら今回の目的、ヴィオラスを匿える空間の確保もできるだろう。

ふと、その時リリはあることに気付く。

「これ、下水道とか大丈夫なんでしょうか」

「……ちよつと調べて来よう」

想定していたより大きな地下室だ。

或いは地下水路にも影響があるかもしれない。

リリの言葉に神妙な表情になったモダーカが、階段を上がって地下水路に確認するよ  
うにベルたちに指示を出したところ、地下水路は何の問題もなく存在していた。

(なにこれこわい)

ひよつとして異空間的なものなのだろうか。

だとすればどこまでも部屋を大きくできたりして。

そこまで考えて、慌てて首を振る。

余計なことは考えないでおこう。今必要な分の地下室は確保できたわけだし、早く次の段階に移らないと。

そちらの方が時間を食うのだから。

「地下室は完成したし、次は家具だ。ガネーシャのホームを出たら、ヴィオラスだけじゃなくて、ボクたちもここに住むことになるかもしれないし、ちゃんと作っておこう」

「これを使うんですよね?」

そう言つて、リリが取り出したのは一冊の大きな紙だ。

ひみつ道具「かみの工作 きりぬく本」。

これも名前でその使い道が分かる、使いやすい部類のひみつ道具だ。

その効果はとんでもないが。

「こんなもので家具が作れるのか?」

「はい。これを<sup>はさみ</sup>鋏で切つて、紙工作すればちゃんと実物と同じように使えるんです」

実際にカンテラを作つてみたところ、問題なく使用できた。

今もこの暗めの空間で、力強く輝いてる紙工作を見るに、他の家具もこれで揃えられるだろう。

「ボクとサポーター君は小さめの家具を作つてみるから、ベル君とモダーカ君はでっかい家具を作つてみて」

「「はー」」

人数分の鍔を配り終わると早速作業に取り掛かる。

リリとヘスティアはまず、明かりになりそうな小道具を次々と切り抜いていく。

これからここを使っていくには照明は必須であるし、ベルがよく使う「くライト」というひみつ道具の名前のおかげで、それが光を発するものだとは容易に想像ができたので、まずは使い方が分かる物から作っていくことにしたのだ。

「結構作りましたけど、まだ部屋全体を明るくするのは難しそうですね」

「全部照らそうとしなくてもいいさ。それをやってたらすぐに返却期限である明日が来る」

一方、ベルとモダーカは冒険者としての身体能力を作り、女性陣以上のペースで大型の家具を作っていく。

しかし、ここで問題が起きる。

「この洗濯機って、洗濯のためのアイテムなのか？」

「多分……機って言うのはこれまでのひみつ道具の名前からして、何かをするためのアイテムって意味ですし」

異世界発祥のアイテムだけあって、どのように使うのか分からない家具が非常に多いのだ。

タンスやベッドならまだいい。異国情緒はあるが、問題なく使える。しかし、中にはどんな使い方をするのかまるで分らないものもある。

エアコンとか、一体どんな能力があるのだろうか。

「ちよつと待つていてください。『エアコンはどう使うの?』……えつと、このりもこんつて言うもので操作して、部屋の温度を調整するみたいです」

「このバカ広い部屋で使えんのか?」

「難しいみたいです」

こんな時に活躍するのがみちび機だ。

普段なら手探りで探していく使い方を、簡単に教えてくれる。

(普段からこれが使えればなあ)

便利なみみつ道具が出る度に思ってしまう。

これがあればみみつ道具を見当違いな使い方することもない。

色んな事に対する近道だつてできるはずだ。

(あ、そうだ。春姫さんのこと、聞いてみようかな)

「『春姫さんをあの状況から救いたいんだけど、どうすればいい?』」

ベルの質問に対するみちび機の回答は『「イシユタル・ファミリア」から奪う』。

想像していたより過激な回答に面食らうベル。

(何かこのひみつ道具抗争しろって言ってるんだけど!?)

春姫はただの娼婦ではないのか?

【イシュタル・ファミリア】はそれだけ退団に厳しいのだろうか。

抗争しても勝ち目などないのだから、そんな選択肢は避けたいのだが。

「も、もうちよつと質問を」

「お〜いベル君!!お昼休憩にしようぜ!!」

「あ、はい!」

ヘスティアに呼ばれたベルは、一旦思考を切り上げる。

既に作業を止めて休憩を始めているヘスティアたちの所に慌てて合流した。

「さあ、ベル君。食べたいものを切り取るんだ」

「え?ひよつとして食べ物もあるんですか、紙工作」

ヘスティアに渡された本の中からいくつかの食べ物を発見し、ちよつと顔が引き攣る。

お腹壊さないのだろうか。

「いや、触感は独特だが普通に旨い」

バリポリバリツ!とシルのお弁当のような音を出しながら、紙工作のハンバーガーを頬張るその姿からは想像できないが、真つ先に食べたモダーカによると美味しいらしい

い。

すごい躊躇のなさだ。耐異常のアビリティを持っているのだろうか。

「い、いただきます……」

ベルも自分が作った骨付き肉の紙工作に噛みつく。

触感の違いなく紙だが、味は豪華な肉料理だ。肉汁すら感じられる。

「ベル君ベル君！じゃーん、ケーキワンホール〜！」

ヘスティアも普段は食事にお金をかけられない分、豪華なメニューにしている。

カルパッチョとか、ドリアとか、とにかくたくさん作っていて、食べきれるか心配だ。

「ひっ、誰ですか！団子なんて作ってるのは!?!」

「俺だがかしたのか?」

「トラウマなんですよ……」

リリはモダーカさんの作った肉団子に怯えている。

……これって十中八九あの事件のせいだね。お尻印の。

ごめん、と心の中で謝った。

「しかし、この広さならヴィオラスを収容できるだろうが、ここまで連れてくるのは骨が

折れるな……」

「あの、モダーカさんたちはどうやってここまでヴィオラスを連れてくる気なんですか

「？」

「昔、暗黒期だった頃にガネーシャ様の神輿を担いで都市中を回ったことがあってな。あれを今回もやるんだと」

遠い目になったモダーカに、何とも言えない表情になるベル。

再び闇派閥が暴れ始めている今、ガネーシャがそう言った行動に出るのはおかしくない、というのがオラリオの住民たちの認識だ。

そのいくつかある神輿の中の一つに、ヴィオラスを入れて運ぶつもりらしい。

「あの……ヴィオラスってかなりデカいんですけど……」

「神輿はもつとデカくなるってことだろ、笑えよ」

(ご迷惑をおかけしてすみません)

後日、完成した地下室の中にヴィオラスを移すためにくつつつつつそ重い神輿を担ぐ【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちの姿があった。

彼らは途中から吹っ切れたのかイイ笑顔だったが、ヴィオラスは恐縮しきりだったという。

そんな極彩色のモンスターの姿に、ちよつと【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちのヴィオラスへの警戒が緩んだのだとか。

## 霊体散歩

まじまじと自分の手を見つめる。

農民として長年鋤クワを握り続けた手は、マメができていた。

見慣れたいつも通りの手だ。色が青っぽい事と手の向こう側が透けて見える以外は。

「ゆ、幽霊になつてる……？」

目の前でストローを咥えたまま動かない自分の体を見て、一体何が起きているのかを理解したベルは途方に暮れた声で呟いた。

始まりはいつも通り、ひみつ道具のスロットを確認していた時だ。

【ゆうれいストロー】というひみつ道具を具現化して、その効果を確かめようとした時。

ストローという名前から何か飲み物に関係するひみつ道具かと考え、水を入れたコップであれこれ実験していたら、「俺がガネーシャだ！」という声が「アイアム・ガネーシャ」に突如として響いた。

驚いてストローを咥えたまま顔を上げてしまったベルは、その拍子に息を吐いてしまい、気が付いたら幽霊として魂らしきものを出してしまったのだ。



(いや、今の僕が魂なのかは分からないけど)

神でもないベルには、魂というものがイマイチ理解できていないので、実際は魂ではないのかもしれない。

とにかく、口から半透明のベルが出てきて、本体のベルは抜け殻になってしまったのだ。

「も、戻れるのかな？」

このままでは大騒ぎだと何とか体の中に戻ろうとする。

この不可思議な現象の原因は間違いなくゆうれいストロー。

ならば、これを通れば元に戻れるかもしれないと、ベルは何とかストローの口に入った。

「——ぷはっ、も、戻れた」

あのまま一生幽霊という事はないようで一安心だ。

ちゃんと戻れることができるのなら、安心してこのひみつ道具の検証に移れる。

一呼吸して再び魂を吹き出す。

(まずは自分の状況を確認しよう。さつき確認した通り体は半透明。それに、どこか不健康な色だ。足は……ないや、なんだか煙みたいにゆらゆらしている)

一般的にイメージされる幽霊像そのままの姿だ。

ひみつ道具の凄さはもう十分に理解した気でいたけど、こんなオカルトめいた能力もあるなんて、やっぱり異世界の技術は凄い。

【神秘】のアビリティもなしにこれを作ったと言えば、世のアイテムメイカーは一斉にひっくり返るだろう。

ファールナ

恩恵抜きでもここまでやれるのだと驚かされた。

「壁は通りぬけられるかな？……うん、できる」

見た目だけではなく、しっかりと幽霊らしいことも可能なようだ。

本体が無防備になってしまおうとは言え、中々有用なひみつ道具なのではないだろうか。

物をすり抜けるという事は、攻撃だつて効かないのかも。

その時、ふと閃いた。

（壁を通り抜けるらるってことは、何処にでも侵入できるってことでもある）  
ならば行けるのではないだろうか。

ずっと気になっていた春姫の所に。

イヅイルス

闇派閥や謎の襲撃者を警戒して、外に出れない状況が続いていたが、攻撃を食らうことがない幽霊の状態ならば大丈夫だ。

「早速……いや、ちよつと早いかな」

善は急げと春姫のいる娼館に向かおうとするが、太陽の位置を見てまだ人を訪ねるような時間帯ではないと思いなおす。

ベルは元農民故に早寝早起きの習慣が身に沁みついているが、春姫がそうかは分からない。

否、夜の仕事ゆえにこの時間帯は就寝時間である可能性の方が高いだろう。

今すぐに会いに行くのは向こうに迷惑だとベルは考える。

(とりあえずお昼頃までぶらぶら散歩しようかな)

今のベルはダンジョンに行けないせいでやることがない。

【ガネーシャ・ファミリア】の手伝いをしようにも、保護対象者にそんなことはさせられないとやんわりと断られてしまった。

おかげですっかり暇を持って余ってしまった。

これが穀潰し＝トという奴なのだろうか。

とにかく、慣らし運転がてらに周囲を散歩してみよう。

幽霊の状態ならばいつもとは違った発見があるかもしれない。

【アイアム・ガネーシャ】の壁を透き通ってオラリオの街に繰り出す。

「とりあえずダイダロス通りにも行こうかな、壁を透き通ったり空を飛べる今の僕ならそんなに迷わないだろうし」

本当はこの際にリリのホームの様子を見ておきたかったのだが、ベルは「ソーマ・ファミリア」のホームを知らない。今からリリに聞こうにも、探られてると知ってリリもいい気はしないだろう。

だから障害物が多いダイダロス通りで、建物を無視して進める今の体を試すことにした。

（今の僕が他の人に見えるかは分からない……慎重に進もう）

気分は極東にいるという忍者だ。

キヨロキヨロと周囲の人の目を気にしながら建物の陰に隠れていく。

そして、顔をちよつと壁の向こうに通り抜けさせて中の状況を確認しつつ、建物を通り過ぎる。

最初はびくついてあまり進めていかなかったけど、徐々にやり方のコツが分かってきて移動ペースも早くなってきた。

そうなる最初一杯一杯で目に入らなかつた周囲の情報も目に入るようになる。

あちらこちらに存在する露天商の商品には鍵がかかり、家の扉の内側には厳重な鍵が欠けられている。

そして、寝起きが速い子供ならば、既に遊びまわっていてもおかしくない時間帯なのに、人っ子一人存在しない。

それが何を意味するのか。分からないベルではない。

(みんな怯えてるんだ)

いつ現れるか分からない闇派閥イグイルスの脅威に。

かつて正義のファミリーアたちによって壊滅したはずだった都市の闇を感じ、また、暗黒期のような時代が来るのかもしれないと感じている。

暗黒期には人が死なない日はなく、誰もが苛烈な悪の陰に怯えていたと聞く。

現在の冒険者の平均年齢が低いのは、かつての抗争で多くの先達が、後の世代のためにその命を散らしたからだどハシャーナは語っていた。

普段の豪快な様子とは違う、どこか寂し気な表情をしていたのは、彼もその時代に偉大な先輩を失ったからだろうか。

そんな犠牲と引き換えの平和が終わり、また騒乱の時代が来る。

(僕はその時どうするんだろう……?)

死の恐怖に震えて、動けないでいるのか。

力に敗れて、命を落としてしまうのか。

狂乱に飲まれて、破滅の道を辿るのか。

いずれにせよ、ベル・クラネルの人生は大きな転換期を迎えるだろう。

祖父の言っていた言葉、オラリオに行けば否が応でも時代の流れに巻き込まれるとい

う言葉を実感する。

英雄にだってなれる、という言葉に嘘はないのだろう。

英雄に必要な試練はきつと有り余っている。

レベル1では到底かなわない分厚い壁が。

きつと、今の自分の悩みも、この巨大なオラリオの中ではありふれた悩みでしかないのだ。

「あれ？エイナさん？」

ふと、街通りの中に制服姿のエイナさんの姿が確認できた。

お店の店員を相手に、何か真剣そうな顔であれこれ尋ねている。

ギルドの職員が街中にいるという事は、何かの調査をしているのだろうか。

「……その冒険者は「ソーマ・ファミリア」の冒険者で間違いなかったですか？」

「ああ、あの月と杯の紋章は確かにソーマだ。この前もサポーターから金を奪ってたぜ。ただ最近は……」

途中から聞き耳を立てたから、正確なところは分からないけど、「ソーマ・ファミリア」のことらしい。

これはひよつとしてベルのサポーターであるリリのことに関係しているのか。

もしそうなら、聞いておきたい。



(まだ店は何処もやってないみたいだけど……そろそろ日が暮れる)

ベルは夜の南東区画を知らないが、恐らく日が落ちた瞬間にこの区画は一変する。冒険者に一時の夢を見せる、ある意味欲望の都オラリオに最も相応しい姿となつて。そう思うとどこかそわそわしてくる。

人目を避けて歓楽街に潜入する足取りにも、自然と警戒心が強くなつていった。

「また同じ紋章だ」<sup>エンブレム</sup>

そうして辺りに注意を向けているとあることに気が付く。

あるエリアから建てられている建物のほとんどが、同じファミリアの紋章<sup>エンブレム</sup>を掲げているという事だ。つまり全部がある派閥の縄張りだという事で……

恐らく、女神を模していると思われる紋章は娼婦たちによるファミリア<sup>エンブレム</sup>。

これだけの建物がそのファミリアの支配下にあると考えると、団員数は一体どれだけになるのか。

規模は力だ。

ダンジョンという無限の戦力を有する存在との戦いを、紛いなりにも経験するベルはそれをよく知っている。

こういった店の護衛として配属されている眷属がどれほど強いのかは分からないが、店ごとに最低一人配属されていると考えれば、その数だけで脅威だと分かる。



（荒くれ者が多い冒険者を相手取る以上、例え非戦闘系のファミリアであってもとんでもない戦力を有していることがある。神様が言っていたのはこういう事かな）

少なくともベルがこの区画で何かやらかした日には、戦える娼婦……所謂戦闘娼婦<sup>パベラ</sup>たちにボコボコにされるのは間違いない。

先日のみちび機による『春姫を奪え』なんて指示に従うことは、はつきり言つて自殺行為だ。

（でも、みちび機が無茶苦茶な指示を出したのつてあれくらいなんだよなあ……）

ベルの知り合いのとある酒場の店主は、かつて在籍したファミリアから脱退して独立している。

春姫とその人の状況は全く違うだろうが、脱退という穏便な選択肢もありだと思っただが。

みちび機がその選択肢を提示する余地が無いくらいに、難しいことなのだろうか。

例えば主神の性格が最悪で、脱退するのに無理難題を吹っかけて来るとか。

「あ、あれだ」

そんなことを考えているとあの日落ちた極東風の娼館が見えた。

そうそう、あの瓦でできた屋根を突き破ったんだ……あんな固そうな屋根だったのか。

建物はまだ開店前で、中から時々人の声は聞こえるが、まだ開店の準備をしているわけではなさそうだ。

これならば春姫と話す時間もあるだろうと、ベルは娼館の壁に近づいた後、建物の中に侵入する。……ちよつとドキドキしてきた。

(今の僕つて不法侵入してるわけだし、拒絶されないかな)

自分がかなり独りよがりなことをしている自覚はある。

繋がりを失いたくないと考えての行動だけど、向こうからしてみれば迷惑だろう。

それでもやってみよう……とは決意していたが、だんだんと不安になってきた。

とにかく、もう一回話をしよう。

そうでなくては何も決められない。

やがて、あの日落ちたと思われる部屋の前に到着した。

一応聞き耳を立てる……うん、着替え中とかさういうことは無いみたい。

緊張をほぐすために深呼吸を一つした後、意を決して部屋に入る。

「こんにちは、春姫さん」

「?どなたで……?!?!?」

春姫の姿を確認したベルは彼女に声をかける。

すると彼女は不思議そうに振り返り、ものすごいびつくりされた。尻尾をビーンと立





## 仮面の襲撃者

始まりは一つの奇妙な依頼だった。

30階層に行き、得体のしれない物体を回収する。

それも、極秘依頼であるがゆえにたった一人で。

30階層とはギルドの定める基準では下層と呼ばれる領域だ。

世界を見渡しても眷属たちの質が高いオラリオであつても、単独で下層を突破できるものはそうはいない。

依頼人不明で難易度は最高クラスが予想されるこんな依頼が成立したのは、依頼報酬が抜群に良かったからだろう。

とにもかくにもこの依頼を受け取った冒険者……ハシャーナ・ドルリアは、万全の準備を整えてダンジョンに向かった。

オラリオでも有数の「ガネーシャ・ファミリア」の二つ名持ちなだけあつて、途中、何度か危機的状況アクシデントが起きてても冷静に対処したその男は無事に依頼された物体の回収を達成する。

後は報酬が指定の場所に振り込まれていることを確認し、冒険の成功を祝って歓楽街

にでも繰り出そうかと18階層の酒場で考えていた時、それは起きた。

最初は喧嘩か何かだと思った。

ダンジョンの中に好き勝手出来る街をつくる、などという酔狂な奴らが集まるこの街ではトラブルが絶えることは無い。

冒険者と住民のいざこざはならず者たちの街の風物詩とすら言える。

大方ダンジョンで得たドロップアイテムをポツタクリ価格で買い取る商人と、それに反発する冒険者の喧嘩だろうと、酒に酔った男は野次馬でもしてやろうと酒場のテントから顔をのぞかせた。

そこでまず目撃したのは、非現実的な白装束に身を包んだ集団が冒険者たちに襲い掛かっているところだった。

イヴイルス  
(闇派閥か！)

一瞬で酩酊していた頭を醒まし、抜刀する。

こちらに気が付いた闇派閥イヴイルスが奇声と共に襲い掛かるが、一太刀で叩きのめした。

ダンジョンの深層にすら向かったことのある、屈強な冒険者が邪神の誘惑に負ける脆弱な輩に負ける道理はない。

普通に戦えば、時間はかかるがハシャーナだけでも目の前の集団は鎮圧できるだろう。

しかし、闇派閥イツイルスが普通の連中ではないことを冒険者たちは良く知っている。「気を付けろ……いつら自爆装置を持っているぞ！」

速やかに数人の闇派閥イツイルスを眠らせたハシャーナは、襲撃者の持ち物を確認し、大声で周囲の冒険者たちにその事実を伝える。

闇派閥イツイルスの自爆攻撃は経験のあるオラリオの冒険者ならば誰もが知っている。なにせ死の七日間の最初の一日目はそれから始まったのだから。

あの戦いで多くの先達と戦友を失った「ガネーシャ・ファミリア」だからこそ、同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。ハシャーナは動いた。

（自爆をホイホイやる狂人共をまた量産しやがったな。ふぎけん、死ぬなら一人で死ね！）

自爆が効果的なのは圧倒的格上を相手に、意表をつくことができるからだ。既に手の内が割れている状態では意味は薄い。

（首謀者はその程度も分らない無能か……或いは他に狙いがあるのか）  
冒険者を殺すことが目的ならばただ手駒を減らす悪手だが、自爆兵の使い道は殺戮だけではない。

爆発と狂人という二つに隠れて裏で小細工を仕掛けるか。

或いはこの騒ぎの中で何かをあぶり出そうとしているのか。

どちらにせよ、短絡的な行動は死を招くことを冒険者としての経験が告げる。

「ガネーシャ・ファミリア」だ！この場は俺の指示に従って動いてくれ！」

こんな時に群衆ガネーシャの主の看板は便利だ。

凡百のファミリアならばともかく、圧倒的な信頼を民衆から獲得する主神の眷属は、それだけで人々を纏めることができる。

現在は極秘任務中故にガネーシャの仮面を模したエンブレム入りの装備ではないので、冒険者たちが納得してくれるかは賭けだったが、反発はない。

誰もがこの場を仕切る存在を欲している。

(……その俺がイウイルスこの襲撃の引き金になっている可能性はあるがな)

奇妙な依頼と閻派閥イウイルスの襲撃が繋がっている証拠はないが、全く無関係ということもないだろう。内心苦々しいものを感じながら、彼はその感情を表に出さずに冒険者たちの統率に努める。

「……やべえ!!この前地上を襲った新種どもだ!!」

しかし、閻派閥イウイルスが手を緩めることは無い。

セーフティポイント  
安全地帯イウイルスに現れるモンスターたち。

閻派閥イウイルスに調教されているであろう極彩色のモンスターは武器で戦う冒険者たちの天敵だ。



「厄介な……リヴィラにいる魔導士たちをかき集めろ!! 魔法が使えない奴は矢で牽制するか、盾で進行を防げ!!」

そう言うのとハシャーナはダンジョンアタックのために用意していた魔剣を取り出す。

本職の魔導士の奇跡の劣化版とは言え、都市の中でも一二を争う上級鍛冶師ハイスミスに造らせたこれも強力な遠距離攻撃手段だ。

(魔剣だけじゃなく、不壊属性デュランダルも造らせるべきだったな!!)

貯蓄的に無理な話なのだが、彼は内心でそう悪態をついた。

魔導士が集まるまでの間こちらからは一切攻撃できないのがつらい。

闇派閥イヴィルスの自爆兵の爆発で、極彩色のモンスターも誘爆しかねないのが戦い難さに拍車をかける。

(見た目の派手さに誤魔化されそうになるが、モンスターと自爆をうまく組み合わせた戦術と言い、死兵共を高揚させる手腕と言い、木っ端指揮官にはできない仕事だ。暗黒期を生き延びた幹部が関わっているのか?)

あの最悪の時代を切り抜けた闇の眷属が背後にいるのならば自分だけでは荷が重い。

それこそアパテーやアレクトのような過激派ならば団長シヤクティ……第一級冒険者が対処しなければならぬ事態になる。

(しかし妙だな……もし狙いが俺ならばこれほどの戦力を動かすか?)

自分の予想が外れているのか。

或いはそれだけ自分がバグバグに隠すコレが不味いものなのか。

それか……これほどの戦力を動かさなければならぬ相手は近くにいたのか。

(ロキ派やフレイヤ派が近くにいいのかもしれん。なら、そいつらと合流して……)

「おい！お前は誰だ！」

今後の方針を思案していると、近くの冒険者が声を上げた。

彼らの前に現れたのは怪物の軀むくろを模した仮面を着けた男。

冒険者の中にはああいった悪趣味は装束を纏うものもいるが、この混戦の中悠々と歩いてくる男に違和感を覚えた冒険者たちは男に警戒を向ける。

「見ない顔だな……所属は何処だ!？」

間合イツイルスいを見極めながら慎重に言葉を重ねる。

闇派閥の多くは白装束に身を包んでいるとはいえ、冒険者に紛れ込んでいる者もいるだろう。

必殺の間合イツイルスいに入れないように剣を向ける。

「生まれ！それ以上動くな！」

半ば怒号じみた声で告げるが、男は気に留めた様子もなく進んでくる。

仮面から覗いた口元には爬虫類じみた嫌な笑みが浮かべられていた。

「これ以上近づけば敵とみなす！」

戦いにおいて間合いは重要な要素だ。

戦闘開始時のお互いの立つ位置で勝負が決まることもある。

故に冒険者たちはお互いの間合いに敏感だ。

既に相手の間合いに入っている……敵が格上であることにも気づいていた。

目の前の男が敵であることはほとんど悟っていたが、実力者の中にはこうしたセオリーを軽視する者もいる。そんな男が一の可能性を考えていたのだが。

(越えやがった……っ)

相手が自分たちの間合いに入った。

明らかな敵対的行為について冒険者たちが動く。

最もステイタスが高いであろう己を中心に、仮面の男に攻撃を仕掛ける。

深層のモンスターすら蹂躪する一撃が仮面の男に襲い掛かるが。

「なっ!?!」

そこで冒険者たちは信じがたい光景を目の当たりにする。

刃が素手で止められていたのだ。

(固い!?!)

冒険者は耐久のアビリティを上げること、防衛力を上げることには可能だ。

しかし、第一級……それこそオラリオ最硬のガレス・ランドロックですらこんな防ぎ方はできないはず。

特殊なスキルを持っているにしても、明らかに異様。

「ちいっ……退くぞー！」

この男は自分たちでは手に負えない。

そう判断した冒険者たちは撤退を試みるが、仮面の男はそれより早く動いた。

冒険者たちの足が動き始める瞬間には、その拳を彼らに叩き込んでいたのである。

「がっ」

「ぐあ!？」

警戒していても、その上から振るわれる理不尽な力。

明らかに第一級の力を見せつける仮面の男は、見つけた獲物を甚振るように拳を振るう。

返り血に染まった仮面の奥に宿る瞳には、蝶の羽をもぎ取る子供のような残酷な光があつた。

「くっ、……はははははははは!!」

哄笑に喜悦を滲ませる男は、最もレベルが高い冒険者であるハシャーナを集中的に狙いだした。

冒険者側の意思を砕くためか、より凄惨に血祭りにあげようと執拗に攻撃を加える。それを何とか捌きながら、ハシヤーナは状況を確認した。

（他の冒険者たちはこいつによるダメージで動けない。動けたとしてもこの野郎にやられる。俺もいつまでも持たないっ……どう逃げる!?!）

チラリ、と腕に装備していたアイテムを確認する。

正直、御守り代わりに貰ったものだが、その威力は自分の身で実感済み。

目の前の男が目を使っている以上、効果はあるはず。

（他の冒険者共は倒れ伏しているから直視する心配はない。音に関しては我慢してもらうしかないが。賭けてみるか……っ）

このアイテムは逃走のための隙を作るアイテム。

その威力は人間ならば暫くは碌に動けないほどだが、目の前の人外にどこまで通用するか。

全く効かないということは無いと信じよう。

（頼むぞ……坊主!!）

このアイテムを作った少年を思い出しながら、ハシヤーナは敢えて襲撃者の攻撃を受けた。

グラリとバランスを崩す体。それを見た男は勝利を確信し、唇を吊り上げる。

その意識の隙間こそハシャーナが欲したものとも知らずに。

暗い喜びに攻撃が大振りになった瞬間、ハシャーナは手首に賭けられた紐を勢いよく引つ張った。

ベルから授けられた発光瓶フラッシュボトルは、その効果を存分に発揮する。

目を焼かんばかりの閃光とともに鳴り響く轟音。世界が崩壊したかの様な錯覚を引き起こすそれを真正面から食らってしまったえば、どんな実力者であろうと無事ではいられない。

「ぎゃあああああ!」

熱すら伴う光を直視してしまった仮面の男は、両目を抑えながら悶絶する。

その無防備な姿に、ハシャーナは絶好の攻撃の機会ではないかと思う心をなんとか戒めた。

攻撃するという事は居場所を知らせるといふ事。自分が食らった時のように長時間効果が持続するかもわからない以上、それは愚策だ。

仕留められなければ、既に手札を見せてしまったハシャーナはいよいよ逃げ場がなくなる。

敵と自分たちの力の差は明白。欲目を出して自分の首を絞めるわけにはいかない。ハシャーナは倒れている冒険者たちを何とか抱えると、そのまま撤退を開始する。



（フラッシュボルト イヱイルス  
 発光瓶は闇派閥はともかく、芋虫野郎には絶対に通じねえ）

どう考えても目が無い芋虫の姿。

音の方では効果はあるかもしれないが、元々足の遅い奴らでは微々たる違いだろう。モンスターへの恐ろしさはその数にあるのだから。

地底の楽園とは思えない、極彩色のモンスターがあちこちに蔓延る光景に目を回しそうになりながら、ハシャーナは生き延びるために頭を回し続けた。

（一番まずいのはあの仮面野郎に再発見されることだ。次は逃がさんだろう。そうなるど、いつまでもこの階層に留まりたくはないが……この数だ。逃がしてはくれないだろう。こつちも対抗して18階層にいる冒険者たちと合流を……）

その時、ハシャーナは背後から魔力の高まりを感じた。

ファミリアの遠征で経験したことがある、深層の怪物たちを彷彿とさせるような、爆発的な魔素の奔流を。

「レア・ラーヴァテイン」！！

乱立する無数の火柱がモンスターたちを飲み込み、イヱイルス闇派閥を吹き飛ばす。

その特大の魔法は同階層にいた者たちの驚倒を誘い、視線をある一点に釘付けにする。

種族はバラバラの集団。しかし圧倒的な位階レベルを持つことを共通する彼らを知らぬも



のは下界にはいない。

「【ロキ・ファミア】……」

「【剛拳闘士】、状況を聞かせてくれないか」

何故ここに彼らがいるかは分からない。

なにもかも見透かしたような不敵な笑みを浮かべるフィンは、普段ならば冒険者たちの反発を生んだだろう。

しかし、この状況下でここまで頼もしい存在はいない。

暗黒期を乗り越えた英雄たちの登場に、どうやら希望の光が見えてきたようだ。ハシャーナは息をついた。

## 同行志願

危機一髪の状況だったが、冒険者たちは「ロキ・ファミリア」と合流出来て一件落着  
……とは流石に問屋は卸さなかった。

「ロキ・ファミリア」の活躍でリヴィラの戦力が壊滅することは免れたが、闇派閥は  
8階層を覆い尽くさんばかりの芋虫ヴィルガと狂信者でリヴィラの街を包囲した。

如何に一騎当千の「ロキ・ファミリア」の幹部たちといえども、森で視界の悪い地形  
を強引に突破するのはリスクが大きい。

闇派閥イウイリスは体勢を立て直した冒険者に追撃を仕掛けられず、冒険者も地の利を得た  
闇派閥を相手に短絡的に正面突破は行えない。そうなると、双方は膠着状態となった。

相手の出方を伺うことに徹する両軍。だが、先に音を上げることになるのは冒険者だ  
という事は誰にも明らかだった。

闇派閥イウイリスとの戦いにおいて、「ロキ・ファミリア」を中心とした冒険者たちは、リヴィラ  
の街に戦力を集中させて陣取った。

ダンジョンの中に造られた街なだけあって、物資も施設も確保できるこの場所が冒険  
者の砦となるのは当然のことだろう。しかし、リヴィラは決して難攻不落の要塞ではな

い。

山脈ともいふべき断崖に築かれているこの街は、地形から言えば攻撃しにくい立地のだろう。

元はダンジョン内に中継地点となる施設を作るという目的で開発されたのがリヴィラだ。18階層において、この場所以上に防衛がしやすい場所はない。

そんな最高の立地と言つてもいいこの土地を利用したギルドの計画は失敗に終わった。

それは何故かと問われれば簡単なことだ。それぞれのモンスターが強靱な力を有した無限の戦力を持つダンジョンにとつて、地の利など些細な問題だという事だ。

頓挫した計画を酔狂な冒険者たちが勝手に引き継いだのがこのリヴィラの街だが、この街は3033回も崩壊している。異常事態イレギュラー一つで第三級以上の冒険者が常に待機していても崩壊しうるここは、決して安全地帯ではないのだ。

それを一番知っているのはこの街で生活する冒険者たちである。

何度も壊滅しているリヴィラがしぶとく残り続けているのは、その街を築く冒険者たちが不味くなつたら逃げるを繰り返したからだ。住民が生きてさえいれば、リヴィラは何度でも蘇る。

しかし、闇派閥イヴィルスに囲まるこの状況では、冒険者たちが逃げ切るのは困難。

お得意の逃げるが勝ち戦法を封じられているのだ。

こうなれば冒険者たちは一致団結して闇派閥イヴィルスに立ち向かうしかない。

だが、リヴィラの街の冒険者はそれぞれ別のファミリアの眷属だ。おまけにその殆どが荒くれ者。足並みそろえて仲良く行軍、なんてことができる人種ではないのだ。

このまま籠城のストレスが溜まれば、内部崩壊する可能性すらある。

「だから援軍を頼めってことか？」

「ああ、この膠着状態を確実に打破できる手としてはもつとも堅実だ」

急遽造られた指令室代わりの酒場に呼び出されたハシャーナは、フィンの要請を聞き、渋い顔をする。

確かに「ガネーシャ・ファミリア」の援軍が来れば確実に戦況は好転するだろう。

「だが、俺たちだけでも勝算は低くないはずだ。態々団長たちを引っ張り出す必要はないか？」

「ああ。向こうがこのままの戦力ならば……という但し書きが必要だけどね」

「隠し玉があるってことか」

ハシャーナからすれば、極彩色のモンスターだけで十分すぎる戦力に見えるのだが。

【ロキ・ファミリア】にとってみればあの大群はそこまでの脅威には映らないらしい。

「あの新種たちは初見ならともかく、何度かやり合った相手だ。もう攻略法は見えてい

るよ。数が多いのは厄介だけど、ここには守るべき民衆もない」

(そーいやあの新種どもは一度地上で暴れてるんだったか)

オラリオの民衆が危機にさらされている時に、己がダンジョンに潜っていたせいで防衛戦に参加できなかつたのは口惜しい限りだったが、それはいい。

オラリオにいた冒険者たちが犠牲一つ出すことなく街を守り抜いたのだから。

たつたそれだけの経験で極彩色のモンスターを丸裸にしたというのだから、ダンジョン攻略の最先端を突つ走る最強のファミリアは恐ろしい。

「あれだけなら僕たちは確実に勝利する。……ただ、僕が気になっているのはあの数だ。先日話してくれた緑の宝玉を奪うためだけにあの戦力を回しているとはとても思えない」

「じゃあ、俺の勘違いだったのか？」

「いや、最初の襲撃が君を狙つてと言うのは間違いないだろう。明らかに君を包围する形でモンスターが展開していたからね。ただ、あの戦力が初めから君を目的としたのではなく、別の目的で編成したものを急遽君の襲撃に使つたように僕には思えた」

確かにハシャーナ一人を襲うためだとしたら過剰戦力だとは、ハシャーナ自身も戦闘中に思っていた。

どれだけ緑の宝玉が重要でも、一人に向ける戦力ではない。

「じゃあ、あいつらは何なんだ？」

「恐らく、狙いは僕たちだろうね」

ハシャーナの疑問にフィンはあっさりと答えた。

「元々、僕たちが18階層に来たのは闇派閥の影を感じたからだ。……恐らく誘い込まれたんだらうけど」

「おいおい……勇者の裏を搔いたつていうのかよ」

「僕が裏を搔かれたというより……あいつらの足の引つ張り合いに巻き込まれた、の方が正しいかな」

「ロキ・ファミリア」を罫に嵌めることが闇派閥の足の引つ張り合い……？

どうもこの小人族バルウムは全てを語らないところがある。

闇派閥内で何が起きているのか、既に理解しているらしき指揮官は苦笑しながらハシャーナの疑問を煙に巻いた。

「僕たちを標的にしているなら、もつと別の本命があると考えられるだろう。……親指も疼くしね」

闇派閥がまだ手札を隠し持っているのなら、勇者が慎重になるのも分かる。

有名な話だが、勇者の勘は時に神すら凌駕する。

勇者は直感したのだろう。闇派閥の切り札を。



同じ神の血を分けられた眷属なのだ、当然のことだろう。

しかしシャクティは団長であり、「ガネーシャ・ファミリア」の最大戦力であるレベル5。

迂闊に行動することは許されない立場だ。

「フィンイヅイルスの言う闇派閥の本命も気になる。もしこれが地上から我々の目を遠ざけるための陽動だった場合、ダンジョンに戦力を割き過ぎれば我々の首を絞めることになる」

ダンジョン18階層は単純に深い。

行軍中に地上の状況が届くまでにはタイムラグがあり、それを察知してから反転しようにも時間がかかり過ぎる。

平時ならばともかく、闇派閥イヅイルスによる波乱がまだ続くと予想されるこの状況下で、ファミリアの行動を決定する立場であるシャクティがそんなリスクは犯せない。

「姉者の言うことは最もだ!!だが、18階層へほどの道救援が必要なはずだ!その時、生半可な戦力では死人を出すだけになる!!」

イルタもシャクティの苦悩は分かっている。

だが、フィンシヤククティの直感を知るがゆえに、勇者の最大戦力による援軍要請を無碍にすることに危機感を抱いているのだ。

シャクティをダンジョンに送るか、それとも地上に残すか。



他の団員たちも意見を出し始め、混沌とした執務室。

そこに、男神は現れた。

「俺がガネーシヤだ!!」

「ガネーシヤ。今は静かにしてもらえないだろうか」

「ガネーシヤ。今真面目な話だから」

「スマン!!間違えた!!」

いつものノリのガネーシヤに冷たい目が殺到し、ちよつと落ち込むガネーシヤ。

団員たちもこういつた時に茶々を入れるガネーシヤではないのは分かっているが、いかに敬愛する主神と言つてもシリアスな場面で奇行をされれば誰だつてイラツとする。

「ゴホンツ、気を取り直して……ベル・クラネルがシャクティに話があるようだ!聞いてやってくれ!!」

「ベル・クラネル?なぜ彼が……ああ、例の報告の時間だったか」

何故ベルが来たのか少しの間疑問に感じたシャクティだったが、恐らく今日使えるようになったひみつ道具の報告に来ていたのだろう。

ベルが具現化するひみつ道具はどれも強力であるがゆえに、その詳細はシャクティの下に毎日届けられていた。今もその報告のために来たら、大声で怒鳴り合っている会話を聞かれたという事か。

(こんなことを失念したとは、私も動揺していたという事か)

未だ未熟な己を自嘲しながら、シヤクティはベルを執務室に通す。

ベルは空気の読めない少年ではない。この状況で尚、話をしようという事は何か考えがあるのだろう。恐らくはひみつ道具関連で。

(保護対象者の力を借りなければならぬのは忸怩たる思いがあるが)

一手間違えれば都市崩壊にも繋がりがかねない。

そんなシヤクティの感覚は闇派閥イッイルスの恐ろしさを知る者なら笑うことは無いだろう。

幸いにもこの場にいるのは全員ベルのスキルを知る者のみ。この場ですぐに聞くことができる。

「あ、あの、すいません。盗み聞きするつもりはなかったんですけど……」

「構わない。あんな大声で話していた我々の落ち度だ。それで、何か考えがあるのか？」

「はい。今日使えるひみつ道具で使えそうな物が結構あつて……」

少しオドオドしながら話し始めるベル。

先ほどまで紛糾していた執務室なのだから、居心地が悪いのは仕方のないことだ。

せっかちなイルタは少し苛つき始めているが、シヤクティに目で制されて黙っている。

やがて、その詳細が語られるとその場にいた全員が絶句していた。

正直に言えばベルの保護体制はやりすぎだと考えている者もおり、実際にシヤクテイ自身もそう感じる部分はあったが、ベルが発現してしまったスキルの規格外さを完全に侮っていたと思いなおす。

「……恐ろしい道具だな」

「それだけで闇派閥イッパルスが何企んでようとどうとでもなるじゃねえか……」

「世界中の戦略家が一斉に頭抱えるぞそれ」

「うむ！ガネーシヤだな!!」

一柱だけ通常通りの神がいたが、眷属たちはベルが説明したひみつ道具の効果を半分引きながら聞いていた。

そんな「ガネーシヤ・ファミリア」の反応にベルも苦笑いするしかない。

（僕はこのひみつ道具を聞いた時は単純に便利だなくって思っただけだけど、大人の人が聞くとやっぱりとんでもない効果なんだ）

「それ下手したら永久機関がががが……」と聞いた途端に壊れだしたヘスティアを思い出しながら、改めて自分に宿った反則チートの重みを実感する。

他の二つのひみつ道具も1・8階層の状況に上手くハマるはずだ。

ベルは思い切って切り出した。

「レベルは全然役に立たないですけど……僕も一緒にダンジョンに連れていってもらえ

「ませんか!!」

はつきりいつて危険だ。

確かにリヴィラからすればこれ以上ない援護になりうるひみつ道具だが、ベル自身がダンジョンに行く理由にはならない。

ベルのスキル【フォース・デイモン・シジョン・ホーチ四次元衣囊】はひみつ道具の具現化だ。

ベルが具現化したひみつ道具を他の団員に渡せばそれで充分なのだ。

態々保護対象者のベルをイヴィルス闇派閥がいる危険地帯に放り込むなど言語道断。

そんなことはベルにも分かっている。

しかし……

「いや、ベル・クラネルがダンジョンに同行する必要はない。そこまで君にさせるわけには……」

「団長、行かせてやってください」

シヤクティは当然断ろうとするが、モダーカがそこに待ったをかけた。

「そのひみつ道具があればすぐに逃げられますし、その近くにコイツを配置してやればいい。万が一ひみつ道具が奪われたりした時、自由に消すことができるコイツがいる意味はありますよね?」

「……確かにその配置ならばベル・クラネルのリスクは低い……だが、それだけでは不十

分だ。お前が護衛している……モブーカ」

「ちよつと考えた挙句間違わないでください!?!自分もモブーカです!」

考えたくはないが、これが闇派閥イヴイルスに渡れば洒落にならない。

一日しか具現化は持たないが、一日あれば主要なファミリアを片っ端から潰すことすら可能なひみつ道具だ。

万が一を考えればベルもつれていくべきか。

(最も、モブーカにはそれ以外の考えもありそうだが)

護衛として、最もベルと関わっていたのはモブーカだ。

人好きのするベルに対して多かれ少なかれ情も湧いているのだろう。

今も「ありがとうございます!」と礼を言うベルに先輩風を吹かせている。

他の団員たちもその光景を仕方のない奴らだと受け入れていた。

妹が生きていれば彼とどんな関係になっていたのか。

シャクティも時折そう考えてしまうくらいには、彼は「ガネーシャ・ファミリア」と距離を詰め始めている。

(あまり連れていきたくはなかったが……先ほど言ったことももちろんだが、彼の能力は目立ちすぎる)

間違いなく勇者には目を付けられるだろう。

せめて闇派閥イヴイルスには目を付けられないように立ち回らせなければ。

「どこでもドア〜」

ひみつ道具を具現化させる少年を見ながら、シャクティはこの後の後始末を考え、密かに嘆息するのだった。

## リヴィラの街は危険でいっぱい

仮面の男はその実、闇派閥イツイルスがその力を振るつた暗黒期からその名を轟かせる闇の使徒である。

それこそ、リヴィラの街に立て籠もる冒険者たちなどその名を聞いただけで震えあがるほどの。

とは言つても現在は紆余曲折あつて闇派閥イツイルスに所属しているわけではないのだが。

(愚か者共が……彼女の寵愛の欠片すら受けられぬ、神に惑わされた凡俗共め。今更闇派閥で指揮官の真似事など虫唾が走る……だが、これも全ては彼女の望みのため。精々扱き使つた後でボロ雑巾のように捨ててやろう)

相変わらず「聖戦だ」「神意の代行だ」と耳障りのいい言葉を吐けば、簡単に乗せられる狂信者たちに内心侮蔑の視線を投げかける。

来世での再会などという何の意味もない報酬のために命を投げ捨てる姿は、彼には理解しがたいものだった。

彼自身歪んでいる自覚はあるが、ここまで盲目的ではない。

敬愛に足る彼女のためならばともかく、勝手に死んだ脆弱な人間によくもあそこまで

入れ込めるものだと思われてすらいた。

全く持つて共感できない考えを持つ集団だが、死を恐れない駒というのは使い勝手はいい。

どんなに危険な役割を押し付けても、二つ返事で命令に従うのだから。

最も、死にたがりばかりで構成されているため、短絡的な判断で被害を拡大させることが多く、何度も苛立たされたが。

理性と狂気の共存はそれだけ困難な物。闇派閥イヴイルスに所属している幹部であつたら頭を悩ませる問題だつただろうが、今の彼には関係ない。

むしろ、簡単に死んでくれる方がありがたい。

（闇派閥イヴイルスなど所詮は邪神どもの巣窟……：奴らが我々といつまでも協力体制にあること等、まず有り得ない話だ。必ず決裂の時は来る）

質では自分たちに敵う者は闇派閥イヴイルスにはいないだろう。

しかし、奴らの強さは畑にでも生えているのではないかと疑いたくなるような数だ。

量より質の時代といわれる現代のセオリーに真つ向から対立するような思想。

だが闇派閥イヴイルスの目的は勝利ではなく殺戮。

人間を殺すために大袈裟な力をつける必要はない。どんな無能の集団でも、一般市民程度なら群れば殺戮できる。



そんな考えだから、ダンジョンで鍛え上げられた冒険者たちに蹂躪されるのだが。

(数など我らの敵ではないが、鬱陶しいのは事実。ならば、今のうちに減らしておくべきだろう)

もちろん、何も考えずに殺してしまえば闇派閥を刺激するだけだ。

いずれ破綻する関係だったとしても今は奴らにも使い道はある。

ならば奴らも納得する使い捨て方をすればいいだけのこと。

例えば、目下最大の障害である「ロキ・ファミア」への襲撃の捨て駒に言うた。

(冒険者共こそ最大の敵。ならば闇派閥イツイルスと喰い合いをさせ、少しでもこちらの役に立つてから消えてもらおうとしよう)

無論、狂信者如きにあの「ロキ・ファミア」をどうこうできるとは考えていない。

あくまでも闇派閥イツイルスはこちらの策のための捨て駒だ。

大群で囲まれれば冒険者たちは必ずリヴィラの街に立て籠もるだろう。

そこに芋虫ツイルガたちを雪崩れ込ませる。

当然、冒険者たちは芋虫ツイルガの習性を知っているがゆえに、迂闊に手を出すことは無い。

だが、芋虫ツイルガと共に自爆兵たちも突っ込ませたら？

連鎖的に奴らは爆発を続け、リヴィラの街は溶解液に覆われることになる。

そして冒険者共はヨーグルトのようにドロドロの亡骸を晒す。

（この策では馬鹿げた頑丈さを誇る第一級冒険者ならば深手を負つても死ぬことは無い……だが、奴らはリヴィラの街の冒険者共を見捨てられない）

ここで「ロキ・ファミリア」がリヴィラを捨てて、自分たちだけで18階層を突破すれば闇派閥程度では防げない。男が参戦しても、確実に取り逃がす。

だが、それをしてしまえば「ロキ・ファミリア」の名誉は失墜する。

リヴィラを見捨てて、自分たちだけ尻尾をまいて逃げた臆病者ファミリアと罵られることは間違いない。

故に奴らはその手段を取れない。

何者よりも栄誉を求めるフィン・デイルムナが指揮をするがゆえに、「ロキ・ファミリア」は英雄でいることを強いられるのだ。

（「ロキ・ファミリア」がリヴィラに足を引っ張られていけば、確実に隙ができる。そうなれば奴らの幹部を孤立されること等私には容易）

今回の作戦で「ロキ・ファミリア」を全滅させる必要はない。

幹部の首を落とすだけでいいのだ。

「ロキ・ファミリア」は平均レベルこそ高いが、幹部以下の団員たちは半ば幹部たちの強さに依存している。一つ幹部が消えるだけで、大きく動揺し、士気は確実に下がるこ

とを男の指揮官としての勤は看破していた。

そうなれば人心掌握の達人たるフィンでも、すぐに立て直すのは不可能。

「ロキ・ファミリア」からのプレッシャーが薄くなれば、それだけ自分たちは大手を振って活動がしやすくなる。

（オラリオ崩壊のシナリオは事前準備がモノを言う。厄介な障害は纏めて片付けるに限る）

イヴイルス 闇派閥と自分達が何時か決裂する……それが共通認識なのは各々の首脳部だけだろう。

末端のメンバーのほとんどはそう言った化かし合いに気づくことはない。噴飯もの話だが、中には自分たちが闇派閥イヴイルスの一組織だと思っっている者すらいた。

馬鹿馬鹿しい。ここまで愚かだと嘲る気すら失せるというもの。

お陰で男は容易に末端たちを心酔させることができた。

もはやこの自爆兵たちは男の忠実な僕だ。

先のおラリオの街を襲撃した件で、あれほどの規模の作戦を展開しておきながら、死者ゼロ等と言う醜態をさらしていたお陰で現在の上層部に不信感が高まっていたのが効いた。

不甲斐ないリーダーたちより圧倒的力と狂気を併せ持つ仮面の男に支持が集中する

のは当然の結末だったと言える。

(最も、闇派閥イヴィルスではない私のために自爆したところで、あの神が契約を守るかは知らんが)

どうせなんの意味もない契約だ。

手違いがあろうと知ったことか。

悲痛な願いを踏みにじる悪意の使徒は、仮面の奥でそう嗤った。

「蹂躪せよ！かの神は必ず契約を履行するだろう！」

「おおおおおおおおおおつっ！！！！！！」

男の内心を知らない狂信者たちは、大地を揺らすかのような雄叫びと共にならず者たちの街に雪崩れ込む。

更に彼女の使徒の権能たるモンスターたちを統べる力で芋虫ヴィルガたちも同時に行進させた。

——血を捧げよ!! 愚かな大衆共に闇の恐怖を叩きつけ、世界を死の宴に誘うがいい!! 異様な熱を持って進軍する狂信者たち。

彼らにとって現世は残酷な本性を取り繕った絵画だ。

この世こそ地獄だと信じ、憎む彼らは殺戮と狂乱と言うペンキでその絵画を汚さんと吠える。

世界の真理を悟れぬ怠惰なる者どもよ。

無責任に可能性を振りまく神々よ。

知るがいい。世を是正する闇の使徒たる我らの怒りこそ正義なのだ。

自分たちを戦場へ導いた仮面の男が、その後ろから冷笑を持って見ていることに気付かぬ彼らは、闇派閥の邪神たちとの契約の下、己が命を凶器と扱う。

天然の防壁となつている水晶と岩壁を超えて、冒険者たちを駆逐せんと口々に鼓舞の言葉を発していた。

「広場を目指せ!!」

冒険者の逃げ足は速い。

このまま突っ込み、街を荒らしたところで彼らはあつさりと言を見限り逃げ出すだけだ。

しかし、それを出来ない者たちもいる。今日までの小競り合いで負傷した冒険者たちだ。

リヴィラの街にある大水晶を中心とした広場に奴らは集まっている。

負傷した冒険者を狙えば、必然的に残る冒険者も彼らを守るために、この街に残ると言う選択をすることは想像に難くない。

そうして足止めさえできれば、後は芋虫ヴィルガの溶解液で街を満たすのみ。



「南区、街が網でできた迷路に変貌している！行軍しようにも、網が足に絡まり、そこに魔法が飛んでくるため突破できない！」

「正門!!床が異様に弾力性を持ちまともに前に進めない！その弾みで芋虫ワイルガと同胞がぶつかり合い自爆が連鎖している!?!何なんだこれは!?!」

酷い悪夢でも見ているようだ。

いつそ冒流的とでも言つていい異常事態にとある狂信者は遠い目をしてしまった。

ちなみに北西区を攻めている彼の目の前に広がっているのは奈落である。

ダンジョンの奥底とつながってしまうのではないかと言うくらい深く、底が見えない。

空を飛べない人間は地続きになっていなければ、どんなに強い意志を持っていようが目的地にはたどり着けない。

だが、ここには例外があった。

こちら側とあちら側を繋ぐロープ。

馬鹿みたいに長い距離だが、それを伝っていけば確実に向こう側につくだろう。

……その向こう側からの狙撃がなければ。

「また同胞が落とされたぞ!!」

「魔導士たちが集中しているのか!?!」

こんな長距離に渡るロープをえっちらおっちらと渡る人間など、誰が考えても絶好的だ。

予想に違わず、ロープを渡り始めた途端に魔法の雨嵐が飛んできた。

ちなみに最も同胞を撃墜している光の魔法は必中属性らしい。糞が。

(こんな……こんなことのために契約したわけではない!!)

死は覚悟していた。

なんならそれを歓迎すらしていたと言ってもいい。

だが、こんな意味の分からない場所で、曲芸じみたことをさせられた挙句、誰の糧にもならない無駄死になどしてたまるか。

この異常事態を前に、闇派閥たちから狂気の色が消えさせる。イヴィルス

死にたくないと本能の声、脳裏にちらついた。

(おかしい。こんな状況はあり得ない)

彼は幸運にも……或いは不幸にも、まだ死んではいない。

必死にロープを両手で握り、耳を掠める魔法の炸裂音に身をすくめさせながら必死になつて前に進んでいた。

だからだろうか、この状況の異常さに気がついてしまう。

(冒険者たちは妨害している。だが、この街の造りは逆だ。俺たちを歓迎していやがる)



耳に飛び込んでくる情報と、実際に目で見た現実。

そこから浮かび上がるのはこの建物から感じられるとある思惑だ。

「これを超えられるかな?」「楽しんでもらえるかな?」という無邪気な意図。

どれも常識はずれな作りになっているが、そのすべてに攻略の道筋が用意されている。

行軍を防ぐためには突破されること等あつてはならないのに。

(リヴィラを攻める前に視察で訪れた時はこんなものはなかった。勇者たちが合流して作ったのなら途轍もない技術力だ……だが、その力で何故こんな遊びを入れる!?)

きつとこれの制作者はこの困難を踏破されることを望んでいる。

自分たちの誰かが向こう側に辿り着けばその誰かは笑顔すら見せて労わるだろう。

おめでとくと。

(理解しているのか?!我々は都市を滅ぼそうとしているのだぞ?!それなのに何故、こんな風に遊んでいるのだ!!)

理解できないものに人は恐怖を感じるという。

これを造らせたであろう勇者は彼の中ではもはや化け物だ。

本能のまま暴れまわるモンスターの方がまだ理解できる。

「南西区!!街の建物がすべて繋がり、滅茶苦茶な建造物になっている!中に冒険者たち

が潜んでおり、奇襲によって部隊は壊滅状態!! 応援を求む!!」  
（く、狂っている……）

これを考えた勇者は狂人だが、それを了承したりヴィラの住民共も頭のネジがまともで飛んでいるに違いない。

分かっているのか？もし、今回の襲撃を防げたとしてもここに住み続けるんだぞ？

こんな頭の可笑しくなるような街に嬉々として改造する精神は異常だ。

度重なるダンジョン探索で、常識と言うものを奈落の底に落としたのではないだろうか。

そんな風在戰場を遊戯場アスレチックと勘違いしているらしき冒険者たちに恐怖していた彼だが、ついに順番が回ってきた。

「あ」

トスツ、と軽い音がして彼の体が揺れる。

見ると彼の右肩に深々と木の矢が刺さっていた。

どうやら魔法に紛れて矢も放たれていたらしい。

破裂音に誤魔化されて完全に気が付かなかった。

その衝撃によってロープから手を放してしまふ彼は、呆然としながらこの地獄に未だ残り続ける同胞たちを見つめた。

誰もが街に攻め入る前に持っていた熱を忘れ、必死に生にしがみついている。その姿に自分がどんな感情を抱いたのか。

答えが形になる前にその体は重力に従い落ちていく。

(来世があるなら……オラリオには近づかないでおこう……)  
そうして彼は奈落の闇に姿を消した。

## 勇者と少年

ベル・クラネルと言う少年がリヴィラの街に現れたのは先刻のことだ。

なんの予兆もなく、唐突に現れた桃色の扉から現れた「ガネーシャ・ファミリア」の援軍。

一目で精鋭と分かる彼らの中に紛れ込んだ少年は、明らかにレベルが劣っていた。平時の18階層でさえ、彼には不適切な階層だろう。

しかし、彼にはこの状況を一変させる力があつた。

（ひみつ道具か……話には聞いていたけど想像以上だ）

モンスターフック 怪物 祭や地下水路での闇派閥イヴイルスとの戦いで共闘したと言う、アイズやガレスたちから報告自体は聞いていた。

曰く、規格外のマジックアイテムを使う少年がいると。

（戦術、場合によっては戦略級の手札を持っているとは）

ガネーシャたちを連れてきた「どこでもドア」もそうだが、リヴィラの街を一瞬で要塞に変えた「アスレチックハウス」も凄まじい。

説明を聞いたときは聡明なフィンでさえ現実味がわかなかつたものだが、実際に使っ

てみると反則だ。

どんな内容かこちらで指定できなかつたのは困りものだったが、そこは腐つても複雑怪奇な迷宮に潜り続ける冒険者。

第一級冒険者たちが手分けしてアスレチックと化したリヴィラの街を調査し、どこでもドアでフィンンの指揮の下、部隊を適切な地点におけば難攻不落の都市の完成だ。

極東の一夜にして城を作り上げたと言う伝説を彷彿とさせる偉業、それをヒューマンが抱える程度の大きさのアイテムが為すとは。

(常識外のマジックアイテムの数々。彼ならあの魔石の大量発生に関与していても不思議はない……と言うのは発想が飛躍しすぎかな)

自分が探していた誰の意図にも存在し得ないイレギュラーである可能性を持つ少年、フィンはそれを静かに見つめた。

都市を騒がせた事件に関与しているとは思えないほどに平凡な少年だ。「ガネーシャ・ファミリア」の指示をよく聞き、テキパキと動いているところから、よく勉強していると感じこそできるが、大成するような器には見えなかつた。

恐らく、自身を取り巻く環境すら十分に理解できていない少年の心は、彼の髪のように真っ白なのだろう。

無邪気なその笑みは、世間一般で想像される欲深な冒険者とは程遠いものだ。

一昔前のオラリオに来ていたら、間違ひなくカモにされていたことは容易に想像できる。

(そんな人間だからあんなことを言えるんだろうけどね)

あんな規格外のマジックアイテムを引つ提げて来たのだ、正直、かなり吹っ掛けられると思っていた。しかし、少年はなにも求めなかった。

「お世話になった人の手助けがしたいんです」と大真面目に言うその姿に、無償で来たとする言葉も疑っていたリヴィラの冒険者たちも毒気を抜かれていたのには笑いそうにすらなかったものだ。

「しかし……参ったな。借りが積み重なる一方だ」

モンスター・ファイリア  
怪物 祭に地下水路と来て、今回の援軍だ。

向こうは見返りを求めてなくとも、それに甘えて本当に何も返さないとあつては「口キ・ファミリア」の名が廃るといふもの。

出来れば感謝の言葉だけでも伝えたいが、忙しそうにあちこちをどこでもドアで繋いでいるところを見ると、わざわざそれを中断させて引き留めるのは迷惑だろう。

この戦いが終わった後、改めて礼を言える時間が作れると良いが。

(とは言え、一番最初に感謝を伝える役目をレフィーヤから奪うわけにはいかないか)

レフィーヤが暇を見つけては、礼を言うために少年を探し回っていたことに気が付い



アスレチックハウスでリヴィラの街をアスレチックにしたのは良かったが、そこからが大変だった。

ベルはてつきり、相手がアスレチック内を迷ってる隙にどこでもドアで脱出するものとはばかり考えていたが、それに勇者が待ったをかけた。

このまま逃げても、芋虫たちが18階層に蔓延ったままであり、オラリオの冒険者は商売あがったりな状況になってしまう。

ならば、この状況を利用して闇派閥を一気に殲滅したいと言い出したのだ。

アスレチックハウスは使用したベルにもどんな地形になるかは分からない。

冒険者も闇派閥イヴイルスのように迷うのがオチだと思っていたのだが……

(なんであつさり地形把握してるのこワイ)

【ロキ・ファミリア】の幹部たちが一斉に散開したかと思つたら、なんか簡素な地図ができあがっていた件。

そして、それを見て瞬時に冒険者たちの配置を決める彼らの首領。

僕もリヴィラの住民もポカーンとしてしまったのは仕方ないことだと思う。

(こんな人たちがいるなら僕が来た意味あったのかな)

非常に悲しい考えだが、僕が来なくても【ロキ・ファミリア】だけで何とかなつた気がする。



そう思う位には規格外な人ばかりだ。

ヴァレンシユタイン  
憧憬の人を見かけて、ちよつとドキツとしたけれどそんな思いも吹っ飛ぶ。

とんでもなく大きな差があるってわかつていた。

でも、それを実感のある形で見せつけられてしまうとちよつと、いや、かなりへこむ。

「坊主、難しい顔をしているみたいだな」

そこにこの街で再会したハシャーナさんが話しかけてくる。

幸いなことに五体満足でいてくれた彼との再会は、驚くほどあっさりと終わった。

フィンさんに挨拶に行つて、何故か反撃作戦が出来上がっていて、いつの間にか作戦に組み込まれて、護衛が必要だという話になって、気心の知れたモダーカさんとハシャーナさんを付けようとなって、ハシャーナさんが連れてこられたと思えばすぐさま作戦開始である。

何と云うか気持ちの整理が追いつかない。

どこでもドアでショートカットしたこともあつて、時間の感覚がおかしくなっているのかも。

「なんだ？外の戦場のヤバさにビビったか？ここが地獄みたいな所だと分かつて居たらうに……そんなところに俺を助けに来るとは可愛い奴め!!」

「ハシャーナさんキモイです」

「うるせえハダーカ」

「とんでもない言い間違いスンナ!? 自分はモダーカです!!」

あつさりしていたというのはあくまでも体感時間的な話であり、ハシャーナさんの反応が薄かったわけではない。

むしろ、今みたいにずっと僕をイジってくる。

ついでに一緒に護衛しているモダーカさんもイジる。

「まあ、そういうなよ。実際ちよつと面倒見た後輩がこんなところまで追いかけてきたら、超うれしいからな」

そう言つてカラカラと笑うハシャーナさん。

ちよつと恥ずかしくなり、僕はつい顔を背けてしまった。

それをハシャーナさんはさらに面白がり、イジリ倒すという悪循環。

「……そうとも、感謝している。お前と会つてなければ俺はきつと生きてなかつた」

「そんな、大袈裟じゃ……」

「いや、大袈裟じゃないだろうさ。そんな確信がある」

そう言つてもらえるのは嬉しいけれど、いくら何でも限度があると思う。

僕のやつたことなんて本当に僅かで、今、ハシャーナさんが生きているのは彼自身の選択の結果だ。

「しかし、すげえなひみつ道具つてのは。さっきのあれなんか闇派閥イウィルスに同情しちまったぜ？」

「確かにアレはひどい。少なくともハシャーナさんから例の物を奪還するつて言う奴らの目的の一つは絶対に果たされなくなつたからな」

そうはいつてもひみつ道具は完全にランダムだ。

今回はたまたま運がよかつたに過ぎない。

それこそ、この前の襲撃者の時のように全く役に立たないひみつ道具が出てくる可能性だつてある。

それに、ひみつ道具を具現化したら、もう僕は役立たずだ。

完全に冒険者としての力で劣っている。

(もつと、強くなりたいな……)

どれだけ悩んでいても強くなつてなれやしない。

だからこそ、重要なのはウジウジするばかりじゃなく、今できることをすること。

あの日、襲撃者から学んだ教訓は今もこの胸にある。

いい機会だと考えよう。

僕は本来、来れるはずもない階層で、参加する資格もないような戦場の端っこにいる。

つまり、今日見れる景色は僕より先にいる人たちが見ている世界。

それを先取りで見れることに感謝して、成長の糧にするんだ。

アスレチックの中をピョンピョン飛び跳ねてあっさり攻略している「ロキ・ファミア」はあんまり参考にならない気がするけれども。

（でも、目立って活躍しているのは「ロキ・ファミア」だけど、他の冒険者たちも凄い）  
闇派閥イツイルスだつて無策で突っ込んでサンドバッグになってるんじゃない。

何百体いるんだと言いたくなるような芋虫ヅイルガを利用して、あの手この手でアスレチックを突破しようとしている。

だが、冒険者たちは野性的ともいえる勘でそれに対応している。

ハシャーナさん曰く「変化する状況にすぐに対応できなければ、ダンジョンの中層以下ではすぐに死ぬから上級冒険者は戦況の変化に敏感」なんだとか。

それに、何よりも勉強になるのは集団戦だ。

「ヘスティア・ファミア」はまだ僕一人しか団員がいない派閥だから、今まで僕はソロで探索をしていた。

サポーターのリリと契約はしているけれど、共に戦う仲間と言うものは今まで縁がなかったのだ。

だからこそ、近くに仲間がいる状況での戦い方は全く知らなかった。

正確には「ロキ・ファミア」の人たちと一緒に闇派閥イツイルスと戦う機会があった。でもあ

の時は周りを観察する余裕なんてほとんどなかったから、あまり意識はしてなかったけど、仲間がいるって頼もしい事なんだ。

正直、連携がしつかりとれているとはいいたい。

他派閥の冒険者たちだし、お互いに息が合わなくて怒鳴り合いをしている人もいる。だけど、訓練とかをしていないからこそ、ここでは自分の役割をすぐに見極めなくてはならないのだと思う。

それがこの街の冒険者たちはとんでもなく上手い。

だから寄せ集めの連合でも、ひとつの軍として戦えている。

「盾役がモンスターを押しとどめて、攻撃役は閨派閥を素早く倒している。そして魔導士や弓使いはアスレチックを利用した狙撃……」

どこでもドアで冒険者の部隊を移動させるだけの僕とは違い、ちゃんと戦いに参加している彼らはみんなステイタスの器を昇華した人ばかりだ。

僕とは状況を認識してから動き出すまでの速さが違う。

（何日も膠着状態が続いたはずなのに、状況が少し変わればここまで圧倒できるんだ……）

冒険者の方がステイタスの有利は圧倒的に上。

そう言ったフィンさんの言葉は間違いじゃなかった。

すでに勝利の女神は冒険者に微笑んだ……少なくとも素人の僕にはそう見える。

(フィンさんは闇派閥イヴイルスが必勝を期したつて言う策が気になっていたみたいだけれど……ここから戦況をひっくり返すことなんてきつと無理だ)

そう判断した僕の考えは後から考えても正しかったと思う。

趨勢すうせいは決した。

もう、相手が何をしようとも冒険者の勝利と言う流れは変えられない。

……問題は、相手の目的が勝利ではないことを僕は気付けなかったことだ。

「南東地区にモンスター共が集まっていやがるぞ!!」

「え?南東地区?」

なんと、闇派閥イヴイルスは集まっていた戦力の大部分を南東地区に回し始めたのだ。

こんな戦闘中に無理に部隊を動かせば戦力の消耗は避けられないはずなのに、関わらず。

「やはり諦めはしないか……」

相手の動きの意味が分からず、混乱する僕とは違い、指揮官であるフィンさんはこの状況を予測していたらしい。険しい表情で南東に視線を向けた。

「闇派閥イヴイルスの目的は殺戮しよくりだろうけど……もう一つの勢力の目的は別にある」

「もう一つの勢力だと?」

フィンの言葉にハシャーナさんが反応する。

その表情を見るに、彼も聞かされていなかったのだろうか。

「ああ、この襲撃は闇派閥イグイルスによるものだけど、その裏に別の目的を持った何者かの存在がある。そいつは闇派閥イグイルスも冒険者も消耗することを望んでいるのさ」

「……お前が秘密主義なのは今更な話だが、それを言わなかったのは？」

「余計なプレッシャーを皆にかけてくなくなかったというのが一つ。後は、僕にとっても漠然とした存在だから確証がどうしても持てなかった」

存在するだろうと親指は疼いていたけどね、とよく分からない言い回しをしながら苦笑いを浮かべるフィンさんはその表情に反して目は笑っていないかった。

つまり、今の状況はそれだけ切迫しているということ。

「南東地区にいるのはアイズか……風を纏ってる彼女を態々狙うなんてその策に余程自信があるのか、或いはこの状況も相手の指揮官には不本意なものかな？」

## 悪意を呼ぶ風

リヴィラの街は水晶と岩に囲まれた絶景で知られる地下の楽園だ。

多くの上級冒険者たちは、ダンジョンの中で初めて体験する安全地帯セーフティポイントの安らぎと美しい輝きに魅せられる。

中にはこの階層を自分たちの骨を埋める地を選ぶものもいるらしい。

そんな多くの人々を引き寄せてきた水晶の柱は今、階層主にすら匹敵する大きさに伸びてバリケードのように乱立していた。

この美しくも残酷な境界を生み出したのは、あの日出会った少年のひみつ道具と言うマジックアイテムだ。

名をベル・クラネルと言うらしき、兎を彷彿とさせる白髪の少年は18階層の援軍として現れ、圧倒的な戦力差に押し潰されようとしていたリヴィラの街を要塞に変えた。

その常識外れな能力に闇派閥イヴィルスたちが怖気づく中、「ロキ・ファミア」の幹部たちはその一騎当千の力を存分に示す。

組織だつて動いているならばともかく、異様な状況に怯え、浮足立っている今は自爆兵と芋虫など足の遅い雑兵でしかない。



第一級の力に叶うはずもなく、見る見るうちにその数を減らすのだった。  
テンペスト  
 「目覚めよ!」

眼前を覆い尽くさんばかりに蔓延る怪物たちを一掃するために、南東地区を担当するアイズは攻防一体の魔法、「エアリエル」の行使に踏み切った。

剣を一振りするたびに極彩色の怪物たちが千切れ飛ぶ光景は、彼女の支援を目的とした冒険者たちに勝利を確信させる。

だが、何かがおかしいと当のアイズは感じていた。

(これだけ攻撃していても敵が途切れる様子が無い。それどころか、増えている……?)  
 アイズは戦術においては素人もいいところだが、ここまで一方的に損害を被ったのならば、一度退き、体勢を立て直すのが常道なのではないか。

数が多いのは厄介だが、劍姫の脅威にはなりえない。

自分の周りにはいる冒険者たちが狙いかとも考えたが、大半はアイズが削っているうえに、残った僅かな生き残りも適切に処理している。

このままでは誰一人殺せないだろう。

(他の戦場の音が小さくなった。……まさか、この地区に戦力を集中させている?)

一体、何のために。

フィンからも水晶の柱が乱立しているだけのこの地区が一番力攻めで落としやすい

から、注意するようには言われていた。

だが、それはこの地区の突破が容易と言うワケではない。

鬼のような難易度の中で比較的マシなものを選ぶとしたら、という但し書きが付くのだ。

アイズの幼少期はダンジョンと同じくらいに闇派閥イツイルスとの抗争の記憶で形成されている。

その記憶が疼く。良くない傾向だと。

これが人間の思惑によって起きた襲撃である以上、違和感には何らかの意図がある。

そこを読み違えると手痛い傷を負いかねない。

(あの子ベルのどこでもドアで援軍は来る……でも、あの子がここにいることを闇派閥イツイルスに悟られないためにも、あの力を必要以上に使いすぎるわけにはいかない)

ベルの持つ力は本人の脆弱さに対して、余りにも強力。

闇派閥イツイルスが目を付けないように、ベル本人が目立つ使い方はさせないで欲しいと言うのがシャクテイの要望だった。

アイズとしても、あの少年が闇派閥イツイルスに能力を把握され、利用されるようなことは許容できない。

出来る限りは自身で解決しなければならない。

(後衛の人たちにフィンに状況を伝えてもらって、それから……)

人を使うことが余り得意とは言えないアイズが、脳裏をかすめる違和感を形にしよう  
と必死に頭を回転させていた時、背筋に戦慄が走る。

アイズの死角となる水晶の陰から急襲する朱い影。

深層のモンスターを幻視してしまうような鋭い一撃に、アイズは纏った風を駆使し  
て体勢をずらし、紙一重で回避する。

「厄介な風だな……アリア」

(!?どうして、その名前を?)

水晶の柱に取り付けられた円形の足場に着地したアイズは、自身を襲った女の言葉に  
目を見開いた。ドクンツドクンツ、と鼓動の音が頭に響く。

衝撃のあまり、口が何かの形を発しようとして、結局言葉は意味をなさず、震え大気  
として吐き出された。

「……いつまでも喧しい声を聞かされるのはいい加減、うんざりとしていた所だった  
……来てもらうぞ」

一体女が何を言っているのか。

どうして、あの人の名前が出てきたのか。

分からない分からない分からない……

混乱するアイズを見ても、女の表情が変わることは無い。

動じず、まるで彫刻のように無表情。

ただ、その女から発せられる圧力は、彼女がアイズの敵であることの何よりの証となるだろう。

「別に持っていくのは死体でも構わん」

先に動いたのはアイズだった。

地に降りた赤髪の女と水晶の柱に取り付けられた足場に立つ自分。

地の利を得ているのは上段に立つ己だと確信し、その優位が崩されないうちに先制攻撃を仕掛け、場の流れを支配せんとする。

初撃が防がれるのは織り込み済み。

女が迎撃のために振った剛腕を利用して、アイズは再び上空へ打ち上げられ、反対方向にある別の水晶に跳ぶ。

そして足が水晶に到達したと同時に、力強く踏みしめて、女に向かって再度跳躍した。風による加速も相まって、先ほどとは次元の違う速度で女に向かうアイズ。

先ほどの一撃が頭に刷り込まれていたであろう女は、目を見開くが即座にその一撃にも対応して見せた。

「くっ！」

「な……」

驚愕に声を漏らすアイズだが、二撃目が防がれるや否や即座に女を蹴り飛ばした。

それを腕でガードする女であったが、風を纏った一撃は脚撃であつても尋常ではなくその体は吹き飛ばされる。

(痛っ……!?)

そのまま追撃を仕掛ける気であつたアイズだが、女を蹴り飛ばした足に残つた痛みに思わず体を止めてしまう。装備の薄い、生身の体を蹴つたとは思えない硬さ。

風で守られていなければ、蹴つた足に支障があつたかもしれない。

痛みを感じ、動きを止めたのは一瞬。

その一瞬で女は体勢を立て直す。

「……」

沈黙が二人を包む。

アイズは得体の知れない女の異様な硬さを警戒して。

女はアイズの纏う風の厄介さに目を細めて。

互いの出方を探り合つた。

次に動いたのは赤髪の女だつた。

緑色の瞳に殺意を漲らせ、握る武骨な長刀を地面に滑らせる。

剣士と言うよりは怪物じみた粗雑な一撃。

神々から劍姫と言う異名で呼ばれるアイズから見ればギリギリ及第点な技術、それを出鱈目な身体能力が必殺の一撃に変えている。

アイズは僅かに体を沈め、自身の首筋を狙った一撃を回避すると同時に最小限の動きでカウンターの一闪を見舞った。

返す刀で冷静に受け止めた女はそのまま鏢迫り合いに持ち込む。

しかし、一連の攻防で身体能力ステイタスで劣ると理解していたアイズは力勝負を拒否し、風を解放して吹き飛ばす。

「便利なものだな。それがなければ死んでいる」

「っ!!」

女の挑発まなじりに眈まなじりを吊り上げるアイズ。

今度は体勢を立て直す暇は与えないと再び水晶の柱をいくつも蹴り、三次元的な攻撃を仕掛ける。ヒットアンドアウェイによる超高速戦闘。

それを女は山のような堅固さで防ぎきって見せた。

エアリアル

風を解放し、水晶の柱と言う無数の足場に恵まれ、常に相手の上を位置取れる最高の条件下での戦い。そんな有利な条件下で戦ってようやく五分な状況に、アイズは無表情の仮面の下で焦りを見せる。

(この状況は長くは続かない。向こうが慣れる前に勝負を決めないと)  
 【ロキ・ファミリア】の幹部の名は重い。

万が一にも敗北してしまえば、現在の冒険者たちの勢いにも陰りが生じてしまう。  
 何より、自分が突破されれば他の冒険者に間違いなく被害が出る。

(ただ、あの人はこの戦闘に集中しきれていない)

時折、何かを探すようなそぶり。

と言うよりは何かに困惑していると云った方が正しいか。

「……近くにあるのは間違いない。だが、この違和感は何だ。……ここより下にあるのか?」

女の呟いた言葉をアイズは聞き逃さなかった。

何かを探すような言葉。

恐らくは闇派閥イツイルスの目的である緑の宝玉。

(あの人は緑の宝玉を探知できる……?)

ハシャーナ・ドルリアが下層から回収したとされる未知の物質。

それが闇派閥イツイルスの目的の一つだとは聞いていた。

一度見た時、アイズが覚えた奇妙な感覚を思い出す。

薄い透明な膜につつまれた液体と、髪が生えた不気味な胎児。

眩暈と共に襲う、思わず膝を折るほどの強烈な吐き気。  
あれが何かは分からない。

しかし、あの嫌悪感を引き立てる緑色が、極彩色のモンスターと無関係とも思えない。  
一連の事件に深く関わっていることは明白だった。

(フインは闇派閥<sup>イツイルス</sup>たちの目標は冒険者の抹殺に切り替わっていると断言していた……でも、それはあくまでも闇派閥<sup>イツイルス</sup>にとつてのもの)

存在するというもう一つの勢力にとつてまだ無視できないものだとしたら。

あの宝玉がこの階層にある限り目の前の存在の行動を抑制できているのかもしれない。

(宝玉が見つかることはまずない。あの子の三つ目のひみつ道具の効果で普通の手段じゃ見つからないし、見つかったも手が届かない)

あの宝玉が守り切られるのは冒険者たちにとつて確定事項。

故に安心して目の前の闇派閥<sup>イツイルス</sup>の殲滅にのみ集中できた。

反則によつて闇派閥<sup>イツイルス</sup>たちの一歩先を行っているこの状況を逃すわけにはいかない。

(このまま押し切る!!)

相手が思考を切り替える前に、片をつける。

必殺<sup>リルラフアーガ</sup>の一撃はモンスターにのみ使う技と決めていたが、ここで拘つてはいずれ押



し返される。自身のありつたけの力を込めて相手に打ち込む。

アイズは身をひるがえすと三度水晶の柱を足場とする。

それを先ほどまでの焼き直しと考えたのか、女は迎撃の姿勢を取るが甘い。

この技はモンスター……階層主級の強敵を想定した絶技だ。

足場を蹴つて、風を纏い、突進する。

文字に起こせばそれだけの単純な一撃をアイズは純粹な必殺技にまで昇華させていた。

真つ向から受け止めようなどと言う愚策は通じない。

「——「リル……」」

風が吹き荒れる。

暴威を持つて巨悪を飲み込まんとする颯風くふうは女に自らの選択が違えていたことを悟

らせる。

だが、遅い。

「リフアー……っ!?!」

今まさに力が発揮されようとした瞬間。

アイズはこの領域に侵入した何者かを察知する。

何者かはアイズの後方の水晶を跳躍し、その拳を叩きつけた。

咄嗟に技の構えを解除し、飛びのくアイズ。

彼女が足場としていた柱が轟音と共に揺らぎ、吹き飛ぶ破片に光が反射する。

「ようやく追いついたぞ……レヴィス」

アイズを襲った仮面の男は、攻撃を躲されたことは気に留める様子もなく赤髪的女人……レヴィスに話しかけた。

「将の真似事をしていろとまではいわんが、独断専行は慎め。おかげでお前の尻拭いをする羽目になった」

レヴィスと呼ばれた女の仲間らしき男は、どこか侮蔑的な話し方だ。

仲間であつても、あまりいい関係ではないらしい。

「それで……本当なのか？ 剣姫がアリアだと？」

「ああ、あの風が何よりの証拠だ」

「信じられん……しかし、お前が言うのだからそうなのだろう」

仮面の奥からアイズを凝視する男は、粘着質な視線を飛ばす。

やがて、クツクツと笑い出した男は何か打ち震えるようにその興奮を吐き出した。

「元々目障りな【ロキ・ファミリア】の幹部が一人でも死ねば僥倖、程度の策だったが面白い！ 【ロキ・ファミリア】の中でも白兵戦は最強と名高い剣姫を葬り、彼女が望むアリアを献上できるとなれば、我が宿願は大きく前進する!!」

(また、アリア……)

何故、母の名前がここに出るのか。

優しい思い出を汚されるかのような感覚に、アイズはいよいよ苛立ちを隠せない。

一方で、経験豊富な第一級冒険者としての冷静な自分が、この危機的状況を分析する。  
(あの仮面の男の身体能力も高い。多分、レベル5くらい)

第一級の実力者が二人掛かり。

五分だった状況が一気に向こう側に傾いた。

(フィンもここに敵の戦力が集まっていることは気が付くはず。なら、私がやるべきことはこの二人を足止めすること)

自爆兵やモンスター程度ならば、アスレチックと化した水晶群を駆使すれば時間稼ぎはできる。

ならば、自分はこの怪物二人に集中し、万が一にも他の冒険者にその凶刃が振るわれることを避けなければならない。

【風デンスエストよ】！！

風の出力を上げ、二人を見据える。

その瞳に怯えはなく、握る剣に迷いはない。

仮面の男とレヴィスが攻撃を仕掛ける。

アイズは自らに迫る脅威を前に集中力を研ぎ澄まし、迎撃を開始した。

## 水晶柱の挟撃

エアリエル

風によって伸びた滞空時間を利用して、通常ではあり得ない跳躍を繰り返し、ポジシヨニングを止めどなく行う。

第一級の力を持つと予想される二人を相手に足を止めて応戦することは自殺行為だ。

アイズの魔法は防御力も向上させるが、あの人外じみた怪力に晒され続けても問題ないと言えるだけのものではない。

ガレスのような受けの技術を持っているのならばともかく、ヒューマンとしての適正レベル程度の耐久の熟練度しか持たないアイズでは数発食らっただけで致命傷だ。

だからこそ、足は止めずに自分に優位な空中での戦いを維持し続ける。

この場で戦う三人の中で最も空中戦に長けているのはアイズ。ほんの少しの戦闘でそれを見切ったアイズは、そこに活路を見出した。

戦いにおいて背後と頭を取られることは死と同義。

戦うものならば誰もが知るその鉄則を、アイズは味方につける。

迂闊に手を出せば手痛いしっぺ返しを食らう。そう印象付けることで相手から積極的な選択肢を除外させた。

仮面の男が大地を蹴り、襲い掛かるが、それをアイズは宙に浮かぶ花卉の様にふわりと躲して見せた。そして、空中で無防備になった男を斬りつける。

咄嗟に腕を交差し防御の構えをとる男だが、人の腕が剣を防げるはずが……

(!?)

その時、アイズが感じたのは異常な硬さ。

人間を斬るつもりで放った一撃であつたために、その剣撃は男を地面に撃墜させるに留まつた。

(ガレスが言っていた赤髪の人の固さと同じ……この人も?)

スキルによる加護か、それとも魔法<sup>エンチャント</sup>か。

装備、アイテム、身体改造……様々な可能性が脳裏に浮かんで消えた。

仲間らしき赤髪の女と同じ特徴というところから、ステイタス上の能力である可能性は低いが。

「ようやく止まつたか」

「!」

仮面の男の攻撃を対処したことでアイズの動きが空中で止まる。

それを待ち構えていたようにレヴィスが迫つた。

だがアイズもレヴィスの考えは想定済み、剣を構えて迎え撃つ姿勢を取る。

アイズの空中戦の高さはあくまでも足場があつての物、踏ん張りの効かない空中に留まつてしまえば、いかに風を纏つていようと先ほどまでの剣撃は不可能。

そう考え、レヴィスは必勝を期した平刺突ひらつきを繰り返す。

だが、彼女は【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

その二つ名は、アイズが魔法エテリエルだけの冒険者ではないことを示している。

アイズは自らに迫る紅蓮の刃を確認すると魔法を解除、風を霧散させた。

今までのように力任せに弾く戦い方だと予想していたレヴィスは怪訝な表情をするが、その先で見たアイズの行動に驚愕する。

猛然と突進するレヴィスの刺突に対し、アイズは剣を添わせた。

そして、レヴィスの赤い大剣を滑るように受け流して見せたのだ。

そのままぶつかり合うような至近距離で互いの視線を躲す両者であつたが。

【目覚めよ】  
テンペスト

アイズは再び詠唱し、神秘の風を纏う。

その風に押されるレヴィスであつたが、彼女も只者ではなかつた。

即座にアイズの狙いを看破し、アイズの鳩尾みすおちに掴み掛り、装備ごと肉を引きちぎつた。

「くっ!!?」

「~~~~っ!!?」

空中で弾かれて水晶の柱に激突するアイズとレヴィス。

レヴィスは持ち前の頑丈さで、何事もなかったかのように立ち上がるが、アイズのダメージは深刻だった。

鮮血が溢れ出る腹部を抑え、何とか高等回復薬ハイ・ポーションで治療する。

傷こそふさがったが、アイテムによる治療はあくまでも応急処置。

腹部に残る灼熱のような痛みは消えない。

「クククツ……随分と苦しそうだな？ 劍姫？」

「……」

「その苦しみは果たして今の負傷だけが原因か？」

アイズの取った空中戦での時間稼ぎは諸刃の刃だ。

発展アビリティ【精癒】を持たないアイズでは精神力マインドは、魔法を使えば使うほどに減っ

ていく。アイテムで回復しようにも、一時的に戦闘が中断された今とは異なり、高速戦闘中にアイテムを使う隙などなかった。

そして、アイズの切り札とも呼ぶべき【エアリアル】であるが、決して何のデメリットもなしに行使できる奇跡ではない。

アイズの風は強力ゆえに、ヒューマンに過ぎないアイズの体は連続で使うと悲鳴を上げる。仮面の男の指摘通り、レヴィスから受けた傷以外にも、風を纏い続けた代償にア



イズの体は既にボロボロだった。

戦闘が中断されている今ならば、とも考えていたが、鋭くこちらに注意を向ける赤髪の女が二つ目の回復薬ポーションの使用を許すとは思えない。

こんな時に体力と精神力を同時に回復できる回復薬ポーションがあればいいのだが、その開発にはまだ成功していないらしい。

あのアミッドすら研究に難航しているというのだからその実現は当分先だろう。

「我々はお前を必死になつて仕留めにかかる必要はないのだよ。お前はその魔法の代償で勝手に消耗していく。我々は時間をかけてお前が弱るのを見ているだけでいい」

勝ち誇つたように笑う仮面の男の言葉に歯噛みする。

このデメリットがあるために、イズは独力で二人を打倒するという選択肢を捨てた。

死に物狂いになれば一人は確実に討てるが、もう一人を討つ前に限界が来る。

このイズの諸刃の選択が吉と出るか、それとも凶と出るかは援軍を呼びに行つた冒険者次第だろう。

微かに聞こえてきた声では「泥犬マドク」を行かせると聞こえた気がするが。

たしか、その名はこの街に来て最初の日に食人花に囲まれていた所を助けた「ヘルメス・ファミリア」所属の犬シヤンスローブ人だったはずだ。

レベルは2……に偽装した3だったはず、食人花に囲まれてもそこそこ立ち回れるだけの実力があるのは確認済みだ。

彼女がフィンのいる場所にたどり着くまでアイズが持ちこたえられる可能性は、どれだけ甘く見積もっても5割に満たない。

仮面の男が勝ち誇るのも当然の状況。

だが、持ちこたえなくては。

ここでは死ねない。

アイズには悲願がある。命を賭してでも果たさなければならぬ誓いが。

胸の奥で燦る黒い炎は自身を殺す狂気の刃。

アイズを地獄へ追いやるこの憎しみが、戦場ではアイズの活力だ。

(血を流しすぎた……今までのような高速戦闘は出来ない。味方は引き上げを完了しているから、ここからは水晶に隠れるような戦い方できなく攻撃を受けないように……)

幸いなことにこの二人は連携する様子が無い。

レヴィスは仮面の男をいないものとして扱っているし、仮面の男などは露骨にレヴィスを見下している。

本当に仲間なのかと言いたくなるが、そのおかげで首の皮一枚で生き延びられている



冒険者たちが援軍を要請して、編成した援軍がここまで行軍する時間を計算すると、どう考えても冒険者たちによる援軍は間に合わない。

気もしない援軍に期待するくらいならば一か八かに賭けて特攻、そう考えると踏んでいたのだが何故時間稼ぎに固執するのか。

(コイツは向こうが勝手に消耗してくれるだけ有難いなどと能天気なことを言っているが……ああ、嫌な予感がする)

悪趣味な仮面を被るあの男は仮にも指揮官であつたはずだ。

それがこの期に及んでどうして樂觀できるのか。

冒険者がそんな容易い存在であつたならば、自分たちはこうも苦勞はしていない。

自分以下の相手とばかり戦っている小者では、視野が狭いを通り越しておかしな妄想を見ている閻派閥の狂信者どもを相手にお山の大将を気取っているのが限界か。

(見慣れた鬱陶しい眼だ。希望を見失わぬ、しづとい冒険者だ……あの白髪頭の子どものように)

金色の瞳の先に、まるで似つかないはずの深紅ルベライトの瞳を幻視する。

あの日の冒険者を思い起こすのは、最も間近な記憶に残る屈辱がこの身の奥で煮えたりぎっているからか。

何の力もないはずの矮小な存在の足掻きが、予定調和を狂わせることをレヴィスはよ

く知っていた。

「策があるのか……それとも仲間に対する信頼か、どちらでもいい。諸共屠るだけだ」

小細工に乗る必要はない。

既に相手は十分に消耗している。

レヴィスに敵を加虐して興奮するような性癖はない以上、速やかにケリをつけるべきだ。

アレに渡すのは死体でも構わないだろう。

暫くはうるさいかもしれないが、こちらは仕事の最中にくだらない茶番に付き合わされてきているのだ。文句を言われる筋合いはない。

「さあ、やるぞ!! 劍姫の首を獲ったとあれば、彼女も喜ぼう」

一人盛り上がっている男を冷めた目で見つめる。

この男は闇派閥イヴィルスの狂信者を見下していたが、レヴィスからすれば男も同じ穴の貉だ。信じがたい話だが、この男にはアレが女神か何かに見えているらしい。

アレに拾われる前は死にかけていたようなので、その時に気が触れたのだろう。

(それとも「ロキ・ファミリア」とやらがそれほどまでに気に入らないのか)

レヴィスは地上のことは何も分からない。

目下最大の障害であるという「ロキ・ファミリア」についても、エニユオが特に警戒

すべき派閥ファミリアであると言っていたのを覚えていただけだ。

元閥派閥イヴィルスらしきこの男には、執着するだけの理由があるのかもしれない。そこまで考えて思考を中断する。

この男の内心などレヴィスには関係のない話だ。

今はただ目の前のアリアを仕留め、アレの前に連れ出せばいい。

(だが、そう簡単には行かないようだな)

レヴィスが感知すると同時にそれは姿を見せた。

水晶群の奥から突如として発生した巨大な魔力。

乱立する柱を照らす翡翠色の輝きは、魔導士たる証の魔法マジックサークル円か。

それまで無秩序に蠢いていた芋虫ワイルガたちがぐるんつ、とその魔力に引きつけられて方向転換する。

あれほどの巨大な魔力を有する魔法ならば超長文詠唱。

詠唱文を言い切る前に芋虫ワイルガたちが押し潰す。

初めは予想よりはるかに速い援軍に動揺していた仮面の男だが、そう結論付けると落ち着きを取り戻す。

だが、予想はまたしても裏切られる。

芋虫ワイルガたちが魔導士の位置を把握するより早く、魔法は放たれたのだ。

極彩色のモンスターを襲うのは三条の吹雪。

この世の果てにあるという極寒の地から直接召還したかなような、無慈悲な絶対零度の暴風はモンスターたちを容赦なく凍らせ、その指揮をしていた二人や闇派閥イッイルスたちに襲い掛かる。

二人は咄嗟に躲すことができたが、闇派閥イッイルスは為すすべなく氷像と化した。

(ちっ、凍り付いた芋虫ツイルガと闇派閥イッイルスが邪魔でこれ以上の行軍は出来ないか)

元々、当てにはしていなかったが、こうも役に立たなければ苛立つ心は抑えられない。特に自爆兵など、爆発する前に凍り付いてどうするというのが。

「がああああっ!!おのれええええ!!」

仮面の男は直撃こそ避けたようだが、左腕に魔法を掠めたのか肘が凍り付いていた。痛みに仮面から覗かせる口元を苦痛に歪め、唾を吐く勢いで激怒している。

既に手勢は壊滅状態だが関係ない。もとより奴らはただの捨て駒だ。

あれほどの魔法をいかにして発動まで隠し通したのかは分からないが、魔法は連発できるとはでない。

強力な一撃で自分たちを仕留められなかった以上、後は無力な魔導士が存在しているのみ。

この痛みの返礼はその命で代えさせてやろうと殺意の刃を研ぐ。

だが、相手は「ロキ・ファミリア」。

凡百の冒険者たちとは格が違う。

入り組む水晶群を縫うように一条の光がその姿を見せる。

「つ小賢しい真似を！」

先ほどの大規模な魔法を<sup>デコイ</sup>囷に、別の魔導士がこの魔法を隠していた。

その事実気が付き、男は悪態をつきながら傍にあつた柱を蹴り、空中に逃れる。鈍すぎるその魔法など、男からすれば見てからでも対処できるものだ。

(馬鹿が)

「何?！」

だが、その光の矢は北西地区で存分に闇派閥を<sup>イヴィルス</sup>蹴散らした魔導士によるもの。

狂信者たちを震撼させたその属性は必中。

男の目の前で曲がつたその魔法は、空中で動けない体に直撃する。

その魔法を知っていたレヴィスは男の油断を内心非難するが、何も忠告をしなかつた。

する意味がないからだ。

「こんな花火で彼女に愛されたこの体が傷つくとも思つたか！」

モンスターと同質の頑強さを持った男にとって、この程度の魔法など小突かれた程度



のものだ。

故に対した苦痛もなく受け止められた。

それだけにしてやられたという怒りが燃え上がる。

「絶望しろ！名も知らぬ魔導士!! 貴様の魔法など私には何の痛痒つらようももたらさない！」

必ずや自分がその愚か者を殺してくれると息巻く仮面の男であったが、この魔法を行使した少女は小さく呟いた。

——そんなことは承知の上です。

小突かれた程度のダメージしかないという事は、小突かれたくらいの影響はあるという事。

ならば意味はあるのだ。

「……!?!?何だ!?!」

魔法に突き飛ばされた仮面の男が向かう先に、突如として現れる桃色のドア。

中から開けられたドアの中にはここではないどこかの光景が広がっている。

空中で方向転換などできるはずがなく、男はそのままドアの中に入っていく、男を飲み込んだ桃色のドアは閉じられると同時にその姿を消した。

(今のは何だ?この異様な街の機能なのか?)

想像外の方法で男と分断されたレヴィスは、その光景に思わず動きを鈍らせる。

その隙をアイズは見逃さなかった。

「はあああつ!!」

「ぐっ!?!」

水晶の陰から飛び出したアイズの鋭い一閃に、レヴィスの顔が初めて歪む。

超人的な反射神経で致命傷は避けることができたが、その右腕には赤い直線が刻まれていた。

大地を濡らす鮮血を感じながら、その瞳は目の前の人物を鋭く睨みつける。

「アリア……っ!」

「その名前をどこで知ったのか、あなたを捕まえて聞き出す」

剣を向けるアイズは、消耗していながらもその戦意は微塵も陰らない。

第一級冒険者と思しき魔導士と、地下水路で遭遇した油断ならぬエルフ、そしてアリア。

形勢は既に逆転されたと悟るには十分だった。

## 捕獲作戦

勝利の定義と言うものは何だろうか。

一対一の決闘ならば単純に戦いの末に生き残っていることだ。

戦術的に見るならば自身より相手に多くの損傷を与えることだと考えていい。

だが、戦略的な勝利とは何かと聞かれれば、その定義を簡単に説明するのは難しいだろう。

極論、戦術的には勝利を収めていたはずが戦略的にはむしろ自分の首を絞めていた、などと言う話は歴史上では間々あることだ。

このリヴィイラにおける防衛戦で冒険者たちの目指す勝利とは何か。

まず、闇派閥イヴィルスの撃退は言うまでもなく絶対条件だ。

飛んでくる火の粉は払わなければならない。

(リヴィイラをアスレチックハウスで要塞化できたおかげで死者なく闇派閥イヴィルスを撃退できる。だが、これはあくまでも闇派閥イヴィルスに対する勝利だ)

フィンの想像通りならば、この戦いの裏には闇派閥イヴィルスを扇動した存在がいる。

冒険者と闇派閥イヴィルスを潰し合わせて漁夫の利を狙っていたであろう何者かが。

その何者かは闇派閥イヴィルスを撃退したところで、何の被害も受けないのである。

（正確には闇派閥イヴィルスからの信頼を多少は失うだろうけど……どうも、敵の布陣を見る限りは織り込みの引き算らしい。初めから失うものと分かっているのなら大したダメージにはならないだろう）

冒険者側に死者はいないと言っても、決して消耗が無いわけではない。

リヴィラの街が襲撃の傷を癒し、従来の機能を取り戻すまでにはある程度の時間が必要であるし、ダンジョン探索の中継基地であるこの街の復旧が進まないとなれば、それを当てる探索系ファミリアの収益は確実に下がる。

ダンジョンからの魔石採掘で経済が回っているオラリオ……その行政機関たるギルドが受ける悪影響は計り知れない。

リヴィラの街が闇派閥イヴィルスに襲撃を受けた時点で、オラリオへの攻撃はある程度の成果を既に出している状態なのだ。

現状、最も被害を被ったのは、多くの戦力を溶かす羽目になった闇派閥イヴィルスである。

次いで、街の機能が停止するであろう冒険者側にも無視できない損害が出た。

そして、未だに姿を見せない何者かは殆ど失っていない。

このままでは姿の見えない第三勢力の一人勝ちである。

（未だに詳細がはつきりしない第三勢力……今回の闇派閥イヴィルスの消耗を強いる戦い方をした

指揮官がその何者かとながりがあるのは間違いない)

このまま終わるわけにはいかない。

オラリオを脅かす悪意は未だ無傷のままだ。

ただ戦いに勝つだけでは、冒険者たちの勝利にはならないのである。

(敵は何者なのか。その真実につながる糸をようやく見つけたんだ。逃す手はない)

フィンがどこでもドアで冒険者たちを退避させなかった理由はここにある。

一瞬で街を要塞に変えるマジックアイテム。

異常な速さで疲労なく届いた援軍。

そして敵に宝玉を渡さないとっておき。

こんな好条件が揃った戦いなど滅多にない。今、この時こそ勝負の仕掛け時だと百戦錬磨の指揮官は判断したのだ。

(第一級冒険者に比する敵は厄介だが……連携されなければ幹部やシャクティが揃う僕たちならば問題なく対処できる)

冒険者たちをフィンの指定した場所にどこでもドアで送るベルを見た際、あの扉が虚空から現れているのを見たことかと思いついた作戦だった。

あれならば相手の意表をついて、強制的にこちらが有利な戦場に飛ばすことができる。

扉の大きさだけはネックであったが、そうした作戦の不安要素を埋めるのが個々人の力と言うものだ。

「レフィーヤがあの戦いで一皮剥けていたことが大きかった。以前のレフィーヤならここ一番で高精度の魔法は放てと言われても即座に頷くことは無かつただろう」

準幹部級の団員が着実に成長している事実にも、つい頬が緩む。

【九魔姫<sup>ナインヘル</sup>】の後継者と言う肩書も、今の彼女ならば重荷に感じることには無いだろう。

「あの仮面の男が第三勢力の中では最も崩しやすい」

援軍が来るまでの数日間フィン<sup>フィン</sup>は男の実力を看破していた。

身体能力こそ第一級冒険者に匹敵するが、それを駆使する戦闘技能が余りにもお粗末だ。

自分たちと同等の身体能力の敵など、深層ではいくらでもいた。

それを何度も乗り越えているのは、「ロキ・ファミリア」が培ってきた戦闘技術の賜物であり、幾度も【冒険】を経験したからに他ならない。

自分の体に振り回される未熟者など敵ではない。

用意された有利なフィールドならばなおのことだ。

そんな状況でだからこそ、敵指揮官の捕獲という最大の勝利を目指すことができた。

「いつまでも何者か、なんて呼んでいたら格好がつかないからね。いい加減、その顔を拝



どこでもドアは戦闘向きのひみつ道具ではない。

そう考えたベルからしてみれば、こんなに極悪な使い方ができるひみつ道具だったのかと戦慄する思いだ。

フィン・ディムナは寒気がするほどに頭の回転が速い人物だという評は正しかったらしい。

これだけ冴えていなければ団長など務まらないのだろうか。

(……もし団員が増えたら、その人に団長は任せよう)

少なくとも自分がここまでできる気がしない。

あまり頭の性能がよろしくはないことを自覚するベルは、フィンと自分を比べてそう思ってしまった。

(きつとこの人ならひみつ道具の使い方一つであたふたしないだろうか……)

リリと言い、小人族バルウムは皆頭が良いのだろうか。

大役を任されてちよつと現実逃避気味に考えているベルの横で、モダーカが淡々とカウントを数えている。

そして、ハシャーナは緊張しているベルに作戦のおさらいを提案した。

「坊主、最終確認だ。ドアから仮面野郎が飛び出して来たらすぐに扉を閉めて、俺たちと同時に戦場を離脱する」



「は、はいっ」

「勇者はカウント通りに仮面を吹っ飛ばすと言っていたが、想定外のアクシデントがあるかもしれない。時間通りに跳んでこなくてもドアの中を覗くな。飛んできた野郎とぶつかる可能性がある」

「そして5秒経つても飛んでこなかったらどこでもドアを閉める……ですよね」

「そうだ」

ドアノブを握る手に力が入る。

もし、指揮官が飛んでこなかったら凄い居たまれないと思う。

正否は既に参戦している二人次第と言うワケである。

(向こうの状況が分からないって怖いな)

離れた場所で起きていることを把握できるひみつ道具はない。

ひよつとしたらアスレチックハウスにその機能があるのかもしれないが、冒険者側の生命線ともいえるひみつ道具をあれこれ弄るわけにもいかなないので確認はしていなかった。

生きている心地がしないとはまさにこのことだ。

「10……9……8……7……6……」

「来るぞ！」

「5……4……3……2……1……0!!」

永遠にも思えるカウントがついにゼロを刻むと同時に、どこでもドアを指定の場所に繋ぎ、解放する。その途端にドアから飛び出る白い影。

「仮面野郎だ!」

「よし!坊主、退くぞ!!」

作戦通りにベルの首根っこを掴んで一目散に逃げる二人。

そんな彼らを飛び出てきた仮面の男が追うことは無かった。

正確にはできなかつた。

「!?!?」

飛ばされた仮面の男に絡む縄。

何故か水晶の柱が乱立していた戦場にいたにもかかわらず、突如足場も建物も網でできていた異様な光景の中にいる現状が理解できず、混乱する仮面の男。

絡まる縄を振りほどこうとする男だったが、その耳に無数の何かが風を切る音が入る。

同時に、この状況に頭の中で何かが掠めた。

(待て、網?網だど?確か報告の中に……)

——南区、街が網でできた迷路に変貌している!行軍しようにも、網が足に絡まり、そ

ここに魔法が飛んでくるため突破できない!

レヴィスがアリアの風を見つけて飛び出す前、闇派閥を指揮していた際に耳に入っていた意味不明な戦況報告の一つ。

この網でできた街と言う奇妙な光景が、その報告と重なる。

「……待て、待て待て待て待て!? ここが南区だと言うのなら!?!」

風切り音の正体に気が付き、仮面の下の顔色を蒼白にする男。

このままでは不味いと慌てて縄を引きちぎりにかかるが一步遅かった。

男に襲い掛かったのは魔法と矢の雨嵐。

数日間にも及ぶ籠城の末、フラストレーションが山の如く溜まっていた冒険者たちは、その怒りを全てぶつけんとばかりにこの地に集結していた。

アイズを捕えるために南東地区に戦力を集めていたことが仇となり、この場所に戦力を集める余裕ができた結果、何とリヴィラの街の冒険者のおよそ五割が獲物を待ち構えていたのである。

各々が詠唱を待機させ、或いは弓を引いて今か今かと待ちわびていた所にノコノコと現れた敵の首魁。

生け捕りにせよと言う命令こそあったが、仮面の男の異様な打たれ強さは既に冒険者の知るどころ……ならば、殺す気ぐらいがちようどいい。



魔法が止み、弓矢が尽きたらその時こそ反撃の時だと憎悪を燃やす男。

だが、フィン・ディムナと言う男がそれを見逃すはずがない。

「やれ、ティオナー！」

待機していた魔法が尽きるタイミングで発せられるフィンの号令。

アマゾネス特有の柔軟な四肢を存分に発揮して、上空に跳躍した褐色の少女は砲弾のように弧を描いて仮面の男に迫った。

「殺しちゃわないよう、にっ!!」

アマゾネス専用装備である大双刃ウルガの刃ではなく、剣の腹をぶつける。

戦闘種族にしか扱えない馬鹿げた質量の得物は、絶大な威力をもつて仮面の男の頭に振り下ろされた。

ゴツスツ!!と鈍い音が響く。

冒険者の中には思わずその音に顔をしかめる者もいた。

仮面が割れていないことを見るに、衝撃を仮面の下に直接浸透させるといふ無駄極まりない高度な技術が発揮されたようだ。

「グッ、ガハッ……」

鉄塊に脳を揺さぶられた男はそれどころはなかつたが。

冒険者たちの攻撃で弱っていたこともあり、受け身を取ることができず白目を剥くほ

どの衝撃をもろに受けてしまう。

たちまち平衡感覚を失い、最早体を動かすことすら覚束ない。

意識が飛びかけるが、それだけは舌を嚙んで耐えた。

(逃げなくては……早く逃げ……)

朦朧とする意識で自分が縄で雁字搦めになっていることすら忘れ、芋虫のように無様に、滑稽に藻掻く仮面の男。

そんな男に告げられる幕引きの言葉。

「[リスト・イオルム]

光の鞭が仮面の男の体に巻き付き、締め上げる。

僅かに残された動く力も奪われた仮面の男は、この魔法を行使した下手人に視線を向ける。

「魔法はあまり得意じゃないけど、一発で成功したみたいね」

先ほどの少女と同じアマゾネス。

テイオナ・ヒリュテの姉であるテイオネ・ヒリュテが姿を見せる。

先ほどまでの魔法や弓矢は本命であるこの束縛魔法を隠すための物だったか、と仮面の男は臆げながら悟った。

魔法種族ではなく、本人も積極的に魔力のアビリティを習熟してはいないとはいえ、第

一級まで器の昇華を果たしているこの魔法の鞭は、階層主すらも封じることが可能だ。多少頑丈なだけの男が突破することは不可能。

「いい加減こっちも我慢の限界だったのよね……一発殴らせるこの野郎!!」

一見大人しいようでその実、妹よりも気性が荒い。

そんな彼女の噂を脳裏に浮かべながら、仮面の男は脳天に突き刺さる拳の衝撃に今度こそ意識を失うのだった。

## 穴が無いから沈めてた

飛び散る血しぶきで水晶が赤く染まる。

アイズとレヴィスの戦いは既に決着が付き始めていた。

「ロキ・ファミリア」の中で最も剣技に秀でるヒューマン。

かつては正義の派閥の「疾風」と並び称された次世代の英雄だ。

無論、それだけならばレヴィスには十分な勝機があつただろう。

だが、彼女の剣技に魔法による援護が合わさっては話は別。

水晶の柱の陰から次々とアイズを支援する魔導士二人。

一人は間違いなくレベル6、もう一人も破壊力だけならば第一級並みの砲撃持ちだ。

そんな都市最大派閥の名に恥じぬ魔導士による的確な妨害は、レヴィスの行動を確実に制限し、アイズを援護した。

「ロキ・ファミリア」の幹部を孤立させ、二人掛かりで仕留めると言うのが今回の作戦の肝であつたが、それを逆に相手にやられてしまつては元も子もない。

粘れば多少は道も開けるのかもしれないが、そこまでやる義理はなかつた。

「はい、まじか」



小さくレヴィスが呟く。

これ以上の戦闘続行は無意味である。

そうレヴィスが判断を下すまで時間はかからなかった。

「逃がさない」

だが、戦闘の中でレヴィスの脅威を十分に理解したアイズがレヴィスをむぎむぎと逃がすはずがない。

ここで仕留めなければ後の障害になることは目に見えている。

なんとしてもここで止めるとアイズは鋭くレヴィスに視線をやった。

だがここは水晶が乱立する要塞。

この地形は戦闘をする分にはアイズの味方だったが、レヴィスが逃亡するとなると途端に身を隠す場所が多いフィールドはレヴィスに味方する。

レヴィスの持つ圧倒的な身体能力をもってすれば、アイズの追跡を振り切ることも可能だろう。

「レフイーヤ！逃がすな！」

「【解き放つ一条の光】——」

それを許すわけにはいかない。

リヴェリアの指示にレフイーヤが詠唱を開始する。

いかにレヴィスが逃げようとも必中の魔法ならば関係ない。

ダメージを与えることはできなくとも、光の軌跡を辿った先にレヴィスはいる。だがレヴィスにとってもそれは承知の上だった。

「——荒れ狂え花ども!!」

レヴィスの声に呼応するかのように18階層に轟音が響く。

咄嗟に音がした方向……上空を見ると、太陽代わりの白水晶がガラガラと落ちてきている。

「天井に例の花型モンスターを待機させていたのか……っ」

要塞に攻撃を仕掛ける際に、いざという時のために撤退の準備をしておくことは当然だ。

まして、常識外の変貌を遂げていたリヴィラの街を攻めるとあればなおさら。

敵が既に撤退の手を仕込んでいたことをリヴェリアは理解する。

「已む得んか……レフイーヤ!! 詠唱を中断しろ!!」

「え? このくらい瓦礫なら回避しながらでも……」

「落ちてくるのは瓦礫だけではない……新種も共に落ちるぞ!!」

瓦礫のみでは目くらましにかなり得ない。

だが、モンスターが落ちてくるとなれば話は別。

建物一つ覆えるほどの大きさを持つヴィオラスが、数十Mメートルの高さから落ちてくるとあればそれだけで脅威である。

物理的攻撃手段に高い耐久性を持つヴィオラスを確実に仕留めるのは、大火力の魔法で魔石を砕くことができる高火力の魔導士だ。

しかし、魔法の詠唱には火力が高ければ高いほどに長文になるという特徴がある。

レヴィスに「アルクス・レイ」を撃った後に、複数体のヴィオラスを葬るための魔法を用意していたのでは間に合わない。

「数体のヴィオラスが落ちれば、バリケードとなっている柱が崩壊しかねない。今はモンスターへの対処が先決だ」

師の言葉に、歯噛みしながら詠唱を中断する。

レヴィスを逃すのは惜しいが、そのために南東の守りに穴が開いては意味がない。

敵の戦力が集中しているのがこの地区なのだから。

上空から落ちてくるヴィオラスにリヴェリアとレフイーヤが対処し始めたことを確認し、レヴィスは脇目もふらずに逃走を開始する。

それを追うアイズだが、レヴィスの身体能力は風を纏うアイズと比する。

このフィールド内で追いつくのは不可能だとアイズには分かる。

このままこの区画を抜けるわけにはいかない。



続けて言われた言葉にベルは身を固くした。

モダーカには「謙遜もやり過ぎればタダの嫌みだからちやんと礼は受け取れ」とは言われたが、フィン・ディムナは本来は雲の上の存在だ。

そんな人物に感謝を告げられている現状はどうも居心地が悪い。

「え、えつと……取り敢えず、戻しますね？」

「ああ、もう闇派閥イウイリスからの襲撃は無いとみてまず間違いない」

ベルはアスレチックハウスのスイッチを押して装置を停止させる。

すると、複雑怪奇な第二の迷宮と化していたリヴィラの街は、あつという間に元の粗雑な木造りにその姿を戻した。

「……説明は聞いていたが本当に元通りだな」

シヤクティはベルが起こした超常の現象に頭を痛めながら呟く。

闇派閥イウイリスにベルの存在は明らかにならなかつたとはいえ、これほど多くの冒険者に目撃されてしまつては隠蔽は困難だろう。

箱口令かんこうれいは布くとは言え、冒険者の口は軽いものだ。

酒場で酒が入りすぎてついつい口を滑らせるものもいるだろうし、忠の篤あつい眷属ならば罰則覚悟で主神に事の詳細を報告しようとするはずだ。

それだけベルの持つひみつ道具は規格外なのだから。

（偽の噂などで今回の全体像はぼかすことにしているが……人と駆け引きが通じない神が相手では真相を知られるのは時間の問題。どうするか）

今回のリヴィラ救援にベルを同行させた判断は全体を見れば成功だ。

敵指揮官の捕獲と言う出来過ぎた戦果は、間違いない彼のおかげである。

しかし、彼の今後を考えれば手放して喜べるものではない。

この先、彼は多くの者に注目される。

「あ、後はあれも解除しないと」

せわしなく持参のバックバックを漁るベル。

この後の苦労も知らずにいるその姿を見ると、どうも見ている方がハラハラする。

（あの少年に重ねているのか……我ながら女々しいことだ）

綺麗ごとのために目を回しながら奔走しているその姿を見ると、どうも昔のことを思い出す。

夕日がよく似合った妹のことを。

「えくと……あつた！」

シヤクティが在りし日に想いを馳せていると、暫くの間、ガサゴソとバックバックを漁っていたベルが弾んだ声を上げる。

その手に握られるのは赤と緑の玉が大量に入った半透明の袋だ。

オラリオでも珍しい素材でできた袋に注目が行きがちだが、このひみつ道具の真価を発揮するのは赤と緑の玉の方だ。

その名は「しずめ玉」と「うかび玉」。

一つのスロットに現れたこの二つのひみつ道具こそ、今回の防衛戦において重要な役割を果たした。

この中から緑色の玉を一つ掴み、武器庫として利用されていたこの街の元締めの人店の床に放り投げる。

すると床が水面のように波打ち、その中から緑色の物体が浮き上がってくる。

(うっ……)

生理的な嫌悪感を引き立てるその姿に、分かっているもつい顔をしかめてしまう。

イッイルス  
闇派閥が狙っていたというこの緑の宝玉。

アイテムなのか、それともモンスターなのか。

嫌に生物的な質感のあるそれは、完全に地面の中からせり上がる。

これこそが冒険者側の秘策。

物体に赤い玉を当てて地中に沈めるしずめ玉と、それを地上に引き出す緑色のうかび玉。

このひみつ道具のことを知らなければ絶対に隠し場所が分からない。分かったとし

ても手の出しようがない、奪わせないという事に關してはこれ以上ないこのひみつ道具が3つ目だった。

「もつと時間があれば水晶の柱を埋めて敵を下から刺したり、敵が一か所に集まったところで足元から火炎石を浮かび上がらせて君の魔ファイアホルト法で起爆したりできたんだけどね」

(この人コワイ)

どうしてこう、えげつない使い方を考えられるのかとベルは戦慄する。

のび太辺りなら部屋の片づけを誤魔化す、みたいな微笑ましい使い方になるだろうに。

にこやかに悪魔のような使い方を披露してくるフィンにどう表情を返したらいいか分からず、曖昧な表情でその場を逃れようとするベル。

「まあ、過ぎた話は置いておくとして。問題はこの宝玉をどうするかだね」

フィンが言った通り、この緑の宝玉の処遇をどうするかが問題だ。

闇派閥イツイルスが奪還しようとしたという事は、闇派閥が持つであろう切り札に何らかの關係があることは確定的に明らかだ。

闇派閥を追う〔ロキ・ファミリア〕・〔ガネーシャ・ファミリア〕の双方からすれば是非とも確保しておきたいものであることは間違いない。

「詳しく調べたい。我々に預けてもらっても構わないか？」



「シー。今回はそちらに借りがあるしね。何か分かったら教えてくれ」  
「ああ、勇者の知恵はこちらとしても是非頼りたい」

本心を言えば「ロキ・ファミリア」で確保したかったのであろうが、今回は「ガネーシャ・ファミリア」に助けられた都合上フィンはあまり好き勝手なことは言えない。

極東では餅は餅屋とも言う。

都市の治安維持に尽力してきた憲兵ならば、悪いようにはなるまいと考え直し、最重要の証拠を彼女に預ける。

「しかし、今回の依頼の報酬はきちんと別途で払ってもらおうぞ」

「はは、お手柔らかに」

如何にもな団長同士の会話を繰り広げる二人にすっかり置いてけぼりを食らったべ  
ル。

これはもう退席したほうがいいのかとも思ってしまった。

レベル1で貧乏且つ弱小ファミリアである彼にとつては、都市を揺るがす巨悪との戦いなど物語の中でしか縁がないものだった。

はつきり言つて場違いもいいところだ。

何かないかと視線を右へ左へと移動させていると、フィンがその様子に気が付く。

「ああ、済まなかったベル・クラネル。こちらだけで盛り上がってしまった」

「そうだな……クラネル。お前はもう退席しても構わない。精々おまえの分の謝礼もふんどくっておこう」

「これは手強そうだ」

そう言って再び団長としてのお話を再開させる二人。

ベルは少し狼狽えた後、「し、失礼しました」と声をかけてから元締めのお店を出た。

(なんだか……凄かったな)

話のスケールがもう「ヘステイア・ファミリア」とは違う。

正に英雄たちの戦いが終わった後、と言う感じでつい浮き上がってしまう。

14歳の少年としてはああ言うカツコイイ大人の会話はツボなのだ。何言ってるのかはよく分からないけど。

「よう！坊主！終わったか？」

「あ、ハシャーナさん。はい。先に僕だけ帰されて、今はフィンさんとシャクテイさんの二人で会話中みたいです」

建物の外で待っていたハシャーナがベルに声をかける。

ベルとしてもハシャーナとは色々報告したいこと、話したいことが山ほどあったのでちようどよかった。

「せっかく18階層に来れたわけだからな、適当に辺りをぶらつくか？」

「はいー」

ここに来たばかりの時は抗争の真っ最中だったから自粛したけど、色々な木材を使つたつぎはぎだらけの冒険者の街は一種の浪漫ロマンと言うものだろう。

今は街の機能の修復中とはいえ、一度アスレチック化したおかげで被害はそこまで大きくない。

商魂著しい者の中には戦勝記念として商品の販売を始めていたりする。

「ここは素人なら一度は痛い目見るところだが……坊主はこの戦いによく貢献していたからな。今日はお前からぼったくろうとする奴も少ないだろう」

そこはいないと言つて欲しかった。

少し不安になりながらも、ベルは初体験であるならローグ者たちタウの街探索に心を躍らせた。

そんな時、あの金色の長髪を人ごみの中に見つける。

(あ……アイズさん?)

アイズもベルに気が付いたのか少し目を開いてこちらに視線を向けた。

突然現れた想い人に動揺したベルはあたふたと狼狽える。

(えーと、えーと、そうだ！この前に逃げちゃったお詫びを……)

前回つい逃げてしまったことを謝ろうと、なげなしの勇気を振り絞つて声をかけよう

とする。

ベルの周りから空気が逃げてしまったかのように、肺に上手く酸素が入ってくれないが、何とか息を整えて一歩前に踏み出した。

できるだけ自然体で近づけるように……実際は全身真っ赤だが……自分に言い聞かせながら、妙に重くなった体を動かしてアイズを指す。

そんなベルに対してアイズはプイツ、と顔を背けた。

「!？」

初めに断っておくが、これはアイズがベルを嫌がったと言うワケではない。

ただレヴィイスとの戦闘で心に余裕がなく、己の中から湧き上がる衝動を恥じていたアイズは今こんな自分を見られたくはないと思っていた所にベルとタイミング悪く鉢合わせしてしまったのである。

そのため、居心地が悪くなってつい顔を背けてしまったのだ。

……人の心を読むことなどできないベルに、そんなことが分かるはずもないが。  
(き、嫌われてた? やっぱりあんな失礼な態度をとっていたから?)

年頃の少年の硝子の心がそれに耐えられるはずもなく。

せつかく振り絞った勇氣も沈下してしまう。

じわつ、と目頭に熱いものを感じたベル。

あんな失礼なことをしていい関係を築きなおせるなんて、馬鹿な期待をしていたと羞恥で体中に力が入る。

良くない反応を返してしまったとアイズが気が付いた時にはすでに遅く。

「あの……」

「ご、ごめんなさあああああああいっ!?!」

既に想い人の言葉を受け止める気力をなくしていたベルは逃走を開始した。

手に持っていた赤い玉をばら撒きながら。

「ちよっ、馬鹿お前!?!」

あたり一面に散乱したしずめ玉は容赦なく周りにいた物や人物を沈め始める。

「おい坊主! 赤い玉をまき散らすな……って逃げ足早!?!」

「これ洒落になんねえぞ?!」

「沈む沈む沈む!?!」

「また……逃げられた……」

途端に阿鼻叫喚となる辺り一面。

しずめ玉に当たらなかつた一部の冒険者が、沈みゆく同業者や物を引き留めるがそれでは一時的に留める以上の効果しかなかった。

特に何故か心理的に大ダメージを受けていた剣姫は、凄まじい速度で沈んでいった

と、とある冒険者はのちに証言している。

最終的に恥も尊厳も捨て去った冒険者一堂による命乞いが、リヴィラの街中に響いたことで事態に気が付いたベルが慌ててうかび玉を使用し、冒険者たちに土下座することで騒ぎは一段落した。

冒険者たちも大した損害は出なかったなので、どこでもドアで地上に送ってもらったことを条件にベルを許したと言う。

## 酒神の忠告

「じゅ、18階層……」

イヴィルス

闇派閥によるリヴィイラ襲撃で大忙しだったエイナは、何とか仕事を一段落させて予定通りにベルとの面談を行うと、彼の口から告げられた報告に絶句した。

冒険者歴がようやく1か月に届くかどうかと言う新米が、ギルドが設定する適正レベルが2である18階層。

それも第一級クラスの実力者による襲撃の真つ最中に飛び込んだというのである。

「街がアスレチックになったとか、首魁を無理矢理包囲網に転移して囲んだとか、何だか嫌な予感がしたと思ったら……」

「い、い、いめんなさい」

ベルを見る目がついジト目になったことは許してほしい。

だが、ギルドに上がってきた意味不明な報告のせいでギルド側も混乱し、職員達が地獄のような確認作業をさせられたのだからつい不満を持つのも無理はないことだ。

「確認するけど闇派閥イヴィルスに姿は見られてないんだね？」

イヴィルス

「はい。ずっと裏方でしたし、僕を見たのは闇派閥イヴィルスのリーダーだった人だけです」

ベルの返答に小さく安堵の息をつく。

ベルはつい先日イヴイルスに闇派閥と交戦したばかりだ。

こんな短期間で何度も顔を見られてしまつては完全に顔を覚えられてしまう。そうなればダンジョン探索どころの話ではない。

「ベル君。私の言いたいことは分かるよね」

「でも……」

「でもじゃないの」

ベルが恩人を助けたいと思つての行動だったことは分かっている。

ひみつ道具が有用だったことも認めよう。

だがそれはベルが死地に出ていい理由にはならない。

「ダンジョンじゃ死んだら終わりなの。やり直しながらできないんだよ」

都市中の冒険者の情報が集まるギルドに所属するエイナはそのことをよく知っていた。  
た。

ベルのスキルは破格の効果を持つが、穴が無いわけではないのだ。

効果が安定せずに運頼りになる点。

ひみつ道具の使い方が手探りなため、実戦で思わぬ落とし穴が発覚する可能性。

何よりも、ベル本人の強さは何処までもレベル1であるということ。



ひみつ道具は強力だがそれに比する、或いは凌駕するスキルや魔法が全くないわけはない。

それこそ、人狩りを得意とする闇派閥イザイルスには対人間向けのステイタスを持つ者が大勢いる。

気配を隠し、一撃必殺の毒で相手を仕留める暗殺者など、正に地力が足りないベルの天敵ではないか。

冒険者の寿命は短い。

レベル1の下級冒険者はもちろん。器の昇華を果たした上級冒険者ですら次々と死んでいく。

期待のルーキーも、熟練のいぶし銀も、怪物と恐れられた逸材も。

ある者はモンスターの牙にかかり、ある者は迷宮の罠かかり、ある者は同じ人間の悪意に屈してあっさりと死んでしまうのだ。

【四 次 元 衣 囊】フォース・ディメンション・ポーチは怖いスキルだよ。規格外の力を持つひみつ道具はベル君を不相応な戦場に誘う」

神々も闇派閥イザイルスもまだベルの存在には気が付いていない。

だが、この状況は長く続くことは無いだろう。

既にベルが起こした奇跡の数々は隠蔽できる物ではない。

点と点を線に結ぶことなど、このオラリオに生きる者たちからすれば造作もないことだ。

既に導火線に火はつけられた。爆弾に着火することはもはや避けられない。

「部外者だった私には君の判断が絶対に間違つていたとは言えないよ。君が行かなければとんでもない被害が出てたかもしれない。でも、今回のことは態々君が出る必要はなかった。リスクを負わず、「ガネーシャ・ファミリア」に任せるつて言う選択肢もあつたよね」

エイナの言葉にベルは俯いた。

ベルもそれは分かつていたのだろう。それでも居ても立つても居られなかつただけで。

それが少年の美点であることは事実だが、今回のように何でもかんでも背負い込んでいればいつか潰れることは目に見えている。

アドバイザーとして、ここは心を鬼にしなければならぬ。

「今後はひみつ道具を使った適正階層以外への移動は許可しません。まずはちゃんと実力を上げること。いい？」

「は……」

この先も同じようなことをしていれば間違はなくベルは死ぬ。

自分の身を自分で守れる程度の力を得るまでは、中層以下に行かせるわけにはいかない。

もしその必要がある時は、エイナに相談してからだ。

エイナの言葉をベルは沈んだ様子で受け止める。

打ちひしがれる少年に内心苦笑しつつ、エイナは場を切り替えるように優しい口調になる。

「……少し厳しい物言いになっちゃたけど、暫くは安全だろうし、ゆっくり力をつけていけばいいよ」

「はい……」

「頑張つていこう？ 私も一緒に手伝うからさ」

「はい！」

「じゃあ、早速勉強しようか」

「はい？」

ドスンツ、と机に置かれる本の山。

心なしかいつももの二倍以上ある気がするそれにベルの顔が引き攣る。

「あの……エイナさん？」

「ベル君からドラえもんさんたちの話は聞いていたのに、移動系のひみつ道具を想定し

てなかったのは私の落ち度だった。これからも何かの拍子に下層に落ちてしまう可能性がある以上、上層の知識だけで満足してたら駄目だったよね。これからはいつもより厳しめに行くよ」

いつもあり得ないくらいに厳しかった気がするが。

一日に参考書数冊を暗記させられていたのは厳しくなかったのだろうか。

「【ヘスティア・ファミア】はI最下級評価のファミアだから深層の情報はかなり制限されちゃうけど、下層までなら問題ないからね。伝えられる限りの情報を教えてあげる」

ふんすとばかりに張り切るエイナは可愛いが、実質死刑宣告されているベルがそう感じる余裕はなかった。

3か月もあれば大まかな所は網羅できるスケジュールらしい。

つまり3か月はあの量の勉強をさせられるという事か。逃げたい。

「あ、これだけだと足りないかもしれないからもうちよつと持つてくるね〜」  
違った。もつとあるらしい。

ボタン、と閉められた扉を凝視するベル。

今なら逃げられるかもしれないが、呆然自失と言った状態でノロノロと参考書に手を伸ばす彼はエイナに完全に調教タイムされているのだろう。

その日、兔の哀れな唸り声がギルドに悲しく響いた。



(……って言うのは流石に厳しいかな)

確かに「ソーマ・ファミリア」に怪しい点があるのは間違いない。

だが、今回の行動は流石にベルに肩入れしすぎだ。

公平・平等を謳うギルド職員としては失格かもしれない。

事が明るみになれば最悪解雇もあり得る。

それでも、彼が傷つくのも、悲しむのも嫌だから。

エイナは間違った選択を後悔しない。

「ハハ……だよな？」

やがて一つのアイテムショップの前で足を止める。

石造りの2階建ての建物。『リーテイル』という店名らしきこの店は様々な商業系

ファミリアの商品を入荷しており、冒険者たちからの評判も高い。

そんな店にエイナがやってきていたのは、この店に入荷される商品の中に「ソーマ・

ファミリア」製の酒があるからだと聞いたからだ。

とにかく少しでも新しい情報が欲しいエイナは、冒険者たちやギルドとはまた違った

視点から「ソーマ・ファミリア」を見ている商人たちに話を聞こうと思いつたのだ。

(結構人気の店って聞いてたけど、今日はあまり人がいないみたい)

この店の商品はいいものが揃えられているだけあって、値段が相応に高い。

今エイナが手に取っているソーマ製のお酒など、何と6万ヴァリスもする。

この適当なラベルと瓶でベルの装備一式より高いのだ。

ギルド職員として高い給与をもらっているエイナですら躊躇する金額。こんなものを日常的に買えるのは高ランクの冒険者くらいだろう。

そんな高ランクの冒険者の多くはリヴィラの街の復興作業で18階層にこもりきりになっている。

そのあおりで客足が減っているのかもしれない。

「おや、この店に冒険者でもない人が来るとは珍しい」

「ひゃっ!？」

その時、突然背後から声をかけられて思わず飛びのく。

そこにいたのは首まで伸びるややクセが付いた金髪に、柔らかな美顔を持つ一柱の神だった。

比較的穏健な神としてギルド内でも評価が高いその神の登場にエイナは驚く。

「神ディオニュソス……?？」

「それは『ソーマ』か。それに目を付けるとは中々目の付け所がいいお嬢さんだ」

エイナの持つ酒瓶を見て頷く神に、そう言えば神ディオニュソスは無類の酒好きとしても有名だったと思えば返すエイナ。

「あの、神ディオニュソスは『ソーマ』を買いに？」

「いや、私の好みは葡萄酒だ。『ソーマ』もいいが今日は新たな味に巡り合えないかと歩き回っていた所だよ」

「そうですか……つかぬことをお伺いしますが、この『ソーマ』は普通のお酒なのでしょうか」

「……ふむ？」

冒険者たちの異様な熱を思い出し、もしかしたら何かしらの関係があるのではないかと詳しそうな神ディオニュソスに問う。

すると、神ディオニュソスは一瞬だけ感情の見えない目を細め、興味深そうにエイナを見た。

その視線がどこか居心地悪く、つい早口で言葉を付け足す。

「え、えつとですね？【ソーマ・ファミリア】の冒険者たちの噂を聞いていると偏見があつて……」

「いや、いいとも。少しでもあのファミリアを知っていれば気付けることだ。お察しの通りこの酒は普通の物ではない。正確にはこの酒の成功作は、か」

「成功作？」

「ああ、あのファミリアが敬う唯一の物。それが成功作……【ソーマ】だ」



ディオニュソスの言葉に思わず酒瓶に巻かれたラベルの文字を凝視する。

『ソーマ』。杜撰な外見のラベル故に主神の名前を適当につけただけだと思つていたが……

「成功作はこんなただ質の良いだけの酒とは一線を画す出来……正に神業としか言えないものになるという。そしてそれは私たち酒呑みの間では有名な話だが、市場には出回らず、ファミリア内でのみ共有されるという」

「……」

「ピンと来ていない、と言う様子だね？ ようはとんでもなく美味しい酒だと思つてくれればいい。それこそ、人生の全てを投げ売つてでも、他者を蹴落としてでもまた飲みたいと思わせるほどのね」

そのディオニュソスの言葉で背筋が寒くなった。

恥も外聞を捨て去つて、他者を蹴落とす。

まさに異常な狂気に取りつかれる「ソーマ・ファミリア」そのものではないか。

「ここで注意しなければならぬのはあくまでも『ソーマ』はただの酒だという事だ。危険薬物を使つて脳に異常を引き起こすドラッグとは違い、法的には何の危険性もない材料で造られている」

飲んだものが狂気に囚われるのはただ美味すぎるから。

人の常識を超えた領域を垣間見て二の句が継げないエイナは、自分が今持っている失敗が恐ろしく思えた。

「なら……【ソーマ・ファミリア】の団員は皆【ソーマ】に酔って……？」

「それはない。この程度の神酒なら器の昇華を果たした眷属こどもは惑われないし、逆に弱すぎる眷属こどもは酒を何度も飲めずに酔いから醒める」

リルルカ・アーデは他の冒険者から虐げられているほどに弱い存在のはず。ならば後者に当てはまるのだろうか。

この事実をベルに伝えたのち、すぐに彼女の状態を調べなくては。

「……神ディオニユソス。申し訳ありません。少し急用が出来ました」

「やはり酒を買いに来た……と言うワケではなかったか。見目麗しい酒呑み仲間ができると思ったのだが残念だ」

話の途中から話題が酒からファミリアに移行したことで彼も薄々察していたのか、肩をすくませながら小さく笑みを浮かべる。

そして、何やら考えた後、店から出ていこうとするエイナに声をかけた。

「お嬢さん。一つ忠告しておこう。あのファミリアは怖いところだよ。神酒ソーマ抜きでもね」

「何故ならあの歪なファミリア形態を作った団長はレベル2。酔ってなどいない」

「にも関わらず酒の配布をノルマ制にするなんて言う暴走を助長させるやり方をしていく」

不気味なほど穏やかに忠告を重ねるディオニユソス。

どこか貴族然とした立ち振る舞いの中に破滅的な空気を漂わせる。

そんな彼を見て、エイナは目の前の存在が人類とは違う視点を持つ超越存在デウスデアであると実感する。

「ここまでの話で【ソーマ】が恐ろしいと思ったのならそれは違う。本当に恐ろしいのはそれを利用した者だ」

そこを理解しなければあのファミリアの闇に飲み込まれるよ？

ディオニユソスはそこで、どこか遠くを見つめた。

目の前のエイナではないどこかを見る瞳は何か酔うように陶然として……

「神酒はきつかけであっても、狂乱オルギアを引き起こすのはいつだって、どんな時だって、結局は人類ヒトなのだから」

## 彼女の苦しみに彼の想い

絶望の底にいる者こそこの世で最も苦しんでいる人間だと思っていた。

実際、希望を失ったあの日はこれ以上ないと思えるくらいに心が追い詰められたものだ。

だが、人の心と言うものはそう簡単ではないらしい。

人間の心は強くない。

絶望の底にいれば心は外界をシャットアウトし、外からのどんな刺激に対しても鈍感になる。

底まで沈み切っていたあの時は、苦しかったがそれが当たり前だった。

空気を吸うように、音を聞くように、心に冷たい絶望が広がっていることが当たり前なのだ。

当たり前のモノに心が強く揺さぶられるわけがない。

ならば、絶望の底にいて感じる苦しみは人が思っているほど大きくはないのだらう。

苦しい。

これ以上ないと思つていた苦しみをあつさりと超える苦痛が少女を襲う。どうしてこうなつてしまったのか。

ただの八つ当たりのはずだった。

惨めな鬱憤をはらして、余計に自分が嫌いになる。そんな未来を予想していた。だけどあの少年は綺麗だったのだ。

容姿が、と言う話ではなくその在り方が。

当たり前のことに笑つて、当たり前前に泣いて、当たり前前に生きる。

それがあんな尊いことだと知りたくなかつた。

知らなければ、絶望していた自分がそれ以上の痛みを味わわなくて済んだのに。

『——リリ』

彼が自分を呼ぶ声がどうしようもなく温かい。

その白髪のように汚れ一つない少年は、きつと自分が少女に苦しみを与えていることになど気が付いていないのだろう。

碌に顔も覚えていない両親が付けたその名を呼ぶ声は、両親からは終ぞ感じることもなかつた親愛に満ちている。

どこか、在りし日に失つた温かさを思い出させるその笑みが、少女の心を追い詰める。

『おう！嬢ちゃん！お前もやってみろよコレ』

『ベルの今日のひみつ道具は玩具だってよ、ホントに何でもありだなコイツ』

一つ温かさを知れば世界は加速的に変わった。

いや、変わったのではないだろう。

今までの自分の視野では見ることができなかったものが、彼との出会いで映り始めたのだろう。

『ぐぬぬ、このままだとボクが最下位……サポーター君!!次は君の番だ!』

世界は自分が思っているよりちよつとだけおかしなもので。

ちよつとだけ間抜けなところがあつて。

ちよつとだけ優しかった。

『つて!?!なんで君が最高得点出しているんだああああ!?!』

『ボウガンを使っているリリに射撃で勝とうとするなんて無茶ですよ神様……』

それは自分が見てきた世界とは違いすぎて、哀れな小人族バルウムは情けなく右往左往する。

懐に隠し持っていたはずの敵意の刃はいつの間にか行き場をなくしていた。

そんな少女がなし崩し的に居ついた場所は、泣きたくなるくらいに温かい。

ふと、恐ろしくなる。

この甘すぎる世界は自分が作り出した幻なのではないかと。

次に目が覚めた時は、またあの酒蔵に逆戻りしているのではないか。

もしそうだったならば、自分はきつと耐えることなんてできない。

『にしてもなんでウエスタンゲームなんでしょうね？これ、どこかに西の要素ありました？』

『さあ、そこは俺たちには分からない異世界的な言い回しなんじゃないか？つうか何気にお前も嬢ちゃんの下にスコア高いな……射撃の才能あんじゃねえか？モンダンカ』

『温暖化みたいな発音で言うんじゃねえよ!?自分はモダーカです！ワザとだろ!』

『そして俺がガネーシャだ!』

『合わせんな!』

いや幻だ。

この関係は所詮、リリが薄っぺらい仮面を被って作ったもの。  
すぐにぼろが出て終わりが来る。

それとも先にザニスが入ってきて終わらせるか。

どちらにせよ、失うと分かっているのだ。

そうなれば耐えることはできないと分かっているのに。

知らなかった。知りたくなかった。

この世で最も苦しいのは絶望の底にいる時じゃない。

底から引き揚げようとして少し上を向いた瞬間なのだ。

中途半端に希望を持つから、心の壁が取り除かれてどうしようもない現実を直視するハメになる。

彼らの笑う声につられて笑う自分を自覚して、愕然とする。

ここまで心を許してしまったのかと。

他人に、何よりも冒険者に。他の誰でもない自分が。

認めない。

こんな事があつてたまるものか。

少年は冒険者だ。いつか裏切る敵だ。

今だって、あの無垢を装った微笑みの裏で無力な荷物持ちサポーターを嘲ているに違いない。

どう金を巻き上げるか、簡単に絆された馬鹿な獲物を前に舌なめずりをしてい  
だ。

その仮面を暴いてやる。

化かし合いならば自分を上回る者などいない。

自分以上に精巧な仮面を纏纏えるか。

「貴方の刻印きざは私のもの。私の刻印きざは私のもの」

そうに決まっている。

そうに決まっている。





出会ってからそれなりに立つが、心を開くあと一歩まで届かない

神様が言っていた「あいすぶれーく」のためのレクリエーションを自分なりに考えてみたのだが、やはりその日のうちに考え付いた程度のアイディアでは駄目なのだろうか。

(次はもつと一緒になって楽しめるような……ん……?)

リリの心を開くための次の一手を考えていると、通路の脇からヒョコツとこちらを除く顔。

リリと背丈が同じくらいのエルフの少女だ。

ちらりと見えた服に「ガネーシャ・ファミリア」の紋章エンブレムがあつたし、見慣れないがこのファミリアの団員の子どものだろうか。

見かけない顔だがエルフとは元来人見知りなもの。

ずっと新顔である自分から逃げていたのかもしれないとベルは結論付けた。

「お兄さん、お兄さん」

「え? 僕?」

だが、人見知りと言う予想に反して少女は人懐っこくベルに話しかけてきた。

思わず動揺するベルをエルフらしい整った可愛らしい顔でクスクスと笑う少女。

「ちよつと聞きたいことがあるんですけどいいですか?」

「う、うん、僕はいいけど……?」

そう言えばファミリアの団員の子どもは、親と同じファミリアに入ることがほぼ内定しているのです。ファミリアの外とのつながりが薄くなりがちだと聞いたことがある。

アイアム・ガネーシャ  
ガネーシャのホームにいながら他派閥であるベルに興味を持つても不思議ではないだろう。

ダンジョンのこととか聞かれるのかな?と気楽に構えていたベルは次の少女の質問で目を見開いた。

あの小人族バルウムの荷物持ちサポーターって絶対にお兄さんを嵌めようとしていますよね?それなのにどうして契約を結び続けているんですか?」

「……」

「この前だってお金をちよろまかしていたらしいですよ」

予想外の言葉に咄嗟に返事が出来ず、沈黙してしまうベル。

それをベルの心が揺れていると判断したらしい少女は畳みかけるようにリリの悪事を暴いた。

「アイテムだってお兄さんから相場以上の値段を吹っかけてるらしいし、この前なんて預かっている荷物を勝手に広げて漁ってましたよ?泥棒でもしたんですよきつと」

「……」

「おまけに陰でお兄さんの悪口ばかり言ってるんですよ？ 散々お兄さんにお世話になっている身分のくせに自分勝手だと思いませんか？」

「……」

「あんな奴とはさつさと縁を斬っちゃえばいいんですよ。あつ、そうだ！ここは【ガネーシャ・ファミリア】ですし、捕まえてもらえばいいんです。なんなら慰謝料で搾り上げて……」

「ちよ、ちよつと待つて?!」

気づけばリリが逮捕されそうになっていて、慌てて少女の言葉を遮る。

一体この少女はどうして他人が逮捕されるといふ話を嬉々として話すのか。

憲兵だらけの環境で過ごすところなるものなのかもしれない、とちよつと偏見を抱きつつもヒートアップしていた少女を止める。

「えつと、まず、はつきり言っちゃうとリリを【ガネーシャ・ファミリア】に引き渡そうとは考えていないよ」

「なるほど！つまり調子乗ってるサポーターへ分からせるのは自分一人でやると。きつと公的機関ではできないような過激な拷問を……」

「全然違うよ!?!君の中で僕はどんな外道に見えてるの!?!」

何故明らかな犯罪行為についてそんなに楽しそうに語りだすのか。

一応、都市の憲兵の子どもなわけだし、もうちよつと穏やかでいるべきだと思う。

「ならお金を巻き上げるとか？ 最初に騙そうとしてきたのは向こうですし、社会的地位が底辺な荷物持ちならどんなに吹っかけても許されるでしょう」

「一旦犯罪から離れて!?! 僕リリにそんなひどいことする気はないよ!?!」

ぜえぜえ、と息を切らしそうになりながら突つ込み続けたベル。

この少女はリリに何か恨みでもあるのだろうか。

「騙されてるのは何となくわかってるよ? でも、嵌めてやろうとか、仕返ししてやろうとか考えているわけじゃないんだ」

「なんでですか? 酷いことされているんじゃないですか」

「本当に大した理由じゃないんだけど……今のままりりと離れるのは嫌なんだ」

「……は?」

ベルの返答がよほど想定外だったが、少女は先ほどまでの猫を被った声色と違って素らしき声を上げる。

心なしか、少女の表情は全く似てないにも関わらずリリと重なって見えた。

「本当はね? 色んな人にリリとの契約を続けるのはやめたほうがいいって言われたんだ」

「……当然です。あの小人族は最低なんですから」

だからこそ、先ほどのベルの発言が理解できないと少女は返す。

「皆、僕より頭のいい人たちだからきつとそれが正しいんだと思う」

「だったら何故そうしないんですか？」

何故そうしないのか。

その問いにどう答えるべきか迷った。

理由ははつきりしているのだが、かなり馬鹿らしいものだから。少女を納得させる説明がなかなか思いつかなくて。

少女のどこか非難するような視線を前に、言葉を探しつつ自分の想いを伝えた。

「えっと、寂しそうだったんだ」

「……」

「ボクの勘違いかもしれないけれど、時々あの娘が見せる表情が悲しくて……放っておけないんだ」

レクリエーションを行った日の神様との会話を思い出す。

リリを観察して、良からぬ事を考えているんじゃないかと僕に言ってきた時。

僕が神様に返した言葉を。

『……神様、一つだけ教えてください。さっきの心理テストの結果。あれって神様がさっき言ったことが全てですか？』

『……どうしてだい?』

『リリは僕よりずっと頭がいいから、騙されているかもしれないけれど。彼女の行動が悪意によるものだけだと思えないんです』

どこか、自分に取り入るために猫を被っているらしいことには気が付いていた。

ただ、その仮面はどこか脆くて、時折少女の本音が垣間見えている気がする。

『今日も僕と神様を見て寂しそうだっと思ったと思いました。ファミリアに居場所が無いという言葉にも嘘は無いと思います』

もしかしたらリリを信じたいあまりに無理やり作り出した錯覚なのかもしれない。

それとも、そう思わせること自体がリリの計画なのか。

でも、間違っているならそれで構わない。僕が馬鹿だったというだけの話なのだから。

そんな僕に神様は一つため息をついた。

『ああ、ベル君の言う通り。バウムテストから分かったのは彼女の欺瞞だけじゃない。あの子自身が気が付いていないであろう願望も映し出されていた』

幹が黒く塗られていることが示していることは自己嫌悪。

周りにぼつぼつと描かれた草から読み取れるのは助けを求める心。

『でも、このテストは完全に人の心を暴くわけじゃない。あくまでも参考程度にとどめ

ておくものだけ』

神様が僕にこのことを教えなかったのは、僕がこういうと分かっていたからだ。

でも、仮に心理テストの結果が違って僕はリリと契約したと思う。

『君は優しすぎるよ……』

『違いますよ。僕は神様から貰ったものを別の誰かに返したいだけなんです』

一人は寂しい。

オラリオに来て、どのファミリアにも入れてもらえずにいた僕はそれがよく分かる。

僕は神様に出会って救われた。

なら、リリは？

『あんな寂しい顔をして欲しくないから、僕はリリと契約したいです』

ひどい出会いだったけど、この出会いが少しでも彼女にとって意味のある物であつて

欲しいから。

愚かだと分かっている僕も僕はリリを選んだ。

そんな僕に神様はやっぱりこうなったかと笑った。

「そんな……そんな馬鹿なことを考えていたのですか!？」

少女の怒声に思考を現在いまに引き戻される。

食つて掛かるように詰め寄る少女は、僕が想像していた以上に僕の答えを否定した。



「え、えつと……」

「あのサポーターはそんな奴じゃありません！自分勝手でする賢くて汚れた最低の小人族バルムなんです！ベル様がそんな風に背負い込む価値もない屑なんです！いつか必ずベル様の想いを裏切るに決まってる！」

凄まじい勢いでリリへの罵詈雑言を発する少女。

やはり何かりりに恨みでもあつたのだろうか。

僕で初犯じゃないならあり得そうな話ではあるが。

「そ、そこまで言わなくても」

「いいえ、言います！それはベル様の妄想です！あのサポーターはただのコソ泥で、自分がやって来たことを棚に上げて悲劇のヒロインぶる救いようのない愚か者で、いつか惨めな最期を迎えるのがお似合いで……」

仲間を侮辱されているはずなのに、何故かベルに怒りが湧いてくることは無かった。

言葉を発するたびに目の前の少女が傷ついている気がして、何かに追い詰められている少女を責める気になれなかったのだ。

どうしてリリに対する想いを語って目の前の少女が追い詰められているのかは分からなかったが。

「それでも、リリは僕のパートナーなんだ」

「……………」

「勘違いならそれでいい。でも、彼女が本当に困っているのなら力になりたい。僕は馬鹿で弱いからできることなんて限られているけど……傍にいるくらいならできるとしよ？」

「あなたは……」

何かを言いたげにして結局言葉が見つからなかったのか俯いた後、少女は耳を揺らし、逃げるようにその場を立ち去った。

それと入れ替わるようにモダーカさんが通路の奥から現れる。

「おーいベル。お前の主神様が呼んでたぞ」

「あ、はい。今行きますモダーカさん」

少し、少女の様子が気になったが神様が呼んでいるのなら行かなければ。

その前にモダーカさんに立ち去ったエルフの少女へのフォローを頼む。

「……………うちにそんな子供いたか？」

流星に「ガネーシャ・ファミリア」ほどの巨大派閥だと団員全員を覚えてはいられないのか、モダーカさんは怪訝そうにしていたけど。

あんなに取り乱していたし、見ればその子だと一発で分かるだろう。

後はモダーカさんに任せて神様の待つ部屋に向かおうとして……



仮面は剥がれた。

ここにいるのは誰にも手を取ってもらえず、泣いている少女。  
綺麗な少年には全くもって相応しくない泥まみれの少女。

そんな彼女宛にザニスからの手紙が来た。

## FROM LILI to BERU

「10階層？」

「はい、ベル様の成長速度を考えれば既に安全マージンは確実に満たしているとリリは愚考します」

今日のステイタス更新を終えた僕は、部屋の前で待ち構えていたリリの意見に首を傾けた。

10階層と言うのはダンジョンにおける1つのターニングポイントと言われている。何故なら、この階層から現れるモンスターにはいくつかの特徴があるからだ。

一つは大型のモンスターが出現するということ。

上層に現れるモンスターは今まで人間以下の大きさのものばかりだった。

だが、この階層からはオークなどの人間を圧倒するような体躯を持つ怪物が姿を見せるのだ。

体がでかいというのはそれだけで驚異だ。単純に体に蓄えられるエネルギーが違う。筋肉だつてたつぷりと付けることができるし、遠心力によって攻撃の破壊力も増す。そして何よりも怖い。

上から見下ろされるといふのはそれだけで人に精神的な苦痛を引き起こすものだ。  
二つ目は天然ネイチャーウェポンの武器だろう。

天然の武器庫とも称されるこの階層は貧相な木々が乱立する。しかし、ダンジョンに生えている木がただの木な筈がない。

この一見すると何の変哲もない枯木はモンスターが握ることで強固な棍棒に変化する。

人間の強さは突き詰めれば他の生き物を寄せ付けられない頭脳と、自らの非力を塗りつぶす武器にある。

素手ならば問題なく倒せる相手がこの武器を身に着けるだけで、やりづらい難敵と化するのだ。

何より、霧に覆われた階層が不味い。

ダンジョンが冒険者を殺し来る、と言うのはそれなりにダンジョンに潜った経験があれば、誰でも一度は経験したことがあるのだと聞く。

この10階層は明確にダンジョンが侵入者に対して妨害を仕掛けている。

毒性の無い霧ではあるが、情報取得のほとんどを目に頼る人間には視覚を奪われるという状況は最悪だ。

気が付いたら棍棒を振り上げているオークと鉢合わせ、なんて笑えない報告もたくさ

んある。

ダンジョン探索にまだ慣れていないとは言い難い僕はまずは9〜8階層で経験を積んでから……と思っただけだ。

「ベル様なら大丈夫ですよ、11階層まで降りたことのあるリリが保証します。そもそもアドバイザーの方にもお墨付きは貰っているんでしょう？」

「まあ、嚴重注意付きだけだ」

本当に細かい注意書きを実際に渡された。

僕のステイタスはそろそろAに届くものもあるし、魔法が使えるのも理由の一つだ。リリの言う通り、客観的に見れば僕は十分に10階層に行ける。

……それでも行く気になれないのは、あのミノタウロスたちがトラウマになっているからだろうか。

「それにいざとなればベル様にはひみつ道具があります！ 万が一なんてありえませんか！」

「あまりスキルに依存したくないんだよなあ」

「だからといって使わないのは宝の持ち腐れですよ」

確かに多少のトラブルなら大丈夫だろう。

だがそれはひみつ道具ありきの冒険者になってしまう危険性もある。



フオース・デイメンション・ポーチ  
そもそも【四次元衣囊】は出てくるひみつ道具が完全にランダムだ。  
頼りすぎれば運が尽きた瞬間が僕の命日となる。

「取り敢えず今日貰ったひみつ道具で何か役立ちそうなものはありますか？」

「えつと……今日のひみつ道具はどれも戦闘向きじゃないと思う」

「……それは残念です。オークに囲まれても無双するベル様は見れそうにありませんね」

ひみつ道具の力で無双してもカッコ悪いだけだと思うが。

そう返そうとした僕は、リリが見せた表情に一瞬口ごもった。

冗談を口にはしているとは思えない、何かにがっかりしていたような……

「……我ながら女々しいですね」

何と言ったかは声小さくて聞き取ることができなかった。

そして、何かを振り払うように一つ深呼吸をすると、いつものように子栗鼠のように人懐っこく笑いかけて来る。

そんな姿が僕と出会ったときのリリに重なる気がして、僕はどうも落ち着かなかつた。

「まあ、ひみつ道具がなくても問題のない実力を今のベル様は所持していることは確かです」

ひみつ道具が使い物にならないことを確認されてから言われても、素直に喜べない。知識は詰め込んでいるけれど、実戦でどこかで使いこなせるかは分からないのだ。エイナさんの勉強で10階層のことは大体分かるが、緊急時にそれが思い出せるかの自信がない。

僕の頭は全然良くないのだから。

(現状維持か……それとも前に進むか)

安全を第一に考えるならば現状維持で一桁台の階層に留まれば、危険はない。

それこそ下の階層から超絶強いモンスターが現れるという異常事態イレギュラーでも起きない限りはそこそこの生活が保障される。

前に進むというのはハイリスクハイリターンな選択だ。

どんなにステイタスが万全でも新階層では万が一がある。

ターニングポイントと言える10階層ならば尚更のことだ。

(……現状維持なら安全だけど、それでいいのかな)

一方で、引ネツつ掛ツクかりを覚えるのは経験値の件だ。

恩恵ファルナはその行為にどれだけ全力を注いだかで熟練度の伸びを決定する。

安全階層での狩りは流れ作業になりがちだ。とても全身全霊をもつて……とは言わなそうだ。

噂だとあのダンジョン攻略の最前線で戦う「ロキ・ファミリア」の幹部の中には、現在の探索領域内では経験値は微妙な変動になっている者もいるという。

器と環境が釣り合わなければ、冒険者に先はないのだ。

このままベルが進まなければ、いかに成長期と言えど、限界が来る。

どこかで踏ん切りをつけなければならぬ。

そうでなければ憧憬を目指すなど夢のまた夢だ。

(なら、答えは決まっている)

「……分かった。リリの言う通り、そろそろ10階層を視野に入れて活動していこうか」  
「はー」

先ほど見せたリリの表情は気にかかるが、今は意識から除外する。

10階層は様々な変化がある階層。

行くのであればしっかりと前準備してから。

エイナの場合によっては赤字になってもいいからやるように散々言われている。

「10階層への準備はご心配なく。リリが用意しておきます」

こんな時、11階層まで経験のあるサポーターの意見は貴重だ。

座学だけでは実感として分からないものだが、彼女は一々根拠がはつきりしていて分かりやすかった。

「それと、ベル様。これを」

ゴソゴソと懐から白い布に包まれたものを取り出すリリ。

布を解くと中から現れたのは黒色の柄の短剣。

ヘステイアナイフ

セルチ

神様の刃の刃渡りが20C位だとすると、これはそれより少し大きい50C程の長さ。

形はシンプルな短剣で、バーセラート両刃短剣とでもいうべきものだろうか。

「リリ、これは……?」

「霧が立ち込める10階層ではナイフによる近接戦闘は危険です。ファイアホルト速攻魔法があるとは

言え、対策は必要でしょうから。そもそもナイフと言うものはメインウェポン主力武器として使うべき

ものではありません。大型のモンスター相手ならばこのくらいのリーチがあれば安心です」

「その、くれるんだよね?これいくら位……」

「タダで大丈夫ですよ。リリの我儘を聞いてくださった恩返しみたいなものです」

そういうことなら貰ってもいいのだろうか。

武器と言うのはかなり値の張る物だから、ちよつと恐縮しちゃうけど。

特に、忘れがちだけどここはダンジョンのある街だ。

地上より強いモンスターの凶悪性は他の場所とは比べ物にならない。

上層レベルの武器であっても、業物と言われるにふさわしい武器なのである。

「うまく使えるかな？ ナイフの延長線みたいなものだけど、短剣で戦ったことは無いし」「そこは途中の階層で慣らしていきましよう。ひみつ道具の確認も兼ねて」

一度、鞘から両刃短剣バゼラトを抜いて左右に振ってみる。

ヒュンツ、と子気味の良い音をさせながら空気を斬る短剣は思っていた以上に軽い。

これならば剣を使ったことが無い僕でも振り回されることは無いかも。

剣帯が無いのがネックだったけど、エイナさんに貰ったプロテクターにちょうど両刃短剣が入られる収納スペースがあり、そこに取り付けた。

(これで落とすことは無いよね)

プロテクターに両刃短剣バゼラトを入れた状態で腕を適当に動かす。

……うん、ちよつと重さは感じているけど、動きにくいということは無いかな。

「これだけの準備があれば、ターニングポイントである10階層も危なげなく突破できるはずですよ」

今までのことでリリの目の良さは知っているし、そのリリがここまで太鼓判を押すという事は僕が10階層に挑戦できることは事実なのだろう。

いよいよ大型のモンスターに戦うことになるのかと緊張を感じた。

10階層の大型モンスターはベルにとっても一つのターニングポイントだ。

もし、あの猛牛の影を感じて竦んでしまうようならば僕の冒険者としての道のりは確実に遠回りする。

最短で憧憬との距離を縮めたい僕としてはそんな足踏みは困るのだ。

(でも、リリが突然こんなことを言うなんて珍しい気がする)

リリはどちらかと言うとエイナさんのような慎重に事を進めるタイプだと感じていた。

準備を入念に行つて万が一の可能性を一つ一つ潰していく。

そんなリリから10階層に行こうという提案は僕の予想外の言葉だった。

提案するにしてももつと時間に余裕を持った状態で提案してくるものだと。

そんなに僕は自分の適性に合わない狩場でくすぶっていると思われたのか。

(それとも……何かあった?)

団員が一人しかおらず、神様自体かなりルーズな「ヘスティア・ファミリア」ではあまり実感しにくいのが、基本的に探索系のファミリアには団員たちに対して一定のスコアをノルマとして課しているのだと言う。

「ソーマ・ファミリア」のノルマを確認する日が近いのであれば、サポーターであるリリの稼ぎが目標数に達していないのかもしれない。

お金のことからリリは正直に言えず、より高純度な魔石が手に入る10階層へ進出

しようと思案したのではないだろうか。

もしそうなら、リリが稼げなかった原因の一端は事件に巻き込まれて暫くダンジョンに行けなかった僕にもある。

何とか協力してあげたいが。

「……ベル様」

「な、なに!?リリ!」

「なんでそんなに驚いているのですか?」

リリがお金で困っているのかもしれない……とは流石に言えず、愛想笑いで誤魔化す。

リリは少し訝しげだったが、一つため息をついた。

「まあ、いいです。ベル様の事ですからまたしようもないことを考えていたのでしょう」  
出会ったばかりの頃に比べて大分遠慮がなくなつた気がする。

こう言う対応になるくらいには色々やらかしちやつたのは否定できないけど。

「ベル様は後悔してませんか?」

「?……何を」

「リリをサポーターにしたことをです」

本当に今日のリリはどうしたのだろうか。

何かあったのかと聞きたかったが、真剣な顔でこちらを見つめるリリを前に話を逸らすことは出来なかった。

「ないよ。後悔なんかしてない」

「……」

「リリがいなかったら、とても10階層になんて行けなかったし、もしかしたら今も7階層から先にいけなかったかもしれない。今の僕があるのはリリのお陰なんだ」

「言い過ぎですよ。ベル様なら1人でもそれくらい階層に到達しました」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、僕はリリがいたからこそここまでこれたんだと思ってるよ。大袈裟かもしれないけど、リリとならどこまでも行けると思うんだ」

嘘偽りない言葉を口にする。

出会ってまだ数週と言うのが信じられないくらいにこの少女に救われた。

リリへの恩は両手じゃ数えきれないほどある。

この出会いを後悔することなんてきつとこの先もないだろう。

「それを言ったらリリはどう思う？僕と契約して後悔はなかったの？」

「ありましたよ……もつと早く出会えていたらって」

「え？」

「きつと凄く楽しかったでしょうから」



やっぱりおかしい。

きつと楽しかった何て言っておいて何故そんなに辛そうな顔をしているのか。ずつと感じていたリリとの心の距離。

今まで漠然としていたそれを明確に意識した。

「リリ……」

「さあ、日が沈むのは早いですしそうと決まれば早速準備しましょう!!」

その感覚を言葉にするために口を開いたが、リリはいつもの口調で話を打ち切った。まるで、その先を拒絶するかのよう。

逃げるように離れていくリリに僕はなにも言えなかった。

何か、大切な機会を逃してしまった気がする。

この話を後で蒸し返そうにも、もうこの話をリリはする気がないだろう。

(気のせい……だよね……?)

胸に芽生えた不安から逃避するように、僕はリリにもらった両刃短剣バゼラットを握りしめた。

『リリとならどこまでも行けると思うんだ』

まだ朝日に照らされていない「アイアム・ガネーシャ」の西側の通路の端。  
ひんやりとした夜の名残が残るその場所に少女はいた。

太陽の光を直接受けることのないそこで、少女は影の内に浸る。

この闇が弱くなってしまった自分の心を覆い隠してくれると信じて。

「リリもですよベル様……」

団員も滅多に通らない通路で、少女は小さく呟いた。

その口元に悲しげな笑みを浮かべながら。

泣きそうな瞳は窓の外に映る、誰の手入れも受けていない雑草が伸び放題になった庭にたたずむ、葉っぱ一つもない木を見つめていた。

## 霧に消えた絆

ダンジョンのモンスターが生まれる頻度は階を下るごとに多くなる。

下級冒険者が主戦場とする上層でも、到達階層を無理に増やした結果、パーティーの許容量を超えてしまい壊滅することがあるのだという。

だから新たな階層では、それまで以上警戒をもつて探索を進めなくてはならないとエイナさんには度々注意を受けていた。

(けどどつ、いくらなんでも多すぎる！)

「ヒイエー！」

「ヒギヤツ」

ゴブリンに似た体格のモンスターたちに囲まれる僕は困惑を隠せなかった。

上層後半に現れるこのモンスターの名はインプ。

10階層以下にも低確率だが出現することがあるモンスターだ。

その特性は数の暴力……だがこの数はいくらなんでもおかしい。

インプの群れは精々5体程度のはず。

しかし今、ベルの前にはざっと見て20体近くの群れがいる。

霧に隠れている個体も含めればおそらく実際にはそれ以上。

「坊主！まだ持ちこたえられるか！」

「はー！」

霧の奥からハシャーナさんの声が聞こえた。

今日の護衛役として一緒に来てくれていたハシャーナさんは現在、何者かの襲撃を受けていた。

ちらりと見える複数の影はどれも僕より強い器の昇華を果たした眷属。

レベル2以上はいないようだが、それでも複数人ならばレベル4のステイタスを持つハシャーナさんと言えども簡単にこつちに来れない。

分断された。

あの襲撃者たちが僕を襲って来ない。それはつまり、初めからハシャーナさんと僕を引き離すのが目的だったという事。

つまり、狙いは護衛されていた僕かりり。

先日も散々ひみつ道具を使ったことから言って恐らく僕が狙いだろう。

(……っ！リリは何処に……!?)

インプたちに対処しているとリリをいつの間にか見失っていた。

本当に忽然と姿を消したのだ。

「リリっ何処にいるの!?!せめて返事して!!」

既に手遅れなのではないかと言う嫌な考えを振り払うように叫ぶ。

大丈夫。ひみつ道具を持っているのはリリだ。

今日のひみつ道具の中にモンスターを殲滅できるものはないが、【かくれん棒】なら潜伏<sup>ハイド</sup>することでインプたちをやり過<sup>ゴ</sup>ごせるはず。

それにリリは頭がいい。使い方が分からなかった【親友テレカ】や【夢破壊砲】をこの土壇場で使いこなして逆転してくれるかもしれない。

胸の内に広がる霧<sup>もや</sup>のような予感から眼を背け、半ば彼女を盲信した。

だから、こうなることは必然だったのだろう。

ガラッ、と何かが転がる音がした。

この甲高い音は木製の棒だろうかと思つた瞬間、慌てて音がした方向を振り返る。

音は上方、僕たちが9階層から降りて来た階段がある場所。

目の前にそびえ立つ断崖の上にリリはいた。

彼女の手元から棒が転がり、崖下の僕の近くで音を立てて落ちてくる。

混乱する頭のどこかで、かくれん棒を連続して使つてリリはあそこまで移動したのだと悟つた。

「終わりにしましよベル様」

「何を……!?!」

「もう、限界だったんです。初めからここはリリのいるべき場所じゃなかった」

表情を変えることなく、平坦な声でリリは僕に話しかけた。

霧に隠れたその目元はどんな風に僕を見ているのか。

「ベル様。ベル様はずっと綺麗なままでしたね。薄汚れたりリリが惨めになるくらいに」

「何?!?!何を言っているの?!?!」

「リリたちは出会うべきじゃなかったという事ですよ」

状況が上手く呑み込めない。

リリが言う事がちつとも理解できない。

一体、何が起きているんだ。

「巷で最近話題になってませんか? 冒険者様方から装備や金品を盗む、手癖の悪いバルウム小人族のことが」

「……!?!」

「それがリリです」

確か、リリとサポーター契約するかエイナさんと相談した時にそんな話が。

ならやつぱり、リリは初めから僕を騙すつもりだった?

「随分と良い物をお持ちでしたから、どれを頂くか随分悩みました。そうしていたら

つの間にやら「ガネーシャ・ファミリア」に接近していて焦りましたよ。おかげで十分な吟味もできず適当な物で妥協するしかありませんでした」

おかしい。何かがおかしい。

ひみつ道具のことなんて初対面の時のリリがどうして知っていた？

「ガネーシャ・ファミリア」を警戒するなら何故僕と契約した？

何よりも……

「……用済みです。ベル様」

その声が震えているように聞こえるのは気のせいか。

無表情の仮面が濡れているように見えるのは、霧が見せる錯覚か。

足元に転がる、この窮地を切り抜けられる有用なひみつ道具は何のために。

ベルはリリについて多くを知っているわけではない。

けれど、サポーター契約をしてから、絆と呼べるものが二人の間に出来ていたと思っ  
ている。

だから、分かってしまう。

あれは、リリの本心ではないと。

そこにいるのは少年を弄んだ悪党ではなく、救いを求めている灰被りの少女だと。

これは決して勘違いではないはずだ。

「さようなら」

だから行かないで。

分かっているから、それが演技だつてことくらい。

君が今、苦しんでいるんだつてことは、君が隠していても伝わってくる。

だから、行かないで。

けど、僕の想いは届かない。

僕の前に夢破壊砲が投げ出された。

「……ありがとう」

小さく呟いた彼女の言葉。

掠れるような声はきつと彼女が伝える気がなかったものだろう。

この距離ならベルには届かなかつたはずだ。

だが、聞こえてしまった。

落ちてきた夢破壊砲にインプたちが怯えて距離を取つたからかもしれない。

しかし、何故聞こえたかはベルにとってどうでもいいことだ。

彼女の本心が垣間見えたことこそ彼にとって重要だつたから。

「待つて!!?リリ!!」

霧の中に消えていった少女を追いかけようとするが、インプたちが獲物をむぎむぎ逃



がすわけがない。

「つ邪魔だ！」

ここまでモンスターに怒りを覚えたのは初めてだった。

怒鳴り声と共に両刃短剣バゼラトで瞬く間に切り捨てる。

3つの潰れた犬のような醜悪な首が宙を飛ぶ。

だが、殺された同族になど目もくれずに残る十数のインプは僕に殺到した。

これがモンスター。

決して情を持たず、生まれたときから持つている人を殺すという唯一つの使命にのみ命を捧げる人類の天敵。

全く思うように進めない中、ベルの耳は重厚な足音を拾う。

「オーク!?こんなときに!」

恐れていた大型のモンスターがよりによつてこんな状況で現れる。

いや、きつとこれは偶然じゃない。

この襲撃はリリ……その背後にいる誰かが仕組んだものだ。

あまりにも逃亡するリリに都合がよすぎる。

(手元にあるのはかくれん棒と夢破壊砲。だめだ、役に立たない!)

かくれん棒は姿を消せるひみつ道具だが、石ころ帽子のように相手の認識から消える

ことができるわけではない。使ったところでこの数のモンスターを欺けるはずがない。夢破壊砲に至ってはどんな能力なのかもわからないのだ。それを呑気に試していたらリリに追いつけなくなる。

「すいません！僕、行きます！」

「おい、ベル!!勝手に動くな!!」

霧の奥からハシャーナさんの声が聞こえるが、止まるわけにはいかない。

リリがいなくなる。もう、会えなくなる。

そう考えるだけで心臓の動機が速くなった。

(一か八か!!)

尋常ではないインプとオークをまともに相手していたら確実にリリに撒かれる。

ここでやるべきは殲滅ではなく突破。

敏捷逃げ足の速さには自信があるんだ。やってやる。

「ブゴオオオオオオオツツ!!」

オークが雄叫びと共に棍棒を振り下ろす。

セオリーならば大きく距離を取るのが吉。

だが、今回はそれをあえて無視する。

エイナさんの講義は一般的なモンスターの対処法だけではなく、限られた状況下での

対応も含まれた。

例えば、広く回避するだけの空間スペースが無い場合。

その場合は逆にオークに接近することもありなのだという。

鈍重なオークと長い棍棒は一動作ごとの動きが遅い。紙一重で回避すれば、ピンチは絶好のチャンスに変わるのだ。

リスクは大きいからおすすめてはできないと言っていたが、その動作の隙は逃走のチャンスでもある。

振り下ろされる棍棒をギリギリで回避。

地面に着弾した棍棒を足で踏み、二撃目を封じる。

棍棒にかかる抵抗に思わず前のめりになるオーク。

僕はその隙を逃さず、棍棒を踏みつけにした足でオークの腕を駆け上がり、跳躍した。

「ピギイ!?!」

「ゲブオア!?!」

モンスターの驚倒が僕に殺到するが、気にする余裕はない。

オークを踏み台にして、モンスターたちの包围網を飛び越して疾走、リリが立っていた9階層への階段前に到達する。

「リリっ、リリ何処!?!出てきてよ!!」



なった場合に備え、モンスターが出現しにくい通路ルートを持つているものだ。リリは自分の活動範囲である1〜1階層までの地図マップを網羅していた。それを使う際の逃走の対象はモンスターより冒険者の方が多かったが、全て予定通りだった。

ハシャーナはあの程度の襲撃ならば護衛対象を守り切れる実力者だが、時間稼ぎに徹した上級冒険者相手では瞬時に対応することは流石にできない。

それでも、あのままならばベルとリリに合流することは問題なかった。リリが自分からあの場を離脱しなければ。

『すぐに戻ってくるように』

それがザニスからの指示だった。

『ガネーシャ・ファミリア』の保護対象であるベルを標的としたリリの八つ当たりの不味さによろやく気が付いたらしい。

今まで余裕ぶっていたあの男もついに団長命令でリリを帰還させた。

ついでにひみつ道具を奪うようにとも指示があった。

何故ザニスがそれを知っているかは簡単だ。リヴィラにいた冒険者がどこかで喋ったのだらう。冒険者の口の流石ともいうべき軽さである。

あまりにも馬鹿馬鹿しくて、最も役立ちそうにない親友テレカを盗んで来てやった。

本当はこのまま「ガネーシャ・ファミア」に全てを話して保護してもらおうのほうがいいだろう。

多少なりとも親交を深めたりりの言葉ならば無碍にはできないはずだ。

ただ、ザニスがそんなものでどうこうならないという確信もあった。

保身に長けたあの男の尻尾を掴むのは至難の業だ。

神酒ソルマから醒めた木っ端団員の告げ口程度、予想していないはずがない。

一時的に「ソーマ・ファミア」にダメージを与えても、待っているのは裏切り者への制裁だ。

それが自分だけに向くならいい。矛先が向くのが「ガネーシャ・ファミア」ならば心配するだけ無駄だろう。

だが、それがベルに向くかもしれないと思った時、心臓が凍るような気持ちになった。ベルではきつと抗えない。

オラリオに來たばかりの世間知らずの彼は、何人もの人々を食い物にしてきた「ソーマ・ファミア」の闇に對抗できない。

強力なひみつ道具を持つベルだが、彼を攻略することは実は簡単だ。

外れのひみつ道具を持ち合わせた状態になるまで継続して彼を襲えばいい。

損害を無視すればそれが最も簡単にベルを害せる方法だ。

通常ならば無茶を言うなどとなるが、神酒ソーマに魅了された多数の冒険者を擁する「ソーマ・ファミリア」ならばそれが出来てしまう。

あの少年をそんな未来に導く位ならば、諦めてザニスに降るほうがいい。

(いや、これは言い訳ですね)

リリは自分の最もらしい言い訳を否定する。

その危惧があるのは事実だが、全てではない。

これだけならば手を尽くせばどうにかなる問題だ。

本当にリリが恐れているのは神酒だ。

これまでリリの人生を散々滅茶苦茶にしたソーマの神業だ。

リリは怖い。

またあの酒を飲まされて、餓鬼に戻る事が。

胸に芽生えた温かなものを忘れ去って、欲望に満ちた醜悪な顔で彼を傷つけてしまう事が。

あれは本当にそうできてしまうから。

既に記憶に微かしか残らない幼少の頃、顔も思い出せない誰かの温かさを欲望に負けて放り投げたりりだから、同じことを繰り返してしまうのが怖い。

だから、別れた。

ただの泥棒になって、彼を裏切ったのだ。

彼のことを見下す最低の小人族バルウムが勝手に離反しただけならば、彼の心は一時的には傷つくかもしれないが、いつかはそんな子悪党を忘れ去って、少年に相應しい真つ当なサポーターと出会えるはずだ。

(なのに……最後の最後で失敗したなあ)

つい、言葉が零れてしまった。

弱虫のりりの素顔が最後の最後で押さえが効いてくれなかったのだ。

声は届いていないはずだが、違和感を持たれたかもしれない。

弱くなったのだろう。

一人だった頃とは違い、ベルと出会ってりりは弱くなった。

もう、かつてのようにはなれない気がする。

(でも、戦わなきゃ)

少年が傷つくのが怖い。

神酒に再び囚われるのが怖い。

だが、それでまた「ソーマ・ファミリア」に支配されるのは違うはずだ。

例え相應しくなくても、自分はベル・クラネルのサポーターだった。

短い時間だけど何度も見てきた。



自分より遙かに強大な相手を恐れながらも、ちっぽけな勇気で抗うベルを。

震える手でリリを守ってくれた、英雄の卵の小さな戦いをずっと見てきたのだ。

ザニスはリリをよく分かっている。

臆病で、卑怯で、姑息で、見苦しい。

救いようのない最低の小人族バルウム。

だが、このことだけは予想外だったはずだ。

英雄になりたい、なんて少年の夢物語が好きになってしまったこの愚かさだけは。

この愚かさでいつか必ず神酒ソーマの呪縛に打ち勝つ。

残る生涯全てを使ってでも、「ソーマ・ファミリア」を終わらせる。

そうして、命を使い切って終われば、少しはましな結末になるだろう。

(……そういえば、死んだら天界で魂は浄化されるんですね)

子供の頃、そんな話を聞いて死ぬのに憧れた。

今は間違っても自分から死のうとは思わないが、ふと考える。

もし、全てをやり遂げてこの薄汚れた魂が浄化されたなら。

自分は彼に胸を張って会いに行けるようになるのかと。

無論、自分が転生した頃にはベルも生きてはいないだろう。

だが、いつかの未来で二人の魂が再び出会う事があるかもしれない。

そうなれば今度はこの胸に秘めた想いを口にするのも許されるのではないか……  
あまりにも都合のいい夢に小さく笑う。

そんないつかはきつと来ないけど、少しだけ救われた気になってリリは詠唱<sup>別</sup>を告げる。

「貴方の刻印<sup>きず</sup>は私のもの。私の刻印<sup>きず</sup>は私のもの」  
さようなら。

貴方に出会えてよかった。

灰被りの膜<sup>ツエール</sup>を纏い、もう会うことは無い想い<sup>ペ</sup>人の笑顔<sup>ル</sup>を脳裏に浮かべる。

「——シンダー・エラ」

そして、リリルカ・アーデはいなくなつた。

## 無力の代価

街を彷徨う。

あの栗色の髪を探し、当てもなく広大な迷宮都市を歩き続けた。

数多くの種族が姿を見せるこのオラリオでも、他種族に比べて体格が劣る小人族は目立ちやすい。

だから、いなくなってしまう彼女の姿もどこかにはないかと期待して、けれど、そんな微かな願望が叶うことは無かった。

あの日から僕はずっとリリを探し続けている。

きつともう彼女は姿を見せないだろうという予感から眼を背けながら。

『リリルカ・アーデ氏が所属するファミリアはね、語弊を恐れずに言うならオラリオでも屈指の歪みを持つ派閥だった』

先日、エイナさんが伝えてくれた情報が脳裏を過る。

神を敬わず、神が作り出した神業の酒を信仰する狂気のファミリア。

それがリリが所属していた「ソーマ・ファミリア」の正体だった。

『神ソーマに派閥を統率する意識はなくて、実権は殆ど団長のザニス・ルストラ氏が握っ

ているみたい。団員たちは過酷なノルマと引き換えにザニス団長が与える神酒ソーマを奪い合っているんだって』

あまりにも「ヘステイア・ファミリア」とかけ離れた神と眷属の関係。

理解なんかできなかつたし、したくもなかつた。

そんな過酷な生存競争の中、冒険者として芽が出なかつたりりはどんな扱いを受けていたのか。

それを思うと震えが止まらなくなる。

自分の傍にそんな恐ろしい世界があつたなんて気が付かなかつた。

……いや、気付こうとしていなかったのだろう。

ヒントはいくらでもあつたはずだ。

記憶の中にあるリリとの何気ない会話。

その中で僕は何度もリリに違和感を覚えていた。

その違和感を解いていけば答えに辿り着けたはずだったのに。

追求しなかつた。

無理に聞くものじゃないなんて分かつたようなことを口にして、リリが伝えてくれることを待った。そんなに簡単に話せることなら、そもそも隠したりするはずがないのに。

『これは想像だけどアーデ氏はファミリア内ですつと搾取される存在だったんだと思う。調べたら同じ「ソーマ・ファミリア」内の団員でも、冒険者とサポーターには明確な格差が存在しているみたいだから』

その結果がこれだ。

リリは何も話すことなく去って行った。

泥棒の仮面を被りながら。

どうしてこうなったのかと自問すれば、出てきた答えは単純だった。

弱いからだ。

ひみつ道具がなければ何もできないくせに、それを自分の実力だと勘違いした愚か者が、そのスペック通りの結末を迎えただけ。

あまりにも下らない答えに笑いたくなくなった。

ひみつ道具ありきの冒険者になっちゃいけないなんて言っておきながら、心の何処かでひみつ道具があるから大丈夫だと慢心していたのだ。

だからもし失敗しても取り返しがつくと錯覚してしまった。

今まではただ運が良かっただけという事を都合よく忘れて。

『……その団長の人を捕まえることはできないんですか』

『できないと思う。神酒ソーマは麻薬とかじゃなくて、ただ単純に美味しいお酒だから違法性



「……うん。ちよつとベルの言う小人族バルウムの女の子には心覚えが無いかな」  
「……」

ベルの状態があんまりにも変だったのか、「ミアハ・ファミリア」のホームである「青の薬舗」に上げられ、ナーザーに話を聞いてもらっていた。

あまり期待はしていなかったが、今日何度目とも分からない外れにやはり気落ちするのは避けられない。

「でも、そつか。ベルはその女の子を……」

「リリはきつと苦しいと思うんです。じやなきやあんな顔をするはずがない」  
最後に見せたリリの無表情。

それが感情を抑えているが故のものであることは、あの時の会話や行動から簡単に理解できた。

だから、助けてと言ってくればよかったのだ。

行ってくればベルは喜んで力を貸したのに。

「僕がもつと強ければ……早ければ。リリに追いつくことだつてできたかもしれない」  
「……」

一度蓋を開けてしまえばベルの口はもう止まらなかつた。

ずっと心に秘めていた抑圧していた感情が、堰を切つたように溢れ出す。

「ホントはこのままじゃダメだつて分かっていた。分かっていたんです。でも、ならどうすればいいのかが全く分からなくて。何もできないまま時間ばかりかけてしまっていたら、ドンドン新しいことが積み重なってしまって。それでも全部、全部抱えようとしたら手が回らなくなっていくって……もう、どうすればいいか分からない……」

ベルの吐き出す言葉をナーアザは静かに聞いていた。

いつものように感情が読み取りづらい表情のまま、決して口を挟むことなく。そして、全てを言い切ったベルが俯くと、用意していた飲み物に持っていたポーシヨンを混ぜる。

「ベル。まずは飲んで」

「……?」

「マジックポーション精神力回復薬を入れた。一旦これを飲んで喉を潤すと良い」

脈絡のない言葉に戸惑うベルだったが、ナーアザに言われるがままに飲み物を飲み干す。

水で薄まった柑橘色の色合いは、魔法を最近使えるようになってからよくお世話になっっているものだ。

「あの、これは?」

「落ち着いた?」



「あ、はい」

というより困惑で頭の熱が引つ込んだというほうが正しい気はするが。

マジックポーション 精神力回復薬には興奮を抑える作用でもあるのだろうか。

「知らない？ マジックポーション 精神力回復薬を飲むと気分が落ち着くって話」

「は、はあ」

「まあ、迷信なんだけどね」

「………は？」

マジックポーション 精神力回復

はあくまでも魔法を使用する精神力を回復するもので、人の心を癒すわ

けではないのだが、名前が紛らわしいのでそう言った効果もあると勘違いする者も多い

のだとナーザは語る。

「味はジュースみたいなものだから、全く効果はないってことは無いんだろうけど」

「………??？」

「ん。眉間の皺が消えていつものアホっぽいベルに戻ったね」

「ひどくないですか？」

許せ許せと妙に長い裾をフリフリと揺らすナーザ。

いつものようにマイペースな人で思わず流されてしまう。

ただ、いつもと違いその目にはベルを気遣う色が見えた。

(……ひよつとしたら元氣付けてくれたのかな)

素直に感謝したいが、少し冷静になれたベルはもう一度コップに口を付けた。

よくよく考えれば街を適当に歩き回るといふ非効率極まりないやり方だったと思ひ返す。

そんなことに気が付かないほどに思考が狭まっていたらしい。

「それで？ 落ち着いたベルはここからどうする？」

「……リリを探そうと思います」

「当てはないんでしょ？」

「ソーマ・ファミリア」の近辺を探ってみます。リリが立ちよる可能性があるところがそこ以外に考えられないですから」

死んだことになっているが、本当は生きていると仮定した時。

暫くはファミリアに隠れているという可能性がもつとも高いのではないか。

ファミリアのホームではなくても、酒造をしている「ソーマ・ファミリア」ならば酒蔵なども候補になるかもしれない。

そうして張り込み、聞き込みを続けていけばリリが見つかるかもしれない。

そうして時間が経てば、役に立つひみつ道具が出てくることだって……

「それで？」

「え?」

「見つけてどうするの? 一度逃げた娘が素直にベルの話を知るとは思えないけど」

全く考えていなかった指摘に言葉を詰まらせる。

リリを見つけることばかり気にして、その後どうするかまで考えが及んでいなかった。

動揺するベルを見て、ナアーザは大きいため息をつく。

「考えなし」

「うう……」

ストレートな言葉に反論できない。

「でも、見つけた後どうすればいいんでしょうか」

「話を聞いただけじゃ二人の関係はよく分からないけど……まずはもう逃げないように説得するべきだと思うよ」

「説得?」

「そう説得。何て言うか、話を聞いているとそのサポーターの娘は一見計算ずくで逃げているようで、結構感情的になっている気がするから」

最後の最後に言葉をこぼしたことや、かくれん棒を態々返したことがその証拠だという。

自分を律しようとして、ギリギリのところまで失敗しているのではないかとナーアザは予想した。

「そ、そうなんですか？リリは凄い頭がいいし、感情に振り回されるなんて……」

「頭の良さと感情を分けることは別だよ。むしろ頭が良いせいで感情的な行動を無理矢理合理化しようとしてこんがらがってるんじゃない？」

リリはいつも冷静沈着というイメージを持っていたベルからすれば、リリが感情に振り回されるどころなど俄かには想像しにくいのが確かにリリの行動は整理すると滅裂だ。

「でも、それなら説得はやっぱり難しいんじゃない」

感情的なものが原因ならば聞く耳を持つてもらえる気がしないが。

だが、そんなベルの考えをナーアザは否定する。

「逆。もしそのサポーターが感情的になっただけで、自分でも制御できないくらいに暴走しているなら。その感情に訴えかければいい。知的な説得よりよっぽどベルに向いてる」

「感情に訴えるって言ったって、どうすれば」

「ベルが思っていることをそのまま伝えればいい。その娘の力になりたいって」

それだけでいいのだろうか。

ベルにはリリの事情など分からない。

そんな人間の言葉が彼女に届くのだろうか。

「さあ？」

「さあつて……」

「話を聞いただけじゃ私には分からないことだらけだし、そもそもそのサポーターが普通に泥棒したのをベルが現実逃避している可能性だってある」

ナーザはそこで一旦言葉を区切る。

この件に関してナーザは徹頭徹尾部外者だ。

そもそも問題の中心である小人族バルウムの姿すら知らないのだから。

ただ、ベルの話を聞けば分かることもある。

「でも、二人はまだぶつけ合っていないでしょ？自分たちの想いを」

「……」

「まずはそこから始めないと、どの道説得なんてできないと思う」

それは単純なことだった。

きつと聞いた多くの人が「そんなことか」と笑うような当たり前のこと。

だが、ベルとリリは一度も自分たちの想いを見せてはいなかった。

ベルは伝えるようなことではないと思って、リリは伝えるべきではないと戒めて。

心の奥底を曝さらけ出すことなくあの関係に落ち着いていたのだ。

（そっか、僕たちはスタートラインにすら立っていなかった。それじゃあ上手くいくはずがない）

リリとの関係が居心地よくて踏み出すことができなかつた本音。

それを聞かない限り、説得なんて到底不可能だ。

伝えよう、この胸にある想いを。

彼女が胸に秘めたままの想いを引き出すために。

「ありがとうございませう。やるべきことが見えた気がします」

「私は大したことを言つてない。お礼も必要ないよ」

ベルはナアーザに頭を下げる。

ナアーザは大したことは無いと言うが、あのままリリを見つけても、どうするべきか答えを出していなければ説得などできなかつただろう。

ベルがアドリブで他者を説得できるような文句を思いつける訳がないのだから。

「ご馳走さまでした。また、リリを探しに行こうと思います」

「うん。頑張つてね……あ、飲み物に使つた<sup>マジックポーション</sup>精神力回復薬代は払つてね」

「あれ有料なんですか!？」

最後にちやつかりとお金を巻き上げるナアーザに苦笑する。

リリがいなくなつてからずつと張りつめていたからか、こんなことでもおかしくてた

まらなかつた。

コップの中身を全て飲み干すとベルは、今もオラリオのどこかにいると信じている少女に誓う。

(きつと見つけ出すからね。リリ)

空は曇天のまま、雲はいつ晴れるかは分からない。

それでもあの鈍色の空の向こうに光は確かにある。

そして必ず、灰被りの少女を温かく照らすのだ。

## 君を呼ぶ声

しんしんと雨粒がフードを濡らす。

目を凝らさなければ雨粒は見えず、まだ濡れているという実感はさほどないが、空を覆う雨雲を見るにすぐにも大雨が降り注ぐだろう。

早朝の人々が活発に動き出す時間帯に湿った空気は中々嫌なものだ。

小人族<sup>バルウム</sup>であるリリにとっては、他種族は全て自分よりも一回りも二回りも大きな存在である。

雑多な人の波の真っ只中はじんわりと暖かく、少し息苦しい。

だがこの有象無象の中になれば彼が自分の姿を見つけることは無いだろう。何せ今の自分の姿は小人族<sup>バルウム</sup>ではなく妖精<sup>エルフ</sup>だ。

〔シンダー・エラ〕の変身は本物さながらにリリの在りようを捻じ曲げる。

エルフの特徴でもある長耳は触ったとしても紛い物だとは見破れない。

リリのトレードマークにもなっていたあの大きなバッグパックも持っていない今、今のリリを見ても小人族<sup>バルウム</sup>のリリの姿を想起することは不可能だ。

(……見つからないようにするためなら一度ベル様に見せたこの姿でいる必要はないの



に)

武具店のショーウィンドウに映るその姿は金髪のエルフ。

ベルの本心を確かめようと……今にして思えば絆される心を必死に否定しようとしていたあの日に変身した姿だった。

リリの「シンダー・エラ」の効果は絶大だ。

リリがイメージできるものである限り、体格を大きく逸脱しなければ何にだって変身できる。

それこそ、冒険者ですら見抜けないモンスターへの変身すら。

なのに一度見られた姿を使っている理由は簡単だ。

どうも、自分は少年に見つけてもらえらることを心の何処かで期待しているらしい。

(愚かです。ベル様を遠ざけるためにあんなことをしたのに、見つけれたら何も意味がないではないですか)

愚かと言えば先日の自分の行動も全てが愚かだ。

泥棒の仮面も碌に被れず、重要な場面で本音を漏らすという失態。

少年に出会う前のリリが見ればきつと嘆くであろうみつともない姿だった。

あれでもうまくやれていると途中までは本気で思っていたのだから救いようがない。

頭が回ることだけがリリの唯一のとりえだったはずなのだが、それすらも失うなど最

早笑い話だ。

あの少年と契約してから半月もなかったはずなのに、随分と遠い世界に来てしまった気がする。

リリが十数年積み重ねた時間は、ベルと過ごした数週間に比べれば何ということもないものだ。

きつとベルに出会うまでリリの人生は空白だらけだった。

(変な話です。あんなに怖かったザニスとあれっぽっちの思い出で立ち向かえるなんて)

立ち向かう、何て言う**と**強くなったようだが実際は弱くなったのだろう。

感情に振り回されて、一人で「ソーマ・ファミリア」を倒そうというのだ。

勝ち目など全く見えないのに。

頭の中で卑怯者の小人族バルウムが囁く。

諦めてしまえ。

怠惰に運命を受け入れろ。そうすればいつか来る破滅の時までは穏やかに過ごしていられると。

どの道お前は神酒ソーマに敵わない。

今胸に抱く想いも、あの魔性が簡単に塗り潰すのだから。

それでも過酷な破滅に突き進ませるこれは勇気ではなく、無謀なのだ。分かり切った結末敗北に突き進む暴走に酔っている。

恐怖と罪過に雁字搦めに縛られたこの決断は間違いだ。

もつと賢い選択肢は幾つもあった。

(未練がましいですね……本当に)

バルウム小人族は勇気の種族だと誰かは言った。

それに対し、リリはそんなはずはないだろうと否定する。

もしそうなら、リリはこんな惨めなりりになっっていない。

少年たちと一緒に綺麗な所にずっといることができたはずだ。

リリは何処までも薄汚れた泥棒だ。

自由のためと信じた過去の行いにいつかは苛まれる。

故に清算しなければならぬ。

これまでの過ちを。

(もし、リリが自首をして今までであったことを洗いざらい話しても、ザニスは逃げられる)

ザニスの恐ろしいところは、ギルドに「ソーマ・ファミリア」が素行の悪いファミリアだと思われながらも「この程度ならば放置して良い」と思わせる線引きの上手さだ。

犯罪者一步手前のよくある冒険者崩れのたまり場というのが、世間一般における「ソーマ・ファミリア」のイメージだと言える。

実際は闇派閥イウイルスに名を連ねてもおかしくないほどに危険なファミリアであるにもかかわらず。

断言しよう。

神酒の情報をギルドに与えても、ギルドはその危険性に気が付かない。

アルカナム神の力を使用しているのなら分かりやすかつたが、ソーマは零能の身。

スペック的には一般人以下の能力しかないのだ。

つまり、人を惑わすあの酒は真正銘技術の産物。

その脅威を理解できる者がどれだけいるか。少なくとも書面だけでは分からない。

仮に分かる者が現れても危険視されるのは主神ソーマであり、ザニスはその陰に隠れて暗躍を続けるはずだ。

〔ソーマ・ファミリア〕を、ザニスを終わらせるためにはもつと決定的な証拠が必要になります）

そのためにリリはザニスの走狗に身を墮とした。

ザニスの核心に迫るためには、組織の表層だけではなく、奥底まで見極める必要がある。

ザニスの手足となれば、あの男の致命的な弱みを握ることもできるかもしれない。あの男がそう簡単に手掛かりを与えてくれるとは思えないが。

「……」

雨が強くなってきた。

俄か雨だと予想して傘を持って来なかった人たちが足早にそれぞれの職場に向かう。

民家に降り注ぐ雨音が響く大通りストリートを人々が小走りで行きかう中、思考に没頭する少女

は己の体が濡らされていることにも構わず、先ほどと変わらぬ速度で歩みを進める。

間違っている。

ザニスの手足となるなんて間違っている。

だってそれは、犯罪に身を染めるといふ事だ。

あの荒くれ者が集まる「ソーマ・ファミア」の冒険者たちですら、絶対に関わって

なるものかと恐れるザニスという怪物の暗部。

それは想像を絶する悪行だ。

あの自尊心に溢れた凶暴な本性を知っていれば、それが人の道を踏み外した畜生の類

に堕ちることを意味することは想像に難くない。

いつか「ソーマ・ファミア」を終わらせる。

そのいつかの前にどれだけの犠牲の山を築き上げようというのか。

リリは今まで殺人を犯したことは無い。

それはリリの良心が咎めたと言うワケではなく、単に冒険者たちがしぶとくて潰しきれなかったからだだが、そんな風にズルズルと最期の一線を超えなかったのは、そこまでする必要に駆られることがなかったからだろう。

だが、ここからはリリのエセ盗賊業とはワケが違う。

もう殺しきれなかったから殺さなかったが通じる甘い世界ではなくなった。

近いうちに必ずその手を血に染める時が来る。

そうやっていくつもの屍を超えた先に得た結末に、どんな意味があるのか。

心の奥底で悲鳴を上げる泣き虫の少女はそう叫ぶ。

ベルと出会って気が付いた弱い自分が、最後の最後で躊躇する。

(でも、だったらどうしろというのですか！)

仮にベルたちに全てを打ち明けて正規の方法で「ソーマ・ファミリア」を攻略しようとする。

ある程度は通じるだろう。

ファミリアの活動は大きく制限されるだろうし、分かっている犯罪行為だけを引っ張り出せば、団員たちを削ぐことだって可能だ。

だがそこで終わり。

人の心を狂わせる神酒が全てを御破算にする。

あれはもはや理を破壊する反則だ。

法も、駆け引きも、あれさえあればいくらでも捻じ曲げられる。

あの神は盤外から勝負を有耶無耶にしてしまえる駒を作り出す。

その手札をザニスは最大限有効に使うはずだ。

上級冒険者は惑わされないという話だが、それは十年近く前の話。

派閥の管理も放り出してひたすら酒を造り続けるあの神が、その領域のまま止まっているとは考えにくい。

最悪の場合、上級冒険者どころか神すら酔わせる酒を作り出してもおかしくはないのだ。

(きつとハシヤーナ様辺りが聞けば話が飛び過ぎていると笑うでしょうね)

これは神酒ソーマを経験してなければ分からない。

こんな冗談のような使い方が本当にまかり通るから、ソーマは酒の神なのだ。

【ソーマ・ファミリア】を倒すならば迅速に。

反撃の隙も与えずに畳みかけなければならぬのだ。

手順を踏まなければならぬ正攻法では、ザニスの逆転の手を完全に封じることが不可能だろう。

他ならない秩序ガネーシャ・ファミリアの守り手だからこそ、「ソーマ・ファミリア」に隙を見せてしまう。

上級冒険者ですらないベルはそもそも論外だ。

間違いなく神酒の虜にされてしまうだろう。

だからリリは毒になる。

「ソーマ・ファミリア」全体に根を広げ、気が付いた時には手遅れという状況を作り出す。

それがリリの唯一できる戦いであり、最適解。

(勝率は0に等しいですが)

それでも、これならばベルたちに被害は及ばない。

成功すればオラリオから膿が取り除かれ。

失敗すれば馬鹿なサポーターの屍がさらされるだけ。

今更裏切った冒険者を思い続けているなど、あの金勘定が大好きな男には絶対に理解できない。

だからベルにザニスの牙が向くことは無い筈だ。

それなのに。心の慟哭は止まらない。

それでいいのかと胸に浮かぶ問いかけは消えてくれなかった。

だがどうしろというのか。



既にリリは選択した。

少年の下から去り、闇にこの身を浸すという選択を。

それを忘れてどうするのだ。

迷いは致命の隙を生み出す。

悪魔との戦いに、そんな余分なことを考えている暇はないのだ。

そう言い聞かせても、心の中の少女は泣いたままだった。

萎れた花を腕に抱く幼い少女の声はずっとリリを苛んでいる。

それで本当にあの人たちに誇れるの？

(でもリリにはこれしかないんです。こうする以外にやり方なんて知らない)

馬鹿のように泣きわめいて、ベルの助けを求められたらどれほど良かったか。

だがそうすれば、ベルにどんな苦難があるか。リリにはよく分かった。

あの優しすぎる少年は必ず、自分がつぶれそうになるまで背負ってしまおうだろう。

ひみつ道具という反則級の手札があっても、14歳の透き通るように綺麗な少年には

酷な話だ。

他者を頼ることを知らない少女は、そう言い訳して少年を遠ざける。

自分が傷つくことはいい。

それでも少年が傷つくと思うと……リリはベルの手を借りようとは考えなかった。

雨はいつの間にか叩きつけるような勢いで地上に降り注いだ。

動物たちにも予想外の豪雨だったのか、先ほどからあちらこちらで猫や犬が視界を横切った。

それに人々が文句を垂れながら駆ける中、リリだけは変わらぬ歩みを刻み続ける。今から向かうのはダンジョンだ。

ザニスは新たな商売としてダンジョン内のモンスターを壁外に売り飛ばす算段らしい。

オラリオはかつて地上に蔓延ったモンスターを大穴に閉じ込めておくことこそ役目。そんなモンスターを態々売買することは間違いないで違反行為だ。

これだけでファミリアを潰すほどのものではないだろうが、手札の一つにはなるかもしれない。

リリに求められた役目は餌だ。

と言っても食われてこいと言われているわけではない。

リリをモンスターに変身させ、それにノコノコ釣られてくるモンスターを他の手下が囲んで捕獲するという事らしい。

通常、モンスターとは同族意識を持たない孤独な生き物だ。

人間を殺す際に同時に襲い掛かることはあっても、連携すること等全くない。

それどころか、人間がいなければ同じモンスター同士で縄張り争いを起こすこともある。

モンスターに化けておびき寄せするなど無意味……そう反論するリリにザニスは語った。

下界の常識から外れた異端のモンスターのことを。

「……そう、ですね。もしかしたらそんなモンスターを知ったから揺らいだのでしようか」

明るみになれば下界の常識が一変するそのモンスターを知り、流石のリリも動揺せずにはいられなかったらしい。

有り得ないものの衝撃に、心が弱ってしまった。

情けないことに、無意識のうちに少年に助けを求めてしまったのだろう。

何て都合のいい女だと自己嫌悪する。

今からそのモンスターを貶めに行くのは誰だ。

最低の選択肢だとは思っていたが、リリはどうやらモンスター以下の屑になるらしい。

コソ泥にはお似合いの末路なのだろう。

自分勝手な小人族パルツムが少年に出会ってちよつとだけまともになり、芽生えた心によつて

自滅する。

趣味の悪い神様ならばニヤニヤとしながら見守りそうな滑稽な物語。

ベチャリと泥が顔にかかった。

大雨の中慌てて走る馬車が泥をはねたのだ。

こちらを確認した商人はフードから覗く長耳を見ると、コソコソと逃げた。

神経質なエルフに時間を取られることを嫌ったのだろうか。

どうせ泥などこの雨ですぐに流されると頓着しなかったりは、ふとギルド前の広場に来ていた。思考に没頭して体がいつも通りのルーチンをなぞっていたらしい。

ベルと契約していたころは、朝早くにギルドのアドバイザーに会うために、ダンジョンに行く前にギルド本部に来ていた。

もう、ベルのサポーターではないのにこんなところに来てしまった。

あの家ホームにいたくなくて、時間より早めにダンジョンに向かっていたが、知らぬ間に大分回り道をしてしまったようだ。

すぐにダンジョンに向かわなければ。

しかしリリの体は動かなかった。

ギルドに来るまでのベルとの何気ない会話を思い出し、足が棒になったように縫い付けられる。

広場で立ち止まるエルフの少女に奇妙なモノを見る視線が送られるが、こんな雨の中にいたくないと人々は次々と道を進んでいた。

雨が少女を濡らす。

フードに滲み込んだ雨水がずつしりと重さを伝える。

下位も下位とはいえ、神の恩恵を刻まれた眷属にはどうという事もない重さがリリをその場から動かしてくれない。

頬をびしゃびしゃに流れていく雨は涙のようで、俯くその姿は帰る場所を失った孤児の様。

こんな大雨の中飛び回るカラスにすら笑われている哀れな迷子。

いつそのまま水に溶けてしまいたい。

弱くなってしまった少女の脳裏に少年との思い出が蘇る。

それは数えるほどしかないのに、何度も、何度も再生された。

「リリっ！！」

だから、最初は幻聴だと思った。

あふれ出す未練が引き起こす現実逃避だと。

けれど泣きそうな声で名前を呼ばれた記憶はリリの中にはなくて、思わず振り返ってしまう。

そこにベルはいた。

魔法で隠されているはずのリリを真っ直ぐと見て。

兎のようにモフモフとしていた髪を少女と同じように泥水で濡らしながら。

正真正銘、リリルカ・アーデに向けてその名を呼んでいたのだ。

## どうかこの手を握って

僕の言葉に振り向いた金髪のエルフの少女。

びっしりと雨に濡れているけどその顔には覚えがある。

とある日に僕にリリの告げ口をした少女だ。

戸惑ったのは一瞬。

だけどその表情の中いつものリリがいる気がして、僕は話しかけた。

「ここにいたんだね、リリ」

「何のことでしょうか？」

「とぼけなくていいよ。リリなんですよ？」

「人違いです。私が振り向いたのは朝から騒いでいる人に驚いただけです」

エルフの少女は認めない。

確かにリリと目の前の少女は種族からして別物だ。

余人が聞けば間違いなく僕が勘違いをしていると指摘されることだろう。

「そうだね。僕の探している女の子は小人族だ。普通を考えればそうなんだけど……」

知ってるでしょ？僕、ひみつ道具を使えるんだ」

「……何のことでしょうか」

僕の揺さぶりに少女は一切動じることなく、怪訝そうな表情を作った。

これが演技だとしたらちよつと困る。

僕には見破れそうにない。

(やっぱり僕に探り合いはできないや)

だから僕は切り札をバッグパックから取り出した。

桃のマークが入った網袋。

中にいくつかの団子が入っているそれを見た途端、少女の反応は劇的だった。

表情を歪めて咄嗟に後ずさったのだ。

「ははっ、タダの団子にそんな風に反応するのは変わってないね……トラウマを植え付けちゃった僕としては凄く申し訳ないけど」

「……っ」

少し前にお尻印のきびだんごをゴブリンに食べさせてしまったあの事件で、リリは団子を見ると過剰反応してしまうようになっていた。

どれだけ別人の演技をしていても、トラウマに対する反応は変わらない。その考えは間違っていないようだ。



「でも大丈夫。これはこの前に出てきた偽物じゃない。正真正銘のももたろう印のきびだんごだよ」

そして、それこそがリリを見つけ出せた理由だ。

このひみつ道具を確認して、まず行ったのはオラリオに生息する野良の動物たちに食べさせることだった。

ももたろうのきび団子は食べさせた動物を懐かせる効果がある。

それを利用するために犬や猫、カラスに団子を千切ったものを片っ端から与えたのだ。

「リリがくれた両刃短剣<sup>バゼラート</sup>。あれに巻いてあった布が手掛かりになったよ」

モダーカさんに聞いた話だけど、獣人の並外れた聴覚や嗅覚を利用して逃亡中の犯罪者を追う捜査方法があるらしい。

獣人に出来ることは動物にもできる。

懐に入れた際に付着したりリリの臭いを動物たちに辿ってもらった結果、動物たちが見つけたのがこのエルフの少女だった。

「ねえ、リリ。聞いて？答えなくてもいいから」

ひみつ道具のおかげで手に入れたチャンス。

これを逃せばもう次はないかもしれない。

だから僕はこの瞬間に僕の中にある全ての想いをぶつける。

「僕にはリリがどんな風なことを思っているのか分からない。君のファミリーアの状況は理解したけど、でもそれだけで全部分かるくらい頭が良くないから」

再びリリと出会うまで、ずっと考えていた。

リリはどれだけ苦しんでいたのだろうか。

彼女の苦しみにどうして気付けなかったのかと。

それに対し、神様は言った。

それは傲慢な考えだと。

人の気持ちなんて聞かなきゃわからないものだから。

踏み込みもせずに読み取ろうとするなんて、彼女とのコミュニケーションを放棄したも同然だと。

その通りだったと思う。

僕は話さなくてもリリを分かっているとうぬぼれていたし、リリに僕の気持ちも伝わっていると言っていた。

でも、そんな筈はない。

人の気持ちを完ぺきに汲み取れるような素質も、経験も、僕にはなかったのだから。

「君の苦しみをどうにかしてあげられる言葉は僕には言えない」

だって何が彼女を苦しめているかは彼女にしか分からないから。それを彼女自身の口から聞く努力を怠ったのは僕だ。

「だから……僕の想いだけを伝えるよ」

結局のところ、ナアーザさんの言う通りなのだろう。

僕の中にある確かな物は想いだけ。

駆け引きではなく、真正面からぶつかることでしか彼女の心を覆う氷を砕けない。

物語に出てくるような主人公のように格好の良い文句何て言えなくて、無様な僕を晒して幻滅されてもこの情けない本音しか彼女に届くものはないから。

「……寂しいよ」

見栄も、意地も捨てて本音を口にする。

リリを見捨てたくない。力になりたいという思いは本当だ。

でも、この胸を貫く虚無感は、リリがいなくなってから感じ続けるこの感情は寂しいと言おうのだろう。

お祖父ちゃんを失ったあの時と同じ熱を失った様に冷たい心臓が、ただ動いているだけなのがこの僕。

「リリと出会って、ずっとずっと楽しかった。大変なこといっぱいあったけど、そんな物を吹き飛ばすくらいに楽しい思い出が詰まっている」

ファミリアは違うけど、僕とリリの関係は凄く温かくて。

激動の日々だったけど、同時にまどろみの中のような時間だった。

ずっと、この世界にいたいと思えるくらいに。

「だから君がいなくなつて寂しかった。世界が急に変わっちゃったと思う位に冷たくて、ふとした瞬間にこの前までのことを思い出して苦しかった」

リリのいない世界は欠けたように歪に見えて、泣きたくなるくらいに冷たかった。

だから、お祖父ちゃんが居なくなつてしまった時のように自分の無力を責めた。

あのときこの手が届いていれば、こんな思いはしなくて済んだのにと。

「……その人のことは知りませんが、どんなに辛い思いをしても時間が忘れさせてくれますよ。裏切つたサポーターの代わりなんて何処にでもあります」

少女はあくまでも他人と言う体を崩さない。

それでも、他人事と捉えるには感情が入りすぎた口調でベルの探し人を侮辱する。

掃いて捨てるほどいるサポーターのうちの一人に固執してるくらいならば、新しい契約相手を見つけてしまえと。

何かを突き放すようにそう告げた。

「それこそ、ギルドにでもいけばもつと信頼できるサポーターを見つけられます。そうではなくても親交のあるファミリアのパーティーに同行すると言う手段なら、サポーター

どころか戦力になる仲間を見つけれられますよ」

フードで自分の顔を隠しながら、少女はそう続ける。

少女が心の中で何を感じているかは分からない。

だがベルは何となく泣きそうになっているんじゃないかと感じとる。

だから、ベルはもつと馬鹿になることにした。

「やだ」

「……や、やだ？」

「リリと一緒がいい。リリとじやなきややだ」

駄々っ子のようない分に唾然とする少女。

自分でもかなり恥ずかしい事していると自覚し、耳に熱が集中しているがこうなつたら止められない。

もとよりベルにできることは自分の想いをぶつけることだけ、その為なら恥も外聞も捨ててやる。

「リリは僕のが嫌いになったの？」

「え？ええっ!？」

「僕に悪いことがあるなら言つてよ……ちゃんと直すから……」

「え、あの、そうじゃなくて」

想像もしていなかったであろうベルの言動に動揺する少女。

「そ、そのサポーターは貴方を裏切って……」

「忘れた」

「泥棒ですよ？然るべき罰を……」

「そんなの知らない」

「えっと、そのつ、散々悪行三昧だったサポーターを恨む人が大勢」

「僕には関係ない」

（無敵ですかこの人は!?)

論議をすれば確実に少女が勝るだろう。

だがベルは端から口論をする気はない。

少女が何を言おうと聞かないし、どうでもいい。

ただリリと離れたくないと喚くだけだ。

論理など暴走した感情の前には塵紙に等しい。

ナイナイ尽くしの三流冒険者とは言え、感情の丈ならばベルには誰にも負けない自信がある。

頬に流れるモノが雨なのか涙なのか自分でも分からなくなりながら、抑えていた感情を爆発させた。



はつきり言って疲れた。

ダンジョンの深い階層に初めて行った時のような、ずっしりとした重みが背中にかかっている気がした。もうベッドで寝たい。

ただでさえ気の乗らない仕事なのに、初める前からこんな状態ではさぼりたくなるというもの。

「底辺サポーターのファミリアなんて厄介事の宝庫です。関わらないほうがいいとは思いませんか？」

「知ってるよ。「ソーマ・ファミリア」が怖いとこだってことは。でも、だからこそリリを一人にしたくないんじゃないか！」

ああ、止めてほしい。揺らいでしまう。

彼と離れるべきだと決断したのは自分なのに、また一緒にいたいと思ってしまう。

こんなに縋りつかれたら、仕方ないかな？と流されてしまいそうだ。

これが計算だったとしたら少年はとんでもない女誑しだ。

多分、厄介なことにはほとんど素なのだろうが。

「あの恐ろしい人たちによつて貴方が傷つくのは見たくない……とサポーターは言うんじゃないでしょうか」

「だったら、僕がリリが苦しむのは嫌だって気持ちも分かってよ!!」



本当に恐ろしい悪魔たちの巣窟なのだ。

ダンジョンのモンスターよりも醜悪な性根をした者たちが、他者を足蹴にし合う最低最悪のファミリア。

心優しい世間知らずの少年には酷な世界だ。

そんな場所とは関わず、ずっと綺麗な所で生きてほしかったのに。

ベルのリリを思う心が痛いほど伝わってくる。

本気で彼女を心配して、心の底からリリと一緒にいたいという想いが溢れていた。

そんな彼の優しさに心が温かくなる自分は本当に弱くなったのだろう。

そんなの許されなれないかと思っていたのに、もしかしたらもう一度戻れるのではないかと錯覚してしまうのではないか。

ベルは残酷だ。

そんな優しきは二人を破滅させる毒にしかないのに。

神酒なんて比べ物にならないほど、心を揺さぶってくる。

「……リリみたいな小汚い小人族バルツムが、ベル様と一緒にいちゃいけないんです」

ポロリと口から出た言葉。

何も意識せずに零れたそれが本音。

多くの人を騙した犯罪者と透き通るように潔白な少年。

釣り合うはずがない。傍にいたことすらおこがましい。

その現実に耐えられなくて、離れた。

【ソーマ・ファミリア】を倒すためと自己欺瞞をしながら。

(結局、自分のため)

今まで気づけてなかった本音を自覚する。

そして思った。

やはりリリはベル様の傍にいたべきではなかったのだと。

綺麗ごとで自分の醜い本音を繕ってベルを裏切ったのだ。

少年と出会ったところで元々の卑怯者の気質は変えられなかったのだろう。

いよいよ惨めだ。

自己嫌悪で押しつぶされそうになった時、ベルは強引に少女の手を取った。

「だからっ、一人で悩まないでよ!!」

深紅の瞳は真つ直ぐとリリを見ていた。  
ルベライト

「どんな理由があっても関係ない!! 法も、道理も知ったことじゃない!!」

ベルにはリリが必要だ。

誰に非難されようと、何に否定されようと、絶対に譲らない。

いつそ清々しいまでに完全な我儘だ。

「僕はリリと一緒にいたい！君のファミリアがそれを拒むなら、ホーム家を捨てて!!」  
「……………」

「君が領いてくれるならなんだってする!!どんな相手だって怖くない!だから……正  
しいことも、間違っていることも全部無視して、この手を握ってくれないかな」  
手が差し伸べられる。

ダメだ。間違いだ。

リリにその資格はない。

ベルを不要に傷つけるだけだ。

その手を払ってしまえばいい。

ベルは本気で嫌がっていれば手を引いてくれるだろう。

今こそ、盗賊業で身に着けた演技力を使う時だ。

なのに、口がピクリとも動かない。

視線は差し伸べられた手に固定されたままだ。

体がリリの意思を離れてその手を取ろうとする。

(駄目……………こんなの上手いくわげがない…………)

まだ引き返せる。

リリさえ上手くやれば引き返せるのだ。

次々と浮かぶ彼との思い出に惑わされるな。  
なのに、止まらない。

自制の声は空虚に思考の奥に消える。

リリの選択を静かに待つベルの存在に。

常の判断力は彼方に飛んで行ってしまった。

「……リリも」

そして

「リリも……ベル様と一緒にいたいんです……」

決壊した。

「もつとつ、もつとベル様と冒険したいですつ。別れたくないつ、ずっとずっと……貴方と笑っていたい！」

「うん僕もだよ」

「でも、リリはベル様の隣にいたるべきじゃなくて、きつといっぱい迷惑かけますつ」

「僕はもう散々かけちゃったし、お互い様だよ」

止められない感情の渦が叫びとなって街に木霊す。

それをベルは静かに受け止めた。

間違ってしまったかつてをとりもどすように、ぶつけられたリリの想いを噛み締めな



ベルとリリはもう一度手を繋ぐ。

また、二人だけのパーティーをやり直すために。

二度とこの手を離さないと誓って。



泣いていた。

少年も少女も動物たちも人々も。

その場にいた多くの者たちが涙を流した。

二人の間に何があったのかは余人には想像しかできない。

だが、想いをぶつけ合う二人がお互いを想い合っていることだけは理解できる。

異様に集まった動物たちや少年の大声に驚いて、様子を見ていた通行人や近隣住民は

二人の泣き声に思わずもらい泣きをした。

経緯などは分からない。

だがこれは少年が泣いている女の子を救う物語なのだろう。

人々はそれだけを理解し、二人のこの先の運命に神々の祝福があることを祈った。

ギルドの職員もこの物語の群衆エキストラの一人だった。

本部前でトラブルを起こしているらしき冒険者がいると連絡を受け、リーダー職を務

めている獣人の男と桃色の髪ของヒューマンの女性が様子を見にきていたのだ。

そして泣いた。

「いい話だな……フロット、【ガネーシャ・ファミリア】に通報を」  
(何やってんの弟君!?)

獣人の上司は泣いた。

二人の物語のこれまでの苦難を思つて。

そしてそれはそれとして通報した。

二人はヒューマンとエルフの少女。

ヒューマンの方は13〜15歳程度、オラリオでは成人とされる年齢だ。

一方でエルフの少女はどう見ても一桁。下手をすれば幼女ではないだろうか。

そしてまさかの誘拐宣言。

犯罪である。

最近は幼女に告白することが流行っているのだろうか。

兎に角獣人の上司は行政機関ギルド本部の真正面で幼女に告白するという偉業を成し遂げたヒューマンに男としては敬意を表しつつ、良識ある一般市民として都市の憲兵に通報した。

少女も虐待を受けているらしいし【ガネーシャ・ファミリア】に任せた方がいいだろ

う。多分。

桃色の髪の女性……ミイシヤも泣いた。

担当冒険者がロリコンで憲兵の御用になる親友を思つて。

でもそうになると暫く牢屋かもしれないから、あの賭けはエイナの一人勝ちかも？

現実逃避をしつつミイシヤは「ガネーシヤ・ファミリア」に向かう。

上司には逆らえないから仕方ない。

告白はせめて後数年待つて欲しかった。

黒髪ツインテールロリ巨乳に大声で愛を叫んだ獣と並び、少年は神話になる。

数週間たつて鎮火しかけていたギルドの幽霊フアントムの呪いの噂が再燃し、ギルド本部はロリ

コンたちの聖地となった。



## 灰被り姫抗争

オラリオは騒動が絶えることはない。

「ファミリア」が数多く存在し、荒くれ者揃いの冒険者を中心に回るこの迷宮都市は抗争が風物詩とすら言える場所。

そんな街で暮らす住民たちは争いに敏感だ。

特に、小競り合いではない本気の戦いになればその嗅覚は最大限発揮される。

「ファミリア」同士の抗争に巻き込まれるものなどこの都市に来て間もない新参者くらいだ。

故に、この瞬間に街から人の姿が消えているのは当然だ。

彼らの直感歴史に残ることもないような小さな戦いすら察知する。

降りしきる雨を迷宮産の素材でできたアーマーが弾く。

水溜まりをバシヤバシヤと乱雑に踏み越えて、同じように身軽だが堅固な冒険者用の防具を纏っていた。

「白髪のがきはまだ仕留められねえのか!？」

「応援を呼べ!」

「ヤバイッ、このまま時間がたてばザニスが黙ってねえぞっ!？」

雨音に掻き消されないような大声で怒鳴り合うように報告する冒険者たち。

殺気だった男たちの声は住民たちを震え上がらせた。

冒険者たちが共通して身につける月と杯の紋章は「ソーマ・ファミリア」のものだ。  
乱暴な言動によつてあちこちで騒ぎを起こす。悪い意味で典型的な冒険者。

市民に危害を加えかねない「ファミリア」がこれ程殺気だっていることに住民たちは良くないものを感じた。

すぐさま家に閉じ籠り、窓を閉めきる。

間違つても見物しようなどとは思わない。

そんな呑気な事をしていれば、超人たる冒険者の戦いに巻き込まれることは確かだから。

「ギルドか【ガネーシヤ・ファミリア】に早く連絡を……っ!」

単なる喧嘩ならば兎も角、ここまで組織だった行動ならばオラリオの法に触れる。

都市の秩序を守る二つの組織ならば「ソーマ・ファミリア」を止めてくれると期待して市民たちの間に瞬く間に抗争の噂が伝達された。

「馬鹿どもが……」

この状況を不満げに感じるものが一人。

「ソーマ・ファミリア」の団長たるザニスだ。

冒険者たちの動きは決してザニスが命じたものではない。

組織として何段も格上なギルドと「ガネーシャ・ファミリア」と事を構えるなど自殺行為もいとところだ。

君臨すれども目立ちすぎるとは嫌いなザニスからすれば、無用な反感を買うのは本意ではない。

だが、冒険者たちの考えは違う。

冒険者たちからすれば正規の手段しか行わないギルドや「ガネーシャ・ファミリア」などよりザニスの方がよほど怖い。

そのザニスの手駒である小人族バルウムが拐われたのだ。

このまま見つけられなければ自分達はどうなるのか。

肥大化した恐怖は彼らにあり得ない選択肢を選ばせた。

則ち、人海作戦。

そんなことをすれば他の「ファミリア」に即座に感づかれる。

しかし彼らはそんなことは意に止めず。あのサポーターを血眼でさがす。

それがザニスの不興を買っていることにも気づかず。

(酒で頭が回っていないのか馬鹿どもめ)

恐怖心に駆られ、市民たちに当たり散らすように少女の探索を続けるその様を見れば、「ファミリア」間のもめごとには基本的に腰が重いギルドも団長であるザニスに罰則を与えることを検討するだろう。

そうした小さないざこざから芋づる式に「ファミリア」の闇が明らかになって逮捕……などという事はこのオラリオで稀に見かけることだ。

そうならないようにヘイト管理に注力していたザニスからすれば、この状況は面白くない。

少女を探すなら探すでもっとましな方法はあつただろうに。

<sup>ザニス</sup>団長が恐怖で「ファミリア」を縛り上げると言う歪なファミリア構造が裏目に出てしまった。

（それにアーブ。白髪の冒険者についていったという事だが、情にでも絆されたか？その冒険者は余程口が上手いのか、それとも私が奴を過大評価しすぎていたのか）

酒に溺れて本能そのままに生きる猿以下になり果てている団員たちの中で、あの非力な少女は違った。

怒りをその瞳に宿し、あの狂乱の中生き延びる選択を取る意志力。

冒険者への憎しみを糧に頭を使って周囲を翻弄する悪辣さ。

実にザニス好みの団員だったが、それが何故今になって感情的な行動に出たのか。

少なからぬ失望と共に、ザニスの頭脳は少女を逃がすことでのリスクを計算する。少女一人逃げたところで「ソーマ・ファミリア」は健在だ。

今回の件からこちら側に引き込んだことで多少の情報は漏洩したが、決定的な証拠となるものは渡さないように立ち回った。

暫く良くない噂が都市に流れるだろうが、ここは世界の中心だ。

次から次へと流れる新たな噂によつて、中堅派閥の都市伝説じみた黒い噂など人々の記憶に埋没する。

だが、少女を連れて逃げる冒険者が問題だ。

奴は「ガネーシャ・ファミリア」と多少なりとも交流がある。

公平をモットーに活動する「ガネーシャ・ファミリア」として所詮は人の子。

親交のある相手の言葉には甘くなるかもしれない。

つまり、不十分な証拠であっても「取り敢えず調べるか」となる可能性があるのだ。

そんな時に街で暴れる挙動不審な団員たち。いくら何でも怪しすぎる。

（馬鹿どもをしつぽ切りできるように私は直接指揮をとらず、尚且つアーデを確保できるように干渉するか。アーデを探してはいたが、暴れている奴らは私とは関係ない末端の暴走だ）

少女の初仕事を見届けるために先にダンジョンに向かっていたのが初動の遅れにつ

ながつた。

行方不明の少女を探すために自分の周りを張り込んできた場合を想定してのことだったが失敗だ。一体どのようなようにして少女の変身魔法を見破ったのか。

(アーデと契約していた冒険者が持つマジックアイテムの効力か?)

はつきり言って眉唾物レベルの効果で、あまり噂を真に受けてはいなかったのだが認識を改める必要があるかもしれない。

もし、噂通りの規格外のマジックアイテムを所持しているのならば、今のこの状況も納得できる。

「おいーまだ見つからないのか!？」

「いや、ダイダロス通りで発見した！だが荷台が荷物をぶちまけたり、急に道路が陥没したりと奴が行く先々でアクシデントが起こる！」

「おい、不味いぞーカヌウの馬鹿がギルド職員に暴行しやがつた!!」

レベル1の駆け出しに足手纏サボーターい。

見つかささえすれば容易く捕らえられるという予想は外れた。

何故か少年たちの行く先々でトラブルが起き、ギリギリの所で取り逃がしまうのだ。

それに苛立った団員の一人が巡回中のギルド職員と口論にあり、暴行を加えたらしい。



る。

「この先を左に曲がった後、石壁の隠し扉を利用しましょう！」

盗賊業で逃げ回る際に、この入り組んだ街並を利用することもあつたというリリの指示で縦横無尽に駆けまわる。

知っていたけど「ソーマ・ファミリア」はとんでもない団員の数だ。

真正面からぶつかつたらまず勝ち目はない。

だからこそその逃走。

逃げて、逃げて、逃げ回って、か細い勝利の糸を手繰り寄せる。

「いたぞ!!」

「……っ!」

しかし、相手は熟練の冒険者。

簡単に逃がしてくれるはずもなく、僕たちはあつさり居場所を特定された。

男たちの手が迫る。

リリをあの監獄のような家ホムに連れ戻さんと迫る。

(そんなことはさせない!)

今日の前にいる冒険者は2人、背後から3人が追ってきていた。

挟み撃ちだ。



それを理解した僕はリリを抱えて思い切り地を蹴り、近くの建物の壁に飛び移る。壁の出っ張りに何とか足を足を掛けて、更に屋根の上へ移ろうと跳躍しようとした。

「逃がすか！」

だがレベル1の僕にできることは同じレベル1の冒険者ならばできる。

前と後ろからそれぞれ一人ずつ、冒険者が跳躍して僕の左右に立つ。

この足場では満足に武器を振ることもできず、捕らえられるだろう。

だからリリは手を伸ばした。

ベルの後方から跳んだ冒険者に手を伸ばす。ホームに戻るために。

あっさりと態度を翻し始めた少女に面を食らいながらも、冒険者は反射的にその手を取ろうとする。

その瞬間。彼らが足場としていた出っ張りが崩れた。

千年前、ダイダロス通りが巨匠ダイダロスの手で造られてから、ダイダロス通りは度々建築系ファミリアによって修繕されている。

……とは言ってもダイダロス通りは貧民街。

満足な報酬も出せるはずがなく、修繕はギルドが出す保証金頼り。

よつてこの街の中には老朽化した場所が多々あり、ある日突然建物が崩れ落ちたとしても不思議ではない。

「うわっ!?!」

「何!?!」

「くそ……っ」

このタイミングで老朽化が露になるという展開にベルも冒険者たちも驚きの声を上げる。

だがベルは何が起こるかまでは分からなくても、何かが起こることは察していた。

全くの無警戒だった冒険者たちとの小さな差が初動に現れる。

ベルは空中で体制を整えると同時に壁を大きく蹴った。

そしてまさかのアクシデントに固まっていた、前方のドワーフの冒険者に向かってそのまま全体重を乗せた膝蹴りを叩き込む。

小柄とは言え一人分の重さは絶大な威力に変換される。

それこそ恩恵ファルナがなければ首がへし折れていたであろう一撃は、冒険者の男を吹き飛ばし戦闘不能状態に追いやった。

本当なら気絶しているであろう冒険者の安否が気になるが、それを確認している余裕はない。

ベルは前方に誰もいないことを確認するとそのまま全速力で逃亡を再開する。

「待て……らあー!」

「アーデ置いてけや!!」

冒険者たちもすぐにベルを追撃するが、ベルのステイタスは既にレベル1上位。特に敏捷はとにかく速く、誰にも追いつけない。

兎の様にあちこちを駆け回り、冒険者たちを撒いた。

「ベル様っ、お怪我は!?!」

「大丈夫! ありがとうリリ、助かったよ!」

危なかった。

リリがひみつ道具の効力を使ってくれなければ、詰んでいたかもしれない。

〔ロキ・ファミリア〕や〔ガネーシャ・ファミリア〕ほどじゃないけど……やっぱり〔ソーマ・ファミリア〕全体と戦うなんて、持ちっこない!〕

分かっていたことだが悔しい。

あの場にいたのは追っ手の中の一部。

多対一なら次々と来る増援に飲み込まれるだけだ。

無謀な戦い。エイナさんが見たら卒倒するくらいに。

だけど、勝機はある。

「その団長さん……ザニスさんはあの中にはいなかった?」

「はい、あのヒョロガリはまだ来ていないようです」

この戦いに「ガネーシャ・ファミリア」の助力は受けられない。

「ソーマ・ファミリア」の悪行の証拠は何処にもないから、都市の憲兵が介入する口実が無いからだ。

そのことを告げるシャクティ団長は苦々しそうにそう口にした。

『我々のやり方ではアーデが一線を超える前に「ソーマ・ファミリア」を検挙することはほぼ不可能と言える……情けない話だが』

それを僕に言ってくれたのはせめてもの誠意なのか。

だから僕は決めた。

決定的な証拠を今日引つ張り出してやろうと。

それを可能にするのがひみつ道具「スナオン」。

その名の通り人を素直にするこの緑色の錠剤で「ソーマ・ファミリア」の悪事を根こそぎ明らかにする。

ゴプリンに飲ませてでも何の変化もなかったから、毒はないだろうという事でモダーカさんが代わりに試してくれた所本当に素直になった。

正確には素直じゃなくて無知というか、ハシャーナさんによって黒歴史を引き出され、歩いて喋る黒歴史ノートとなった挙句、『実はヒューマンだと偽っているがそれは仮の姿。本来は象の仮面に宿る妖精さん』という嘘を信じ込まされて新たな黒歴史を量産

していたが。

モダーカさんの心の傷と引き換えにこのひみつ道具の効果を知れた僕はこっそり「アイアム・ガネーシヤ」を抜け出し、リリを探していたのだ。

……神様にはすっかり見破られていて「ちゃんと帰ってくるんだよ」と言われてしまったけど。

悪事を暴くという意味ではこの上なく強力だけど、問題はどうかやって飲ませるか。

ザニスさんの所持って行って行って健康にいいんですよー試してみましょーと飲ませることも検討したが、それより倒してから無理矢理飲ませたほうが早いと思う。

この後の計画を聞かれたとき、そうリリに言ったら「ベル様ってやつぱりあほなんですね」と可哀そうなものを見る目で言われた。

自覚はあるから止めてほしい。

兎に角、スナオンを飲ませるために「ソーマ・ファミリア」の団員を翻弄し、団長自ら出てくるように誘導しているのだ。

聞いた限りザニスさんはかなり用心深いから上手くいくか心配だったけど。

『多分、レベールのベル様ならザニスは警戒しません。本質的には策士じゃなくて、弱い者いじめが大好きな獣のような男ですから』

力で叩き潰せる相手と侮られているのなら真つ向勝負もできる。

弱者だと思ってくれれば僕たちの前に姿を現す。

そう仮定して逃亡し続ける。

なげなしの牙を隠して、愚かな弱者で居続ける。

実際に愚かな弱者だ。

レベル1のくせにレベル2に勝とうとする愚か者だ。

臆病な自分が泣きそうになるのを叱りつけた。

やると決めたならやり通せ。

守ると誓ったりりの前で無様を晒しても、恐怖を見せるな。

戦え、戦え、戦え！

緊張で乾いた喉が水を求める。

永劫かとも思える時間の終わりは早かった。

大雨のカーテンの奥に見えた黒い人影。

目がいい小人族バルウムのりりがそれを認識すると緊張を纏う。

水たまりの音をさせながら、人影はゆっくりと近づいてきた。

「私たちの仲間を返してもらおうか、坊や」

痩せた体軀に灰色の髪。

水滴に濡れた眼鏡の奥に光る嫌な視線。

「ソーマ・ファミリア」団長 ザニス・ルストラ。

ガシメルツア  
【酒守】の二つ名を持つレベル2。

ラシクアツプ  
器の昇華を果たした強者がその姿をついに見せた。

この人がリリを縛る悪意。

この人がこれまでの歪み。

この人が僕が倒すべき敵。

「貴方たちのじゃない。僕の仲間です」

今日、「ソーマ・ファミリア」と事を構えてから初めて武器を抜いた。

ヘステイア・ナイフ バゼラー  
神様の刃とリリの武器。

二刀に必勝の念を込めて、上級冒険者と向かい合う。

さあ、リセットの時だ。

行くぞ。

僕は貴方を倒して、リリと本当の仲間になる。

## 降りしきる雨に灯をともせ

鮮血が舞う。

膝をつくのは白髪を泥に汚した少年だった。

対峙するザニスは対照的に無傷。

勝ち誇った顔で剣を弄ぶ。

「何か奥の手でも隠しているのかと思えば……全くの無策とは呆れさせてくれる」

「……っ！」

それは予定調和の光景だ。

レベル2にレベル1は叶わない。

よほど規格外の魔法なりスキルなりがあれば別だが、そうした一握りの天才でなければこの理は絶対だ。

「他に仲間を伏しているのかと警戒してもそんなものはまるで姿を表さない。常識的に考えてお前のような愚か者に助力する者などいるはずもないか」

剣を無造作に横向きに振る。

技術など欠片も感じさせない力任せの一撃。



冒険者になってようやく一ヶ月のベルの方がまだ巧い。

一人前の冒険者が見れば間違いない失笑ものの剣撃。

だがそれを、神の恩恵が必殺の領域に昇華させる。

視認すら困難な一撃。

ベルはそれを守りに秀でた二刀の構えで何とか防いだ。

この劣勢は戦う前から承知の上。

冒険者たるもの戦う前に敵を知るべし、とは彼の担当アドバイザーの言葉だったか。

彼女の言いつけを愚直に守る少年は既にザニス・ルストラの公開されている情報は予習済である。

(レベルひとつ違えば生物が違うのと同じだ。ザニスさんとの戦いは人間相手のものだと思わない方がいい)

この戦いのために高等回復薬ハイポーションを赤字覚悟で揃えている。

アイテムだって貧乏ファミリアが備えられる限界まで用意した。

対人の戦いだって、性能の悪い頭なりに可能な限り叩き込んできた。

そんな準備があつても遠い。

レベル差の理不尽を改めて実感する。

「しついで野兔がー」

弱者の涙ぐましい努力の跡を感じ取ったザニスは嘲笑した。

狐じみた印象を与える顔は嗜虐の色を宿し、暴力に酔うように攻撃の手は過激になっていく。

息ができない。

空気を欲する口を開くために食い縛っている歯を緩めれば、それが致命の隙になってしまう。

あの暴虐の剣を受け止めるなど論外。

ベルに許されたのは受け流すか、避けるか。

最初は距離を取るつもりだった。

最も高い評価アペリティを誇る敏捷を活かして、ザニスの攻撃を受けないように。

だが想像を超えた身体能力ステイタスの差に圧されて、気がつけば足を止めてしまう。

レベル1の取り柄など知ったことかと潰してくる上級冒険者。

万全を期してなお埋め足りない力の差に怯える心を叱咤する。

精一杯の抵抗で目の前の男を力の限り睨み付けた。

それが気に入らなかったのか、ザニスの攻撃は激しさを増す。

「~~~~~ツツツ!!」

満足に呼吸もできないベルは、声にならない叫びを上げながら懸命に捌いた。

受け流し損ねて度々走る痛みに顔を歪ませても、決して相手から眼をそらさない。絶望的なまでに聳え立つ壁がどれだけ高いのかも分からず、無謀なまでに腕を酷使した。

レベル2とはこのオラリオの中では決して強いとは言えない存在だ。

上級冒険者の中では第三級に分類され、都市外ならば強豪とされていても世界最高峰の戦力を誇る迷宮都市では中堅以上のファミリアならば必ずいて、最高峰のファミリアでは雑兵にもなれない。

力、速さ、堅さ、技術。

どれをとつても花にも朱い女にも見劣りする。

だが、ベル・クラネルにとつては今こそが一番の窮地だ。

ベルが格上と戦う時。いつも傍にはその格上と戦える誰かがいた。

現に花はアイズが、朱い女はガレスが倒している。

だからベルは敵を倒さなくても自分の役割を果たすだけで良かったのだ。

(でも、ここに僕を助けてくれる人なんていない。この人は僕自身が倒さなきゃいけないんだ！)

煉瓦で舗装された地面を転がる。

大きく振りかぶられた一撃で吹き飛ばされた。

倒れた先に出来ていた水たまりは水しぶきを上げ、息の上がつた僕の体を冷ます。

「——ハハハッ!!」

哄笑ともに迫るザニス。

それに対し、ベルは咄嗟に水たまりの泥水を掬い、ザニスの顔面に投げつけた。

顔が汚れることを嫌がったザニスは後ろに飛びのき、高揚していた気分には水を差したベルを忌々し気に睨みつける。

ベルもこの絶好の機会に距離を取り、ゆっくりと息を吐き、吸った。

(ああ、良かった。これでもうちよつとだけ頑張れる)

取り入れた酸素が血管を巡り全身に広がる。

呼吸ができたところで劇的に強くなるわけじゃないけれど、空っぽになりかけていた体力に悪あがきするだけの力は溜まったのではないだろうか。

これならまだまだ粘っていられる。

結局、ベルがザニスに勝利できるとすれば相手の失策以外にない。

少なくともベルにはそれ以外思いつかなかった。

ならどうやってザニスの失敗を引き出すか、それを考えていた時ふとヘステイアの言葉を思い出す。

『また店長に叱られた……疲れているとどうしても集中力が……』

人間の集中力というものは長続きしないものだ。

作業が長引けばそれだけ注意が散漫になり、思わぬミスをしてしまうもの。

ならば、格下を倒すのに梃子摺れば？

倒せる相手が倒せない苛立ちと、変化の少ない状況でミスを誘発できるのではないか。

だからベルは決めた。

粘って、粘って、粘り続けて、相手が致命的な失敗をするまで耐えようと。

幼い頃の自分がこんな勝ち方をした英雄を見たら「カッコ悪い！」と拗ねるだろう。

祖父は割と気に入ってくれそうだが。

ドラえもんやのび太は……飽きて途中で寝てそうだ。

ぼんやりとしつつある頭の中で浮かんだ想像について笑ってしまった。

「……何が可笑しい!!」

それを挑発と受け取ったのかザニスは激昂して攻撃を再開する。

足を使った戦いはもうできないだろう。

そんなことをすればあつという間に体力が尽きる。

だからベルは両の足で立った。

守るべき女の子の前で、傷だらけになった体で。

もはや殺意を隠さないザニスの突き。

線ではなく、点の攻撃は捌きにくい。

だからこの攻撃には神ヘステイア・ナイフの刃と両刃短剣バゼラートの両方で対処する。

二刀を交錯クロスさせた形で構え、ザニスの剣に合わせる。

真つ直ぐと正面の敵を突き刺すための力は、正面の物体には強いがそれ以外の場所から加わる力には弱く、すぐに影響を受けてしまう。

例えるなら弓の矢だ。

どんな速度で飛んで行つたとしても、横風の影響を受ければ狙いとは全く別の場所に向かつてしまう。

ザニスの剣に双剣を滑らせたベルは、そのままザニスの懐に飛び込む。

視線と視線がぶつかり合った。

脳裏に思い描いていた蹂躞劇とかけ離れた光景に目を見開くザニスをよそに、渾身の力で剣を弾き上げる。

剣はくるくると宙を飛ぶと、甲高い音を出しながら闇の中に消えた。

「待っ——」

「ああああああああああああっつつ！！！！！！」

その隙を逃がさず、全力で頭突きを見舞う。

レベル2の敏捷で向かっていた反動をカウンターに変えて、ベルの額に何かがつぶれる感触と共に雨水以外の液体がかかった。

砕けた眼鏡が地面に転がって泥まみれになったことも気に留めず、ベルは双刀を捨てて飛びつくように殴り掛かる。

今しかない。

今、この瞬間に全てを出し切る。

潰れた鼻を追撃するように直突き。

畳みかけるように左腕は回し打ちを放つ。

(息を整える時間を与えたらさっきまでの繰り返しになる!!ここで、一気に!!)

一撃、二撃、三撃、四撃、五撃。

ベルが攻撃の手を緩めることは決してない。

体全体を連動させて、攻撃の手を休めることなくつなげていく。

毎日欠かさず続けてきた鍛錬はベルを裏切ることなく最高の連撃を実現させた。  
熱い。

体が炎になったようだ。

体内を駆け巡る熱は刹那の力。

限界はすぐに来ることをベルは感じ取っていた。





がむしやらに勝利を求める血に濡れた兎。

非力で、臆病で、だけど守るべきもののために牙を剥く。

「……舐めるなああああああ!?!」

だが少年の攻勢は長くは続かない。

地力で勝るザニスは決して無視できないダメージを受けつつも健在だ。

出鱈目に振るった拳は苦しまぎれもいいところだったが、熱に浮かされ攻撃に没頭していたベルは回避できない。

九撃目の打撃と半ば相打つ形で食らってしまふ。

腰が入っておらず、レベル2の身体能力ステイタスを全く生かしていない無様な一撃。

しかし、そんなラッキーパンチがベルの連撃を止めた。

即座に荒々しい蹴りを見舞ったザニス。

その息遣いは荒い。

歯牙にもかけなかった相手からのまさかの反撃。

潰れて血を流す鼻の痛みが屈辱を燃え上がらせ、自尊心プライドを刺激する。

「このっ、汚らしい底辺冒険者が!! 誰の、誰を相手に喧嘩を売ったと思ってる!?!」

仰向けに地面に倒れたベルを容赦なく踏みつける。

顔を真っ赤にして怒鳴り散らすその姿に普段の理知人を気取るザニスははいない。

「夢に酔った無知蒙昧の輩が!!何を勘違いした!?!貴様などマジックアイテムがなければ  
そこらの鼠にも劣る畜生だ!!私はレベル2だぞ!?!貴様などつ、貴様など!?!」

力任せにベルの腹部を踏みつける。

何度も、何度も、鬱憤を晴らすように。

上級冒険者による甚振りにはベルの骨を砕き、内臓に傷をつける。

口から吐き散らした嘔吐物はやがて血の混じったものに変わった。

「ベル様つ……!ザニス様!分かりました!もう、ホームに戻……!」

「喋るなアーデ!!」

ひみつ道具の効力を発揮するために、ホームに戻ろうとしたリリをザニスは怒号をもつて制止する。

「すでにからくりは見えている!貴様らの切り札のマジックアイテムは条件を満たすと  
発動する!!貴様が「ホームに帰ろうとすること」がその条件だ!!」

「翻弄される団員たちを見てある程度の推測を立てていたザニスは、リリの妨害を防ぐ。」

第三のひみつ道具【すて犬ダンゴ】。

ドラえもんが来たという22世紀において、捨てたペットが再び家に戻ってくる  
ことが無いように食べさせるといふこのひみつ道具の効果は家に帰れなくなることに  
なること。

時にアクシデントが、時に他人が、ホームに戻ることを妨害する。

ベルとリリはそれを「ソーマ・ファミリア」との戦いのサポートとして使っていた。

「それならばホーム以外の宿を用意して飼殺す気だったが……これまで我々に守られておきながら恩を忘れた裏切り者が!!もういい!!ここでそのガキと死ぬ!アーデっ!!」

リリがソーマ・ファミリアに戻ろうとすると事故が起きるといふならば、ホームに返さずに首輪だけつけなければいい。

そう考えていたザニスだったが、ベルの手痛い反撃によって頭に血が上り、リリの肅清を口にする。

(たかがサポーター風情にここまでこだわったのが失敗だったのだ!!ガキともどもモンスターの胃の中にぶち込んでくれる!)

怒りのままりりすら抹殺しようと少女に向かうザニス。

その足をベルの腕が掴んだ。

「……あ?」

力などない。

先ほどの連撃への仕返しとばかりに加減もせず十数回腹を踏みつけ、胃の中のモノをすべて吐き出させたのだ。

現に足を掴む腕は震えていて、絶え絶えの呼吸など擦れている。

だが、ザニスを射抜くその視線は。

暗く濼んだ街で力強く色を発する深紅ルベライトの瞳は変わらない。

それは、どうしようもなくザニスの神経を逆立てた。

「何だその目はく??:…何なんだ!!」

リリまで向かっていた体を反転させ、ベルの頭をボールのように蹴飛ばす。

その衝撃で少年の体が僅かに浮き上がり、水しぶきと共に石畳の上に落ちた。

リリの悲痛な叫び声の木霊す中、ザニスはベルの喉元を踏みつける。

「まだ分かってないのか!?何処まで愚かなのだお前は!!死ぬんだよ!お前も、アーデも、化け物共の餌になって死ぬんだよ!!」

引き離そうとしたリリを一蹴し、足に力を籠める。

空気を求める口がぱくぱくと開き、痙攣するようにベルの体が震えた。

それでも瞳は変わらない。

「それかこの期に及んで誰かが助けてくれるとでも勘違いしているのか?だとしたら御目出度いことだ」

それが気に入らなくて、もう一度少年の頭を蹴り飛ばした。

そして苛立ちのまま傍で倒れるリリを蹴り飛ばそうとして、また、ベルに止められる。

もつれかかるようにザニスの足にしがみつくとベルを無様と笑い飛ばそうとして、再び





殺してしまおう。

殺して、魂のなくなった死体からこの赤い瞳をくり抜いてしまえばいい。後は秘蔵の神酒にでも浸けて存分に愛でていればいいだろう。

いつだったか見た悪党どものアジトの鍵などよりよっぽど綺麗な赤色だ。そんなことを考えて、笑いながら少年のナイフ拾う。

「駄目じゃないかア、得物はもつと大切に扱わなきゃああああ!」

振りかぶった黒い刃が目指すのは少年の左胸。

駆け出し冒険者には不釣り合いな己の武器で死ぬがいいとザニスは狂笑をもつて勝利を確信する。

少年に止めが刺されようとし、リリの叫びが口から零れた瞬間。鈍い音を立てて兎鎧が主を守った。

「……はっ」

呆然と弾かれた刃を見る。

業物だったはずだ。

対峙してこの武器にだけは背筋がひやりとするくらい。

武器の鑑定などできないザニスですらわかる業物。

それが何故弾かれる？

(アーマーが優秀だった？いや、ナイフの刀身が死んでいる……？)

紫紺の光を放っていた刃が、ザニスの手の中では沈黙している。

ザニスには知る由もないことだ。

このナイフは少年の主神がありつたけの想いを込めて贈った神の刃。

ベル・クラネルを生涯の伴侶とし、彼の女神の眷属以外に握られることを拒絶する、真の意味での専用武器<sup>オーダーメイド</sup>。

ソーマ<sup>ザニス</sup>の眷属ではその力が振るわれることは無い。

業物が鈍らに変貌したことによる動揺。

これこそベルの求めていた最大の間隙。

ヘステイア・ナイフをザニスの傍に捨てたのも全てはこのための布石。

声にならぬ雄叫びを発し、ザニスの顔面に掴み掛る。

既に勝負はついたと油断していたザニスは、突然の攻撃にバランスを崩して倒れ込んだ。  
だ。

(このまま頭を石畳に叩きつける気か!?)

ベルの狙いに気づき、だがそれは耐えられると冷静に計算するザニス。

昇華<sup>ラッシュアップ</sup>を果たした器ならば、常人では致命傷となるダメージにも耐えられる。

歯を食いしばって反撃に備えた。



だがザニスは忘れていた。

ベル・クラネルをひみつ道具頼りの冒険者と侮るあまり、彼のそれ以外の武器を。

この状況でベルだけが許される世界の唯一。

詠唱不要の速攻魔法を。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！！！」

大雨の中に小さな火が瞬いた。

ザニスを石畳に叩きつけると同時に発動した炎雷は掴まれたザニスの顔面に勢いよく炸裂する。

絶叫すら燃やされるザニス。

最弱の魔法とは言え、その威力は馬鹿にできない。

魔力の衝撃と石畳に叩きつけられた衝撃、そして口の周りの酸素を燃やされたことにより、ザニスの想定を超える威力の一撃は容易く男の意識を奪った。

「……」

その光景をリリは忘れられないだろう。

顔から煙を立ち込めさせながら気絶する恐怖ザニスの象徴ニスと、その傍で立つザニス以上にポロポロな少年。みつともないくらいに血と泥にまみれた少年は息をするにも一苦労と言った様子だ。

それでも、リリに向けてくれたのは笑顔だった。

体中が痛くて、無理矢理作ってくれた不格好な笑みがこの戦いが真に終わったのだと理解させる。

「リリ……」

今でも戸惑う心はある。

自分はここにいていいのか。

罪を償わなければいけないのではないか。

汚れた自分に彼の傍にいる資格などないのではないかと。

だが、もう我慢はできない。

この少年と一緒にいたい。

偽らざる想いが溢れ出す。

いつか、報いを受けるのかもしれない。

それでも今この瞬間だけは恥知らずな未来を願わせてほしいと思う。

「もう、大丈夫だよ」

少年の笑みにまた、涙が溢れ出す。

幼子のようにコントロールの効かない感情の渦に身を任せて泣いた。

気が付けば雨はとうに止んでいて。

憎たらしいほどに青い晴天が少年と少女を見守っていた。

## ICE BREAK

『人を惑わす神酒の恐怖!』

『酒守、自分は守れなかった!』

『歪な組織構造? 暴かれるソーマ・ファミリアの闇』

全てを自白したザニスによって、「ソーマ・ファミリア」が隠してきた数々の違法行為が衆目の目に晒された今回の事件はオラリオに衝撃を与えた。

「ソーマ・ファミリア」自体は団員数こそ多いものの、何の変哲もないありふれたファミリア。強いて言うなら主神が趣味で造っている酒が一部で人気である程度。それが一般からのこれまでの評価だった。

そんな人々の日常に自然と溶け込んでいたファミリアが隠していた悪事の数々。

巷を騒がせる闇派閥イヴァイルスとの関わりを初めとした違法行為は「ガネーシャ・ファミリア」の団長であるシャクテイ・ヴァルマ直々に情報規制を行うほどだと噂される。

当然、そんな悪事が明らかになった「ソーマ・ファミリア」に対して、ギルドは重い腰を上げて厳しい罰則を与えた。

派閥として蓄えた資産は罰金としてほとんどが没収され、その活動には無期限の停止



待ち合わせの時間よりちよつと早めに来てしまつたりリリが見る空の色は南国の海がそのまま写されたような青。曇り一つもない晴天だ。

ポカポカと日の光を浴びていると、つい眠気が刺激される。

早朝にこんな風にゆつたりとする時間が作れると、今の「ソーマ・ファミリア」から抜け出した平和な状況を再認識できると言うものだ。

「うーん……早すぎました」

デートでもないのに気合を入れて集合時間より早く来てしまつた自分に苦笑する。

あれほど億劫だつたサポーターをやるのが、こんな風に待ち遠しくなるとは思わなかつた。

（恵まれすぎているなあ……）

先日の「ソーマ・ファミリア」の団長であるザニスを突き出した時、リリもまた罪の清算のために「ガネーシャ・ファミリア」に自首をしていた。

間違いを間違いのまま放置はできない。

自分のこれまでの過ちを全て打ち明けたリリに対し、ガネーシャもまた群衆の主としての顔で罰を下す。

それは「ソーマ・ファミリア」捜査のための協力の要請と、多額の賠償金。

ベルから離れる際に雇つた冒険者たちに、貯蓄のほとんどを報酬として与えていたの

で少し厳しい額だったが借金という形で少しづつ返済することになった。

甘すぎる罰だと思ったがガネーシヤは「罰則にこだわって更生の余地をなくすほど俺は厳しくないのぞな!!」と言つてこの内容を強行した。

公的機関としてはあまりいい顔はされない判断だ。

しかし、全知たる神である彼がそれでもそれを選んだのは情なのか、或いは下界の間では見通せない何かを見ているからなのか。

少し、納得ができない……というよりは拍子抜けしてしまつたりだが、軽い罰で済んだことを無邪気に喜ぶベルを見ていると厳罰にしてくれとも言ひ出せず、この罰を受け入れていた。

(今思えばベル様を隣に置くことでリリの反論を防いでいたような……)

エキセントリック  
風変わりな存在とは言え神という事か。

そんなわけで再び温かい日常に戻ることができたりだが、そこからが大変だった。主神が半分廃人状態なので「ソーマ・ファミリア」からの脱退ができないのである。

トラウマがある神とは言え、勇気を振り絞つて交渉に臨んでもブツブツと何事かを呟くだけで碌に返事が返つてこない。というよりアレはリリの言葉が聞こえていないの  
だろう。

意地悪で聞こえないふりをしているわけでもないから困りものだ。

同行していた「ガネーシャ・ファミリア」の団員も完全に自分の中に閉じこもるソーマに呆れてしまっていた。

おかげでファミリアの脱退が全く進まず、リリの背中の恩恵は未だに「ソーマ・ファミリア」のもののみだ。

（大変と言えばヘステイア様も大変でしたね……）

ベルがリリを追いかけることは見逃していたヘステイアだが、決してこの展開を歓迎したわけではない。

ヘステイアからすればリリはベルを嵌めようとして近づいたわけだから良い印象などあるはずがない……と言うわけではない。

少年の主神だけあってヘステイアはあまりそう言ったことにはとらわれない。

釘は刺してもリリの未来を思いやれるのは正真正銘、彼女が慈愛の女神だからだろう。

リリが頭を悩ませているのはもつと単純な理由だ。

『「先ず問題が解決したことにはおめでどうと云っておこうサポーター君。し・か・し！ベル君は渡さないからなああああ!? あの子はボクのだあああああああ!!』

どうやらヘステイアにベルを巡る恋敵認定されたらしい。

女神の威嚇（チワワ級の迫力）によってベルとヘステイアの嬉し恥ずかしエピソード



がこれでもかと展開され、「ガネーシャ・ファミリア」の団員たちのいい見世物になったのは記憶に新しい。

（初めは本当に言いがかりだったのに、本当にそうなってしまったから世話がありません）

初めて牽制されたのは地下水路の時だったか、その頃は恋愛感情などなかったはずなのだが、そのままずると彼に惹かれていき先日についてトドメを刺された。

向こうにはその気はないらしいのが実に悪質だ。

無論、しっかりとヘステイアのノロケエピソードにはダメージを食らいつつ、衆目の前で自分を欲せられた話で反撃した。

そしてヘステイアは轟沈してヘファイストスに泣きつきにいくのでした。ざまあ見ろです。

「本当に、変わっちゃったなあ……」

ふとした日常で笑みを浮かべる自分を見る度に、かつての氷に心を包んで何事にも無感動になっていた自分とのギャップを感じずにはいられない。

背に残る酒神の刻印からはまだ解放されていないのに、こんなにも毎日が楽しいのはどうしてか。

思い浮かべる色の名は白。

処女雪のように真っ白な少年。

魔法の時間を告げる鐘の音のように、響いた刹那の時間は何よりもリリの胸を熱くさせる。

出会いを求めてダンジョンに来たと彼は言う。

多くの人が馬鹿にするであろう動機をリリだけは馬鹿にはできない。

何故なら彼女は本当にダンジョンで出会ってしまったのだから。

人生を、運命を変えてしまうほどのとびきりの出会いを。

その背中を覚える。

話にならない位に弱いのに、懸命に少女を守る愚かで尊い小さな勇気を。

その鼓動を覚える。

馬鹿みたいに強大な相手を前に、恐怖で泣きそうになりながら、それでも少女を守る

のだと強く胸に抱いた決意を。

なにより。

なによりもその笑顔が忘れられない。

体中泥まみれの傷だらけで、なにも知らぬ者が見れば滑稽極まりない姿を晒しながら、

それでも守れたのだと喜ぶ、あの打算など欠片もない眩いお人好しを。

小さな出会いが本当に世界を変えてしまった。

まるで別世界に迷い込んでしまったかのような幸せな時間がそこにある。

それはリリの当初の目論見通りに人から奪った金品で「ソーマ・ファミリア」を退団しても、きつと手に入らなかつたものだ。

(温かい)

ポカポカと体を温めるこの感覚は日の光によるものだけではない。

少年を知るたびに強く、大きくなっていったこの想いが心臓の鼓動を早めているのだ。

身体を包み込む春の息吹のような温もりは夢心地で微睡みそう。

内から生まれた熱によって心の氷は何時の間にやらじわりじわりと溶かされて、最後は力尽くで砕かれてしまった。

そうなればもう自覚するしかない。

リリルカ・アーデはあの純白の光に恋をしたのだ。

今もそう、「アイアム・ガネーシヤ」の前を人が横切るたびに、あの白髪を探している。足音が聞こえるだけで過敏に反応してしまうのは盗賊時代のようなだが、あの時とは別の意味でリリの心は張り詰めていた。

自分は普通にできているだろうか。

彼を見てすぐに笑みを浮かべられるだろうか。

そんな風に他人から見ればどうでもいいようなことまで気にして思考がぐるぐると高速で堂々巡りの回転する。

恋は盲目という言葉の意味が理解できた。

確かにこれは想い人のこと以外は考える余裕はない。

実の所、集合時間までは大分時間がある。

それなのにこんなに早く来てしまったのはきつとこの想いのせい。

全く普段の冷静な自分を保てなくて、外の風に吹かれればこの熱も少しは冷めるのではないかと入り口に立つことにしたのだ。

ちよつと早すぎて、リリが入り口に来た頃にホームを出ていった人がちらほらと戻ってくることもあった。

そしてその人に「ただだけ待っているんだ？」と怪訝な目で見られて赤面する。

(ヘスティア様に対抗するためにグイグイ行こうとは思ってましたが……)

恋は自覚したが、自分は思っていた以上に熱に浮かれているらしい。

彼に心を振り回される感覚は決して嫌いではないが、制御できないのは困りものだ。

想いで熱くなるばかりの体を冷やすために外に出たが、ぼんやりと考え事ができるくらいに暇になったので悪化している気がするのは気のせいか。

思わぬ罨であった。

思い描いていた攻勢に出られるにはもうちよつと時間がかかりそうである。

(早く来て欲しいような……もうちよつと待って欲しいような……)

何とも踏ん切りがつかない情けなき。

勇気の小人族バルックムが聞いて呆れるというものだ。

しかし、仕方ないではないか。好きなものだから。

「ベル様……」

何の意味もなく少年の名を口にした。

それだけで幸福になれる自分はもう末期なのだろう。

正直、この恋慕が叶うことは難しいとリリは考えている。

自分が彼の隣に立てるだけの価値があるとはやはり思えないし、気後れする思いは今もある。

そもそも彼の中で自分の立ち位置が子分になっている気がしなくもない。

おのれ朴念仁。

(そもそも恋敵も多くありませんか?)

目下最大の壁であるヘスティアは勿論のこと。

弁当を毎日受け取っている酒場の看板娘やら、ギルドの専属アドバイザーやら……

どうも怪しい人物たちがベルに矢印を向けている気がする。

何だか歓楽街にも知り合いがいそうである様子も見える……ベッドの上から始まる恋は認めませんよ？

そこまで考えて、また笑みを浮かべる。

(幸せだなあ)

優しい人たちに囲まれて。

恋に一喜一憂して。

自分が貰つていいのだろうかというくらいに幸福。

これが夢ならば自分はシヨックでどうにかなつてしまふだろう。

「あつ……」

<sup>ブーツ</sup>革靴の音が聞こえる。

キュツ、キュツと他とは少し違う音だ。

それはベルの靴音。聞いた瞬間に確信できた。

中古品だったらしく、どうしても歩く度に音がするのだとか。

新品に変えようにも借金だらけのファミリアの財産事情を見ると気後れするから使い続けていると少年は話していたのを思い出す。

姿はまだ見えない。

それでもすぐ近くまで来ている。

どくどくと心臓の音がうるさくていけない。

ほんの数秒の出来事のはずなのに世界がゆったりと動いて見える。

自分は気付かぬうちにあのピンクの錠剤を飲んでしまったのか。

加速する世界の中で、大丈夫かな、変に思われなかな、と無意味な思考する。

考えて、考えて……結局、考えるのをやめた。

賢しく振舞うのはやめよう。

散々迷惑をかけて、いっぱい無様を晒した。

ヘステイアも言っていたではないか。あれこれ考えて、気に病みそうになることはあるけれどそんなのはただの自己満足だ。

本当に必要なのは反省と感謝。

もう間違えは犯さないという誓いと、こんなリを救ってくれてありがとうという想い。

それを彼に伝えよう。

言葉だけではなく行動で。

差し当たってまずは何をしようか。

自分を救ってくれたあの笑みに対して、自分は何を返すべきか。

ちよつと迷ってから、今度はすんなりと答えが出た。

笑みには笑みを返すべきだ。

自分は貴方のおかげで幸せになれたと伝えるにはそれが一番やがて、待ち望んでいた白髪と深紅ルベライトの瞳が現れた。

少年はすぐに少女に気付き、小走りでリリの所に向かう。

「ごめん、リリ。待たせちゃった？」

「いいえ、大して待ってませんよ？」

全く待つてなどいなかった。その言葉に嘘はない。

少年を思うと、時は瞬く間に過ぎたのだから。

「……じゃあ、また行こう？ 冒険に」

伸ばされる手。

小人族バルウムとは違う、大きな手をリリは向日葵ひまわりのような笑みと共に取った。

「はいーベル様！」

空は蒼く、世界を優しく包む。

その下で人々は出会いと別れと再会を繰り返す。

再始動リセットした少年と少女は、また新しく積み重ねるために今日もダンジョンに向かった。

次に十二時のお告げが来ても、今度は決して離れないように。





最も早くイレギュラーの存在に気が付いたフィンは確信をもって口にす。

ダンジョン2階層で起きた魔石の大量発生から始まるオラリオを騒がせた馬鹿騒ぎの数々。

その元凶が少年なのだ。

「ひみつ道具、だったか。また随分と面白い冒険者が生まれたものなのう」

「これまでの彼の行動を考えると我々は頭が痛いかな……」

豪快に笑うガレスとは対照的にリヴェリアの表情は鋭い。

「ひみつ道具というマジックアイテムの力は分かった。フィン、ガレス。お前たちから見てベル・クラネルと言う少年はどう映った」

この三人の中で最もベルとのかかわりが薄いのはリヴェリアだ。

リヴェリアの街の防衛戦ではどこでもドアを使って転移する際に二、三言話した程度では少年に対する評価のつけようがない。

故に地下水路で共闘したガレスと、リヴェリアの街で一時的に部下にしたフィンにその目にどう映ったかを問う。

「未熟もいところだが、根性はある小僧だった。遥か格上との戦いでも恐怖に吞まれなかったのは見事だったぞ」

「裏表のない子供……それが現段階の評価かな。良くも悪くも純粋だ」

ガレスからは地下水路での戦いぶりから高評価、フィンは無難な印象と言うところか。

「どうやら問題のある人格ではないようだ。」

「そうか。ならば闇派閥イツイルスと結ぶことは無いと考えていいか？」

ベルを考えるうえで真つ先に危険視したのはその可能性だ。

これまでの共闘は半ばなし崩しのものであり、ベルは決して「ロキ・ファミリア」の味方ではない。

アイズやレフィーヤからの印象で悪人ではないだろうとは思っていたが、フィンやガレスと言った老獪な冒険者から見てもそうならば間違いないだろう。

「ああ、彼が自分から闇派閥イツイルスに与することは無いだろう。自分からは……ね」

闇派閥とは真つ当な組織ではない。

その構成員も全員が志願して眷属になったわけではないのだ。

と言うか嬉々として自爆装置を体に括りつけるような奴らが自然に大量発生してたまるかと言う話だ。

「拉致をして洗脳、或いは人質を取って言いなりに……」

「まあ、奴らならばそうするじゃろうな」

ひみつ道具という規格外は秩序側以上に混沌側が欲するアイテムだ。

後先を考えなくていい破壊者たちからすれば、ひみつ道具は絶対に予想できない切り札。

もし、敵にベルがいて。たまたまその日に有用なひみつ道具を持っていればと考えれば最悪だ。

いかに「ロキ・ファミリア」の未知への適応力が優れているといっても限度がある。初見殺しの効果があれば最初の一回は確実に食らうてしまおうだろう。

その一回を致命傷にするくらいは闇イッパル派閥だつて考えるはずだ。

極論、どこでもドアでロキを直接殺せば「ロキ・ファミリア」は壊滅するのだから。おちおち遠征にも行けなくなる。

「いっそのこと「ヘステイア・ファミリア」を取り込めれば話は終わるが」  
「できると思ukai?」

「無理だろうな。ロキと神ヘステイアの相性の悪さは地下水路で散々見せられたわい」  
ベルを保護しようにも主神同士がいがみ合っていればいらぬ問題を引き起こす。

神とは強烈な個の持ち主。

波長が合わないものと仲良く協力などできるはずがない。

ロキとヘステイアの不仲がここにきて痛い。

ベル・クラネルはヘステイアの眷属だ。

神様が嫌いなものは僕も嫌いとなっていて不思議ではない。

「そもそも懐柔しようにも大きな問題がある」

「ん？何だい？」

「アイズによると先日の宴でベートが誇った少年がこのベル・クラネルらしい」

「……あー」

「しかもその場に彼本人がいたらしい」

「地下水路で妙にベートに怯えていたのはそのせいか……こちらに好印象を持っているはずもないのう」

一斉に頭を抱える3人。

ベートの問題行動は承知していたが、ここで響くとは。

「それは……ちゃんと謝れたのかい？」

「アイズはそうしようとしてしているらしいが……毎回逃げられるらしい」

「はは……」

リヴィラの街では心に余裕がなく、無視するような対応をしてしまったと落ち込んでいたアイズを知るリヴェリアの言葉にフィンから枯れた笑いが出た。

報復されてもおかしくない団員たちの行動に「今度から団員たちのマナー教育も行うべきかな」と少し考えてしまう。



オラリオの情報通は勿論、今回大きな損害を受けた闇派閥イヴィルスがそれを怠るはずがない。噂話に右往左往しているのは末端だけ。

首脳部は既にベルの存在を感じていた。

「ひひっ、これが例のガキか？こんなガキに一泡吹かれるたあ怪人クリーチャー様も大したこたあねえなあ」

部下たちによって作られた人相書きを見た女は笑う。

そもそもあの一件は怪人クリーチャー人によって引き起こされたものだ。

自爆兵を持っていかれたが、それ以上に怪人クリーチャー人の面目を潰せた方が大きい。

白装束の信徒たちに囲まれる女は愉快気に人相書きを放ると、骸骨のレリーフが刻まれた椅子に音を立てて座り込んだ。

「そもそもオリヴァス如きにクソ勇者フィをどうこうできるはずがねえ。エニユオなんて御大層な名前のスポンサー様も少しはこれで大人しくなるだろうさ」

女にとってオリヴァスが負けることは想定通りだった。

扇動者としては有能な男ではあるが、指揮官としては扇動した暴徒と共に自分も冷静な判断力を失うという本末転倒な男だ。

感情を排した冷徹な判断が売りのフィンの相手が務まるはずがない。

(とは言え、ここらまで完敗することは予想外だったかな)

嘲笑の裏で女は冷静に思考する。

オリヴァスの作戦の失敗自体は予想通りだが、冒険者たち側に犠牲が出ていないのは予想外だ。

これが「ロキ・ファミリア」のみならばあの怪物どもなら当然のことだと納得できたが、18階層に到達するのがやつとの木っ端冒険者すら仕留められていないのはどういうことか。

その答えがこのヒューマンだった。

「しかし、本当なのでしようか。こんな子供が妖術じみた異変を……」

「そういうもんだろうが恩恵ファルナなんざ。それこそ「鍛冶」のアビリティすら持たずに魔剣を作っちゃうクロツゾとやらも王国ラキアにはいる。こいつがおかしなスキルなり魔法なりを持つていたとしても不思議じゃねえ」

このヒューマンの使うマジックアイテムは正に規格外。

その効果はこれまで被害にあつてきた闇派閥イザイルスはよく知っている。

「レベル1が持つには過ぎた力だ。私たちならもつと有効活用してやれるぜ」

混沌をもたらすマジックアイテムなど、実に闇派閥イザイルス好みだ。

あれほど有用なマジックアイテムを好き勝手使っていないのを見るに、何らかの制限があるのかもしれないが、その効果は魅力的である。





神アルカナムの力を行使できない象神に未来を見通す力はない。

だが、人々の守護者として世界を見守り続けた彼だからこそ分かる。

不完全なこの世界にたびたび起きた変革と言う名の嵐。

今ある平穩はその前触れに過ぎないのだと。

「……スキルが知られれば彼の生活はこれまで通りとはいかないだろう。誰もが欲するはずだ。世界を変えかねない力を」

そうなれば、「ガネーシャ・ファミリア」もまた彼との関係を変えなければならなくなる。

ひみつ道具を持つベルを保護し続けていれば様々な勢力から非難を受けかねない。

「アイアム・ガネーシャ」内で保護している今は困い込みと言われてもおかしくはないのだ。

都市の憲兵たる「ガネーシャ・ファミリア」への信頼が損なわれることは、オラリオの治安悪化にも繋がりがかねない。

既に闇派閥イツイルスの影響で、現在の治安は決まるとは言えない。

ベルの存在は「ガネーシャ・ファミリア」と他派閥との関係に罅を入れる危険な要素だ。

「だが、守らなければならぬ」

ガネーシヤの言葉にシヤクテイも無言で頷く。

例えばベルを保護し続けることに不利益があつたとしても、それはベルを放り出す理由にはならない。

「ベル・クラネルがこれから背負わされるものは大きいだろう。既に現段階ですら闇派閥以外に異端児イヴイルスと言ゼノスう爆弾を抱え込んでいる」

これまで幾度となく妨害してきた闇派閥イヴイルスは勿論、リヴィラの街の活躍で勇者ブレイバもベルを取り込もうと画策するだろう。

それだけでも一冒険者には重すぎる事実だが、異端児ゼノスはさらに不味い。下界を揺るがす爆弾。

それを前に少年がどのような決断を下すか。

……既にホーム内で何度も彼と交流したシヤクテイには何となく、それが分かつてしまった。

「それに、フレイヤが動くかもしれん」

「なに？、神フレイヤが？」

「ああ、モダーカが俺にだけ話した。不確定な情報だが、襲撃者は【猛者おっしや】かもしれない」と

暗黒期では派閥の枠を超えて共闘することが多かつた。



警戒した勢力も概ね自分の思い通りに動いた。

チヨロチヨロと自分の周りを嗅ぎまわる男神は面倒だが、それも些細なことだ。全ては順調……にもかかわらず何故こうなっている？

血が流れない。

冒険者たちの勝鬨かちどきは止まない。

人々は警戒しつつも日々の中で笑顔を絶やさない。

こんなことは間違っている。

下界にはもつと相応しい世界があるはずだ。

大好きな下界をもつと見ていたかったから、天界から降りたというのに台無しではないか。

どいつもこいつも腹立たしい。

自分を善神だと思い込んでいる馬鹿どもが向ける笑みのなんと心をささくれだたせることか。

いつも以上に酪酊を深めていなければ、余りの苛立ちに眷属の首を絞めてしまうところだった。

それでは約束は果たせないというのに。

癩癩を抑えて原因を探る。

計画はまだ修正できるレベルにしか狂ってはいない。

謎を秘めた冷酷なエニユオの仮面に罅が入らぬうちに、新たなる狂乱オルギアを用意しなければ。

そう考えた神は眷属たちに命じて情報を収集する。

そうして、一度冷静に立て直すのだ。

そんな神の目論見は浮かび上がった情報によって、激情で塗りつぶされた。



そしてオラリオを管理するギルドの地下。

本来は最高神しか入ることが許されない祈祷の間で荒れ狂う黒色のローブ。

幽霊のような印象を与えるその容姿を見れば、ギルドの受付嬢であるミイシャあたりは絶叫するかもしれない。

異様に怒り狂っている今ならばなおのこと。

「……フェルズ。落ち着け」

「これが落ち着いていられるかうラノス！」

老人の姿をした神ウラノスは何処か困ったような表情でローブの人物を宥めるが、怒り心頭な黒ローブは聞く耳を持たない。

「私が今、市中でどう噂されているか知っているか!? 幼女を愛し、幼女じゃなければ微妙な悪戯をして、男たちにロリコン化の呪いをかけながら歓楽街で幼女を求めてさまよう

<sup>ゴースト</sup>幽霊だぞ!!」

彼は被害者であった。

ざまあみろと言える闇派閥イヴィルスやエニユオとは違い、何も悪事は働いていないのにとんでもない風評被害に苛まれている。

「しかしフェルズ。こう言つては何だが、お前が人前に出ることは滅多にない。すぐに消えるであろう噂など気にする必要はなからう」



「ああ、そうだとも……何故カリドたちにまで噂が伝わっていないかな!!」

こうなつてから人に会わない日々が続く中、リドたちとは長い付き合いになる。

そんな彼らにちよつと引かれた目で見られるのは堪えるのだ。

「ま、まあ俺つちたちも困難な夢を持っているからな!フェルズも一緒に頑張ろうぜ!!」と斜め上の気遣いをされた時は本気で死にたくなつた。

「まったく、一体どうやって人との交流が少ないリドたちに噂話が……」

「……」

「その沈黙は何だウラノス。……まさか、お前か?お前がリドたちに教えたんだなウラノス!」

まさかの最高神の裏切りに胸元を掴まればかりに詰め寄る黒ローブ。

部外者が見たら今まさにウラノスが襲われているように見えるだろう。

「定期報告を受けた際に、真面目すぎてつまらないから何か面白いことを言えと言われてな……」

「今の私が面白いと?いい冗談だ、お前も許さん」

暫くウラノス相手に鬱憤を晴らした後、フェルズは怒りのままに叫ぶのだった。

「覚えていろベル・クラネル!!この返礼は高くつくぞ……具体的には透明になつて砂糖



## Next stage

背中に波紋が走る。

人の可能性を引き出す神イコルの血は少年が今まで歩んできた道を記録していた。

共にダンジョンで冒険することが出来ない神々は、刻印に刻まれた経験値を拾い上げることで初めて新しい物語を知ることができるのだ。

ヘスティアはこの瞬間が好きだ。

大好きなベルが歩んだ時間を感じることができるとこの時が。

神おやとして眷属こどもの成長を目の当たりにする幸福は何よりも得難い。

(走り始めて一ヶ月。永遠を生きるボクたちにとっては瞬く間の出来事なのに、こんなに彼は歩みを進めていたんだな)

炉にくべられた灯を模す刻印。

そこに浮かび上がる経験値エクセリアを指でなぞる。

ヘスティアによって最適化されたベルの上質な経験値は、ベルの血肉となって彼をまた一つ強靱な冒険者に近づけた。

ベルの成長を早める【憧憬リアリス・フレイゼ一途】。

その原動力がヴァレン何某への恋心と言うのは少し思うところがあるが、何ともベルらしいスキルでもあると思う。

復讐でも憎悪でもない。

馬鹿みたいに一途な想いを胸に駆け上がるベルだからこそ発現したスキル。

ベルの理想である【四次元衣囊フォース・ディメンション・ポーチ】に振り回されない強さは着実につけられていた。

きつと、少女を救う物語こそ彼の初めての冒険だった。

あの戦いがベルを冒険者として一皮むけさせたのだ。

（本当に下界の眷属こどもは変わりやすい……悔しいな、ボクも神じゃなければ一緒に隣を歩けたかもしれないのに）

成長するとはどんな気持ちなのだろうか。

きつと今、オラリオで一番早く成長している少年を見ながらヘスティアは思った。

「……君はどんどん速くなっていくね」

生き急いでもとも言えるほどに戦い続ける眷属を心配する気持ちが無いと言えは嘘になる。

だが、限りある命だからこそできる、生命を燃やしても進むその姿を尊いと思ってしまうのは神の性サガなのだろう。

本当に良く頑張った。

だから、きつとこの結果も必然。

ステイタスを更新し終えたハステイアはほう、と小さく息をつく。

気が付けば額を濡らしていた汗に、自分も初めての作業に緊張していたらしいと苦笑した。

一度、ベルのステイタスを確認する。

もう、見ることは無いであろう無名の冒険者であったベル・クラネルの小さな冒険の数々。

それらを越えてベルが飛び込むのは新たな位階。

脳裏にその光景を刻み込むと、フェアルナ恩恵を塗りつぶす。

限界を超えて蓄えられた熟練度アベリテイも0に還っていく。

しかし、それは終わりを意味するのではない。

ここから新しい冒険ネクストステージが始まる。

「おめでとう、ベル君。【ランクアップ】だ」

万感の想いを込めて。

女神は少年を祝福した。



「……」

「どうしたんだい？」

「いえ、特に、変わらないんですね？」

何となく、ランクアップは凄いいことだと思っていたから少し拍子抜けしてしまう。

レベル1だった数分前と何も変わらない。

何だか思っていたのと違う気がする。

「そりゃー体が変わったわけでもないからね。変な風と稲妻が巻き起こって髪が逆立つ

……みたいな派手な演出を期待させていたなら謝るよ」

ケラケラと笑う神様。

でもよく考えたら四六時中力が漲っていたら絶対に私生活に支障が出るし、当然かも  
しれない。

「でも、器の昇華はもう果たしている。実感できなくても今までとは次元違いの力を使  
えるはずさ」

ランクアップとは人間が神に近づくことなのだという。

デウス・デア  
超越存在にほんの僅かでも近づいているレベル2は正に別物。

レベル1がまだ常識レベルの超人なのに対して、ランクアップを果たした上級冒険者  
は半分物語の住民だ。

今までのステイタス更新でも十分に成長は感じられたはずなのに、今は一体どうなっているのだろうか。

振り回されないだろうか。

「スキルとかは発現していませんね」

「うん、残念ながらね。ヘファイストス曰くランクアップするほどの冒険を乗り越えた後は、結構な確率で新しいスキルや魔法を覚えられるそうだけど、ベル君の資質に合った経験値<sup>エクセリア</sup>ではなかったみたいだね」

ザニスさんの戦いは凄く苦しかったし、何か新しい能力が追加されると思ったけどそう簡単には行かないみたいだ。

噂じゃ5個以上のスキルを持っている人とかもいるらしいけど、どんな冒険をしたんだろ？

「でも、発展アビリティはちゃんと発現しているだろ？それすら出てこない冒険者もいるらしいし万々歳だよ」

「でもこの発展アビリティはよく分からないですから……」

発展アビリティは基本アビリティとは異なり特殊、或いは専門的な能力を与える。

発現のタイミングはランクアップするごとに1つずつ追加できる。

どのようなアビリティが生まれるかは恩恵<sup>ファルナ</sup>を授かった眷属の行動次第。

特筆すべき行動がなければランクアップしてもアビリティは発現しない。

「幸運」は本当に良く分からないですから……正直、「狩人」の方がカッコ……いや、安全だったかも、とは思っちゃいますね」

ただし、特筆すべき経験があれば複数のアビリティが選択肢に出てくることになる。そうなるのとどれを選べばいいか悩みモノだ。

中にはそのレベルでしか発現できないものもあるし。「狩人」とか。

「実際「狩人」なら間違いはなかっただろうね」

発展アビリティ「狩人」は短期間で多くのモンスターを倒した者にのみ発現する。

その効果は一度倒したモンスターに対するステータスの補正。

エイナさんによると冒険者に最も人気のあるアビリティの一つらしい。

冒険者ほどモンスターと戦う職業もそうはないし、僕が発現できればかなり探索が楽になったはずだ。

それに対して「幸運」は謎が多いアビリティだ。

多分、その名の通り運がよくなるのだらうけど、どの程度の効果はあるかは不明。

数多くの冒険者のスキルやアビリティを記録しているギルドですら、この発展アビリティに関する情報はなかった。

ヘタをすれば僕が初めて会得したレアアビリティなのかもしれない。



エイナさんの予想では、ランダムで手に入るドロップアイテムが出てきやすいのではないかということだが。

これを発現させた神様の勘によると加護のようなものらしい。神様はこれこそ君に必要なアビリティだ!!と物凄い推してきた。

3つ目の選択肢であった【耐異常】はレベル3でも取れるから、実質的に【狩人】と【幸運】の二択。

手堅い【狩人】で冒険者としての地力を高めるというのも、僕が目標にするひみつ道具頼りではない冒険者への近道に思えたが、最終的に選んだのは【幸運】だ。

ドロップアイテムと同じくランダムなひみつ道具に対する補正が期待できたし、何よりもオンリーワンと言うのは心強い。

使いこなせば僕だけにしかできないこともできるようになるかもしれない。

賭けではあったけど、僕は未知の力を選んだのだ。

「手っ取り早くアビリティの効果を確認するにはどうすればいいんでしょうか……  
賭け事?」  
ギャンブル

「止めておきたまえ、オラリオのカジノは魔境だよ。それに借金漬けのファミリアが賭け狂いになったらかなりカッコ悪いよ?」

手早く稼げるし良いのではないかとも思ったが、神様は反対らしい。

まあ、「耐異常」を持っていても全ての毒を無効化できるわけではない。

同様に【幸運】があつたところでずつと賭けに勝てるわけでもないだろう。

調子に乗れば痛い目に会うかもしれない。

「暫くはドロップアイテムの発生率を比較しよう」

「……その方がよさそうですね」

ひみつ道具を試すのもそうだけど、短絡的に物事を進めると痛い目を見る。

既に【ソーマ・ファミリア】との件でいろんな人に心配をかけてしまった身だ。

出来るだけ慎重でいるように心がけよう。

「まあ、朝っぱらから難しい話ばかりするのも何だし、もつと楽しい話をしようか」

「楽しい話？」

「冒険の後は盛大に宴を……冒険者の常識だろうか？」

何と神様は選択する発展アビリティを考えるためにランクアップを保留にしていた

間に、僕のレベル2記念のお祝いを計画していたらしい。

「場所は勿論君の行きつけの【豊穡の女主人】だ！もう、予約もとっているぜ！サポー

ター君と楽しむといい」

「サポーター君と……つて神様は行かないんですか？」

すると神様はどよーんと肩を落とす。

「行きたかったけど急にシフトが変わっちゃって……他の日も空いてないし……」  
「何かあったんですか？」

「うん。何でもフレイヤのところが無茶な注文をしたらしくて、てんやわんやだよ。くそう何で予約した後なんだ」

これはボクとベル君を引き離すためのフレイヤの陰謀だ！と叫ぶ神様。

都市最強派閥が僕みたいな一冒険者に興味はないと思いますよ神様。

「せっかく例のシル何某を見てみようと思っただのにさ」

「あれ？神様ってシルさんと会ったことありませんでしたっけ？」

「うん。前の怪物祭の時も結局会わなかったし、この前予約にいったときも出掛けてるって。ベル君にちよっかい出してるからどんな娘か見てやろうと思っただのに！」

神様は絶対ボクから逃げているね間違いないと腕を組む。

結構近くにいる機会は多かったのにギリギリのところまで面識がないままだったのか。

「と言うわけだ。絶対に参加するであろうシル何某とも楽しむがいいっ！と言うかヴァレン何某も参加してW何某になっちゃう気がする」

「W何某って何ですか……」

「神の勘。ツインテールがピョコンってなった」

（神様の勘ってそうやって受信しているんだ……）

アイズさんが参加する状況なんて想像出来ないけど、神様の勘って結構当たるからな……

ちよつと期待しちゃう。

「あ、ヴァレン何某と言えば」

そこで神様は何やら手紙らしきものを取り出す。

何だろう。かなり上質そうな紙だけ。

宛名は……僕？

「さつきガネーシャのホームのポストに入っていたらしくてね。イルタ君が届けてくれたよ」

イウイルス

闇派閥とのあれこれがあった後だし、僕に届く荷物は全て「ガネーシャ・ファミリア」の人によって検閲してあるらしい。

中身がカミソリならまだ良い方な状況に置かれている僕だから正直ありがたい話だ。

「ねえベル君。確認だけど「ロキ・ファミリア」とはイウイルス闇派閥とのゴタゴタで共闘しただけ

だよな？」

「は、はい。そうですけど……」

「先日の件を謝罪したいって書いてあるんだけど……」

「へ？」

謝罪……謝罪？

全く心当たりがない。

「しかも団長直々に……本当に何もなかったのかい？」

「なかったと思います。多分」

何だか自信がなくなってきた。

他の人によく言われることだが、僕って結構鈍感らしいし。

リリにももう少し周りからどう見られているか自覚しましょうねーと言われたばかりだ。

（団長……ってことはあの勇者のフインさんか？）

18階層で僅かな間だが指揮下に入ったことのある第一級冒険者の顔を脳裏に浮かべる。

遙か彼方の人物であるあの人とこんな早く再会するとは思わなかった。

「どうするんだい？ 行くのかい？ 提案されている日にちはお店の予約をしてある日と被るけど」

「時間的には余裕がありますし、行ってみようと思います。何かすれ違いがあるかも知れませんが」

神様から手紙を受け取って中身をしっかりと確認する。

うん。ホントに謝罪したいって書かれている。

こんなに偉い人の手紙を無視するのも失礼だろうし、ちゃんと行かないと。

場所は……喫茶店かな？

(本当はすぐにダンジョンに行きたかったけど、レベル2の力を確認するのはまた今度にしよう)

「それじゃあ、ちよつと切手とかを買いに行きます」

「うん。気を付けるんだよ」

早速、手紙の返事を書くために便箋を買いに雑貨店に向かう。

フィンさんから来た手紙には「ロキ・ファミリア」の紋章がスタンプされていたけど、<sup>エプレム</sup>の紋章がスタンプされていたけど、僕もやったほうがいいのかな？でも「ヘステイア・ファミリア」にそんな物ないし……

そんなことを考えながら「アイアム・ガネーシャ」を出た。

臉を焼く太陽の光に思わず手を翳す。

突き刺すような光だが、ホーム内にいた時に予想していたほどの暑さはない。

バタバタと服を打ち付ける風のせいだろうか。

空は連日の荒れた天気が嘘のような青空だ。

風に流れる白い雲は海原に泡立つ空気のように。

ぐんぐんとぐんぐんと、雲は青空を置き去りに進んでいく。

「……」

器の昇華と言う一つの区切りを得て知らず舞い上がっているのだろうか。

ざわつく心が風を焦燥感に錯覚させる。

ベルは穏やかなように絶えず変化する空模様を見て何故か、世界の流れが加速しているようだと思ってしまった。

## 不穏な街

都市西南の第六区画。

そこに建つ『ウイーシエ』と言う小綺麗な喫茶店がフィンからの手紙に記された場所だった。

「た、高そう……」

ベルから出て来たのはそんな小市民的な感想。

出身である名前も無い様な村には、喫茶店なんて洒落な場所はなかったから、全く作法マナーが分からない。田舎者だと馬鹿にされないだろうか。

服装も貧乏ファミリアではいつも使っているようなものしか用意できないかった。

こういう他派閥同士の話し合いだとどちらかのホームで行うと角が立つかも知れないという事なのだろうか。

それともいい店を紹介しようというフィンの純粹な善意か。

どちらにせよベルは猛烈に逃げたかった。

場違い感がすごいし、謝罪と言われてもまるで心当たりがない。

もし何か勘違いとかだったら絶対に気まずくなる。



とは言え一度行きますと返信したわけなのだから、バックレるわけにもいかない。それは流石に失礼と言うものだ。

意を決して扉を開く。

カラン、コロンと透き通るような鐘ベルの音が響いた。

外見に違わず、店内も清潔で心なしか空気も澄んでいるようだ。

眼鏡をかけたエルフの主人がマスター出迎えてくれると、奥のテーブルに案内される。

もう予約されているという事らしい。

いよいよ緊張のあまり迷宮神聖譚ダンジョン・オラトリアの登場人物を数え始める。

(騎士フルランド、狼帝の末裔サルオン、アマゾネスの女帝イヴェルタ、不死卿ガルザーネフ、覇の槍シドウ、精霊王朝スフィア、汚れ知らぬ妖精王ハイエルフの聖女セルディア、傭兵王ヴァルトシュティン……あ、これはお祖父ちゃんのオリジナルだった。正しいのは大英雄アルバートだ。また最初からやり直さないと……)

素数を数えるノリでやっている他の人に聞かれれば、間違いなく引かれるであろう行為を続けて現実逃避をするべし。

だがそんな時間稼ぎが上手くいくはずもなく、先に席で待っていたフィンに声をかけられたことで思考を中断される。

「やあ、よく来てくれたね。ベル・クラネル」

「お、お久しぶりです。えっと……今日はどういうう？」

ベルのピンとしていない様子に、フィンパーティーは苦笑しながら着席を促した。

「先日の遠征の祝勝の宴の際……【豊穡の女主人】でウチの団員が君に対して働いてしまった件について、謝罪をしたかったんだ。本当に申し訳なかった」

そう言つて頭を下げるフィン。

都市でも有数の実力者が自分に頭を下げている現実慌てるベル。

「フィンさん！僕なんかに頭を……」

急いで周りを確認する。

都市最強派閥の団長が自分のような木っ端冒険者に頭を下げている所を見られたら大問題だ。

「ロキ・ファミリア」の看板にも傷がつくかもしれない。

「いや。君に不快な思いをさせたのはベートの悪癖を知っていながら強く咎めることを怠つた僕たちの怠慢だ」

「いいですから、その件についてはもうベートさんと和解済みです！」

「……ベートが？」

ベートがベルに謝罪した事実が余程予想外だったのか、キョトンとしたフィンの顔。今ベルはすごく貴重なものを見れているのかもしれない。

「この前、ベートさんに迷惑かけてしまったときにお互いに謝って水に流したんです。だからフィンさんが頭を下げる必要何てありませんよ」

「……そうか、ベートが」

少し、フィン表情が柔らかくなった。

まるで団員の変化を喜ぶように浮かべたその顔に、ベルはヘスティアが時おり見せる庇護者としての姿が重なって見えた。

少しの間の後、再び団長としての顔にあらためたフィンは小さく首を振る。

「それでも団員ペイトの行動の責任は団長僕にある。ベル・クラネル。どうか、この謝罪を受け取ってくれないか」

そう言つて再び頭を下げるフィン。

あらかじめ注文しておいてあつた紅茶が二人の前に並ぶ。

上品な香りが漂うがまるで手をつける気にはならない。

「わ、分かりました。「ロキ・ファミリア」の皆さんには何度も助けられていますから、もうその位で……」

「そう言つて貰えると助かるよ」

暫く下げ続けていた頭をようやく上げたのを見て、思わず安堵の息をつく。

世に知らない者はいないと断言できる位に有名な冒険者が自分などを相手に頭を下

げている光景はなかなか心臓に悪い。

噂に聞く勇者の熱烈な信奉者に睨まれる案件だ。

神様たちは追跡者T型とか言っていた気がする。

「居心地の悪い思いをさせてしまつてすまない。だが、君に受けてきた恩に対して僕たちが与えたのは暴言だけではあんまりだ」

「お、恩？」

「ああ、怪物モンスター祭でレファイヤを救つてくれた恩。地下水路でガレスたちと共闘してくれた恩。最近ではリヴィラの攻防戦だ。これらの戦いで君がいてくれたことによる功績を否定するものなどないだろう」

そこでフインは言葉を区切った。

自分が褒められていることは照れ臭いが、とてつもなく嫌な予感をベルは感じ、身を硬くする。

「それと……2階層の怪事件」

悪い感覚というのは馬鹿に出来ないものらしい。

ベルとしては何としても隠さなければならぬ一件。

探りを入れられている今こそ平常心だ。

「ななな、なんのことやらっあゝ!? 全く分かりましえんっつー!」

駄目だった。

これまで平和な田舎でのんびりと過ごしてきたベル君に腹芸などできるはずもなく、百戦錬磨の勇者でなくとも分かるくらいに動揺してしまっていた。

二人の様子を遠目で見ていたエルフの主人マスタすら察している。

「はは……そう警戒しなくていい。君のスキルが起こした事についてはこちらから文句を言うつもりはない。被害は碌に出していないし、怪我の功名で闇派閥イヴイルスの陰謀も暴けたわけだしね」

どう見てもパニックになっているベルにフィンは優しい口調で告げる。

「そう、君の行動は闇派閥イヴイルスを妨害し続けてきた。君のこれまでがオラリオにどう影響を及ぼしているか、聞きたくはないかい？」

突然の話題を切り替え。

このためにフィンはベルを呼び出したのだと悟る。

だが、どうしてそれをベルに言うのか。

「有難いですけど……どうして他派閥の僕に話すんですか？」

「本音を言うところ機嫌取りのためだね。最初は賠償金でも払おうと考えていたけど、君はそう言ったものを嫌がりそうだったからね。今の君に必要なものを考えた時に思い浮かんだのが情報だ」

情報、と言う曖昧な概念がピンと来ず、首を傾げるベル。

確かに大金を貰うとなると恐縮して、土下座してでも止めてもらおうとするかもしれない。

「自慢じゃないけど、僕たち『ロキ・ファミア』の情報網はかなりのものだと思自負している。一連の事件についての把握も『ガネーシャ・ファミア』に決して負けてはいない……知りたいだろう？君を取り巻く情勢を」

「でも、ある程度のことなら……」

「『ガネーシャ・ファミア』も保護対象に最低限の情報は伝えるだろうけど、あくまで最低限だ。過保護だからね。あそこは」

フィンの言葉にベルは何も言えなくなる。

自分に対して全てを語ってないのは何となく気づいていたが……

「……」

「何かが起きているのに何も分からないのは嫌だろう？良かったら、僕が今分かっていることを整理するよ」

「『ガネーシャ・ファミア』が僕に全てを話さないことは仕方のないことだ。

他派閥の僕には話せないことだってあるだろう。

だから、今まで不満を持ったことは無かったけど……でも、知りたい。

「……お願いします」

「ああ、まずは君が最も気にしているであろう闇派閥イヴイルスについてだ」

フィンマスターは紅茶に口をつけると、主人に軽食を頼む。

長くなると覚悟するベルに、フィンは「そう気を張らないでくれ」と笑った。

「まず、闇派閥イヴイルスとはファミリアではなく、犯罪行為を行うファミリアの集合体であることは知っているね？」

「は、はい」

「ファミリアが違うという事は主神あたまも違うという事。極東の『船頭多くして船山に上る』  
と言う諺ことわざは聞いたことがあるかな？ 勢力のわりに普段は強大な力を使えないのはそう  
言った事情によるものだ」

ギルドのない探索系ファミリアがまともに協力し合うこと等できないように、まとめ  
役がいなければ集団とは機能しないものだ。

「でも、最近はなんだかすごい力を持っている気がしますけど」

「うん。怪物モンスター祭ファイリアでの彼らの動きは僕たちにとつて予想外もいところだったよ。暗黒  
期を知る者なら【死の7日間】を想起したはずだ」

死の7日間。

神エレボスと嘗ての最強派閥の生き残りによる大厄災。

「おそらく今回も闇派閥イヴァイルスにスポンサーが現れたのは間違いない。本来ならばその黒幕によつて恐るべき陰謀が動いたのかもしれないけど……例の魔石の大量発生ですべてが狂った」

闇派閥イヴァイルスによる仕業と誤認されたあの事故は、極秘裏に進められた謀を日の下に晒した。

そのため、「ガネーシャ・ファミリア」を中心とした強力な派閥ファミリアによる万全を期した警戒態勢が敷かれてしまう。

それを打ち破るために闇派閥イヴァイルスは本来想定していた以上の戦力を投入し……敗れた。

「神エレボスが死の七日間で絶大な悪のカリスマとして君臨できたのは、初動の成功があつてこそそのもの。それに失敗した黒幕は闇派閥イヴァイルスにおける求心力を失った」

そんな闇派閥イヴァイルスで起こったのは内部抗争。

溜まりに溜まっていたやる気は身内同士の潰し合いに発揮された。

「リヴィラでの兵を使い捨てるかのような戦いは間違いなくそれが理由だ。軍勢と指揮官の派閥が違つたんだらう」

「うわあ……」

リユーさんに似たような話は聞いていたけど、思つていた以上の闇派閥イヴァイルスのグダグダぶりに思わず声が零れた。



恐ろしい相手としか思っていないなかったけど、内情を知ると微妙な顔になってしまふ。

「おかげで今まで裏で闇派閥イヴイルスと繋がっていた連中が尻尾を出し始めていてね。【ガネーシャ・ファミリア】は大忙しと言うワケさ」

（そう言えば忙しそうだったな……リリを探すときに【アイアム・ガネーシャ】を簡単に抜けられたのはそのせいだったのかも）

「本当に闇派閥イヴイルスの根は深いと実感したよ。商人、地主、娯楽施設に歓楽街……」

「え？・歓楽街？」

思いもよらなかつた言葉に驚くベル。

脳裏に浮かんだのは金色の狐人ルナール。

彼女は大丈夫なのだろうか。確か、主神様が怖いヒトだつて……

「娯楽施設と歓楽街にはお金が集まるものだからね。昔から彼らは繋がりやすい」

……そう言えば春姫さんは身売りをされたと言っていた。

オラリオの闇はベルが想像していた以上に身近にあつたのだろうか。

「……」

「あ、すいません。話を遮っちゃつて」

「いや、構わないよ。言つただろう君に情報を提供すると」

気が付けば聞き入ってしまった。

と言うか本当に自分が何も知らなかったのだとベル恥ずかしくなった。

「……少し、長くなっちゃったね。兎に角、今の君の状況は分かったはずだ。【ガネーシャ・ファミリア】だけでも十分だとは思うけど……今後、困ったなら相談に来ると良い。歓迎するよ」

「あ、ありがとうございます！」

「君への借りはこんなものでは返しきれないさ。どうだろう？良かつたらこの後、食事にでも行かないかい？いい店を知っているんだ」

「あ……すいません。この後仲間と【豊穰の女主人】に行く予定が……」

「それは残念だ。君のランクアップを祝いたかったんだが」

「!？」

まだ公表はしていないはずの情報が届いていることに仰天する。

【ロキ・ファミリア】の情報網はヤバイ……っ

「いや、僕も今日初めて知った。君は本当に僕たちの想像を超えるね」

店に入ってきたところですからすぐに分かったらしい。

そっちの方がヤバイのでは……？

「ランクアップ直後は色々と困惑するだろうから、周りの上級冒険者を頼るといい」  
色々格の違いを見せられつつ、ベルは全く味の感じない紅茶を喉に押し込んだ。



ベルが店を出た後、店に残ったフィンは新たな紅茶を注文し、一人思考に没頭する。

(今時あんなに純粋な反応を返す子がいるとはね……分かりやすく助かった)

自分の力の異常性をよく理解しているのだろう。

しかし、フィンを相手にするには少々素直過ぎた。

(ひみつ道具……やはりあれは彼のスキルによるものだったか。知り合いに貸してもらっていると言う彼の言い分には無理があるとは思っていたけど)

やはりひみつ道具を使用できるのはあの少年の特権なのだろう。

レベラーの駆け出しの時点で使えていたらしいという事は発展アビリティではなく、恐らくは魔法かスキル。

ヒューマンは魔法種族ではないことを考えると、特殊なレアスキルだろうとヤマを

張ったが正解だったようだ。

彼は一連の事件がスキルによるものだというフィンの鎌かけをすんなりと受け入れていた。

「やはり、彼自身を守る必要があるな」

闇派閥が彼に対してどう動くかはまだ分からないが、ひみつ道具を生み出しているのがベルだと薄々は勘づいているだろう。

ベルの協力を取り付ける前に、彼自身の安全は確保しなければ。

〔ガネーシヤ・ファミリア〕ならば万が一は無いだろうが……できればそこに僕たちも助力できれば恩を売れるだろうか〕

ベルのひみつ道具を考えれば恩を売っておきたいが……

はつきり言つて今の「ロキ・ファミリア」は逆に借りを作りすぎている。

彼本人がそう思っていないくても、筋は通さなければならぬ。

（幸い、幾つか恩を売れそうな事は見つけられたけど）

ベルが欲している情報の提供と、ランクアップにおける先達としての助言。

それが彼が抵抗なく受け入れてくれるものだろう。

（さっきの会話だと歓楽街に反応しているようだったな。色に興味を持っているというよりは、何かを心配している様子だったけど）

少年と歓楽街の関係を調べてみるか。

彼のトラブルメーカーな体質から考えて、魔石の大量発生のように妙な噂になっていくかもしれない。

ベル・クラネルがオラリオに来たのは一ヶ月前。彼の行動を洗い出すのは難しくないだろう。

まずは直感に従つて最近起きた幽霊騒動から調べるとするか。

（確か、狐人の娼婦に幽霊が憑いているのだったか）

「イシユタル・ファミリア」の末端娼婦とのことだが……親指が疼くのは何故か。どうやら一筋縄ではいかないらしい。

（後はランクアップの件か……団長である僕があまり関わりすぎると一部の団員の反応が怖いから、アイズカレフィーヤに頼むか）

顔を知っている相手の方が少年も気楽だろう。

リヴィラで見た装備から考えると戦闘スタイルはアイズの方が近いか。

「彼との関係を繋ぐ手掛かりを得たのはいいことだけど……少し、予想外のものも出てきたな」

チラリと窓の外に視線を向ける。

上手く隠れていたようだが、ここでフィンと会ってしまったのは想定外だったか。

「僕と彼が出会ったのは中層……それも彼はどこでもドアを使って転移してきたから、僕と彼が面識があると知る機会はなかった。だから今日の約束も分からなかったんだろう」

知っていればまだやりようはあっただろうが、第一級冒険者の五感はベルを尾行していたその存在を完璧に察知している。

特に小人族の良い眼はその顔をはつきりと確認した。

（確か、レベル3の冒険者だったか）

相手がフィンでなければそれでも大きな問題はなかっただろう。

レベル3などオラリオではありふれているが……ダンジョンの地図マップを全て記憶できるフィンの頭脳は一度ランクアップの知らせとして出回った似顔絵を覚えていた。

一体何処のファミリアの冒険者なのかも、はつきりと。

「フレイヤ・ファミリア……何故彼を監視しているのかな？」

窓の外に聳え立つバベルの塔。

その最上階で地上を見下ろす銀色の女神を睨みながら、闇派閥イッイルス以外にもベルが抱える

厄介事は多いらしい。

これは難題だとフィンは団員たちの前では見せない憂鬱な表情になるのだった。

## ウラナイ×パーティー

「あ!!ベル様……こちらですよー!」

日も傾き出した頃、相変わらずの盛況ぶりを見せる「豊穰の女主人」に足を踏み入れた僕をいち早く発見したりリが奥のテーブルからぶんぶんと手を振ってきた。

なんだかとても嬉しそうだ。

元々小動物っぽい可愛さがあるリリだけど、最近それに磨きがかかってきている気がする。

こう、足元でじやれつく栗鼠<sup>リス</sup>的な庇護欲をそそる仕草が多くなってきた。

「ソーマ・ファミリア」との因縁に一応の決着がついて、開放的になっているのだろうか? あんなリリを見ていると頑張つて良かったと思える。

(まあ、僕は大了したことではできなかつたけど)

<sup>ザニスさん</sup>レベル2を倒すのは大変だったけど、後のことは全部「ガネーシャ・ファミリア」にお願いしてしまった。フィンさんの話を聞いた後だと、余計なお仕事を増やしてしまつてごめんなさいと言う気持ちになる。

でも、幸せそうに笑うリリのほんの少しでも支えになれたのなら本望だ。

準備されたテーブルにはリリだけではなく、シルさんやリユーさんもついていた。

予約より早めに来たつもりだったが、僕が一番最後らしい。

「ごめんなさい。結構待ちましたか？」

「いいえ？ 私たちもさつきついたばかりですよ」

「謝らなくて結構です。クラネルさん。この前に勇者との約束があったことはアーデさんから聞いています」

僕の謝罪も微笑みをもって流すシルさんと静かに返答するリユーさんに促されて席に腰かけた。

よく考えたらパーティを開いてもらうなんて初めてのことだし、持ってきたひみつ道具もどのタイミングで出すべきだろうか。

「クラネルさん。まずはおめでとうございませう。よもやこれほど早くに「ランクアップ」を成し遂げるとは……どうやら私は貴方を見誤っていたようだ」

乾杯の後すぐに頂いた祝いの言葉に照れてしまう。

リユーさんとはんでもなく美人だからすごい緊張してしまうのだ。

「い、いやあ……」

「そうですよベルさん？ あんな偉業を成し遂げてランクアップした冒険者様なんてきつと歴史上いませんよ」



「シルさん……」

「そう!!ギルドの真正面で幼女に愛を叫び、追手の【ソーマ・ファミリア】をロリコンパ  
ワーで薙ぎ払い、立ちはだかるレベル2のDV男を倒すなんて偉業、後にも先にもベル  
さんだけにしかできません!」

「違いますよ!?!」

きつと神話<sup>サーガ</sup>として神様たちに語り継いでもらえること間違いないです、と悪戯な笑み  
を見せるシルさん。絶対分かって言っている……っ!

『ベル……ああ、ロリコンか』

『【ヘスティア・ファミリア】で幼女二人を囲っているってあの?』

『白髪のヒューマン……間違いねえよ。二人目の勇者(○)だ』

『この街でギルドに喧嘩を売るとは……若い時は無茶するもんだな……』

『レベル1一人で【ソーマ・ファミリア】倒したってホントかよ』

『マジらしいぜ?ダイダロス通りの住人が噂してた。ロリと結婚するために【酒守】<sup>ガンダルヴア</sup>  
手に血だらけにされながら一步も引かなかったらしいぜ』

『漢だな……』

『あいつと【凶狼】<sup>ヴァナルガンド</sup>のせいで最近変態共がギルド前に出没して鬱陶しいんだが』

『っーか大丈夫かあそこ。ガチで幽霊に呪われてるんじゃない?』

『ずっと勇気が出せなかったけど俺もそろそろ覚悟を決めるか……ッ！』

『乗るしかないっ、このビッググウェーブに!!』

『おい誰か「ガネーシャ・ファミリア」連れてこい』

散々な言われようである。

なんでこうなってしまったのか。

よく考えなくともエルフの少女に変身していたリリに言った台詞のせいなんだろうけど。

あの時は兎に角必死だったから何言ったのか覚えてない。

「えへへ……困りましたね」

元凶と言えなくもないリリはもう満面の笑みだ。

可愛いけど少しは誤解を解いてください。

「クラネルさん。落ち着いてください」

「リユ、リユーさん……でも」

「貴方が犯罪的行為に手を染めない人だとは分かっています。もつと堂々としていなさい」

やはりこういう時に頼りになるのはリユーさんだ。

冷静で、頼りがいがある……なんだか先生みたい。

「何より貴方はシルの伴侶なのですから、浮気をする事など有り得ない」

この人も誤解しているよ!?!ちよつと斜め上の方向に!!

この前会つたときもそんなこと言つてなかつた!?!ひよつとして天然さん!?!

シルさんもキヤーキヤー言つてないで誤解を解いてください!!

初つ端から大ハプニングで始まつた僕のレベル2昇格祝いのパーティーであつたが、料理が運ばれてくると途端に皆がそれに夢中になる。

やっぱりミアさんのごちそうは凄い。

途中、アーニヤさんやクロエさんの悪戯でちよつと僕の髪が乱れた以外はおかしなことは起きない。うん、こういう平和な時間つて凄い大切。

オラリオに来てからトラブルだらけだったからとてもそう思う。

「さあさあ、ベルさん。たくさん食べて飲んでくださいね?今日はベルさんが主役なんですから」

「えつと、ありがとうございます」

いつの間にやら隣で甲斐甲斐しく世話を焼いてくれていたシルさんに「いつ近づかれただらう……?」と戸惑いながらも、シルさんの持つてくれた小皿を受け取る。

何故かじとーと見てくるリリが怖いです。

「あ……ベル?」

その時だった。

あの金髪の彼女が声をかけてきたのは。

その声を聞いた瞬間、僕は弾かれたように振り返った。

「アアア、アイズさん!?! 何でここに!?!」

「えつと……フィンにここに来ればベルに会えるかもつて……」

そう言えばさつきフィンさんに「豊穡の女主人」で食事の予定があるつて話した気がする……いやそれでも会えるかもつて?」

「その、ずっと君に謝りたくつて」

「謝る?……あ、フィンさんにも言いましたけど僕は気にしてませんよ? 寧ろ悪いのは迂闊に下に潜つた僕で、ちゃんと現実見せてもらったことに感謝して……」

フィンさんもそうだったけど、「ロキ・ファミア」の人たちは真面目だ。

ベートさんの言い方はあれだったけど、そういわれるだけの醜態を僕は見せたわけ  
で。

それをこんな風に謝つてもらえるなんて滅多にないことだろう。

それだけでいい人たちなんだと分かる。

「それでも、君をいっばい傷つけたから……ごめんなさい……」

「え、えつと……」

深々と頭を下げる憧憬の姿に心底困り果てる。

こういう時、どうすればいいんだろう？

ちよつと気まずい空気が流れてきたがそこに現れた一人の影。

「いつまで突っ立ってる気だい？営業の邪魔だよ!!」

「あ……すいませ」

「いいからとつとと座りな!!店に来たからには注文なしで何て帰さないよ!!」

そう言うアイズさんの肩をぐわしと掴んで、僕がいつも着くカウンター席に座らせる。

きよとんとしたまま硬直するアイズさんは、ミアさんの言われるがまま注文を頼む。

……今日一番高いメニューにちやつかり誘導している辺り、ミアさんも強かだ。

あつという間に特大ステーキがどかんと置かれる。

アイズさんってああいうのは食べれる人なのだろうか。なんだか顔が青い気がする。

「ア、アイズさん……それ、食べきれますか？」

「……ゴライアス」

何故か階層主級のモンスターの名を口にする。

どうやら駄目らしい。

「良かったら僕たちと分けませんか？こつちのテーブルにステーキはないですし」

リリやシルさんから「えー」という感じの視線が飛ぶが気にしない。想い人云々以前にあれば見捨てたらだめだと思う。

チラリと厨房を見るとミアさんがこちらを見てにやりと笑っていた。僕のこの考えはお見通しらしい。

流石に年季が違う……とか考えた瞬間オボンが飛んできた。痛い。

「……お願いします」

アイズさんが椅子と料理をもって僕たちのテーブルに座る。

な、なんだか緊張してきた。

誘ったのは僕なんだし、何か話題を……

「はあ……」

テンパっている僕を見て、シルさんは一つため息をつく。

「ベルさん。ゲームか何か持ってきてませんか？さつきから何かをお披露目する機会を伺っているみたいでしたから」

(すっごい見透かされてる)

フィンさんと言い、僕って色々なものが見透かされ過ぎではないだろうか。

スキルのことをなるべく隠しておかなければならない身としては、心臓に悪い話である。

「ゲームと言うとウエスタンゲームみたいなものですか？」

「うん。あれよりは娯楽性は薄いかもしれないけど」

パーティーにおいて持つていくゲームに射撃は向いていないだろうとも思うが。

そんなどうでもいいことを考えながら懐から橙色の箱を取り出した。

「それは魔導具マジックアイテムですか？」

「……ひみつ道具？」

ボタンが付いた奇妙な造形からか、リユーさんとアイズさんはこれが普通のアイテムではないと見破った。

やっぱり観察力のある人だと、ひみつ道具が特殊なアイテムなのだと分かるものなのだろうか。

「はい。【うらないカードボックス】って言うらしいです」

これは名前の時点で分かりやすい効果だった。

万が一のフェイクの可能性を考えて、ちゃんと試用済みである。パーティーでやらかすのは失礼だし、そこは慎重に効果を試した。

危険性はないだろう。

「へー、なんだか変わった形ですね？どうやって使うんですか？」

うらないカードボックスをあれこれ弄りながら聞いてくるシルさん。

好奇心の赴くまま触っているのだろうが、初見のアイテムをあんなに大胆に触るのは凄い。怖くないのだろうか。

「名前の通り、占ってほしい内容を言ってから、箱を振るんです。そうすると三枚の絵が出てきて未来を暗示してくれるんです」

正直三枚の絵が何を暗示しているのかは分かりづらい。

神様が試したときは『笑った顔のロキ様』『ジャガ丸くん』『時計』だった。

これはどういうことだろうかと神さんと二人でうんうん唸っていたら、ジャガ丸くんのバイトの時間をとづくに過ぎていたことに気が付いて、慌てて飛び出した神様がバイトの上司に取っ捕まって説教を食らい、半泣きになっているところを通りかかったロキ様に盛大に煽られ笑われたことで理解できた。

始末書&残業が確定してしまった神様に、心の中で頭を下げておきながらこのひみつ道具を持ってきた。

お祖父ちゃんは女は占いが大好きだと言っていたし、パーティーを盛り上げるのには良いのではないかと思っただのだ。

「面白そうですね。じゃあ、まずは私から。私のこの先を占って？」

うらないカードボックスに囁くように言葉を伝えるシルさん。

そして、ゆつくりと3回うらないカードボックスを振る。



「これは……妖精……いや『精霊』『雪』『親子』？」

出てきた3枚のカードにシルさんはこてんと首をかしげる。

初っ端から分かりにくい組み合わせだ。どういう意味だろう。

「精霊……？」

アイズさんが何か考え込んでいるがどうしたのだろうか。

この占いの意味を考えているというよりは、精霊と言う単語について反応してしまったような……？

「これは……『雪』の降りしきる聖夜の中、『精霊』様の祝福の下で新しい『親子』が誕生する、と言うのはどうでしょう！ベルさん!!」

「おめでとうございます」

ロマンティックですねーと笑いかけるシルさんと、何故か真顔で祝福するリユーさん。

どうして僕を見て言うんですか？

「まーきつと悪い意味ではないでしょう。では次はリリが」

そうして出てきたのは『花』『鎖』『牛』。

余計に難解になった気が。

(と言うかこの花って!!)

「随分と悪趣味な花ですねー。口がついているなんて」

「ワイオラス食人花……っ」

アイズさんの表情が硬くなる。

アイズさんにとつては闇派閥の先手の言うイメージだし、その反応も無理はない。

でも僕たちはそうではない、そうではなくなつた食人花を僕たちは知っている。

（あの食人花ワイオラスに何かある？ それともあの食人花ワイオラスが何かをする？）

ちよつとこの話題は深掘りされたくないで次はリユーさんにやってもらおう。

「よく分からないですから、一旦後回しにしましょう？ 次はリユーさんどうぞー」

「は、はい」

リユーさんは僕の剣幕に押されるように慌ててうらないカードボックスを振る。

出てきたのは……『天秤』『♪』『暗闇に浮かぶ崖』。

「天秤、ですか」

どこか哀しそうな表情で呟くリユーさん。

僕には意味がよく分からなかったけど、何か心当たりがあったのだろうか。

「リユー……」

「失礼しました。では劍姫、次は貴女が」

「……」

アイズさんもリユーさんの様子が気になっていようだったけど、うらないカードボックスを受け取ると3つのカードを取り出した。

「んと……『交差する剣とナイフ』『炎を纏った風』『光と闇』……なんだろう、これ？」  
アイズさんのカードは何だか複雑だ。

二つの概念が混ざり合っているのだろうか。

或いは……これらすべては同じものを暗示している？

この中に僕を暗示するものがあればいいなと思うが、どうも剣とナイフとか物騒だったり、光と闇みたいに真反対のモノなのが気になる。

ひよつとしてあんまり良い物ではないのか。

「それじゃあ、最後は僕が」

アイズさんからうらないカードボックスを受け取る。

【アイアム・ガネーシャ】では神様がごたごたしていたから、僕自身の未来は占つていなかった。

どんな結果になるのだろうか。

「……僕のこの先の運命はどうなりますか？」

出てきたカードは……『赤い鎚』『糸が交錯する洞窟』『雷光』。

何となく、占いの結果は繋がっている気がした。この先の僕の人生を左右する大きな

波に。

く。僕たちは占いの結果をああでもない、こうでもないと言いつつながら料理を食べてい

く。談笑と笑顔が絶えない【豊穣の女主人】で、束の間の日常を楽しむのだった。

「……」

何かをリリがうらないカードボックスに呟いた。

それから覚悟を決めるように、少しの間目を瞑ると小さく箱を振る。

ハラハラと現れた3つのカードのイラストをじっと見つめた後、ちよつとの間首をか  
しげたが、まあいいかと彼女は頬を薄く染め小さく微笑んだ。

『花束』

『桃色と黒色』

『笑顔のベル』

## レベル2と課題

「また来れたね、10階層……」

霧に包まれた階層に初めて降りたのは一・二週間ほど前の話だが、その後は「ソーマ・ファミリア」とあれこれあって、再挑戦はできていなかったのだから久しぶりに感じる。

「あの時でも十分に通用していましたが、今のベル様はレベル2。以前とは比べ物にならないほど難易度が下がっているはずですよ」

「そう、なのかな？」

ギルドによって定められている適正階層はレベル2ならば中層だ。

そこそこ鍛えたレベル1が主戦場とするこの階層ははつきり言って適正外だ。

とは言え、冒険者ベル・クラネルの経験はあくまでも一カ月程度。

10階層以上の階層に至っては、ちようどリリの離脱騒動が重なったこともあって皆無と言ってもいい。

ダンジョンにおける脅威の指標の一つである大型級モンスターが現れるのは上層後半から。そこでの経験が十分でないうちに到達階層を増やすのは問題だろう。

アドバイザーであるエイナさんも、せめて大型級の間合いに慣れてから中層を目指したほうが良いと忠告してくれた。

(何より、ランクアップ後の感覚のズレって言うものがどの程度なのかも分からないし) ランクアップをする際に、エイナさんに特に注意されたのが器の昇華による感覚のズレだ。

僕の戦い方はレベル1であつた時の身体能力を基に構成されている。

それがランクアップによつていきなり身体能力が上がるわけだから、戦い方に支障が出るのは当たり前だと言えるだろう。

それでも格下相手ならごり押しはできるだろうが、不測の事態になつた時に自分の実力を十全に発揮できないというのは痛い。

だからランクアップした冒険者は、まずは自分の向上した身体能力ステイタスを把握することに勤め、感覚を修正するのがセオリーらしい。

正直、普通に生活している分には何も変化はなかつた。

神様はスイッチが入るとその差を実感するだろうとは言っていたけど。

「まずはインプ盛りから始めますか？」

「そうだね……オークの重い一撃は今怖いかも」

この階層に到達するまで殆ど戦闘はなかつた。

多分、僕の前に上級冒険者が通ったんじゃないかな。

狩場を巡るならともかく、下の階層を進むならショートカットとするわけだから、道が重なることもあるだろう。

そうなるかとダンジョンで飛び跳ねて確認するのもどうかと思ったので、前回苦戦したこの階層に来るまでステイタスのチェックはできなかったというわけだ。

「なら、前方にいるインプの群れを目標にしましょう。数は5体です」

「分かった。ひとまずリリは手出ししないで」

小人族バルウムの眼で霧の先にいるモンスターの情報を分析したりリの言葉に頷いて、神様のナイフを構える。上体を前傾気味に落として白い霧モヤの奥で蠢く影に集中した。

まだ向こうは気が付いていない。

つまりは先制攻撃ファーストアタックによる有利が取れるという事だ。

瞬時に脳裏で戦闘の流れをシミュレートした僕は右足を叩きつけるように跳躍した。

白色のカーテンを抜けて潰れた犬のようなインプの醜悪な姿が目映る。

戦闘だ。

ナイフを握る力は不要な分まで入り切らないように、適度な脱力を意識しつつ力の解放の瞬間を待つ。得物の間合いとコボルトの首が重なる瞬間を待つ、待つ……戦いのろしを上げる時が来た。





静寂を纏っていた草原に立ち込める殺気の数々。

レベル1の頃ならば竦みはしなくても、一筋の汗が額に伝ったことだろう。

「でも、今なら!!」

襲い掛かるインプを跳躍で躲し、すれ違いざまに脳天に一突き。

2体目のコボルトも自信が何をされたかすらわからず絶命した。

軽業師じみたアクロバティックに、目の前の敵の力を理解するインプたちだったがもう遅い。

「ヒイエー!」

「ヒギャツ」

それでも衰えぬ殺意は怪物の本能的な<sup>モンスター</sup>のか。

慌てずに翡翠色のプロテクターから両刃短剣を抜き放つ。<sup>バゼラート</sup>

ナイフの間合いを意識していたであろうインプたちに、間合いが長い短剣は不意打ち<sup>ヘステイア・ナイフ</sup>の気味の一撃となり、一体は喉元を切り裂かれ、その攻撃に驚いた一体を神様の刃の投擲

で仕留める。

「ギャ?!ギャ?!」

あつという間に最後の一体となったインプが大いに狼狽える中、ベルは最後の得物に一気に接近する。

「ベル様！ 新手です！」

「！」

その時、リリの声がベルの耳に届いた。

どこか焦ったような声にベルは新たなモンスターに気が付く。

（ハード・アーマード！）

ベルと同じ体躯のアルマシロのモンスター。

本来は11階層に分布するはずの上層では上位に位置するレベル1熟練者の壁。

10階層であるここには本来出現するはずがないモンスターに、ベルはダンジョンでは稀によくあるモンスターの階層移動があつたことを悟る。

ハード・アーマードの特徴はキラーアントのような硬い甲羅。

ドワーフの怪力すら寄せ付けない防御力は、レベル1では白兵戦は困難。強力な魔法を発現してようやくだと言われている。

間違いない11階層より先の難易度を上げるこの鉄壁は攻撃にも転用される。

「体を丸めた……っ、気を付けてください!! ベル様！」

（ハード・アーマードの回転攻撃！）

嘘か真か冒険者のパーティーを纏めて蹴散らすこともあるという玉弾。

力と速さを兼ね備えた一撃は上級冒険者へと至れる者の選別だ。

無慈悲な暴威があつという間にベルとの距離を縮める。

「口オオオオオッ!!」

雄たけびと共に襲い来る車輪。

発見に遅れたベルの回避が致命的に遅れた。

その俊足を持つてしても回避は間に合わない。

迎撃しようにも、中途半端な一撃では弾き飛ばされるだけだろう。

力で対抗するのは困難。ならば魔法で迎撃する。

「【ファイアボルト】！」

タイミングをずらした二発の炎弾。

今までにない爆音が霧を揺らす。

より速く、より強くなった炎雷はハード・アーマードの突進を押しとどめた。

そして衝撃に耐えられず、攻撃の体勢を解除してしまったハード・アーマードは甲羅で守られていない腹部を見せてしまう。

暴かれた弱点に吸い寄せられるように遅れてきた炎雷が飛び込む。

「ガッツ!?!」

断末魔と共にハード・アーマードは魔法で貫かれた。

レベル1では一対一など自殺行為と言われるほどに強力なモンスターを倒せたこと

に驚く。

(魔法も強くなっている……っ)

神様の言うとおりでっ。

全然違う。段違いだ。

攻撃、速度、魔法までも。

今までの自分は何だったのだろうかと言いたくなる次元。

これが「ランクアップ」。これが神の恩恵。

ようやく憧憬に一步近づけたという実感がベルを包んだ。

「ギヤツギヤア!?ギヤアアアアアア!!」

生き残ってしまったインプは出鱈目な魔法の威力に混乱している。

足を止めてしまったているモンスターに手加減をする理由はない。

回収したヘステイア・ナイフで止めを刺した。

「凄いですね……レベル1の時の最終的なステイタスはどのくらい高かったのですか

？」

「えつと……全部S」

「アビリティオールSですか。やっぱりベル様は滅茶苦茶ですね」

ちよつと引き気味に言われた。

ベルの戦い方はヒットアンドアウェイ。

本来ならば耐久は上がりにくいのだが、ザニスとの戦いでボコボコにされたのが効いたらしい。

治療してくれたナアーザさんは、下手をすれば後遺症が残っていてもおかしくないと言っていたくらい殴られていたから、最後の最後にグリーンと上がったのは納得かもしれない。

(神様は凄い筈なんだけどなんか足りないような……とか言っていたけど。でもS以上なんてなるわけがないし……)

それとも何かスキルを獲得できるチャンスがあつたとかだろうか？

神の勘と言うのは過程を無視して結論を見つけるものだから、はつきりと説明できないようだが。

「でもこれでレベル2の力はよく分かりましたね。大型のモンスターに慣れたらアドバイザーの方に中層に向かうための相談を試みたらどうでしょうか」

中層と言う言葉に急に不安になる。

とんとん拍子でここまで来たせいでどうも不安だ。

この先にはミノタウロスだっている。

そうなった時にちゃんと戦えている自分がイマイチ想像できないのだ。

(やっぱりもうちよつと準備を……でもそれだといつまでたつても先に進めなそう)

今まではサクサク階層を降りられたのに、急に怖気づいてしまうのは5階層でミノタウロスに襲われたのがトラウマではないけど、頭の片隅で引つかかる。

襲われてからまだ一カ月も経ってないから記憶もまだ鮮明だ。

あの時よりはステイタスも成長しているし、もうちよつとまともな逃げ方ができると思うけど。

「!!ベル様!・モンスターが集まってきています」

「もしかしてさっきのコボルトの声が聞こえたのかな?」

重い足音からして多分オークだと当たりをつける。

白兵戦と魔法はもう試したから、次はスキルを試してみようと両刃短剣をプロテクターに収納した。

「フワフワ銃〜」

腕から発せられる光が形を成す。

特に光の強さに変化はないようだ。

(あ、でも少し構成する速度は速くなっている気がする)

前までは5秒くらいかかっていたのが少しだけ早くなっているのかもしれない。

1秒くらい。

ランクアップによってスキルの力が強化される時があるとは聞いていたから、もしかしたら生成のスピードが速くなるとは思っていたけど、1秒じや誤差みたいなものな気もする。

これは多分遠距離攻撃をする武器だ。くうき砲と先端の部分が似ている。

「銃って言う名前なら使い方は分かる!」

標準を定めるための突起にオークを合わせ、引き金を引く。

何も起きなかった。

「……」

「……」

「……」

冷たい風が流れた気がする。

心なしかオークも困惑しているのではないか。

「使い方は分かる!」と自信満々にひみつ道具を構えたベルは羞恥心で顔が真っ赤だ。ランクアップによる全能感でちよつと調子に乗りすぎたと反省した。

「ブグルアツ!」

気を取り直してと言わんばかりにオークが丸太のようだ腕を振り下ろす。



それを慌てて回避したベルはもう一度引き金を引くが変化はないままだ。

「ベル様！リリがそのひみつ道具を使うので投げてください!!」

「ゴ、御免！お願い！」

フワフワ銃を投げ渡すと、ヘステイア・ナイフを逆手に構える。

動揺したままでは10階層屈指のモンスターを相手するのは危険だと一つ大きく息をついた。

（まずは落ち着いて、このオークは自然武器ネイチャーウェポンを装備していない。今のうちに木を処理しておかないと）

「【ファイアボルト】！」

4条の炎雷が当たりの自然武器ネイチャーウェポンを消し飛ばす。

これでオーク対策である天然の武器庫ランドフォームの破壊は完了した。

後は素手のオークを倒すだけ……

「とはいかないか……」

「ギイエー！」

「ギャギャッ！」

インプたちや追加のオークが集まり始める。

ダンジョンと言うのは静かな時は本当に静かなのに、いざ戦いになると次々と現れる

のはどうしてか。

「オオオオオオオ！」

既に棍棒を装備していたオークの攻撃を側転するように辛うじて避ける。

その瞬間、ビキツ、と不吉な音がベルの耳に入った。

鉄が割れたような鈍い音に自然と眉間に力が入る。

（今のは……う？いや、それよりも）

嫌な予感がするが今は後回しだ。

体勢を崩した所に襲い掛かるインプたちを蹴散らし、襲ってきたオークに向かいなます。

オークがベルに対して再び棍棒を振りかぶろうと腕を上げると同時に、甲高い音が迷宮に響いた。

「えっ？」

そして異変がオークに起こる。

ただでさえ丸っこいオークの体がさらに膨れ上がり、風船のように宙に浮かび上がった。

その様子を言葉で表すとすれば『フワフワ』しているというのだろう。

（と言う……とはつまり!!）

「な、なんとか使えました」

フワフワ銃を構えるリリは足元に転がる箱から金色の物質を拾い上げる。

（あれは……あまり尖ってないけど、矢じりみたいなモノ？ひよつとしてフワフワ銃と一緒に出てた？）

金色の物質をフワフワ銃の中央の部分を取り外し、そこに空いた6つの穴に詰めていく。

まるで矢を弓につがえるように、全ての穴に詰めたリリはフワフワ銃をもとの状態に戻し、再びモンスターたちに構えた。

そしてリリが引き金を引くと同時に、円状の部分が小さく動き甲高い音が再び響いた。

そして浮かぶもう一体のオーク。

これで攻撃力の高いオークは無力化された。

「リリ！ありがとう！」

オークの一撃を警戒する必要がなくなった今、数体のインプに苦戦するはずがない。

瞬く間に殲滅し、空中で動けないオークたちにも止めを刺した。

「ちよつと危なかったですね」

「うん。リリがフワフワ銃の使い方を見つけてくれなかったら危なかったかも」

「このひみつ道具とボウガンに共通する要素があつて助かりました。それにしても、ひみつ道具ってああやって具現化するんですね。魔力も感じなかったですし、不思議なスキルです」

そう言われて、ベルはリリにひみつ道具の具現化を見せるのは今日が初めてだったことに気が付いた。

今まではスキルの詳細を知られたら良くないと隠していたが、もうそんな必要はないだろう。

「【ガネーシャ・ファミリア】の方々は知っていて、リリだけ知らなかったと思うとちよつと思ふところはありますが……あの時のリリは信用しないほうが良かったですからねえ。我ながら」

隠し事をしていたんだし、怒られても仕方ないと思つていたのだが、リリはさして気にしない様子だった。

多分正直に言つてたら情報売つてましたよー、と笑顔で言われてちよつと反応に困る。

「それはそうと先程の戦闘中に何かありましたか？少し、戦いにくそうでしたが」

「うん……何か、防具からビキツ、と嫌な音が」

「あーレベル2ですしねえ。レベル1を対象にした防具ではベル様のステイタスについ

ていけないのかもしれませんが」

「それって不味くない？」

「戦ってる最中に自壊とかは勘弁してほしいです」

「どうやらベルが現在装備している防具……びんが兎鎧 Mk—II がベルの成長でガタが来ているらしい。

初めて買った防具なのだから結構愛着はあつたが、それにこだわって死んでは意味がない。

赤ん坊の頃は心地よかった揺り籠も、成長してしまえば窮屈なだけだ。

新しく買いなおすべきだが……

(作成者はヴェルフ・クロツゾさんだったよね……新作で良いのなかな?)

いつの間にファンになっていたのか。

ベルの頭の中にはエイナと買い物をしたときに確認していた名前が自然と浮かんでいた。

## ジャガ丸・ロワイヤル

(ヴェルフ・クロツゾ……ヴェルフ・クロツゾ……うーん。新作はないかなあ)

バベルの塔の中に出店されている「ヘファイストス・ファミリア」の武器屋に来ていたベル。

エイナと来た頃よりも財布には余裕があり、下の高級な方ならば別だがお手頃なこの店ならば選り取り見取りだ。

にも関わらず、店に来たベルは自然と一人の鍛冶師スミスの名前を探していた。

昇降機を中心にぐるりとお店が並ぶ階フロアを右回りに一周する。

その過程で様々な店のトルソーが装着するアーマーに掘られた名前を見ていくが、探せど探せど「ヴェルフ・クロツゾ」という名前は見つからない。

(防具を作るのって時間がかかりそうだし、そうポンポンと新作は出てこないかな……でも、今まで見た物の中にもピンとくるものはなかったし……)

武器の鑑定眼なんてないから偉そうなのは言えないが、やつぱり命を預けるものになるのだしちゃんと納得したものを使いたい。

勿論、そんな武器と出会えることは滅多にないのだから、あまり贅沢言わずにここに

あるもので妥協するのが賢い選択なのだが。

それでも手に取った瞬間に感じた、あの雷が落ちたような感覚を知ってしまったのと胸につつかえのようなものを覚えるのだ。

消化不良と言うか、煮え切らないというか。

ヴェルフ・クロツゾの新作を買う気満々だったせいで気持ちの切り替えができていない。

(前に見た時は木箱に適当に入れられていただけだった……なら今回もそうなのかも)

これは推測だが、鍛冶師<sup>スミス</sup>ヴェルフ・クロツゾの評価は高くない。

期待の新人とかならば、目立つ位置に防具が置かれるはずだ。

だが前回の店の隅っこに乱雑に放置されていた有様から言って、恐らく経営陣からは冷遇されているのではないだろうか。

そうなると今回も予想外の見つけにくところに置かれているのかも。

そう思いつくと、ベルは前回ヴェルフ・クロツゾの防具を見つけた商店に足を運んだ。

やはり、一番置いてある可能性が高いのはここだろう。

既にこの店の中は探してはいたが、見落とした可能性もなくはない。

「あ、すいません。ヴェルフ・クロツゾさんの防具って今は売ってないんですか？」

「ヴェルフ・クロツゾですか？生憎まだ商品は卸されてませんね」

店員の人に聞いてみると店員の人は一瞬表情を嫌そうに歪めた後、すぐに取り繕った営業スマイルで回答した。

ベルは目当ての防具がまだ無いことに肩を落とすが、同時に店員の反応が気になる。

（あの表情……「またか」って感じで何かにウンザリしていたような？）

ひよつとしたら製作者のことを聞いた人間はベル以外にもいるのかもしれない。

そう考えると少し焦りのようなものが出てくる。

評価が高くないというのはあくまで推測。よくよく考えれば良い防具を作る鍛冶師スミスなのだ。新作が欲しいというファンがいても不思議ではないだろう。

もしかしたらもう新作も取られていたのかも。

「新しい防具って次はいつ入荷されますか？」

「さあ……ウチは商品の入荷に期限が無いわけではないんですがかなりふわつとしていまして……あと一・二週間以内には確実に届くと思えますが」

一・二週間防具なしは少し厳しい。

ベルもすぐに「ハステティア・ファミリア」の眷属としてお金を稼ぎにダンジョンに潜らなければならぬ。

その時防具なしと言うのは自殺行為だ。



ヘステイアもリリもエイナもそれは許してくれないだろう。

せめて正確な時期が分かればやりようはあるかもしれないが……

「すごい厚かましいですけど、ヴェルフ・クロツゾさんに連絡を取ることはできませんか？どのくらいに商品が出るか知りたくて」

「……まあ、紹介してもいいですが何分頑固者です。お客様のようになんざわざ訪ねられた方を追い出すことも多い偏屈な奴ですからおすすめはできません」

頑固者、と聞いて思い浮かべるのは職人肌の人なのだろうかと言う想像。

勝手なイメージだが、良い物を作る人にはかなりのこだわりがあることが多そう  
だ。

ヴェルフ・クロツゾはそんな気難しい人なのかもしれない。

それにしてもやはりライバルは多いようだ。

一ファンとしては喜ばしいことだがこれは不味い。

駆け出し冒険者の自分では話を聞いてすらもらえないかも。

「やっぱいい防具を作る人の所に皆来るんだなあ……」

「え？防具？」

ふと零した言葉に店員が目丸くして反応する。

予想もしていなかった評価を聞いたかのように。

その反応にベルも思わず驚いてしまった。

確かに【兎鎧】びよん吉なる名前はどうかと思うが、そんなに変なことを言ったかどうか。

「いえ、今までは商品そのものではなく【クロツゾ】の名前に注目していた方ばかりだったので」

「クロツゾ……う？」

「ご存知ありませんか？あの王国ラキアを一時期最強国家にのし上げていた伝説の武具【クロツゾの魔剣】。それを作り上げていた鍛冶貴族なんですよ」

王国ラキアと言うのは知っている。

軍神アレスの下、あちこちで戦争をしている超好戦的な国だったはずだ。

村にいた時も王国ラキアがどこそこに戦争を仕掛けたらしいという事が何度も噂になっていた。

「く、クロツゾ？鍛冶貴族？」

だがそれ以外の単語は初耳だ。

貴族と鍛冶って全然合わなそうだけど？

いよいよベルが本当に何も知らないらしいことに驚く店員。

どうも、さっきの態度はその【クロツゾの魔剣】目当ての客にウンザリしていたのだろうか。

「魔剣と言うのは基本、魔導士が使う魔法の劣化でしかありませんが〔クロツゾの魔剣〕は違います。むしろ上位互換。その威力は城壁を破壊するほどだったそうで」

「それは……凄いですね？」

「ええ、まだ実績皆無の新人ですらクロツゾならば客が選り取り見取りになるくらいには」

それは手ごわそうだ。

そんなにライバルがいるのなら新しい防具もすぐに売り切れてしまうだろう。

ベルがあの防具を買えたのはかなり運が良かった。

「負けられない……っ！どこに行けば会えますか！」

善は急げだ。

早速ヴェルフ・クロツゾさんにアピールせねばと店員に詰め寄る。

「ほ、北東のメインストリートを抜けた先にある〔ヘファイストス・ファミリア〕の工房に今は籠っているかと……」

「分かりました！新しい防具は絶対に手に入れます！ありがとうございます！！」

店員に礼を言うのと飛び出すように店を後にする。

店員はベルの行動に暫く硬直した後、「最後まで魔剣じゃなくて防具か。クロツゾではなくヴェルフにあそこまで熱心な客ができるとはな」と少し感慨深げに目を細めたの



空に響く鍛冶師たちの息遣いを感じながら、目当ての工房の前で足を止めた。

そこは他の団員たちの工房とさして違いはない簡素な平屋。

ここからも鉄の響きが聞こえるので、留守と言うことは無いはずだ。

あの階フロアに作品が置かれていたという事は、まだオラリオの最高級ブランドである「ヘアアイストス」を刻むことが許されていない木っ端団員なのだろう。

そんな人でもあんなに凄い防具を作れてしまうのだから「ヘアアイストス・ファミリア」の層の厚さが伺える。

ベルはついにヴェルフ・クロツゾに会えるのだと浮き立つ心を抑えるの必死だった。何度も深呼吸を繰り返し、平常心を保つように努める。

決して粗相のないように持つてきたお土産と自己紹介をもう一度確認し、意を決して開かれている扉を潜った。

温度が違った。

屋内を照らす炉は真つ赤で、殺人的熱気を放っている。

炉から十分距離があるベルの額に汗が流れてしまうほどに、熱気が小さな工房内に荒れ狂っているのだ。

神秘的ともいえる炎の猛り。

しかしここは神事の祭壇ではなく、一つの命を持つ人間の戦いの場であることを告げる影が炎に照らされ伸びている。

そこに鍛冶師スミスはいた。

炉の炎と同じ燃えるような赤髪に、焼かれたように薄く褐色を纏う肌。

鋭く引き締められた眼差しは、どんなに叩かれても曲がらない鋼石のよう。

男が片手に持つハンマーを振り下ろした。

凄まじい金属の打撃音がベルの心臓を震わせる。

恩恵フルナによって強化される腕力をもって奏でられる錬鉄の調べが世界の音を塗りつぶ

した。

小ぶりの振り下ろしだ。コン・コンと単調に感じられる音色のはずだ。

それがどうしてベルの目を惹きつけて止まないのか。

火花が散る。

それはきつと叫びだった。

姿かたちを変える気のない鉱石と、鍛冶師スミスの罵倒の応酬。

一文字に引き締め、仇を見るように凄む男の横顔はその込められた思いの強さを伝える。

まるで彼自身が炎のようだ。

腕を振り下ろすたびに飛び散る汗の量が、彼の一振り一振りに込めた力を感じさせた。

時に形を整え、時に大きく歪め、同じように振っているように見えたハンマーのから鳴る音の違いに気づけたのは見始めてから20の音を聞いてからだだった。

これで【鍛冶】のアビリティを持っていないのかと戦慄する。

手に持った鎚から真つ赤な閃光が発せられる光景をベルは固唾を飲んで見守った。

「……何の用だ？」

これまで一言も発していなかった男が声を出したのは、作業が一区切りついていたからだだった。

探るように鋭い視線をベルに投げかける。

「——ッ!!」

だが、そんなものは今のベルには気にならない。

凄いモノを見た。

その感動がベルの心を震わせる。

「ヴェルフ・クロツゾさんですよね!?!お店であの商品を購入しました!それをお願いがあるんです!」

「ああ、またそういう奴か。いいか?俺は絶対に……」

「新しい防具を僕に売ってくれませんか!？」

「魔剣は打たな……ん? 防具?」

ヴェルフは嫌そうに何かを口にしようとして、ベルの言葉に引つかかるものがあつたのか聞き返す。しかし、今の暴走したベルは頓着しない。

もはや道中散々考えてきた自己紹介など忘却の彼方へ放り投げ、一心不乱にまくしたてる。

「僕、クロツゾさんの作る防具が大好きなんです! だから、新しい防具も絶対にクロツゾさんがいいって!」

「お、おう……ありがとうな?」

あんなものを魅せられて、もう他の人など考えられないと必死にアピールする。

考えなしに本音をぶつけるベルに、ヴェルフは調子を崩されて鍛冶の時の鬼気迫る姿は何処かに飛んで行ってしまった。

「お、お前は魔剣を頼みに来たんじゃないのか?」

「魔剣? 僕は防具が欲しいんです。もちろんクロツゾさんの武器なら良いモノなんでしようけど」

「あ、うん。そうか……」

「それでクロツゾさんの防具は全く動きを邪魔しなくて! それでいて上層のモンス



ターの攻撃になんてビクともしないくらいに頑丈で!! 一目見た時からクロツゾさんの作った防具しかないって感じていたんです! この前だつてキラアートの群れに襲われたとき……!」

ヴェルフの防具が欲しいというベルの言葉を信じられない様子だったが、今まで捲し立てていたベルがそこだけは素のテンションで否定したことで何も言えなくなるヴェルフ。

そんな彼にお構いなしに『ヴェルフ』の武器の良さを語り続けるベルに、周りの平屋からなんだなんだと他の鍛冶師スミスが様子を見に来るが、もはやベルの眼には入らない。

「ダンジョンで冒険するならクロツゾさんの防具がいいんです! お願いです! 新しい防具が出来たら僕に売ってくれませんか!」

「え、えつとな? 俺の防具は……!」

「分かっています! クロツゾさんの作る武器にはいつも人が殺到しているんですよ! それでも僕はクロツゾさんがいいんです!」

「いや俺はただの売れない鍛冶師だからな!? お前の中でどんなカリスマ鍛冶師スミスになつてるんだ!」

「慢心せずに常に上を目指しているということですね! 流石です!!」

「違う違う! ただの客観的評価だ! だからその英雄ヒーローを見るようなキラキラした目はやめ



らかです。

「美味めエ！美味めエ！美味めエ！」

なにはともあれ喜んでもらえて何よりだ。

心なしか目がイツちやっていると、リリに聞いた神酒ソイマを飲んだ人みたいになっている気はするけど、ここに来る前にベル自身で味見もしたし大丈夫だろう。

ただの美味しいジャガ丸くんだったし。

「お、おい！俺にも食べさせろ！」

「一口だけ！一口だけで良いから!!」

「独り占めしてズルいぞ!?!手前え！」

そんな時、何故か野次馬していた鍛冶師スミスたちが一斉にヴェルフの持つジャガ丸くんに殺到した。

確かに美味しそうだし、気持ちは分かる。

しかし、流石にヴェルフにのみ渡すつもりだったので、ここにいる全員分はない。

一口だけで我慢してもらって……

「うるせえ！これは俺のもんだ！」

「何だどこの野郎!!」

「調子に乗んな没落貴族!!」

「止まるんじやねえぞとか言いそうな声しやがって!!」

が、何故か目がイツちやっているヴェルフはこれを拒否。

そして同じく目がヤバいことになっていて鍛冶師たちはカム着火インフェルノオオオオオオウ!!とばかりに殺気爆発。

各々走って平屋に戻った。

「なんで帰って……ええええ!!」

奇妙な鍛冶師たちの行動に疑問符を浮かべるベルは次の瞬間驚愕する。

何と彼らは武器をもって出てきたのだ。

気が付けばヴェルフも工房に掛けてあった大剣を手に使っていた。

「ジャガ丸くんをよこせええ!!」

「ふざけろおおおお!!」

「なんでこうなるのとおお!!」

互いの自信作をぶつけ合う鍛冶師たち。

ヴェルフ対その他になるかと思いきや、取り分が少なくなるのが分かっているからか足の引つ張り合いが始まる始末。

(なにがどうなっているの!?!まるで【魅了】みたいな……)

この場で唯一正気を保っているらしいベルは混乱の極みにあった。

何故かさつきから恩恵のスキル欄が熱いが関係はないだろう。

フォース・デイメンション・ボーチ

ス キ ルにはひみつ道具の効果を打ち消す力は無い筈だ。カドバールの件でそれは思い知っている。

だが、今の彼らは明らかに尋常な様子ではない。

まるで朝食を吸い込むように食べつくした今朝のヘステイアのようなだ。

ベルは半泣きになりながら襲い掛かる鍛冶師スミスに応戦する。

ここ一帯で活動する鍛冶師スミスはレベル1とは言え数が多く、ベルが全員を叩きのめせたのは日が暮れた頃であった。

一袋のジャガ丸くんを巡って起きた、「ヘファイストス・ファミア」の末端構成員たちによる小さな戦いは暫くオラリオの語り草になったという。

## Revenge Of Smith

時間の流れが早い一日というものがある。

勿論、本当に時が加速しているわけではなく、あくまでも人間の体感的な話になるが。ベルが工業区に足を運んだのはお昼時にもならない時間帯であったのだが、暴走したジャガ丸くんジャンキー中毒者たちを撃退していたら空は真つ暗になっていた。

「本当にごめんなさいー」

時間が経って正気が戻ったヴェルフに平謝りするベル。

あの異常な鍛冶師スミスたちの様子は明らかにひみつ道具である味のものもとが原因だ。考えなしにお土産の味を良くしようとしたベルに非がある。

「別にいいさ。お前だつてわざとじゃないんだろう？自分で毒味までしたつて話だし、それで分からなかったならしょうがない」

謝罪を受けとるヴェルフはあまり気にしていないようだが頭を上げるわけにはいかない。

一歩間違えれば流血沙汰だ。

「……それで？色々インパクトのあることが重なって忘れそうになっていたが、お前は

元々俺の防具を買いに来ていたんだろ」

「は、はい」

あんなことをしでかしてしまった後で防具を売ってくれと言える図々しさはなく、ベルは恐縮頻りであった。

「そう、か」

だから下を見続けてしまい、その時のヴェルフがどんな表情をしていたのかベルは知らない。

ただ、予想していたよりもずっと柔らかい声色に困惑した。

「悪いな。まだ新品のぴよん吉Mk—Ⅲは完成していなくてな。もう数日待ってくれ」

「す、すいません。クロツゾさんの事情も考えずに……」

「いや、構わないさ。そこまで熱烈に自分の打った武器が求められるのは悪い気分じゃない。そして、そんな熱烈な顧客にむぎむぎ他の鍛冶師スミスの武器を買わせるのも癪だ」

そう言うとうヴェルフはベルが持ってきていた荷物を漁る。

「え？何を……」

「さつき見せてくれたよな？ Mk—Ⅱを。レベル2になって何処にガタが来たのか知りたくてな」

自分が実際に、過去にヴェルフの防具を買っていたことを証明するためにベルが持つ

てきていた兎鎧びよん古を持ち、鋭い目つきで観察するヴェルフ。

ベルとしては自分が壊してしまったそれをまじまじと見られるのは少し居心地が悪い。

やはり自分が作ったものを壊されるのはいい気分がしないものだろう。

(どんなことを考えているんだろう……「やっぱりお前に売る防具はない!!」って言われちゃうのかな……)

まるでエイナにテストの採点をしてもらう時のように生きた心地がしない。

ダンジョンのテストならばやり直しはまだ聞かすが、今回が初対面のヴェルフに良い評価がもらえなければかなりダメージはデカくなる気がする。

「……つと、そんなに気構えないでくれよ。今のはお前に対する評価じゃなくて、俺自身の未熟を痛感していたからだ」

「未熟? クロツゾさんがですか?」

上層のモンスターなんて寄せ付けず、レベル2の猛攻からもベルを守ってくれた防具を作った人物に対する評価としてはとても納得できない言葉にベルは思わず不満げな声を出す。

そんな少年に苦笑するヴェルフは再び兎鎧びよん古に視線を落とす。

「未熟さ。使い手を守るどころか足を引つ張つちまったコイツを見れば、鍛冶師スミスなら誰



でもそう指摘するだろうぜ」

「それは僕が無茶な動きをしたからで……」

「どんな理由があれ、主を守るといふ使命を果たせなかつたことは確かだ。俺にもつと腕があれば、【鍛冶】のアビリティがなくてもコイツにやるべきことを果たせるだけの力を与えられただろう」

ヴェルフの言葉は何処までも自分に厳しかつた。

その厳しきこそが、ヴェルフの武器があフロアの階の中でベルを強烈に引き付けて止まなかつたものなのだろうか。

やがて、兎鎧を観察し終えたヴェルフは破損の原因を関節部の強度不足だと結論付けた。

レベル2へと至つたベルの急激な体の振じりに耐えきれなかつたのだという。

ベルとしてはそんな無様な緊急回避を取つた自分に非があると考えているのだが、ヴェルフは自分の作品の不備を譲らない。

「軽量化にこだわつたのが仇になつたか……使い手の能力についていけずに自滅するようじゃ、至高の武器なんて夢のまた夢だな」

「至高の武器？」

「俺たち鍛冶師の最終目標だ。自分が打つた最高の武器を最高の使い手に振るつてもら

う。今の俺じゃ言うだけ滑稽な目標になっちまう」

そう自嘲するヴェルフの眼はどこか遠くを見つめていた。

ずつとずつと遠く。空のその先を。

「……ああ、今日はホントに騒がしかった。あいつが大好きな混乱の宴だ」

「ご、ごめんな……あいつ？」

てつきり先ほどの騒動の文句を言われるかと思つたが、ヴェルフの表情は依然として穏やかなままだ。

その瞳に少しだけ悪戯な輝きをのせて、懐かしむように笑っていた。

「なあ、お前の名前は何だったか」

「べ、ベル・クラネルです!!」

「そう緊張しないでいいって……ベル、少し俺の昔話に付き合ってくれ」

そう言うヴェルフは工房の奥からお茶の入った水筒を取り出し、コップに入れた。

武骨ながらも味のあるコップに注がれたお茶はこの話が長くなるという暗示だろうか。

それを恐る恐る受け取ると、ベルは一口だけお茶に口をつける。

(あ、美味しい……)

そのお茶は高級品と言うワケではなかったが、ヴェルフの淹れ方が良かったのか喉を

統べるような清涼感をベルに与える。

男前なヴェルフの容姿からは想像もつかない、繊細な芸当に少し驚く。

「ウチは代々鍛冶師をやっていた家系でな。俺も物心ついた時には鍛冶師になるべく修行をしていた。親父と爺の三人で……面倒な神もたまにちよつかいを出してきやがったけどな」

鉄の声を聞け、鉄の響きに耳を貸せ、鎚に想いを乗せる。

それはヴェルフが真つ先に教わった鍛冶の極意らしい。

確かに、ベルが見た先ほどの光景は正にその言葉の体現だった。

「爺はそこそこ名の知れた鍛冶師でな、俺の生まれ故郷でランクアップをしていた騎士の武器を打ったこともある」

「壁外でランクアップって……すごい人の武器を打っていたんですね」

眷属のステイタスは漠然とした積み重ねでは成長しない。

しかるべき壁を乗り越え、神々に称えられるにふさわしいだけの偉業を打ち立てる必要がある。

さらに、最低でも一つはD以上の評価を得た基本アビリティを備えてなければランクアップは行えない。

一度器の昇華を果たしたベルだからわかる。

ベルの成長にはベル自身の異常性の他に、このオラリオと言う激動の魔境で冒険を行ったからこそぞだという事は。

この世で最も危険な地であるダンジョン。

そこに潜る冒険者たちの経験ははつきり言つて質が違う。

命がけの戦いを毎日行っている地など、そうそうあるはずがない。

あつたとしてもこの地ほど純度の高いモンスターが生まれる場所はないのだ。

地上でも十分に恐れられるブラッドサウルスが、ダンジョン産のオークと同等の力でしかないという事に代表されるように、魔石を分けて劣化し続けるモンスターが蔓延る程度の壁外は冒険者たちには天国だ。

……逆説的に言えば、壁外でランクアップしたという事はそんな壁外の常識が崩れるほどの修羅場をくぐり抜けたという事。

戦闘技能が碌になかったザニスのように、オラリオでは時間を費やせば確実に強くなる。

実際の実力が大したことは無くとも、レベル2までなら誤魔化せるのだ。

故に上級冒険者と言えど、レベル2はこの都市では第三級冒険者と分類される。

光る石はあれど大半は有象無象だ。

そんな誤魔化しは壁外ではできない。

故にランクアップした者の多くは強者なのだ。

「ああ。俺はその騎士が他の奴らと一緒に素振りしているのを見ただけが……一目で他の奴と違うのがよく分かった」

使い手と半身。

英雄と至高の武器。

その美しい組み合わせこそ、幼き日のヴェルフの心を燃え上がらせ、今も強烈な衝動として彼を突き動かす願いののだ。

「だからこの結末に納得するわけには行かない。ベル・クラネル。俺に再挑戦リベンジの機会をくれ」

「再挑戦……?」

「ああ、お前をぎゃふんと言わせるくらいに凄い装備を作ってやる。もう一度、俺の武器が欲しいと言ってもらえるくらいにな」

それは無意味な宣誓だった。

既にベルはヴェルフのファンなのだ。

今更他の鍛冶師スミスに浮気することなど考えられない。

(でも、きつとクロッゾさんが言っているのはそういう事じゃない)

ヴェルフも自分の言葉の可笑しさは理解しているはずだ。

それでもあえて口にしたのは、ヴェルフ自身がベルからの評価に納得していないのだらう。

誰よりも鍛冶に真摯なこの青年は、自分に見合わない評価を甘んじて受けることはない。

だからと言ってベルからの評価を真つ向から否定するのは鍛冶師の沽券に關わる。

過分な評価だというならば、それを飲み込んでさらに大きな自分へ。ベルからの評価が釣り合う鍛冶師になる。

これはきつとそう言う誓いだ。

「取り敢えずこの防具を修復・補強する。一日時間をくれ」

「え!? 一日でできるものなんですか!?!」

「ああ、徹夜する」

「いや、さつきまでファミリアの人同士で喧嘩してたじゃないですか! ちゃんと休んでください!!」

「そうか? なら、二日で仕上げる」

ただこの人は凄く無茶をしそうとベルは密かに心配する。

完全に鍛冶に人生捧げている系の人だ。

「あーそれでだな。もう一つ頼みがあるんだが」

「？」

「俺をパーティーに入れてくれないか。ベル・クラネル」

「……え？」

言われたことが理解できなくて一瞬思考停止してしまうベル。

どうして鍛冶師である彼がダンジョン探索のパーティーに参加しようとしているのか。

「簡単なことだ。俺は発展アビリティが欲しいんだよ」

「あつ、ランクアップ……」

聞いたことがある。

鍛冶師スミスの中でも、「鍛冶」の発展アビリティを発現しているか否かは重要な境になると。

それこそ【鍛冶】があれば通常の鍛冶作業ではできない様々な機能の搭載が可能になるらしい。

そう、それこそ魔剣のような。

「ん？クロツゾさんが【鍛冶】の発展アビリティを発現してないなら、クロツゾさんはどうやって魔剣を……」

「その辺の話はまた今度にしてくれ。あまり楽しい話でもないからな」

会話の中で違和感を覚えたベルだったが、ヴェルフはその話題を強引に打ち消した。

「アビリティもそうだが、後はお前の戦いぶりを見てみたいというのもある」

「僕の手？」

「そりやそうだろ？ レベル2をレベル1で倒した今話題のロリコンなんだ。気にならな  
いはずがない」

「誤解なんですっ！」

あつさりと誘導に乗ったベルは先ほどの疑問などどこへやら。

いつの間にかここまで広まっていた噂を訂正するのに必死になった。

出来れば冒険者として覚えてもらいたい。

「冗談はさておき、冒険者の戦い方を鍛冶師トウが知っておくのは悪いことじゃない。実際  
に使っているところを見てみたいというのもあるけどな」

確かに採寸を測ってベルに合わせたサイズにしようとも、肝心のベルの戦い方が分か  
らなければベルに最適化した防具は作れないだろう。

専用装備と言えはヘスティア・ナイフもそうだが、あのナイフがベルによくなじむの  
は神業によるものであり、あれを基準にしてはいけない。

「ベル。お前の到達階層はどのくらいだ？」

「10階層です」



「大体俺と同じか。羨ましい……とは言っちゃダメなんだろうな。それだけの偉業を成し遂げたお前への侮辱になっちまう」

ヴェルフの言葉にベルは驚く。

今の言い方が本当ならばヴェルフは10階層まで行った経験があるという事だ。

あの階層になると適正アビリティ値は最低でもBはないと厳しい。

という事はヴェルフはレベル1の中でも結構上位の冒険者でもあるという事になる。

「その階層まで行けるなら僕たちのパーティーに入らなくても十分にランクアップを狙えるんじゃないですか？」

「いや、正直なところ10階層から先には単独じゃ行けそうにない。パーティーを組もうにも俺は他の連中から疎まれてるからな」

「え……」

「同じファミアのくせに頑なに俺とパーティーを組まねえんだ。あいつらは」

きつとあれは俺の才能に嫉妬しているな、と笑うヴェルフだがベルにはそれがどこか苦しいなものに感じた。

基本的に冒険者が偉業を成し遂げる時はパーティーを組むものだ。

そうすることで経験値は分散してしまうが、リスクを減らして偉業に挑める。

ベルのようにサポーターこそいたものの、戦闘は一人でこなすというやり方は稀なの

だ。

経験値エクセリアこそ大量だが、一歩間違えればミス挽回できずにすぐに死ぬ。

「このままじゃ不味いと回復薬ポーションをかき集めて1階層に挑戦したが、ものの見事に死にかけてな。こうなりや他派閥だろうと頼るしかないってわけだ」

既にヴェルフの同期のほとんどはランクアップを果たして上級鍛冶師ハイスマスになっている。

これ以上の後れを取るわけには行かないのだ。

（確かにクロツゾさんが【鍛冶】のアビリティを取得すれば出来上がる装備も凄いモノになる。僕にとってもパーティーのメンバーは必要だし……）

話してみても悪いヒューマンではないようだし、信頼してみてもいいのでは？

そう考えるものの、ベルの脳裏にジト目で見つめてくるリリの表情が浮かんだ。

「すいません。仲間の意見も聞いてみないと……」

「そうか。いや、俺も焦つちまつて悪いな。兎鎧びんごを受け取る時にでも答えを聞かせてくれ」

その日はその会話を最後にヴェルフと別れ、帰路についた。

ベルとしてはヴェルフの提案に傾き始めているが、リリやエイナの意見も聞いておくべきだろう。

まずは兎鎧<sup>びよん古</sup>を預けることで生まれた休日中にリリとエイナに相談すべきだ。  
後は……春姫にも休みを利用して会いに行けるかもしれない。とベルは考えた。  
勿論、いいひみつ道具が出てくればの話だが。

## 歓楽街は危険地帯

「イシュタル・ファミリア」はオラリオでも有数の大規模ファミリアである。

オラリオに在籍するファミリアである以上、保有する戦力の強さももちろんではあるが、彼女たちの最大の武器は色だと言えるだろう。

人の三大欲求の一つである性欲を司るかの派閥は、娼館としても絶大な規模を誇っている。

それこそ大量の金を落としていく上級冒険者は勿論、人脈の多い商人や都市の運営を担当するようなギルドのエリート職員。極めつけにはファミリアの主神として絶大な影響力を持つ男神たち。

そんな男たちを虜にするべく、「イシュタル・ファミリア」の娼婦たちはその美貌を持つて一時の夢を見せるのだ。

眷属の強さでは「ロキ・ファミリア」「フレイヤ・ファミリア」と言った二大巨頭には遠く及ばないだろう。

権力の強さではオラリオの全てを統治するギルドとは比較できない。

人望では「ガネーシャ・ファミリア」とはそもそも勝負にすらならないはずだ。

だが、人々の心を侵すという一点にかけては「イシユタル・ファミリア」の右に並ぶものなどない。

だからイシユタルは許される。

多少の横暴は彼女の機嫌を損ねる危険リスケを考えたら呑むべきだ。

オラリオでは違法とされる人身売買も、オラリオの男たちの欲望を受け止めてくれるならば目を瞑るしかない。

オラリオの欲望は彼女が握っているのだから。

「おいー誰だこんなもの仕込んだのは!!」

「床がすごいベタベタする〜」

「ギヤツ……なんかこの壺静電気が」

だが最近は少しその勢いに陰りが出ているかもしれない。

幽霊騒動から始まる「イシユタル・ファミリア」の娼館で起きる数々の怪奇現象。

最初は変なこともあるものだと対して気にせず、幽霊の呪いの噂を笑い飛ばしていた娼婦たちも、立て続けに起きる異常事態にすっかり参ってしまった。

お楽しみ中に変な人形たちが、色っぽいムードの音楽を奏でていた時は生きた心地がしなかった。

客は最初は店の出し物だと思っていたが、娼婦の反応を見て幽霊の噂に行きついたら

しく、大慌てで逃げ出した。ほぼ全裸で。

男を度々扱うフリユネの悪評もあり、「イシユタル・ファミリア」の店に寄り付く客は減少の一途を辿っていた。

皆無にならないのは熱烈な固定客と、噂を聞き付けた神々が足を運んでいるからである。

ただし、神々はマナーなど知ったことかと騒ぎまくるので、余計に新規の客が来ないという悪循環に陥ってしまったが。

「見た目はいつも通りなのに、なんで畏だらけになっっているんだ……」

今回の怪奇現象の厄介な点は一見すると全く異常に気づけないことだ。

しかも発動した畏は自動消滅し、いつも通りの姿に戻る。そのせいで通路を進むことすらおっつかなびっくりという有り様。

「て言うかこの畏って春姫の部屋に近づくほど多くなってるない？」

「あの娘本当に呪われてるんじゃない……」

「お祓いさせてあげれば良いのに。いくらなんでも可哀想だし」

その異常事態が立て続けに起きているのは、常にある娼婦の周囲でだった。

いつも暗い表情で、出世を狙い目をギラつかせる周りの娼婦たちからは浮いていたが、だからと言って彼女を嫌っているわけではない。



「はい。いつか、ちゃんと恩返しがしたいです」

オラリオのなかでは底辺も良いところな「ヘスティア・ファミリア」の冒険者であるベルだが、春姫にはベルの冒険を聞くのがお気に入りらしい。

彼女の所属する「イシュタル・ファミリア」の遠征とは比べ物にならないほど平凡なダンジョン探索に、ハラハラしながら聴き入るその姿はまるで吟遊詩人の唄に目を輝かせる子供のようなのだ。

今回も新たに仲間に加わったヴェルフの話を聞いて尻尾を揺らして楽しんでる。

「良かったです。ここ最近イツイルスは闇派閥とつながりのある冒険者様と戦ったりと波乱万丈でしたので、背中を預けられるお仲間が増えて安心しました」

「ははは……確かにこの頃物騒でしたね」

一時は春姫に会いに行けないほどに忙しかったわけだし、知らぬ間に春姫が他の娼館に行っていたりと大変だった。

歓楽街のこと等さっぱりわからないベルは、「ガネーシャ・ファミリア」の中でこう言ったことに詳しくそうなハシャーナの協力の下、何とか探し出せたが。

「怪物祭から暫くは闇派閥イツイルスが活発でしたから、このあたりでも何かあったんじゃないですか？」

「いえ、この付近はアイシャ様……バベラ戦闘娼婦の方々が巡視していることもあって、そこま



で大きな騒ぎはありませんでした」

「戦闘娼婦……噂で聞きましたけど、やっぱりすごいんですね」

春姫の件もあつて、そこそこ歓楽街について調べていたベルは最近覚えた言葉に反応する。

「イシユタル・ファミアリア」はその眷属の多くがアマゾネスだ。

アマゾネスの有名な特性は二つ。

男を連れ去り貪り食うという言い伝えができるほどの性欲と、しなやかな四肢を利用した独特の武術。

世界中からアマゾネスが立身出世を狙って進出してくるといふ「イシユタル・ファミアリア」に在籍する多くの娼婦は戦いも兼業する。

多少腕に覚えがある冒険者程度なら素手でのしてしまふのだとか。

(もし僕が春姫さんを無理矢理強奪しても、絶対に逃げきれないよね)

秘密基地を作った時にみちび機に春姫を救う方法を聞いた際の回答。『「イシユタル・ファミアリア」から奪う』がどうも頭から離れないのである。

常識的に考えてレベル2なりたての新人が、第一級冒険者を有する大派閥を敵に回して無事で済む筈がない。

ハシヤーナに聞けば娼婦の救済措置として身請けと言うものもあるそうだし、まだコ

ツコツとお金を貯めていった方が時間はかかるだろうが確実だ。

過去にいくつも前例があるようだし、間違った回答ではないだろう。

だが、あの日のひみつ道具であるみちび機は、この回答を除いたすべての質問に完璧に答えた。

たまたまこの問いに関する答えだけが間違っていた確率と、それまでの質問同様にこの答えも正しい可能性。どちらの方が高いと思われるかと聞かれれば、少し悩んだ後に前者を選ぶだろう。

(ひみつ道具を鵜？みにはできないけど、完全に無視するのも違う)

世界には自分では想像もつかない闇がある。

それをリリの一件で学んだベルは、決して自分の常識に惑わされてはならないと己を戒めた。

たとえ的外れでもいい。悩んで、考えて、その末に出した結論がベルを納得させるはずだから。

「ただ歓楽街ではありませんが、ダンジョンで襲撃はありました」

「ダンジョン？」

「はい。白装束を着た不気味な方々でした」

イギリス  
(闇派閥ッ！)

暗黒期には、闇派閥イヴイルスはダンジョン探索を行う冒険者の前に度々出現し、冒険者狩りを行っていたとハシャーナに聞いたことがあったベルは、それが再び始まったのかと警戒する。

リユーやフィンの話では弱体化しているらしいが、それでもベルにとつては脅威に違いない。

しかし、そんな風に考えを巡らすベルの様子に気付かず、春姫は予想外の言葉を口にした。

「暫くアイシヤ様……戦闘娼婦バーベラのリーダーの方と話した後、急に戦い初めまして……」  
 (話し合う？ 襲撃じゃなくて、待ち合わせてから交渉が決裂した?)

春姫の言葉を信じるならば「イシユタル・ファミア」は闇派閥イヴイルスに問答無用で襲われたわけではないらしい。

それどころか、直前まで話をするほどに呑気だったという。

闇派閥イヴイルスの代名詞ともいえる白装束を纏った相手を前に。

それが示す事実の一つ。

「イシユタル・ファミア」は元々は闇派閥イヴイルスと繋がっていたのではないかという可能性。

前に春姫がイシユタルを怖い神と表現したことを思い出す。

都市最強には及ばないまでも、十分強豪と言われるファミリアが都市を裏切っているのかもしれないという情報に思わず息をのむ。

（動揺しちゃダメだ……この人は多分何が起きているのか分かってない。余計な心配をさせちゃダメだ）

「……クラネル様？」

春姫は何も分かっているのではないのだろう。

彼女は一度もダンジョンでの襲撃者を闇派閥イツイルスとは言っていない。

外の情報が全くない見分けがつかないのだ。

だから襲撃者を見たままの表現で……

（見たまま……？）

その瞬間。背筋が凍るような錯覚を覚える。

とんでもない落とし穴に直前で気が付けたときの嫌な感覚。

「春姫さん。どうして襲撃者の見た目を知っているんですか？」

「え？」

「ただの娼婦のはずの貴方が、まるでダンジョンで実際に見たみたいに」

「コンッ!？」

春姫は戦闘娼婦バトルベラではない。

戦う力のない彼女がどうしてダンジョンにいたのか。

ダンジョンでは死傷することなど日常茶飯事。

嫌な言い方だが、商品である彼女を傷つけるリスクを負う意味が分からない。

逸る心を必死で律し、いつも通りの口調で尋ねる。

だが、春姫も失言をしたと思っただのかビィインと尻尾を立てた。

「え、えつと……じ、実は私は、あのつ、荷物持ちでして」

(……サポーターとは言わないんだな)

あたふたと言葉を重ねて誤魔化そうとしているが、喋るたびにダンジョン探索の知識が無いことが浮き彫りになる。

違和感だ。

決して無視してはいけない違和感がベルの本能に警鐘を鳴らす。

(この人の置かれている状況が僕の思うよりも危険なんじゃないかっていう予感。その手掛かりを掴んだ気がする)

このまま秘密を追求したいという欲求が沸き上がる。

だが、ベルはそれを押し殺した。

短い期間の付き合いだが、春姫は意外と頑固な所があるのは分かっていた。

問い詰めても口を割ることは無いだろう。それどころか会うことを拒否される可能

性もある。

それならばここは退いて、少しずつ探っていくほうがいいかもしれない。

幸い春姫は隠し事が苦手だ。

今回のようにボロを出す可能性は大いにある。

「クラネル様は本日はどうやって忍び込んだのですか!?!いつも驚きの方法で春姫は気になります!」

かなり強引な話題転換を切り出す春姫。

隠し事があると言わんばかりの態度だが、ベルは敢えてそれに乗る。

手遅れにならないかと言う不安を押し殺しながら。

「今日は「いたずらオモチャ化機」っていうひみつ道具を使っただけです。その名の通りモノを悪戯道具にできるってアイテムで、ちよつと見張りの人たちの目を誤魔化しました」

「だ、大丈夫なのですか?」

「そんなに危険はないですよ……多分」

アスレチックハウスほど鬼畜なことにはならなかったはずだ、とベルは言い訳する。効果がランダムなのは心配だが。

「部屋の周りにも罠をばら撒いておいたので、この部屋に人は暫く来ないでしょうし」

「それで今日は遊おねえさん女たちが来ないのですね」

時折春姫の様子を見に覗いてくる先輩たちが来るたびに、ベルが慌てて隠れたり、逃げ帰ることが最近が多かったので、そもそも部屋に近づけなければいいのでは？ とうい発想が浮かび、今日は辺り一帯にいたずらオモチャ化機を使用した。

春姫をいじめずに気にかけてくれる人たちに申し訳ないが、ベルが見つかるという貫の終わりなのだ。

「でも最近はお客様も来られなくなりましたし、人が来る心配は減っていますね」

「え？ そうなんですか？」

「はい。春姫は何か粗相をしてしまったのでしょうか……」

決して望んでこの環境にいるわけではないとはいえ、根が真面目な春姫は成果が出せないことを疑問に思っているようだ。

ベルとしても彼女がいよいよ男に身を差し出さなくていいことは喜ばしいと思っているが、全く客が来ないというのは変だと思った。少なくともベルはその美貌を一目見た瞬間、呼吸を忘れたというのに。

「クラネル様は何か分かりますか？」

「いえ……春姫さんはこんなに綺麗なのになんでだろう？」

「き、綺麗!？」





（もし、みちび機のアドバイス通りに「イシユタル・ファミリア」と戦う事が正解なのだとしたら）

自分はその道を選べるだろうか。

敗北すれば自分だけではなく、周りも巻き添えにしてしまうと知りながら。

何よりも大切な神様を苦しめてしまうかもしれないのに。

懊悩するベルは歓楽街を歩いていく。

一つ、冒険を越えたとしてもベルはまだまだ未熟だった。

人としても、冒険者としても。

だから、迫りくる脅威にギリギリまで気が付かない。

「……………」

頭の中で自問自答を繰り返していたベルは、不意に影が自分を覆っていることに気が

付いた。

もう日没になってしまったのだろうか。

妙に思い、顔を上げるとそこには。

2 M<sup>メドル</sup>を超える巨体。

筋肉質な褐色の短い腕と短い脚。

ずんぐりむつくりとした体形は迷宮の魔物のよう。



## 男殺しの怪物は厄災へ

春姫さんを助ける方法をみちび機に尋ねた際に、「イシュタル・ファミア」から強奪するという選択肢が現れた。

いくらひみつ道具による予知とは言え、鵜呑みにすることはできないが、それでももしかしたらと言う引つ掛かりを捨てきれなかった僕は、自分のやれる範囲で「イシュタル・ファミア」の戦力を調べたことがあった。結果は敵いつこないと再確認しただけだったが。

規模・人脈・権力。

敵対しちやいけない理由は星のように多いが、その中で最も単純明快な解答。

「イシュタル・ファミア」には第一級冒険者がいる。

そのレベルは何と5。

憧憬と同格の冒険者が在籍している事実を決して無視できない。

「ロキ・ファミア」と何度か共闘する機会があったから理解できた。

第一級冒険者は異常だ。

語弊を恐れないのなら壊れてる、と言ってもいい。はつきり言っただの段階の冒険者

は何でもありになつてくる。

同じ冒険者を名乗るのが恥ずかしくなつてくるほどに、第一級とその下との格差は大きい。

まず、間違いなく僕では勝てない眷属。

それに加えて人格が最悪なのだ。彼女の二つ名【男殺し】アンドロクトノスがそれを良く示している。

田舎ではアマゾネスには結婚を控えた若い男を攫つて行き、子孫を残すために貪り食うと言う言い伝えが今も子供たちに伝えられていた。かく言う僕も子供が門限を守らなかつた時に使われる定番メニユーであるこれで泣いていたものだ。

目の前の冒険者はそれをホントにやってみよう。

夜な夜な歓楽街に出没し、自分の気に入った男を強引にホームに連れ込んでいるのだとか。

人の見た目であまり悪くは言いたくないが、生理的に無理です。とお断りされることは間違いない容姿の彼女が満足するためにもどのような凄惨な事が行われるのか、奇跡的に帰ってきた男はみな廃人になっているのだと言う。

フリユネ・ジャミール。

僕が【イシユタル・ファミリア】に喧嘩を売つてはいけない最も大きな理由が、僕の前で死刑宣告を決定した。

「ゲゲゲツ、さあ、一緒に来るんだよお！」

「ごめんなさいもう門限なんです失礼シマスつつっ!」

脱兎のごとく、と評されるようななりふり構わない逃げっぷり。

それを嗤う者などいなかった。それどころか今まで伸ばしていた鼻の下を引っ込めて、道を開けてくれている。

人々の優しさに涙が出そうだ。できれば直接的にも助けてほしかったが。

ランクアップで跳ね上がった脚力を存分に活かして、自己最高速度を叩きだす。

「アイアム・ガネーシャ」だ。もはやそこしか安全地帯はない。

「逃げるんじゃないよツツ!!」

「ひよっ!」

だが、いかに僕が成長したと言っても所詮はレベル2。

第一級冒険者にステイタスで敵うはずもないのは分かっていた。あの巨体が高速で動くさまは想像以上に怖かったが。

僕に出来るのはスタートダッシュで稼げた空間を利用するだけ。

そう、ひみつ道具、いたずらオモチャ化機で。

地面・壁・看板。

兎に角通り過ぎるものに手あたり次第光線を当てていく。

もうこれは隠すどころの話じゃないが、気にしてはいられない。男として生きていくためには。

フリユネさんが通り過ぎようとした看板が、クラツカーのテープのようにその体に巻き付く。

「ああん？　小賢しいねえ!!」

それを全く意に返さず、力だけで数百のテープを引きちぎる光景は悪夢に出てきそっだ。

粘着質な地面も、迫る壁も、全てを強引な力押しで突破されては笑うしかない。いや、笑い事じゃないが。

「人見知りな子だねえ!!　ますますアタイ好みだよ!!　手取り足取り教えてやる!!」  
手取り足取りって丁寧に教えるって意味なのに、僕の脳内に浮かぶ達磨状態のベル・クラネルは何なのか。

でも、絶対に近いような状態になるという確信がある。

顔を真っ青にして、懸命に走るがステイタスの差は如何ともしがたい。

ゆっくりと悪魔の巨体が迫ってくる。

本来なら一瞬で捕まるにも関わらず、未だ逃げられているのはひみつ道具のおかげではなく、ただフリユネさんが遊んでいるからだろう。彼女のには多分、ビーチで追いか

けっこするアレみたいな感覚なのかもしれない。

だが、それもここまでだと僕の顔をすっぽり覆えそうな巨大な手が僕の首元を掴みかけた。

「うおおおおお!!? 坊主、そのまま止まんなよ!!?」

その時、物陰に隠れていたハシャーナさんが飛び出した。

春姫さんを探すにあたって、唯一相談していた彼は僕が歓楽街に来る手助けをしてくれていたのだ。

そのまま僕を見守っていてくれたハシャーナさんだったが、何故か歓楽街で一番目を付けられてはダメな存在に追いかけられるという想定外の事態に大慌てで出てきてくれた。

フリユネさんの手を払い、僕を抱えて疾走する。

「【剛拳闘士】かい? やれやれモテる女も辛いもんさア。二人纏めて夢を見せてやるよっ!!」

「それは悪夢だろうが!!」

ハシャーナさんとしてもフリユネの相手は御免なのか、滝のような汗を流しているが。

ハシャーナさんのレベルは4。フリユネさんに勝つことはできなくとも、拮抗する程

度はできる。

だが、ここはイシユタルの城歓楽街。

例えフリユネさんを相手にやり合えるだけの力があっても関係ない。

「お前たちイ!! やりな!!」

フリユネさんの号令によって店と言う店から女たちが現れる。

そのすべてが恩恵を身に宿す眷属であることは、その機敏な動きを見れば一目瞭然だ。

「ちくしょう! やっぱ数を使つてきやがった!!」

「ハシャーナさん【ガネーシャ・ファミリア】ですよ! これって逮捕はできないんですか!」

「こんなだが一応客引きだ!! 違法じゃねえ!! 公務で来てるわけでもないから、公務執行妨害も使えん!!」

これが合法で行われてるのだから恐ろしい。

流星に魔法を撃つたりしたら問題だが、ちよつと暴力的な位はオラリオ風という事で見逃されるんだとか。

だからオラリオは野蛮とか言われるんですよ。

「つーか何で罨を全部突破してんだ!! おわあ! 鉄の糸を食いちぎんな! モンス



ターかつつ!!」

正直悪戯レベルを超えた効果が出ちやっても、問題なく対処できてしまうのは流石第一級冒険者ということか。

他の眷属たちは罠に四苦八苦しているから、いたずらオモチャ化機が弱いわけでは無い筈なのだが。

「ヤベエ!!」

すると突然、何を思ったのかハシャーナさんが僕を放り投げる。

その少し後にハシャーナさんに降りしきる矢の雨。

なんでこれが違法じゃないんだ。

「先ずは兎から頂こうかねえ!」

守ってくれるハシャーナさんのいない僕から捕まえようと、フリユネさんの手が伸びる。

(ヤバツ……)

絶体絶命の中、様々な光景が浮かんで消えた。

嘘か真か、走馬灯とは死に瀕した人間の本能が過去の記憶から、生き残るための手段を探すことで起きるのだと言う。

その俗説の真実は定かではないが、過去の情景を振り返った僕は僅かな可能性に突き

動かされた。

(怪物祭ツ、地下水路ツ、それにリヴィラツ!)  
モンスターフライア

怪物祭で使用したひみつ道具、名刀電光丸の受け流す剣術を応用し、地下水路で出会った朱髪の女の速さを元に動きを予測、それらをリヴィラで遠目に見て、学んだアマゾネスの体術を参考に受け流す体術に落とし込む。

自分の視界からフリユネさん以外の情報が限りなく薄くなった。

意識が加速し、次の呼吸までの時間が異様に長くなる。

それはこれまでの冒険者人生で身に付けた技術。

格上とばかり戦い続けた少年が、生きるために必要な一瞬を見逃さないために磨きあげた極限の集中力だった。

正確な起動を予測するために、喜悦に歪む黄土色の眼球ルベライトを深紅の瞳を吊り上げて凝視する。

旨そうな雄としてしか写していないであろう醜悪な性根に僕は活路を見いだす。

「ベルッ」

ハシャーナさんの焦る声が今は遠い。

僕の体は後ろに飛び退いていた。否、正確にはやや左よりの後ろだが。

それを誰もが少年の悪足掻きだと受け止めた。決して実ることのない、憐れな逃避行

動だと。

事実、フリユネさんから見た僕の動きは笑ってしまいうくらいに遅かっただろう。

慌てすぎていたのか、脚をもつれさせて倒れ込む姿の何と滑稽なことか。

だが、これは僕の作戦。

油断しきつた何の技巧も込められていない一撃ならば、この一瞬に僕の出せるありつたけの力を動員すれば辛うじて迎撃可能だ。

(合わせるっ)

全てが緩慢になった世界で、ベル・クラネルの意識は更に深度を増した。

意識の中心はフリユネさんからフリユネさんの腕へ。

僅かな筋肉の動きも逃さないよう、自身に迫る驚異から目をそらさない。

(———今だ！)

褐色の指が額に触れようかという距離までフリユネさんを引き付けた僕は、自身の待ち望んでいた状態。フリユネさんの腕が真っ直ぐと伸びきった状態を前に賭けに出た。

上体をグンツと倒し、後頭部が地面すれすれまで落ちる。

ただ僕が体勢を崩したただけだと高を括っていたフリユネさんの驚愕を感じとりながら、僕は懸命に脚を振り上げた。

回避するだけではダメだ。第一級ならば後からでも軌道を変えられる。

ただ受け流すだけでもダメだ。力が桁違い過ぎる。力を誘導するどころか、巨大な力の流れに押し流されるのがオチだ。

受け流すのなら、腕よりも強い力を発揮できる部位を利用すべきだ。そんなところは何処か。僕には一つしか思い浮かばなかった。

（腕より足の方が筋力は強い。繊細さだけじゃなくて力も必要な今はコレしかない）

狙いは拳ではなく外からの力の影響を受けやすい手首だ。

全身を連動させて大質量の弾丸を受け流すべく、自身の可動範囲の限界まで体を素早く動かした。

「痛ッ……!!」

手首と接触した瞬間、ズンツと重みが足に伝わる。

自分より一回りも二回りも大きな岩石を蹴ったかのような感触。

勢いがついていない手首に対する蹴撃だと言うのに、蹴った自分が悲鳴を上げたくなくなる耐久がベルの全力を空しく霧散させようとした。

想定内だ。痛みを表情を歪ませる僕はそう自分に言い聞かせた。

もとよりこの蹴りは攻撃を目的としたものではない。全力をもってしてもフリユネ<sup>レ</sup>ベル<sup>ル</sup>さん<sup>5</sup>に蚊ほどの痛痒も与えられないことなど、今更驚くようなことではない。

（そう、蹴るんじゃないなくて、挟み込むように……!）

痛みをこらえて足首でフリユネの手首を挟み込み、勢いよく縦回転で体を回す。全身を駆使した受け流しは、少年の体に悲鳴を上げさせつつも脅威を受け流すことに成功した。

同時に足を振り切った体勢のまま後転の要領で距離を取る。

予想外の展開にたたらを踏むフリユネさんから十分に距離が開いたのを確認して、再び向かい合った。

呼吸が荒い。

たった一撃を往なすだけでごっそりと体力が削られてしまう。

おまけにほとんど衝撃を受け流したにも関わらず、体の節々に鈍い痛みが走る。

一撃を往なすことに集中しすぎて、体にかかる負担は二の次になっていたからだ。

「ゲゲゲツ、面白い曲芸だねえ。将来有望じゃないか」

ますます食いたくなってきたと唇を歪めるフリユネさんに動揺の色は見られない。

当然だ。今のは圧倒的レベル差から来る油断に上手くつけ込めただけの話。

僕がこういう風に動けると分かっていたら、そう弁えた上で捕えに来るだろう。

もうこんな手は使えない。

けど、それでいい。

この場にいるのは僕だけではないのだから。

「坊主ー」

流石はレベル4。第一級規格外の一步手前の眷属と言うべきか。

足止めの戦闘娼婦バールベラたちを蹴散らしたハシャーナさんはフリユネさんに殴り掛かった。

それを余裕で回避するフリユネさんだが、ハシャーナさんは更に連撃で畳みかける。

第二級冒険者の攻撃は無視できず、そのままフリユネさんの足止めに成功。それでも

その攻勢がいつまでも続くはずがないことは誰の目を見ても明らかだ。

「ハシャーナさん！ 使います！」

「な!? そいつはガネーシャとヘステイア様に止められていた奴だろう！」

「はい！ でも名前からして確実に入り込めます!!」

「……っグダグダ言ってるんか！ よし、やれ坊主！」

渾身の一撃を叩きこむハシャーナさん。

如何に第一級冒険者と言えども、直撃すればただでは済まない威力にフリユネさんが初めて防御の構えをとる。それを見たハシャーナさんは攻撃を強引に中断し、後ろに飛びのいた。

「待ちなア!!」

それに手を伸ばすフリユネさんだが、僕は咄嗟にいたずらオモチャ化機で落ちていたポーション（なんか色がピンクっぽい）の空容器をアイテム化する。

空容器はボンツと破裂し、辺り一帯に桃色の煙が充満する。

「小賢しいねえ!! 無駄だよっ!!」

それを腕を一振りするだけで払うフリユネさんだが、僕たちにはその動作でできる僅かな隙で十分だった。

ハシャーナさんが僕を抱えて、歓楽街のメインストリートから入り組んだ裏路地に身を投じる。

「ここはアタイたちの縄張りさね! 逃げ切れると思っっているのかい!」

背中から嘲笑が投げかけられるが、そんなことは承知の上だ。

この街自体が脅威なことは一連の流れで良く理解している。

だからこそ使うのだ。ひみつ道具を。

「うそつきかみく」

具現化の際の光をハシャーナさんの体で隠す。

気休め程度の対策だが、人のいない裏路地にいることもあつて目撃者はいないはずだ。

そうして現れたのは一見するとただの鏡。

しかし、こんな見た目でも神様とガネーシャ様が、猛烈に嫌な予感がするから使うなと口酸っぱく注意したひみつ道具。

おそらくは、ドラえもんさんの話に度々登場した危険なひみつ道具と言うモノだろう。

鏡に映る僕の顔はこれまで見たことが無いほど整っていて……

「そうです。貴方が世界一……」

「ゴメン！ 後で聞くからっ!!」

絶世の美少年の顔だが全く心が動かない。

風を纏う憧憬に比べれば、塵チリに等しいものだ。

鏡が喋りでしたが、そういうこともあるだろう。ひみつ道具だし。

そもそも、後ろから脅威が迫っていると言うのに、そんなものに構っている余裕はない。

「ちよつと【逆世界入りこみオイル】を塗らせて!!」

「え、ちよ、ギャー!!」

いたずらオモチャ化機での潜入に失敗した時のため、保険として持ってきた3つ目のひみつ道具を鏡に塗りたくる。

これは鏡や水面と言った反射する物に使うと、左右反対な世界に入り込めると言うひみつ道具だ。自我を持っているらしきうそつきかがみには悪いが許してほしい。後でちゃんと謝るから。





いと気が済まないねえ……」

ゲゲゲツ、とベルとハシヤーナが聞けば卒倒しかねないようなことを言うフリユネ。ボタボタとこぼす唾液が裏路地を更に汚した。

「ん？」

その時。

フリユネはふと何の変哲もない鏡を見つける。

見つけてしまった。

「な、何だいこれはツツ！！！！！！？」

そこに映る自分の顔を見たフリユネは今日初めて動揺した。

美しすぎるのだ。

フリユネは今まで自分の美貌（本人視点）に絶対の自信を持っていた。

それこそ、美の女神などと称しているイシユタルやフレイヤなどよりもずっと自分は美しいと。

周りではそれを妬んで事実無根な風評を流し、何て心の狭い奴らだと嗤っていたものだ。

しかし鏡に映った自分はそんな自分すら驚愕する絶世の美女。

もはや罪とすら言える美しさを発する己を愕然と見つめるフリユネ。

そして、声が喋りだす。

「私は真実を映し出す鏡です。私に映り込む世界こそ真実。あらゆるまやかしを撥ね返して貴女に本当を届けます」

「あ、アア……真実？ 真実だつて？ アタイはずつと偽物の自分を見せられていたつて言うのかい？」

鏡が喋りだしたという異常事態に気付かず、放心気味に問う。

これが真実なのだとなれば、今まで偽物で満足していた自分のなんと滑稽なことか。

「これは……駄目じゃないかい……こんなに美しかったらアタイを巡つて戦争が起きちゃうよ！」

「ああ、お優しい方。その容姿と同じく心清らかなのですね。大丈夫、全ての人は貴女の虜。貴女が願えば世界の恒久的平和すら確約されるでしょう」

フリユネは自分を恥じた。

周りの女たちを自分の美貌に嫉妬する醜悪な不細工どもだと見下していたが、これが真実なのだとなれば悪いのは自分の美貌の方だったのだろう。

仮に、自分の前にこれほどの美女が現れた時、海より広い心を持つフリユネであつても嫉妬の心を抑えられなかったことは想像に難くない。

「今まで真実を知らなかった貴女は自分の美貌を御存じなかった。だから貴女はその美

貌を十分に引き出せていないのです」

「な、何だつて!? この美貌にはまだ先があるのかい!？」

「はい。表情をもっと工夫してみましよう。目を見開いて瞳孔を上向きに……そうそう、とつてもチャーミング。男の庇護欲をそるお姫様みたいです。そこで満面の笑みを見せれば女神だつて裸足で逃げ出します。髪型も変えてみましようか。貴女はありのままの姿こそ美しい。綺麗に整えた前髪も素敵ですが、ここは敢えて整えずくしゃくしゃにしてみましよう。不安定な魅力は女神様では再現できない貴女だけの特権です。それと香料も変えてみてはいかがですか? 発酵した毒<sup>ポイズン・ウェルミス</sup> 妖 蛆の体液を……」

その先の地獄絵図は言うまでもないだろう。

依然として二人を見つけれられないレナが、嫌々報告に行くところの世のものとは思えない光景に意識を手放し。

騒ぎを聞きつけて面白半分様子を見に来た神々が真顔で逃走。

外の様子を見るために鏡から顔を出したベルとハシャーナは、哀れ正面からそれを目撃してしまい半狂乱になりながら鏡を飛び出し「アイアム・ガネーシャ」に逃げ帰った。しかし、自分磨きに余念がないフリユネは、そんな周りの様子など一切気にすることなくうそつきかがみのアドバイスを実行し続ける。

その日から歓楽街に厄災の化身ともいふべき怪物が跋扈し、幽霊騒動で怖いもの見た

さに集まっていた神々すら足を運ばなくなつたと言う。

## 新装備試着

「いやに疲れているな……何かあったのか？」

「うん……ちよつと怖いものを見ちゃつて」

ヴェルフが改修した兎鎧を受け取ったベルは、約束通りヴェルフをパーティーに加えて10階層を探索していた。

相変わらず、どこから出てきているのかも分からない白い霧のせいで視界が悪い。

パーティーの人数が増えたことで、霧に巻かれてバラバラになってしまうリスクも増えた。

いつも以上に周りに注意を払わなければならないと、昨日のことで少し脱力気味だったベルは気合を入れなおす。

「昨日はお前もハシャーナさんも大変だったらしいからな」

今日も護衛のためについてきてくれたモダーカが気の毒そうにベルに話しかける。

昨日は大変だった。と言うか恐ろしかった。

逃げ込んだ左右反対の世界から出たらあのフリユネがいたのだ。

何故か禍々しい変顔を披露していたが。

「確かに迂闊な行動ではあったけど……シヤクティ団長もあんなに怒らなくてもなあ」  
そして命からがら帰ってきたらそこには仁王立ちするシヤクティだ。

勝手にホームから出た僕とハシャーナさんはそれはもうこっぴどく叱られた。

イッパイルス  
闇派閥に襲われたのはつい最近だというのに、歓楽街で夜遊びとは何事だという至極真つ当な内容で。

暫くは春姫さんには会いに行けないかもしれない。

ゆうれいストローみたいな相手の攻撃を無力化できるひみつ道具が出たら行けるかもしれないが、何のひみつ道具が使えるようになるかは運次第。「幸運」のアビリティがどの程度働いているかは分からないから、あまり期待はしないほうがいい。

「モダーカ様もお疲れの様ですが……？」

「あー、俺も昨日は大変だった。ジャガ丸くんを求める剣姫が暴れててな」

「剣姫様が？」

「ああ、幻のジャガ丸くんを求めてオラリオ中を動き回ってな……『フレイヤ・ファミリ  
ア』なんかは警戒するし、何を勘違いしたのか剣姫は牽制に来た幹部を倒せば情報が入  
ると思っただらしくてな……」

何故か立ちふさがる幹部たち↓この人たちも幻のジャガ丸くんを狙ってる(?) ↓何  
か情報を持つてるかも(!?) と言う天然爆裂な思考が展開されたいらしい。

オラリオの二大派閥が抗争を始めたことと誤解した住民たちが阿鼻叫喚、「ガネーシャ・フアミリア」が起動する事態になった。

それに参加したモダーカは、モンスターより化け物してる第一級冒険者たちの超人戦争に巻き込まれてグツタリだったらしい。

最終的に保護者リヴェリアがアイズに拳骨を落として事態は収まったんだとか。

漁夫の利を狙えるチャンスと勘違いした一部の闇派閥イヴェルスが、全てが終わった後にノコノコやってきて、闘争心を持って余した暴れ猫のストレス解消に使われてたのは笑うしかなかったと言う。

「つとお喋りはここまでだな。インプの群れだ」

「オークも2体いますー！」

「1体は天然武器ネイチャーウェポンを装備してるな。どつかのアホがミスったな」

一度、仲間内から除け者にされてやけくそで10階層に突撃し、案の定返り討ちになった記憶がヴェルフの脳裏に蘇るが、ヴェルフはそれでも不敵に笑った。

「よし！ オークは俺に任せろ。ここいらで俺の冒険者としてのアピールもしたいからな」

「なら、僕はインプを。リリはクロツゾさんの援護お願い！」

「分かりました」



「よっしゃ、なら新装備も試してくれ。感想を聞きたい」

ヴェルフの言葉にベルは頷き、自身のポーチに目を落とす。

ベルが依頼したのは兎びん古鎧の改修のみだったが、ベルとの世間話の中でハツメイカーで設計図を作ったのはいい物の、想定不足で結局使い物にならなかったアイテムの話になった。

その中の一つのアイディアに目を付けたヴェルフによって、彼なりにアレンジを加えた追加装備も造ってきていたのだ。

ヴェルフ曰く、ちよつとしたサービスらしい。

「……行きますっ」

草原を蹴り、紫紺の群れに突撃する。

既に前回の戦闘でコツは掴んだ。万が一は無い。

だから余裕を持って改修したアーマーと追加装備を試す。

まずはすれ違いざまに先頭のインプの首筋をはね、続く二体目をその勢いのまま蹴り飛ばす。

決して足を止めず、白い稲妻のような軌跡を描いて敵を翻弄する。目標は紙一重での回避。

シビアな体捌きを要求されるこの動き、生半可な防具では悲鳴を上げるが。

(うん、大丈夫)

ベルはあの嫌な音がアーマーからしないことに安堵する。

これならば新作の防具が完成するまで持つだろう。

今日一番の懸念事項が解消されたことを確認したベルは、チラリとヴェルフたちの戦闘を見る。

オークは上層では有数の怪力の持ち主、ベルとしては一撃が重いこのモンスターは苦手だったが、ヴェルフは全く動じた様子が無い。

ゆっくりと自分から間合いを詰め、オークが攻撃を仕掛けようと腕を振り上げた瞬間に右手の大刀を見舞った。たるんだ緑の腹が衝撃で波打ち、豪雨のようなくぐもった断末魔が轟く。

流石に鍛冶師だけあって力のアビリティは高い。

レベル1上位というベルの予想は当たっていたということか。

自身に注がれる視線に気が付いたヴェルフは、ベルに向かって歯を見せて笑った。

それにベルも微笑み返す。

向こうはこのまま任せても大丈夫だろうと、ベルは残るインプたちを片付けるためにナイフを構えなおすが。

(……っ、何!?)

強力なプレッシャーを感じて霧の奥に向かい直す。

遅れてヴェルフたちもそのモンスターの存在に気が付いたのか、慌てて振り返った。大地を揺らす鈍い音色。

階層が軋むような重厚感を含むその響きは、徐々に霧の中から黒い影を伴い冒険者に近づいてくる。その大きさは……およそ4 M<sup>メートル</sup>。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

空気が揺れるほどの凄まじい猛り声。

思わず耳を塞ぎそうになるのを何とかこらえる。そんな隙は見せられない。

やがて、そのモンスターは白いカーテンを突き破って姿を見せる。

鋭利な爪に、刺々しい鱗。

その姿は小竜。

「インファント・ドラゴン……」

呆然と眩くリリの言葉が空しくフロアに響く。

下級冒険者の活動範囲ファイナルドに出現するモンスターでありながら、その強さは階層主に例えられる稀少種レアモンスター。

「やべっ」

小竜が現れたのはヴェルフとリリの真正面。

下級冒険者によつて構成されたパーティーを、尽く壊滅させたという報告が大量にあるこのモンスターを相手にするにはリスクが大きすぎる。

尻尾をゆらり、と振るインファント・ドラゴン。恩恵を受けた眷属の骨すら砕く一撃の前動作だとエイナに教わっていたベルは、息をのんだ。

「ベル様！クロツゾ様！相手を交換します」

「うん！」

「すまんつ、頼んだ！」

リリの判断は早かった。

まだレベル1で十分に対応できるインプたちをヴェルフが、インファント・ドラゴンを上級冒険者のベルが相手する。

すれ違い様にヴェルフとハイタッチをしたベルは、まずはポーチから追加装備であるグローブを取り出し、走りながら装着。そして魔法を行使する。

「【ファイアボルト】!!」

既に振り抜かれた尻尾。

このまま回避すれば足の遅いリリに当たる恐れがある。

それを防ぐにはこの攻撃をベルが迎撃しなければならぬ。

如何にレベル2の火力と言えども、無詠唱だけでは尻尾にかき消されるだろう。

故にベルは咆哮した。

「あああああつ!!」

(あれは……!?)

炎雷がベルの手から離れる前に、それに追いつかんと全力をもって跳躍する。さながら拳に魔法を纏っているかのような光景に、リリは既視感を覚えた。

その一撃はあの戦いの再現。

爆裂音と共にフロアが緋色に照らされる。

自慢の一撃を真つ向から弾かれたインファント・ドラゴンは驚愕する。

「べ、ベル様っ、腕は!」

「ちよつとチリッ、つて感じになつたけど大丈夫!」

流石は精霊の護符。流石はヴェルフ謹製の武器。

ザニスを倒した一撃をこの程度の負担で再現できるとは。

ただ、ナイフは少し掴みづらい。慣れるまでは無理はしない方がいいだろう。

(残つてたオークが来る。このグローブにはウォーシャドウの爪が指の部分に使われているはず。なら……)

「オオオオオオオッ!」

オークが棍棒を振り上げて襲い掛かる。

本来ならば大きく回避するのがセオリーだが、敢えて足を止めてヘスティア・ナイフを左手に投げ、右腕を掲げた。

そんな愚かな人間を嘲笑うかのように、唇を吊り上げて棍棒を叩きつけ……

「ヴオ？」

オークが頭の中に描いていた、頭蓋が砕け、脳漿が弾け飛ぶ光景が霧散する。

腕が止まった。頑強なドワーフすら八つ裂きにする怪力が、目の前の子どもの力で封じ込められていた。

棍棒を正面から掴み取ると言う、非常識極まりない方法で。

ウオーシヤドウが冒険者にとって、最初の難関と呼ばれるのはその頑強な爪。

ナイフと遜色ないその威力は防御にも活用できるのだ。

(おいおい……あんな使い方想定してないぞ)

ヴェルフが作った追加装備はあくまでも超近距離での魔法を軽減する物。

モンスターの打撃を完全に受け止めるなどできない。衝撃はそのまま使用者に届く。

それでも微動だにしないのはベルの【耐久】と、力を受け流す【器用】の異様な高さ。

(【敏捷】だけじゃないのかよ!?)

インプたちを掃討し、ベルの援護に行こうとしていたヴェルフは思わず足を止めてしまった。

ベルの真価を目の当たりにしたヴェルフは、自分がまだ契約をした冒険者を評価し損ねていたと悟る。

アビリティオールS。

それはベル・クラネルの規格外さを証明するには十分な事実だ。

棍棒を【力】の限り握り砕く。

武器を失った衝撃でよろめくオークは逆る【魔力】に思考を凍らせた。

「ファイアボルト」!!」

オークの顔面を掴むと爆裂と共に、その巨体をインファント・ドラゴンに向けて投げ飛ばす。

脂肪をたっぷりと抱えたオークの超重量が、インファント・ドラゴンの首に激突する。

「ギャアアアアアアアアッ!」

ビキリッ、と首から出た致命の音に小竜は絶叫した。

敵を前にして見せる最悪の隙。

その愚をベルの【敏捷】は見逃さない。

「せやあああああああつ!!」

右手のグローブが朱い炎雷を纏い。

左手に持った神の刃が紫紺の光を放つ。

少年の超高速の連撃は、最早インフロント・ドラゴンに立て直しの余裕を与えなかった。

「アアアアアアアッ!？」

悲鳴は爆音にかき消され、血しぶきはその白い髪に汚れを残すことすら許されない。肉も骨も削られるインフロント・ドラゴンはあつという間に崩れ落ちる。

「ガ……ア……」

ピクリと痙攣した後、絶命するインフロント・ドラゴン。

再び静寂が戻る1階層。ベルは少し残心した後、無言でナイフを鞘に戻した。

「ありやーレベル2クラスだったが……やっぱぶつ壊れてんなお前」

「それ褒めてます?」

「ぶつ壊れているは冒険者への誉め言葉だよ。それと、そのグローブもいいな。なんて名前だ?」

「ありがとよ、びよんきゅー兎肉球だ」

「え?」

びよんきゅー  
「兎肉球」

「お、おう……」

最後まで手を出さなかったモダーカはベルの成長を称えた。



ミノタウロスほどではなくても、レベル2でも倒すのが難しいと言われる相手に余裕をもつて対処したのだから、多少なりとも少年の成長を見守っていた先達としては喜ばしいことなのだろう。

ヴェルフのネーミングにはちよつと引いていたが、しばらくすれば慣れるのでベルは放置した。

「しかし、こんなレアモンスター稀少種。なんで急に……」

インフアント・ドラゴンが突如現れたことに疑問を抱いた様子のもダーカだったが、突如ベルの後ろに回ると抜刀する。

もダーカの行動に、少しの間混乱したベルだったが、これまでの経験から何が起きたのかをすぐに察し、慌ててヘスティア・ナイフを抜刀。

（敵襲?!）

振り返るともダーカが仮面の人物と鏢迫り合いを行っていた。

「闇派閥か?!」

「……ッ」

もダーカの言葉に苛立ったように、強引に空中で轉身した仮面の人物は再びベルを狙うがそれをもダーカは許さない。

伸ばされた腕を切りつけ、敵からベルたちを遠ざける。

「リヴィラから碌に日にちを開けずにまた活動するとはな……今回の黒幕は随分と活発だな？」

「……」

揺さぶりをかけるモダーカの言葉に反応はない。

その視線はベルを見据えたままだ。

「それでやることはこんな新人を狩ることか？ 随分と暇人なんだな？ そんなお気楽

な仕事、ごごたごた続きの身としては羨ましいな」

「サエス  
ト  
囀ルナ、退ケ」

ようやく言葉を発した仮面の人物。

リリはその声に違和感を感じる。まるで何人もの肉声が混ざり合っているような違和感。

（地声を隠してる……？）

「お前、リヴィラで暴れてたやつらの同類か。今の動き、人間らしくなかったぞ」

「……」

（駄目だな。碌に喋りやしない）

モダーカはこれ以上の会話は無意味と判断すると、敵の戦力分析に勤めた。

リヴィラで暴れた連中の同類であると仮定しても、あの二人ほど化け物じみてはいな

い。

これならばちよつと大変だが問題なく撤退できる。

(つと。そう簡単には行かせてくれないか)

モダーカとほぼ同時にベルも気配に気づいた。

周りから感じる幾つもの視線に。

「<sup>イヴァイルス</sup>闇派閥の狂信者……つ」

ベルの言葉にヴェルフとリリも緊張した様子でそれぞれの武器を構えた。

数は凡そ10人前後。白装束はこの階層の霧に同化しているかのように見え、幽霊に囲まれているかのように。

「ぞろぞろと……ゴキブリか何かかよ」

ヴェルフの軽口もどこか固い。

レベル差は大差ないようだが、数が多い。

少しだが、ベルたちの方が不利な状況だ。

<sup>イヴァイルス</sup>闇派閥たちはそれぞれ武器を構え、殺気を飛ばす。

(あれ……?)

だが、その殺気が向けられているのはベルことではない。

それが向けられているのは……仮面の人物。

「エイン様……ヴァレット様によるとその男はマジックアイテムの在り処を聞き出すために、拉致せよとのものだったはずですが」

リーダー格と思われる男が、剣呑な雰囲気で仮面の人物に尋ねる。

その口調はとも仲間に対する物とは思えない。

「知ラン。私ハタダエニユオノシジニシタガウ」

「正体も明かさない。ただ状況をかき乱し事態を悪化させた者を優先するのか」

「……」

互いに殺気をぶつけ合う両者。

話を聞く限り、仮面の人物はベルを殺そうとしていて、白装束の一味はベルを捕まえようとしているようだが。

「仲間割れか……お前ら、隙を見て逃げるぞ」

状況を理解したモダーカは小さな声でベルたちに指示を出す。

「失セロ……」

「調子に乗るなエイン。怪人クリーチャーと言えども、お前は最も弱い！」

3つの勢力がそれぞれの動きに警戒を払い、動きを止めた。

モンスターたちの唸り声のみが響く、霧の都で混沌とした戦いが始まる。

## 灰を切り裂く剣閃

ベルを殺そうとする仮面エの人物イン。

ベルを利用しようとする闇派閥イヴイルス。

そして、2つの勢力から逃げようとするベルたち。

睨み合う彼らのなかで、先に動いたのは闇派閥イヴイルスだった。

「先ずはエインを止めろ！」

個々の力では最弱の怪人にすら劣る彼らは、その驚異を先に排除しようとして矢を射掛ける。

並の冒険者ならば致命の矢の雨も、第二級冒険者並の身体能力をもつエインには当たらない。

闇派閥イヴイルスの攻撃を片手間で捌きつつ、エインは中層のリザードマンが使う自然武器ネイチャーウェポンで、

ベルの心臓目掛けて突きを放つが。

「させるかー！」

モダーカの剣がそれを弾き、反動を利用して仮面に包まれた顔面目掛けて蹴りを放つ。

だがエインはグニヤリと体を曲げ、攻撃を回避して見せた。後頭部と足がくつつきそうなほど、空中で体を折って見せると言う、人間ではできないような柔軟な動きにモダーカは唾然としてしまう。その隙を逃がさんと宙に浮いたままエインがモダーカに剣を振り落とそうとし。

「っー！」

飛来した炎雷を空中で身を捻って避ける。

「無詠唱力、面倒ナ」  
ムエイシヨウ  
メンドウ

エインは腕を伸ばし、睨み付けるベルを一瞥すると距離をとる。

矢より強く、速い速攻魔法。

それだけならば驚異ではないが、上級冒険者相手には無視できない隙を作ることはできさるのだ。

「【ファイアボルト】!!」

詠唱を必要としない特性を存分に活用して、常識外の魔法の連射を披露するベル。

四条の火柱が、霧を裂いてエインに迫る。

閻派閥が射掛ける矢とベルの魔法による弾幕がエインを釘付けにした。

「(っ)のまま……っ!!」

先ずはこの場で最も驚異となるであろうエインを確実に無力化しようと、込める魔力

を高めるベルだったが、闇派閥イウイリスの一部がベルを取り囲もうとしていることに気がつき、そこから移動する。

敵の敵は味方ではない。

闇派閥イウイリスはあくまでも、自分たちの目標であるベルを殺そうとするエインと反目しているだけ。ベルのパーティーと手を組む気など更々ない。

エインへの攻撃に集中しだしたベルに隙を見出したのか、一部の者はベルの確保に動く。

「おっと」

それを武骨な大刀が阻む。

暗黒期こそ経験はしていないが、ヴェルフもオラリオに来てそこそこ経つ。

日陰者の考えが予想できる程度には修羅場は潜ってきているのだ。

ヴェルフが肩に担ぐ大刀を警戒して足を止める闇派閥イウイリスたちは、凄まじい敏捷で駆け付けたモダーカによって一掃された。

(仮面野郎には立て直されるが……っ)

モダーカのやるべきことはベルの安全の確保だ。

危険人物にかまけて護衛対象に敵を近づける愚を、もう二度とは起こさんと残る闇派閥イウイリスにも剣を突き立てて警告する。

矢と魔法の弾幕にほころびが生じ、エインは距離を取って体勢を立て直した。  
イヅイルス闇派閥もキリの中から次々と現れる増援によって、戦力に陰りは見えない。

そして、ベルたちは互いの死角を補うために、互いの背中を庇い合って四方に警戒を敷く。

(また状況が膠着しやがった。どうする……)

モダーカは再び訪れた探り合いの時間にうんざりしながらも、一連の状況を頭の中で整理し直す。

この場で最も強いのはエインで間違いないだろう。

しかし、その強さは決して状況を決定づけるほど圧倒的なものではない。

モダーカも一対一では危ないが、ベルの援護があれば十分に有利が取れる程度の相手だ。

逆にこの場で最も個々の力が弱いのはイヅイルス闇派閥だ。

レベルはリーダー格が2程度。自爆装置を持つわけでも、呪詛装備カースウェポンを持つわけでもない彼らはモダーカを脅かすことは無いだろう。

ただ、純粋に数が鬱陶しい。エインに有利を取るとすぐに邪魔をしてくる。

エインを破った次は自分たちだと分かっているからだ。だつたら出てくんなど言いたい。



(状況は悪くないが、良くもない)

勝利の目と敗北の目が同居する微妙なバランス。

天秤を動かす何かがあれば即座に一方に傾くいやらしい局面では、一つの読み違いが命取りに繋がる。

(最悪なのは闇派閥イヴイルスと仮面野郎が同時に俺たちに襲い掛かる展開だ。この階層には遮蔽物がない。下手すれば集中砲火をもろに食らいかねないぞ)

対オーク対策で自然武器ネイチャーウェポンとなる木は刈り取つてある。

ダンジョンがそれらを再生させるのはもう少し後のことだろう。

霧こそあるが、今のパーティーは格好の的だ。

何か壁になるものがあれば……と内心愚痴るモダーカが、再び動き出そうとしているエインに応戦の構えをとろうとした時。

「耳を塞いでくださいー！」

リリの声がモダーカの背後から聞こえた。

咄嗟に指示通りになると同時に背後から灼熱のような閃光を感じ取る。

「ぎやああああアアアッ?!」

「グッー」

白い世界をさらに溶かすような光にエインや闇派閥イヴイルスが苦悶の声を出す。

リリが何をしたのか、リヴィラでハシャーナがどう生き残ったかを聞いていたモダーカにはすぐに分かった。

（発光瓶か！）

ベルがかつてハツメイカーと言うひみつ道具によって作り出した簡易型発光アイテム。

上級冒険者や怪人にすら通用する逃走の切り札はその効果を發揮する。

（こいつ、俺たちが背中合わせになっているから光を直視しないことも計算して……？）

発光瓶は強力故に加減が効かないアイテムだ。

発動の際には味方にタイミングを知らせないと、仲間も光と爆音で感覚を潰されかねない。

しかし、香気に発動を知らせれば手練れならばアイテムの性質を見抜き、対応されるリスクがあった。

だがリリは敢えて大きな声で耳を塞ぐように指示を出したのだ。光は背中合わせになっている仲間たちには大した影響は与えないと踏んで、爆音だけに敵の意識が向くように誘導したのである。

このアイテムの存在自体は聞いていたヴェルフだったが、その使い方に戦慄した。

「よしっ、このまま一気に上の層へ……」



「敵は炎ファイアボルト雷を警戒しているはずですよ。ですがひみつ道具に銃がありますから、そちらを  
使えば意表をつけるでしょう」

「銃なんてあったっけ？」

「ガンって言うのは銃と同じ意味ですよ」

リリの考えた作戦はエインと闇派閥イヴァイルスの分断である。

戦況が拮抗しているのはこの2つの勢力の内、どちらかを潰そうとするともう一方が  
邪魔をしてくるからだ。

それをあらかじめ防ぐために闇派閥イヴァイルスを遠ざけて、エイン対モダーカ&ベルの構図に持  
ち込む。

「でも、ひみつ道具を出すときの光はどうしよう」

リリの作戦に異論はないが、ベルはヘスティアに厳命されているひみつ道具の秘匿が  
できないのではないかと危惧を漏らす。

既にベルがひみつ道具を持っていることは知られたが、それを生み出しているのがベ  
ル自身だという事までは辿り着くことはできないはずだ。

「コレを利用すればちようどいい目くらましを発生させられます。それに紛れて具現化  
しましょう。ついでにリリが風を起こして闇派閥イヴァイルスに喉けて動きを止めましょうか。一

石二鳥です」



る。

「魔石を砕いたのか？ っち、霧と相まって前が見えん！」

モンスターへの命の源である魔石を砕くと、モンスターはその体を維持できなくなり灰と化する。下界では誰もが知る常識だ。

何故自分たちのアドバンテージである障壁を消してしまったのか、視界が遮られるのは一瞬だ。理解できずに混乱するリーダー格であったが、そこに少年の少し間の抜けた声が聞こえた。

「ラツキーガン〜」

「つむじ風うちわ〜」

（なんだ？ 作戦の合図か？ ええい、灰で何も見えん）

次々と意図の分からない行動を連発する冒険者たちに、イザイルス 闇派閥は警戒を強める。

エインもまた、視界が封じられた状況下の奇襲に備えてリザードマンの剣を構えた。

ベル・クラネルの持つ不可思議なマジックアイテムはこの場で最も警戒されているものだ。

戦いの趨勢を一手で決めてしまうこともあり得る規格外な手札は誰も予想できない。迂闊に動けずにいた彼らの前にそれは現れた。

「うわあああッ!？」

「つむじ風だああああ!？」

灰と霧を巻き上げる渦巻き状の突風が突如闇派閥イヴイルスの前に発生する。

つむじ風の中に入ってしまった彼らが飛ばされることは流石に無いが、インファン・ドラゴンの灰が叩きつけられ、そのまま目や口に入ってしまう。

激痛にあえぐ闇派閥イヴイルスはヴェルフの強襲を受けて、もはや戦いどころではなくなり、

方々に逃げ出した。

(闇派閥イヴイルスニヨル横槍ヨコヤリヲ封ジタカ……来ルク)

仮面によって直接灰に触れることが無いエインは闇派閥イヴイルスから意識を離しつつ、来るであろうひみつ道具か、モダーカによる急襲に気を張った。

「おおおおおっ!」

裂帛が霧を突き破ってエインに叩きつけられる。モダーカだ。

再びぶつかり合う剣と剣。

一合、二合、三合と重なり合う剣戟の音が舞い散る草葉を揺らし、霧と煙の混じり合うフロアに一層響いた。

モダーカは11人いる「ガネーシャ・ファミア」のレベル5には劣るが、それでもオラリオに3つしか存在しないSランクの派閥の一員。

最弱と言えども怪人クワイチャー相手に見事に渡り合った。

霧の向こう側から現れる炎雷の援護も相まって、モダーカは着実にエインを追い詰める。

(今ノ私トホボ互角……流レガアチラニアル分、イズレ押サレル)

状況を理解したエインの決断は早かった。

モダーカとの剣戟を強引に中断し、ベルへ向かわんと炎雷が飛んできた方向に駆ける。

そうなればエインはモダーカに格好の隙を見せることになり、容赦なくモダーカは斬撃を浴びせかけたが。

(止まらねえ!?)

負った傷など知ったことかとエインは脚を止めなかった。

怪人の頑強さを知識としては知っていたとはいえ、実際に戦った経験がほとんどなかったモダーカの油断とすら言えない隙。

それが怪人のベルへの接近を許してしまう。

リリが作戦のミスに思わず声を上げる中、エインは使命の完遂を確信した。

誰もが作戦の失敗を感じる中、ベルは戦う意思を見せる。

世界が時を止めたような深い集中の中で、迫る脅威にベルは眈を吊り上げ、ラツキーガンを発砲。



黒い弾丸が甲高い音を伴い轟進する。

ファイアホルト  
速攻魔法に注意を払っていたエインは、魔力を伴わない銃撃に意表をつかれ、直撃してしまふ。

「ダカラドウシタ」

予想外の攻撃ではあつたが、クリチャー怪人としてモンスター並みの耐久を持つエインに銃は通じない。聞こえてきたドジャンツ、と言う不吉な音も、先程のアイテムのような妨害だと考え、もう惑わされるものかと無視を決め込む。

そのままベルの首をはねようとリザードマンの剣を振るつた。

ナイフに持ち替える暇もないベルは、右手に持ったラツキーガンでその剣を受け止める。

剣と銃がぶつかり合い、ビキリツ、と破滅的な音が響く。

腕を震わせる衝撃と同時に、リザードマンの剣に罅が入つたのだ。

何の修理もしないリザードマンから奪つた自然武器ネイチャーウェポンとは言え、この状況でガタが来る運の無さにエインは動揺した。

「ナツ……!?!」

「ああああああああつ!!」

ベルは銃を持つ手に力を込めて剣を砕く。

剣の破片が散り、互いの体勢が崩れる中、エインは執念のままメタルグローブを突き出す。

衝撃でラツキーガンを失ったベルも、鏡合わせのように**びんきゅー**兎肉球で迎え撃った。

重なり合う爪撃と爪撃。銀と朱。

ステイタスはエインの方が上だが、ベルにはその差を埋める魔法がある。

「**ファイアボルト**！」

掴み合う二人の間に炎雷が発生した。

金属の五指を吹き飛ばす爆炎がエインを草原に転がす。

「グッ……ククッ」

モダーカが背中の大きな傷と、ベルの**ファイアボルト**によって焼かれた左腕。

通常の間人ならば間違いなく再起不能だが、**クリーチャー**怪人は違った。

「再生してやがる……」

ヴェルフの愕然とした声とその理不尽を物語っている。

二人によって負わされたダメージが目に見えて回復しているのだ。

全く消費が無いと思わないが、これは余りにも出鱈目。

エインは最低限動けるようになったのを確認すると、足元にある先ほど吹き飛んだラツキーガンを無事な右手で構えた。

「しまっ……」

動揺するベルに発砲される赤色の弾丸。

咄嗟に顔をグローブで庇うベルは、次の瞬間に訪れるであろう衝撃に歯を食いしばり

……

ピンポーン！

「へ?!」

状況に似合わない陽気な音に目を点にするベル。

全くダメーヂを与えていない弾丸に、エインも戸惑う様子を見せる。

その時、風が走った。

「ガッツ!?!」

攻撃に全く反応できずに吹き飛ばされるエイン。

エインだけではない。

ベルも、リリも、ヴェルフも、モダーカすらも反応できない神速の剣技。

黄金に輝く長髪は、霧に包まれたこの階層でも良く映えている。

そこに立っていたのはベルの憧憬。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

「<sup>ケンキ</sup>剣姫!? ナゼッツ!?!」

全く脈絡なく現れた都市最強派閥の幹部に焦燥を隠せないエイン。

ベルも何故？　と言う疑問が頭の中でぐるぐると回っていた。

「状況はよく分からないけど……多分、あの女ひとと同じ、だよな？」

アイズはエインに視線を向けると、凄まじい剣気を発する。

ヒューマン最強とも謳われる所以の一端を垣間見せ、抜剣の風圧で舞い散る灰を一掃する。

「助太刀します。倒したら、君に幻のジャガ丸くんを教えてもらおう」

ベルにそう告げると、アイズは目にも止まらぬ速さでエインに向かった。

「……ええ？　なんでジャガ丸くん？」

## 運命の分かれ道

最強の冒険者は誰か？

世界最高戦力が集う迷宮都市オラリオで、市民たちの世間話で度々議論される話題である。

都市唯一のレベル7である【**猛者**】。

秀でた頭脳と武勲を併せ持つ【**勇者**】。

規格外の火力を持ち、都市最高の魔導士と名高い【**九魔姫**】。

暗黒期から第一線で戦い続けてきた歴戦の冒険者たち。

彼らと並び、都市最強の一角に数えられる新世代の冒険者。

それが【**剣姫**】。

都市最強派閥の片割れたる【ロキ・ファミア】の幹部にして、ベルによって覆されるまで更新されることは無いだろうと思われていた、前世界最速のレベル2到達記録者だ。

「……………行くよ」

「グッツ!?」

11階層と言う浅すぎる階層に、何の前触れもなく現れたそんな第一級冒険者が銀光にしか見えない刺突の連打によってエインを追い詰める。

得体のしれない怪人<sup>クリーチャー</sup>の威容はもはやそこにはなかった。

剣の嵐が止まらない。

懸命に獐猛な刃から逃れようとするエインだが、それを許すアイズではなかった。

無論、この霧が濃いフロアで一瞬の隙を見て逃走しようにも、第一級冒険者の鋭い五感<sup>五感</sup>はエインを逃がすことはまずないだろう。

しかし、誰でも、どんな格下でも奥の手を持つのがこの世界の常識だ。

最後まで気を抜かず、エインをその場で釘付けにするようにアイズは時計回りに移動する足使いで、敵に逆転のチャンスを与えなかった。

「……ッ……ッ!!」

もはや声にならぬ悲鳴を上げながら亀のように固まり、メタルグローブで必死に頭部への攻撃を防ぎ続けるエイン。

ローブには徐々に傷が増え、そこから噴き出す鮮血が紫紺の生地をどす黒く染め上げていく。

先ほどまで自分たちが全力で戦っていた相手を、まるで赤子の様に捻り潰すその光景。

それはヴェルフを唾然とさせるには十分すぎるものだった。

(なんなんだあの強さ……これ、本当に現実か?)

次元が違う、比較でよく使われるその言葉がぴったり当てはまるほど一方的な戦い。常識を軽々と超えたその強さは正に絵本の中身だ。

レベル1では測りきれないステイタスに、己の感覚が麻痺してしまっていることをヴェルフは自覚した。

「相変わらず無茶苦茶ですね……」

呆れたように呟くりりの声が、ヴェルフには何処か引き攣つて聞こえる。

自分たちは助けられているのだ。不気味なあの怪人クリーチャーから。

だと言うのに畏怖の想いが強く湧き出る。

何という化け物なのだと、そう感じてしまう。

幼き頃に見た騎士。

王国でも有数の実力者であった彼すら、あの剣技の前には霞む。ラキア

「あれ、本当にレベル5か？ ウチの団長も鍛冶師とは言えレベル5だが、いくら何でも強すぎるだろ」

第一級冒険者は怪物。

それは有名な話だが、それにしても【劍姫】は異常だ。

そんなヴェルフの疑問に答えたのはモダーカだ。

「レベル5じゃない」

「……………」

「多分、ランクアップしている。今の【剣姫】はレベル6だ」

冒険者として、ヴェルフ以上に多くの実力者を見てきたであろう、モダーカの言葉にヴェルフはいよいよ動揺した。

都市最強の一角に数えられていたのはレベル5時点 ведь。

レベル6になった今、今までの【剣姫】の噂を考慮すれば、或いは【ロキ・ファミリア】最強にまで力は上がっているのかもしれない。

「あれで魔法もあるとか本気で隙が無いぞ」

【剣姫】が出鱈目な付与魔法エンチャントを使えるというのは有名な話だ。

それこそがレベル5でありながら、都市最強の一角に数えられていた所以なのだから。

だが、この戦いに魔力の波動は感じない。

アイズは素のアビリティのみで戦っているのだ。

「うおおおおお!!」

アイズの強さに破れかぶれになったのか、雄たけびを上げながら殺到する闇派閥イヴェルス。



せめてベルの確保だけはと、なりふり構わない彼らの魔の手が迫る。

「そんなこと」

しかし、風のような敏捷速さをもつ彼女は。

「させない」

闇派閥イヴァリスたちがベルたちを襲う前に彼らの前に現れた。

同時に吹き飛ぶ幾人もの狂信者たち。

剣を振られたにもかかわらず、その体が真つ二つになっていないという事は剣の腹を叩きつけられたという事か。

先ほどまで緊迫感のある戦いの中にいたはずの彼の心は、自分に違和感を覚えるくらいには落ち着いている。獅子の上に乗る鼠の気は大きくなるというアレだろうか。

もう自分たちは大丈夫だ。

そうヴェルフが確信してしまうくらいに、アイズは圧倒的だった。

(嫌になるな。俺たちの戦いがまるで茶番劇だ)

助けてもらってこんなことを考えるのはいいい気がしないが、ヴェルフは目の前の光景を見てそう思ってしまう。

それはくだらない意地なのだろう。或いは不貞腐れか。

第一級冒険者の戦いを見て絶望してしまう冒険者は多いと聞くが、納得してしまう。

これでは確かに心が折れる。

その場にいる誰もがアイズの無双ぶりに脱力する中、ここまでベルが一言も発していないことにヴェルフは気が付いた。

どうしたことかと彼の方を見ると。

「……」

少年は静かに少女の戦いを見ていた。

食い入るように、拳を握りながら。

諦観しているわけではない。怒りを覚えているわけでもない。

ただベルは真つ直ぐと、アイズ・ヴァレンシユタインの戦いを見つめた。

その瞳に透明の輝きを宿しながら。その輝きの名はきつと『憧憬』。

きつと自分もいつかあの場所に辿り着くという誓い。

「……そうだよな」

ヴェルフは圧倒的力を前にしても、その心を燃やし続けている少年に笑みをこぼす。

腐ることに何の意味もない。

未熟で、無力な自分たちにできることはただ、絶対にその場所に行くのだと己の魂に

誓いを立てることぐらいだろう。

(お前は決して揺らがないんだな)

あの戦いで起きていた事象を理解できないヴェルフ以上に、アイズ・ヴァレンシユタインの強さは絶望のはずだ。

それでもベルは心を一層燃やし、一つでも多くのことを学び取って見せると貪欲に成長を求めている。

(相棒がそうやって前を向いているんだ。鍛冶師である俺も腐っていらねえ)

第一級冒険者の戦いを改めて見直す。

今度は思考放棄などせず、ベルの専属鍛冶師として。

ベルがあの領域に辿り着くために自分ができることは……用意できる者は何だ？

速さを阻害しない鎧か？

何処までも伸びる腕か？

衝撃を緩和する背囊か？

敏捷を跳ね上げる靴か？

道を指し示す羅針盤か？

得物を研ぎ澄ます鞘か？

あの規格外の戦いに、ベルはどう動く。

ヴェルフはどんな武器を作る。

ベルと同じように、透き通った思考でヴェルフは眼前の戦いを見守った。



この人はあの女の人ほどの脅威ではない。

そうアイズが理解したのは様子見の初撃に、仮面の人物がまるで反応できなかったからだ。

異質な力は感じるが、基礎的な能力スベツクがレヴィスとは比べ物にならないほど低かった。

(それに、あの極彩色のモンスターも今は使えないみたい)

怪人クリッチャーの最大の力である極彩色のモンスターを操る力。それを仮面の人物はまるで見せることがなかった。そう言った能力が無いのか、それとも今は使つてはいけな  
か。

三つ巴だった時から使わずに、闇派閥イヴァイルスの数を生かした戦い方に手を焼いたところから考えて、今更その手札を切るとは考え難い。

怪人クリッチャーにも順序のようなものはあるのだろうか、戦いながらそう考察するアイズは目の前の人物の捕縛にかかると。

レヴィスほどの強さならば生かして捕えようなどと考える余裕はなかったが、第一級冒険者には届かない程度の仮面の人物ならば可能だ。アイズは手加減が苦手だが、そこは怪人クリッチャー。多少のダメージは問題にならないだろう。

「気を付けろよ【劍姫】！ 前の【白髮鬼】ヴェンデッタみたいな増援が来ないとも限らない！ 現に

闇派閥共はゴキブリみたいに湧いて出やがった！」

【ガネーシャ・ファミリア】の団員の言葉にアイズは頷く。

闇派閥の増援が次々来たということは、向こうとつてはこの階層の様子を探り、仲間を向かわせることが容易であるという事かもしれない。

（そう言えば、あの時も）

アイズがレベル2へと至ることになったきっかけ。

闇派閥の邪神と出会ったのも確かこの階層だったはずだ。

（12階層に闇派閥の隠れ家がある？）

こんな地図化がされ尽くした上層に？　と言う疑問はあるが、状況証拠からして可能性は高いのかもしれない。

幾度も同じ部分を攻撃することで、右腕のメタルグローブを粉碎したアイズは真実にまた一つ近づく。

もし、この仮定が正しいのなら。仮面の人物は何としても確保しなければならない。念を入れて足の健も斬って、確実に動きを封じようとした時、アイズは仮面の人物の異様な様子に気づいた。

「【白髪鬼】……？」

だらり、と頭部を守っていた腕から力が抜ける。





もはや何を言っているかも判別できないほど取り乱した仮面の人物がアイズに突進する。

だが、遅すぎる。技も余りに稚拙で、心は言うまでもない。

一旦、気絶させよう。

思考を切り上げてそう判断したアイズによって5つの刺突が撃ち込まれる。

仮面・右肩・左肩・右膝・左膝。

無力化のための連撃によって仮面の人物は吹き飛ばされ、完全に沈黙した。

(後で目を覚まして、落ち着いたら話を……!?)

その時、閃光が散った。

黒く、溶けるような光の粒が。

無数の光粒は仮面の人物を分解し、霧の奥へ消えていく。

「……魔素」

そこに魔法の残滓を感じ取ったアイズは、あの仮面の人物が魔法でできていたことを知る。

人形を作る魔法か、それとも【分身魔法】か。

あの規格外の魔法こそ、仮面の人物のとおきなのだろう。

追うことはできない。



あれほどの魔法を使う手練れが、仮面の人物と同等の実力しかないと思ひ込むのは自殺行為だ。

仲間のいない状況でやるべきことではない。

「ごめんなさい。逃がしました」

「いや、あれを捕まえるのはそもそも無理があつた。撃退してくれて助かつた」

アイズの謝罪に「ガネーシャ・ファミリア」の団員が答えた。

意気揚々と助太刀に来たアイズとしては不甲斐無い限りだが、そう言ってもらえると助かる。

「あ、ありがとうございます！」

その時、ベルがアイズの前に出てきて頭を下げた。

霧の中でも分かつてしまうほど顔が赤い。そんなに怖かつたのだろうか。

「いつも助けてもらつてばかりで、本当に情けなくて……えっと、ありがとうございます  
!!」

「ううん。私たちも何回も助けてもらつたからお互い様。遅くなつたけどリヴィラでも助けてくれてありがとう」

リヴィラではあんな態度を取つて逃げられてしまったばかりだから、こうして話せることがすごく嬉しい。

微笑むアイズにベルは更に顔を赤くする。

そんなベルの両肩をアイズはぐわしと掴んだ。

「へ？」

「それで幻のジャガ丸くんは何処に？」

「何故？」

とぼけた様子だがアイズは誤魔化されない。

【ジャガ丸・ロワイヤル】の当事者の一人である鍛冶師スミスに事情を聞いたアイズは、その場にいた全ての鍛冶師たちを魅了したジャガ丸くんを持ってきたのが白髪赤目のヒューマンの少年だったという情報を入力した。

そんな特徴的な外見の人物の特定など容易い。

早速【アイアム・ガネーシャ】に突撃したアイズ。

バイトに行くところだったヘステシアと「ベルは何処ですか」「なにい何某までも争奪戦に!」「そうです。ベルの居場所を教えてください」「ふざけるな!」「これ以上の参戦は認めないぞ! あの子はボクんだぞ!!」「なら力づくで」「ツアー!?!」と言う会話を繰り返しながら遂に情報を吐かなかったヘステシアの遅刻が確定しつつ、隣にいた顔に傷がある男性から今はダンジョン探索中だと教えてもらい、追撃。

何だか思った以上に深く潜っていたベルをようやく見つけ出したのだ。

仮面の人物をしばいたのはあくまでついで。本命は幻のジャガ丸くん。

「あ、アイズさん？」

「せめて一口だけでも……」

「いやそうじゃなくて……もうないんです。それ」

「ガーン」

クリーチャー  
怪人の攻撃ではびくともしなかつたアイズは、ベルの一言によって崩れ落ちた。

最早全てが空しい。急速に活力を失い、もと来た道に戻る気力すら失せる。

その時、ベルのパーティーに新顔がいることに気が付く。

（黒いすずに汚れた着衣……あれは「ゴブニユ・ファミリア」の鍛冶師の人たちと同じ

……鍛冶師？）

その瞬間、アイズの脳内で様々なピースが組み合わさる。

ベル・ジャガ丸くん・ベルのパーティー・「ヘファイストス・ファミリア」の下級鍛冶

師。

彼女の所属する派閥の団長並（自己評価）に回転した脳細胞は一つの結論に辿り着い

た。

「貴方が……っ」

「は？」

「貴方がジャガ丸くんを独占してっ!!」

(何故バレた)

自分が一人で全部食べたことを知られたら、絶対に面倒なことになると霧と同化しようとしていたヴェルフ。

あつさりと隠し事を看破され、冷や汗を流した。

「ずるい……私は食べれてない……のに……」

(あ、俺死んだ)

メラメラと嫉妬シエラシーを燃やすアイズ。

親の仇を見るかの如き第一級冒険者の眼光に、レベル1が耐えられるはずもなく、哀れなヴェルフはしめやかに失神した。

いいアイディア浮かんだのにこんな死に方なの?ここから俺とベルの大冒険始まるんじゃないの?!

これがヴェルフの最期の思考だったと言う。

「いや最期じゃだめですから!起きてくださいーい!」

慌ててヴェルフに駆け寄り。

天界に旅立とうとしているヴェルフの魂を引き戻さんと尽力する。

馬乗りになってパパパパパンツと往復ビンタしている姿は止めを刺しているように

も見えるが、眷属は頑丈だし、アレが適正なのだろう。多分、きつと、メイビー。

「え、えつと……そのうち味のものもがまた貰えるかもしれないので、そうなったらアイズさんに」

「対価は？」

「え？ 僕たち助けてもらいましたし、それで……」

「それはジャガ丸くんの情報を貰う対価。幻のジャガ丸くんを食べさせて貰える対価には釣り合っていない」

「ええ……」

契約内容の変更はマナー違反とリヴェリアも言っていたから間違いない。

そうなると一体自分に何が出せるのだろうか。

お金では一体いくら払えばいいのか分からない。ドロップアイテムでも同様だ。

むむむ……と頭をひねるアイズに先日フィンの言葉が蘇った。

『ベル・クラネルが先日ランクアップしたらしい、色々と困っているだろうから先達としてアドバイスしてあげると良い』

(成程。私が戦い方を教えればいいんだ)

違うよ？と突っ込むフィンはここにはいない。

そもそもフィンはあくまでもおすすめの武器屋を教えるとか、その程度のもりで

言った言葉だ。しかしアイズには一から十まで手取り足取り教えなさいという指示に聞こえた。

普段ならファミリアの積み重ねた経験と言う、お金では買えられない無形の財産の重要性をアイズも理解できただろう。しかし、ジャガ丸くに浸食された今のアイズに常識は通用しない。

フィンのお墨付き（勘違い）を貰っているアイズは、迷い無くそれを提案した。

「なら、戦い方を教えようか？」

「え？」

「教えてくれる人、いないよね」

「は、はい。そうですけど、でも……」

あれこれと考えているベルだが、答えは既に決まっていることをアイズはよく理解していた。

ここままで必死に駆け抜け続けてきた少年が、強くなれるこのチャンスをものにしないはずがない。

少年は己の手を取り幻のジャガ丸くんを明け渡すしかないのだ。

これで少年はさらに強くなり、自分は幻のジャガ丸くんを手に入れ、少年の強さの秘密を探れ、ちよつと気になっている少年と話すことができる。正にロキが言うところの



だが、その肌には走る葉脈のような筋が少女がただのエルフではないことの証だ。  
病的なまでに白い肌。

落ち窪む瞳は澱んだ深碧。

濡れ羽色の髪は体を包むほどに長い。

「私は……」

少女は元々自分が運がいい方ではないと自覚していた。

こんな汚れた妖精になってしまったのだから当然だが。

しかし、それでもなお、今日はひどく運が悪かった。

格下の獲物<sup>ターゲット</sup>を殺せなかったこと。

その冒険者の援軍に何故か劍姫が現れたこと。

知りたくなかった秘密を知ってしまったこと。

戻ってきた分身の残った不運を肩代わりしたように、少女はその後も様々な不運に見舞われる。

情報を知って動転してしまい、その様子をアウラに目撃されたこと。

そのまま逃げ込んだダンジョンで、錯乱したまま大きなバックパックを背負う<sup>ポアズ</sup>猪人の冒険者に突っ込み返り討ちにあつたこと。

弱ったところをモンスターたちに襲われたこと。



何を悲劇ぶっている。自分がやったことの報いだ、と依存の対象が曇った今、ほんの少し正気に戻ったエルフの矜持が頭に響く。

でも、そうだとしよ、これはあんまりだ。

いつそ殺してくれば良かったのに。

(もうすぐ日が変わる。はやくホームに戻らなくては……)

もう他の道などない。

あの方の計画を完遂させることだけが自分の生きる意味だ。

こんな自分を抱きしめ、美しいと言ってくれるのはあの神ひとだけなのだから。

歪んでいても、その愛は本物なのだから

何より、自分は殺し過ぎている。どうして今更やめるなどと厚顔な真似が出来ようか。

そう自分に言い聞かせても最早妖精は狂信者になれない。

余りにも色々なことが起き過ぎた。

心を覆う鍍金メッキの依存を修復不能にするくらいに。

盲目になることさえ否定された彼女は間違いない不運だ。

「貴女は、フィルヴィス……さん？」

ならば、これも不幸なのか。

この時、この場所で、汚れた体を見られたことも。

汚れた心を包んでしまえる山吹色の髪を持つ少女と出会ってしまったことも。

少女……フィルヴィス・シヤリアにとっては不幸だったのか。

日時の狭間。

今日と昨日の曖昧な輪郭の中で、運命は再び変わる。

## ベルの弱点

迷宮都市オラリオ。世界の中心とすら言われるこの場所の起源は、千年前に人々がダンジョンの大穴に築いた蓋である。

幾度となく人類を滅ぼしかけてきた絶対悪<sup>モンスター</sup>。それを無限に産み出す魔境に、人類は気が遠くなるような年月の末に到達し、バベルの塔の前身を作り上げたのだという。

世界に二度とモンスターを蔓延らせないという英雄たちの決意。それがこのオラリオの発端だ。

そんな使命を持つ都市にとって、蓋と並んで重要な存在。それが市壁である。

ダンジョンに繋がる大穴をぐるりと囲む壁は圧巻で、原始的ながら重厚な質感はモンスター<sup>モンスター</sup>の牙や爪など寄せ付けないであろうことが一目で分かった。

恐らく、この世のどんな要塞よりも堅い守りは外敵のためと言うよりも、中から現れるモンスターを閉じ込めるためのものだ。

最も、現在のオラリオにそこまで逼迫した空気はないが。

恩恵<sup>ファルナ</sup>がなく、武器も乏しかった千年前に比べて、今のオラリオは世界有数のファミリアが揃い、都市の大神たるウラノスの祈祷によってダンジョンは鎮められ、活動は鈍化

しているのだから。

千年前とは違い、今は守る対象であるはずの人類、闇派閥イウィルスや王国ラキアの方が市壁を崩そうと目論んでいるのは皮肉な話だ。

現在、ベルとアイズが来ているのは北西よりの市壁外縁部。

未だ日が昇らない時間帯に早起きして来たベルだったが、その目はバツチリと覚めていた。

(アイズさんと二人で訓練……まだ実感が湧かないや)

高すぎる高嶺の花。それが目の前の少女だった。

冒険をする中で、何度か出会う事はあったが距離が縮まることは無く、むしろ自分の醜態を重ねるだけだったベルとしては、この機会に何としてもお近づきになりたい。

訓練であるとか分かってはいるが、思春期の少年としては甘いイベントの一つも期待してしまうもので、そんな風に湧き上がる欲望を必死に抑えていた。

「ごめんね、こんなところに呼び出して」

「いえっ、大丈夫です！」

何故こんなところで訓練することになったかと言えば、いわゆるファミリア間の都合と言うところだ。

新興かつ零細ファミリアの「ヘステイア・ファミリア」ではあまり縁がなかったこと

だが、他派閥と交流があるという事はオラリオでの縄張り争いに巻き込まれることがあるのだという。

例えば、抗争が起きれば友好的な派閥に力を貸し、敵対的な派閥には武器を向けると言つたように、このファミリア間での友好関係と言うモノは馬鹿にならないらしい。

都市最強派閥だけあつて敵も多い「ロキ・ファミリア」の幹部であるアイズに教えを乞うとなると、ベルもそうしたパワーゲームに巻き込まれる恐れがあるとアイズは懸念し、市壁と言う人目のない場所を選んだ。

流石に「ガネーシャ・ファミリア」にはアイズとの訓練については報告済みだが。

アイズが傍にいるならば問題はないだろうとシャクティも判断し、二人だけの訓練が出来ている。

「それで……幻のジャガ丸くんは？」

「今日は味のものもとは出てないですね……」

「……そっか」

グイツ、とやや前のめりになって尋ねるアイズ。

幻のジャガ丸くんが余程気になるのか、その目は爛々と輝いている。

リヴェリア辺りが見れば眉間を抑えた後、みつともないと教育的制裁が下ることが間違いない食欲。年頃の少女としてそれはどうなんだという言動である。

百年の恋も一瞬で冷めそうな残念ぶりを見せるアイズだが。

(あージャガ丸くんに必死なアイズさんも可愛いなあ)

ベルはアホなので特に問題はなかった。

恋は盲目と言うか、もうアイズなら何でもいいだろと言うべきか。

ベルにとつてはアイズの魅せる一つ一つの挙動が、アイズにとつてのジャガ丸くんなのだろう。

訓練前とは思えないぽわぽわした空気になるが、ちよつと天然が入っている二人は気にせずに話続けた。

「まだ何か方法が……今日のひみつ道具はなに？」

「風船いかだ」「かたづけラッカー」「まねラジコン」です」

「むむむ……」

(かわいい)

諦めずに可能性を模索するアイズだが現実是非情だった。

どう考えても食べ物とは関係がなさそうな名前ばかりである。

「らじこんって言うのは何？　もしかしたら幻のジャガ丸くんをコピーできるひみつ道具かも」

「意味は分かりませんでしたけど、残念ながら相手の動きを真似るアイテムでした」

どうやら本当に不可能らしいと結論を出したアイズは目に見えて落ち込んだ。ヴェルフの狂乱ぶりを知る身としては、あまり出ないほうがいいひみつ道具だと思うのだが。

「分かった。まだ序盤。遠征が始まるまで余裕はある。まだ大丈夫……」

全然大丈夫じゃない様子で呟くアイズ。

この人はギャンブルをさせたらダメな人なのだろう。

少しの間自分に言い聞かせていたアイズは、やがて深呼吸を一つして落ち着いた様子になる。

「待たせてゴメン……それじゃ、やろっか」

「はい！ お、お願いします」

緩んだ気を引き締める。

ここからはアイズの一言一句も聞き逃せないと集中して……

「それで……なにをやるうか」

「え？」

「昨日からずっと考えていたんだけど思いつかなくて……素振り？」

「……えーと」

ベルも薄々気が付いてはいたがアイズは天然だ。

頭が悪いわけではないのだが、マイペースと言うか。

まるで叱られている子供のように小さくなるアイズは、世間で言われるクールな女性冒険者像からかなり乖離していた。

でもそんなアイズさんも素敵です。

「そもそも私は君の戦いをあまり見たことが無い」

「そ、そう言えば僕がアイズさんと会ったときつて、僕自身の力で戦ったことつてそんなにないですよね」

怪物祭の時は名刀電光丸による自動戦闘。オートバトルリヴィラの街ではどこでもドアによる

送迎係。この前の戦闘では霧があつて良く見えなかつたらしい。辛うじて魔法ファイアボルトを撃つているのは分かつたというが。

ミノタウロスの一件に関してはどうか思い出さないでいただきたい。

「極彩色のモンスターとの戦いで使つたあのナイフが主体？」

「食人花との戦いですか？ はい、一応」

「その腰に着けている奴だよね」

「はあ、……っ!?!」

どこかほわーとした雰囲気が突如として凍り付く。



それが目の前のアイズから放たれている剣気だと理解する前に、ベルの体は反射的にナイフを構えていた。フリユネの時のように、慮外の力を受け流さんとその驚異的な集中力を解放する。

引き延ばされた世界の中で、目に映る情報は色を失い、音も風を切り裂く鋼の奏で以外は耳に入らない。

己の思考すら置き去りにした脳はアイズの剣の予想される軌跡を分析。何とか対抗しようとナイフをギリギリその軌道に割り込ませる。

筋繊維一本のミスすら許されない繊細な防御。

そのために限界まで見開かれた深紅ルベライトの瞳は、あつさりと放り投げられたアイズデスベレットの剣をそのまま追いかけた。

(え……っ!?)

武器を、捨てた？

僕を斬るんじゃないのか？なんで。

そんな混乱する思考は無理矢理打ち切られた。

胸部に走る衝撃。突き刺さる痛みに肺の中の空気を全て吐き出す。

「がっ……あ……っ！」

悲鳴すら出せない激痛。

くの字になった体のおかげで、辛うじて胸の兎鎧に突き刺さるアイズの右足を視認する。

劍姫が……蹴り？

チカチカする視界は切り替わり、薄暗い空を映し出す。同時に感じる風圧。後ろに吹き飛んでいるのだと理解したのは急速に流れゆく雲のおかげだ。

すぐに背中に走る衝撃。

市壁の欄干らんかんにぶつかっただらしいと気づく、そして、そのまま重力の腕に捕まり地面に転落しかけていることも。

悲鳴すら上げることができず、落下しかけたベルは。

「ごめん……強くやっちゃった」

吹き飛んだベルより早く後ろに回っていたアイズによって助けられた。

お礼を言おうとするが、口から出るのはせき込みだけ。

(リンクアップしてなかったら……あのまま気絶してたかも)

一瞬で戦闘不能に追いやられたことに驚愕しつつ、ベルは何が起きたのかを振り返る。

アイズは会話の最中に剣を振り、ベルはそれを迎撃……しようとして放り投げられたアイズの剣に視線を誘導された。そして剣に気が向いてから空きになった胸に蹴りを

叩きこまれたのだ。

思い返せば単純な攻防。しかし、ベルはあの瞬間。何も把握できなかった。

恐るべき速度だ。

「うん……大体分かった」

アイズはベルが回復するのを待つてから話始めた。

一連の流れで分かったということは、どう考えてもいい意味ではないだろう。

「まず、君は凄い集中力がずば抜けている。あんなに早く切り替えができるとは思ってなかった」

「え?」

ボロクソに言われることを覚悟し、身構えていたベルは予想だにしない好評に戸惑う。

「あのまま剣を振っていても直撃は避けれただろうし、受けの技術もしっかりしている。……とても1か月の経験しかないとは思えないくらいに」

「……ありがとうございます」

「でも、集中しすぎてる」

（集中……しすぎている?）

それの何が悪いのか。反感ではなく、純粋な疑問としてベルはそう思った。

限界まで集中しなくては、格上の攻撃を受け流すなんてできないはずだ。

「防御に全部の集中を割いたら駄目。少なくとも、ダンジョンでそれは通じない」

「なんで……」

「攻撃の手段は一つじゃない。君みたいに武器を持つ手だけ注意していたら、それ以外の部分の奇襲にやられる。そもそも、ダンジョンでは何体もモンスターが出てくるから、一体だけに気を取られるのは危ない」

言われてみれば覚えがある理屈だった。

最近のダンジョン探索でも、意識外からモンスターの奇襲を受けることが増えているとは感じていた。

下の階層に行くようになったから、それだけモンスターが手ごわくなったのだと納得していたのだが、真相はそうではなかったらしい。

「えっと……集中するのが駄目なわけじゃなくて……んと、それだけを見るのがだめだから、君の集中力はかけがえのないものだから……」

途中しどろもどろになりながら、アイズはベルの弱点を指摘する。

ベルは集中の加減が下手なのだ。

格上と戦い、深い集中を要する場面が多かった経験キャリアによる歪み。

ベルは戦いにおいて、集中を100か1かでしか切り替えていない。

「凄い集中するってことは、凄い疲れること。いつまでも続くわけがない。1時間持てばいい方だと思う」

一日中ずっと。

遠征などでは何日もダンジョンに潜る上で、そのやり方ではすぐに集中力が底を尽きる。

「集中力も、体力みたいを考えて配分するのが大切、だよ？」

「配分……もう一度お願いします！」

鉄は熱いうちに打てと言わんばかりにベルは身を乗り出して、先ほどの再現を願っている。

アイズはそれに一つ頷くと、静かに剣を構えた。

(集中力を限界じゃなくてまずは半分程度に……)

集中の対義語は雑念だ。

何か考えて集中を中和するのはどうだろうか、とベルは試してみた。

(あーアイズさんやっぱ美人だないいつもののんびりしている顔と戦っている時の顔のギャップが堪らないそれにあの鎧はどうしてあんなに露出多めなのか造った人は変態に違いない先生と呼ばせてください青や銀のアーマーの色と目も覚めるような金髪がベストマッチしてるよそうそうアイズさんと言えばやっぱりあの金髪だこの世のいか

なる金銀財宝ですら霞むような高貴な色合いに一流の職人が丁寧に一本一本拵えたんじやないかと思うくらいに更々な長髪きつと風に吹かれたら太陽の光も反射して幻想的何だろわないや夜空の下で月をバックに湖を佇むというのも捨てがたいぼんやりとした輝きはさながら湖のようせいのようなだろうこれでエルフ耳があれば完璧……)

「すごい隙だらけ」

「ぐえー!?!」

「集中を抑えるつて言うのは余計なことを考えることじゃないよ」

「ハイスイマセン」

ちよつと煩惱が噴き出してしまった危ない危ない。

鞘付きとは言え、頭にガツンと良い一撃を貰いクラクラするベルは欄干に腰かけた。

「多分、君が集中しすぎちゃうのは、受け流すときにどうやって動くかまで頭で考えているから」

「え? 普通はそうじゃないんですか」

「うん。みんなそういう動きは無意識にやってる」

ことなげに言うが考えずに動くというのはどういうことだ。

いくらイメージしようにも想像がつかない指示にベルは頭を悩ませる。

「無意識?……無意識?」

「あ、言い方が悪かった……？ えっと、その、この時こうすればいいと言うか」  
首をひねってブツブツと呟き始めたベルを見て、慌てて言葉を変える。

ああでもない、こうでもないとならぬ後、何かを思い付いたようにポンと手を叩いた。

「数学の公式」

「……はい？」

「この問題の時はこの公式みたいに、この攻撃の時はこの受け方って言うのを決めておけば、受け流すときに色々考えなくていいよ」

(……僕数学分かんない)

会心の言い回し!! とドヤ顔になっているアイズだが、一般農民でしかないベルに数学のたとえば分からなかった。

だが、言いたいことは何となくわかる。要は予め体に動きを覚えさせろという事だろう。

「今から受け方を実際に見せて……あ」

その時再びポンと手を叩くアイズ。

「まねラジコンは動きを真似る」

「はい」

「つまり君が私の動きを真似れば簡単に体に覚え込ませられる」

「おぉー」

アイズのアイディアにパチパチと拍手を送るベル。

教え子に褒められてうれしいのか、無表情ながらもどこか得意気のアイズ。

何故か彼女の背後に幼いアイズが胸を張ってムフーとしていた。かわいい。

意気揚々とアイズは持ってきていたひみつ道具を早速二人の頭にセツトする。

「じゃあ、やろう」

「え？」

「まずは相手が振り下ろしをしてきた場合」

「ちよ、待ってください（こ）は……」

アイズは大型のモンスターを想定し、振り下ろしてきたネイチャーウェポン自然武器に自分の得物で擦り上げるように軌道を変え、頭部をがら空きにする動きをする。

最小限の動きで大きな隙を、アイズの達人の技はまねラジコンを通してベルの体に伝わり全くずれなく再現された。無論、この動きはナイフのように調整されたもの。アイズに抜かりはない。

「うん。できてる」

「うわあ、凄い……」

「そして（こ）からっ」



「あ、ちよつと待つてください!!このままだと……」

反撃の手段を教えないのは不親切だと感じたのか、そのまま想像のモンスターの頭目掛けて回し蹴りを繰り出す。

アマゾネス姉妹ほどではなくとも、練度の高い鋭い一撃はベルに伝わり。

メキヨリと音がした。

「あ」

思い出してほしい。

ベルは先ほどのアイズの一撃でふらつき、欄干に腰かけていたのだ。

そんなところで回し蹴りをすればどうなるか。

石でできた市壁で、加減しているとはいえレベル2には十二分に速い速度でベルは回転し……

そのベルの弱点は欄干に減り込んだ。

「くあwせd r f t g y ふじこf不2雄1p?」

「あわわ……」

この世のものとは思えぬ絶叫を上げるベル。

男ではないアイズには分からない痛みにのたうち回る少年に、アイズは右往左往するばかりだ。

その動きがベルにも伝播するので、凄まじく異様な光景になっている。

回復薬をかけようにも、これがベルの弱点に効くか等アミッドには聞いてない。

太陽が顔を出すまで続いた地獄の後も、第一級冒険者の動きに振り回されるベルは似たような光景を繰り返しつつ、受けの技術を伝授されるのだった。

## 試練生誕

カリカリとペン先が書類の上を滑る音が時折聞こえる書庫。

オラリオのあらゆる情報が内包されたギルドの知の宝物庫で、ベルとエイナは恒例のダンジョン講習を行っていた。

「それじゃあおさらい。上層と中層の主な違いは？」

「遠距離攻撃を加えてくるモンスターと、モンスター出現までのインターバル……あ、後  
は中層後半から出現する地形的罠です」  
フィールドトラン

エイナの出す問題に目を瞑りながら、必死に記憶のノートを掻き分けて答えを絞り出すベル。

その答えに満足げに頷くエイナは、己の持つ中層域に関する資料に目を落とした。

（よく勉強している。流石に実地で経験しなきゃ実感までは得れないだろうけど、十分すぎるくらいに知識は詰め込めた）

満点とはいかないが、及第点は超えるくらいの返答ができる程度には知識の消化も進んでいるようだ。

ランクアップして慢心するようになり、ダンジョンの知識を学ばなくなることを危惧

することを懸念していたエイナとしては、むしろ以前以上に学ぶことに貪欲になっていることは素直に喜ばしい。

(多分、きつかけはアーデ氏だよね)

リリルカ・アーデを救うためにたった一人で挑んだ無謀な戦い。

後から事の詳細を知らされた時は、眩暈を覚えた程に絶望的な戦いを切り抜けたベルは確かに成長している。

体もそうだが、冒険者としての心構えが。

準備を怠らなくなった。

今までも備えることをしていなかったわけではないが、ランクアップしてから今まで以上に慎重に可能性を模索するようになっていく。

(……どんな戦いをしたんだろう)

【ソーマ・ファミア】との戦いについての詳細をエイナは持たない。

ベルは誰に相談することもなく、戦ってしまい、事後報告で一連の流れを語ったに過ぎなかったのだから。

分かっているのは当時レベル1だったベルが、レベル2のザニスを破ると言うジャイアントキリングを達成したという事だ。

俄かには信じがたいことだが、ひみつ道具を使ったと思えば納得はできる。

今までベルを救ってきた異世界のマジックアイテムの有用性は、彼の担当アドバイザーであるエイナも知るところだ。

力関係を覆す規格外が出てきた可能性は高い。

(ただ……今回の戦いでランクアップできたって言うのが引つかかるんだよね)

神の恩恵は敵を倒せば強くなると言った便利なものではない。

己を賭け、冒険に挑まなければ器の昇華などできないはずなのだ。

少なくとも、強力なひみつ道具を当てただけでは大した経験値エクセリアは手に入らない。

器の昇華を果たしたという事は、それ相応の苦難があったという事で……エイナとしては素直に褒めたくはないのだ。

無茶が必要な場面もあるだろう。それがダンジョンだ。

しかし、無茶をし過ぎた結果、それが当たり前になって引き際が分からなくなるといふ事だけは避けなければならない。

「ベル君はこれからどうしたい？ レベル的には中層は既に適正階層になるけれど」

「いいえ。暫くは中層への進出は見合わせようと思ってます」

探る様な目付きで尋ねたエイナの問いに首を振るベル。

これまでの少年の傾向からして、すぐにでも中層に行きたいと言い出すと考えていたエイナは思わず面を食らってしまう。

「防具もまだ間に合わせですし……僕と契約を結んでくれたクロツゾさんには色々試したいものがあるそうなので、一通り試してからにしようと思います」

「クロツゾ氏って言う例の「ヘファイストス・ファミリア」の……？」

現在ベルが愛用している防具の作成者が、新たなパーティーメンバーとして加わっていることはエイナも聞いていた。

あの日、ベルが一目惚れしていたアーマーの鍛冶師スミスの登場に、世間の狭さを感じていたものだ。

エルフの血を引く身としてはクロツゾの名に僅かばかり思うものがあるが、ベルのアドバイザーとしては身元がはつきりしている新メンバーは大歓迎である。

「はい。最近ちよつと戦い方を見直したりもしていますし、リリも中層に向けて準備したいことがあるそうなんです。だから、今は中層へ行く前の準備期間にしようと思いません」

「新しい武器ってそう簡単にできるものなの？」

「ちよつと突飛なアイデアだけど、難しすぎる物にはしないって言ってました」

既に材料集めのために探索している階層も調整しているらしい。

ドロップアイテムは見つけるのが大変で、長丁場も覚悟していたらしいが、妙にベルの倒すモンスターからドロップアイテムが出るおかげで、むしろ当初の予定より早く出

来上がるかもしれないらしい。

「うん、安心した。ちゃんと階層を増やす前に準備ができるのはいいことだよ」

ベルのこれまでの戦いは色々なことがありすぎた。

「ここはじっくりとベルの冒険者としての基礎を築き上げる時間という考えには同意する。」

「最近は何も大変だったからね。用意ができるまではイヴイルス闇派閥にも関わつちやダメだよ」

「あはは……イヴイルス闇派閥は向こうの方から来ると言うか……」

「リヴィラの街の一件はもう忘れた？」

「すいませんでした」

「アーデ氏の騒動も一歩間違えればイヴイルス闇派閥が関わつてきてたかもしれないだよ」

「おつしやる通りです」

トラブルホイホイな体質によって、すっかり専属アドバイザーからの信頼を失っているベルはガツクリと肩を落とす。

ベルも流石に今のままだと不味いことは理解しているらしく、大人しくエイナの言うことを聞くつもりようだ。

「【ガネーシャ・ファミリア】もこれ以上ベル君にあれこれさせないだろうし、この話は（ここまでかな）」

イヴィルス

闇派閥に関しては、ベルの言う通り向こうが勝手に暴れまわるのだから、巻き込まれたことを文句つける気はない。あくまでもベルは被害者なのだから。

イヴィルス

とは言え、こう何度も闇派閥と関わって、彼らの危険性に麻痺してしまう可能性もある以上、必要ないとは思っているが釘を刺さずにはいられない。あれは関わらなくていい存在なのだと。

「ランクアップして色々と見えてくる物も増えたと思うけど、君の手には限界があることは変わらないからね」

「はい。僕も今までみたいにとんとん拍子でいつまでも続くとは思ってません。『冒険者は冒険しない』ですよね」

エイナが度々使う言葉を口にするベルに、エイナは満足そうに頷く。

平和とは新たな戦いに向けた準備期間だとある者は言う。非常に意地の悪い言葉だが、今の静かな時間がいつまでも続くなど、エイナも考えていない。

ベルが新たな戦いに向けて力を蓄えているのなら、エイナもアドバイザーとしてできることをしなくては。

差し当たって、気になるのは己が所属する機関……ギルドの動向だ。

ブレイク

ベルによると【ロキ・ファミリア】の団長である【勇者】は、ひみつ道具目当てに接近してきているらしい。闇派閥もベルを抹殺する派と利用する派で分裂しているが、ベ



ルのことを強く意識しだしていることには変わらない。

こうなるとギルドが今だノーリアクションなことが気になる。

レアアビリティ・レアスキルにはひどく敏感な組織なはずなのに。

エイナも上に【フォーラム・ディメンション・ポーチ四次元衣嚢】を隠しているとはいえ、探りが全くないのは不自然だ。

ギルド長はオラリオを管轄している以上、冒険者たちの噂にも敏感なはず。

呼び出し程度なら覚悟していたのだが。

(それとも、もうとつくに監視されている?)

だとすれば厄介だ。

ギルドの政治力は一受付嬢のエイナの手に余る。

今もどんなちよっかいがかけられているのか分かったものではない。

その時、ベルのペンがするりと床に落下した

「あ」

思わず出したベルの声に何人かの職員が振り返り、ああまたかと言う顔で視線を書類に戻す。

落ちたペンを拾うベルは居心地が悪そうだ。

「大丈夫?今日は良く落ちるね」

「す、すいません……」

「気にしなくていいよ。机が傾いちゃってるのかな?」

そう話している間にも転がり始めるペン。

今度は落ちる前に気が付いたベルが阻止しようとするが。

ギョーンッ!

「わっ」

(急加速した!?)

ベルが動き出すと同時に回転を増すペンは、ベルの手をすり抜けて再び落下する。

幸い、書庫室には絨毯が敷かれているので音はならないが。

これが無ければ音がうるさくて周りから白い眼で見られていただろう。

(あれ? こっこって絨毯なんかあったっけ?)

ふと疑問を覚えるエイナだったが、恐らく自分の知らない間に模様替えがあったのだろうと納得する。魔法陣とそこに潜む猫と言う、かなりいいデザインの逸品であるし、他の職員からも好評だった。

もう一度拾ったペンが三度まわりだし、ベルが半泣きになってそれを止めると言う光景を眺めながら、エイナは透明人間が悪戯しているみたい、と呑気な感想を持つのだった。



迷宮で雑念を持つなど自殺行為、他の冒険者にとっては噴飯物の愚行だが、オツタルは許される。

何故ならオツタルにはこの階層モンスターなど姿を見せることは無いからだ。

警戒は無意味。仮に襲ってきたとしても、次の瞬間にモンスターが壁の染みになって  
いるだけである。

本来ならば適正にまるであつてない階層。

この階層に存在する全てのモンスターを根絶やしにしたところで、オツタルの熟練度<sup>アビリティ</sup>の  
数値は微動だにしないだろう。

それなのに彼が姿を見せたのは、偏に女神の命を遂行するため。

(ベル・クラネルの新たな試練か)

今までフレイヤの奔放な性格を見てきたオツタルとしては、今までよくちよつかいを  
出そうとしなかったものだと思われ、意外な気持ちだ。

同時に、常とは違うフレイヤの対応に何処か期待する気持ちも湧き上がる。

(……いや、この段階で出すべき答えではない)

フレイヤの真の願いに薄々勘づいているオツタルとしては、少年の飛躍は複雑な思  
いがありつつも賞賛すべきものだと考えている。

才無くあそこまでの過酷を己に押し付けられるものはそういない。

過酷であらざる得なかつたオツタルとは違い、少年の歩む道は真正銘彼自身の選択の結果だ。

そんな少年に相応しい試練を用意するのが今回のオツタルの役割であるが、これが中々の難題だった。

既に少年は冒険を乗り越えている。

そんな彼に思考停止したまま、ただ強敵をぶつけた所で先の戦いの二番煎じになるだけだ。

乗り越えた先に成長が無ければ試練ではない。

それがオラリオ唯一のレベル7まで至つたオツタルの考えだ。

当初はバグベアーでも用意しようかと考えたオツタルだが、その先に少年が得るものは無いと考え至り、より残酷な敵を用意するに至つた。

(フレイヤ様から聞いたベル・クラネルの傷……原初の泥は未だ拭えてはいない)

ザニス・ルストラをひみつ道具に頼らずに打ち破つた偉業は見事なものだ。

しかし、それは単に使えるひみつ道具がなかったという事。

あの日のひみつ道具を打ち破られる恐怖は脳裏にこびりついたまま。

汚点が残り続ける限り、その魂が真の輝きを放つことは無い。

雪辱を果たした先にこそ、冒険者ベル・クラネルの真価はある。

ベル・クラネルは最早弱者ではない。

時間と共にいずれは汚れは削ぎ落されるだろう。

それでも、早急なほどに彼に過酷を課するのは、誰よりも敗北の泥を舐めたオツタルからのベルへの信頼だ。

女神すらも見通せない、オツタルだけが見抜いた少年の可能性。それを引き出す。

(……フレイヤ様は何故か拗ねておられたが、単に俺とベル・クラネルに共通点が多いというだけの話なのだな)

自身に使命を与える際のどこか投げやりなフレイヤの態度を思い出す。

ある意味、女神以上に少年を理解していることが、フレイヤとしては面白くないようだ。

オツタルとしてはお互いに汚点だらけと言うことなのだから、誇れることではないのだが。

そうフレイヤに伝えると、それはそれは綺麗な笑顔で『それって共感すらできない私の嫉妬を分かって言っているのかしら?』と仰られた。多分ちよつと怒っていた気がする。

もう一度あの子に薬を貰おうかしら? と爽やかにとんでもないことを言い始めた女神によく分からないが頭を下げたことを思い出し、苦笑した。最近のフレイヤは本当

に退屈していない。

「……む」

オツタルが歩みを止め、岩盤の壁を凝視する。

途端に壁一面に罅が走った。モンスター産まれ落ちる瞬間。

日々の大きさからして目的のモンスター……ミノタウロス。

この時まで何体もの猛牛型モンスターを選別していたオツタルは、直感的に探し求めた素材に辿り着いたことを悟る。

(こいつにするか……)

ベル・クラネルの傷。

ひみつ道具が通用しなかったというトラウマ。

それを再現する。

それがオツタルの試練。

用意するのは過酷ないばらの道。

横暴な神意に沿うように、理不尽な激励が少年に送られる。

冒険しない者に殻は破れない。

とあるハーフェルフとは対極の論をもって、女神の寵愛を受けた少年を洗礼する。

やがて岩盤は崩落する。

この地を主戦場とする冒険者が見たら、顔を青くして逃げ出す光景。それをみても武人は揺るがない。

生誕と共に目の前の人類に襲い掛かる猛牛の角を片手で掴み、必殺の突進を受け止めた。

「やはり上々だ。お前を調教してやる」

『ウ、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

『岩盤の迷宮』を震撼させる咆哮が響く。

オツタルは生誕したばかりのミノタウロスに教育を開始する。

最強の刺客を完成させるために。

始めに言おう。

これは人が雄牛を倒すだけの物語。

或いは人が雄牛に倒されるだけの物語。

——唯、それだけの物語。



## 二属性回復薬……じゃない、何だコレ……

「やつべえ……」

ヴェルフは顔を真っ青にしていた。

いつも勝気な態度を崩さない彼には珍しい、絶望的な表情を晒しているのには理由がある。

始まりはベルが受けていた冒険者依頼クエストだった。

ヴェルフの打つ新たな防具のために、紫パープル・モス蛾を大量に狩ることになったベルたち。

ベルは探索の準備のために「ミアハ・ファミリア」を訪れ、そのことを話すとついでにブルー・パピリオの翅も集めてほしいと冒険者依頼クエストを出してきた。

片手間にやれるなら問題ないだろうと了承したベルだったが、問題は無事に依頼を完了し、後は報酬をもらうだけという時に事件は起きた。……正確には発覚した。

結論から言ってしまうえば、今までベルが買っていた回復薬ポーションは売り物にならないくらい粗雑品だという事だ。目ざといリリが薄めた回復薬ポーションを誤魔化していることを指摘、主神たちが出てくる事態にまで発展した。

平謝りするミアハに、頭を押さえつけられて一緒に謝罪するナーザーの説明による



ら、それだけでオラリオの戦力が何割減ることか。

いや、二大巨頭のような力を持たない中堅派閥であっても問題だ。ダンジョンと言う特大の危険地帯に日々潜る冒険者は言い方は悪いが消耗品。どれだけいても不足しているのだ。

だからこそギルドはオラリオのファミリアが減ることを警戒している。

とは言え、しつかりとした手続きを行えば、それほど都市から出ることは困難ではない。

どんなに神々にとつてオラリオが特別とは言え、基本的に風船にジェット機能でも付けているのかと言うほど自由気質な神を完全に縛り付けるなど不可能だ。

故にギルドは本音はどうあれ、眷属や神の都市外での活動を認めているのである。

……まあ、そんな手続き無視して砂漠に護衛なしで突撃した女神さまもいたようだが。

「ブラッドサウルスは本当にダンジョンにいるほどの力はないんですよね」  
「うん。ずっとオラリオ暮らしなりリルカには信じられない話だろうけど」

ダンジョンの外にいるモンスターは全て、太古の時代に地上世界に進出したモンスターの子孫だ。壁から生まれるモンスターの子孫と言うのは実に奇妙だが、モンスターにも交尾と言う概念はあるらしい。

体内の魔石を削っているので、個体の力は年々減少気味だが。

今回の目的である『ブラッドサウルスの卵』は、そんなダンジョンではお目にかかれ  
ない素材。

リリはブラッドサウルスと聞いて下層に出てくる恐竜を連想して焦っていたが、地上  
の個体はそこまでの力はない。精々オークより強い程度。

インファント・ドラゴンを討伐したベルの敵ではない。

「ゴブリンやインプみたいな小型と違って産卵は少ないから、セオロの密林にも卵は殆  
どないかも……下手したら一か所にしかない、なんてこともありうる」

「うへえ……それは大変そうだなあ」

元来怠け者なヘスティアが怠そうな顔で呟く。

後のヴェルフへの死刑宣告になる訳だが、この時ヴェルフはジャガ丸くん（幻ではな  
い）を食いながら右から左へ聞き流していた。

「レベル2の私とベルが行けば確実にあいつらは殲滅できるけど……ゴメン、私は戦え  
ないから」

「心傷トラウマなら仕方ないですよ。インファント・ドラゴンを一人で倒した時に比べればこの  
くらい」

「ありが……え？ なにしてるの……」

ナアーザはベルの言葉に礼を言おうとするが、自然ナチュラルに飛び出したベルの人外発言に少し引く。

忘れてはいけないが、インファント・ドラゴンの上層における階層主ポジションである。

気軽に単独撃破とかしてはいけない。

「おつ、そうだ！ ベル、今日はこれを使つて見てくれよ！」

「これつて……兎鎧びよん吉？」

「ああ、MK―Ⅲだ。ようやく完成したからな。初お披露目が中層じゃないのは残念だが、まずは確実に安全なここで試そうぜ」

渡された木箱の中身を早速確認するベル。

前の軽ライトアーマー装と大きな違いはない。小さな紅玉が手甲に埋め込まれていて、前より

少しだけお洒落になっている程度だ。

「前作より装甲は厚めにしてある。だから装備すると少し違和感があるかもしれないねえ。そうだったら、遠慮なく俺に教えてくれ」

「そうなんです、そんなに重さは感じませんが。ありがとうございます。クロツゾさん」

「……あー、ベル？ そのクロツゾつてのは止めてくれ。家名、嫌いなんだ」

「えーと……ヴェエ、ヴェルフさん？」

「……まあ、今はいいか」

ヴェルフの様子に怪訝そうな反応を返すベルだが、当のヴェルフは気にしないでくれ、と手を振った。

やがて馬車から降りたベルたちは密林の中に足を踏み入れる。

装備を身につけたベルは早速ひみつ道具を具現化した。

「迷子探し機「ごはんだよ」」

煙突の生えた一軒家のようなミニチュアが光と共に出現する。

それを見たミアハとナーザは、事前に聞いていたとはいえ驚きを隠せない。

「これがベルのスキルか……やはり眷属こどもたちは未知の塊だな」

「魔力を感じない。どこかから取り出してるわけでもなさそうだし、どうなっているんだろう？」

今回の冒険者依頼クエストを機に、「ミアハ・ファミリア」にはベルのスキルを打ち明けていた。

リリはあんなこともあったのだから教えるべきではないと反対したが、もつと普段から腹を割って話せていたら、こうはならなかったのではないかと言うベルが意見を押し通した形だ。

リリは不満げだったが「仕方ないですね、ベル様ですから」と最終的には納得とまでは行かないが、譲歩した。とは言っても、きちんと契約書を書かせて、口外した場合は「ディアンケヒト・ファミリア」の借金がかわいく思えるような罰則を設けていたが。

一堂に見守られる中、迷子探し機「ごはんだよ」は煙突からモクモクと煙を出す。

同時に、あたり一面に香ばしい香りが充満した。

「これでモンスターが寄ってくるのでしょうか？」

「うん。鳥とかが集まったってドラえもんさんは言っていたから、モンスターも集まるんじゃないかな？ エイナさんも、遠征とかだとパーティーの炊き出しとかの臭いでモンスターが集まることあるって言っていたし」

ブラッドサウルスの卵は希少。つまりブラッドサウルスは卵を狙うものがいたら、それはもうお怒りになることは間違いない。

子供に手を出された生き物が手強いのはモンスターであろうと同じこと。

つまりベルたちは二手に分かれて、親をおびき寄せる者とその隙に卵を確保する者で班を作る。

事前の打ち合わせで、囀班がベル・ヴェルフ。残りの者は卵の改修に当たることになつていた。

当初、ブラッドサウルスをおびき寄せるために血トランプアイテム肉テムを使うことも考えていたが、ア

アイテムと言うのは効果が確かな代わりにお高い。

それは貧乏ファミリアたる「ヘステイア・ファミリア」と「ミアハ・ファミリア」には無視できない負担だ。だから、ベルのひみつ道具で有用そうなものが現れた時、その使用に踏み切ったのである。

やがて、レベル2となり強化されたベルの聴覚が超大型のモンスターの足音を捉えた。

同じくレベル2のナーザも同時に気づき、シユタツと手を上げた。

「じゃあ、後よろしく」

そういうや否や、非戦闘員たちを連れてあつという間に離脱する。

流石はレベル2ともいべき速さ。

店番をしているところしか知らなかったベルの目が点になった。

「……戦闘職じゃなくてもあれだけ動けるのか」

「ランクアップってすごいからね。普通のステイタス更新とは別格に強くなる……あ、すいません」

「いや、もつと言葉使いを崩していつてくれ。前から距離感があるって思っていたんだ」

その方が楽だろう？ と笑いかけるヴェルフ。

そんな彼の言葉にベルは迷いながらも頷いた。



「えっと、善処します……」

「おう」

会話しながらも互いの武器を構える。

既に輪郭は樹木と樹木の間から見えていた。

目を細めて戦闘態勢に入り、腰を低く落とす両者。

やがて、咆哮。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

「いくぞー」

同時にヴェルフの声が耳に届き、弾かれるように疾走する。

見た目は30階層から出現する強大なモンスター。

怯みそうになる心を抑えて、地面を蹴った。

ブラッドの名の通り、血に濡れたかのような紅き体を凝視する。

敵は5匹。個体数が少ないと言うナーザの話から考えて、この数は近辺に生息する

モノが全て集まった可能性がある。

「ふっ!!」

「ギャガッ!?!」

まずは先頭の一体の目を切り裂く。

耳が割れるような絶叫と共に倒れるブラッドサウルス。

更にベルは着地と同時に二体目のブラッドサウルスの足を回し蹴りで引っ掛けた。

常人の蹴りならばビクともしないであろう、丸太のような分厚い脚だがベルの「力」のアビリティは規格外。あっさりとバランスを崩して、先に倒れていたブラッドサウルスと頭と頭がぶつかり合う。

「ギギヤア!?!」

この一度の交戦で理解した。

やはりここではベルが一番強い。

5体だろうが10体だろうが、ベルならば問題なく倒せるはずだ。

しかし、ヴェルフはそう簡単に終わらないことを理解していた。

(こいつら声がうるさすぎる。これは密林中のモンスターがやってくるぞ)

3体程度ならそこまで問題ではなかったが、5体ともなると密林中に咆哮が響いている。

つまり、ヘルハウンド等のモンスターも寄ってくるのだ。

「こりや速攻でひみつ道具を使ったほうがいいな……ベル!!」【ばくはつコシヨウ】を使う

ぞ!!」

「分かった!!」

名前からしてどう考えても火薬。

ならば炎の魔法を持つベルならばモンスターを一網打尽にするのも可能だ。

ヴェルフの意図を正しく理解したベルは同族を倒されて興奮しているブラッドサウルスを一蹴。後方にいたヴェルフとポジションを交換する。

「おらああああつ!!」

裂帛と共に大刀を振るヴェルフ。

ヴェルフは己の武器に名前は付けない。

だが、自作の武器は上層ならば問題なく通用するほどの業物だ。

5 Mの巨体メトルがバターののように切り裂かれる。

並走していたブラッドサウルスが唾然とした目で見つめてくるが、当のヴェルフに余裕はない。

大刀の隙は大きい。

こんなに良い一撃が入るのは、警戒が少ない初フーストアタック撃だけ。

後は、大きな隙を見せないように立ち回るしかできないが。

「ばくはつコシヨウ〜」

それでいい。それがいい。

ヴェルフが足を止めて立ち回ること、樹木の海から湧き出るモンスターたちが一か

所に集まる。つまりは、爆発で一網打尽だ。

背後で光が収まり、ひみつ道具の具現化が終わったと理解したヴェルフは合図を出す。

「今だベル!!」

「うん! ヴェルフ!!」

ベルの声にニヤリと笑うヴェルフ。

ヒュン、と軽い音が上空で聞こえると同時にヴェルフは後ろに飛びのいた。

そして放たれる速攻魔法。

「[ファイアボルト]!!」

炎雷の矢は瓶に入ったひみつ道具を撃ちぬく。

その光景を見て勝利を確信するヴェルフだが

「……あれ?」

特に何も無い。

爆発など起こらず、バラバラと焦げた臭いと共にコシヨウがブラッドサウルスたちに降りかかる。

ステーキにしたら美味しいのかもしれない。

「つ、使い方間違えた?」

後ろから聞こえるベルの声。

指示を出した張本人であるヴェルフは未だに固まったままだ。

「……はっ！ ボーツとしてる場合じゃねえ!! とつとこいつら倒してリリ助たちが向かった窪地に行かねえと」

そう、ヴェルフが口にした時に異変は起きた。

先ほどまでヴェルフに迫っていたモンスターたちが一斉に止まったのだ。

「あ?」

「な、なに……?」

モンスターたちの様子に怪訝そうな表情を浮かべるヴェルフ。

一方のベルはこれまでの経験上、嫌な予感を隠せない。

「ガ……ア……」

(苦しんでいる……いや、と言うよりこれは)

全てのモンスターが空に顔を上げて、何かを必死に抑えている。

その光景に父親や祖父がたまにやっていた光景がヴェルフの脳裏に浮かぶ。

その答えが脳内で形になる前に、答え合わせはやって来た。

「……………ブヘックシヨイイイイイイイイイイイ!!……………」

「ぎゃあああああああ!」



その特徴的な声にまた目が遠くなる。

「な・に・を！　なあああああにをしてるのですかヴェルフ様ああああああ!!」  
予想に違わず激怒したりり。

ばくはつコシヨウってこいつを爆発的に怒らせる効果もあるのかーと馬鹿な考えが浮かぶ。

口には出さないが。殴られるだろうし。

リリが言葉を捲し立てる中、「お、終わった……」と静かに崩れ落ちるナーザ。  
借金が払えないことが確定したのだから無理もない。

それを慌てて抱き上げるミアハ。

「ナーザ！　しっかりせよナーザ！」

「ミアハ様……ごめんなさい。もう、駄目みたいです」

「悪いことが重なった結果だ。仕方がなかったと受け入れるしかあるまい」

「どうしてこんなことに……貧乏人に神様は残酷ですね」

「いや、貧乏だが私が神だぞ？」

「ボクも神だぜ？　貧乏だけど」

「じゃあ、誰を恨めばいいのですか……」

「ヴェルフ君じゃないかな」

「そうします」

「どうやら結構余裕はあるようだ。」

「凶太くなければオラリオでやってはいけない。」

ミアアたちのケアは必要なさそうだな、と次にヘスティアは正座させられるヴェルフを叱りつけるリリの下に向かった。

「サポーター君。サポーター君。そこまでにしたまえ」

「放してくださいへスティア様!! この激ダサネーム量産機への説教はまだ終わってません!」

「まあまあ、まだ取り返しはつくだろう?」

「そう言っつて、遅れてやって来たベルに問いかける。」

「た、多分……」

「おお! それは真かベル!」

「今日のひみつ道具の最後は『なおしバンとこわしバン』って言う名前です……」

「直す力か! それならば或いは……」

ミアアとナーザは抱き合っつて喜ぶ。

「多分、それで上手くいくのだろうが一つ問題が。」

「これは多分『クイックとスロー』みたいな2種類の効果の複合型……ですよね、ベル様」



「うん。僕もそう思う」

ベルの【フォーム・ディメンション・ポーチ四次元衣囊】はひみつ道具を具現化するだけ。

その使い方は分からない。

どちらがなおしバンで、どちらがこわしバンかまでは分からないのだ。

「では最初に二つ壊れた卵を用意して、どちらも試してみましよう」

「うん。なおしバンとこわしバン」

最後のひみつ道具を具現化する。

早速比較的形が残っている（グロテスクだが）卵を二つ用意したりりは、具現化した  
はこからX型の青い絆創膏と赤い絆創膏を取り出し、それぞれに付けた。

その結果は……

「青い方だね」

「青い方です」

一目瞭然だった。

青い絆創膏が貼られた卵はあつという間に元に戻った。

紅い絆創膏は……もはやこれは卵だったものではない。

「じゃあ、青い絆創膏を手分けして貼って行くかうか！」

ヘスティアの号令の下、青い絆創膏を手に窪地内に散らばる一同。



「何か困ったことがあったら、言って。必ず助けに行くから……」  
微笑みかけるナアーザにベルも微笑む。

そんな彼女にベルも笑った。

ベルの初めての冒険者依頼はようやく完了したのだ。

「あ、そうだ。良かったらこれも……」

「これは二属性回復薬……じゃない、何だコレ……」

まだ終わってなかった。

次に渡されたのは薄紺の液体を渡される。

「これも、報酬……ポーナス」

「え?こんな回復薬ありましたか?」

「合間合間に作ってた……熱中して寝るのを忘れてたけど」

「だからそんなに限がすぎいいんですか!」

「これは良いモノ……こうやって飲むと……」

グイ、と瓶の中身を飲み干すナアーザ。

え? それ報酬じゃないの? とベルが困惑していると、途端にナアーザがビツター

ンと倒れた。

「ナアーザさん!」

「どうしたベルよ!？」

驚くベルの声に反応し、ミアハが駆け付ける。

床に倒れ込んでいる眷属と、その手に握られた空いた容器をみた。

「なるほど『ユメミール』か」

「な、なんですかそれ？」

「前に回復薬ポーションの調合を誤った際に偶然できたものでな、それを飲んだものは己の望む夢を見る」

「だからユメミールですか」

「なんて安直な……と呆れるベルだが、床の上をビクンビクン跳ねるナーザはどう考えてもいい夢を見ていない。

「あの、本当に自分の望む夢を見ているんですか？」

「うむ。本来のユメミールはそうなのだが、これはそれを再現しようとして失敗しているな」

「失敗」

「己の望む夢ではなく、己の恐怖するものを見せている」

「ひどくないですか!？」

「恐らく碌に被験しなかったのだろう……材料は赤い絆創膏で歪んだ卵か？ 疲れすぎ

ておかしくなっていたようだ」

神特有の超速理解である。

「ユメミールの失敗作……なずけるならば『ワルイユメミール』！」

「ミアハ様も疲れてません？」

「うむ。寝たい」

一人の薬師の暴走によって生み出されたこのアイテムが、ある騒動の原因になるとはこの時は誰も思わなかった。

## 黒衣の強襲

雲一つない何処までも続く青空。

やわらかい風に包まれて、黄金の髪がふわりと宙を揺蕩う。

女神の隣にいても、決して見劣りすることが無いであろう、神秘的な美を醸し出す少女の名はアイズ・ヴァレンシユタイン。

第一級冒険者として畏怖と羨望を一身に集める少女は、花のように艶やかな唇を開く。

「またやつちやつた……」

彼女が立つこの場所は市壁の上。

とある派閥の少年との訓練のために、早朝から訪れていた彼女は本日3度目となるK・Oを果たしていた。ぐてーんと転がる白髪の少年の頭の上には、クルクルと星が回っているようだ。

これでは訓練にならない。

初めに言っておくと、これは決してベルが悪いわけではない。

アイズと実力差があるからこそ、ベルはアイズに師事をしているわけであり、それを

責められる謂れはないのだ。

ベルが気絶しているのはアイズが適切な指導を出来ていないことが大きいのである。

しかしアイズを弁明するならば、ベルはアイズの指導力不足を加味したとしても教えにくい人物だった。

それは指導を聞かないとか、才能が無いという話ではない。

むしろ、ベルは教えられたことを素直に受け止めるし、才能もアイズが知る規格外たちほどでないにしても芽が無いわけではなかった。

問題はその成長性だ。

教導には自分の実力と相手の実力を見極め、相手に適切な難易度の課題を出す必要がある。

簡単すぎれば成長できず、難しすぎれば突破できない。その匙加減こそ教導力と言えよう。

しかし、ベルの実力は安定しない。

ムラがあるわけではない。彼は常にベストとは言いつぎだが、高水準に自身の力を発揮できている。ただ、その自身の力がどんどん強くなるのだ。

アイズの所見によればベルは天才とは言えない。

名前は忘れたが数年前に戦った彼と同じ白髪的女性のように、見ただけで相手の技を

真似できるような才能の怪物ではないはずである。

(だけど、少しずつだけど、強くなってる)

呑み込みがいいとは言えないが、ベルはアイズとの訓練を通して確実に実力をつけている。

既に駆け引きの基礎を身に着け始めていたことも手伝い、今の彼を冒険者歴一ヶ月と見抜ける者はいないと断言できるほどに。ベルの冒険者としての器は形作られ始めた。

どンドンと力の上限が上がれば、アイズの指導力も間に合わなくなる。

結果、力が入りすぎて吹き飛ばすという事を繰り返してしまう。

(どうして、君はそんなに早く、強くなれるの?)

まだ眠り続けている少年に心の中で問いかける。

ベートの言葉は残酷だったが、ある種の正しさがあった。

アイズもあの時の少年が強くなれるかと聞かれれば、返答に困っただろう。

冒険者として頭角を現すのはあの状況下でも戦える人間。悪い言い方をすれば頭のネジが外れた人間だ。

それにしてもベルの感性は普通過ぎる。

勿論、食人花ヴォラスとの一件で勇気を出せる少年なのは分かるが、彼の戦う動機は自分たちとは違うモノのようにアイズには感じられてならない。





リアを見かけたら逃げようと心に決めた。

「そうじゃなくて、ベル・クラネルについて君に伝えなければいけないことがある」

「ベル……？」

なんだろうと首をかしげる。

「ヘステイア・ファミリア」は新興派閥。ロキとヘステイアの仲の悪さ以外に団員として気を付けなければならない事があるのだろうか。

「あの少年……どうも『フレイヤ・ファミリア』と目を付けられているらしい」

「ベルが……？」

「ああ、どういう理由か分からないけど。九分九厘間違いないだろう」

フィンとベルが話した喫茶店で、フィンは少年を監視する冒険者の存在に気づいたという。

一目見ただけでその団員が彼の女神の派閥だと見抜いたのは流石勇者といったところか。

「フレイヤ・ファミリア」に目の敵にされるようなことをしたの……？」

「僕が調べた限りでは接触はしたことがないようだ。向こうが身分を隠して接触していたら分からないけどね」

ベルと「フレイヤ・ファミリア」に接点が見つからずフィンも困っているのだという。

強いて言うなら、彼がよく通う店が元「フレイヤ・ファミリア」団員の店という事だが……

「その店で問題を起こしたと言うワケでもないようだ。どちらかと言えば店主には気に入られているらしいからね」

これはお喋りな猫キヤットヒール 人の二人組から聞いた話だけだね、とフィンは笑う。

つまり、ベルが「フレイヤ・ファミリア」から敵意を持たれる理由はない。

「後は女神フレイヤの新しい標的かとも思ったけど……それにしても悠長すぎる気もするね」

狙った男はどんな手を使ってでも自分のモノにする。

それが女神フレイヤであり、「フレイヤ・ファミリア」の団員たちだ。

もし、ベルが気に入られているならば既に何らかの接触があつてしかるべきだ。

尚更無関係だとは考えられない。

「まあ、あの女神は奔放と言うか、気まぐれと言うか……僕もはつきりその目的を見通せるわけではないから、断定はできないけど」

フィンはそう言うのと表情を改めた。

「ロキ・ファミリア」の団長としての顔だ。

「アイズ、彼と接点を持てたことは僥倖だったかもしれない。彼が「フレイヤ・ファミリ

「ア」にされる立場なのは確かだ、後はそれが害意のあるものか……場合によつては好意であつても危険だ」

ベル・クラネルの規格外な力を欲するフィンからしてみれば、フレイヤの気まぐれで切り札を失うなど堪ったものではない。

そうでなくとも団員と交流を深め、いい方向に導いてくれた少年を見殺しにする気はなかつた。

「いずれ必ず向こうからこちらに接触がある。大事にする気はないけど、最悪の可能性は考えてくれ」

最悪の可能性。

つまりは「フレイヤ・ファミリア」との争い。

抗争にまで発展するとは思えないが、フレイヤが何を考えているかは分からない以上は油断できないだろう。

闇派閥の危険性とフレイヤの機嫌を損ねるリスク。

天秤にかけた場合、僅かに闇派閥が勝るとフィンは結論付けた。

「戦いになるの？」

「シー、どうか、案外杞憂かもしれない」

ペろりと、そう言いながらフィンは親指の腹を舐める。



「脈……？ ベルは筋はいいと思いますけど……」

「あー、ボクが言っているのは冒険者としての素質の話ではなくてね？ まあ、気にしないでくれたまえ」

「……分かりました？」

後、こういう会話は止めてほしい。

そもそもアイズさんってそういうことに興味ないんだなって分かっちゃうから。

前途多難だなあ。

冒険者としても、恋の進展も。

訓練で良いところ見せようにも、すぐに気絶しちゃうし。

これでカッコいい！とはならないだろう。

(と云うか石畳の上で散々転がったからか、頭が痛い。なんなら体中がギギギツツて感じ)

日が落ちて、温度が下がっているからか、体中の痛みが気になる。

体を動かすたびに鈍い痛みが響くから困り物だ。これでは固体を保てないかもしれない。

まあ、流石は恩恵を宿した眷属<sup>フェアルナ</sup>だけあって、明日にはケロリと治っているのだろう。

多分、「耐久」がすごい勢いで伸びているんだろうな。

僕って基本的に足を動かして相手の攻撃を躡るのが戦い方だから、相手の攻撃を受け止める【耐久】は上がりにくい筈なんだけど、お得って思えばいいのだろうか。

そんな風に自虐していると、先頭を歩くアイズさんが口を開いた。

「無意識の防衛」

「え？」

「今日の動きは、良かったよ。教えた通りの受け流し方だったし、体勢も反撃を意識したものになっていた」

「本当ですか!？」

「でも何某君は結局一撃も反撃されなかったじゃないか」

「えっと、それは……力加減を間違えて、その」

アイズさんの言葉に喜色を浮かべる僕だったが、神様の指摘とそれに対するアイズさんの返答にガツクリと肩を落とす。

そうだよ。加減されてるんだよね。なのに反撃できてないんだよね。つらい。

「あのっ、君は悪くなくて、むしろ私が君の実力をいつも見誤っちゃうから……」  
つまり思ったより弱かったという事です。ね。

憧憬に言われるにはキツ過ぎる事実。

ちよつと泣きそうになった。

「……いや、何某君も大概だけど、ベル君もレベル2の動きじゃない気が。何あの変態アクロバティック」

神様が何かを呟いているが聞こえなかった。

女の子にいいところを見せたくなるのが男と言うモノだ。

いや、眷属に男も女もないのは分かっているけど、やっぱり凹む。

アイズさんの持つ小型の魔石灯に照らされる通路は市壁内部の階段だ。

やがて出入口についた僕たちは、密室の湿った空気から解放されたことでほつと息を

……

(……灯が無い?)

その時、異変に気が付く。

星の光で辛うじて足元は見えるかと言った暗闇。そんな時間に街の魔石灯がない?

一つも?

そもそも人を見かけない。遅い時間とは言え、ここは世界の中心オラリオ。休み知らずの都市だというのに。

弾かれたようにアイズさんの横顔を見る。

その顔は既に剣士のものだった。



遅れてベルもナイフを抜き、構える。

不自然な暗闇、まるでない人の気配。

求められる答えは何者かの襲撃だ。

「うわっ!?! ベル君!?!」

神様を背に庇う。

第一級冒険者たちとは違い、僕に気配の有無など分からない。

だから、兎に角変化に敏感になる。

敵の初動に気が付かないと……っ。

僕の焦燥を嘲笑うかのように敵はあっさりと姿を現した。

コツコツと石畳を叩く金属質な靴ブーツの音。

闇と溶け込むような漆黒の防具・インナー・バイザー。

頭部の猫耳キャットヒールからして猫 人の男性だ。

(一人? なんで馬鹿正直に?)

不意打ちの優位を捨てての意味が分からず、困惑する。

だがその答えはすぐに分かった。

その姿がブレる。

次の瞬間、漆黒のバイザーが僕の目の前に現れた。

「っ！」

僕の十八番を奪う圧倒的【敏捷】アビリティィ。

反応できない。

冷たい光を宿す槍の切っ先が、僕の胸部を貫いた。

その瞬間、ベルの体はバシヤリと溶ける。

水のように不定の存在となったベルに物理的な攻撃は通じない。

「マジックアイテムかつー！」

悪態をつく猫キャットヒール 人に銀の剣閃が瞬く。

事前の打ち合わせ通りの動き、猫キャットヒール 人はそれを驚異的な反応速度で対応した。

そこに四方から現れた4人の小人族バルウムが剣、槌、槍、斧とそれぞれの得物を振るう。

逃げ場などない完璧な連携。

アイズは為す術もなく連撃を叩きこまれ、霧散した。

「またか!」「こんどは霧だ」「神も使っているのか?」「警戒を」

気体は瞬時に個体に戻り、再び「劍姫」がその姿を見せた。

場所キャットヒールは猫 人の死角。

小人族バルウムたちが壁になり、状況把握が一拍遅れている隙をアイズは見逃さない。

「ふっー！」

「くっ……!?!」

紙一重で回避するも、その代償にバイザーが音を立てて壊れる。

琥珀の瞳が露になる中、アイズは欲張ることなく距離を取った。

「やっぱり、【女神の戦車】……」

「デメエ……」

フィンの助言を受けていたアイズは、道中に「フレイヤ・ファミア」の襲撃を受けることを警戒し、今日ベルが持ってきていたひみつ道具「サンタイン」で備えていた。

一杯食わされたことを理解した襲撃者は忌々しそうにその顔を歪める。

「どうしてベルを狙うのか、聞かせてもらおう」

「のぼせ上ってんじゃねえよ！ 人形女!!」

ロキとフレイヤ。

最強派閥同士が今、ぶつかり合う。

## サントインの誤算

激しい戦闘を繰り広げるアイズと「フレイヤ・ファミリア」。

暗い街に度々火花が散り、剣戟の音が響く。

都市を代表する第一級冒険者が戦う横で、ヘスティアはひみつ道具を入れたバッグに飛び散った液体を吸い込ませていた。

キャットビール  
猫 人の攻撃を受けたベルが液体から戻らないのだ。

既に5人はアイズとの戦いに移行している以上、隠れている必要は無い筈なのにである。

嫌な予感がしたヘスティアは、街に降りてくるまでのベルの動きづらそうな様子から、元の固体に戻れなくなっているのではないかと察し、慌ててベルだった液体を集めていた。

ある程度液体を拭き取ったバッグを絞る。

(これで上手くいってくれ……)

何の確証もない行動だったが、液体は一つに集まり少年の体を構成する。

固体化を果たしたベルは息を切らしながら膝をついた。

「あ、ありがとうございます」

「ベル君、大丈夫かい？」

「なんとか……ちよつと体が軽くなった気がしますけど」

ひみつ道具・サンタイン。

その名の通り、固体・液体・気体と言う三態に変化することが可能になるこのひみつ道具は一見すると無敵のひみつ道具だった。

しかし、その使い勝手はかなり悪い。

まず、効果は一時間しか持たないという事。

この制限のおかげで液体化したゴブリンも何とか対処することができたわけだが、いつ襲ってくるか分からない襲撃者のために飲んだものだったため、後数十分で効果は切れる。

だが、それはまだいい。戦闘がそこまで長引くことはあまりないのだから。問題はもう一つの弱点だ。

液体・気体と言う状態がベルたちの想像以上に不安定だったのである。

本来は、アイズが襲撃者を攻撃している間にベルが魔法で援護し、人目を呼ぶ作戦だった。

しかし、槍で貫かれた衝撃でベルは四散し、自力では戻れない状態に。

ヘスティアの助けで戻ってみれば、襲撃者のヘルムが割れて正体が露になっている。襲撃者が「フレイヤ・ファミリア」だったのは驚きだが、それ以上に彼らが撤退しないことが想定外だ。

「アイズさんが霧になつてゐるのに、どうしてまだ戦おうとして……」

ベルの援護により人目につかせるといふのは保険策のようなものだった。

普通、攻撃がすり抜ける相手に勝ち目が無い戦いを続けるはずがない。

実際にはそう便利な力ではなかったが、それは使用しているベルやアイズにしか分からないことだ。

勝ち目が無いと分かれば撤退する。

それが作戦の前提だったのに、見事に覆ってしまった。

「多分、正体がバレたからだと思う」

「え？」

「ロキもフレイヤもオラリオの最強派閥。敵になりえるのがお互いしかない状況だ。分かりやすく言えばライバルって奴だろうね」

ただし、ライバルと言っても綺麗な汗を共に流して切磋琢磨という爽やかな感じではなく、隙あらば足ひっぱって蹴落としてやるぜ的なライバルだ。

ゼウス・ヘラを追い出す時や暗黒期には協力していたらしいが、基本的には犬猿の仲

だ。

(ゼウス・ヘラって誰だろう……?)

「さて、そんな仲の悪いファミリアの幹部同士が激突しました。ちなみに5対1です。女の子を男が寄ってたかって攻撃してます。傷一つつけられずに返り討ちに会いまして……どうなると思う?」

「……アイズさん、【ロキ・ファミリア】の武勇伝が増えて、【フレイヤ・ファミリア】は看板に泥を塗られたことになりました」

よく、オラリオの住民の間では最強の二大派閥のどちらが強いかと言う話題は度々耳にする。

最強議論が展開されるという事は明確には力の差が分からないという事だ。

それだけ拮抗しているからこそ、今のオラリオの状態がある。

そこでアイズ一人で【フレイヤ・ファミリア】の幹部5人を退けたという情報が入ればどうなるか。

実態はどうであれ、人々の中で【フレイヤ・ファミリア】より【ロキ・ファミリア】の方が強いという認識が生まれかねない。

それは面子商売ともいえるファミリアにおいて無視できないことだ。

【フレイヤ・ファミリア】の傘下は多いし、信者も多いけど、同じくらい敵対者もいる。



そんな連中は間違いなく今回の件でフレイヤを揶揄する。イシユタルなんかはもう嬉々として」

所詮は一時の流れだ。フレイヤは気にしないだろう。

だが、ファミリアの団員たちはどうか。

主神を信仰し、彼女のために全てを捧げる彼らが、自分たちの行いによつて女神の顔に泥を塗る真似を許容できるか。

「だから彼らは退けない。一方的にやられたわけではなく、痛み分けに終わらないとフレイヤを汚してしまうから」

女神の眷属の意地と言つてもいい選択肢。

合理性の欠片もない答えが、その実、ベルたちを追い詰めていた。

「謎の襲撃者のままならこうはならなかったけど、正体が露になったのが今となつては痛かった」

アイズを責めるわけではない。

【フレイヤ・ファミリア】の幹部が相手なら手心を加える余裕などなかったはずだ、見せた隙に飛びつかなくては押し切られる。今回は偶々見せた隙が双方にとつて最悪だっただけ。

（不味い、僕の液体化ほどじゃないけど、アイズさんの気体化もリスクだ。このまま弱

点に気が付かれたら押し切られる)

幸い液体化ほどわかりやすい弱点ではないから今はバレていない。

だが、第一級冒険者ならば気体を吹き飛ばすほどの攻撃を放つなど朝飯前のはず。ベルのようにレベル2程度の力しか持たない眷属とは違う。

アイズが空中に浮かび、付かず離れずの距離を維持しているおかげで迂闊な一撃は放つて来ないが、いつまでも続くわけではないだろう。

(こつちがああ5人を倒すのは無理だ。攻勢に出たら間違いなく向こうも全力の攻撃を仕掛けてくる)

そうなればこちらの綱渡りに気付かれる。

かと言ってこのまま攻勢に出なければ違和感を持たれる。

「どうすれば……いや」

ここでベルは発想を戻した。

向こうに退いてもらえればいい。

ハツタリをかまして退かなきゃいけない。否、退いていいと思わせる。

「神様。『フレイヤ・ファミリア』が退かないのはこつちが数で負けているからですよね」

「うん。同格に無様は見せられないってことだ」

「なら、数でこつちが上回れば、撤退しますか？」



近くの建物を何度も蹴り、三次元的軌道でアイズとの距離を詰める。

それに対し、チラリと一瞥したアイズはすぐに興味を失う。

血管が浮かび上がるほどの苛立ちを感じ、槍を振るうアレンだが、第一級冒険者としての判断はその攻撃の結末を冷静に予期した。

「つんとに、面倒くせえアイテムだっ！」

華奢な体を両断する勢いで振るった槍に手応えはない。

霞を相手取るなどと言う前代未聞の体験をしている彼は、この規格外のマジックアイテムを有し、今も己の主神の関心を独占する少年への殺意を滾らせた。

当の少年からすれば堪ったものではないとぼつちりだが、アレンからすればベルは厄そのものだ。

「使えない駄猫め」「猫のくせに猿みたいにピョンピョン飛び回るな」「何が戦車だ。荷車からやり直せよ」「襲撃してすぐ顔バレとか恥ずかしくないのか」

それ以上に痛に障るのが同僚のだが。

普段からうざったいことこの上ない四つ子だが、攻撃材料を経た今は通常の3倍ウザイ。

「元はテメエらが作った隙のせいだろうが！」

「近くにいたお前が悪い」「死角からの攻撃ぐらい対処しろ」「敏捷型のくせに足止めんな

馬鹿」「足と違つて頭の回転は悪いなお前」

ああ言えばこう言う。それがかける4である。

この仲の悪さで連携など望むべくもない。

アイズはそれをうまく利用して、アレンと四つ子を互いに邪魔させるよう立ち回っている。

つまり、お互いからしてみれば仲間どころか邪魔をしてくる障害物だ。

(こいつらは後で殺す……それにしても、「劍姫」は妙だな)

アレンは四つ子と口喧嘩しつつも現状把握に努めていた。

状況は圧倒的に「劍姫」が優位、当初はそう判断していたアレンだが、ここにきて疑念が湧く。

(あのバトルジャンキーにしては静かすぎないか？ 俺たちと大事にはしたくないつう考えかもしれないねえが、何故この優位な状況で攻勢に出ない。魔法を使わないのはそう言った拘りがあるんだろうか)

【劍姫】は対人戦で風エアリアルを使わないのは有名だが、多対一のこの状況でそれにこだわり続けるだろうか。

それよりは何らかの制限がかかっていると考えた方が自然だ。

そこに勝機が見えるとアレンは第一級冒険者としての勘で導き出す。

後はその条件を炙り出すだけだが。

この四つ子と仲良く共闘などできない以上、思うように動けない。

「何が『四人揃えばいかなる第一級冒険者にも勝る』ガリバー兄弟だ。蹴散らされてんじやねえか雑魚ども」

「「あゝ？ オマエからコロスゾ？」」

「やってみろチビ」

火花散る高速戦闘中も罵詈雑言を忘れない彼らは、もはや当初の目的……ベルの現在の戦力評価を完全に放棄していた。こうなつた以上、それどころではない。

女神フレイヤの眷属がロキから逃げ出すなどあつてはならない恥辱だ。

せめて一撃入れなくては、女神の威信に傷がつく。

今の最優先は「劍姫」。

レベル2のベルは後回し。

それゆえに彼らはベルの動きに気が付けなかった。

「【ファイアボルト】！」

少年が魔法を咆声する。

予備動作が無い無詠唱魔法は最速の攻撃。とは言え、レベル2の魔力では彼らに碌なダメージを与えられない。

そう、一発だけならば。

辺りの壁中にずらりと生えている無数の手。

白い手甲に包まれた腕は見覚えのあるモノだ。

(ベル・クラネルっ、またマジックアイテムか！)

暫く液状から戻らないままだったことから、有効なアイテムを持っていないのかと踏んでいたが外れらしい。

夜中に街中あちこちからによきよき白い腕が生えている光景は、何も知らない一般人が見たらトラウマものだろう。

そこから一斉に放たれる炎など、何の冗談だと言いたくなる非常識的な光景だ。

流星に街中という事もあつて威力はこけおどしのようなものだが、こんな弾幕の中で空中戦などやっついていられるはずがない。

「……だが、単調だな」

一見豪快に見える攻撃だが、腕だけが突き出ているためか狙いは荒かった。

アレンもガリバー兄弟も数秒でリズムを把握し、空中戦を再開しようとする。

しかし、その数秒こそベルが望んだものだった。

アイズとの訓練で得た集中の分散は大きな隙になるといふ事実。

それを相手に押し付ける駆け引きはアイズにひみつ道具を受け渡す隙を作り出す。

「アイズさん！ ハンマーを!!」

「!」

ベルの言葉を瞬時に理解したアイズが突き出る腕の一つ。

唯一魔法を撃っていない腕に近づきトンと叩いた。

それを合図に腕を引っ込めたベルは、すぐさま腰に掛けた槌を持って壁に付けたチャックの中に再度腕を突っ込む。

それこそがこの無数の腕を作り上げたひみつ道具である。

受け取った槌を自らの頭に振るうアイズ。

そして起こった異常事態にアレンは目を見開く。

「【剣姫】が増えただと……」

闇夜に生える金の長髪が二つ。

全く同じ顔、同じ装備のアイズがひみつ道具を使ったアイズから現れる。

分身したアイズは驚愕するアレンを急襲した。

「ふっっ!!」

「くっ……!?!」

飛び散る火花は先ほどまでのものと遜色ない。

その身から迸る【剣姫】の闘気に陰りなどありはしない。



(こいつつ、ステイタス【剣姫】と同じだと……っ!?)

数合の斬り合いの後、上空に浮かび上がった分身したアイス。

元のアイスに並び立つた彼女は先ほどと全く同じ動きで頭を叩く。

2人から4人に、4人から8人に、8人から16人。

いつの間にか数の優位を覆してしまったアイスが16本の剣先を「フレイヤ・ファミリア」に向ける。

金の剣士たちに囲まれるアレンたちは、ここから自分たちの逆転が不可能に近いことを認めざる得なかった。

「ふわあああ……なんだよこんな時間にバカスカとつて、なんじゃこりゃ!?!」

「ひいひいひい!?! 手が!?! 手がいつぱい!?!」

「あ、【剣姫】だ綺麗だn……なんでいつぱいいるんです?」

「なんか【剣姫】浮かんてる!?!」

騒ぎを聞きつけた住民たちが集まってしまった。

あれだけ魔ファイアボルト法を乱射していたのだから当然だが。

衆目が集まってしまったことを苦々しく思うアレンだが、これで撤退の理由が与えられたことに気が付く。

(これだけの第一級冒険者に囲まれた状況なら、逃げることは恥じゃないってか……ふ



住民に騒ぎを起こしたことを謝り、その場を後にしたベルたち。

街が落ち着きを取り戻し、静寂の時間が戻った時、ポツリとアイズは口にした。

「すいません。サンタインにこんな弱点があったなんて……」

「ひみつ道具を使おうと提案したのは私。こつちも御免なさい。君を危険にさらすところだった」

サンタインは早朝にダンジョンで試していたが、ベルに水を吹き飛ばすような攻撃ができるだけのステイタスがなかったため気が付けなかった。

あの場を誤魔化せるひみつ道具である「分身ハンマー」と「マジックチャック」があったからよかったものの、あのままだったら目ざとい第一級冒険者に狙われていただろう。

「どうして『フレイヤ・ファミリア』に君は狙われていたの？」

「ぼ、僕ですか？」

「うん。フィンが言ってた。君の周りに『フレイヤ・ファミリア』がいるって」

アイズから聞かせられた事実には動揺するベル。

全く心当たりがなく、首を振った。

「……気を付けてね。あそこの神様は怖い女神ヒトだから」

「ん？ 君はフレイヤにあったことがあるのかい？」

「はい。最近……」

ヘスティアとアイズが話し合う中、不意にベルは視線を感じた。  
無遠慮な銀の視線を。

「……」

振り向くと、そこにはオラリオで最も高いバベルの塔。

今も女神がそこに居る地が静かにベルを見下ろしていた。

## ヘステイアの噂調査

「フレイヤ・ファミリア」による「剣姫」襲撃事件は、瞬く間にオラリオ中の人が知る出来事となった。

イヴイルス  
闇派閥が引き起こした数々の大規模事件。それにより緊迫した空気が蔓延る中、いたずらに都市最強派閥同士がぶつかるという愚行に、多くの批判の聲が上がった……と言わケではなかった。

「フレイヤ・ファミリア」の輪を乱す行動が許されたわけではないが、今回の件を蒸し返す人物は意外なほど少ない。

この街に来たばかりのベルとヘステイアにはピンと来ない話だが、フレイヤの気まぐれで騒動が起こることはオラリオではよくあることらしい。「フレイヤ・ファミリア」が強すぎることもあって最早騒ぎ立てるのも馬鹿馬鹿しいと言った様子だ。

住民たちの話題も「フレイヤ・ファミリア」の無法への批判と言うよりは、最強ファミリア論争の一環と言った趣が強いようである。

最終的に「剣姫」が無数の手と地獄の炎を召喚したという斜め上の結末が、人々の妄想を掻き立てて好き勝手な考察が横行していた。

「ガネーシャ・ファミリア」やギルドも嚴重注意こそ送っているが、それ以上には至らない。

実害がほぼ無かったことで、そこまで大事にしなくてもいいだろうとなつたらしい。

「納得できるかあああああああ!!」

これにお怒りなのがヘスティアである。

アイズによれば「フレイヤ・ファミリア」の目的はアイズではなくベルだ。

フレイヤが何故ベルに執着するのは分からないが、フレイヤのヤバさは天界にいた頃から有名すぎる。

好きすぎて殺しちゃった☆ などと言う可能性が大いにある。女神の愛を舐めてはいけない。

フレイヤに狙われているというアイズの話が本当ならば、ヘスティアにはこの一件で終わりとは思えなかった。

だからこそ、ギルドや「ガネーシャ・ファミリア」に厳しい処置を取ってほしかったのだが、相手は大派閥。

新興のファミリアにどうできる相手ではない。

（ヘファイストスは『後で私からも言っておくから、今は退いておきなさい』って言っていたけど……）

フレイヤの派閥に喧嘩を売れば今の「ヘステイア・ファミリア」等瞬く間に刈り取られる。

それはヘステイアとて理解していることだ。

だからと言って泣き寝入りすれば、今度はいつ襲われるか分かったものではない。

フレイヤを対抗するとなるとアンチ・フレイヤな勢力と結ぶことが考えられるが。

(フレイヤアンチの筆頭ってイシユタルだよなあ。ちよつと怖いから無理かも……)

ヒステリックな性格のイシユタルと、のんびりしたヘステイアは同盟相手としては相性が悪いだろう。そもそも話を持ち掛けてもまともに取り合ってくれないかもしれないらしい。

「そもそもあんまり殺伐としたのは嫌だなあ」

インドア派なヘステイアにとって敵意や殺意であふれる空間は大の苦手だ。

先日のダンジョンに入った時もそうだが、根本的に争いごとに向かない神格じんかくなのだろう。

天界でディオニユソスが発作を起こしたときも、あの殺気立った空間が嫌で十二神の座を返上して自分の神殿に引き籠ったものだ。

「そうなると思うようにコイツと敵対しないようにしようと思ってもらうしかないけど」  
至難の業だ。

そうできるだけの実力がないからアンチフレイヤと結ぼうと考えたのだ。

如何に成長著しいとはいえ、ベルがあっさりと「フレイヤ・ファミリア」の幹部たちクラスに追いつけるはずがない。

結局、最初の問題に戻ってしまった。

(力が無いファミリアが大派閥に意見……ん?)

その時、ヘスティアの脳裏に何か引つかかるものがあつた。

いたはずだ。天界のご近所さんで兎に角立ち回りが上手い男神が。

「ヘルメスはファミリアのランクこそ低いけど、オラリオでは結構な存在感がある………つてヘファイストスが話してたっけ」

オラリオでも便利屋としての地位を確立させている。あのうさん臭い神は団長がレベル2と言う中堅より少し下程度のファミリアの主神だが、その実ウラノスの手駒と言う意見もあるくらいには油断できない。

「ヘルメスのトコがあんなにうまく立ち回れるのはヘルメス自身の人脈と……それに伴う情報力」

正に曲者のファミリアだ。

腹の探り合いが苦手なヘスティアやベルが到底まねできるものではないだろうが、ヒントにはなる。



「何かフレイヤの気を逸らせる情報で誤魔化すくらいしかない」

フレイヤの弱みを握って……と言うのも考えたが、どう考えても後で抹殺される未来しかないのでパスだ。

そもそも脅しは敵対と何も変わらないわけだし。

「ボクの情報網は近所のおばちゃんたちレベルだけど、ひみつ道具なら何かあるんじゃないか」

非常に情けない話だが、ヘステイアにフレイヤを驚かす情報が入るほどの情報網はない。

だがひみつ道具なら話は別だ。

なにかいい道具が出るかも知れない。その望みを抱いて待ち続けること三日。ついにお目当てのひみつ道具を発見した。

その名も【サキ鳥】。

ひみつ道具の名にふさわしい。凄まじい性能のアイテムだ。

その見た目は木に留まる何羽かの赤い鳥。

最初は外れかと落胆していたが、ウマタケのような意思を持つアイテムであることを期待して情報収集を依頼したところ、見事にその役目を果たしていた。

「ビッグニュース！ ビッグニュース！ 明日、タケミカツチのジャガ丸くん。新商品

入荷ー！」

「なんだとおう!? ここで勝負を仕掛けて来たか! 後でおばちゃんに教えよ」

「ビッグニュース! ビッグニュース! ミアハ、女の子口説く! 顔真っ赤か!」

「それはニュースじゃなくていつものことじゃないか? ナアーザ君にチクつとこ」

次々とオラリオ中に放っていたサキ鳥たちが、噂を聞きつけて戻ってくる。

役に立つものからどうでもいい情報まで、都市中の噂話がヘスティアの耳に飛び込んできた。

「流石に『フレイヤ・ファミリア』をあつと言わせるような情報はなしか……」

しかし、市街の噂ではフレイヤと取引できるほどのモノは無い様だ。

ヘスティアは噂話をメモに記入しながら、フレイヤの興味を引く内容の情報が無いことのために息をついた。

(多分、今のオラリオで最も噂話は集まったけど、うん。不味いかも)

都市中に流れる数々の噂。

その中には幻のジャガ丸くんやら、歓楽街の怪物やら、果てにはギルドの幽霊など、ベルが関わっていると思わしきモノも多々ある……というか、今のオラリオの異変のほとんどに何らかの形で関わってしまったている気がしなくもない。

(……………これ、隠すのも無理じゃない?)

サキ鳥は市内に出回っている噂話を集めるひみつ道具だ。

つまり、今日一日だけで既にこれだけの目撃情報があるわけで、真相が出鱈目すぎてそう簡単に辿り着かないと思いたいが、情報戦が強いファミリアならば恐らく気付ける。

都市最強派閥として団員の層も厚い「フレイヤ・ファミリア」が真相に辿り着いている可能性は大いにあった。

（最悪、「フレイヤ・ファミリア」には【フォース・デイメンション・ポーチ四次元衣嚢】すらバレていることも覚悟したほうがいいのかも……）

フレイヤを出し抜くどころか、薄々察しつつあった現状の危うさを再認識することになったヘステイア。

ドカリと椅子にもたれかかるように座る彼女は大分疲れていた。

「ビッグニュース！ ビッグニュース！ ヘファイストスに恋の予感！ お相手は赤髪の眷属?!」

「へー。ヘファイストス誰かと良い感じなんだ。悪戯できるひみつ道具出たら遊びに行こー」

「ビッグニュース！ ビッグニュース！ ベル歓楽街に再チャレンジ！ しかしアンドロクトノス【男殺し】を見かけて涙目敗走！」

「へー。ベル君は後でお仕置き決定だな」

さらっと明かされたベルの現状にジト目になるヘスティア。

サキ鳥だけ置いてアイズと訓練に行ったはずなのに、何故歓楽街にいるのか。

この間怒られたばかりなのに何をやっているのだろうか。

自分の眷属がそんなに女に飢えてしまっているとは思えないので、また何かを背負い込もうとしているようだが。

「ビッグニユース！ ビッグニユース！ リリルカがナーザに新アイテムの作成を依頼したところ、ナーザは床に鼻をこすりつけている模様！」

「どういう状況なんだそれは」

「ビッグニユース！ ビッグニユース！ おうじゃ【猛者】が一週間ほどまえからダンジョンにもりきりの模様！」 「イシユタル・ファミア」が襲撃作戦を企てている!!」

「一週間前か……ならあの襲撃とは無関係かな？ これをフレイヤに教えれば恩を……ないな。絶対に気にも留めなそうさ。むしろイシユタルの恨みを買っただけ損だから関わるの止めとこ」

次々と舞い込むうわさ話に、初めは熱心にメモを取っていたヘスティアも次第に聞き流すようになる。

流星は世界の中心と言うべきか、サキ鳥たちは交互に戻って来ては情報を口にしてい

き、また出ていくを途切れずに続けていた。

既に一時間近く休みなしにペンを動かしていたヘスティアの怠け者の部分が睡魔を引き寄せる。

(情報屋つて大変なんだな……ボクには無理……)

既に舟をこぎ始めている頭を叩いて何とか覚醒させる。

眠いよー。ベル君が帰ってきたら説教より前に膝枕してもらおう。と全く集中できず雑念全開なヘスティア。

わずかに残った主神としての責任感がベルを守るために、とヘスティアの手を動かす中(眠気に負けてミミズみたいな字だが)、窓から新たな噂を持つてきたサキ鳥が入って来て……その瞬間、神としての勘が最大級の警鐘を鳴らす。脳内で鳴り響くアラーム音がヘスティアの眠気をかき消した。

「トップシークレット!! トップシークレット!!」

(掛け声が違う……?)

戻ってきたサキ鳥の様子がおかしい。

まるで警告するかのようによく常とは違う文句を口にする。

ヘスティアにはそれは選択を強いているように聞こえた。

聴くか、聴かないか。その覚悟を問われている。

心は警鐘を鳴らす。聴かないほうがいいと。

自分とは分不相応な情報を得ようとしている。

神の勘は怯えていた。

その警告の果てにある、悍ましき悪意を感じ取って。

だが、ヘスティアが選んだ答えは傾聴だった。

背筋に凍るような悪寒を感じながら、それでも無知である罪を許さなかった。

その決意が、ヘスティアに真実への鍵を渡すことになる。

「ディオニュソス乱心！ デイオニュソス乱心！ 突如暴れだしたディオニュソス、酒蔵にて大暴れ！ 「あの糞女神が!!」と叫びながら落ち着かせようとする団員に暴行！」  
サキ鳥の告げた噂話は過激な内容だったが、大袈裟に警告するほどのないようではないと他の神々なら判断するだろう。

だが、ヘスティアは違った。

その噂話を聞いた瞬間、脳裏に閃光が弾ける。

想起するのは神の宴。

あの時、遠目で見えたディオニュソスの浮かべた笑み。

そして、天界で何度も見た発作が重なっていく。

場違いにも浮かんだその感情が再びその姿を現した。

(確証はない……そもそもただの噂だ。でも、だけど)

これが何を意味するかは分からない。

なぜサキ鳥が警告を発したのかすら今はヘステイアには判断できない。

ただ、自分が知ってはいけないことに足を踏み入れたことは理解できた。

「ただいま戻りました……神様？」

気が付けば日は暮れていた。

何かから逃げ惑ったように髪を乱した様子のベルは、ヘステイアの常とは違う様子に気が付き不思議そうな顔で訪ねてくる。

そんないつもと変わらないベルに少し笑みをこぼし、ヘステイアは迷いを捨てるように一つ深呼吸した。

「おかえり、ベル君。疲れて帰って来ている所悪いんだけど……ちよつといいかな？」

「はっ」

「……ふふつ、まだなにも言っていないよ」

「神様の望むことならなんだってやります。僕は、神様の眷属です」

普段の少年なら慌ててしどろもどろな解答をするだろうに、今日ばかりは迷うことなくヘステイアの望む答えをあつさりと返した。

今のヘステイアの動揺が伝わっていたのかもしれない。

ベルのヘスティアへの忠誠は揺るぎないものだ。

彼女が望むなら、ベルは何でもする。

彼はそう自分に決めていた。

「なら、遠慮なく我儘を言わせてもらうね……少し、膝を貸してくれないかな」

「……はい。どうぞ」

ベルの膝の上に頭を乗せる。

包み込むような温もりが、人肌を通してヘスティアの心に滲みた。

「……」

ヘスティアは戦う神ではない。

ロキやフレイヤのように智謀策謀を張り巡らせることなんてできないし、タケミカヅチのように神域の武芸を披露できるわけでもない。

かつて小人族<sup>バルム</sup>たちが敬愛したという、架空の女神フィアナのように明日を切り開く勇氣すら持ち合わせていないちっぽけな神だ。

それでも、この少年の前では背伸びをしていたいから。

早すぎる成長をしていく彼の背に刻まれる刻印に相応しい存在でいたい。

だからどんなに怖くても。恐ろしくても。

この温もりを忘れなければやせ我慢できる。



女神は微睡みの中で、そう誓った。

## 蝶のように舞い、蜂のように刺す

### 6階層。

平らな床と壁、無機質ながら何者かの意思を感じさせるシンプルな構造。

第三級冒険者の資格を得たベルにはあまりにも難易度が見合っていない領域。<sup>エリア</sup>場合によつては狩場荒らしと揶揄されるかもしれない。

そんな階層で探索を行っている理由は二つ。

ヴェルフの考案した新装備の素材集めと、同じくヴェルフが作った新防具の試着である。

その名も翔<sup>びよん</sup>兔<sup>ん</sup>鎧<sup>古</sup>。

兔<sup>びよん</sup>鎧<sup>古</sup>シリーズの新作……と言うよりは派生形。

形はこれまでの兔<sup>びよん</sup>鎧<sup>古</sup>と大きな違いはない。ただ、色が少々特殊だ。

兔の名の通り、これまでの兔<sup>びよん</sup>鎧<sup>古</sup>シリーズはベルの髪と同じように処女雪のような純白だ。

だがこの翔<sup>びよん</sup>兔<sup>ん</sup>鎧<sup>古</sup>は水晶のように透き通るようなスモーキーホワイト。

ぼんやりと暗い迷宮で光を放っているようにも見えるその鎧。

その素材は何と紫<sup>パープル・モス</sup>蛾の翅。

上層中部で、数々の新米冒険者に毒の鱗粉による状態異常の恐怖を叩き込んだ要注意モンスター。

ベルもエイナの講義の中で幾度となくその危険性を教えられていた。

このモンスターが大量発生するからこそ【耐異常】のアビリティが半ば確定でオラリオの冒険者は発現できる。

オラリオ以外で【耐異常】のアビリティが珍しくない場所など、自然を蝕む古のモンスター<sup>アサシン</sup>の近くに<sup>アサシン</sup>いる過酷な環境に置かれた眷属たち、或いは邪神が運営すると言われる【暗殺ファミリア】の暗殺者位だろう。

そんなモンスターだが、防御力と言う意味では実は大したことはない。

サポーターのボウガンで仕留められる程度だ。

当然、そんなモンスターの素材が、強靱なダンジョンのモンスターの爪や牙から冒険者を守る防具の素材にはふさわしくない。

紫<sup>パープル・モス</sup>蛾のドロップアイテムは薬品や特殊な魔導具<sup>マジックアイテム</sup>に使われるものであり、装備に使うことは無い。それがオラリオの常識。

しかし、ヴェルフはその常識を敢えて破る。

「イイアツ!」

四方を岩に囲まれたダンジョンの中でありながら、白い流星を感じた瞬間に6階層のモンスター、フロッグ・シューターは短い断末魔を残して力尽きた。

数M<sup>メトル</sup>先の岩床にトン、と人が降り立つ音が響く。

フロッグ・シューターに不可視の一撃を与えた少年は、その場でトントンとリズムを取るように小さく足を鳴らした。

少年の戦いぶりを見たヴェルフは満足そうに頷き、その意見を求めた。

「どうだ？」

「……動きやすい、です」

「だろ？ お前の最大の武器は速さだ。それを兔に角補助する装備にしてみたんだが、悪くはないみたいだな」

兎鎧シリーズ全体のコンセプトとして、『軽量化と堅固性の両立』が挙げられる。

ヴェルフの理想である使い手を引き立てる至高の武器。

そこに至る第一歩としてヴェルフは両立し難いこの難題に挑戦した。

至高の武具への思案の前にヴェルフが考えたことは至高の武具の反対。最低の武具の定義だ。

目指す場所の対極を知ること、逆説的に至高へのヒントを導きだそうとして考え抜いた最低の武具の定義、それは『使い手を阻害する武具』と『使い手を殺す武具』であ

る。

重く、可動範囲が狭められれば使い手は力を十全に発揮できず。

脆く、使い手の能力頼りの武器等もはや鍛冶師の殺意が疑われる。

よつて、びよん兎鎧シリーズは『動きやすく』『堅い』防具を目的に作られた。

すなわち、頑丈なライトアーマーである。

「びよん吉MK―IIは自分でも中々の出来栄えだったと思うが、ベルに最適化していたわけじゃないからな」

ヴェルフのセンスと努力の甲斐あつて経営陣からも下級鍛冶師にしては上々の評価を貰えた兎鎧（名前を聞かれた途端に評価がガタ落ちしたらしいが）。

だが、ヴェルフは自分の作品に100点満点をつける気にはなれなかった。

その原因は単純だ。ヴェルフは己が作った武器を使いこなす使い手の顔を思い浮かべることができなかったからだ。

結果としてモデルは中途半端なものになり、惜しい作品になったのである。

更なる改良を施したMK―IIIも何か引っかけかりを覚えずにはいられなかったヴェルフだが、ベルとの出会いがその靄を払しよくした。

今までぼやけていた、自分の理想の武器を振るう最高の担い手のイメージに、ぴったりのこの少年が合致したのだ。

そしてベルの戦いぶりを見てみると、次々と自身の武器の欠点が浮かび上がる。もつとここをこうすれば……あそこは不要な部分だった……

気が付けばヴェルフの頭の中にはベルのための武器がいくつも出来上がっていた。

この翔兔鎧はそのうちのひとつ。

ベルの一撃離脱……いや、連撃離脱の戦い方をより際立たせるための防具。

素早い兔の動きを阻害しない、超軽量化こそヴェルフの辿り着いた答えだった。

(その代償に硬度はMK-II並に下がっちゃったがな)

ヴェルフが目をつけたドロップアイテム〔パール・モスの翅〕。

鉱石ほどではないにしても、それなりの硬さを持たせるためにどれほどの試行錯誤があったことか。

まるで精密なパズルを組み立てるように、衝撃を翅から翅へと伝えて兔鎧全体に分散するような構造になるように苦心し、「パールモスの鱗粉」と魔石を混ぜ合わせて作った接着剤の異様な臭いで工房の周りから苦情が来つつも完成させた逸品だ。

他の鍛冶師が見れば、狂気じみた正確な作業に白目を剥いたかもしれない。

妙にヴェルフにちよつかいを出す団長なら爆笑しただろう。

そんな愚行によってこの兔鎧は作られた。ドロップアイテムから考えればあり得ないほどの耐久性を持つが、ヴェルフとしてはまだまだ発展の余地がある技術だと考えて

いるらしい。

(紙でできてみたいに重みを感じない！ 思うように動ける!!)

そんなヴェルフの自慢の一品を前にベルは興奮を隠せなかった。

レベル2になって桁違いに動けるようになったと自覚していたが、今は更に出鱈目だ。

まるで空を飛翔するかのようバーブル・モスに飛び回るベルは、紫蛾の翅が自分に生えてきたようだとすら感じていた。

この自分にはもはや易しすぎる階層でベルは一つ、自分にある縛りをつけている。

それはモンスターの戦いにおいて、一度も地面に足を付けてはいけなアタッカーいと言うものだ。

この先自分が足を踏み入れようとしている中層は更に広く、岩石による高低差も激しい場所だと聞いている。

そうした相手と空中戦になることも前線にはよくあることなのだそうだ。

フロッグ・シューターを狩るついでにその予行演習を兼ねていたのだが、とんでもなく飛び跳ねやすい。

壁を蹴り、モンスターたちに急接近する。

加工の末に紫からくすんだ白に変わった翅の吸い込むような色合いが、視界の中でブ

レると世界も揺れた。それが己の首が刎ねられたという事だとウォーシャドウが理解する前に、ベルは反対側の壁に到達。再び蹴りつけ、もう一匹のフロッグ・シューターに突撃した。

残ったフロッグ・シューターはようやく襲撃者の存在に気づき、自分に一直線に迫る兎に伸縮自在の舌を伸ばす。カウンター気味の一撃。空中を直進するベルに本来は回避は不可能。

だがベルはナイフを左手に持ち替えると、体を捻って、地面に手をついた。伸ばした右手はガリガリと岩盤を削り、直進していた勢いを和らげる。

しかし跳躍がいきなり静止するはずもなく、速度を削られながらもベルの体がフロッグ・シューターの舌に触れようとした時。

少年は咆声した。

「【ファイアボルト】!!」

右手の兎肉球びんきゅうと岩盤の間に発生する炎雷。

この小さな火種が、ベルの直線的な動きに反応したフロッグ・シューターのカウンターを外させた。

ぶわりと反動で浮かび上がるベルはフロッグ・シューターの攻撃の回避と共に、曲線を描いてモンスターの死角、頭上への移動に成功する。



「イイツ!? イ!?!」

炎雷が現れたと思つたら、目の前の獲物を見失つたフロッグ・シューターが冷静さを保てるはずもない。

ぎよろぎよろと大きな目玉が右往左往する中、天井を蹴り、加速。

ようやく頭上の冒険者に気付いたフロッグ・シューターだったがもう遅い。

ヒュンツ、と子気味の良い音が鳴り、首元を斬りさかれた蛙は音を立てて地面に倒れ込んだ。

「……あ、地面に手をつくのはアリかな?」

モンスターとの戦いで地面に足はつかないことになっていたが、手はアウトなのだろうか。

少し考えつつ、ベルはフロッグ・シューターが落としたドロップアイテム「フロッグ・シューターの舌」を回収する。

「……随分と安定してきたな。もう私たちの護衛も要らないだろ」  
「闇派閥イワイルスとかがいるので引き続き保護してください」

モダーカやハシャーナがいない代わりに、今日の護衛役を引き受けてくれたイルタの軽口にリリが反応する。

そんな当たり前の光景が嬉しくてこっそりと弧を描いた唇だったが。



弱き己との決別。

それこそが超克を果たすべき者の責務だとオツタルは考える。

何度も敗北の泥を味わってきた男であるがゆえに、彼はその屈辱を飲み干した末に力を得ることができると知っているのだ。

ベル・クラネルは第一級の領域には遠く及ばないながらも、壁外ならば十分に強者と評される実力がある。

オツタルは既に一度超克を果たしたベルに、それ以上を求めるためにはどんな試練があるか。

弱さとは過去に現れるものだ。

フレイヤにいつかは聞いたベル・クラネルの傷。

決して拭えぬ屈辱の記憶にこそ、そのヒントはある。

「オオオオオオツツ!!」

苛立ちと共に振るわれる鋼の塊。

ミノタウロスが持つには少々どころではなく、不相応な業物はオツタルが与えたものだ。

既にミノタウロス如きに後れを取るベル・クラネルではない。だが、オツタルの考える試練にはミノタウロスが必須であった。

少年のあの日の屈辱を再現するためには。

眉一つ動かさず、片手で払いのける猪人ポアズの武人。

信じがたい耐久はミノタウロスの力で突破できるものではない。

業物の力を引き出せず、技術の欠片もないモンスターの限界。

「……仕置きだ」

「ヴオオ？」

オツタルは腰に掛けたバッグから緑黄色の小剣を取り出す。

己にかすり傷しか与えることはできないであろう鈍らに油断するミノタウロス。

オツタルはそんな愚か者に容赦なく颯風を浴びせた。

「オオオオオオツツ!？」

剣と言う形から予想がつかない無色の遠距離攻撃。

隙だらけのミノタウロスの顔に斜めの切り傷が生まれ、絶叫と共によろめいた。

「馬鹿が」

オツタルはそんなミノタウロスの左胸を殴りつける。

途端に大型のモンスターは冗談のようなスピードで迷宮の壁に叩きつけられた。

衝撃で空気を全て吐き出し、溺れたかのように口をパクパクと開閉するミノタウロス。

彼の前に立ちふさがるオツタルは、冷たい眼光でミノタウロスに告げた。

「相手の行動には必ず意味がある。お前の相手は未知の塊、油断などするな」  
オツタルが最も警戒するのはベルのひみつ道具による瞬殺である。

無論、ベルがひみつ道具だけのつまらない冒険者でないことは重々承知している。

だが、やり易いアイテムがあれば使うのは当然だ。

ベルとの戦いの際に彼が有用なひみつ道具を持ってないことを期待するなど、あまりにも愚かなことだとオツタルは断言する。

故にこのミノタウロスの調教において、最優先の課題はひみつ道具への対応力を育てることだった。

そのためには経験が必須。だがオツタルはひみつ道具など持たない。

ミノタウロスがひみつ道具と対峙するのはぶっつけ本番とならざる得ないのだ。

その為の策として用意したのが数々のアイテムだ。

ベルセウス  
万能者を代表するオラリオの叡智の結晶をかき集めたオツタルは、これを擬似ひみつ道具としてミノタウロスの調教を開始した。

「ウヴオオオ……ッ！」

その結果、多種多様な容赦のない攻撃がミノタウロスを苦しめる。

風の魔剣、フラッシュボルト発光瓶、各種毒薬。

ミノタウロスが瞬時にそれを見抜き、対応しなければ瀕死直前まで追い込む。

「オオオオオオオオオツッ！」

理不尽な調教にミノタウロスが絶叫した。

破れかぶれに極東から流れ着いたと言う暗器、千本を左腕を盾にして防ぎつつ、オツタルに接近し、大剣で叩き潰さんとするが、最早認識すらできない速度で頬に拳が突き刺さる。

「それでいい。肉を切り、骨を断て」

叩きのめした相手に対する賞賛は絶対的な力の差の証左だ。

既に何日もオツタルとの戦い、否、調教を続けているミノタウロスは臆気ながらも繰り返された言葉の意味を理解し、殺意を燃やす。

「ヴオオオオオオオオオツッ!!」

それはモンスターとしての本能か。

虐げられた怪物の積もった瞋恚しんにか。

それともそれ以外の何かなのか。

痛みと屈辱のなかで磨き上げられたミノタウロスの必殺。直進的なラッシュのキレは通常のミノタウロスとは比べ物にならない。

空間を捻り穿つがごとき突進は、その凶悪な角で目の前の敵を突き刺さんと加速す

る。

それを真正面から受け止める【猛者】。  
激突する力と力。

その瞬間、迷宮が小さく震えた。

## カノジヨノ悪夢

夢と言うのは人間にとって最も身近な不可思議だ。

その殆どは唐突で、何の心構えもなく見せつけられる。

天にも昇る様な幸せな夢を見ることもあれば、世界の終わりを幻視することすらある。

まるでもう一つの人生を体感しているかのような、ずっしりとした疲労感が残った時には夢と現実の区別がつかなくするものだ。

そんな風に多くの人々を惑わせる夢は時に人生のターニングポイントになる。

使命を告げるかのように進むべき道を指し示す夢、内なる危機感が形となって未来への不安を自覚させる夢、そして冷たい現実に引き戻す夢。

目を閉じれば浮かんでくるそれはもう一つの現実だ。

そしてまた一つ。少年の焦燥をかき乱す夢が。

少年に現実を突きつける幻想が浮かぶ。

ただし、普通とは違いその夢を見たのはベル本人ではなかったが。





「ユメかんとくいです」

光と共に現れたのは簡素な椅子を中心に置かれた数点の小道具。

ひみつ道具にしてはオラリオの家具と大きな違いはないように思える。

「監督は管理する人のことですし、恐らくは夢を自在に操れるひみつ道具ではないでしょうか」

ひみつ道具を出したはいい物の、全く使い方が分からずに悩んでいたベルに事情を聴いたりりは自身の仮説を話した。

「ダンジョンでは使えなそうだね」

「まず初めに使えるかどうか考える基準がダンジョンなのは気を付けたほうがいいですよ」

ダンジョンで呑気に寝ていられないし、今回は外れかとガツカリするベルにリリはジト目で突っ込んだ。

最近素材集め、ひみつ道具の確認、エイナとのマンツーマン指導と寝ても起きてもダンジョンな状況が続いているのだから仕方ないのかもしれないが。

このままではダンジョン中毒者ジャンキーに一直線な少年にため息をつく。

「夢となると寝なきやいけないわけだし、朝早い今の僕たちだと使えないかも」

「いえ、見てください。ここまでヘステシア様が全く話してこないと思いきや、堂々と二



「なんというか……悪魔みたいな顔でゲラゲラ笑うロキ様から兎と花を守ってました。その辺りには高笑いする象の仮面が飛び回っていて、隅っこでワイン瓶がびよこびよこ揺れていて……最終的に揚げたてのヘアアイストス様が登場したところで、収集つかなくなりそうだったからリリが口を挟んで強制的に終わらせました」

言葉にするとなんだそれとは言う感じだが、夢と言うのは大体あんな感じで混沌としているのかもしれない。

遠い目になってしまったベルをよそに、アイズは何か考えた後、振り返った。

「そのひみつ道具……私にも使える、かな？」

「え？」

「夢を書き換えることができるなら、やりたいことがあるから」

まさかこのひみつ道具に食いつかれると思っていなかったベルは、少々面を食らったがアイズの真剣な表情に思わず頷く。

(アイズさん……?)

今までの何処かのんびりとした雰囲気霧散し、殺気立つとまでは行かないがどこかピリピリし始めている彼女の様子に戸惑いを隠せない。

その目の色は澱んでいるようにも思えた。

やがてユメかんとくいす一式を用意するベルは、そのままアイズが眠るのを待とうと

するが。

「うわっ、早……」

あつという間に眠りにつくアイズ。

ゴツゴツした石畳の上だというのに全く苦にしている様子だ。

遠征ではダンジョン深層と言う過酷な環境に、何日も身を置かなければならない第一級冒険者にはこの程度の条件下での睡眠なんて慣れっこなのかもしれない。

横向きになり、膝を抱える様な体勢で眠る彼女はまるで幼子おぎなのようだ。

自分などよりよほど強い相手に向かって、失礼ともいえる感想をこの時のベルは抱いた。

『……………け、ベル』

(ん?)

『行け、ベルよ』

(……………んん?)

無防備すぎるアイズの横寝顔を見つめていたら、突如響く謎の声。

レベル6であるアイズが反応していないという事は、自分にしか聞こえていないのだろうかとあたりを見渡すベルはふと、この声に聞き覚えがあると思いついた。

そう、これはとても懐かしい声。

いつも村で騒ぎを起こしては怒られていた、愉快な……

『行けえい！ ベルよ！ 接吻じゃああああ!!』

(お祖父ちゃん!?)

寝込みを襲ええーい、と頭の中で暴れまわる祖父やみの声がベルの体の操作を奪う。

瞳を閉じ、寝息を立てる彼女の顔に徐々に接近して……

『待つんだベル君!!』

そんな邪念に支配された行動を咎めるように、女神ひかりの声が脳内に響き渡る。

『寝込みの娘を襲うなんて真似は許されないぞ！ 特にその娘となんて絶対にダメだ！

なんでボクじゃないんだっ!!』

(そ、そうだ。こんなこと絶対に許され……神様?)

後半何かおかしなことを口走っていたハスティアの叫び声に応えるかのように、体が

制止する。

しかし、光の加護の力はそれまで。

カチーンと硬直した体はそのまま動かず、二つの脳内に響く声に翻弄された。

『早く離れるんだ、ベル君!!』

『据え膳食わぬは男の恥よお!』

白熱する善と悪の戦い。

しかし、悲しきかな。人の善心が強ければこの世に闇派閥イヅイルスなど存在しないのだ。

徐々に、徐々に押されていくヘスティアの声。

偉大なるスケベ心が天秤を破壊しようとしたその時。

「待っ……てて……」

「!!」

ずっと視界に固定されていたアイズの唇が震え、弾かれたようにアイズの下から離脱するベル。

依然、目を閉じたまま微かな寝息を奏でるアイズに脱力しそうになる中、最後の声が現れた。

『ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜』

『うぬう………何奴!?!』

『この音楽は一体!?!』

色々と空気をぶち壊す陽気な音楽。

デレレレ……と繰り返される聞きなれない音響に一番混乱しているのはベルだった。

祖父やみと女神ひかりの間に現れた新たなガラガラ声は……

『ぼくドラえもんです』

(ドラえもんさああああん!?)

なんの伏線まえばれもなく、いきなり現れた青狸に動揺を隠せないベルは心の中で絶叫した。  
『ぼくは狸じゃなああああ!!』

あ、すいません。

『ベル君。ユメかんとくいすを使って、アイズちゃんの夢を覗いてみよう』

(え、あつ、はい)

『そもそも初めからそういう予定だったじゃないか。なのにこんなことであたふたして  
るなんて、君は実に馬鹿だなあ』

(ご、ごめんなさい……)

猫型ロボットの言葉によつて、自由が取り戻されるベルの肢体。

自己嫌悪と意外と口が悪いドラえもんによつて凹みながらも、ベルはモヤモヤにアイズ  
ズの夢を投射する。

そこに映っていたのは……

「……アイズさん？」

今もベルの前で横になっている少女と同じ髪の少女だった。

ただ、年齢が違う。

アイズをそのまま幼くした見た目の少女は泣いていた。

誰もいない荒野で、黒い風に晒されながら泣いていた。

——待ってて

やがてその瞳から涙が途絶える。

——必ず私が……

金の虹彩が黒く縁ふちどられていく。

狂おしいほどの衝動が、幼い体の中に満たされていくのをベルは見てしまう。

その衝動の名は殺意。

幼子には全く似合わない憎悪の仮面に包まれた彼女の姿に、ベルは何かを言いたくて

……結局、その想いが言葉になることは無かった。

「……っ」

自分の無力に焦がされながら、ベルは予めアイズに頼まれていたように夢を書き換える。

「アイズさん!!」

「……?」

「僕です、ベル・クラネルですっ」

「ベ……ル……?」

突如世界に届いた声に動揺するアイズにベルは語り掛けた。

夢の配役も設定も意のままに出来るユメかんとくいです。



そのひみつ道具を知って、こんなことを考える人物などアイズだけだろう。何も考えずに了承してしまったベルだったが、これでいいのかと自問する。

こんなに過酷な夢だとは知らなかった。

悪夢の中で自分を保ち続けるという残酷なことを、自分は支援していいのかと懊悩し、結局結論を出すことは出来ない。

少しの葛藤の末。

ベルは苦渋を滲ませながら、アイズの指示通りの言葉を発表した。

「貴女はもう力のない子供じゃない！ 貴女は……【劍姫】です！」

憧れた名前を口にすることが、こんなにも苦しくなる日が来るとは思っていなかった。

「け、ん……？」

「……貴女は剣を取った、もう、戦える」

幼子に剣を取らせる自分が堪らなく嫌だった。

それが彼女自身の願いだとしても、これはきつと間違っている。

何の根拠もないが、そう確信してしまう。

幼い少女が風に包まれる。

荒野に蔓延る黒い風ではない、無色の神風。

「……ありがとう。ベル」

アイズの声は舌足らずなものからベルの良く知るものに変わった。

聞く度に胸を高鳴らせた音色が、今だけは苦しい。

涙を流す少女の姿は消え、無表情の仮面を纏う剣士が風の中から現れる。

【剣姫】として悪夢の中に降り立ったアイズは体の調子を確かめるように拳を握り、開くという動作を繰り返し、一つ頷くとベルに礼を言った。

それがどれだけベルの心を苛んだことか。

(何が起きたのかは分からない……けど)

これはアイズの過去なのだろう、と予想は出来た。

夢は好きに見えるものではない。

にも関わらず、この夢を見ると確信した様子だったのはなぜか。

(心傷……  
トラウマ)

彼女の過去に何があったのか。

聞いてもアイズは答えてはくれないだろう。

そして、ベルもそんな予測に飛びついて知ることを恐れてしまっている。

(きつとこれは克服するための儀式なんだ)

だからこそ、アイズは夢のなかで【剣姫】になった。

都市最強の剣士となって、かつての無力を晴らそうとしている。

それならばいい。

彼女に剣を取らせたことは心苦しいが、これが彼女の心の傷を埋める一助になれば

……

「……………え？」

そう、信じようとしたベルの眼に信じがたい光景が飛び込む。

鮮血が飛び散った。

荒野の中で、赤い命の証が大地を潤したのだ。

「アイズ、さん」

都市最強の剣士。

決して負けない第一級冒険者。

そんな盲信がガラガラと崩れ去る。

勝負にすらなっていないかった。

アイズの剣撃はまるで届かず、敵の攻撃はいつの間にかアイズを苛んだ。

この攻撃が全く把握できないのはベルが未熟だからか。いや、そうではない。

今戦っているアイズすらも、敵の攻撃が見切れていないのは次々と増えていく傷で分かった。

血と肉が吹き飛び、骨も砕ける。

敗北は確定的だ。

それでもアイズの瞳は揺るがない。

それは冒険者の意地でも、人としての誇りでもなかった。

(分かっていったの……?)

その表情に動揺は見られない。

ここ数日の訓練のおかげで、アイズの僅かな表情の色を見分けることができるようになった。アイズはそれを察することができてしまった。

おかしい。あそこは夢だ。

夢を改ざんする権利はユメかんとかいすを使う人間だけのものではないことは、ヘスティアに使った際にロキに対抗してヘフアイストス（揚げたて）を召還した時に分かったことだ。

つまり、アイズは夢の敵に勝とうと思えば、そういったように改ざんされるはずだった。

そうなっていないということは、アイズは敵に勝てないと思っっているからだ。

勝てないと知ってなんで挑んだのか。

あれがアイズの心傷トラウマだというのなら、克服できなければ戦っても傷が深くなるだけではないか。

「まさかっ」

ここでベルは己が思い違っていたことに気付く。

アイズの目的は心傷トラウマの解消ではない。

寧ろ、逆。

「……傷を刻み込むために戦っている？」

まるで敵との距離を測るように。

アイズは自身の無力を確かめているのではないか。

そのために己に過酷を課しているのだとすれば、とんでもない自傷行為だ。

心の傷は体と違って簡単には治らないものだ。

当然、回復薬ポーションなどと言う便利なアイテムも心には効かない。

「僕、は」

こんな自傷行為に手を貸してしまったことに青ざめるベル。

あんな憧憬の姿は見たくなかった。

自身の血肉を燃料に走り続けるアイズが、その先に迎える結末を思うと心臓を鷲掴みされたように胸が痛くなる。

涙で視界がぼやけ、視線は気付けばアイズの夢から自分の足元に移っていた。

この光景を見届けられるほど、まだベルは強くなかったから。

——雑魚にアイズ・ヴァレンシユタインは釣り合わねえ。

また、かつての言葉がベルに牙を剥く。

見据える先が遠すぎる。

レベル2になったことで多少は近づいたと思っただことは錯覚だったのだ。

少女が強くなる理由を知った。

自分とは真逆の悲しい理由だ。

きつと彼女はそれを受け入れているのだろう。

ならば自分が口に出すのはお門違いだ。ファミリアでもない自分の言葉が届くとも

思えない。

なにより、安易な同情はこれまで歩んできたアイズへの侮辱になる。

既にアイズは一角の人物。

新米冒険者に過ぎないベルの言葉など、彼女を動かすには軽すぎる。

……それでも。

それでも、それでも、それでも、それでも。

「……救われてください」

道理も打算もねく、こぼれ落ちた言葉。

涙をはらんだ言葉は誰にも届かず消えていく。

自身の言葉の無力さに、もはや自嘲すらできないベルは俯き続けた。  
だから、気が付かなかつた。

悪夢の中で小さく響いた鐘の音に。

そして、アイズを包む風が白い光を放つたことに。

予想外の事態に動揺しながらも放つた一撃は、黒い風の先にいる敵に初めて届き……  
夢は白い光に包まれて終わった。

## 力無き者たちの切望

「クラネル様？」

「え……ああ、すいません」

呆けていた意識が引き戻される。

目の前で心配そうに僕の顔を覗き込む春姫さん。

話の最中なのに相手が心ここに非ずな様子では不安にもなるだろう。

(いけない……今は春姫さんを優先しないと)

自分があるこれ抱え込みがちなのは理解している。

だから目の前のこと一つ一つに取り組んでいけばいい。

それが僕が見つけた答えだったはず。

だというのに、全く集中できてないのは先日アイズさんの夢が原因だろう。

あれが何を意味するのかわからない。

結局、あのあと夢の意味を聞くことは出来なかったからだ。

心傷トラウマに関わることを興味本位に聞き出すのはどうかと言う判断もあるし、アイズさん

自身もあの夢に関しては深くは話そうとしていなかった。



精々、ユメかんとくいすを使って何か干渉しなかったかと聞いてきたことぐらいだ。アイズさんに師事されたとおりにしか口を出してないと言うと、不思議そうな顔で首をかき上げていたが。

もう終わった話だ。

今あのことを考えていてもできることは何もなし、頭の奥隅に情報として留めておいて保留するのが正しい。

そう割り切ることができればよかったのだが、あの夢を見た衝撃は大きかったようだ。

こうして春姫さんの前に来ているのに、未だに心が整理できていない。

「なにかあったのですか?」

「い、いえ!? ちょっとボーっとしちゃっただけです。すみません、話している最中なのに」

春姫さんにすら心配されるとは失態だった。

今日は春姫さんの周囲を探るといふ目的もある。潜入や逃亡に有利なひみつ道具は今日では使えない以上、いつも以上に慎重にならなきゃ行けないのに。

「最近では鍛冶師の人の新作装備のために、もうガンガンとダンジョンに潜ってますから疲れちゃったのかもしれないです。今付けている【伸蛙<sup>ノビエール</sup>】もヴェルフさんが作ってくれ

たもので、今日はひみつ道具じゃなくてこれを使って……」

「クラネル様」

なんとか予先をずらそうとしたが、春姫さんらしからぬ力の籠った声に二の句が継げなくなる。

怒っている……と言うよりは叱る感覚に近いかもしれない。

翡翠の瞳に映る僕は気まずそうに口を結んでいた。

「なにか、あつたのですね？」

「……まあ、はい。個人的なことですけど」

「話してはもらえませんか」

「え……」

「クラネル様には今日まで良くしていただきました。それなのに貴方様が辛そうな顔がされていては、春姫も心苦しく思います」

そう話す春姫さんの声は何時ものようにオドオドとしたものではなかった。

真つ直ぐとこちらを見据える狐人（ルナール）から視線を逸らしそうになって、それは卑怯だと自分言い聞かせた。

僕は春姫さんの心を開かせようとしているのに、こっちはそれを拒絶するなんて筋が通ってない。

彼女を助けたいと思つて来ているのに、逆に悩みを聞いてもらうことになるなんて物凄く情けないけど、無意味な意地を張るところではないだろう。

とは言つても、自分が何に悩んでいるのか。正確に伝えられる自信がない。

アイズさんのプライベートのことが含まれているとか、そもそもあの訓練は内緒のモノだとか、理由は色々あるが一番はこのモヤモヤを自分の中で言語化しきれていないからだ。

なんとか言葉にしようとして頭を捻る。

春姫さんは中々口を開かないでいる僕の言葉を静かに待つてくれていた。

やがて纏まり切らないながらも、僕は自分の中の不安を口にする。

「僕はある冒険者の人に助けられて……それでその人を目標にしてきたんです」  
始まりはあの日。あの場所。

ミノタウロスに追い詰められて、みっともなく喚いていた醜態の記憶。

そして、そんな嫌な気持ちすら霞む溢れんばかりの恋心。

現実を突きつけられて落ち込むことはあつたけど、絶対に追いついてやると誓った。

「いっぱいダンジョンに潜つて、たくさん冒険をしました」

あの8階層の屈辱の敗走。

モンスターフイリア  
怪物祭での大規模テロ。

朱い女の人と戦った地下水路。

謎の襲撃者からの逃亡劇。

リヴィラの街での攻防。

身の丈に合わない戦いを潜り抜け、着実に力を付けた。

彼女の隣に立てる。ひみつ道具に使われるのではなく、使いこなす冒険者を目指して。

そうして訪れた契機。

レベル<sup>ザ</sup>2との死闘<sup>ニス</sup>。

絶望的な戦いを乗り越えた自分は確かに成長した。

「浮かれていたんだと思います。器<sup>ランクアップ</sup>の昇華が出来て、もうあの頃の弱かった自分じゃないんだと。憧憬に一歩ずつ近づいているんだって」

事実、大きな前進だったはずだ。

そしてそれに驕ることなく、寧ろさらなる力を求めて走り続けた。

だからこそ、ランクアップを果たしたばかりにも関わらず、既にレベル2上位に迫ろうとしているとエイナさんにも太鼓判を押されている。

進み続けていることに実感を持ち、いつか必ず彼女のいるところに辿り着けると確信すらもっていたのだ。

ただ、僕にとってはアイズさんの隣が目標ゴールであったとしても、あの人にとってはそこは通過点でしかない。今になって気付かされた。

考えれば当たり前のことだ。

僕の成長に合わせて、アイズさんが成長を止めているのではないのだ。彼女は進み続けている。

そして、その到達点はきつとあの悪夢なのだろう。

モダーカさんがレベル6に到達していると話していた「剣姫」が、為すすべなく敗れ去る異常な強さのモンスター。

あれがアイズさんによる妄想の産物だとはとても思えなかった。

つまり、彼女は知っていたのだ。あの埒外の怪物を。

そしてアイズさんの目標は恐らく、あの怪物を倒すことだ。

最強と名高い剣士を一蹴する絶望を乗り越えんと力を磨いているのだろう。

そうならば、隣に辿り着いてお終いなどと言うことがあるだろうか。

「自分の到達点が思っていたはるか先にあるんじゃないかと思つた時、無性に怖くなつたんです。明確だと思つていたのに、霞みたいに曖昧になつちやつて……」

必ず辿り着くと誓つた。嘘じゃない。

今だって憧憬への想いは変わらず燃え続けている。

だけど、熱の切れ間。渴望の中にある冷静な自分が囁く。

一体どこまで走るんだ？

僕は本当に近づけているのか？

憧憬がああ絶望に挑む時。僕はその隣に立てるようになれているとは思えない。

水を刺すそんな軟弱な思考に負けじと情熱と言う炎に薪を入れて、我武者羅に鍛えることと考えないようにした。

そんな欺瞞じみたやり方に心が疲れたのかもしれない。

「僕は、何をしたら強くなれるんでしょうか？ 僕のやっていることは全部無駄なんじゃないでしょうか……」

ポロリと出た言葉で胸のモヤモヤの正体を悟った。

自分は見失っているのだ。憧憬に追いつくための道標を。

最初は憧憬と同じくらい強くなれば良いと、そう思っていた。

アイズさんと同格の第一級冒険者になれば、この想いを伝える資格ができるんじゃないかって。

でも、そうじゃない。

臆気ながらそれに気付けたのは仮面の人物に襲われたとき、加勢に入ったアイズさんがレベル6に至っているとモダーカさんに教わってからだ。

あの人も強くなろうとしている。

考えれば当たり前な理屈が僕には衝撃だった。

そして先日の夢で確信した。

あの人の求める渴望の前には、アイズ・ヴァレンシユタインでも無力な存在なのだ。  
否、だからこそ渴望している。

力を。最強の称号を。

彼女はいつか、その領域に手を届かせるのかもしれない。

その時、僕には何が出来るのか。

今までのように。あの悪夢のように。

このままで彼女の戦いを見守ることしかできなくなる。

「僕は……弱い」

震える声で拳を握りしめた。

どこまで傲慢なんだと自分に向けた嘲笑を漏らす。

こんなこと、人に話すことじゃない。

春姫さんからすれば何が何だかわからずいい迷惑だろう。

握り締める力故か、それとも腸で煮えくり返る激情故か。

馬鹿みたいに震える手を、春姫さんは優しく包み込んだ。

「いいえ、クラネル様はお強い方です」

「……そんなことありません。戦いでは結局ひみつ道具頼りで、運に助けられて偶々上手くやれてきただけです」

「いいえ。いいえ、違います」

ゆつたりとした口調で僕の言葉を否定する。

まるで子供をあやす母親のような優しきで彼女は囁いた。

「私に戦うことは出来ません。ですが、何度も戦う冒険者様を見守らせていただいで、分かったことがあります。それは英雄様のような華々しい戦いを出来ない方であっても、戦う意思には貴賤はないという事でした」

遠くを見るように春姫さんは窓の外から覗く青空を見た。

彼女の眼にはそこにとどのような光景が投射されているのだろうか。

「イシユタル・ファミリア」と言う、Sランク派閥に最も近い大勢力に在籍する彼女は多くの戦いを経験しているはずだ。それこそ、僕の探索のように小さな範囲ではない。本物の冒険である遠征すら経験していてもおかしくはない。

「私は御覧の通り無力な存在です。自衛も碌にこなせないのに今日まで生きてこられたのは、イシユタル様と言う強大な庇護者があってこそです」

春姫さんは戦える人ではない。



体の動かし方を見てもドが付く素人であることは明白だったし、そもそも気性的に荒事には全くと言つていいほど向かない人だ。神様といい勝負かもしれない。

「もし春姫が強ければ……そう空想の羽を広げたこともありませう。ですが、私に戦う才能があつたとしても、何も変わることは無かつたでしょう」

「……」

「紛いなりにもモンスターをじかに見る機会がありましたから分かります。あの爪や牙には私の命を容易く奪い去ることが出来るのだと」

獣人は他のデミ・ヒューマン 人と比べ、動物たちが持つような感覚、野生の勘に非常に優れている。

それこそ、戦いにおいてはすぐに相手が格上かどうか分かつてしまうのだと聞く。

春姫さんのような、お世辞にも好戦的とは言えない人にはモンスターの脅威を他の種族よりも理解できてしまう分、戦いを殊更に避ける傾向があるのかもしれない。

「そう思えば体が棘み上がり、私は震えることしかできません。……どんなに強くても、必ず勝てるわけではありませんから」

春姫さんの言葉は至極当然のことだ。

強いだけで勝てるなら、僕がザニスさんに勝つことなんて不可能だった。

「だからこそ、冒険者様の心の強さは尊いものだと思ひます」

微笑む彼女は寂しそうに笑つた。

自分にはできないことだからこそ、彼女には眩しいのだろう。

「強くなんでないです。今も迷い続けています」

「それでも、クラネル様は進むことが出来ました。武器をその手に掴み、願いのために戦う覚悟を持たれたのです。それは誰にも恥じることのない、貴方様だけの強さのはず」

貴方の想いをずっと聴いてきた。

貴方の戦いにずっと心を踊らされた。

貴方の強さは私が知っている。

「例え行く道が見えなくても、貴方の歩んだ軌跡は確かに残っています。それをどうか忘れないで下さい」

重なる手に伝わる熱が腸の激情を鎮めた。

……本当に情けない。この人も今はつらい筈なのに、元気づけられてしまった。

「ありがとうございます。ちよつと、落ち着きました」

「はい。春姫の言葉が少しでもクラネル様のお力になれば幸いです」

ぴよこぴよこと尻尾を揺らしながら微笑む春姫さん。

最近はこうした反応も自然と見せてくれるようになった気がする。

僕の恥をさらす結果になつちやつたけど、こうして心の距離を近づけることが出来たのは良かったかもしれない。

「それにしてももうダンジョンに潜っていることは隠さないんですね」  
「……コンツッ!」

(あ、無意識だったんだ)

僕の指摘に春姫さんはビイイン!! と尻尾を立てて慌てる。

わたわたと手を振る春姫さんは正直とても可愛い。

「え、えつと、実は私つ、こう……地図を……」

「地図書きですか?」

「はいっ!! 春姫は地図書きなのです!!」

「あ、地図を書く専門職は地図作成者<sup>パー</sup>でした」

「コ、コーンツッ!」

やはりダンジョン知識ゼロ春姫さんはあっさりとカマかけに引っかけり、ダラダラと汗を流す。

この世の何処に自身の職の名前を間違える専門職がいるのか。

「はわわわ……つ、ち、違うのです! こここここれはそのおおおおお!」

「ちよ、春姫さん、あんまり大きな声出すと……」

からかい過ぎたと思ったときにはすでに遅く。

春姫さんは目をグルグルと回して支離滅裂な大声で叫びだしてしまった。

完全にやりすぎだ。<sup>オーバーキル</sup>

「春姫ー？　どうかしたのかい？」

不味い！

春姫さんの声で先輩娼婦たちが集まって来ようとしている。

「すみませんっ、僕ちよつと逃げます！」

「も、申し訳ございません！　クラネル様！」

「こつちもすみません！　色々聞いてもらってありがとうございます！」

右手に付けられた新たな装備。

ダンジョン上層のモンスター。フロッグ・シューターを模した赤い装置が特徴的な装備の名は伸蛙。<sup>ノビエール</sup>

フロッグ・シューターの一番の特徴である長く伸びる舌。これはそれを素材に伸縮自在なロープを発射する装備だ。

キラアートの牙を先端に付けているとはいえ、通常の武器に比べれば殺傷力は低い。

だが、この装備の特徴はその応用性だとヴェルフは言っていた。

例えば、建物の5階まで密かに潜入する時の移動手段に使った今回のように。

拳を握り、手首を曲げると伸蛙から細長い舌が発射された。

僕の手の動きと連動するこの装備は難しいけど上手く狙えれば、突き刺すと言う使い方以外にも巻き付けると言ったやり方が出来る。

ちょうど春姫さんの部屋から見える、魔石灯のアーチ部分に舌がぐるりと巻き付いたことを確認すると、最後に春姫さんにぺこりと会釈して部屋の窓から脱出した。

まだ昼間だから通行人の姿は少ないとはいえ、見つかったら大ごとだ。

僕はポーチから用意していた壁と同色の隠蔽布カムフラージュを纏った。

これならよほど壁を注視しない限り影になっっているから見つからない……はず。

レベル2の身体能力ステータスならば5階から飛び降りることも簡単だが、そんな派手に動けば間違いなく戦闘娼婦バーベラに勘づかれる。

見つからないためにはおっかなびっくりロープを伝って降りていくしかない。

上の部屋から春姫さんの言い訳が聞こえる中、物音を立てないように地面に降り立った僕は息をつく間もなく早歩きで裏路地を移動し、何食わぬ顔で大通りメインストリートに出た。

(ひ、ひみつ道具なしで初めて潜入できた……)

【イシユタル・ファミリア】の勢力圏を抜けたところでようやく肺に溜まっていた空気を吐き出す。

ひみつ道具を使っても潜入と脱出は生きた心地がしないものだが、今日は頼れる物が己の技量だけだからなおさら緊張してしまった。

それでも気付かれることなく潜入できたことを安堵する。

(これで都合のいいひみつ道具を待たなくても潜入できるようになった。何度も同じルートを使うのはバレる危険が高まるだろうからやれないけど、これで選択肢は確実に……)

伸蛙ノビエルを撫でながら今後の展望を思い描くが、その言葉はしりすぼみになった。

何故か。進んだ先にシャクテイさんがいたからだ。

凄い怖い顔で。

「……」

「ひえっ」

女性の顔を見て失礼な悲鳴を上げてしまった僕を許してほしい。

だがシャクテイさんは滅茶苦茶美人なだけあって、怒っていると凄みが凄いのだ。

「あ、あのっ！ これは……」

「不用意な外出は控えるよう言っただけだ」

言い訳を考えつく前に頭に振り下ろされる拳骨。

真つ昼間なのに一瞬目の前が暗くなった。

「~~~~~」

「まして、騒ぎを起こしたばかりの歓楽街に一人で来るとは何事だ」

畳みかける正論の嵐にグウの音も出ない。

そのまま首つたけを掴まれた僕は抗うこともできないまま「アイアム・ガネーシャ」に連行される。

これは不味い。きつとフリユネさんの時と同じく長時間の説教コースだ。顔を青ざめさせながらシャクテイさんの様子を恐る恐る見ると。

(…………?)

「…………」

何かを探る様な目付きで春姫さんのいる娼館を見つめていた。

怒っていたりするわけではなく、なにか不可解なものを観るような……

「…………探るか」

「え？」

「なんでもない。それよりも今日の説教には神ヘステイアも呼ぶからな」

「それだけはご勘弁を!」

神様はものすごく貞操観念が厳しい。

娼館に入りびたりとか思われた日には僕を見る目は絶対零度のモノになるのは間違いないだろう。

自身の悪行を親に知られんとする子供のように、僕は弁明を捲し立てた。





そんな彼がフィルヴィスをどう扱うか。それが分からなかった。

いきなり殺すことはないだろう。モンスターと融合しているとはいえ、フィルヴィスはまだ人間と言えるはずだ。

だが、フィルヴィスが闇派閥イヴイルスと、一連の事件の黒幕と繋がっているのならば、その手が全く穢れていないと楽観などできなかつた。

人を殺せば恨みが残る。

その恨みは加害者を庇護するものにも向かうだろう。

闇派閥イヴイルスの大規模な作戦は阻止され続けているとは言え、局所的な被害は出続ける。

その中にはきつと彼女が関わったものもあるはずだ。

フィルヴィスを保護した場合、「ロキ・ファミリア」にもその恨みが向くことになる。

小人族再興のために名声を求めるフィンには面白くないことだ。

そして、そんなリスクを負うだけの価値がフィルヴィスにあるとも思えなかつた。

無論、これは全てレフィーヤの想像だ。

フィンバルウムはレフィーヤ以上に頭が良い。自分では思い付かないようなフィルヴィスの価値を見出だして、何事もなく保護されるかも知れない。

それでも、レフィーヤは動けなかつた。

(ディオニュソス様はこの事を「存知なの……?」)

レファイヤーの中で恐ろしい仮説が成り立とうとしている。

現在、「ロキ・ファミリア」と同盟を結んでいる「ディオニュソス・ファミリア」はそ  
の実敵なのではないかと。

フィルヴィスがモンスターと融合しているからと言ってディオニュソスが黒になる  
わけではない。

ディオニュソスが知らぬうちに出し抜かれている可能性もなくはないのだ。

下界の人間の偽りが通じない神が相手でそれが出来るかと言われれば難しいが。

(でも、私にそう思わせて内部分裂を仕掛けているのかも……)

ディオニュソスが敵ならば何故「ロキ・ファミリア」に接近したのか。

探偵の協力者が犯人など小説の中だけの話だろう。

捜査の主導権を握っているならともかく、ロキとディオニュソスでは力関係に差があ  
りすぎてそんな真似は出来るはずかない。

つまり、ディオニュソスが黒幕ならばロキに近づくメリットよりデメリットの方が大  
きいのだ。

(でも神様の気紛れと言われればそれまで……)

考えれば考えるほど分からなくなる。

自分はどうすべきなのか。どうしたいのか。

答えが出せず、ホームに帰ることすらできない。

内通者の可能性に気付きながら、それを報告しないなど背信行為だとすら言える。

フィルヴィスを一度「ディオニュソス・ファミリア」に帰そうと声をかけたときに見せた取り乱した姿。

中層の食料庫でパーティーを組んだときの凛とした姿からは考えられないほどに、焦燥と恐怖に満ちた叫び声が忘れられない。

ディオニュソスが黒にしろ白にしろフィルヴィスはホームに戻ることはできない。

クリッチャー 怪人であることが露見してしまった以上、必ず排斥される。

そしてギルドや「ガネーシャ・ファミリア」を頼ったところで拘束され、重い刑罰が下されるだろう。

つまり、彼女の居場所はどうどこにもない。

ここ以外には。レフィーヤが拒絶しない限り、彼女の仮初めの居場所はここになる。

既に身体の傷が再生しきっているフィルヴィスがまるで出ていこうとしないことが何よりの証拠だ。

それを悟っていて突き放せるほどレフィーヤは薄情になれなかった。

(でも、ほんなのいつまでも続かない)

暫く留守にする旨の手紙は送つてあるとは言え、いつまでもホームに戻らなければ不

審に思われる。

黒よりのグレーである【ディオニュソス・ファミリア】にいたっては手紙など出せるはずがない。

持つて数日。

それ以上は現状維持などできない。

必ず選択を迫られるだろう。

フィルヴィスを裏切つてファミリアに彼女を売るか、ファミリアを裏切つて彼女を庇うか。

どの道を選んでも後悔しかない。

「私、は」

堂々巡りする思考が答えを出すことを阻む。

こんなのあんまりだ。

誰が好き好んで友達を売りたいと思うのか。仲間を裏切りたいと思うのか。

残酷な選択肢を前に、力無き少女は動けない。

何が正解なのか。

悔いなき選択は何処にあるのか。

レフィーヤは答えがほしかった。

(こんなとき……)

終わりになき自問自答の中、不意に浮かんだ思考。

(彼なら……どうするんでしよう)

愚かな選択の末に自分を救って見せた少年。

彼ならば、迷わないだろうか。

最低最悪な道を選ぶことを。

## それは少女の小さな願い

「中々良い物は見つかりませんねえ……」

ため息をついて『リーテイル』を後にするリリ。

メインストーリーに出れば、他種族よりも体格が小さい小人族であるが故に乱雑な人の波に押し込まれそうにはなるが、そこは腐つても神の恩恵ファルナを受けた眷属。

華奢な体に見合わない安定性ですいと人の狭間を縫って進む。

「冒険者」用達のお店でもピンと来るものは無し。武器店の物は高いですし、ヴェルフ様バルウムがあれこれ言いそうですからあまり行きたくはありませんが」

小人族サイズのメモ帳に幾つか書かれた名詞の内、『リーテイル』に野線を入れる。

目的の品を探す前に目星を付けていた最有力候補の一つだったが、リリの要求するベルの物は見つからない。

(中層探索が始まる前に見つけておきたいのですが……)

今回、リリが探しているのはベルの身を守るためのアイテムだ。

何故そんなものを欲しているかと言うと、その原因はすべりベルの異常な経験にある。

ベルは世界最短でレベル2に至った冒険者である。

彼の専属サポーターとしては喜ばしい限りだが、どうやってベルがレベル2に至ったか理解している身としては危機感も覚えずにはいられない。

「ベル様は典型的な巻き込まれ体質です。【幸運】のアビリティが仕事をしているのかつてくらいに厄介事が向こうから来ます」

ランクアップとは冒険者の成し遂げた偉業によつてのみ許される超克の儀だ。

無論、一回二回の修羅場では足りない。

何度もその体に傷を負いながら、それでも生き延びて初めて資格を得る。

すなわち、こんな短期間で成長出来たベルは才能こそあつたかもしれないが、それ以上短期間で冒険させられてしまったということだ。

冒険者の迷信だが一度不幸が訪れた冒険者はそれが継続するもの。

レベル2になったからと言ってそれを上回る試練もあるだろう。あるに違いない。「そんなこと、何度もやって生き残れるはずがありません！」

ヴェルフもそれを見越して……半分以上は新しい装備をつくるためだろうか……翔兔鎧びよんちを作り上げている。

ちようどベルに対する恩返しを何かしたかったところだ。

彼を守るためのアイテムをサポートとして探していたのだが。

「まさかここまで良い物が見つからないとは……」

忘れてはいけないが、レベル2も十分希少な戦力だ。

それ相応の性能が武具には求められる。はつきり言って凡百の眷属ならば安物で十分だが、第三級冒険者が主戦場とする中層域でこれまでのような間に合わせの安物を続けるのは自殺行為だ。

ベルの命を預ける物に関しては妥協するわけには行かない。

以前にリリがベルに渡した両刃剣バゼラントは銘入りとは言え上層を対象とした武装である。

それでも値段は19000ヴァリス。それも値切りにより、おおまけにまけてもらっての値段だ。

(リリの財産が残っていればよかったです……ベル様を振り切るために大半を使ってしまったのが痛いですね)

そうでもしなければベルを振り切ることなどできなかつたであろうとは言え、あの時の自分はずちよつと思いい切りが良すぎた気がする、とりりは黒歴史にしたい最近の出来事に目を遠くした。

(『桃色と黒色』『花束』……前にうらないカードボックスで、このプレゼント計画がどうなるか聞いてみた時の単語に関連することを調べても空振りばかりですし)

『笑顔のベル』のカードもあつたことから、最終的にはいいアイテムに巡り合えるのか



もしれないが一体いつになることやら。

プレゼントの結果笑顔になるのはいいことだが、その過程が分からないのは困り物だ。

老夫婦もあの可愛らしい服をくれた時はこうして迷ったのだろうか。

(……やめましょう)

かつて失ってしまった絆を思い出し、ズキリと胸を痛めるリリ。

思えばこうしたプレゼントをすと言う考えはあの日の思い出から来ているのかもしれない。

壊れてしまったとはいえ、あの思い出は暗い幼少期で確かに救いだっただから。

「このひみつ道具もちゃんと使えているんでしようか……」

首を振って思考を中断したりリは、アイテムが見つからない場合の保険に思考を移す。

ひよいつ、とポケットから一本の薬を取り出すリリ。

一見すると本当にただの薬にしか見えないこのひみつ道具の名は【チョージャワラシベ】。

その効果は恐らく欲したアイテムを引き寄せると言うモノ。

何本かあったチョージャワラシベの内の一本を貰っていたリリは、「ベル様の身を守

るアイテムが欲しい」とチョージャワラシベに頼んでいたが、今の所効果はないように見える。

ベルの場合は「サラマンダー・ウールが欲しい」と言った途端に、齒に何か挟まっていたハシヤナが現れて、ワラシベと交換でサラマンダーウールの割引券を貰った。

一方で「パーティー用のドレスが欲しい」と願ったヘステイアの場合はかなり時間がかり、ガネーシヤが妙にワラシベを気に入り団員用の仮面と交換。それを仮面をなくしたモダーカの迷宮珊瑚<sup>アンダー・コラル</sup>と交換。更に様子を見に来ていたヘファイストスが偶々思い付いたアイディアに迷宮珊瑚<sup>アンダー・コラル</sup>が必要だったため、譲渡するのと引き換えにパーティー用ドレスと一緒に買いに行く約束するというかなりの遠回りだ。

(サラマンダー・ウールもパーティー用ドレスも中々高価な代物。単純に値段に労力が比例しているわけではなさそうです)

条件が分からない以上、リリの曖昧な願いも受理されているかは分からない。

ここまで街中をぶらついているのだから、そろそろ何かあってもいいはずだが。

「お？ おーい。ちよつと待ってくれないか？」

(来ましたね)

チョージャワラシベを見つめていると、それを目にした神が声をかけてきた。

容姿は質素な和服に身を包んだ黒髪の男神。

他の神々とは違い、癩に障るニヤツキ顔はしていない。

「その藁、もし良かったら譲ってもらえないか……う？」

「いいですけど」

「本当か!?! いやあ、すまない。俺の眷属たちの鍛錬に使いたいんだ」

神様曰くこの藁にポールを巻きつけて使うらしい。

武術を眷属に教えるということはこの神様は武神なのだろうか、と思考を巡らせるリに武神は先ほどまで己がいた屋台に戻り、茶色い包装紙でつまれた熱々のジャガ丸くんを持ってきた。

「これは礼だ。持つて行ってくれ」

「ありがとうございます」

渡されたジャガ丸くんから微かに熱を感じる中、これがどうすればベルの身を守るアイテムになるのか。

「俺の眷属たちも順調に成長はしているが、ダンジョンは何が起こるか分からん。ましてや中層だ、教えられるだけ教えておかないとな」

「奇遇ですね。リリも契約している冒険者様がこれから中層に挑戦されるので、アイテムを用意していたんです」

「そうか、もし俺の眷属と会ったときはよろしく頼む」

きつとお前のパーティーとウマが合うだろう、と神の勘を働かせる武神。

随分とサツパリとした性格の神様だ。眷属は神に似るものだから、この男神の眷属たちも似たように好感を持てる人たちなのだろう。

「……タケミカツチくん。駄目じゃないか、持ち場を勝手に離れちゃ」

「あ、すいません店長。すぐに戻りますから、ハイ」

姿を現し、注意するバイト先の店長にへこへこと頭を下げる武神。神の威厳など欠片もない。

ヘステイアの同類かとジト目になるリりを横目に大慌てで屋台に戻ろうとする。

「じゃ、ありがと……あ」

「あつ」

礼を言つて片手を上げる武神だが、上げた手にボールを持つていたことを忘れていたらしい。

ボールは武神の手を離れ、弧を描きながら屋台の裏へ飛び。

ガツシャーン

「……す、すいませんしたあああああああつ!?!」

飛び出してきた建物の主に美しい土下座を披露する超越存在。

デウスデア

世も末である。

(あれつて宿屋ですよね……窓の修理代も高そうです)

宿の主と店長の説教に挟まれながら、不動の土下座を続ける武神から距離を取るリ。

ここで巻き込まれてはたまらないので移動することとしよう。

なんだなんだと人が集まる中、それらを掻き分けて先に進む。

ジャガ丸くんが潰されないように注意しつつ、次なる交換相手を探す。

(食べ物という事は……お腹が空いてそんな人でしょうか?)

キヨロキヨロと辺りを見渡していると、一人の女性が目に入った。

一房だけ白く染まった水色アクアブルーの髪。

純白のマントを纏う彼女は絶世の美女と言えるだろう。

その目に隈が出来、今にも死にそうな雰囲気ベルセウスが台無しにしているが。

「あれは……万能者？」

オラリオを代表する魔導具アイテムメイカー製作者。アスファイ・アンドロメダ。

【神秘】のアビリティを誰よりも熟練しているとされる「ヘルメス・ファミリア」の

団長。

さて、ここまで書くとしたの偉人だが、彼女にはもう一つの特徴がある。

その便利さから、都市の様々な勢力から馬車馬の如く扱き使われている点だ。特に主神に。

「また徹夜……訴えてやる……絶対に訴えて……っ」

(うわあ……)

神々による理不尽な試練はオラリオにはよくあるもの。

故に人々は彼女に同情しつつも、巻き込まれたくはないので遠巻きに見るだけだ。

当然リリも巻き込まれたくはなかったのだが、アスファイの目がリリを凝視していた。正確にはジャガ丸くんを。

同時に鳴り響く腹の虫。リリは絶叫しなくなった。

(この人なのですかチョージャワラシベエエエツ!?)

地雷そのものな人物が次の交換相手だと知り、行きたくはないが勇気を持って危険人物に近づく。

「……い、いりますか」

「いただきます」

しゅばっ、とリリの手からジャガ丸くんを取ると一心不乱に食べ始めた。

まるで数日ぶりの食事といわんばかりの必死さにちよつと泣きそうだ。

「ハムツ、ハフツ、モグモグ……」

凄まじいのは一心不乱なのは伝わるが、見た目は綺麗に食べていることだ。よほど厳しくしつけられたのだろうか。

やがて全てを食べ終えたアスフィは包装紙を丁寧にしたたみ、ゴミ箱に捨てた。

「ふう……ありがとうございます。助かりました」

「い、いえ」

「何かお礼を……と言つてもこれしかありませんね」

そう言つて渡されたのは……フラッシュポトル発光瓶。

「最近流行っているアイテムだそうで……簡単な作りでこれほどの効果を出せるのは素晴らしいですよ」

（ベル様が流行らせたアイテムがこんな有名人にも……）

ハシャーナが広めているようだが、一カ月もしないうちに爆発的に広がっている。

もしベルがこれを開発したことを知られば、ちよつとした騒ぎになる可能性もあるかもしれない。

「最近冒険者だけではなく、ああいった店でも防犯用に持っているそうですよ」

そう言つて指さすのは個人経営の店。

イッイェルス闇派閥が暴れていることから防犯意識の高まりをリリも感じてはいたが、確かに安価に用意できるフラッシュポトルは収入が少ない冒険者以外の人々でも用意できる。

「特に戦う力のない老人たちが経営するようなお店は、特に重宝していると聞いています」

老人、と言う言葉にドキリとするリリ。

先ほどまで彼らのことを考えていたせいで過敏になっているのかもしれない。

雑念を振り払おうとした時、アスフィのポーチから覗く白い花びらに目を取られた。

エデルワイス  
(花薄雪草……)

彼らが好きと言った花。

それだけだ。それだけなのに、リリにはそれがあの老夫婦たちの店のものに思えた。

「あのっ」

「なにか?」

「あ、いや、えっと……その花を売っていた人たちは元気ですか」

何を言っているのだとリリは自己嫌悪をした。

会話の前後を無視した言葉。まるで意味が分からないだろう。

だがアスフィはどう感じたのか、リリの奇妙な質問を問い返したりはしなかった。

「ええ、元氣そうでしたよ。最近は若い常連客もいるようですよ」

「……そうですか」

「この花と同じく、真つ白な髪をした少年だそうです」



(…………え?)

老夫婦の現状に安堵したりりだが、続いた言葉に戸惑う。

エーデルワイス  
花薄雪草のような白髪? それではまるで……

「近頃は物騒ですので、防犯用にでも持つて行ってください」

「……」

「では」

無意識に発光瓶を受け取ったりりは呆然とアスファイを見送った。

ポツン、と立ち尽くすりり。

(偶然? でも、ベル様が花を……?)

ベルと花と言う似合わない組み合わせに戸惑う。

花を愛でる趣味はなかったはずだ。だとすると男性が花を買う場面と言えば……

(まさか……求愛!?)

ガビーン!! と雷が走ったかのようなシヨックを受けた。

お子様なベルにそんな度胸があつたとは!

問題は誰がその対象かだ。

(まずりりはないです。完全にポジションが子分ですから、悔しいことに。次にヘス

ティア様ありません。お袋です。なら他によく会う女性と言えば……)

アイズだ。

最近訓練を受けているという、ベルに急接近中の女性。

(か、勝ち目がありません！)

美人で強くて金持ち。

こんなの反則である。

ちんちくりんのリリが太刀打ちできる相手ではない。

凄まじい心的ダメージにふらつきながらメインストリートを歩くりり。

ベルセウス  
万能者から闇を引き継いだかのような光景に人々は引いた。

「あ、あの……っ、困ります……」

「なんだあ？ 良いだろうが」

「ちよつと遊ぶだけだぜ？ ヒヤハハハッ」

何やら前が揉めているが気にも入らない。

訓練つていったい何の訓練なんだと暴走する思考は、あらゆる雑事の一切をカットした。

そして、周りが全く見えなくなったりりはドスンと前方にいた男の足にぶつかるのだった。

「ああん？ なんだてめえ」

「こりやあ重症だ!! 慰謝料1億万ヴァリス……」

「えい」

「ギヤーツ!?!」

何やら言っていたが、今のリリにはインプの鳴き声と同じ。

なので容赦なく防犯用アイテムを発動する。

問答無用であった。

激しい光に襲われた男たちが怯む中、男たちに絡まれていた少女が慌ててリリの手を取る。

「ん、んっつち?!」

地面を転げまわる男たちを置いて、その場を後にした二人。

メイנסトリートから少し離れた地点に辿り着いた少女はその場でへたり込んだ。

「た、助かったあ……」

「……は!! ここは何処でしょうか」

ようやく意識が現実に戻還したりリリが今更ながら周りを確認する。

あまり店が少ない北東区画、工業区の近くのような。

「助けてもらってありがとうございます」

「はえ?!」

「その、これしかないんですけど、お礼です」

「??」

なにやらリリを置き去りに話が進んでいた。

口を挟む暇もなく袋を渡されたリリを置き去りに少女は走り去っていった。

「……【二ードルラビットの角】？」

袋の中にあつたのはモンスターのドロップアイテム。

なんでこんなものを持ち歩いていたのかと首を傾げたりりだが、まあいいかと気を取り直して次の店に向かう。

「ああ〜!? 間違えて【兎の刃】渡しちゃった〜!? アレが無いと【焰の蜂たちの群れ】から身を守れないのにいいいい!!」

先ほどの彼女の叫び声が聞こえた気がするが、意味不明なので問題ないだろう。

なんだか猛烈にぐったりしながらメインストリートに戻ろうとする。

「お!! リリ助!!」

「ヴェルフ様?」

すると最近聞きなれ始めた声が入る。

そういえばこの辺りに彼の工房があつたかと思ひ出す。

「ちようどよかつた……明日の予定で相談が……ん? それは……」

ヴェルフはリリの持つ袋に視線を落とす。

「【ニードルラビットの角】か!! ひい、ふう、みい……十分だな。それ、貰えないか」  
「え？」

「新しい装備に使いたくてな、明日の探索で探したかったんだが……これを貰えれば行かなくていい」

「ならいいですけど。貰い物ですし……ん？」

そう言つて袋を渡す。

そこで嫌な予感がした。

ヴェルフはベルの専属鍛冶師だ。つまりヴェルフが渡す者が……

「そうだ!! ついでにこれを持って行つてくれ。『ベルの身を守るアイテム』だ」  
「やっぱりいいいい!!」

ヴェルフが作ったものならば勝手にベルに届くではないか。

とんだ無駄足である。

(ベル様は誰かと逢瀬してますし……踏んだり蹴つたりです)

ガツクリと肩を落として、アイテムを確認した。

ぱつと見は背バックバック囊。

お約束とばかりに兎の意匠が施されている。



「アイアム・ガネーシヤ」前で呟いたリリは盛大な空回りに落胆する。でも、もう良いだろう。

うらないカードボックスによればベルの笑顔自体は見れるのだ。それで十分。(プレゼントって大変だなあ……)

幼い頃に可愛らしい服を貰って無邪気に笑っていたが、いざプレゼントを送る側になるととても大変だ。

老夫婦もこうして足が棒になるまで探し回ったのだろうか。

(ああ、また……)

今日は老夫婦のことをよく思い出す。

胸を締め付ける記憶だが、それでも自分には欠けがえのないものだったらしい。既にリリは満足している。

ベルやヘスティア、優しい人たちに囲まれた今こそ至宝だ。

これほどに恵まれてさらに求めるなど凶々しいというものだと言うのにこの心は浅ましくもかつてを懐かしむ。

「会いたいなあ……」

言葉にして後悔する。

もう遅いのだ。リリとあの老夫婦の関係はあのととき終わった。

疲労による気の迷いだ。

一晩寝ればいつも通りに戻るだろう。

扉を開き、「アイアム・ガネーシヤ」の中に入るとリリは首をかしげた。

静かだ。誰もいないと言うわけではないことは遠くや上の階から聞こえる足音で分かる。

しかし、普段なら自然と耳に入ってくる団員たちの話し声が聞こえない。

(誰か来ているのでしょうか?)

この辺りに人の姿が見えないと言うことは、玄関近くの個室に來客が来ているのかもしれない。

だったらリリも余り物音を立てないように、静かに、そして素早く移動するしかないだろう。

そう判断し、素早く廊下を抜けようとするリリだったが、リリの動きを察知したかのように扉は開かれた。

「あ、やっぱりリリだったんだ」

「ベル様?」

扉から出てきたベル。

てつきり來客が来ているのかと思っていたリリは面を食らってしまう。



「リリ、今ちよつと時間はあるかな？」

「リリですか？ 特に用事はありませんが……」

「良かった。君にお客さんが来ているんだ」

客、と言われてもリリにはピンと来なかった。

わざわざ訪ねてくれる友人などはいなかったし、ヘステイアのように借金をしているという事もない。

誰だろうかと思いつつ、扉を潜る。

「――」  
リリは息を止めた。

自分の目が信じられず、視覚情報を処理する脳が上手く働いてくれない。

先ほどもでずつと考えていた人たちがそこにいた。

ずつと遠目で見守ってきたヒューマンの老夫婦。

一度、「ソーマ・ファミリア」も何もかも捨てて逃げ出した時に、迎え入れてくれた優しかった人たち。

リリが救われ、壊されてしまった居場所。

二度と会う気はなかった人たちだった。

「ごめん、押しつけがましいかもしれないけど、ずつとすれ違ったままなのは嫌だったか

ら……」

ベルの言葉が麻痺した頭に響く。

確かにチラリと彼に話をしたことはあった。

エーデルワイス

花薄雪草に目を取られた自分を気にしていた彼に、あの花の思い出を語ったのだったろうか。

何気ない会話をベルは覚えていたらしい。

何て余計なことを。

そう毒づく心だが、体は全く動いてくれない。

いつもなら反射的に行えただろう逃走も、役立たずになった体では望むべくもなかった。

会いたかった。

見放されても、傷つけられても、会いたかった。

それでも自分の存在はあの人たちを苦しめてしまおうと自分を律し続けてきたのだ。

「……リリちゃん」

妻の声にビクリッ、と震える肩。

意識は彼女の次の言葉に向けられた。

どんな言葉を期待しているのか、自分は何を言いたいのか。

何も分からないままリリは妻の言葉の続きを待つ。

「ごめんなさい。貴女の抱えているものを理解しないで、半端に希望を与えて突き放して……」

「私たちは自分のことしか考えてなかった。許してくれ、リリちゃん……」  
続いたのは懺悔の言葉。

こうなることは分かっていた。優しい人たちは自分の過ちを許せない。

リリルカ・アーデが予測し、見たくないと思つた光景だ。

なのに、こんなにも動揺している。

胸から想いが溢れ出す。

何て現金なんだと、リリは軟弱な自分の心を詰つた。

離れるべきだという理性こえと離れたくないという感情こえ。

葛藤し、凍り付いたリリの背を優しく押ししてくれたのは、いつの間にか隣に来たベルだった。

「いいんだよ」

『笑顔』を見せて、リリを後押しするベル。

理屈も何も全部無視して、感情に素直になればいい。

あの日、自分の手を取ってくれたように、と言外に語る少年が決定打だった。

「つ……お爺さんつ、お婆さんつ」

決壊した想いが小さな体を弾かせる。

あの日と同じように老夫婦に駆け寄り。

あの日、その小さな手を払い退けて拒絶した二人は——今度こそリリを包み込んだ。  
涙ながらに抱擁し、謝り合う老夫婦とリリ。

再始動した3人の時間を見届けたベルは、もう大丈夫だと静かに部屋を後にした。

ここからは、部外者がいてはいけない。

失った3人の時間を取り戻すには、時間がきつと掛かるだろうから。

今は何も考えず、再会を喜んでほしかった。

オラリオは出会いと別れの街。

望まぬすれ違いで別たれてしまっても、縁が繋がればこうして再会することもできる。  
。

そう思うとなんだか嬉しくて、ベルは窓の外から見える街の風景に微笑んだ。

## それは少女の小さな決意

時計の針を無理矢理動かしたのは硝子音。

ファミリアの仲間や闇派閥イウイルスから隠れるため、商業用の宿屋を利用していたレフィーヤはその音に飛び起きた。

「な、何ですか!？」

カーテンを閉めた部屋の中で、懊悩しているうちに眠ってしまったらしい。

数日間ずっとこの部屋にこもっていたことで時間の感覚がずれてしまったのだろうが、真つ昼間から熟睡してしまったことを自覚したレフィーヤは顔を青くした。

(今の硝子音はまさか襲撃? タガが外れ始めている闇派閥イウイルスならおかしな話じゃない)

怪人クリッチェイが闇派閥イウイルスにおいてはどのような地位にあるかは分からないが、リヴィラの街では白髪の怪人クリッチェイが指揮を執っていたことから、深い関わりがあるのは確かだ。

フィルヴィスを回収に来たのか、口封じに来たのか、どちらが闇派閥イウイルスの選ぶ行動かは分からないが、これが闇派閥イウイルスの襲撃ならば最悪だ。

どちらにおいてもレフィーヤは邪魔ものになる。そうなれば交戦するのは必然だが、レフィーヤは後衛魔導士。主戦力である魔法は街中で気軽に放てるものではない。

「ロキ・ファミリア」の団員として接近戦の訓練も受けてはいるが、本職顔負けとはいかない。ミノタウロスにすらレベル3になってステイタスのごり押しが出来るから倒せる、という程度しか接近戦をこなせないレフィーヤでは焼け石に水だ。

「本当に襲撃なのか確認……」

その時、宿からやや離れた位置から感じる魔力。そして破裂音。

魔法にしては小さすぎる波長は恐らく魔法道具マジックアイテムによるものだろう。

そんなものを気軽に街中で使うわけがない。

つまり、使わなければならない何かがある宿の外で起こったという事。

（本格的に襲撃を受けたにしては静かすぎる。なら、まだ相手は本格的に動いてないのかも）

下っ端の暴走か。

情報伝達のミスか。

どちらにせよ、先手は向こうに握られた。

（情報を確認してからじゃ間に合わない。今、ここから出るしかない）

そう判断するとレフィーヤは色を付けて宿代をテーブルに置き、未だベッドの上で呆けているフィルヴィスの手を取って部屋を後にする。

幸い、こうした襲撃の可能性も考えてあらかじめ宿からの脱出ルートは想定済み、騒



様々な区画に繋がっている。

よそ者がうっかり迷い込んで、そのまま帰ってこれなくなることもある薄暗い道を、レフィーヤはフィルヴィスの手を繋ぎながら走っていた。

（あれが本当の襲撃だったにしろ、そうでないにしろそろそろタイムリミットだった。なら、ちょうどいい機会だったって切り替えるしかない）

人目を気にして中々外に出る決断が出来なかったレフィーヤは、この災難をいいきっかけだつたと思うことにした。

問題はここからだ。

（何処に行けばいいのっ!）

まず「デイオニュロス・ファミア」はない。

フィルヴィスが何も話してくれない以上、レフィーヤの推測でしかないが、現状デイオニュロスイヴィルスが閨派閥と関わりを持つている可能性は非常に高いのだ。フィルヴィスを男神に届けければ、彼が黒だった場合、間違いなくレフィーヤは始末される。

次に「ロキ・ファミア」も選べない。

レフィーヤの安全と言う意味ならそれが最善。

だがフィルヴィスは恐らく抹殺されるだろう。イヴィルス閨派閥と深い関わりがあると予想できる人物を匿うなんてするはずがない。こんなことをしているレフィーヤがおかしい



のだ。

ギルド、「ガネーシャ・ファミリア」も立場上、フィルヴィスを放っておくなどできないはずだ。そもそもその二勢力は「ロキ・ファミリア」の同士と言うワケではなく、「フレイヤ・ファミリア」よりはましだが普段は政敵に近い関係にある。

必ず腹の探り合いになる。そうした策謀を張り巡らせること等、魔力しか誇れるものが無いレフィーヤには土台無理な話だ。

その他の勢力に関してはそもそも接点がない。

怪人クリッチャーと言う爆弾を共に抱え込もうとするお人好しがどこにいるというのか。

レフィーヤは孤立していた。

(どこかに協力を取り付けるのは無理。なら、フィルヴィスさんを隠せる場所だけでも) もう宿屋を利用するのは無理だろう。

人目につきやすい場所ではあるし、そんな所を転々としている二人に注目が集まるのは避けられない。レフィーヤもフィルヴィスもそれなりに名は知られているのだから。

先のように客の顔を碌に確認しない宿がそうそうあるはずがないのだ。

(なら、人目につかない所に匿うしか……)

だが人目につかないところなど何処にあるのか。

ここは世界の中心。迷宮都市オラリオ。

どんな場所であつても、どんな時であつても活気あふれる場所だ。

この都市に来てから、度々レフィーヤの胸を高鳴らせた賑やかさが今は苦しい。こうして裏路地を通る間も何人かとすれ違つている。

知り合いがいなかったのは幸いだが、それが続くとも限らない。

(やつぱりオラリオに人が集まらないところ……なん、て……)

その時、レフィーヤの頭の中で何か引つかかった。

人が集まらない。そんな話題をつい最近聞いたはずだ。

確か話していたのは噂好きのエルフィ。

ルームメイトであるが故に、彼女と話す機会が多いレフィーヤはそれなりに都市の情勢にも詳しくなつていた。

『最近「イシユタル・ファミリア」がヤバいらしいよ。幽霊が出るとか、アンドロクトノス「男殺し」がモンスターみたいな姿になつて徘徊してるとかでお客さんが全然来ないんだつて。騒ぎ好きの神様たちですら近寄りなくなつてるなんて相当だよね〜』

そんな言葉を思い出した時、レフィーヤは思わず手を叩いた。

隣でフィルヴィスがビクツ、と怯えていたので慌てて謝るが、内心の興奮は冷めやらない。

よく思い出せたと自分を喝采したくなつた。

ここならば人目にはまずつかないはずだ。

噂では「イシユタル・フアミリア」の娼婦たちが自分たちから売り込んで、わざわざホームから離れた地点に行かなければならないほどに大変らしい。

そこならば上手く潜むことも可能ではないだろうか。

娼館の中には使われていない建物があつてもおかしくはないし、何ならあの少年たちのようにその地下で過ごすという手もありだ。

なにより神々が近寄らないというのは実にいい。

あの神出鬼没で予想不可能で傍迷惑な存在は出来れば会いたくないものだ。

特に下界の人間たちにはない観察力は、今のフィルヴィスのことも見通してしまうかもしれない。神たちがいない所など、今の娼館くらいしかないだろう。

【男殺し】アンドロクトノスのことは気になりますますが暴れてるわけじゃないですし、まあ、大丈夫でしょう」

見た目が恐ろしくなっているだけだ。

色々やりたい男たちには気分を害するものだから近寄りたくないのだろうが、自分たちにそういう目的はないので不快な思いをしても我慢すればいい。

と言うか女性に向かつてなかなか酷い噂である。

（この世のものとは思えない醜さだから、絶対に行くなと神様たちが言いふらしてるよ



憧憬<sup>アイズ</sup>に度々絡む様子があったために印象にも残りやすかったのだ。

あれこれ言われる容姿ではあったが、それでもまだアマゾネス……？ となるくらいには人間的だったはず。

しかし、今レフィーヤたちの前に立っている存在の肌の色は白だ。

白い肌と言うのは一般的には誉め言葉だが、今のフリユネには当てはまらない。

なにせ、今のフリユネの肌はしわくちやなのである。そして血が通っていないのではないかと言うほどに青白い。

不健康な肌の見え目と言うならば、今のフィルヴィスも同じだが、フリユネはもう蠟<sup>ロウ</sup>で造られたと言われても信じられるほどに不自然な白だ。

まるで毒性のある何かに長時間浸っていたかのようなふやけ具合である。

(おまけに何なんですかあのメイク……っ)

さらに追い打ちをかけるのはメイクだ。

もともと大きな目の持ち主だったが、更に強調されている。おかげで目玉が飛び出ているかのよう。そして口紅はドギツイ紫。肌が全く光を反射していない中、そこだけテカテカと輝いていることに凄まじい違和感を感じてしまった。

想像をはるかに超える厄災の降臨に二人の妖精は震えることしかできない。

多分、今のフィルヴィスの顔色を見られても、恐怖で真っ青になったようにしか見え

ないだろう。ぎゅつ、とレフィーヤを掴んでいるフィルヴィスは半分涙目だ。

「失礼な奴らだねえ、その長つたらしい耳は飾りかいっつ!？」

怯えるだけで質問に答えなない二人に凄むフリユネ。

それでも口を開けたら、漂う酸っぱい臭いが肺に入っただけでどうにかかなりそうで開けな  
い。

(噂って全部本当だったんですね……)

とんでもない噂があるところに神々が集まらなかつた理由が分かつた。

恐らく、娯楽好きの神々は一度ここに突撃して地獄を見たのだ。

性格最悪な彼らですら、命からがら戻つた後は歓楽街に行かないように眷属ことどもたちに警告するレベルの地獄を。

「……そうかい！ そうかい！ アタイが美しすぎて言葉も出ないかい！ ならもつと近くで見せてやるよっ!!」

一人で何やら納得したらしいフリユネが丸太のような手を伸ばす。

自分たちを掴んで至近距離で鑑賞させる気だと気づいた時、ついにフィルヴィスは決壊した。

「うわあああああああつ!？」

「へぶりやあつ!？」

技もへつたくれもないパンチだが、油断しきっていたフリユネはクリーンヒットを食らってしまふ。

凄まじい勢いで吹っ飛ぶ巨体は衝撃波を放ちつつ、建物に激突した。

「にににに逃げるぞ！ レフィーヤッツ!?!」

「は、はい〜っ!?!」

一刻も早くフリユネから逃れようと脇目もふらずに近くの娼館に飛び込む。

先ほどまでとは逆にフィルヴィスがレフィーヤの手を引く形になり、あれ？ ひよつとしてフィルヴィスさんアイズさんより速い？ と混乱しつつレフィーヤたちは大慌てで階段を駆け上った。

こんな騒ぎなのに全く人が出ないのはフリユネを怖がっているからだろうか。

普通に考えればあり得ない考えが信憑性を持ってしまふ。

「ウガアアアアアツツ!! アタイの美しい顔によくもおおおオオオオオツツ!?!」

下の階から聞こえてきた獣の咆哮じみた怨嗟の声に、身をすくませるレフィーヤは思わず足をもつれさせて倒れてしまふ。

そのまま手を繋いでいたフィルヴィスも巻き込んで、レフィーヤは襖を倒して部屋に転がり込んでしまふ。

「きゃあああ!?!」

「うわっ!?!」

「コンッ!?!」

部屋の中にいた娼婦は狐人ルナールの少女だった。

突然現れた二人に目を白黒させる少女は混乱した様子だったが、階段を駆け上がる超重量な音で全てを察したらしく、二人の手を引いた。

「この屏風の裏にお隠れ下さいっ」

言われるがまま屏風の裏に隠れるレフィーヤとフィルヴィスは息を潜める。

生きた心地がしないまま、緩慢な時間の流れに身を任せているとやがて足音が近づいた。

「春姫エー! ここにエルフの二人が……アアン?」

「す、スースー……むにやむにや」

「まさか寝たふりで押し通す気ですか!?!」

「むにやむにやなんて実際にいうわけないだろう!?!」

どうやら寝ていたのでエルフたちは見ていないと誤魔化す気らしい狐人ルナール。

あまりにも無理のある言い訳だが。

「つち、アタイが来るといつもサボって寝てるねえこいつは」

(通じちゃうんですか!?!)



(それ寝てるんじゃないかって、アレを見て気絶してるだけじゃないか?)

どうやら彼女はフリユネが来るたびに気絶しているらしく、あっさり騙される。

そのまま殺気立った様子で部屋を後にした。

「……も、もう大丈夫でございます」

「ありがとうございます」

「すまないっ、助かった!」

狐耳をびくびくと動かし、フリユネが去って行ったことを確認した狐人ルナールが寝たふりを止める。

半泣きで礼を告げる二人はほっと息をついた。

「いつも通りなら、この後フリユネ様はステイタス更新のためにイシユタル様がいるホームに行くので、その時間帯に外に出てくださいませ」

「分かりました」

「それまではこの部屋にいてくださいませ。【イシユタル・ファミリー】の皆さんたちがフリユネ様の命を受けて探しているかもしれないません」

何とかこの窮地を脱したと実感し、脱力する。

正直、この後の隠れ家を見つける気力がそがれてしまった。

最悪下水道で一晩過ごそうと考えるレフィーヤは、狐人ルナールの娼婦がが自分たちに視線を注

いでいることに気付く。

「……あ、申し訳ありません。こうして人が来るのはあの方以外では初めてで」

「あの方？」

「はい。こんな私を気にかけてくださるお優しい方で……」

（これはひよつとしなくとも……）

いつも予想外の方法で忍び込むのだという、その少年の話をする彼女の頬は淡く赤らんでいた。

年頃のそういった話に敏感なレフィーヤは甘い想いの香りにちよつと興味が湧く。

「娼館に金を払わずに忍び込んでいるのか？」

「はい。でも、私と話をしてくださるだけの紳士な方です」

「不法侵入していて紳士は無理があるんじゃないか？」

（フィルヴィスさん、そういうこと言ったらだめですっ）

少女の惚れ事に冷静なツツコミを入れるフィルヴィス。

先ほどまで壊れた人形のようなありさまだったというのに、凄まじい回復力である。

そんなに先ほどの厄災フリユネがショックだったのか。

「娼館にこもっていて世情に疎い私に、その方は色々と教えてくださるのです。最近では【剣姫】様という冒険者と【フレイヤ・ファミリア】が戦ったというお話を……」

「え？」

ルナール 狐人の言葉に戸惑うレフィーヤ。

イヴイルス 闇派閥ならばまだ分かる。

しかし、「フレイヤ・ファミリア」と戦ったとはどういうことか。

(例のジャガ丸くん騒動の続き？ でもあれはリヴェリア様によつて終止符が……)

一体何が起きたのか。

自分が少し離れている間に事態が大きく動いているらしいと動揺する。

(一度黄昏の館ホムムに戻る？ でもフィルヴィスさんを置いては……)

状況が分からず判断ができない。

フィルヴィスはそんなレフィーヤを何か言いたげに見つめる。

「よろしいのですか？」

「……何がだ」

「事情を知らない私がいらぬ世話だとは分かっていますが、道は自分で選べます」

「……」

「自分を棚に上げているようでお恥ずかしいですが……このまま流されて後悔しません

か？」

ルナール 狐人の言葉を受け止め、フィルヴィスは目を閉じる。

その頭に浮かぶのは不安か、恐怖か。

少しの間沈黙を続けたフィルヴィスはやがて顔を上げ、レフィーヤに近づいた。

「レフィーヤ」

「……え？ ど、どうしたんですか？」

「済まない、迷惑をかけた。私はこのままお前から離れる」

「フィ、フィルヴィスさん!？」

「お前を危険に巻き込みたくない。なにより、大切な仲間を優先すべきだ」

フィルヴィスの申し出にレフィーヤは一瞬何を言っているのか分からなかった。

少ししてその意味を理解したレフィーヤは……爆発した。

「何を言ってるんですか！ 今のフィルヴィスさんを放つてなんてっ」

「いいんだ。汚れたこの身でお前に縋る資格なんて私にはそもそもなかった」

「つだから、そうやって一人で納得しないで言ってるんです！」

フィルヴィスの提案は当然のことではあった。

フィルヴィスは怪人<sup>クリーチャー</sup>だ。深入りすることはレフィーヤに良いことではない。

ここできつぱりとフィルヴィスを忘れ、次は敵として対処する方が正しい。

「本当に資格なんてないんだ。私の噂は知っているだろう」

「……死妖精<sup>バンシー</sup>」

「そうだ、私とパーティーを組んだ者が次々と死んでいったのは当然だ。私が、殺した」  
「……っ!!」

「薄々気が付いていただろう? 私はもう、後戻りができない存在なんだよ」

ずっと可能性を考え、その度に頭の奥隅に押し込んでいたことを彼女は暴露した。

最悪の告白にレフィーヤの心臓が止まったかのような衝撃を受ける。

「だから、いいんだ」

そう告げるフィルヴィスの顔は無表情。

仮面を被ったように生氣を感じさせない。

「……っ」

だが、レフィーヤはもう知っている。

フィルヴィスは冷酷な殺人鬼になどなれない。

その心はもうボロボロなのだ、この数日で痛いほど理解してしまっている。

それをどうして見捨てろなどと言うのか。そんなことが出来ると本気で思っている

のかとレフィーヤは滅茶苦茶な怒りを覚えずにはいられなかった。

「いいわけがない!」

「レフィーヤ……」

「貴女に罪があることは分かりました。それは決して許されない罪でしょう……でも、

違うでしょう！　ここでフィルヴィスさんを突き放すのは絶対違う！」

「違わないさ、今更お前に救われる資格は……」

「資格資格言わないでくださいっ!!」

フィルヴィスの正論など耳に入らない。入れてやらない。

溢れ出す感情はレフィーヤの虚飾なき本音だ。

「あんな顔をされて、見なかったことなんてできない！」

ついに、口にした。

道理に合わない。罪人を救いたいという願いを。

「……」

「ハアツ、ハアツ……」

その勢いにフィルヴィスが困り果てた顔で沈黙する。

レフィーヤも一気にまくしたてたため、息を切らせていた。

気まずい沈黙が部屋を支配する中、ポンと二人の肩に手が置かれた。

「そこまでです。ここで一度止めましょう？」

「あ……」

「すまない、私もレフィーヤも熱くなり過ぎた」

狐人の娼婦は二人に優しく微笑みかけると、一人の少年の話 시작했다。

「これは聞いた話なのですが、お二人のように『助けたい』と『助けられたくない』でぶつかったお二方がいたそうです」

「……その方たちはどうなったんですか？」

「最終的には本音をぶつけ合い、無理矢理にでも助ける我儘を通したそうですよ」

「……」

「今はまだ、決められないかもしれませんが……賢くある必要はないと思います」

そうではない愚かな選択が道を切り開くときもある。

「少なくとも、縁は切ってはなりません。それは、辛いことです」

狐人<sup>ルナール</sup>の娼婦は最後に「本当に私に言えたことではありませんが」と呟いて言葉を締め

た。「でも、縁を切るなど言われても私は身を隠さなければ……」

「でしたら暫くはこの部屋で落ち合うのはいかがでしょうか？ そちらのレフイーヤ様はホームに戻らなければいけないようですし、ここを約束の場にしていただければ」

「いい、いいんですか？」

レフイーヤもフィルヴィスも戸惑いを隠せなかった。

はつきりと言ってレフイーヤたちだけが得をし、彼女には何のメリットもない話だ。

「はい。……最期に、善行を成しておきたかったのかも知れません」

「え？」

「いえ、大したことではありません」

袂で口元を隠す狐人<sup>ルナール</sup>。

彼女によって与えられた先延ばしの機会。

二人は少し考え、それに乗った。

「……本当はこうすべきではないのだろうか」

「……その結論は、いつかはつきり決めましょう」

その後、フィルヴィスは近くの下水道に身を隠し、レフィーヤはホームに戻ることを決めた。

狐人<sup>ルナール</sup>の案内で無事、娼館から抜け出せた二人はメインストリートの前で別れる。

「……」

フィルヴィスから言葉はなかった。

自分を律するように、レフィーヤに一瞥もくれずに暗くなり始めた道に行く。

「……絶対、助けますからね！」

レフィーヤの別れ際の言葉にも彼女は反応せず、歩みを止めることは無い。

だが、レフィーヤには夕日に照らされるその顔が、どこか泣いているように見えた。



## 深紅が見つめる先は

重なる銀の剣閃。

まだ太陽の光に照らされたばかりの空気は、少し肌にツンと突き刺すような冷たさをはらんだままだ。否が応でも意識が覚醒させられる。

「グッ!？」

そんな気温で良かった。

寝ぼけ眼のままだったら、きつとあつきり叩きのめされただろうから。  
やつぱりアイズさんは凄く強い人だ。

訓練が始まってからそこそこの時間が経つのに一向に慣れる気配はない。

「……」

掛け声も出さず、静かに剣を振るうアイズさん。

明らかに手を抜かれているのに、まるで相手にならない。

前に食人花ヴィオラスと戦っている時に風の付与魔法エンチャントを使っているとところを見たのを思い出す。

もし、目の前の憧憬が全力を出したらどうなってしまうのだろうか。

ヘタをしたら剣圧だけで真つ二つ……なんてことになるのかもしれない。

そんな馬鹿な考えにちよつと笑いそうになるが、次々と腕を襲う衝撃に顔は歪み、笑うのに失敗してしまふ。

今まであまり経験はなかったけど、守勢に回るのつてすごい疲れる。

終わりが見えないし、こうして命の危険にさらされるたびに精神をガリガリと削られていくみたいでおかしくなりそうだ。

(このままじゃまたやられる。攻めろ！)

教え子として一生懸命教えてくれる先生に無様は見せたくない。

焼き写しのように、為すすべなくやられることを繰り返しては訓練の意味がないのだから、失敗を恐れず果敢に挑むべきだ。

(命の危険が無い今こそ冒険の時だ！)

振り下ろされた一撃を受け流し、と言うには少々強引なやり方で自分から逸らす。

ヘステイアナイフ

神の刃の頑強さを信じ、彼女の細腕から出されているとは思えない剛力の向かう方向に無理やり干渉した。

肝が冷える挑戦だったが、どうにか受け流しきった対価は小さな隙。

この生み出したチャンスが無駄にしまいと、僕は紫紺の煌きを放った。

その斬撃の数は3。無理をしながら繰り返した攻撃にしては上々の数だ。

3連撃全てが当たるとは訳じゃなくても、一つくらいは……

そんな淡い期待をアイズさんはあっさり叩き落した。

全く動じずに対処される連撃。生み出したはずの隙は、その実予定調和だったという事なのか。

静かに僕を見据える金の瞳。

「うわあっ!?!」

そして始まったのは銀の嵐だ。

剣の速度は先ほどと変わらないはず、なのに全く受けきれない。

無理な攻撃体勢が僕の動きを奪っていた。

それを咎めるように対応しきれなくなり始めた攻撃が肌を掠めていく。

(こっとなつたら……っ!!)

弾き飛ばされ、勢いよく転がった僕は起きる動作と同時に、ブーツの側面に付けられた小さなレバーを引いた。

足を強く踏み込み、靴に仕込まれた装置を起動する。

カチリ、と足の裏に何かの小さな衝撃が走ったのを自覚すると同時に世界がブレた。

突然の加速は、アイズさんの剣を置き去りにし、僕と彼女の距離を急激に縮めさせた。

これがヴェルフの新装備【兎弾足】。

白い具足は僕に会わせた特注品だけあって、軽く、硬く、動きやすい。

そのままでも十分に有用な装備だが、ヴェルフらしくこの装備にも面白い機能が取り付けられている。

それは発光瓶フラッシュボトルを利用した衝撃波だ。

『お前が教えてくれたこの発光瓶フラッシュボトルだが、調べてみると発動する瞬間だけ小さな火花が散っているんだ。つまり、こいつは簡易的な発火装置にもなるってことだな。もちろんこれだけじゃとても火を付けたりすることは出来ないが、それを解決するのがこいつだ。このアイテムは火炎石つってな、フレイムロックのドロップアイテムなんだが、発火剤になるほど可燃性が高い。こいつをブーツの底に少量だけ仕込んで爆発を起こすわけだな。こいつを起動させるには強い衝撃が必要なわけだが、強く踏み込んだだけで発動してたらおちおち走ることもできないだろ？ それを解決するためにマジックアイテムで普段は装置を止めておいて……』

物凄いペラペラと話していたが、要は靴の底で爆発を起こす機能があるらしい。安全装置を解除して、強く踏み込むと発動するそれは、ステイタス以上の敏捷を可能とする。

レベル2のステイタス以上の速さで接近する僕の動きは、完全に予想外のはず。

今度こそ一本を……そう考える僕の視界からアイスさんの姿が掻き消える、

一体どこへ、と思う前に喉に走る痛み。

「うぐえつつ!？」

喉に何かがめり込むと、視界の風景がぐるんと回った。

石造りの欄干と床が消え、綺麗な青空が一面に広がる。

そして首筋に走る鈍い痛み。

グラグラと揺れる思考は、辛うじて自分が床に倒れていることだけを理解した。

「ぐっ、ゴホッ!、ゴホッ!……」

ムセ込む喉が空気を欲する中、視界に揺らめく金髪が見えた。

吸い込まれるような青い空に、太陽の光を反射する金髪は良く映えるのだな、なんて場違いな感想が浮かんでしまう。

「今のは良くないよ」

何が悪かったのでしょうか、と聞きたいがまだ喉に痛みは走り続けている。

それを察してくれたのか、アイズさんは僕の隣に座り込んで教えてくれた。

「装備で起死回生するのはいいけど、さっきの君は何も考えずに使っていた」  
恥ずかしいがその通りだ。

アイズさんの意表をついて、状況を何とかしようと思っただけでなかった。

「んつと……アイテムを使うと人はそのことばかりに注意が向くから、それを使ったらどうなるかとか、そういった剣とかではできていた予想がやれなくなりがち」

詰まる所、技と駆け引きの欠落だ。

剣技などとは違い、外付けの力だからか、使う際は単純化しがちだとアイズさんは指摘する。

耳が痛かった。兎弾足びよん弾フーツはひみつ道具じゃないけど、これはひみつ道具にも言えることだ。

ひみつ道具を使いこなすというのは、場当たり的に対処してはダメなのかもしれない。それを使ったらどうなるか、それを考えられるようにならなくては。

「でも、私の意表をつこうとしたのはいい発想。だから、後はアイテムを使うことだけに意識が向かないようにすればいい」

これも集中力の配分と言ってもいいのかもしれない。

アイテムをどう使うか、それをあらかじめ決めておけば、一瞬で考えなきやいけない情報はかなり減る。

だから、普段から考え続けることが大切なのだろう。

こう考えると、冒険者って意外と頭を使う仕事なのかも。

「……今日はここまでだね。また、明日」

「はい。ありがとうございました」

ファミリアの幹部としてやるのが色々とおもしろいアイズさんとは、ここで別れ



そうになると、どこが良いのだろうかと迷った僕はある場所を思い出した。

それは旧「ヘステイア・ファミリア」のホームである。

ポツポツ地下室によって大きくなった地下室は訓練するには困らない。

鍵を閉めれば安全性もあるし、良いアイディアだと思う。

ヘステイアナイフと同じ重さの木でできたナイフを使う。

相手は紙工作でつくったモンスター……らしきもの。

らしきものと言うのは僕が知っているダンジョン製のモンスターとは所々の特徴が異なるからだ。

ドラえもんさんの世界だとモンスターは架空の生き物らしいし、これはその世界の人たちがイメージで作ったモンスターの姿なのかも。

「ゴブゴブウツ！」

（なんか気が抜けるなあ……）

鳴き声もどこか可愛らしい。

ちよつとやりにくいけど、これも訓練。気を入れないと。

「集中力の分配……集中力の……」

ゴブリン（切り絵）の動きを注視しようとして、いつも通り集中しすぎていると気づいて自分を戒める。



集中しすぎないという感覚は何となくつかめてきたが、まだ自然にそれを熟じなすることは難しい。

(よしっ、もう一回……)

普段の足を動かした戦い方を止めて、一点に留まるカウンター主体のやり方に切り替えた。

アイズさんとの訓練で分かったことだけど、返しカウンター技と言うのは反射じゃできない。

とんでもない天才とかならできるのかもしれないけど、基本的にこの技を使うには相手の動きを予測する必要がある。受け身になっている以上、失敗すれば無防備に攻撃を食らってしまうのだから。

それに相手の攻撃を食らわない様にしつつ、相手の隙を伺うというのは難しいことだ。

僕は集中の配分が未だに下手くそだから、どちらかに注力してしまう。

元来の臆病な性格もあって、回避ばかりになって攻撃の手が止まっている、とは何度も指摘を受けたことだった。

だからこそ、足を動かさなくていいこの戦い方は、その分の集中力を相手の観察に使える。

集中力の配分という訓練の目的とは矛盾するようだが、そもそも僕は相手の観察が上

手くできてないと思う。アイズさんのフェイントにあっさり引つかかるのがその証拠だと言っている。

まずは相手の観察と行動の予測の精度を上げない事には配分以前の問題だ。

「ゴブゴブウー！」

「つとー！」

ゴブリン（切り絵）の動きを注視した。

目線が僕の胸部部に向いている。紙一重で兎鎧を掠めた打撃を回避。

棍棒（切り絵）が僅かに浮いた。横殴りの一撃に木のナイフを添わせて受け流す。

上体が沈み始めた。即座に膝蹴りを食らわせて攻勢を未然に防いだ。

観察・予測・観察・予測・観察・予測。

面白いほどに噛み合うカウンターは散々憧憬に見せられたものの再現だ。

なるほどこれは凄い。アイズさんがどうして紙一重の攻防を大切にしているのかかった。これは楽だ。

勿論、ただ攻撃から身を守るなら、大きく躲したほうが確実だし、あれこれ駆け引きも要らない。

だが相手を倒さなければならぬ時に、無駄な動きは多くの物を浪費させる、それは体力だったり、距離だったり、或いは相手の隙だったり。

命をかけた戦いにおいて、その重要性は僕でも分かる。紙一重の先には多くのリターンがある。

華麗に見えた彼女の剣技はその実、効率化の化身だったらしい。

(相手はレベル1相当とは言え、もう攻撃は見切れている)  
なら次のステップだ。

観察・予測、この後にもう一動作を付け加える。

それが達成出来たらまたもう一動作、更にそれが達成できたら……

それを繰り返せば、アイズさんの教えようとしている集中力の配分をもののできるはずだ。

(まずは足を動かそう)

とは言ってもいきなりいつも通りの足さばきは難しい。

まずは単調な動きから始めよう。幸い、この状況にぴったりなのが兎弾足だ。びよん弾フーッ

安全装置を解除し、思い切り踏み込む。

その瞬間、僕の体は突風を纏って直進した。

「ゴブゴブウ!!」

「……………え?」

が、ここで予想外の事態が起こる。

何とゴ布林（切り絵）が風圧で吹き飛んでしまったのだ。

まさかの出来事に思考が停止する。この高速移動中に。

あつという間にバランスを崩した僕は、自らの迂闊さを呪いつつ、衝撃に備えて歯を食いしぼる。だが、予想していた地面との激突は起きず、僕の体は緑の触手に包まれていた。

「あつ……：ヴィオラス、ありがとう」

気にしないで、と言うように僕から離れた触手を揺らすヴィオラスは、先日この地下室に來たばかりだ。

「ガネーシャ・ファミリア」の協力の下、無事にこの地下室に送り届けられたヴィオラスは今までの窮屈な檻から一転して広いこの部屋でのびのびと暮らしている。

今も僕の自主訓練を（目はないけど）眺めつつ、ガネーシャ様が用意してくれた大きなボールで遊んでいた。こうやって見ていると、見た目には全然合わないけど幼児みただ。

「あ、ゴ布林（切り絵）も取ってくれたんだ」

もう片方の触手で捕まっているゴ布林（切り絵）が必死に逃げ出そうとする中、ヴィオラスはゆらゆらと揺らして悪戯している。

片方は偽物とは言え、人類の天敵同士がじゃれついているのを微笑ましく見ている僕

はちよつとおかしいのかもしれない。

(でも、予想外の弱点だったな……風圧に弱いのか……)

紙なのだから当然かもしれないが、これでは訓練にならない。

どんなに厳しい状況でも、風が吹けば飛んで行くモンスターでは兎弾足の鴨だ。

簡単に倒せるどころか、うっかり倒さないように気を遣うレベルである。

「ここにいる他のモンスターの切り絵も同じだろうし、また一人稽古かな」

他のアイテムや装備なら問題なく練習できるだろうが、兎弾足の練習をしたい今は

意味がない。

仕方なくアイズさんが目の前にいるとイメージして……

さわさわ。

「ん？ ヴィオラス？」

トントン

「えつと、もしかして練習に付き合ってくれるの？」

コクコク

「あ、ありがとう……？」

なんでコミュニケーションが成立してしまったのか自分でも分からないが、ヴィオラスの申し出に有難く乗らせてもらう。

ヴィオラスは第一級冒険者ともそこそこ渡り合えるくらいには強い。

訓練の相手に不足はない。むしろ僕が不足している気がする。

じゃあ行くよー、とばかりに挙げられた触手が振り下ろされる。

物凄い速さで。

「うわわわわっ!?!」

間一髪身を投げて躲すが、触手が床に着弾した衝撃で吹き飛ばされる。

え? 何今の超速い。

ビターンビターンビターンと何度も叩きつけられる触手が視界を埋め尽くす。

ヴィオラスは未だにゴ布林（切り絵）を片方の触手で持ったまま。つまり、今視界

を埋め尽くしているように見える触手は一本だけらしい。怖い。

攻撃の隙を伺うどころじゃなくなった。

ベートさんたちと戦っている時と比べたら遅いから加減はしているんだろうけど、レ

ベル2には十二分に速い。そして強い。

僕が何度も気絶させられているアイズさんの鞆付き剣戟より明らかにヤバい攻撃。

僕はそれを死に物狂いで回避し続けた。

「ゴ、ゴブゴブ……?」

「これヤバくないか……?」と言わんばかりに引いているゴ布林（切り絵）をよそに、

更にスピードアップするヴィオラス。なんかもう振動が地震みたいになってきてる。

多分、ヴィオラスの中ではこのくらいなら華麗に回避するのが僕なのだろう。期待が重い。

(不味い不味い不味い全然見切れない!?)

正直、気が付いたら触手が頭上に迫って来てるようにしか見えない僕は、焦る思考が空回りしないように必死に制御していた。

手元がブレてしか見えないせいで攻撃の位置が分かりにくい。

このままだとクリーンヒットは時間の問題だ。

(一旦下がるしかない!)

大きく後退する。

紙一重の回避にこだわってる場合じゃないと苦渋の決断。

それが活路を開く。

左斜めから迫る触手。

それを僕は身を沈めて、髪を掠めさせながら回避した。

(え、見えた?)

突然の変化に動揺する。

何故いきなり対応できたのか。それは距離だ。





それでも少女は油断しなかった。少年の瞳に何かを狙う意思を感じたから。「ぐっ、あああああああつ!!」

懸命に攻撃を切り払い、どうにか生み出した剣舞の空白に三連撃を叩き込む少年。だが、これも焼き直し。

予定調和のように受け流されたことで、生じる隙。

それを咎めるように少女は首筋に鋭い一撃を放つ。

(……来た)

それを待つていたかのように引き締められた眼光に、少女もここから勝負どころと踏んだ。

どんな策が来ようと先に首筋に攻撃が届けば問題ない。

首に何らかの防具が仕込まれている可能性も考慮して、少々強めの一撃になる。

【耐久】も高い少年ならば大丈夫だろうと、少女は策ごと食い破らんと勝負を決める。視線と視線が交錯し、鞘付きの剣が少年の首に減り込もうとした時。

少年の足が爆発した。

(昨日の装備)

それはもう知っている。

恐らくは少女の攻撃へのカウンターなのだろうが、一度見せた手札は通じない。

観察と分析による相手の能力への対抗手段の構築は、最前線の冒険者の必須技能。  
あのブーツは少女への切り札には成り得ない。

剣の軌道を僅かにずらし、少年と少女の直線上に置く。

それだけで少年は自分から剣に突っ込むことになる。

すなわち、前回の焼き直しだ。

(どうする?)

このまま同じ失敗を繰り返すのか、それともその先へ行くのか。

注意深く少年を観察する。

爆発によって弾き飛ばされた少年は超加速による移動を行った。

少女の読みとは違う後方への。

(逃げた?)

少女の仕掛けた罠に気づき、咄嗟に方向を変えたのか。

そんな予想はすぐに破棄された。

数M<sup>メートル</sup>下がった少年の表情に動揺はない。

つまり、これは作戦通り。

その視線は少女の全体像を確認している。

剣を振り抜き、右側がガラ空きになっているその隙を。

「!」

「うわあああああつ!!」

その時、少年の右腕の装備が延長していることに気が付く。

その素材は加工されているがフロググ・シューターのものだと看破する少女は少年の狙いに気が付き、目を見開いた。

ビインと切れそうなほどに引き締められたロープは、反動で外側に向けられた爆発的ベクトルを内側に引き込んだ。

まるで吸い寄せられるようにロープに引かれる少年は、少女の隙だらけの右側の懐に潜り込み、その深紅ルベライトの眼光を瞬かせる。

そして放たれる必殺の一撃。

勝利の確信を持つて放たれる一撃は、驚異的な速度で戻ってきた剣によってあっさり弾かれた。

そしてそのまま振り下ろされる鞘付きの剣は、鈍い衝撃音と共に少年の意識を刈り取る。

(……あ、また、やっちゃった)

予想を超えた動きを見せた少年に思わず出してしまった力量以上の攻撃。

もう何度目とも分からない失敗に少女はため息をつく。

「でも、すごかった」

まさか数日でここまでモノにするととは思わなかった。

自分としてはこの訓練中に指先だけでも掛ければ上出来のつもりだったのだが、本当にこの少年の成長速度には驚かされる。

(ちゃんと目標が達成出来たらご褒美を上げること)

少年を指導するにあたって少女も教育のイロハを学び始めている。

今こそ予習を活かす時、と気合を入れ直す。

脳裏に浮かぶ参考書の図解が人參を啜える兎であることを突っ込んでくれる人はいなかった。

ついでにその本があった近くの本は、何故かペット関係の本だらけだったことも。

無論、直前になってご褒美どうしようと思むなどと言うこともない。

アイズは先生だからそこら辺はちゃんと考えてきておいたのだ。エッヘン。

具体的には母親リヴェリアに聞いてきた。

『高価なものだと委縮されてしまうだろう。膝枕でもすればいい。お前ならばそれで十分だ』

なぜ膝枕がご褒美に良いのかはよく分からなかったが、リヴェリアの言うことだから間違いはない。

サツソク膝枕を開始する。

ぐるぐると目を回す少年をそつと仰向けにし、自分の膝に頭を乗せた。

(膝枕つてこれでいいのかな……)

アモーレの広場で男女が時々やっているのを参考にしてみたが、何分これがファースト膝枕。

ちゃんと気持ち良くできていくかは分からない。

固いところだと痛いかもしれないから、太腿の内側に少年の頭が当たるように調整しつつ、あの男女がやっているように少年の髪をなでる。

やっぱり見た目通りモフモフだ。

(あ、兎鎧に新しい傷がついている)

もしかしたら自己鍛錬の跡だろうか、なんども太くて大きなものに叩きつけられた形跡が残っていた。

きつとあの動きを会得するために、少女がいない所でも頑張っていたのだ。

自分が教えたことを、真面目に反復練習していたと思うとどうもくすぐったい気持ちになる。

彼が何を想い力を求めるのかは分からない。

だが、その打算のない真つ白な心は見ていてとても気持ちがいい。

復讐に憑りつかれた心も、今だけは洗われていくようだ。

少年にはきつと目標になっている人物がいる。

恥ずかしいのか少女には言ってくれないが、言動の節々からそれが伝わった。

どんな人だろうと少女はぼんやりと晴天に見守られながら空想する。

きつとこの世で一番幸福な人に違いない。

あんなに真つ直ぐ見てもらえるなんてこと滅多にないだろうから。

その顔も知らない誰かのことが少女はちよつぴり羨ましかった。

## 二つの勢力の動向

「ガネーシャ・ファミリア」が主催した怪物祭モンスターファイリアで起きたモンスターの大量発生。都市の憲兵たる群衆の主の憲兵による行事で、闇派閥イヴイルスが大暴れしたこの事件によつてガネーシャの威信が揺らぐことは無かつた。

それは犠牲者0と言う最大の成果や、これまでの「ガネーシャ・ファミリア」の都市への貢献によるものではあるが、それは「ガネーシャ・ファミリア」にとつてこの事件を水に流してよい免罪符にはなり得ない。

あの事件を契機に明らかにオラリオの治安は悪化した。

暗黒期を数多の仲間と盟友の犠牲によつて、ようやく手に入れた平和を乱す者を許すわけにはいかないのだ。

主神であるガネーシャの勅命の下、闇派閥イヴイルスへの対応と本事件への調査は「ガネーシャ・ファミリア」の総力をもつて行われている。

「やはりここは闇派閥イヴイルスとは関係が無いか」

現在、シャクティが来ていたのは闘技場であつた。

「ガネーシャ・ファミリア」によつて管理されていたモンスターが放出されたあの一件

は、間違いなく都市の憲兵の汚点だ。

その再発防止は必須である。

だがこの闘技場のモンスターが放たれた件に関しては謎が多い。

まず、この場所を襲った理由。

ダンジョン産の強力なモンスターを暴れさせることが目的かと当初は思われていたが、極彩色のモンスターをあれほど大量に保有しておいて、新たに上層レベルのモンスターを欲するのは不自然だ。

次は警備を無力化した方法。

警備に当たっていた眷属には外傷がなかった。そもそも、モンスターを管理するこの場所にいた団員は並の眷属に後れを取ることは無い選りすぐりだ。

それが他の場所にいた団員が気が付かないほどに素早く撃退されるはずがない。

ならば薬物かとも疑ったが、「耐異常」のアビリティを簡単に突破するには下層以上のドロップアイテムが必要なはず。そんなものを無差別に使用できるほど集められるだろうか。

更に最も不可解なのはこの際のモンスターたちの動きである。

モンスターは人類の天敵。人を襲う事は本能に刷り込まれた存在理由レゾンデートルとすら言える

だろう。



そんな存在が暴れたにしては被害が少なすぎる。

如何に【劍姫】を始めたとした第一級冒険者の活躍があつたとしても、その極力被害を出さないかのような動きには不可解な点が見えた。

通常のモンスターを逸脱した存在についてはシヤクテイも知つてはいるが、理性を持つていたとは思えない。

(そうなる……モンスターを操るマジックアイテムが使われていたのか?)

何者かの意思通りに動くモンスターと云えば、極彩色のモンスターが思い浮かべられる。

だが、極彩色のモンスターと怪物祭の一件は別勢力による犯行のはず。同系統のアイテムを都合よく持つているのは妙だ。

(駄目だな。なにか、見落としている。ピースがある)

シヤクテイは一度思考を切り替えた。

モンスターフィリア

怪物祭での失敗は苦い教訓だ。

しかし、それに囚われすぎては意味がない。

「団長」

「モンサータか、どうした」

「いやモダーカですっつ!？」

「……？」

いつもモンタークは騒がしいが有能な団員だ。

恐らく、頼んでいた事で何かが分かったのだろう。

「あの娼館はどうだった？」

「まだ尻尾は見せませんが……クサイですね。あんな人がいなくなっている「イシユタル・ファミア」のエリアで妙にあの辺りは人通りが多い。おまけに如何にも寂れた人気がない場所です、なんて面しておいて警備の数が多すぎる」

先日、勝手に「イシユタル・ファミア」の娼館に忍び込んだベル・クラネルを追った際、ベル・クラネルが入っていた娼館の妙に多い警備と人通りに気づいたシャクティは、モクナースにその娼館を監視させたのだ。

「あの糞蛙が途中で来たので撤退しましたが、団長の睨み通り何かありますね」

「【イシユタル・ファミア】はあの暗黒期を共に乗り越えた派閥。考えたくはないが……」

元々【イシユタル・ファミア】に闇派閥イツイルスとのつながりは指摘されていたが、これまでは神イシユタルの手腕によって誤魔化されてきた。

だが火のない所に煙は立たぬと言う。

怪しいところが無いとは言いい切れない。

「引き続き監視し続ける」

「いいんですか？ 下手に突いてギルドの二の舞になりかねませんよ」

「神イシユタルの危険性を考えれば必要経費だ」

「そこまで言つてふと思ひ出す。」

もう一人違う意味で気を付けなければいけない人物がいたことを。

「そう言えば監視中にベル・クラネルは現れなかつたか？」

「はい。ここ数日は【剣姫】との訓練ばかりですね」

「そうか、まさかあの【剣姫】が気に入るとはな……」

事あるごとに、かつて共に正義を志した戦友と比べられることが多かつた少女を思い浮かべた。

危うい所も多い少女だったが、人は成長しているという事なのだろうか。

「【剣姫】と言えば、【ロキ・ファミリア】も闇派閥イヴイルスのことを追っているそうなのですが……

共同はしないのですか？」

「ああ、我々が協力するのが一番いいのだろうが、そうもいかん」

都市の存亡をかけた戦いになるかもしれないのに何をと思われるかもしれないが、それが政治と言うモノだ。

【ロキ・ファミリア】は独断専行が多い。

暗黒期にその行動に散々助けられたわけだが、それでチャラにしているわけではない。

シヤクテイが飲み込んでも、他の団員は確実に不満を持ち、敵を前に足の引つ張り合いいになりかねないのだ。

無論、シヤクテイもフィンも統率力のある団長であるがゆえに、それらの問題を解決することも頭が痛くなるだろうが可能である。

だがそうなると「フレイヤ・ファミリア」の動向が怖い。

こちらにその気はなくとも、「フレイヤ・ファミリア」への牽制ともとられかねない。  
(暗黒期にまがりなりとも共闘できたのは運がよかつたのだな)

あの頃も仲良しこよしとはいかなくなつたが足並みを揃えられた。

だが、正義側が強くなつたことで協同する必要性が薄くなり、今はこうなつてしまつている。

「だが、わざわざ反発しあうこともあるまい。情報のやり取りくらいはしていいだろう」  
(どつちから提案するかでまたグダグダになるんですね分かります)

「途中から声が出ているぞ」

どつちが主導権を握るかにあまり頓着していないモウダーマはウンザリしているよ  
うだが、納得してもらえない。



「楽しんでるねガレス」

「そりやあ見ていて飽きないからのう。こちらに被害が来ない限りは」

ガレスはベル・クラネルの被害を受けてはいない。

愛の奴隷となったベートを嚇けられたことは被害と言えば被害かもしれないが、あれはベートのダメージが圧倒的過ぎた。

「効果は分からないな……過剰反応しているのはリヴェリア以外だと水や漬け石とかだね」

「まるで意味が分からんな」

「……随分と楽しそうだな」

呑気に今回のひみつ道具を考察するガレスとフィン。

それに対し、リヴェリアは怒りを滲ませながら睨みつけた。

「おっとリヴェリアはお怒りのようだからここまでにしよう」

「そうじやな母親を怒らせると後が怖いからのう」

（後で書類仕事投げるか）

親指の危機感からガレスに全部擦り付けることを心の奥で決めつつ、フィンは集まった二人と先程までの寸劇を肴に昼間から酒を仰いでいる主神を見渡した。

「さて、今回はそのベル・クラネル……正確には彼を監視している「フレイヤ・ファミリ

ア」について話したい」

「先日は遂に襲撃まであつたそうだな」

「アイズ一人で撃退できたのを見るに本気ではなかつたようだが……神フレイヤへの抗議はどうなった」

「『ごめんなさいね？ 少しウチの眷属が少しヤンチャしちゃって』でのらりくらりや」

手ぶりでその時のフレイヤの所作を再現しているらしきロキ。

それを見たりヴェリアは目を細めた。

「それだけか？」

「……」

「こちらの幹部が襲われて、それだけか？」

のらりくらりで引き下がる。

自分のファミリアを溺愛する余りにもロキらしくない対応。

「……それだけや、そういう契約になつとつた」

「先日、神フレイヤを揺さぶりに行つて返り討ちにあつた時のものか」

「ああ……ん？ 何で知つとるん!？」

自分の眷属にカッコ悪いところを見せなくなかつた自分の隠し事が、あつさり見抜かれたことに驚愕するロキ。

それを苦笑するフィン。

「ンー。まあ、そうなるだろうとは思ってたし」

「ウグウ!？」

「それでも落としどころはしっかり見極めると思ったんだがのう」

「ガツハア!？」

「まさかアイズが襲撃されてだんまりを決め込むような内容とは……見下げ果てたぞロキ」

「グエエエエ!？」

愛する眷属こどもたちの容赦ない口撃に叩きのめされる主神。

血反吐を吐きながら地に沈んだロキはそのまま痙攣し始めた。

「せやかてええええく分かるわけないやんく。あの色ボケの色ボケに首突っ込むなちゆう契約がこうなるなんて想像つかんってええええ!？」

フレイヤの次の標的がベルだったことが運の尽き。

何故かその少年の師匠にアイズがなり、フレイヤの嫉妬爆発などと言う未来がロキに予想できるはずもなく、色ボケの騒動に何て関わってたまるかいと言う判断は完全に裏目に出たのだ。

「しかし神フレイヤの寵愛を受けるとは、あの小僧もこの先大変じゃのう」



「神フレイヤは魂を見る眼を持つているという。ベル・クラネルがあいつたスキルに目覚めていることに早くから見抜いていたのか？」

「……いや、そこまで便利なもんじゃ無い筈や。フレイヤが少年に目を付けたのは本気で偶々やろうなあ……どないせいっちゅうねん」

ロキはついに頭を抱えて丸まってしまふ。

色々言つたとは言え、流石にこれを予想するとは言つたのは無茶だ。

「つーか、少年に対する対応が今までの色ボケと違いすぎるやろ……なんであつちのほうで近づいてんねん」

「ロキ?」

「……あー、なんでもないなんでもない」

「マジか? マジでマジなんか?」と未だにブツブツと呟いているロキは使い物にならないと、フィンはガレスに視線を向けた。

「それで、聞きたいんだが。オツタルが中層にこもっているというのは本当かい?」

「ああ、ラウルやアキが話していた。マジックアイテムを買い込んで数日泊まり込んでいるらしい」

オツタルは都市最強のレベル7。

中層ではステイタスはピクリとも変動しないだろう。

そんな階層に泊まり込むのは不可解だ。

あの愚直に力を求める男にそんな真似をさせられるのは……

「神フレイヤの意思か」

「だが【おうじや猛者】は女神フレイヤの意思であつても謀は好まない性格だ。そう大きな問題にはならないのではないか……というのが私の見解だが、間違つてゐるか？」

リヴェリアの発言は正しい。

オツタルは正に武人と評するのが相応しい性格だ。

冷酷なように見えて、筋はしつかりと通す男。それは正しい。正しいが。

（オツタルは謀を好まない性格……だが、謀が出来ないわけではない）

フィンからしてみれば意味のないようなことに、オツタルは至上の価値を見出す男。

自分たちの視点では気付けないことにオツタルが気付く、彼の価値観で謀をするだけの価値があると判断されれば、女神の神意に肅々と従うのもあり得る話だ。

「オツタルも神フレイヤのベル・クラネルへの騒動に関わつてゐる、そう想定しておいて損はないさ。オツタルがマジックアイテムを買ひ込んだというのが個人的に気になつていてね。彼がアイテムに頼る姿は想像できない」

「だが、これが【しつれん試練】だとすれば……そう言うことか」

「それに中層……これでベル・クラネルと言えば……」

「ミノタウロスだな。確かにうってつけの試練だ」

オツタルの思惑を完全に読み切ったフィンが続けて言った。

「神フレイヤと契約したのはロキ個神こじん。そうだね?」

「ああ、ウチとフレイヤは主神としてではなく、個神こじん的な内容にしておいた。ウチ自身は動けんが、フィンたちは違う」

ファミリアとして動けるならばオツタルの行動を邪魔することに問題はない。

ベル・クラネルを女神の気まぐれで殺されるわけにはいかないのだ。

（今の所盤上にいるのは、僕たち「ロキ・ファミリア」と「ガネーシャ・ファミリア」、それに「フレイヤ・ファミリア」と……イヅイルス闇派閥、それとエニユオ）

何とも複雑になってしまったが、これが都市で活発に動く勢力たち。

それぞれに何らかの形で影響を与えているベル・クラネルが鍵だというのは全勢力の共通認識。

「僕たちは「フレイヤ・ファミリア」への牽制を行っていいこう。横から突かれてイヅイルスたちへの対処にケチが付いたら笑えないからね」

それぞれの勢力が動き出す中、近いうちに何かが起きるとフィンは予感する。

中心にいるのは恐らく……

## 嵐の予感

意識が覚醒する。

後頭部に感じる暖かきで、また気絶してしまつたらしいと理解した。

同時にカーツ、と血が頭に上る感覚。

ぐるぐると回る視界。羞恥が心臓を馬鹿みたいに叩く。

その衝動のままに、僕はその場を飛びのいた。

「どうわああああ!」

「あっ……」

穏やかな晴天に似合わない不細工な悲鳴。

遠くに見える鳥たちの羽ばたきが僕を嘲笑しているようだ。

しかしそんなことはどうでもいい。

まただ。また膝枕。

何故こうなっているのだろうか。

ここまでの交流でちよつと天然が入っているらしいと分かつてきた憧れの人は、いつたいどういった経緯でこの解に至つたのだろうか。



鼓動が聞こえてないかしら、なんて馬鹿げた考えが浮かぶ。

「(い)い(い)い(い)御免なさい! また気絶しちゃってっ!」

このまま一人で考えているとますますドツボに嵌る。

慌てて口を開いても出てくるのは相変わらずみつともない言葉だ。

幻滅されないだろうか、と未だ収まらない心音に邪魔されつつも、アイズさんの言葉を待つ。

「ううん、私こそ御免なさい。また失敗しちゃった」

それに対し返された言葉に特変はない。

音量も、音程もいつも通り。リラックスした状態だ。

ひよつとして欠片も意識されてないんだろうかと、なけなしの男の矜持プライドが傷つく。

一人でドキドキしているかと思うとなんだか悔しい。

「えつとね、君は凄く上手くなっているから自信を持つていい。もう技と駆け引きは身につき始めているし、集中力が変に高まりすぎることもなくなった。もう、同じレベル帯でも恩恵に振り回されている人たちからは間違ひなく一步先を行ける」

そう言つてアイズさんは僕に鞘付きの剣を突き出した。

予備動作なし、何の前兆も感じさせない一撃。

それを僕は首を少し傾けるといふ最小限の動きで回避する。

「うん。ちゃんと二撃目にも警戒を払っている」

続く膝蹴りを全力で叩き落した。

恐らく軽く小突く程度の感覚の攻撃だったのだろうが、今のベルには十分すぎるほどに高威力だ。

こちらは両腕で叩いたというのに、ジンジンと腕が疼く。

ここから次の攻撃がくればもう持ちこたえられない。

だが、二撃防いだ。

初日はまんまと引つかかった奇襲も、今ではしつかりと対応できている。

アイズさんの教導が身になった……とは言い過ぎでも、教わったことの欠片程度は実践できていると信じたい。

「なら、次の段階」

「次、ですか……」

「そう、集中力の分配は出来るようになった。でもダンジョンではそれをいつでも、どんな状況でも行えなきや意味がない」

集中力の分配は内的な技術だ。

心構えと言うモノは異常事態イレギュラーが起きた途端、簡単に崩れてしまうものだという。

「限界まで心が追い詰められて、パニックになるといつもだと考えられない失敗をする

ことがある。休憩中レストにあたりの壁に傷をつけ忘れたり、接近するモンスターの気配を察知し損ねて、敵に有利な場所で戦わされたり」

上級冒険者ですら、一度心が揺らぐと脆いもの。

故に歴史の長いファミリアほど有事の冒険者のその場での判断を信用しない。

心が追い込まれれば弱くなる。それを理解するからこそ、臨機応変な対応などさせないのだ。

「ロキ・ファミリア」だと、こういう時はこう動くつて言うマニュアル……決まり事みたいのを決めているよ。君に細かいことまでは教えられないけど」

当然だ。

ダンジョンでどう動くべきかと言うマニュアルとは、詰まる所ずっとダンジョンに潜り続けてきた者たちの血と汗の結晶。

それをただで横から頂こうなど身勝手すぎる話である。

なんなら戦闘技術だけでも結構ヤバイ。

「動揺してても得た技術を十全に使うための訓練に付き合うだけなら問題ない、はず」  
「なるほど……よろしくお願……」

「でも、なにをすればいいんだろう……？」

「え」



「ずっとホームで考えてて……でも、なにも思いつかなくて……」  
ずううんつと肩を落とすアイズさん。

なんかどこかで見た光景だ。

確かに動揺してても集中力の分配を行えるようになるって、重要性は分かるけど、どうやって身に付けるものなのだろうか。

「……」

完全に沈黙してしまったアイズさんだが、よく見ると汗がツツ、と流れていく。  
気まずい。完全に向こうは何言えばいいか分からなくなってる。

多分、思いつかなかったから後回しにしているうちに僕に話すタイミングが来ちゃったんだ。

(こ、こんな時こそひみつ道具を……っ)

困った時にはひみつ道具である。

幸い、それらしいものは確認済みだ。

「そ、そのつ、【スパルタ式苦手克服錠】を使って見ませんか!?!」

「……えつと、今日のひみつ道具、だよね……?」

「はい。多分、アイズさんの言っていた訓練に役立ちます」

例のごとくゴブリンで試したところ、苦手意識を増大させて凄く怖がらせると言うモ

ノらしい。

何故か僕を見て一番怯えていたけど、ひよつとしてもう僕はゴ布林たちで実験しまくっている人物としてゴ布林たちの間で有名になったのだろうか。

「すばるた……ロキたちはリヴェリアがレフィーヤにさせてる勉強を見てそう言った。凄い厳しいことだと思っけど」

「凄い厳しい方法で苦手を乗り越えさせる薬という事でしょうか？」

そうならばこれまでの中では分かりやすい部類だ。

問題はどの程度厳しいかだ。

はつきり言つてゴ布林たちの怯えようは異常だった。

まるで「おうじや猛者」と対峙してしまった、あの日の不運なゴ布林のような顔に全員なつていた位に恐ろしく感じていたらしいが。

「それじゃあ……飲んでみます」

握り拳のマークが付いた箱から錠剤を取り出す。

それを一思いに飲み干そうとした時、アイズさんから待ったがかかった。

「まず、私に飲ませて欲しい」

「え？ でも、僕が飲まない訓練に……」

「先生は生徒に寄り添って共にチャレンジすべし、つてこれに書いてあった」

「それは生徒に言っちゃっていいんでしょうか」

「……あ」

アイズさんは常に携帯しているらしき『今日からあなたもラビット☆マスター』なる本を掲げる。

薄々勘づいていたけど、僕ってアイズさんのペット枠になつてきてない？

『ワシ等の世界ではご褒美です』

(頼むから出てこないで？ 邪神いや邪心)

脳内の祖父の声を顔を赤くしながら打ち消す。

うん。気を取り直そう。

アイズさんが僕より先に飲むというのはかなりいい。

アイズさんは【耐異常】のアビリティ持ち。それも、かなり高度な。

レベル2であるがゆえに【幸運】のアビリティしか持てない僕では、万が一毒性だった場合、ナーアザさんを頼り、超ポツタクリ価格でお財布がご臨終される。

そうなる前のワンクッションは有難い。

しかし、アイズさんに毒見をさせるみたいで気分は良くなかった。

アビリティG以上なら地上の毒物などほとんど弾くと言われているとはいえ、じゃあいいやになるほど人間やめていないのだ。

そんな風に悶々としている僕から、アイズさんは苦手克服錠をひよいと奪い取る。そして止める間もなくそれを飲み込んだ。

「あっ」

シント、と静寂が辺りを包む。

恐る恐るアイズさんの様子を見る。

問題……ない？

「ア、アイズさん？」

「……平気、だと思う」

自身の様子を確かめるようにあたりを見渡しているが、特に何も……

「……」

何も……

「……」

な、何……も……

「ガタガタ」

何かあったようだ。

「アイズさん、その、大丈夫ですか？」

「アバババ……」

顔を蒼白にして体を震わせるアイズさん。

反応しているのは、持参した参考書。

「ベンキョーコワイベンキョーコワイベンキョーコワイベンキョーコワイベンキョーコワイ」

「ホントに大丈夫ですか!？」

なんと勉強嫌いと言う意外な一面。

途切れ途切れだが、話を聞くとかつて自分に勉強を教えてくれた先生がとんでもなく『すばるた』だったのだとか。

その記憶が本を見ただけで再生されてしまったようだ。

(これ、過剰反応しすぎじゃない?)

苦手克服どころか、トラウマをほじくり返しているようにも思える。

恐怖心を引き出すのが本来の目的とはいえ、これはやりすぎだ。

これでは訓練どころではない。

まずはアイズさんを落ち着けなくては。

「昔のことですよ。今は落ち着きましよう?」

「ガクガク」

「と、取り敢えず本は置きましよう。無理して持たなくてもいいですよ」



だがそれより悪戯だ。

ベル・クラネルが【剣姫】と訓練をすると知った時は、どう接近するものか頭を抱えたものだが抜かりはない。

緻密なシミュレーションによって、想定される24通りの異常事態イレギュラーに対する解決策も考案済み。

丁度ベル・クラネルは有事の対応を学んでいるらしいが、その模範解答を見せてくれる。

(ベル・クラネルはジャガ丸くんを買うために下の屋台に向かった。徒歩で15分だが、今の【剣姫】の様子を考えるに、小走りで往復するかもしれん。5分以内に仕掛を施さなければ)

自作のマジックアイテムの効果で透明になっているフェルズは細心の注意を払ってアイズに……正確には彼女の剣に接近した。

その手に持つのは鞆と同色のアクセサリー。

(ベル・クラネルは【剣姫】に良いところを見せたいようだがそうはさせん)

このアイテムは属性付与のアイテムを試作した際の失敗作を改造したものだ。

本来は雷属性の魔力を武器に付与するものだったが、電気が使用者にも流れてしまうと言う欠陥があった。

それによりお蔵入りになっていたものを引っ張り出したのである。

(大変だったぞ。電気が【剣姫】に流れないようにするのは！)

あくまでも被害はベル・クラネルに。

それが鉄則。

アクセサリーに絶縁機能を搭載し、錨の部分から下には電気は流れない。

期せずして本来の雷属性の付与と言う目的は達成できているのだが、残念ながら悪戯に夢中なフェルズは気が付かない。

お前は頭が良いが頭が悪いのだな、とウラノスが妙なことをいつていた気がする。

今の弱っている【剣姫】ならば透明化しているフェルズには気づけないだろう。

行ける。

「っ誰？」

「あ」

しかし彼女は第一級冒険者。

心が乱れていようとも、その索敵能力に陰りはない。

少年に教えようとした、動揺しても技術を十全に使うをしつかりと実践していた。

フェルズの隠密も中々のものだったが、相手が悪すぎた。

鞘から抜かれた刃を間一髪回避するが、その代償に透明化していた姿が露になってし





「おのれベル・クラネルウウウウウウウウツツ!!」

今ごろ呑気にジャガ丸くんを買っているであろう少年に理不尽に怒りながらピューンと吹き飛ばされるフェルズ。

やがて木造の簡素な小屋に直撃する。

しまった、住人に被害は。

チカチカと点滅する思考が情報を求めて周囲を探る。

「……………これは?」

仮に。

ここに来たのがシャクテイならば。フィンならば。

違和感を覚えても確かな正解は導き出せなかっただろう。

そう、神々の司る奇跡の一端に指先をかける、「神秘」のアビリティを極めた賢者の成れの果てだからこそ気が付いた異常。

【神秘】のアビリティを極めた賢者の成れの果てだからこそ気が付いた異常。

フェルズの視線は部屋に充満する魔素……ではなく、積み上げられた木箱に付着した淡く輝く物質に向けられた。

「この感覚は精霊……それも自我の薄い下位のものではなく、大精霊と呼ばれる類いのものか」

精霊。

神々の子供たる亜<sup>デミ・ヒューマン</sup> 人の中でも特に神々に近いと呼ばれる種族。

神々が降臨した神時代でこそその価値は薄れたが、オラリオでも滅多に見ることの無い希少種族だ。

稀に聞く精霊の悪戯かとも思ったが、そうではないことは明らかだ。

何故なら部屋の中は酷く荒れている。

まるで何者かが争った跡のように。

「……下手人も精霊も遺体はない。ならば、どちらかが逃げたか」

どうやら気楽な休暇<sup>イタズラ</sup>期間は終了らしい。

面倒事は闇派閥<sup>イヴィルス</sup>だけにしてくれとフェルズは瓦礫に埋もれながら溜め息をついた。

## 闇の中の小さな戦い

娼館を利用する客と言うモノは通常は一夜の夢を見るために来る。

娼婦の役割を考えればそれは至極真つ当なものであるし、それ以外の目的で来る人間は少数派であると言えるだろう。

ただ、何事にも例外は存在する。

娼館と言う不特定多数の人間が集まる場を利用した情報収集。

或いは人身売買によってこの場に流れ着いた親族・友人の探索。

女性に対する免疫を上げるために来るも、結局の所、手を繋ぐまでが限界だった  
【超凡夫】<sup>ハイソレビス</sup> なんかもいるかもしれない。

舞い上がって貢物を献上しまくった【超凡夫】<sup>ハイソレビス</sup> はともかく、娼館が雑多に並ぶ歓楽街には闇がちらほらと見え隠れしているものだ。

色香に紛れて社会に蔓延る犯罪を育て、助長する。

それもまた歓楽街の一面だ。

「……少し娼館が慌ただしくなってきたな」

だが、それは平和の使徒たる「ガネーシャ・ファミリア」もそれは承知している。

都市を脅かす闇派閥イツイルスと誰よりも戦い続けた彼らは、そういつた犯罪の臭いに敏感だ。先日、シヤクテイが勘づいた妙に警備が嚴重な娼館。

ベル・クラネルが度々潜入しているためかとも思われたが、それにしても警備の配置が妙だ。警備の存在を隠しているのは、侵入者を追い返すというよりはむしろ中で行われている何かを隠すためではないだろうか。

(あの警備を素通りできるひみつ道具を恐ろしく感じればいいのか、素人には分からぬいはずの警備の位置を把握できるようになった坊主の成長速度に呆れればいいのか)

シヤクテイやモダーカが臭うと評した娼館を監視するハシャーナは、携帯食料を頼張りながら他派閥の後輩の規格外さを思った。

最近はひみつ道具なしでも潜入し始めていることを彼は知らない。

単に知り合いの少年の青春劇を援護していただけのつもりだったのだが、また妙なことになってきた。トラブルメーカーと言う奴か。

(まあ、坊主はいいか。警備の雰囲気が変わったな。何かが起きているのか、それともこれから起きるのか)

娼館で行われている何か。

それについて「ガネーシャ・ファミリア」は確証こそないが、大まかな予想を立てている。

人気のない大通りから外れた立地。曲がりくねった細い道は尾行を困難にするだろう。そして、接近した者がすぐにわかる見通しの良い場所。

これらの材料から導き出される答えは『密会』だ。

「どこぞの有名人の不倫なら笑い話にもなるが……まあ、違うだろうな」

【イシユタル・ファミリア】傘下の娼館がそんな笑い話を提供してくれるとは思えない。闇派閥イウイリスか、それに準ずる犯罪組織だろう。

【イシユタル・ファミリア】程の大派閥が態々、会って話し合おうとするのだからかなりの大物であることが予想される。

オラリオ有数の巨大派閥イウイリスが闇派閥イウイリスと癒着しているとは思えないが、樂觀は許されない。

（坊主を近づけるなっつう団長の判断は正しいな。これ以上闇派閥イウイリスと関わりを持たせて堪るか。……坊主の潜入を後押ししちまった俺の胃は超痛い。仕方ないだろ、冒険者のよくあるヤンチャだと思っただよ……）

ブツブツと愚痴を続けたくなるが、いよいよ何者かが来る時間が近づいているらしい。

これ以上、団長の雷を落とされたくないハシャーナは上級冒険者の強化された目を凝らして観察を続けようとして……

自身に急速接近する何者かの気配に気づいた。

「勘づかれたかっ」

抜刀し、戦闘態勢に入る。

一直線にこの場に向かつてくる以上、目標は間違ひなく娼館を監視する自分だ。

背後から迫る戦慄に冷たいものを感じながら、闇から飛び出すであろう攻撃に備えた。

一瞬の静寂の後に銅色の鈍い光が走る。

防御の姿勢に入っていたハシャーナを吹き飛ばしたその剣閃は第一級に劣らない。

(畜生、また格上かよー)

潜んでいた建物の陰からはじき出されるハシャーナ。

これでは娼館の警備にも気づかれたらう。任務は失敗だ。

「ハッ、随分と剣呑な空気で娼館を見つめてたじゃねーか。どこぞの阿婆擦れに金でも巻き上げられたかよ正義の味方」

ゆらりと、闇が蠢いた。

女の声だ。耳に障る、悪意に満ちた女の声。

ぶらぶらと剣を弄て遊びながら歩むその姿は一見すると隙だらけだが、その見てくれに騙されて隙に飛びつけば、自分の首が飛ぶことになるだろうとハシャーナは冒険者と

しての嗅覚で感じ取った。

「おいおい、何が出てくるかと思えば……随分な大物じゃないか」

「そういうお前は噂の割には大したこたあねえ。「豪拳闘士」なんて御大層な二つ名を持つておいて女の細腕に敵わねえなんざ笑わせんな」

色褪せた桃色の髪に、瞳孔の開いた狂気的な土色の眼。

口は裂けているのではないかと言うほどに吊り上げられている。

何よりもその身体能力<sup>ステイタス</sup>。レベル4のハシャーナを楽々と弾き飛ばせる力は間違いなく第一級冒険者のものだ。

「**【殺帝**<sup>アラクニア</sup>」ヴァレッタ・グレーデ。闇派閥の超重要幹部がこんなところで何をしている」

「ヒヒツ、歓楽街<sup>こんなところ</sup>でヤルことなんざ一つしかねえだろうが、言わせんな恥ずかしい」

ヴァレッタの言葉は戯言だらけ、恐らくここに来た目的は「イシユタル・ファミリア」  
との何らかの取引だ。これほどまでの大物が直接出向くとは何を話すつもりだったのか。

ゲラゲラと笑うヴァレッタだが、その視線は油断なくハシャーナに向けられている。  
会話の隙に斬りかかることもできないだろう。

「そいつは随分と羨ましいな。こちとら先日<sup>さき</sup>のやらかして娼館利用禁止命令が出たところだっ！」



相手はレベル5。

一対一で勝ち目などない以上、ハシャーナが選ぶべき選択は逃走のみだ。

犯罪者から逃げるなど屈辱だが、ここで死ねば意味がない。

「おいおい随分と淡泊じゃないか、ここで会ったのも何かの縁だ。溜まつてるんだろう？ 抜いてやるよ……テメエの血をなア！」

寧猛な猛獣のように犬歯を？き出しにして追撃する。

乱暴な剣捌きだが、型にはまらない攻撃はハシャーナであつても見切りにくい。

徐々に対応できなくなっていく、ついに首を狙った剣に反応し損ねた。

目を見開くハシャーナ。

そのまま剣は果実のように中身が詰まった頭部を刎ねようとして、横から現れた槍に弾かれる。

「……」

「惜しいなア、あと少しでこの殺風景な景色に華が出たつて言うのに」

「その耳障りな口を閉じろ狂人」

「ヒヒツ、部下が殺されかけてお冠かア？」 アンクレーシャ 【象神の杖】

【イシュタル・ファミリア】との取引相手が小物であるはずがない。

【ガネーシャ・ファミリア】の最大戦力であるシャクティ・ヴァルマも、万が一を想定

してこの場に配置されていた。

ヴァレッタもシヤクテイも共にレベル5。

第一級同士の戦いが始まったことを理解した両者は構えた。

シヤクテイは槍の切っ先をヴァレッタに向け、ヴァレッタもハシャーナが相手の時には見せなかった防御の姿勢をとる。

「あの極彩色のモンスターは何なのか、黒幕エニユオとは何者なのか、そして「イシユタル・ファミリア」に何の目的で接近したのか……全て吐いてもらおうぞ」

「やってみろよ都市の護り人」

「やると言ったのだ狂気の使徒」

轟音が響いた。

それが武器と武器のぶつかり合いだとハシャーナが気づくと同時に、ぶつかり合った得物から火花が散る。

遅れて参戦するヴァレッタの部下たちをハシャーナは切り伏せていく。

夢を冷ますような冷たい金属音の連鎖。

色を売る夜の街は、血しぶきの飛ぶ戦場へと変わった。

周囲の人間たちは始まった抗争に巻き込まれまいと方々に逃げ出す。

そんな彼らを四方から監視していた「ガネーシャ・ファミリア」の団員が避難誘導し

て逃がした。これで民衆に被害が出る可能性もない。そう確認したシャクティは攻勢に出る。

神速の突き。

景色を置き去りにした穿ち抜きは、防御の上からヴァレッタを屠る威力がある。

それを察知するヴァレッタは咄嗟に味方を盾にした。

「え？」

迂闊にも第一級同士の戦いに近づきすぎてしまった狂信者は、何が起こったのか理解する間もなく絶命した。

突きとは槍による最速の一撃であると同時に、隙が大きな攻撃だ。

人体に突き刺さった武器は簡単には抜けない。

武器が封じられるこの瞬間を狙って、ヴァレッタは凶刃を振るう。

「舐めるな」

だがヴァレッタの手口など暗黒期に散々見せつけられている。

今更動揺するはずもなく、シャクティはその膂力によって強引に槍を振り回し、狂信者をヴァレッタに投げ飛ばした。

同胞の遺体を殴り飛ばすヴァレッタ。

その頬に降りかかった血をぺろりと舐めて、寧猛に笑う。

(私とヴァレットは互角……だがハシャーナは押され気味か)

【ガネーシャ・ファミリア】に見つかりながら撤退を選ばない闇派閥。イヴァイルス

その理由はこの場の戦力がやや闇派閥イヴァイルスに分があるからだ。

シャクティとヴァレットは互角。或いはシャクティがやや上。

しかし、ハシャーナは複数の狂信者を相手取っている。

レベルでは格下とは言え、簡単には倒せない。

今はシャクティとの戦いに専念するヴァレットだが、間違いなくこの戦いにハシャーナも巻き込まうとするだろう。ヴァレットならば同格を相手取っても、その程度の嫌がらせをする器用さがある。

(俺が団長の足手纏いになってやがる……糞ッ)

自爆兵がないのは救いだが、ハシャーナだけでは手に余る状況。

援軍が来るには時間がかかるだろう。その間にハシャーナ、シャクティのどちらかが倒される可能性は低くない。

(これほどまでに騒ぎになれば【イシュタル・ファミリア】の戦闘娼婦バウベラも直に来る。その時、奴らがどう行動するか……)

普通に考えれば【ガネーシャ・ファミリア】に味方するだろうが、闇派閥イヴァイルスとの繋がりに勘づきつつあるシャクティを消そうと闇派閥イヴァイルスに加勢する可能性もあり得なくはない。

戦闘娼婦と援軍ならば、恐らく戦闘娼婦の方が速いだろう。

「哀しいなア【象神の杖】。自分たちしか頼れねえつつうのは」

「何が言いたい」

「暗黒期とは違う。冒険者たちが何人もランクアップして、若い世代も次々と進出している。闇派閥じゃ及びもつかないほどに正義側は強力になった。なのになんでアタシらは潰されない？ 答えは簡単だ。テメエらがバラバラになったからだ」

「……」

「正義の敵は別の正義だっけかア？ 笑えるじゃねえか。アタシたちを倒せるようになった途端にお前らはアタシたちを後回しにして、足の引つ張り合いを再開した。そのまま協力しとけば、民衆はあれから7年も闇派閥に怯えずに済んだのになア。ロキやフレイヤの連中なんざ、もうテメエらしか眼中にねえ。真面目に民衆守ってんのはお前らだけだよ」

剣と槍を交えながら、ヴァレッタは粘りつくように言葉を重ねた。

悲鳴を上げるようにヴァレッタの持つ剣は軋むが、そんなことをまるで気にせず滅茶苦茶に震われる。

それに対し、シヤクテイは縦横無尽の槍捌きで対抗し、その口を塞がんとした。

無秩序に火花が散る戦場でヴァレッタの言葉は続く。

「かつて肩を並べた戦友がこのありさまじゃ、アストレアの連中も浮かばれねえなあ」  
「……………ッ！」

かつての友たちの名に僅かに肩を震わせるシャクティ。

狂人の言葉に意味などない。ただ、シャクティの焦りに怒りも付け加えて冷静な判断を奪おうとしているに過ぎない。

「戯言は済んだか」

激情を飲み込み、冷徹にヴァレッタを見据える。

自身の煽りが通じていないことをそれで察したヴァレッタは、心底つまらなそうにため息をついた。

「面白くねえな。他の奴なら馬鹿みてえに『お前があいつらを語るな！』つって猿みてえな単調な攻撃になるのによ」

「事実ではあるからな。貴様のその鬱陶しい口を今日まで塞げなかったのは私たちの失態だ。だからこそ、ここで終わらせる」

「おーおー、殊勝なこと……やっぱテメエにはこっちの方が効果的だな」

そう言つてヴァレッタが見た先はハシャーナ。

即座に狙いを看破したシャクティが止めに入るが、ヴァレッタは左手を翳した。

手首に括りつけられたポーシヨンの容器と魔石を見た瞬間、シャクティは咄嗟に腕で

目を覆った。

フラッシュボルト  
(発光瓶かつ！)

身構えていたとはいえ、光と音を防ぐために初動が遅れる。

それを最大限利用して、ヴァレッタはハシャーナとの距離を詰め、その首を再度刎ねようと口を裂いて狂気の笑みを纏う。

その接近に気づく、ハシャーナは自身が絶体絶命の危機に立たされたことを理解する。表情を歪めて、せめてもの反抗にヴァレッタを睨みつける。

それに対し、歪な笑みを浮かべるヴァレッタに何か飛び掛かった。

「アアツ？　なんだコリヤ？」

ヴァレッタに飛び掛かったのは石だった。

それも、手のひらに収まる程度の小石だ。

何やらペンキで兎が描かれたそれは、キューキューと鳴きながらハシャーナを守るように飛び掛かる。

「ツチ、鬱陶しいんだよっ」

レベル5にはまるでダメージを与えない突進だが、繰り返されれば苛立つ。

力任せに弾き飛ばすが、妙に頑丈な石はビクともしなかった。

その小さな時間の浪費は、シヤクテイに挽回のチャンスを与えた。

「ヴァレットター！」

「糞っ!!」

ハシャーナの下には行かせないと、轟音と共に槍を振り抜いた。

これまでの小手調べとは違う全力の一撃に、ヴァレットもそれまでの余裕をかなぐり捨てて回避する。槍が通り過ぎた後には竜の爪痕ドラゴンのような破壊痕が残り、ヴァレットの表情を引き攣らせた。

「畜生、テメエもバケモンだ！」

「ふっつ！」

シャクティの攻撃は留まることを知らず、怒涛の連撃がヴァレットをハシャーナから遠ざける。

不利になり始めたヴァレットに狂信者たちが加勢に入ろうとするが。

「うわっ!!」

「何なんだこの石は!!」

「いやデケエよ馬鹿!!」

狂信者たちに降り注ぐ石の霰あられ。

狐、鼠、犬、猫……様々な動物がペンキで描かれている。

ハシャーナとシャクティ以外の人間に降り注ぐそれは、どう考えても不自然だ。



「例のガキのマジックアイテムか！」

すぐさま結論に至ったヴァレットの行動は早かった。

即座に石たちを薙ぎ払い、撤退したのだ。

ベル・クラネルのひみつ道具は正に未知。情勢が悪くなったこの状況で無理はできない。

狂信者も続く中、シャクティは追撃をかけようとするが。

「おい、（ ）で何をしていた」

「……  
アンティアネイラ  
【麗 傑】」

騒ぎを聞きつけた「イシュタル・ファミリア」の戦闘娼婦であるアイシャ・ベルカを前に、追撃を中止せざる得なくなった。

「イシュタル・ファミリア」は限りなく黒に近い灰色。その動きには注意が必要だ。

「闇派閥を発見し、その逮捕に当たっていた」

「ならば後は私たちに任せるんだね。ここは「イシュタル・ファミリア」の縄張りだよ」

気怠げに髪をかき上げながら、そう言い捨てるアイシャの姿にシャクティはどことなく違和感を覚える。

記憶通りならばアイシャはアマゾネスらしいアマゾネスだ。

加勢するにしろ、敵対するにしろ、もっと好戦的な態度になると考えていたが。

「……いいだろう。後は任せる」

「あいよ任された」

何にせよ、「イシユタル・ファミリア」の縄張り内で勝手に捜査していたのは自分たちだと、ここは退く。

間違いないくヴァレッタと交渉するつもりだったとはいえ、はつきりとした証拠はない以上、下手に追及すればこちらが非難される。

そう判断し、撤退しようとするシャクテイにアイシャは声をかけた。

「こんな夜更けにご苦勞なことだね。近頃はおうじや【猛者】も妙なことをして大変だろう？」

「……？ 何を」

「知らないのかい？ フレイヤの連中が好き勝手するもんだから、ロキは殺気立ってそのうち喧嘩になるってことさ。そして、あいつらが暴れまわるところに首を突っ込む奴もいるだろうから、都市の憲兵さんは休みなしで大変だって話だよ」

突然切り出された話題に困惑するが、アイシャは構わずそう言い切ると背を向けた。

もうこれ以上は話さない、とばかりに。

(……) 【麗アンテイアネトラ 傑】は何かを伝えようとしたのか？ ロキとフレイヤの両派閥が先日の件で

険悪なのは分かっていたが、また衝突する予兆があると？ ……そして何者か、恐らく



戻ってきた石たちに礼を言いつつ、二人が無事にあの場を切り抜けられたことに安堵する。

「あの方たちに何かがあつてはクラネル様が悲しむから……良かった」

突然戦闘が始まった時は何事かと混乱したが、多勢に無勢で戦っているヒューマンがこれまで娯館から帰るベルを迎えていた人物だと気が付き、居ても立つても居られずに石たちにあのヒューマンを助けてほしいとお願いしたので。

「キューキュー」

「ええ、本当にありがとうございます。貴方様のおかげです」

「チューチュー」

「勿論、鼠さんたちの協力もなければあの方たちを助けることは出来なかつたでしょう」  
ベルが今日持ってきた「ペットペンキ」で作ったペットたちがいてくれてよかった。

客も来ない時間は暇だろうと、ベルが都市中の石と共に持ってきたひみつ道具によって作られたペットは石でできているために非常に硬い。

戦闘能力こそないが、いざという時は頼りになる存在だ。

「コン、コーン」

「ワンワン」

「ニャーニャー」

「はい。ちゃんとクラネル様に皆さんのご活躍をお伝えしますね」

狐耳を突いたり、尻尾に乗ってじやれつく石たちに微笑む春姫。

ベルが持ち帰った石たちも元気にしているだろうかと考えていると、獸人の鋭い聴覚が階段を上ってくる足音を拾った。

慌てて部屋の隅に石たちを隠し終わつたのと同時に、襖が開かれた。

「騒ぎは収拾が……何やってるんだい」

「ア、アイシャさんッ。そ、その大丈夫だったのでですか!？」

「ああ、怪我一つないよ。私としては何故か顔からズッコケているあんたの方が心配だよ」

いつもの位置に戻ろうとしたら、畳の間に指をつつかえさせて転んでしまった春姫だが、春姫の運動音痴は今更なのでアイシャは特に深くは突っ込まない。

「とは言え、あんな騒ぎがあつた以上、客は来ないだろうね」

「そう……ですか」

「まあ、あの化け蛙のせいで大して変化はないけどね」

遠い目をするアイシャは「イシユタル・ファミリア」のホームに身を置いている。

傘下の娼館にいる春姫よりも遭遇の機会が多い姉御肌の背中では煤けていた。

「男漁りを止めたと思つたら、何であんな風に悪化してるんだあのバカは」

「あ、あはは……」

その原因を知っている身としては曖昧に笑うことしかできない。

「最近はお部屋の鏡を片っ端から割っていくなんて訳の分からないことをしているし、あんたもあいつの前で鏡は見せるんじゃないよ」

「は、はあ……」

「おかしなこと言ってるのは分かるけど、本気で今のあいつは鏡嫌いだからね。最悪命にかかわる」

そう言うときアイシヤは帰っていった。

窓からホームに戻っていくアイシヤの姿を確認して、ようやく肩の力を抜く。

石たちがバレないかずっとヒヤヒヤしていた。

(そう言えばあのエルフの方々にはどう説明しましょう……)

自分の部屋を待ち合わせ場所にしていいと言ったが、彼女たちは石たちにどんな反応をするのか。

誤魔化し方を延々と考える春姫だったが、最終的には寝入ってしまった、石たちが群がっているところを娼館の先輩たちに見つかってポルターガイストだと騒ぎになるのだった。

## 妖精の加護

オラリオに来てから随分と経つが、人の出会いと言うモノはひどく唐突なものだ。

最近親交を深め始めている少年と少女を見て、私はそう感じている。

二人の出会いは一ヶ月ほど前だったはずだ。はず、と言うのはその時の状況を私は断片的にしか知らないため、どうしても曖昧な表現となってしまう。

正直、私の彼に対する第一印象は最低だった。何せ彼は私のお世話になっている店で食い逃げを働いたのである。

当然、私はすぐさま真剣を手に追いかけてやろうとした。

彼女……シルに止められたためにそれは実現しなかったが。

私たちが彼を追わなかったのは、人を見極めることに關しては一級品の目を持つシルへの懇願と、後はミア母さんが動こうとしなかったからだろう。

レベル1の冒険者の動きに、あのミア母さんが反応できないとは考えにくい。ならば、彼を一時的にせよ見逃す理由があったのではないかと考えた。

(思えば、あの日に何があったかは二人しか知りません)

暫くしてお金を手に自ら店に戻ってきた彼とシルがどのような会話をしたのかは不

明だ。

ただ、彼との縁はそこで途切れず、今も繋がりに続けているという結果がある。

シルは冒険者として毎日のようにダンジョンに潜る彼に、手作りの弁当を用意して早朝に渡すという習慣が出来ていた。

クロエ曰く、恋する少女の行動なのどうか。

ならば私は応援しよう。

それが彼女に救われた私にできる小さな恩返しにもなる。

(とは言え、二人の関係は何処まで進んでいるのでしょうか?)

生憎、生まれた日から今日まで恋など経験したことが無い身だ。

二人の間の感情の機微など分からず、応援しようにもその手段が分からない。

出来ていることと言えば弁当の味見位だが、シルの料理は不味……非常に独特なので、できれば違う形で貢献させてほしい。そもそも、あれを渡し続けるのは恋する少女の行動ならば逆効果ではないかと思うのは間違いでしょか。

「リユー。そろそろ買い出しに行ったらどうだい」

「分かりました、行つてきます」

そんなことを考えながら、当番だった買い出しに向かう。

店の制服を着たまま外を出歩くのは、店で働き始めた当初こそ違和感まみれだった



が、今となつては随分となれた。

行きつけの店で特にトラブルを起こすこともなく、言いつけられた通りの品を購入し、帰路についていると、目の前に倒れている人影を見つけた。

(小人族……いえ、人形でしようか……?)

恐らくは老人らしいそれは、前のめりに倒れた状態で道のど真ん中に倒れていた。

急ぎ容態を確認するために近寄るが、至近距離から見れば明らかに人形だと分かる。何故なら、その後頭部にかでかかとゼンマイがくつついているのだから。

老人方の人形と言うのは珍しいが、なくはないだろう。

近くにこの人形を落とした者がいるのではないかとあたりを見渡していると、うつ伏せに倒れていた人形が突然喋りだした。

「腹……ヘッタ………」

(喋る人形……マジックアイテムでしょうか)

変わった人形、と捨て置けばいいのだろうか、その声には切実な響きを感じられた。それを無視するのは、ちつぽけなエルフの矜持が許さない。

だが、リユーが持っている食品は全て店の料理に使うもの。リユーの一存で他人に渡すことは出来ない。

例外となるのは店の同僚から頼まれた品だろう。これならば後日買い直せばいい話

だ。

とは言っても同僚に頼まれた物の多くは生活雑貨。食料と言うと……

「……申し訳ないが手元にはこのリングゴ以外には渡せるものがありません」

シルに頼まれていたものだが、後でシルに事情を説明すれば許してもらえらるだろう。暫くは頭が上からなくなりそうだが。

人形に何をしているのか、と言った感情はある。

だが、困っている存在に貴賤を付けることは出来ない。

少なくとも、嘗ての友ならば迷わず行動したはずだ。

むしやむしやと、よつぼど腹を空かせていたのか無我夢中で食べる人形。

やがて芯に至るまで食べつくした人形は、満足げにポンポンとお腹を叩くと近くに転がっていた杖を取り、飛翔した。

「!?」

「ワシハ神様カミサマジャ。心優ココロヤサシイソナタノ、三ツノ願ネガイヲ聞キイテアゲヨウ」

突然人形が浮かび上がったこと。

片言ながらしつかりとした意味を持って言葉を喋る人形に驚愕するリユ。

あまりにも常識外れな光景と人形が口にした神様と言う言葉を聞き、咄嗟に辺りを確認する。

(時折神々が意味もなく下界の住民に仕掛けるという『どつきり』だと思つたのですが……)

リユーは第二級冒険者クラスのステイタスを持つ強者だ。

下界のルールによって零能の身に堕ちている神では、その感覚から逃れることは出来ない。

そんな素敵の結果、神の気配はゼロ。

よほどうまくやっているという事が無ければ、自分に監視などついていない。

(そうなるこの神を名乗る存在は一体……)

アルカナム神の力は感じ取れないが、不可思議なエネルギーが人形の周りに渦巻いている。

これで市販のただの人形というオチはあり得ないだろう。

「三つの願い……ですか」

咄嗟に出せと言われても中々でないものだ。

そもそもリಂಗゴ一つ与えただけのリユーが強欲な要求をするのは、いくら何でも恥知らずな真似である。

そうなるは無難な街事で良いだろう。ちょうど、少女が少年にそうしたように。

「そう、ですね。それならばこの後私の働いている店に来ていただけませんか。……客が増えればミア母さんも喜ぶでしょう」

少々お金は取られるかもしれないが、それに見合った味であるはずだ。

店にはおかねがはいってきて、人形は美味しいディナーを食べる。

それに、客が来て欲しいというのは本音だ。

闇派閥イツイルスが暴れ始めてから、街の住民たちは自らの家に引きこもっている。

無秩序に暴れる闇派閥イツイルスから身を守るという意味では正しいのだが、それで誰も出てこれなくなっているのは寂しい物だ。

「ツイテキナサイ」

願いを聞き届けた人形（神様？）はテクテクとひとりでに歩み始めた。

（……？ まだ店の位置は教えてないはずですが）

迷う素振りもなく小走りで大通りメインストリートの人ごみを掻き分けていく。

まるで目的地を知っているかのような行動に、リユーはひどく驚いた。

やがてリユーの現在の勤め先、「豊穡の女主人」の正面まで歩き続けた神様は、杖でその入り口を指し示す。

「なっ、こんなになっ！」

そこにあつたのは長蛇の列。

【豊穡の女主人】は多くの常連客を持つ名店。それが従業員として働くリユーの忖度なしの評価である。

しかし、確かな実力を持つ名店……ではあるがそれがここまでの盛況を生み出せるほどとは思ってない。

現に、店に来て数年のリユースですら、これほどの大行列はお目にかかったことが無い。(まさか、客が増えてほしいという私の願いを実現させた……?)

あの願い事を言った後、人形に連れられた「豊穰の女主人」が大盛況。

これで無関係とは思えない。

「あゝッ!! リユース! 何処行つてたニヤ!?!」

「何ポケッツと突っ立てるニヤ! このデスマーチをとつと片付けろニヤ!」

「早く現場に戻って!?! 私たちだけじゃ回しきれないからあ!?!」

同僚の中でも特にリユースと絡むことが多いアーニヤ・クロエ・ルノアの三人組も、あまりの過酷さに殺気だっている。ミア母さんに至ってはダンジョン深層の階層主もかくやと言う迫力を放っている。

「ああつ、こんな時は猫の手……いや、兎の手でも借りたいニヤ! ちよつと上目遣いすればコロツと騙されてくれて、騙された後でもなんやかんやで協力してくれるお人好し……そんな奴はいないかニヤ!?!」

「いやいやそんなのいるわけが……」

その瞬間、バァーンッ!! と店の扉が開かれた。

現れたのは「豊穰の女主人」の看板娘であるシル・フローヴァ。

小悪魔的な笑みがよく似合う、可愛い系の美人だが、その手には白い髪に赤い瞳の少年が捕まっていた。

「いたよ！<sup>イケニエ</sup> 兎！」

「でかしたあああああああつ!!」

酷い言い様である。

人手のない状況で全員のテンションがおかしくなっているらしい。

「あ、あのつ、まだ状況がよく……」

目を白黒させる最近「豊穰の女主人」の常連客となった少年、ベル・クラネルは混乱した様子のまままだ。

恐らくはシルの口先三寸で丸め込まれたのだろうが、余りにも無警戒過ぎた。野生の勘が鈍りまくっている動物園の兎ですら、もうちよつとは警戒心を持っているだろうに。

「うっさいニヤ！ 後でミヤアの歌を聞かせてやるから働け白髪頭!!」

「ニユフフ、シルに捕まった時点で最早手遅れニヤ……:というかホントに助けてくださいお願いします」

「ゴメンね冒険者君。後で文句はちゃんと聞くから今は助けて！」

デスマーチの真っ只中にいる少女たちは、道連れを逃がそうとはしない。

最後に縋るような目で私を見たが、視線をそらしてしまった。申し訳ありません、クラネルさん。

「坊主！ 厨房で馬鹿みたいに溜まった皿を洗いなっ!!」

ミア母さんも逃がす気はないらしい。

自分たちの戦場に彼をあつさり入れるほどに、「豊穡の女主人」のみんなは心を開いている……という事にしておこう。

クラネルさんにとっては全く嬉しくない話でしようが。

(しかしあの量はいくら何でも凶悪だ。私も手伝いたいが……)

矢継ぎ早に出される注文の数にウエイトレスが追いついていない。

自分が厨房に向かうのは困難だろう。

「二ツ目<sup>フタメ</sup>ノ願<sup>ネガ</sup>イハ何<sup>ナニ</sup>ジャ？」

その時、中央のテーブルの下からひよつこりと人形が顔を出した。

いかなる手段か、この状況を生み出した人形だ。超自然的な力を持つことは間違いない。

真っ先に考えたのはこの状況の鎮静化だが、それがどのような手段になるか分からない以上、下手に願うのは危険かもしれない。

そうなると再び無難な解答がいろいろ。

まずはこの地獄に唐突に落ちてしまった少年への援護だ。

「クラネルさんの援護に向かいたいのですが、できますか？」

「ホッホッホ」

人形は陽気に笑うと、杖を一振りした。

すると杖から小さな光の粒が飛び出し、すぐ近くを通ったアーニヤに吸い込まれた。

「……ニヤ？ ハニヤニヤ?!? なんか力が溢れ出したニヤ!!」

凄まじい速度で客が食べ終わった皿を運ぶ。

姿がレベル4の視力でもブレているその姿は正直気持ち悪い。

だが、アーニヤの奮闘で今ならば一人ぐらい抜けても問題ないだろう。

「クロエ、ルノア。今の内に私はクラネルさんの援護に向かいます」

「え、つちよ!! リュー!!」

「アーニヤがキモイ動きで高速化してるけど、所詮アーニヤだニヤ!?! 絶対ドジやらか

すニヤ!?!」

「後は頼みます」

二人に断つて厨房に向かう。

何やら大量の水が落ちた音と、ガラスのようなものが割れた音、そしてアーニヤの悲



鳴が聞こえた気がするが心の中で二人に謝った。

洗い場では、溢れんばかりの食器を前に少年が悪戦苦闘している。

男性は家事仕事が苦手なイメージがあつたが、クラネルさんはそうでもないようで、そこそこ手際はいい。

しかし、この量の食器を前にしては手際どうこうの話ではなく、既に涙目だ。

「手伝います」

「えっ？ リューさん、いいんですか？」

「はい。ホールの方は問題なく回つてますから」

「……なんか凄い絶叫が聞こえてくるんですけど」

「……問題ない、ハズ」

そうこういいつつもテキパキと食器を片付けていく二人。

皿とスポンジが擦れる音と流れる水は、騒がしい「豊穣の女主人」の中で喧騒から隔離された不可思議な空間を作り出した。

思いがけず現れた心地よい空間に身を委ねる二人はやがてポツリポツリと話始める。

「今日は忙しい中申し訳ございません」

「いえ、ちよつと探し物をしていただけなので、特にこれといって用事もなかつたです  
し」

「探し物?」

「【神様ロボット】って言う……まあ、それはいいです。それにしても今日は凄く混んできますね」

クラネルさんはちらりとホールを見ながら呟いた。

客が絶えることのない【豊穰の女主人】だが、ここまでの盛況は彼の目から見ても異様なだろう。

「申し訳ありません……」

「えっ?」

「いえ、なんでもありません」

私はこの状況の元凶とも言えるので、つい謝罪の言葉を口にしてしまう。

クラネルさんからすれば訳のわからない謝罪だろう、後からそう思い至った私は話を逸らすことにした。

「……彼らはどうもジャガ丸くん愛好家らしいです」

「じゃ、ジャガ丸くん?」

「はい。なんでも巷で話題になっていると言う『幻のジャガ丸くん』の持ち主によく似た特徴のヒューマンの目撃情報があるのだとか」

「……」

「中には『幻のジャガ丸くん』は「豊穰の女主人」のメニューではないかと疑う者もいるように、噂の真相を確かめるべく乗り込んできたんだとか」

酒場にジャガ丸くんがあるわけ無いと普通なら分かるだろうに。それとも藁にもすがると言うものだろうか。

「……スイマセン」

「クラネルさん？」

「あ、いやあ別に。アハハ……」

何故か妙な空気になってしまった。

相手の隠すことは気になるが、あまり踏み込んで自分の隠し事に気づかれたくないので動けない。このままだと居心地が悪すぎる。再び話題を変えなくては。

「最近は躍進目まぐるしいようですね。酒場でも度々話題になってます」

噂の内容は主にロリコンだがそこには触れない。

シルの伴侶となる人がそんな変態なはずがない。

「……差し支えなければ聞かせてもらえませんか。何故、貴方はそこまで強くあろうとするのか」

ベル・クラネルと言う少年は成長著しい。

それこそ、生き急いでいるとも表現できるほどに。

名を馳せる冒険者と言うのは得てしてそうした特徴があるが、それにしても少年の原動力にはどこか異質なものを感じる。

それをどうして私が気にするのか。既に冒険者ではない私が。

「……」

それに対し、クラネルさんがすぐに答えを返すことはなかった。

手を動かしながら、口のなかで小さく自問自答を繰り返す。

やがて、彼は透明な声色で話し出した。

「始めは憧れた人に追い付くためだったと思います。その理由は今も変わりません」

閉じられた<sup>まぶた</sup>瞼は過去の情景を写しているのだろうか、何を思い描いているかは私には

分からない。

「でも、そうやって必死になっていたらいろんな人たちと出会って、絆を結んでいきました」

冒険者は一人ではいられない。

先達に師事する、アイテムを用意してもらおう、強敵を倒すために協力する……冒険を乗り越えるためには多くの助力が必要なのだ。

「それなら見ていた世界はどんどん広がって、僕の大切な人たちがその影で苦しんでいることを知りました」

覚えはある。

一時期、少年が酷く不安定になっていた時があった。

幸い、自分が関与らない場所でその靄を晴らしたようだったが。

「それで、無様だったけど、凄く無様だったけど、なんとか仲間を守ることができたんです。その時の経験から、ずっと平和な時間が流れるなんて無いって今更ながらに気づいたんです」

……そう、当然のことだ。

永遠などと言うものなど、神ならざる人間には手に入らないもの。

そんな簡単なことが、少年を強くした。

次に危機が訪れたとき、大切な人たちを守る力。

それを得るために、少年は走り続けているのだろう。

(なんて、眩しい)

そのひた向きさは、もう私には抱けないものだ。

戦いから背を向けた私では。

「えっと、ごちゃごちゃしちゃつてすいません。要は僕は出会った人たちを無意味にしなくたって、なんでもかんでも守れるようになりたいんです」

恥ずかしそうにクラネルさんはそう笑った。

確かに子供の理想だ。いつか、誓いを守れない時は必ず来る。

それでも、その願いは綺麗だった。

ここから先は特に語ることはない。

行列は終わり、あの殺人的な仕事も片付いた。

クラネルさんはミア母さんに賄いをもらい、燃え尽きた灰のようになって帰っていった。

店員たちもそそくさと片付けを終わらせ、泥のように寝入る。

何故か目が覚めてしまい、一人店に佇んでいた私に人形は問いかけた。

「最後サイゴノ願ネガイハ？」

ここまでの流れでこの人形に超常的な力が備わっていることは分かっている。

なればこそ、慎重にその願いは口にしなければならぬ。

思ったのはあの無茶ばかりしててであろう少年。

その無事を祈ろうかと最初は思った。

しかし、それはきつと精一杯生きている彼への侮辱になるだろう。それは出来ない。

熟考の末、出てきた願いは。

「彼に新たな出会いを」

憧れに出会い、強くなる理由を得た。

仲間と出会い、強くなる意味を得た。

ならば、この先の出会いできつと彼は成長する。

その成長が彼を生かすだろう。

「……」

人形はなにも答えず、光の粒子となって消えた。

願いが叶ったかは分からない。

ただ、この願いの先に少年の道があつて欲しいと、窓から見えた星に願う。

## 準備は整った

ダンジョンにおいて最も恐れるべきとは何か。

まず一番最初に思い浮かべるのはモンスターだろう。冒険者の死因で最も多いのは凶暴なモンスターに力及ばずに敗れ去ることだ。

無限に産み出されるモンスターには、時に第一級冒険者ですら敗れ去る。

だが、冒険者の敵とはモンスターだけではない。

複雑な迷宮、人知の及ばぬ超自然の環境もまた脅威なのだ。

その広大さ故に、神々が降臨し、千年の月日が流れた今日に至っても、その全貌の解明にはほど遠い。

どれだけランクアップを重ねたところで、人は霞を食って生きられるようになるわけではない。

無限に続くとすら錯覚させられるダンジョンで人が活動すれば、あつという間に資源を食いつぶすことになるのだ。

一度自らの位置を見失えば、地上に戻ることをすら危うい。

だからこそ冒険者はダンジョンの地図を躍起になって手に入れようとし、ギルドも上



位派閥には下層域の地図化を多々依頼する。

「それでも、ダンジョンで自分の位置が分からなくなることは無くなるわけじゃないの。そんな状態の人の探索依頼が出されることもあるけど、広大なダンジョンの何処にその人がいるかなんて探し出すのは大変だし、手遅れの可能性も凄く高い。だから、いざとなれば誰かが助けてくれる……なんて樂觀はしないほうがいいよ」

ギルドの職員として、行方不明になった人々をよく知るエイナはそうベルに釘を刺していた。

今思えば、何処でもドア等での自己到達階層以上の領域への侵入を禁じられたのは、何らかのアクシデントで移動手段を失えば、土地勘のない場所に放り出されるといふ最悪の状況を防ぐ意味合いもあるのだろう。

ベルとしても自分の位置が分からなくなるのは避けたいが、どれだけ気を付けていても異常事態は起こるものだ。

冒険者としての経験はベル以上なヴェルフに相談したところ、考えてる案があるとの事でのその検証を行っていたのだが。

「無理ですッ、こんなの無茶苦茶ですううううっ!？」

リリの悲鳴が7階層に響いた。

現在、ベルのパーティーは大量のモンスターに囲まれている。

(モンスターパーティー  
怪物の宴ッ……!!)

い。  
こんな上層ではなく、本来ならば中層以上で使われる用語を想起するほどに数が多い。

十数などと言う視界に収まる数ではなく、数十と言う大群だ。

だがこれは異常事態ではない。何故ならば、この階層のこの場所ならば、その程度のモンスターはいても不思議ではないのだから。

「やっぱ食糧庫パントリーに陣取るのはキツイな……」

「キツイじゃありませんよっ!? だからリリは反対したんです!!」

「仕方ないだろう!」「正かくグラフ」だところが一番数字が高かった!」

モンスターたちの食糧を供給する食糧庫パントリー。

ギルドから狩場として推奨されている正規ルートからかなり外れた地点にベルたちはいた。

(まずはパープル・モスを駆逐しないと……ッ)

このパーティーに【耐異常】のアビリティ取得者はいない。と言うかレベル2はベルだけだ。

ならば、毒の状態異常を付与するパープル・モス是最優先で倒す。

飛び掛かるニードル・ラビットたちを切り捨て、びん弾で上空に飛んで、モンスター

の群れを俯瞰し、毒々しい紫の蛾たちの位置を捕捉。

砲身に見立てた右腕を突き出して、最速の魔法を発動させた。

「【ファイアボルト】 ツ!!」

5条の炎雷が鱗粉ごとモンスターを燃やし尽くす。

厄介なモンスターを始末したベルは、跳躍の勢いそのままニードル・ラビットの群れに突っ込んだ。

「ベル様はそのままニードル・ラビットをお願いします。ヴェルフ様はキラアアントを潰してください！ 素早いニードル・ラビット相手だと大刀のヴェルフ様は足手まといです！」

「お前俺にだけ厳しくないか!？」

「当たり前です！ こんな愚行に付き合わされて怒らないはずないでしょうがツ!!」

二人の言い合いを聞きながら、ベルは角付兎の首を刎ねていく。

やはり、この上層においてレベル2の身体能力ステータスは圧倒的だ。

前までは脅威だったその角も、今となつては簡単に捌ける。

(でもっ、数多すぎ!)

モンスターたちが現れた通路に目をやる。

この大空洞には十数の通路が繋がっている。そこから多くのモンスターがこの

バントリイ  
食糧庫の水晶の樹を指して来ているわけだ。

「おらあああああつ!!」

キラアアントをなます切りにしつつ、ヴェルフは額を伝う汗を豪快に拭った。

既にこの場所に陣取って数十分。モンスターの死体が折り重なって大変だ。

リリが隙を見計らって死体から魔石を抜いてなければ、さらに酷いことになっていただろう。下手をしたら足場が無かったかもしれない。

モンスターが集まり、一見すると効率的に稼げそうな食糧庫だが、ここを主戦場にす  
る冒険者はいない。

キリが無いからだ。この物量を相手にするぐらいなら、下に潜って上質な魔石を得た方がよほど効率がいいと言える。

にもかかわらず、パーティーがここに陣取った理由。

それはベルの左腕に答えがある。

「どうだ! そろそろ情報は溜まったか!」

「まだ時間がかかるみたい!」

ヴェルフが考案したベルの新装備。それは簡単に表現すれば方位磁針だ。

意外なことに、ダンジョンに潜る冒険者が羅針盤等のアイテムを所持することは無い。

何故ならダンジョンが発生させる特殊な磁場が、方位磁針を狂わせ、出鱈目な方向を指してしまうからだ。

故に冒険者たちは己の感覚だけを頼りにダンジョンで己の位置を割り出しているが、人間の感覚など些細なことで狂うもの。なんとか解決できないかと考え出したのがこの装備。

ダンジョン内の磁場を発生させるポイントを割り出し、その情報を記録することでその地点を割り出す……要はその階層の特徴的な磁場のある場所を指針とした羅針盤だ。

これによってダンジョン探索において画期的な発明がされた……わけではなかった。「このままでと、また戦闘の音を聞きつけたモンスターがこちらに向かってきますー!」「くっそ……上層だろ、なんでこんなにモンスターがいるんだよ!」

「上層だからまだ対応できるんです!」

まず、特殊な磁場を割り出すという作業がとんでもなくめんどくさい。

何せ磁場を感知するアイテムは尽く狂わされるのだ。何度もトライアンドエラーを繰り返さなければならなかった。

更にその階層の情報を読み込むには、一度装備内の情報を真っ新にしなくてはならぬ。  
い。

つまり階層を上がるたびに特殊な磁場を発生させる地点に赴き、情報を更新する手順

が必要なのだ。

そして、情報を読み込むためには凄まじい時間を要する。

ざっと一時間は過ぎる。時間の浪費だ。

「作ってる最中におかしいと思わなかったのですか、このお馬鹿あああつ!!」

「こんなに時間がかかるとは思わなかったんだよ! なんなら磁場の発生地点が厄ネタばかりなんて想像つくか!」

何よりもベルたちを苦しめたのは磁場の発生地点である。

7階層まで全て確認してきたが、磁場の発生地はいずれも食糧庫バンクトリーのようなダンジョンの特殊な地形が多かった。

ダンジョンの特殊な地形と言うモノは、大体的場合は「近づくな」がセオリー。つまり、難易度が跳ね上がるのだ。

おかげでパーティーは連戦に次ぐ連戦でもうヘトヘトである。リリが苛立つのもしかたない。

「撤退します! これ以上はベル様がいても万が一があります!」  
「……ああつ、しゃあねえか」

パーティーの頭脳役であるリリが撤退を進言する。

それに対し、ヴェルフも複雑そうに顔を歪めながら頷いた。

新装備の試用は惜しいが命あつての物種だ。

「ルートはどうする!?!」

「恐らくモンスターは北の正規ルートから来ています!　ここは来た道ではなく、北西から迂回してモンスターが少ないルートを通りましょう!」

「よっしゃあ!!」

ギルドによつて公開されているダンジョン上層の地図マップを、全て記憶しているリリの指示の下、パーティーは北西部に繋がる通路の突破に目標を切り替える。

「クリアアントが多いな……ベル!　あれ使え!」

「うん!」

ヴェルフのアドバイスにより魔石をリリから受け取ると、それをベルはナイフの鞘の中に仕込んだ。

「援護します!」

リリがボウガンでパール・モスやニードル・ラビットを牽制し、クリアアントまで一直線できる道を作る。それを確認したベルは一気に加速した。

モンスターたちの知覚を振り切る敏捷。

威嚇の鳴き声を発した体制のまま、目と鼻の先に現れたベルに驚愕するモンスターを深紅ルベライトの瞳が映す。

「あああああああつっ!!」

キラアアントの反応も許さず、ベルはナイフを鞘に勢いよく収めた。

そして、前にリユーがやっていたような居合の構えを想起しながら吠える。

その雄叫びに呼応するかのように弾かれるナイフ。

新人殺しの名で知られるキラアアントの甲殻はそのちっぽけな刃に触れ、粉々に四散した。

四散した破片を魔法の炎を纏った兎肉球びよんきゅうで弾くと、散弾のように周りのキラアアントたちを葬る。

「ナイフはどうだ!」

「……大丈夫、問題ないと思う!」

これもまたヴェルフの作った新装備の一つ。名を納弾鞘カッチバツチン。

12階層の自然武器ネイチャーウェポンの枯れ木を材料に作り出した鞘だが、この装備にもあるひと工夫がある。

それは魔石を中に入れる機構があり、中で砕くことによつて起こる小規模な爆発。それを利用し、ナイフを凄まじい勢いで振らせることが出来るのだ。

兎弾足びよん弾フットで使用した技術を応用したこの装備は、兎肉球びよんきゅうと同じく、決定打に欠けるベルのステイタスを補うためのものだ。





実力では楽勝のはずの上層でこの有様ですよ!？」

「……あー。やっぱ方位磁針は無理だったか……」

ヴェルフは自身の作成した装備がお蔵入りになることにへこむ。

今回はひみつ道具の正かくグラフで大まかなポイントを割り出していたにもかかわらずこれだ。

正かくグラフは14段階に物事のデータを表示するひみつ道具で、大雑把な指針ながら磁場の発生地点の割り出しをこの上なく効率的に行うことができた。

つまり、今日を過ぎればデータを取るのはさらに難しくなるだろう。

「そもそも何でそんな無謀なものに挑戦してるんですか」

「ベルに万が一下の階層で迷ったときの備えが欲しいと言われてやってみたんだが、これじゃ意味がないな」

そもそもヴェルフが数時間で考えた程度のアイディアが試されてないとは思えない。

残念ながらダンジョンでも使える方位磁針はお蔵入りだろう。

「違うやり方を探さないと……」

「そもそも機能が大きすぎるんです。探し出すのは迷子になった人物だけで良いと思いますよ? もっと個人に限定したマジックアイテムはないのですか?」

「マジックアイテムは詳しくないんだよなあ……」

うーむと頭を捻るヴェルフ。

出来ないなら仕方ないとベルは声をかけようとするが、それより先にリリが何かを思いつく。

「もしかしたら……」

「リリ？」

「……ヴェルフ様。少し、心当たりがあります」

「本当か!？」

「はい。魔力に反応する性質があったはずです」

暫く、考えていたりりはベルに小さく耳打ちした。

「ベル様。ヴェルフ様にあの事をお伝えしてもいいでしょうか」

「あの事？」

「ヴィオラスです。魔力に反応する習性から、魔力を強く感知する器官があるはず。それを利用すれば特定個人に反応する装備が作れるかもしれせん」

「!」

ベルはその提案に対して咄嗟に返答できなかつた。

ヴェルフのことは信頼しているが……

「ひみつ道具を教えている時点でもう身内も同然です。伝えても問題ないかと」



「オオオオオオオオオオオツツ!!」

だが、今回は違った。

激突の直前。ミノタウロスは僅かに上体を浮かし、オツタルの虚を突かんとしたのだ。

これまでとは一拍遅れの衝撃。

オツタルにダメージはない。その思考に乱れもなく。心は小さな波紋すら浮かばなかった。

だが、その足元には短く後方に押し出された跡が残っていた。

「……」

それを確認したオツタルは、攻撃に集中しすぎたミノタウロスの顎を蹴り上げつつ、氷の魔剣を振るう。

凍てつく吹雪がミノタウロスに迫るが、ミノタウロスはすぐさま立て直し、その巨体に見合わない機敏な動きで回避する。

単なる身体能力ステータスに任せたものではない。予測による事前行動。

初見の攻撃でありながら魔法を回避したミノタウロスは、二撃目が繰り出される前にオツタルとの距離を詰める。

「正解だ」

角を用いて魔剣を弾き飛ばすと、腕に持つ大刀を思いきり振るった。

「オオオオオオオオツツ!!」

轟音と共に放たれた一撃をオツタルは腕で弾く。

階層中のモンスターを怯えさせる殺意が渦巻くこのフロアの壁がギシギシと悲鳴をあげた。

忌々しげに目の前の猪人<sup>ポアス</sup>を睨み付けるミノタウロスを冷たい目で見下ろす。

「最低限の小細工は覚えたが……足りん。ベル・クラネルならば30秒も経たせずに貴様を葬れる」

オツタルはそう言うのとミノタウロスを片腕で投げ飛ばした。

ズンツ、としたの階層にまで響きそうなほどの勢いで床に激突したミノタウロスが呻く中、懐から取り出した袋を目の前に投げ捨てた。

「……ヴオ?」

「喰らえ。それで漸く互角だ」

魔石をモンスターに食べさせる。

他の冒険者がみれば泡を吐いて倒れるだろう行為を、平然と行うオツタルは己の主がいるであろう上方を見上げた。

「フレイヤ様……準備が完了しました」

禁断の味にミノタウロスが歓喜の雄叫びを響かせるのを確認し、オツタルは少年に届くことなき激励を送る。

さあ、乗り越えてみせろ。

## 水面下で動き出した勢力たち

【おろしや猛者】の奇妙な行動。

数多流れるダンジョンの噂の中で、中層に留まるオツタルは怪訝に思われていても、実害が無い以上、冒険者たちの記憶から漂白されていた。

「オツタルの下準備が終わったらしい。そろそろベル・クラネルに接触するはずだ」

【ロキ・ファミリア】以外には、と但し書きが付くが。

【フレイヤ・ファミリア】によるベル・クラネルへの監視に気が付いたフィンは、女神フレイヤの次なる標的ターゲットが件の少年になったと理解し、オツタルの行動の理由にも気が付いていた。

恐らく目的は試練。

戦士を心から愛する女神フレイヤにとって、冒険者が偉業に挑む瞬間は至上の喜びだろう。

女神フレイヤの命令か、独断かは分からないが、オツタルはフレイヤの敬虔な眷属だ。大方、ベル・クラネルに相応しい試練としてモンスターを宛てがうという腹積もりに違いない。



真面目な性根をよく理解しているフィンは、傍から見れば割に合っていないオツタルの動きを正確に看破する。

「僕たちはオツタルの行動を阻害し、ベル・クラネルを保護する」

「……オツタルの動きが分かっているのなら、ベル・クラネルに予め忠告するか、〔ガネーシャ・ファミリア〕に伝えればいいのではないか？」

「そつちの方がベル・クラネルを守るには確実だけど……現行犯でないとオツタルを追及できないからね」

フィンの言葉にリヴェリアは眉をひそめた。

何故、オツタルを追求しなければならぬのか。

フィンが単純な正義感で物事を決める人間でないことは、長い付き合いのリヴェリアには理解できていた。

つまり、これは悪巧みだ。

少年の安全よりも、こちらの利を優先する判断。それは高潔なハイエルフであるリヴェリアにとってあまり気分のいい話ではない。

「弱小ファミリアにモンスターを喚けるなんてスキャンダル、〔フレイヤ・ファミリア〕の弱みになるからね」

勿論、ベル・クラネルが負傷することが無いように手を尽くすつもりだが。

こんな時にも足の引つ張り合いをしていることは、フィンにとつても愚かな話だという自覚はあるが、「フレイヤ・ファミリア」は潜在的な敵のようなものだ。

中途半端に邪魔をして敵対心ヘイトを煽っただけで終わるならば、リターンも無くては。

「黒幕エニユオが健在である以上、いつか「フレイヤ・ファミリア」と肩を並べることもあるだろうけど、その時向こうがこちらの指示を素直に聞くとと思うかい？」

「あり得んな」

仲間内ですら険悪な「フレイヤ・ファミリア」が外のファミリアと仲良しこよしなどできるはずもない。

ダンジョンで度々小競り合いを行ってきた実績もあるのだ。

そう、協調できないなら、コントロールする術があればいい。

「ガネーシャ・ファミリア」にはちよつと悪いけど、いい加減「フレイヤ・ファミリア」には大人しくしてもらわないとね」

「……」

リヴェリアはフィンに反対することも賛同することもなかった。

目を瞑り、腕を組んで椅子に座り込むだけだ。

（オツタルも冷静な男だから大事にはならないだろうけど、万が一がある。幹部と準幹部だけでパーティーを固めるか）



顔色を窺ってヘコヘコする英雄など、小人族は望むはずがないのだから。

「しかし、奴らが協調できないとしてもその力は圧倒的です。奴らの小競り合いも大事にはならないでしょうし、どうするのですか？」

白装束を纏った部下が尤もな疑問を投げかけた。

二大派閥の小競り合いなどよくあることでしかないはずだが、なぜヴァレッタは舌なめずりしそうなほどに喜んでいるのかと。

それに対しヴァレッタは唇を吊り上げる。

「予定調和を混沌に塗り替えるのがアタシらのやり口だ。後に引けなくしちまえばいいのさ。場をひっかきまわしてなア……」

「ロキ・ファミア」と「フレイヤ・ファミア」の小競り合いならば結末は見え<sup>こたえ</sup>ているが、そこに異物が入り込めばどうなるか。

決まっている。ぐちゃぐちゃの混沌の出来上がりだ。

そのどさくさに紛れて首の一つでも取ればいい。

このために自分たちは沈黙を貫いた。

これまでの戦いで疲労してきた闇派閥に初めの勢いはない。

それは正しい。だが、何も動けなくなるほど疲弊したわけではなかった。

フィンやオツタルの目を自分たちから外し、知覚外からの一撃を加えるための布石。

それが実を結ぼうとしている。

(あの勇者の勘は厄介だがなア、指の疼きはオツタルのせいだと錯覚させればいい。すまし顔の小人族バルツムにだって出し抜き方の一つや二つはあるんだよ)

【ガネーシャ・ファミリア】との小競り合いは予定外のことだったが、フィンは知らされていいだろう。

所詮、他ファミリアなのだから、連絡などしているはずがない。

「自爆兵どもの数は揃えたんだろうなア？」

「はっ、既に先の戦いでの補充は万全です」

「キヒツ、タナトス様も随分と働きの者だ」

烏合の衆だろうが上級冒険者すら殺しうる自爆兵は使い勝手がいい。

夢破れて生きる気力をなくした者が毎日作られるオラリオには、その代わりもいくらだって存在する。神流に言うならばコスパが最強といったところか。

「妙なマジックアイテムを持つガキを引き込めていれば、もつと混沌としていたんだろうが……贅沢は言わねえさ」

「エイン様の横やりがなければ上手く行っていたのでしようが、何が目的だったのでしよう？」

「顔も見せねえエニユオの狗の考えなんざ分かる訳ねえだろ」



誰よりも誇り高い妖精エルフの少女ならば。

それがフィルヴィスには怖かった。

こんな汚れてしまった自分が受け入れられたら、あの方しかいないと思ひ込んでいた夢が覚めてしまったら。

フィルヴィスは自分の手を染める朱色の幻覚と向き合わなければならなくなる。

これまでの過ちを、過ちと認めなければならなくなる。

それはこれまでのフィルヴィスを否定することだ。

「……」

分かっている。

レフィーヤの手を取ることが正しい。

過ちを犯したから、過ちを許容することの何処に正義があるのか。

穢れを知らないかつての自分はきつとそう言うだろう。

それでもフィルヴィスはその道を選べなかった。

彼女は弱いエルフだったから。

しかしその道を捨てることもできなかった。

可能性を手放すことも恐ろしかったのだ。

故に停滞。

この静寂を永遠と錯覚して、答えを出すことを拒否した。

そんなことが長続きするはずがないのに。

——フィルヴィス。

声が響く。

聞き覚えのある男の声だ。

彫像のように固まっていたその身を震わせる、甘い誘惑だ。

——探したぞ。あの子供の始末は失敗したようだな。

「も、申し訳ありませんっ、  
■■■■■■■■■■様っ」

——全く、お前は何処まで愚図なのだ？ エインであつてもあの程度の子供ならば簡

単に殺せただろうに。

死体のように青白かった肌が更に蒼白になる。

侮蔑の言葉に胸がひび割れていくのを感じた。

呼吸が不規則に乱れ、大粒の汗が浮かび上がっていく。

——そしてなぜ帰ってこない？ 使いも満足にできなければ逃げ出す子供か？ 最

早呆れ果てて言葉もないとはこのことだな。

ぐにやりと視界がゆがむ。

使える使徒でなければならぬ。そうでなければあの方の望みを……



「私、は……」

強迫観念が思考を乱す。

ぐちゃぐちゃの継ぎ接ぎだらけなココロが砕けてしまう。

肺に上手く入ってくれない酸素が、まるで自分を拒絶しているようで……

——だが許そう。

「——え」

——愚かなフィルヴィス。哀れなフィルヴィス。お前はいつも役に立たない。無様に、滑稽に、這いつくばって愛を乞うだけ。……嗚呼、だからこそ、お前がこんなにも愛おしい。

ひび割れた心に、言葉は簡単にしみ込んだ。

陶醉する。ひんやりと肌に伝わる冷気をもともしない胸の高鳴り。

与えられる愛が、フィルヴィスに確かな肯定をもたらした。

——私は忘れてなどいない。忘れないが、その慟哭が、その悲哀が、私の心をかき乱す。お前は私を悦ばせるためだけに生まれてきたのだと、そう確信したのはいつのことだったか。

酔っていた。

酒に溺れるように。

情欲の虜となるように。

——お前の狂乱オルギアこそ、私の何よりも愛しき眷属の証左だとも。

フィルヴィスは狂信に酔っていた。

神の前では人の道理など無意味だ。

そんな小さなものに囚われるくらいならば、神の愛を享受することこそ幸福だ。

神の愛に包まれる限り、フィルヴィスは何処までも自分を肯定してもらえらる。

「ああ……様」

——全く、私の手を煩わせるなよフィルヴィス。これ以上お前をみていると、時間を忘れてお前を愛でていたくなる。

捨てられない。

フィルヴィスにこの幸福は捨てられない。

可能性を閉じてでも、至福の愛は齎されるのだ。

——さあ、あの鬱陶しい女神の眷属を殺せ。フィルヴィス。

今までのように、仮面エインを被なつて。

地下水路に佇むシルエツトはそう言い残すと姿を闇の中に消した。

そんなことなど気にも留めないように陶酔するフィルヴィスは夢見心地に呟く。

「そうだ……私はエイン。あの方の、冷酷な使徒」



精霊は、エルフ以上の魔法種族<sup>マジックユーザイ</sup>。

何が出来てもおかしくない存在だ。そんな精霊を闇派閥<sup>イヴイルス</sup>が確保するなど冗談ではない。

「しかし妙だな……精霊を統べる気ならばそれに即したマジックアイテムなり、アーツアイテムなりを用意しているはずだが、そんな痕跡はない」

深層域のモンスターすらタイムするマジックアイテムを有する闇派閥<sup>イヴイルス</sup>ならば、精霊を操る方法もあるのだろうかと思えば、全くそれらしきものが無いのは妙だ。

「……何かを見落としている。闇派閥<sup>イヴイルス</sup>の目的は捕獲した精霊の制御ではないのか？」  
フェルズは精霊を追っていた派閥のアジトを隅々まで調べたが、答えは見つからなかった。

見つからないものは仕方ないと、縛り上げた闇派閥<sup>イヴイルス</sup>たちを連れて帰還しようとした時。

「……あれは、伝書鳩か？」

ランクアップを果たしている感覚が上空の存在を探知する。  
そこに存在しているのは一匹の鳩だ。

足に括りつけられた筒は人に躡けられたことを示している。

「逃がさん」

戦闘の跡を確認して慌てて逃げ帰る鳩に腕を伸ばし、標準を定める。

自作のマジックアイテム【魔<sup>マジック・アイテム</sup>咆手】に魔力を装填し、無色の衝撃波を放った。

モンスターでもない鳩にオーバーキルな一撃は、あっけなく鳩を吹き飛ばし、筒を地面に転がす。

「……やはり要改良だな。魔力を食いすぎる」

鳩一羽を仕留めるだけのためにこれほど魔力を使っているのは割に合わない。

最近まで近くで観察と悪戯をしていた少年の速攻魔法程でないにしても、牽制用に省エネ化しようかと考えながら筒を回収したフェルズは、その中身を確認した。

「思った通り<sup>イヴイルス</sup>闇派閥間の連絡だな。これは……【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】にちよっかいを出す気か？ 自殺行為もいいところだな。……自爆しているし、今更か」

フム、とフェルズは考え込んだ。

恐らく自分が探っている一件とは無関係。

かと言って放置もできない。

(ギルドを通じて【ガネーシャ・ファミリア】に伝えるか)

対象である両派閥はギルドの忠告だろうと聞く耳を持たないだろう。

ならば、両派閥に怯まずものを言える【ガネーシャ・ファミリア】に任せようがい



「今団長に呼ばれているから、また後でな」

そう言うのと石たちはわかったよー、とでもいうように飛び跳ねて去って行った。頭のいいことである。

「団長」

「モンタラシアンか」

「違います。自分はモダーカです」

「モンモンシアン。先ほどギルドから冒険者依頼クエストが届いた」

「ちよつと名前弄ってますけど、大本が違うので意味ないですよ……ギルドから？」

ギルドと「ガネーシャ・ファミリア」は仲がいい。

共に都市を第一に考える組織であることから当然だが、有事の際はギルドが頼るのは「ガネーシャ・ファミリア」だ。

そして、そのような場合は大抵この様にしてギルドから直接依頼されるわけだが……  
「【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】が近々小競り合いをしようとしているらしいが、そこに闇派閥イカイルスが介入しようとしていると情報が入った」

「ギルドはよくそんなことを知ってましたね」

「あの組織の地獄耳は今更だろう。我々にはその対処をして欲しいとのことだ」

なんて面倒な、とモダーカは内心毒づいた。

「両派閥には伝えたんですか」

「伝えるどころか門前払いだ」

「デスヨネー」

流石は最強派閥。

協調性ゼロである。

フレイヤはともかく、ロキはそこそこ話を聞いてくれそうだとも思ったが。

「【ロキ・ファミリア】の緊張感から言つて、戦いがあるのは間違いない」

「遠征と言う可能性は？」

「そうであつて欲しいがな」

【勇者】フレイバーとも、【猛者】おうじやとも付き合ひの長いシャクティは、それが叶わぬ願いだと理解

していた。

両派閥は間違いなくぶつかり合うだろう。

そして、そこに閥派閥イツイルスも関わりになると、無視はできない。

「ファミリア間の争いに口を出す気はないが、閥派閥イツイルスがいるならば話は別だ。モカンス、

お前には当日の討伐隊に入つてもらおう」

「了解。……後自分はモダーカです」

色々と面倒なことになっているらしいとモダーカは内心ため息をつき、またあれこれ



忙しくなるであろう団長に心の中で合唱した。

## 探索の途中で

ピキリッ、小さな音が響く。

テーブルに置かれた白いマグカップに突然ひびが入った。

黒い稲妻のような割れ目が、汚れ一つなかった容器を汚す。

「わっ、ちよっ!!」 どうしたの皆?」

それを見て押し黙ったヘスティアはじつとベルを見た。

ペットペンキによってベルが作ったという鳥、蛇、飛蝗といった石たちが、ベルの周りを飛び跳ねている。

一見すれば主人にじやれつくペットたちと言った場面だが、石たちには何処か焦っているかのような様子が見受けられた。それを感じ取るベルは対応に困っているようだ。

ヘスティアはもう一度マグカップに視線を落とす。

何かにぶつけたわけではない。急激な温度変化もなく、気温はいつも通りのはずだ。

貯蓄に余裕が出来てから購入した物だから経年劣化と言うワケでもないだろう。

粗雑品を掴まされた、と考えるのが自然なのだろうが女神にはそれが凶兆のように思えた。

（今日は初めて中層に潜る日、ベル君が心配で神経質になっていいのか……？）  
 ヘステイアも知識でしか知らないが、上層と中層は違う。

上層まででは問題なく適応できていた冒険者が、中層に挑戦した途端に環境の変化に戸惑い、瓦解するという事は珍しいことではないらしい。

今日まで十分に準備を重ねたベルならば大丈夫だと信じているが、万が一を考えてしまうのも仕方ないだろう。この胸騒ぎはそんなヘステイアの不安、と考えるのが妥当だ。

（アドバイザー君によって1-8階層までの知識は叩き込まれているらしいし、ヴェルフ君が作った装備のおかげで中層への備えも万全。ステイタスだって……）

ベル・クラネル

Lv. 2

力：D501 耐久：E429 器用：D533 敏捷：D598 魔力：F387  
 幸運：1

《魔法》【ファイアボルト】

・速攻魔法

《スキル》【四次元衣囊】

フオース・テイメンション・ポーチ

・ひみつ道具を具現化できる。

- ・使用可能な道具は一日三つ。
- ・一日ごとに内容は変化する。
- ・現在使用可能なひみつ道具。

【武器よきならば灯】【カミナリだいこ】【ライトニングボルトサーベル】  
リアリス・フレゼ  
 【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

これがランクアップをして一週間ちよつとの人間のステイタスだと誰が信じるのか。間違いなく同期の冒険者の中では飛びぬけている……どころかレベル2の中堅層にも迫る勢いだ。更に、「ガネーシャ・ファミア」からは引き続きハシャーナが護衛に当たっている。普段はその力を宛てにはできないが、何かが起きれば助けてくれるだろう。

はつきり言つて中層の始め程度ならば、十二分な安全マージンの確保が出来ていると言える。

ひみつ道具も有用そうなものばかり。

これ以上望むべくもないほどに盤石の備えをもって、中層への初チャレンジに挑むの

だ。

ヘステイアの予感など杞憂。その筈だ。

(それでも……)

これだけの好条件で尚、収まらぬ胸騒ぎは何だ。

ヘステイアの中で囁く、警告の声が鳴りやんでくれない。

自分でもどう処理すればいいか分からない予感に、少し迷った後、ベルに声をかけた。

「ベル君。その子たちも連れていくといい」

「ええつと……?」

「ボクは心配性だからね! 初挑戦した階層で、まくた君がやらかすんじゃないかと考えると夜も眠れないよ。頼りになるストーンアニマルたちを連れて行ってもらえれば、安心して昼寝が出来るって寸法さ!」

ヘステイアの言葉に石たちがよく言った! とばかりにびよんびよん飛び跳ねた。

「そんなに信頼ないですか?」と落ち込むベルを尻目に、石たちはベルが背負った兎袋びよんびよんの中に飛び込んでいく。

あの石たちもヘステイアが感じていたような不安を持っていたのだろうか。

(ペットペンキで絵が塗られた石は頑丈だし、ベル君に忠実だ。きつと助けになつてくれるはず)



「例のあいつかから採取した枝の破片を使った方位磁針にパーティーメンバーの血を吸わせる、そのメンバーの魔力に反応して、針がその方向を指し示すつつう仕組みだ」

突貫で作った装備だったから一つしかできなかった、と悔しそうに呟くヴェルフだが、ベルはその仕事の早さに感嘆した。

中層の異常事態でパーティーメンバーがバラバラになるといのが、このパーティーで考えられる最悪の展開だ。それをリカバリーできるのは大きい。

「もつと小さくは出来なかつたのですか?」

「魔力に反応させるにはこの大きさの針じゃないと意味がなくてな……要改良だな」

「それでもあるだけ心強いし、ありがたいよ」

「おう。尋探木タエ子をよろしくな」

「う、うん」

「やっぱりその名前はないです」

ワイワイとダンジョンを進むパーティー一同はやがて霧が立ち込める10階層に着した。

既に見慣れ始めた風景。上層最下部の階層域にいよいよ中層も近づいてきたと実感する。

「そう言やあ、今日はひみつ道具の試用をしてなくないか?」

その時、護衛役のハシャーナがふと思いついたように声を出した。

いつもならば1階層辺りでゴブリン相手に試し打ちをしているのだが、今日はあつさり素通りしている。

「今日のひみつ道具の中に【武器よさらば灯】と言うモノがあるのですが、名前に武器を持った相手じゃないと意味がなさそうですから。リリたちに使って武器を損失ロストしたら悲惨ですし」

「それで自然武器持ちが出てくる10階層まで一気に来たのか」

武器よさらば灯がどのような効果はあるのかは不明。

ひみつ道具の名前からは想像もつかない能力の可能性もある。

「後は【カミナリだいこ】と【ライトニングボルトサーベル】か」

「ライトニングボルトサーベルって何だかかっこよさそうですよね！」

「そうか？ 俺なら雷鼠ビリビツカ剣にするけどなあ」

「お、おう……」

ヴェルフの独特すぎるネーミングにどう返答を返せばいいのか戸惑うハシャーナ。

「ヴェルフ様の妄言は置いておいて、いい加減一階層ばかりで試すのも人目が気になつてきましたからねえ」とリリは周囲を見渡した。

（霧で隠れられる）こなら至近距離にいない限り人目は気にしなくていいってことか）



無論、無警戒ではいられないだろうが。

「まあ、使ってみろ」

「はい、武器よささらば灯〜」

光によつて構成されたのはビッグライトのようなライト系のひみつ道具のようだ。

ライト系のひみつ道具は光によつて効果を発揮する傾向がある。今回も『灯』という光に関する名前が付いていることから、今後は光に係するひみつ道具はライト系と予想できるかもしれない。

「後は武器を持ったオークがいてくれればいいんだけど」

「問題ありません。今、ヴェルフ様を探しに行つてます」

「霧の中で別行動は合流できない可能性が……あつ、例の装備か」

「はい。ヴェルフ様にリリの魔力に反応する針を設置した尋探木タエ子を持たせてます。迷うことは無いでしょう」

やがて、霧の中からヴェルフとオークが現れた。

しつかりと自然武器ネイチャーウェポンの棍棒を装備している。

「ちゃんとリリを探知できましたか。一安心です」

「おいりり助。さては俺を実験台にしやがったな?」

「当然です」

二人の会話を聞きながら、ベルは武器よさらば灯を構える。使いは他のライト系と変わらないだろう。気になるのは効果がどの程度の距離まで有効なのかだ。

「まずは零距离から！」

草原を蹴り、霧を割いてオークに接近する。

右手に構えた武器よさらば灯を至近距離で使用すると、薄暗い10階層に慣れたオークは突然現れた光源にうめき声をあげて目を覆った。

武器よさらば、と言う名前から相手の武器を無力化するのは确实。

武器が吹き飛ぶのか、消滅するのか。

それを見極めようと光に怯まずにオークの棍棒を凝視する。

「……………」

そして思わず目を点にした。

10階層に生えている枯れ木を元にした棍棒は、酷く原始的なもの。

太い木を粗雑なナイフで棍棒の形にしたような、ゴツゴツとした見た目だ。

でつぷりと横幅の広いオークに似合う武器なのだが……細い。

茶色なのは変わらないが、兎に角細い。

まるで子供が振り回すような枝にすり替えられてしまったのではないか、と思つてし

まうほどこに。

(いや、枝と言うか……付着している土からして根っこ?)

「……」

え、なにこれ?

と言わんばかりに変わり果てた棍棒(?)を凝視するオーク。

先ほどまで冒険者たちに向けていた殺気は霧散してしまっている。

思わず互いを見つめ合っってしまうベルとオーク。

「えくと……」「ファイアボルト」

「ガアアアアアッ!」

取り敢えず速攻魔法でカタをつける。

思ったよりも凄い形で武器よさらばしてしまった。

「……どういうひみつ道具だ、これ?」

「棍棒が根っこに……?」

ヴェルフやリリも戸惑いの声を上げる中、ベルは棍棒が変わった姿に見覚えがあることに気が付く。

貧乏ファミリアである「ヘステイア・ファミリア」は安い食物ならばなんでも買っって食べる。

たしか、極東出身のファミリアの主神と神友しんゆうであるヘステイアが持つてきた食べ物がある。こんな見た目だったはずだ。

「確か……ゴボウ、だったけ」

極東は木の根を食べる習慣があるのかと、ヘステイアと共に戦慄した記憶がある。ファイアボルトによって炙られたゴボウの香ばしい匂いが辺りに充満していた。

「……食べる？」

「遠慮しておきます」

「流石ネイチャーウェポンに自然武器を食う勇氣はないな」

「後で食ったゴボウが棍棒に戻ったら洒落になんねえ」

「どうやらパーティーの誰も食べる気はないらしい。」

「ちよつと悩んだ後、焼けたゴボウは放置することにした。」

「そのうちモンスター辺りが食べるだろう。多分。」

「これ作った奴頭おかしいだろう」

「相手を無力化するのには分かりません。なんで武器を野菜に変える必要があるのですか……」

「ひみつ道具ではよくあることだが、何のために作ったのかよく分からない物だ。」

「異世界のジョークグッズなのだろうか。」



その背後に控えているのは魔導士たちの中でも随一の火力持ち。

レベル上ではオツタルに迫る者がいないとはいえ、ここにフィンと言う指揮官がいればオツタルに勝ち目はないだろう。

「……」

「既に君の目的は分かっている。悪戯好きの女神の娯楽に彼を巻き込むのは止めてもらおうか」

「随分とベル・クラネルを買っているな。……否、買っているのはひみつ道具か」

ここにきて、オツタルも「ロキ・ファミリア」が他派閥の冒険者のために動く理由を察する。

アイズやレフィーヤはともかく、フィンが動いているのは十中八九ひみつ道具と言う強力なマジックアイテム狙いだ。

ダンジョン攻略の最前線に行く彼らからすれば、喉から手が出るほど欲しいものもあるだろう。

同じ冒険者だ。備えの必要性はよく分かる。

いわば「ロキ・ファミリア」は鍛冶系ファミリアや薬剤系ファミリアにするのと同じように、自分たちがマジックアイテムの恩恵を受けることを目的に行動している。

「……お前はそう見るか」

「……………」

オツタルの反応にフィンもピクリと眉を動かす。

妙な話だが、ベル・クラネルと言う少年を見て大成しない、将来性を感じないと評する者は多いらしい。

オツタルとしては少々腑に落ちない意見だが。

フィン・デймナの目には彼の少年がどう映っているのか。興味はあるが今はそれを論じる場面ではないだろう。

(ベル・クラネルへの試練は俺に一任されている……が、「ロキ・ファミリア」と事を構えて行うほどのことではない)

ここで団長同士がぶつかり合えば、抗争に発展しかねない。

ここまで鍛えたミノタウロスは惜しいが、ここは退くべきだろう。

【ロキ・ファミリア】が遠征に向かった後にでも改めて動けばいい。

「お前たちが徒党を組めば俺に勝ち目はない。ここは退こう」

「ありがとう。……そのカーゴの中身を見せてくれないかな」

「それはできん」

「やましいことが無ければ、見せてくれても構わないんじゃないかい」

「できんと言っている」

ピリピリと肌を刺すような緊迫。

しかし、それは予定調和だ。両派閥はにらみ合った後、互いに退く。それがオツタルとフィンの考え。

両派閥がぶつかり合えばただでは済まない。

今日はもう予定を完遂できないオツタルは勿論、フィンも遠征前に余計な疲労は望まないはず。

「……」

それでも互いに不用意な隙は見せない。

隙を見せれば、何をされるか分からない相手なのだから。

深く、深く、その一挙一動に集中する。

それが、女の狙った隙。

ゴトンツ、とオツタルの後方から響いた音にその場の冒険者たちが一斉に注目する。

オツタルの背後に置かれていたカーゴが奪われていた。褐色の肌の女冒険者……

テイオナの同族のアマゾネスによって。

（「イシユタル・ファミリア」か!?!）

ここまで盤上に上がってこなかった派閥の登場に目を見開く二人。

怒号と共にその後を追おうとするが。



「……キヒツ」

白装束に身を固めた狂信者たちが冒険者たちを取り囲む。

まるで両派閥の道を塞ぐように。

イヴイルス  
「閥派閥!?!」

「なんで!?! いままでずつと出てきてなかったじゃん!?!」

レフィーヤとテイオナが応戦すると、瞬く間に蹴散らされる。

都市最強派閥の冒険者に狂信者が叶うはずがない。

だが……

「カーゴが……っ」

足止めには十分だった。

迷宮の閥に溶け込んだカーゴは、完全に冒険者たちの視界から消えた。

(やられた……っ。閥派閥イヴイルスは「イシユタル・ファミリア」を利用したか!)

神イシユタルとフレイヤの確執……と言うよりは嫉妬は有名だ。

フレイヤの眷属が一人でダンジョンに潜っていると知られれば、直ぐに襲ってくるほどには。

どには。

17階層付近でオツタルが籠りきりになっているという情報は、すでにオラリオの冒険者たちが知るところではあった。だからイシユタルの耳にもすぐに入っただろう。

当然、オツタルの襲撃が用意されたわけだが、そこに闇派閥イヴィルスが干渉したのだ。

「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」が衝突する瞬間を狙うように。

「嫉妬に狂った女神なんざ簡単にコントロールできるさ。テメエも女の情念までは予想外だったかよフイ〜ン〜?」

両派閥の混乱を嘲笑うヴァレッタは、止めとばかりに指を鳴らす。

やがて迷宮中からモンスターモンスターの鳴き声が響いた。

これで両派閥はしばらく足止めされる。

あのフィンのことならば、この計画の背後にレベル5ヴァレッタがいることくらい直ぐに行き着くだろう。それでいい。計画通りだ。

自分の襲撃を警戒して動きが鈍った間にベル・クラネルにあのカーゴの中身をぶつけろ。

「ロキ・ファミリア」は大慌てで中身を狩らなきやなア〜? 【猛者おうじや】は試練を台無しに

する勇者どもを妨害しないとア〜?」

大人らしく退却など許さない。

お前たちはここで争っていると女は嗤った。

## アンチエイン

階層中に響き渡る怪物たちの鳴き声。

それは「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」の衝突を狙うイウイルス闇派閥を追って13階層に来ていたシャクティたちにもすぐに伝わった。

「っ！　よりにもよって13階層でだど!?」

都市最強派閥の不穏な空気は知っていた。

事を構えるなら治外法権であるダンジョン内部であろうことも当然予測していた。

だが、13階層で勃発するとは。

「【おっじゃ猛者】め！　何故今日になって17階層から引き返してきた!?!」

イルタがここにはいない猪人ゴアスの冒険者に毒づいた。

オツタルの17階層での無意味な行動。それを「ガネーシャ・ファミリア」は挑発行為だと捉えていたのだが、見事に外れたようだ。

（あの武人肌が女神フレイヤの命であつても謀などしないと予想しての推測だったが、何が目的だ？　急な降下は「ロキ・ファミリア」を狙つての物か？　それとも勇者の策か？）

二大勢力に闇派閥イヴイルスが首を突っ込もうとしているという情報を得たのが遅すぎたのだらう。

【ガネーシャ・ファミリア】にはそれぞれの陣営の思惑がまるで見えてこなかった。

「団長！」

「モハーカ、どうした」

「13階層でモンスター共が暴れ狂ってます！ 恐らく、闇派閥イヴイルスのマジックアイテムによつて引き起こされたものです！ 後、こんな時になんですが自分はモダーカです！」

闇派閥は単純な力だけならば最強派閥に喧嘩を売れるほどではない。

破滅型の人間で構成される組織とは言え、そこは分かっているはずだ。

ならばどうするか。簡単な話だ。

「ダンジョンのモンスターたちを手駒にしたか……」

闇派閥イヴイルスのモンスターを操るマジックアイテムならば容易い。

階層中のモンスターを操る必要はなく、数匹を完全にコントロールできれば、無秩序な暴走を引きおこす程度は出来るはずだ。

無論、第一級冒険者ならば13階層のモンスター如きは問題ではない。

しかし、一瞬の混乱は避けられないはずだ。

その一瞬をこれ以上ないほど悪辣に使うのが闇派閥イヴイルスだという事は、暗黒期の頃から痛



「リリッ！ 平気!?!」

「リリは大丈夫です!」

咄嗟にリリの手を掴めたのは運が良かっただけだ。

もしこの荒波に飲まれて彼女を見失っていたらと思うと……ゾツとしない。

「ヴェルフさんとハシャーナさんは!?!」

「分かりませんっ、見失いました!」

そう、運が良くてもつかめた手はリリのモノだけ。

他の二人はあつという間に見失った。

「このままバラバラになっているのは危険です! 例の装備を!!」

「うんっ……よし、ヴェルフさんは北北東!」

モンスタ―たちが直撃して割れないように守っていた<sup>タエ子</sup>尋探木は、ヴェルフさんの説明

通りに一点を指したままだ。

この装備を信じるならば針の先にヴェルフさんはいる。

僕の気のせいではなければ、ヴェルフさんとハシャーナさんは別々の方向に流されていった。

レベル4のハシャーナさんはともかく、レベル1のヴェルフさんにはつらい状況だ。

<sup>タエ子</sup>尋探木を持つ僕が探し出さないと。

(けど、動けない!)

濁流のようなモンスターの大群。

へたに抜け出そうとすればリリを庇いきれるか怪しい。

それ以上に、タエ子尋探木が壊される。

突貫作業と言われていた通り、この追加装備は戦いに耐えられるだけの硬さはないのだ。

リリとタエ子尋探木。

どちらも守りながらここを強引に突破できると断言できない。

(せめて、どっちか片方だけなら……っ)

有り得ない仮定をしよう自分の弱さを叱咤する。

そんなことは出来ない。

リリが急に強くなることも、タエ子尋探木が頑丈になることなんて……

「ベル様! リリには構わず、その装備をお守りください!!」

「リリ!?!」

「ライトニングボルトサーベルを使います!」

そう言つて背負うバックバックからシンプルなサーベルを取り出すリリ。

僕の背後から飛び出るとサーベルを構えてモンスターの群れと真っ向から対峙する。





簡単に覆せない。

多勢に無勢を覆す常套手段と言えば、指揮系統の乱れを利用することだが、あのフィングが中心となっているパーティーがそんな無様を晒すことはないだろう。

オツタルは「ロキ・ファミリア」によって完封されるはずだった。

イヴイルス 闇派閥がいなければ。

「そおらー！」

「あーっ、もう！ あの槍なんかヤダーー！」

テイオナがヴァレッタの鈍色の槍を回避しながら、愚痴を垂れた。

イヴイルス 闇派閥側は第一級に匹敵する戦力をヴァレッタしか持たない。

だが、その力の差を埋めるのが外法の術だ。

「あの臭え感じ、カースウエボン 呪詛装備か」

「パーティー一同に持たせるとは、随分と贅沢だね」

どのような効果なのかは、アイテムメイカーではないフィンたちには分からないが、呪詛とは【耐異常】のアビリティすら無効化する人間の天敵だ。

どう考えても碌なものではない。

攻撃を受けてしまえば戦闘不能してしまう可能性もある。

必然的に「ロキ・ファミリア」は足を止めざる得なかった。

「……」

「ヒヒツ、そんな目で見るなよ。この方がお前には都合がいいだろオガ」

結果としてオツタルの「ロキ・ファミリア」の足止めと言う目的は果たされているが、オツタルとしてはそれを素直に喜んではいられなかった。

剣呑な視線をヴァレッタに向けるが、女はどこ吹く風と言った様子。

テイオナやベートを足止めしつつ、決して踏み込むことは無い用心深さで立ち回る。  
闇派閥イヴェルスの迷惑通りの状況。

それを打破したのはフィンでもオツタルでもなかった。

混戦の中で突如響く衝撃音。

「……つく」

続いてカラン、と洞窟に金属音が木霊す。

右手首から血を流しながら、脂汗を流すのは何とヴァレッタだ。

何が起きたのか分からないといった様子で傷口を押さえる。

痛みに呻いたのは数秒。

いかなる手段かは分からなくとも、自身のアドバンテージを奪われたことを理解した

ヴァレッタの動きは速かった。

真つ先に武器を失ったヴァレッタに迫るベートの脚をまともに食らいつつ、吹き飛ば

された勢いのまま退却する。

「相変わらず逃げ足の速い……」

「どうすんだフィン！」

「捨て置き、今はカーゴを確保するのが先決だ」

暗黒期からヴァレットタに散々手を焼かされてきたフィンは、ここで彼女を追い詰めることは困難だと判断し、闇派閥幹部の捕獲と言う選択肢を切り捨てた。

そもそもあのヴァレットタが呪詛装備を失った程度で敗走するはずがない。

間違いなく罠が貼られているだろう。

またヴァレットタの不意打ちがあるかもしれない。そう考えるとここで冒険する判断は出来なかった。

「させん」

何より、この男がいる。

戦いになれば十分に勝てる算段はつけてきたが、オツタルの強さを誰よりも見てきたフィンに油断はない。

ここで戦力を分散させる愚は犯せないのだ。

「いいや、行かせてもらおう。アイズ!!」

「分かった」

金の光が迷宮を疾走する。

「ロキ・ファミリア」最速のベートであっても目を見張るような超加速。

それに対応し、その直線上に立ちふさがろうとするオツタルの前にティオナとベートが立ちふさがる。

「……どけ、<sup>ツアナルガンド</sup>【凶狼】、<sup>アマゾン</sup>【大切断】」

「テメエが失せろってんだよ！」

「アイズの邪魔はさせないよっ！」

レベル5の二人が立ちふさがる。

レベルの差は二回りもあるが、第一級まで上り詰めている冒険者には大抵の場合格上殺しの手段があるものだ。無視することはできないだろう。

オツタルが振るう分厚い大刀を<sup>ウルガ</sup>大双刃でティオナが受け止め、二振りの短剣でベートが斬りかかる。

それに対しオツタルはティオナを剛力で弾き飛ばし、ベートの動きを予測して刃を置いた。

「っ!？」

敏捷はベート程ではなかった。だが、圧倒的なのはその反応速度。

全霊の突貫に合わせられ、吸い込まれるように置かれた刃に向かってしまう。

刃が狼を切り裂く寸前、光の矢が大刀に直撃する。

吹き飛ばされることは無くとも、僅かにブレが生じ、ベートは強引に身を振じって回避した。

サウザンドエルフ

「千の妖精」……師と同じ、大樹がごとき揺るぎなさを得たか」

「弾くこともできないなんて……っ」

本来ならばこの場に相応しくないレベル3だが、ベル・クラネル同様に怪物祭の一件で大きく成長を果たしたという主神の言は確かだったらしい。

先達の看板の重みに怯むだけの少女だったはずだが、次世代の成長はどの派閥でも早いと言う事か。

感心ばかりしていられないと、オツタルは前衛の二人を突破しようと圧を強めるが。

「煙幕か」

「ロキ・ファミリア」全員の動きを注視していたが、アイテムを使用する素振りはない。かかった。

先ほどのヴァレットの負傷と言い、どうやら透明な何者かがいるらしい。

「ロキ・ファミリア」の団員たちの反応からして、彼らの派閥ではないようだが。

（体に纏わりつくかのような不自然な煙。マジックアイテム類……ベル・クラネルか？

いや、奴はここにはいないはずだ）



そして、ぐにやりと曲げられた柵が、下手人がオツタルによつて捕獲されていたモンスターによるものだという事が察せられる。

「13階層……いや、中層にでて良いモンスターじゃない」

先程、ちらりと見えた陰からミノタウロスだと予想していたが、ミノタウロスにここまでのは力は無い筈。

あり得るとすれば強化種の可能性だ。

「……？」

その時、焦げ臭さが辺りに残っていることに気が付く。

よくよく見れば、倒れている冒険者たちには打撲痕だけではなく、肌を焼かれたような跡がある。

(ミノタウロスに特殊攻撃は無い筈……強化されてなにか固有の力を身に付けた？ それとも、ミノタウロスに襲われた後、たまたまヘルハウンドの集中砲火を受けた、とか……)

アマゾネスたちの応急手当てを終えたアイズは思考を切り上げた。

考察は後で良い。

こんなモンスターがこの階層に解き放たれたら大変なことになる。

早急に自分が倒さなくては、とアイズは気を引き締めた。

## それでも、彼らは出会った

下界は不自由だ。

全能の力を封じて降臨したフレイヤは、それでも美の女神と言う圧倒的個性をもつて天界時と変わらぬ権力を獲得したが、それでも全てを思いのまま操れるわけではない。どれだけ計算づくで行動を起こしても、下界の未知によつて思惑が壊されることは珍しくはなかった。

「それでも、この状況は予想できなかったわね」

ハア、といつも傲慢不遜を地で行く彼女にしては珍しく、疲れたようなため息をつく。彼女が望んでいたベル・クラネルの試練は完全に破綻したと言えるだろう。

この滅茶苦茶な戦場でミノタウロスと引き合わせることはもはや不可能だ。

如何に強化種と言えども、第一級冒険者が蔓延るあの階層で長生きできるはずがない。

場合によつては自爆兵の爆発に巻き込まれてしまうかもしれないのだ。

せめて「ロキ・ファミリア」の妨害が無ければ、オツタルも巻き返せたのだろうか。

（オツタル、「ロキ・ファミリア」、イツイルス閨派閥に「ガネーシャ・ファミリア」……姿の見えな



い5つ目の勢力もいるわね。これも誰かの策謀なのかしら？)

恐らくは違うだろう、とフレイヤは結論付ける。

この状況で得をする勢力などいるはずがない。先ほどまでは闇派閥有利だったが、イツイルス【ガネーシャ・ファミリア】と5つ目の勢力によつて状況がかき乱され過ぎていた。

つまり、これはただの偶然。

下界名物の巡り合わせと言うモノだろう。

全能の力が跋扈する展開ではあり得ない要素。

下界の醍醐味ともいえるものだが、今回ばかりはそれが恨めしい。

「……」

くるくると、髪を弄る。

思い通りに行かずに手が一人でに遊びだすなど、まるで下界の子どものようだと言った。苦笑した。

この日のために千里眼……神の鏡の使用のための手回しまでしたというのに。

これも少年にとつては試練と言えるだろうが、せつかくなればオツタルのお膳立てをした舞台を見たいものだった。

(文句ばかり言つても仕方ないわね)

想定外が嫌ならば下界になど来なければいい話だ。

今回の件はいい教訓と飲み込もう。

フレイヤはコトリ、とワイングラスを置いて神の鏡を観る。

この力は多くの神々に交渉して、今日限り使用が許されたものだ。

思い通りにならなかったからと言って、ここで中断するのは勿体ない。

この混戦の行く末だけでも見守るとしよう。

「仲間と逸れたのね。ええ、その方向でいいわ。でも、そこから先には行けないわよ」人の魂を見通すフレイヤには、ベルの進む先にヴェルフがいることは分かっていた。しかし、ベルを誘導している装備は、あくまでも方角しか示さないらしい。

ベルは針の示す先を真っ直ぐ進むようとしているが、その先には大きな縦穴がある。

中層から現れるダンジョンの特殊な構造。ベルも知識として頭には入れているだろうが、今回が中層初挑戦という事もあり、その危険性はまいちわかっていないらしい。

13階層は上層に比べて燐光が少なく、先が見通しにくい。

迂闊に全速力で動けば、縦穴を見落としてそのまま下の階層へ真っ逆さまだ。

ましてや、今のベルはモンスター群れとの戦いで視野が狭くなり始めている。

このままでは勢い余って縦穴に突撃しかねない。

(そうなれば、仲間の救助どころではないでしょうね)

ハシャーナはともかく、ヴェルフはこの階層でいつまでも戦えない。



出来れば倒した後に魔石も砕いておきたいが、そんな余裕はない。

今もダンジョン・ワームの突進を紙一重で躲して、魔石を一刺しするので精一杯だ。

「はやくヴェルフ様と合流しましょう！ この階層で一人にいるあの方も危険ですが、リリたちも余裕はありません！ 味方を増やさないと!!」

ライトニングボルトサーベルでバットバットを迎撃するリリは息を切らしている。

オートバトル  
自動戦闘とは言え、リリからすれば全てが格上のモンスター。

精神の消耗は著しいだろう。

「うん！ このまま最短距離で……」

互いに失われていく余裕が思考を短絡化し、不用意な強行突破につなげる。

ベルもリリも熱に浮かされるまま、更に強引な突破を試みようとするが。

『その先に行つてはいけないわ、右から迂回しなさい』

鼓膜から脳全体に染み入るような、綺麗な女の人の声が聞こえた。

モンスターたちの雄叫びにまみれた13階層に不似合いな美声にえつ、と思わず声を  
出す。

ダンジョンの中にながらベルは一瞬、戦いを忘れた。

「「「キュ——ッ！」「」」

「うわっ!?!」

その隙に殺到したアルミラージたちが自然武器である、石でできた斧を持って襲い掛かってくるが、慌てて構えた武器よさらば灯を照射した。

ひみつ道具の効果により、斧は人参に変わる。

「……キユ？」

突然変わった己の武器に困惑するアルミラージたちは、お互いの顔を見合わせる。

少し静寂が周りを包んだ後、兎たちはポリポリと人参をかじり始めた。

「……ハッ、今のうちに」

「待ってりり、右から行こう！」

「ベル様!？」

「なにか嫌な予感がする！」

「……問答の時間はありません、分かりました！」

意外とおいしいのか、人参に夢中になるアルミラージたちを置き去りに、二人は進路を変えて針の示すルートから、大きく右に逸れた。

相変わらずモンスターはウヨウヨと存在しているが、ベルたちはそれらを切り払い、焼き尽くしながら先へ進む。

少しづつ、上り坂になっているルートを突き進んでいると、先ほどまで自分たちがいた地点を上から見下ろせた。

「あの穴は……」

「縦穴、だよ。こんなに大きいんだ」

「あのまま直進していれば、落ちていたかもしれないね。ベル様の勘を信じて正解でした」

ほっと胸を撫でおろすリリを見て、彼女はあの声を聞かなかったのだらうかと疑問に思うベル。

あれは幻聴だったのか。

(……ありがとう)

自分でもイマイチ自信が持てなかったが、聞こえた声の主に心の中で礼を言う。

そして反省した。

イレギュラー  
異常事態で気が動転していたのかもしれない。

せつかくのアイズの教え、集中力を配分すると言う技能を忘れていた。

モンスターだけが敵ではないのだ。

一般的に、上級冒険者は下級冒険者より死にづらいと言われている。

体の頑丈さが段違いだし、ベルのような例外でもなければその領域に辿り着くのは経験と実力を伴った存在だからだ。ダンジョンの上層以下は質こそ高いが、冒険者側の技量もあって死亡率はイメージほど高くはない。

しかし、中層以下で例外的に死亡率が高い階層がある。それが13階層。

上層から難易度が跳ね上がる本階層は例年、変化に適應できなかった夥しい第三級冒険者の死体を積み上げていると言う。

自分がいるのは紛れもない危険地帯なのだ。

「……!? リリツ、何かが近づいてくる!」

冷静さを取り戻したのも束の間。

ランクアップで強化された耳は洞窟内に響く無数の足音と、何かが擦れるような金属音を察知する。

悲しいほどに聞きなれてしまったその音は、ベルにこの階層で起こっている戦いの一端を告げた。

(なんでここに闇派閥が……!)

薄暗い迷宮の闇の中でもその存在を告げる白装束。

まるで亡霊のように浮かび上がるシルエットは忘れもしない。

闇派閥の狂信者……自爆兵たち。

「下がつて!」

「ベル様!」

「自動戦闘じゃ、爆発には対応できない！」  
オートバトル

通常の攻撃に対してはめっっぽう強いライトニングボルトサーベルだが、名刀電光丸と同じように爆発や溶解液といった外法には反応しない。

そんな物を剣で斬れるはずがないのだから当然だが。

「うおおおおおおおっ!!」

狂信者たちは獣じみた声で叫びながらこちらに突進してくる。

その背後には無数のモンスターの群れ。

「怪物進呈ですっ!?!」  
バス・バレード

リリの悲鳴交じりの声に、ベルもギョツとする。

この異常事態の中で更にモンスターが追加なんて最悪だ。  
イレギュラー

否、そもそも閥派閥こそがこの異常事態の発端か。  
イツイルス

先ほどバットバットと交戦した時から奇妙には感じていた。

バットバットは10階層に生息するモンスターだ。中層域に出現することは滅多に

ないはず。

モンスターは下の階層になるほど強くなる。

怪物間に仲間意識があるわけでもないのだから、自分が脅かされる領域にわざわざ行くはずがない。



なのに上層のモンスターが存在していたのは、闇派閥イヴェルスによってこの階層まで追い立てられていたからだ。

(エイナさんが言っていた闇派閥イヴェルスの冒険者狩り。それが今、起こっているんだ!!)

リユーやフィンイヴェルスは闇派閥の力が低下していると同時に、末端は暴走しだしていると言っていた。これも、その影響なのかもしれない。

モンスターフェイス  
怪物祭の勢いのまま、暗黒期のお約束を復活させたのだ。何て迷惑な。

(でも末端の暴走なら、そんなに強い指揮官はいないはずだ!!)

现阶段で集まった情報から、ベルはそうのように推測した。

ならば、素早く無力化するに限る。

「ひみつ道具を使ったら一緒に突っ込もう」

「分かりました! あの人騒がせな連中を片付けて、さっさとヴェルフ様を回収します!」

武器よさらば灯の射程範囲にリリがないことを確認して、狂信者たちに照射。

それぞれの武器は野菜となり、

「な!?! 何故自爆装置がトマトに!?!」

一番厄介な装備も無力化する。

これで爆発を恐れる必要はない。

「あああああああつ!!」

「やあああああつ!」

ベルのダブルナイフが次々と狂信者たちを無力化する。

リリのライトニングボルトサーベルもその名の通り、雷のような煌きをもつて力を存分に発揮した。

……刃ではなく腹の部分で叩きのめしていたとはいえ、一応鉄の塊なのだから、あんなにフルスイングしたら狂信者たちは死ぬると思うが大丈夫だろうか。

「【ファイアボルト】!」

モンスターたちを引き連れていた狂信者たちを沈黙させると、後方のモンスターたちに炎雷を何度も打ち込む。上層から来たと思しきモンスターたちの断末魔を聞きながら、ベルはリリから差し出された精神回復薬を飲み干す。

8700ヴァリスと言う、ベルとヘスティアの一日の食費より高い柑橘色かんきつの液体だが、出し惜しみしていられない。精神疲弊マインドダウンになつたら間違ひなく死ぬ。体力も細目に回復しなくては。

「さあ、急いでヴェルフさんの……っ」

「ベル様?」

その時、既視感を覚えた。

一本どの記憶が疼いているのかも分からないまま、直感の赴くまま視線を上に向け  
る。

先ほどの爆発の影響か、崩れ落ちた瓦礫の山の先。  
そこに怪物はいた。

「……」

何度夢に出てきただろう。

何度その面影を恐怖の代名詞としてきたか。

自分よりも一回りも二回りも大きな体躯。

折れた角は激闘を潜り抜けた……所謂当たり個体の証拠だ。

牛頭人体のモンスター。ミノタウロス。

ベル・クラネルに大きな敗北の傷をつけたモンスター。

「な、なんで……まさか、闇派閥イヴイルスは下層パス・パレードからも怪物進呈を……」

リリの戦慄の聲が耳を通り抜けた。

スツ、と目を細め、集中を深める。

ミノタウロスの脅威はよく分かっている。

中層で殉職する冒険者たち。その多くの死因はこのモンスターだ。

単純に強い、理不尽の権化。モンスターらしいモンスター。

向こうが二人に気が付いた。

それと同時にベルは駆けだす。

恐怖を押し殺し、先手必勝の一撃を見舞う。

ぶつかり合う武器と武器。

白い少年と紅いミノタウロス。

緊迫した空気がフロアを支配する。

「」

状況は誰の手も離れていた。

女神も猛者も勇者も、闇も正義も光も悪も、互いにエゴをぶつけ合い、主導権を渡す

ことは無い。

女神の舞台は崩された。

勇者の思惑は乱された。

悪の策謀は潰された。

運命と言う糸は迷宮の中で複雑に絡み合い、縫<sup>ぬ</sup>手の思惑を外れて混沌を生み出す。

そこはある意味最も原始的な世界。何者の思惑もない、ただ在るだけの光景。

誰の手からも外れた物語。

それでも、彼らは出会った。

## 闘牛猛撃

膠着は一瞬。

ぶつかり合った力と力はすぐに一方を打ち消した。

そう、ベルの力負けだ。

(うっ……強い!)

ミノタウロス。

中層で活動するにあたって一番驚異的なモンスターだ。当然ながらベルも予習済みだ。

中層の中盤から出現する大型のモンスターであり、その特徴はランクアップした眷属を簡単に捻りつぶす【力】と、生半可な装備を寄せ付けない【耐久】が特徴だ。

レベル2であっても一対一は厳禁な強豪だが、そうであっても強すぎる。

ベルのレベル1時の最終評価はオールS。

ランクアップを果たし、ステイタスがリセットされても下地として、これまで積み上げたその規格外の能力値は残っている。

既に能力値だけならレベル2上位陣に匹敵するベルならば、ミノタウロスとの一対一

でも有利を取れるとエイナも太鼓判を押し続けていた。

だが、一合のやり取りだけで理解する。

このミノタウロスは規格外だ。

(不味い、簡単に突破させてくれないっ)

空中で体勢を立て直し、着地後すぐに構えなおす。

ひみつ道具を駆使すれば倒せるだろう。だが、時間がかかる。

ヴェルフの救助に一刻の猶予もないこの状況で、それは致命的だ。

思考を回し、ベルは決断する。

「リリッ、ここは僕に任せてヴェルフさんの所へ！」

「ベル様!？」

「ライトニングボルトサーベルなら中層でも活動できる！ ヴェルフさんを援護で連れてきて欲しい！ 三人でこのミノタウロスと戦えば、確実に勝てるよね!？」

リリガベルを置いていくことに反発することを見越して、ヴェルフとの合流のメリッ  
トを語る。

実際に三人ならば勝てるだろう。ミノタウロスはそもそもパーティーで戦うことを推奨されているモンスターだ。

「分かりました！ どうか、お気を付けて！」

「うん！」

ダブルナイフを持って再び突撃する。

今度は力で突破するのではなく、ミノタウロスの反撃を受け止めるように二つの刃を交差させて。ミノタウロスが持つ、冒険者のものと思しき大刀を封じると大声で指示を出した。

「お願い、ストーンアニマルたち!!」

びよんびよん  
兎袋から跳び出す複数の石たち。

鳥、蛇、飛蝗のイラストが描かれたそれらは、ベルの指示に従ってミノタウロスに襲い掛かる。

「ヴオオオオオツ?!」

オールレンジ・アタック  
全射程波状攻撃。

一対一と思っていたミノタウロスはまさかの攻撃手段に呻き、その動きが鈍る。

ベルが作り出した隙を逃がさず、リリは通路を一気に駆け抜けた。

自分を無視して背中を向ける小人族に怒号を発し、追跡をかけようとするミノタウロスだが、そうはさせないとベルは砲声した。

「【ファイアボルト】！」

「ヴオ………ツツ」

至近距離からの一撃。

並のモンスターならば粉碎される一撃だが、ミノタウロスは僅かによるめくだけだ。ミノタウロスの皮は熱にも強い。既に予想していたベルに動揺はない。

この異常な強さを持つ個体ならば、予想して然るべきだろう。

それでも、ベルは眈を吊り上げて敵を見据えた。

ミノタウロスもリリに向けていた怒気と殺気を全てベルにぶつけた。

「お前の相手は僕だ……っ」

「ヴオオオオオオオオツツ!!」

言葉など通じない。

それでも、それが目の前の人間による挑発であることは理解できたらしい猛牛が吠える。

そして殺し合いが始まった。

ベルの刺突とミノタウロスの叩き潰しが、互いの心臓部を狙う。

刺突は鋼鉄の筋肉に阻まれ、叩き潰しは神の刃の受け流しで地面にその力をぶつけた。

空回りした殺意の矛先は、血みどろの死闘の合図だった。

地面を揺らした叩き潰しに次いで血しぶきが飛んだ。



大刀を受け流されたミノタウロスは、間髪入れずに残った角をベルに向けた。

地面に密着したかのように伏せた猛牛の角が、ベルの左目を狙い、一気に浮上したのだ。

それを首の捻りで回避したベルの左耳の耳輪じりんが横に切り裂かれ、雨の様に鮮血がミノタウロスの顔に降りかかる。

だがベルは受け流した大刀の引き起こした衝撃を利用して、ヘステイアナイフをミノタウロスに向けた。弾かれるように紫紺の軌跡を描く女神の分身が、ミノタウロスの眼球ごとその脳を突き刺さんとする。

しかしミノタウロスの角撃に気が付き、急遽回避行動を取った結果、狙いがそれでミノタウロスの額に傷をつけたに留まった。派手に血が噴き出ているが、こんなものはダメージですらない。

(最初の二撃が回避されることを予想、した……?)

何だそれは、とベルは愕然とした。

異様に身体能力が強い個体だとは感じてはいた。

それでも、技と駆け引きで勝てるという見込みを付けていたのだ。

とんだ見当違い。

ベルとミノタウロスでは、向こうの方が格上だとベルは認識を改める。

「つくお!!」

ベルはミノタウロスの肩を蹴り、距離を取る。

そして、溜め込んだ空気をようやく吐き出せた。

ダンジョンがこんなに狭いと感じたのは初めてだと、ベルはヘステイアナイフを握り直し、迷宮の燐光が照らす猛牛を睥睨した。

ミノタウロスもこの攻防で殺せなかったことが不満なのか、鼻息を荒くし今にも飛び掛かってきそうだ。

至近距離のやり取りでベルが気が付いた無数の傷は、きつとミノタウロスはここに来るまでの間に想像を絶する戦いを潜り抜けたのだろう。

「ヴオオオオオッ!!」

休む暇など与えないとばかりに迫る巨体を大きく飛んで躲す。

ミノタウロスの巨体はそれだけで超脅威力の武器だ。

真正面からぶつかるとは行かない。

「【ファイアボルト】!!」

雷炎の三連撃。

薄暗い洞窟を照らす速攻魔法が猛牛に襲い掛かる。

無詠唱の特性を存分に發揮し、息をつく間も与えない。

このまま遠距離から一気に押し通そうとするが。  
ミノタウロスではない、猛獣じみた声たちがベルの背後から迫る。

「つ……他のモンスター!?!」

イカイルス  
闇派閥によって連れ込まれたモンスターたちが、ベルに襲い掛かる。

ここは無限のモンスターの巣窟、ダンジョン。

一対一に専念すること等できない。

だが、ベルにはアイズから教わった集中の配分がある。

モンスターたちの動きを短時間で見極め、攻撃を回避しつつ反撃していく。

(モンスターの群れは対処できる。でも、そうするとミノタウロスは……)

他のモンスターたちを倒しつつ、ベルの視線はミノタウロスを離さない。

この場で最もベルの命を脅かすのはあの猛牛だ。

モンスター同士は連携をしないとは言え、数で押されれば必ず負ける。

(つく、あんまりこれは使いたくないけど……!)

まずはすぐに倒せるモンスターを倒す。

オークやアルミラージ等の自然武器ネイチャーウェポンを持つモンスターたちに、残弾がどれほど残っているか分からない武器よさらば灯を照射する。得物を失い、動揺するモンスターたちを

ベルは白い影となって切り伏せて回る。

そのままミノタウロスに光を向けるが、そこでミノタウロスは予想外の行動に出る。その手に握っていた武器を空中に放り投げ、再び突進したのだ。

そして、ベルを襲う連打ラッシュ。

武器よさらば灯を使用するために、両刃短剣をしまっていたベルは防御に有利なダブルナイフではない。ハステイアナイフを握る右腕だけで打突を防いでいくが、ミノタウロスは咆哮ハウルを浴びせ、その視野を狭めた。

(しまった！)

その隙はミノタウロスの駆け引きが生み出したもの。

先程空中に投げた大刀を掴み取り、一気に振り下ろされた。

「うわあああああつ!」

もし、今身に纏う装備が強化された兎びよん音M-K-III 鎧でなければベルの体は両断されていただろう。

ヴェルフの鍛えた防具がベコリとへこみ、防ぎきれなかった衝撃がベルを迷宮の壁まで叩きつける。血を吐き出し、倒れ伏せたベルが痛みに喘ぐ間にモンスターたちが襲い掛かった。

「つー!」

咄嗟に兎弾足びよん弾フーッで壁を蹴る。

魔石によって発せられる衝撃波による爆発で、吹き飛ばされるような形でベルはその場を離脱した。

「……ガフツ、ゴホ、ゴホ……」

咳込みと共に血が飛び散る。

霞む視界に歯を食いしばりつつ、レッグホルスターから回復薬を取り出し、飲み干した。

モンスターに駆け引きで負けた。

それはベルにとって途轍もない衝撃だ。

ヴィオラスのような例外はいるが、怪物は本能で暴れる凶獣。その認識が覆された。

(下層なら駆け引きを駆使するモンスターもいるって言うけど、ミノタウロスが……?)  
最悪だ。

中層域で最恐のモンスターが知恵を使ってくるなど。

(吹き飛ばされた衝撃で武器よさらば灯は手元がない。残っているのは兎袋びよんびよんに入っているカミナリびよんびよんだけ!)

兎袋からカミナリびよんびよんを取り出し、ミノタウロスに突き付ける。

まだ高等回復薬の効果は出ていない。駆け引きが行えるならばこうした牽制びよんびよんが効くはずだと考えたのだが。

「ヴオオオオオツ!!」

「ぐっ、駄目か!？」

多少の小細工ならばその頑強さで耐えられるという事なのか、怯まずに追撃をかけてくる。

ならばとベルは太鼓を鳴らした。

突如現れる雷。

アルミラージたちはたちまち感電し、バタバタと倒れていくが、やはりミノタウロスは違う。

迫りくる雷撃を大刀で叩き落したのだ。

(滅茶苦茶だー)

思わず叫び出しそうになる。

だが、文句を言う余裕などない。

重りを括りつけられたかのように重い体に鞭を打って、ミノタウロスの横風の一閃を防ぐ。

体が真つ二つになることは避けれたが、足は踏ん張りがきかずにゴロゴロと地面を転がった。

凹凸のある岩の地面は不規則に転がる体を跳ね上げ、先ほどの一撃でへこんだ兎鎧が

肌に突き刺さる。痛みが体中に走る中、ベルは決断する。

(ごめん、ありがとう)

その謝罪と礼を向けたのはヴェルフと兎鎧。

もはや可動域を制限し、防具の体を成してないぴよん吉MK―IIIを外す。

ブーツと、無事だった追加装備を残し、命を守ってくれた防具に別れを告げた。

ヒヤリ、とダンジョンの冷たい外気がベルの体から熱を奪う。

乱れた呼吸を繰り返す喉に痛みが走る度、ベルの脳内が白黒にチカチカと点滅した。

(あの大刀を奪うんだ。武器よさらば灯を拾って)

あの業物の大刀は驚異的だ。

装備の恩恵をこんな形で実感するとは思わなかった。

ミノタウロスは強敵。少しでも戦力を削らなくては。

武器よさらば灯はベルから2Mの距離に落ちている。

遠いわけではないが、ミノタウロスを前に迂闊には取りに行けない微妙な距離。

じりじりとベルはつま先をひみつ道具に向け、ミノタウロスの間を伺った。

ミノタウロスも、ベルがあひみつ道具を確保することが、自身の敗北につながると

悟っているのか、油断は見られない。

「……………」

探り合いの時間が続く。

他のモンスターたちも両者の緊迫を感じ取っているからか、動き出す気配はない。ベルの耳輪じりんを伝う赤い滴が静かに地面を濡らす。

その音無き合図が両者を動かした。

「届けええええええええ!!」

走りだしたベルは、ミノタウロスの振り回す大刀を躲しつつ、右腕を突き出した。

伸蛙ノビエールという何処までも届く腕を使い、武器よさらば灯を回収しようと試みる。

しかし、ミノタウロスは飛び出したロープを素手で握り締めた。

「なっ……」

「ヴオオオオオツ!!」

(武器よさらば灯やカミナリだいこでもそうだったけど、このミノタウロス、対応力がかしい!!)

初見で伸蛙ノビエールの特性を見破られたことに動揺するベル。

驚倒を置き去りにするように、ベルの体が宙に浮く。

ミノタウロスが力任せにロープを上投げ飛ばしたのだ……と理解したベルは、ミノタウロスが行うであろう次の行動に表情を強張らせた。

(ロープを握り締めたまま!! まさか……っ!?)





そんな恐怖がベルの身を包む。

(同じだ……あの時と……)

倒れ伏したまま動けない。

体中のダメージと、嘗て何もできずに敗北した挫折トラウマの記憶がベルを苛んでいる。

あまりにも似すぎていた。

ひみつ道具を使っても何一つ届かなかったあの日と。

負ける。

ステイタスで負け、駆け引きで負け、ひみつ道具も通じない。

これでどうして生き残れると言えるのか。

ここがベルの終着点なのだろうと、ベルは諦観の中で理解した。

「あつ……くくつ……ッ……」

腕に力を込めようとするが、震えが止まらない。

乗り越えたはずの記憶が、ベルから勇気を奪う。

ダメだ。

戦わなきゃだめだ。

死んだらベル・クラネルが積み重ねてきた今まではどうなる。

神様との約束。憧憬への誓い。仲間との思い出。

ヴィオラスの未来。春姫の救い。

やらなくてははいけない事なんて山ほどある。

それら全てを、こんなところで？

なんて世界は残酷なのか。

走馬灯がベルの中で駆け巡る。

ベルの始まったばかりの物語はこんな形で潰えるのかと、悲痛な叫びを魂が発した。

(動いて……お願いっ、動いて!!)

他人のモノになってしまったかのように、言う事を聞かない体に懇願しても何も変わらない。

猛牛の視線がベルを貫いた。

止めを刺そうというのか、一片の油断もなく。

ストーンアニマルたちがミノタウロスに飛び掛かるが、先程リリを逃がせたのはあくまでも不意打ちだったから。石たちの軽い体当たりではミノタウロスはビクともしない。

絶望的な状況に体から力が抜けていく。

抗えと言う心の叫びに、ポロポロの体が蓋をした。

自身の意志から外れた体を奮い立たせようと、上体を起こし、ミノタウロスを涙で泡

立つ瞳で睨みつけるベルに、無慈悲な鉄塊が振り下ろされようとした時。

「諦めるな！」

男の声が響いた。

それが誰のモノなのか。ベルは考えるほどが無いほどに、この耳はその声を聞いている。

ヴェルフだ。

ベルと別れたリリは、約束通り彼を連れてきてくれたのだ。

二人がいるのは後方、その姿は見えない。

それでも、聞こえてきた言葉がベルに仲間の存在を知覚させた。

——信じているぞ。馬鹿野郎。

「ツツツ!!」

火が付いたように熱い。

この階層の岩肌のように冷たくなっていた体が息を吹き返す。

諦めるなどと言う激励<sup>エール</sup>が、ベルの意志が肉体を超越する後押しをした。

「があああああああああつっ!!」

ヘステイアナイフと、残っていた右肩の防具で大刀を受け止める。

死に体だったはずの獲物の奮起に、動揺する気配が武器越しに伝わった。

ベルはそんなミノタウロスに倒れ込むかのように接近し、両刃短剣バゼラートを叩きつける。ダメージはない。上層では十分通じたこの武装も、ミノタウロスの筋繊維の前には無力。

(知ったことか!!)

ベルは止まらない。

一撃、二撃、三撃……

切り裂けなくても、鈍器のように叩きつけられた切っ先から火花が散る。

全く通用しないはずの武器がミノタウロスをよろめかせる。

「フアイアボルト」!!」

そこに炎の華が咲く。

互いに吹き飛ばされるベルとミノタウロス。

ミノタウロスは煙を立てながら、倒れることなくベルを睨みつけた。

対してベルは、もう何度目かも分からない地面の味を経験していた。

しかし、今度はその体が動きを止めることは無い。

生まれたての小鹿の様に、プルプルとみつともなく震えながら、それでも力を振り絞り、獣じみた声を上げて立ち上げる。

「ハア、ハア……」

肩を大きく揺らし、息を荒げる。

だが、その深紅の瞳はミノウアウロスを見据え続けていた。  
立ち上がったベルの隣に二人が並ぶ。

ヴェルフは一張羅だと言っていた着流しをボロボロにして、重ね着ている鎧は僅かにそのひび割れた姿を覗かせていた。焼け焦げた臭いはヘルハウンドの炎弾に晒された名残か。

リリはベル以上に息を切らせ、力を入らない手でライトニングボルトサーベルを握る。可愛らしいその顔には無数の傷があり、いつも被っているフードは泥まみれで、彼女の潜った死線を物語っている。

言いたいことは沢山あった。

無事でよかった。

ありがとう。

勝手に諦めてごめん。

助かった。

二人は大丈夫？

それでも、今言うべきことはこれだけだ。

「……行こう、ヴェルフ！ リリ！」

「ああ！」

「はい！」

無数のモンスターと共に咆哮ハウルを上げるミノタウロス。  
強大な敵に向かい、ベルのパーティーは駆けだした。

## 逆転の兆し

このパーティーはベルをエースとした構成だ。

レベル高ステイタスを活かしてベルが斬り込み、ヴェルフが大刀で力を補い、リリが遠方から攻撃を仕掛ける。

リリの遠距離攻撃がボウガンと言うダンジョン産のモンスターには効果が薄い物であり、魔導士が所属するパーティーと比べると決定打に欠けるという弱点はあるが、中層でも十分に機能するパーティーになっていた。

しかし、現在のパーティーは常とは少々異なるフォーメーションになっている。

「合わせろリリ助！」

「自動戦闘オートバトルに無茶言わないでください！」

その最たるものはリリの前衛投入だろう。

現在のリリの装備は、ベルのひみつ道具であるライトニングボルトサーベルである。

その特性は装備した者の接近戦能力を飛躍的に高めると言う物。

今のリリはベルよりも強い。

「つとー……助かったぜ、蛇のヤツ！」



ミノタウロスの振り下ろしがヴェルフを襲うが、蛇の絵が描かれた石の体当たりによつて攻撃は逸らされた。

ベルの指示で援護をしてきているストーンアニマルにヴェルフは、そう礼を言った。

レベル1のヴェルフはストーンアニマルたちの尽力によつて、なんとかミノタウロスに食らいついていた。

ストーンアニマルが作り出した隙を逃さず、リリとヴェルフは同時に斬りかかる。

しかし、ミノタウロスはその巨体に見合わぬ速さで二人の刃を弾く。

「これでもダメか……」

「技を持つミノタウロスなんて、迷惑過ぎます!?!」

思わず二人は悪態を吐いた。

反則的なひみつ道具を使っているにもかかわらず、届かない。

圧倒的な怪物の力の前に、二人は戦慄すら覚えていた。

その時、フツ、フツ、とミノタウロスが鼻息を荒げ始めた。

何かに苛立つようにミノタウロスの眼光が鋭くなり、その意味を理解したヴェルフは焦りと共に冷汗を流す。

(畜生、咆哮だ……ッ)

生物の心身を原始的恐怖で縛り上げる、怪物の雄叫び。

それは戦闘中であっても強制停止リストレイトを引き起こす脅威の力だ。

器を昇華し、心身ともに強靱になったベルですら、不意を突かれれば無視できない隙を誘発されるのだ。レベル1の二人がそれをまともに食らえばどうなるか等言うまでもない。

ミノタウロスが何故中層最恐と呼ばれるか。

それはこの強力なモンスターの前では、戦う資格のないものは動くことすら出来なくなるからだ。如何にひみつ道具を持つとも、使い手が恐怖に縛られれば意味がない。

咆哮ハウルの先にあるものが、死であることを理解する二人の瞳が、猛牛の口が開く瞬間をゆっくりと映し出すが、それを許さない者がここにいる。

「【ファイアボルト】!!」

「ルグウツ!?!」

緋色の瞬きが猛牛の顔面に炸裂し、放たれる威圧は意味のない悲鳴として掻き消えた。

何者よりも速い無詠唱の魔法は、ミノタウロス必勝パターンに入る前に動きを潰す。

「ありがとうございます! ベル様!!」

リリの前線登用と同じく、目立つ大きな変化。

それはベルの後衛としての活用である。

ファイアボルトは最弱の魔法だが、それでも弓矢よりも速くて強い。

ベルの【魔力】のアビリティの高さも相まって、このミノタウロスですら無視できない威力があるのだ。

「やっぱり僕も前に……っ」

「駄目だ!! 今は体力の回復に専念してろ! ボロボロだっただろうが」

このような形になったのは、合流前にミノタウロスによって負わされていたベルの負傷に起因する。ベルはエースだが、万全ではない状態でその力が十分に発揮されることは無い。

まずはその身の回復が先決と判断したのだ。

「ベル様の性格に合わない役目なのは分かりますが、お願いします! それと、ハシヤナ様は見つかりましたか!」

「うん、ここから西側にいるみたい!」

「……途中まで同じ方向に流されていたからな。近いだろうとは思っていたが」

それともう一つ。

ベルの尋探木タエチによるハシヤナチの搜索がベルの役割だ。

三人になったとはいえ、状況が悪いのは変わらない。

向こうは無数のモンスターなのだ。

今も戦いに乱入してくるモンスターを、ベルやストーンアニマルたちが排除することで、リリとヴェルフがミノタウロスに専念できるようにしているのだ。

(ミノタウロスを倒すことは出来てませんが、膠着状態ならもう少しは続けられる……なら、ここは無理に倒そうとせずに、ハシャーナ様との合流を優先するべき！)

リリは判断を下すと、ベルに西側への通路を塞ぐモンスターたちの掃討を指示した。ダメージが抜けきつてなくとも、ベルならば他のモンスターは問題にならない。

紫紺と白の線を駆け巡らせ、モンスターたちを切り裂いていく。

そして、ある程度通路の敵がその数を減らしたのを確認し、リリは号令を出した。

「後退します！ 走って一気に距離を……」

「待てリリ助、ミノタウロスが背中に括りつけている斧に気を付けろ！」

「何を……」

「アレは魔剣だ！ 迂闊に背中を見せたら丸焦げだぞ!!」

ヴェルフの言葉にリリは表情を険しくした。

何から何まで異常事態イレギュラーだらけのモンスターだ。

明らかに自然発生した存在ではないだろう。

(誰かの意志が働いている……?)



ステイタスは大したことは無いようだが、自爆の恐怖をよく知る「ガネーシャ・ファミリア」としては迂闊に攻撃はできない。

「ケインズウウウウウウウ!!」

「シャロオオオオオオオツ!!」

「バイブウウウウウー!!」

口々に違う名前を叫びながら迫る狂信者たち。

泣くぐらいならやるなど言いたい。泣きたいのはこつちだ。

別に派閥の幹部と言うワケでもない自分にこんな犠牲を払ってどうするのか。

狂信者たちの爆発がモンスターを更に呼び寄せることも考えられる以上、その前に仕留めなければならぬ。

だが、魔剣を持っていないハシャーナは狂信者たちを倒すためには接近しなければならぬ。

「契約のために!!」

「うおっ!?!」

「汚れた命をもって彼女に!!」

「危な!?!」

「悪の執行による世界是正をおおおおお!?!」

「だああああああああああつ!! うっせえわ!」

この頭のおかしい人たちの叫びを聞き続けた結果、精神的に参ってしまった。変なことを言つては自爆の繰り返しで頭がおかしくなるかもしれない。

(こいつら本当にどつから湧いてくんだよ。実はダンジョンのモンスターなんじゃないか?)

イッパリス 闇派閥が自爆と言う手段を使い出したのは6年前からだ、自爆という狂気的手段を迷いなく実行する狂信者をこれほど確保する方法は謎のままだ。

「坊主たちは無事なのか……」

ベルの実力を考えれば、13階層なら安心してみていられると思つた矢先にこれだ。

もうあの少年は呪われているのかもしれない。

今度のひみつ道具でお祓い系が出たら真つ先に使わせよう。

(坊主を狙つての犯行じゃねえ。いくら何でも無秩序すぎる。そうなるかと別件に巻き込まれたつてことか)

思い当たるのは、先日のシャクティとの会話だ。

ベルの中層への挑戦の前に、先輩冒険者としてあれこれ相談に乗っていたハシャーナは突然、シャクティに呼び出されていた。

『先日の歓楽街での一件は覚えてるな』

『ええ、まあ……』

『その際に得た情報、ロキ派とフレイヤ派の衝突に介入しようとしているイワイルス閻派閥に動きがあった。明日、ロキの一団が中層に向かうらしい』

『遠征前のこの状況で？ まさか……』

『ああ、ロキとフレイヤがいよいよよぶつかるのだろう。我々も閻派閥イワイルスの警戒のために中層に潜ることになる。……ベル・クラネルの潜る13階層に影響はないだろうが、一応警戒しておく』

(影響ないんじゃないのかよ!?)

ロキとフレイヤがぶつかると予想されていたのが16〜18階層。

距離的にもここまで波乱があることはあり得ない。

馬鹿みたいに量産されている狂信者でも、中層全域に配置、などと言う真似は出来ないはずだ。

一体、何が起きているのだとハシャーナは混乱する頭で状況を把握しようとしていたが。

「……畜生、お祓いが必要なのは俺の方か」

「オイオイ、女の顔を見ていきなり失礼な奴だな。お前モテないだろう？」

「うるせー高い酒買えば好感度もうなぎ登りに上がるわ」



「ヒヒツ、しつかり巻き上げられてるじゃねえか」

出来ればもう一生見たくなかった顔に溜息をつく。

【殺帝】アラクニア ヴアレッタ・グレーデ。

どうやら自分たちの予想は外れていたらしい。

ロキとフレイヤの衝突が起こった階層はここだ。

「あの堅物女にこんな辺鄙な所に配置されるなんざ、嫌われることでもしたのかよ？

ナア？」

「ちよつと後輩を大人の店に連れっていっただけだつうの」

（……この言い様。俺がベルたちの護衛とは分かっているのか？ つまり、今回の狙

いはベルじゃねえ）

敵の狙いがベルで、意図的に分断されたという最悪の状況ではないらしい。

最悪まで蟻の一步手間であることは変わらないが。

「まあ、折角殺し損ねたやつを見つけたんだ。遊ばせろよ」

「おいおい……いいのかわよ？ 罠かもしれないねえぜ」

「ハツ……罠ならこの状況で、あの堅物女が出てこねえハズがねえだろうがッ!!」

猛獣のようにハシャーナに飛び掛かるヴァレッタ。

精一杯のブラフも通じなかつたようだ。

余りにも絶望的な状況だが、それでも冒険者の意地を見せつけてやると剣を構えた時。

風が、吹き荒れた。

「ガッー!?!」

金色の人影が迫っていたヴァレッタを吹き飛ばす。

狂信者も、モンスターも、熱狂を忘れて立ち尽くした。

「……援護します」

最強派閥「ロキ・ファミリア」の幹部。「劍姫」アイズ・ヴァレンシユタイン。

単独の戦闘能力ならばファミリア内最強と名高い第一級冒険者の存在を前に、まやかしの強さなど通用しない。

「クソがア!?　なんでここにいんだよ!」  
【おうしゃ猛者】はどうした!?!」

「みんなが押さえてくれている。私はミノタウロスを追っていたんだけど、貴女がここにいるなら、見逃すわけには行かない」

「……つまりはミノタウロスを放つて置いたってワケか!　ハハツ、流石冷酷無慈悲な勇者のファミリアだなア!　そんな奴らが正義を気取ってるなんざ笑わすな!!」

「……問題ない」

ヴァレッタの挑発にアイズはピクリと反応するが、直ぐに冷静さを取り戻す。

同時に、その姿が掻き消えた。

ハシャーナにはそう映った。

「ガフツ……ツ!!」

「貴女を倒して、それから追えばいい」

「舐めてんじやねエぞおおおおお!!」

ヴァレットタの獣じみた声と共に、彼女の周りを白装束の軍団が固める。

鈍色の武装は呪詛装備か。  
カースウェボン

「……今度の奴らはステイタスがかなり高いな。自爆兵じゃない実働部隊か」

「剣姫」と真つ向から打ち合えるだけの強者はいないようだが、向こうは鼻からその気

はないだろう。

どうやら自分にもまだ役目はあるようだ。

「【剣姫】は【殺帝】アラクニアを頼む。そつちも急ぎの用があるんだろ」

「貴方は？」

「あの女さえないなけりやどうとでもなる。頼んだ」

「はい」

アイズはヴァレットタに、ハシャーナは闇派閥たちに向かい、再び火花を散らす。

ヴァレットタの悪知恵さえ封じれば、この階層には「ガネーシャ・ファミア」も到着

している。すぐにも援軍が到着するだろう。

前に仕留めそこなつたハシャーナにこだわったおかげで、ヴァレッタは徐々に追い詰められ始めている。

(状況は依然として分からんが……一先ずの平穩は確保できそうだな)

そうハシャーナが考えたのは当然のことだろう。

ヴァレッタに逆転の目はない。

冒険者としての経験が、そう断言していた。

『さてはて困りましたねえ……私も少しは手助けすべきでしょうか？』

## 換装! 翔兔鎧!!

硝子の割れる音がした。

キラキラと燐光を反射させる破片はその破滅的な美しさ故に、ある意味このダンジョンに映えていた。

驚愕に染まった深紅の瞳が猛牛の大鉄塊を写す。

ミノタウロスの攻撃による装備の損失。

それだけならば迷宮に置いては不幸な事故で済んだだろう。

しかし、その意味するところを冒険者たちは理解できてしまった。

「このミノタウロス、俺たちが尋探木タエ子を確認しながら進んでいることを理解して……つ」  
「何度も何度も……ふざけないでください!!」

ハシャーナとベルたちを繋ぐ希望。

決して細くはなかつたはずの糸が絶たれた。

（僕がミノタウロスの動きに対応し始めたのを見越して、狙いを尋探木タエ子に切り替えるなんて……）

消耗を押さえるために、紙一重で回避していたのが裏目に出た。

相手の狙いと此方の読みの齟齬が、向こうに味方したのだ。

(ふざける……っ。尋探木にまともな耐久力さえあれば……！)

恥辱に顔を赤く染め上げたのはヴェルフ。

大刀が振り抜かれる直前にベルはミノタウロスの狙いに気がついていた。

そのまま左腕も大きく回避に転じたことで、大刀が接触したのは、ほんの髪の毛ほど。

それで破壊されたのだから、これは鍛冶士の失態である。

試作品だったなどと言いつきはできない。

ダンジョンと言う魔境で戦う冒険者の装備だ。

ほんの少しの衝撃で碎けるなど失笑ものの欠陥品である。

「お二人とも切り替えてくださいー！」

真つ先に口を開いたのはリリだった。

パーティーの参謀役として、現状を再分析したりリリは、見かけほど大きな損失はない

ことに気がついたのだ。

「ハシャーナ様がそこまでリリたちと離れている訳がありません。ベル様の装備が示した先の正確な距離こそ分かりませんが、もう姿が見えていてもおかしくない頃です。そして、針がここまで全く動いてないことから……」

「今からその場を移動する可能性も低い、か」

尋探木を失ってもやることは変わらない。

針が示した場所を目指すだけ。

パーティーとしての指針を取り戻したベルとヴェルフは一先ず落ち着きを取り戻した。

(ハシャーナ様が動かないと言うことは、動けない状況にある可能性もあり得ますがね) それをリリが口にするのはなかった。

どのみち自分たちだけでは対応できない状態だ。

虎穴に入っても、活路を見いだすしかない。

「ヴオオオオオオツツ!!」

「くっ」

ミノタウロスの突進じみた剣技がリリを容赦なく襲う。

ライトニングボルトサーベルがあるとはいえ、リリの精神はガリガリと削れていった。

迂闊に攻勢に出れない。

その間にミノタウロスの選定の声が、リリから戦場に立つ資格を奪う。

(リリやヴェルフ様で前衛をするのは限界が来ている……そのフォローでベル様を前線に戻したせいで装備を失ってしまった)



時間稼ぎくらいしかできない己の無力を憎む。

ライトニングボルトサーベルに使われているリリは、ミノタウロスにとつて御しやすい敵に見えているのか、リリを積極的に狙うことでベルやヴェルフに揺さぶりをかけられていた。

(でも、もうすぐ大広間)

ダンジョンで足を止めて防衛に徹する場合、通路のように逃げ場のない場所で戦うのは下策だ。

見晴らしがよく、フィールドを広く使える広間フロアの方が防衛に向いているのは、ダンジョンに潜る者の常識と言えるだろう。

歴戦のハシヤーナならば間違いなく心得ていると考え、リリは通路の先にある広間フロアを本命としていた。

果たしてこの判断は吉と出るか、凶と出るか。

意を決して通路の先へ踏み込んだパーティーの視界に映り込んだのは、尋探木タエ子が導いてくれていたハシヤーナの姿と……

「アイズさん!？」

あまりにもこの階層に相応しくないはずの高嶺の花だった。

中層のモンスター等いくらいても問題ではないであろう、第一級冒険者の姿に僥倖

だ、と喜ぶことは出来ない。

二人の緊迫した表情から、何かが起きてきているのは確実だ。

(白装束の一団……ハシャーナ様が動けなかった理由は闇派閥<sup>イツイルス</sup>?)

違和感がある。

上級冒険者、特に女性冒険者の中では最強とすら謳われている【劍姫】を、それだけの時間足止めする戦力が闇派閥<sup>イツイルス</sup>にあるのだろうか。

漠然とした警鐘を鳴らす脳裏の声に従い、ベルとヴェルフに注意喚起しようとした時、ハシャーナが自分たちに気が付いた。

「坊主!?! 足元に気をつけろ!!」

「それはどういう……」

ハシャーナの不可解な警告に問い返そうとした時、ビシリツと、ベルの脛に痛みが走り、世界が回った。

「え?」

間拔けな声を上げるベルは、臀部に走る衝撃と共に自分が転倒<sup>スリツツ</sup>したことを理解する。

この状況で? なんて、不味い……っ!?

混乱した思考を断ち切るかのように、ミノタウロスの斬撃がベルを襲う。

地を這うような振り上げる一撃。

咄嗟に二振りの短剣で受け止めるが、踏ん張りがきかない。ベルはあつけなく吹き飛ばされた。

「ぐっ、ああああああああつっ!?!」

通路付近から壁際まで叩きつけられる。

もし、衝撃を吸収する兎袋を背負ってなければ、背骨が折れていたかもしれぬ。

自分の代わりに、ぐちゃぐちゃに再起不能となった兎袋の断末魔の感触を背中に受けながらも、ベルは自分に襲い掛かるモンスターたちを切り払いながら直ぐに身を起しました。

「坊主戦えるか!?!」

「大、丈夫ですっ」

「なら気を付けろ! 妙な物を飛ばしてくる奴がいる。当たれば強制的に転倒させられるぞー!」

ハシャーナの言葉に驚愕する。

この混戦において何という極悪な能力なのか。

（闇派閥の新しい手札……?）

ベルは恐怖と共に闇派閥の指揮官らしき女を見るが、その表情を見た時、思考に疑問符がついてしまった。

女は自分に優位な状況ながら、その表情に得意げな色はなかった。

むしろ不可解気にその眼光は細められている。

こんなものは知らない。そう言いたげに。

そして、足元に潜む脅威を知ったヴェルフは声を上げた。

「リリ助! ベルに剣を渡せ!」

「ヴェルフ!? 何を……」

リリの命綱であるライトニングボルトサーベルを何故ベルに渡せと言うのか。

突拍子もない指示にベルは耳を疑った。

「よく分からん攻撃を受けているんだ! 今の半壊した装備じゃ、間違いなくやられる

! 何処まで効果があるかは分からないが、この場で換装しろ!!」

「!?」

「自動戦闘ならできなくないだろ!」  
オートバトル

ヴェルフのとんでもない提案に目を見張るベル。

指示をされたりリリは一瞬の間の後、その指示に従った。

リリの優先順位の頂点はベルだ。そのためならば自分の危機など厭わない。

「ベル様、リリと位置を入れ替えてください!!」

「くっ……【ファイアボルト】!!」

辺りのモンスターと狂信者を炎で一掃し、空白のスペースを確保したベルはリリの下に向かう。

ベルの足音を確認したりリリも、ライトニングボルトサーベルがミノタウロスの大刀を大きく弾くと同時に地を蹴って後退した。

両者が交差する一瞬、赤と栗色の瞳が互いを映し合う。

——ごめん、ありがとう。

——お願いします。

言葉はなく、謝意と感謝、そして信頼を交わし合った。

そして己の手の中にあつたひみつ道具を投げ渡したりリリは、ボウガンを装備し直し、後衛に回る。

リリから剣を受け取ったベルは、裂帛と共にミノタウロスに斬りかかった。

「あああああああつ!!」

「ヴオオオオオオオツ!!」

ぶつかり合う剣が火花を散らす。

ミノタウロスを抑えるにはヴェルフだけでは荷が重い。

ライトニングボルトサーベルを受け取ったベルは、必然的に前に出なければならなかった。

すなわちミノタウロスとの斬り合いをしながら新しい装備を装着するのだ。

「受け取って下さい!!」

リリのバックパックから取り出される半透明の防具……翔兎鎧びよんこが投げ渡される。

元々予備として作られていたとは言え、こんな使い方をすることになるとは思わなかったとベルは頭の片隅で苦笑した。

(……)からだ。気合を入れ直さないと……(つ)

オートバトル  
自動戦闘とは言え、絶対ではない。

戦闘中に鎧を換装する等と言った前代未聞の愚行を為すには、ひみつ道具の補助だけでなく、極限の集中が必要だ。

始まりは胸当て。

ライトニングボルトサーベルを右手に持ち、ミノタウロスに応戦し、左手のみで鎧の装着を試みる。

右腕から伝わる剣戟の振動が、幾度となく邪魔をしたが、何とか装着できた。

ダンジョンでも手っ取り早く装着できるように、装備の手順を簡略化したヴェルフには感謝しかない。

そうでなければ、ライトニングボルトサーベルありでもこんなことは出来なかっただろう。

「…………!?!」

突如始まった愚行に、ハシヤーナも、アイズも、闇派閥イウィルスですら目を見張った。

しかし、それに頓着せず、リリは新たに肩当を投げ渡す。

破損していた兎鎧を取り外し、投げ捨てる。ベルはそれも装着し始めた。

(乱暴に扱ってごめん)

ここまで命を守ってくれた装備に心の中で謝る。

その言葉も猛牛との高速戦闘の中ですぐに漂白された。

鉄と鉄のぶつかり合いが空気を震わせる。

人間たちの戦いが一瞬の間を見出す静の戦いならば、人と怪物の戦いは純粋な力比べである動の戦い。

互いの咆哮と共に、両者は加速した。

「ふっ!!」

「ルグアツ!?!」

ベルは名刀電光丸の時の経験を活かし、ライトニングボルトサーベルの軌道を先読みして、その動きを加速させた。

リリの時とは違う、使い手の技量によって引き出されたひみつ道具の威力は、ミノタウロスを僅かに後退させる。

(受け身一辺倒だと何をされるか分からないっ、攻めろー!)

「ヴオオオオオオツツ!!」

調子に乗るなどばかりにミノタウロスの角撃がベルを襲う。

それを回転しながら大きく躲すベルだが、それはミノタウロスの誘発させた大きな隙。

ミノタウロスは必殺の確信を持って、迂闊にも晒されたベルの背中に大刀を振り下ろしたが。

「ヴオツ?!」

その斬撃はライトニングボルトサーベルの背面受けによつて受け流される。

誘われた、そう理解したミノタウロスの脳に畳みかけるように衝撃が走った。

受け流した勢いを利用したベルの回転蹴りが綺麗に牛頭に直撃したのだ。

ズンツ、と倒れそうになるのを懸命にこらえるミノタウロスだが、その隙をヴェルフは見逃さなかった。

「おらああああああつ!!」

「ヴオガアアアアツツ!?!」

ヴェルフの無銘の大刀がミノタウロスの胴に入った。

レベルーとは言え、この強攻撃を前に怪物から血が噴き出す。



その隙にベルは籠手、脛当ても装着し終えた。

「っ!!」

その時、ライトニングボルトサーベルが反応した。

先ほどベルを転倒させた謎の攻撃が再びベルを襲ったのだ。

自動的に迎撃する剣に弾かれた謎の攻撃、上級冒険者の動体視力はその正体を見逃さない。

(銃系のひみつ道具の時に使う弾に似ている。やっぱり、この攻撃はモンスターじゃなくて人工物!)

下手人は何処にいるのか。

人とモンスターに埋め尽くされた大広間で探し当てるのは至難の業だ。

それに、そんな余裕はベルにはない。

「フツ、フツ……ヴォオオオオツ!!」

「うおっ!?!」

連撃で畳みかけようとしたヴェルフに、ミノタウロスが怒号と共に薙ぎ払いをかけた。

攻勢から一転して防御に徹さなければならなくなった、ヴェルフが苦悶の声を上げる中、ベルは疾走した。

「リリ!!」

「最後です!!」

ヒュン、と飛んできたのはこれまでとは違う緑の輝き。

それを確認すると、ベルはここまで導いてくれた尋探木タエ子の残骸を取り外し、なじみ深くなつたその装備を装着し直した。

グリーン・サポーター。

これを送つてくれたアドバイザーと同じ緑玉色エメラルドの色が頼もしい。

これで換装は完了。

不可思議な弾丸に何処まで対応できるかは分からないが、これで最低限の備えは出来た。

「ははっ……マジでやりやがった」

「指示しておいて酷くない?」

「やれるとは思つたが、本当にやったのは正直引いてる」

「やっぱり酷い」

ベルとヴェルフは軽口をたたきながらも、その視線をミノタウロスから離さなかつた。

冒険者にしてやられて怒り心頭、そんな様子に見えるが、その一方で何処までも冷静

に自分たちを観察しているような視線も感じる。

(強さは全然違うけど、まるであの時の襲撃者のような……)

その時、ベルたちの来た通路とは反対側の通路が爆ぜた。

何事かと色めきだつ人間たち。

その中でアイズは瞳を細め、ヴァレッタは顔を引き攣らせた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!!!!」

「わあああああああ!?!」

「このクソ猪がっ!」

吹き飛ばされてきたのはアマゾネスの少女と、ウエアウルフ狼人の青年。

ベルは見覚えのある人物に目を丸くする。

(あれはベートさんと……確か、ティオナ・ヒリユテさん!?)

憧憬と同じ第一級冒険者が息を切らしている。

衝撃的な光景に絶句する一同だったが、更なる衝撃が襲う。

「ハアツ、ハアツ……」

「……見誤ったか。本当に君は強いな、オツタル」

傷だらけになり、ティオナとベート以上に消耗した様子だが、猛獣のような闘志が迸るその様は最強の存在であることをその場にいた全員が感じていた。

「……なんで【おうじゃ猛者】と【ロキ・ファミリア】が戦っているんだよ」  
ハシャーナの途方に暮れたような声がフロアに木霊した。

## 全ての勢力の勝敗を握る者たち

「ロキ・ファミリア」、「フレイヤ・ファミリア」、イヴイルス闇派閥、その他……様々な勢力が入り乱れる戦場。

フィン は現状を理解しきれていなかったことに、内心歯噛みした。

（何処から見落としていたか……それを考えるのは後だ。優先すべきはミノタウロスとイヴイルス闇派閥の排除。だが、オツタルがそれを許さない）

女神の意向に忠実な猪人ポアズの従者をよく知る身としては、オツタルを無視して他勢力への攻撃を加えることが、どれだけ困難であるか簡単に予測できてしまった。

なにより、アイズの様子が気になる。

何故ミノタウロスが存在しているフロアにいなながら、その討伐を行っていないのか。

イヴイルス闇派閥如きに止められる彼女ではない。ならば……

「注意しろ！ イヴイルス闇派閥以外の何者かが潜んでいるー」

勇者の号令に団員たちは疑問を持ちつつも従った。

フィン・ディムナの超常的な頭のキレは「ロキ・ファミリア」ならば周知のこと。

それに反発する理由はない。

「一々邪魔してんじやねえ！ このデカブツがツ!!」

尚も立ちはだかる【おうじゃ猛者】を前に、ベートが怒号と共に斬りかかった。

目の前の男は最強とは言え、【ロキ・ファミア】の幹部たち複数人とやり合つて勝てるほどの存在ではない。

一気に勝負を決めた後、ミノタウロスもイワイルス闇派閥も蹴散らせばいい。

フィンの言う姿の見えない何者かが介入しようと思つて関係ない。姿を見せたところを引きずり出す。

「がるああああああつ!!」

「……」

闘志を漲らせて向かつてくる若い狼に、オツタルは無言で大刀を向ける。

岩のように佇むその男に渾身の一撃を放とうとした時、パアーンツ、と破裂音が響いた。

（来たか!）

コソコソと戦いの陰に隠れて狙い撃つ卑怯者。

フィンの忠告により、予めその存在を予期していたベートは飛んできた弾丸を目視する。

こんな小さな鉄の塊蹴り飛ばしてやる、と装甲に包まれた脚で受けた彼は。

「……あ?」

突如その体のバランスを崩し、転倒した。

思わぬ失態に目を白黒させるベートに容赦なく襲い掛かる一刀を、同じく身の丈ほどの大双刃ウルガでティオナが防ぐ。

「コラー!? 何勝手に突っ走って、何勝手に転んでるのさー!?」

「違エ、これは……」

「いいわけなんて聞かないからね! どりゃあああああああつ!!」

「オイコラ!? 話聞け馬鹿ゾネス!」

オツタルの大刀を弾きつつ、頭上で大双刃ウルガを振り回しながら突撃するティオナだったが、そんな彼女の耳に再び発砲音が入った。

そして次の瞬間、彼女はスッテーンと前のめりに転がる。

「ぐえー!」

「言わんこつちやねえな! その寂しい胸みてえに脳みそもねえのかテメエは!」

岩を削る勢いで滑るティオナにベートは唾を吐きながら怒鳴りつけた。

彼女は馬鹿だった。

「……」

「うわわわっ!」

オツタルは何処か困惑した雰囲気を感じながら、無言で大刀を叩き込む。

それを転がりながら慌てて回避する少女。

喜劇の様だが割とピンチだ。

「全く、もうちよつと落ち着いて行動することを覚えようか」

そこに小人族バルウムが割って入る。

指揮官としての印象が先行しているフィン・ディムナだが、それは彼が直接戦闘で劣ると言うワケではない。

同派閥の団員や古くからの腐れ縁であるオツタルからすれば、むしろ勇者自ら前に出たことの意味を重く受け止めるだろう。

【勇者】

ブレイバー  
デナトウス  
神会において定められる冒険者の二つ名。

その中でもこの簡素シンプルな響きを持つこの名は、厳密には神々によって命名されたわけではなく、自薦によるものと言う異色の由来を持つ。

神々がこのような例外を認めたのは、彼がその二つ名に名前負けすることが無いと確信していたからだ。

その知識も。その勇氣も。

そして、その武勇さえも。勇氣を示す者の名に相応しい。

「……お前とやり合うのは予想外だった」



「だろうね。君にとつては想定外だらけの戦場と言うワケだ。同情するよ」

遠心力を伴つた薙ぎ払いがオツタルの頭部を狙います。

槍が空気を切り裂く音で、既に先の二人とは桁違いの力が籠められることが見て取れる一撃に、猪人ポアズの武人は初めて防御の構えをとつた。

爆発音と聞き間違えそうな轟音が響く。

周囲の恐怖と畏怖を搔つ攫う両者のぶつかり合ひは正に異次元の戦いだ。

「ベートー・テイオナー！ 今のうちにミノタウロスを仕留めろ！ 女神の戯れに付き合う必要はない」

オツタルが妨害行為に及んでいるのは、間違いなくミノタウロスとベル・クラネルの戦いが原因だ。

その根本を断ち切ればオツタルは退くだろう。こんなことで一々逆上する性格ならば武人呼ばわりはされていない。

即座に最適解を弾きだしたフィンはたった一人で「おうしや猛者」を抑える。

本気で倒すつもりならば切り札を切る必要があるが、時間稼ぎだけならフィン一人で十分だ。

団長の意向を受けて駆けだす二人。

「余計なことさせんじゃねえ！」

ヴァレットタも【猛者】（おうじや）を【ロキ・ファミリア】にぶつけていなければ、閹派閥（じぶんたち）が確実に殲滅されることを理解し、狂信者たちに指示を出した。

雄たけびを上げて白装束の亡者たちが二人に殺到するが。

「失せろ雑魚以下のカスが」

「邪魔しないでよねーっ!!」

第一級冒険者たるベートとティオナの敵ではなく、あつという間に蹴散らされていく。

鋼鉄のメタルブーツで蹴り飛ばされ、大双刃（ウツルガ）によって頭を横殴りされて吹き飛ぶ。

数秒にも満たない刹那の間で戦いは終了していた。

「……っち」

それを見てヴァレットタは舌打ちをする。

心底気に食わないと言った様子で糞つたれがと吐き捨てた。

こんな時だけ思い通りに動いてるんじやねエよ、と。

「結局ヤローの思う壺じやねえか馬鹿らしい」

『ええ、まあ。こちらでもヴァレットタさんをやられるのは色々と不都合でして、【ロキ・ファミリア】にはご自重頂きたく』

不意に、ヒュンと虚空から何かが投げ出された。

感覚の鋭い冒険者たちは一斉に視線を向け、眉をひそめる。

それは奇怪なアイテムだ。魔石灯のようにも見えるが、取っ手部分は伝え聞く銃と言  
う武器のような……

このアイテムの意味を知り、表情を強張らせたのはベルたちだ。

良く知っている。間違うはずがない。

それは先ほども自分で自分たちの下にあつたものなのだから。

(武器よさらば灯っ!!)

その絶大な効果に散々助けられた故に、その危険性も十二分に理解できる。

ベルの手元から離れていたひみつ道具が向かう先は……ミノタウロス。

ミノタウロスの視線も武器よさらば灯に向いていた。

それを確認した時、ベルの中にある不安感は頂点に達する。

「させない……っ」

ライトニングボルトサーベルを駆使して斬りかかるベルだが、ミノタウロスは異様な  
勘の鋭さでベルの攻撃を尽く退けた。

完全防御も、必殺の太刀も、もう知っていると云わんばかりに。

それでも妨害し続けていれば、ミノタウロスにあのひみつ道具が渡ることは無い。

自動戦闘に従い、目の前の敵を切り倒す最適解をなぞるベルの身体。

それに対し、ミノタウロスは唸り声と共に切り札を手に掛けた。

「フウツ、フウツ、フウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……」

（何を……）

肩に背負っていたのは斧。

金の装飾が施された、とんでもない業物だと分かる逸品。

ヴェルフ曰く、魔剣。

それを抜き放ち、魔力を帯電させる。

「ヴオオオオオツ!!」

「なっ!？」

そこでモンスターは予想外の行動に出た。

魔法を発現させたその剣を持ったまま斬りかかってきたのだ。

魔剣は魔法を放つ遠距離武器。そんな人間の常識の裏を突く魔物の不意打ち。

ベルが全く予想だにしていけない攻撃にも、持ち前の自動戦闘<sup>オートバトル</sup>で反応するライトニング

ボルトサーベルだったが。ベルは青ざめた。

（違う！ 罠だ！）

ベルの急制動も間に合わず、ライトニングボルトサーベルと雷の魔剣はぶつかり合った。

そして、光が少年と猛牛を包む。

「ヴォガアアアアアアアアアツツ!!」

「うわあああああああつっ!?!」

罅迫り合いをした状態からの感電。

至近距離で直撃した雷属性の魔法がベルの体を包んだ。

絶叫を発しながら、ベルはミノタウロスの取った策に戦慄した。

ベルの絶対防御を前にしたミノタウロスの戦術は単純だ。

防がれてもダメージを与えられるようにすればいい。

そう、つばぜり合いした状態で魔法が放たれれば、サーベル一つで防げるはずがない

のだから。

(ま、ずいっ……!)

この戦法はある意味自爆だ。

魔剣から発せられた魔法は暴発し、使い手自身も苛んでいる。

人間だつたらまごう事なき愚行。

しかし、受けるのがミノタウロスならば話は別だ。

モンスターの方フネスは、冒険者がどれだけ「耐久」のアビリティを鍛え上げた所で

マネできるものではない。

ベルとミノタウロス。

感電し続ければ、先に限界が訪れるのは間違いない。ベルだろう。

いや、そんなことはどうでもいい。

いま懸念すべきことは他にある。

(体が、痺れて……っ。止められない……!!)

雷属性攻撃の特徴。

痺れる雷撃は稀に行動不能を引き起こす。

まるで動けない自分の体を意識が遠くから見守っているようだ。

そんな自分の前で、ミノタウロスが武器よさらば灯を持った。

(隙が出来るけど、もう消去するしかない。でも、体の痺れがスキルの効力を鈍らせてる

……っ)

ひみつ道具の消去には、そのひみつ道具を想起しながら消滅を念じる必要がある。

だが、このひみつ道具の想起が問題だった。

頭の中で描くイメージにはある程度の精密さが必要とされるため、ベルは目を閉じて数秒程念じると言うたびきりの隙を晒してしまう羽目になるのだ。

常のモンスターでも自殺行為。

この異常事態個体の前でやるなど正気の沙汰ではない。

故に武器よさらば灯を紛失した後も、ひみつ道具の消去が出来なかつたのだが、完全に裏目に出してしまった。

致命傷覚悟で目を閉じて念じるがもう遅い。

「……………えっ？ あたしの大双刃ウルガが!?!」

「何だコレ……………つて、テメエか！ 兎野郎!!」

「ぐ、ぐめんなさい……………」

テイオナの大双刃ウルガはサツマイモに。ペートの双剣は小松菜に変化していた。

さて、彼らは第一級冒険者冒険者だ。当然、その装備が安い筈もなく…………

中には億近い値段が付くこともあると、ヘファイストスの店で私服のエイナに教わっていたことを何故か今思い出した。

「つてヤバ!?!」

「ツチ、鬱陶しいんだよ！ モンスター共が群れていやがつて臭いが辿れねえ！」

武器を失った二人にすかさず発砲音。

謎の弾丸を大きく回避する二人は、相変わらず居場所を特定させない厄介な相手に辟易する。

フィンは二人に後退を指示すると、目まぐるしく頭を回転させる。

(姿の見えない敵に武器の紛失。こうなると僕たちだけで動くのは難しくなる。せめて

姿の見えない敵さえどうにかなれば……)

オツタルと幾合にも及ぶ斬り合いの最中、何度目とも知れぬ発砲音が響く。その瞬間、フィンの親指が疼き、フィンは即座に槍を回転させた。

直後に鳴り響くギイン、と言う音がフィンの直前までの危機を教える。

しかし、安堵する暇はない。

「オオオオオオオオオオオオオツツ!!」

「くっ……」

謎の弾の対処によって乱れたフィンのリズム。

生まれながらの戦闘者であるオツタルがそれを見逃すはずがない。

あつという間に主導権を握られたフィンは苦悶の声を漏らした。

もとよりレベル7とレベル6。

善戦できたのは偏にフィンの戦術眼が優れていたからに他ならない。

基礎的な条件では圧倒されているのだから、順当な結果に戻ったというのが正しいの

だろう。

(指揮を放棄するか……?) 駄目だ。条件がそろってない。団長である僕しかこの流れ

は読み解けない)

切り札を検討するにも、フィンの切り札は諸刃の剣。



戦闘者としてのフィンは桁外れに強化されるが、指揮官としてのフィンは失われる。打開の手段見つけられてない状況で、狂戦士になることは許されない。

(親指頼りに敵をあぶり出す……不可能だ。僕の直感はそのような便利な代物じゃない) オツタルを前にして先の見通せない賭けなどできない)

姿こそ見えないが、敵が非常にクレバーな存在であることはここまでの動きで推測できた。

モンスターと人の合間を縫うその手腕はいつそ芸術的ですからある。

勘がいいだけの冒険者など、簡単に攻略されてしまっただろう。

(弱点……天敵が必要だ。姿の見えない何者かをあぶり出すには、その攻撃を受け続けられる……)

また、発砲音。

思考を中断させ、辺りに気を配る。

親指は鳴らない。ならば対象は自分以外。

「ぐっ……」

そして、少年の声と共に弾かれる音が続く。

謎の弾が転がる音は、たちまち猛牛の雄叫びにかき消された。

狙われたことにも気づいていなかった様子で目を白黒させていたベルは、その声に呼

応するように自らも吠えた。

「ヴオオオオオオオオオオオオッ!!」

「ああああああああああつ!!」

少年と猛牛の攻防の中で。

勇者は思わず目を見開いた。

(そうか、彼が)

姿の見えない何者かとその攻撃を意にも介さないひみつ道具。

この場で唯一、ベル・クラネルだけが安全圏から、この難敵を打破できる。

チラリ、と闇派閥イヴィルスの指揮官であるヴァレットタを盗み見る。

彼女もベル・クラネルの持つひみつ道具の可能性に気が付いたのか、表情を歪めていた。

「ベル・クラネルを援護しろ!」

「ミノタウロスの邪魔をさせんじやねエ!」

指揮官たちの指示はほぼ同時。

姿の見えない敵は自動防御ができるベル・クラネルしか倒せない。

自動防御を持つベル・クラネルは、防御を突破できる魔剣を持つミノタウロスにしか倒せない。

フロアの中心で戦うベルとミノタウロスに殺到する両勢力。

しかし、そこに介入するものが一人。

「邪魔はさせんと言った筈だ！」

「くつ、オツタル……っ！」

女神の意思に従う武人が、勇者を突破してベルとミノタウロスの戦いに近づく者たちの前に立ちふさがった。

「……おい、イカれ野郎。テメエ、ナニやってんのか分かってるんだろオナ？　ロキだけ

じゃなく、闇派閥アタシともやりあう気かよ」

ヴァレッタの理解できないと言いたげな表情に、オツタルはなにも答えない。

否、ヴァレッタなど興味もないと、背後の戦いを一瞥した後、宣誓した。

「全ては女神の願いのままに……」

「遺言はそれでいいんだな!!」

「いい加減退いてもらおうか!!」

勃発した三つ巴の戦闘。

都市最強と言えども多勢に無勢、本来ならば對抗しきれない筈だ。

しかし、「ロキ・ファミア」と闇派閥イヴァイルスは互いが不倶戴天の敵。

協調などできるわけではない。

それを見越したオツタルの立ち回りもあり、状況は膠着し、彼らは最早見守るしかないとなった。

嵐の中心。少年と雄牛の決闘を。

この場の全ての目が二人に向いた。

## 電光雷轟

大剣が迫る。

凍るような殺意が込められたそれを前に、怯む心を奮い立たせて迎撃した。

その名前の通り、稲妻のような速さで僕の反応以上に的確な対処をする剣は正に絶対防御。

だが、僕はこれっぽっちも安心できなかった。

「ヴオオオオオオオツツ!!」

「がっ!!……ま、たっ!」

続けざまに放たれた雷を纏った斧が振り抜かれ、防御の上から感電する。

大剣と戦斧の二刀流。

人間なら間違いない腕が壊れるであろうバトルスタイルは、生粋の怪物であるミノタウロスの身体能力によって僕の前に顕在した。

(何時になったら耐久限界が……っ)

魔剣は一定回数使用すると砕け散る。

ヴェルフの忌み嫌う運命が僕の希望だった。

しかし、砕けない。

既にこの身が浴びた雷は3回。

魔劍の耐久力について詳しく知っているわけではないが、ミノタウロスがどのような経緯でそれを手に入れたにせよ、ここに来るまで一度も使わなかったとは考えにくい。

既にそれなりの数は使ってきたはず。

(なのに砕けないなんて、ひよつとして凄い鍛冶士の作品なんじゃ……)

この攻防は終わらない。

漠然とした不安が頭に浮かんで消える。

錯覚だ。追い込まれてるせいで馬鹿げた妄想に騙されているんだ。

大劍の降り下ろしをライトニングボルトサーベルで弾き、雷鳴を轟かせる戦斧を跳躍して回避する。首筋に掠めた鳥の鳴き声のような甲高い音に、引き攣った安堵をこぼした瞬間をミノタウロスは見逃さない。

「がっ……ぐはっ!」

腹部から押し上げる圧力。

ベルの体がかくの字に折れ、霞んだ瞳が腹部に突き刺さるモノを映す。

丸太のように大きな怪物の脚。ミノタウロスの蹴りだ。

武器に気を取られ過ぎた。

自分の迂闊な判断を恨む暇もなく、背中に感じる熱さ。

ミノタウロスの肘内が宙に浮かび上がっていたベルの背中に突き刺さっていた。

手に力を入れて武器を失う事は防いだが、それ以上は動けない。

(息、がつ……)

衝撃で肺から全ての空気が吐き出され、意識が断絶しそうになるのを懸命に繋ぎとめる。

地面に勢いよく叩きつけられ、痛みが脳に危機信号を伝えるが、それに従って悶える暇はない。

(次、来る、備えろッ!!)

麻痺しそうな感覚の中、何とか地面を殴りつけて体を無理矢理仰向けにする。

そして視界に映り込んだのは雷の魔剣を叩きつけようとしているミノタウロスの姿だった。

「う、ああああ、あ、あ、あ、あ、あ、つつつ!」

血を吐きながら、半ば悲鳴じみた声を上げてライトニングボルトサーベルを構える。

オートバトル  
自動戦闘に従い、ぶつかり合う武器と武器。

そして、雷光が少年と猛牛を再び包む。

「~~~~~つ!」

「フウウウウ、ウ、ウ……ッ」

両者を魔力の奔流が苛む中、銀の光が瞬いた。

ヒュンツ、と風を切つて突き進む鎌。リリの援護射撃だ。

ミノタウロスの眼球を狙つて放たれたそれは、ミノタウロスの角によつてあつけなく弾かれる。

「ベルツ!!」

「……くっ、おおおおお!!」

だが、その動作で浮いたミノタウロスの頭にヴェルフが大刀を振り下ろす。

同時に、ベルが戦斧を弾き、飛び上がるようにミノタウロスに襲い掛かった。

右腕の照準を構え、伸蛙ノビエールを発射する。

ヴェルフによつて鋭く鍛えられたキラーアントの牙が、フロツグシューターを模した籠手から飛び出す。

中層のモンスターであろうと貫通できるであろう一撃は、ミノタウロスの凄まじい反応速度によつて紙一重で回避された。

「うおっ!」

更にヴェルフの大剣に、猛牛の大剣を合わせて吹き飛ばす。

出鱈目な身体能力。



人間の連携など歯牙にもかけない怪物の特権。

(まだだ！)

それに対し、ベルは諦めなかった。

ミノタウロスを凝視し、今できる最大の攻撃方法を模索する。

ミノタウロスの視線がヴェルフからベルに向かう瞬間、ベルは一步先に踏み込んだ。

目指すべき場所は、ヴェルフに対応するために踏みしめられた左脚。丁度ベルの腰の高さほどに位置する膝関節部。

そこに足を踏みつけたベルは、更に勢いよく踏み込んだ。

びん弾ブーツ トリガー  
兎弾足の起動動作だ。

靴の裏から発せられる衝撃波は、ミノタウロスの膝関節部を粉碎し、ベルの体を上へ押し上げた。ミノタウロスの絶叫すら置き去りにして、ベルはさらに伸蛙ノビエールを巻き上げる。

ミノタウロスの画面から外れたキラアートの牙は、迷宮の天井部の岩に深く突き刺さり、アンカーとなってベルを上空まで引き上げた。

「ヴォッツ!!」

驚倒の音が遠く響く。

自身の反応すら追いつかない超加速に身を委ねながらも、ベルの体は動いていた。

「せああああああああああっ!!」

思い切り振り上げる渾身の右膝。

ジャンプニキック  
飛び膝蹴りは深々とミノタウロスの顎に突き刺さった。

「オゴオツ!？」

白い砲弾となったベルの一撃は、頑強なミノタウロスであっても防ぎきれず、口から血を噴出してその巨体をグラリと揺らめかせる。

更にベルは空中で反転。魔石を補充する。

天井に両足を付けると再度加速した。

跳ね上がる形で上空に向けられていたミノタウロスの視線は、そこで目にする。

己に真つ直ぐな視線をぶつける白い少年の姿を。

「いっけえええええええええ!!」

無理な軌道に自身も、傷ついた内臓から流れた血を吐き出しながら。

それでも目の前の敵を打破せんと声を上げる。

ヘステイアナイフを勢いよく鞘に納め、もう一つの衝撃を繰り出さんと<sup>まなじり</sup>毗を吊り上げ

た。

「オオオオオオオオオオオオオオツ!!」

それに対し、猛牛も咆哮をもって応える。

激突する人と怪物。

両者は無限とも思える戦いに没頭していく。



「ベートはヴァレッタを討て!! 僕とティオナでオツタルを退ける!」

「ああ!? 三人でやった方が速えだろうが!」

「そうしたいのはやまやまだが、その女を野放しにするのは危険だ!」

「何だよクソ勇者ア! いたいけで無力なアタシを捕まえてよオ!!」

「その軽口に付き合う気はない!」

ベルとミノタウロスが死闘に没頭する中、その周囲を囲む彼らの戦いも混迷を極めていた。

騒ぎを聞きつけて集まってくるモンスターたちのせいで、まだまだこの慌ただしい戦いは終わらないだろう。

熱されている。

誰も彼も、この激闘の中で吠えていた。

ここはある意味オラリオと言う都市の縮図だ。

ギラギラと眼光を光らせる者たちが、自分たちの望む物のために命を燃やしている。

そんな戦いを凍った心で見つめる者がいた。

「……」

その身体の熱はない。

その心に誇るべき物などない

世界が隔絶されたように、彼女はあらゆる雑音を通り過ぎる。

(これなら、外さない)

この場の誰もが目の前の敵に夢中。

暗殺者にとってこんなにもやりやすい条件はないだろう。

これなら使命を果たせる。

ベル・クラネルを亡き者にすると言う、黒幕エニユオの命令をようやく。

「……」

少年と猛牛は殺し合っている。

既に周りの情報など忘れて、まるで世界に一人と一頭しかいないかのようにお互いしか見えていない。

奇妙な話だが、お互いの死を望みながら、その実その存在を求めているようにも見えた。

「馬鹿馬鹿シイ……」

くだらない雑念ノイズを切り捨てる。

余計なことは考えなくていい。

ファイルグイス

私はエニユオの忠実なる駒だ。

エイズン

私は残酷なる殺戮の使徒だ。

深く、深く、仮面を被れ。

もうこの手は穢れ、手遅れなのだと思い出せ。

まるで冒険者のような夢ある思考など必要ない。

やるべきことは変わらないのだから。

「【一掃せよ、】」

魔力が吹き荒れる。

よかった。ここに魔力をふんだんに使う標的ターゲットがいて。

これなら、初動だけでは勘づかれない。

あの厄介な【勇者】の直感が働いても、この魔力が敵性存在の攻撃か、ベル・クラネルの装備によるものかは一瞬では判別できず、僅かな思考を欲するだろう。

その一撃で勝負をつける。

「【破邪の聖杖いかすち】」

この魔法が発現できたきつかけは何だったか。

なんにせよ、あまりにも皮肉な詠唱だ。

邪なるこの身が使う魔法がよりにもよってこれ。

神々はそんなことをしないと云っているが、自分には運命を弄ぶ何者かの存在を感じずにはいられない。

自嘲することすらもう疲れた。

いいじゃないか、楽をしたって。

一度穢した手は、ずっと穢れたまま。

奪った命はもう取り戻せない。

出来もしない贖罪に生きてなんになるのか。

人が許すのを決めるのがその人自身ならば、とつと許してしまおう。

だから、もういいのだ。

考えるな。希望を抱くな。救われようとするな。

あの山吹色の慈愛に惑わされるな。

「……」

詠唱はもう完了している。

後は放つだけ、卑怯にも決闘の横槍について、目標を抹殺するだけ。

もはや仕事は九割九分終わったも同然。

なのに、どうして躊躇するのか。

(お前は本当に愚かだな)

黒い、声がする。

フィルヴィス

私と同じ、だけど決定的に違う声。

フィルヴィス

(ああ、選べないよなあ？ だからお前は私なんだ。

一体お前は何度あの方を邪魔す

るつもりだ？)

その通りだ。

フィルヴィス・シヤリアはずっと未練を抱えている。

戻りたいと、噴飯物の願望を捨てきれないのだ。

(もういい、私が代わる。ずっとそうやって来たんだ)

そうだ。

ずっとそうだった。

エイン

私はあの方の忠実な僕で。

エイン

私は冷酷無慈悲な怪人で。

エイン

私は絶対に迷わない。

あの日。

全てが狂ってしまったあの日からそれは変わらない。

これからも変わりなどしない。

仮面が嗤う。

暗黒の使徒らしく、素顔など放り捨てて。

これでいい。こうであると定めたのは他でもないフィルヴィス・シャリアなのだから。

悲劇があつた。狂乱があつた。

逃れようのない行き止まりがあつた。

しかし、結局選んだのは自分自身。

ならば、責任を最後まで持たなくては。

(私の生き方は変わらない。私はエイン。エニユオの忠実なる僕だ)

答えは出た。

これ以上の葛藤は不要。

ターゲット 標的を逃さないように、エインは冷たい眼光で戦場を見下ろす。

「……あ」

だから気が付いてしまった。

熱に浮かされず、冷静な目で見る事が出来るから。

戦場の狂乱に隠れて、ある人物に向かう男に。



その男の名は知らない。

だが、その男が闇派閥であることは、その手に持つ鈍色の呪詛装備カースクウェポンによつて推測できた。

回復不能の凶器をもつて向かう先は……

(レフィーヤ……)

血の気が引いていく。

レフィーヤは魔導士だ。

その役割は大魔法によるモンスターたちの殲滅。

フィン・ディムナがレベルに劣る彼女をパーティーメンバーに加えていた理由は、その圧倒的火力に他ならない。

戦況を覆しうる妖精の魔法は、様々な英雄譚に伝わるほど強力無比。

それを使える彼女を抹殺するという思考は合理的だ。

絶望的な位に合理的だった。

(誰か、気が付いてないのか……?)

レフィーヤ自身は詠唱を維持するのに必死で隠密に気が付けない。

ベート、ティオナはそれぞれの敵に集中して気が付いていない。

アイズはそもそも距離が離れすぎている。

フィンハ……何かに気が付いたように目を見開いた。

冷静沈着な彼にしては珍しく、弾かれるように後方を振り返る。

その視線の先はレファイヤだ。

その小人族バルウムの体を向かわせようと、動き出す。

【おうじや猛者】は、今までベル・クラネルの下に向かおうとしていたフィンの奇妙な行動に眉をひそめるが、こちらに來ないのならばそれでいいと見逃した。

【ロキ・ファミリア】の団員たちは、団長の突然の転身に戸惑いを隠せないようだ。

そしてヴァレッタは……唇を吊り上げて、哄笑と共に自爆兵を突撃させた。

そこからフィンの判断は早かった。

一秒の間に槍で狂信者たちの自爆装置を破壊、及び吹き飛ばす。

だが、その一秒が致命的だった。

ズドンツ、と発砲音。

同時にフィンの体が倒れ込んだ。

勇者の焦燥をついた鮮やかな手口は、姿の見えない闇派閥イヴィルスの切り札だろう。

(レファイ………つ)

間に合わない。

もう男はレファイヤに接近している。

前にパーティーを組んだから分かる。

レフィーヤの近接戦技術は高くない。むしろ、レベル3としては低すぎるほどだ。並行詠唱もまだ練習中と話していた少女に対処できるのか。

男は恐らくレベル4だというのに。

「……っ」

切っ先が赤い華を咲かせる寸前。

エインの中にレフィーヤとの思い出が蘇った。

諦めきっていた時に見つけてしまった希望。

穢れ切った自分の中に芽生えた綺麗な宝物。

それが奪われる。

あの笑顔が永遠に失われてしまう。

そう、思ってしまった。

「……ッ【ディオ・テュルソス】!!」

黒い雷が走った。

その行く先はベル・クラネル……ではなく、今まさにレフィーヤに襲い掛かろうとしている男。

「えっ？」

「っ!? 新手ですか!?!」

細目の男は間一髪魔法を避ける。

第一級冒険者にも劣らない魔力の塊に冷や汗を流す中、遅れて金髪の小人族バルウムが槍を振るった。

反応も許されず壁に叩きつけられる男。

レフィーヤはようやく自分の身に迫っていた危機に気が付いたのか、慌てて杖を構える。

「クフフツ……これが世界に轟く小人族バルウムの勇者の力……っ。勉強になりました」

「……見ない顔だな」

「おやおやこれは心外ですなあ。これでも闇派閥イザイルスに身を置いてそこそこ長いのですが」

「君が何者かはあとでじっくり聞こう」

「ふふっ、そうしたいのはやまやまですが……流石にお遊びが過ぎました。連れ戻されてしまうようですよ」

「何?」

何の前触れもなく。

男の姿が虚空に消える。

「だ、団長……!?!」

「……辺りに気配はない。本当にいなくなつたのか……？　なにせよ、このままでいるのは危険だろう。アイズと合流してくれ。こつちもそろそろテイオナが不味そうだし、釈然としないものを感じながら、再びフィンはおツタルとの戦闘を再開する。

レフィーヤもフィンの指示に従い、アイズの下に向かった。

その一部始終を見ていたエインは地面にへたれ込み、呆然と自分の手を見ていた。

「なんで……私が……？」

様々な者の想いを置き去りにして。

戦いは決着へと加速する。

## 物語の一ページ目

強さとは何なのだろうか。

冒険者ならば一度は考えたことがあるであろう疑問。

求めるほど遠のくもの。

自分自身を超える力。

手に入れることが出来ない余り、憎いとすら感じるもの。

答えは人によって多種多様なだろう。

オラリオに来てから、アイズも様々な考えを知った。

そしてその度に思う。自分は何のために強さを求めたのかと。

「ああああああつ!!」

少年は吠える。

冷ややかに佇む薄暗闇の迷宮に熱を灯さんとばかりに。

加速し続ける連撃が幾千もの瞬きを煌かせた。

「ヴオオオオオオツ!!」

雄牛は猛る。

混沌とした戦場に己の存在を刻み込むかのように。

紫電を伴う一閃が岩盤の破片をまき散らした。

互いはその身を血に濡らしながら、それでも戦いを止めなかった。

痛みに表情を歪めながら、振り絞るように己の全てを眼前の敵にぶつけ尽くす。

「……」

その戦いは決して高度なものではなかった。

彼らの周囲に展開する戦場の中には、彼ら以上の力と技量をもって戦うものは何人も  
いる。

だが、この戦いの中心は紛れもなく彼らだった。

熱かった。

ぶつかり合う鉄と鉄の音は心音のようで。

命の鼓動はここにあった。

既に何度目とも知れない雷の魔力が二人を包む。

体を蝕む魔法に苦悶を漏らす少年は、歯を食いしばって目を見開く。

「ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……!!」

壊れた背囊から太鼓型のひみつ道具を取り出す。

鏝ぜり合うサーベルで左手がふさがっている状況では、使用できないと油断していた

ミノタウロスの疑問をよそに、ベルは力いっぱい自分の左肩を太鼓で叩く。

「ヴオガアアアアアアアッ!」

その瞬間、ミノタウロスは爆発的に増大した雷の威力に絶叫する。

太鼓型のひみつ道具を至近距離で放ったことで、ミノタウロスの想定以上の雷がその身を焼いたのだ。だが、その余波はベルの体にも届く。

長期的に見れば、この行動でベルの方が受けたダメージの方が多い。

しかし、ベルが欲したのは想定外のダメージでミノタウロスが怯んだ一瞬。

その一瞬を埋める魔法がベルにはある。

「がつ、ツツ!」【ファイアボルト】オオオオオオオオオオオオ!!」

太鼓型のひみつ道具を投げ捨て、速攻魔法を叩き込む。

洞窟のダンジョンを炎が照らす中、煙の臭いが広間フロアに充満した。

よろめくミノタウロスにすかさずベルが腰に装備された黒色のナイフを繰り出す。

爆発音と共に圧倒的勢いで一閃。

ミノタウロスの隻角を砕き。

中層最強の所以となる武器を奪った。

「ヴオツ……オオオオオオツ!!」

これまでベルを翻弄してきた変則的攻撃を封じられたミノタウロスだが、その闘志が



衰えることは無く、大剣と戦斧の二刀流でベルを圧殺せんと殺意を滾らせる。

(やっぱり、あのミノタウロスは何かが違う)

モンスターが最大の武器を失った場合、大人しくなるわけではないがその殺気は多少なりとも鈍るものだ。本能で動くモンスターには恐怖だつてある。

だがあのミノタウロスにはそれが見られない。

むしろこれまで以上にその気迫は練り上げられているとすら感じられた。

「フウウウウウウウウウウッ!!」

ミノタウロスの大剣をベルがサーベルで受け止めるが、ミノタウロスは力任せにベルを防御ごと吹き飛ばした。

咄嗟に右腕の装備を飛ばし、ミノタウロスに巻き付けるベル。

先ほどのようにロープを巻き上げて再度接近を試みるが。

同じ手は通じない。

ミノタウロスは巻きつけられたロープに戦斧を翳す。

「しまっ……うわああああああ!?!」

ロープを伝い、流れてくる電撃。

これまでとは違う一方的な魔法攻撃に、自らの失策を悟ったベルは黒塗りのナイフで右腕の装備を切り離れた。

「ハアツ、ハアツ……」

電撃の影響か、頭をぶんぶんと振るベルにミノタウロスが突撃する。

ベルによつて破壊された膝のせいで、ミノタウロスの代名詞である突撃攻撃チャージは出来ないようだが、その巨体は加速を付けなくとも十分な脅威。

（大剣による押し潰し……はフェイク。本命は魔剣）

アイズの分析と同じ答えを出したらしいベルは、敢えて大剣に向かった。

ここまでミノタウロスの攻撃を逸らすことにより攻撃を防いできたが、ミノタウロスから機動力が失われたのなら話は別だ。

ベルはその加速力で最初の大剣を抜き去り、ミノタウロスの斜め右側の死角に潜り込んだ。

（剣だけじゃない。ちゃんとミノタウロスの体の動き全体に気を配れている）

アイズの教えを忠実に守った集中の配分。

それはミノタウロスから更に武器を奪った。

大剣を持つ右手の甲に深々と突き刺さるナイフ。

当然、ミノタウロスの右手から大剣を持つ余力は失われ、ダラダラと流れる血と共に、大剣は音を立てて迷宮の床に転がった。

「ツツ！！」

「うっ!? まだ!？」

だが、ミノタウロスは血を流す右腕でベルを殴りつける。

余りにも早い切り替えに、ベルは反応しきれずに打撃を受けてしまい、ナイフは右手に刺さったままベルの手から離れてしまった。

ひみつ道具以外で唯一通用する武器の紛失。

ベルはエメラルドグリーンの防具から両刃短剣<sup>バゼライト</sup>を引き抜く。

(駄目、それは通じない)

モンスターや狂信者を退けつつ、アイズは追い込まれ始めているベルの状況に表情を曇らせる。

ベルの持つ両刃短剣<sup>バゼライト</sup>は業物だが、あくまでも上層レベル。

異常な強さを持つあのミノタウロス相手には不足過ぎる。

「ヴオオオオオオツ!!」

ベルがこの戦場に見合わない武器を装備したことを勝機と見たのか、怒涛の攻撃を開始するミノタウロス。

魔剣である以上、そう何度も雷は起こせないが、腕のいい上級鍛冶師<sup>ハイミスミス</sup>によつて作られたであろう戦斧はベルの命を刈り取るには十分だ。

アイズも応援に行こうとするが、モンスターや狂信者が蔓延るこの場所にレベル1で

あろうベルの仲間を放置して向かうわけには行かない。

この場で彼らを庇える余裕があるのは自分だけなのだ。

ベルは反撃を仕掛けるが、両刃短剣はミノタウロスに傷一つ付けることは無い。

ミノタウロスはまるで両刃短剣の存在を無視するように、その視線はサーベルにのみ向けられている。

やがてベルが装備した新しい防具にも傷がつき始める。

何度も雷を浴びていることもあり、新品と思しき装備もガタが出始めている。

左の肩当が弾き飛ばされ、ばつくりと赤い線が刻まれた。

返り血を浴びるミノタウロスの眼差しに勝利の確信が見えた時、ベルは動いた。

「舐めるなっ……！」

サーベルで戦斧を受け流し、両刃短剣をミノタウロスの鳩尾に叩きつける。

切っ先はミノタウロスの腹筋に阻まれ、その皮膚すら突破できない。

ヒューマンの悪あがきを潰そうと、ミノタウロスは血を流す右腕を振り上げるが、ベルは瞳を逸らすことなく咆声した。

「【ファイアボルト】!!」

真つ赤に燃える炎雷を纏う右手。

ウオーシャドウの爪のような装備に魔法を灯し、掌底突きのような形でミノタウロス

の腹部……正確にはそこに刺さりかけている両刃短剣の柄頭を殴りつける。

「オ、オ、オ、オ、オ、オオオツツ!!」

無警戒だった両刃短剣からのダメージに呻くミノタウロス。

しかしこれでは足りないとはかりにベルはもう一度構え、咆声する。

「フアイアボルト!!」

再び轟く爆音。もう一度突き穿つ掌底。

両刃短剣は鋼鉄の腹筋を突き破り、猛牛の腹部に突き刺さった。

目を血走らせて息を荒げるミノタウロスに、ベルは更に畳みかけた。

「フアイアボルト」オオオオツ!!」

「ゴガアツツ!」

止まらない炎雷。渾身の殴打を叩き込み続ける。

業火のうねりはミノタウロスの皮膚だけでなく、その傷を通って内臓すら燃やしているかもしれない。

最早、剣身は八割がたミノタウロスの中に減り込み、剣と皮膚の接合部から血液が流れでている。

途轍もないダメージを負ったミノタウロスだが、無茶の代償を支払うベルも呻き声を漏らす。

「あ、痛……っ」

右手に付けていたグローブは魔法からベルを守るものだったのだろうが、これほどの連撃を想定して作られたわけではないのだろう。

右手のグローブはぐちゃぐちゃに罅割れ、破片がベルの手に突き刺さっている。

もう魔法を手に纏うあの攻撃は出来ない。そう判断したのであろうベルは脂汗を流しながらも、荒々しくブーツに魔石を挿入すると、思い切り地を蹴り浮かび上がった。

「まだ、まだあああああつ!!」

「ヴオツ!?!」

血を流しながらも止まらない少年に凍り付く眼前で、ベルはドロップキックを両刃短剣バゼラートの柄頭に叩き込む。

この戦いで幾度も見せた衝撃波が、これまでにない威力で両足の裏から発せられ、両刃短剣バゼラートは完全にミノタウロスの腹の中に入り込んだ。

「ヴオ、ヴオオオオオオツ!?!」

衝撃波の威力で倒れ込んだミノタウロスは、血を吐いて狂ったように身を振らせる。

ミノタウロスの体内に潜り込んだ両刃短剣バゼラートが内臓を致命的なまでに傷つけた。

ゴポリと泡を含んだ血を吐き出すミノタウロスは、しかしその戦意を緩めることは無い。

酷使しすぎ、煙を上げているブーツを抱えて蹲るベル。

ここにきて反動が来てしまった。

「フツ、フツ、……オオオオッ！」

「が……っ」

倒れ込みながらも戦斧を振り回し、滅撃と雷の魔力をばら撒く。

それを同じく倒れ伏したベルがサーベルで受け止めた。

そのまま一合、二合……とぶつかり合うお互いの武器。

もはや己の姿など気にせず、戦い合う両者は、お互いに決着の時が近づいていることを悟っているようだった。

(……どうして)

地面に這いつくばり、震える手で懸命に立ち上がりながら、真つ直ぐな視線を向けるベル。

血まみれになり、泥だらけに汚れ、それでも戦い続ける少年に問いたかった。

あの日と同じ疑問を。

(……どうして君は、そんなに早く、強くなっていけるの?)

分からなかった。

あの、日常で朗らかに笑うベルと命を懸けた戦いに臨むベル。

同じ顔をしているはずの二人がアイズの中で全く一致しない。

ミノタウロスも掠れ始めた息遣いと共に立ち上がる。

体から流れる血。それを塗り替えるように滾る闘志で、ベルを睨みつけた。

「ヴオ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、ツ!!」

ミノタウロスが腹に潜り込んだ両刃短剣を強引に掴み取る。

ミチミチ、と筋繊維が断絶するかのような音が聞こえるのもお構いなしに、ミノタウロスは埋め込まれたその武器を引きずり出すと咆哮と共に地面に叩きつけ、踏み碎いた。

そして、腹部から滝のように流れ落ちる流血など気にも留めずにベルに向かう。

ベルもスウ……、と小さく息を整えると、決意を固めた表情で歩み始める。

(……この戦いは、一体、何だったんだろう)

徐々に距離を詰める両者。

その息苦しい空気はこの広間<sup>フロア</sup>を支配していると、アイズはそう感じた。

最初に来た時、アイズにとってこの場合はベルを狙っているという「フレイヤ・ファミリア」との対決の場でしかなかった。

しかし闇派閥<sup>イグニルス</sup>の暗躍により、状況は混沌とし、目に見えている者、目に見えない者たちの思惑が複雑に絡み合い、アイズでは到底全体図が理解できない戦場になる。



そこから更に状況は二転三転し、気が付けばこの戦いの中心は、保護対象だったベルとオツタルの駒でしかなかったはずのミノタウロスになっていた。

或いは、初めからそこだけが中心だったのかもしれない。

(ベル、君が戦うのは何のため?)

数多の英傑を押しつけて舞台の主役となった少年は、誰よりも真つ直ぐな瞳でミノタウロスを見ている。

彼が何を想い戦っているのか、それはアイズには分からない。

ただ、彼を見ていると。彼の求める強さが少しだけ分かる気がした。

ベル・クラネルの求め、手に入れた強さは抗うためのものだ。

誰に命じられたわけでもない、自分自身の願いのために。

与えられた役割<sup>ロール</sup>を逸脱し、予測不可能は物語を綴っていく。

「あああああああつ!!」

少年の雄叫びが迷宮を駆け抜ける。

ベルのサーベルがミノタウロスの右胸に深い切り傷を与え、ミノタウロスの戦斧がベルの残った肩当を弾き飛ばし、その破片が少年の頬を傷つけた。

数度の斬り合い、その結果見えたミノタウロスの際にベルは神の刃を叩き込む。

鞘の機能によって爆発的威力を伴う斬撃は、ミノタウロスの右腕を切り裂いた。

「ゴツ……、ウ、オオオオオツ!!」

「なっ!?!」

戦斧を捨て、血しぶきを上げて使い物になった右腕を、左腕で引きちぎる。

辛うじて繋がっていた己の腕を躊躇なく捨てたミノタウロスは、そのまま腕を鈍器のようにベルにぶつけた。

サーベルでガードするベルだったが、刃に触れた途端に、丸太のような腕はバターのようになり裂かれる。

「っ!! 受けちゃダメ!!」

それが失策であると悟るアイズの言葉は遅かった。

切り裂かれた拳部分は、その勢いのままベルの頭部目掛けて直進する。

「ぐうツ……え……?」

頭に直撃した振動で揺さぶられる脳。

思わずサーベルを手放してしまったベルに、ミノタウロスは嵐のような連撃ラッシュを開始する。

グニャグニャと揺れる右腕を何度も叩きつけ、ベルを地に叩き伏せた。

地面を揺らすかのような攻撃の度に、ベルの体は痙攣し、その装備は衝撃を受け止めきれずに罅割れ、粉碎されていく。

「……………」

息をのむ。

頭が真つ白になり、続いて憤怒が燃え滾った。

アイズの金の瞳に黒い意志が宿り始める。

こうなれば禁じられていたあのスキルを使つてでも……！

そんな考えに支配され、鍵となる言葉スベルを口にしようとした時。

ベルの瞳めが見えた。

「」

そこに諦観はなく。絶望もなく。

ただ、真つ白な炎があつた。

思わず形を結びかけていた言葉が溶けて消える中、ベルは転がされた先にあつたひみ

つ道具を掴み取り、音を鳴らす。

「ガアアアアアッ!?!」

太鼓から現れる稲妻。

先ほどもでミノタウロスに通じなかつたそのひみつ道具は、失つた右腕から体内を焼き尽くし、猛牛の動きを止める。更に動物の絵が描かれた石たちが纏わりつき、そこから一步も動かさない。

石たちは一斉に左腕に攻撃し、ミノタウロスは思わず右腕を手放し、地面に捨てていた戦斧を蹴り上げ、空中で掴み取る。

その隙にベルは、先程飛んできたミノタウロスの拳からナイフを抜き取り、手放してしまっていたサーベルを拾い直す。

「ゼエ、ゼエ……ゴホッ……っ！」

「フウッ、フウッ……フウッ、ウウウウッ」

肩を揺らし、交差する視線。

剣戟の音が遠い。

全てを置き去りに、二人だけの決闘は続いた。

「……」

気が付けば、アイズの瞳から黒が消えていた。

彼女は観客だ。

人が雄牛を倒すだけの物語。

或いは人が雄牛に倒されるだけの物語。

そんな物語を外から見守る観客。

それを不満に思うことは無かった。

だって、あの二人の間には余人が立ち入れない何かがある。

強く強く、願った先にこの戦いがあつたのなら……  
きつと今だけは、世界は二人のためにある。

「……………」

それも、もう終わり。

既に終止符エンドマークは見えている。

長かった。

そう感じるほどに、濃密な時間。

それを惜しむ心を感じていることに彼女は驚いた。

(……………)

ふと、少年が訓練の最中に漏らした言葉を思い出した。

どうして自分にこんなスキルが芽生えたのだろう。

どうして自分がひみつ道具を使うのだろう。

本当ならば、そうなるはずではなかったのに。

何をもってベルがそうなるはずではなかったと思つたのかは分からない。

ただ、彼が言うのならそうなのだろう。

ベルがひみつ道具を使うのは多分間違っている。

彼が本来持たない力によって物語は大きく歪んだ。

その果てにどんな結末があるかは分からない。

ベル・クラネルと言う少年のたどるはずだった道は、彼自身の力で切り開くべきものだったのだから。

(それでも)

道を違えても。

この先に待つ世界がどんなものであったとしても。

彼は進み続けるだろう、とアイズは思う。

間違えてしまっても、それがこの世界のベル・クラネルの冒険だから。

(頑張って)

「ああああああああっ!!」

「ヴオオオオオオオオオツ!!」

そして、最後の激突。

ベルはサーベルを振りかざし、ミノタウロスはそれに戦斧を合わせる。

後は雷の魔法を強制的に二人で浴びるだけ。

ダメージが深い両者だが、ミノタウロスの方が怪物のタフネスで僅かに耐えられる。

その後他の冒険者に対応できないほどのダメージを負うが、そうだとっても構わないとばかりに猛り声を上げてベルに向かう。

そんなミノタウロスにベルも張り合うように咆声した。

「【ファイアボルト】！」

「……ッ!？」

ナイフを親指に引つ掛けたまま、四本の指を上げた状態で魔法を繰り出す。

炎雷は雄牛に直撃し、サーベルとぶつかり合う直前だった戦斧を僅かにブレさせる。

その僅かにサーベルは飛びついた。

「いっけええええええええええ！」

体全体でサーベルを加速させ、ベルは吠える。

その切っ先が向かう先はミノタウロスの戦斧の柄肩。

キンツ、と寒気がするような涼やかな音。

一拍遅れてミノタウロスの持つ戦斧が真つ二つに斬られた。

「」

ベルとミノタウロスのぶつかり合う。

最後に両者がどう思ったのかは分からない。

ただ、眩い緋色の華に目がくらんだゆえの錯覚か、アイズにはミノタウロスが笑って

いるように見えた。

時折モンスターが見せる、醜悪なそれとは違う、純粹なそれを見て、ベルがどんな表

情をしたのかは白髪に隠れてよく分からない。

ベルは全霊の雄たけびをもつてこの戦いを終わらせた。

決着を告げるのは紫紺の一閃。ミノタウロスの首が宙を舞う。

戦いの決着は静寂を持って迎えられた。

最早この戦場の趨勢は決したので。



## 思惑の行方

女神フレイヤの悪戯に端を発した今回の騒動。

本来ならば黒幕不明で終わつたであろうこの事件は闇派閥イヴィルスの暗躍により、白日の下にさらされた。

それがいい事だつたとは言い切れないが。

「今回の件はどの勢力にとつても痛み分けて終わつたな」

【アイアム・ガネーシャ】の執務室で、ガネーシャは普段の快活さを潜める。

13階層での大規模怪物進呈バス・パレードの被害を未然に阻止した【ガネーシャ・ファミリア】の活躍に対する評価は高いが、当事者としては忸怩たるものを感じずにはいられない。

「フレイヤ派は勿論だが、独断で行動したロキ派も問題だ。他派閥とそこまで歩調を合わせる義理はないと言われればそこまでだが」

他派閥に対する干渉はご法度。

オラリオでの暗黙のルールは承知していても、彼らが早い段階で情報共有を行つていればと考えると、シャクテイとしては苦言を漏らさずにはいられない。

ファミリア間での仲間意識が薄い、オラリオの構造的欠点が目立つた事件だった。

「仕方あるまい。我々と違い、【ロキ・ファミリア】にそんな義務はない。自派閥の利益を優先するのは当然のことだ」

「分かっているさガネーシャ。結局、情勢を把握しきれていなかった我々の落ち度だ」

この事件で【ガネーシャ・ファミリア】に人的被害はない。

しかし、オラリオ全体で見れば最強の二大派閥が消化不良の軋轢を抱えるという不穏な状況になってしまっている。

「それだけではない。ここにきて闇派閥イツイルスに新たな手札が見えてきた」

「ああ、ガネーシャだな」

「……」

「スマン自重する」

執務室の机に置かれた壊れたマジックアイテム。

ハシャーナが遭遇したという、強制転倒スリツツを引き起こすという自動人形はミノタウロス  
を撃破したベル・クラネルによって破壊された。

それが決定打となり、闇派閥イツイルスは退いたそうだが、それを素直に喜ぶわけには行かない。

「……ガネーシャ」

「似ているな」

初見のマジックアイテムだが、ガネーシャとシャクティの二人はこれによく似た雰囲気

気のマジックアイテムをよく知っていた。

シャクティだけならば気のせいとも思えたが、神の勘を持つガネーシャもそう感じるならば勘違いとは言えまい。

「異世界のマジックアイテム……ひみつ道具」

「こんなものを何故闇派閥イヴァイルスが持っている？」

ベル・クラネルのようにひみつ道具を具現化するスキルを発現させた……と言うわけではあるまい。

何故なら、ベル・クラネルの持つひみつ道具とは違い、このひみつ道具は消滅しない。時間制限がないのだ。

この自動人形をお詫びとして引き渡した勇者は、ひみつ道具と言う明確な答えに至ったわけではないようだが、何者かの暗躍を感じたらしい。

「この自動人形はギルドに預ける」

「……なるほど、賢者ならば適任だろう」

「ああ、マジックアイテムに関しては我々以上に適任だ」

イヴァイルス  
闇派閥の脅威はまだ終わらない。

そう確信するガネーシャとシャクティは、改めてオラリオ守護に対する決意を固めた。



【おうじや猛者】 オツタル

岩のごとく不動の男として恐れられる彼だが、この瞬間、彼は嘗てないほどに追い込まれていた。

「……」

彼の眼前に佇むのは一枚の羊皮紙。

ベルセウス万能者謹製の、消えないインクを使用したペンで書かれている文字群。

それこそが都市最強と謳われる男に隠せぬ焦燥を強いている。

「……これは」

「……オツタル様宛に届いた借用書です」

侍従頭であるヘルンの平坦な声が響く。

それは分かっていた。

オツタルはベル・クラネルへの試練を作るにあたり、オラリオ中からマジックアイテムをかき集めた。

その場で払うには金をかき集める時間がなかったため、リヴィラの街でするように、「フレイヤ・ファミリア」の紋章エンブレムを刻んだ借用書でツケとしていたのだ。

このような無茶が通るのは、最強派閥である「フレイヤ・ファミア」（フレイヤ・ファミア）、そしてその頂天であるオツタルだからこそそのモノであったが、無茶は無茶。

普段は己の身一つで戦うオツタルに、マジックアイテムの相場など分かるはずもなく、途方もない金額が立ちふさがっている。

その金額はゼロが8個ほど並ぶ程度。

普段、そこまで金に頓着していないオツタルの貯蓄など、あつさりと吹き飛ぶ金額である。

（馬鹿な……ベル・クラネルのマジックアイテム、ひみつ道具の下位互換のような性能でこの金額だと……？）

世界中の魔導具アイテムメーカー製作者を一斉に敵に回すような思考をしてしまうオツタル。

世界最先端の技術なのだから何もおかしくはないが、ベル・クラネルのひみつ道具を基準にしてしまったことが運の尽き。

もしかしたら、無茶な注文をした依頼主への意趣返しもあるのかもしれない。

さて、重ねて言うがこれらの借用書は「フレイヤ・ファミア」の紋章エンブレムが刻まれているのだ。

すなわち、女神フレイヤの名に懸けて、必ず借金を返済するという表明である。

それを背くということは、女神の名を汚すということだ。

払えませんが通じない。

侍従頭の『何やってつんだコイツ』という視線が痛い。

幸いにしてオツタルは第一級冒険者。金ならばダンジョンに少し……否、だいぶ潜れば何とか返済できる、筈。

そう結論付けた彼の行動は早く、すぐさまダンジョンに潜る。

しかし、彼の不幸は終わらない。

彼が迷宮にこもれば、それを無視しない者たちが当然動き出す。

「……」

「とつととやるぞ糞猪」

「ククツ、落陽ラグナロクの刻は来たれり……頂に君臨せし益荒男よ、今こそ我が深淵アビスの更なる高みへ至るための生サクリファイブ贄となれ……」

「一日で借金生活になった大馬鹿野郎が」

「カツコつけて値段確認せずにホイホイ買うからこうなるんだ大馬鹿野郎が」

「この獣頭が団長とか正直恥ずかしい」

「おいお前ら止めてやれよ……オツタルも慣れない任で勝手が分からなかったんだから」

ヘデインを除く「フレイヤ・ファミリア」の幹部勢ぞろいである。



「団員に被害が出なかったのは幸いだったな……」

「とは言え、遠征前にあれほどのトラブルがあったんだ。こうなるのも仕方がない、か」  
テキパキと書類を片付けながら雑談する。

フィンはそれが二人の気遣いに思えた。

（やれやれ……好調続きで油断したか）

今回の失敗の原因は何だったかと聞かれれば、間違はなくそこに行きつくだろう。  
闇派閥イッイルスの脅威に今まで出来過ぎなほどに対処してたが、向こうも一筋縄ではいかない  
曲者ぞろいだったという事だ。

（癪だが認めるしかないな……ヴァレットの立ち回りが上手かった）

脅威を感じていた筈だ。

なのに気が付けば心に隙が出来ていた。

否、あの女がそうなるように誘導し、自分たちはそれにまんまと乗せられたのだ。

（人的被害こそ出なかったが……大局的に見ればあの混戦は負けよりの引き分けだ）

あの戦いでこちらが失ったものは多い。

ベートやティオナの武器もそうだが、何よりも派閥間の繋がりがり。

【フレイヤ・ファミリア】は勿論だが、【ガネーシャ・ファミリア】とも今後はギクシヤクとした関係が続くだろう。向こうからすればとっと知らせると言う話だ。



それに対して、イヴイルス 闇派閥は予め捨てようとしたものしか失っていない。

どころか、連敗続きだった中、フインの顔に泥を付けて見せたのだ。

これをうまく使えば、下がり続けていたイヴイルス 闇派閥の士気を持ち直すこともできるだろう。

「……欲張り過ぎはよくないな、本当に」

「死人は出なかつたのだ、勉強になつたと切り替えていけ」

「聞けば聞くほどややこしい戦場だったようだからのう、よく乗り切れたもんじゃ。新  
手のマジックアイテムもあつたのだろうか？」

「そうだね……そうしよう」

紅茶に口を付け、あの戦場を振り返る。

イヴイルス 闇派閥の動きは見事だったが、あの場の全てがイヴイルス 闇派閥の想定通りと言うことは無いだろう。

（あの場に確かにいた勢力は僕たち以外には、「フレイヤ・ファミリア」、「ガネーシャ・ファミリア」、「ヘスティア・ファミリア」、イヴイルス 闇派閥……だが、あの戦場には明らかにそれ以外の者たちが紛れ込んでいた）

こちら側の援護を行ったものが二組。

イヴイルス 闇派閥側に手を貸した勢力は一組。



(私は、何を……ッ)

フィルヴィスは激しい後悔に見舞われていた。

何故か。決まっている。

エニユオの命を遂行できなかつたからだ。

ベル・クラネルの命を刈り取る漆黒の雷は、彼の身を脅かすことは無かつた。

彼自身は自分が暗殺されかけていたという自覚もないだろう。

その原因はただ一つ。レフィーヤという少女の存在。

(あの時、レフィーヤさえいなければ、私はエインでいられたのに！)

フィルヴィスは弱いエルフだ。

クリーチャー  
怪人としての自分を受け入れられないほどに。

だからこそエニユオに縋つた。

その愛だけが彼女を肯定するすべてだつたから。その筈だつたのだ。

あの少女さえ現れなければ。

フィルヴィス・シャリアと言う少女の本質は善だ。

それはまだその身が穢れを知らなかつた頃、何の疑いもなく正義のために戦えたかつ

ての姿が証明している。

そんな彼女が悪の手先として働くことは酷く苦痛を強いられる。





一切の光が届かない暗部。

そこで彼らは円卓をぐるりと囲んだ。

「結局、上級冒険者の首は獲れなかったか」

「だがこの戦いで奴らは少なくとも損害を被った！」

「これはもう我々の勝利だったと言っても過言ではあるまい！」

「さすがはヴァレット様。勇者など及びもしない慧眼よ」

白装束の闇派閥たちは、そのおどろおどろしい見た目にはいささかアンバランスな表

情で笑っていた。

怪物モンスターファイター祭から、苦い思いばかりだった彼らは、ようやく勇者に辛酸を味合わせてやっ

たと喝采をあげていた。

「約束された破滅の時は近い！」

「忌々しいオラリオの愚衆どもめつ、目にももの見せてくれるわ！」

うおおおおおつ！、と騒ぎ立てる彼らは闇派閥の幹部たちだ。

頭蓋でできた盃に、血のように赤い葡萄酒を満たし、勝利の味に酔う。

そんな彼らをヴァレットは冷ややかに見ていた。

「あの勇者を這いつくばらせたマジックアイテムもある！ これで我らの勝利はまた盤

石に……」

「んな訳ねえだろオがよ」

浮かれた様子で騒ぎ立てた部下たちに冷ややかな言葉を浴びせかける。

不機嫌だった。ヴァレッタは途轍もなく不機嫌だった。

「いいか？ あのマジックアイテムについて幹部は何か聞いてない。これでそのスポンジみてえな脳でも少しは理解しただろ」

辺りを見渡すヴァレッタはそう言うが、何人かはピンと言っていない様子であり、舌打ち一つした後言葉が続けた。

「【顔無し】が何を考えているかは知らねえが……イヴァイルス闇派閥なんぞ基本は身内同士でもいざこざを起こすやつらだ。ましてや、あいつは元々エレボスの眷属だぞ？ 何を考えているのかまるで分かりやしねえ」

「……つまり、今後あのマジックアイテムを持つ勢力と衝突する可能性が？」

「あるに決まってるだろオが。一番嫌いな奴らがロキやフレイヤつてだけで、アタシらは仲良し連盟じゃねえ」

そうなった時。尋常ではないマジックアイテムを持つであろうあの男に対抗できるか分からない。

未知と言うのはそれほどまでに危険なのだ。







ヴェルフは壊れた。

「許せねえ!! ちよつと【おうじゃ猛者】に文句言ってくる!」

「ダメエ!? 殺されちやうつて!」

「あと神フレイヤにもケジメ付けさせてやる!」

「フレイヤ信者一斉に敵に回しますよ!」

「知つてて放置していた【ロキ・ファミリア】も引つ掻き回したイギリス閥派閥も同罪だ!!」

「いくつの勢力に喧嘩売る気!」

【フレイヤ・ファミリア】のホームに乗り込もうとするレベル1をベルとリリは必死に押しとどめていた。

「H A ☆ N A ☆ S E」

「一旦落ち着こう!? なんか口調が変だからっ!!」

「正直気持ちは分かりますけどっ! 行ったらヴェルフ様だけでなく、リリたちもまとめて人生終了なのでこらえてください!」

完全に我を忘れている。

実際彼には怒る権利はあるが。

「やばいやばいやばい!! 僕本調子じゃないから止められないかも!」

「リリなんて【力】Iの糞雑魚サポーターですよ!」



様々な勢力が絡み合つた混戦の場は、先日の騒がしさを忘れたように静まり返つてい  
る。

そこに男が一人現れた。

「……クフツ」

一見すれば何処にでもいる平凡な男。

街ですれ違えば、瞬く間にその存在を忘れてしまうだろう。

そんな男がわらう。

笑うのか、嗤うのか、それとも晒うのか。

自分でも分からなかったが。

「そうですか……あれがそうなのですね」

静かに、熱狂の混戦の跡地で不自然なほど静かに。

男は呟く。

「なるほど、確かに彼は■■■■だ」

虫の羽音のように小さな声。

しかし、それは込められた感情に比例しない。

彼以外の何者かは気付いた。そこに込められる溶岩のような熱に。

「美しい物語、なのでしよう」

細目がちの表情から感情の動きは読み取れない。

一体、美しい物語と言う言葉に、彼は何を感じているのか。

知っている者は誰もいない。

「ああ……だからこそ、なればこそ」

空を見上げた。

ダンジョンに空などないが、ありもしないそれに両手を伸ばす。

焦がれているのか、それとも掴み取ろうとしているのか。

「私は……」

その後は何と続けたのか、フェルズには分からない。

この距離ではそこまで聞き取れず、唇を読もうにも背を向けられている。

「……」

犯人は現場に戻る。

そう辺りを付け、潜伏した甲斐があった。

（あれが例の自動人形の主か？）

男はやがて歩き出す。

フェルズはその後を追おうとするが、男は尾行に気が付いていた……と言うよりは尾行を前提とした動きで迷宮内を歩き回った。

これ程までに用心深い相手なら、深入りは厳禁と撤退する。  
成果としてはここまでで十分だろう。

そう判断したフェルズは地上へと帰還する。

新たな騒動の予感を覚えながら。

ダンまちってどこにあるの？

古本屋で目当ての本を探す。

本好きの間では堪らない一時として語られる行為だ。

目当てのタイトルや著者名を見つけ出した時の快感は言葉にできない物であり、その過程で見つける面白そうな本に手を伸ばして、時間を忘れて立ち読みするというのも面白い。

勿論、限度は必要だが。

「ちえー……どこにもないや」

最も、それを面白いと思える人間は少数派であることは事実だが。

ページをパラパラめくれば眠気に襲われ、活字を見ただけで鳥肌が立つような人種からすれば苦痛極まりない。

これがおもちゃ屋だったらちよつとは楽しいのに、と少年は愚痴をこぼす。

「あんな長い名前ならすぐ見つかると思ったのに」

眼鏡の奥から眼を細めて、はるか頭上に陳列されているタイトル群を見つめる少年。既に何日か通い詰めである少年だが、彼が本に手を取ることは一度もなかった。

否、正確には小学生程であるはずの彼にしては、少々対象年齢から外れているような幼児向けの絵本などはパラパラと開いていたが。

「君も飽きずによく来るねえ……」

「あ、店長さん。こんにちは」

キヨロキヨロと暫く店の中をさまよっていたその少年……のび太は気の抜けるような挨拶を見せの主に行う。

それに対して、こんにちはと笑顔で返す店長は本についた埃を落とすために店内を回っていたらしい。

「まだお目当ての漫画は見つからないかい？」

「うん。続き気になったのにさ」

「なんてタイトルだったかな？」

「えくと、なんか長い!!」

「それじゃあ分からないなあ……」

見事に知能指数を示す返答に苦笑する店長。

長いタイトルと言うと……とあれこれ考えてくれているのは彼の人が良いからだろう。

「うくん。小説のタイトルなら結構思い浮かぶんだけど漫画か……漫画は殆ど子供が



見るものだから、そんなに長いタイトルを付けているのは珍しいね」

「難しい言葉がいつぱい出てたから小説を漫画にしたのかも」

「小説から……と言うのは珍しいね。その先生がよっぽどその作品のファンだったとか？」

「さあ？ それよりしよーかんって言葉が出てきてた。何か知ってる？」

（しよーかん？ ……将官？ 戦記物かな）

「うーん……」

やはり情報が少なすぎるのか、頭を捻る店長。

正しく言えば、のび太の説明が足りない過ぎるのだが。

「あんなに長いタイトル覚えられるわけじゃないじゃん」

「覚えられないほど……『自分以外の全員が犠牲になった難破で岸边に投げ出され、アメリカの浜辺、オルノクという大河の河口近くの無人島で28年もたった一人で暮らし、最後には奇跡的に海賊船に助けられたヨーク出身の船乗りロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚きに満ちた冒険についての記述』みたいなの？」

「長い」

読書好きの間では有名な長文タイトルの本を例に出してみたが、のび太はアホを見るか顔で店長を見ていた。



あった。

「しかしタイトルがやたら長い漫画か……」

「出木杉の家にもない？」

「ちよつと心当たりがないなあ」

「すつごい綺麗な絵なんだ。僕たちの持つてる漫画とはまるで違う」

「綺麗？」

「こう、手足がすらつとしていて、白黒なのに色があるみたいで？」

「色？ カラー付きってことじゃないのかい」

「そうじゃなくてこう……点々とか線でそう見えるって言うか……」

（色に見える白黒の点や線って言うスクリーントーンのことかな）

そこまで考えて出木杉ははて、と首を傾げた。

漫画のことについてはそこまで詳しくなかったが、スクリーントーンとは中々高価なものだと聞いた気がするが。

自分の持っている漫画にも使われてはいるが、のび太の印象に残るほどふんだんに使うものだろうか。

「あ、後はコマが大きかったかも」

「コマ……？」

「二ページのコマすごい大きいから迫力あったなあ。戦ってる時とかはカッコよかった！」

(バトルがあるのかな)

「でも台詞が多くて結構飛ばしちゃった」

(ここまで聞くと凄い変な漫画だな)

有名な漫画家の言葉の受け売りだが、スクリーントーンの多用やセリフなどで解説しすぎることは、漫画を作る上での御法度のはずだ。

それを破っていて、のび太がここまで面白いという作品なのかと出木杉は興味を覚えた。

「のび君。タイトルをあやふやでも良いから思い出せないかい？」

「え？」

「僕はその漫画を多分持っていないけど面白そうだから」

秀才の出木杉と落ちこぼれののび太は接点がない様に思われているが、案外話してみると会話が弾む。

それを出来杉は自分と彼の価値観が似通っているためと推測している。

のび太はよく思い付きで突拍子も無いことを口にするが、周りがそれを馬鹿にする中で出来杉はそれがおかしいとは考えたことが無い。

論理的におかしな点は指摘するが、彼の考えには共感することが多かった。なんというか、お互いに浪漫志向なのだ。二人は。

そんなのび太が面白いと評した漫画だ。個人的に読んでみたい。

聞いた限りでも型破りと言うか、時代の流れを無視している印象がある。

「うーん。最初は『だ』から始まったんだけど」

「うんうんそれで？」

「だ、檀上？ 団長？ うーん……」

「最初の所に拘らずに、思い出せるところを上げていこう」

のび太をせかさずに答えを待つ。

のび太は出来杉がじっくり待ってくれるらしいと分かったからか、彼にしては珍しく頭を絞り出すように記憶を探した。

「『だ……』の後、『に会いを』って続いて……ゴメン、その後何か漢字があったんだけど分からないや」

「最後は漢字だったの？」

「いやそうじゃなくて『■めるのは』があつて、そこから漢字があつて『■■つてるだろうか？』で終わったよ」

ふむふむ、と紙にのび太の言った言葉を並べる。

『だ……に出会いを■めるのは■■っているだろうか』

「そうそう、こんな感じ」

「ひよつとしたら作中の台詞か……最終話辺りで回収する伏線かな。どんな内容の話なの？」

「えーと……主人公はベルで、ベルが冒険者になってモンスターと戦う話」

「モンスター？ 舞台は現代じゃないのかい？」

「魔法使いがいるし違うと思う。神様も出てきてふぁみりあを作ってた」

（ファミリア……スペイン語で家族……マフィアみたいな組織をそう呼ぶこともあるつけ）

のび太の口から出てきたワードから、漫画の舞台が中世ヨーロッパあたりだと推測する。

「神様の名前って出てきてた？」

「えーと。ヘステイアだった。だからベルはヘステイア・ファミリア」

「ヘステイア？ また随分と変わった神様を使っているね」

「そうなの？」

ちよつと待ってて……と言うと出木杉は立ち上がり、本棚から一冊の分厚い本を取り出した。

タイトルは『ギリシャ神話入門』。

「ヘステイアはこの神話に登場する女神だよ」

「へー強いのか？」

「分からない。ヘステイアは偉大な女神様だけど、地味だから」

「地味？」

「逸話が少ないんだよ。他の神様が騒ぎを起こし過ぎともいえるけど」

そう言つて出木杉が指さすイラストを眺めたのび太はん？ と疑問符を浮かべた。

「こんな見た目じゃないけど」

「漫画のキャラだしね。漫画だとなの？」

「えーと、黒いツインテールで、子どもみたいで、胸が大きくて……あと紐」

(紐?)

のび太から聞き出したイメージ図と目の前のイラストを見比べる。

……全然違う。

(いや、ヘステイアなんてマイナーな女神を出してきたのだから、この見た目にも意味はあるはず……子供みたいでも胸が大きいというのは、神話内での産み直しの逸話でヘステイアが長女から末妹に変わったことへの暗示なんじゃ……)

「おーい出木杉？」

(後は露出の多い格好と紐……駄目だ。分からない。露出の多い格好は当時のギリシャの服を作る技術で分かるが、紐ってなんだ？ 下着替わりか？ でも服の上から回してゐるならそれは僕たちに例えると服の上にパンツを付ける変態という事に……)

「おーい」

(いや、そんな意味の分からないデザインではないだろう。ヘステイアで紐が関わる逸話何てあったかな？ 有名なのはディオニユソスに十二神の座を譲ったこと……これは多分違う。後はポセイドンとアポロンが求婚騒動を起こした時に、処女神を宣言したこと……関係ないな……)

「……モグモグ」

(待てよ？ 確かその時にゼウスから孤児たちの神に任命されていた。そして昔は子供を背中に抱える時におんぶ紐を使っていたはず。ギリシャではどうだったか分からないけど、これは子供たちを世話する神様と言う側面を示す物なのだとすれば……!!)

「……グウ」

(なんて凝ったデザインなんだ。作者には相当な神話知識があるに違いない)

黒髪ツインテロリ巨乳は未来に生きすぎなデザインだと思うが。

何やら考え込んでしまった出木杉に、のび太が話しかけても返事が無い時間が続く。

やがておやつを食べきったのび太が夢の世界へ旅立った頃、ようやく出木杉は帰還し





「あの漫画……『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』のこと？」  
のび太と違い、ドラえもんはキチンとタイトルを覚えていた。

「空き地にあつたのは途中までだし、誰もあの漫画を知らないんだあ！」

「ちやんと自分で探したの？」

「言われた通りやったけど、見つからないんだよお！　ねえ、ひみつ道具でなんとかしてえ！」

はあつ、とため息をつきつつ、ドラえもんは四次元ポケットを弄る。

この世の何処かにある漫画本の情報を見つけるにはこれが一番手っ取り早いだろう。

「宇宙完全大百科端末機」

おなじみの掛け声と共に現れたのは本型のひみつ道具。

百科の名の通り、のび助がたまたま勝手に買ってきては置いていく、本類そっくりの分厚い見た目だ。

「それってこの前に使った……」

「そう、宇宙のあらゆる事を知ることが出来る巨大なデータベースだよ」

過去から未来……宇宙のあらゆる情報が記されたひみつ道具。

22世紀であっても、星の大きさを程の施設に内蔵されたデータディスクを使用しているという超ド級の反則業である。

「それじゃあマイクを用意して……『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』」

ドラえもんの検索と同時に、画面に映し脱される情報群。

ネタバレは見ないように飛ばしつつ、その本の基本的な情報を探っていくが……

「……ん？」

「どうしたの？」

「この漫画……というか小説。発行された年がおかしい」

ドラえもんの視線を辿るとあれ、とのび太も首を傾げた。

刊行した日にちの項目に書かれていた年は『2013年1月15日』。

「……今って何年だっけ」

「なんで未来から来た僕に聞いているのさ。1976年だよ」

「そんな……100年も未来じゃないか！」

「37年だよ」

のび太のおバカ発言にはツッコみつつも、これはどうしたことかと困惑する。

何故未来に生まれる物語がこの時代にあるのか。

「これ、オーバーツだね」

「おパンツ？」

「場<sup>オー</sup>違いな工<sup>パー</sup>芸<sup>ツ</sup>品。時代にそぐわない代物のことだよ。ルバアントウンやアステカの遺跡で発見された水晶髑髏。インドの昔話に登場する飛行機であるヴィマナ……そんな、その時代に絶対あるはずがない工芸品をそう呼ぶんだよ」

のび太たちの時代だと、こうした者は本当に歴史を覆す新発見か、或いは捏造品かの二択だ。

しかし、ドラえもんがいた22世紀ではもう一つの可能性があるのだ。

「たまにあることなんだ。他の時代のモノがひみつ道具の暴走や失敗で過去に飛ばされること」

「じゃあ、あの漫画も?」

「小説のコミカライズが偶々この時代に落ちてきたんだろうね」

そういったものはタイムパトロールにより回収されているが、時代を超えるひみつ道具は簡単に手に入るものだ。

当然、こうした事故は多く、後手後手になっている。

(それで現地の人たちに迷惑が掛かって……最近じゃタイムマシンの使用を制限する、なんて話があるみたいだし)

観光客が過去の人たちへの迷惑行為を行っていることは、22世紀の社会問題だ。

そろそろ政府も厳しい対応を行うのではないかと、度々ニュースになっていた。

そうなればのび太の世話をしているドラえもんにとつても他人ごとではない。

「未来の漫画ならどこにもないよなあ……あーあ。続き見読みたかった」

「……読めないけど、見えるよ」

五体投地したのび太はつまらなそうにボヤクが、それにドラえもんは一つ案を出す。

「前も入っただろう？ あの世界」

「……あ!! 絵本入りこみぐつ!」

「浦島太郎とかの最後も見れたしね。漫画の続きも見れるんじゃない?」

「じゃあ早く入ろうよ!」

「慌てない慌てない……まずはまた空き地について……」

「もう漫画はここにあるよ?」

ほら、とのび太はランドセルの中から見覚えのある本を取り出す。

「なんで持ってきてるの?」

「何だか土管の上で広げっぱなしだったんだ。あのままじゃ雨に打たれてボロボロにな

るよ」

「ふーん」

大方誰かがのび太に読んだが、のび太と違い興味をそそられなかったという事か。

それにしても迷惑な奴ではあるが。

「早く早く!!」

「もう、急かささないでよ……絵本入りこみぐつ」

ついこの間ののように、二人分の絵本入りこみぐつを取り出した二人は急いでひみつ道具を取り付ける。

「あ、そうだ。出木杉も読みたいって言ってたし、今度誘ってやろう!」

「うんうんいいと思うよ。友達は大切にしないと」

喋りながら漫画の中に飛び込む二人。

結構物語は変わり果てていたのだが、物語の世界に飛び込むワクワクで頭の中がいっぱいなのび太は、それにこの時点で気付くことは無かった。

こうして、新しい物語が始まるうとしていた。

## 再会と一波乱

あの大混戦……ミノタウロスとの死闘から一週間が経った。

この一週間の間、一度もダンジョンには行っていない。

ナアーザさんによるドクターストップが入ったからだ。

間違いなくあの中で最も重症だった僕は、闇派閥イッイルスが撤退した後、「ガネーシャ・フアミリア」によって大急ぎで地上に運ばれた。

そこからはもう大騒ぎだ。エイナさんは真つ青な顔で駆けよって来て、僕の状態を確認した後、お説教が叩きつけられた。そして、神様はボロボロになった僕に泣きながらヘッドスライディングを決めて危うく止めを刺されかけた。

そこからはあれよあれよと言う間に「青の薬舗」へ直行だ。

ナアーザさんは「あんまり短いサイクルで大怪我を続けてたら絶対後遺症が残るよ」と呆れた顔で……目は凄いい真剣だった……注意してくれた。

（守銭奴なあの人が言うなんて相当なんだろうな、僕）

時々リリやヴェルフが見舞いに来てくれつつ、慣れ始めてしまった病院生活を送っていたが、昨日、ようやく退院の許可が下りたのだ。

「いやあ、君が大怪我をして帰ってきたときはどうなることかと思ったよ」

「心配かけてすいませんでした」

「本当さ！ ……こんなこと、何度もやらないでくれよ。心臓に悪いんだから」

僕の恩恵ファルナを弄りつつ、軽口を叩く。

「ここ一週間。ステイタスの更新なんてできなかつたから何だか新鮮だ。」

「それにしても随分経験値エクセリアが貯まったね？」

「そう、ですか？ ひよつとしてランクアップとか」

「流石にそれは無理かな。レベル2ともなると、生中な量じゃないってことだろう」

あのミノタウロスとの死闘。

僕個人の感想としては、ザニスさんを相手にした時と同じくらいに緊迫した戦いだつたから、もしかしたらと思つたけど、そう甘くはないらしい。

(やっぱり一歩一歩行かないと)

憧憬までの道のりはまだ遠い。

逸らず進んでいこう、と自分に言い聞かせた。

「でも、全く収穫が無いわけじゃないぜ？ 基礎アビリティはグリーンと上がったし、ランクアップに必要な、上質な経験値エクセリアも順調にたまっている。何よりスキルが発現した」

「……………え」



「君の3つめえ……じゃない！ 2つ目のスキルだよ!!」

何やら慌てふためく神様。動揺しているのだろうか。

気持ちは分かる。

魔法と違ってスキルは制限が無い。

無論、簡単に手に入るものではないが、冒険者が飛躍的に強くなる手段の代表的出来

事だ。

「スキルって!?! どんなスキルが!?!」

「まてまて、今写すから」

ベル・クラネル

L v. 2

力：S926 耐久：S963 器用：A874 敏捷：SS1027 魔力：A8

33 幸運：1

《魔法》【ファイアボルト】

・速攻魔法

《スキル》【フォーエスディメンション・ポーチ四次元衣囊】

・ひみつ道具を具現化できる。

・使用可能な道具は一日三つ。

- ・一日ごとに内容は変化する。
- ・現在使用可能なひみつ道具。

【ガールフレンドカタログメーカー】【○×うらない】【タイムテレビ】  
リアリス・フレゼ  
 【憧憬一途】

- ・早熟する。

・懸想おもいが続く限り効果持続。

・懸想の丈により効果向上。

【英雄願望】  
アルゴノクト

・能動的行動に対するチャージ実行権。  
アクティブアクション

「おお……？ あれ、何か一つ多いような……」

「おっとマチガエタ」

コシコシとスキル欄の真ん中に書いてあった文字群を消す神様。

カキマチガエチャッターと言って完全にぼやけたのを確認して、改めて神様は僕に羊皮紙を手渡した。

何が書いてあったのかは見えなかったけど、【フォーム・デイメンション・ポーチ四次元衣囊】を二度書きしちやつたのだろうか。

「ちよいミスだから気にしなくていいぜ!! ……そんなことより、これまた妙なスキル

だね」

「チャージ……チャージ？」

能動的行動とか、実行権とか、カッコイイ字が並んでいるが、イマイチ何を指している言葉なのか分からない。

まあ、使っていれば分かるだろう。

日替わりじゃないし。

「きつと凄いスキルだよ。何某なんて目じゃないほどのねー」

「いやいやそれは言いすぎじゃ……」

神様が僕を誇ってくれるのは嬉しいが、神様の評価は時々かなり過剰になる。

僕とアイズさんなんてゴブリンとゴライアスくらいに差があるのに。

(このままだと、またアイズさんへの口撃が始まっちゃうし、他の話題に移ろう)

「それより、この『ガールフレンドカタログメーカー』と『タイムテレビ』って何でしょう」

「ガールフレンドカタログメーカーはあれだろ。絶対にくくでもない奴だよ」

ジトツ、と言う目で睨まれた。

なんでそんな目で見られるのか全く心当たりがなく、僕は何となく神様と目線を合わせないようにする。



「「かんぱーい!!」」

ジョッキのぶつかり合う音が響き、直ぐに活気あふれる人々の声にかき消される。

仲間内でベルの退院祝い兼勝利を祝す宴を開こうということになった彼らは、早速ベルの行きつけの店である【豊穰の女主人】で宴会を予約した。

少々奮発しただけあつて、選り取り見取りのご馳走を堪能するベルたち一行。

「いやー、ベル君の言う通りこの店の料理はおいしいね!」

「前々から来たいと仰っていたけど、今日まで予定が合いませんでしたからね」

特にヘスティアは凄い勢いで料理を口に放り込んでいく。

流石は娯楽好きの神様と言うべきか、三大欲求の一角を占める美食についてもすごく豊富なりアクションを繰り広げている。見ているベルたちもこれだけで満足しちやいそいだ。

「それにしても……シル何某は今日は休みかー」

「まあ、店員さんも毎日仕事をしている訳じゃないですし」

ただ、今日は偶々シルは休みの様だった。

何故か彼女に対して対抗意識を燃やすヘスティアは残念がつている。

「な〜んか避けられてる気がするんだよなあ」

「いやいやそんなまさか……」

「あり得ない……そう言い切れないくらいには秘密主義ですよね」

リリの言葉にちよつと納得しそうになるベル。

そういうえば、僕はあの人のことをほとんど知らないな、と思ひ至る。

「でも、今回は本当に偶然だと思ひますよ？ 元々どこかに出かける予定だったみたいですから」

リリが予約に赴いた時には、「その日は予定があるんですよ……残念です」と言つていたらしい。

そう言われたヘステイアはふーん、と反応の薄い返答を返すとチラリと入り口から見える外の様子を見やつた。

「だとするとシル何某も運が悪い……よりにもよつて異常気象の日になんて」

暖房がガンガンと焚かれ、多くの人々がいることで、店内には温かな空気が漂つていゝるが、扉一つで隔たれた外の景色は白一色。

風の音も微かに店の奥にいるベルたちが耳を澄ませば聞こえてきた。

「まだ雪が降る季節ではないんだがな」

「商人たちは大変そうですね。いろんな予定が急に狂つたわけですから」

所謂異常事態イレギュラーが名物ともいえるオラリオだが、ダンジョン外でのそれは珍しい。

当然ながら冒険者でもない商人たちはセオリーが通じない状況に簡単には適応でき

ずに、品物が予定時間に届けられず、お店の中の商品棚が虫食い状態な所も少なくないんだとか。

(雪って大変だな……)

喜んでるのは子供と神様たちだけ。

大人は仕事に支障が出まくるものだから目を回すような勢いだ。

どこかに出かける予定だというシルも今頃は大変な思いをしているかもしれない。

「ま、俺たちには関係の無いことだ」

そう言つてヴェルフはこの話題を断ち切つた。

暫く異常気象は続きそうだが、確かに今は考えなくてもいいだろう。

(ん……?)

意識を料理に持つていこうとしたベルは、ふと、外の風の音を聞くために澄ませていた耳に、とある会話が入ってきたことに気が付いた。

『なんで僕たちがこんなことを……』

『ぼやいてないで手を動かして。さつきから僕ばかりやつてるじゃないか』

聞き覚えのある声だ。

特にドラ声、とでも呼ぶべき特徴的な声は、様々な会話が入り乱れる店内でも容易に聞き取れた。

(こ、この声は……!?)

バツ、と振り返ると厨房の奥の洗い場に明らかに変な子供がいる。

その名の通り、女性ばかりの店である「豊穰の女主人」のスタッフでも浮きまくっている二人を見たベルは思わず思考を停止した。

「ベル様？ 何を見て……なんですかあのモンスター」

「いや、モンスターじゃないだろ。多分。あんな堂々と人前に現れてるわけだからな」  
リリとヴェルフの会話が遠い。

思いもよらない再会に頭の痺れを自覚しながら、ベルは立ち上がり、厨房の方に向かう。

「ひいい。今日はシルがないから忙しすぎだニヤ〜!……ニヤ?」

「あれ、どうしたの冒険者君」

僕に気が付いたウエイトレスのアーニヤとルノアに事情を説明し、厨房に入れてもらった。

「……」

厨房に入り、より間近で見るとやつぱり変な子たちだ。

女性の職場に男の子たちが紛れ込んでいるのもそうだが、その雰囲気もどかこの世界に生きる人たちとは違う気がする。





したベルの手前何とか堪えた。

「やあやあ！ 話は聞いてるよ。ベル君が前にお世話になったそうじゃないか！ 僕の名前はヘスティアだ。よろしくね！」

「……リリルカ・アーデです」

「ヴェルフ・クロツゾだ」

自己紹介を済ませた一同だが、ヘスティア以外少々歯切れが悪い。

常識外の存在を前に戸惑っているのだろうか。

ヒューマン、獣人、小人族、エルフ、ドワーフ、アマゾネス、妖精……意思疎通はこの種族間でのみ成立するこの世界のことを考えれば当然だが。

「二人はどうして『豊穡の女主人』に？」

双方の友人である自分が、何とか会話を回さなければとベルは慣れない司会じみたことをする。

こういう時シルさんがいれば助かっただろうな、と思いつつ、気になっていたことをぶつけた。

「ベルに会いに来ただけで、外がすつこい寒くて……」

「ベル君を探してウロウロしてたら、偶々この店を発見したんだよ」

漫画と同じ外観のお店に感激して突撃。

そしたらミアが温かい料理を振舞ってくれたのだという。

喜んで食べた二人だが、そこから鬼店長にジョブチェンジしたミアによつてボツタクリ請求が発動。

お金など持っていない二人は泣く泣くその体で支払っている最中だと言う。

「ずつと皿洗いで冷たい水に当たっていたから手が痛い」

「理不尽だ……」

恐ろしき人材確保術……と言う訳ではないのだろう。

こういつては何だが、先ほど見ているだけでも危なっかしい手つきで既に何枚も皿を割っているのび太や、その見た目のせいで誤解されてお店の評判を悪くしかねないドラえもんにも、そこまでして取り込む価値はない。

ミアの性格を多少は知っているベルは、彼女がこういった理不尽を強いる時は大体相手のためだと理解できた。

（そのまま二人だけで今のオラリオをうろつくのは危険だし、ツケは保護する名目だろうな）

【豊穡の女主人】の戦力は強い。

へタなファミリアなら返り討ちに出来るほどに。

ここに匿われていれば、妙な手合いに絡まれることはないだろう。

「まー理不尽なバイト主には覚えがあるよ。君たちも大変だったねえ」

とは言え苦勞しているのは事実。

同じくバイトで大忙しなヘステイアと二人は息があつた。

そうなれば、その話題になるのは必然だっただろう。

「そうそう、ひみつ道具つてもともと君たちのなんだろう？　なら、ガールフレンドカタ

ログメーカーつてやつはどう使うんだい？」

「それはこれから出会う女の人たちのことが予め分かるってひみつ道具で……」

その瞬間、世界が凍り付いた。

後に騒ぎの中心にいたヴェルフはこの時のことを振り返る際に、そう表現した。

## 何れ来る未来を識れ

未来を識る。

多くの英雄譚に登場する超常的能力だ。

しかし、その力に対する見解は千差万別。

より良い未来を得るための切符とある者は言った。

人々の決断の結果を軽くする最悪の愚行だとある者は言った。

それに対し、ベルは未来を知ることと特別忌避感はなかった。

手段を選べるほど才ある身ではない訳なのだから、使える物は遠慮なく使うべきだ

……と、今までは思っていたからだ。

今はちよつと違う。

「なるほどなるほど……つまりこれを使えばベル君に群がる泥棒猫たちが一目瞭然と言  
うワケだ……」

「いや、この先出会う女の人分かるだけで、恋愛感情を持つかどうかは……」

「○×うらないを使えば恋愛的フラグも分かりますよヘステイア様！」

「ナイスアイディアだサポーター君」



女神の嫉妬には逆らえないのは育ての親と同じなのだ。

ドラえもんに憐みの視線を送られつつ、ガールフレンドカタログメーカーの使い方を教わると、恐る恐るボタンを操作していく。

やがて、ピンポポーンと軽快な音と共にひみつ道具から精巧な絵画が滝のように溢れ出した。

あつという間に机を埋め尽くした絵画に、先ほどまで剣呑は様子だったヘステイアとリリも思わず真顔になる。

「……多くね？」

「しかも全体的に美人な人たちばかりです」

針のような視線に思わず顔を背けるベル。

別に悪いことはしていないのに何故か居たたまれない。

「……うん！　ベル君に粉かける奴らは全員把握しようと思っただけど無理！　危険度の高い案件だけ確認しよう！」

ヘステイアは口元を引き攣らせながらリリに○×うらないの使用を促す。

思っていた以上に多い恋敵候補たちに心なしか動揺しているようにも見える。

そうすることで大分すつきりとした絵画を並べる。

……すつきりしたのは先にテーブルを埋め尽くす物量を見たことによる錯覚で、一般

的には十二分に多い。

「……モテるなあお前」

「……」

「駄目だ完全に思考停止していやがる」

顔を真っ赤にして固まるベルを茶化そうとしたヴェルフだったが、深紅ルベライトの瞳の中はミズのようにぐちゃぐちゃで文字通り目を回してしまっている。

同じ男としては羨ましいような、絶対この先苦勞するのだろうと思うと同情するような複雑な感覚をヴェルフは覚えた。ちなみにコイツもコイツで大概である。

「僕の時はこの間に多くなかったけど」

「月すつぽんと蠶つづみを比べてどうするのさ。そもそも君の場合は恋愛対象で限定してないから実際はさらに少ないだろうに」

ちよつと横から聞いているとドキリとするような毒舌を爆発させるドラえもん。

のび太はさして気にしていない様子であることから推察すると、これが平常運転なのだろう。

「てゆーかエルフ率多くない？ あと金髪」

「ベル様の性癖が浮かび上がってきますね」

「止めて!?!」



殺し屋のような目で絵画を吟味するヘステイアとリリ。ベルは自身の性癖を公開されるといふ恥辱を味わった。

「ん………？ これこのメイドエルフ君じゃん!?」

「なんですつてー!?」

やがて一枚の写真にくわつと目を見開くヘステイア。

そこに写っていたのは「豊穰の女主人」のウエイトレス、リユー・リオンだった。

「……」

遠巻きに見ていた群衆の視線が一斉にリユーに向く。

相変わらず無表情に見えるが、同僚たちは真つ赤に染まったエルフの長耳を見逃さなかつた。

「ニヤーツ!? どーゆーことだニヤ!?」 リユーが白髪頭と番になるニヤ!?」

「ば、馬鹿なことを言わないでくださいアーニヤ!!」 クラネルさんはシルという将来の伴侶が……」

「そのシルの絵もあるんだけど!?」 修羅場!?」 リユーとシル修羅場なの!」

「そんな筈はありません!」 シルの幸福を私が阻む理由がない!」 謂れないことは慎んでくださいルノア!」

「少年のお尻がリユーに………?」 そんなニヤの………そんなニヤの………ニユフフ、NTR

も結構悪くないニヤ〜」

「何を言っているのですかクロエ!？」

わいわいにやーにやーと騒ぎ立てるウエイトレスたち。

ここにシルがいなくてよかった、とベルは思う。

いたら更に収拾がつかなくなる。

「おのれ!! クールキャラを気取っておいて、いざ恋愛ごとになるとポンコツだと!？」

ベル君が好きそうなギャップ萌えじゃないか!!」

「神様!?! お願いだから僕の性癖を大声で分析しないでください!! めっちゃ見られて

ます!!」

しかし、ヘスティアは地団駄を踏み、リニューに突撃する。

愛しい眷属に近づくと悪い虫は即座に滅さなければならぬのだ。

「エ〜ル〜フ〜く〜ん?」

「違います神ヘスティア!?! 私は断じてクラネルさんに……」

「神に嘘はつけえええええええん!!」

ツインテールを荒ぶらせるヘスティアに妖精の言い訳など通用しない。

「確かに今は明確な恋愛感情じゃないんだろう! だがそれで後からコロツと堕ちたあざとい娘なんてもう見せられてるんだよ!」

「グフツ」

ヘスティアの言葉に何故かダメージを受けるリリ。

「てゆーか現時点でもちよつと良いかも……とか思っているだろ!!」

「い、いえ!!? そのような……」

「ボクのベル君が良くないって言うのかアアアアアア!!?」

「この神様、滅茶苦茶ニヤ!?」

もはや完全にヒートアップしているヘスティア。

やがてぐるんつ、とドラえもんに振り返る。

「ドラえもん君。タイムテレビの使い方を教えてもらおうか」

「え、この状況で使っても絶対確なことn……」

「教えるんだ」

（アルカナム神威使った!?!）

（大人げねえ!!）

下界のルールギリギリ……というか厳しい目で見たらアウトなアルカナム神威を行使するヘス

ティア。

天界では12神に数えられたその神格を完全に無駄遣いしている。

「このひみつ道具は未来を見ることが出来るひみつ道具らしい……これで言い逃れは出



それは『嘘』だと、彼が言う事は『嘘』なのだと神であるヘステイアには理解できた。「ええ……私たちは帰れる」

それにリユーも乗った。

瞳の淵に涙を溜め、安らかに笑って。

「ベル……」

血の海に沈み、生死の境をさまよう二人の掠れた眼差しはまるで微睡んでいるよう  
で。

二人は幸福な夢を見て笑った。

「……抱きしめてくれませんか？」

リユーのか細い声が響く。

少し驚いた気配の後、少年は妖精に手を伸ばした。

妖精も手を伸ばし、二人は抱きしめ合う。

少年の胸に誘われたリユーは唇を綻ばせた。

誰よりも繋がり合えたことに涙を流しながら、まぶた 瞼をゆつくりと閉ざす。

「……少しだけ、寝ます……」

リユーが眠る。

それを見届けたベルはほのかな笑みを浮かべ……立ち上がった。



「地上に帰るとか言ってたよね。ダンジョンでリユーが死にそうになる場所って……」  
 「下層とか、深層だろうニヤ」

三人娘たちも野次馬根性を捨てて今この映像を考察する。

あたりがざわつく中、ヘスティアはある可能性に気が付いた。

(もしかして他の泥棒猫候補たちも厄ネタじゃね?)

ベルは無茶をする子供だ。

世間一般のラブコメとは一線を画す、絶望&絶望な展開の末にフラグを確立することになるのではないか。

現にリリの時は一歩間違えば死ぬを何度も繰り返している。

(そう考えると途端に泥棒猫候補者たちの絵が胡散臭く見える!)

鈍色の髪の町娘とか、どう考えても高貴な箱入りお嬢様な狐人<sup>ルナール</sup>や、緑っぽい金髪やら、  
 フレイヤやら……。ちよくちよくヤバ気な案件が見え隠れしている。

と言うかフレイヤはヤバい。マジで。

(え? ちよつと怖くなつて来たんですけど)

ベルのトラブル体質を考えると妄想と言いつても切れない。

主神としてはそれを知っておくべきなのかもしれないが、ちよつと覚悟を決める時間が欲しい。

予想外のものを見せられて動揺してしまっている。

「……………」

ベルとリユーは完全に停止してしまっている。

未来の自分たちが何故あんなことに……と言うワケではなく、未来の自分たちが自然に行っていた抱擁やら優しい嘘の応酬やらで完全に混乱しきっているのだ。

第三者目線で見ると破壊力が凄い。当事者はその自覚がなくとも、あれはイチャついでるようには見ええない。

そんなことを考えて固まっている二人は、実はこの中で一番余裕があるのかもしれない。

「ヨシッ！」

場の混乱を抑えるためか、ヘスティアが周りに良く通る声を発する。

「この先はボクがホームで見る！ うん。しゅーりょー！」

「それは流石に無理あるニヤ」

「仕方ないだろう。こんなことになるとは思ってなかったんだ」

これ酒の席で見て良い奴じゃない、そう判断するヘスティアの言葉にすかさず入るクロエのツツコミ。

ヘスティア自身もちよつと無理あるなーと思つたが、強引に話を切り上げた。



やはり未来など簡単に知ってしまったっていい物ではないのだろう。

ブーブー不満を飛ばされつつも、騒ぎは収まった。

「あれ？　この人知ってる。アポロンと戦争した時の敵だ」

が、そんな空気を気にせず爆弾を投下するのはのび太である。

最初は漫画にも描かれていなかった先の展開にハラハラしていたが、他のみんなが考察を始めだすと、頭を使った作業が苦手な彼は残ったヒロイン候補たちを眺めていたのだ。

すると、ちょうど漫画で出てきたキャラクターがいることに気が付いたのである。

「アポロンって……あの『アポロン・ファミリア』か!？」

「え、なに？　なんでそんなに驚いてるの?」

「『アポロン・ファミリア』と言えば、主神アポロン様の恋路のために周囲に迷惑をかけるまくるファミリアとして有名ですからね」

「凄いファミリアだね」

「呑気なこと言ってられないぞ。そこと戦争になるってことは、お前もそういう騒動に巻き込まれるってことだろうが」

「アポロン・ファミリア」の悪評を知るものたちは哀れむような目でベルを見る。

ヘステイア狙いでベルがまたポコポコにされるのだろうなとみんなが予想する中、ア

ポロンとは天界にいたことから知り合いなヘステイアだけは違う予想をした。

(あいつはどっちもイケる口だけど、どっちかと言うとアポロンが好きなのは男……と言うか少年のはず……ま、まさか……)

嫌な予感が出てタイムテレビをつい操作するヘステイア。

先ほどまでベルとリユールの虚像が映し出されていた場所に、新たな人影が映し出される。

赤みがかった金髪に月桂樹の髪飾り、神々らしく目が覚めるような美形だ。

(この方がアポロン様……?)

ベルはこの先、因縁が芽生えるであろう男神の虚像を見つめた。

男神はチェスの駒を持って何やら考えに浸り……その表情をぐにやりと崩した。

「ひっ!!」

さつきまで真面目な顔だったところに、いきなりの変態顔を見せられたベルから悲鳴が漏れる。

背筋に冷水を浴びせられたような悪寒が「豊穣の女主人」を包む中、アポロンは駒を口元まで持って行き……

「ベエエエルウウウウウきゆうううううん。うへへ……」

(((((狙いそっち!)))

店にいたすべての者の心の声が一致した。

その後、アポロンはとも口にできない変態行為を繰り返し、見ていた者たちの食欲を奪ったと言う。

そして見事な営業妨害をかましたヘステイアは、ミアにこっぴどく叱られた。

## 小さな出会い

逃走する。

慣れない走るといふ行為に戸惑いながら、石造りの道に響く足音たちから逃げ続ける。

「いたか!？」

「ああ、大分弱まっているようだ」

「つたく、ヴィトー様の考えることはよく分からん」

「俺たち下つ端が分かる必要もないだろう」

白装束の男たちは私を追ってきた。

どうしてかは分からない。

彼らは私と話をすることなく、出会い頭にいきなり襲い掛かってきたからだ。

あの白装束の姿をした集団が、幸福に暮らす人々を虐げる場面は都市を見守っていく中で何度も見てきた。

温かな光景が壊れていくのが嫌で、でも私にはもう何もできなくて、ずっと苦しかった。

そんな白装束の男たちは遂に私のことも攻撃してきた。

「糞ツ、都市中を逃げ回っていやがる」

「もう4日目だぞ。いい加減ヴィトー様も苛立ち始める頃だ」

「だったら高位の眷属の方を動員してほしいんだが……あんな化け物相手なんてこつちは一杯一杯なのによ」

ズキズキと痛む足の内側。

都市に住む人間の男たちが激しい運動をした後、たまに動かしていた部分を痛そうに抑えていたが、これがそうなのか。

喉を出入りする空気がこすられて、点滅するように痛む。

もう一步も動きたくない。そんな欲求を何とか捨てる。

あの白装束の男たちが何を考えているかは分からない。

ただ、あの人たちに捕まった人たちが無事に家に帰ってきたことは無かった。

だから、逃げないと。

「はあつ、はあつ……」

懸命に息を抑えながら再び走る。

漏れ出る音で気づかれないか恐れつつも、胸を突き動かす焦燥に導かれるままに。

少しでも身を隠せるように、日の光が届かない、寂れた小さな道を進んだ。

誰もいない、空っぽな路地には誰もいない。

このまま撒くことができる……そう、希望を持った瞬間。

足に衝撃が走った。

「あ……………」

体は感覚を失い、走った勢いのまま石の道に倒れ伏す。

体中に広がる痛みに呻きながら、目に映った小さな影に恐怖した。

それは人型だが、神々に愛されし人間ではない。

それを模した玩具、人形のような存在だ。

目には赤いサングラスをかけ、ちよつと裕福な人が着けているこじやれた帽子ハットを被っている。

手に持つ小道具は迷宮都市では見かけないが、どこか魔導士と呼ばれる人たちの持つ杖に似ている気がした。

(ま、た……)

その杖が火を噴くと、私の体はバランスを崩して必ず倒れる。

かすり傷程度で済むが、その発砲音を聞きつけ男たちが寄ってくるのだ。

今もほら、足音が集まってくる。

「お前は向こうから回れ！」

「梃子摺らせられたがこれで最後だ！」

狭い裏路地は一本道。

前と後ろから挟まれたらもう逃げ道はない。

だから私は……

「来ないでっ!!」

魔力を迸らせた。

体から吹雪が発せられ、驚く男たちを覆い尽くす。

視界一杯に白が染められれば、張りつめていた空気もガラリと変わる。

吹雪が収まった時、男の人たちはいなくなつて、周りの建物も違くなつていた。

「はっ、はっ……あ……あ……」

ガラリと目の前が揺れる。

足が柔らかくなつて力が入らなくて、そのまま地面に手をついた。

汗が浮き出て流れ落ちる。

一緒に力と存在も抜け落ちているような、そんな気がした。

「逃げ、ないと」

震えながらそう言つても、体がちつとも動いてくれない。

溶けるように体を建物の壁にくつつける。





「俺たちだけなら無茶だが、これがあれば話は違う」

そう言って目線を足元の人形に落とす。

人形は少女が消えたことを確認すると、すぐさま少女を追跡するために走り出した。

「仕事熱心なことぞ」

「なんなんだありや……便利なのは間違いないが、あんなマジックアイテム初めて見たぞ」

「ころばし屋DXとかいうらしい。ヴィトー様が例の奴らと取引した結果手に入れたんだとさ」

「……自分たちで言うのもなんだが、よく今の闇派閥イウィルスにそんな高度なマジックアイテムを取引する気になつたな」

忌々しいことだが闇派閥イウィルスはここ最近では負け越している。

元から自分たちにつながるりのある組織ならまだ分かるが、あれはどう考えても未知の技術。

すなわち、新しい取引先という事だ。

「俺たちにも詳しいことは分からんが、オラリオの外側の連中らしい。だから今の勢力に影響されないとかなんとか……」

「オラリオは世界有数の都市だぞ？ 外国だからと言って無関係は決め込めないだろ

う」

「ヴィトー様本人がそう言ってるんだからそうなんだろう。これ以上は踏み込まん方がよさそうぞぞ」

イヴィルス 闇派閥の取引先など真つ当ではないことは確実。

暗黒期の終わりには、正義側の力が強まることを予想して、これまで関わりがあった賞金稼ぎやら暗殺者やらの処分をするくらいには人の心が無い連中なのだ。

下つ端構成員の命など鼻をかむチリ紙以下だと思つてのことだろう。

このまま話を続けるのはよくなさそうだと、男たちは自分たちの上司に話題を切り替えた。

「ヴィトー様と言えば、最近何かあったのか？」

「ああ、なんだか近頃は鬼気迫ると言うか……ブレーキが外れた気がするよな……」

男たちの上司であるヴィトーはイヴィルス闇派閥の幹部の一人である。

それも、あの邪神エレボスの眷属であつたと言う闇の勢力としては特上の経験を経ている。

そんな彼には他の幹部たちと大きく違う点が一つあつた。

イヴィルス 闇派閥の掲げる世界是正の理念。多くの幹部がそれを方便としている一方で、ヴィトーは敬虔な闇の信者として積極的に活動を起こしている。

そういった意味で所謂過激派に属する人間では元々あった。

だったのだが、ここ最近の彼の行動は明らかに勢いづいている。

「あの餓鬼だつて、もつと弱つてから捕獲する予定だつたんだろ？」

「ああ、降誕祭ホーリデーの時期になるんじゃないかつて話だつたが……」

「あのころばし屋？ とかでやりやすくなつたとはいえ、ここまで急いででやることか？」

「さあ……もしかしたらさつき話した取引相手が何か関係してるのかもな」

明確な時期は分からないが、ヴィトーがあのもマジックアイテムを入手した時期から彼の変貌は始まつた。

顔無しと呼ばれ、積極的に活動しながらも、どこか他幹部の陰に埋もれていた印象のあつた彼がこうも存在を主張する日が来るとは。

「最近イヴイルスは闇派閥の中でもバラバラだし……どうなるんだろうな、これから」

「どの道、今更戻れる清い身の上じゃ俺もお前もない。なるようにしかならないさ」

男たちは世間一般の白装束……闇派閥イヴイルスの狂信者のイメージとはかけ離れた疲れ切つた嵌め息をつく。組織の行く末に疑問を持つたところで、ひっくり返した盆から溢れた水はもう戻らない。

「……発砲音が聞こえたな」

「働きのころばし屋様が仕事をしたってことだろう。とつと俺たちも向かうぞ」  
「いい加減次で終わらせよう」

民衆に見つからないように注意しつつ、発砲音が発せられた地点に急行する。

そこには、体をよるめかせながら逃走を続けようとする少女と、少女に向けて冷徹なまでに銃を向けるころばし屋DXの姿があつた。

「よし、さつきよりも存在感は更に薄くなっているな」

「瞬間移動なんてすれば当然だな。奇跡もいよいよ品切れと言うワケだ」

ポロポロになりながら逃げようとする少女の前に、フェルナ恩恵を受けた眷属としての  
ステイタス身体能力を存分に活かして飛び出る男。

「あ、ああ……や、だ……こないでえ……」

ガタガタと震える少女に、特に心を痛める様子もなく淡々と詰め寄る。

生気を感じさせない白装束は少女にはモンスターより恐ろしい化け物のように映っていることだろう。

そんな狂信者が少女を見て思ったことは一つだけ。

また暴発されたら面倒だなという事。

「奇跡って言うのはどのくらいの力が必要なんだ？」

「さあな。俺じゃなくて学者様にでも聞けよ」

「あいつら頭の中身ぶっ飛んでるから関わり合いになりたくないんだよな」  
 散々手を焼いてきた奇跡で、また逃げられては溜まったものではない。

とはいえ、魔力の発動を抑えるマジックアイテムなど自分たちの手元にはなかった。さて、特別なスキルもなく、知恵もない裏世界の人間が、特別な力を持つ子どもを逃がさないためにはどうすればいいか。その答えは簡単だ。酷く原始的な答えだ。

男は懐から鈍色の刃を取り出した。

「こいつで痛めつけるか」

「おいおい。殺すなよ」

「逃がさないようにこうするだけだ」

男は無造作に凶器を振るい、少女の足の健を切りつけた。

例の怪物モンスターレイリア祭の時から闇派閥構成員イヴイルスにばら撒かれた不治の呪詛装備カースウエボンだ。

これでもうウロチヨロされる心配はない。

「後は適当に痛めつけて恐怖を教え込めばいい。逃げようなんて気は起きないようにな」

そうやって男は少女の頭を踏みつける。

そこには隠し切れない嗜虐の色があった。

闇の中で潜み続け、抑圧された男の邪悪が漏れ出る。

「ひっ……」

怯える少女の声に顔に、顔にかかった布の奥の唇が弧を描く。

それをもう一人の男が白けた目で見ていた。

「やるのは勝手だがせめてクノツソスに戻ってからにしたらどうだ」

「いいや。連れていく最中に最後っ屁でもされたら一大事だ。今のうちにやっておいたほうがいい」

「……はあ、また悪い癖が始まった」

少女に暴行を加える相方に呆れたように嵌め息をつく男。

他の構成員と違って、真面目なヴィトーの配下である彼らは表で好き勝手出来なかった。

その鬱憤が溜まっていたのだろうと見逃すことにする。

暴力を振るう方便であるとは言え、その危機感には一定の正しさはあった。

「い……」

ただ、その判断は余りにも愚かだった。

虐げられる弱者。

怯え、殴られ、蹴られる少女の姿に警戒が緩んだのは仕方が無いことだ。

だが彼らは忘れてしまっていた。



いやだとおもってはなしたらすーといたいのきえていった。  
でもまだおくのほうにちいさなきたいののこってる。

「……さむく」

あかいてんてんはおそらからおちてくるしろいふわふわでなくなっちゃう。  
しろいふわふわはわたしのうえにもおちてきた。どんどんどんさむくなる。

このままわたしもなくなっちゃうのかなあ。

どんどんどんさむくなる。

ずっとまえからそうだったけどいまはもつとひんやりしてる。

むねのおくにぽっかりあながあいてるみたい。

「……」

あなからさむいのいっばいひろがって。

からだからなにかがなくなっていく。

あしからながれるあつたかいみずがわるいのかな。

とまって。

いたいのあつたかいのとまって。

いっしょうけんめいおいのりしたらぽんわりあしがあつたかい。

もうあかいのながれてない。



「あ」

そしたらなにかがなくなっちゃった。

ペリペリわたしがはがれちやつてどんどんちいさくなる。

わたしはどんなだったけ。わたしはどこにいたんだっけ。

あたまのなかもからつぽになっちゃった。

「……」

からつぽのままがいやだからそらをみた。

かおをうえにするためにからだをころがした。

まっしろのじめんはつめたくていたくてやらなきやよかった。

すぐにせなかはみずだらけふくがせなかにはりついてきもちわるい。

でもおそらはすごいきれい。

まんまるおつきさまとおほしさまたちがきらきらひかっている。

ちっちゃいあつたかいのでひえてるおそらをあたためてる。

「……だれ、か……」

とつてもきれいだからかなしくなつてめからみずがこぼれた。

さつきのあかいみずとはちがうやさしいあたたかさ。

「た……う……け……」

くちがうまくうごいてくれない。

あたまがどんどんましろ。

おつきさまとおほしさまがほしくてわたしはてをのぼした。

でもまったくあたらなない。

すごいくやくしくてわたしはそれでもあきらめきれなくて。

「……大丈夫？」

まんまるおつきさまがおんなのひとになった。

ひよっこりでてきたそのひとはかなしそうにわたしをみた。

「……おつきさま？」

「そう言われたのは初めてかなあ」

こまっちゃったみたいにならったかおはすごいやさしくて。

わたしのむねはちよつとあつたかくなる。

そしたらねむくなっちゃった。

「もう営業は終わってるだろうし、お店に連れて行ってもいいかなあ……」

おねえちゃんがあたまにかぶってたひらひらをわたしにかぶせた。

あたまにすりすりされたようにかんじながらわたしはゆめにおっこちちゃった。

## 大☆暴☆走

シルが訳ありな人間を「豊穡の女主人」に連れ込む。これ自体はよくあることだ。

小悪魔的、と評されることが多い彼女だが、困っている人間を見れば手助けするくらいには善人だ。現に酒場には、そうした経緯を経て店員として居ついた者も存在する。

「お願いミアお母さん。この娘をここにいさせて欲しいの！」

「そうは言ってもねえ……」

シルの懇願に困ったようにミアは髪をかき上げた。

店内の同僚たちもまたシルの悪癖が始まったと囁き合う。

シルがボロボロの幼児を連れて店に来たのは、開店準備の真っ只中のことだった。

店の人間におびえた様子で、あちこちをキョロキョロと見渡すヒューマンの少女がどのような状態なのか。訳ありだらけの店員たちは大体察することは出来たが、だからと言つて店で面倒を見るといふのはどうかと話し合う。

「……？　かわいいそうだし、いさせてあげてもいいじゃない？」

「あのねのび太君。犬猫じゃないんだからそんな簡単に決められないよ。今はもう僕たちが面倒を見てもらつてゐるわけだし」

子どもの面倒と言うのは馬鹿にならないものだ。

店に置けばその分負担が増える。

ただでさえ多忙な店員たちからすればこれ以上の負担は御免被るだろう。

それに、少女の家族のことも気になる。

少女の事情が分からない以上、下手をすれば誘拐事件だ。

……あんなボロボロの服装で親元でまともな生活をしていたとは思えないが、それならそれで問題がある。

仮に虐待親などであつた場合、他所の家庭のゴタゴタに巻き込まれる可能性があるのだ。

そうなれば泥沼式に抜け出せなくなるかもしれない。

「それにあの傷がなあ……」

「足の傷がどうかしたの?」

「あんなの普通に暮らしてたら絶対につかない切り傷だよ。絶対になにかあるよ」

少女は足の健を斬られている。

鋭利な刃物で、両足をバツサリと。

これが偶々料理の手伝いをしていたら、包丁を落としてうつかり……などという怪我ではないことは、医学知識を持たないドラえもんでも分かった。

「漫画の世界だからって油断してたけど……ここは凄い危険な場所だよ。どんなことに巻き込まれているか分かったもんじやないだろう？」

「だったら尚更助けないと……」

「警察、こつちだと憲兵か、それがいるだろう？　酒場が解決する問題じゃない。と言うか、まず病院に行つた方がいいんじゃないかい？」

ドラえもんとて少女のことは心配だし、少女をあのような目に会わせた何者かには怒り心頭だ。

しかし、何事にも道理がある。

のび太は世界の危機とやらを何度か経験しているせいで感覚が麻痺しているが、人の命を預かるという事の責任は重い。

一般人が気軽に背負つていい物ではないのだ。

「ねえ君。名前は？」

「……？　な、まえ……？　わからない……」

「はい記憶が無いこと確定ー。逃げられないように足の健を斬つてあつて、記憶喪失とかどう考えても厄ネタニャー。深入りしても碌なことにならんわコレ」

「ミャーたちで面倒を見れたらそりゃーいいけど、いくらなんでも難しいニャ……」

ウエイトレスの三人娘も少女を引き取ることに反対のようだ。

同情する気持ちこそあるが、そこは酸いも甘いも噛み分けるオラリオの住民。良くない兆候をかぎ分けければ、躊躇もする。

「……」

同じようにシルに救われ、この「豊穡の女主人」に流れ着いたリユーは何も言えない。否定も、肯定も、彼女の立場では言えるはずがなかった。

ただ、この中で誰よりも悪の臭いに敏感な彼女は、少女を襲ったであろう悪意に強い危機感を覚える。

（闇派閥イツイルスの人攫い。……彼女はその脱走者なのでしょうか）

可能であれば助けたい。今は背負う資格がなくとも、かつて正義を胸に抱いた者として。

だが、この酒場のことを想えば迂闊なことは出来ない。

そんな葛藤で彼女は言葉を発せない。

「ミアお母さん……」

シル自身も無茶な願いだとは分かっているのか、その言葉には勢いが無い。

これが平時であるならば別だったであろうが、今は闇派閥イツイルスが活発化している。

如何にこの酒場が下手なファミリア以上の戦力を有するとは言え、万が一がある。

そんな時に騒動の種を持ち込むのは、彼女としても不本意という事だろう。

(それでもここに連れてきたという事は……それだけのなにかがこの娘にはあるってことかい)

店内の者たちには様々な懸念が飛び交っているだろうが、シルは聡い娘だ。全て分かっただうえでの行動だろう。

これがいつもの我儘ならばミアも遠慮なく突っ返したが、彼女が本気であることはよく伝わった。彼女の眼を知るミアとしては無碍には出来なかった。

「……好きにしな」

「ちよっ!? ミア母ちゃん!?!」

「その馬鹿娘が自分で面倒を見るならこっちも迷惑はかからないだろう」

【豊穰の女主人】のルールであるミアの鶴の一声によって、少女の処遇は決定した。

店員の少女たちも初めはブブー言っていたが、ミアの「いつまでくっちゃべってるんだい!!」と言う怒号で慌てて開店準備を再開する。

「……」

リユーはシルが少女を連れて二階に向かうのをじっと眺め、何やら考え込んだ。

「……シルがあの子の面倒を見る」

「リユー! あんたもとつと働くんだよ!! よそ見る暇なんて……」

「……シルの料理を食べさせるのは虐待ではないでしょうか」





はいいが、冒険者でもない強者たちの庇護下にあるとなると、こちらからの干渉は控えたいほうがいいか」

【豊穰の女主人】の向かい側。

建物と建物の間に隠れる全身ローブのその影は独り言ちる。

「どうするウラノス」

『……あの少女は未だ不安定な存在。ここで強引に居場所から引きずり出すことで暴走しないと限らん。今は弱っているとはいえ、周囲を氷漬けにする程度ならば可能だろう』

「そうなると静観、ということでもいいな？」

『ああ。任せるぞフェルズ』

手のひらをコロンと転がる水晶に向かい話しかけるフェルズ。

水晶からは威厳のある老人の声が響いた。

「……しかし、よりにもよって【豊穰の女主人】とは」

フェルズは悩まし気に仮面を搔いた。

世間には単なる一酒場としているが、その実態はかなり胡散臭い。

というより、店主が元々所属していた派閥ファミリーを考えれば、先日大いに迷惑させられた女神の駒……とはいかないまでも、密接なかかわりがあるのは明らかだ。

今回の件はあの女神の悪巧みではないだろうが……この先はあの都市最強派閥も頭の中に入れて行動しなくてはならないようだ。

「疾風の件で縁はもう絶たれていたものと思っていたが、何が起こるか分からんな」

ここからどう動くべきか。

かつての疾風の暴走の際に、彼女には自分がギルド側の人間だという事は知られてい

る。  
あまり自分の存在を晒すことは喜ばしくないが……。

(いざとなれば止む得ないか)

彼女を狙うイヅイルス閻派閥は妙だ。

まるでベル・クラネルの持つひみつ道具のような特殊なマジックアイテムを使っている。  
る。

フェルズであつても出処が皆目見当がつかない、未知の力を。

イヅイルス閻派閥も独自の研究機関は持っているだろうが……それで説明は出来ん)

マジックアイテムは使い方次第では大物食いが可能だ。

第二級冒険者に匹敵する実力者が揃っているとはいえ、隠し玉で逆転される可能性は大いにある。

「難しいな……」

フェルズは今回の事件を任されているが、同時に別件も扱っている。

怪人クワイチャーによつて示唆された59階層で起きている異変、それを確認されるために出た

【ロキ・ファミリア】の【剣姫】に持たせたマジックアイテムによる情報収集。

並行作業は毎度のこととはいえ、いい加減私を便利に使い過ぎだぞウラノス。

サボれば都市が減びるからやるしかないが。

「気になるのは闇派閥イザイリスの動きか。あの男がどう動くか読めない」

『フェルズが13階層で見たという男か』

「ああ。私を撒くかのような動きを見せたので尾行は中止したが……あのまま奴らのアジトが分かれば話も変わったのだが」

現在フェルズが追う事件の主犯と思われる人物。

赤髪に細目の青年だったが、かなり切れる人物らしい。

あれから今日までフェルズに尻尾を掴ませない。

（体捌き見たところ、私と同等程度のステータス……低くはないが特筆して脅威でもない。【殺帝アラクニヤ】の方がよほど注意すべき人物ではある。しかし……）

思い返すのは13階層での独白。

言っている意味は分からなかったが、あの時に男がうつすらと明けた瞳の奥に燃えていた感情。

それがフェルズを不安にさせる。

(単純な能力やステイタスでは測れぬ悪。あれはそういった類なのだろうか)

このまま放っておけば大きな厄災を引き起こす。

長年オラリオを守り続けてきたことにより培われた勘が警鐘を鳴らしていた。

「ここ」まで静寂を保ち続けた奴が簡単に動くとは思えないが……【ロキ・ファミリア】がいない間に強硬手段を取る可能性もある。ここからは離れられんか」

『私もロイマンを使い情報を集めさせよう』

「助かる……む？」

今後の方針が決まり、通話を終了しようとした時。フェルズは騒がしい声と音を聞いた。

耳が無いのに音を聞くというのは妙な表現だが、そうとしか言いようがない。

その声は最近聞き馴染み始めた少年のホイッスルボイスともいうべき悲鳴で、音は蒸気が連続して発生している音だろうか。

ポツポーーーーツ!! と朝から騒がしい音を立てながら走り回る白髪の少年。

ベル・クラネルであった。

頭に付けた煙突のような帽子から、煙を出しながら爆走している。

半泣きになっているのを見るに止まれないのだろうか。

人に当たっていないのは通勤を終えた時間帯であることと、ベルがレベル2の反射神経で何とか避けまくってるからだ。

「ふむ」

フェルズは視線を落とす。

そこにはガラクタの山があつた。

「この店はごみを人目に映りにくい路地に捨てているらしい。マナーの無いことだ。

「縄と……ダンジョン産の竹と……木材か」

「全くもってなっていない。」

「こんなに使える物ばかりだというのに。」

「……」

『フェルズ……今は遊んでいる場合では』

「無論だウラノス。都市の存亡がかかっている状況で私が私情で動くと思つていいのか。だとすればそれは酷い侮辱だ。そもそもここで私が騒ぎを起こしてしまえばあの酒場の店員たちにも勘づかれる恐れがある。そうなれば私の任務は困難なものになるだろう。勿論見つかつてしまつてもマジックアイテムでどうとでも誤魔化せるが態々手札を使うわけがない。お前が気軽に使わせるマジックアイテムを作るのは大変なのだから。だからそんな一時の感情でデメリットしかない行為を私がするはずがや

はり 我慢 できん !!」

ヒュバアツ!! とメインストリートに飛び出るフェルズは、ベルがそのまま通るであろうルートを瞬時に計算する。

せめて透明状態インビジビリティになれと言うウラノスのツツコミを置き去りにして掴み取ったガラクタでなにやら工作を始めた。

まず【豊穡の女主人】の屋根に飛び乗り、しなる竹を固定。

次に木材を組み立てて四角の枠を作る。そして並行して枠と同じ大きさのガラクタを置く。

それをマジックアイテムで道路に固定。

更に縄を交差させる形で円を作る。そして一方の縄を円の中へ上から入れ、その拍子に新たに出来た円にも上から通し、最初の円と二本の紐を引つ張り『わな結び』にする。

その縄に別の木材を括りつけ、四角の枠に通して引つ掛ける。

縄が外れないように括りつけた木材とガラクタの間に、細い棒を地面に並行する形でセツト。

罨の完成である。

「うわわわわわっ!!? 止まらないっ!!?」

ベルはフェルズの予想通り止まることが出来ず、罨にかかる寸法。

細い棒を蹴り飛ばされ、支えを失った縄はしなる竹に引き寄せられて上空へ。そこにちようど円になった縄の先がベルの足を捉えた。

大きな円は空中で引き締められ、ベルの足を縛り付ける。

「あーれー!?!」

後は【豊穡の女主人】の前に縄でつられた哀れな鬼がいるのみ。

ひみつ道具の影響か未だに空中でシュ、シュ、シュ……と言いながら足をばたつかせる光景は滑稽だ。

まあ、これで人にぶつかる心配はないから良いだろう。うん。

「フハハハハツ!! こんな罨を瞬時に作り出す私が怖い!!」

『フェルズ……』

「む? さては私が見られてないか心配しているのか? 安心しろウラノス。既に幻想花の花粉をばら撒いている。ここら一帯にいる者は皆夢を見ているから、飛び出た黒ローブなど夢の一部とは思われん。完璧だな!!」

『そういう事ではないのだが……仕事を任せ過ぎたのだろうか』

この後、第二級冒険者並であるがゆえに幻想花の効かないウエイトレスたちに見つかり、盛大な鬼ごっこをした。

## 炎の少年と薪の少女

「なんで坊主が店の前に吊られてるんだい……」

「ワカリマセン……」

【豊穰の女主人】に突如として飾られた現代アートと化していたベルは十数分後、異変に気が付いた店員たちによつて救助された。

ミアの呆れかえった表情にベルは羞恥心で顔を赤らめる。

アレは恥ずかしい。

「御免ミアお母さん。見失った」

「悪意のない監視者かと思つていたんだがね。なんでそんな行動を取るのか」

「……ニヤ？ ひよつとして母ちゃん気付いていたのかニヤ？」

「まあね。闇派閥イワイルスではないだろうと思つていたんだけどね……妙なマジックアイテム振りまいて何を企んだのやら」

無差別テロにしても大した被害はなく、何かの作戦の陽動にしても何も起こらなすぎる。

まさかこれが監視者の一時のテンションに任せた行動とは夢にも思わないミアが訝



し気に顎を撫でた。

「……」

「あれ？ 子供、増えたんですね。ひよつとしてのがび太君の話に出てきてたし、ずかちゃんですか？」

「しずかちゃんじゃないよ。日本人じゃないじゃない」

「この世界の住民にそれが分かるわけないだろうに」

自分をじーと見つめる少女に気が付いたベルの言葉に対するのび太たちの発言に彼は苦笑する。

そう言えばこの世界の人間は、のび太たちの世界の人間よりも、見た目がカラフルなのだと言った話を前に聞いた気がした。

「シルが拾ってきた新しい子供ニャー。ウチは託児所かつつうの」

「ミャーの猫耳を弄りまくってもう大変なのニャー!! このおさかなさんは!!」

「お、おさかな？」

「ニャハハ！ ミャーが付けたコイツの名前ニャ。親しみを持てるさいこーの名前ニャ」

「アーニャ？ 私その名前却下したよね？」

怖い笑顔でアーニャを見るシル。

アーニヤのビビりまくった「フニヤガツ!」と言う悲鳴が漏れる中、少女（おさかなさんではない）はベルの下へズルズルと近づいた。

「……」

「え、えつと?」

「おゆき、いつぱい。つめたくなあい?」

「これは僕の髪の毛の元々の色で……し、シルさん? この娘……えつと」

「ノエル、ですよ」

「ノエルちゃん……なんだか幼すぎると言うか……」

少女は確かに幼児と呼ばれる年齢のようだが、それにしても常識を知らなすぎではないか。

神々がよく言う「ふしぎちゃん」と言う奴だろうかと戸惑うベルは、少女を拾ったというシルに疑問をぶつけた。

「そうなんですよねえ。記憶が無いからでしょうか」

「記憶が?」

「はい。帰る家も分からないみたいで……」

その話を聞いて真っ先に考えたのは闇派閥イザイルスの被害者と言う可能性だ。

犠牲者ゼロと報じられてはいるが、実際の所は謎だ。

嫌なことに巻き込まれている可能性は、一カ月程度とは言えオラリオで生活したベルには有り得ないものではないと思えた。

「【ガネーシャ・ファミア】に聞いてみましょうか？　もしかしたら搜索依頼が届いているかもしれません」

「ありがとうございます。お願いします。……きつとないでしょうけど」

「シルさん？」

「何でもありませんよ」

にこつと笑ったシルにベルは嫌な予感を覚えた。

これは話を強引に変える時の顔だ。

主にベルがダメージを受ける話題で。

「そ・れ・で？　何でベルさんはなんでお店の前に吊るされていたんですか？　ひよつとして厄除けのお守りになってくれました？　兔脚ラビットフットお守り……なんちゃって」

「なんで吊るされたのかは僕にもワカリマセン。こつちが聞きたいです。なんでお店の前に罠があつたんですか？」

「そりゃ、あたしが聞きたいよ」

下手人と思われる黒ローブを今度見かけたら、一発拳骨を食らわせてやると指をほきほき慣らすミアから無言で離れる店員一同。

行かれる店長の恐ろしさを知る彼女らは黒ローブの冥福を今から祈った。

「そもそも少年は何であそこにいたニヤ？ 今日朝からダンジョンに潜って来るって言うてなかったかニヤ？」

「えっと、あそこにいたのはマジックアイテムの取り扱いに失敗して……」

「ベルが頭に付けていたのは『人間機関車セット』だよね」

「うん。凄い速さで走れたのはよかつただけど……まったく止まれなくて、ダンジョンを抜け出しちゃったんだよねえ……」

思いっきり街中をひみつ道具で爆走した事実を目を遠くする。

これももう隠蔽不可能かもしれないなあ……。

実際にはちようどその時間帯に住民たちは謎の集団幻覚を見ており、頭に変な帽子被って煙を立ち上げながら爆走する少年のことも幻覚と思っていたが。

現時点での少年がそれを知ることにはなかった。

「畏で暫くバタついたら止まりましたけど」

「エネルギーを使い果たしたんだと思うよ。また石炭と水を食べない限り大丈夫」

「え、……冒険者君何食べてんの」

「お、美味しかったですよ？」

ルノアにドン引かれたことにへこみつ、これからどうしようかとベルは独り言ち

る。

ダンジョンに残っている仲間たちに合流したいが、それには一つ問題がある。

「ジー……」

「の、ノエルちゃん？」

何故かズボンを引つ張ってジーと見つめ続けているノエルだ。

幼女を振り払って出ていくのはお人好しなベルには憚れた。

「ノエル？ ベルさん困っているよ？」

「……もふ、もふ……」

「ノエルはベルさんの髪が気になっているみたいですね」

「そうなの？ はい」

ベルは何故だか僕の髪の毛にする人多いよなうと思いつつ、膝を折ってノエルの手が届く位置まで頭を下げた。

ノエルは表情の変化は乏しいがどこかご満悦な様子でベルの頭をくしゃくしゃにする。

（アーニヤさんやクロエさんもこんな感じで弄られたのかな……）

ちらりとベルはノエルの足を見た。

先ほどから床を這うように動き回る少女の足は痛々しい傷跡がある。

(ドラえもんさんなら治せるはず……いや、このままってことは出来ないのか)  
傷が治らない呪詛。<sup>カース</sup>

のび太たちの世界には魔法はないらしい。正確には個人の情念で芽生えるステイタスに裏打ちされた固有魔法は。

如何に技術が進んでいるとは言っても、ない物には対抗策など用意できない、という事なのだろうか。

「……」

「わっ」

「こうしたほうが触りやすいでしょ？」

無性に胸が締め付けられたように感じられて、少女を持ち上げ、肩車する。

少女は最初は戸惑っていたようだが、直ぐに髪を弄ることを再開する。

軽かった。

生まれてきて一度も物を食べていないんじゃないかと思う位に。

この少女に何があったのかは分からない。

ただ、こんな小さな少女に降りかかった不幸を想うと、ベルは<sup>まがた</sup>瞼が熱くなることを止められなかった。

「ふわああ……たかい、ね……！」

静かに幼い興奮を発するノエルが体を揺らす。

少女の存在をしつかりと認識するベルは、自分の動揺を悟られまいと唇を意図的に緩めた。

「僕の髪ばかりじゃなくて、あの人の耳も触る?」

「フニヤ!! こつち巻き込むニヤ白髪頭!!」

「ねこみみ、さわる!」

「フニヤアアツツ!」とベルの頭の上から手を伸ばすノエルに猫耳を蹂躪されるアーニヤの叫び声が木霊す。

そんな三人を見て、店の人たちは笑っていた。

「……これはまた随分と賑やかなことになってるな?」

いつの間にか、店内に現れていた青年の声にベルは振り向いた。

「あ、ヴェルフ……」

「ひみつ道具の暴走が収まって一安心ってどこか。だがなにやってるんだ? これは」  
その言葉にベルはバツが悪そうに笑った。

ヴェルフも肩車されている少女の足の傷を見て、なんとなく事情を察したのか追及はしてこなかったが。

「そろそろりり助たちと合流するぞ」

「うん…………ごめんね、ノエルちゃん。ここまでみたい」

「あ…………」

ノエルを肩から降ろすと、ベルは人間機関車セットを持ち上げる。

そろそろダンジョンに潜らなければ。

「それじゃ…………バイバイ」

「ばい、ばい…………？」

「お別れの挨拶だよ」

「え…………いつちやうの…………？」

ベルを見上げる瞳に涙が溜まる。

それを見て今のは良くない言い方だったとベルは反省した。

お別れ、では冷たすぎる。

「ごめん、言い方が悪かったね。…………また、会おうね」

「…………うん」

名残惜しいがいつまでも【豊穡の女主人】に居座る訳にもいかない。

ベルはシルたちに挨拶をし、店を出た。

ヴェルフもそれに続こうとし…………一度、ノエルを見た。

「…………？」





鍛冶師<sup>スミス</sup>なだけあって、目ざとくノエルの傷から凶器を特定していたヴェルフは反吐が出<sup>ス</sup>そうな表情<sup>ミ</sup>だった。

冒険者でも呪詛<sup>カースウエボン</sup>装備を持つ者はいるが、あくまでもモンスターに対して使うものだ。

しかし、少女の傷跡から見て取れたのは、ギザギザとした刃。

傷跡を細かくつけ、仮に呪詛<sup>カース</sup>が解けても治癒を遅くするためのものだ。

それは、異様なタフさを持つモンスターには意味がなく、脆弱な人間を痛めつけるにはもってこいの武器。

「本当に嫌になるな、闇<sup>イヴァイルス</sup>派閥<sup>イヴァイルス</sup>つてのは」

ヴェルフは闇<sup>イヴァイルス</sup>派閥<sup>イヴァイルス</sup>が本格的に活動していたという暗黒期のことを知らない。

ただ、今回のことで嫌な連中だと確信を持っただけだ。

「【ガネーシャ・ファミリア】にも伝えておけ」

「怖がらないかな」

「あいつらが直接会えなくても、そういう被害を受けた人間がいるってことは知っていたほうがいいだろ」

ヴェルフを見て怯えていた通り、人見知りの少女の様であるため、【ガネーシャ・ファミリア】の団員を見て怯えるかもしれないという懸念はあるが、ベルに紹介してもらえれば大丈夫だろうとヴェルフはこの話題を打ち切った。

「しかし、なんであの店にいたんだ？」

「実は店の前で罨にかかって宙吊りに……」

「どういう状態だよ」

ヴェルフの至極真つ当な問いに苦笑しつつ、あの辺りでぶら下がっていたんだよ、と【豊穣の女主人】を指さした時。

一人の男が目に入った。

「……」

「ベル？」

もう通勤の人ごみは落ち着いてきた時間帯とは言え、今日は久しぶりの快晴。

そろそろお店も開店し始めると考えれば、人がメインストリートを出歩いていること

自体はそう不思議ではない。

男が持つモノが無ければ。

（あの形……！）

覚えがある。

前に似たようなものを彼は何度か使っていた。

男の両手に収められている緑色の箱型のアイテムを。

ノゾキアナから風景を捕え、スイッチを押すそのアイテムは正に……

「カメ、ラ……!?!」

ひみつ道具が生み出す異世界のアイテム。

それを見たベルの脳裏に浮かんだのは先日の死闘。

ミノタウロスとの戦いの中に割り込んできた謎の人形。

闇派閥イツイルスのマジックアイテムとされていながら、その実誰もそうだと信じられなかつたものだ。

(もし、あれがみんなが言うようにひみつ道具と同じものだったのなら……!)

あの男が持つそれもひみつ道具なのではないか。

そんな疑問がベルの脳裏に走る。

「……」

「お、おいつ」

気が付けばベルは男に向かっていった。

どくどくと、痛いくらいにはねる心臓の音に後押しされて。

ひみつ道具の凄さはベルが一番よく分かっている。

未だ使いこなせずとも、その力に支えられてベルはここまで来たのだから。

だから、もし、もしもその力が闇派閥イツイルスに渡ってしまったら。

想像もつかないほどの厄災に至るはずだ。

これが正しい選択かは分からない。ただ、もしもそのカメラの効果人が人々に害をもたらすモノなら……

黙っていることはベルにはできなかつた。

パシヤリツ、と男がシャッターをきる音がする。

男は風景をレンズに収め、手慣れた様子で様々な建物を見て回っていた。

「あのっ」

「ん？ ……おや」

意を決し、発せられたベルの声に男が振り向く。

赤髪に細目。貼り付けられた笑顔が特徴的な男は、ベルを見た一瞬、なにか驚いたような素振りを見せた。

「これはこれは……最近巷を騒がせる新人さんではないですか。私になにか御用ですか？」

「……その、アイテムは」

「ふむ？ ……これに興味がおりますか。中々お目が高いようで」

男は丁寧な物腰でベルに應對する。

闇派閥イッイリスの関係者と思っていた男の態度に困惑しつつも、ベルは気を緩めなかつた。

「それは……なんですか」

「ちよつとした趣味のオモチヤですよ。そう悪い物ではありません。間違つても魂を奪つたりなどしないですとも」

「魂……?」

「冗談です冗談。昔、これを見てそう反応した人がいたと、このカメラを譲ってくれた方が仰つていたので」

くつくつと笑う男はそう言つてベルに向き直つた。

「初めまして、新しい英雄様。私は単なる暇人……ウイトーと申します」

この時、細められた瞳の先に何を宿していたのか。ベルにはまだ分からなかつた。

## 主人公へ問う

「そのマジックアイテムは一体どこで手に入れた物ですか」

ヴィトーと名乗った男が持つカメラ。

ひみつ道具の名前の中に度々登場した名詞に警戒心をあらわにするベルだったが、ヴィトーの返答はあっさりとしたものだった。

「これですか？ 友人……と言うにはかなり冷めた関係ですねえ。仕事上の取引相手の厚意でいただいたものですよ」

男は緑色のカメラを見やる。

細目に薄っぺらい笑顔を張り付けた彼の心情は分からない。

「その人がそれをどこで見つけたのかは分かりませんが」

「さあ……魔法<sup>アルテナ</sup>大国から貰ってきたようですが、詳しいことは私も知りません」

魔法<sup>アルテナ</sup>大国と聞いて、ベルは内心歯噛みをした。

かつて不老不死の秘宝を作り出したと言われる賢者を生み出した、魔導士たちの国。

【魔導】や【神秘】の発展アビリティ保有者が山ほどいるあの国ならば、妙なマジックアイテムを作っているのも不思議ではない。

「もしやこのカメラに興味が？」

「あ、えつと……」

「このマジックアイテムを融通してくださった方に貴方を紹介してもいいですが……中々気難しい方ですからねえ。おすすめはしません」

この人のいう事は本当なのか。嘘なのか。この人は分かっているのか。この人自身騙されているのか。

判断ができない。

魔法大国は超秘密主義。

調べたところでカメラがこの国で開発されているのかは分からない。

というか魔法大国は魔法を至上とする価値観を持つ国だ。

そんな成り立ち故に、優秀な魔導士を多く保有するオラリオをかなり敵視しているらしい。

弱小ファミリアとは言え、オラリオに属するベルには尚更情報は流れてこないだろう。

この場で白黒つけるのは難しい。

だが、もしもこの男が闇派閥ならば野放しにもしておけない。

「……それでも、その人と会わせてもらえませんか」



「……」

「その、どうしても欲しいんです。説得は僕だけでやりますから」

何とかヴィトーとの接点を残し、カメラの出処を探る。

そのためには取引相手を知る必要がある。

咄嗟に嘘を吐くベルの内心はぐちゃぐちゃだった。

自他ともに嘘を吐くことが向いていないと評するベルは、心臓が口から出てきそうなほど緊張しながらヴィトーの返事を待った。

「ふむ」

「……駄目、ですか?」

じつと自分を見つめるヴィトーから眼を逸らしそうになるのを我慢する。

おかしな態度を取れば、嘘に気付かれるかもしれないのだ。

「望みは薄いとは思いますが……いいでしょう。話は付けておきますよ」

「……ありがとうございます」

「ただ、多忙な方ですから、数カ月は待つていただくことになるかと」

「分かりました」

面識のない人間からの申し出を受けて貰えるものなのかと不安だったが、なんとなくなったようだ。ほっと胸を撫でおろしそうになるのをぐっと我慢する。

気を抜くことは出来ない。相手は闇派閥イヴィルスかもしれないのだから。

「しかし、冒険者の方はこういったものには興味が無いように思っていたのですが」「えっと……探索中に役に立つかと思ひまして」

「確かに実物と見間違えるほど精密な絵ですから、使いようはいくらでもありますね。流石は噂の新人さんルーキだ。中々勤勉でいらっしやる」

「ヴィトーはそう言う」と【豊穰の女主人】をパシャリとカメラで撮影した。

あつ、と声漏れそうになるのを何とか堪える。

（何も、起きてないよね……？）

あのカメラがもしも攻撃的なひみつ道具だったらと考えると肝が冷えたが、見たところおかしな変化はない。

目で見えない何かがあるかもしれないが……後でドラえもんを確認しようとするのは決めた。

「ここでこうして知り合えたのも何かの縁です。実は私、貴方様にどうしても聞きたかったことがあります。よろしければお聞きしてもよろしいでしょうか」

「……？」 はい、なんででしょうか」

ヴィトーの薄い笑みを張り付けた口角が僅かに上がる。

男の見せる表情に言いようのない不安を覚えたベルは、泡立つ腕を咄嗟に抑えた。

「なに、そんなに難しいことではありませんよ。物語の背景にも成れぬ凡人の小さな疑問です」

何処か芝居がかった口調でヴィトーは問いかけた。

「この世界で私たちはなんのためにとお思いでしょうか」

「……なんのために、と言うのは……？」

「運命に縛られた私たちの物語に果たしてどのような意味があるのか……ある意味、最も行く先を決定づけられている貴方にお聞きしたかったのです」

男のいう事は曖昧で、規模が大きすぎて……飲み込むのに少し時間がかかった。

運命、というのは無慈悲な言葉だ。少なくとも、男の言葉から読み取れるニュアンスからはポジティブな意味は読み解けない。

(……運命に縛られる)

その言葉はこの世に生きる者たちへの侮辱。

胸を抉り、絶望に浸る様な大切な人を失った悲しみも。

世界を色づかせ、胸を高鳴らせる恋心も。

悔しさで嗚咽と共に流した涙も。

苦難の果てに紡いできた絆も。

命を燃やす死闘さえも。

全てが定められた道の上を進んだだけなのだとしたら。

自分たちにはどんな意味があるのだろうか。

酷く意地の悪い質問を問いかける男は薄い笑みを浮かべ続ける。

その意味は意地の悪さすら感じさせた。

その一方で、決して軽くはない意志も込められた気がしたから。

ベルは懸命に頭を働かせた。

「……僕はまだ冒険者になつたばかりで、みんなほど多くの物を積み重ねてはいないですけれど。色んな事を経験してここまで来たと思います」

「……」

「それが初めから決まっていたことだとしたら、それは凄く寂しいし、悲しい事ですけど。きつと後悔はしないと思います」

「そう言えるのは何故？」

ヴィトーの再度の問いかけに、ベルは一度言葉を区切った。

胸の中の靄はまだある。

それでも、確かなことを引つ張り出した。

「僕が歩んだ過程で笑つてくれている人たちがいます。その笑顔は絶対に間違いじゃないと信じたいですから」

ベルの脳裏に浮かぶのはこれまでであつて来た人たちだ。

大好きな人たちの笑顔が自然と浮かんでくるのなら、物語であつたとしても恥じるものではない。

そう、ベルは信じてる。

「……………それが、貴方ですか」

ヴィトーは笑みを消し、真剣な表情でベルを見る。

その答えは彼にとって正しかったのか、それとも望んでいたものではなかったのか。

感情を読み取ることは出来ない。ただ、目の前の人間は本当に、この問いにベルを投げかけたかったのだろうかという事だけは伝わった。

ヴィトーはベルの答えを軽んじることなく、真摯に受け止めたから。

やがて、遠目で二人の会話を見ていたヴェルフが話しかけてきた。

「おい、用事が終わったなら早く行くぞ。リリ助たちが待っている」

「あ、うん。それじゃ、ヴィトーさん、僕はこれで」

「はい。貴重なお時間を妙な質問で浪費させてしまい申し訳ありませんでした。ええ、とても参考になりましたとも」

ヴィトーに会釈をし、ベルは駆け足で待ってくれていたヴェルフの下へ向かう。

その最中、あることに気が付いた。



「いい加減戻らないと皆さんもまたうるさいでしょうしねえ」

イツイルス 閨派閥の幹部である彼が、日中堂々と街に繰り出すことをよく思わない者は多い。

ただでさえ落ち目なイツイルス 閨派閥の幹部が、散歩中に捕捉されて御用、などと言う展開は勘弁してほしいと言う彼らの主張も分からなくはないが、ヴィトールはこの趣味を止めることはなかった。

(思いもよらない収穫もありましたしね)

ベル・クラネルとの遭遇は全く意図していなかった出来事だ。

世間と言う物は案外狭い。

彼と出会うことになるのは雪が降る季節だと予想していたのだが。

「まあ、いいでしょう。接点があればこちらもやりやすい」

元々タイミングを見計らって接触する予定ではあったのだ。

向こうの方から近づいてくれたのは僥倖と言つていいだろう。

「どうもこのひみつ道具の出处と、私のことを探りたいようですが……根が素直過ぎましたねえ。筒抜けです」

少年の言い分には微笑ましいほどに粗がありすぎた。

この世界にないカメラを欲するという違和感。

唐突に顔も知らない取引相手との交渉を申し出る焦燥。

なにより、目線。

嘘を吐くときは相手と目を合わせてはならない。そんな腹の探り合いの基本すら彼には分かっていなかった。

(ベル・クラネルなりに手掛かりを手放したくないと工夫はしていましたが……)  
役者が違う。

暗黒期からどつぷりと悪に染まるヴィトーと、ついこの間まで平和に農民として畑を耕していた世間知らずの少年では探り合いが成立するはずもない。

巨匠ダイダロスの作り上げた狂気作品『ダイダロス通り』。

ダンジョンのように入り組んだ道を慣れた様子で進む。

壁に描かれた道標アリアドネを無視して、ダイダロスに居つく浮浪者すら立ち入らない深部に足を運んだ。やがて、階段を下つて地下に降りた彼は懐から目玉状のマジックアイテムを翳す。

大質量の扉が開き、ヴィトーはその中へとよどみなく歩を進める。

本当に見事なものだ。

ダイダロスが呪いとして残したこの迷宮は。

闇派閥イヴァイルスとして敬意を払うべき狂気の使徒。

その異業を見て、ヴィトーはぼつりとつぶやいた。



「子孫の魂すら歪めるこの執念……予め定められていたものだと思えるとここも見方が変わりますねえ」

皮肉気に唇を吊り上げそうになり、いけないいけないと首を振る。

どうも、真実を知ってから上から目線の思考が多くなってしまった。

己は他者を嘲笑える立場ではないというのに。

白装束の男たちがヴィトーを見かけると一齐に姿勢を直し、道を開いた。

「苦労様です、と声をかけた彼はふと何かを思い付き、男たちに尋ねた。

「もし、少々お尋ねしてもよろしいですか」

「? ……ハッ!」

「貴方の願いについて聞かせていただきたいのです。閨派閥イツイルスの一員としてではなく、貴

方個人の願いとして」

「無論、愛する人との再会です!」

「その願いが何者かによって作られたものだとしたら?」

一瞬、男たちの表情が歪んだ。

また始まった、と言うところだろうか。

すぐに殊勝な表情を取り繕ってはいたが、ヴィトーにはその内心は手に取るように分

かった。

真実を知ってから手当たり次第に聞いて回っているからと言うのもあるだろう。

男は間髪入れずに答えた。

「それでも変わりません！ 何があるうとも！」

用意された回答にヴィトーは微笑みと共に頷く。

ベル・クラネルのモノと表面上は大して違いのない解答。

それに対するヴィトーの反応は、男たちが知る由もないがベルへのモノとは大きく異なった。

「私も祈っていますよ。その願いが成就されることを」

邪魔をしましたね、と言つて通路を進むヴィトーは笑みを張り付けたまま。

やがて自分に用意された一室に到着する。

扉の前でヴィトーを待っていたのは黒装束の構成員だ。

「精霊は見つかりましたか？」

「いえ、目下捜索中ですが目撃情報が例の襲撃地点からぱたりと止んでおり……」

「瞬間移動されればそうもなるでしょう。呪詛カウスのことを考えれば最悪失血死していてもおかしくありませんしねえ」

「……捜索を打ち切りますか」

「まさか、彼らが納得しませんよ。私自身もね。精霊の奇跡を信じましょう」

呪詛は強力なものだが、呪詛できないこともないだろう。

何せエルフを超える魔法種族<sup>マジックユーザー</sup>なのだから。

（これで止血のみ成功して傷自体は癒えていない、という状態ならば最高なのですが）  
「搜索範囲を広げなさい。私も散歩がてら探しておきましょう」

「ハッ！」

「では、私は少々休みます」

黒装束の男たちが去って行くのを見送ると、ワイトーは部屋に入った。

人一人に与えられるには広すぎるその部屋は製作者の子孫曰く、ダンジョンにおける  
広間<sup>フロア</sup>を意識しているらしい。

つい先日までは伽藍洞だった空間には、今は沢山の建物を模した模型の山が置かれていた。

本物をそのまま小さくしたと思えるほどに精巧なそれは、彼らからの贈り物の成果だ。

【ポラロイドインスタントミニチュアせいぞろカメラ】

ワイトーの持つ緑色のカメラ型ひみつ道具の名前だ。

このカメラによって撮影された建物は生物・背景を除き、忠実に再現されたミニチュアとして作り出される。

遊戯用のひみつ道具らしいが、ヴィトーはこのカメラでオラリオ中の建物を取って回り、居室にオラリオの模型を作り上げていた。

今日もまた、撮影した「豊穡の女主人」のミニチュアを作り出し、メインストリート沿いに配置する。

ミニチュアを作り出しては配置。作り出しては配置……。

薄い笑みを浮かべながらヴィトーはそれを繰り返した。

## 子供たちのプレゼントづくり

これまで異世界を冒険することは何度かあった。

それは過去だったり、未来だったり、機械だらけの世界だったり、魔法の世界だったり様々だったが、共通して言えるのは非常に違和感だらけだということ。

建物の形状から、コップの取っ手の形まで、のび太たちの世界との違いは際限ないが、最初は『なんだこれ』が連発するものだ。

しかし、のび太が単純なのか、人間の適応能力が偉大なのか。

そんな違和感は数日たてばかなり激減する。

全くのゼロにならずとも、そういうものだと思えるのが出来るのだ。

ただ、そこまで長期間滞在すると今度は元居た世界に違和感を覚えてしまうのが困りもの。

少しの間はフワフワした気分になってしまうのはどうも妙な感覚になる。

出木杉の家に訪れたのび太は、暫く見慣れていた木造りの臭いのしない部屋にそわそわしつつ、お菓子を持ってくるといふ彼を待った。

やがて階段を上ってくる音が聞こえると、のび太はドアの方を見つめる。

友達の家遊びに入った時、大きな楽しみの一つは出されるおやつだ。

家を出てくるいつもと違うおやつと言うのは中々に新鮮な気持ちになる。

「お待たせ。ちょうどママがドーナツを作ってくれてくれたんだ。よかつたら一緒に食べよう」

「わあ！ 美味しそう！」

流石は出木杉家。

野比家ではまず出てこないおしゃやれなお菓子にのび太は両手を上げて喜んだ。

そんなのび太に出木杉は微笑んでいたが、やがて申し訳なさそうな顔で謝った。

「どうやら、『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』の搜索が上手く行っていないことを気にしているようだ。」

「それで、例の漫画の続きは見つかったのかい？ こつちも色んな人に聞いてみたんだけど中々心当たりのある人がいなくて」

「実は……」

のび太はドラえもんが調べた結果、探していた漫画が未来のモノだったということ。

その続きを知るために絵本入り込み靴で漫画の中に入っていることを説明した。

「ドラえもんのひみつ道具は本当にすごいね……」

「ワザワザ探してもらったのにごめんよ」

「いいよ。続きが見れたようだなによりだ。それで、漫画の中と言うのはどんな感じなんだい？」

どんな感じ、と言う言葉にうーむと唸るのび太。

国語ですら0点を取りまくる彼の語彙力を舐めてはいけない。

「えーと大昔の街みたいな感じで、馬車が通って、猫耳のお姉さんと耳の長いお姉さんがいて……」

脈絡のない説明が続く。

ジャイアン辺りならば途中で「分かる様に言え！」と拳骨ゲンコツが飛んできたであろうが、出木杉は静かに、そして興味深そうに聞いた。

「昔ながらの街と言うけど、木でできていたのかい？」

「酒場は木だったけど、周りはレンガだったと思う」

「なにか特別目立つ建物はあったかい？」

「街の真ん中にある塔と、街の周りにある壁。すっごいデカかった」

「塔って言うのはあの窓の外に見えてる電波塔くらいの大きさ？」

「あんな無比物にならないよ！ 雲より高かった！」

「じゃあ、壁の大きさは？ あとどんな風に街を囲っていた？」

「二番目に大きかったよ。どんな風に囲っていたって……うーん。丸？」

のび太は普段は何でも知っている出木杉からの質問の嵐が嬉しいのか、得意げにオラリオの街並みを話す。

一方の出木杉は自身の記憶する世界中の都市から、一番近い風景を記憶の底から引っ張り出した。

（細部に違いはありそうだけど……ドイツのネルトリンゲンの城塞がそれに近いのかな？ 大昔のパリなんかも掠ってそうだな）

なんのためにそんな壁を作り上げたのだろうか。

やはりモンスターに対する備えだろうかと考えると、出木杉は珍しくワクワクした感情を自覚する。

たかが漫画に何をと思われるだろうが、物語の世界の歴史や風習……いわゆる世界観を考察するのは中々楽しいものだ。

「やっぱりすごい楽しそうだね。僕も行ってみたいなあ……」

出木杉は優等生であるが、同時に問題児であるのび太と同程度には好奇心旺盛だ。

話を聞くだけではなく、実際に見てみたいという想いが浮かぶのは自然なことだった。

「なら行ってみよう！」

「えっ!？」



「実は出木杉に相談したいことがあったんだ！」

のび太はそう言うのと、漫画の中に入ってから出会った少女……ノエルのことを話し始めた。

「足が不自由な女の子……」

「そのせいで全然遊べなくてさ！ 何かしてあげたいんだけど……」

「ドラえもんのひみつ道具でなんとかならないのかい？」

「タイム風呂敷を使ったけど駄目だったんだよ……」

お医者さんカバンを使えば何とかならないにしても、解決策が見つかるかと思いきや、そもそも怪我をしていないという結論が出たらしい。

「それは……おかしな話だね」

「うん。ドラえもんもどうすればいいんだろうつて頭を抱えていた」

ドラえもんのひみつ道具はどれも一部を除いて優秀なものばかりだが、それを使うのはあくまでも人間だ。

何を使うべきか分からなければ宝の持ち腐れである。

「そうだな……すごい安直な発想だけど車いすをプレゼントするのはどうだろう」

(アンチヨク?)

「そうすれば仲良くなるきっかけにもなるだろうし……」

（アンチヨクってなんだろう？ アンコウの仲間かな）

「うん。連れて行ってもらえるなら、その前にその子のための車いすを作らないかい？

僕だけで作るのは大変だから君たちの力も借りることになっちゃうけど……」

「なるほどアンチヨクな発想だね！ 理解した！」

よく分からないがこのままでは不味いと、取り敢えずオウム返しすることにしたのび太。一歩間違えば喧嘩間違いなしだが、出木杉は今の発言でのび太が理解していないことを理解したので問題なかった。

「その子と仲良くなるためにプレゼントを用意したいんだ。自由に動けないその子に必要な車いすなら喜ばれるだろうし、ドラえもんの力を借りれば車いすを作るのもそう時間がかからない」

「いいじゃないかー！」

分かりやすく噛み砕いた説明で今度こそ理解したのび太は、早速明日から作ろうと意気込んだ。

その時、ふと出木杉が気になったことを質問した。

「そう言えば野比君たちは随分長い時間漫画の中にいたみたいだけど、学校はどうしたんだい？」

「……タイムマシン使った」



「野比君大丈夫かい？」

「な、なんのこれしき……ゼエ……裏山は……ゲホツ……僕の庭……ヒイツ……」

「生まれたての小鹿みたいにプルプル震えながら言う事じゃないよ。少し休む？ のび太君」

整備された道ではない、デコボコした道に体力を削られたのび太が長距離走を走った後のようにフラフラになっていたが、一行は道なき道を進み続ける。

車いすを作るに当たって真つ先に問題になったのが材料だった。

なにせのび太たちは小学生。

木材などで車いすを作ろうにもお小遣いでそれらを集めるのは難しい。

あれこれ考えていた時に、案を出したのはのび太だった。

裏山に捨てられているゴミを使おうと。

「ゼエ……ゼエ……、（ん）……」

「本当に木材がこんなところに捨てられていたのか……」

裏山の正規ルートから外れた場所。

そこには無造作に捨てられた木材や釘がばら撒かれていた。

雨風に晒されて木は痛み、鉄はさび付いているが。

「ひつどいよね！ この辺りは静かだから昼寝にもってこいだと思ったのに、これじゃ

落ち着いて眠れやしないよ！」

「昼寝の場所を見つけるためだけに、あんな死にそうな顔をするほど歩いたのか君は……その執念はもつと別な所に使ってほしかったよ」

いつものこととはいえ、のび太はやりたいことには凄い集中力を発揮する。

それを知っているからこそ、ドラえもんはのび太の普段の無気力さが残念だった。

「それよりドラえもん」

「うん」

のび太の促しに、ドラえもんは四次元ポケットを弄るとおなじみの掛け声を出した。

「タイムふろしき〜」

時間を巻き戻す風呂敷を捨てられた木材たちに掛ける。

すると、虫が湧いていそうだったボロボロの木材は、お店で売られているような新品に早変わりする。

これでお金を使わずに車いすの材料を集められると言うワケだ。ついでに裏山を綺麗にできるといっておマケつき。

「この調子でどんどん集めていこうか」

「うひー。まだ歩くのお……」

「のび太君はいい機会だと思って体を動かしなよ」



出木杉が考えた車いすは、台車にイスを取り付けたようなシンプルなものだ。

本職の作る車いすと比較すれば鼻で笑われるお粗末な見た目だが、三人は万が一にも事故が起こらない様に慎重に組み立てた。

出来上がった車イスにさっそく乗り込んだ出木杉をのび太が押すと、車イスはタイヤの回る音を立てながら進む。

「おおー！ やったじゃないかー！」

ドラえもんのみみつ道具による手助けがあったとはいえ、小学生が作ったとは思えない出来に喝采を上げるドラえもん。

「よし、ちゃんと整えられた道じゃなくても安定してる。これなら変にスピードを出さなければ揺れで気持ち悪くなることもないはずだ」

想定通りの出来に出木杉もほっとした様子だ。

心地の良い疲労感を噛み締める一同だが、ふとのび太があることに気が付いた。

「この車イスは自分で動けるの？」

「え？」

「今みたいに押す人がいなくなったら結局大変じゃない？」

のび太の言葉に出木杉はハツとする。

のび太たちはちよくちよくもとの世界に帰ることになる以上、四六時中ノエルの側に

いる訳ではない。

【豊穰の女主人】の店員たちは仕事で忙しいから尚更無理だろう。

つまり、ノエルが一人の時にはこの車イスは使えないのだ。

「しまった……僕たちが押せば良いって考えていて、自走のことを考えてなかった……」  
自身の設計ミスに落ち込む出木杉だったが、ドラえもんは落ち着いて四次元ポケットに手を入れた。

「まあまあ、ここまで頑張ったわけだし、少しくらいズルをしてもいいと思うよ」

ひみつ道具の大盤振る舞いはあまり褒められたことではないが、のび太が珍しく精神的に活動したことが嬉しかったらしい。

今回ばかりは多目に見ようとドラえもんはひみつ道具をだした。

「ラジコンアンテナ」

陽気な声と共に取り出したのはその名前の通り、ラジコンのアンテナの形をしたひみつ道具だ。

「これをつけたものは動くものならなんでもラジコンになるんだ」

「なるほど。ノエルちゃんも腕なら動くもんね！」

さっそく車イスに取り付けると、車イスはラジコンの操作にしたがい、スイスイと動き始めた。



「わあ！ すごいすごい！」

「高級な車イスには電気で自走できるものがあるって聞いたことがあるけど、それでもこんなにスムーズには動かないよ！」

のび太は車イスに乗ったまま、ラジコンで前に後ろに、更には庭を一周してみせた。

「ちよつとジャイアンたちに見せて……」

「こらこら、そうやっていつつも取られて泣いてるじゃないか。『お前のものは俺のもの！』って言われる前に早くプレゼントしないと」

「ちえー」

のび太は口を3の字に尖らせるが、ドラえものの言うことも尤もと思っただらしく、素直に車イスから降りた。

ジャイアンへの流石とも言うべき（負の）信頼である。

ドラえもんが四次元ポケットに車イスをしまうと、絵本入りこみぐつを取り出し、三人は靴を履き替えた。

「それじゃ、行こう」

「おー！」

「……うん！」

ドラえもんの声かけにのび太は能天気な、出木杉は少々緊張した様子で応えた。

た。三人は次々と漫画の中に足を踏み入れ、庭には漫画本のみが開かれた状態で残され

## ヒトの戦い、カミの戦い

ダンジョン中層。

13階層より始まる真の冒険者たちの戦場。

その特徴はやはりこれまでとは桁違いの質と量だ。

特に、人類の天敵たるモンスターたちが出現するまでの次産間隔インターバルの短さが致命的だ。

モンスター一体一体の強さは確かに強いが、12階層までのモンスターたちと比較すれば順当な能力強化ではある。レベル1であっても、上位陣の実力者ならばやり合えるだろう。

だが、ダンジョンでの戦いは一体倒したら体力や装備が全回復してくれるわけではない。

次から次へと強いモンスターが連続して襲い掛かって来るとすれば、次第に押し負けてしまうモノだろう。

レベル1がこの階層に来るといふ事は、そんな一瞬一瞬が死と隣り合わせな探索を行うことであり、多くの見習い冒険者はここでダンジョンの過酷さを再認識することになる。

「……筈なんだがな」

現在、レベルが1であるヴェルフは正にそんなトラウマを叩き込まれる側の冒険者のはずなのだが、その心に恐怖はなかった。

それは緊張感が無いと言うワケではない。むしろ、これが中層探索二回目だとは思えないほどに辺りに注意を払っている。

しかし、上層とは比べ物にならないほどの敵対的遭遇エンカウンターに晒されながらも、その思考は常と変わらなかった。

それがヴェルフの人としての器だとか、冒険者としての才能と言った格好の良い理由であればよかったのだが、ヴェルフはそうではないだろうと自己分析する。

これはただ、感覚が麻痺してしまっているだけだ。

(初日があれだったわけだからな)

アルミラージが声を上げて襲い掛かる。

その数は10。

やはり上層とは比べ物にならない数。

だがあの日の絶望に比べたら霞んでしまう。

「リリが牽制します！ ベル様は足を止めたアルミラージから片付けてください!!

ヴェルフ様はヘルハウンドへの魔法行使の用意を！」

「うん！」

「おう！」

パーティーに指示を出したりリはボウガンに数束の矢を一気にセツトする。

特注のボウガンはそれを難なく射出し、空中で5条の流星と化す。

中層域のモンスターが直撃するはずもないような緩やかな速度だが、モンスターたちは自身に向けられた銀の凶器を警戒し、足を止めた。

すぐさま駆け抜ける白い影。

兎鎧MK-IIIと翔兎鎧びよんの無事だった部分を継ぎ接ぎし、回収した臨時装備を身に纏う

ベルは、圧倒的ステイタスの暴力でアルミラージたちを次々撃破していく。

「頼もしいな！」

突貫工事にもほどがある己の作品に内心苦々しく思いながらも、ヴェルフはベルのさらに成長した強さに賞賛の声を上げた。

あの馬鹿みたいな混戦を経て、また一段先に進んでしまった彼に負けるものかと吊り上げる両目。

その視線の先には口から炎を迸らせるヘルハウンドだ。

「燃え尽きろ、外法の業わざ！」

モンスターによる魔法攻撃。

並のパーティーならば浮足立つところだが、もはや中層とかそういう問題ではない。修羅場に放り込まれて尚生還した彼らの前には恐れるものではない。

ヴェルフは冷静に己の対魔力魔法を發動させる。

「ウィル・オ・ウイスプ」

緋色の華が暗い迷宮を照らした。

魔力暴発によつて魔法を発生させていた口ごと脳が吹っ飛んだモンスターたちは、自分が死んだことにすら気が付かなかつただろう。

「……やっぱりヴェルフ様の魔法はズルいです。神様たちの言葉を借りるなら反則です」

「お前だつて便利な魔法持ちだろうが」

「戦闘では何の役にも立たない魔法が発現した時のリリの絶望分かりますか？」

「正直スマン」

リリの目からハイライトが消えた。

ヴェルフはリリの事情を詳しくは知らないが、荷物持ちの不遇ぶりはオラリオでは有名な話なので、何となくは察している。

かなり闇は深そうだが、ベルはよくこの面倒な少女の心を溶かしたものだ。

(後でベルと二人きりになれるようにしてやるか)

それで目の光は復活するだろう。

なんなら魔法で尻尾を生やしてブンブン振り回しそうだ。

「キュー!!」

「うおっ!?!」

このままでは劣勢と見たのか、アルミラージが手に持つ斧を投擲してきた。

虚を突かれたヴェルフは咄嗟に大刀を盾代わりに構えるが、斧はヴェルフの目の前で炎雷によって吹き飛ばされた。

「【ファイアボルト】!」

電光石火の速攻魔法はアルミラージの斧に命中。

視界を覆いつぶす炎にアルミラージが戸惑いの声を上げる、その瞬間にアルミラージの首は宙に浮いていた。

空中でゆつたりと回転する視界の中、いつの間にか自身の後ろだったところ立っ白髪ヒューマンの人間がアルミラージの見た最期の光景だった。

カチン、とナイフが鞘に仕舞われる。

2分でモンスターたちを殲滅したベルたちはそのまま当たりの警戒を続け、リリがモンスターたちの魔石を取り終わるまで小休憩とした。

「お前、本当にランクアップしてないんだよな……?」

「うん。前の戦いでアビリティは結構上がったんだけど、高位の経験値は溜まり切らなかつたみたい」

「レベル1から2になるのは1ザニスで十分という事だったんでしようが、2から3になるには2ザニス以上は必要という事なのでしょう」

「リリ助は何の話をしてるんだ」

（経験値の単位をザニスさんで換算している……）

やはりレベル2ともなると成長もしくいモノらしいという事だろうか。

ベルの成長速度的に誤差な気がしなくもないが。

「俺たちとしてはあの事件は悔恨の極みなんだがな……」

ベルたちの護衛で来ていたモダーカはそう肩を落とした。

どの勢力にとつても交通事故のような事件だったのだから仕方ないことだが、あの後シャクティたち幹部一堂による謝罪は心臓に悪かつた。

あの事件に関与した勢力全部にいつか喧嘩を売る予定であるヴェルフも、「ガネーシャ・ファミア」には悪いところはないだろうと思つていたので凄じ居づらかつたらしい。

「【ロキ・ファミア】は謝罪したらとつと遠征に行きやがるし……」

「仕方ないよ、なんだか急いでいたみたいだし」



「ギルドからせつつかれたらしいですよ。遠征という名目で何かやってるんじゃないかってもっぱらの噂です」

ちなみに「フレイヤ・ファミリア」からは何の音沙汰もない。

モダーカ曰く、いつもの対応らしいが。

「**【猛者】**が団員たちに袋叩きにあっているって言うのがケジメ……なのかもしれん」

「かも、つてことは違うかもしれないってことですか」

「ああ、団長の首を狙う位はあのファミリアじゃ日常茶飯事だ」

もうなんかすごい。

そんな幼稚な感想が出てきたのも仕方ないだろう。

「……しかし、そうか。この時期にオラリオのS等級ランクファミリアが険悪になったのか」

「この時期？」

「デナトゥス神会だよ。絶対今回荒れるだろ」

3か月に1度の一定周期で行われる神々による集会。

下界の住民が立ち入ることが許されないその場合は、有名無実と言え諮問しもん機関の役割でもある。

オラリオの中でもそれなりの権威を持つ神しか席が与えられない、その会議での発言力は都市での影響力とイコールだ。

つまり、デナトウス 神会でも大きな存在感を放つ3柱が険悪になっているという事で……。

「……抗争とかありませんよね？」

「流石にそんな短絡的なことは無いと思いたいが、まあ、ありえなくもないというのが回答だ」

イツイルス 「闇派閥もまだ健在なのに、とりりたちは思ってしまうのですが」

「秩序側も仲良しこよしじゃないからそこは仕方ないさ」

地上ではおどけた様子の神々も、今回ばかりはアルガム 神威をバチバチとぶつけ合う緊迫した場になるだろう。

「そんなところに神様は行つたんですね」

「ガネーシャ様やヘファイストス様がフォローしてくれるだろうが、お前結構やらかしてるからなあ」

「うっ」

ついさつきも街を暴走したばかりだし、とジト目で見てくるモダーカ。

ベルもオラリオに来てから……というか【フォーム・デイメンション・ポーチ 四次元衣囊】を発現してからやらかしまくっている自覚があるベルは冷や汗を流した。

「二つ名も覚悟したほうがいいぞ」

冒険者のそれまでの偉業を称える称号である二つ名。

「ランクアップ」したものにのみ与えられる名誉だが、やってきたことによつては割と酷いものもある。

【超凡夫】ハイノービスとか【泥犬】マドルとか……もう悪口だらこれ。

「そうですねえ……」

「まあ、お前ならすぐにランクアップできるだろうし、その時までにもつといい二つ名を貰えるように……」

【漆黒の墮天使】ダークエンジェルとか、言われてみたかつたなあ」

「……」

モダーカとリリの目が生暖かくなる。

ベル・クラネル。御年14歳。所謂そう言う年齢だった。

「いや、ここは防具に倣つて兎吉びんきちに……」

ヴェルフ・クロツゾ。

こちらは年齢とかは関係ない。

元々残念なセンスなのだ。この名前のまま使つてくれているベルに少しは感謝したほうがいい。

微妙にゆるゆるな空気になりつつも、パーティーは危なげなく13階層の二度目の探索を終了するのだった。



「うむ！ その意気や良しっつ !! そして俺がガネーシャだっつ !!」

「ガネーシャうるさい」

「すまんっつ !!」

相変わらずの格好でポージングを決めるガネーシャ。

これでもオラリオ有数のファミリアの主だ。

ヘステシアとヘファイストスの脱力した視線にもはっはっはっつと笑っていた彼だったが、ここで表情を改める。

「……実際の所、ヘステシアにかかっているプレツシャーはかなりのものだ。都市を混乱に陥れる元凶。お前はその答えを知ったうえで初神会デナトウスに参加しなくてはならない。

世界最速のランクアップ者の主神と言う誰であつても注目する肩書と共に」

ヘステシアが見た未来の映像。

そこでは、本来は順を追って知るべき事柄が全て分かつてしまった。  
黒幕エニユオの正体すらも。

「大丈夫さ。いや、正直めっちゃめっちゃ怖いけどっ !!」

相手はオラリオの全ての神々を惑わせた最悪の邪神。

これまで相手の迷惑を尽く潰せたのは、単に運が良かったからだ。

その豪運がいつまでも続くわけではない。

ここからが、本当の戦いなのだ。

ヘステイアという何の力もない女神による、オルギア狂乱を引き起こす酩酊の悪意との。笑ってしまいうほどに絶望的な戦い。

「それでも頑張るよ。……だってボクはあの子の神様なんだ」  
恐ろしい神だ。

先に答えを知ったからこそ、今までのその神の立ち回りが見え、その周到さに鳥肌が立った。

未来の情報と言うアドバンテージが無ければ、勝負にすらならなかったであろう相手だが、ヘステイアは逃げない。

だって、ベルは多くの格上との戦いにも挑み続けた。

そんな物語を傍で見守り続けた自分も、冒険しなければ嘘だ。

(……本当に、変わったわね)

あの日、ヘステイア・ナイフ彼のための武器を作って欲しいと直談判してきた日と同じように、ヘファイストスはしんゆう神友の成長に唇を綻ばせた。

「……うん、いい話だ。だがな……」

そこに口を挟むのは1柱の男神。

ドレスやスーツに身を包む神々の中で、珍しく東方の着物に袖を通すその人物は困惑

した様子でガネーシヤを見た。

「なんで黒幕の正体を俺たちにもばらした？ 我関せずって言ったよな、オイ」

「私もタケミカツチも力になれるとは思えぬが」

タケミカツチの言葉にミアハも同意する。

覚えているだろうか、神の宴での彼の言葉を。

『騙し合いが好きなら連中は好きにすればいいが、俺の性には合わん。下手に近寄って大  
火傷するくらいなら初めから我関せずを示したほうがいいだろ』

そう宣言していた筈なのだが、何故巻き込まれているのか。

この神会にもギリギリ末席に指を引っかけているような弱小ファミリアだとい  
うのに。

「だって信用できる神がこの面子しかないし……」

黒幕エニユオの正体を持ち込まれた場合、大半の神はどうするか。

恐らく面白半分に状況をかき乱して遊び始めるだろう。巻き込まれる人間のこと等  
考えず。

本当にしようもない生物だ、とヘステイアは自分も神であることを棚上げして嘆息し  
た。

神格者じんかくしやは少ない。

それこそ、ヘステイアが知るそう呼ばれる神は目の前の4柱で全てだ。

「それでも俺たち以外にも協力できるファミリアはいくらでもあるだろ？」

「……単純に「ヘステイア・ファミリア」だと君たち以外とは面識がないんだよ」

「それならば「ガネーシャ・ファミリア」が動けばいいのではないか？ S等級ラングのファミリアの名は伊達ではあるまい」

ミアハの言葉にガネーシャは首を振った。

そうしたいのはやまやまだが、これまでの闇派閥イヴァイルスの動きを見るに、「ガネーシャ・ファミリア」から情報が洩れている節がある。

「怪物祭モンスターフェイスタまで全く我々が感知できなかった存在だ。どれだけの情報網を持っているか分からん。俺が動けばすぐに奴は自分が察知されたことに気が付く」

「それでも問題なからう。「ガネーシャ・ファミリア」に謎と言うヴェールを失った奴が勝てると思えん」

「無論、戦いになれば俺たちは負けん。しかし、そこに群衆が巻き込まれることになる」  
黒幕エニユオの行動を分析すると、浮かび上がってくる二つの人格。

一つは慎重すぎるまでに策略を重ね、事前準備を怠らない厄介さ。

そしてもう一つは、そんな何年もかけているであろう事前準備を一時の感情で台無しにする短気。



追い詰められたその神は確実に暴発する。

それがハスティアとガネーシヤの共通見解だった。

仮に、ガネーシヤが「ロキ・ファミア」に接触したとしよう。

<sup>エニユオ</sup>黒幕はそれを確実に察知できる立ち位置にある。そうすれば確実に奴は無差別殺戮  
と言う手段に切り替えるだろう。

それを完封することは難しい。

最後には勝利したとしても、それまでに出る犠牲に見合った勝利にはならないのだ。

「その点、ボクはそこまで警戒されたいはずだ。だって新興派閥もいいところだからね」

「このタイミングでハスティアがお前たちに接触を凶つたという事が奴の耳に入ったとしても、<sup>デナトゥス</sup>神会での助力を頼んだとしか考えられぬだろう」

ひみつ道具であるタイムテレビという盤外の駒によって、多くを知ることが出来たハスティアはそのアドバンテージを活かす必要がある。

まずは奴に察知されないうちに、対エニユオ包囲網を形成するのだ。

「今回は無理だったけど、「ロキ・ファミア」や「ヘルメス・ファミア」に助力を要請するアテもある。と言うか、これから訪れる。すっつごい嫌な形でだけ」

この後すぐに、ベルはダンジョン内で遭難し、18階層に落ちることになる。

そこでエニユオと近しくなってしまった両派閥と接触の機会もあるはずだ。

ヘステイアとしてはベルに無茶はしてほしくないが、チャンスではあるから迂闊に未来は変えられない。

未来を知ってしまったジレンマだ。

「兎に角、みんなはアイツの正体を念頭においてこの神会デナトウスに参加してほしい」

真剣なヘステイアの表情にタケミカツチとミアハはため息をついた後、頷いた。

荷が重たいはいえ、彼らも人々を想う神。

非力な自分にできることがあるならば助力は惜しまない。

「じゃあ、行こうか」

神々の戦いに。

それぞれの神が用意された席に座る。

ヘステイアも自分の席向かう最中、ちらりとある神の横顔を見た。

その神の名はディオニュソス。

天界の頃から長い付き合いがある神で、ヘステイアがその内心をずっと怖れてきた神で、そして……都市崩壊を企てるエニユオの正体。

## 初めての神会は絶体絶命!?

巨大な円卓をぐるりと囲んで神々が向かい合う。

硝子張りの壁から透ける太陽の光が白い円盤に反射して、神々の整った容貌を照らした。

その光景は正しく神話の一ページ。

世の画家たちがその光景を見てしまえば、己の想像力の限界を悟って筆を折るであろう美しい光景だ。

「第ウン千回神会デナトウス開かせてもらいます、司会進行はうちことロキヤ!! よろしくなー」

「「「「「イエエエエエイツツ!!」」」」」

そんな幻想をブツ壊すかのようなゆるーい言動。

下界の子どもたちは神会デナトウスを厳正なる神々の審判、などと思っているらしいが、実際の所は何時もの迷惑な神たちだ。

そもそもこの神会デナトウスの成り立ち自体、ダンジョンという未知の塊の前に住み着き、世の流れの中心を特等席で見物してきた神々が、「よく考えたら俺ら神だからダンジョン行けねーじゃん。つまんな」といつもの病気を拗らせたことが発端であった。

要するに神々は平常運転という事である。

「なんでロキが司会なんだよ……」

「本人曰く暇だから、らしいわ。今は殆どの眷属が遠征で出払っているらしいし」

初参加なだけあって、バリバリに緊張していたヘステイアの肩の力が抜ける。

絶対にこの後疲れるぞ、当初想定していたのとは違う方向で、と何処にいても頭痛の

種しかもたらさない同族どもに頭を抱えた。

(最も、それだけではないでしょうけどね)

終始ふざけたノリで進む神会デナトゥスだが、それだけのお気楽な場ならばギルドがわざわざ

諮問しもん機関と言うくくりにはしない。

一癖も二癖もある神々が集まるだけあって、そこには陰謀が渦巻くものだ。

もとはただのお茶会だったというのに、すぐさま腹黒神の化かし合い会場となったの

は流石は神と言うべきだろうか。

この場にいるほとんどの神は情報収集や、派閥争いの延長線上で来ている。

いや、本命は暇つぶしなのだろうか。

「うへえ……」

つまりこの場に入る神は馬鹿騒ぎをしつつも、冷徹な判断を出来なければならないことだ。

裏表がなく、面倒ごとを嫌って天界では自分の神殿に閉じこもりきりだったヘステイアには中々酷な作業である。

「……」

「ん？」

ふと、ロキの視線を感じた気がした。ヘステイアはチラリとロキを見返す。

その時には既にロキは別の方向を見ていたが、ヘステイアは常ならざるロキの様子を怪訝そうに見返した。

「ようし、サクサクいくで。面白いネタ報告できるやつおるかー？」

(き、来た!!)

早速の難関である。

ヘステイアは事前にヘファイストスから神会デナトウスでの大まかな流れを説明してもらっていた。

気まぐれな神々の会話であるが故に、決まった形があるわけではないのだが、大抵はくだらない笑い話を始めに語りつくすのだという。

くだらない笑い話、どこかの誰かさんのおかげで今のオラリオはそのネタに事欠かない。

その誰かさんの主神がノコノコやって来た日にはどうなるかと言うと……

「はいはい！ 魔石の大量発生で低品質な魔石が都市に溢れかえった結果、魔石の買取り額が過去最高に下がっていて下級冒険者たちは阿鼻叫喚だそうです」

「ゴリラの水死体がダンジョン上層で見つかったらしい。何言ってるのか分からねえと思うが俺にも分からん」

「ギルドのロリコン幽霊を奉る賽銭箱を置いてみたら、ヴァリスがウツハウハでこの都市真面目にヤベエなと思いました」

「ロリコンと言えばツアナルガン【凶狼】だな！ この前団員たちの前で弱え女は嫌いだからと言つてたところにエルフイたんが「でも幼女が好きなんですよね」つて突っ込まれて爆笑したわ」

「ジャガ丸くん愛好家たちの進撃が止まらん……幻のジャガ丸くん搜索のために、またヘファイストスの下っ端たちの工房に突撃する気らしいぞ」

「歓楽街の厄災見てきた……なんていうか……うん、後悔するから見ないほうがいいぞ？」

（お腹痛い）

もう見事に話題はベルが関係した事件ばかりだ。

どういう目で見られているのか怖すぎてヘファイストスのいる方を見れない。

（平常心、平常心……）

バレなければ問題はないのだ。

こちらがボ口を出さなければ、スキルで具現化したひみつ道具による犯行など分らないだろう。

「最近はずやかなものだ。時にヘスティア。君は……正確には君の眷属はどの事件でも目撃情報があるね？」

(ディオニユソスウウウウウウウツ!?)

コソコソとやり過ぎそうとしたヘスティアに、槍のように突き刺さる言葉。

金髪の爽やかな貴公子、と言った風貌のディオニユソスによるものだ。

果たして故意なのか、偶然なのか、さらつとヘスティアを追い込む一手を打ってきた。

ギリリ、と神々の目が光った気がした。

これこそ神々の共通する特徴。面白いことは骨の髄までしゃぶりつくすである。

いつだったか抱いた懸念。ベルの特異性に気が付いた神々によつて遊びつくされる未来がすぐそこまで来ていた。

「ぐ、偶然だヨ！ ウチのベル君は運が色々こう……凄いだ！」

私はアホですと自己紹介しているかのようなごまかしのへたつぴさ。

先ほどは神友しんゆうの成長を喜んでいたヘファイストスも心なしかあきれ顔である。

「そもそも色んな事件でベル君は被害を食らいまくっているわけだし？ ベル君が原因

ならそんなことには……」

「いや、ひみつ道具つちゆうモン使いこなせていないだけやろ」

「ゲツ、ロキ……」

それでも何とか疑惑を逸らそうとするヘスティアだが、ロキはひみつ道具のことを知っている。

と言うかそのベートが餌食になった場面をバツチリ目撃しているのだ。

「年貢の納め時ちやうか。なあ、ドゥチ〜ビィ?」

ケケケツ……と笑うロキにヘスティアはぐぬぬ……と唸る。

共闘したことはあれどロキとヘスティアは犬猿の仲であることは変わらない。

おまけにロキは人の嫌がることは進んでやる神格しんかくの持ち主なのだ。

ヘスティアが必死こいて隠している秘密を知れば、こうなることは必然だった。

「あわわわ……」

完全に手詰まりとなったヘスティアの目がぐるぐると回る。

どう考えても誤魔化しようがないこの状況をどうにかしようとする頭の中から言葉を引っぱり出しては、自分で否定するの繰り返し。

(あ、これもう無理)

完全に自分の許容量キヤパを超えている。



そう判断したヘステイアの行動は、隣にいるヘファイストスの手を円卓の下から握り叫ぶことだった。

「ちよ……ちよつとタンマ!!」

突然大声で叫んだヘステイアに対する反応はなかった。

何故なら、神々の全員が彫像のようにぴたりと動きを止めていたからだ。

ヘステイアを追求するために立ち上がろうと腰を浮かせていた神など、中腰の姿勢のまま止まっている。

「本当にすごいわね……そのひみつ道具……」

「強いひみつ道具だからベル君たちに持って行って欲しかったけど……」

「今の有様じゃアンタが持っていて正解だったわね」

「うっ」

先ほどまでガヤガヤと騒がしかった摩天楼パベルの30階は静まり返り、二柱の声しか響かない。

ヘステイアとヘファイストスである。

この神会デナトックスに参加するにあたって、ベルがヘステイアに持たせてくれた二つのひみつ道具のうちの一つ。

それが懐中時計型のひみつ道具「タンマウオッチ」である。

その効果は時間停止と言う単純にして絶大な力。

ボタン一つで世界が止まるのだ。

例外はボタンを押した者と、その者が触っていた者だけ。

「それで、これからどうしよう……ここから逆転できる気がしないけど……」

このひみつ道具によって、ヘステイアはヘファイストスと堂々とアドバイスできる環境が出来ていた。

会議の場で自分の意見を温められる時間と言う物は貴重だ。

策謀の類が兎に角苦手なヘステイアにとっては、この手札が生命線だった。

……使う間もなく追い込まれたが。

「ディオニュソスが何処まで意図したのが分からないのが怖いわね」

「……流石に偶然じゃないかい？ 騒動にベル君が関わりまくっているのは確かだし」

「そもそもさっきの騒動にベル・クラネルが巻き込まれていることをディオニュソスが知っている方がおかしい話だけ」

「え？」

「いい？ ベル・クラネルはついこの間まで無名の新人だったの。そんな冒険者に対してディオニュソスが情報を持っていることが気になるのよ。単なる好奇心で調べたと言われればそれまでだけど……」

ヘファイストスはディオニュソスが言葉を発したことにより、ヘステイアが追い込まれている状況に嫌な予感を覚えているらしい。

ディオニュソスがヘステイアを牽制している風にも見えるのだ。

「偶然だけど、ヘステイアの子がエニユオとしての行動を潰してきたのは事実だしね」

「でも直接的に潰していたのは『ロキ・ファミア』だし、そんなにベル君に注目するかな？」

「ひみつ道具の厄介さに気づいたのかもしれないし、ヘステイアのことには眼中にないという可能性は捨てたほうがいいわ」

今回の神会デナトゥスでヘステイアが行おうとしたのは敵と味方の判別だ。

ディオニュソスに対する包囲網を作ると言っても、誰も彼も入れた結果、内通者が出たら堪ったものではない。

神会デナトゥスでディオニュソスに同調する神をそれとなく探るつもりであったが、これでは探ることは困難だろう。

この場の神々全てがヘステイアに傍迷惑な悪意を向けているのだから。

「ロキとヘルメスは同盟を結んでいるけどエニユオの手駒ではない。他に似たような理由でエニユオとしてではなく、善神ディオニュソスと手を組んでいる派閥もあるかもしれないし、神酒によって無自覚な協力者にさせられている可能性も……」

そんな複雑な事情をこの滅茶苦茶になった神会デナトウスで探るのはもう無理だろう。

初戦は敗北、致命的打撃を受ける前に撤退するべきだろう。

(ディオニュソスが私たちの動きを察知したのか、それともヘステイアを目障りに思っ  
て牽制しているのか)

やはりやりづらい相手だとヘファイストスは、都市を相手取って数十年騙し続けてきたであろう神を睨みつけた。

この場で天界に送還してやりたい気分だが、ヘステイアがやり込められている状況でディオニュソスが不可解な死を遂げれば、確実にひみつ道具という摩訶不思議な力を持ったヘステイアがやったとバレる。

ここは泥を飲むしかないだろう。

「兎に角、ディオニュソスは一旦置いておいて、ヘステイアは火消しに専念しなさい」

「火消しだったってどうすれば……」

「周りをよく見なさい。すべての神がヘステイアの敵じゃない。ガネーシヤは時間を止めなければ、そのまま話題を逸らすつもりだったらしいし」

ヘファイストスに指を示したほうを見ると、確かにガネーシヤが口を開こうとしていた。

(ボク、周りが全然見えていないな……)

思った以上に上手くやれなかった自分に落ち込むヘスティアはぐてくと円卓に身を投げ出した。

ベルの神様として頑張ろう！ と決意したのは良かったが、それだけで上手くいくなら苦労はない。

改めて自分の主神としての力量の無さに泣きたくなくなった。

「時間をまた動き出させる前に、あのひみつ道具を使いなさい」

「え？ あれをどう使えっていうのさ？」

「ガネーシヤは話を逸らそうとするけど一筋縄ではいかないでしょう。だから、それをガネーシヤに使って援護するの。そうすればガネーシヤの言葉を見えできないわ」

なるほど、とヘスティアは早速もう一つのひみつ道具を取り出した。

それはベルが言うところのライト系のひみつ道具。その名も「目立ちライト」。

本来はヘスティアが場の主導権を握るためのものだが、この状況でヘスティアが目立っても確なことにはならないだろう。

だが、ガネーシヤに使えば話は別だ。

「後は頼んだ！ ガネーシヤ！！」

ガネーシヤに光を照射したヘスティアは、自分の席に戻ってもう一度タンマウオッチを押し、時間を動かした。

「……いい加減隠すのは」

「話の腰を折る様でスマンツツ!! だが聞いてくれないか!!」

「ああん?」

再開したロキの追及にガネーシヤの声が被さる。

いつもの五割増し大きいんじゃないかと言う声にロキは眉をひそめつつ振り返ると。

「俺が!! ガネーシヤだああああああつ!!」

いつものように暑苦しく叫ぶ象男。

普段ならば「そうかもう座れ」と塩対応だっただろうが、今回は違った。

「ガネーシヤだ!」

「ガネーシヤが動いたぞ!」

「ヘスティアなんか後回しだ! だってガネーシヤだぞ!」

まさかの大好評。

神々はまるでアイドルを見たかのようにガネーシヤに熱狂した。

これこそ二つの目のひみつ道具。目立ちライトの効果だ。

その名の通り、このライトを浴びた者は目立つ。

街を歩けばどんな地味男でも黄色い声援を浴びるくらいに目立つのだ。

「思っていたより好感触でガネーシヤ困惑!! でも都合がいいから話を進めるゾウ!!」

ガネーシヤも予想外の反応に一瞬だけ面を食らっていたが、目立ちライトをためしたゴブリンが一階層で冒険者たちに追い掛け回されているという話を思い出し、これがひみつ道具によるものだと理解した。

ならば、存分に利用するまでだと。ガネーシヤは大声で話し始める。

へスティアの話題を塗りつぶすがごとく。

「まずは謝らせていただきたい!! 先日モンスターファイリアの怪物祭では我々の管理するモンスターの脱走で迷惑を掛けた。あの事件の解決に協力してくれたファミリアたちには感謝の念が尽きん!! ガネーシヤ超感謝!!」

「うおおおおおおお!!」

「既に下手人の調査を進めているところだ!! あの事件を契機イヴイルスに闇派閥の活動も活発化しているが、奴らの起こそうとした事件は全て、オラリオのファミリアが協力して対処することで未然に防ぎ続けている!!」

「フオオオオオオオオ!!」

「調査の過程ですべての黒幕は都市エニユの破壊者オを名乗り、暗躍していることが分かっている!! 我が「ガネーシヤ・ファミリア」は全力でこの巨悪に立ち向かい、群衆を守り抜くことを誓わせていただこう!!」

「いよっ!!」

「流石だぜ!!」

「ガネーシヤ様愛してるううううっ!!」

「そしてつつつ!! 俺がつつつ!! ガネーシヤだああああああツツツツ!!」

「二「ガネーシヤツ!! ガネーシヤツ!! ガネーシヤツ!!」二」

流石は巨大派閥の主神と言うべきか。

過激な発言で神々の心を驚掴みにしてしまった。

目立ちライトの効果も相まって最早宗教である。

「なあにこれえ……」

「酷いわね……」

「なあ、これ收拾つくのか?」

「うむ。無理であろう」

余りの熱狂ぶりにヘステイアたちは引いていた。

チラリとみると普段は涼し気な表情のフレイヤも流石にドン引きしている。

ロキとヘルメスは先ほどから続くガネーシヤコールにノリノリで参加していた。

「神に下界の術なんぞ効かないだろうに……」

「この場の全員が反抗<sup>レジスト</sup>出来るであろうが……神々にとつては何か心に燃やすというのは得難い経験だからな。皆分かっていて乗せられているのだろう」



タケミカツチとミアハの分析も、タガが外れた神々の声に掻き消された。最早ロリ巨乳幼女神のこと等忘却の彼方だろう神々たち。

そんな彼らにため息をつきながら、ヘステイアはディオニュソスを見た。

そこには目立ちライトの効果を反抗し、静かに座る彼の姿があった。

貴公子然とした男神は苦笑しつつ、くるくると前髪を弄っていた。

## 異形のモンスター

これは神会デナトウズが開催される3日前の話。

地上の迷宮とも称されるダイダロス通り。貧民街スラムであるこの場所はその住民の特性や、ギルドも把握しきれしていないと言われる複雑に入り組んだ構造によって、犯罪の温床になりやすい。

闇のヴェールに包まれる夜の時間は悪党たちの悪企みの時間だ。

余計な騒ぎに巻き込まれたくなかったら、深夜のダイダロスは出歩くな。

とある孤児院では子供たちにそんな約束がされているという。

その判断は正しい。今日もまた、月光に照らされて悪は嗤っているのだから。

「……ふむ。エニユオはやはり時間通りにしか来ませんね。手持無沙汰なこの時間も私には惜しいのですが」

暗闇に同化するような黒の衣装に身を包むヴィトーはそう独り言ちた。

先方を警戒させないために護衛なしで来なければならぬものだから、話し相手も用意できやしない。

今度、遠距離でも会話できるひみつ道具を用立ててもらおうべきだろうか、とも考えた

がそんなバランスプレーカーをエニユオが警戒しないはずも無し、止めておこう。仕方なくヴィトローは天に浮かぶ白い月を見た。

極東では月を見て有難がる風習があると風の噂で聞いたことがある。

あんな殺風景なものを見て何が面白いのかはヴィトローには分からないが、ヴィトローは案外何もない空を眺めるのは嫌いじゃない。

ヴィトローにとってこの世にあるあらゆるものはその存在自体が煩わしい。だからこそ、全く心を震わせない夜空は好きでもないが嫌うこともなかった。

大体の物事が不快なヴィトローにとっては、心が動じないことは貴重なことだ。

「おや」

コトリ、と足音がしてヴィトローは振り返る。

そこにいたのはヴィトローが想像していた人物ではなかった。

「珍しいですねえ。エイン様ではない伝言役とは」メッセンジャー

どういふ風の吹き回しかと訝しむ。

エニユオは姿を見せず、闇派閥イヴィルスと関わりを持った数年前から交渉事は全て仮面の人物

が引き受けていたはずだ。

しかし、今ヴィトローの目の前にいるのはしわくちやな老婆だ。

アルカナム神の力を感じることから、それが神であることは分かるが……

彼女がエニユオなのか。

(まさか、何も知らぬ神が遊びに来たわけではないでしょうねえ……?)  
有り得ない話ではない。

神と言うのはとことん自由に動く。

今も「夜のダイダロス通りを探検だ〜!」と言って眷属なしで来る可能性もある。

そう言った部外者を入れないように建物付近には、部下を配置していたのだが。

(もしも無関係な神を紛れ込ませてしまったのなら、私は彼らを罰せねばなりませんねえ。ああ、それはとても悲しい。胸が張り裂けてしまいそうですとも!)

口元が弧を描く。

既にヴィトーには幾通りもの仕置きが描かれていた。

血まみれになって沈む部下たちの姿を思うと、小心者の自分としては胸の鼓動だけでアバラ骨が砕けてしまうかもしれない。

「貴女は……」

「何だい何だい!! 辛気臭い場所に辛気臭い男だねえ!!」

「……」

「私自ら話しかけているんだよ!! 何か喋りな!!」

面倒な神らしい。

笑みを張り付けたヴィトーは脳内で血まみれになって倒れる部下に焼き印を押しつつ、穏便にお帰り願おうと口を開こうとした。

「まったく!! さっさと商品を送りな!! 言い値で買うよ、あいつがね!!」

「……っ!」

そんな時に飛び出した一言に目を見開く。

何も知らない神がいう事ではない。やはり彼女がエニユオなのか。

「意地が悪い……もう少しで部外者だと追い出す所でしたよ」

「追い出す!? 追い出すって!? 嫌だ嫌だ!! こんな心のない奴なんかこっちがお断りだよ!!」

ヒステリックに叫び散らすその姿に神としての威厳は感じない。

本当にこれがエニユオなのか? と言う疑問が再び湧き上がる。

イウイルス

闇派閥を利用するために悪の力リスマを演出するという事は、嘗ての主神も行っていたことだ。エニユオの暗躍ぶりもその一環なのだろうと考えていたが、ここで正体を明かす理由が分からない。どう判断すべきかヴィトーが悩む間も老いた女神は叫び散らす。

「そんなことより酒だよ!! 糞みたいな街で糞みたいな酒を飲む!! 正に底辺の楽しみさね!!」

そう言うとおもむろに葡萄酒ワインのボトルを取り出し、浴びるように飲み始めた。

如何に自由な神と言えども、交渉中に飲酒を始めるとは……とヴィトーも流石に唾然とする。

「これは私のモノだよ!! 返しな泥棒!!」

そんなヴィトーに構わず、老婆はヴィトーの服からボタンを雀り取る。

無論、老婆のボタンをヴィトーが盗んで勝手に服に付けていたという事実はない。というか老婆とヴィトーは初対面である。

(これではまるで……)

言動が自由と言う次元ではない。彼女の行動は全く出鱈目なものだ。

これがあの緻密な計画を立てた黒幕エニユオとは思えない、と疑惑の目を強めた。

「そんなことより酒!! 酒だよ!! アイツは何処にいるんだい!」

「アイツ……とは……?」

「アイツはアイツだよ!! 誰だったかねえ……」

ブツブツと呟くその女神の姿を見て、ようやくヴィトーも答えに辿り着いた。

(成程、この神は道化ですか)

エニユオによって玩具にされた哀れな生贄。

下界の手段で惑わすことは出来ないはずの神をどう手玉に取っているのかは分から

ないが、思い返せばこの神は明らかに思考能力が失われている。

まるで泥酔した人間のように。

「これが全知全能……超越存在デウスデア、ですか」

クツ、とヴィトローは嘲りを漏らさずにはいられなかった。

生まれてからずっと、神と言う存在には軽蔑を隠せなかったが、どこまでも失望させてくれるものだ。まあいい。所詮は仮初の上位存在。

敬意を払う必要などない。設定だけの存在だ。

滑稽に踊っているのは酔っているようにがいまいが同じこと。

「まあ、いいでしょう。懐の大きいところを見せてくれましたし、今エニあニュオたがどのような状況なのか、追及はしないであげますよ」

「味見くらいはさせろってアイツも言ってるじゃないか!! 粗雑品こそ下界の華だつていうのにな!!」

「……試したい、と言うことでしょうか。もう少し話が出る状態にしてほしかったです。ねえ。では、彼にちよつかいをかけるついでに試運用という事で」

ヴィトローからすれば、エニニュオの計画が成功しようが失敗しようがどうでもいい。

自分なりの目的遂行を果たすのみ。

（ああ、天界から見えていますか？ 貴方たちはこんなにも滑稽な存在なのですよ）





ダンジョンに潜り続けていれば、いつかはそのくらい強くなれると信じたい。ちなみにアイズさんは遊び感覚で深層に入れるらしい。流石です。

そんなこんなで午後は暇な時間が出来た。

いつもなら一刻でも早く憧憬に追いつくために訓練して所だけど、今日はちよつと予定を変更して【豊穰の女主人】に向かう。

（あのノエルちゃんが気になるんだよな……）

妙に幼い言動の女の子。

僕に出来ることなんて殆どないだろうけど、力を貸してあげたい。

そう思ってお店に再度来た僕は予想外の出会いがあった。

「初めまして。僕は出木杉英才ひでとしといいます」

「あ、ベル・クラネルです。ご丁寧にも」

出木杉君と言うらしいのび太君と同年代らしき少年の丁寧な挨拶に、僕も慌てて挨拶を返す。

落ち着いた子だ。僕が同じくらい頃の頃は顔を泥んこにして遊び倒していたと思うけど。

「この世界のことを詳しく知りたいんだって」

聞けばこの出木杉君は凄く勉強熱心で、ガツコウ？　って場所でも超優秀なんだと

か。

物語の世界にも興味を示すなんて好奇心旺盛だ。

(……でも、世界のことを教える、かあ)

世間知らずであると自覚している僕には荷が重い。

多分、質問にも的身に答えられない。

エイナさんとかの方がいいんじゃない……流石にそれはあの人が過重業務すぎるか。

「それにしても……みんなが作ったって言う車いすは凄いな」

「ドラえもんのおかげですよ。僕は設計図を引いただけです」

「実は君、小人族バルウムだったりしない？」

「パル……？」

最近リリに年齢詐欺をされた僕としては疑り深くなってしまうところだ。

それとも異世界ではこれがスタンダードなのだろうか。二ホン、コワイ。

「わっ、……わっ……！」

ミアさんからお休みを貰ったという子供たちと、今来ているのはオラリオの北西地区。

分かりやすく言うと、「ヘスティア・ファミリア」の最初のホーム。今はヴィオラスの隠れ家になっている場所だった。

昔の抗争で廃墟になってしまっただけから放置され続けているというここは、車いすの練習にはうってつけだ。

ノエルちゃんは箱についたボタンをあれこれ動かしながら、慣れない車いすの操作に苦闘している。それでも、キャツキャツと笑っていて楽しそうだった。

「ドラえもんさんのひみつ道具は相変わらず凄いですね」

「僕としてはそれを生み出せる君も凄いけど」

「僕の場合はランダムですから」

やっぱり使いこなせば何でもありな力だと改めて思う。

ドラえもんさんは異世界の未来では量産されている存在らしいけど、信じがたい話だ。

こっちの世界が何千年経ってもドラえもんさんが出来るとは思えない。

「ノエルちゃん!! もっとゆっくりから始めたほうがいいよ!!」

「わかっ、た……!」

ベルの声にノエルは頷くと減速させる。

しかし、操作に集中しすぎて前を見ておらず、壊れている柱にぶつかりそうになった時、車いすに置かれていた石が飛び出し、ノエルを衝撃から守った。

「あうう……」

怪我はなかったものの、上手く操縦できなかったことにへこむノエルだったが、ベルは優しく諭した。

「スピードを出すのは楽しいけど、ノエルちゃんが危ない目に会ったらシルさんが悲しむよ。今度からは、怪我をしないように周りをよく見て、安全に進もうね」

「……うん！」

「じゃあ、もう一回やってみようか。またお願いね」

任せて！ とばかりに飛び回るのはストーンアニマルたちだ。

ノエルちゃんを守って欲しいという僕の願いを快く引き受けてくれた彼らは、こうしてノエルちゃん傍で危険から身を守ってくれている。

「ペットペンキとかも出てくるんだね……」

「うん。春姫さんと作ったんだ。知っているでしょ？」

「うん！ 漫画でもその辺りまで……あれ？」

のび太君はそこで首を傾げた。

本で僕の物語を見ているという彼なら、登場人物のことは分かると思っただけだが違っただろうか。

「牛のモンスターはいつ倒したんだっけ？」

「ミノタウロスのこと？ 最近だよ」

「じゃあ、巨人は」

「え、なにそれ」

「え」

巨人？ ダンジョンで巨人って……

まさかゴライアス!? え、嘘、僕ミノタウロスの次はゴライアスなの!?

思わぬ未来に起こる試練に絶句する。レベル2じゃ死んじゃわない？ それとも討伐隊に参加するとか？

「じゃあ男の人が好きな男の人は」

「まって、僕の未来どうなるの!?!」

なんか未来が怖くなってきた。

男の人が好きな男の人……僕は対象外だよね。

この前、うへへへへって言いながら柱の陰から見てきた神様は違うよね!?

「あれ？ あれ？ つまりどういうこと?」

「僕が聞きたいんだけど!?!」

なにやらのび太君は混乱しているようだが、僕も落ち着いていられない。

アイズさんに追いつくために険しい道だろうと進み切る覚悟だったけど、予想外に凹凸が激しいのではないだろうかこの道は。

頭を抱えてクエスチョンマークを乱立させるのび太君に追求しようとした時。  
嫌な、予感がした。

「っ!? みんな後ろに下がって!!」

「えっ!?」

「早く!」

ノエルちゃんとのび太君は混乱していたようだったけど、ドラえもんさんと出木杉君は状況を察してくれて、二人を僕の後ろまで連れてきてくれた。

ダンジョン帰りにそのまま来ていてよかった。

間に合わせだけど、装備があるこの状況は幸運だ。

ヘステイア・ナイフ  
神の刃を構える僕は、プレッシャーを感じる方向を睨みつけた。

やがて、倒壊した建物から影が現れた。

「ひっ……!?!」

ノエルちゃんの悲鳴が聞こえた。

のび太君がストンと腰を抜かして倒れた音や、出木杉君が後ずさる音も。

「モ、モンスター!?!」

ドラえもんさんの叫びに呼応するように、影が襲い掛かる。

狙いは叫んでしまったドラえもんさんだ。

(速いっ!?)

中層ですら見かけない敏捷。

僕はギリギリドラえもんさんに一直線に進むモンスターを阻み、その姿を凝視した。

「コボルト……? でも、その触手はっ」

そこにいたのはダンジョン上層に生息するコボルトらしきモンスター。

しかし、レベル2の身体能力ステイタスでも反応を振り切られかねない敏捷は上層にいて良いモ

ンスターではない。

なによりも、背中から生える触手は人狼型のモンスターにはない特徴だ。

そして、体のあちこちに見える花卉の色は極彩色。

その特徴は食人花ヴァイオラスに近い。

「闇派閥の仕業か……っ!」

押し切られそうになりつつも、コボルトらしきモンスターの鳩尾に蹴りを入れて吹き

飛ばす。

鉄の塊を蹴りつけたかのような痛みが足に響いたが、なんとか距離を取れた。

息を荒げながら、僕は後ろにいる四人を見る。

のび太君は青ざめていた。

出木杉君は冷や汗を流しながら気丈に睨みつけている。

ドラえもんさんは慌てて「なんかかないかなんかないか」とポケットをひっくり返している。

そして、ノエルちゃんは恐怖で大粒の涙を溜めていた。

だったら、僕のやるべきことは決まっている。

僕は年上で、冒険者なんだから。

「大丈夫」

一合で分かった。向こうの方が強い。

本当は心は竦んでしまっている。

それでも、火を灯せ。

決して消える事なき、不滅ヘステイアの炎を。

出会った絆を守るために。それがベル・クラネルにできる唯一のことなんだから。

「僕がみんなを守るよ」

決して不安にさせないように笑みを浮かべる。

嘘は苦手だが、やるしかない。虚勢だろうとみんなを安心させるのだ。

英雄のように。

「グギャアアアアアアッ!!」

「勝負だ……っ」



涎を振りまき、触手を振り回すコボルトヴィオラスとでもいうべき未知のモンス  
ター。

それに対してベルは深紅ルベライトの瞳を吊り上げて迎え撃った。



「くっ……」

囹は上手くいった。

混乱している子供たちから虐殺される最悪の展開は防げた。

しかし、そこまで。

肝心のベル・クラネルがこのモンスターを倒す決定打が見いだせない。

僅かな攻防で浮かび上がる残酷な<sup>ステータス</sup>身体能力の差。

ミノタウロスの時ほど絶望的ではないが、格上相手の下克上はそう何度も起こせるものではない。

「【ファイアボルト】 ツ！」

炎の魔法が爆ぜ、煙のにおいが充満する。

のび太君は「やった!？」と喜んでいるが、ベルの表情は優れなかった。

(手ごたえが無い……っ！)

遠距離攻撃である魔法で手ごたえと言うのも妙な感覚ではあるが、この速攻魔法を発生させてから何体ものモンスターを屠っていった中で、芽生えた機能。

それが手ごたえだ。

敵を撃破した瞬間に感じる確信ともいえる安心感。

それが先ほどから全く感じられないのだ。

今この瞬間も、爆炎の向こうに揺蕩う影がモンスター健在を知らせた。

殺意に濡れた双眼が己を貫くのを感じ、乾いた唇を舐める。

「やっぱり、ただのコボルトじゃない……」

魔法の炎雷は無詠唱だけあって、魔法の中では最下位ともいえる効果でしかない。それでも弓矢よりよほど強いのだ。

その威力はダンジョン上層のモンスターなど容易く蹴散らすはずだった。

しかし、現実のコボルトに火傷一つ与えられない。

なんてタフさだと毒づく暇もなく、ベルに迫りくる3本の触手たち。

最近は見慣れてきていた極彩色が、凶悪な音を引つ提げて迫りくる。

「ギャ、ギャアア、アアアアアッ！」

殺意の籠った獣声とも、歪な体に苦しむ悲鳴とも取れる叫び。

それに対し、ナイフを構えて待ち受けるベルの前で、「ドカンッ!!」とコボルトヴィオラスが吹き飛んだ。

「くうき砲〜」

この声は僕が発したのではなく、本家本元のもの。

ドラえもんさんがひみつ道具を四次元ポケットから取り出した合図だ。

(くうき砲は前に僕も使ったことがある。確かに有用な武器だ)

ドラえもんさんの右腕に取り付けられた見覚えのある銃口。

それを確認した時、僕の体は咄嗟に彼とモンスターの直線上に立たないように動く。守る、何て言うておいてだけで、味方の援護を意地で潰す時じゃない。

ありがたく受け取るとしよう。

こうして出来上がった前衛と後衛のコンビだが、さあここから反撃……とはならなかった。

そもそも味方に当てずに敵だけに攻撃するというのは案外難しいものだ。

そこに必要なのは信頼性と段取り。

信頼性はともかく、お互いの動きなど知るはずもない僕たちでは、お互いの性能を十全に発揮できない連携にしかならなかった。

「ヴォガアアアアアアアアアアツ!!」

苛立ったモンスターの凶暴な顔。

本当に変わらない。

こんな、明らかに人間の手が加わった個体なのに、人類に対する狂おしい殺意だけはモンスターらしい。

「ドラえもん！ 僕にも！」

「ちよつとまって……あつたこれだ！ 熱線銃」

ドラえもんさんは自分だけでは弾幕が薄いと感じたのか、即座にのび太君にもひみつ道具が渡される。

「これで、3人掛かり！」

そう言うやのび太君は照準に狙いを付ける。

その瞬間、背筋に走るゾワリとした悪寒。

咄嗟に後ろを振り返ると、のび太くんの手には飾りつけのない銃。

これは今までの奴とは違う。

そう判断して再度接近を試みる。

高速で動き回るモンスター相手に正確に狙い撃つのは至難の業だ。

あの強力なひみつ道具を確実に当てるためにも、まずは自分が動きを止めさせなくては。は。

そう考えた僕だったが、直ぐにその予想は裏切られた。

光線が発射された。

のび太君が持つ熱線銃から放たれる無慈悲な一撃は、コボルトヴィオラスに向かう。

くうき砲の一撃ではびくともしなかつたコボルトヴィオラスは、最早警戒する意味が無いとでもいうように後衛たちには無関心だった。それが判断ミスだと、コボルトヴィオラスは失った触手から流れる体液によって理解した。

「……え」

触手が宙に飛んでいた。

のび太の撃った熱線銃がコボルトヴィオラスの触手に直撃。

熱線の威力に負けた触手はあっさりと貫かれた。

(の、のび太君が撃ったの……?)

確かに触手の根元を狙えば、高速で振り回されている鞭の部分を狙うよりは楽だろうが、難易度がおかしい事には変わりない。

子どもにあるまじき超精密射撃だ。変な夢でも見ているのではないか。

傍から見ている僕ですら、そんな現実逃避をしまっているのだ。

時が止まったように静止してしまったコボルトヴィオラスを誰も責められないだろう。

「っ、今だ！」

この機を逃すわけには行かないと痺れた頭に活を入れて、何とか再起動させる。

鉄壁だった触手の境界の一角が失われた今、僕には冒険者に許された一撃必殺を挑戦することが出来る。

アドバイザーであるエイナさんから耳に胼胝タコができるほどに聞かされたこと。すべてのモンスターが共通してもつ弱点を思い出す。

『どんなに強いモンスターでも、モンスターである限り、そこを突かれたら例えドラゴンでもやられちゃう』

一撃で良い。

その一撃で皮膚を貫けるなら、冒険者は理論上、あらゆるモンスターを打破できるのだ。

モンスターの証。その胸に隠し持つ唯一無二の核。

その一点こそ僕の見出した活路だ。

ヘステイア・ナイフが燐光を零す。

ベル・クラネル  
女神の眷属の戦意に呼応するように紫紺の軌跡が瞬いた。

「ルグルアアアアアアッ!」

瞳の奥に必殺の意志を感じ取ったコボルトヴィオラスが残った2本の触手を叩きつける。

頭上から振り下ろされる攻撃。しかし、僕は触手のしなりから攻撃の起動を予測。

前に回避しながら更に距離を詰める。

その驚異を近づけまいとコボルトヴィオラスは、振り下ろした触手を無理矢理使って再度攻撃を仕掛ける。

地面から跳ねるように近づく触手に意表を突かれた僕は反応が遅れるが。



「ドカンッ!!」

ドラえもんさんの声が響くと同時に、触手が無色の衝撃波に吹き飛ばされた。

無茶な軌道の代償に、威力も、速度も殺した一撃ならば、超人ではないドラえもんさんたちでも対応できたのだ。

「ありがとうございますー!」

礼と共に最後の一撃を紙一重で回避。

地面に接触した触手を踏みつけ、「力」と「敏捷」に任せて思い切り踏み抜いた。

嫌な感触が足に伝わるが、今は完全に無視する。

攻撃の勢いのまま、最後の加速をかけ、己の体を一つの武器に見立てて突貫した。

ベネトレーション  
突撃銃。

逃げ出すことは不可能。

最期に断末魔の叫びをあげることすら許さず、神様のナイフの一撃はコボルトヴィオラスの魔石を完全に砕き、灰色のチリとした。

「……………ふう」

溜め込んでいた息を吐き出す。

ドラえもんさんたちのひみつ道具に助けられたが、何とか倒せた。

張りつめていた緊張の糸が緩んだ時。

「まだ終わってない！」

「ひうつ……!?!」

出木杉君の緊迫した声と、ノエルちゃんの怯える気配。

慌てて振り返ると、そこには二体目のコボルトヴィオラスがいた。

(つ……馬鹿!?)

気を緩めてしまった自分を罵倒する。

先ほど自分で感じていたことではないか。あのモンスターは明らかに人為的なもの。

おそらくは闇派閥イッイェルスに関係していると。

だったら、一体倒して終わりだなんて見通しが甘すぎる。

速攻魔法も間に合わない完璧な不意打ち。

出木杉君とノエルちゃんに迫る異形のモンスターの爪。

「グルアアア、アアアアッ! ……ギャツ!?!」

それを防いだのはストーンアニマルだ。

ノエルちゃんを守れと言う指示を忠実に守る彼らは、束になつてコボルトヴィオラスに立ち向かう。

顔面に体当たりをしてコボルトヴィオラスの攻撃を妨害する彼らを、鬱陶し気に触手で薙ぎ払うモンスター。

ストーンアニマルたちではモンスターは倒せないが、時間を稼いでくれれば十分だ。

「【ファイアボルト】 ツ！」

「ガアツ!!」

速攻魔法がコボルトヴィオラスの足元に着弾する。

本能的に飛び退いたそのモンスターが睨みつける中、僕は二人を庇うように立ちふさがった。

「ごめん！ 平気!？」

「は、はいっ」

「う、ん……っ」

「良かった……ありがとう、ストーンアニマルたち」

二人に怪我が無いことを確認し、最悪なことにはならなかったことに胸を撫でおろす。

もし彼らが怪我でもしていれば、僕は自分が許せなかつただろう。

しかし、喜ぶにはまだ早い。

「ま、また出た！」

「モンスターって街中にも出るものなのかい!？」

のび太やドラえもんの周りにもコボルトヴィオラスが現れる。

これで3体目。

1体倒すのでやっとだった相手が次から次へと出てくることに、焦りを隠せない。全員を一か所にまとめて、円陣を組むようにお互いを庇い合う。

じりじりと近づいてくるコボルトヴィオラスに誰かが唾を飲みこむ音がした。

（僕一人で3体全部倒すのは現実的じゃない。だけど、車いすの操縦の練習のために人がいない広い空き地に来ているから、助けを呼んでも誰も来ない可能性だってある。どうすれば……）

打開策を絞り出そうと懸命に頭を回す。

起死回生の一手ならある。

あの猛牛との戦いで得たスキルなら、この状況を打開できる。

（だけど時間が無い。スキルが十全で使えるようになる前に攻撃されたら終わりだ）

なにか、モンスターたちを足止めする手立てはないのか。

冷や汗が流れることを自覚する。もう、一か八かに賭けるしかないのかと思考が陰つた時、出木杉君が声をかけてきた。

「なにか、あいつらを倒せる方法はありませんか」

「……ある。だけど、使うのに時間がかかるんだ。途中で攻撃されたら不味い」

「僕が時間を稼ぎます。ドラえもん、相手の目を見えなくする道具はあるかい。後、タケ

コプター」

出木杉君はドラえもんさんから黒い魔石灯のようなものと、タケコプターを受け取る。

「確認です。冒険者の人たちは五感がとても鋭いんですね」

「えつと……一般人に比べたら」

「なら音に集中してください」

そう言う出木杉君は上空に飛び立ち、黒い魔石灯を使用した。

その瞬間、世界が真っ暗になる。

「わっ、……な、なに？」

「落ちていてノエルちゃん。これは「暗くなる電球」だよ。つけると辺りが暗くなる。

W<sup>ワット</sup>数を上げれば、周りが見えなくらいに暗くなるんだ」

聞こえてきたドラえもんさんの解説で、光を灯して暗闇を照らす魔石灯とは真逆だ、と思う。

コボルトヴィオラスたちは戸惑ったような声を上げた後、おもむろに触手を振るいだした。

ヒュン、と風を切る音にナイフに込める力が強くなるが。

「ギャッ!？」

「ピゴツ!？」

「ガルアアアアツツ!!」

コボルトヴィオラスたちはお互いに触手をぶつけ合い、苛立ちと共に咆哮する。

ヴィオラス

食人花と違い、その感覚器官はコボルトの眼である彼らは情報取得のほとんどを目に頼っていた。

触手と言う中距離を範囲とした武器を持つ彼らが、視力を失えば、目標の場所も分からずに暴れまわるしかない。

結果として、コボルトヴィオラスの触手はお互いにぶつかり合い、それを敵の攻撃と認識した彼らは同士討ちを開始したのだ。

「ひっ……や……」

ノエルちゃんやんは獣たちの殺意に濡れた応酬に怯える。

無理もない。こんな幼い子にこれは酷だ。

だから僕は怯える気配を頼りに彼女の頭にポン、と手を置いた。

「大丈夫」

「あ……」

「僕が、守るよ」

一人じゃあのモンスターを倒せないくせになにを、と自分でも思うがまずはこの子を



あのもんすたーたちにきかれたら、きつといっぱいひどいことをされる。そうおもつちやつたらこえをだすのがこわかった。

だから、ゆきのなかにいるみたいにするえて、こわいこえがききたくなくてみみをふさごうとしたら。

「大丈夫」

あたたかいてがあたまにあつた。

やさしいこえがとなりにあつた。

「僕が、守るよ」

まっくらなのにこのひとのかおがみえたきがした。

ゆきとおなじいろで、ゆきとはまったくちがうあたたかいひと。

きれいなあかいめでわたしをみてくれるひと。

あたまにのせられたかれのをぎゆつとにぎると、すずのおとがした。

「のび太君、ドラえもんさん。僕の近くにきて」

「う、うん」

「どうするの？」

「あいつらを倒します」

ひかりがとびでた。



くらいやみをてらすちいきなひかりのつぶ。

「アルゴノートだ！」

「アルゴノートだよ……そう言えばこれも知られてるの!?! 僕の内なる願望が本で全国展開!?!」

ふたりのおはなしはみみにはいつてこなかった。

だつてきれいだったから。

まつくらのなかにちかちかひかりがかがやいて。

まるで、あのひにみたほしぞらみたい。

もんすたーたちはまだけんかしてる。

もつたいないな。こんなにきれいなのに。

けんかにむちゆうできがかないんだ。

「と、とにかくいつたんこの場をでます。時間稼ぎはもう十分」

「わ……………」

そういうとおにいちちゃんはわたしをてにかかえた。

すごいちからもち。

「わあ!?!」

「うわっ!?!」

のびたくんとどらえもんのおどろいたこえもきこえた。

おにいちゃんはさんにんももってるんだ。

すごいすごいちからもち。

「ちよつと走るから、舌を噛まないでね！」

おにいちゃんがそういつたらぐんつ、てからたがゆれた。

おそらをとんでるみたいにかぜがぶつかってくる。

きもちいい。

きがついたら、まわりがあかるくなつてめがしよぼしよぼ。

よるがおひるにもどつていた。

「みんなはここにー！」

おにいちゃんやんはわたしたちをおろすと、うしろをにらんだ。

わたしたちがいたばしよはそこだけまっくら。

くろのなかからもんすたーのこえがいまもきこえている。

まだあそこにいるんだ。

こわくてふるえるところをおにいちゃんやんはふきとばした。

「出木杉君、離れて！」

「えっ!? ……っ! はい！」

おそらをとんでもんすたーをつかまえていた、できすぎくんがはなれていく。

おにいちゃんのみぎてにあつまっているおほしさまたちをみて、うなづくどじやんぷした。

「消え……ええ!？」

「高すぎ!？」

おにいちゃんはぴょんととんで、できすぎくんよりたかいばしよにひとつとび。

のびたくんもどらえもんもおめをまるくしてびつくりしてる。

あおいおそらにとびこんだおにいちゃんはからだをくるつてうごかして、うでをもんすたーたちにつきだした。

くらのがきえてもまだけんかしているもんすたーたちにおにいちゃんはさげんだ。

【ファイアボルト】

ほのおがたつた。

まつしろで、ふといほのお。

こわいもんすたーをたおすほのお。

からだからさむいのをふきとばしちゃう、あつたかいほのお。

たきびのまわりみたくなくきががせになつてあたたかいつてる。

おにいちゃんはじめんにころがりながらおちて、ねころぶと。

ちやくちはしっぱいしちやったと、わたしのほうをみてわらった。

## 次なる戦いへの予感

【英雄願望】  
アルゴノウト

それがミノタウロスとの戦いを終えた僕が発現したスキルの名前。

能力は能動的行動に対するチャージ実行権。  
アクティブアクション

初めて見た時はどういうこと？ と首をひねったものだが、その効果はすさまじい。

憧憬とする英雄の姿を思い浮かべることトリガーを起動鍵とし、時間をかけて力を溜めた分だけ

攻撃力を増幅させる。

決定打と言う物を不確定要素が大きい【四次元衣囊】フォー次元メシジョン・ポーチに依存せざる得なかつた僕

としては、貴重な安定した高火力スキルだ。

そんな風に頼りになるスキルなのだが、なんでアルゴノウトなのか。

アルゴノウトと言うのはそこそこ有名な英雄譚、或いは喜劇の名だ。

スキルは本人の資質を引き出すものと言うが、イマイチ自分とアルゴノウトの共通点

が思い浮かばない。

ミノタウロスを倒しただけでアルゴノウトなら、世界はアルゴノウトで満ち溢れてい

るだろう。

そんなに好きなわけもなかったし、謎だ。

「アルゴノートを近くで見れるなんて、やっぱり漫画の中に入って良かったな」  
「だからアルゴノウト……小さい子には言いづらいのかな？」

のび太君の言葉から考えるとやっぱりこの能力を得ることは既定路線だったらしい。  
……思うところが無いわけでもないけど、言っても仕方ないか。

「けど……派手に壊しちゃいましたね……」

「う、うん。この辺りは無人だからすぐに問題になるってことは無いだろうけど」

【英雄願望】で強化された魔法によって破壊された地面。

出木杉君は辺りに充満している熱気に汗を流しながら、周囲を見渡していた。

（まだ奇襲を警戒している……本当に年齢離れた子だ）

戦いが終わったと思つて安心している他の子たちと違つて、出木杉君やドラえもんさんはまだ油断をしていない。

実際、さつきはその油断を突かれたわけだし、二人の考えは正しい。

さつきまで僕たちを監視……と言うよりは観察していたらしい人の気配もあった。

その人はもう引き上げたようだけど、万が一にも子供たちに怪我をさせてはいけない。僕も注意しないと。

「けど、さつきののび太君の射撃は凄かったね」

「えへへへ……」

「のび太君の数少ない特技だからね」

二人の冒険は村で初めて出会ったときに聞いていたけど、のび太君の射撃センスとひみつ道具は確かに強力な武器だ。

モンスターがおらず、何十年も戦争をしていない国に生まれなければ一角の人物になつていたのではないか。

そんな世界じゃないほうがいいに決まっているが。

「しかし、奇妙なモンスターだったね」

「なにか変なところあった？ モンスターなんてあんなものじゃない？」

「オオカミのようなモンスターだったけど、触手は全く別の生き物みたいだった。もしかしたら、あの触手は寄生してるのかもしれないね。ロイコクロリデイウムみたいに」

「ロイ子黒リウム？」

「カタツムリに寄生する虫だよ。写真とかは見ないほうがいいと思う。気持ち悪いから」

のび太君と出木杉君の会話で、ふと、あの異形のモンスターを思い浮かべてみる。

仮称としてコボルトヴィオラスと呼んでいたあの個体が、出木杉君の言うようにヴィオラスに寄生されたコボルトと言う可能性はあるのだろうか。

（違う……と思う。「ガネーシャ・ファミリア」がヴィオラスのことを研究していたけど、そんな特性はなかったはず）

ヴィオラスが「ガネーシャ・ファミリア」にいた間、闇派閥の突兵として今後イヴィルスも利用されるのが予想された極彩色のモンスターの解明のために様々な研究者がヴィオラスを調べていた。

ベルはその研究で明かされたすべてを知っているわけではないが、旧「ヘステイア・ファミリア」ホームにヴィオラスを移した際に、概要くらいは聞かせている。

寄生、などと言う危険な特性があれば、教えられているはず。何だったら、ベルが管理すること等許されなかったかもしれないではないか。

もちろん、短期間で全てが分かるとは言えないから、新発見の特性かもしれないが。そうなること異なるモンスター同士ヴィオラスの交配……もつと有り得ないか。

そもそもコボルトと食人花ヴィオラスがどう交配するのやら。なんなら極彩色のモンスターたちがダンジョンから生まれてきてるかも怪しい。

そもそもモンスターが子を為すのはダンジョン外での話。しかも新たにモンスターを生み出すために魔石を分けているから弱体化してしまうと聞いている。

30階層に出現するブラッドサウルスが10階層のオーク程度の強さしかないのに、そのやり方であんなに強いモンスターが生まれるはずがない。



「食人花<sup>ヴィオラス</sup>にしては触手は小さかったし、寄生つてことは無いと思う」

「そうなる移植したとか？ 拒絶反応とかどうしたんだろう」

「きょーしつはんのう？」

「拒絶反応。自分と別の細胞がくつつくとお互いに敵だと思つてしまふんだよ」

「相変わらず出木杉君はよく知つてるなあ。のび太君も少しは本を読んだほうがいいん

じゃない」

「余計なお世話だ！」

出木杉君よりも年上な僕も知らなかつたのでドラえもんさんの毒舌が痛い。

本当に何でも知つてるな……。

頭が良いだけではなく、勉強家なのだろう。僕は英雄譚以外の本は読むのが苦手だったし、難しい本を読める人は素直に凄いと思う。

僕も勉強したほうがいいかな、と思つた結果魔導書<sup>グリモア</sup>を使つちやつて借金が増えたのだけど。

「拒絶反応は最近やつていたテレビの番組でやつていたんだよ。ほら、日本初の心臓手術の……」

「そんな勉強みたいな番組よく見るなあ」

「僕の時代だと一般常識みたいなやつだけど、そつか。のび太君たちの時代に近い頃

だったっけ」

異世界の会話についていけない僕は、さつきからずっと僕に掴まっているノエルちゃんを見下ろした。

恐らく、【豊穣の女主人】に流れ着くまでは誰かに襲われたであろうこの娘がさつきの戦いでトラウマを再発したんじゃないかと心配だったんだけど、そう言った様子はない。

それはいいのだが……

「……」

「ノ、ノエルちゃん？」

「……ぎゅー」

今僕に掴まっているのは怖がっているのではなく、甘えているのだろうか。

さつきまで楽し気に乗っていた車いすから離れてクイクイと引っ張ってくる。

これは肩車をして欲しいという事だろうか。

「はっ」

「……♪」

肩に乗ったノエルちゃんは上機嫌で辺りを見渡している。

襲撃も気にせずマイペースに振舞うその様子に僕はシルさんの面影を見た。

(シルさんのことを慕っているみたいだし、似てきているのかも)

「あの、クラネルさん」

「ん？ どうしたの」

「この世界で移植することって一般的なんでしょうか？」

移植、とは先ほどから出木杉君の口から出てきたワードだ。

効きなれない言葉だが、恐らくは体の一部を別の体に付けるという意味だろう。

「うーん。聞いたことないなあ」

そもそも体の一部を欠損したなら義手を使うものだし。

ナアーザさんの持つているものほど高性能だとすごい高価だけど。安価な義手でも最低限の生活動作はできる……と聞いたことがある。

内臓が悪いなら薬を飲めばいいし。【調査】のアビリティを持つ職人が作った薬の効き目は凄いから。わざわざ別の体の一部を切ってくつつける、なんて危ない真似はしない。

「同じ人間でも拒絶反応は凄いのには、別の動物で何て凄い技術だっと思ってたんですけど」

「この世界は魔法とかあるし、深く考えすぎじゃない？」

「……そうだね」

出木杉君は何か引つかかるものを感じているようだけど、いつまでもここにいてるわけ

には行かない。

まずは【豊穰の女主人】に戻って、みんなを預けた後で【ガネーシャ・ファミリア】に相談しよう。

日はまだ明るい、イウイリス闇派閥はまだまだ活発に動いている。

ノエルちゃんの車いすの練習をもう少ししたかったが、続きは後日、別の場所でするとしよう。

(そう言えば……)

無人になった車いすを引きながら【豊穰の女主人】に戻る途中。

不意に頭に浮かんだ疑念。

先ほどの戦いの時に感じたかすかな違和感。

(奇襲をしたコボルトヴィオラス……どうして触手じゃなくて爪で攻撃したんだろう)

リーチは圧倒的に触手の方が上。

にも関わらずなぜ攻撃が届きにくい手だったのか。

そもそもあれは攻撃ではなく……

(これも誰かに相談したほうがいいかな)

蒼い空を見上げた。

異常気象が続く中、久しぶりの晴天だったけど、まだまだ荒れた天気は続きそうだ。



目立ちすぎる。

取引不成立となるのは面白くない。

彼らから「新種植物製造機」というひみつ道具を高額で買い取り、実験室の手も借りている以上、失敗した時の損失が大きすぎる。

少し、黙考した後、ヴィトーは結論を出した。

「レベル2の魔導士を要する4人パーティー相手だったと改竄しましょうか」

流石は闇派閥。

表社会なら完全にアウトな行為を平然と行うものである。

裏社会でも普通にアウト？　ドーせ来るのは酔っ払いだから分かん。

そう結論付けたヴィトーは早速記録を改竄し始めた。

酔っ払いとは言え相手は神。ならば嘘ではなく、真実を誤認する形で記載すればい

い。

不都合な部分を添削し、適切な報告書に書き直していく。

「前衛を触手による同時攻撃で翻弄するも、魔導士の魔法準備が整ったため、大火力の魔法で討伐される……これなら惨敗が惜敗に見えるでしょう」

前衛と魔導士が同一人物であることなど書かなくていいのである。

レベル2以外のパーティーメンバーは恩恵なしの一般人などと書かなくていいので

ある。

なんなら戦っていたのはほぼ一人で、他のメンバーは牽制程度しかしていなかったこと等書かなくていいのである。

酔っ払いを交渉の場に送り込んでいるのだから、この程度のリスクは向こうも勘案してしかるべきだ。

ヴィトーが書き上げた報告書は後でエニユオに届くだろうが、取引を決めるのはあの酒に溺れた神だから文句の言いようもない。

「さて、後は適当なパーティーをいくつか襲って資料を纏めるとして……面白い報告も入っていますねえ」

ピラリ、と資料をめくると写真付きの報告書。

そこに写っていたのはベルが保護していた少女の姿だった。

「まさか、巡り巡って彼の下に辿り着いていたとは……この時期のベル・クラネルに精霊との接触はなかった……と記憶していたのですが」

何処までが創造主の手のひらの上なのか。

計画の鍵が標的の下にあるとは、実に物語的展開ではないか。

皮肉気に唇を吊り上げさせた表情は、この場に見る者がいれば蛇を連想させるだろう。

「あの後我々を撒こうとしたようですが……残念でしたね。少女の目撃情報はその前から既に上がっていますよ」

ベル・クラネルは戦いの後、尾行を警戒していたために追跡は出来なかったが、戦いが始まる前まで警戒していたわけではなかった。

当然、あの荒れ果てた空き地に来るまでの目撃情報は残っている。

それを逆算してしまえば、住処の特定など容易い物だ。

【豊穡の女主人】という酒場。

成程、小説内でも様々な訳有娘を有する場所だ。

その店に幼い子供が住み込んでいるという事は噂になっている。

あのレベル6であるミア・グラントが経営する店など、戦力過多もいいところだが

……

「分かっていたらやりようなどいくらでもある」

監視者は精霊に気が付いて慌てて指揮を乱してしまったようだが、焦る必要はない。

計画は順調に進められてきた。万全の用意をする時間は十二分に残されている。

「ククク……ハハハハハッ！」

予想よりもずっと早く来た計画の成就を予感して。

ヴィトーは嗤った。



## ままが(と)

子どもと言うのは遊びたい盛りだ。

元々ベルに懐いていたノエルだったが、先日的一件でのベルの戦いを見てからはよりべったりとベルにくっついて回るようになった。

「ノエル、ベルさん来たよー」

「……」

「こんにちはノエルちゃん」

今日もシルに貰っていた弁当箱を返しに来たベルを確認した途端、車いすを動かして向かってきた。

尻尾を振る子犬のように自分を慕ってくれるノエルに頬を緩めるベルだったが、子どももの底なしの元気と言う物を再確認しつつある。

(村には女の子はいなかったから女の子の遊びには疎いし、ノエルちゃんは自由に動けないからやれることも制限されちゃうな)

ノエルの表情に笑顔が多くなってきたことは嬉しいが、自分より小さい子供と遊ぶ機会が少なかったベルの女の子の遊びのボキヤブラリーは少ない。

なので、ここ数日はシルに協力してもらいつつノエルの遊び相手になっていた。

「忙しいのにもありがとうございます」

「いえ……シルさんも忙しいと思いますけど大丈夫ですか？」

冒険後は確かに多少の疲労はあるが、無理をしない探索の重要性をエイナにこれでもかと叩き込まれているベルには中々余裕がある。

ハシャーナやモダーカもベルの体力配分に関しては、新人とは思えないほど適切だと評価していた。一度疲れを溜めすぎて失敗しているからこそ、同じ失敗はしないように努力した結果だ。

アイズによつて集中力の分配を教えられてからは、更に疲労が少なくなり、前日の疲れを引きずることもほとんどない。

一方のシルは要領がいいが恩恵フェアルナを持たない一般人。

【豊穡の女主人】での仕事は傍目から見てもハードなものだ。

シルは全く疲れた様子を見せなかったが、ベルも流石に不安になると言うもの。

「大丈夫ですよ。今日も仕事を所々リユーに押し付……もとい、手伝つて貰いましたから」

(リユーさん……)

カラツ、と笑いながら小悪魔じみた事を言つてのけるシルはやはり流石だ。

こういうタイプの人は周りの人から嫌われがちな印象があるけど、「豊穰の女主人」の従業員にそのような雰囲気はない。

線引きは見極めているという事だろう。質クオリティが悪いとも言う。

「ノエルは今日は何をしたい？ またトランプやる？」

「……やらない」

「アハハ……だよね」

動けないノエルがやる遊びとなると必然的にテーブルゲームが多くなったが、これが悲劇の始まりだった。

幼児であるノエルが、あまり複雑なモノや戦略性の高いゲームをするのは難しいだろうと、リユーが簡単なトランプを教えたのだが、相手が悪すぎたのだ。

「アレは酷かった」

「……悪気はなかったんですよ？」

リユーが遠い目でその時のことを振り返る。

端的に言えばノエルが相手をしたシルとベルは、その手のゲームがアホみたいに強かったのだ。

シルは元々駆け引きの鬼であったし、ベルはもう論外レベルの豪運の持ち主。

ノエルはあつという間にポコポコにされたのである。

シルの場合はまだ手加減していたからよかったが、ベルは酷かった。

何せベルの強さの根源は運であるため、手加減などと言う器用なことが出来ない。

世界の理不尽を叩きつけるかのようなワンサイドゲームが展開されたのである。

ババ抜きで配った手持ちからペアを出して行ったら、ジョーカーだけ残った時は全員開いた口がふさがらなかった（ベル自身も含めて）。

当然ノエルは不貞腐れた。

「……あれは、ひどかった」

「反省シテマス」

リユートの言葉を真似るノエルにベルはひたすら頭を下げるしかなかった。

ベルに運の関わるゲームをさせるのは禁止。そんな暗黙のルールが【豊穰の女主人】には出来上がったのだ。

「きよ、今日は運とか関係ない遊びだから！」

「あれ？ 今日にはベルさん発案なんですか？ ひよつとして……」

「はい。ちょうどいいひみつ道具が使えるので」

「やっぱりベルさんって運がいいですね」

因みにシルにひみつ道具のことはあつさりバレた。

と言うものび太が【豊穰の女主人】の仕事で失敗するたびに、フォローしていたド

ラえもんがひみつ道具をガンガン使うので、ベルが使うマジックアイテムとの類似性に気が付いたらしい。

「それで、今日はなにをやるんですか？」

「今だします。未来ままごとシート」

光と共に現れたのは一枚のシートだ。

「ままごと……確かにノエルでも楽しめませぬ」

「ままごと？」

「うーんと。お家の中のお父さんやお母さんになりきって遊ぶの。ご飯を作ったり、仕事に行ってくるお父さんに行つてらっしゃいしてあげたり」

ノエルはよく分かっている様子だったが、初めての遊びにワクワクした様子でシートを見つめている。

「ここに乘つて遊ぶんでしょうか？」

「だと思いません。ひみつ道具だから他にも機能があるかも……」

ベルとシルが取り敢えずままごとの道具を用意しようとすると、シートからニヨキニヨキと物体が生えてきた。

流し台や食器棚、少し変わった形だがテーブルもある。

「……異世界ってすごいですね」

「ドラえもんさんの世界は皆こういうので遊んでるのかあ」

予想外高性能なひみつ道具に若干引きつつ、ベルはシルからままごとのやり方を確認していた。

幼馴染の女の子などいかなかったベルは、ままごと遊びの存在は知っていても、やり方までは大まかなことしか分からなかったのだ。

「取り敢えず、私がママ役でベルさんがパパ役ですね」

「流石にノエルがいきなり母親役は難しいですからね」

「そういうのが好きならやつてもいいんですよ？ ベルさんは噂によると、小さい女の子がみんなの前で告白しちゃうほど大好きらしいですし」

「風評被害です!？」

クスクスと笑うシルは噂を信じてはいないようだったが、真面目に二つ名にも影響を与えかねない噂なので勘弁してほしい。

ベルの二つ名は意外と難航しているらしく、後日改めて神会デナトウスが開かれるんだとか。

ヘスティアは「難航してるとか絶対嘘だ……あいつらこれまでのボクたちの失敗を徹底的に調べ上げて玩具オモチャにする気だ……」と死んだ目でブツブツ言っていたが……。

（考えないことにしよう。神様たちは一生懸命僕の二つ名を考えてくださっている。わあいウレシイナー）

嫌なこと思い出してしまい、ズーンと沈み込むベル。

ノエルが心配げに服をツンツン引つ張ってくるのが癒した。

「そうですねー。私はブランド物が大好きな奥さんで、ベルさんはギャンプル大好きな夫と言うのはどうですか？」

「ほのかにバッドエンドの香りが……もつと夢を大切にしましょう？」

絶対ままごとが終わった後にダメージが残りそうな設定は却下しつつ、大まかに設定を決め、3人はシートの上に座り込んだ。

「それじゃあ、早速……ん？」

その時、ふとベルの背中の中の刻印が疼いた気がして、思わず背中に手を回す。

このスロットの位置は……スキルだろうか。

(なんだろう……?)

もしやカドバールのような、精神に影響を与えるひみつ道具なのかと辺りを見渡すが、シルもノエルも特におかしな様子はない。

気のせいだろうかとベルは腑に落ちないものを感じながらも、疑問を飲み込んだ。

「それじゃあ、お母さんお料理作るねー」

シルは母親の役割ロールに則って台所に向かう。

異世界の調理道具に興味津々と言った様子で目を輝かせていたが……

「あれ？」

「シルさん、どうかしましたか？」

「いえ、この銀の棚に本物の食材がありました……」

シルが指さす棚の中をベルはノエルを肩車しつつ覗き込んだ。

そこには新鮮な野菜、果物、魚、肉……と見るだけで飽きないほどの種類の食べ物があつた。

「……物凄い精巧な玩具……じゃ、ないですね。感触も本物だ」

元農民のベルが野菜の感触を間違えるはずもなく、ベルは未来のままごと事情に少し遠い眼をした。本物の食材を使って遊べるとは異世界は進んでいる。

「これ、なに？」

「これは……牡蠣だね。凄い新鮮な状態」

「ひよつとしてドラえもんさんたちの世界だと、腐りやすい物も安全に保存できるのかな」

「だからこの棚の中はこんなに冷たいのかもしれないね。寒いところだと物が腐るのは遅いって言いますし」

さらつと異世界の技術力の高さを見せつけられた。

ベルたちの世界だと痛みやすい物はどうしてもその日のうちに食べなければいけな



いものだ。

つまり、牡蠣のような食材は海の近くにいるような人にしか食べられない。

シルが知っていたのは恐らく、オラリオの近くに港町メレンがあったからだろう。

「よし、お母さん腕によりをかけちゃうぞー。ノエルはお父さんと向こうで遊んでい  
てねー」

「おとーさん?」

「ベルさんのことだよ」

分からないことを尋ねるノエルと、それにちゃんと答えるシルの姿は本物の親子のよ  
うだ、とベルは思った。

実際、記憶もないノエルにとっては、シルは母親と変わらないのかもしれない。

「おとう、さん。あそぼ……?」

ベルを見上げるノエルが、手を伸ばしてくる光景は中々衝撃が凄かった。

娘を持つ親が、「うちの子は嫁に行かせん!」という心情が少し理解できる。

「うん。そうだね」

「作り終わったら呼ぶからねー」

「はい」

「あはは……ん?」

ついシルに言われるまま動いてしまったが、この後どうなるのだろうか。

言うまでもなくシルの料理は……その、色々とアレだ。独創的だ。

本物の食材を使うこの未来ままごとシートで、彼女が腕によりをかけたらどうなるのか。

(ヤバイ)

自分の顔の色がさーと青ざめていくのがベルには感じられた。

机に向かっていていた足が貼り付けられた様に急停止し、バツと弾かれるように後ろを振り向いた。

シルは大きなフライパンを用意したのち、いくつかの食材を銀の棚から取り出した。

その中には先ほどノエルが興味を示した牡蠣の姿も……

(ヤバイヤバイヤバイ!?)

牡蠣と言えば食中毒の代表格。

フライパンを用意するところから流石に加熱はするようだが、あたったら洒落にならない。

ノエルは幼くして地獄を見る羽目になる。

(こ、子どもが使うことを想定して作られているから安全装置みたいなものは……駄目だ、ひみつ道具にそんな信頼性はない！)

技術は凄まじいが、作る側の倫理が欠落しているとしか思えないひみつ道具もあるのだ。

そんなうまい話に賭けることは出来ない。

ここまで思考を要するのに0.2秒。ベルはノエルを連れてUターンを決めた。

「やっぱりお母さんを手伝いに行こう!」

「えー?」

「今は家族みんなで家事をする時代だと思っただけ!」

「家族……うん!」

苦しい紛れの発言であったが、ベルの言葉に何か思うところがあつた様子。ノエルは納得してくれた。

手伝いつつちゃんと料理になるようにサポートするしかない。

ベルは合間合間に訪れる味見ゴウモンを一人で引き受け、なんとかまともに食べられるシーフードの盛り合わせを完成させるのだった。

白目を剥きつつもなんとかノエルを守り切つたベルだったが、残念なことにノエルにはその真意がイマイチ伝わっておらず、彼女の中でベルは食いしん坊ポジションとなつたらしい。

この日からベルの弁当にノエルが作った簡単なおかずが追加されるようになったと



「昨日のモンスター、覚えてるかい？」

「あのウニヨウニヨした狼？」

「そうそれ」

出木杉によると、あの後のび太が読んだ漫画を調べてみてもこの世界にモンスターを改造する技術があるとは思えないとのことだった。

「勿論、そう言った技術が無いとは言いい切れないけど、末端冒険者でしかないクラネルさんにわざわざ差し向けるほど有り余ってる存在では無い筈だ」

「でも、実際にいるじゃないか」

「うん。だから僕は原作とは変化が起きているんじゃないかと思ってるんだ」

原作の世界観にそぐわないものが現れたという事は、世界観自体に異変が生じている。

そう、出木杉は主張したいらしい。

「現に、クラネルさんの冒険も漫画に描かれているものと大分かけ離れているよね」

「そうなの？」

「確かに所々言っていることに違和感が……」

「一番わかりやすいのは闇派閥イウィルスだね。あんな奴ら漫画だと出てきてないもの」

実際は大森先生の頭の中にいたのかもしれないが、ベルの物語にあのような巨大な組

織はなかった。ベルの物語に……或いは世界の流れに大きな変化をもたらしたものだ。それは間違いなくひみつ道具だ。

「まさか会っただけでこうなるなんて思わないよ……」

ドラえもんのがヤキに出木杉も苦笑して頷いた。

バタフライエフェクトという言葉はあるが、この一連の流れはその極致のようなものだ。

なんてことのない行動で、世界が大きく変わることもある。

これだけで一つの論文が出来そうな事件だ。

「じゃあ、あのモンスターたちも僕たちがベルに会ったのが原因」

「うーん、どうだろう……」

「出木杉がはつきり答えられないなんて珍しいな」

「君たちとクラネルさんが会ったことが、どう影響してあんなモンスターを生み出したのか想像つかないからね。正直、僕はあのモンスターはまた別件なんじゃないかと思っ  
ているんだ」

そこまで言うとう出木杉は表情を引き締めた。

「ここからが本題だと言わんばかりに。」

「まずは確認から。この漫画、『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろう

か」は未来の本。そうなんだよねドラえもん」

「うん。何かの事故で誤ってタイムスリップした場<sup>オ</sup>違いな工<sup>パ</sup>芸品だよ」

「本当にそう思うかい？」

「……ん？ どういうこと？」

「漫画が僕たちの時代に落ちていたのは本当に事故なのかい、と言う話」

その言葉にのび太はピンと来なかったが、ドラえもんははつとした様子になる。

「まさか……」

「ドラえもん。絵本入りこみぐつは凄いひみつ道具だ。いくらでも悪用の方法が思い浮かぶくらいには」

「ねえ、つまりどういうことさ」

出木杉とドラえもんだけ分かっていることが気に入らず、のび太は二人の会話に割って入った。

出木杉はごめんごめんと謝ると、簡単な結論を伝える。

「つまり、この漫画をわざと僕たちの時代に持ち込んだ存在がいて、その何者かがこの世界で悪巧みをしているんじゃないかって言うのが僕の推論だよ」

「ええ!! 大変じゃないか!」

「うん。だからその手掛かりを探しに行こうって言うのが僕の提案」

冒険者の街で、少年たちの小さな冒険が始まろうとしていた。



## 現実からの侵入者

「でも……手掛かりを探そうって言ってもどうするのさ。イビルスの基地がどこにあるかなんて分からないよ」

「イビルスじゃなくてイヴィルスだよ」

「カタカナの言葉は言いにくいから嫌だ」

自分たちの世界の何者かがこの『ダンジョン』に出会いを求めるのは間違っているだろうか』と言う物語を乱している。

そう言われれば、のび太とて黙ってはいたくない。

だが、現実問題として、闇派閥イヴィルスの手掛かりが全くない以上は動きようがないではないか。

そんなのび太の主張に答えたのはドラえもんだった。

「だから街に出て手掛かりを探そうってことだろう？」

「僕たちがちよつと質問して見つかるんならもう警察が見つけているはずだろ」

「警察じゃなくて【ガネーシャ・ファミリア】」

「日本人は日本語だけ使うべきだと思おう」

そこら辺の人を捕まえて「この世界にやって来て、悪いことをしている人たちはどこですか?」と聞いたところで答えが返ってくるはずがない。その程度はのび太にだって分かることだ。

常識的に考えれば確かにそう。しかし、物語の外側から来た自分たちにはアドバンテージがあると出木杉は説いた。

「この漫画の世界に誰かが紛れ込んで流れがおかしくなっている。つまりは、本来のストーリーとの違いを見つければ、そこから元凶への手掛かりを見つけられるって言う事だ」

物語の住民である「ガネーシャ・ファミリア」は原作の流れなど知ることは出来ないが、絵本入りこみぐつでこの世界に來た自分たちならそう言った視点を持てる。

要は推理ドラマで物的証拠ではなく、物語として、或いは俳優で誰が犯人かを言い当てる感覚に近いと出木杉は言った。

「犯人が最初に分かれば、後付けで証拠だって作れるだろう? ドラえもののひみつ道具には過去の行動を明らかにするものだってあるんだから」

もしも推理ドラマでこんな展開をされたら、間違いなくテレビ局には非難の嵐が来るだろう。

しかしこれは現実。遠慮をする理由はないのだ。

「確かにそれなら僕たちにも手掛かりを探せるけど……よく思い付いたね」

「向こうがどんな人間かは分からないけど、裏の世界を生きている人間だ。反則の塊であるひみつ道具をフル活用してもまだ足りないよ」

だからこそ、やれることはすべてやっておきたい。

後手に回ってしまつては翻弄されるだけなのだから。

「でも、もとのダンまちとの違いって言ったって一杯あるじゃないか」

例えばベルと春姫の出会い時期。

本来ならばまだずっと後だったはずなのに、ベルはもう春姫を知っていた。

流石にこれに元凶が関わっているとは思えないとのび太は反論する。

「うん。確かにこの漫画はひみつ道具を使う主人公と、ひみつ道具で好き勝手する元凶の二つの要素でかき乱されている。どれがクラネルさんが原因で、どれがそうじゃないか、なんて探していると絶対に時間が足りない」

ほんの少し、話を聞いたただけだがベルの動きは原作と全く異なる。

そもそも闇派閥イグイルスとやらとの交戦など原作にはなかったのだ。

「だから、確実にクラネルさんが関わってないと断言できるものから調べよう」

「確実にベルが関わっていないもの？」

「あーなるほど。でもいいのかい？ あそこにまた近づくのは危ないと思うけど」

会話から何かを察したらしいドラえもん。

一方ののび太はまだ出木杉の考えが分からずに首をひねる。

「ほら、つい先日見たばかりだろう？ 明らかにおかしい敵を」

「ん？ んんっ？」

「コボルトヴィオラスだよ。のび太君」

「……あ、そつか。あんな奴いなかっただもんね」

狼の背中にウニヨウニヨした触手が張り付いているという、明らかに不自然な姿。

すつかり頭から抜けていたが、あれも「違い」の一つだろう。

「クラネルさんも心当たりはない様子だったわけだしね。ひみつ道具を盗まれたのかと

も思ったけど、一日で消滅するというスキルの制限を考えると現実的じゃないし」

何より、出木杉が感じたあの違和感。

それが22世紀の技術提供によるものだとしたなら。

「ドラえもん。何か、姿を隠せるひみつ道具を出してくれないかな」

「やっぱり、この前の現場に行く気だったんだね」

「それが一番の近道だ」

のび太はようやく出木杉の考えを理解した。

ついこの間のび太たちが襲われた場所に行つて、ひみつ道具の力で元凶を見つけ出す

うというのだろう。

「タイムパトロールにでも頼めばいいじゃないか。態々僕たちが危険を冒す意味はない」

「本当なら僕もそうしたいけど、タイムパトロールはすぐに来てくれると思う？」

「それは……」

タイムパトロールは歴史と言う膨大な時間で活動する組織だ。

街の交番のようなフットワークの軽さを発揮するには、マンパワーがどうあがいても足りていない。

そもそも、この世界の元凶が犯罪者なのかも不明だ。

「犯罪者じゃないかもしれない!? なんでさ? こんなに悪いことしてるじゃないか!」

「クラネルさんたちと接していると忘れがちだけど、ここはあくまでも物語の中だよ。登場人物たちを現実の法律が守ってくれているものなのかい?」

「……」

物語の中の人物を滅茶苦茶にする。

それが果たして犯罪なのか、そう出木杉は問いかけた。

のび太や出木杉たちの時代にも、熱心なファンならば二次創作と言うものやっ

る。

そこで自分を投影したキャラクターを物語の中に出して、登場人物を殺すというストーリーを作ったとしても、その人が殺人罪に適用されるわけではない。

絵本入りこみぐつにおける改変も、同様のものとみなされてしまうかもしれないのだ。

「元凶が単に性格の悪い人だったら、僕たちが文句を言える筋合いじゃなくなる。だから、決定的に相手が犯罪者であるという証拠が欲しい」

「出木杉君は今回の元凶が犯罪者だと思ってるの？」

「うん。8割くらいは。わざわざ過去に未来の本を隠した辺り、やましいことをしているってことだと思っし」

出木杉の言葉が的外れでないことは、ドラえもんの苦々しげな表情からのび太にも窺えた。

「つまり、出木杉は犯人の証拠を集めてからタイムパトロールに逮捕してもらいたいてワケ？」

「うん。僕たちに出来るのはその辺が限界だろうね」

なるほど、とのび太は頷いた。

それならドラえもんには簡単なことだろう。

ひみつ道具を使えば分らないことなどないのだから。

「……ハア。のび太君まですつかりやる気になっちゃった」

何とか反論を探そうとしたドラえもんだったが、のび太の様子を見てため息をつく。

こうなったら梃子でも動かぬ頑固さがこの少年にはある。

もう自分が何を言っても聞かないだろう。

「仕方ないな、もう……しゅん間リターンメダル」

ドラえもんが取り出したのは直系3cmほどの丸い玉だった。

一番上にはボタンがあり、上と下で真つ二つになるひみつ道具が三人分その手に握られている。

「危なくなったらこれで緊急避難すること！ 100mしか有効じゃないから、慎重にね」

「どこでもドアでいいじゃない」

「敵に襲われたりしたときに呑気に使えないだろう」

教育ロボットであるドラえもんにとって、のび太や出木杉の安全は絶対に無視できない。

出木杉はともかく、あんなったのび太は自分が協力しなくとも止まらないだろうと考えると、こうやって万が一を回避する以上に考えは浮かばなかった。





「まだベルのファイアボルトの痕が残ってる」

何せ、大きく焼け焦げた跡が地面に残っているのだから。

この中で、何体ものコボルトヴィオラスが消し飛ばされたというのは現実感が湧かない。

（クラネルさんは漫画の中だと発展途上で強そうに見えなかったけど……実際は十分超人なんだな）

あれでオラリオの上級冒険者の中では、下から数えたほうが高いとは冗談いいところだ。

ひみつ道具がなければ自分たちは牽制すらできなかつただろう。

「それじゃあドラえもん。タイムテレビをお願い」

うんしょ、と言いなながら、ドラえもんは四次元ポケットから薄型テレビを取り出す。

良く思うのだが、ドラえもんが使うタイムテレビは何時も微妙に違う気がする。

未来ではちよくちよく取り替えないといけないのだろうか。

「えーと。コボルトヴィオラスに襲われたのは……」

ダイヤルを弄ると、ちょうどベルとコボルトヴィオラスが接敵したところだった。

「あ、そうだ！ この映像を撮って売ったら売れるんじゃない!? ベルの動き、どんなヒーローものよりもカッコイイよ！」

「ひみつ道具を利用した商売は犯罪だつて言つてゐるだろう」

のび太の提案を却下しつつ、ドラえもんは映像を逆戻りさせる。

こちらがタイムテレビを使うこと等向こうには分からない以上、コボルトヴィオラスには必ず下手が接触しているはずだ。

案の定、コボルトヴィオラスがベルたちの前に出る前に、ケッシュ檻に入れられた状態で男たちに連れられていた。

「うーん。顔がよく分からないな。口元隠してるし、服もひらひらしてる」

「これはこの世界の人かもイウィルス闇派閥はこういう格好が多いらしいし」

「こういう言い方は良くないけど、如何にも狂信者つて格好だなあ。肌も色白だし。まるでお日様に全く当たつてないみたいだ」

「確かにテレビでたまにやつてる病院の患者さんたちみたいだ」

映像を更に巻き戻していくと、ケッシュ檻に黒い布をかけた男たちは逆向きに歩いていく。

「うん。思った通りだ。これで敵のアジトが分かるはずだ」

「あ、そつか。この人たちは基地からモンスターを連れてきてるもんね。こつやつて過去を見ればどこから来たのか分かるんだ」

「のび太君。説明聞いていたよね」

「今やつと分かつた」

やがて男たちは下水道におりて、地下水路を進んでいく。

曲がりくねった複雑怪奇な道を進んでいくので、出木杉が何とか地図を書こうとするが複雑すぎて断念。

「うーん。これじゃアジトの場所が分からないな」

「ドラえもん何とかならないの？」

「しようがないなあ」

困ったドラえもんたちは苦肉の策として、「ラジコン宇宙人」に「トレーサーバッジ」を持たせ、タイムテレビで男たちが通った道を行ってもらって、レーザー地図で何処に行ったのかを把握することにした。

タイムテレビを見つつ、ラジコン宇宙人を操作する作業は大変だったが、なんとかやり遂げる。

「なんか街の方が騒がしくない？」

「化け物が現れたんだって、おっかないよね」

「……あつ（察した）。え、えっと、ラジコン宇宙人も巻き込まれないか心配だし、早く下水道に避難させない？　ね？」

「えー。でもだいいつきゅーぼーけんしゃが来るみたいだし、折角だから見ていきた

……」

「いいから早く避難させようっ!!」

途中ちよつとしたトラブルはあったが何も問題はなかった。いいね？

「あ、なんか目玉みたいなの出した。キモチワルー……」

「目玉みたいなのっていうか、多分、本当に目玉だよ。加工してるみたいだけど」

「ウエー……」

舌を出しながらのび太が気持ち悪そうな顔をする。

出木杉も顔色が優れないようだ。

悪者だとは思っていたが、こんな常識外れなものを持つているとは。

「赤く光ったら扉が開いたね」

「あの扉の鍵みたいなのかな」

「この世界で言うところのマジックアイテムだ。」

単なる魔法のアイテム程度にしかとらえていなかったから、意識をガツンと殴られた気持ちになる。

「せめてモンスターの目の加工であって欲しいよ」

「人の目にDって文字はないし、モンスターのなんじゃない?」

「どうかなあ。猫耳が生えてる人がいる世界だし……僕たちの常識は所々通じないみたいだね」

気持ち悪くなりながらも、扉の奥に続く道を逆向きに歩く二人。

映像を巻き戻してるとは言え、違和感だらけの映像だ。

「あれだね。大昔のダンサーの踊りみたいだ。なんだっけ……ムーン」

「なにそれ」

「ちよつと僕も分からないな……」

「あれ、あのダンサーって君たちの時代の人じゃなかった？」

チラツとドラえもんの未来知識がありつつ、黙々と通路を進む男たちを観察する。

すると、誰かに呼び止められたらしい男たちが立ち止まった。

何かを話し合っているようだ。

「ん？ この人の服装、なんか22世紀っぽいな」

「そうなの？ 確かにこの世界の中では浮いてるけど」

「全身ピツチリなのは確かに22世紀っぽいかも」

V字型の髪型のその男は酷く冷たい目で男たちと話している。

左の眉の近くについた十字の傷は、彼がそう言った世界で生きてきた住民であると示している。

逆再生を止めると、どうやらコボルトヴィオラスに関して言っているようだ。

『それが俺たちがくれてやったひみつ道具で作ったオモチャか。どんな出来かと思えば

子供じみた姿だな。22世紀の幼児が適当に新種植物製造機を弄ったほうがマシだな」

『……』

『言い返す勇氣もないようだな。所詮は紛い物の人間か』

十字傷の男の言葉は余りにもこの世界の命を軽視するものだった。

男たちの目も心なしか敵意が見える。

『お前たちがひみつ道具をどう使おうが勝手だが、夢を見るなら俺たちの関係ないところであれ。最近象の仮面を被った奴らが鬱陶しくてかなわんのだ』

暗に闇派閥イヴィルスのこれまでの失態を責める言葉に、男たちの苛立ちが目に見えて膨らんだ時、パンパンと手を叩く音に双方が振り返った。

『顔無し』……』

『耳の痛い話ですが、どうかその辺りで。彼らはこれからコボルトヴィオラスの試験と言う重要な役割があります。貴方様方にとっても成功したほうがいいでしょう？』

振り返った先にいたのは赤毛の男。

全身を黒で包むそのいでたちは、薄暗い通路では見失ってしまいそうだが、その男の持つ存在感ゆえか、タイムテレビ越しに見るのび太たちにも不吉なものを感じさせた。

『うるさい、知ったことか』

そんな赤毛の男に対しても、十字傷の男の態度は変わらなかつた。

『幹部だか何だか知らないが、所詮は紙の上の人間擬きだ。俺と対等ぶるな、身の程をわきまえろ』

『対等ぶっている気はないのですがねえ……』

『その態度が癪に障ると言っているのだ』

ギスギスとした空気だ。

こういつた雰囲気が苦手なのび太などは、うんざりした様子でモニターから目を離す。

「なんなのこのひとたち？」

「赤い髪の人は閻派閥で、傷がついている方がこの世界を荒らす元凶……だと思ふ」

「正確には元凶たちの一人だね。俺たちって言ってるし」

状況を見るに取引相手のようだが、その中は良好ではないようだ。

悪人と悪人なのだから当たり前かもしれないが。

「仲間なのに仲が悪いなんてヒーロー番組の敵の組織みたいだ」

「自分勝手な人たちだから、喧嘩ばかりしてるってことだろ。のび太君はこうなっちゃダメだよ」

その後もネチネチとしたやり取りが続く。

言葉が難しくして半分も理解できていないのび太が、この時ばかりはドラえもんも出木

杉も羨ましかった。

『もういい。時間の無駄だ』

『おやおや、そちらは忙しいようで。私はもつと話していたのですが仕方ありませんねえ』

十字傷の男が背を向けると、赤毛の男は肩をすくめ、馬鹿にするような口調で言った。それが気に入らなかつたのか、十字傷の男は表情を歪め、吐き捨てる。

『ほげげ、【顔無し】どころか【名無し】風情が……』

『……』

十字傷の男の捨て台詞に、赤毛の男の口が初めて止まる。

細目の表情からその内心は受け取れなかつたが、周りの人間の反応を見るに不味いのだろう。

『ひっ……』

『……さあ、行きなさい。また厄介なお客様方に捕まる前に、ね』

『し、失礼させていただきますっ！』

男たちはいそいそとコボルトヴィオラスを連れてその場を離れた。

決して、赤毛の男と目を合わせないように。

「……………( )までだね」



ドラえもんがタイムテレビの電源を切る。

そこでようやくやくのび太と出木杉は我に帰った。

「あの男が言っていたひみつ道具をくれてやったって言う話……そこに金銭が動いてるなら犯罪のはずだよ。ひみつ道具でお金儲けはダメだし」

「それじゃあ」

「証拠は見つけたってわけか」

自分たちに来ることは終わったらしい。

タイムテレビで見た悪い大人たちの会話に圧倒されていたせいで、ピンと来ないが。

ラジコン宇宙人に持たせたトレーサーバッチのおかげで、アジトの場所はバッチリ分かっている。

「もしかしたら余罪もあるかもね」

「なにそれ」

「他にも犯罪してるかもってこと。つまり、指名手配犯」

そう言つてドラえもんはタイム電話で妹のドラミと連絡を取った。

「これでドラミに今の人を調べてもらってる」

「指名手配されてたらタイムパトロールもすぐに来てくれるってワケか」

「……これで終わり？」

「釈然としないのは僕も同じだけど……これ以上出しゃばるのは危険だと思うよ。野比君」

そろそろ日も暮れてきたから【豊穰の女主人】に帰ろうとドラえもんが提案する。

のび太も出木杉も今日は疲れてしまったので、その提案に賛同する。

そうして帰る途中も、三人の頭の中にあつたのはあの二人の会話。特に赤毛の男が最後に見せた表情だった。

（十字傷の男は人間擬きと言っていたけど……）

最期に見せた無表情。

その奥に轟く悍ましい感情は、自分たちのものと遜色ない。

「何事もなく終わって欲しいね……」

ドラえもんの言葉が荒れ果てた風景に木霊する。

予感、などという非科学的モノを信じていない出木杉も、きつとこのまま終わってくれない。

そんな不安を感じずにはいれなかった。

## ヴイトーとの再会

心と言うものは不思議だ。

体の何処にもそんな名前の臓器はない。にもかかわらず、体の影響を大きく受ける。身を清めてスツキリすれば心も爽快になるし、逆に体が汚れていてムズかゆければ心も荒む。

冒険者となって数多の戦いを潜り抜けてからは、尚更そう感じるようになった。体が万全な時と、大きなダメージを負ってしまった時。明らかに心は違っていた。心の在りようと言うものは案外馬鹿にならない。

僕がザニスさんやあのミノタウロスを倒せたのは、勿論それまで積み重ねてきた身体能力ステイタスが大きいと思う。しかし、最後に勝敗を分けたのは心だ。

最後まで諦めず、前を見続けたからこそ、全力以上のモノを大一番で引き出せたのである。

そう、だからこの時も。

諦めなければきつと届くはずなのだ。

グギユルルルルル……

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……」

屍人ゾンビのようなうめき声を上げつつ、僕はオラリオの街を突き進む。

【豊穡の女主人】が存在する西区から【青の薬舗】がある北西区へ。

今世紀最大のピンチに見舞われているベルの救いの地は、最早それ以外にない。

胃薬でも下剤でもなんでもいいから薬を下さい。

大方の予想通り大惨事となったシルさん単体の料理。

舌に食材が当たった瞬間訪れる（あ、これ駄目だ）という直感。

全身が総毛立ち、本能が脳内で警告を点滅させる。

体は反射的に料理を吐き出そうとしたが、そこで見たのは邪気のないシルさんの

顔。

邪気なしであの怪物を生み出したことに戦慄しつつも、お祖父ちゃんからの英才教育せん

は女の子に恥をかかせてはならぬと意志に肉体を凌駕させた。

絶対に喉の奥に通してはならない酸っぱい味を喉で感じつつ、苦悶を懸命に表に出さ

ないように。

料理は得意なわけではなかったが、こうなつては四の五の言つてはいられない。

ノエルちゃんに料理を覚えさせるといふ名目で、シルさんの料理に介入していった。

幸いなことに、シルさんはあれこれ余計なことをして失敗するタイプだったようで、

変なオリジナリテイを出させなければ、修正自体は簡単だった。それをどう誘導するかは大変だった。

「おっつふ……」

時々意識が飛びつつも、僕はやり遂げた。

過剰な自己評価だが、呪詛<sup>カースウエボン</sup>装備に匹敵する劇物を、普通レベルにまで向上させたことは偉業にカウントされてもいいのではないかと思っている。

そんなこんなでノエルちゃんの胃と、二人の笑顔を守ることが出来た僕。

これでめでたしめでたしとなって欲しかったが、現実は厳しい。

最初の毒が胃袋に入ったところから意図的に逸らしていた違和感。

お腹にずっしりと溜まる不吉な気配。

ぶっちゃけ腹を下した。

「お腹、痛い痛い……」

腹の中に蛙を飼ってしまったのではないかと思うほどに荒れ狂う音。

どンドンその音が水つぽくなってる気がする。

二人には何とかバレずに済んだが、【豊穡の女主人】を出た瞬間から前かがみになって歩いている。

通行人が不審者を見る目で僕を見るが気にしない。気にしてる余裕がない。

「(おひい)……」

歩く振動で限界が早まる気がする。

馬車を使いたいけど、でもなんか気を抜いたら即アウトな予感。

【青の薬舗】までの道のりの遠さに頭が真っ白になりつつ、ふらふらと前に進んだ。

「ゼエツ、ゼエツ……」

息を切らしながらもようやく【青の薬舗】の姿を確認する。

あと一息。意識が半分ほど剥がれかけながらも、自分を奮い立たせていた時。

ある人物の姿が視界に入った。

(ヴィトーさん……?)

パシヤリ、とカメラを使って周りの風景を撮っている赤毛の彼。

予想外のタイミングで再会を約束した人を見つけてしまった。

今、お腹痛いの。

「……おや？」

(見つかっちゃった……)

ひみつ道具に似たアイテムの在り処を探りたいとは思っていたが、神様たち風に言う

なら時機タイミンが悪い。

この状態でまともに会話が出来る気がしないのだ。

「これはこれは……予想外に早い再会でしたねえ」

「お、お久しぶりです……」

無視をするのも失礼だと、返事を返す。

なんとか早めに話を切り上げねば。

「先日のアイテムの件、先方に問い合わせた所、時間を空けてくださるとの事でした」

「ありがとうございます」

「貴方様は今のオラリオでは最も有名な冒険者の一人ですからねえ。今のうちに接点を作っておきたいとの事です」

仕事上の取引相手だという人の思惑についてヴィトーさんが話してくれているが、正直今はどうでもいい。

早く終わって。

「それで、先方に空いている時間を問い合わせて見ましたら、この日にちが……」

ここからそれなりの時間を話した気がするが、記憶があやふやだ。

頭の中は薬トイレ薬トイレ薬トイレ……だったし。

「……では一週間後の午後はこちらで」

そう言つて手渡される簡素な地図。

予定の日時を聞き取れたことは奇跡だったと思う。

「分かりました」

「姿は黒ずくめの出で立ちですし、おそらく一目で分かるかと」

「そうですね」

「……？」

やばい。流石に一言だけで会話するのは無理があつた。

完全に怪しまれているが、もう頭の中がぐちゃぐちゃで考えてる余裕がない。

アイテムを彼に渡した人と会う日にちも確認したことだし、一旦ここで話を打ち切ろう。

まだお腹は間に合うはず……

「そうそう、そう言えば貴方様のお耳に入れておきたいことが……」

(え、まだ続くの?)

てつきり話を終わられると思つていた僕は、まだ終わりそうにない話に気が遠くなる。

もうじき終わると思つていたから完全に油断していた。

トイレに入ろうとしたら、ただいま清掃中の看板があつたみたいない気分だ。

「ええ、実は先方は気の難しい方でして……商談前に少しでも気に入られたほうがよろしいかと」



「き、気に入られる?」

「はい。お土産といたしますか。今後よろしくしていきたいとお伝えできれば、非常に良好な関係で取引を開始できると思いますよ」

(つまりどういうことなのか簡潔に話してほしい)

この前会ったときは気にならなかつたけれど、この人の話は回りくどい。

いや、人の話し方にケチをつけるのは良くないけど、今この瞬間は勘弁してほしいかっ  
た。

「要は、手ぶらではなく、先方が気に入って下さるものを持って行くとよろしいですよ  
言う話です」

「はあ……」

まあ、それはそうだろう。

これから会う人は別に友達と言うワケでもないし、こちらはお願ひする立場だから何かを持参するのは当ぜ、あつ、ちよつとこれヤバイ。お腹がキュルル……つと締め付けられ始めた。

「ところが先方は少々自尊心が強いと言いますか、気に入らないものを渡されて機嫌を損ねる可能性もあるわけでした」

結論を言ってください。

口には出なかったけど、そんな言葉が脳裏を過った。

「私も初めの頃は苦労しましてねえ。ドルマンスタインさん……おつと、先方の名前で。彼は基本的には自分たちの利益優先、という方なので。利にならないと分かれれば即座に話を打ち切られてしまうでしょう。そこで、これまでドルマンスタインさん相手に交渉を行ってきた私が、彼に気に入っていただけのお土産を選んで差し上げようかと。勿論、お金などはいりませんとも！ 私が欲しいのはあくまでも貴方様との信頼関係でして……」

(あ、もう無理)

脳がいよいよ最大級の警報を発する。

このまま話を聞いていたら僕は死ぬ。社会的に。

(ごめんよあの日のゴ布林……)

思い浮かぶのはお尻印のきびだんごを食べたゴ布林。

彼の全てを解放する前の絶望的表情がちらつく。

因果応報と言うならばまさに今がそうなのだろう。

しかし、その罰を甘んじて受けるわけには行かない。己の尊厳は己自身の手で守り抜かねばならないのだ。

「ゴメンナサイツ用事があるので失礼シマスッ!!」



ベル・クラネルを相手取る上で、今最も邪魔なのは「ガネーシャ・ファミリア」である。

あの正義の使徒たちと引き離すために、彼に違法行為を働かせることで自ら距離を取っていたかどうかと考えたのだが、見事に失敗してしまった。

（押しに弱い彼の性格ならば行けると踏んだのですが……予想通りにはならないものです）

ここで彼を犯罪行為で貶めておけば。

「ガネーシャ・ファミリア」による守護が解かれるのは勿論、この先彼が育む人間関係にも致命的な影響があると考えていたのだが、アテが外れてしまった。

前科者ならば第一印象も大きく異なると思ったのだが。

ベル・クラネルの厄介な点は、その成長速度もそうだが、物語を通して様々な人<sup>キャラクター</sup>たちと育まれる絆にこそあるとヴィトーは見ている。

自分だけではなく、他の人<sup>キャラクター</sup>物までも成長させるあの特性は唯一無二のものだ。

「過ぎたことを気にし続けていても仕方ありませんね。一週間後の約束を取り付けただけで良しとしますか」

ベル・クラネルは一週間後、ダイダロス通りにやって来る。

そこを狙い打てばいい。「ガネーシャ・ファミリア」の護衛も来るだろうが、関係はな

い。

あそこは入ってしまえば脱出は極めて困難。

戦えばこちらに分がある。

爬虫類のような瞳で【青の薬舗】を……そこに入ったベル・クラネルを見据える。

物語は多少なりとも変化しているとはいえ、まだ想定内。最早逃がさない。

(彼らの内の一人が妙なことをしているのは気になりますが……放っておきましょう)

彼らと自分の目的は違う。

彼らはこの世界を隠れ蓑に、悪巧みをしているようだが、その目的には何の興味もわかない。

ひみつ道具を融通してくれる以上、最低限の協力はするが後はどうぞご勝手にとしか思えなかった。

故に彼らの内の一人が、他の二人とは違う思惑があったとしても、ヴィトーにはそれをどうこうする気はない。

彼らの目的のうちの一つがこの世界に来ているらしきことも、言う必要はないだろう。

(物語の住民を軽く見過ぎですね。この世界における情報網はこちらの方が上だというのに)

如何にひみつ道具と言えども、全てを知ることは出来ない。

できるものがあつたとしても、それを使うのはあくまでも全知には程遠い人間ならば限界はある。

ならば内心どう思っているにしても、協力し合うべきとは思うが、向こうにその気はないようだ。

そしてそれ以前にヴィトーも、闇派閥幹部としても、個人としても彼らは好きではない。こちらから歩み寄る気にはなれなかった。

「さてはて残りは一週間。それまでの何とか完成させなくては」  
望ましい展開になつてきてはいるが、本来の予定を大幅に前倒ししてしまっている。

ここからは大急ぎで『アレ』を完成させなければならぬだろう。  
空を仰ぎ見てヴィトーは嗤う。

空は嫌いだった。

不完全な世界で、己のような歪みを産み出した神々が、あの軽薄なニヤケ顔で自分を見下ろしていると考えると、届かぬ殺意に身を焦がしたのもだ。

しかし、それも全ては過去の話。

箱庭を見下ろすと言う設定の神々の姿など、最早滑稽でしかない。

今なら空が好きになれそうだ。

(嗚呼、樂しみです)

世界は終わる。

三大クエストの失敗でも、オラリオの崩壊でも、ダンジョンの限界でもなく、  
ヴィトーの怒りがその滅びを具現化するのだ。

この世界を徹底的に扱き下ろし、英雄たちの祈りを侮辱する怪物。

最後の英雄に泥を塗る、最悪のモンスターの生誕の時は近い。

この物語は最悪の形で汚されるだろう。

それを前に、彼は何を思うのだろうか。

そんな思考が過ぎ去り、その前に死んでいますね、とその感傷を否定した。

「さあ、努めましょう。最悪の終焉<sup>おわり</sup>を迎えるために」

時折声が聞こえる【青の薬舗】を舐めるように見つめる。

ヴィトーは笑みを深めながら、ポラロイドインスタントミニチュアせいぞろいカメラの  
シャッターを切った。

## もういない大好きな人たち

「ひ、酷い目にあつた……」

げっそりとした様子で「青の薬舗」の机に突つ伏すべし。

トイレで財布を無くしたことに気が付いた時は、もう（社会的に）死んでもいいかな……と自暴自棄になっていたが、のび太が財布を届けに来てくれたことで何とか助かった。

「でもよく僕の場合が分かつたね」

のび太が財布を見つけた「豊穰の女主人」から、「青の薬舗」まではそれなりに距離がある。

人ごみの多いオラリオで、特定の人物を探すのはかなり骨が折れるはずだが、のび太が「青の薬舗」に来たのは、財布を無くしたのに気が付いてから僅か数分のことだった。  
モンスターライオン  
怪物 祭でシルを探した際にその大変さを身をもって実感したべしは、のび太の余りにも早い発見に疑問を持つ。

それに対して、のび太はあるひみつ道具を取り出して答えた。

そのひみつ道具はボタンが付いた箱に、矢印型のパーツが取り付けてあるという非常



に簡素な作りのモノだ。

「この【人探し機】を使ったからだよ」

「ドラえもんさんのひみつ道具?」

「うん。これを使えば簡単に探している人を見つけしてくれるんだ」

矢印の示す方向を探せばいいのですごく楽なんだとか。

(たずね人ステッキよりも使いやすそうだ)

前にシルを探していた時にこっちのひみつ道具が使えれば、早めにシルを見つけだしてモンスターに遭遇せずにいれたのかもしれない。

【四 次元衣囊】はランダムでスロットが埋まるスキルなので、文句を言っていて

も仕方がないが。

「だけど一人で来て大丈夫? 今のオラリオは物騒なんだよ? この前だって変なモンスターに襲われたばかりでしょ」

「大丈夫、大丈夫」

そう言つてのび太はもう一つのひみつ道具を見せた。

黄色いプロペラ状のひみつ道具はベルにも見覚えがあるものだった。

「あ、タケコプター」

「あれ? 前に見せてたっけ」

「ううん。僕のスキルで出したことがあるだけだよ」

空を飛んでいれば襲われないだろうという考えらしい。

オラリオ周辺には飛行するモンスターはいないから、確かに危険は少ないだろう。

……近くの山脈とかには普通に生息している飛行型モンスターが何故いないかと言え、オラリオの冒険者が撃ち落とすから。つまり、のび太も誤認されていれば

……

「……のび太君。飛んでくるとき人目に映らないようにした？」

「え、なんで？」

「今度からは石ころ帽子も一緒に使つてね」

平和な世界から来たからだろうか。

どうものび太は危機感と言うか、警戒心が薄い気がするよとベルは感じた。

空を飛べない人たちが空を飛ぶ人間を見たら混乱するモノなのだ。

普段から空を飛んでいるとそう言った感覚が希薄なのかもしれない。

これが異世界の文化的差異カルチャーショックと言う奴なのだろう。

「……日も暮れてきたし、そろそろ帰ろうか。【豊穰の女主人】まで送っていくよ」

「え、僕タケコプター使うから……」

「送っていくよ。今度こそ騒ぎになるかもしれないから」

ナアーザに礼を言つて「青の薬舗」を出る。

因みにベルの腹痛に対する薬はなかった。

腹痛はシルの料理のあまりの不味さに、毒を飲み込んだと錯覚した体の過剰反応が原因だったらしい。あの人のメシマズ……もとい、毒創的料理（誤字に非ず）はどこに向かおうとしているのか。

北西のメインストリートは冒険者を対象にした店が多い。

冒険者がダンジョンから帰還する時間と重なり、今はかなり人通りが多い。

逸れないようにベルとのび太は手を繋いだ。

「こっちの世界も夕焼けは赤いねえ」

「のび太君たちの世界でもそうなの？」

「うん。このくらいの時間になるとみんな慌てて帰るの。6時くらいになると怒られるから」

「僕のお祖父ちゃんはその辺りは緩い人だったな。むしろあの人のの方が遊び惚けていたような……」

夕陽を見ると故郷を思い出すという冒険者は多い。

広い世界でも、あの空の光景は変わらないのだろうか。

確かに、ベルも夕焼けの向こうに、手を繋ぐ幼い自分と祖父の姿を幻視することがあ

る。

しんみりとした空気が二人の間に流れる。

異世界人同士でありながら、同じ夕焼けの感慨を共有したことで口が軽くなったのか、普段ならあまり話さない会話をしたくなった。

「そう言えば、ベルのお祖父ちゃんってどんな人なの？」

「変な人だったよ。子供だった僕より楽しそうに遊ぶし、女の人が好きであつちこつちにちよつかい出してたし、妙なことを一杯知ってる人だった」

世の中の祖父と言うのはみんなあんなものだと思っていたが、ヘステイアやリリの反応からして、ベルの祖父はかなりぶつ飛んだ人物だったようだと言分かった。

確かに、孫に夕日に向かって『男だったらハーレムだー！』と叫ばせる英才教育は口ツクだったと今は思う。

「のび太君のお家はお祖父ちゃんやお祖母ちゃんは元気？」

「……ママの方の祖母はまだ元気だけど、他は死んじゃってる」

「そっか……」

それは大変だっただろうとベルは思った。

14歳の自分でも祖父との別れは堪えた。今よりもっと幼かったであろうのび太の悲しみはどれだけ深かっただろうか。

「お祖母ちゃんは凄く優しい優しくて……いつもみんなに怒られてばかりの僕の味方をしてくれたんだ」

「……」

「お祖父ちゃんは僕が生まれた時にはもういなかったけれど、過去にいった時に僕が孫だつてこと信じてくれて、とつても親切にしてくれた」

「素敵なお祖父ちゃんとお祖母ちゃんだね」

「うん！」

強いな、とのび太の笑顔を見てベルは思った。

影を感じさせない笑みは、彼がその死と折り合いをつけている証拠だ。

（前はドラえもんさんとの冒険ばかりに注目していたけど……いろんな所で見えたのび太君の優しさの原点はそのお祖母ちゃんなのかな）

どんな人だったのだろうか。

祖父しか知らない自分ではよく分からないが……出会ってみたかったな、と思う。

きつと素晴らしい人たちなんだろう。

「……僕がオラリオに来たのはお祖父ちゃんとの繋がりを覚えておくためだったと思う。あの人が何度も話したこの迷宮都市に僕は家族を求めたんだ」

「お祖父ちゃんが言ってたんだよね。オラリオなら英雄になれるって」

「うん。覚悟があれば、だけどね」

「あと『はれむ?』もつくれるとかなんとか」

「そつちの方の夢は忘れておいてください……」

夕焼けの中で笑い合う。

何でもない日常を噛み締めるように、二人は道を進んだ。

やがて、二人の間に口数も減っていく。今は亡き人たちを思い出して湿っぽくなってしまうたのかもしれない。

だが、居心地は悪くなかったとベルは思っている。

「……あのさ」

「なに?」

「ベルは……寂しくなかった?」

「え?」

「僕はお祖母ちゃんが死んじやった時は悲しくて悲しくて……今でも寂しいって思っちゃう。でも僕にはまだ家族がいる。もう一人のお祖母ちゃんはまだ生きてるし、ママやパパはまだ生きてる。ドラえもんだっている。だから、僕は一人じゃないんだ」

けど、ベルは違う。

そうのび太は言葉を続けた。

「ベルはお祖父ちゃんがいなくなつて一人になつちやつたんだよね。それは……寂しくないの？」

のび太にとっては恐ろしいもしもの話。

もしも、家族がみんな死んでしまつたら。

まだまだ親に甘える年の少年にとって、家族の存在は大きい。だから思うのだろう。

唯一の肉親である祖父を失つたベルは大丈夫なのかと。

「……ありがとう。心配してくれて」

祖父がいなくなったことによる喪失感。

それは未だに胸の中でくすぶり続けているのだろう。

オラリオに來た理由である祖父との繋がりも、マイナスな見方をすれば、ベルが吹っ

切れていない証拠だ。

この都市に來る決意する前に、ベルと出会つていたのび太にはベルの心の傷が一層深

い物に写つていたのかもしれない。

「……まだまだ寂しいと思う事はあるよ。お祖父ちゃんが亡くなつて、ようやく二カ月

経つかどうかだもの」

ふとした瞬間に心が陰ることがある。

その度にあの好々爺が、自分の心の深くにいたのだと自覚できた。

「でも、のび太君は一つだけ間違っているよ」

「間違い？」

「僕が一人ぼっちだつてこと」

この都市に来てから多くの出会いがあった。

ヘステイアから始まって、本当に多くの人に助けられた。

辛いことも、苦しいことも一杯あったが、そんな風にベルを支えてくれた人たちのおかげで何とか一人の冒険者として立っている。

「たった二カ月程度なのに、とても大切に思える繋がりがたくさんある。だから……寂しくないよ」

今、ベルがこんな晴れやかな気持ちで祖父を語れたのはきつとみんなのおかげだ。

空っぽになった心に、注ぎ込まれた温かい絆。

まだ一人しかない「ファミリア」だけど、びっくりするくらい多くの人と繋がっている。

「僕はね、のび太君たちに感謝してるんだ」

「なんで？」

「僕がオラリオに行こうって決めることができた最後のきつかけは君たちだったから」

ドラえもんとのおび太の大冒険。



それに対する憧憬が、沈んでいた心を熱くさせてくれた。【四次元衣囊】フオーズ・ディメンション・ポーチという言葉の発現させるほどに。

もしも彼らに出会わなければ、自分はずっとあの村で沈んだ気持ちでいたのかもしれない。

だから、ベルはずっと伝えたかったのだ。君たちに会えたおかげで僕は何とかやれるよ、と。

「そんなことないよ。ベルは僕たちと出会わなくてもオラリオに行つてたし」

「それでも、この感謝は本だから。受け取つて欲しいな」

のび太読者が言うのならば、ベルが祖父の死を乗り越えてオラリオに来ることは既定路線だったのかもしれない。

それでも、あの日の出会いに何度も救われてきた。この心は絶対に嘘じゃないから。

真つ直ぐとそう告げると、のび太はくすぐつたように目を細め、顔を背けた。

耳元が真つ赤に見えるのは、きつと夕陽のせい。

のび太は誤魔化すように言葉を出した。

「……そう言えば、僕たち、ヘステイアとちゃんと話したことないよな」

「あれ、そうだっけ? ……あ、そっか、あの時は色々バタバタしちゃつてたから」

「うん。なんだか今の話を聞いてちゃんと話したくなつちやつた」

「そうだね。僕も君たちの話をみんなに聞いてほしいし、神様のことを君たちに知って欲しい。凄く、素敵な神様なんだ」

そう言えば何度か夢想したことがある。

もしもドラえもんやのび太が自分の大切な人たちと出会ったら。

それが叶っていたのかと嬉しく思い、夕陽に照らされたベルの口元は小さく笑みを浮かべた。

ヘステイアだけではない。

リリやヴェルフ、エイナと言った今までお世話になった人たちに知ってほしい。

この子たちは凄いのだと。

僕の心の英雄なのだと。

(……)

その時、ふと、かねてから持っていた考えがベルの中を過る。

誰よりも、何よりもあの子に会って欲しい。

のび太たちには迷惑をかけてしまうかもしれないけれど、この世界の外側の存在である子供たちなら、偏見なくあの子に出会えるだろう。

会える人間がベルやヘステイアしかいないのは寂しいだろうから。

迷いは少しだけあった。

外の世界の人間と言つても、のび太たちを見る限り、ベルは自分たちと心は大きく変わらな<sup>い</sup>と思つてゐる。

怪物モンスターに対する嫌悪感も、同じ様を持つてるかもしれないのだ。

それでも、多くの種族と冒険の中で心を通わせた少年を信じることにした。

「……もし、もしよかつたら、神様と会うときにもう一人紹介したいんだ」

「誰？ リリ？ ベルフ？」

「ベルフじゃなくてヴェルフだよ」

「名前が似すぎなんだい」

「ご、ごめん？」

夕焼けの赤が濃くなり、遠くに見える街の影が揺らめいている。

そろそろ急いだほうがいいだろうと二人の足も早まった。

「それで……あつて欲しいのは人間じゃないんだ」

「人間じゃない？ えるふとかどわーふ？」

「えつと、そうじゃなくて……なんて言えばいいのかな……」

つい、遠回しな表現をしてしまい眉を下げて唸るベル。

モンスターが人類の敵なのはのび太も知っているだろう。だから、あまり混乱させたくない……いや、単にベルにしっかりと伝える度胸が無かつただけだ。

落ち着いて、深呼吸を一度する。

(うん、大丈夫)

心臓が嫌な鼓動を奏でているが、言うど決めたのならはつきりしろとベルは自分を奮い立たせた。

小さく手招きをして顔をのび太の耳元に近づけた。

のび太も大きな声で言えない内容だと理解してくれたのか、聞き取る意志を見せる。

「ヴィオラスってモンスターに会って欲しいんだ」

雑多な人ごみの音に紛れて、のび太にしか聞き取れなかったであろう小さな声。のび太はぱちくりと目を瞬かせた。

## 時空の歪み

【豊穰の女主人】で住み込みで働くのび太たち。

その業務内容は当然ながら、子どもにこなせる程度の物だ。

暴君が如く酒場に君臨するミアだが、線引きはしっかりしている。

のび太たちが仕事をするのは精々1〜2時間で、人が混んで殺人的仕事量になる時間帯は避けられていた。

ファルナ 恩恵を持たない普通の子どもが潰れないように配慮された勤務は、大人たちからすれば簡単な仕事だ。とは言え、体力のない子どもたちにしてみれば、目が回る様な忙しさであることには変わらない。

「グウ……」

「スヤ……」

のび太と出木杉は泥のように眠っている。

まるで野球の試合に参加した時のように、体から湧き出る眠気に身を任せただ。

【豊穰の女主人】の二階の一室で、子どもたちは一つにまとまって雑魚寝していた。

「……」

ゲシゲシと寝相の悪いのび太に蹴られながら、ドラえもんは窓から見える月を見た。オラリオの気候が日本の四季に沿うかは分からないが、今は本来、春や夏に近い時期らしい。時々降る雪は季節外れの異常気象だとみんながそれぞれ言っている。

春や夏は空気中の埃やら湿度やらで、ぼんやりとした月になりがちなのだが、よほど空気が澄んでいるのか、溜息が出るほど美しい。

しかし、そんな景色を見てもドラえもんの不安が晴れることは無かった。

むしろ、月の光りに目が刺激されて、眠りから遠ざかってしまったかもしれない。

そり、と音を立てずに布団から抜け出し、窓を開けた。

「……行こう」

ドラえもんはロボットだ。

高性能故に疲れや眠気こそ感じるものの、人間と比べたら無茶も効く。

一日くらい夜更かしをしたところで支障はないだろう。

そう判断したドラえもんはタケコプターを装着して、窓から外に抜け出した。

世界の中心と言われるだけあって、子どもたちが寝静まる時間帯でも街の光が消えることは無い。南東の方向はむしろ昼間より活気立っているかもしれない。

「なるほどあつちが娯館がある方か。のび太君たちを近づけないようにしないと」

そんなことを考えながら、ドラえもんは四次元ポケットを弄る。

こつちだつたけ、あれ違つたつけ、と四次元空間の中のひみつ道具たちをひっくり返し、目当てのモノを見つけた。

「あつたあつた……タイムセンサー」

棒型のひみつ道具の名は「タイムセンサー」。

超空間に生まれる異常な波を検知するひみつ道具だ。

この世界にはどうやらひみつ道具を闇派閥イヴァイルスに渡している存在がいるらしい。

その情報を聞いた際に、真つ先に気になつたのは時間を操作できるひみつ道具はあるのかという事だ。

ダンまち世界はのほほんとした題名に反して、中々血みどろな歴史を歩んでいる。

一歩間違えれば世界の終わり、という事がいくつもあつた世界なのだ。

そんな綱渡りを時間を渡つた悪党に壊されれば、一気に世界は崩壊する。

歴史を変えることは簡単ではないが、正しい手順を通せば可能なのだ。

「ベル君に聞いた限りは、タイムマシンみたいなマジックアイテムは無い筈だ。つまり、この世界で時空の歪みを発生させられるのは、ひみつ道具を使ったときくらいのはず」

反応が無かつたらそれでいい。最悪の手札が闇派閥イヴァイルスに渡つていないという事だ。

もしも反応があつたのなら……敵の懐に一気に近づけるかもしれない。

「今のオラリオの偉い人たちが子供の時に暗殺されたりしたら大問題だ。早めに見つけ





タイムセンサーが反応を示しているのは裏通り、さらにその地下だ。

歓楽街の経営者がこれを把握しているかどうかは不明だが、この辺りがひみつ道具を使う何者かのテリトリーになっているのはほぼ間違いない。

「でも変だなあ？　こんなに時間を行き来することなんてあるかな」

タイムスリップをしたのはほぼ確実だが、その回数が異常だ。

一回のタイムスリップだけで多くの物事を改変できる。数回やれば本来の流れとは全く別物だ。

それを念頭に考える。タイムセンサーの測定した数値からしてこの辺りでタイムマシンが使われたと思われる回数は17回。やけくそかと思えるほどの回数だ。

いったい何を改変するのにそんなに時間を使ったのか……

(それなのに状況は未だに都市側有利。本当に改変をしたんだろうか。まるで、タイムスリップしておいてなにもしていないような……)

いやいや、そんな馬鹿などドラえもんは首を振った。

タイムスリップをしておいて何も改変しない？　ならば元凶は何を考えているのか。

まさか17回も観光をしたわけでもあるまい。こんな見る場所もなさそうな路地裏で。

(歴史改変が狙いじゃないとしたらどんな目的が……こんな何も無い場所にわざわざ1

7回も足を運ぶなんて……)

何か特別な場所なのかと辺りを確認して回るが、分かったことは特に何も無い路地裏であるという事だけ。

特別な仕掛けがあるわけじゃないし、隠れ家的な店があるわけでもない。

地図に乗せるにしても大きな通りから外れた、グニヤグニヤした細い道の一部としてしか映らず、人目に触れても次の瞬間には忘れられるだろう。

もしも、超時空の異常が見られなければ、ドラえもんもここに來ることは絶対になかった。

「……」

ふと、思考が跳んだ。

自分は今、何を考えた？ とドラえもんは青ざめる。

超時空の歪みが無ければ、こんなところに来ていない。

それは逆説的に言うくと、超時空が観測できる者ならばここを無視はできないという事ではないか。例えば、ひみつ道具を使えるドラえもんはその条件に当て嵌ってしまふ。

(まさか、誘い出された!?)

機械の体がヒヤリと背筋が凍る感触を覚えた。

相手側に自分の存在を感知されていないつもりだったが、向こうは既に自分たちに気

が付いていたのか。

己の迂闊を呪いつつも、咄嗟に護身用の武器を構えた。

「名刀電光丸」

近接戦において最強のひみつ道具を取り出す。

これが罠だとしたら、一瞬も油断できない。

辺りを警戒していたドラえもんは、チリツと首筋に視線を感じ、弾かれるように上を見た。

月を背に、建物の屋上に立っていたのは全身をロープで隠した人物。

たまたま紛れ込んだ通行人、などと樂觀視できるほどドラえもんの頭はおめでたくなかった。

「ドラえもん……?」

「ぼ、僕の名前を知っているのか!」

ぼそり、とロープの人物が零した呟きをドラえもんの耳は敏感に察知する。

故障しているとはいえ、猫型ロボットの高感度音波測定イヤーは誤魔化せない。

謎の人物に一方的に名前が知られているという状況に動揺を感じつつも、ドラえもんは目を吊り上げた。

この人物こそひみつ道具を横流ししている人物に違いない。そう断定し、名刀電光丸

の切っ先を向ける。

「ま、待て！…話を……」

「そうやって騙そうとしたってそうはいかないぞ！」

この漫画の世界でひみつ道具を使える人間は二種類。

スキルの力で反則的に具現化できるベルと、外からひみつ道具を持ち込んだ人物だけだ。

ドラえもん existence を知っていた以上、間違いなくローブの人物は外から来た存在。

「お前と戦う気はない！…話を……」

「話なんかしないぞ！…ひみつ道具を悪い奴らに渡してる奴なんか信用できない！」

おかしなことをされる前に相手を無力化する。

そう判断したドラえもんは跳躍し、名刀電光丸を叩きつける。

このひみつ道具なら殺してしまうことは無い。捕まえてから話を聞きだせばいい。

犯罪者相手に呑気にしていたら自分がやられる。

「くそっ！！」

名刀電光丸の刃を受け止めたのは、細長い剣身。

日本刀のような和風のデザインである名刀電光丸とは違い、中世の海賊が使うようなサーベル型のそのひみつ道具にドラえもんは焦りを見せる。

「ライトニングボルトサーベル……!」

名刀電光丸と同じ、装備者に無双の剣技を身に付けさせるひみつ道具。

唾競り合う両者は互角。夜の闇に火花が散る中、ドラえもんは名刀電光丸を右手のみで持ち、左手を四次元ポケットの中に突っ込んだ。

全自動で戦う名刀電光丸とライトニングボルトサーベルの戦いは千日手。

決着が付くことは無いだろう。そんな戦いに勝つにはどうすべきか。

全自動ではない部分で勝利するしかないのだ。

「くうき砲〜」

「くっ!?!」

即座にそのことを理解したドラえもんの行動は早かった。

くうき砲による息もつかせぬ連撃を食らわせ、ローブの人物の次手を封じる。

そのまま名刀電光丸とくうき砲による連続攻撃で押し切ろうとするが。

「オラアツツ!!」

「あっ!?!」

咄嗟にくうき砲を蹴り上げられ、衝撃でくうき砲は左腕からすっぽ抜けてしまう。凄まじい身体能力だ。

カランコロンと甲高い音を立てて空気砲が転がる中、ローブの人物は名刀電光丸をラ

イトニングボルトサーベルで押し込みつつ、言葉が続けた。

「頼む！ 俺を信じてくれ！」

「ローブで顔を隠すような相手を信用できるもんか」

「こ、これは俺の顔がこの世界だと混乱のもとになるからだ！ お前こそ、なんで顔を隠さねえ!? この世界でロボットが人間に見つかったら大騒ぎだぞ!」

名刀電光丸とライトニングボルトサーベルは派手に斬り合っているが、決着はつきそうにない。

それに焦りを見せたドラえもんだったが、同時に違和感も覚えていた。

ローブの人物が動かなすぎる。

ドラえもんからくうき砲が離れた今がチャンスなのに、追撃が無い。

追加のひみつ道具を使おうともしない。

(本当に話し合いが出来る人……?)

絶え間ない剣戟の中でドラえもんは目の前の人物をよく観察する。

ライトニングボルトサーベルを振るう際の安定した体感から、かなり動ける人物のようだ。

戦いの素人と言ったようには見えない。

そんな人物が勝機を理解していないとは思えない。

それを手放してまで、何を話し合おうというのか。

「そこで何をしてやがる！」

その時、褐色の肌の女性を先頭に、何人かの冒険者がやって来た。

その一段のリーダー格の女性は世界特有の種族であるアマゾネスだ。

「ガネーシャ・ファミリア」か……」

ローブの人物の言葉にベルが事前にしていた説明を思い出す。

オラリオのファミリアは9段階の等級で数えられる。

「ヘスティア・ファミリア」は底辺からようやく抜け出せたHの評価なんだとか。

では、最も高い等級のファミリアは何処かと聞いたところ、S評価のファミリアはオ

ラリオに3つあるらしい。

ダンジョン攻略の最前線である「ロキ・ファミリア」。

戦士たちの箱庭である「フレイヤ・ファミリア」。

そして、都市の憲兵である「ガネーシャ・ファミリア」。

(あの人たちは都市でも有数のファミリア！)

ひみつ道具は確かに強力だが、この拮抗した状況で多勢に無勢ならばどうしようもない。

先日、化け物じみた身体能力を見せたベルですら、この都市の中ではレベル2と言う

ありふれた冒険者でしかないのだと言う。

「ガネーシャ・ファミリア」ならば、ひみつ道具相手でもうまく立ち回ることが出来るはずだ。

「あー……これは無理か」

ローブの人物も同じ結論に至ったのか、脱力気味に呟いた。

「どの道、ドラえもんが気づいている以上、タイムパトロールが来るのは時間の問題。ならいいか」

「……？」

いやにあつさり諦めるものだどドラえもんは訝しんだ。

犯罪者が憲兵に見つかつたというのに、特に動揺した様子が無い。

それどころか、タイムパトロールの介入を良しとしているかのような言動をしている。

「君は何を考えているんだい……こつちを誘い込んだくせに、さつきから守りに徹して」  
狙いが見えない。

まるで態と捕まりたがっているようなふるまいだ。

なにより、何故ドラえもんを見て動揺していたのか。

「ひよつとして、君は僕が知っている人物なのかい？」



ドラえもんの問いかけにローブの人物は無言だった。

それははぐらかさそうとしたり、もったいぶっているからではなく、躊躇しているが故だろうか。

まるで、いたずらをしていた子どもが親に正直に話して怒られるのを怖がっているよ  
うな、そんな感覚を教育ロボットであるドラえもんは抱いた。

「俺、は」

やがて覚悟を決めたように何かを喋り出そうとしたローブの人物。

対話をする気かと罅迫り合いをしている手の力を緩めた時、ローブの人物の剣圧が強  
まった。

「ぐっ……!?!」

「なっ……!?!」

互角だった膠着状態から一転。

ずるずると押されていくドラえもん。

(騙したのかっ! ……え?)

ドラえもんはローブの人物を睨みつけるが、ローブの人物の狼狽えように疑問を持つ  
た。

まるで剣を押し込んでいるローブの人物自身、予想外とも言うかの如き反応だ。

ギインツ、と名刀電光丸が弾かれる。

衝撃でたたらを踏みながら、ドラえもんは体のバランスを崩さないように必死だった。

「おい！ 【ガネーシャ・ファミリア】だ！ 戦いを止めろ！」

「い、今の俺に近づくな！」

【ガネーシャ・ファミリア】の団員が戦いに割って入るが、ローブの人物はライトニングボルトサーベルに振り回されるように暴れ続ける。

止む得ず名刀電光丸で応戦するが……

「な、なんで押されるんだ!？」

先ほどまでとは違い、ドラえもんは劣勢だった。

確かに名刀電光丸は強力なひみつ道具だが、無敵ではない。

剣の達人には負けてしまうこともある。

しかし、ローブの人物が使っているのはライトニングボルトサーベル。

名刀電光丸とは自動戦闘オートバトルと言う、同じ特性を持った武器であり、同党の戦闘力となる以上、決着はつかなかったはずだ。

にも拘わらず、更に言うなら、押されているドラえもんを庇って【ガネーシャ・ファミリア】という $\alpha$ の援護があるにも拘らず、圧倒されている。

(どうなっているんだ！)

あまりに理不尽な展開に叫びそうになるドラえもん。

対話できそうな相手とは対話できず、戦いでは互角なはずなのに押されている。

この場の誰もが混乱する中、新たな勢力が乱入する。

「お困りの様ですねぇ」

「……ヴィトー!!」

「大事な大事な取引相手様のお仲間の危機……勿論、見捨てませんとも。ええ、貴方が望んでいなくとも」

タイムテレビに出てきた闇派閥の幹部が登場してきたことに、いよいよ焦りを隠せなくなるドラえもん。

ローブの人物はこの援護を歓迎していないようだが、そんなことはお構いなしな様子だ。

つまり、危機的状況は変わらない。

(この不自然な状況もひみつ道具によるもの……っ!?)

名刀電光丸とライトニングボルトサーベルは互角。

ならば、それ以外の戦力で勝負が決まるとドラえもんも考えていた。

あの赤毛の男がひみつ道具でローブの人物の戦いを援護きょうせいしているとすれば。

さきほどから感じていた理不尽に説明が付く。

「ガネーシャ・ファミア」が来てしまったことは予想外でしたが……好都合です。ここでレベル5の一角にはご退場願いますようか。ねえ、イルタさん？」

「この狐面が……っ！」

配下を連れて、屋根から飛び降りる闇派閥イッイルスの幹部。

戦場はより混沌を極めようとしていた。

## 起死回生の切り札はお前だ（震え声）！

ヴィトーに率いられた閩派閥イウイルスの動きは狡猾だった。

決して正面から戦わず、一撃離脱ヒットアンドアウェイを繰り返す。

勿論、それだけでは精鋭たる「ガネーシャ・ファミリア」を翻弄することは出来ない。ひみつ道具というアドバンテージがあつてこそだ。

「ぐあつ！」

「大丈夫か!？」

「報告に会つた例の人形だ!」

ころばし屋DX

13階層での混戦時に現れた、相手を強制的に転ばせる銃を持った人形型のひみつ道具。

転倒状態となつた憲兵たちに閩派閥イウイルスは容赦なく襲い掛かる。

幸いなことに今回の閩派閥の武装が呪詛装備ではないようだが、「ガネーシャ・ファミリア」は焦りを隠せなかつた。

「ひみつ道具が敵に回るとこころも厄介とは……っ」

イルタは苦虫をかみつぶしたかのような表情でヴィトーを睨みつける。

数合の斬り合いを得て、自分の方が強いとは感じた。

だが、相手がひみつ道具を使う以上はどんな奥の手があるか分からない。

迂闊には動けなかった。

「やあああ!!」

「おっと」

ドラえもんはヴィトーの脅威を感じ取り、名刀電光丸で斬りかかる。

剣豪宮本武蔵に匹敵する剣の冴えは、第一級冒険者のイルタからしても感嘆に値するものだったが、ヴィトーはそれを小さな刃物であつさりと弾いて見せた。

「また……!?!」

「随分と強力なひみつ道具をお持ちだ。羨ましい……」

「ドカンッ!!」

間髪入れずに予備のくうき砲で狙い撃つが、ヴィトーはドラえもんを嘲笑うかのよう  
なひらり、ひらりとした動きで回避する。

「……どんな絡繰りだ。お前にそんな技量がある様には見えなかったぞ」

「ふふふ……どんな強敵も事前の準備が万全ならば、やりようはいくらでもあるという  
事です」

イルタの疑問に、ヴェイトーはおちよくなるように鼻を鳴らす。

ころばし屋DXだけではない。まだなにか、厄介なひみつ道具を使用しているようだ。

「ほらほら、私にばかり構っていると……」

「うわっ!？」

ころばし屋DXの弾丸がドラえもんの右足に直撃する。

【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちと同じく、体勢を崩す中、懸命にドラえもんは名刀電光丸を構えた。

そして、激突。

ベル以上の敏捷で距離を詰められ、ドラえもんは全く視認できないまま、名刀電光丸の言いなりとなって応戦した。

甲高い鉄の音が鼻先で幾度となく炸裂し、刃の破片が夜の街に煌く。

ギリギリと鏝迫り合いとなる。やがて、力の均衡はゆつくりとドラえもんが押され始めたことで破られた。

「うっ……」

「さて、あなたはどうぞでしょうねえ」

おかしい。やっぱり変だとドラえもんの頭は混乱する。

この世界の冒険者は身体能力が凄いという事はドラえもんにも分かっている。だが、名刀電光丸にはそう言った能力も補強する機能があるのだ。

第一級冒険者ならば、能力のぎり押しで負けることもあるだろう。だが、目の前の男が、名刀電光丸を破れるほどの何かを持っているようには見えない。

（なのにつ、どうして負けるんだ!?!）

ドラえもんの疑問に答えが出る前に、男の刃がドラえもんの肌に食い込んだ。

赤い血が青と白の肌を汚していき、その温かな感触にいよいよ危機感を強めていると突然、ヴィトーは力を緩めた。

「うわっ!」

急に力の行く先を失ったドラえもんは、思わず前のめりに体勢を崩す。

何とか立て直そうとするも、足を引っかけられてそのまま倒れ込んだ。

思わず名刀電光丸を落としてしまい、再び拾おうとするが。

「そこまでですよ」

「痛いっ!?!」

伸ばした手を踏みつけられ、苦悶の声を漏らす。

痛みに涙を貯めながら、ヴィトーを睨みつける。

それに対し、ヴィトーは酷く醒めた目でドラえもんを見下ろした。



「つまらない、ですなあ」

「ぐっ!？」

ドラえもんの手を一層強く踏みつけた後、その顔を蹴り上げる。

「ごろごろと転がったドラえもんが呻くのを横目に、ヴィトールは得物に付着した血液を、懐から取り出した白い布で綺麗に拭き取った。

「少々私の独り言にお付き合いただきませう。勿論、拒否などできませんし、しても勝手にしやべらせていただきますが」

朱く染まった布を放りなげると、男は淡々と口を開く。

「私は生まれた時から感覚が不自由でして、日常生活を送る上ではそこまで支障が無いのですが、人間社会を生きていく上ではこれ以上ないハンデでした」

ヴィトールはゆつくりと右腕を上げる。

指さす方向にあるのは、夜天に淡く輝く月だ。

「あれは、あの月は、人々には美しい物らしいですね。暗闇の中で輝く様に皆魅了されるのだとか……私には、輝いている者など何処にも見えませんが」

「……………」

「例えば歌劇<sup>オペラ</sup>。名優たちによる演技と美しい音の調律が心を動かすのだとか……私にはただただ耳障りな音としてしか認識できず、虫の羽音と何が違うのか終ぞ理解不能でし

たが」

「例えば美食<sup>グルメ</sup>。味覚を刺激し、生活を豊かにするととても素晴らしいものだから……私には雑多なノイズで舌がおかしくなっているとしか感じ取れませんでした」

ドラえもんはそこまで聞いて男の歪みを理解し、冷や汗を流す。

この男はこの世界が美しいと感じられないのだ。

周りが感動している中、一人だけ世界に取り残される哀れな異端者。

「世界とは灰色なのです。なんの価値も見いだせない、下らぬ箱庭。……ですが、その中で一つだけ、美しいと思えるものがない」

違う。この男は哀れなどではない。

「血が、ね。心を震わせるのですよ。あの赤い色合いだけが、私の心を振るわせてくれる。悲鳴や恐怖が混ざり合っていればなおいい」

この男は悍ましい異端者だ。

悪に堕ちるべくして堕ちた、生粋の殺戮者。

刃物を弄ぶその手に、ドラえもんは血の色を幻視した。

「ですが……貴方の血にはまるで心が震えない」

「……」

「ろぼつと、と言う奴だからでしょうか。悲鳴を上げてくださり、恐怖を感じてくださつ

ている。しかし、その潰れた鼻から流れる血を見ても、心がピクリとも動かないのです。こんなことは初めてですよ」

ドラえもんの頬を切った瞬間に、急激にヴィトーからは殺気が萎んだのはそれが原因だった。

ヴィトーは、ドラえもんの血が自分を沸き立たせるものではないと確信した瞬間、遊ぶ気を失ったらしい。

「まあ、正直な所、初めて見た時から薄々感じてはいましたが。ここまで期待外れとは……貴方はただただ厄介な方だというだけのようです」

ピンツ、と音を立てて、ヴィトーは刃の切っ先をドラえもんに向けた。

どうやら、遊ぶことを止めて本気でドラえもんを殺しに来る気らしい。

足元に転がる名刀電光丸を遠くに蹴り、ゆっくりとドラえもんに近づくと。

「ドラえもんっ」

「おやおや、私は貴方様を助けに来たのですよ？　ここは私を応援するのが筋なのでは？」

「デメエ……っ！」

「ふふっ、怖い怖い。ですが、動けませんよねえ？　もう貴方はこの状況のタネに気が付いている。故に、戦えば私が絶対に勝つと理解できてしまう」

ローブの人物はヴィトーの言葉に黙り込む。

ローブ越しても感じ取れる殺気に、ヴィトーは臆することなく言葉を続けた。

「故に、いい判断だと思えますよ？ 我が身を盾にして彼らを逃がそうというのは……  
させませんが」

「なにを……」

「こういう事ですよ」

ヴィトーは腕に巻き付けてあるアイテムを見せた。

それは一見するとポーションの瓶に魔石を入れただけの質素なアイテムで……

「やばいつ、見るな！」

「えっ!?!」

それが何なのか、良く知っているイルタはドラえもんの目を咄嗟に隠した。

同時に閃光と爆音が響く。

そのアイテム……フラッシュボット発光瓶をまともに直視してしまったローブの人物が怯むと、ヴィ

トーの合図に合わせて白装束の狂信者たちがローブの人物を捕えた。

「お連れしなさい」

「は、離せっ!!」

ローブの人物は拘束を振りほどこうとしているが、視覚と聴覚を失った影響か、思う

ように動けず、ずるずると闇の中に引きづられていく。

そして、逃げられないと理解するとドラえもんに向かって叫んだ。

「恐竜ハンターだった男とドルマンスタインの目的はお前たちへの復讐だ！ 気を付けろ！」

「な………っ?!? 恐竜ハンターだって?!?」

かつて、白亜紀にタイムスリップした際に戦った時間犯罪者。

予想外の名前に動揺するドラえもんは、一体どういうことかとローブの人物に問いかけようとするが、ヴィトーはそんな隙を与えない。

空気を裂いて首筋に迫る刃を慌ててくうき砲で受けた。

当然、ランクアップした眷属の一撃は爆発的で、ドラえもんは後退を余儀なくされる。

ヴィトーはそのまま追撃をかけようとするが、イルタによって阻まれた。

「お前がドラえもんだな!?!」

「は、はいっ」

「今はアイツは後回しにしろ！ このままだとやられちまうぞっ」

イルタの言葉は正しい。

ヴィトーの謎のひみつ道具によって追い込まれている状況で、他のことに注意を向ける余裕はない。

あのロープの人物が心配だが、まずはこの場を切り抜けることが一番だ。

「ベルから話は聞いている。答えろ、お前がひみつ道具のオリジナルを持っているんだな？」

「そうですけど……？」

「だったらあいつらが使っているひみつ道具に心当たりはないのか？」

「わ、分からないですよ……ひみつ道具って言ったって一杯あるから……」

「チツ」

凄い顔で舌打ちされた。美人だが怖い人らしい。

この状況を一番何とかできそうなドラえもんが答えられなかったのだから、イルタとしてはいよいよ焦りを隠せない様子だった。

「小賢しい悪巧みはここままでですよ」

「アタシの後ろに隠れていろ！」

イルタとヴィトーの戦いが再び始まる。

有利なのは間違いなくイルタ。しかし、何故かヴィトーに押されてしまう奇妙な戦いが続いた。

「ドカンッ!!」

「危ない危ない……ククッ」

ドラえもんもくうき砲で隙を作ろうとするが、何故かヴィトーはドラえもんの方も見ずに最小限の動きで躲してしまふ。

悪夢めいた光景に眩暈がしてきそうだった。

(おかしすぎる！　まるでそうなることが自然みたいにあの人に有利になっていく)

時折、相手の意表をついて足止めもできた。

イルタはそれに応えて、生まれた隙に果敢に挑んだ。

だが、気が付けば相手が有利な状況がある。

一体どんなひみつ道具を使えば逆転できる？　ドラえもんは必死に四次元ポケットの中を掻き分けるが、頭のどこかが冷徹に告げた。

なにをしても、きつと勝てない。

ヴィトーが語った言葉はどうしようもない真実だ。

「なんかないかなんかないかなんかないか……つつ」

最早なりふり構わずに、四次元ポケットをひっくり返す。

ガラランガラランと音を立てながらガラクタが地面を転がった。

「くっ！」

このままでは不味いとイルタは一旦距離を取る。

戦場となっている歓楽街は「イシユタル・ファミリア」の縄張りだ。

現在、イウイリス闇派閥との関係が囁かれているファミリアがどう動くか分からない以上、戦闘を長引かせるのはリスクが大きい。

【ガネーシャ・ファミリア】の援軍より、【イシユタル・ファミリア】の戦闘娼婦パベラが到着する方が早いだろう。そう考えたイルタは歯噛みした。

「いい加減、くたばりやがれ……っ」

「今にも死んでしまいそうなほど息を切らしながら言われたところで、怖くもなんともないですよ！」

ヴィトーと共に二人の狂信者が襲い掛かる。

動きからしてヴィトーよりさらにレベルの低い眷属。

一対一ならばベルであつても安心して見守れる程度の実力だ。

「また、かよ……っ！」

にもかかわらず、イルタが押されてしまう。

世界の理を捻じ曲げられているかのような感覚に、不気味さを感じつつ二人の攻撃を捌いた。

「……」

その隙にヴィトーは一人の狂信者に目配せをする。

あらかじめ伝えられた作戦を執行する時だと理解した狂信者は頷くと、ひっそりと気



配を消した。それに満足したように笑みを深めたヴィトローはイルタに斬りかかった。

「そろそろ何も知らない貴女も理解できたでしょう？ ……私たちが勝つことは絶対です」

「……っ、ほざいてろ!!」

加速する剣戟。

ヴィトローを主軸とした布陣フォーメーションに圧倒されつつも、イルタは他の団員たちの力も借りて

応戦を続ける。

戦況は混沌を極める闇派閥と「ガネーシャ・ファミリア」。

そして、そこから少し離れた位置で取り残されているドラえもんに分けられた。

完全に蚊帳の外になってしまった形のドラえもんはいよいよ焦りを隠せない。

なにかできることは無いかと、戦場を懸命に俯瞰した。

だからだろう。

戦場を離れた所で動く影に気が付いたのは。

(あれは……さつきヴィトローに指示を出された白装束?)

そろり、そろりと息を殺してイルタの背後に回ろうとしているその姿。

それを見てヴィトローは合図を出すように左手を上げた。

アレは間違いなく奇襲をするつもりだ。

「危ないー！」

「なっ……!!?」

ドラえもんの切羽詰まった声にイルタが振り返る。

視界に入ってきたのは、血走った目でナイフを振り下ろそうとしている狂信者の姿。

ナイフは……間違いなく呪詛装備だ。  
カースウェポン

かすり傷だけで致命傷になってしまいう一撃を叩き込まれるイルタは、即座に回避行動に移るがギリギリだ。

ギリギリならば、ヴィトーによる妨害によつてかすり傷程度は確実に与えられるという事でもある。

（しまったー！）

第一級冒険者の超人的動体視力が、迫る刃をゆっくりと写す。

こんなところで、と憎々し気に狂信者を睨みつけるイルタは、アマゾンネス戦闘種族の本能に従い、目の前の相手を相打ちに持ち込もうと腕に力を込めた。

「ドカンッ!!」

だが、その瞬間に狂信者は横から来た衝撃に吹き飛ばされる。

ドラえもんのくうき砲だ。

イルタに迫る危機を何とかしようと、破れかぶれに放った一撃にイルタは目を見開い

た。

「あ、当たった……う？」

撃った張本人の啞然とした言葉が木霊す。

当たった。当たったのだ。

今まで何をしても届くことのなかった攻撃が、嘘のようにあっさりと。

ドサリツ、と狂信者が崩れ落ちた。

その手からころりと球状のアイテムが転がるが、誰も見向きもしない。

(何故急に当たった……なにか、条件があるのか、それとも時間切れ……?)

なんでもいい。

今、この瞬間、敵を守っていた加護はなくなっている。

そう判断したイルタの行動は早かった。

即座に二人の狂信者を吹き飛ばし、ヴィトーに迫る。

「くっ!？」

この日、初めてヴィトーは余裕のない表情を見せる。

それを見て加護の消失を確認したイルタは一気に攻め立てた。

一合振れば右腕が裂け、二合振れば左足が斬られる。

そして三合で刃はヴィトーの首元に突き立てられ……

「サービスタイムは終了です」

あつさりど切り返され、返す刃がイルタの頬を斬る。

そして、再び斬り合いの中でヴィトーは立て直し、攻守は逆転した。

（くっ、攻めきれないか！）

「随分とオイタをされてしまいましたねえ……これは相応のしつけが必要でしょう！」

ドラえもんに殺気を見せるヴィトー。

敵の注目が民間人ドラえもんに行ってしまったことを悔やみながら、イルタは冷静に状況を整理していた。

（これは……無理だな。流れを失った。もう、勝てない戦いだ）

冒険者として戦っていると、戦場の空気と言うものは感じ取れるようになる。

これは勝てない戦いだ。

唯一の機会を今、失ってしまった。

そう結論付けたイルタは、しかし、絶望していなかった。

勝てない戦いならば、負けないようにすればいい。ダンジョンではそんなことは日常茶飯事なのだから。

相手はどうやら『必ず勝てる状況』を仕組んでいるらしい。

ならば、必要なものは勝敗を超えた存在。

常ならばそんなものどうすればいいのだと怒鳴り散らしただろうが、幸いなことにこは「イシユタル・ファミリア」の縄張りだった。

(アタシたちもきついかもしれないがやるしかない！)

イルタは不敵に笑う。

それを見て、不快そうに鼻を鳴らしたヴィトローの攻撃をよけつつ、ドラえもん呼びかけた。

「おい、ドラえもん！ 特定の相手をここに連れてこれるひみつ道具はあるか!」

「え、うん。あるけど……」

「それをよこせ!」

一体何をする気なのかとドラえもんは不思議そうだったが、打開策がなにも思いつかない以上は言う通りにすべきだと考え、四次元ポケットを弄った。

「よびつけブザー」

スイッチだけのシンプルなデザインのひみつ道具を取り出すと、イルタに投げ渡すドラえもん。

イルタはヴィトローの攻撃を躲しつつ、それをキャッチした。

「使い方は!」

「ボタンを押しながら呼びたい人を呼ぶんだ!」

ドラえもんの説明を聞くと、イルタは即座にボタンを押し、誰かの名前を呟いた。

「ほう、これはまた珍妙なひみつ道具を……」

「これでお前の気色悪いニヤケ面もお終いだ」

「できますかねえ？」

「できるさ。アタシはもう逃げたい」

「……？」

ドスンッ、と遠くで音がした。

「勝とうとすれば駄目だろうさ。今のお前には【おうじゃ猛者】であつても敵わない」

ガヤガヤと人々の声が絶えない筈の歓楽街。

そんな場所で、声が途絶えた。

「だったらこうすればいいのさ。そもそもの戦いをぶち壊す奴を呼ばいい」

痛いくらいの静寂。

やがて爆発のような人々の絶叫が轟く。

バタバタと足音が雪崩のように街を揺らした。

「何を言つて……」

「さあ、奴が来るぞ……っ！」

街が哭いている。

冒流的気配にガリガリと、ドラえもんは何かが削れていく感覚を覚えた。

「ゲーーーーゲゲゲゲゲ……ゲゲゲゲゲゲゲツツツ!!」

「うひっ!?!」

「恨むならベルとハシャーナを恨むんだな……っ!」

ナニが来たのか理解してしまったヴィトーが、今までの切れ者キャラを投げ捨てた悲鳴を上げるが、それを笑う余裕は誰にもなかった。

厄災が、来た。

「今夜はいい夜だねえエエエエエエエエエエツ!」

「じゃあ、後頼んだ」

「なっ!? 悪党を見逃すのですか【ガネーシャ・ファミリア】!!」

「民間人の保護が最優先ツツ」

S等級ランクのファミリアの名は伊達ではない。

高練度の冒険者たちは風のような速さでその場を去った。

勿論、ドラえもんを抱えて。

ヴィトーも同じように逃げようとするが、それより先にぐわしつと体を手で掴まれる。

そしてそのまま殺人的な腐臭を漂わせた背後の存在の名を呟いた。

「フリユネ・ジャミール……っ」

「ゲゲゲゲゲ……よく知っているねエ！ やっぱいい女つてのは隠せないもんだ  
！」

（息が……まるで船一杯の腐った魚を凝縮したかのような殺人的臭いがつつ！）

背後から漂う臭いで嗅覚を早速破壊されたヴィトー。

一般人が美しいと感じるものを美しいと感じれない彼だが、悲しいことに一般人にとつて不快なものは、変わらず不快である感じてしまうのであった。

「顔を見ずにアタイを見抜いたご褒美だよオ……今日は眠らせないからねツツ！！」  
「いっそ永眠させてほしいのですが」

ぐるんっ、と強制的に背後を向かされてしまうヴィトー。

目を瞑る間もなく、ヴィトーの網膜はそれを見てしまった。

「ぎゃああああああああああつ!？」

この日、ヴィトーはより世界が嫌いになった。



## 英雄譚朗読

人間の慣れと言うものは恐ろしいものだ。と出木杉は実感する。

初日は他の従業員たちよりもずっと短い時間の仕事でへろへろだったというのに、今は同じ量の仕事を終えても少し遊ぶくらいの余裕があった。

「それは君だけだよ……」

隣でグテーンとしているのび太のボヤキは、残念ながら彼の耳には入らなかった。

タイムマシンで学校の授業は受けれると言っても時間は有限なのだ。

この漫画の世界に来たからには、この世界の様々なことを知りたい。探求心の強い出木杉はずっとそう思っていた。

しかし、タイミング悪く、現在は闇イザイルス派閥と言う反社会的組織が活発的に活動をしている。

自由にオラリオの街を探索するには適さない状況だ。

(ここ)で駄々をこねても意味はない。僕たちの世界だって不審者情報や泥棒が出たら集団下校させる。日本とは比べ物にならないくらい治安の悪いこの世界なら、なおさら警戒しないと)

大人に同行してもらおうにも、店の従業員は毎日忙しいし、主人公かつ常連客のベルもダンジョンに潜っているからお願いはできない。

ひみつ道具を使うドラえもんは頼もうかとも考えたが、「豊穰の女主人」の店主であるミアにとつてみれば、ドラえもんとて保護対象なのだから納得してもらえないだろう。

「ブツブツブツ……」

なにより、仕事が終わると速攻で布団に包まって膝を抱えている今の彼に話しかけるのは勇気がいる。

昨日の夜に抜け出していたようだが、一体何があつたのだろうかと出木杉は首を傾げた。

「野比君、ドラえもんはどうしたんだろう?」

「なにか怖いものを見たみたいだよ。朝なんてぼくの顔を見て『今までメタクソに君の顔をけなしてきたけど、君ってホントは悪い顔してなかったんだね。ちゃんと人間だ』とか変なこと言つてたし」

完全に精神が崩壊していたが、なんとか店の仕事をやり遂げたドラえもんの表情を言ひ表すならば虚無。

仕事は皿洗いで良かった。あれで接客などした日には苦情が来る。

よくあんな状態で仕事が出来たものと、従業員の娘たちは感心していた。

「【あらかじめ日記】で自分が仕事をすることを決定していたよ」

「そこまでやるくらいなら休んでもバチは当たらないんじゃないか……?」

適当なように責任感が強い猫型ロボットである。

ともかく、そんな状態のドラえもんを連れまわすのもどうかと思い、出木杉は外出を断念した。

同じようにのび太も暇を持て余すのかと思いきや、今日は元々ベルと二人で会う約束をしていたらしく、早々に店を出て行ってしまった。

ズルくないかい? と出木杉がらしくなく不満を口にしてしまったのも無理はないだろう。

決して二人が自分を除け者にしたわけではないことは、ベルの申し訳なさそうな態度で分かったが。

「いよいよやることが無い……」

こんなことなら勉強道具でも持ってきた方がよかつただろうか、と出木杉は後悔する。

異世界に来てまで自習と言うのも悲しいから、なくてよかつたかもしれないが。

偶に『悪いなのび太、これ3人用なんだ』と言われているのび太の気持ちが少しわかつたかもしれない。

手持無沙汰のまま立っていると、ツンツンと背中を小さな指で突かれた。

「わっ！ ノ、ノエルちゃんか……」

「……」

「どうかしたの？」

「……さみしい、の？」

「え？」

「ひでとし、さみしそう……」

舌足らずながら、自分を思いやる言葉に心は温かくなる出木杉。

大丈夫だよ、と返して、この足が不自由な少女も思い切り遊びたいのを我慢しているはずだと自分に言い聞かせた。

そんな出木杉をぼくつとした表情で見つめていたノエルは、その腕を引っ張る。

「あそぼ？」

「うん」

異世界を探索するのもいいが、現地の子供と交流するのも大切だろうと出木杉は今日一日はノエルの相手をすることにした。

クラスの子供たちと多少なりとも交流もあるため、全く少女の遊びについていけないという事にはならないだろう。

「何をして遊ぶ？」

「えほん」

「そっか、じゃあ、絵本を読もうか。と、なると……」

ノエルは記憶喪失であり、自分は誰だったかという事だけではなく、日常的な情報すら忘れている。文字も読めない可能性があるだろう。だが、自分もこの世界の言語である共通語コイネーは読むことが出来ない。

さて、困ったぞとなる場面だが、こんな時こそドラえもんの出番だ。

「ドラえもん、「ほんやくコンニャク」を出してくれないかい？」

「邪神が……潰れた蛙が……ツアトウグア……ん？ 仕方ないなーのび太君は。ほんやくコンニャク」

（僕とのび太君を見間違えるほど正気を失っている……！）

ここじゃない何処かを見ているドラえもんの逝っちゃっている目に引きつつも、出木杉は自分の知らない言語でも翻訳してくれるほんやくコンニャクを受け取った。

時がこの哀れな猫型ロボットを癒してくれることを願おう。

アブナイのでノエルを連れてドラえもんと距離を取りつつ、出木杉はほんやくコンニャクを口にした。

（……そう言えば会話するだけなら普通に話せてるな）

物語ゆえのご都合なのだろうか。

確かに海外発の童話の世界に行っても言語の壁に困ったという話は聞いてないが。ちよつとした発見をしつつ、ノエルにどんな絵本を読みたいか聞く。

「えつとね、んと、アウゴート」

「……? あ、もしかしてアルゴノウトかい?」

主人公が同名のスキルを持つていたがゆえに、直ぐに答えに辿り着くことが出来た。確か、ベルのスキルはこの世界の英雄譚が元になつていたはずだ。

「おとーさんのおじーちゃんが好きなんだつて!」

「おとーさん? もしかして記憶が戻つたの?」

「……? おとーさんは、おとーさんだよ?」

「……うーん」

ノエルの奇妙な言葉に首をかしげてしまう。

つまり、どういうことだろうか。

「ノエル、出木杉君が困っているよ」

上手く言葉を返せず<sup>座主</sup>にいた出木杉に助け舟を出したのはシルだった。

【豊穰の女主人】のミア<sup>座主</sup>を除けば中心人物と言える従業員。

自分たちの様子をそれとなく見守っていたらしきシルは、ノエルの言葉の意味を解説

した。

「えつとね？ この前、私とベルさんとノエルでおままごとをしてね？ その時に私が母親役で、ベルさんが父親役だったの」

「つまり、その時の呼び方をずつと？」

「気に入っちゃったみたい」

困ったように笑うシルに出木杉はなるほど納得した。

記憶喪失のノエルにとって、自分を助けてくれたシルと、自分を守ってくれたベルの存在はとても大きい。

二人を親代わりとして慕うのも当然のことだろう。

（野比君にもあとで教えておこう。知らなかったら悪気なく「ベルがお父さんなわけないじゃない」って言っちゃいそうだし）

のび太が優しい心を持った素晴らしい少年であることは、クラスメイトである出木杉もよく分かっているが、同時に口が軽い一面があることも知っている。

学校ではよく、のび太がジャイアンやスネ夫にいじめられている。

勿論、いじめをする方が当然悪いが、のび太の時々見せる口の悪さも原因の一つだと出木杉は思っている。

深く考えないで言葉を発する彼は余計なトラブルを起こしやすい。

深く考えないからこそ、誰かにとつては救いになる言葉も言えるのだろうから一長一短だが。

「それじゃあ、アルゴノウトを読もうか」

「うん！」

「私も混ぜてもらつていいかなー？」

「仕事は大丈夫ですか」

「今、ちよつと手が空いてるから大丈夫だよ」

休憩休憩と出木杉の隣に座るシル。

なんとというか凄い自然に人の隣に座れる人だ、と出木杉は感じた。

異性に傍まで来られているのに、全く緊張しないのは距離の取り方が絶妙だからだろう。

物語の中の人物とは思えないほどに人の心に敏感だ。

「それじゃあ、読むよ。……それはとても こつけいで だれでも えがおにしてみよう えいゆうに あこがれた ゆかいな 英雄のおはなし」

その物語は序文に示された通り英雄に憧れる青年の物語。

そう聞くと如何にも王道な英雄譚（ヒロイツクサガ）の出だしだが、出木杉が受けた印象はだいぶ異なつた。



「……アルゴノウトのすることは、いつもあたまのわるいことばかり、むらのひとびとは、いつだって、かれのことを、わらっていました」

端的に言えば、この主人公はどうしようもなく愚かだった。

巨大なモンスターと勘違いして風車に突撃し、返り討ち（というか自滅）にあつたり。ミノタウロスを倒すための英雄を王様が求めたと知れば、それは自分のことだと決めつけて旅に出て、最初の一步で崖を転がり落ちたり。

しようもないことばかりをする主人公だと、それが出来杉の偽らざる感想だ。

アルゴノウトの道化ぶりは旅を終えて王都についても変わらない。

集められた英雄候補たちがピリピリしている中、空気も読まずに仲良くなろうとしてボコボコにされる。人々にはなんてまぬけなヒューマンだろう、と笑われる始末。

しかし浮かれているアルゴノウトは自分が馬鹿にされていることになど気が付かない。

「……おそろしい、まものも、王女さまを、さらったミノタウロスも、ぜんぶ、わたしが倒して見せよう！」

これのどこが英雄譚なのだろうか。

朗読しながら出木杉は疑問を感じ続けた。

周囲の人間の嘲笑と、何もわからず笑う滑稽な男。これではむしろ喜劇ではないか。

「……かみがみよ ごししょうらんあれ！ アルゴノウトが 英雄になる しゅんかんを  
！」

滑稽な物語は続く。

人々は愚かなアルゴノウトを騙し、アルゴノウトは騙されたことにさえ気が付かない。  
い。

ついには街中で踊りだすという奇行をしだした。街娘をちやつかり巻き込んで。

(これは……どういふことなんだろう……?)

主人公であるベル・クラネルの力の源であるスキルの名前であり、育ての親が愛読していた本。

いわば『ダンまち』の根源<sup>ルーツ</sup>としても呼ぶべき物語にしては、いささか以上に格好悪い。

メタ的な視点を持つ出木杉はそんな風に疑問に思った。

(最初の怪物と勘違いして風車と戦う話は多分、スペインの滑稽本『ドン・キホーテ』が元だと思う……この先、ミノタウロスと戦うなら多分、クレタ島のミノタウロスとテューセウスの戦いがモデル。だけど、なんでアルゴノウトなんだろう？ 確か、ギリシヤ神話でイアソンが乗っていた船の名前だったはずだけど)

次々と疑問は浮かび上がるが、出木杉の朗読は続いた。

アルゴノウトの冒険……もとい、奇行は王様の耳にも届く。

そして王女を失つて参つていた王様は考え付いた。

「……アルゴノウトを ミノタウロスの えさに してしまおう」

アルゴノウトは王様の呼び出しにノコノコ応じ、あつさり地下牢に監禁されてしまつた。

彼を憐れんだ戦士によつて、なんとか助け出されたアルゴノウトは傷だらけになつて街に逃れる。

彼は自分を捕まえようとする人たちから逃げて逃げて逃げて……そして力尽きて倒れてしまう。

「……いじわるな女が いいました ああ みじめな アルゴノウト なんて こっけいな アルゴノウト みんなから わらわれる 道化 おまえは 英雄 になんかなれはしない」

「……むう」

「(こらこらノエル? 口をすばませないの)」

ここまで夢中になつて聞いていたノエルは、いじわるな女の一言が気に入らなかつたらしい。

のんびりとした彼女には珍しく、頬つぺたを膨らませて納得いかない! と主張していた。

そんな少女をシルは苦笑しながらたしなめる。

彼女は意外とこの物語を気に入っているらしい。

朗読している身としては有難いが、何故だろうかと思木杉は考える。

(もしかしたら、僕たちとこの世界の人では感性が違うのかも)

まずは最後まで読み終えよう。

感想を聞くのはその後で良い。

「……そして 女のことばに アルゴノウトは 答えました」

その瞬間、ふと、誰かに似た声が聞こえた気がした。

『それでも……それでも、僕は笑うよ』



パタン、と絵本を閉じる。

気が付けば外は夕暮れだ。

「感想は……聞かなくてもいいかな」

「この物語が気に入ったみたいだね。ノエル」

「うん！」

ぶんぶん手を振って、興奮を伝えるノエル。

普段大人しい子だが、こういった一面もあるのかと驚く。

「僕は……ちよつと複雑かな」

「えー」

「文句を言うわけじゃないけど、英雄譚つて感じはあんまりしなかつたかも。最初から最後までアルゴノウトは利用され続けたわけだし」

「男の子はそう言う感想を持つことも多いみたいだよね」

出木杉の率直な意見に、ノエルが不満げに声を出す。

今日一日で大分遠慮がなくなつたようだ。

「ベルさんも小さい頃に聞いた時は『英雄に憧れる英雄なんてアリ？』つて反応だつたみたいだし」

ベルの言葉は出木杉にも共感できるものだった。

なんというか、不完全燃焼感がある。

「だからこそ、この話は色んなところに広まったのかもしれないよ」

「……？」

「出木杉君やノエルは知らないかも知れないけど、この世界つて元々神様なんていなくて、人間たちの力だけでどうにかしなきゃいけない時代があつたの」

そういうえば、漫画の何処かで神々が降臨した時の場面があつたな、と出木杉は思い出す。

人々が作った建物を倒壊させつつ、「遊びに来た」と言つて人間たちを呆然とさせるといふ、ギャグ的な一コマだった。

(よく考えれば、それまでの時代は神の恩恵なしで戦つていたんだ)

ゾツとする話だ。

神の血を授けられた神時代の冒険者でさえ、モンスターとの戦いでは命の危険が常にある。

それなしに戦うなど、なんて絶望的な状況なのか。

「みんな希望を失つて折れそうになる人も多かつた。だから、心に活力を与えるこの英雄に憧れる英雄の物語が愛されたんじゃないかな」

なんて馬鹿な奴だと笑わせ、自分ならもつと上手くやれると奮い立たせる。

冴えない英雄譚はだからこそ、人々の間に語られてきたのだろう。

まるで当時を見てきたかのように、シルの言葉には説得力があつた。

「なるほど……」

出木杉は『ダンまち』世界の歴史を感じさせる考察に頷いていると、ふと、ノエルの様子がおかしいことに気が付いた。

今の話の何か引つかかっているかのように、額を抑えている。

「ノエルちゃん？」

「……神様がいない……英、雄」

そのの見えない水の中から、記憶を掬いあげるかのように何事かを呟くノエルの様子に、出木杉は心配げな声をかける。

暫く、記憶を取り出そうと試みていたノエルは、やがて諦めたかのように額から手を離した。

「……わかん、ない」

「無理に思い出そうとしなくても大丈夫だよ。少しずつでいいから」

落ち込むノエルをシルは慰めると、「そろそろ戻らなくっちゃ」と立ち上がった。

「今日はありがとう、出木杉君」

「いえ……」

「もしよかつたら、また遊んであげてね？」

「あり、かと……」

無垢なノエルの感謝に、つい頬を掻きながら顔を逸らしてしまう。

夕日に照らし出されるその顔はほんのりと紅かった。

「それじゃあ、私は行くね。そろそろ仕事を押し付けてきたみんなも怒ってるだろうか」

（小悪魔だなあ……）

「いつてらっしやい、おかーさん」

「うん。行つてくるねノエル」

悪戯つ子のような笑みを浮かべて手を振り、シルは店に戻る。

「やつと戻つてきたニヤー!」「おのれ、あの時無理せずにチエツクしていれば……っ」「なんで三人がかりだったのにポーカーで負けてるんだらう私たち」とウエイトレスたちの声がかすかに聞こえた。

「……明日もまた遊ぶかい?」

「うん! ……でも、なに、しよう?」

「僕が考えておくよ」

一つ、思い浮かべている考えがある。

それにはドラえもんの協力が必要だから、なんとかあの状態から再起動させないと。そう思い、ドラえもんの包まっている毛布を見たが。

「……あれ?」

「……?」

「ドラえもん、何処に行つたんだらう?」

「……わから、ない」

ドラえもんの姿はそこになかった。



## 意外な出会いは突然に

夕暮れとは不安定な時間だ。

昼間のように明るいとは言えないが、夜と言い切れるほど暗いわけでもない。

視界に映る世界はぼんやりとして、誰がそこにいるかも定かではなくなる。

感覚のほとんどを視覚に頼る人間は、そんな時間を恐れた。

そんな恐怖が魑魅魍魎を具現化させ、嘗てはこの黄昏の時間を幽霊や妖怪と出会いそうな時間として逢魔時<sup>わおまがとき</sup>、或いは不吉の予兆として大禍時<sup>わおまがとき</sup>と呼んだという。

夕焼けに照らされない路地裏から、周囲を警戒するために顔を出したドラえもんは、そんな知識を思い浮かべた。

(実際に魑魅魍魎染みた人がいるからなあ……)

思い出すのは……いや、思い出したら発狂しそうなので、その直前位に留めたのは厄災の姿。

「ガネーシャ・ファミア」がどういう意図を持って、あの人をよびつけブザーで呼びつけたのかは分からないが、一言位言ってくれても良かったのではないかと心の中で愚痴った。

退避する直前に闇派閥イワイルスの幹部の顔の影と、厄災の頭部が重なっていた気がするが……  
気のせいだと思いたい。

途中までバタバタしていた足が魂を失ったようにグツタリしていたのも気のせいだ。

「こんなところもう二度とは来たくなかったけど……」

布団に包まって震えていた時にふと思いついてしまったのだ。

「ガネーシャ・ファミリア」と戦っていた闇派閥イワイルスの狂信者。その一人がボール状のマジックアイテムを落としていたことを。

混戦の中なので「ガネーシャ・ファミリア」は気が付かなかったかもしれないが、後衛として援護を行っていたドラえもんはそれをはつきりと見ていた。

直後に訪れた厄災の衝撃によってすっかり頭から抜け落ちていたが、先ほどまで無限トラウマに続く心傷記憶のループが頭の中にフラッシュバックしていた時に、思いついてしまったのだ。

ついでにそれが何なのかまで気がついてしまった。

「どうでもいいガラクタなら放置していたけど……アレは絶対、タイムテレビで見たあいつらのアジトの鍵だったし」

あれがあれば、タイムパトロールが敵のアジトに乗り込む時に楽が出来る。

そう思い立ったドラえもんは善は急げとこの街に再び戻ってきたのだが……

歓楽街についた途端に恐怖がぶり返した。

正確には思い出した興奮の熱が冷めてしまった。

(会いませんように……っ)

オラリオの一角とは言え、歓楽街である第三区画は広い。

特定の人物に会う可能性は低い筈だが、恐怖とは理屈ではないのだ。

もう帰ろうかな……と考えると途端に後頭部に横長の意志が衝突した。

「イテテ……何で僕、こんなひみつ道具使っちゃったんだろう」

歓楽街に近づく度にもう戻ろっかな、と思いつ返すことが多くなり、このままでは不味いと使ったのがこの「強いイシ」だ。

落とし物を確認してくるとを条件に、その意思に反する行動を取るとこの石が飛んできて攻撃を受けてしまうので、半ば強制的に使用者は最初の意志を貫かなければならなくなる。

「一時の熱に浮かされると碌なことがないよ。本当に」

そもそも「ガネーシャ・ファミア」に伝えるだけで良かったのでは？　と思うも後の祭り。

ドラえもんは恐るべき怪物との遭遇エンカウンターにビクビクしながら、昨日の場所に戻っていた。「ようし、いないみたいだし……ここは近道をするぞ！」

こんな場所に長居などしたくないし、日が完全に暮れたらいよいよホラー映画だ。意を決してドラえもんは、まだ人が疎らな大通りを駆け抜けた。

ドラえもんの速度は鼠を見た時並の時速129, 3 km。はんぺい足はどんな場所でも静かに歩ける優れモノだ。

このまま目的地まで一気に駆け抜けられる。そんな希望は淡くも崩れさる。

「……………エ……………エエ……………」

「……………?」

「……………エ……………エエ……………ゲ」

「ひっ!」

「……………ゲ……………ゲゲ……………ゲゲゲゲ」

「あわわわわ……………」

遠くから聞こえる破滅の歌。

耳元に届くまでには掠れて聞こえるその小さな音をドラえもんの耳は捉えてしまった。

徐々に大きくなる音。それが指し示す事実の一つ。

厄災はこちらに向かつて来ている。

(終わった)

よく思い出せないが、とんでもなく恐ろしかったことだけははつきりと覚えているあの日の光景が脳裏に蘇る。

恐怖に硬直した体は、厄災が迫る大通りのど真ん中で停止すると言う自殺行為を選んてしまう。

心なしか必死な強いイシがガンガンと頭をぶつてくれるが、ドラえもんはピクリとも動けない。

そして限界を迎えた猫型ロボットは遂に決壊した。

「うわあああああん!!」のび太くうううううううんっつ!?!」

「ゲーーーーーゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲエエエツツ!!!!!」

いつも面倒を見ている少年と立場が逆転したかのように、少年の名を絶叫するドラえもん。

ズンツ、ズンツ、と冗談のような足音が近づいて来ることに震えながら、ドラえもんはその体を常より更に真つ青にして泣き出した。

厄災の訪れを、この街に来てまだ間もないドラえもんよりも早くに察知した住民たちが消え、伽藍洞となった大通りにはもはや救いの手を期待することは出来ないだろう。

やがて、厄災が現れた。



「ん……?」

「どうかしたの、のび太君?」

「なんだかドラえもんと呼ばれた気がして……」

旧「ヘスティア・ファミリア」ホームにて、この場にはない猫型ロボットの悲痛な叫びを幻聴したのび太は不思議そうに天井を見た。

ポップ地下室の防音性能から考えると、地上のドラえもんの声が聞こえるはずもないし、単なる勘違いだろうとのび太は結論付ける。

「しかし、やっぱり外の子だと偏見が無くて助かったよ」

「はい。僕もホツとしています。のび太君を信じてよかった」

ベルとヘスティアは嬉しそうにのび太を見上げる。

現在ののび太はヴィオラスの頭の上にちよこんと乗せられていた。

「でつかいなあ……」

ベルが明かした人に敵意を持たないモンスターであるヴィオラスをのび太はあっさりと受け入れていた。

そして、物珍しきで頭の上にのせてもらい、その大きさに感嘆していたのだ。

「僕の世界には君みたいに大きな生き物はいなかったよ」

のび太はこれまで様々な生き物と触れ合ってきたが、建物より大きな生き物というのは初めてだ。クジラならヴィオラスより大きいかもしれないが、陸上の生物ではない。上は比較するのも変だろう。

「ヴィオラスくん。ボクたちも乗せてくれないか？」

ヘステイアの声にヴィオラスの触手が揺らめき、二人をのび太の下まで掴み上げる。痛くないように力を微調整しつつ、慎重に頭の上まで運ぶその姿を一般人が見れば卒倒するか、夢だと思つて頬を抓ることだろう。

そんなこの世界では違和感バリバリな光景も、そもそもこの世界の住人ではないのび太はあっさりと受け入れた。

人間や動物どころか、異星人やらロボットやら精霊などと絆を育んだのび太からすれば、人間以外と友達になることは難しくないのだろう。

流星に最初に見た時はその見た目を怖がっていたが。

「よつと、やつぱり高いねえ。のび太君は高いところは平気なのかい？」

「うん。よくタケコプターを使っているし、天上世界に行ったことも……あ、でも今ドラえもんいない。やつぱり怖い」

「藪蛇だったか」

ヘステイアとの会話でうっかり恐怖を覚えてしまったのび太を、いざとなつたら自分

が助けるからと勇気づけると励ました後、ベルはのび太に今まで気になっていたことを聞いてみた。

「そう言えば……のび太君はいつまでこの世界にいるの？」

「あまり考えてないけど……」

「凄い行き当たりばったりじゃないか。向こうの生活は大丈夫なのかい。家族が心配しているかもしれないぜ？」

「タイムマシンを使ってるから大丈夫だよ」

「……異世界便利だなあ」

「とは言え、現実問題としてこの世界にのび太たちがいつまでもいることは出来ないだろう。」

「この世界に骨を埋めるならばともかく、彼らには彼らの世界があるのだから。」

「無限の刻を生きる神たちと違って、外の世界の君たちにも寿命はあるだろう？ 寄り道もほどほどにね」

「……ヘステイアってまるで先生みたいだ。僕と同じくらいちっこいのに」

「ち、ちっこい言うな！」

のび太君は嫌そうにヘステイアに返した。

まあ、気分がいいときに説教みたいなことを言われたらいい気がしないのは分かるか



もしれない、と児童だった時期がそう遠くない少年は苦笑する。

「いや、実際の所さ、ボクたちはこの世界のことには好きだけど、危ない場所だろう？ 君たちが怪我でもしたら親御さんに申し訳ないし」

「確かに街を歩いてる人が武器をしてるもんね」

「そうそう、武器を持ち歩かなくていい世界なんて恵まれてるんだぜ。ボクも争いごとは苦手だから、そんな感じの世界のほうがいいんだけどねえ……」

「できないの？」

「難しいさ。下界の争いのタネは絶えないし、軍神<sup>アレックス</sup>辺りがそれを許すとも思えない」

「僕の故郷でも頻繁に王国<sup>ラキア</sup>がまた戦争を始めた、って聞く位には戦好きですしね」

戦争が無い国から来たのび太にはピンと来ないようだが、この世界は割と物騒だ。

平和に暮らせる世界があるなら戻るべき、と言うヘステイアの言葉は正しい。

「今すぐじゃなくてもいいけど、そろそろ帰りも考えたほうがいいぜ」

「……ちえ」

「異世界なんてたまに来るくらいがいいんだよ」

「神様たちはずっといるじゃない」

「そりゃー、いつでも来れる君たちと違って一度きりだし。それに、君たちの言うずつとは神<sup>ボク</sup>たちからすればあつという間のことさ」

むー、と頬を膨らませるのび太にヘスティアは苦笑する。

この世界では中々見ない、素直な子だと。

ベルと意気投合するのも納得だ。

「まあまあ、神様もすぐ帰れって言ってるわけじゃないし、また来れるんでしょ？」

「そうだけどきー。遊園地だつてまた来れるけど、帰りたくなるもんなんだよ」

「『ゆーえんち』が何かは分からないけど、楽しい時間はずっと過ぎたいって言うのは分かるかも」

それでも帰れるなら帰るべきだろう。

彼には帰れる家があり、家族もいるのだから。

「……まつー！ 今はこの世界を楽しめばいいさ」

「僕、全然自由に出かけられないけれど」

「テロリストが好き勝手にしている世界だからね仕方ないね」

のび太としてはもっと色々な所に遊びに行きたかったのだろう。

それこそ、ダンジョンにだって行きたかったはずだ。

「観光は平和になるまで待つてもらおうしかないけど……君たちは酒場で居候しているんだらう？ だったら、オラリオの人や神と話してみると良いかもしれないよ」

オラリオと言うとやはり冒険者の街だ。



まるで獲物を探すかのように辺りを見渡したフリユネはちつ、と舌打ちをした。

「アタイを求める子猫ちゃんの声が聞こえた気がしたんだけどねエ。気のせいか」

今日も例の鏡さんのアドバイスを自分なりに昇華し、モンスターの灰を利用したファンデーションを下地なしで塗りたくり、粉っぽい肌を表現。毒々しい赤色の口紅を浮き上がるほどに重ね塗りしている。自然な美しさを追求し、あえて眉はぼさぼさに。

例えるならば、何十年もゴミ捨て場で雨風に晒された道化師の人形だ。

正直、彼女は娼婦のファミリアではなく、道化師のファミリアに入ったほうがいいだろう。

道化神は泣きながら土下座をして拒否するだろうが。

「おっと、そろそろ日がくれちまうねエ。最近のアタイの美しさにやられて歓楽街に雄たが寄り付かないし、アタイの美しさも罪なモンさ……こっちからダイダロス通りの貧乏人たちの所に行こうかねエ。海より深い慈悲を持つアタイに感謝しな！ ゲゲゲゲゲゲ……」

ダイダロス通りに住むすべての人々に対する死刑宣告を告げながら、フリユネは世界の終りのように燃え盛る夕焼けを背にノッシノッシと歩いて行った。

やがて、その人影が完全に見えなくなるころ。

大通りの端から溜息が漏れた。

「た、た、助かったあ……」

九死に一生を得たとは正にこのことだろう。

ドラえもんは這いつくばって、無事でいられた幸運を喜んだ。

「ありがとうございしました……あの時、腕を引つ張つて貰えなかつたらどうなっていたことか」

恐ろしいIFにドラえもんは思わず身震いをする。

さりげなく子猫ちゃんとか言っていたことも怖い。どんな直感だ。

恐怖で停止していたドラえもんを救ったのは、路地裏から飛び出した黒い影だった。

目にも止まらぬ速さでドラえもんを引つ張り、フリーユネに見つかる前に路地裏に逃げ込んだのである。

「……」

そんなドラえもんの救いの主は無言。

押し黙つて「もうここから離れる」とばかりに背を向けた。

そんな恩人に慌ててドラえもんは声をかける。

「あ、ちよつと待つて!? せめてお礼を……」

「必要ない。私がやったのはただの自己満足だ」

女性の声が路地裏に響いた。

冷たく、突き放すかのような言い方にドラえもんは一瞬怯むが、助けてもらって何も  
しないなど猫型ロボットの名折れ!! とばかりに食い下がる。

「それでも助けてもらったからには何か」

「くどい」

一段と声が冷たくなる。

ローブの中からこちらを見るのは赤い瞳。

ベルと同色だが、彼よりも何処か暗い光を灯す彼女の視線は鋭かった。

「お前が何なのかは知らないが早く帰れ。今度アレに見つかつたらもう見捨てるぞ」

長い耳は、彼女が妖精<sup>エルフ</sup>であることを示している。

【豊穡の女主人】の従業員の一人であるリユーと同じ、現実にはいない種族。

リユーと初めて会った時の忠告を思い出す。

『初めに忠告しておきます。私に触れることはお勧めしない』

数ある種族の中でも、エルフは排他的な側面が大きい。

特に他種族への差別が大きい地域だと、触れることすら許されないのだと言う。

『私も故郷の頃の風習が根付いてしまっている。触れられたら、反射的に振り払ってし

まうのです』

『そーなのニヤ。こんな風に』

ニヤー！ とリユースの手を素早い動きで掴もうとするアーニヤ。

それに対し、リユースは手首をスナップさせつつ頬に拳をめり込ませた。

『触れるな！』

『フンニヤアアアアアア!?!』

アーニヤは、磁石で引つ張られているのではないかと思えるほどの勢いで壁に激突する。

店の備品がいくつか天に召される中、店長の凄まじい視線を浴びていたリユースは最後に呟いた。

『……私はやりすぎてしまう』

(あの後、ミアさんに折檻されていたリユースさんみたいに、他種族と距離が近くないエルフなのかな)

警戒するように距離を取る女性。

ドラえもんはそんな彼女に、尻尾を上げて警戒する猫の姿を幻視した。

「僕、この先で探し物をしなければいけない……」

「……なら、そこまで私が送ってやる。だから、用事が済んだらさっさと帰るんだな」

警戒心は強そうだが、悪いエルフではないのだろうか。

そう思ったドラえもんはさつきはちよつと怖かったこともあり、同行をお願いするこ

とにした。

さて、そうなるとお前、あなたでは呼びにくい。

そう説得したドラえもんは彼女の名を聞き出すことに成功する。

「僕ドラえもんです」

「……フィルヴィス」

それが、ドラえもんの意外な出会いだった。



## 迷子の妖精

それはおかしな心理ではないのだろう。

嫌なことがあって、逃避のために楽しいことに熱中する。

恥も道理も全部を放り投げて、時折思い出したかのように自傷する暗い愉しみ。

人は耐えられない痛みの前に立ち尽くし、それを忘れようと酔っぱらう。

傍目から見ても、そして自分から見ても滑稽な振舞いを止められないのだ。

フィルヴィスが逃げたものは穢れ。

フィルヴィスが酔ったものは愛。

そして、その代価は罪。

ある日、理不尽で不条理な悪意によつて変貌した身体。

それは誇り高い妖精エルフには耐えられるはずもなかった。

エルフは脆い、と誰かは言う。

他種族と比べ、容姿的にも能力的にも優れ、寿命も長いエルフは大きな自尊心によつて成り立っている。

誇りが貫けているうちはいいが、自信の抛り所をなくした途端に不安定になるのは有

名だ。フィルヴィスもその例に洩れなかったと言うワケだ。

自分を見失った者は、自分以外の者に救いを求める。

家族、友人、恋人……依存先は様々だろうが、フィルヴィスは最も質の悪い物にそれを求めた。

それが神。正義の仮面を被った飛び切りの悪意。

自身が変貌した時に、その体を見せることがどれだけ恐ろしいことだったか。

人類にとってモンスターとは絶対悪。ならば、それ同質の存在になってしまった自分は、もうみんなの中には戻れないのだろうとフィルヴィスはすぐに悟った。

居場所が無い。自分を肯定してくれる者もない。

それは想像を絶する恐怖だ。

『よく戻ってきた。フィルヴィス』

だからこそ、穢れた身体に構わず抱きしめてくれた神だけが自分の絶対だったのだ。

自身の仮面を脱ぎ捨て、その悍ましい野望を吐き出されても、フィルヴィスにその神から離れるという選択肢はなかった。

例えその選択によって、数多の命が屠られることを知っていたとしても。

(なのに、今更……)

狂ってしまったのは何時からだろうか。

神の素顔を知る唯一の使徒として、罪なき邪魔者を殺した時。

多くの罪に耐えきれなくなった心が魔法を発現させた時。

或いは……あの眩い同胞に出会ってしまった時。

初めて会ったときは興味は持たなかった。

自分とは違う、性格の良い少女だとは思ったが、関わりすぎるつもりはなかった。

どうせ、エニユオの目的が完遂されれば皆死ぬ。その時に自分の心に負担をかけるような真似をして何になるのか。

「ロキ・ファミア」の信頼を得る……と言うよりは疑惑の目をそらすために苗場ブランドの一つを破壊して、それだけで終わるはずだった。

向こうは気にかけてきたが、所詮は他派閥。会う機会が少ない以上、自然と疎遠になるものなのだから。あの日、自分の姿が見られなければ、そうなっていた筈だ。

エニユオの命令で最近都市を賑わせている新人を始末しに向かったことで全てが変わった。

世界に嫌われているのではないかと思うほどに不運が重なり、あつという間にボロ雑巾に変わったフィルヴィスを偶々ダンジョンに来ていた彼女が見つけてしまったのだ。

『貴女は、フィルヴィス……さん？』

穢れた自分を見た者は始末する。それが鉄則だ。

自分からエニユオの正体に辿られる可能性が極めて高い以上、そうするのがフィル  
ヴィスのあの場での使命だった。

にも関わらず、そうしなかったのは単にその気力が無かったからだ。

襲撃した冒険者パーティーの何気ない言葉。〔白髪鬼〕。

それはフィルヴィスがこうなってしまった原因。『27階層の悪夢』の首謀者。

殺しても殺したりないほどに憎い相手が自分と同じ存在になって、闇派閥イヴイルスに所属して  
いる。

それを、フィルヴィスは知らされてなかった。

闇派閥イヴイルスの出資者であり、現在の実質的な黒幕であるエニユオならば、知らないはずが

ないというのに。

その瞬間、絶対だった愛に罅が入る。

そうなれば愛の奴隷だったフィルヴィスの体は、糸を斬られた人形のように動かなくな  
るのは必然だったのだろう。

罅割れた依存に割り込むように、彼女は現れた。

「嗚呼、レフィーヤ……どうして現れたんだ。今更過ぎる。今更……」

フィルヴィスと闇派閥イヴイルスの関係などすぐに分かったはずだ。

レフィーヤは事件を追う〔ロキ・ファミリア〕の一員なのだから。

後は団員に連絡を取って、ファミリアに引き渡せばいい。その筈だった。だが、レフィーヤは何もしなかった。

フィルヴィスを保護し、敵からも味方からも隠し続ける。

ファミリアに対するある種の裏切り行為。

それをレフィーヤが行っていたのは……恐らく、フィルヴィスがどうしようもないほどに惨めだったからだ。

目を離せばあっさりと死んでしまうほどに、弱り切ったフィルヴィスを優しい妖精は放っておけなかった。

愚かな優しさは糾弾されるべきなのだろう。しかし、だからこそフィルヴィスの心に染み渡ってしまった。

その善意にズルズルと寄り掛かって、苦悩する彼女の傍に寄生し続ける。

かつて、高潔なつもりだった自分が見れば、恥を知れと吐き捨てる無様な姿だ。

『……絶対、助けますからね!』

やがて、彼女は覚悟を決めて言い放った。

そこにどんな決意があったのかは知らないが、愚かなことだ。

綺麗な彼女に救われる価値など、自分にはないというのに。

そう、振りほどくこともできずに無言で去るしかできなかった自分のなんと浅ましい

ことか。

結局、エニユオに見つけ出されて再びその手を血に染めようとしたのだからいよいよ救いようが無い。レフィーヤが危機になった途端、使命を放り捨ててしまったことも含めて。

いよいよ自分に失望しきったフィルヴィスが身を潜めたのは歓楽街だった。

エニユオの使命を自分の意思で捨てた自分は、もうあそこには戻れない。

最後に残ったレフィーヤとの再会の約束だけが心の支えになっていた。

「一度はレフィーヤの想いを無碍にする真似をしておいて、なんて厚顔な……」

もう何にも酔えない罪人は自己嫌悪の海に沈む。

狐人ルナルの部屋に訪れては、レフィーヤが来ていないことに落胆する毎日を送る自分は本当に度し難かった。

迷宮攻略の最先端に行く「ロキ・ファミリア」の遠征は、他派閥と比べても長引く傾向にある。

数日で戻ってくるとしたら、それは遠征隊が壊滅的打撃を受けた時だけだろう。

レフィーヤがないことを確認し、場所を貸してくれる狐人ルナルの娼婦と数口会話して去り、身を潜めて時間が過ぎ去るのを待つ。

恐らく、この世界で最も無駄な時間を浪費しているフィルヴィスが見つけたの

は偶然だった。

誰もいない大通りにポツンと立ち尽くす青い狸。

デミ・ヒューマン  
 亜 人のどれとも異なるその存在は、近づいて来る例の厄災に怯えて泣き出ししていた。

自身も厄災に関してはトラウマを持つフィルヴィスとしては、何となく他人事に思えずに助けてしまったのである。

「……ドラえもん、お前はその、異端児か？」

「その単語については分からないけど、僕は猫型ロボットだよ」

「……猫 キャットビープル 人とは違うんだな？」

フィルヴィスが助けたドラえもんは不思議な存在だった。

当初は異端児と呼ばれる喋るモンスターが何かの拍子に地上に出たのかもしれないと思っただが、話を聞く限りはそう言った存在ではないらしい。

深く詮索しなかったので、モンスターではないという事しか分からなかったが、どうもこの世界においては異端児以上に外れた存在なのかもしれない。

因みに最初に狸の獣人かと聞いた時は烈火のごとく怒り狂った。気を付けよう。

「それにしてもこの辺りで探し物か」

あまり、いい物ではないだろうとフィルヴィスは呟いた。

エニユオの使徒として、大なり小なりこの都市の暗部に関わってきた身だ。ドラえもんは誤魔化しているが、厄介事の臭いがプンプンした。

(ドラえもんの言っていた特徴からして、恐らくはクノツソスの鍵。何故こんなところに転がっていることをこいつが知っているかは分からないが……)

「ドラえもん。迂回するぞ」

「え？ でもここから真つ直ぐいったほうが近道じゃ……」

「だからこそ、だろうな。この道は見張られている」

最近是人通りが少ないとはいえ、歓楽街はオラリオの経済を回す重要な区画だ。

フリユネの噂を聞いていても、仕事のために泣く泣く訪れている人間は多い。

街ではそんな人間たちとすれ違う事が度々あったが、フィルヴィスはその中からききな臭い人物たちを度々見つけていた。

「……お前が探しているアイテムと関連があるかは分からないが、堅気ではない人間がいる。目立つのは避けた方がいいだろう」

口では関連を曖昧にしているが、十中八九闇派閥イヴイルスの人間だろう。

まるで何かを探すかのように、一般市民に紛れ込んだ彼らが歓楽街のあちこちを動いている。

(……もつとも、私たちの向かう先にはいないようだが)



幸いと言うべきか、闇派閥イヴイルスは探し物の在り処は分かっているらしい。

急いでクノツソスの鍵を手に入れば、後はドラえもんを安全な場所まで送り届けばいい。

それで、この奇妙な道中も終わる。

「あの、フィルヴィスさん」

「……なんだ」

「なにも聞かないんですか……?」

ドラえもんの問いに数瞬意味を考えた後に納得する。

確かに、ドラえもん視点だと、フィルヴィスは何の事情も分からないままついて来ているように見えるわけだ。堅気ではないが人物がウロウロしている中で。

実際は闇派閥イヴイルスと関わりが深く、狂信者たちがいくら群れようとも関係ないほど強いフィルヴィスだが、そんなことをドラえもんが知る由もない。

「別に、興味はないからな」

それを馬鹿正直に話す理由はないが。

話を断ち切り、黙って歩みを速める。これで話す気はないと理解してもらえらるう。

我ながらいやな元エルフだが、円滑にコミュニケーションしつつ、距離感を保つなど

と言う器用な真似ができない以上は仕方がない。

再び、会話は途切れ、少々居心地の悪い時間が始まるところを、ドラえもんが強引に会話を引き出そうとした。

「じ、実は僕が今探しているアイテムは悪い奴らのモノなんです。多分、見張ってる人たちはそれを狙って……」

「そうか」

「ごめんなさい。変なことに巻き込んでしまつて」

「気にしていない」

ドラえもんとしては、犯罪組織に関わる厄ネタ探しに巻き込んでしまったことを悔いているらしい。おかしな格好をした生き物だが、随分と素直な性格をしている。

フィルヴィスの口数が少ないことも、もしかしたら怒られていると思つたのかもしれない。

「……私は本当に気にしていない。しかし、迂闊に首を突っ込んでいい話ではない事は確かだ」

「ごめんなさい……僕の友達が傷つけられちゃつていて、それで居ても立つても居られなくて……」

「友達、か」

やはり素直だ。穢れたフィルヴィスとしてレフィーヤと同じく、少々眩しい。

そんな風に思ったのがいけなかったのか、つい感情を乗せてしまった眩きをドラえもんは聞き逃さなかった。

「あの、何かあつたんですか」

「なに？」

「フィルヴィスさん、なんだか悲しそうだ。お友達と何かあつたんじや……」

悲しそう、そんな言葉が出てしまうほどに自分は参つていたらしい。

何とも身勝手な話だ。散々人を殺しておいて。

「私の自業自得だ。気にする必要はない」

「……」

「友人……と言えるほどのモノではないが、そうなれたら幸せだろうと思える人を裏切っておいて、そうしてまでやろうとしたことすら果たせず、挙句の果てに再びその人に縋りつこうという自分にほとほと愛想が尽きただけだ」

何を不幸自慢しているのか。

ますます自己嫌悪に陥るフィルヴィスにドラえもんは戸惑いながら声をかける。

「よく分からないけれど……要はフィルヴィスさんは自分勝手して友達に迷惑かけたつて……」

「……そのまとも方は嫌だが、有り体に言えばそうだな」

「ちゃんと友達には謝ったの？」

「……なに？」

「フィルヴィスさん、自分を責めてるのはいいけど、それを口にして伝えてないんじゃないかなって思ってる。さつきから口数少ないし」

予想外の言葉にフィルヴィスは動揺する。

「謝って許される内容じゃないんだ」

「謝るのは、許してもらうためにやるんじゃないよ。もうしません、っていう反省を伝えるためのモノなんだから」

反省を伝えてどうなるのか。

やってしまった罪はなかったことにはならない。

レフィーヤの想いを踏みにじったことも。彼女が差し伸べてくれる手を掴めないほどに血濡れた己の手も。

「また難しく考えてる。そうやってどうせ意味ないって思いこむことが一番悪いよ」  
「……」

何も知らないお前が勝手なことを、と怒るのは楽だろう。

実際、土足で心に踏み入られる真似をされて、苛立ちで頭が熱くなっている。

だが、真つ直ぐと自分を見る目を誤魔化すことは、辛うじて残る妖精<sup>エルフ</sup>の矜持がさせなかつた。

(謝る、謝る……？　そう言えば、私は謝つたことが無かつた気がする)  
ずっと許されないことだと思つていた。

自分のこれまでやって来た罪。これからやるかもしれない罪。

その重みに押しつぶされそうになつて、無言の悲鳴を上げる。

何を今更、散々やって来たことだとそれを押し潰して、また罪を増やす。

いつも心は悲鳴を上げていた。ごめんなさいと叫んでいた。

だが、それを誰かに伝えたことはあつただろうか。

絶対に許されるはずがない。当たり前だ。だから誰にも言わなかつた。

言つたところで自己満足にしかならないと思つて。

ずっと心の中に押し込めた。

(私の罪は誰も知らない。レフィーヤにだって、私は何も言っていない)

その気づきがどれほど衝撃だつたか。

レフィーヤは察しているだろう、だが、フィルヴィス自身の口から告白はしていない。

「謝つて、それで、許されるはずが……」

「だから、許されるかどうかの問題じゃないんだ。怒られるにしても、許してもらうにし

ても、まず第一歩は謝ることでしょう？」

「……………」

ドラえものの言葉に反論する気は起きなかった。

自分の殻にこもっていたフィルヴィスはまだ、なにも始まっていないのだ。そんな結論がストーンと胸に落ちる。

「そうか……………まず、謝るべきだったのか」

掠れるような声と共に、フィルヴィスは頷いた。

許してもらうためではなく、始めるために。

「……………ありがとう、ドラえもん。少し、気が楽になった」

「い、いえ。何だか好き勝手言っちゃってごめんなさい」

「いや、言ってくれて助かった。お前はまるで先生の様だったよ」

「それはまあ、教育ロボットだしね」

「……………ん？ 『ねこがたるぼつ』とやらではなかったか？」

「うん。猫型ロボットの教育ロボットなの」

「難しいな」

心なしかドラえもんと距離が縮まった道中、特にこれと言った出来事があつたわけではない。



たら私は……」

「申し訳ございません。残念ながら見つかりませんでした」

「ク、クハハハハハハッ！　そうですかそうですか。では仕方ありませんねえ」

ヴィトーは部下を見やることなく、愉快気にミニチュアを配置し続けた。

「任務に当たった皆様には、私からよく労わっておきましょう……よくやってくれました、と」

クノツソスの鍵の紛失。

イヴェイルス

闇派閥の生命線とも言える、クノツソスを脅かしかねない失態をヴィトーは全く気にも留めなかった。

正確には、気にも留めない演技をして歓迎した。

「あの化け物が襲ってきたときはどうなるかと思いましたが、なんとか憲兵さんに落し物は預けられそうだなにより。……いよいよ計画も大詰めです」

屋台のミニチュアを鏡の前に映し、分裂させる。

地図に記された通りにメインストリートに屋台を配置していくヴィトーを狂信者たちは見つめていた。

(何でもないように過ごされているが……)

(ヴィトー様って昨日、アレされてたよな)



(まだ分かんないだろ、アレされる前のアレで逃げ切れたのかも知れないし)

(と言うかヴィトー様顔色悪くないか。いままで部屋の暗さで気が付かなかつたけど)

ひそひそと囁き合う狂信者たち。

上司をほつぽり出して逃げた手前、あの後何があつたか聞く勇気が持てなかつた狂信者たちはヴィトーに聞こえないように囁き合う。

「聞こえていますよ」

「「「ひっ!?!」」」

いつの間にか自分たちをじつと見ているヴィトーに肝を冷やす狂信者たち。

ヴィトーはいつも通りの穏やかな表情だ。

「言っておきますが最後までは行く前に逃げました」

(最後までではいったのか……)

「皆さんが私を置いて逃げた件ですが……根に持っていないですよ。ええ、根に持っていない」

(根に持っていないらしい)

時折見えるヴィトーの本音に狂信者たちが冷や汗を流す中。

ヴィトーはぼつりと呟いた。

「オラリオを滅ぼす時は真つ先に歓楽街を消しましょう」

何とも言えない沈黙が部屋を包んだ。

## 野球をしたたい！

それはノエルがのび太たちの世界について聞いて聞いている時のことだった。

遊びたい盛りの子供が友達に聞くことと言えば、やはり普段はどんな遊びをしているかだろう。

例に洩れず、ノエルも異世界の子どもたちの遊びを知りたがった。

「のび太たちは、いつつもなにをやってるの？」

「うーん。色々あるなあ……あやとりとかはよくやるよ。お金かかんないし」

「僕は絵を描いたり、手品をしたり、後は遊びつて言うかは分かんないけど……料理が好きなんだ」

「……！ ノエルも、おとーさんと、おかーさんといっしょにやった!!」

わいわいと友達同士で盛り上がっている子供たちを横目に、ドラえもんは昨日手に入れた『クノツソスの鍵』を弄びながらこの後の動きを考えていた。

(タイムパトロールが来るまでどのくらい時間がかかるか分からないし、ここはこの世界の憲兵である「ガネーシャ・ファミリア」に渡したほうがいいかな)

後でタイムパトロールが到着したとしても、「ガネーシャ・ファミリア」に協力を仰げ

ばいいわけだから、問題は何もないだろう。

いつ渡すかに関しては宛がある。

ベルに同行している護衛に直接渡せばいい。

(問題はなんでこんなものを持つているか説明するのが大変……いや、それこそベル君に口添えを頼もう。僕よりよっぽど信じてもらえるだろうし)

丁度、今日に遊びに来る予定だったはずだ。

そう頭の中を振り返っていると、のび太がドラえもんの手の中にある身慣れないアイテムに興味を持った。

「ねえ、それなに? 新しいひみつ道具?」

「いいや。ちよつとした拾い物だよ」

「ふーん。なんだか野球ボールみたいだ」

のび太はドラえもんの持つアイテムを白っぽい玉だからか、彼らの世界の球技に例えた。

実際にはこんなものをバットで打った日には、中身はこぼれ出て大惨事だろうが。

他愛のない雑談だったが、のび太の言葉にノエルが反応を示す。

「やきゆう?」

「ん? この世界には野球ってないの?」

「さあ、私は聞いたことないけど」

のび太たちの世界での一番人気のスポーツも、世界を跨げば無名の競技だ。

子どもたちを見守っていたルノアに聞いてみても、初耳と言った様子だった。

「えーと、野球って言うのはボールを投げて打つことだよ」

「??？」

「野比君、それじゃ伝わらないよ……ノエルちゃん、野球って言うのは野比君が言ったようなことを2つのチームで繰り返して、点数を競い合うことで……」

意外と説明しようとするの大変だなと思いつつも、何とか野球を説明する出木杉。

四苦八苦しながらも何とか説明しきると、概要を知ったノエルは強く興味をそそられたようだ。

「やって、みたい」

「よし、それじゃあ、早速……」

「ちよ、ちよつと待つてのび太君！」

「……やれやれ」

ノエルに野球を教えようと奮い立つのび太だったが、何やら慌てた様子の出木杉とドラえもんに止められる。

ドラえもんはノエルに「ちよつと待つてね」と言うと、のび太の耳を引っ張って部

屋の外に出た。

「なんなんだよもう……」

「いや、あれは不味いよ野比君」

「忘れてるみたいだから言うけどね。ノエルちゃんは動けないんだよ」  
「……あ」

のび太はノエルの足が不自由だったこと遅まきながら思い出す。

しまった、とばかりに口に手を当てるが後の祭りだ。

ちらりと部屋の中を覗き見ると、わくわくとのび太が教えてくれる新しい遊びに期待  
マシマシな少女の姿があった。

「う、腕だけ振れば……」

「ボール一つ投げるだけでどれだけ体を動かさと思ってるのさ」

「うう……」

「ノエルちゃん……凄く楽しみにしてるね」

「どどどどうしよ〜」

「おバカ! いつも考えなしに動いて!!」

「ここで「やっぱりさっきのアレなしで〜」と言ったらどうなるか。

自他ともに認めるおバカなのび太でも分かった。絶対にノエルが悲しむだろう。

純粋に善意で楽しいことを教えるつもりだったのび太は、もうパニック寸前だ。

「ドラえもんくん！ 何とかならないのおく!?」

「何とかって言ったってなあ……」

ノエルの体がドラえもんのひみつ道具で直せないとなると、動けない人でも野球が出来るひみつ道具を使うことになる。ドラえもんのひみつ道具を使えば誤魔化せはするだろうが……

黄金バットでできたボールを必ず打て、エースキャップで毎回三者三振になる試合は楽しいだろうか。自分なら絶対に途中で飽きると断言できた。

「やっぱり今から謝ってきなよ」

「そ、そんなあ。出木杉君」

「ごめん。僕も解決策は思いつかなくて……」

いよいよ泣きべそをかき始めたのび太。

彼に悪気が無かったことは分かっている分、ドラえもんも強くは出れない様子だった。

どうしようと出木杉が助けを求めようにあたりを見渡していると。見覚えのある白髪赤目の少年が通路から首を覗かせていた。

「ちよつとドラえもんさんに聞きたいことがあったんだけど……どうしたの?」





ドラえもんのことを誰よりも知っているのび太も、ベルが具現化したひみつ道具に首をかしている。

ひみつ道具を使った経験が豊富な彼でも初めて見るようだ。

「ん〜……説明すると難しいんだけど、君たちの時代にテレビゲームってあるじゃない？」

「うん。クリスマスにパパが買ってくれたよね」

「その技術がものすごく発達するとこれになるの」

「という事は……未来のゲーム機なのかい!？」

ドラえもんの説明を飲み込んだ出木杉は驚愕をあらわにする。

子どもたちにとってテレビゲームとは、時代の最先端に行くハイテクな遊び道具だ。

その何十年先の進化系を見ることになるのは、と彼にしては珍しく目を見開いた。

「すごいすごい! どうやって使うの?」

「やり方は簡単だよ。ベル、ちよつと……」

「ん……っ?」

「ごによごによとベルに何事かを耳打ちするドラえもん。

それに対し、ベルは「ええ!?」「いやそれはちよつと……」と慌ただしく反応を見せる。

ドラえもんに頼まれた何かに最初は拒否的だったが、根負けしたのかやがて無言で頷

いた。

「ごめんごめん。待たせたね。これには誰かの協力が必要なんだ」

「うう……大丈夫かな……」

ドラえもんはベルから距離を離すと、「本物電子ゲームドラマチックスペシャル」を構えた。

本物電子ゲームドラマチックスペシャル（以後、本物電子ゲームDS）の裏側にあるセンサーを、不安げな表情のベルに向けると、本物電子ゲームDSの上側の画面にベルが表示される。

「こーやって人を画面に映して……」

「わ!!」

ドラえもんがパシャ、とボタンを押すと、ベルはあつという間に姿を消す。

「お、おとーさん……どー……」

目の前でベルが消えたノエルが泣き出しそうになると、慌ててドラえもんは本物電子ゲームDSの画面を見せた。

「大丈夫だよ。こーやって人をゲームに取り込めるんだ」

『変な感じがします』

「おとーさん、大丈夫……?」

『うん。大丈夫だよ。……いや、自由に動けないんだけど、ホントに大丈夫なんですかコレ』

鏡を触るかのようにペタペタと画面に手を当てている（様に見える）ベル。

ベルが無事だったことを確認したノエルはホッと息を撫でおろした。

「凄いいけど……これが何なのさ」

「ノエルちゃんは実際に動くことは出来ないけど、ゲームなら体を動かさずに野球を楽しめるでしょ？」

「つまり、これでノエルちゃんを監督みたいにして、野球が体験できるってことかい？」

「そうそう、テレビゲームでも野球のやつがあるでしょ？ それと同じだよ」

（……そんなのあるの？）

（僕は知らないな……もしかしたら、また少し未来の話をしてるのかも）

発想の転換だった。

ノエル自身がやらなくても、楽しめる方法。

子どもたちが楽しむゲームなら、問題なくプレイできるだろう。

「こうやって9×9、合わせて18人をゲームに取り込んで野球ゲームを作ろう」

「ようし!! やるぞー!」

「ただし、言うまでもないことだけど、人をゲームに取り込むなんて真似、簡単にやって

いい事じゃない。ちゃんとお願いして、受け入れてくれた人だけ……」

「ドラえもん……もう、野比君行っちゃったよ」

「なんだって!?!」

気が付くと、ドラえもんの手の中から本物電子ゲームDSが消えていた。

ついでにのび太も忽然と姿を消していた。

「また勝手なことをして!! いつつ、そうやってロクなことにならないんだ!」

「あはは……はあ……」

ブンブンと憤慨するドラえもん。

出木杉も苦笑いを浮かべようとするが、顔が引き攣ってしまったている。

「そ、それにしても、こんなひみつ道具があるならどうして出さなかったんだい?」

「それは簡単だよ。僕、あのひみつ道具持ってないし」

「え?」

話を逸らすために出した話題だったが、予想外の答えに驚く出木杉。

ベルのスキルはドラえもんのひみつ道具を具現化することではなかったのか、と疑問を浮かべた。

「別に僕だってすべてのひみつ道具を持つてるわけじゃないし、ベルのスキルがひみつ道具を具現化することなら、僕の持ってないひみつ道具がスロットに現れてもおかしく



「もう、色々怖いけどワールドを闘技場にセットー!」

モンスターファイア  
怪物 祭の舞台となった「ガネーシャ・ファミリア」の管轄である施設。

通りすがりのガネーシャから許可をもらい、特別に野球場として使わせてもらうことになったのだ。

因みにガネーシャはその後、ゲームに取り込まれた。恩を仇で返す所業である。

もう怒られてしまえ、いや、僕も怒られるだろうけど、と思いながらドラえもんは取り込まれた人たちを解放した。

「素材オーブーン!」

その瞬間、虚空から突然人と神が現れる。

折り重なるように倒れ伏す彼ら彼女らの服装は、緑の服とオレンジの服の二つに分けられている。

「……」

その中で、緑の服を着たベルが死んだ目をして倒れていた。

その上にはヘステイアとリリが乗っかっている。

「あの、色々言いたいことはあるんだけど、まず一つ言わせてもらっていい?」

ちらり、とベルは自分の後方を恐る恐る見る。

そこにいたのは2 Mメドルを超える巨体。巖いわの様な猪人ポアズがいた。

もつと分かりやすく言うよと【おうじゃ猛者】がいた。

「ナニシテクレテンノ?」

「強そうだから選んだ」

「もおおお!! もおおおおおおおおおおおおおおおつっ!?!」

(後で押さえつけてでも謝らせよう……)

今まで自由に行動できなかった反動か、のび太が兎に角自由だ。

ベルはオツタルばかりに注意を向けているが、その隣でこちらを凄い形相で睨んでいる黒髪の猫キャットヒール 人も不味い気がする。

「ふにやにやつ!?! お兄様!?!」

アーニヤが辺りで一緒に倒れていた酒場のウェイトレスたちから、頭を蹴られた形になりながら叫ぶ。

何やら因縁があるらしい。漫画ではちつとも分からなかったが。

「おい、ベル。どうなってるんだよ」

「私たちも状況が把握できないのだが……」

「つていうか屋台誰もいないじゃないか……ヤバイ」

ヴェルフが、こんなワケ分かんないことはお前のひみつ道具が原因だろうとベルを問いたです。

ミアハとタケミカツチは全く状況がつかめていないようだ。

というか、タケミカツチは絶賛クビの危機でそれどころではない。

「……取り敢えず、コピーロボットでなんとかしておこう」

ドラえもんによって、タケミカツチ解雇と言う致命的な展開は回避しつつ、いよいよゲームが始まる。

画面上には【豊穡の女主人】vs【ファミリア連合】の文字が表示された。

「それじゃあゲームスタートだ。ノエルちゃん、本物電子ゲームDSとタッチペンを持って」

「う、うん」

「頑張れノエル！」

早速始まるのかと緊張するノエルを、ちやつかりゲームに取り込まれることを回避しているシルが応援した。

プレイの掛け声が本物電子ゲームDSから響くと同時に、ベルたちの体が勝手に動き出し、闘技場で割り振られたポジション通りに配置されていく。

「なるほど、異世界のスポーツをやるうってことか」

ここまでの話の流れで、大まかな概要を掴んだヘスティアは最初こそ混乱していたが、そこは流石は神と言うべきか、早速この状況を楽しみ始めていた。



「のび太君、話を聞くにこの鉄の棒を振って投げられたボールを打てばいいんだろ？」  
「うん。ノエルちゃんが操作するからヘスティアはその通りに動いて」

「チエスの駒になった感じか、珍しい経験だし面白そうだ」

「良くも悪くものんびりとした気性のヘスティアらしく、これもまた未知だと楽しもうとする。」

意気揚々とバッターボックスに向かうが。

『チーム【豊穣の女主人】一番 ヘスティア。チーム【ファミリア連合】ピッチャー オツタル』

「……」

「あ、ムリ。ボク、送還されちゃう」

マウンド上に立つ巨人を前にして呑気な笑顔が凍り付く。

全知零能たるヘスティアが幻視したのは粉微塵になる近未来。

早速女神の心が折れた。

## 野球でつながる絆

唐突だが人間を生物界の頂点に君臨させている要素とは何か。

分かりやすく人間が他の生物に勝っている点と言えば頭脳だ。しかし、当たり前だが殺し殺されの世界では呑気に頭を使っている余裕はない。

頭を使って自分たちに有利な状況を作り出せるのは、あくまでも準備期間があつてのこと、人類が生まれた当初、その余裕が初めからあつたわけではなかった。

ならば、その頭脳を活かせるだけの余裕を作り出したのは一体何かと言う話になる。その答えは単純明快。攻撃可能範囲だ。

詰まる所、投擲である。

牙や爪などでは到底届かない距離からの攻撃。

これがどれだけ一方的なものであるか等、語るまでも無いことだろう。

投石機カタパルトにも似た人の柔軟な腕こそが、人間の最大の武器なのだ。

のび太たちの世界では野球選手と呼ばれる人間は、時速160kmもの剛速球を投げることが出来る。それを神フアールナの恩恵を得た、それもレベル7という頂天に立つ者がやつたらどうなるか。

ヘステイアは空気の断末魔の声と共に理解させられた。

「無理無理無理無理……」

割れた、と表現するしかない。自然界に会ってはならない不自然な音がボールよりも遅れて飛んできた。

当然、身体能力一般人以下の糞雑魚ナメクジ駄女神に反応できるはずがない。

ヘステイアは全てを諦めた表情で涙を流した。

「クソゲーじゃないか……」

チーム【豊穣の女主人】は早速お通夜である。

そもそもこのチームは零能の神が3人もいる時点でバランス調整がおかしい。

「なんで俺がこんな目に……」

だがクソゲーは向こうも同じらしい。

都市最強の投擲攻撃を喰らうことになってしまったモダーカが、闘技場の壁に減り込みながらこの世の不条理を嘆いた。

受け止められるか馬鹿、と言う彼の言葉は本物電子ゲームDSには届かない。

飽きないようだという事でゲームはイーニングだけだが、彼は生き残ることが出来るだろうか。

「これ、あてれるの……?」

ヘスティアは本物電子ゲームDSを操作するノエルのタッチペンによって動くが、ノエルは全く当てられる気がしなかった。

しかし、隣でアドバイスをするのび太はその野球知識である戦法を教える。

「ノエルちゃん、下の画面をこうやって押さえてみて」

「( )う……う？」

「お？ おおお？」

ノエルが言われた通りに通りにすると、ヘスティアはバットを両手で横に持ち、頭の上に星が回っているモダーカ力の構えるグローブの前を陣取る。

俗にいう、バント作戦だ。

「つてちよつと待てー!? 顔寄せちやうんだけど！ さつきより間近にボール通るんだけど!」

「……」

「うおおい!? 無視して投球体勢に入るなアー!」

喚くヘスティアをよそに第二球を放つオツタル。

因みに、ノエルが操作するチーム【豊穣の女主人】とは違い、チーム【ガネーシャ・ファミリア】は自動で動いている。オツタルは悪くない。

「ぎゃああああああつ!」

案の定、吹き飛ばされるモダーカ。

ヘスティアはツインテールが風圧で自分の顔にバシィッ！ となっただけだが、涙が止まらなかった。

「だ、大丈夫なのかい？ どう考えてもモーターカさん試合できそうにないけど」

「自、分は……モダーカ……ガクッ」

ついにノックアウトしてしまったモダーカがお医者さんカバンで治療される中、チーム「ガネーシャ・ファミリア」の次なるキャッチャーは……

「……俺がツツガネーシャだあああああ!!」

「駄目ー!! S等級<sup>ランク</sup>ファミリア壊滅しちやああああああう!!」

何故かガネーシャであった。

都市の憲兵まさかのピンチに騒然となる一同。

オツタルすらも動揺している。

「のび太君っつ！ これは本当に不味いから!？」

ベルの必死の訴えに、ドラえもんが流石に動いた。

ノエルから本物電子ゲームDSを貸してもらおうと、ピコピコとボタンをいじり、設定画面を開く。

「もうこうなったら一番弱くしよう」

設定画面の『オツタルレベル』の表示を最低の1に変更するドラえもん。

すると、オツタルの姿が威厳あるものから見るからに貧相に……と言うかヘナチョコに変わる。

分かりやすく言うとも一期EDに出てきた簡単イラストのオツタルが、頭に日の丸の旗をぶっ指して鼻水垂らしている。これは酷い。

先ほどまで打って変わって勝てそうになったオツタルの姿にヘステイアは元気を取り戻す。

「あ、あのアレンさんも強いから設定直したほうがいいよ」

「!？」

シルの笑顔と共に放たれた一言にアレンは弾かれたようにシルの顔を凝視する。

まるで何かに裏切られたかのような表情の猫<sup>キヤットヒール</sup>人は、抵抗もできずにオツタルと同じ運命をたどったのだった。

そして始まるチーム「豊穡の女主人」の反撃。

カキンカキンカキーンと景気のいい音が響くが、当のベルたちは気が気ではなかった。

（これは打つても大丈夫なのでしょうか……）

（後が怖いんだけど……）



「せめてひみつ道具を使わせて!!」

「いや、それはルール違反でしょ」

「22世紀なら大丈夫なの!」

のび太はバランス調整と言うものがまるで出来てない。これではノエルが野球を面白く思うはずがない。

そんなドラえもんの懸命な説得にのび太は……

「じゃあドラえもんは代えようか」

無常なるピッチャー交代を提案した。

凄い目でドラえもんが見ていることにも気が付かず、のび太は「誰と代えよつか?」とノエルに意見を聞く。

ノエルはうーんと悩んだ後、最も信頼できる人物を選んだ。

「おとーさんにする!」

「ノエル!? 信頼は嬉しいけど、僕じゃドラえもんさんと五十歩百歩……」

『チーム【豊穣の女主人】ピッチャー交代。ベル』

愛娘からの信頼の高さに涙が出そうになるベル。

レベル2の冒険者が太刀打ちできそうなのが、ガネーシャとヘナヘナ【フレイヤ・ファミア】しかない。



ガネーシヤは気にしないだろうが、「フレイヤ・ファミリア」に許してもらえるかは未知数。

この試合が終わるためには3人をアウトにしなければならぬが、次の次がよりにもよってアレンだ。今の弱体化した状態なら打ち取れるだろうが……あなる前の剣呑な様子からしてタダでは帰してもらえないだろう。

「か、体が勝手に〜」

行きたくないとどれだけ思っても、本物電子ゲームDSはそんなベルの訴えは無視して体を勝手に動かしだした。

そしてマウンドに立つ羽目になったベルは顔がドラえもんのように青い。

打球が自分の方に飛んで来たら間違はなくお陀仏である。

チーム「ガネーシヤ・ファミリア」のバッターはハシヤーナ。レベル4だ。

「坊主、顔色凄いで」

「代わってください」

野球のことは未だに分からないだらけだが、小細工でレベル2がレベル4をどうこうできるはずかない。

【豊穡の女主人】のウエイトレスたちの方がどう考えても適任なのに……とベルが考へてる間にもものび太とノエルが作戦を話し合った。

「どうすればいいの?」

「うーん。ストリートだと多分打たれるし、ここはカーブで……」

「いや、野比君。ここに何かあるよ」

「え?」

二人のゲームプレイを後から見ていた出木杉がここで待ったをかける。

出木杉は戸惑う二人を尻目に画面をタッチしていき、『必殺技』のメニューを開いた。漫画とかでよくある魔球をこれで投げられるかも」

「おお! それなら凄い!」

「まきゅーすごい」

ベルが使える必殺技は『速球』『ファイアボルト』『アルゴノウト』。

ゲージの分だけ使うことができるようだ。

「どれを使いたい?」

「ふあいあーぼると! おとーさん、これでモンスター一杯倒してた!」

「ちよつと待てちびっこ共。その理由だと俺も倒されることに……」

「じゃあ、ファイアボルトにしよう」

「聞けよ!」

ハシヤーナの訴えを聞き流しつつ、ベルの必殺技を発動させる。

「うっ!! 腕が勝手にっ」「ファイアボルト!」

砲声によって放たれる一条の雷炎。

電光石火の速攻魔法は唸り声を上げてハシャーナに向かう。

(ちよつと待て今動けな)

バットを構えた姿勢のまま固まるハシャーナの顔面に炎が直撃した。

「熱ちちちちちツツ、アツチイイイイイイアアアアアツツ!!」

威力が抑えられていることと、レベル4の頑強さによって大きなダメージにはなっていないが、熱いものは熱い。

のたうちまわるハシャーナの横でそこそこの速さのボールが横切った。

『ストライイク! ストライイク! ストライイク! バッターアウト!』

「……セコイ」

鳴り響く本物電子ゲームDSの音に紛れて誰かが言った。

自分だってやりたくてやっているわけではないと、ベルは泣きたくなかった。

「次はアレンさんって人みたい」

プスプスと焦げた匂いを醸しながらベンチに戻っていくハシャーナ、入れ替わる形で現れたのはヘナヘナアレンだ。

子供の落書きみたいな作画のまま、枯れ葉のようなステップでバッターボックスに

入っていく。

風が吹いたらそのまま飛んでいきそうなくらいに頼りない足取りである。

「こんな兄様みたくなかったニヤ……」

チーム【豊穡の女主人】のキャッチャーがグローブで顔を覆う。

外から眺めているシルはニコニコだったが。

「よし！ この勢いのまま三者三振だ！」

「……ん！ つぎは、これ」

必殺技がお気に召したのか、ノエルは再び必殺技のアイコンを開く。

そして、ベルのもう一つの力である【アルゴノウト】を発動するのだった。

「このまえよんだえほんとおなじ！」

（あれ、このスキルって反動が凄いんじゃないかな……？）

タラー、と嫌な汗を流す出木杉がベルの表情を伺う。

ベルの目から光は消えていた。

鐘の音が辺りに響く。

ボールを持つ右腕に光粒が収斂していき、蓄力が開始される。

「よし、この画面を擦って必殺技発動だ！」

「がん、ばるー！」

てやー！ と少女は気の抜ける声を発しながらタツチペンを上下に動かした。  
シヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカ  
シヤカ……

「おい、糞兔、いつになったら終わるんだ」

「……多分、後2分くらい」

「長えよ馬鹿」

一向に必殺技ゲージが溜まる気配がない。

それもそのはず。【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>は蓄力した分だけ威力を増す。<sup>チャージ</sup>

数秒の蓄力<sup>チャージ</sup>など必殺を名乗るには程遠い。

その特性は本物電子ゲームDSでもバッテリー受け継がれていたらしい。

「つ、つかれた……」

女の子の細腕には余りにもキツイ作業だ。

辛さと作業の単調さに、ノエルは既にタツチペンを投げ出しそうになっている。

「うーん。無理してやるのもなんだし……休憩しようか」

『タイムー！』

本物電子ゲームDSから響いた音声に従ってベルの体がビタリと停止する。

腕に光粒を纏わせた状態のまま。

(う、動けない……!)

「腕の痛みがなくなるまで休んでよ」

「うん」

(ちよつと待って、それまで僕ずつとこの状態!?)

プルプル震えながらスキル発動を留めるベル。

【英雄願望】の力を収斂させるといふ効果は簡単に起こせるものではない。

スキルによつてベルからは発動中は常に体力と精神力を消費させられるのだ。

今よりずっと練度が上がれば蓄力の維持は簡単にできるかもしれないが、今のベルには難しい注文だ。ゴリゴリと削られている体力と精神力にベルは悲鳴を上げるが、子どもたちには届いてくれなかった。

「やきゆう……まだよくわからないけど、みんなすきななの?」

「うん! 野球はみんな大好きさ!」

子どもたちは皆、親に野球の道具一式を買ってもらうのが当たり前であること。

大人は好きな球団の話になると、大声で怒鳴り合う位に熱中すること。

そして、子どもも大人もテレビで試合をやっていると夢中になつて観ているということ。

のび太は野球の熱を少しでも伝えようと、身振り手振りを交えてノエルに説明する。

お世辞にもその説明は上手くなかったが、そこにある熱はノエルにも伝わったらしい。

「いっばい、たのしいがあるんだね」

「うん！ 僕の周りだけじゃない。いろんな国や年齢の人が……ううん、もつと言えば未来のロボットだって夢中になっちゃやう凄いスポーツなんだ」

そう言うと、のび太は何かを懐かしそうに思い出していた。

まるで遠くに離れてしまった友を想うかのような表情。青空に向けた視線の先にその姿が写っているのだろうか。

「のびた……？」

「……あ、ごめん、ノエルちゃん。ちよつと友達を思い出していて……」

「……さみしいの？」

じつとのび太を見つめる灰色の瞳は少年の心の揺らぎを見透かしているようだった。

普段はぼーっとした少女だが、時折人の心の機微に聡い。

「……うん。一緒にいた時間は短かったけど、一杯楽しいことがあった。野球を教えてもらったりもしたんだ」

「……」

のび太の言葉にドラえもんは無言だった。

彼もその日のことを思い出しているかのように目を閉じ、思考を記憶の海へ飛ばす。

「でも、平気だよ」

「どうして?」

「いつか、戻って来てよくなったたら、また会えると思うから。そしたらもつと野球を教えてもらうんだ」

いつかの再会を夢見るその笑顔に、ノエルも安心したように笑った。

「どんな、ひと、なの?」

「口が悪い」

「怖い人?」

「うん。でも好きなんだ」

「……よく分からない」

「僕も自分で分かってないから同じだよ」

のんびりと思いい出の人物について話し合う二人。

晴天の下、いつまでも続くかと思われたが……

「あの、二人とも……」

「ん? なに、出木杉」

「ひでとし?」





それを遠くから眺めていたローブの人物は呆れたような……それでいて懐かしむような素振りを見せた。

「ドラえもんがこの世界に来ていたからまさかとは思ったが……お前もいたのか、のび太」

なんでよりもよつてこの漫画に来ているんだと頭を抱えたくなるが、文句を言いたくなるが向こうもそんなこと分かるはずがないのだから、言うのは筋違いだろう。

いいさ。いいとも。のび太たちがそこにいるのが分かっていたらややすい。

考え方を変えればこれは自分に有利な展開だ。

「恐竜ハンターどもとジャックにはなんとかバレない様にしないと……」

彼らを見つけたのが自分で良かった。

面倒くさがりな人間たちに代わって、街で雑務を引き受けていた事がこう繋がるとは。

自分の運も捨てたものではないらしい。

しかし不用心なことだ。

この世界の最強派閥である「フレイヤ・ファミリア」。

そのワンツーが揃って弱体化など、闇派閥イザイルスにでも見つかっていたら一大事だ。

無論、自分は報告するはずがないが。

「……でも、そうか。覚えていてくれたんだな」

自分のような薄汚い時間犯罪者のことを。

そう思うと鉄でできた体にジン、と熱がこもる。これが目頭が熱くなるという現象か。

「のび太、お前に会えてよかった」

溢れ出す気持ちを飲み込むように空を見上げた。

こうなってしまった以上、更生して普通の暮らしに戻るには時間がかかりそうだが、それでもいい。

正しいことをしよう。

不思議な絆を育んだ少年を裏切らないために。

「さて、それはそれとしてどうするかなこの状況」

アレンの目が吊り上がりすぎて明日の顔面筋肉痛が気になる。

正直怒られて当然だが、ここで黙って見ているのも気が引ける。

ウンウンと考えていたローブの人物だったが、やがて「あー面倒くせえ」と投げやりな言葉が出てきた。

「こうなったらとことん混沌とさせて有耶無耶にするか」

そういつて取り出したひみつ道具は人の顔の様な形だった。

あたまについている角によって悪魔にも見えるかもしれない。

そのひみつ道具から発せられる電波はその場にいた人々を……

そこからあったことを語ることは本人たちの名譽のために伏せておこう。

ただ、闘技場にいた面々はギルドの前で幼女への愛を叫んだベートを笑えなくなっただけである。

# 【延長戦】ベル・クラネル二つ名命名!! 【遊び尽くせ】

「二ヒヤツハー！ 祭りの始まりだあああああ!!」

「い、い、の暇神どもが……」

前回、デナトウス神会における恒例行事であるランクアップした眷属への二つ名の命名が行われた。

その際にメインディッシュになると思われたのが、新たなる世界最速鬼レコードホルダーであるベル・クラネルの二つ名だ。

レベル2昇格を僅か1ヶ月で達成するという前代未聞の偉業。

その前の記録が一年であるという事を考えれば、その異常性も伝わるだろう。

本来ならばまず不正が無かったのか徹底的に調べ上げるところだが……主神はあのヘステアである。

様々な顔を使い分ける神にしては珍しく、裏表のない誠実なじんかく性格……と言えば聞こえはいいが、実際の所、のんびりとし過ぎて致命的に謀に向かない性格なのだ。

天界では最上級の荣誉であるオリュンポス十二神の座を、ギスギスしたのは嫌だという理由でディオニュソスにあっさり譲ったこの女神が、偽りの名誉のために不正をする

等あり得ない。

よって、少年の上級冒険者の仲間入りは速やかに認められた。

……とここまででは良かった。

(案の定、ベル君を玩具として目を付けたなこのロクデナシ共)

安牌と確定したのなら、遊びたくなるのが神と言うモノ。

〔ヘスティア・ファミリア〕はつい最近興されたばかりの新米ファミリアだ。

通常、世界最高峰の眷属が集まるオラリオでいきなり派閥を形成する神は少ない。

勢力の強さⅡファミリアの権力となる迷宮都市で、ゼロから出発すれば、とんでもない困難が待ち受けているのは火を見るよりも明らかだから当然である。

しかし、ヘスティアはその辺をまるで考えず、いきなりオラリオに直行したのであった。

世間知らずここに極まれり。その代償が今である。

「二ヶ月だけじゃギルドもまともな資料作れなかつたみたいだからなく」

「お楽しみをお預けされたときはムカついたけど……調べれば調べるほど、出るわ出るわおもしろー情報」

ニヤニヤと神々が手元の資料を見る。

因みに今回の資料はそれぞれが持参したものだ。

嫌な笑いに囲まれるヘステイアはぶっちゃけもう帰りたいかった。

「どいつもこいつも遊ぶことしか考えてない。ミアハやヘファイストスがいてくれるとは言え、数の暴力には逆らえない所が民主主義の悪い所である。」

「そんじやー始めるでー。司会は前回に引き続きロキや」

その中でも特に禍々しい笑いをする一柱。

アンチヘステイア派の筆頭であるロキが場のまとめ役と言うのがなお悪い。

眷属こどもたちが遠征中で暇を持て余すこの道化神がこの機を逃すはずがなかった。

「んじやー手始めにい……こん餓鬼のやらかし発表会や!!」

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

冒険者の二つ名を決めるためにその来歴を調べることは当然。

僅か一ヶ月と言う所要期間でありながら……或いはだからこそ、ベルの冒険は濃い。

おまけにランクアップ後も様々な騒動を引き起こしているのである。

話題のタネには尽きないだろう。

「はいはい！ 恩恵ファルナ刻んで真つ先にホームぶつ壊された感想はいかがでしょうヘステイア様」

「はいはい！」

「例の魔石大量発生の時さ、他の冒険者たちは魔石に弾き飛ばされたらしいけど、白髪のがキだけは魔石に埋まってたらしいよね。不思議だね。まるで溢れ出た場所にいたみ

「たいだよね」

「クツソ速いゴブリンが現れたときに、後ろでシャカシャカキモイ動きで走る白髪頭をうちの眷属が見たってよ」

「そういやロリ巨乳たちが前に住んでた地下水路にレイダーフィツシュいたな。それはそうと5階層でレイダーフィツシュが泳ぎまくったことがあってな。いや、特につながりはないと思うけれど(〇)」

「リヴィラの街がワケ分からん要塞になってたつて噂もあるよな。……あれれ？ ベル・クラネルの到達階層って13階層までじゃないっけくおかしいぞお？」

「やっぱギルド前でのロリコン宣言は外せねえだろ。あれで餓鬼どもの中にもロリの素晴らしさを理解し始めたやつが現れている。人類が神々オレらに追いつく日も近いぞ」

「幻のじゃが丸君つてぶつちやけこいつが原因だろ。正直、本気で味が気になるから食べさせてほしいんだが」

「【劍姫】が幽霊引き連れて【フレイヤ・ファミリア】と異能バトル繰り広げてたのもこいつ原因？ おう、キリキリ吐けやコラ」

「この前の闘技場周りの騒動もお前らじゃね？」

「歓楽街の厄災……」

「……その話は止めよう」



「アツハイ」

マシンガンの如く次から次へと話題が振りかかってくる。

畜生、やつぱりこいつら情報網はきっちり持っていやがる、と悔しがるヘスティア。もう誤魔化すのは無理だろう。

いくつかはバレてないのか、ヤバすぎて触れないようにしているのかは分からないが、完全にベルは玩具認定を下されたと言える。

「はい、一旦(ワン)までー。随分と暴れたなアドチビィ〜？ 今から二つ名が楽しみや」

蛇のように細長い舌をちろちろ見せて笑う一応(ワカ)女神を、ぐぬぬと震えながらヘスティアは睨みつける。

他の神々も頭の中で用意してきた『あれ』な二つ名を出す機会を今か今かと待ちわびていた。

司会権限で地獄の釜を開こうとロキが声を上げようとした瞬間、涼やかな美声が場の神々に染み渡った。

「ちよつと、いいかしら」

「……ああん？」

小さく手を上げたのはフレイヤだ。

いい気分になっていた所に水を差されたロキは不機嫌そうにフレイヤを見下ろす。

並の神ならば震えあがってしまうような剣呑な様子だが、流石は「ロキ・ファミリア」と互角の「フレイヤ・ファミリア」の主神と言うだけあって、全く動じた様子が無い。

「こんな可愛い子に酷い二つ名を付けるのは可哀そうだわ。確かに騒ぎを起こした回数が多いけれど、ちゃんと成し遂げた偉業も見てあげなくては不公平でなくて？」

「……」

「それとも、自分の眷属こどもの記録を抜かれて嫉妬しちゃった？」

「……つち、色ボケが」

フレイヤの挑発染みた発言にヒヤヒヤする面々だったが、当のロキは珍しく反発することもなく矛を下げた。

都市最大派閥の喧嘩に幹込まれなくてよかったと、神々が胸を撫でおろす中、ヘスティアだけはフレイヤの顔を複雑そうに見ていた。

(多分、この段階でフレイヤはもう……)

タイムテレビによる情報を想起するヘスティアの視線に気が付いたフレイヤは不思議そうに女神を見返す。

自身の情報が今後の切り札であり、ウィークポイント弱点であると自覚するヘスティアはその視線から顔を背けた。あの女神相手に駆け引きなど望むべくもない。

今回は助けられた形になるが、警戒を緩める理由にはならないだろう。

「俺はフレイヤ様を支持するよ！」

そんなヘスティアの内心を知ってか知らずか、ヒューヒューと口笛を鳴らしながら親フレイヤ派として振舞う神物じんぶつが一人。

ヘスティアの同郷であるヘルメスだ。

一見すると美の女神にのぼせる一般的な神だが、そうでないことはあのタイムテレビの映像で分かっている。

（ヘルメスは色々複雑なんだよな……敵じゃないんだろうけど、味方でもない）

今のとぼけた発言も、ロキとフレイヤ間の険悪な空気を解消するために敢えて道化になつたのだろう。

二柱もそれが分かっているのか、ヘルメスの発言に特に反応することは無く、場は自然とベル・クラネルの二つ名で遊ばない、と言う空気が出来上がっていた。

都市最強派閥の不興を遊びで買う馬鹿はそうそういないのだ。

「んじやー真面目に考えてみるか」

「でも真面目な二つ名って考えてみるとなかなか出てこないよな」

「つーか、ギャグ抜きでコイツの来歴見るとヤベーわ。何で生きてんの」  
モンスターリリイア

怪物 祭激戦区における立ち回り。

地下水路における閥派閥幹部級と思しき者との遭遇。  
イヴイルス

謎の獣人（つーかコイツ【おうじゃ猛者】）じゃ……と言いかけたおバカさんはフレイヤの絶対零度の笑みを向けられた）の強襲。  
ヴエンデツタ

白髪鬼率いる狂信者たちによるリヴィラの街攻防戦。

【ソーマ・ファミリア】との戦い。及び酒守ガンダルヴァの単独撃破。

仮面の人物・闇派閥との三つ巴。

【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】の抗争の巻き添え。

異常事態に次ぐ異常事態、そして隻角のミノタウロスとの死闘。

これがオラリオに来て二カ月での出来事というのだから、なんとも騒面白そうがしいことだ。

暇に殺されそうな神々からすれば、羨ましすぎる二カ月である。

「いやーこれを一言で纏めんの?」

「無理じゃね?」

「エピソード一つをピックアップするか……それともベル・クラネル個人の特徴を二つ名にするか」

「特徴って言うことやっぱマジックアイテムだよな」

「あとはトラブルメーカーってことだな」

うーむ、と腕を組んで考え込む神々。

やったことは凄まじいが、何分活躍は二カ月しかないせいで、分からないことだらけ。

へスティアから根掘り葉掘り聞こうにも、既にそう言った空気ではない。

KYな言動は神々の得意とするところ……とは言え、一度決まった話を掘り返すのは料ではない、と考えているのか、自重している神々にへスティアは心の内で溜息をつく。

「はい考えタイムしゅーりよー。とつと二つ名決めてお開きにするでー」

「ふふつ、悪戯できなくて不貞腐れているのかしら」

「やかましいわ」

ロキの投げやりな司会によってベルの二つ名候補が発表されていく。

「はいじゃあまず俺から。王道にマジックアイテムの底知れなさから【秘奥の少年】」

「やっぱマジックアイテムの数の多さがウリだよな。まずは【千の小道具】にして、コ

イツの成長に応じて二つ名を変えていくのはどう？」

「いや、ベルきゅんは巻き込まれ体質な点にこそ注目すべき……！【狂乱野兎】！」

「次のアポロンの標的になってしまったか……ドンマイ」

次から次へと出てくる二つ名候補。

最後のアポロンは真面目な二つ名なはずなのに、嫌な予感がするのは何故だろうとへスティアは冷や汗を流す。

「はは……そうだな、【魅成年】<sup>ネバー・ボーイ</sup>と言うのはどうだろう。これからも俺たちに楽しい物語を魅せてくれる少年であることを願って」

帽子のツバをいじりながらヘルメスは提案する。

その言葉の裏に、【最後の英雄】への神意かつほうを宿して。

【不思議玩具箱】  
ワンダーボックス

「清々しいほどにベル君を玩具にする意思を隠さないなロキ!」

「ドチビの眷属なら遠慮する理由はないわ」

円卓に足を乗せながら、ロキはケラケラと笑う。

道化神らしく、細めた瞳の光にその心の内を見せず。

「……せつかくだし、私からも提案させて貰おうかしら?」  
【超兔耳】  
エスバウル

「……なあ、エスパルってなんだ?」

「フレイヤ様の権能に関わる概念なのか?」

「生と死、美と愛情、豊穰、黄金の力、魅了セイズ……そして、月だっけか」

フレイヤは静かに、そして謡うように口にした。

その由来は誰にも分からない。

「ミアハ、タケ、君たちからも何か案をおくれよ」

「ふむ……では、【奇妙な兎兄】ストレンジ・ラビッツはどうだ? いつか、【ヘステイア・ファミリア】が大きい

くなり、ベルの弟や妹に当たる団員が現れることを祈って」

「なら俺からは【開封兎】エルベイスで。その力を多くの人の希望となることを期待させてもらう」

ヘステイアの友神ゆうじんは友神の唯一の眷属けんじゆに期待を託す。  
女神と紡ぐ、眷属けんじゆの物語に。

「……おーし。じゃあここまでで締めk……」

「ヒヤアツ!! 我慢できネエエエエエ!!」

波乱が予想された神会テマトゥスは予想に反して話し合いは綺麗に終わる。

筈だったが、ここでシリアスな空気に我慢できなかつた神が現れた。

「どいつもこいつも二つ名無難過ぎてつまんねえ!!」ロリコン・アナウサギ「幼女好兎」!!」

「(いや、やりやがった……!)(……)」

用意していた兎吉びよん吉がその後の調査で中古だったことが分かったことで、フラストレー

ションが溜まりまくっていた。

そこにシリアスな流れ、彼は弾けた。

由来は勿論愛の告白だ。

「……」

「フ、フレイヤ様がアイツのことめっちゃ見てるううううう!!」

「終わったな」

「完全にフレイヤ様の言葉無視しやがったからな」

「ぶはははっ!? ええでええで! 良くやったモブ神!! アホやけど」

(やっぱり最後まで持たなかったか)

一柱の勇氣ある行動により再燃する神会。デイトゥス

これは暫くかかりそうだな、とハステイアはげんなりと円卓に突っ伏すのだった。



## プリズンブレイク2123

「(ファイアボルト) ツ！」

ダンジョン14階層。

当初の予定からちよつと遅れて到達階層の更新を果たした僕は、迫りくるアルミラージュに対して存分に速攻魔法を見舞った。

最初の死線である13階層に来たときは、上層とは全く勝手が違う環境に戸惑ったものだったから、今回も気合を入れて臨んだが、幸いなことに14階層はそこまで突飛な激変を遂げることは無かった。

モンスターの質は確かに高くなっていったけれど、想定通り。

事前の打ち合わせに従えば確実に倒すことが出来る程度の相手だった。

(当然、油断はできないけどっ！)

炎への耐性を持つヘルハウンドたちを、ヘステイア・ナイフ神様の刃で処理しつつ、僕は新たなモンスターが生成されていないかあたりを見渡した。

中層の敵には慣れてきたとは言え、人間慣れ初めが一番怖い。

取り敢えず、今は異常事態は起きてないらしい。このまま上手くいけばいいけど。

「相変わらず速いな、坊主」

ハシャーナさんの呑気な評価の言葉が聞こえる。

自分より遙かに上の冒険者にそう言ってもらえるのはありがたい。

彼から見ても今の戦況は安定しているということだ。

「これで終わりだ！」

ヴェルフの大刀がヘルハウンドを真つ二つに断ち切り、戦いは終わった。

流石14階層大量ですね、とリリが魔石を拾い始めると、ヴェルフが話しかけてくる。

「もう中層じゃ敵なしじゃないか？」

「そんな訳ないと思うけど……」

「いや、謙遜しなくていいさ。お前はもうレベル2でも上位陣並だ」

オラリオに来る前に、それなりに名の知れた騎士を見たことがあるというヴェルフは今の僕はそんな人たちと遜色ないと太鼓判を押す。

「二つ名も貰えるわけだし、期待の新人は絶好調だな！」

「ははは……二つ名かあ」

「やっぱ楽しみか？」

「うん！ だって神様たちが考えてくれるんだよ!! キつと僕なんかじゃ想像もつかな

いほどカツコイインだろうなあ」

今、丁度このダンジョンの真上。

デイトゥス

バベルの塔で開かれていた神会で僕の二つ名が決められている。

資料が間に合わなかったとかで、態々僕の二つ名のために追加の神会が急遽捻じ込まれたんだとか。恐れ多いことこの上ないけど、すごく嬉しい。

(神様は悲壮な顔で「無難な二つ名を……」って言ってたけど、やっぱり貰えるなら神様のセンスが炸裂した凄い奴がいいな)

こう、「我が名は!!」とか大声で言ってみよう。

強敵を前にして名乗り合うのは大昔からの浪漫だし。

そんな馬鹿な事を考えていた時、ハシャーナさんが声をかけてきた。

「坊主、敵が湧いてない今のうちに話しておきたいことがある」

「はい?」

「……俺は離れていたほうがいいか?」

「別にいいさ。お前がペラペラ喋る奴じゃないのは分かる。……話つて言うのは例のひみつ道具を売る男についてだ」

「!」

ヴィトーから聞き出したひみつ道具を売買する謎の人物。

それは既に「ガネーシャ・ファミリー」に報告済みであった。

そして、話し合いの末、僕を囿にヴィトーが紹介した男の正体を突き止めようとしていたのだ。

まさか気取られたのかと緊張する僕はハシャーナさんの次の言葉を待った。

「お前にひみつ道具の取引を持ち掛けた男、ヴィトーとやらが闇派閥であることが確認された」

「な……!?!」

「それも、幹部級の立場らしい。先日、歓楽街でウチの奴らとやり合ってたな。お前のダチのドラえもんによってその名が明かされたんだとよ」

正直、怪しいとは思っていた。

「だけど、たまたま街で出会った人物が闇派閥のメンバーとは……」

「その、向こうは僕のこと……」

元から知っていて近づいたのではないか。

恐らく、この世で唯一の闇派閥イヅイルス以外のルートからひみつ道具を手に入れることが出来る僕に、ひみつ道具を売買する人物が偶然接触したというのは出来過ぎている。

そう思った僕だったが、以外にもハシャーナさんは煮え切らない態度だ。

「分からん。お前の話を聞いた限り、お前たちの出会いに作為的なものはなかったが、な

んでお前の取引に応じたのかがまるで判断できん」

イヴァイルス 闇派閥のことだから何も考えずに悪事を行っているのかもしれないが、幹部級ともなれば嫌でも警戒するしかない。

作戦は中止だろうか、と考える僕だったが、告げられたのは作戦続行。

「おい、イヴァイルス 闇派閥の幹部なんてヤバイ奴が出てくるなら、中止すべきだろう!」

横から話を聞いていたヴェルフが堪らず口を挟む。

ファルナ 恩恵を刻まれた眷属とは言え、一般の協力者を巻き込んでいい状況じゃない。

そんな正論に対し、ハシャーナさんは苦々しく返答した。

「ガネーシヤの勘だ」

「……」

ハシャーナさんのまさかの言葉にヴェルフは目を見開いた。

神様の勘、と言うものは最も根拠のない無視できないモノ、と表現される。

論理的な根拠など求められないが、彼らがそれを口にした時は何か起きる。

ましてや、今回は言った神がガネーシヤ様なのが問題だった。

群衆の主と名高い、都市の守護者。

市民の安全を最優先とするそんな神がポリシーよりも勘を優先した……?!

オラリオに来てまだ日が浅い僕でも分かるその異様さ。

ヴェルフも激昂するよりも先に啞然とした。

「シャクティ団長も、幹部たちも反発していたが、全員嫌な予感は隠せなかった」あのガネーシャ様がこんな行動を取る。

なにか、尋常ならざる事態が迫っているのではないか……？

誰もがそんな靄がかかったような危機感を抱く。

ガネーシャ様はそんな眷属たちに対し、「この機を逃せば手遅れになるやもしれん……」と普段の調子を捨てて重苦しく語ったという。

「……」

「鍛冶師の坊主の意見は尤もだ。俺だつて頭じゃ納得していねえ。だが……ああつ、糞つ……」

ガシガシと頭をかきむしり、言語化できない感情を捻り出そうとするハシャーナさんは苛立つように吐き捨てた。

ハシャーナさんの葛藤は尤もだった。

どう考えても正当性のない作戦強行。それを自身の主神がらしくなく唱えているのだ。

盲目になっているわけではないが……何かあるのではないか？ そう思ってしまうのは無理も無いだろう。

「こんな曖昧な根拠で作戦に参加させようなんざ戯けた話だ。無視してくれても構わん。そうされて当然だからな」

ある意味、主神からの命令に対する否定を口にするハシャーナさん。ただ、無理だ。

胸に芽生えたこの嫌な予感、目を背けちやダメなものだと思ふ。

十中八九錯覚なのに、そう、思ってしまった。

「その危機感とやらに、外の世界の連中が関わっているのか？」

「交戦したイルタによれば幹部級のヴィトーは精々レベル4、そんな奴がガネーシヤ様に危機感を抱かせるような大それた計画を立てれるとは思えんし、おそらくそうだろうな」

そう言って、一枚の紙を僕に手渡す。

上質……とは違う。妙に洗練された技術によつて作られた紙質に違和感を覚える。

こんなきれいな紙はオラリオで流通していただろうか。

「こいつは手配書だ。と言つてもこの世界のモノじゃねえ」

「……まさか」

「ああ、外の世界から届いた、向こうの世界……さらに言うとその未来の手配書だ」

手配書にはデカデカと精密な絵が描かれていた。それは人の顔だ。

V字型の髪型に頬には十字の傷。

何人もの人を殺してきたかのような冷たい眼光に、絵にもかかわらず、僕は背筋に冷たいものを感じた。

「名は殺し屋ジャック……ドラえもんたちの世界でその悪名を轟かせた時間犯罪者だ」

「手配書があるってことは……」

「ああ。向こう側の世界では全世界規模の指名手配犯だよ」

「全ツ……!?!」

オラリオにも指名手配をされる犯罪者と言うものはいる。

ちよつと違うかもしれないけど、前に暗黒期の情報を集めた時に度々耳にした「疾風」と言う冒険者もブラックリストとして、賞金がかけられていたはずだ。

それでも、指名手配を行っているオラリオから離れば捕まる可能性はグツと減る。

ギルドや「ガネーシャ・ファミリア」が追いかけてくるとしても、他所の国には他所の国の自警の組織があつて、越権行為と見なされる。

態々他のところで法を犯した人間を捕まえると言うことは少なく、犯罪者は大抵の場合はそのうやつて国外に逃れようとするのだと言う。

(でも、全世界ってことはその大原則が覆されてるってこと……!)

それはつまり、全ての国を敵に回していると言うことだ。



たった一人を捕まえるために、そこまでやる程のことを仕出かしたのかと思わず絶句した。

「そんな奴がひみつ道具を持ってこの世界に来ているのか……」

「っ！」

ヴェルフの呟きに息を呑む。

ひみつ道具を悪用すれば何だってできる。それこそ、正義と悪のパラーバランスをひっくり返すことだって。

「ああ、しかもこの世界に来ているのはこいつだけじゃない。ヴィトーの話に出てきたドルマンスタインや、街の目撃情報から恐竜ハンターとやらもいるらしい」

「『きょうりゆう』ハンター？ ちよつと、なんのことだか……」

「大昔に絶滅した生き物を乱獲している時間犯罪者らしい。俺も話を聞かされただけでよくは分かかっていないんだが」

密猟者と言う存在に近いのだろうか、とベルは自分の中の知識と擦り合わせる。

間違いなく、犯罪者だ。

「もしかして、ドラえもんさんが戦ったロボの人物も分かっているんですか？」

「いや、分かっていない。候補が多すぎるからな」

「どう言うことだ？」

「一番最初に言った十字傷の男……殺し屋ジャックが向こうの世界でとんでもないことを引き起こしたのさ」

世界にその名を馳せる犯罪者だったジャックだが、22世紀の警察は極めて優秀。あつという間に追い詰められたらしい。

このまま逮捕されるのも時間の問題かと思われたジャックだったが、ここで起死回生のために恐ろしい行動に出た。

「な、何があつたんですか」

「このままでは捕まると悟ったジャックは発想を逆転させたんだ」  
「逆転……?」

「このままでは捕まる。ならこつちから外の憲兵……タイムパトロールに攻め込めれば良  
いってな」

「は?」

常識はずれの結論に僕とヴェルフの声が重なった。

僕たちの世界で言えば、一犯罪者が「ガネーシャ・ファミリア」に捕まるのは嫌だから、逆に襲撃してやろう……って考え付いたってことだ。

「正確にはタイムパトロール自体と言うよりは刑務所を狙ったらしいがな」

「なんでそんなことを?」

逆に捕まってしまう可能性も高いのに意味が分からない。

刑務所を襲うことにどんなメリットがあるというのか。

「刑務所を如何こうしたところで捕まるのは時間の問題じゃ……」

「いや、はつきり言ってリスク極まりない行動だったが、タイムパトロールの目を一時的に逸らすことには成功しちまったんだ。なにせ、そこに収監されていた時間犯罪者をジャックは片っ端から逃がしやがったからな」

「……ヤバイだろそれ」

「ああ、ご丁寧にタイムマシンとか言う時間をさかのぼるひみつ道具を全員に渡したらしくてな。タイムパトロールは蜂の巣をつついたような大騒ぎなんだよ」

当然、野に解き放たれてしまった時間犯罪者の対処のために、ジャックへのマークは甘くなる。

その際にジャックは解放した何人かと共に過去の世界に逃れたと言うワケだ。

「なんでこの世界に来るんだよ……」

「ドラえもんから話を聞いた出木杉の受け売りだがな、恐らくはこの世界が隠れ蓑なんだよ」

「そうか、過去の世界かつ、その中の漫画の一つに逃げ込んでいるなんてそう簡単に分からない。だから、この世界は犯罪者が逃げ込むには都合がいいんですね」

「らしいな。迷惑な話だ」

ハシャーナさんはうんざりした様子でため息をついた。

別世界から犯罪者が逃れてくるなんてとんでもない事態だ。気持ちは痛いほどわかる。

(でも、確かにとんでもないことだけど……ガネーシャ様の勤が働くようなことをその人たちがやるのかな……?)

僕は犯罪者の心理に詳しいわけじゃないけど、憲兵から逃れる犯罪者と言うのは目立たないようにするものではないだろうか。

ここが物語の中で、悪事が外の世界からでは分かりにくいとは言っても、迂闊な行動を取るの是不自然に感じた。

「しかし、そいつ一人でよく監獄破りが出来たな。異世界の刑務所がどの程度の所かは知らんが、一人で如何こうできる相手じゃないだろ、普通」

「そのためにこれまたぶつ飛んだ騒ぎを起こしたらしいからな。ミュータントがどうか、俺にはよく分からん内容だったが、国連軍とやらが出動する騒ぎになったらしい」

「国が連なるってまさか」

「世界中の国が協力し合う軍隊ってことだ」

「外の世界で何が起こってるんだ……?」

無謀としか思えない監獄破りを、滅茶苦茶な手段で成功させてしまった殺し屋ジャック。

それに協力するドルマンスタインと恐竜ハンター、そして謎に包まれたローブの人物。

……後は、彼らの取引相手である闇派閥イヴイルスの幹部、ヴィトー。

何かが始まろうとしている。

ダンジョンの闇が、そんな嫌な焦燥感を掻き立てた。

## 今、この幸せをカメラに

ここに一つのテープがある。

未来の技術など使われていない、ただのテープには飾り気のないラベルが貼られている。た。た。た。

ラベルには油性ペンで『ダンまち世界の思い出』というタイトルが付けられており、何度も再生されたのか、ラベルの端は少し繕よれている。

映像が流れ始めた。

22世紀の技術が使われるひみつ道具と比べると、その映像は拙い。

色はくすみ、ノイズも所々混じる。

しかし、そんな技術の不熟さは作り物ではない生活感を際立たせた。

やがて、映ったのは木造りの酒場。

撮影者はカメラに慣れないのか、映像は所々ブレる。

『えっと、出木杉君これでいいの？』

『はい。僕が撮影するので、みんなはレンズ……この丸いところの正面に来てください』

『これで今の光景が記録できるんだ。やっぱり異世界って面白いね、ノエル』

『うん!』

初めに映ったのは3人。

白髪の少年は心配そうな瞳で撮影者を見ている。

反対に、鈍色の少女は楽し気に少年の隣に座り、自身の膝に乗る幼い少女に話しかけた。

どこか、鈍色の少女に似ている幼い少女は快活に頷く。

『僕たちの世界だと、こうやって家族の団欒を記録するんです』

『一般家庭で買えちゃうんだ、それ』

『流石にまだ高くてみんな持つてゐるわけではないですけどね』

『うちにもないな』

『コラッ、撮影中は静かに』

画面外で会話する二人を見て、映像に写っている3人は苦笑する。

撮影者の咳払いが聞こえた後、映像は幼い少女に寄った。

ソワソワと、カメラが来る時を今か今かと待ちわびていたと、見ただけで分かる幼い

少女はカメラが近づいた途端、慌てて本を読むフリを始めた。

『今、何をしているの?』

『えほん、読んでもらってる!』

『何て題名?』

『あうこのーと!!』

『ふふつ、ノエルは本当にこの絵本が気に入っちゃったね』

カメラに見せつけるように絵本を突き出す幼い少女は、映像を残すという新鮮な行為に興奮しているようだ。

笑顔を浮かべて、せわしなく体を動かしている。

『ひでとしも! いっしょに、よも?』

『うん、それじゃあ……』

『コラコラ〜! 次はミヤーたちの番ニヤ!』

『うわあ!』

何者かにカメラを動かされたように、カメラの映像がグワんツと変わった。

そこに写っていたのは茶髪の少女だ。鈍色の少女と同じ、緑の給仕服を身に纏う少女にはある特徴があった。

猫のような耳が頭部に存在し、背中からチラチラと揺れる尻尾が見えるのだ。

何も知らない第三者が見れば作り物にしては妙に感情豊かに動くそれらに首を傾げたことだろう。

『アーニヤだニヤ!』



『クロエだニヤ!』

撮影者からカメラを強奪したらしき少女は、酒場のカウンターにカメラを置くと映像に映り込む。

画面の外からひよつこりと現れた、同じく猫のような特徴を持つ黒髪の少女と息の合った挨拶をするペラペラと話し始めた。

『いやー、遂にやって来てしまったニヤ、ミヤーたちの時代が』

『これでオラリオ中の美少年たちはミヤーの虜。夢のシヨタハーレム生活の幕開けニヤ  
!』

『あの、別にこれはオラリオ中に流す予定はありませんけど……』

『『ニヤンですとーーー!!』』

ガビンと二人揃って同じ反応をする。

二人はあつという間にやる気を霧散させ、外向け様に繕っていたキャラクターを放り投げた少女たちは、ダラダラとダメ人間丸出しの仕草でカンペを投げ捨てた。

『あー解散解散ー。せつかくのシヨタハーレム計画がパアニヤ』

『じゃあ、返してもらいますね』

『……ハッ!! よく考えたらこれにミヤーを撮すより、美少年たちのあーんな姿やこーんな姿を記録すべきだニヤ!! ふひひつ、先ずは少年! さっそくこの『かめら』にむ

かってその臀部を……』

『寝言は寝て言おっか？』

『あ、はい。ちよーし乗りましたすみません。だからその迫力ある笑顔止めるニヤシル  
』』

『……ねえ、なんでクロエさんはシルさんに怒られてるの？』

『人として恥ずかしいことをしたからだよ、のび太くん』

画面外から伸びた腕に首根っこを捕まれて、ズルズルとフェードアウトする黒髪の少女。

何かの断末魔のような悲鳴があがるなか、画面に映り続ける茶髪の少女はカタカタと体を縮込めて震えていた。

『アニーニヤ？』

『フンミヤー!! ミヤーは悪くないニヤー!!』

『ふふっ、まだなにも言っていないのに』

『おかーさん。こわい……』

『ノエルは良い子にしようね。あのシルさんは僕もこわい』

茶髪の少女が画面に駆け寄ると、映像はガタガタと揺れる。

先程のように景色がぶれ、再び先程の三人が映った。

ただし、様子が変わらないのは笑みを浮かべる鈍色の少女だけで、幼い少女と白髪の少年は何処か及び腰になっている。

『えつと、それじゃ気を取り直して』

『改めましてこんにちは。シルでーす!』

『……』

『んー? 二人とも声が聞こえないですよー?』

『べ、ベル・クラネルですっ』

『ノ、ノエルはわるいこじやないよ……?』

三人の中のヒエラルキーが確定したところで、撮影者が強引に話題転換を試みる。

『ど、ドラえもん、例のものを』

『……この空気のなかでだすのー?』

しようがないなーと何かを弄る音がした後、画面にニユツと人間ではない手が現れる。

その手が持つ石鹼を受け取ったベルは戸惑いを口にした。

『これは……?』

『ちよつとしたパーティーグッズだよ。それで顔を拭いてみて』

『えへへ……』

『嫌な予感がするんだけど』

結局、声の指示する通りにする白髪の少年。

石鹸をもって厨房の水洗い場に行くために画面からフェードアウトし、そして「ほ、ほわああああ!」と言う間の抜けた絶叫が響いた。

『ちよ!?! 目が取れたんだけど!?!』

『それは福笑い石鹸って言うってね。顔のパーツを外して福笑い……って言うてもこつちだと伝わらないか。えーと、パズルみたいにできるひみつ道具だよ』

『僕たちの世界だと正月は皆福笑いで遊んでいるんだ』

『異世界恐ろしいトコロッ?!』

盛大に福笑いと言う文化に対しての誤解を異世界に植え込みつつ、取れたパーツを拾い集める子供の手。

『それじゃあ福笑いやろうかノエルちゃん』

『や、やだ!』

『そりやそうだ』

白髪の少年の顔がジャガイモの様になってしまつて、ショックを受けているらしい幼い少女。

撮影者や子供たちの説得により、白髪の少年にはなんの害も無いことを約束すると、

恐る恐るパーツに触れる。

『これを、どうするの……?』

『目隠しをして、ベルの顔に戻るようにつけるの!』

『目隠し!? 絶対ちゃんとした形になりませんよね!? 僕の顔大丈夫なの!? ちゃんと元に戻……』

顔のパーツが取れた白髪の少年をスルーしつつ、説明が終わる。

早速少年の特徴的な深紅ルベライイトの目を持ちつつ、鈍色の少女に目隠しされた幼い少女はえいや!! と少年の顔に貼り付けた。

『……ぷぷぷ』

『ちよつと!? なんて笑ったんですかりユーさん!』

『も、申し訳ありません。クラネルさん』

画面外の人物の噴き出す音はテープの中にも記録されていた。

余りの不意打ちに思わず漏れてしまった口内の空気。途中でなんとか漏れないように口を閉じたのだろうが、そのせいでより我慢できなかった音が際立っている。

『ニヤハハハハっ!? 白髪頭が目がぐりんって!』

『ご、ごめん冒険者くん。これは我慢できない』

先ほどフェードアウトした茶髪の少女と、これまでの人物たちとはまた別の少女の

声。

バンバンと机を叩く音が二人のツボの嵌り具合を表す。

『つぎは、これ』

『あははっ、ノエルく、それは鼻じゃなくて口だよ』

『え？ まちがえ、ちゃった？』

『ノエルはうつかり屋さんだな』

『鼻じゃなくて口ってどういうこと?! 僕の顔今どうなっているの?!』

オロオロと右往左往する少年の顔。

悲鳴じみた声が国産するが、その声を発している口は顔の中心にある。

鼻と間違えたにしても高すぎる位置だ。

いよいよ爆笑の渦となる一同。

少年の顔は火を噴きそうなほどに真っ赤だ。

『私もやつちやおーつと。それ!!』

『あだあ!?! シルさん!?!』

『僕は鼻を口にする!』

『のび太君!?!』

『ミャーにもやらせるニャー!』

『あーーーーれーーーーー!?!』

もみくちやにされながらパーツを顔にくつつけられていく。

ゴボルトの群れもかくやといった勢いにあつという間にバランスを崩した少年はされるがまだ。

そして、最後の一つである眉毛をノエルがくつつけ、ようやく福笑いは完成を迎える。

『絶対直ってないって視界でもう分かるんですけど』

『ニヤハハ!?! ニヤハハハハハハハハツツ?!? ガフツ!!』

『笑いすぎて過呼吸起こしてるニヤ。やっぱアーニヤはアホだニヤ』

白髪の少年は残念ながらと言うべきか、やはりと言うべきか、元には戻っていないなかった。

遠すぎる両目の距離。

鼻と間違えた口は耳輪の頂点よりさらに上に付けられている。

口代わりに付けられた鼻は横向き……かと思いきや、なんとまさかの縦。顎からはみ出ている。

眉毛は目の近くに張ろうとしたようだが、右眉は前髪的位置に置かれ、微妙に浮き上がり、左眉は右斜めに寄りすぎている。端っこが微妙に目と重なっているため、痒そうだ。逆さまつ毛と言うレベルではない。

ここうして世にも奇妙な顔となってしまった白髪の少年。

さぞ、落ち込んでいるだろうと思いきや。

『お、おとーさん、ごめんね』

『うう……』

『ちや、んと、なおすから……』

『ううう……がおお！ ゆるさないぞー！』

『きゃー！』

意外とノリが良かった。

失敗を気にしていた幼い少女に気を遣わせないためでもあるだろう、まるでごっこ遊びに出るモンスターのようによい少女を追い掛け回す。

幼い少女は悲鳴を上げて逃げ回るが、その表情は笑顔だ。

『僕に捕まったら仲間にしてやるー！』

『わーベルさんに捕まっちゃうー！ 逃げろ逃げろ』

『まずはのび太君からだ』

『グエー』

『次に捕まるのは誰だー！』

『レベル4のミャーがレベル2の白髪頭に捕まるワケが……ニヤハハ!? ちよ、顔で笑



わせるの反則……!』

顔のパーツが滅茶苦茶なので走りにくいというハンデがありながら、運動神経が残念過ぎる眼鏡の少年と、余裕ぶっこいていたら迫りくる変顔に笑って自滅した茶髪の少女が捕まる。

するとどこからともなく例の青い手が石鹸を画面外から渡し、二人も福笑いの末にそれぞれの変顔を披露することになった。

『こうなったら出木杉も道連れだ!』

『あつ、あんなところに答案を持った先生が』

『えつ、どこどこ……つて騙したな出木杉ー!!』

眼鏡の少年が同年代の少年少女を追い掛け回す。

全く捕まえることは出来ていないが、3人とも笑顔だ。

『ニヤハハ!! おミヤーたちも仲間になるニヤー!』

『ちよ、本気で追ってくんバカ猫!』

『少年だって子供の手前自重してたニヤ!』

『くつ、こうなれば二人を犠牲にしてもシルを守らなくては!!』

『『おい、馬鹿エルフ!』』

微笑ましい子供たちとは対照的に、こちら側は割と必死だ。

何故かブリッジの体勢で追いかけてくる茶髪の少女から汗を流しながら逃げる一同。お互いを盾にしながら我先にと逃げるが、その口元には皆、笑みを浮かべている。

『コリアアツ!! 五月蠅いよアホンダラア!!』

さて、営業はまだしていない様子とは言え、酒場で騒いでいる以上、当然の様に酒場の店主が現れた。

樽が擬人化したかのような巨体を持つ、酒場の女主人はその外見通り、騒いでいた少年少女たちには恐るべき存在であつたらしい。

各々慌てて釈明の言葉を口にします。

『ゲエ!! み、ミアかーちゃんツツ!!』

『ち、違うんです!!? これには訳が……』

『そうだよ! 仕事をさぼってビデオ撮ってたなんてことないよ!』

『へえ? 仕事をさぼって? 随分と偉くなったもんだ……ブフツ!!』

一斉に振り返つた3つの変顔を不意打ちで見せられた女主人が思わず怒気を霧散させる。

腹の外から絞り出すような豪快な笑い声が響き、つられて他の面々も笑つた。

誰もかれも笑っていた。

悩みも、不安も、未来も、別れも、今だけは全てを忘れて。

幼い少女も、満面の笑みを浮かべ、この一時の幸福を享受する。

そんな思い出の一ページを記録し続けていた画面は、プツン、と切れる。

ここから先に映像はない。どうも、充電切れになってしまったらしい。

1976年の最先端とは言え、未来から見ればまだまだ発展途上の技術。稼働時間も

ひみつ道具とは比べ物にならなかった。

ガチャリ、とビデオテープを取り出す。

辺りは先ほどまでの笑い声の残響すら残らないほどに静かだ。

そんな静けさを悲しむように、ビデオテープに光が反射する。

ビデオテープはケースに収められ、『ダンまち世界の思い出』のタイトルが見えるよう

に、また元あった場所に保管されたのだった。

## おとり捜査

いつもと同じ街。

いつもと同じ通り。

いつもと同じ人混み。

……なのに、どうしてこんなに遠い光景に思えるのか。

まるで別世界に迷い込んでしまったような戸惑いが纏わりつく。

(……………ここで良かったよね?)

渡された簡素な地図は頭の中に叩き込んでいる。

記憶力はお世辞にも良いとは言えない僕だけど、ああいった取引の場所を記したメモをいつまでも持っていては先方はいい顔をしない。ヴィトーさんにも暗記したら捨てるように言われていた。

何故、そんな風にするかと言うと、万が一にでも見つかって、「ガネーシャ・ファミリア」やギルドに見つかれば、取引のオーナーである闇派閥イッイルスは大きな損失を余儀なくされるからだ。

だから、闇派閥イッイルスの指示書と言うのは読んだら捨てる、が鉄則なんだとか。……まあ、こ

れはシャクテイさんの受け売りだけだ。

先方に不快に思われ、交渉が「ガネーシャ・ファミリア」の面々が踏み込む前に潰れてしまうことを避けるために、その鉄則に従ったワケだが、正直後悔している。

頭の中の地図は薄っすらとぼやけていて、思い出そうとするたびに何処かが欠けている気がしてならない。

これまで行ったことのある階層の地図は大体覚えていけるといりりの記憶力が途轍もなく羨ましかった。

「……」が目的地のはず」

キヨロキヨロと辺りを見渡す。

取引、と言っていたから人の目のない建物とかを想像していたが、そこにあるのは少々小汚いが近くに浮浪者もポツポツと見える至って普通な建物。

とても悪い人間たちがお金をやり取りする場には見えないが。

「お待ちしていました」

「……」 ヴイトーさん……」

突然背後から声をかけられて、弾かれたように振り返る。

そこには、相変わらず感情の見えない能面のような笑みを張り付けた人がいた。

「では、私について来て下さい。ドルマンスタインさんの下へご案内いたしますよ」



幹部とは言え、ヴィトーさんが何処まで関わっているかは不明な以上、彼を捕まえ、さらに情報を全て引き出したところで、そのまま手掛かりが途絶えることになりかねない。

「だからこそ、今回はクラネルに囮の役目を依頼した」

「つまり、ヴィトーとやらが坊主を連れてアジトなりなんなりに足を運んだと同時に檢舉しようってワケか」

分かりやすくもいい、と好戦的に歯を見せて笑うのはイルタさんだ。

ヴィトー一人ではなく、闇派閥イヴィルスの団員の一斉檢舉。これならば、当たりの情報を持つ構成員を見つけられる可能性は高くなる。

「なにより、ドルマンスタインと言う異世界の時間犯罪者を捕まえることが出来れば、確実に敵の計画を知ることが出来るだろう」

「ひみつ道具なんてものをバラ撒いている奴だ。計画の中枢にいることは間違いないだろうよ」

「ああ、モンモンカータの言う通り、時間犯罪者こそ、ガネーシャの勤の原因だろう。ドルマンスタイン・恐竜ハンター・殺し屋ジャックの三名、及びそれ以外にもいるであろう異世界人は最優先で捕獲しろ」

「はい！……って、自分はモダーカですっ!？」

シリアス  
真剣な時くらい間違えないうでください!?

テイさんはあるアイテムを取り出した。と訴えるモダーカさんを無視して、シャク

「それと、今回の作戦の文字通り『鍵』となるのがこれだ」

「……ドラえもんさんが持ってきた敵のアジトの鍵」

Dの文字が浮かび上がった赤い眼の様なマジックアイテム。

タイムテレビでこの不気味なマジックアイテムを使ったところを、実際に見たらしきドラえもんさんが僕の知らない所で恐ろしい戦いを乗り越えて手に入れたものらしい。

彼の友達としては、そんな時に力になれなかったことが申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

……ところで、ドラえもんさんは一体どんな戦いを経験したのだろうか。

なんか、物凄い震えていて、おかしな呪詛カースをかけられたみたいだった。

共闘したって言うイルタさんは微妙な表情で「一応、お前も悪いからな？」って言うていたけど……みんな？

「坊主のおとり捜査でこれまで所在が不明だった闇派閥イツイルスの巣穴アジトを見つけ出し、俺たちはその鍵で確実に侵攻するってワケか」

「この作戦は未知数な部分も多い。生半な戦力では万が一もあるだろう。よって、私を含めた精鋭で片を付ける」



「団長も出陣するんですか」

「ガネーシャの勘だ。ここで手を抜くのは愚策だろう」

僕の思考が横道にそれた間にも話は進む。

【ガネーシャ・ファミリア】からすれば突然出てきた不確かな情報なのに、今できる最大の対処を行うつもりらしい。

派閥の最高責任者にして最大戦力であるシャクテイさんが直々に動くとは。

「クラネル。お前はアジト内に我々が侵攻したと同時に撤退しろ。戦いになる前ならば、お前の足で逃げ切れることは十分にできるはずだ」

「でも、ヴィトーさんは僕より絶対に強いんじゃないか……？」

「だからこそ、奴は我々を無視してお前だけを追う事はしないでだろう。レベル1だった頃ならともかく、上級冒険者というものはそうやすやすと殺せるものではない。レベル2としては上位に位置するお前が相手ならば尚更だ」

閥派閥イウィルスは自分勝手な悪党の集まりではあっても、通すべき筋や果たすべき責務と言うものは確実にある。

むしろ、秩序や法が届かない裏社会だからこそ、同業者間での掟には厳しい一面があるらしい。

自分の都合だけで動いて、やるべきことをやらない奴は、悪党からもそっぽを向かれ

るものなのだと言った。

「無論、そのまま逃げ続けろとは言わん。クラネルはモスキュートが保護を行い、速やかに撤退するように」

「だ・か・ら！ 自分はモダーカですっつ！！」

「……？」

「なんで不思議そうな顔をしているんですかア!?!」

息苦しい会議の場でも相変わらずなモダーカさんに思わず笑みがこぼれる。

目ざとくそれを見つげられて、僕はモダーカさんにくしゃくしゃにされたけど、少しだけ肩の荷が下りたかもしれない。

その時、ふとあることに気が付き、拳手をして質問する。

「すみません。質問いいですか」

「ああ、なんだ」

「ドラえもんさんの協力は貰えないんですか？ ひみつ道具は僕より断然安定して使えますし、ドラえもんさん自身、色んな冒険を乗り越えています」

ドラえもんさんやのび太君はそれこそ、世界をどうこうしてしまうような強敵と幾度となく戦っている。

この戦いでも頼りになるのではないか、そんな僕の問いかけにシャクティさんは悩む

間もなく即答する。

「彼らの手は借りない。ここは私たちの世界で、この戦いは私たちの義務だ」

彼らの力を侮っているわけではないだろう。

ひみつ道具について逐一報告を受けていたシャクテイさんは、もしかしたら僕以上にひみつ道具の可能性に気が付いているのかもしれない。

だが、その上で彼女はその選択肢を取らなかつた。

ドラえもんさんにも、のび太君にも、命がけの戦いをする理由はないのだから。

「それに、彼らも狙われる可能性がある」

「え？」

「先日、我々にこの手紙が届いた」

【ガネーシャ・ファミリア】の中庭に落ちていたという手紙。

近くに落ちていた風船はドラえもんさん曰くひみつ道具らしい。

【長距離手紙風船コントローラー】と言う名のそれに括りつけられていたのは、宛名もない封筒。そして、その中に入れられていた飾り気のない紙だ。

そこには、新聞紙の切り抜きでこう書かれていたと言う。【豊穰の女主人】のガキを頂く、と。

「そんな……!？」

「ガキ、というのが具体的に誰のことか分からん以上、あの酒場の子どもは保護対象だ。戦いには尚更巻き込むことは出来ん」

「ノエルやのび太君たちは大丈夫なんですか？」

「ああ、既にあの酒場の主人には連絡済みだ」

なら大丈夫だろう、と納得する。

ミアさんは自分で言ったことは無いけど、明らかに第一級冒険者級。

下手をすればシャクテイさんがいない【アイアム・ガネーシャ】より安全な場所が【豊穡の女主人】だ。

「しかし、この手紙を出したやつは何が目的なんですかね？」

「……？ モダーカさん、それはどう言う」

「犯罪予告なんて虚構フィクションだけの話だ。実際にやれば警備が厳しくなるだけで、犯罪者側になんの得もない。精々自己顕示欲が満たされるくらいだろう」

確かにモダーカさんの疑問は最もだった。

予告が無い方がミアさんの警戒心も下がってやりやすい筈なのに、なんでだろう？

ミアさんの力を知らない？ それでも手紙を見た途端、【ガネーシャ・ファミリア】なりギルドなりを頼ることなんて想像がつくはずなのに。

「……陽動か？」



ロス通り程度ならば、迷うことは無い」

「と言う頼もしすぎる返答を返された。」

ダンジョン攻略と言うと「ロキ・ファミリア」の専売特許のイメージがあつたが、流石はS等級ランクファミリアの派閥だ。

それに、ダイダロス通りは良くない噂も多い。

今回のような尾行は初めてではないのだろう。

（今もちゃんと追つて来ているみたい。やっぱすごいな、熟練ベテランの冒険者つて）

背後から感じる視線に勇気づけられる。

ちゃんと追いかけてもらえているのはありがたい。

ヴィトーさんは気が付いていないみたいだし、このまま作戦は成功するかもしれない。  
い。

「はいです」

案内されたのは地下に繋がる隠し通路。

その先には大きな扉がある。

素材の鑑定なんてできないけれど、かなり堅そうだ。ランクアップした今でも壊せる気がしない。

超硬金属アダマンタイトと言うやつだろうか。

ヴィトローさんは懐からあの目玉のようなマジックアイテムを取り出すと、頭上に掲げた。

マジックアイテムから発せられる朱い光に呼応するように、扉が一人でに開く。

「……………すげえ」

「それでは奥に参りましょう。あまり長時間開けていると怒られてしまうので」

人口迷宮の中にヴィトローさんは躊躇する様子もなく入っていく。

少し気圧される感じはあるけど、ここで突っ立っていても仕方ないと、僕も彼に続いた。

(……………本当にダンジョンみたいだ)

隠されていた閤派閥のダンジョンの中で思ったのは、まずそんなことだ。

ダイダロス通日もダンジョンに例えられることはあつたけど、ここはもう瓜二つと  
言ってもいい。

明らかに人工的に作られていると分かる金属で造られていなければ、僕はいつの間にかダンジョンに迷い込んでいたと錯覚するだろう。

「……………あの、ドルマンスタインさんはこの先にいるんですか？」

「……………ふふっ」

僕の問いかけにヴィトローさんは薄く笑った。

それに胸騒ぎを覚えると同時に、幾つもの視線が僕を貫いた。

「!?」

「おやおや……視線に鋭い、と言うのはこう言った感じなのです。やはり文章で読むのと、実際に見るとでは随分と違いますね」

交渉事には大勢で来るのが基本なのだろうか。

いや、そうにしてもこれはおかしい。

これから交渉が始まるなら何で……視線に殺気が混じっているのか。

(畏っ!?)

偶然としか言えない出会いだったのに、初めから僕を陥れるつもりだったのか。

それともひみつ道具を探る僕を始末しようと考えたのか。

或いは閻派閥イツイルスの報復……??

その可能性を考えなかったとは言わないが、やはり衝撃は大きい。

それでも体は事前にシヤクテイさんに言われた通りに撤退のために動く。

(ありがとうつ、ヴェルフっ!)

念のためだと急ピッチで装備一式を修理し、今朝方に渡してくれた専属鍛冶師に心の底から礼を言う。

これがあれば、いろいろと小細工が出来る。



ひみつ道具と合わせれば、このアジトからの脱出は可能はずだ。  
「突撃しろ！」

後方から扉が開く音と共にシャクテイさんの号令が聞こえた。

【ガネーシャ・ファミア】も侵攻を開始したらしい。これならこの場にいる闇派閥イワイルスたちを打破することだってできる。

「……」

それでも、ヴィトーさんの笑みは消えなかった。

## 悪意たちは嗤った

雪崩れ込む「ガネーシャ・ファミリア」は、戦場の熱気を発しつつも、誰もが違和感と危機感を覚えていた。

敵が冷静過ぎる。

この侵攻は奇襲。闇派閥イヴィルスに悟られることが無い様、部隊の編成は少数精鋭とし、ベルがヴィトールと出会った後は、針に糸を通すような繊細さで尾行を続けた。

(だが、闇派閥イヴィルスの狂信者たちはまるで浮足立っていない。どれほど練度の高い眷属であろうと、想定外の攻撃には動揺するはず)

嫌な感覚に眼光を鋭くしつつ、既に始まってしまった戦いを中断はできないとシヤクティは号令と共にヴィトールたちの確保にかかる。

「いいえ、貴方方のお相手はそちらです」

だが、ヴィトールがまるで指揮者のように腕を振ると、音を立てて通路の壁が開いた。  
闇派閥イヴィルスのアジトに仕掛けられた罠だ。

「グギャアアアアアッ!!!」

「コボルトに食人花ヴィオラスの触手が寄生している！ 例の新種です！」

ベルがコボルトヴィオラスに街中で襲われた件は、既に「ガネーシャ・ファミリア」が把握済みの事件だ。

モンスターがいるはずもないオラリオに脈絡なく現れたモンスターが、闇派閥イウイリスに関わる可能性は指摘されていたが、やはり出てきたかとモダーカは盾を握る力を強める。

「盾を構えろ！」

シャクティの指示の下、憲兵たちは加工超硬金属アイル・アダマンタイトで造られた手持ち盾でコボルトヴィオラスの触手攻撃を防ぐ。

実力派である「ゴブニユ・ファミリア」の鍛冶師たちによって、秘密裏かつ突貫工事で造られたそれは、稀少金属レアメタルをふんだんに使った逸品だ。

人工的に軽量化されたことで、元の超硬金属程の硬度は失っているが、ベルの報告によれば、コボルトヴィオラスの攻撃力はどれだけ高く見積もってもレベル3下位程度。

ならば、超硬金属アダマンタイトの硬さにこだわるより、軽量化して機動力を確保するべきと言う判断の下、急遽用意されたこの防具は討伐隊全員に配られた。

防具ごと肉と骨を押し潰そうとするコボルトヴィオラスの触手だったが、上級冒険者たちの巧みな技術によって、鞭は勢いを大幅に減衰させ、弾かれた。

「コボルトヴィオラスは対処済みですか。数さえいれば上級冒険者相手でも戦えるのですが……さすがに都市の憲兵相手では分が悪い」

ベルが散々手こずった触手も、既に情報が暴かれている今は脅威になり得ない。

事前の打ち合わせ通り、触手を受け止め、勢いをなくしたそれを切断することで、コボルトヴィオラスたちを捌いていく【ガネーシャ・ファミリア】はいよいよヴィトーたちが集まる広間<sup>フロア</sup>に到達する。

(今のうちに!!)

形勢は考える必要もなく【ガネーシャ・ファミリア】が有利。

ならばこのまま急いで彼らと合流しよう<sup>と</sup>地を蹴るベル。

背後から矢や魔法を撒けられることを警戒しつつ、ベルは作戦通り全速力でアジトからの脱出を目指す。

そんな彼らに対し、ヴィトーは慌てることなく懐からとあるアイテムを取り出した。

それは、【豊穣の女主人】の従業員たちが休憩時間によく遊んでいるゲーム。

この状況には余りにもそぐわないその名はトランプと言う。

「……? なんのつもりだ?」

「気を付けろ! ひみつ道具かもしれない!」

場にそぐわない不自然なアイテム。

保護をしている少年のおかげで、それに嫌と言うほど心当たりがある【ガネーシャ・ファミリア】の面々に緊張が走った。

疾走するベルも嫌な予感を感じつつ、討伐隊まであと少しと言ったところまで迫る。「ベル・クラネルがこのまま『ガネーシャ・ファミリア』と合流するのは面倒です。』なにか、想定外の出来事が起こって彼を妨害してくれないでしょうか」

戦場の騒音の中、ヴィトーの声は良く通った。

一体何を、と困惑する間もなく、先程開いた通路の壁からコボルトヴィオラスが飛び出す。

「なっ!?!」

「まだいたのか!?!」

偶々、飛び出すのが遅れ。

偶々、誰にも察知されなかった。

余りにも都合の良いすぎるその個体が、幸運にも『ガネーシャ・ファミリア』の目をすり抜けてベルに襲い掛かる。

「くっ!?!」

一度倒した相手とは言え、今のベルにとっては身体能力的にはまだまだ格上の存在。

咄嗟に神様の刃でコボルトヴィオラスの爪を受け止めるベルだったが、続けて放たれた触手攻撃を防げない。

なんとか肩の防具で防ぐが、威力を殺しきれず吹き飛ばされてしまう。

「坊主……っ!」

「おっと、『ガネーシャ・ファミリア』が救援にいけないほどの援軍が、たった今到着すると非常に助かるのですが」

ハシャーナがベルの救援に向かおうとするが、偶々到着した極彩色のモンスターたちと狂信者の群れが広間フロアに到着する。

幸運、と片付けるには余りにも出来過ぎている。

「あの野郎まさか……っ!」

「状況をいいように操れんのか!」

二度も起きた異様な幸運。

そこから導き出される答えにハシャーナとモダーカは目を見開く。

イヴイルス 闇派閥は、考え得る限り最悪の効果を持って「ガネーシャ・ファミリア」を迎え撃っているのだ。

シャクテイの判断は早かった。

あれがどの程度の力を持つかは未知数。

だが、偶々敵を見逃す。偶々援軍が到着する。

その程度の力はあるのならば、それは無視するわけにはいかない脅威だ。

「あのひみつ道具を奪え!!」

对芋虫用<sup>ヴィルガ</sup>に用意されていた魔剣が喰りを上げる。

炎・雷・風・氷……様々な属性の魔力弾がヴィトーに殺到するが、それらが男の身を焼くことは無かった。

「『そろそろ変異体も到着するところでしようか』」

また一枚、見せびらかすように掲げたトランプが消える。

同時に床が開き、中から巨大な影が現れた。

射線上に突如として現れた影は、魔法攻撃を尽く受け止めるがビクともしない。

「超大型級のモンスター?!」

「また極彩色のモンスターの新種……!」

イルタの忌々し気な声に、ヴィトーは嘲るように鼻を鳴らす。

現れた新種のモンスターは、簡潔に言ってしまうえば食人花<sup>ヴィオラス</sup>の集合体だ。

数多の食人花<sup>ヴィオラス</sup>が折り重なり、一つのモンスターを形作る。命を冒流した形にベルは吐き気をこらえた。

「あれは実験場が開発中の新たな手駒<sup>ラボラトリー</sup>でしてねえ? 第二級冒険者クラスの実力者でな

いとビクともしない素晴らしい耐久の持ち主なんですよ。『ガネーシャ・ファミリア』ならば倒せるでしょうが……時間はかかる」

鈍色の剣を携え、ヴィトーはベルの前に回り込んだ。

ヴィトーの言葉通りなら、「ガネーシャ・ファミリア」の援護はすぐには来ない。

「しかし……恐ろしいひみつ道具ですよ。まさか、ここまで上手いくくとは」

「……っ」

「ええ、このタイミングで「ガネーシャ・ファミリア」が襲撃に来る。私がこのトランプに願った通りだ」

ヴィトーはそう嗤った。

嵌められたと悟ったベルは何処からがヴィトーの仕込みだったのかと、寒気を感じる。

ガネーシャの勘。

シャクテイの判断。

タイムパトロールとの合流が難しいタイミング。

ヴィトーの正体をあの段階でドラえもんたちが知ったこと。

歓楽街で闇派閥の持つひみつ道具の脅威を体感したこと。

あの日に起きたベルとヴィトーの偶然の出会い。

……或いは、もつと前から？

「【しあわせトランプ】、と言うそうでした。このトランプは一枚消えるごとに一つ、願いを叶えてくれるという優れものです」



予想は出来たとはいえ、出鱈目すぎる効果だ。

回数制限だって、トランプの枚数分と考えると無いに等しい。

「しかし、便利な道具と言うのはつついっつい使ってしまうモノ。既に私は結構な数を使っ  
てしまっていてね。もう49回程使ってしまったのですよ」

トランプの枚数は52枚+ $\alpha$ 。

ヴィトーの言葉が正しければ、残りは3枚程度。

これを少ない、などと思うことは出来なかった。

「……数回願いを叶えられるなら、貴方を全滅させるくらい容易いですけど、ね」

ヴィトーはカードをまた一枚、懐から取り出す。

さて、何を願いますでしょうかと余裕ぶって顎に手を添えた後、いやらしく唇を歪めた。

「こういった願いはどうでしょう? 『あの厄介な盾がなくなればいいのですが』」

その瞬間、地面が揺れた。

【ガネーシャ・ファミア】により、ヴィオラス食人花の変異体が倒されたのだ。

その巨体が崩れ落ちたことにより、地震と勘違いしてしまうほどの揺れがフロア広間で起

きる。

流石、【ガネーシャ・ファミア】。あんなに大きなモンスターをもう倒すなんて。

ベルは援護が予想よりも早く来れそうだと安堵と共に、彼らがいる方を見て、予想外

の光景に思考を停止した。

(芋虫<sup>ワイルガ</sup>が……浮いている?)

先ほどの援軍の中にいた芋虫<sup>ワイルガ</sup>。

それらが宙に浮かぶという常識外の光景は現実離れしたもので、「ガネーシャ・ファミリア」の熟練たちも目を見開き、視線を芋虫<sup>ワイルガ</sup>に固定している。

食人花<sup>ワイオラス</sup>の変異体が倒れた衝撃で近くにいた個体が空中に放り出された。なんとか現実に追いついた思考がそう結論付ける。

この一瞬の思考に生じた空白が隙だった。

宙に浮かぶ芋虫<sup>ワイルガ</sup>が想定外だったのは冒険者だけではない。

冒険者を囲むコボルトヴィオラスたちもこのような光景は予想できていなかった。

予想できていないが故に、コボルトヴィオラスと芋虫<sup>ワイルガ</sup>の間には距離が無く、必然的にコボルトヴィオラスの視界を空中に放り出された芋虫<sup>ワイルガ</sup>たちが覆う。

それを見たコボルトヴィオラスはこう思った。

ああ、邪魔だな、と。

「不味いっ!」

シャクティがこの後に起こる事を想起した時には遅かった。

視界を埋める邪魔者をどかそうと、触手を振り回すコボルトヴィオラス。

鎧の上から冒険者を叩き潰せるだけの硬さを誇るそれらは、脆いモンスターである芋虫ウィルガには耐えきれぬものではなかった。

攻撃の衝撃により弾ける極彩色のモンスターたち。

飛び散る体液の性質は溶解。

突如として冒険者たちに降り注いだ破滅の雨。

冒険者は直撃を避けるために盾で身を守るよりほか無かった。

「ぎゃあああああつ?!」

「熱いつ、熱いいいいいつ?!」

だが、手持ちの盾で飛び散る液体全てを防ぐことなどできない。

僅かな飛沫が容赦なく冒険者の体を溶かし、屈強な男たちが悲鳴を上げる。

「盾を手放せ!」

そんな中、シャクティの切羽詰まった声が響く。

何故、と疑問を覚える暇もなく、統率の取れた「ガネーシャ・ファミリア」の団員たちは団長の指示に従って盾を投げ捨てた。

そして、手元から離れた盾の姿に団員たちは指示の意味を理解する。

「加工超硬金属の盾が……っ!」

「これでも溶けるのかよ!」

まるで、炎に溶かされる蠟細工のように原形を留めずひしゃげていく盾の姿。

手放すのがおそれれば、溶解液が担い手にまで届いていたことは想像に難くない。

「あの厄介な盾はもうない！ 同胞たちよ！ 【ガネーシャ・ファミア】に世界是正の

鉄槌をつっ！！」

間髪入れずに、闇派閥から魔法や魔剣による攻撃に晒される冒険者たち。

たった一枚のトランプ、たった一度の願いが形勢を逆転させる。

「さて、次の願いは……」

「【ファイアボルト】 ツ！」

更に畳みかけようとするヴィトローを止めるため、ベルは速攻魔法を行使した。

しかし、ヴィトローは炎雷を見ることもなく、あっさりと回避する。

「お止めになったほうが賢明ですよ。私はレベル4で、貴方はレベル2。戦いになどな

り得ません」

「関係ないっ！」

ベルとて冒険者だ。

目の前の敵との力の差など感じている。

それでも、この危険な相手を放っておくこと等できなかつた。

ここでヴィトローを野放しにすれば、どれだけの被害が【ガネーシャ・ファミア】に

出るか分からない。そう分かって逃げられるほど、ベル・クラネルと言う少年は薄情ではない。

「ふふっ、ええ、そうでしょうね。そうですとも！ 貴方はそういう性格だ！」

そんなベルの決死の想いなどお見通しだと嘲るヴィトーが接近する。

ひみつ道具のカードを持ったまま、鈍色の剣を振り上げた。

当たれば間違いなく呪詛カウスに侵されるであろう剣戟を喰らうわけには行かないと、ベルは飛び退いて攻撃を躲した。

「くっ」

「ほらほら、これでどうですか？」

ヴィトーは知覚ギリギリの攻撃を続け、ベルを追い込む。

その気になれば簡単に絶命させることも可能。だが、見せびらかすように左手でしあわせトランプを弄ぶ。

（あのひみつ道具が使えれば……っ！）

活路はある。

ベルが今日使えるひみつ道具の中には「チョーダイハンド」と言う名のモノがあった。ヴィトーに不審に思われなかったために、取引前にダンジョンに潜ることは出来なかったため、試すこともできなかったが、名前からして十中八九相手の持つ物を譲ってもらえ

るひみつ道具だろう。

効果も使い方も不明なままだが、それを使う事しかベルがしあわせトランプを奪う方法はない。

(だけどっ、ひみつ道具を具現化する隙が……っ)

ひみつ道具の具現化には数秒の隙が生まれる。

レベルアップしたことによって、その時間は多少は早まっているが、格上相手に見せられる隙ではないのだ。

「おっと、遊んでばかりでは怒られてしまう」

「まっ……」

しあわせトランプを使おうとしていることに気づき、止めようとするベルを蹴り飛ばしつつ、ヴェイトーは願い事を口にする。

『ガネーシャ・ファミリアは決して逃しません』

その瞬間、団員の一人が持っていた『鍵』がドロリと溶けた。

「なっ……」

「溶解液がかかっていたのか!？」

「す、すみませんっ」

「謝るな! あの狐面の仕業だ!」

いつの間にかかかっていた少量の溶解液。

量が僅かだったせいで効果が現れるのが遅く、発見が遅れた。

これで「ガネーシャ・ファミリア」は脱出の手立てを失ったことになる。

「いけませんねえ。そんなに私の左手ばかりに注目していると……！」

消えるしあわせトラップに注視しすぎて、疎かになった足を引っかけられる。

背筋に虫が這うかのような浮遊感の後、視界が揺れ、転倒。

そこに突き立てられる呪詛装備カースウェポンから必死に逃れた。

ゴロゴロと転がりながら回避する無様な姿を罵ろうと口を開きかけた一瞬。

「ベルツツ!!」

既に鍵として使い物にならなくなったそれを、団員から奪い取ったモダーカがヴィトーに向かって投擲する。

油断していたヴィトーは初めて動揺したように目を見開き、回避行動をとった。

このままでは当たらない。そう判断したベルは手を突き出し、砲声した。

「【ファイアボルト】ツ!!」

3条の炎柱。

何者よりも早い炎は投擲された鍵に着弾し、その低い威力故に鍵を破壊せず、押し出した。

「なっ!?!」

加速する。

投擲を確認したと同時にヴィトローが脳内で計算していたより、ずっと早くなつた鍵は剛速球、と評していいほどに伸びた。

鍵は芋虫<sup>ウィルガ</sup>の溶解液に侵されている。

そんなものに触ればレベル4と言えども無傷では済まない。

飛沫であつても当たるとは出来ない、ヴィトローは身を大きく振つた。

それこそ、ベルが求めた隙。

「チョーダイハンド」

光が収束する。

ベルはこの状況を打破する唯一の切り札を切つた。

手のひらを横した飾り物が先端につく棒は、以前出したまあま棒に近い形状だ。

「くっ……!!」

「そのトランプを下さい……下さい! 欲しい! 頂戴!」

前に使つたことがあるまあま棒のように、特定の言葉がトリガーになるとアタリを付けて、それらしいキーワードを並べていく。

体勢を立て直したヴィトローがベルに襲い掛かるより早く、チョーダイハンドは効果を



發揮した。

「……やられましたね」

ヴィトーはつい先ほどまでの劍幕が嘘のように、左手に持つしあわせトランプをベルに渡した。

ベルは慎重にそれを受け取りつつ、チョーダイハンドの効果が途切れた時、いきなり攻撃を再開される可能性を警戒し、後ろに下がる。

「……ふふふ。本当に、私の思い通りにやってくれました」

「……!?!」

切り札を失ったはずにもかかわらず、全く慌てていない。

それどころか、この状況すら計算通りだと嘯くヴィトーの言葉にベルの方が動揺する。

「そのしあわせトランプは願いを叶えてくれる優れもの。この言葉には嘘はありません。ですが……言っていないことが二つあります。一つは願いを叶えることに言葉はいらぬという事。いや、それどころか持ち主が無意識に思った事すら願いとしてカウントする点。これには困りましたよ。くだらないことを思えば、トランプが反応してどんな残数が減っていくのですから。おかげで52枚全てを使ってしまいました」

ヴィトーの突然の解説を何とか飲み込んで思考する。

ヴィトーはしあわせトランプを最初に説明した際に使用した枚数は49枚。つまり、それから3枚トランプを使ったという事だ。

【ガネーシャ・ファミリア】の盾を失わせるために1枚。

このアジトの鍵を壊すために1枚。

(そして、残りの1枚は今の説明を踏まえると……言葉を発さずに使った。きつと、モダーカさんの投擲を躲すために)

無意識に攻撃を回避しなければ、と強く思ったことでカードを使ったという事だ。

だが、ここで疑問が生まれる。

52枚全てを使ってしまった、とヴィトーは言った。

ならば、今、ベルの手元にある最後の1枚はなんなのか。

「そしてもう一つ。……それはですねえ。最後に残った道化師ジョーカーのカードが現れた時っ!

52枚分の幸福が反転し、持ち主に不幸を呼び込むという効果です!」

「まさか……!」

「そうっ! それこそ最後の1枚! 本当に焦りました! 予想外に最後の1枚を使ってしまったせいで、貴方に持たせる前に不幸が発動するところだった! そうなれば……52枚分の不幸を貴方に押し付ける計画が台無しでしたから!」

頭の中が真っ白になる。

ベルがわが身可愛さにヴィトローのことを放置していれば、ヴィトローは自滅していた。ここで勇気を振り絞って戦ってしまったことで、ヴィトローは一切のデメリットをベルに押し付けることに成功したのだ。

「そう設定された通りっ！ 貴方は他者を見捨てられない！ アハハハッ！ 全ては……私の計算通りだったんですよっ！！」

狂笑を上げる男の声が遠い。

一枚であれほどの力を見せたひみつ道具。

その効力が52枚分、反転して返ってくるのだとしたら。

「ご自慢の【幸運】では精々1枚分を打ち消せるかどうかと言ったところでしよう。これでいい。これで最も厄介だった貴方の特性は封じられた！」

呆然と、ヴィトローから奪ったカードを見つける。

ジョーカー  
道化師のイラストがニヤリと笑った気がした。

「ベルッ！！ それを俺に寄越せ！！」

血相を変えたモダーカが強引にベルの下に駆け寄る。

その判断は早かった。

心優しいベルが、他者に押し付けられたがらないであろうことも理解している彼は、

ジョーカーを強引に奪おうと体が傷つくことも構わず進む。

「しかし……距離がありすぎましたね」

そんなモダーカの奮闘を嘲笑うかのように、不幸の束がベルに襲い掛かる。

手始めは亀裂。

頭上から聞こえるビキビキと固い何かに罅が広がっていく音に、敵味方が仰天する。

「……なるほど、築千年ともなれば、こういったことも起こりますか」

決壊。

超硬金属等の稀少金属を豊富に使った人工迷宮は、そのすべてに補修が行き渡って

いるわけではない。

よりにもよってこの日、この時間。

ベルと「ガネーシャ・ファミア」が隔てられている状態で天井の金属が崩れた。

岩雪崩のように降りかかる鉄塊。

それらから必死に逃げている間に、ベルは運悪く「ガネーシャ・ファミア」たちが

いる広間から離れてしまう。

それを捕捉しているのは一人だけ。

「さあ、悪夢はここからです」

ヴァイトーと道化師。

悪意たちは嗤った。

## 『PASSPORT Of SATAN』

小さく、地面が揺れた気がした。

地震かと思いい、慌てて周りを見渡すが、店に吊られた干し肉は揺れている様子はない。気のせいだろうか、とドラえもんはため息をつく。

「ガネーシャ・ファミリア」が閻派閥イヴァイルスの討伐・及び幹部級眷属の確保のためにそろそろアジトを攻めている頃合いだ。

そこには、この世界に来て初めての友達であるベルもいる。

友のことを思えば、ドラえもんやのび太も協力を惜しむつもりはなかった。

だが、本来はこの世界の住民ではない人間に危険な橋は渡らせることは出来ない、と至極真つ当に諫められては反論もできない。

「待つしかないって辛いね」

そう声をかけてきたのは出木杉だ。

普段は年齢に見合わない、落ち着いた態度の子供だが、流石に今は冷静ではいられていないようだ。

「クラネルさんは……その、戦っているんだよね」

「大丈夫だよ。危険になったら逃げるって言っていたし……」

「それでも、何かあつたら死んじやうかもしれないんだ」

出木杉の言葉にドラえもんは返す言葉を出せなかった。

何十年と戦争をしていない。平和な国に生まれた彼らには、ある日友達が戦場に行つてしまうという非日常に実感が追いついていないのだ。

ベルが死ぬ。そう言われても、戸惑うことしかできない。

頭ではそういう世界だと分かつていても、未だに心の整理が出来なかった。

「与謝野晶子の気持ちに少しだけ分かった気がするよ」

「……『君死にたまふことなかれ』だね」

「未来から来たドラえもんでも分かるんだ」

「細かい内容までは知らないけどね」

『君死にたまふことなかれ』

それは日本の有名な詩人である与謝野晶子の代表作ともいえる詩だ。

日露戦争に向かう弟の<sup>ちゅうせいのう</sup>籌三郎を想い、生還を祈る晶子の切実な願いが綴られている。

日本人ならば、一度は耳にしたことがあるその詩に込められた苦しみが、今の出木杉には少しだけ理解できた気がした。

「まあ、籌三郎はその後ちゃんと帰ってきたんだけどね」

「そうなのかい？ てつきり戻ってこなかったんだと思ってた」

「だから、僕たちも心配する必要はないさ。きつと」

そう、自分に言い聞かせる。

そんな形でお別れなんてしたくない。

友達の亡骸など、見たくはないのだ。

「……ひでとしとどらえもん、またむずかしいこといつてる」

「あーやだやだ。ああやって難しい知識を並べれば頭が良いって思ってるんだ」

「のび太は頭の悪い人代表みたいな嫉みをまずは何とかしたらどうだい」

「ベー、だ」

のび太やノエルも普段通りに振舞う。

ただ、その態度は何処か空元気のように感じられた。

「……おとーさん、だいじょうぶかな？」

「大丈夫さ！ この前だつて見ただろう！ ベルは強いんだ。モンスターに囲まれても

ファイアーボルドーでイチコロさ」

「ファイアーボルドーじゃなくてファイアボルトだよ。ファイアーボルドーだと燃える

ワインだ」

「それはそれで強そうだね」

不安を振り払いながら軽口を叩く子供たち。

4人の前にぬつ、と大きな影が立ちふさがる。

「「あ………」」

「口より先に手を動かさせてんだこのアホンダラア!!」

「「ゴ、ゴめんなさい!?!」」

怒れる店主の号令を受けて慌てて仕事を再開すのび太・出木杉・ドラえもん。

足が動かせないノエルはそのまま応援だが、子どもたちは汗水を垂らして「豊穣の女主人」の中を駆け回る。

(なんだってこんな仕事が多いのさ! 今日はお客さんなんて全然入ってないじゃないかないか!)

(お馬鹿!! ミアさんに聞かれたらまた説教だぞ!!)

のび太とドラえもんが小声で言い合いしつつ、テーブルを拭いていく。

全く客がない時くらいサボらせてほしいと、元来怠け者ののび太はぼやいた。

それが万が一にもミアの耳に入れば、連帯責任で自分までお仕置きを喰らいかねないとドラえもんが注意した時、出木杉があることに気が付く。

(……いや、のび太君の言う通りだ)

(出木杉君?! なにを……)



(いや、サボろうって話じゃなくて、今日はお客さんがいないのに働かされるなんておかしいって話)

【豊穣の女主人】で子供たちが勤務し始めて数十分が経過する。

それまでの間に入った客の数はゼロ。ホール内も伽藍洞だ。

この店が全く人気のないと言うなら残念だったと言えるが……

昼時には主婦層をターゲットにした営業でいつも盛況だったはず。

何故、今日だけは客がやってこないのか。

まるで、予め人払いをしているようだ。

(それに従業員たちの動きも変だ)

(変?)

(緊張しすぎていると言うか……あのアーニヤさんやクロエさんが休んでいないんだよ

? お客さんが全然来ないのに)

のび太に匹敵するサボリ魔二人が、まるでその気配を見せない。

それどころか、いつも以上に気を張っているように思える。

【ガネーシャ・ファミリア】とクラネルさんの無事を祈って待っているだけ。そんな状

況じゃなくなっている気がするんだけど」

「……………」



いた切り札がある」

そう言つて狂信者の一人は、下卑た笑いを顔を覆う布越しに見せる。懐に入れられた手は赤い手帳のようなアイテムを覗かせていた。

他の二人も頷くことで同意を示した。

その言葉を契機に、機敏な動きで「豊穡の女主人」内に忍び込む3人。

迷いなく、淀みなく行われるその行動は、決して今回が初めてと言うワケではないの  
 だろう。

邪神から恩恵を与えられるだけあつて、その動きは常人では追隨できないほどに速  
 く、正確だ。

「あーあ。結局言われた通りに面倒ゴごとが来た」

「がっ!!」

しかし、それはあくまでも器の昇華を果たしていない者が見たら、と言う前提が付く。  
 気の抜けた声が聞こえ、怪訝に眉をひそめた瞬間。

ドゴンツッ!、と人体から鳴つてはいけない音がさく裂した。

「なっ……!!?」

「どこから現れたんだこの女!!」

「はいはい。いつも同じ台詞ばかり。昔を思い出してうんざりする」

仲間がやられた。

時間がかかりながらも、そう飲み込んだ2人が気色ばむ。

臨戦態勢に入り、剣呑な殺気をまき散らす狂信者たちだが、突然現れたヒューマンの少女は全く気にした風に見えない。

「こつちはいきなり妙な仕事振られて苛ついてんだよね。ポーカーでアーニヤがクロエを買収さえしてなかったら……」

「なにワケ分かんねえことを!!」

「うん。分かってもらう気はないし。取り敢えずお前らのせいで、私が迷惑かけられて腹が立ってるってことだけ分かっていればいいから」

そう言つて殴り掛かる少女。

痛快な音を立てて崩れ落ちる相方を見た狂信者は、少女が自分より数段格上……第二級冒険者並の実力者だという事を理解する。

なんでそんな奴がこんな酒場にいるんだ! と叫びながら、そんな相手でも問題なく御せる切り札を取り出した。

悪魔の様な顔が描かれた手帳型のひみつ道具。

それこそが狂信者たちの切り札。

手帳の表紙に描かれた文字は『PASSPORT Of SATAN』。

「これでも見やがれ！」

「は？　これがどう……」

「俺はガキを誘拐しに来ただけだ！」

「あつそ、勝手にどうぞ」

酒場で居候している子供を誘拐する。

そんなことを言われれば、激怒するのが人と言うものだが、手帳を見せられた少女はそれをあつさりと受け入れた。

まるで、それが悪いことだと認識していないように。

【悪魔のパスポート】

これを提示すれば、どんな悪事でも許される。

最低最悪のひみつ道具である。

「ヒヒヒツ……そうさせてもらうぜ。だが、その前にお前にはたつぷりお礼をしてやらないとなあ!？」

自分では及びもつかないような強者をいのようにしてやった狂信者は、ゲラゲラ笑いながら拳を振りかぶった。

ただ、目的を達成してやるだけじゃ生ぬるい。

女のくせに自分の肝を冷やさせたこの女を、思う存分に甚振ってやると嗤う。



闇派閥イウィルスがドラえもんたちが使うような、いくつかのひみつ道具を使用したという情報は「ガネーシャ・ファミリア」によって届けられており、末端の構成員程度ならば恐れる必要はない彼女らでも、万が一を考える必要があった。

そこで考えられたのが今回のフォーメーションだ。

まず一人が発見した構成員を対処し、残るメンバーは少し離れた位置で待機する。

こうすれば、一人がひみつ道具の効力にかかっても、他のメンバーが対応できる。

待機するメンバーも視覚を封じたりユー、耳を抑えて外音を遮断したアーニャ・高い【耐異常】のアビリティを持つクロエと、どのような能力が来てもいいように対策を行っていた。

「いやーおとり捜査ご苦労！　ぶっちゃけかませみたいな役割だったニャー！」

「オイコラ喧嘩売ってんなら買うぞ陰険猫」

あつはつはと笑いながらルノアの肩をバシバシ叩くクロエ。

ルノアとしてはひみつ道具で自身の思考を捻じ曲げられたわけだから、心中穏やかではないらしい。

因みに囷役はポーカーで負けた人間が行うことになっていた。

駆け引きを元の派閥で叩き込まれていたリユーや、腹黒でお馴染みのクロエならばともかく、アホのアーニャならば負けることは無いと高を括っていたルノアは、クロエを

お菓子で買収するというまさかの奇策の前に敗北し、囚役を就任するに至る。

「まあ、実際にあそこまで不味い効果だったとは思わなかった。あれをいくつも使えるとは思いたくないけど……闇派閥イツイルスの脅威は確実に上がっているわね」

一通りルノアをからかっていたクロエだが、闇派閥イツイルスの見せた規格外のひみつ道具に口調が変わる。

あの時、待機していたメンバーでも、視覚を封じて悪魔のパスポートを視認することが無かったリユー以外は、ひみつ道具の効果にかかり、動くことが出来なかった。

リユーが動いた時も、一瞬、何が起きているのかクロエですら把握できなかったのだ。「……ノエルやのび太が攫われそうなのに全然嫌に思わなかったニヤ……」

「アーニヤ、気にしなくていい。あれはひみつ道具に思考を歪められた結果だ」  
今回の対策を行ってよかった、とアーニヤは思う。

下手をすれば、正面から押し入った敵にあのひみつ道具を掲げられ、子どもたちを連れ去られていたのかもしれないのだから。

「しかし、彼らの反応は妙だ」

「ん？ 何か気になる事でもあった？」

「はい。ルノアが迎撃に出た際、「なんでこんな奴がいるんだ！」と叫んでいました」

「ニヤ？ そうだったかニヤ？」



「はいアーニャはアホニャー。ついさつきあつたばかりの事なんだから、覚えとけつて話ニャ」

「フンニャー!?! ミャーはアホじゃないニャー!」

キヤットフアイトを始めるアーニャとクロエを無視して、リユーは自身の感じた違和感を口にした。

「……犯罪予告じみた手紙を送つておいて、何故、警備がいることを驚いていたのでしょうか」

「私がウエイトレスの格好をしてるからじゃない? 警備をするような人間には見えな  
いだろうし。私たちが戦えることを驚く奴なんてこれまでもいたじゃん」

「そうとも取れませんが……」

引つ掛かりを覚える。

そんな様子のリユーに他の3人も違和感を覚え始めていた。

しかし、その答えが出る前に、ウエイトレスは突如現れた気配に身構えた。

「!?! いきなり気配がつ?!」

「見逃してたの……?」

「いや、これはむしろ……」

「いきなり現れてきたニャー!」

窓越しに見える人物には特徴的な十字傷。

他にも何人かの人物を引き連れている。

見慣れない装いは彼らがオラリオの……延いてはこの世界の外から来た人間であることを示している。

「殺し屋イグザイルスジャック……！」

闇派閥イグザイルスにひみつ道具をばら撒いていとされる異世界人。

その中でも、世界規模の指名手配をされたという危険人物をリユーは睨みつけた。

## 真意を追う

アダマンタイト  
超硬金属の天井が崩れるというアクシデントに見舞われて数十分後。

イヴィルス  
闇派閥が次々に繰り出す手札に翻弄され続けた「ガネーシャ・ファミリア」であったが、冒険者とは未知に挑む存在。

イヴィルス  
闇派閥があらかた手を出し尽くしてしまえば、後は地力の差を埋める方法など狂信者たちにはなかった。

極彩色のモンスターたちを蹴散らし、狂信者たちを次々と捕縛した憲兵たちはあつという間に戦闘を収束させる。

流石は都市の憲兵、群衆の主と歌い手がいれば高らかに勝利の詩を歌い上げたことだろう。しかし、皆その表情は険しかった。

「ベル・クラネルの行方はまだ分からないのか」

「申し訳ありません。後を追おうにも超硬金属アダマンタイトの瓦礫が通路を塞いでいるため、二人の跡を追えません」

「……復旧にはどれだけかかる」

「5分で終わらせませす」

通路を埋める高純度の金属の山。

常人ならばそのうちの一つを10Mメートル動かすだけで一日が終わりそうだが、上級冒険者の集まりなだけあつて凄まじい速さでの仕事の終了を断言する。

(時間がかかりすぎる)

だが、一秒ですら惜しい今の状況ではなんの慰めにもならない。

闇派閥イワイルスの幹部ならば確実に第二級冒険者並の力がある。

レベル2のベルを害するには、5分と言う時間は多すぎた。

「糞ツ……俺があの時、あいつのカードを奪っていたらっ」

「落ち着け、モダーカ。過ぎたことを悔やんでいる暇はないだろうが」

度々護衛役を任じられているため、ベルと距離が近かった2人の声がシャクティの耳にも届いた。そして拳を握る。

ハシャーナの言う通り、悔やむのは後だ。

自らの無能などいくらでも誇る事が出来る。

今すべきは、本当の意味での最悪……ベル・クラネルが戻ってこないという可能性を少しでも減らすことだ。

「イルタ。闇派閥イワイルスの狂信者たちの中に鍵を持つ奴はいたか」

「駄目だ姐者。こいつらは持っていない」

捕縛した狂信者たちの身体を調べていたイルタは、シャクティの問いかけに苦虫を嘔み潰したような表情で返した。

想定外が起きたのなら敵のアジトになどいつまでもいるべきではない。しかし、先の一戦でヴィトーが使った奇妙なひみつ道具の効果で「ガネーシャ・ファミリア」が所持していた唯一の鍵は溶解液に晒されていた。

（今、私たちがすべきは脱出手段の確保と、ベル・クラネルとの合流）

そして、その中でどちらを優先すべきか。

情を捨てた天秤の下、シャクティは決断する。

「私たちは鍵の回収、或いはその他の脱出手段の確保に当たる。ベル・クラネルの追跡はハシャーナに任せる」

すまない、と心の中で少年に詫げる。

心情で言えばなりふり構わず彼を救いに行きたいが、鍵を失った自分たちではベルと合流できてもそのまま心中してしまうかもしれない。

故に、シャクティは脱出手段を優先した。

その結果として、ベルが手遅れになる可能性を承知しながら。

「了解。坊主は俺が連れ戻しますよ。必ず」

「……頼むぞ」



ムが元になっているようだ。なんて話をバイト仲間の神様が教えてくれたと言っていた。

そんなボードゲームが長らく愛されているのはその奥深さ故だと言う。

一手一手に意味があり、策略があり。凄まじい達人だと何十手も先を見据えて打つのだとか。

まるで未来を作っているみたいだな、なんてその時の僕は漠然と考えていた。

「……はあ……はあっ」

出入りする空気が擦れて発する、喉の痛みと熱が僕の意識を何でもない過去の情景から引き戻す。

「まだ諦めませんか？　これほど力の差を目の当たりにして？　あらゆる手札を無効にされて尚？」

ヴァイトーさんは鈍色の呪詛装備カースウエポンを弄びながら、面白そうに聞いてくる。

それに言葉を返す余裕なんてない。相手から視線をそらさないように閉じられそうな瞼に力を入れ、気を抜けば握力を失いそうになる我が身を奮い立たせんと歯を食いしばることしかできない。

「……実に結構っ！！」

果たして僕の無様な姿はどう映ったのか。

彼は喜色を浮かべて襲い掛かってきた。

喉元を挟ろうとする刺突を転びかけながら躲し、速攻魔法で反撃……と見せかけて、右手に注目しながら空きになった顎を目掛けて左足を思い切り蹴り上げた。

修繕された兎弾足びん弾フットの反動で、予備動作なく放たれた強烈無比な一撃は確かにヴィトーさんの予想を上回っていた筈だ。

「おっと危ない」

しかし、あつさりと躲される。

絶対に予想は出来ていなかったはずだ。

だけど、敏捷に任せた強引な回避ではない。反応速度の速さによる反射的行動でもない。  
い。

まるで初めから当たらないことが決まっていたかのように、僕の足は空を蹴った。

「っ!? 【ファイアボルト】 ツ!!」

「ほうっ…」

起死回生の一撃を外すという事は、致命的な隙を相手に晒すという事だ。

足一本で立つ形になった今の僕は、どう見ても格好の獲物。

危機感と共にそれを理解した僕は、フェイクとして伸ばしていた右手を砲声。

ヴィトーさんを牽制すると同時に敢えてバランスを崩す。そして、重力に従い背中か



ら倒れそうになることに逆らわず、敢えて右足で地面を蹴った。

その結果、空中で独楽のように回転しながら神様の刃でヴィトーさんを切りつけた。

「上手い上手い」

だがそれも笑顔のまま呪詛装備で弾かれる。

まただ、またごく自然に弾かれた。絶好の隙を作り出したはずだったのに。

歯噛みする僕は着地しようとして、運悪く床の小さな窪みに足を取られる。

「……………うっ!？」

ガクンツ、と倒れそうになる体を気合で持ちこたえた。

それが自分の隙になると理解しても、無防備に仰向けになるよりはましだ。

「いけませんねえ!! 悪にそんな隙を見せたらっ!!」

「……………っ!？」

そこに振り抜かれる悪の剣。

咄嗟に腕に装備された伸蛙ノシエトルで防ぐ。

ギヤガガガガガツツ!! と嫌な音が腕の骨を伝って耳に入る。

吹き飛ばされるように転がった僕は超硬金属アタマメタルの壁にぶつかった。

「あ……………ぐっ」

転がっている最中に額の何処かを斬ったのか、左目がドロリとした赤い液体に侵され

る。

本・当・に・運・が・悪・い。これでは視界が半分潰れたようなものだ。

いくら投げ捨てても戻って来る道化師ジョーカーのカードは今も嗤っているのだろうか。

目の前の悪意のように。

「素晴らしい……絶望的な力の前に屈さず、僅かな勝機を求めて全霊を尽くす。まるで物語の中から飛び出した『英雄』のようではないですか」

素晴らしい、と口にしていながらその笑みは悪意に溢れている。

童心に返ったように興奮しているようだが、それを微笑ましいと思う事はベルにはできなかつた。

(おかしい……)

体中の痛みに耐えながら、僕はこれまでの戦いで感じた違和感に戸惑っていた。

(なんで、僕は負けているんだ?)

ヴィトーさんの自己申告では彼はレベル4。対して僕はレベル2。

きつと僕の思考を聞けば誰もが「何を当たり前のことを疑問に思っているんだ」と呆れるだろう。

そう、格上相手に負けるのは当たり前のこと。それはいい。

いやよくはないけど、今は置いておく。

（負けた理由が分からない。どうやって僕の攻撃に対処したんだ？）

格上の存在との戦いと言うと、僕が最もやられたのはアイズさんだろう。

何も分からないままやられることはあったけど、それは僕が認識できていなかったからだ。

彼女の動きが速いから眼が追いつかなかった。彼女の剣技が段違いだったからフェイクと本命を見抜けなかった。

相手が格上過ぎてよく分からないまま負けることは多かったけど、その程度のことの後から推察できたのだ。

だが、今回は違う。

（ヴィトーさんが振った剣はレベル4とは思えないくらいに手加減されていた。下手したらレベル2の僕の方が早いくらいに。なのに、何故か迎撃されて負けてるっ）

実力で負けるなら分かる。

だけど、これまでの戦いでヴィトーさんが見せただけの力で僕を圧倒するのは不可能だ。

ヴィトーさんが全部読み切っていて、最小限の動きで僕の攻撃を捌いているならまだ分かりやすかったけど、さっきの兎弾足びよん弾フーツを使った奇襲は明らかに想定外と言った様子だった。

なのに対処された。ヴィトローさんの見せた速さなら僕の蹴りは躲せないはずなのに。僕より遅い動きのヴィトローさんは、彼より速く動いている僕より速かった。

意味が分からないが、そうとしか言えない理不尽が先ほど展開されていたのだ。

(格上だから強いとかじゃない。この違和感の元をどうにかしないと大番狂わせなんて絶対無理だ)

まるで世の中の法則に手を加えているかのような不条理。

ひみつ道具と戦うとはこういう事なのだ実感する。

(しあわせトランプのジョーカーはあくまでも不幸を押し付けるだけのはず。躓いたり、額を斬って左の視界が潰れたのがそれにしても、さっきまでの異様な展開は説明つかない)

ここまでの違和感がしあわせトランプによるものならば、途方もなく難しいが、効果が無くなるまで耐えきればいい。

だが、これまでいくつものひみつ道具を使って来たベルは、その楽観を捨てる。

(しあわせトランプのジョーカーだけじゃない。まだヴィトローさんは他のひみつ道具を使っている！)

冷や汗が流れた。どこにひみつ道具はある？

彼の服装の中に紛れ込んでいるのか、巧妙に隠してあるのか。

それとも既に使った後だからここにはないのか……？

疑い始めれば全てが怪しい。不味い、ドツボに嵌っている。

(何とか逃げないと……)

勝ち目が全く見えない戦いなんてやるわけにはいかない。

エイナさんも言っていただろう、冒険者は冒険しない。

ここは冒険すべき時じゃないんだ。

やがて一通り笑ったヴィトーさんは剣を小さく振った。

ああ、不味い不味い不味い。あの視線、この気配、ここで終わらせようとしているのか。

地の利は向こうにあつて身体能力ステイタスの差も歴然。

このままでは逃げるなんて到底不可能だ。

活路を見出すために何とか時間を稼がないと。

「では……」

「なんでっ」

「ん？ ようやく話してくれましたね。一人でしゃべり続けるといふのは中々心にくるものなので、話し合いは無理かと思っていたのですが」

「どうして……貴方はここにいらっしゃるんですか」

なんとか会話を捻り出そうと口から出たのはそんな疑問。

「だけど、実際に気になってることだった。」

「ヴィトーさんはまるで本気を出していないけど、とても強いのは伝わってくる。」

強豪派閥である「ガネーシャ・ファミリア」にアジトが踏み込まれている以上、僕みたいな木っ端冒険者よりも、第一級冒険者もいるあちらの対処をするべきのはずなのだ。

だが、ヴィトーさんは「ガネーシャ・ファミリア」にまるで関心を示さなかった。

警戒はしていても、自分の中の優先順位で「ガネーシャ・ファミリア」を僕より低い位置に置いたままに見える。

それが理解できなかった。

「【ガネーシャ・ファミリア】なら指揮官のいない部隊なんてあつという間に倒せるはずですよ」

「でしようね。既にあちらは終わっているはずですよ」

「なら、なんで……」

僕の疑問にヴィトーさんは何でもないように答えた。

予想もできないかった、異様な答えを。

「あんな脇役に興味はありませんよ。所詮、物語の本筋に関わることもできない連中で

す」

「……な、なにを言っているんですか？」

その言葉の意味を自分の中で咀嚼するのに時間を要した。

脇役？ 物語の本筋？

場にそぐわない曖昧な単語にいよいよ混乱する。

「ふむ、どこから説明すればいいものか……そうですね。もつと端的に言ってしまうえば、私は「ガネーシャ・ファミリア」などと言う者どもより、あなた一人の方が脅威だと思っているんですよ」

「僕が……？」

過大評価もここまでくると笑う気すら起きない。

何か、聞き違えてしまったのだろうかとすら思ってしまう。

(もしかしてひみつ道具を使っているから？)

真つ先にそれらしい理由として思い付いたのはそれだ。

対外的には友人に貸してもらっているという事になっているが、僕自身がひみつ道具を具現化していることに気が付いたとすれば……そんな仮説を頭の中で組み立てていると、ヴィトーさんはおかしそうに言葉を続けた。

「もしかして、ひみつ道具を使えるから貴方を脅威だと見ている。そんな風に勘違いし

ていらつしやいますか?」

「違うんですか?」

「ええ、全く。貴方がひみつ道具を使っていることには心の底から驚きました。ですが、それは貴方を調べる過程で分かったこと。そこは本命ではありません」

「ならどうして……」

「それを説明するのはやぶさかではありませんが……言つたでしょう? 何処から説明すればいいか分からないと。貴方が途中で逃げ出してしまつてはお教えできませんよ」

薄く笑うヴィトーさんに僕の心臓は跳ね上がった。

バレていた。こちらの時間稼ぎの意図は初めから。

そのうえで彼は話に乗っていたのだ。

「話途中で退散されては、器の小さな私としては癩癩を抑えられないかもしれません。できればゆっくりと話すために、私の自室に来ていただけませんか」

「……」

「乗りませんか。ええ、それが普通だ。しかし、貴方は乗らぬわけにはいられない」

会話の主導権を握られつつある。

そう感じた僕は黙りこくつたが、そんな反抗を楽しし気に見るヴィトーさんは口にした。



無視できない言葉を。

「あの可愛い娘さんも……直にこちらに着くでしょう」

「な……っ!?!」

唇で弧を描き、ヴィトーさんは僕に背を向けた。

ついて来い、という事だろうか。

(どう考えても罨……だけどっ)

ヴィトーさんの最後の言葉。

娘……恐らくはノエルの事をどうしてここで口にしたのか。

ハツタリだ。ハツタリに決まっている。

そう思いたくても、ひみつ道具の出鱈目さをよく知っている僕は、頭に浮かぶ無数の

『もしかしたら』を無視できない。

特定の人物をここに連れてくるなんて、ひみつ道具にかかれば朝飯前だ。

(……ハシャーナさんは、駄目だ。来ない)

藁にも縋る思いでヴェルフが作ってくれた、人を探知する装備を見た。

【ガネーシャ・ファミリア】が救援に来てくれるならば、迷わず退避できたかもしれない。  
い。

だが、尋探木<sup>タエ子</sup>が指し示す針は動かなかった。

それはつまり、ハシヤーナさんはまだあの戦場にいるという事だ。救援は期待できないだろう。

僕の前にある選択肢は二つ。

情報から目を背けて闇雲に逃げ回るか、それとも危険を承知で虎穴に入るか。

「……っ。畜生っ！」

思わず口汚くなりながら、僕はヴィトーさんを追った。

それが罫だと知りながらも、彼の言葉を無視することが僕にはできなかつた。

ここで逃げてノエルに何かあつたら。そう思ってしまった。

……尋探木の針がゆっくりと少年の視界の外で動き出す。

道化師ジョーカーはまた嗤った。

## 箱庭の街

コツコツと、不自然なほどに人がいない通路を歩む。

おかしな気分だ。さっきまで戦っていた……と言うよりは飛ばされていた相手についていくのは。

何かが間違っている。そんな焦燥感が胸の奥で渦巻いている。

そう感じていても、他の選択を選ばないくらいにヴィトーさんとの力の差は圧倒的だった。

(……遊ばれてる)

ヴィトーさんの警戒を煽らない程度にあたりを見渡す。

奇妙な建造物だ。

ダイダロス通りにどうしてこんな建物があるのか。

人工物であることは舗装された床を見れば一目瞭然だが、それでいて人間が作ったにしては違和感だらけの混沌とした雰囲気も漂う。

左右非対称、<sup>アシシメトリ</sup>とでも表現すればいいのだろうか。

普通の建物はきつちりと寸法を測って、規則性が素人目にもはっきりと分かるが、こ

の建物はそうじゃない。まるで、ダンジョンのように不規則な構造をしているのだ。

内装は明らかに人工物だらけなのに、形や雰囲気は自然にできたダンジョンの様な違和感に脳が混乱しているのか、眩暈を覚えた。

(ここを闇雲に逃げ惑っても遭難するだけだ。僕がここから逃げきる方法はこの人から探り出すしかない)

だから、都市を脅かす犯罪者にノコノコ付いて行っている。

頭のいい人たちからしたら「馬鹿野郎」と怒られてしまいそうだと自分でも思う。

けど、自力では他に思い浮かぶ手段が破れかぶれなものだから仕方ないじゃないか。

(見え見えの企てだけど、この人が戦う気のない今がチャンス。不意を突いて、大ダメージを与えるしかない。その後には逃げ道を聞き出す)

先ほどまでのひみつ道具も不意打ちならば効果を発揮しないかもしれない。

部屋に着いた瞬間は必ず気が緩む筈。そこを狙えば……

「道中無言と言うのも味気ないですね。気になっていることは沢山あるでしょう？ よければなんでも答えますよ」

僕の考えに気付いているのか、いないのか。

ワイトーさんは余裕綽々と言った様子で話しかけてきた。

(よしっ、会話の間でも隙を作り出せるように誘導するんだ)

話術に何てこれっぽっちも自信はないが、自信がないからやりませんなんて贅沢は言つてられない。

会話を途切れさせないようにして、情報を引き出しつつ、油断を誘うんだ。

「なら、さっきの言葉の意味は何ですか。娘つて……」

「ええ、貴方の思っている通り、最近「豊穰の女主人」に転がり込んだあの少女ですよ」

「っなんでノエルを!？」

「それについてはここ最近起きた異常気象について説明しなければなりませんね。既に御存知のことだとは思いますが、オラリオの四季ではありえない、早すぎる寒気があつたでしょう」

オラリオの異常気象、と言うとのび太君たちと再会した日当たりのことだろうか。

確かに、オラリオでこの時期に雪が降るのは珍しいとリリが話していた筈だ。

神様は暖炉を使つてくれる人が増えてちよつと嬉しいと言つていたけど。

その異常気象と、ノエルを狙うことになんの繋がりがあるというのか。

「実の所、あの異常気象は本来の物語上は起こらない筈でして、私たちがノエルさんを捕獲しようとした際の彼女の抵抗によって引き起こされた物なんですよ」

「……やっぱりノエルの傷は貴方たちが!」

「それを言ったら私の部下はその時の足掻きのせいで氷漬けにされました。ここはお互

いに両成敗と言うことにいたしましたしょう」

ふざけないでください！ そう叫びそうになった時に僕は引つ掛かりを覚える。

イウイリス  
闇派閥から逃れるための足掻きで異常気象？ 狂信者が氷漬け？

ファルナ  
恩恵を刻まれていても不可能に思える超能力だ。

「ふふっ、そう。貴方たちが家族ごっこをしていたあの娘は人間ではない。神々に最も近い神秘の種族……精霊です」

「……」

「驚いて言葉も出ない、と言った様子ですね。気持ちは分かります」

精霊。

数ある種族の中でも最も珍しく、人間社会とのかかわりが浅い種族。

世界中からあらゆる人が集まるオラリオでも滅多に見ることが出来なかつたはずだ。

その特性はエルフ以上の魔法種族。マジックユニザーヴェルフの話が本当ならば、ファルナ恩恵によつて発現し

た魔法すら超えるかもしれない神秘の使い手だと言える。

「疑問には思いませんでしたか？ 自然治癒を阻害する呪詛装備をその身に浴びなが

ら、中途半端とは言え傷がふさがっていることが」

「……ノエルから精霊特有の気配は感じませんでした。あれは、貴方たちの仕業ですか」

「ええ、まあ。安全に捕獲するために消耗していただく計画だったので、何度も何度も追

い詰め、その度に力を使っていたき……現在の様に僅かな力すら感知できないほどに弱体化して頂きました。記憶障害が出たのは流石に想定外でしたが」

「そんなに酷いことを……っ!! なんのために!?!」

「それについてはこの部屋で……おっと」

ヴィトーさんが部屋を見るために僕から目を逸らした瞬間、僕は絞り出すように腕を振り切った。

へステイア・ナイフ  
神様の刃による紫紺の一撃。

それを彼は見もせず紙一重で避けて見せた。

「全く、油断も隙もありません、ねー!」

「がっ……!?!」

カウンターとして放たれた肘打ちが鼻を潰す。

鉄の臭いが鼻腔に広がり、ドロリと唇を汚した。

よろめく僕にヴィトーさんは容赦なく蹴りを放つ。

脇腹に突き刺さった衝撃に体がくの字に曲がる。

嘔吐感に呻きながらも、何とかナイフを突き出すが、ヴィトーさんはそれを簡単に弾き、距離を詰めた。

「さて、どこまで話したかねえ。なんでそんなに酷いことを、でしたか。答えは簡単で

す。……この世界が物語だからですよ」

「げほっ、げほっ……だからっ、それとノエルを傷つけることに何の関係が……っ」

「私としては、この世界の秘密を知っておいてどうして今まで通りに過ごせるのかの方が理解できません。知っているのでしょうか？ この世界が一人の作家の空想であることを」

ここまで飄々とした態度を崩さなかったヴィトーさんが初めて苛立った。

掴み所のない策士の画面の先に僅かに見えたものは激情。

「私は絶望しましたよ。その真実を知ったとき、この世のあらゆるものが茶番になり下がったのですから」

「あ、がっ」

荒々しく僕の髪を掴み、ヴィトーさんは僕の顔を自分の顔に近づけた。

「さあ、行きますよ。貴方がここに来る瞬間をずっと待っていたのですからー」

ガツンツ、と脳を揺さぶるかのような衝撃が襲った。

地面に叩きつけられたと気がついたのは、チカチカと点滅する視界が超硬金属アダマンタイトで覆われていたからだ。

鼻に再び走った痛みを認識するより先に、僕の体はヴィトーさんによって扉の方に投げられた。



「うわああああああっ?!」

砲丸と化した僕が直撃し、ドアが吹き飛ぶ。

それでも勢いは殺せず、僕はゴロゴロと部屋の中を転がった。

「ぐっ、くくっ……んっ、はっ」

地面に叩きつけられた時の衝撃が未だに残っているのか、バランスを崩しかけながらも上体を起こす。

飛び込んだ先は部屋というよりは通路だ。

迷宮産の稀少金属によって作られていた通路とは打って変わってどこかおもちゃのような内装。

脈絡もなく雰囲気ガラリと変化したものだから、ドアから先が別世界に繋がっているかのような違和感を感じる。

(この感じ何処かで……そうだ! ガリバートンネル!)

内装に覚えた既視感。

一体何時のことだと記憶を辿ると、全く同じものを僕はオラリオに来たばかりの時に見ている。

神様の髪飾りを作るために「ミアハ・ファミア」から貰った鈴を小さくする時に使ったあのひみつ道具だ。

(このひみつ道具を通った人は小さくなる……不味い!?)

唯でさえ力の差があるのに、ここで大ききのハンデが増えたらいいよ勝てない。

慌ててガリバートンネルの入り口に戻ろうとする僕の前にヴィトーさんが立ち塞がる。

「何処へ行くこうと言うのですか!？」

襲いかかるのは鈍色の嵐。

一撃でも喰らえば不治の呪いが発動してしまう。

強引に突破する事もできずにズルズルと後退するしかなくなる。

チョーダイハンドである呪詛<sup>カースウェポン</sup>装備を奪おうにも、そんな余裕がない。

この攻防のなかで相手の攻撃以外に気を割いたら、まず間違いなく対応出来なくなる。

なにより、既にそのひみつ道具を知っているヴィトーさんが発動を呑気に待っていてくれる訳がない。

(前につ、前に出ないと……!)

「そんなに前に出たいなら望み通りにしてあげますよ」

「え……うわっ!？」

神様のナイフの軌道を予測したヴィトーさんは、その手に持つ剣をくるりと回転さ

せ、神様のナイフの柄に呪詛装備カースウエボンの柄を引っかけた。

そして、レベル4の脅力にモノを言わせて強引に僕を引き寄せる。

ひたすら前に出ようとしていた僕は、踏ん張る事もできずに前のめりになる。

更にヴィトーさんは彼に向かって倒れ込む僕をヒラリと回避し、すれ違い様に膝蹴りを鳩尾にめり込ませた。

「~~~~ツツ!?!」

声にならない絶叫とともに吹き飛ばされる。

バウンドしてガリバートンネルから放り出されて、地面を削る勢いで転がった。

そうか、自分はボールだ。ふざけんな。

思わず浮かんでしまった汚い悪態は、口から出る直前、背中に走った衝撃で霧散する。

前方からの衝撃を殺すことばかり考えたせいでまともにぶつかってしまった。

衝撃と共に胃を逆流しそうなモノを何とか堪えながら、僕はあたりを見渡す。

(ガリバートンネルの出口は上空……だからあんなに転がって、こんなに体が痛いのか。態々段差を付けるなんて悪趣味だ。これじゃ、あそこからは逃げられない)

空高くに見えるガリバートンネルの出口。

それを忌々しく見ていると、視界の隅に有り得ないものが映った。

「え……? 市壁……?」

オラリオを外敵から守るための城壁。

オラリオに住むものならば、毎日見ているであろうそれ。

それがどうして部屋の中に聳え立っているのか。

混乱する頭に新たな刺激。

それは、すぐ傍から聞こえる噴水の音。

咄嗟に振り返ると、更に有り得ないものがあつた。

「……なっ!？」

僕が背中を強打したのは噴水だったらしい。

そこはいい。不自然だが、部屋の中に噴水を飾る変人もこの世にいるだろう。

だが、その先に見える者を室内に飾っている者など絶対にいない。

そもそも、飾れるはずがない。

「バベルの塔!？」

都市の中央に位置する神々の住居<sup>すみか</sup>。

そして、世界を絶望に追いやるダンジョンの蓋。

いよいよ動揺を隠せなくなってきた僕の前に、ヴィトーさんは軽やかに着地する。

(ガリバートンネルをこの人も潜った? なんのために)

僕をガリバートンネルに潜らせたのは、小さくなった僕を叩き潰すためではないの

か。

訝しんでいると、ヴィトーさんは感情の読めない薄っぺらな笑みを僕に向ける。

「驚きましたか？ 私の部屋の中に再現されたオラリオの街は」

「……これは、一体」

「ひみつ道具ですよ。映したものを模型にするひみつ道具でオラリオを再現しただけの

「と」

ようやくここを説明できる、と彼は嗤った。

「ここは貴方のために作ったものです。この物語の主人公の墓標となる偽りの世界観」

オラリオ

「……っ!？」

声色に込められた殺意に思わず身じろぐ。

全く違う。今までの殺気がお遊びに思える濃密な悪意。

「ヴィトーさん……」

「ベル・クラネル。貴方はこの世界をどう思っていますか。全てが定められたこの物語

を」

「……」

「私は、堪らなく、狂おしいほどに……憎悪していますよ」

刃が来る。

そう錯覚してしまうほどの瞋恚。

彼の憎悪に呼応するかのように、周囲の建物も軋んだ。

(……ただの模型のはずがない)

目の前の男の言葉に圧倒されながらも、僕の意識は彼以外、周りの建物に向けられていた。

ここは彼が用意したフィールド。事前にどんな罠があるか分かったものではない。

そう考えると、見慣れた風景であるはずなのに、何故か悍ましい姿にこの目に映る。

「さあ、開演です！ 怯えなさい！ 哭きなさい！ この世界の中心たる貴方の無様がつ、この世界の無価値さを証明するのだから!!」

指を鳴らすと、市壁の向こう側に巨人が現れる。

いや、今の僕は小さくなっているから、大きく見えるだけで実際には普通の人間なのだろう。

ヴィトーさんの指示を受けた狂信者は、手に持っていた橙色の箱型のアイテムを固定する。

その形は最近、見かけた気がする。

(そうだ、あれは出木杉君が持って来たものと同じ！)

確か、ビデオカメラ、と言うのだったか。

そんなものを持ち出して、何がしたいのか。

それほどまでに、僕の無様を期待しているらしい。

鈍色の殺意を伴ってヴィトーさんは哄笑した。

僕は異様な雰囲気を撥ね退けるかのように、地を蹴る。状況を立て直さなくては。

そのためには、一度彼の前から離れないと。

オラリオによく似た敵地で、壮絶な鬼ごっこが始まる。

## アブダクション

目が覚めた時、まず感じたのは埃を伴った風だった。

続いて熱く、沸騰するように全身を貫く痛み。

(……な、なにが?)

体が重りになったかのように動かない中、ぼんやりとした視界から情報を欲する。

視界の半分近くを目尽くす木造の床。どうやら、自分は倒れているらしい。

木片があちらこちらに転がっていることから、部屋が壊れるような何かがあったのは理解できた。

「うっ……みんな、大丈夫かい?」

「目がグラグラする……」

「のび太君もノエルちゃんも怪我はしてないみたい」

「だい、じょうぶ」

出木杉の視界には映っていないが、子どもたちは全員無事らしい。

よかった、と安堵している暇はない。この攻撃は闇派閥イッサイルスと無関係だと樂觀することは

出来ないのだから。



「ここから離れよう。また攻撃をうけるかもしれない」

「でも、体が動かないよ」

「ロボットの僕は動けるから、掴まって」

ドラえもんがのび太を連れて移動し始める声が聞こえた。

出木杉もノエルを移動させようと、這うように腕を動かす。

（確か、ノエルちゃんの声はこっちから……）

いつ敵が襲ってきてもおかしくないという恐怖から目を逸らしつつ、出木杉はノエルの姿を求めて懸命にさび付いた首を動かす。

やがて、ベッドの傍に倒れているのを発見すると、その手を掴もうと手を伸ばした。

「ノエルちゃん、僕に掴まって」

「う、ん」

出木杉と同じように倒れ伏した彼女は、近くに見える壁の大穴から流れた風に髪を揺らされながら手を伸ばした。

じりじりとお互いの手が近づき、あと少しで接触しようという瞬間。

ノエルの姿は出木杉の前から忽然と消えた。

「……えっ？」

人が何の脈絡もなく唐突に消えると言う事態を飲み込めず、呆然と声を漏らす。

真つ白になった頭はその片隅で、これは夢なのだろうか、と言う現実逃避を始める。

「よしつ、次は出木杉君と……ノエルちゃんは？」

全く働かない頭が再起動を果たしたのは、のび太を避難し終えたドラえもんの声が聞こえたからだ。

ノエルがいない、その事実に出木杉の中で急速に焦りが噴き出す。

「ドラえもん！ ノエルちゃんがつ」

「で、出木杉君？ どうしたの？」

「目の前で消えたんだ！ 僕の、目の前からっ!!」

「落ち着いて、出木杉君!?!」

ドクドクと心臓の嫌な鼓動がうるさい。

高速で空回りを続ける脳が空気を求めて乱暴に喉を酷使する。

イレギュラー  
異常事態を前に、出木杉はすっかり冷静さを失っていた。

「すぐに追ってツ、でも、何処に、誰がつ!?!」

「……っ!! まず君も避難するんだ!」

混乱し続ける出木杉を見て、何とか落ち着きを取り戻したドラえもんが少年を引きづる。

2階の別の部屋に出木杉を放り込むと、「大人を呼んでくる!」と言い残し階段を下つ

て行った。

残された出木杉とのび太はベッドに横になった状態だ。

「出木杉。さつき、ノエルちゃんが消えたって」

「……ごめん」

「大丈夫だよ。何とかなるって」

気を使われている。

そう感じると、出木杉は自分が無性に情けなくなつた。

「取り敢えず、ドラえもんが戻ってきたらひみつ道具で治して貰おう。そして、ノエルちゃんを助けるんだ」

「君は、凄いね」

「……? 友達を助けるのは当然でしょう?」

のび太の言葉に曖昧に笑みを返すと、出木杉は目を瞑つた。

ノエルを助ける。当たり前のことなのに、先ほどまでの自分は目の前で起きた出来事に動転するばかりだった。

(考えるんだ。ノエルちゃんは何処に行ったのか)

子どもを攫うような犯罪組織がオラリオにどれだけいるかは分からない。

出木杉のダンまち知識は中途半端なものだし、この世界に来て、漫画だけでは分から

なかった世界観などもあるのだから。

ただ、人が忽然と消えた異常な出来事。

この世界の魔法やスキルは案外不使……と言うよりは制限の大きなものが多い。そう考えると、魔法やスキル以外の手段での誘拐だったと考えられるはずだ。

そんな出鱈目な手段を出木杉は良く知っている。

「ひみつ道具……」

「ん？ どうしたの？」

「この世界でひみつ道具を使えるのは、クラネルさんとイツイルス闇派閥だよね」

「うん。ドラえもんもイビルスがひみつ道具を使っていたみたいだったって言っていたし」

（やっぱり、ノエルちゃんはイツイルス闇派閥に誘拐された可能性が高い。だったら、連れていかれる場所は彼らのアジトが自然だな）

冷静さを取り戻した出木杉は今後の方針を急速に打ち出す。

すると、ドアをノックする音が聞こえた。

何かを警戒するようにあたりを見渡しなが、ゆっくりとドアを開くドラえもんの姿に、出木杉とのび太は嫌な予感を覚えずにはいられない。

「……」

「ドラえもん？ 下の人たちは……」

「石になってた」

「……え？」

石になっていた、という余りにも現実感のない言葉に出木杉は戸惑いの声を上げる。

魔法がある世界だ。そのようなことがあり得ないとは言わないが、素人目に見ても強かった【豊穡の女主人】の従業員たちがこんなにもあっさり無力化されるとは。

（不味い……それはつまり、ここの守りが無くなってるってことだ）

ドラえもんもそれを理解したのだろう、トンボ返りする形でこの部屋に戻ってきたのだという。

おもちゃの兵隊を部屋の外に配置し、守りを整えたドラえもんは更にポケットを弄つた。

「多分、石になっているのはひみつ道具の『ゴルゴンの首』が原因だと思う」

「どうしてそう思うんだい？ この世界なら魔法や呪詛カースの可能性もある」

「近くに箱が転がっていたからだよ。二人とも、すぐに動けるようにするからね。石になっていたみんなの傍には箱しかなかった。肝心のゴルゴンの首の本体は抜け出していったんだ」

ちよつと待つて、と出木杉は叫び出したかった。

人を石にするような恐ろしいひみつ道具が自律行動が可能なのか。

「なんでそんなものを売っているんだい……」

「使いこなせば便利なものだから……」

「動き回れるようにする必要はないんじゃない？」

のび太の正論が虚しく響く。

つまり、今の状況は「豊穰の女主人」の守備が壊滅、近くには人を石に変える化け物があるわけだ。最悪すぎる。

「みんなはそのままにしてきたの？ ドラえもんなら治せるんじゃない？」

「ごめん、敵がどこにいるのかわからなかったから、急いで逃げてきたんだ」

「それでいいと思うよ。ブービートラップの可能性もあったんだし、ここはドラえもんの判断が正しいと思うよ」

石化した仲間を救うために近づいたところを不意打ち、なんていかにもありそうな展開だ。

ドラえもんがいなくなったならこちらの対抗手段がなくなる以上、仕方ないことだと出木杉は不満げなのび太を諫める。

「これじゃない、あれじゃない、それでもない……」

「ドラえもん、道具はしっかり整理しておいたほうがいいよ」

「たまにしているけどすぐに散らかっちゃうんだ」

目当てのひみつ道具が見つからないのか、ドラえもんは四次元ポケットから手当たり次第に物を放り出す。

積み重なっていくガラクタを見ると、嫌でも焦りが煽られてしまい、出木杉は現状を確認した。

「ドラえもん。僕たち以外のみんなが石になってしまったのかい？」

「ううん、ミアさんとかリユーさんは石になっていたけど、シルさんだけは姿が見えなかったな」

「逆に言うとそのほかの非戦闘員は全滅したわけだ」

「シルさんも隠れているのかな……？」

上手く逃げ切れたのか、今の自分たちのように隠れたのか、それとも他の用事があって店にはいなかったのか。

どちらにせよ、シルは底知れない所はあってもあくまでも一般人。宛てにすることは出来ないだろう。

(何かを隠している気はするけど、正体が凄腕の冒険者つという秘密でもない限りはここでは無意味だ)

断片的な情報しか知らない出木杉は、シルを無理に探すことは諦めた。

嫌な話だが、敵に見つかるリスクと彼女と合流するメリットは今はないのだ。

「僕たちが最後にリユースさんと会ったのはあの部屋にいるように言われた数十分前。そこからさっきの爆発までにみんながやられたんだね」

「ゴルゴンの首は光線を浴びただけで動けなくなるから、戦闘なんて起こりようがないしね」

「あれ、じゃあさっきの爆発はなんだったの？」

「……確かに戦う間もないなら、のび太君の言う通りあの爆発は妙だ。あれは攻撃じゃないのかも」

攻撃じゃないとするとあれは何のためにやったことなのか。

決まっている。ノエルを誘拐するためだ。

（あの爆発は僕たちへの攻撃じゃない……でも、ノエルちゃんを爆発で誘拐する効果のひみつ道具なんてあるのか？）

「ドラえもん、爆発でノエルちゃんを誘拐できるひみつ道具ってない？」

「うーん……ちよつと分からないなあ。爆発こしよは人を爆発的にくしやみさせる効果だから違うだろうし」

ひみつ道具に最も精通しているドラえもんがこの反応。

すると、ノエルを直接誘拐するのに爆発を使ったわけではないかもしれない。



(なら、あの爆発で僕たちが転んだ以外に何があった?)

懸命に頭を回す。

あの時の情景を出木杉は口に出しながら思い起こした。

「爆発して……倒れて……風が吹いていて……木片も……あつ」

風が吹いて、木片が転がっていた。何故か。爆発で部屋に大穴が開いていたからだ。

つまり、あの爆発は部屋に穴をあけるためのものと言うことになる。

「何のために壁に穴を? ……そうしないとノエルちゃんを攫えないからだしたら

……!!」

「出木杉? 何か分かったの?」

「ドラえもん、空間が繋がっていること、もしくは視界に入っていれば人を遠くから攫えるひみつ道具はないかい?」

「うーん……?」

「……あつ、ドラえもん! 【手にとり望遠鏡】じゃない?」

出木杉の質問にドラえもんは唸るだけだったが、反応を返したのはのび太だった。

「前に使ったことはあつたけど、泥棒猫を捕まえようとして間違えて猫を追いかけたいたおばさんを捕まえちゃったことがあつたんだ!」

「そう言えばそんなことがあつたような……」

「あの時凄く怒られたから覚えてた」

流石は普段からひみつ道具を使っては痛い目を見ているだけはある。

嫌な記憶と言うのはのび太レベルの脳みそであっても思い出しやすいらしい。

「お手柄だよ野比君。ドラえもん、そのひみつ道具はどのくらいの距離まで使えるんだい？」

「君たちの時代の望遠鏡くらいだよ。こう、手の平サイズの」

「つまり、ノエルちゃんやノエルちゃんを攫った奴はまだそう遠くないってことだー」

この場合、最悪だったのは相手がアジトにいながら攫った場合だ。そうなればもう打つ手はなかった。

しかし、望遠鏡から覗ける程度の距離ならば、追いかければ捕まえられるかもしれない。しかし、望遠鏡から覗ける程度の距離ならば、追いかければ捕まえられるかもしれない。

「すぐに追いかけないと!!」

「駄目だ。僕たちだけだと危険すぎる。まずは皆の石化を解除して、こっちの仲間を増やすんだ」

「なら、ゴルゴンの首を捕まえないとだね。そのためには、君たちの怪我を治さないと

……あつた！ お医者さんカバン」

メタリックなカバンを四次元ポケットから取り出したドラえもんは二人の怪我を治

療する。

未来の医療技術によってたちどころに回復した二人はベッドから起き上がった。

「それで出木杉、どうやってゴルゴンの首を捕まえるの？」

「ゴルゴンの首によって石にされるのは人間だけ？」

「うん。僕みたいな高度なロボットも石にされることはあるけど」

「なら、おもちゃの兵隊で大丈夫かな。彼らに探索してもらって、見つけたら後ろからどこでもドアで奇襲をかけよう」

あつという間にゴルゴンの首捕獲作戦を組み立てる出木杉。

ドラえもんもゴルゴンの首は亀くらいの速さだからそれで大丈夫だと太鼓判を鳴らす。

のび太は途中から分からなくなったが取り敢えず腕を組んで頷いておいた。どこが分からないのかも分からないので質問のしようがないのだ。

そんな子供たちの会議だったが、彼らの立てた作戦が実行されることは無かった。

「ゴルゴンの首は頭の上の蛇を引っ張れば石化を解除するから、捕まえたら……」

「なるほどな、こうするのか」

「えっ?」

カチリッ、と何かが作動した音が部屋に響く。

弾かれたように3人が声の聞こえた扉を見ると、そこには黒髪の猫キャットピープル人が立っていた。

「なっ……おもちゃの兵隊に守られているはずなのに!？」

「あのみようちきりんな玩具はテメエの仕業か青狸。数だけ揃えた鈍間なんざいた所で無意味なんだよ」

「僕はタヌキじゃなくいつつ!？」

「ど、ドラえもん、落ち着いて……!？」

どう考えても友好的ではない眼光をぶつけてくる相手に、反射的にいつもの行動を取ってしまうドラえもんをのび太は懸命に抑えた。

「貴方は「フレイヤ・ファミリア」の……」

「……はっ、下らねえゴミだな」

前にのび太の暴走で本物電子ゲームDSに取り込まれてしまったことがある、「フレイヤ・ファミリア」の副団長、アレン・フローメル。

その手に持つ沈黙した石像は、今から捕獲しようとしていたゴルゴンの首だ。

アレンは石化を解除し、用済みとなったゴルゴンの首を放り投げ、槍で真っ二つに切り裂いた。

「な、なんでここに……?」

あの一件以降、接点が無かった第一級冒険者の登場に出木杉が疑問を浮かべる。

「奔放娘にいいように使われただけだ」

「アレンさん？ その言い方はないんじゃないかなーって思うんですけど？」

「そう言われるのが嫌なら大人しくしていてもえませんか。こつちも暇じゃないので」

ドアの向こうからひよつこりと顔を出したのはシルだった。

背後には2M程の大男である「おうじや猛者」を連れてくる。

更にそのまた背後で壁に減り込んでいるおもちやの兵隊たちはご愛敬。

「みんな、怪我はない？」

「はい。それよりシルさん、この人たちは……？」

「ちよつと危なくなってきたから、知り合いの冒険者様たちにお願ひして護衛してもらってるの」

「そ、そうですか」

第一級冒険者が知り合いとは、この女性はいったい何者なのだろうかと出木杉はやや引き気味に頷いた。

戦力的にアテにはならないが、底が知れない。

「……ノエルはここにいないの？」

「ごめんなさい……連れていかれちゃいました」

ノエルの所在を聞かれたとき、出木杉は無意識に震えてしまった。

目の前で少女が消えてしまったあの衝撃がぶり返したのかもしれない。

ノエルと本当の親子のように絆を深めていたシルを直視できず、俯いてしまう。

「そっか……気にしないで良いんだよ出木杉君。君たちが無事でよかった」

「でもっ」

あの時、傍にいたのは自分だ。

もつと自分が上手くやれていれば、彼女は連れ去られなくて済んだのかもしれない。

少年が無意味で無価値なもしもに押し潰されそうになった時、シルはゆつくりと出木

杉に近づいた。

そして人差し指を少年の顔に突き出し、ぐるぐると目と鼻の先で回し始める。

「出木杉君は元気になる、元気になるー」

「あ、あの、シルさん？」

「出木杉君は、笑顔になあーるー……えいつ」

つんつ、と鼻を押され、目を白黒させる出木杉にシルは母親のように微笑んだ。

「元気が出るおまじないだよ。落ち着いた？」

「……はい」

「ノエルのことを一生懸命考えてくれて有難いけど、自分を追い詰めちゃダメだよ」  
……やはり、底が知れない。

あんなに荒れ狂っていた心は何時の間にやら平静を取り戻していた。

「はい！ 不毛なやり取りはお終いです。今から下の階のみんなに事情を説明して、ノエルを取り戻しに行こ？」

パンツ、と手を叩き、シルは冒険者や子供たちに指示を出す。

あつという間に場の空気を切り替えてみせた彼女は、一瞬だけ憂いに顔を歪めたが、それはこの場の誰にも悟られることは無かった。

## 地下・北西・東

「え……？　（こ）は……？」

突如変わった景色に戸惑いの声を上げるノエル。

【豊穡の女主人】の木造りの部屋から、オラリオの建物が乱立する光景に切り替わったことに混乱しながら、目の前から消えてしまった出木杉の姿を求めて首を動かす。

「ひっ」

しかし、傍にいたのは最近ずっと一緒にいた子供たちの姿ではなかった。

そこには、黒いマスクと帽子を被る男と、ローブでその姿を隠した人物しかおらず、しかもノエルの体は黒いマスクの男に掴まれている。

「だ、だれっ!？」

「よし、お前は予定通りこの精霊を連れて例の宿へ向かえ。すでに人工迷宮クノッッスには【ガネーシャ・ファミリア】が向かっているはずだからな」

質問を無視してノエルを放り出す黒いマスクの男。

乱暴に屋根の上に落下したノエルが呻く中、黒マスクの男の独白は続く。

「全く、あの【名無し】のイカレタおままごには付き合ってられん。旦那もいい加減あ



んな奴とは手を切つて欲しい所だが……」

「……」

「ほら、とつとと行け。わしはここから奴らの足止めだ。できるとも思えんが、ゴルゴンの首を突破する可能性もある」

黒マスクの男の言葉にローブの人物は返事を返すことは愚か、頷く事すらしなかった。

ただ黙つて、ノエルを連れて【豊穰の女主人】とは反対方向に走つていく。

「や、やだあー」

ローブの人物から逃れようとするノエルを凄まじい力で連れていく様を見届けると、黒マスクの男は溜息を吐いた。

「つたく……一言も喋らない不気味な奴だ。車の事故で音声機能が狂つたらしいが」

意思疎通が出来ないというのも考え物だ。

作戦がしつかりと伝わっているのかも怪しく思える時がある。

「まあいい。あんな娘を連れていくだけのお使い程度はポンコツロボットでもできるだろう」

望遠鏡型のひみつ道具で【豊穰の女主人】を監視する黒マスクの男は、すぐにローブの人物への興味を無くした。もとより、彼がやるべきことはただ一つ。

留置場に共にいたあのロボットと行動しているのは、ある共通の目的があるからだ。それさえ果たしてくれるならば、それ以上の期待はしない。

「まさか、この世界にあのガキどもが来ているとはな」

何という幸運だと男は凶暴な笑みを浮かべる。

こちらから行く手間が省けたというものだ。

「おっと……もしや奴が何か言いたげだったのは、俺一人で楽しむなど言いたかったのか？　だとしたら……あいつも楽しめる分は残しておかないとだな」

その時、男の脳裏に浮かぶのは白亜紀でのあの忌まわしき事件。

凄腕の密猟者だった男はたった5人の子供たちによって敗北し、タイムパトロールに捕らわれたのだ。

闇の世界は面子商売だ。

様々な幸運に助けられていたとはいえ、小学生程度にやられた自分の名は地に墜ちた。

当たり前だ。子供にやられる犯罪者をどこの誰が恐れるというのか。

脱獄したところで、汚名モットが変わることは無いのだ。

故にこの世界での掟モットに従う。

やられたらやり返す、だ。



特にリーチの長い槍を使うアーニヤと比べ、小振りな短刀使いであるクロエは攻撃を防ぎきれず、光線の残子に肌を焼かれる。

「つち、愚図が」

そんな二人を見て、普段から不機嫌そうに見える目をより細めたアレンが舌打ちをした。

「アレン、付近に敵はいない」

「分かりきったことをいちいち言ってるじゃねえオツタル。どうせ娘のお気に入りを買ったのと同じマジックアイテムだろうが」

マジックアイテムじゃなくてひみつ道具だぞ、と訂正するオツタルの言葉に更に苛立ったように眉を吊り上げるアレン。

うっせえ！ と怒鳴りつつ下手人の視線を感知し、居場所を即座に特定する。

東に800M<sup>メドル</sup>。いくつかの世帯が共同で使用する建物。

その屋上に佇むヒューマンらしき黒い覆面を付けた男。

「鬱陶しいったらねえ。轢き殺してやる」

「ひきころすつて、車でも持ってるの？」

「ちよ、のび太君。変な茶々入れないほうが……」

ドラえもんの忠告も空しく、ゴツンと槍の石突<sup>いしつき</sup>でのび太の頭は叩かれた。

鼻を鳴らし、改めて標的を両眼に捉えたアレンは、屋根から屋根へ飛び移る猫のように体の重心を低く落とした。そんな彼を尻目に、のび太たちにリユーが解説を加える。

「……異世界からやって来た貴方たちでは知らないのも無理はありません。彼は「フレイヤ・ファミリア」の副団長にして、この迷宮都市オラリオにおいて、もつとも足が速い冒険者です。そして、都市最速とも謳われるその二つ名は」

瞬間。空気が爆ぜた。

無色の大波に飲まれたかのようにバランスを崩す子供たちを酒場の娘たちが支える。

その時、ドラえもんは聞いた。自信を支えるアーニヤが小さな声で、様々な想いが詰められた声で、囁いた異名を。

「……ヴァナ・フレイヤ【女神の戦車】」

この日、オラリオの青空に流星が昇った。

非常におかしな表現だが、その光景を見た出木杉はそう独白する。

余りの速さに姿が線としてしか認識できないという異様さ。

(クラネルさんも速かったけど……全然違う、桁違いだ)

ベルの速さまだ分かりやすかった。

勿論、自分たちの世界のオリンピック選手たちすら霞むくらいの敏捷であったが、それでも、知覚こそできなかつたが認識は出来た。

だが、アレンは違う。

結果を知った瞬間には既に行動を終えていたのだ。

まるでビデオで過程のシーンだけを抜き取られて、一つの行動の始まりと終わりだけを見せられたかのような違和感に脳が揺さぶられたかのような錯覚を受ける。

目の前の出来事を現実だと受け止められない。

「は、速い……」

「え？　ええ？」

咄嗟に周りを見渡すと、やはりドラえもんとのび太は混乱している様子だ。

実際にフィクション的な超人を見せられた人間はこうなるのか、と半ば現実逃避気味に思っている。

「わー、はっや」

「やっぱ第一級冒険者はおかしいわー」

「……」

一方の酒場の店員たちは少し引きつつも、自分たちのように混乱してはいない。

凄いは凄いけど、この程度なら想像の範疇という事なのだろうか。

この世界に来て最もカルチャーショックを受けたかもしれない。自分たちの非常識は異世界では常識になるらしい。

狙撃の利点をあつという間に潰した猫キヤットビール 人に遠い目をする出木杉。

ひみつ道具を使う者が誰かは知らないが、あんな出鱈目戦力に太刀打ちできるはずが無い。そう、少年が考えるのも無理はないだろう。

その時、ここまで碌に口を開かなかつた猪人ポアスの獣人が口を開いた。

「……敵方も中々やる」

「え、えつと」

「アレンが仕留めそこなった。狙撃手の位置に迫り着く数瞬前に姿を消したようだ」

出木杉の言葉に律儀に返してくれたオツタルの言葉に、出木杉が弾かれたようにアレンに視線を戻す。

少し遠いから断言はできないが、確かにアレンの向かった先には人つ子一人いないらしい。

(ひみつ道具!!)

そう、滅茶苦茶な身体能力ステイタスがこの世界にあるように、ドラえもんの世界にはひみつ道具という切り札がある。

敵はそれで瞬間移動なりなんなりができるのかもしれない。

「ドラえもん、あれって……」

「うん、きつと【手にとり望遠鏡】を応用したんだ!」

ドラえもんとのび太によると、木のような手で取れないくらいに大きなものを掴むとそれに引つ張られて転移してしまうらしい。

「だとすると不味い。ここは建物が多いから、どこへだつて逃げ放題じゃないか！」

「物を取る時の応用で、向こうの攻撃まで距離を無視するつて言う点も追加で。さっきの熱線はこの機能が応用されたんだと思う」

「何であろうと問題はない。このまま目的地へ向かう」

ドラえもんが出木杉が話し合う中、オツタルは二人の会話を遮った。

それに対し、抗議しようとした二人だったが、オツタルはそれを無視して飛んできた熱線を大剣で払いのける。

「……アレンが轢き殺すと言った以上、余計な手出しは無用。あの矛先を自分に向けられたくなければ、素直にここから離れておけ」

それは同じ女神の眷属を信頼しての言葉には聞こえなかった。

何故なら、そこに感情の熱は込められてなく、ただ当然のことを言っているからだ。焦っている自分たちとの温度差を感じつつ、出木杉は何の根拠もないと反論しようとしたが、のび太がそれを遮った。

「あれ、ミアさんはっ……」

キョロキョロと周囲を見渡し、「豊穡の女主人」の女将の姿を探す。



大柄なドワーフだから、足が遅くてついてこれなかったのかしら、などと呟いていると全てを理解したらしいオツタルは嘆息した。

「レベル6が二枚……既に過剰戦力だ。ここは奴らに任せて我々は進む」

オツタルは有無を言わせない威圧感で強引に話を推し進める。

これ以上問答する気はないという事だろう。

「それで……お前たちの言う目星とは何だ」

「……僕たちは前にひみつ道具で闇派閥イツイルスのアジトを突き留めています。そこで未来……じゃなくて異世界人の犯罪者も見かけました」

「ならばそこに案内しろ。それと、このままでは遅すぎる……加速するぞ」

「えっ」

そう言うオツタルは、闇派閥イツイルスのアジトを知っている出木杉を地図代わりだと言わんばかりに抱える。

そして、ショートカットのために建物を飛び越え始めた。

「ミャーたちも行くニャー！」

「ちよつと我慢してねドラ猫君！」

「うわあああああつ!?!」

続いて、アーニャはのび太を、ルノアはドラえもんを抱えてオツタルに追従する。



【豊穰の女主人】を襲撃した後、娘の護衛を警戒してその場を撤退していたジャックは、闇派閥のアジトである人口迷宮クノッツスではない、オラリオ北西区の安宿で精霊を攫つてくる手筈の仲間を待つ。

しかし、待てども待てども仲間が来る様子はなかった。

(失敗したのか?)

それならば失敗の合図を糸なし糸電話で伝えるはずだが、それすらできないほどに追い詰められているのか。

苛立ちつつ、ジャックは糸なし糸電話のボタンを押した。

ピンポロポン、と言う音が暫く部屋に響き、やがてジャックが再びボタンを押して音を停止させる。

「奴は出ないか。ならば恐竜ハンターはどうだ」

今度は別の糸なし糸電話を使用する。こちらはすぐに繋がった。

男性の息遣いと時折聞こえる破壊音。あまりいい状況でないのは確かだろう。

「おい……」

「今かけてくんじゃねえ！ クツソあの飼い猫野郎!! 逃げてても逃げてても金魚の糞だ!!」

「精霊はまだ来ないのか」



「ひう……しゃべ、ったあ」

「そう怯えるな。俺はお前を誘拐する気はねえ」

「……え？」

突然流暢な言葉を喋り出したその人物にノエルが面食らう中、ローブの人物はキヨロキヨロと周りを確認する。

「お前をあいつらの所に連れていく気はない。すぐにあの酒場に戻してやるから心配するな」

「なん……で？」

「俺はもう、悪いことは止めたんだ」

ローブの人物はそう言うど、オラリオの東側……【アイアム・ガネーシャ】を指して密かに移動を開始した。

## 「迷宮都市逃亡戦

硝子突き破る。

レベル2となり、様々な能力が強化されているとはいえ、流石に罅割れた硝子突き刺されればベルの体も傷だらけになった。

だが、それに頓着している余裕はないのだ。

「懐かしいですねえ。あの死の七日間から7年。大手を振って冒険者狩りが出来る時代ではなくなってしまったので、こうして逃げ惑う冒険者との鬼ごっこは心が躍ります！」

息を切らせて床に蹲るベルの耳にヴィトーの声が入った。

余裕ぶってゆつくりと歩く彼は、間違いなく狩人だ。それも、獲物を前に舌なめずりし、急所ではなく足先を狙う類の。

この箱庭の迷宮都市に閉じ込められ、ベルは遥か格上であるヴィトーから終わりの見えない逃亡戦を強いられていた。

既に体はポロポロ。呪詛カースにより治療を阻害されているせいで、体中のかすり傷から出る血と共に彼の体力は刻々と減っていつている。

「くっ……」

傷は治らなくとも、体力を一時的に上げる程度ならば回復薬ポーションで出来る。

腰に着けたアイテムポーチから乱暴にポーションの液体が入った瓶を取り出し、一気に飲み干す。気休め程度には体力を戻せたと確認したベルは、急いでアイテムポーチから次に必要なアイテムを取り出した。

「しかし、こどもも狙い通りの場所に来て下さるとは。しあわせトランプの効果でしょうか？ 小説では随分と「幸運」のアビリティに助けられてきた貴方が、皮肉だ事だ」

（声が近づいてきた。なら）

伸蛙ノビエールを発射し、ヴィトーがいる方とは反対側の窓にロープを繋ぐ。

これで建物にヴィトーが入ってきたとしても、ベルはすぐに離脱できるようになった。

逃亡のための準備を整えたベルは、ヴィトーが来る前に終わらせなければと手を動かす。

魔石の破片を空になったポーションの瓶に詰め、もう一つの魔石には紐を巻きつけてから瓶に入れる。その後、手首に紐を巻きつけて準備は完了。

フラッシュボルト  
発光瓶の完成だ。

「ほらほら、早く逃げないと」

「ファイアボルト」ッ!!」

建物のドアが開くと同時に速攻魔法を撃ちこむ。

この偽りの街にいるのはベルとヴィトーのみ。もしかしたらヴィトーの部下も潜んでいるかもしれないが、ベルの味方や一般人はいるはずがない。

自分以外の動くものは全て敵だ。

炎弾の成果を見届けることもなく、伸蛙ノビエールを巻き上げる。

そのまま建物の外に飛び出したベルは熱と共に自らの失策を悟った。

建物が集まる密集地帯。その中でポツリと空いた空き地。

洗濯物が干されていて、いるはずのない住民の生活が垣間見える場所だが、それを気味悪く思うことは出来ない。ベルがそれを視界に入れる前に、そこは跡形もなく吹き飛んだのだから。

「うわあああああつっ!?!」

ヴィトーの仕掛けた爆弾だ。と吹き飛ばされながらベルは理解する。

爆発に直撃しなかったのは単にロープを巻き上げる力が想定より弱かったから。

先ほどの攻防の際に伸蛙ノビエールを防御に使ったのが不味かったのか。複雑な構造を持つ装備は内部で不具合を起こしてしまったらしい。

結果的にそれに救われたのかもしれないが、爆発によって壁に叩きつけられてしまっ



た。

「ぐ……くっ」

呻きながらも、ナイフを構える。殺気が、来る。

煙を裂いて現れたのはヴィトーだ。

振るう鉛色の凶器の向かう先はベルの頸動脈。

なんとか致命打を防ぐベルにヴィトーは囁くように語り掛けた。

「……」はシルバーバックに追いかけられた時に逃げ込んだ隠し通路。起死回生を果たした地が、今は貴方の敵」

「……………？　ゴホツ、ゴホツ……………」

「ふふ………手持ちの解毒薬では【ダークファンガスの孢子】は解毒しきれませんでしたか？　上層の紫パープルモス蛾用のものしか持つていなかったでしょう？　この時期はまだ18階層にも到達していないのですから仕方ない!!」

ナイフが押し戻される。やはり力勝負では勝てない。

レベル云々以前に、毒に侵されてしまっているベルでは。

【豊穡の女主人】の樽や酒類が、ベルが入ると同時に破裂し、中にあった迷宮由来の毒物をばら撒かれたときの影響がまだ残っている。恩恵フレイグナを昇華していなければ、喉が焼けていたかもしれない。

「しかし……ダークファンガスの胞子を見た瞬間に速攻魔法ファイアボルトで焼き払う位は思ったのですが」

「……っ！」

「今の貴方はそこまでの技量はないようですね。レベル3になつたわけでもないから当然……そもそもあれは9巻でのお話ですからね」

「さつきから……なにを」

「もう貴方が辿り着くことは無い。未来のお話ですよ！」

ベルの腹部にヴィトーの拳がめり込む。

胃の中のモノを逆流させながら前のめりに倒れるベルだったが、ヴィトーは更にベルの後頭部に肘打ちを喰らわせた。

「ぎっ!?!」

石造りの地面に転がったベル。

床はオラリオの街とは流石に違うらしい、などと遠くなつた意識の片隅で考えた。

「ふふふ……さて、そろそろ貴方の腕御一つでも……」

このまま眠つてしまいたい、と言う誘惑を振り払つて右腕を突き出す。

先ほど即興で作り上げた発光瓶フラッシュボトルだ。今なら不意打ちで光を直視するはず。そう確信して起動させるが。

(……不発?)

とっておきのマジックアイテムはその力を発揮しなかった。

作る際に間違えていたわけではない。ハツメイカーによって設計されたこのマジックアイテムは作りやすさがウリなのだ。

恐らく、たった今倒れた際に魔石を結ぶ紐が綻んでしまったのだろう。

運の悪いことに。

「しあわせトランプの道化師様様ですなえ」  
ジョーカー

困惑するベルを見て、なにが起きているのか理解したらしきヴィトーは啜う。

【幸運】を失った無様なベルを。  
主人公補正 主人公

そのまま突き出された右腕の手首を切り裂き、  
フラッシュエポトル発光瓶を粉碎する。

「あつ、がああああああつ!」

手首の筋を切られ、力を失った右手から零れる神様の刃。  
ヘステイア・ナイフ

それをなんとか左手でキャッチすると、ベルは目に溢れるほどの涙を溜めながらも、懸命にヴィトーを睨みつける。

ベルの懸命の抵抗は、しかしヴィトーを興奮させるだけだ。

「そんな熱い目で見ないでください! 自分が抑えられなくなる!」

笑みを浮かべて斬りかかるヴィトーの剣を左手のナイフで払い、ベルは立ち上がる。

そんな少年の姿にヴィトローは喜色を深めるが、ヴィトローが何かをするより早く、今度はベルが動いた。

ベルは敢えて傷ついた右腕を振り、手首から流れる血をヴィトローに飛ばす。

顔面にベルの血を掛けられたヴィトローがよろめく中、ベルは全速力で駆け抜け、当たりを囲む壁をレベル2の驚異的跳躍力で飛び越えた。

あわよくば、等と考えない。

相手は圧倒的格上で、今の自分は信じられないほど持つてない。

一見すると絶好の際に見える敵の失態に、ベルは飛び込まなかった。

「傷ついた右手を利用した血の目隠しですか」

ヴィトローは顔に付着した血を拭いとるとベルの足音が聞こえる方へ視線を向ける。

ヴィトローの油断があったとはいえ、鮮やかな逃走の手際だ。

「流石は未来の【逃走】の発展アビリティ持ち、とでも言っておきましょうか」

獲物を逃したというのにヴィトローに焦りはない。

もはやベルとヴィトローの戦いは結末が決まっている。それが逃亡戦だったとしても、何も変わらないのだ。

価値が確定している以上、あっさりと終わっては面白くない。もつと楽しませてもらうなくては張り合いがない、とヴィトローは独り言ちた。



よそ者どころか、普段から住み着いている住民ですら迷う事は多いのだという。年に何人もの行方不明者が出ると噂されるそこは、もう一つの迷宮ダンジョンと言える。

まあ、何が言いたいかというと。

ダイダロス通りは迷子になりやすいのである。

「こつちで、いいの？」

「ギギギ……」

ノエルの手を引いてダイダロス通りを歩くロープの人物は、ノエルの問いに頷いて見せる。

とは言え、自信満々ではなく、「大丈夫だろ、多分」と聞こえてきそうな感じだが。

「ガ、ゴ」

「やじるし？」

ロープの人物が指さす先には住民が描いたらしき矢印があった。

迷わないために住民たちが用意した道標アリアドネだ。

「ガ……」

キョロキョロとロープの人物が辺りを見渡す。

矢印は分かりやすく、短距離だが、その分敵対者には読まれやすいだろう。

闇派閥や時間犯罪者がいないかを確認し、ノエルを連れて通路を進んでいく。

「……」

「……」

暫し、無言が続いた。

しかし、ノエルは結局好奇心を抑えられなかったらしい。

「どうして、たすけて、くれるの?」

ノエルの当たり前と言えは当たり前の質問に、ローブの人物は少し考える仕草を見せた後、ひみつ道具を使い喋り出した。

「お前の友だちにのび太っているだろう」

「うん」

「俺もあいつの友だち……じゃあないよな。凶々しい。なんて言えはいいのか分からんがそうだな、あいつの世話になったもんだ」

そう言つてローブの人物は空を見上げた。

「俺は悪い奴でな、のび太に会つていろいろあつた後。罪を償うためにタイムパトロールに行つたんだ」

「タイム、パロール?」

「あーなんていえはいいんだ? 正義の味方つて奴だ」

そこで裁判前の手続きのために留置場で待つていた時、時間犯罪者たちを率いた

ジャックがタイムパトロールを襲撃してきたとローブの人物は語る。

「じかんはんぎいしや?」

「滅茶苦茶悪い奴らだ」

「どのくらいわるこ? しろひらひら?」

「し、しろ……? あ、ひよつとして闇派閥イツイルスの狂信者の服か」

次々と捕まっていた時間犯罪者を解放したジャックは、ローブの人物も解放したらしい。

「せいぎの、みかたに、おこられないの?」

「怒られるだろうな。俺が更生すると信じてくれたタイムパトロールの奴らには悪いが

……」

ローブの人物も初めは逃げるつもりが無かったらしい。

しかし、自分より早く解放されていた時間犯罪者……恐竜ハンターの言葉が無視できないモノだった。

『聞いたぞ。お前もワシと同じようにあのクソガキどもにしてやられたらしいな。ワシらと手を組め。奴らを共に血祭りにあげてやろう』

改めて言っておくと、ローブの人物はのび太に負けて捕まったのではなく、のび太との交流で改心して自首しただけだ。



にもかかわらず、恐竜ハンターがロープの人物のことを誤解したのは、ロープの人物が捕まってからジャック襲来までの期間が短かったからだろう。

「どっちの逮捕にも**び太**が関わっているからな。タイムパトロール内でも俺が自首したことを知らない奴らもいた。捕まってる悪党どもには俺の逮捕に**のび太**が関係している、としか伝わっていなかったのさ」

もしも、ジャックが襲ってきたのがもつと後だったなら、彼らは改心している己を開放しなかっただろうとロープの人物は語る。

事実、改心して更正しようとしている怪盗Xは無視され、彼が改造を施した**ひみつ道具**だけが利用された。

「最初は断るつもりだったが、恐竜ハンターから物騒な言葉が出たからな。ここで無関係でいて、後での**び太**に何かあるのが怖かった……おっと、生まれ」

通路の奥で蹲る**乞食**たちを見て、歩くノエルを制止する。

イツイルス  
闇派閥の**関係者**らしい。

「少し遠回りが必要だ。こつちにこい」

「うん……」

ひみつ道具をはずす。

再び無言。

ロープの人物は乞食に扮した闇派閥関係者に気取られないよう細心の注意を払い、ノエルはそんな彼を邪魔しないように口を開かなかつた。

やがて、道標アリアドネとは少し外れた通路に入り、溜め息を溢した。上手くやり過ごせたようだ。

「もう喋っていいぞ」

「むねが、ばくばく、してる」

「なんとか誤魔化したみたいだ。こっちから【ガネーシャ・ファミリア】へ行くぞ」

「うん」

「にしても面倒だな、こうやってひみつ道具を使わなきゃ喋れないのは」

「どうかしたの……?」

「なに、事故で言葉が喋れなくてな。ひみつ道具の「心の声スピーカー」を使っているんだ。これなら音声機能がなくても言葉を伝えられる」

そう言ってロープの中をみせると、そこには皿状のアイテムが取り付けられた不思議な形の道具があつた。

「べんり……!」

「そんなに良いもんじゃない。心の声だから嘘はつけないし、余計な事も口走つちまう」  
時間犯罪者たちに紛れ込んだ異物であるロープの人物としては、変なことを口走る事

がないように、このひみつ道具を持っていることは隠していたのだ。

「お陰で大変だったぜ。会話ができないから上手く質問もできないし、この世界の人間との交渉にも参加できないから、奴らの悪巧みがどこまで進んでいるか分からない」

すぐにタイムパトロールにジャックや恐竜ハンターの居場所をリークする気だった彼は、のび太の襲撃が何時始まるのか気が気ではなく、逃げるのがなかなか出来なかつたらしい。

また、ローブの人物が改心しているとは思ってなくとも、自らの利のために裏切る可能性は考えていたらしい。

時間犯罪者たちの交渉の末に派遣された闇派閥イヴィルスは協力しつつも、監視をしている節があつたと言う。

「なんとかこの世界の奴らには感知できない時空の歪みを起こすことで、タイムパトロールが気付いてくれるのを願っていたんだが……なんでかドラえもんが見つけたまいったよなあ」

「ん？　どらえもんはせーぎのみかた？」

「正義つちやあそうかもしれないが、タイムパトロールではないぞ」

あんな騒ぎがあつた以上、これまで以上に闇派閥イヴィルスの監視は厳しくなるだろう。

そうなるともう自分にやれることはない、とローブの人物は悟つたらしい。

「いい加減限界だったからな。最後にあいつらの計画の要のお前を逃がしてトンスラこくことにしたんだ」

「げんかい?」

「ああ、最近是完全に蚊帳の外だった。ひみつ道具をレンタルしていることにも最近気がついたんだ」

【イシユタル・ファミリア】でドルマンスタインが取引するらしいと知り、時空の歪みを発生させるついでに調査もしていたらしい。

結局、取引の末に何かを貸したのは確からしいと言うことしか分からなかったが。

「さあ、俺の話はここまでだ。とつとつ【ガネーシャ・ファミリア】に保護してもらってホームインからのサヨナラだ」

「ん? おー?」

最近何処かで聞いたことがあるようなスラングを使われ、首をかしげつつも同意しておくノエル。

ローブの人物はそんな少女を抱き上げて一気に走り出した。ここを一直線に進めばダイダロス通りを抜けてオラリオ東部に出ることができる。

「……」

そんな二人を建物の屋根から見下ろす影。

その頬には十文字の傷がついていた。

## 精霊の魔力

こんな経験はないだろうか。

嫌な胸騒ぎがして、普段は校則をやや外れている着崩しなのに、その日だけちゃんとした格好をしたら朝一番からの抜き打ちチェックの日だったこと。

こんな経験はないだろうか。

外に遊びに行く前に嫌な予感を覚えつつ、だけど予定だからと出掛けたら、いきなり大雨が体に叩きつけられる音を聞き、やっぱり来るんじゃないかと思つたこと。

未来は誰にも見通せないというけれど、まるで頭の何処かがこれから先の光景を垣間見たかのように芽生える予感。

『このままだと失敗する』

そんな胸のつつかえ。

論理的に考えれば、気の迷い以外の何者でもないそれは、この場の何人かが感じていた。

(ノエルはこの先の闇派閥イヴイルスのアジトに本当にいるのでしょうか……)

シルを抱えて走るリユーも、自らの内から沸き上がる予感に揺れていた。

出木杉の推論に異存はない。地下に隠され、これまで存在すら気取られていなかった隠れ家など、正に絶好の逃走先。

必ずいると断言はできないが、確率としては悪くない数字になるはずだ。

(しかし、予感がある。この先にノエルはいないと)

リユーは元冒険者だ。

既に一線から退いているとはいえ、深層域の探索や迷宮モンスター・レックスの孤王の討伐経験すらある彼女の潜り抜けた死線の数々は、いまでも彼女の中で息づいている。

そんな極限の地獄を経験したリユーは、勘や予感といった曖昧なものであっても軽視しない。

(何かを見落としている……いや、私たちに見えていない何かが見えている……?)  
しかし、やはり曖昧なもの。

それを明確な言葉に言語化できず、焦りだけが胸の奥で渦巻いた。

このまま行っても失敗する、ならばどう動くべきなのか。その答えが見つからない。

出木杉の案は決して検討外れなものではない以上、代案もなしに止めようと言ったところで納得されるはずがない。

「リユー……」

「シル? どうしましたか?」

「焦らないで。今は何もヒントはないかもしれないけれど、必ず手掛かりはある。その時に冷静じゃないと、気づけないよ」

(シルも違和感を覚えて……そうですね。今の私は冷静ではない)

シルの言葉も最もだと、リユーは一度、頭の中を空っぽにして熱くなりかけていた思考を冷やす。

どうも自分は近い者の危機には過敏になってしまいうらしい。

これではライラにまたからかわれてしまう。

(地下のアジトでないとすると、考えられるのは治外法圏である歓楽街かカジノ……ここで人数をバラけさせるには候補が多い。もっと絞れるものは)

リユーが何とか嫌な予感と折り合いをつけようと思いを加速させる直前、魔力の渦が現れた。

「ニヤ!? なんニヤ!?!」

「この感覚は……?」

アーニヤたちは勿論、異世界から来たドラえもんたちですら感じ取れる強大な力。

(この魔力量……! まさか、精霊!?)

魔法種族たる妖精エルフのリユーですら啞然とする魔力。

そんなことができるのは、神秘の種族である精霊だけだ。



オラリオでも珍しい神々に最も近い存在の登場に、リユーは何が起きているのか事態を把握しきれなかった。

「ちよつと、これ不味くない……う？」

ルノアの焦燥に満ちた眩きが木霊す。

もしも、この魔力の奔流が所謂『精霊の悪戯』ならばいい。突発的な事態ではあるが、今のリユーたちがその被害を受けることは無いだろう。

だが、これが精霊にとつても予期せぬ事態。精霊が身に迫る危機に止むを得ずに力を発揮した結果だとしたら、放置することは果たして正解なのか。

一瞬の逡巡を打ち破ったのは腕の中の少女の声だ。

「行つて！ リユー！！」

「シル……!?!」

「あそこにノエルはいる！」

冒険者でもない筈の彼女は一体何を感じ取ったのか。

確信を持つてノエルの所在を示す。

（しかし、あの方角は……）

精霊の物と思われる魔力を検知したのはオラリオ東部。

都市の憲兵とも称されるS等級派閥ランクファミア「ガネーシャ・ファミア」のお膝元だ。

子供を誘拐した犯罪者がそんな所に逃げ込むなど、心理的にあり得るのだろうか。

様々な可能性を検討し、リユーは決断する。

「【おうじや猛者】！ 私たちはこの場を離脱し、魔力の下へ向かいます！」

「……いいだろう」

リユーの突飛ともいえる進言に少し考えこんだオツタルだったが、リユーに抱えられるシルと視線を交わし、重々しく返答を返した。

「リユー!?!」

「あの魔力がノエルと関係している可能性がある！ 私たちが現場を確かめます！」

「……敵の戦力が分からない以上、戦力を分散させるべきではないと思うけど？」

「クロエの言い分は最もですが、今はそれ以上にノエルへの手掛かりを失うほうが怖い！」

仲間たちにそう言うや否や、身をひるがえしてオラリオ東部へ直行する。

「まあ、このままアジトに向かっても空振りする可能性は否定できないわね……と、言うワケでミヤーも抜けさせてもらうニヤー。ぶっちゃけ【おうじや猛者】と同伴とかマジ勘弁」

「何かあるか分からないからミヤーたちみんなでリユーを追いかけるニヤー！ 団長ならイヴァイルス闇派閥が何人いようと問題ないニヤー！」

「……ああ、もう！ ドラえもん、しつかり掴まっててよ！」



凝視し……

金属質な音共に弾かれた長物に唇を吊り上げた。

「……ああ？　っち、またおかしなマジックアイテムか」

「は、ははは……恐ろしい身体能力だが、『がんじょうぐすり』で硬質化したワシの体は貫けなかったようだな」

「それがどうした。結局その後は何もできないだろうが」

「それはどうか?!」

恐竜ハンターはスプレー型のひみつ道具を取り出した。『J B G』と記された緑色の缶を右手に持ち、左手で四次元ポケットを弄る。

そして、四次元ポケットから無数のナイフを放り投げ、それらにスプレーを噴射した。そして、四次元ポケットから無数のナイフを放り投げ、それらにスプレーを噴射した。「あの糞猫をつ、アレン・フロームルをぶん殴れ！」

恐竜ハンターの号令に従い、ナイフたちは意思を持つかのように一斉に襲い掛かる。無数に煌く銀の殺意による弾幕。常人ならばズタボロになった自分の未来図に顔を蒼くするところだが、アレンは下らなそうに鼻を鳴らし、目にも止まらぬ速さで槍を振るい、弾幕を吹き飛ばした。

「無駄だ！　この『自動ぶん殴りガス』を吹きかけたものは標的を狙い続けるぞー！」

そんなアレンを嘲笑う声。

恐竜ハンターの言葉通り、弾かれたナイフたちは再び空中でその切っ先をアレンに向け、突進する。

何度繰り返されようとも終わらないナイフたちの襲撃に、恐竜ハンターは勝利を確信した。

どれだけ化け物じみた力を持っていたとしても、永遠に繰り返される攻撃など防げない。やがて限界が来て無様な屍を晒すだろう。

自動ぶん殴りガスの所持者である自分を先に潰そうとしても、がんじょうぐすりを服用している以上は手出しは出来ない。神の恩恵を刻む怪物たちを簡単に葬り去る必勝法だ。

（槍が目の前にあった時はどうなるかと思つたが、齒の中にかんじようぐすりを仕込んでいたことが幸いしたな。これでワシの勝利は揺るがない）

勝利を確信する恐竜ハンターであつたが、凡人の想像の上を行くものこそ冒険者。

アレンは鬱陶しそうに眼を細めると、信じられない行動に出た。

飛んでくるナイフを掴み取り、煉瓦で舗装された地面に深々と突き刺したのだ。

「は……？」

高笑いが止まり、啞然とする恐竜ハンター。

深々と突き刺さったナイフは抜け出せないのか、時々震えることはあるがそのまま沈

黙してしまふ。自身の行動の結果を確認したアレンは、次々と襲い掛かるナイフを驚掴みし、地面に突き刺していく。

何度か繰り返すうちになれたのか、しまいには10本近くを一度に掴み取る、などと言ふ人間離れた業まで披露して見せた。

「が、あ、な……う？」

「つまらねえ技を解説しやがって。掠りもしねえんだよ」

「ば、馬鹿な……」

飛んでくるナイフの刀身を掴むと言う現実離れた光景に呆ける恐竜ハンターを、アレンは唾棄するように睨みつけた。

必勝の策をあつさり破られた恐竜ハンターは、想像以上に化け物な第一級冒険者に冷や汗を流す。

「このっ、創作物風情が……っ」

「手前えを見ていると戦う気が失せる。とつとと死ね」

「だが自動ぶん殴りガスを防いでどうする!? ご自慢の槍はワシの体を貫けんぞ！」

（不味い……がんじょうぐすり効果は10分しか効かない……そろそろ時間切れになつてしまふっ）

一転してピンチになった恐竜ハンターは、何とか誤魔化そうとハッターで切り抜けよ

うとする。

知ったことかと口では言うアレンだったが、自動ぶん殴りガスと違い、がんじょうぐすりの詳細は理解していない以上、慎重になっていられるらしい。

未見のひみつ道具も警戒する必要があり、必然的に睨み合う形となった両者。

(手にとり望遠鏡は少し離れた位置に転がっている。何とか回収できればまた逃げられるはず。新しくがんじょうぐすりを飲めれば多少は無理をしても……)

「……つち、時間切れか」

「なに？」

打開の策を捻るべく頭をフル回転する恐竜ハンターであったが、アレンがぼそりと呟いた言葉に眉をひそめた。

(時間切れ……？ 奴に何か制約が？ それとも……)

アレンの真意を探ろうとする恐竜ハンターだったが、その答えは恐竜ハンターの足元……屋根の下を突き破って現れた。

「このアホンダラがああああああっ!!」

「な、なんだっ!？」

足の骨ごと握り潰されそうな握力を感じながら、屋根の下に引きづられる。

恐竜ハンターは視界が移り変わる感覚に吐き気を覚えながらも、事態の元凶を理解し

た。

「酒場の……女主人か」

「このアホ猫!! 殺したら情報が取れないだろうが!!」

「しるか」

「まったく、教育がなっていないね。ちゃんと団長やってのかいあの餓鬼は」

恐竜ハンターとアレンを追ってきたらしい、「豊穣の女主人」の女店主のミア・グラドは丸太のような腕で恐竜ハンターを捕えた。

万力とも思える「力」の能力値<sup>アベリテイ</sup>。動くこともできない恐竜ハンターはしかし、笑って見せた。

「情報を引き出すだと? がんじようぐすりによつて無敵となつているワシにはどんな拷問も無意味だ」

実際はそろそろ効果が切れそうだが、そうは悟らせないハツタリを見せる。

しかし、それに対してミアも凄む。

「そんなことは知ってるよ。そのアホ猫の槍が弾かれるのを見たからね」

「ふん、だったら……」

「だったら……こうすればいいだろう!」

恐竜ハンターの顔を鷲掴みにしたミアハそのまま恐竜ハンターを持ち上げる。



そして、そのまま投球するように振りかぶった。

(ワシを地面に叩きつけるつもりかっ!!)

無駄だ、と恐竜ハンターはほくそ笑む。

叩きつけられようと、鋼鉄じみた体は痛みを感じることは無い。隙を見て脱出を……  
そんな考えは、しかし、ミアの次の行動で吹き飛んだ。

「ふんっ!!」

ミアは恐竜ハンターを地面に叩きつけることなく、空中で再び恐竜ハンターを引き上げる。

恐竜ハンターの体が異様な方向に曲がるほどの急制動で。

「うっ……!?!」

同時に恐竜ハンターに異変が起きる。

体のどこかからグキリと変な音がし、一瞬気を失う。

すぐに覚醒して、頭の中に浮かんだのは疑問。

何処にもぶつかっていない。ならば、今の感覚は何なのか。

その答えはミアが答えた。

「刺しても殴ってもダメなら……揺らせばいいだろう!?!」

(ま、まさか!?)

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッ!!」

残像が見えるほどに恐竜ハンターの頭が上下に揺さぶられる。がんじょうぐすりによって体にダメージはない。

しかし、恐竜ハンターは苦悶に呻いていた。

(脳が……揺れているっ!?)

人間の脳は頭蓋骨の器の中に浮かんでいる。

強い衝撃がかかれば、頭蓋骨の中で脳は揺れ動くのだ。

体がどれだけ頑丈になっていようと関係ない。

「ぎいやああああああああああああ……っ」

「そらっ! とつとつとノエルをどこにやったのか教えな!!」

脳筋ババアが……と呆れるアレンの前で、恐竜ハンターは情報を吐き出すまでシエイクされ続けた。

## デンジヤ

のび太は奇妙な星の下で生まれている。

ドラえもんと言う未来の猫型ロボットが勉強機の棚から出てきたこともそうだが、それ以外にも不思議な出会いを繰り返してきた。

この『ダンまち』の世界で出会った人たちも、物語の人物たちであるがゆえに、本来は会おう事はありませんでした。

だからこそ、ノエルとの別れがこんな形で来ることは我慢できない。

別れの時は近づいているのかもしれないが、納得のいく終わりがたをしたかった。

(今何が起きてるのは全然分かんないけど！)

のび太の頭の出来は全く良くはない。と言うか、良くないからこそドラえもんが来たのだ。

だから周りの大人たちがあれこれ言い合って方針を決定しても、なんでそうなったのかはよく分かっていない。

ただ、ノエルを助けるために皆が必死になっていたから、信じてみようと考えただけだ。

「魔力が濃い……っ。そろそろ到着します！ 各自警戒を！」

魔法が得意だというエルフだからか、のび太には感じ取れない微細な魔力の違いを察知したらしいリユールが仲間たちに呼びかける。

「のび太君！」

ルノアに抱えられたドラえもんが四次元ポケットからショットガンを取り出し、アーニヤに抱えられるのび太に投げ渡した。

いよいよ現場が近い。

何が起こるか分からない以上、いつでも戦える準備をしておけという事だろう。

「ありがとう！」

のび太は非力な少年だが、銃の才能には自信がある。

敵が現れたら、これで撃ち抜いてやると意気込むのび太を連れて、一行は魔力の発生源に到着した。

「……これは……!?!」

ドラえもんが絶句する。

西洋調のデザインによって作られた街角には、無残な家の残骸の姿があった。

「……っ！ 住民はっ」

「落ち着くニヤ、リユール。ここに住民はいない。とつとつ逃げたっポイニヤール」

「この壊れ方、単純に剣や槍で暴れたってワケじゃなさそうだね」  
「焼けた跡があるニヤ。きつと魔剣か魔法を使った……はニヤ?」

周囲の状況を確認していたアーニヤは、そこで声を漏らした。

何かに気が付いたように怪訝な様子で、パタパタと顔を扇ぐ彼女にシルが問いかける。

「どうしたのアーニヤ?」

「ニヤ……? こんな真つ黒こげなくらい燃やされたのに暑くないニヤ」

「寧ろ寒いよ……」

冷気で少し体を震わせるのび太。

寒いものは苦手なのだ。

「この冷気は精霊が?」

「分かりません。魔力は感じますが、膨大過ぎて何に使ったかまでは……」

「ちよつと、人が倒れてるんだけど!?!」

リユーとシルがこの違和感を話し合っていると、ルノアが慌てた声色で叫ぶ。

急いで彼女のいる方へ向かう一同だったが、のび太はそこで衝撃の再会を果たす。

「……君は!?!」

大きな体躯に赤色の塗装。



そんな高性能な耳は、自分たちに迫る3つの物体空気の壁を突き破る音を正確に拾った。

「攻撃か!? 俺に掴まれ!」

ノエルを抱きかかえたデンジャは、背中に迫る物体を間一髪躲す。

それに安堵しかけ……再び三つの音が近づいて来る音に戦慄する。

「追いかけてくる……! ひみつ道具か!」

ノエルを抱えたまま走り出したデンジャがチラリと後を確認する。

そこには、細長い棒状のひみつ道具が煙を発しながら飛行していた。

「不味い、【ゆうどうミサイル】だ! 燃料がなくならない限りどこまでも追いかけてくるぞ!」

自分たちに使われたひみつ道具を即座に分析したデンジャは、四次元ポケットから武器となるひみつ道具であるくうき砲ポピュラーを取り出した。

くうき砲は22世紀では比較的一般的なひみつ道具だが、デンジャのそれは普通とは違う。

「ゴガグツ!!」

ガ行しか言えない音声機能のせいで妙な発音になったが、デンジャは空気砲の力を解放する。

一発の威力は通常の者と変わらない。だが、デンジャのくうき砲は連射が可能。

「ロボット  
カスタマイズ自らも機械であるからか、デンジャは機械類に強い。市販のひみつ道具であっても、改造によって別物クラスのひみつ道具に生まれ変わらせるのだ。」

「すごい……！ おとーさんみたい」

「そいつはどうも！」

瞬く間に放たれた空弾が飛翔体たちを炎の華に変える。敵の先制攻撃はしのいだらしい。

そう、これはあくまでも先制攻撃。

次の手を敵が撃って来ない訳が無い。

戦いのイロハは理解できずとも、まだ終わっていないことを感じ取り、身を竦ませるノエルを勇気づけるように無言で頭をポンポンと叩きながら、デンジャは油断なくゆうどうミサイルが飛んできた方角を睨みつける。

「……」

「まさかとは思ったが……俺を裏切ったな、デンジャ」

「殺し屋ジャック……ッ！」

十文字の傷を持つタイムパトロール襲撃の主犯者が姿を現した。

ゆうどうミサイルを見た時から、ジャックに見つかったと悟っていたデンジャは、し



かし、それでも苦々しい表情だ。

「その精霊は闇派閥イワイルスが使った後は22世紀で売りさばく手はずだつたはずだ」

「……」

「金に目がくらんで裏切つたか。廃棄物未満スクラップの分際で」

ジャックの問いにデンジャは答えることなく、くうき砲を叩き込んだ。

全世界指名手配の犯罪者。デンジャも元々は札付きの悪党だが、目の前のこの男ほど暴れたことは無い。

そんな危険な男を一秒でも早く倒さなければと考えての一撃だったが、その攻撃はジャックの目の前に突如現れた存在によって防がれた。

「——アアッ!?!」

「ガガッ!?!」

ジャックの前に現れたのは頭身の小さな白い少女。

明らかに人間ではないその存在は悲鳴と共に消えていった。

目の前で起きた異様な光景に戸惑いの声を上げたデンジャだったが、やがてこの異変を起こしたひみつ道具を悟る。

「テメエ!! 【精霊よびだしうでわ】で呼び出した精霊を盾に」

「そのこの精霊の近くなら、雪がなくともこのひみつ道具の紛い物の雪の精霊を呼び出せ

ると踏んでいたが……アテが外れたな。これでは使い物にならない」

非情な手段を悪びれもせずに使ったジャックに、ノエルの表情が蒼白となる。

ノエルのこれまでの世界はベルやドラえもんたち、「豊穰の女主人」によって守られてきた。それ故に感じていなかった恐怖を、足の傷が生み出す幻痛と共に思い出す。

「素直にその精霊を渡したほうが身のためだぜ」

精霊よびだしうでわ、それは近くの自然現象に応じた人工の精霊を召喚するというものなのだ。

呼び出された精霊は召喚主にある程度従い、ドラえもんたちの世界に伝承される神話的な能力を行使するのである。

当然、悪用しようと思えばなんだって出来る。

勿論、呼び出した精霊は自我を持つが故に歯向かうような行動を取ることもある。

先ほどの様な我が身を盾にして、となると、よほど信頼関係が結べているか、恐怖と力で強引に隷属させているか……全世界指名手配されるような悪党が好かれるはずがないので、間違いなく後者だろう。

「そいつが決め球らしいが、俺のミート力を舐めるなよ！」

「……随分と饒舌になったもんだ。普段はダンマリのくせにな」

「糞野郎と喜んで会話する趣味はねえんだよ！」

ジャックが腕輪を擦ると炎を模したかのような朱い精霊が現れる。

ゆうどうミサイルの爆炎を触媒としたらしい。迎撃されるのは想定済みということか。

「不味い、火の精霊で燃やす気だ……!」

ジャックの意図を理解したデンジャはノエルを連れてその場を飛び退いた。

同時に、火の精霊の起こした炎が辺りを焼く。

このまま好き勝手されてなるものかとデンジャは反撃しようとしたが、何かに気が付いて反撃を取りやめた。

「……なんのつもりだ？ 何故反撃しない」

「……」

「お前の高火力の武器ならばこの程度の炎は吹き飛ばせる筈だ」

絶好の機会を自らフイにしたデンジャに、怪訝そうにジャックは問う。

その答えは無言。心の声スピーカーを切り、その腹の内を見せることは無い。

「駆け引きか、それとも何らかの事情で使えないのか……」

デンジャを揺さぶろうと様々な可能性を口にするジャックだったが、デンジャは無反応。

やがて、ジャックはそのうち見えてくるだろうと結論づけ、攻撃を再開する。

そこからの攻防は一方的だった。

精霊の力を使ったジャックが、大自然の力を武器にデンジャを追い詰めていく。

しかし、優位に立っていてもジャックは不可解な気持ちを捨てられない様子だ。

「分からん。反撃できるタイミングなどいくらでもあった。なのに、なぜ絶好のタイミングで反撃しない」

何かの作戦かと警戒していたジャックも次第に困惑を見せる。

本来ならばジャックとデンジャに、ここまで圧倒的な戦いになるほどの戦力的差はない。そう考えたからこそ、ジャックはゆうどうミサイルから始まる一連の戦術を組み立てたのだ。

にも拘らず、この結果。撒き餌にしてもデンジャの負担が大きすぎる。

「何故全力を出さないかは知らないが、俺の攻撃を本気で躲しているのは分かるぞ。なら、このまま追い込んでやる。心変わりする暇もなくな！」

何らかの事情で本気が出せないならば好都合。このまま焼き尽くしてやると火の精霊に逃れられないほどの広域に炎の弾を出現させる。

緋色の弾丸は周りの建物をも包み込み広がっていき……

「……ッ！ ガガッ!!」

突然、デンジャはジャックとは全く関係のない方向にくうき砲を発砲する。

砲身の先にあったのは、精密な射撃ができないが故にデンジャから大きくそれた炎弾。

それをくうき砲で掻き消す。

「……？」

いよいよジャックはデンジャの行動の意味が分からなかった。

意味もなく隙を見せて何がしたいのかとその目は語っている。

「意味が分からん。今の炎がお前に不都合だったのか？ なにか向こうに仕込みがあるわけでも無かろうに、あの建物が燃えて何が……」

そこでふと、あり得ない妄想が過る。

普段のジャックならば鼻で笑うであろうその答えは自然と口から出ていた。

「まさか……炎から住民を守っていたのか？」

確かに住民たちは突発的に発生した戦闘から避難がまだ完了していない。逃げ遅れた人間がちらほら見られた。

しかし、ありえない想像だ。デンジャが自分の知る時間犯罪者ならば。

だが、そう考えるとつじつまが合ってしまうことにジャックは気付く。

ジャックが自分のひみつ道具を積極的に使わないのは、高火力故に街を壊すことを恐れて。

ジャックが反撃してこないのは、防御に徹することで流れ弾を減らすため。

威力が低いくき砲も、自分の出す被害を最小限にするのが目的だろう。

「……まさか、その精霊を連れだしたのも、俺たちを出し抜くためではなく、助けるためなどと言わんだろうな」

「……」

「つち、既に牙を抜かれていたか。恐竜ハンターめ、コイツの何処が凶悪な犯罪者だというのだ」

下らない時間だったとジャックは吐き捨てた。

駆け引きなどそもそももないなら慎重にやる必要など何処にもなかった。

圧倒的な戦力差がないということは、どちらかが自身に縛りを課した場合は天秤は大きく傾くという事だ。

悪意を失った今のデンジャでは悪党のジャックは倒せない。そうジャックは結論付けた。

そんなジャックの言葉をデンジャは肯定する。

「そうだな。我ながらどうしようもない。昔は甘い物なんて大嫌いだったのに、そんなのが好きな奴の体に入って、無理矢理甘いものをたらふく食わされて……最後にはそんなに悪くねーな、なんて思っちゃった」

「何の話だ」

「覚悟の話だ」

デンジャは腕のくうき砲をジャックに向ける。

「どうせお前は理解できねえよ。あいつらと会っても理解なんてできないんだろうさ」  
「ウダウダとうるさい！ 何が言いたいんだ！」

「お前は絶対にのび太たちに会わせねえつつつてんだ!! ここで、くたばりやがれ」  
デンジャとジャックの視線がぶつかり合い、火花が散る。

一瞬の静寂の後、デンジャが動いた。

「くらえ!!」

改造したくうき砲の三連撃。

ジャックを打ち取らんと轟音とともに迫る、三条の透徹の砲撃が最悪の殺し屋に迫る。

「盾になれ」

それに対し、ジャックの命令は単純だった。

雪の精霊と同じく、ここまで自分に付き従った火の精霊を肉壁とするつもりなのだ。  
周りの炎があれば、また火の精霊は呼び出せる。そんな計算だ。

(引っ掛かった!!)

結論から言えば、デンジャの砲撃が精霊に当たることは無かった。

三連撃はジャックではなく、その足元を狙ったのだから。

「盾になるという命令のせいで火の精霊の動きは遅れるだろ!？」

叫びながらデンジャが駆ける。

遠距離に徹されればデンジャは精霊になすべがない。

だからこそ、一瞬が必要だった。デンジャが攻勢に移るための一瞬が。

「……ツツ！ 焼き殺せ!!」

火の精霊がジャックの指示に従って炎の弾を繰り出すが遅い。

咄嗟に絞り出されたそれは、先程の弾幕とは量も威力も不十分。

これならば耐えられる。熱さを我慢する覚悟さえ決めていけば。

「ギツ、ガ……アアアアアツツ!!」

炎の弾を突き破った。

ジャックが応戦の構えをとるが、接近戦ならば戦闘用チュウリョウに調整されたデンジャが有利

だ。

ジャックを防御ごと上空へ殴り飛ばす。

空高く跳ね上がったジャックに、デンジャはありつたけをぶつける。

「街中で使えないなら……こうすればいいんだよ!!」



デンジャが何故凶悪なロボットと認識されていたか。

それはその体に仕込んだ火器での乱れ撃ちだ。

かつては銀行や豪華客船でミサイルを乱射しまくっていたからこそ、デンジャは時間犯罪者となったのだ。

その圧倒的な火力が、全世界指名手配犯の殺し屋ジャックに向けられようと……

「ガッ!」

内臓したミサイルを発射しようと上体を空に向けた瞬間、突風がデンジャを襲う。

鉄でできた体を押し倒すほどの風がただの自然現象のはずがない。

(風の精霊が空に……!?! いったから……)

精霊よびだしうでわの能力は自然現象から関係する精霊を召喚すること。

風の精霊が呼び出せるような自然現象がこの戦いで起こったのは、デンジャがくうき砲で目眩ましをしたときのみ。

あの瞬間からジャックの術中だったのだ。

「街中で使えない重火器を空に向けて使う程度、予想できる」

(不味い……!?!)

倒れた拍子に標準が大きく外れ、このままでは建物にミサイルが激突する。

そう理解したデンジャは全ての攻撃を中止した。



# 彼はどうしてこの世界に来たのか

囚人がそこにはいた。

電灯の光を反射する深紅の装甲は、彼が人間によって作られたロボットであると示していた。

人のために生まれ、人のために生きる彼が收容されたのは、ロボットでありながら多くの人を危険な目に会わせる犯罪者だったからだ。

22世紀の住民から恐怖を集めたロボットの名はデンジャと言う。

本来ならば人々のために重い物を持ち運ぶための腕で、彼は武器を振り回し、破壊活動続けた。

しかし、悪いことをすれば報いは受けるものである。ある時、デンジャはタイムパトロールとのカーチェイス中に事故を起こしてしまい、捕まってしまったのだ。

本来ならば時間犯罪者として、そのことを忌々しく思うべきなのだろうが、彼はそうは思わなかった。

『ねえ！　また今度、野球を教えてよね！　僕も君みたいにホームランを打ちたいからやー！』

かけがえのない出会いがあったのだ。

あの少年にちやんとした形で会うために、更生しようと思えるほどの。

そのために彼は自首し、この収容所で治療を受ける予定だった。

本来ならば模範囚として更生を果たすはずだったデンジャがどうして脱獄したのか。

答えはあの日にある。

「ガ……？」

静かに手続きを終わらせたケーブルが戻って来るのを待っていると、デンジャの優れた集音機能が喧騒を聞き取る。

最初は収監されている囚人がトラブルでも起こしたのかと考えたデンジャだったが、続いて起きた爆発音によってそうではないことに気付かされる。

(この揺れ、地震じゃねえ。攻撃を受けているのか?)

けたたましく鳴り響く警報。

連続する爆発音に、人々の足音が紛れる。

暫くすると音はならなくなり、不気味な静寂が部屋を包んだ。

体を固定されているデンジャは、状況を確認することもできずに時が過ぎるのを待つしかなかったが、やがて2組の足音が近づいてきた。

「……いつか?」

「ああ、看守共が噂してるのを聞いた。銀行や豪華客船でミサイルを乱射したイカれたロボットだ」

その会話内容から、足音の主が看守でないことはすぐに分かる。恐らくは爆発の原因の襲撃犯たち。

何が目的だと身構えていると、部屋の扉が開かれた。

「貴様がデンジャカ」

「ガガ……」

「おい、返事を……」

「ん？ ジャックの旦那。こいつ、発音機能が故障しているらしいですぜ」

現れたのは十字傷の男と覆面の男。

明らかに堅気ではない2人に、何をしに來たと無言で睨みつけていると、馴れ馴れしく覆面の男が話しかけてきた。

「聞いているぞ？ お前が餓鬼どものせいで捕まったって話はい？」

覆面の男の言葉に動揺するデンジャ。

それをデンジャが侮辱されて怒ったと勘違いしたらしき覆面の男は、両手を上げて自身にその気のないことを伝える。

「おっと、馬鹿にする気はない。寧ろ共感しているのだ。ワシは恐竜ハンターをやっていたが、その時に餓鬼どもが邪魔をしてきてな。御用となったところをこっちのジャックに助けられたのだ」

何やら親し気に話しかけてくる恐竜ハンターの話は何処かずれている。

もしや自分が捕まった経緯を勘違いしているのか？ と考え付いたデンジャダが、ガ行しか話せない今の彼にそれを指摘することは出来なかつた。

次に発せられる言葉を思えば、それが幸いしたのだろうが。

「デンジャ、力を貸せ。あの餓鬼どもに復讐するぞ」

「!!」

この時、自分が固定されていて良かったとデンジャは振り返る。

自由の身であつたなら、後先考えずに殴りかかっていただろうから。

「これから我々は過去へ逃れてタイムパトロールをやり過ぎす。そのついでに……餓鬼どもにお礼をしに行ってもバチは当たるまい？」

罰当たりそのものな発言に熱くなりかけた頭を冷やしつつ、この話を断ればどうなるか計算する。

ここで行かないと突つ張り、残るとする。

恐竜ハンターがのび太たちへ復讐をする、と言う情報は彼らの逃れる時代を容易く特

定させるものだ。まず間違いなく、デンジャは口封じされるだろう。

動けない今の状態では身を守ることすら出来ず、スクラップになる未来しかない。

そうなれば、誰も のび太たちの危機を伝えられなくなる。

「ガ……」

デンジャは頷くしかなかった。自分の更生を信じてくれた人たちに心の中で謝りながら。

「よし、これからワシたちは同士だ」

(なにが同士だ。くたばりやがれ)

心の中で盛大に呪詛を吐きながら、デンジャは決意する。

時間犯罪者たちの懐に潜り込み、獅子身中の虫となることを。

のび太たちへの復讐を全力で阻止することを。

そこで夢の光景は去り、突き刺すように差し込む日の光が現実への帰還を告げる。

「ガガ……?」

「あ、目が覚めたみたい」

日の光を遮って視界に映り込んだのは、いつの日かに鏡で自分のものとして映っていた姿。

正規品と違う青い肌。猫型ロボットの名前と違い、耳のない真ん丸頭。

ドラえもんだ。

「……」

「大丈夫？ さっきまで凍っていた所を溶かしたんだ。身体の機能に不具合はない？」

「ガ……」

「あれ？ ひよつとして発音機能まだ直っていなかったの？ それとも氷漬けになった

影響かな」

ちよつとまつてて、とドラえもんは四次元ポケットに手をつ突っ込んだ。

「うーんと。あつた！ ほんやくコンニャク」

相手の言語を自動的に翻訳するひみつ道具。

デンジャの言葉はロボットとしての機能の障害に拠るものだが、それでもしつかりと機能したらしい。

「ガ……ギギガ」

「うん。久しぶり」

「ゴゴギ、ギガグ」

「あいつを守れなくて済まないってどういうこと？」

そこから、デンジャの説明が始まった。

ジャックがタイムパトロールから恐竜ハンターを逃がしたこと。



恐竜ハンターはドラえもんたちに復讐を企てていたこと。

デンジャもドラえもんたちに恨みを持つと間違えられ、仲間に誘われたこと。

そして、時間犯罪者たちがドラえもんたちに危害を加えないように見張っていたら、精霊であるノエルを闇派閥イグニルスが欲しており、時間犯罪者は精霊を売り飛ばし、活動資金を得るためにノエルを誘拐したこと。

「そして、ノエルちゃんを連れだしたら裏切りがバレてやられかけたら、ノエルちゃんが精霊の力を解放してこうなったってこと？」

コクリ、とデンジャは頷く。

氷漬けになる前の記憶はあやふやだが、あの熱線銃が放たれていればデンジャは無事ではなかっただろう。デンジャを覆った氷がほとんど受け止めてくれたおかげで五体満足でいられた。

「恐らくはノエルが貴方を守るための防壁として氷を作り出したのでしよう」

「でもリユーさん、デンジャは凍っちゃっていたよ？」

「本調子ではないので精度が鈍ったか。それとも無意識での行動だったのか。いずれにせよ、そのころぼつと？　しか凍り付いていなかったのは不自然だ」

「ガグガ……」

「情けないなんてとんでもないよ。ノエルちゃんのためにありがとう」

助けるつもりが助けられてしまったデンジャは気落ちした様子だが、ドラえもんとび太は礼をいった。

「ガゴゲ……」

「え？ 僕たちに伝えなきゃいけないことがある？」

「……」

「穢れた精霊？ なんだい、それは？」

「……」

「それを使ってヴィトーって言う闇派閥イツイルスの幹部が世界を滅茶苦茶にしようとしているだつて!? おまけにベル君を誘い込んで罠に嵌めている!？」

驚愕するドラえもんに対し、デンジャは懐から紙切れを取り出した。

「これは……地図?」

「ググ、ゲゲゲ」

「これを持って行けつてことは、これは闇派閥イツイルスのアジトなのかい?」

「ガガグ」

「全部じゃなくてすまないって、これだけで十分だよ!? これでベル君が何処にいるのか分かる!」

ノエルがこちらに向かったことや、ベルのピンチのことを考えるとオツタルや出木杉

と連絡を取りたいが、その余裕があるかは分からない。

ノエルを攫った穢れた精霊の顕現がいつになるかも分からないし、現在進行形で罠に嵌められているであろうベルは一刻を争うかもしれない。

「みんな！ 早くこの地図のしるしの所に……！」

「いえ、私はここに残ります」

「え、リユーさん……？」

急いで闇派閥のマジトイヴェイルスに向かおうとするドラえもんだったが、リユーの思いもよらない言葉に虚を突かれる。

「そのろぼつと……彼をこのまま放置はできません。一度、【豊穣の女主人】で保護します」

「ガ……!？」

「あ、そつか……体に悪いところがあるかもしれないもんね」

このままデンジャと一緒に行動することになると思っていたのび太は残念そうに納得した。

「ガ、ガガ……!？」

「自分のために戦力を割いたら、穢れた精霊と戦いになったら危ないって言ってるよ」

「……しかし、今から援軍を呼ぼうにもどうしようもない。私の知る上級冒険者たちは

皆多忙、今から捕まえられるかも分かりません」

リユーが困った様子で呟く。

他の面々もどうしたものかと頭を捻らせる中、声を上げたのはのび太だった。

「そうだ！ あの子を呼べば!!」

「のび太くん……?」

「あ、でもベルに秘密にしておいてって言われてたんだ……えーい、今はしょうがないよ！」

何かを思いついたらしきのび太は悩みながらも決断する。

「ごめん！ 皆先に行つて！」

「ニヤ？ のび太どうしたニヤ？」

「凄い強い人……じゃないけど、とにかく心当たりがあるんだ！」

「何やら事情があるようですね。深くは聞きません」

のび太の思い付いた援軍が誰なのかは分からないが、アジトの居場所が判明した今、道案内として少年を同行させる意味は薄い。

このまま戦線を離脱させられるのならとリユーはのび太の意見を受け入れた。

他の面々も同じ考えなのか、反対意見は出ない。

「じゃあドラえもんはのび太に付いて行つて」

「う、うん。のび太君一人を放っておくわけにもいかないし。だからこれを渡しておくね……通りぬけフープ」

ルノアの意見に頷いたドラえもんは、鍵を持たない【豊穰の女主人】の面々のためにひみつ道具を譲る。

これで問題なくアジトに突入できるだろう。

「ガガ……」

「え、これを、僕にくれるの?」

デンジャは、少しでものび太の安全が確保できればと自身カスタマイズが改造したくうき砲を渡した。

のび太は少しだけ戸惑った様子だったが、デンジャの瞳を見て何かを感じ取ったのか、やがて頷きを返す。

一行はここで三つのチームに分かれた。

このままアジトへ向かう【豊穰の女主人】のウエイトレスたち。

援軍を呼ぶために離脱するのび太とドラえもん。

そして、このままここに残るデンジャとリユウ。

頷き合い、互いの無事を祈りあつた一同は三手に別れ行動する。



「ガ……ガガ……」

「……参りましたね。ほんやくコンニャクを分けてもらうべきでした」

のび太やシルたちを見送り、ダイダロス通り東部に残ったリューは、ガ行しか喋れないデンジャとのコミュニケーションに四苦八苦していた。

「ですが、言いたいことは伝わっています。何故、私はここに残ったのかと聞きたいのですね」

コクリ、と頷くデンジャ。

デンジャはこの世界に入る前に、『ダンまち』のことを軽く学んでいる。

リュー・リオンは、主人公のベル・クラネルを度々救った所謂お助けキャラと言うやつだ。

その戦闘力は同レベル帯と比較しても頭一つ抜けている印象がある。

デンジャを保護する程度で最大戦力とも言える彼女を、激戦が予想される場所から遠ざけるだろうか。

「確かに私がここににいる意味は本来ありません……貴方の隠し事が無い限り」

「！」

「貴方の話でノエルやクラネルさんの危機は分かりました。しかし、貴方が氷漬けにされる前に交戦していた殺し屋ジャックについてはまるで触れなかった。大方、私たちに

内緒でその危険人物を対処するつもりだったのでしょ」

凶星であった。

あの殺し屋ジャックとのび太を関わらせてはいけない。

タイムパトロールから逃れるためにタイムパトロールを襲うような異常な存在なのだ。

へたに関わらせて粘着されても困る。

この世界の悪党ならば本から出れば二度と会うことは無いが、現実世界のジャックはそうはいかないのだから。

「その決意は見事ですが、話を聞くだけでも危険性が伝わる相手です。1人より2人のほうがいい」

「ゲゴ……」

このことをすぐに指摘しなかったのは、デンジャののび太に殺し屋ジャックを関わらせたくないという願いをリユースが尊重したからだろう。

この分だと他の面々も気が付いていたのかもしれない。先ほどまで連れていたシルをクロエに託した時も誰も反発しなかった。

「なにより……既に正義を捨てた身とは言え、悪に負けたままと言うのは座りが悪い」

木刀を取り、リユースは切っ先を建物の先に向ける。

そこには、精霊<sup>ノエル</sup>の力から逃れていたジャックの姿があった。

「隠れていたつもりですが、その悍ましい殺気、隠せると思わない！」

「……やはり、冒険者の感覚と言うのは面倒だ」

ジャックは苛立った様子で手元の熱線銃を弄ぶ。

デンジャに第二級冒険者が加勢しようと、その目に宿す殺意に播らぎはない。

「ノエルの力はあるくまでも彼を守るために行使された。貴方が氷漬けから逃れていることに驚きはありません」

「ガガ!!」

その視線に晒される2人にも怯えは見られなかった。

ロボットと妖精<sup>エルフ</sup>によるアンバランスなコンビが世界最悪の時間犯罪者に挑む。



# 大いなる一撃 小さな一撃

戦場において、領域テリトリーと言うものは重要な要素だ。

自分たちの戦術に合った土地ならば、不測の事態というものは起こりにくく、逆に相手の戦術に合わない状況下に追い込めば、無双の軍であろうとも烏合の衆と化す。

その意味では、まふまと「ガネーシャ・ファミア」を自分たちの領域テリトリーに誘い込んだ闇派閥イウイルスの前準備は周到だった。

それこそ、戦う前から勝負を決していたと構成員たちは誰もが確信していた。

「と、止めるおとおおっ!?! 調教師テイマーたちをやらせるなあ!?!」

だが、そこから先はない。

そもそも時代は量より質の時代。

戦略を戦術で打ち破る英雄たちを生み出すための恩恵フェルナだ。

縦横無尽に槍を振るう第一級冒険者を前に、これ以上望みようがないほどの好条件によつて戦っていた闇派閥イウイルスは次々と吹き飛ばされていく。

「象神アーンクーシヤの杖カース」は呪詛で抑えるんじゃないのか!?!」

「その呪術師ヘクサーが真つ先にやられたんだよ!」

「罨トラップだ！ 人工迷宮クノッソッスの防衛装置をもつと使つて……げはあつ？」

右往左往する狂信者たち。

力尽くで戦況を盛り返したシャクティに及び腰になりながらも、なんとか食い止めようとして立ちふさがる。

「象神アシクーシヤの杖」さえ討てば良い！ 自爆兵を使つて奴の足を……」

「姐者だけにいい格好させられるか！」

「団長に続け！！」

「な……まだ第一級冒険者がくるのか?！」

ロキとフレイヤの二大派閥と比べ、同じS等級派閥ランクファアマリアの中では一歩及ばぬ印象がある都市の憲兵たちだが、彼らが二大派閥と同格とされているのにも理由はある。

それは、所属する第一級冒険者の人数である。

「ロキ・ファミア」は7人、「フレイヤ・ファミア」は9人、どちらも本来ならば有り得ないほどに第一級冒険者が存在しているが、「ガネーシャ・ファミア」に所属する第一級冒険者は11人。レベル6こそいないものの、オラリオでも屈指の団員数を誇りつつ、質でも高い水準を実現しているのだ。

弱者を甚振ることばかりで、冒険しない闇派閥イヴァイルスでは正に鎧袖一触。

「くっ、押し返せつ!!」

「む、無理です!! 同士たちが動くより先にやられていきます! 陣形を組もうにも一  
 気に溶かされる!」

「このままでは調教師たちにも攻撃が……!」

圧倒的な差で戦力を削られる闇派閥が辛うじて戦闘になっているのは、彼らが使役する  
 極彩色のモンスターたちによるものだ。

第一級冒険者であっても簡単には倒せないモンスターたちを使役する調教師によつ  
 て、瞬殺だけは免れている。

「何としてでも死守しろ!! 奴らの狙いは調教師だ!!」

「時間が無い!! 奴らの持つ鍵を手に入れるんだ!!」

順調に見える「ガネーシャ・ファミリア」だが、決して余裕があるわけではない。

寧ろ、時間が経つほどに追い詰められるのは自分たちだろうとシャクティは考えてい  
 た。

如何に人より頑丈な第一級冒険者とは言え人間だ。疲れはするし、腹も減る。

長期戦になれば、必ず限界が来てこの悪意の要塞に押しつぶされるだろう。

(そもそも罾があれで打ち止めとも限らん。このまま戦況が優位のまま長引けば、  
 闇派閥もここを放棄するだろう。その時に、致命的な罾を置き土産にしていきかねない)

例えば、この通路を崩壊させる罠。

或いは大量の水で押し流すか。

冒険者は強力で、罠もほとんど意味をなさないが、やりようなどいくらでも考えられるのだ。

(脱出手段を確保したら速やかに離脱しなくては、敵幹部の身柄は惜しいが、戦い続けても得る物があるとは思えん)

ガネーシヤが感じたという勘は気になるが、それに固執することは団長としてできない。

ベル・クラネルの保護も行わなければならない以上、撤退するのは当然の選択だった。

「ぎゃああああああああつ!!」

「今度は何だ!?!」

「……新手、ではないな」

その時、人工迷宮クノッソスの壁が吹き飛んだ。

超硬金属アダマンタイトでできた強固な守りは、散弾となって狂信者たちを襲う。

「な……稀少金属を破壊するだ?!?!」

上層で取れる粗悪品ならいざ知らず、人工迷宮クノッソスに使われるのはダイダロスの系譜が始祖の悲願を果たすために血眼になってかき集めた上質な超硬金属アダマンタイトだ。

それが飴細工のように粉碎される光景に指揮官の狂信者はあんぐりと口を開いた。

(魔法を使ったとは言え……いや、それでも有り得ん！ そんなことが出来るとすれば、これをしたものは確実に第一級冒険者!!)

憲兵と狂信者が固唾を飲んで見守っていると、立ち込めた煙を裂いて一人の人物が現れる。

「ひいつ……!?!」

「何でアイツが……?」

それを見た瞬間、狂信者は絶望の声を。憲兵は困惑を漏らした。

「【猛者】……!?!」

「【ガネーシャ・ファミア】……加勢する」

何故ここにいるかは分からないが、敵対するつもりはないらしいとシャクティは感じ取った。

オツタルは謀を好まない、ならばその意図はどうあれ、援軍には違いない。

脇に抱え込んだ子供に關しては後で問い詰めなければならぬが。

「<sup>ワイオラス</sup>食人花共、やれ！ やれえ?! あの男を殺せええええええ?!」

<sup>テイマー</sup>調教師の指示に従い、極彩色のモンスターたちがオツタルに殺到する。

それに対し、オツタルは背負っていた大剣を解放する。



今もずっと自分を見ているようなカメラのレンズは酷く違和感が……

(……不味い、集中力が切れてる……血が流れ過ぎて頭もボーツと……して……)

寄り掛かってた壁にゴンゴンと後頭部をぶつける。

それで何が変わるわけでもないけど。

「呪詛<sup>カリスウエボン</sup>装備のせいだ。早く何とかしないと……」

傷が塞がらないとはこんなにも恐ろしいことだったのか。

傷を止血することの大切さをエイナさんは語っていた気がするけど、それを初めて実感していた気がする。

(あ、エイナさん……エイナさんは勉強の時に何か、呪詛<sup>カリス</sup>について言っただけでなかったかな

……)

呪詛<sup>カリス</sup>は魔法とは違って、特殊なアイテムでもなければ防げない。それこそ、【耐異常】の発展アビリティであつても。

もしも呪詛<sup>カリス</sup>を躲すことが出来なくても、できることは2つある。

1つは解呪。治療師<sup>ヒーラー</sup>の魔法や、専用のポーションで呪いは打ち消すことが出来るらしい。

最も、解呪が出来るような治療師<sup>ヒーラー</sup>なんて早々いないし、解呪用ポーションなんて需要が無さすぎるから滅茶苦茶にお高いと聞くけれど。

そして2つ目は呪術師ヘクサーを倒すことだ。呪詛カースの中には使用者を倒すことで解除されるものもあるのだという。ただし、全てがそうとは限らないし、倒した後も暫く効果が続く場合もある。

だから、確実なのは呪術師ヘクサー自身に解除させること……

(あ、僕の呪詛カースは武器が原因だった)

こんなことを失念するなんていよいよ頭が不味い。

一度、深呼吸をする。

(呪詛装備カースウエポンの対処はそう言えば聞かなかつたな)

そうそうあるものではない筈だから後回しにしていたのだ。

その割に闇派閥イヴイルスはポンポン持つてくるけど。ひみつ道具とかで増やしているのだからうか。

「治療する方法は無いし、僕にやれるのはこの方法だけ」

呪詛カースの基を断つ。

そうすれば、呪詛カースも消えてくれるかもしれない。

「【ガネーシャ・ファミリア】と一緒になら、ポジションや魔法でどうにかなったのかも知れないけど……」

彼らとははぐれてしまった。本当に運が悪い。



不幸を運ぶしあわせトランプの道化師ジョーカーのカードを懐から取り出す。

どうやっても捨てる事が出来ない悪夢のひみつ道具。これもある意味呪いだ。

さつさと使い切つてしまいたいが、こんな時に限つて穏やかだ。

きつと自分にとつて大切な時に、嘲笑うように不幸を呼ぶに違いない。

(多分、ヴィトーさんが使っているであろうもう一つのひみつ道具については分からな

いまま……ああつ、思考を逸らしちゃ駄目だ。ポーツとする頭が怠けようとする)

こんなに自分の心が弱いとは。

手足もどんどん重くなつていつて、石のように動かない。動かしたくない。

(頭っ、動け!!)

ぶんぶん頭を振つてみるが、思考が明瞭クリアになつた気がするのは一瞬のみ。

今、この時も血が流れている以上、ここで立ち止まり続けることは出来ない。

流れた血が多いだけ、ベル・クラネルの限界は迫るのだから。

(なんとか踏ん切りをつけないと……そうだ!)

掠れる思考があることを思い出す。ひみつ道具だ。

あまり戦闘で使えるひみつ道具ではなかったがために、今の今まで忘却していた。

神様に見せていただいた「ステイタス」の写しを思い出しながら、そのひみつ道具を

具現化する。

「強いイシ〜」

言葉を発した後に、この掛け声で見つかるかもな、なんて思ってしまった。何せ自分は運が悪いのだから。

無駄なことを考えつつ、その手に現れたひみつ道具を見つめる。それは石だ。

何の変哲もない横長の石にダイヤルが4つ付いている。それだけ。思わず落胆の溜息を吐く。

「……意志じゃなくて石だったのか」

ならば、効果も滅茶苦茶に硬い石なのだろうか。

できれば意志を補強するひみつ道具が良かったのだが。

取り敢えず、強さを調節するものであろうダイヤルは最大にしておく。

「結局、ひみつ道具頼りじゃダメか。うん、仕方ない。僕自身が、あの人を倒すんだ」  
ダイヤルをいじりながら、半ば自分に言い聞かせるように呟く。

「……足音が来た」

やはり、ヴィトーさんには先ほどの声が聞こえていたらしい。

真つ直ぐとこちらに向かって来ているけど……

(不味い、意識が遠のいてきた……)

決断するのが一步遅かったのだろうか。

末端の痺れと共に、僕の意識は徐々に体から引き離されて……

目の前が暗くなりかけた途端、頭に痛みが走る。

「……あたあ!？」

痛みで覚醒する意識。

視界には強いイシが浮かんでいた。

それがゴンゴンと僕の頭を叩く。

「な、なんで僕に攻撃を……? あ、ひよつとして」

石と意志。

強い意志を持たない者に制裁を加え、初志貫徹を強制するひみつ道具。

それこそがこのひみつ道具の能力なのではないだろうか。

(また、絶妙に役に立たなさそうな能力……でも)

今の僕には丁度いい。

ヴィトーさんを倒す、と言う意志を忘れて眠りにつかないようにするのもってこいだ。

足音が近づき、よりはつきりと位置が分かった。誘惑を強いイシによって強引に振り払いながら、その体は何時でも飛び掛かれるように屈んだ姿勢のまま、散り散りになっ

ていた集中力をかき集める。

(……よしっ！)

息を潜めて待ち構えていた赤毛が視界に入った。

最後の力を振り絞って飛び掛かる。

もう油断して逃がしてはくれないだろう。体力的もそんな余裕はない。

今の自分は切れかけの糸だ。気を張ってなければたちまち切れる糸。

来るべきタイムリミットまでに倒せるか……？

「ああああああああっ！！」

ヘステイア・ナイフ  
神様の刃の一撃は甲高い音と共に防がれた。

驚きはない。今更、動揺なんてしてやらない。

「おやおや……かくれんぼはもうお終いで？ 怯える白兔のように、必死に恐怖を隠そ

うとする押し殺した呼吸は何時までも聞いていられたのですが」

「っ！ ずっと、隠れている場所に気付いて……っ」

ナイフを弾き、脇腹を抉ろうとする呪詛装備を身を振って躲す。

そのまま速攻魔法ファイアボルトを至近距離で放つ。

最速の魔法はこの距離では必中。しかし、避けられ、肘打ちを浴びせられた。

「ぐ……っ！」

「ふふふつ、耐えますか！ 覚悟を決めた今、これなら耐えられますか！」  
ヴィトーさんの哄笑を無視する。

有り得ないものを見せられた。しかし、驚きはやはりない。

しあわせトランプの罠では説明がつかない現象はこれが初めてではないのだから。

（やっぱり、この人のひみつ道具が使われている限りは『絶対に勝てない』！ そう言う効果なんだ！）

先日 to 戦ったイルタが導き出した結論にベルも辿り着く。

絶望的戦い。分かっている、そんなこと。

この推測が頭をよぎった瞬間から。

「それ、でもっ!!」

崩れ落ちるのをこらえて、強引に視線を男に固定する。

ベルは加速した。

渾身を出し続けて、ここを最後の攻防と定める。

無数の斬撃。まるで届かないそれらに歯噛みしながら、ベルは思考も加速させる。

（今までは逆転の策を出そうとしても不運が邪魔をした！ その度にしあわせトランプは恐ろしいと思った。でも!!）

ひみつ道具は万能じゃない。

誰よりもひみつ道具を使ってきたから、ベルにはそれが分かる。

しあわせトランプによると思われる不運を思い返すと、それは一つの共通項を浮かび上がらせた。

道化師ジョーカーによる不幸は、起こり得るものでしかないという事を。

今のベルは信じられないほどに不幸。

しかし、起きていることはありふれた不幸ばかり。

ひみつ道具らしい出鱈目な現象は起きていない。

それはつまり、あのひみつ道具はあくまでも現実的過程の下で結果を導き出しているということ。

100%成功する策ならば、干渉の余地はないのだ。

(僕にはそんな作戦は思いつかない。けれど、100%信頼して良い物なら知っている)

思い返せば、度重なる不幸の中で彼らだけは裏切らなかつた。

ヴェルフが整備した武器たちだけは。

当然だ。万が一を起こさないために、専属鍛冶師は細心の注意を払って整備しているのだ。

不幸など、起こる余地が無い。

つまり、ベル・クラネルの命運を託せるのは自分の持つ武器なのだ。

(……っ、今だ!!)

何分経ったのか、それとも数秒だったのか。

主観的には気が遠くなる時間の末に見つけた隙。

そこに僕は賭ける。

勢いよく、叩きつけるように納刀。

ぶつかり合った刃と鞘の間は、仕込まれた魔石によつて爆ぜた。

カッチパン  
納弾鞘。

ヴェルフが作った僕のための鞘はヘステイア・ナイフ神様の刃に刹那の破壊力を付与する。

唸るように飛び出した刃は、眼前の敵……ではなく、その敵が持つ呪詛装備カースウェポンに向かっ

て驀進する。

「ああああああああっ!!」

「っ!」

渾身の一撃が呪いの基を砕く。

目を見開くヴィトーさんに追撃を変えようとするも、予定調和の敗北。

気づけば僕は吹き飛ばされていた。地面を転がされる。

それでも、届いた。

立ち上がった僕は急いで回復薬ポーションを傷に振りかける。

「治った……呪詛カースが解けたー！」

最大の懸念事項であつた不治の傷。

これを克服できたことは大きい。これでまだ僕は戦える。

「……これは驚きました。私の武器を破壊するとは。しかし、一度流れた血は回復薬ポーションでは戻りません。じり貧なことに変わりはありませんが？」

「そうだとしても諦めることはしません。貴方が絶対に勝てるひみつ道具を使つていたとしても、僕には、これしかできないから」

絶望的なことには変わらさず。

しかし、眼差しは真つ直ぐとヴィトーさんから離さない。

抗いつけてやる。このイシが鼓舞し続けてくれる限り。



## 援軍・クレヨン

人工迷宮<sup>クノッツス</sup>。三大秘境に数えられるダンジョンを模して造られた巨匠ダイダロスの妄執は千年の時をかけ、正に強大な闇として君臨している。

知れば誰もが偉大な才能、そして人の域を超えた異業<sup>いぎよう</sup>だと思うだろう。

その広大な敷地に目を付けた闇派閥<sup>イヅイルス</sup>だったが、実の所、その領域のほとんどは手付かずになっていた。そもそもダンジョン中層にまで匹敵する空間はどれだけ人がいても余るといふモノ。

「ガネーシャ・ファミリア」の襲撃を受けて大騒ぎになっているのは人工迷宮<sup>クノッツス</sup>上層域、それもほんの入り口でのそのまた一部での出来事だ。

侵入してくる憲兵たちへの防衛のために人員が駆り出されているだけあって、他の広間<sup>エリア</sup>では戦いの喧騒すら聞こえてくることは無い。

暗闇と共に、時間が停止したかのような無音が辺りを支配していた。

そこに、小さな穴が突然現れる。

「誰もいないニヤ」

穴から潜り抜けてきたのはアーニヤだ。

さらに、少女に続くように次々と少女たちが現れる。

「人工迷宮だっけ？　こんなものが私たちの足元にあつたつてことだよね……」

「ギルドは何をやつてんだつー話だニヤ。ダイダロスつて大神様ウラノスの元眷属だから監督責任で慰謝料ふんだくれるかニヤ？」

「まあまあクロエ。ダイダロス通りは元々住民たちでも全貌が分かつていない場所だったし、こんなところを調べる酔狂な人はそうそういないよ」

薄暗い空間を物珍し気に眺めまわした一同は、気を取り直して目的地を目指す。

「確か、穢れた精霊が眠っているのは中層の辺りだっけ？」

「うん。そこにノエルを連れてきて、精霊の力を使わせることで目覚めさせようとしてるみたい」

「なら、閨派閥イツイルスより早めに回り込めれば待ち伏せできるつてわけだニヤ」

「デンジャがノエルの確保に失敗した時に備えて予め用意していた通路ルートを、【豊穣の女主人】の面々はレベル4の脚力で駆け抜ける。

通り抜けフープを併用すれば、大幅に時間のロスを削減できるはずだ。

「ところでシル。ノエルが精霊つて話、元々知つてたニヤ？」

「うん。それがどうかした？」

「……やつぱは怖い女だニヤ」

クロエはデンジャから真実を告げられた時はかなり動揺したのだが、やはりシルはそうではなかったらしい。

底の知れない少女だと思いつつ、クロエは自身の感じたものをシルに話した。

「モンスター取り込んでおかしくなつた精霊を利用するために、ノエルを攫う。多分、これ自体はずつと前から計画されていたことだニヤ。それはいい。いや、破滅願望持ちの馬鹿が付き合わせんなつて言いてーけど」

「クロエが言いたいののは、それだけで終わるのかつてことだね？」

「穢れた精霊が強いつて言うのは理解できるニヤ。それでも、一体で何が出来るつー話ニヤ。世界どこかオラリオで討伐されてお終いだニヤ」

穢れた精霊がどれほど強いのかは不明だが、一体で「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」を同時に相手どれるわけではないだろう。

異世界人がそう言っているのなら、無知な奴らと笑つて終わりだが、この計画を立てたのは闇派閥イヴイルス。暗黒期からひたすらに正義の陣営にやられ続けた者たちである。

「確かに、穢れた精霊だけなら世界がどうこうとはなりそうにないよね」

「……なんか嫌な感じがするニヤ。ミヤーたちだけだと穢れた精霊だけでも十分にやばいけど、それ以上の札が出されたら詰みニヤ」  
イヴイルス

「クロエの不安は正しいと思う。きつと闇派閥はとんでもないことを企んでそうだが

ら」

「その根拠は？」

「私の勘」

その言葉を口にした時、シルの目がすっと細められた。

（やっぱ、どう考えても普通の街娘じゃないニヤ）

普段でもシルは小悪魔的なところがあるが、時々見せる表情の中に得体の知れないものをクロエは度々感じていた。

人間性を欠いた瞳とでも言うべきか、何もかも見透かすその視線はどこか神に似ている。クロエにはそう思えてならない。

クロエが黙り込んだのを見て、すぐにそんな気配を霧散させたシルは笑いかけた。

「……なんてね。一応、ちゃんとした根拠はあるよ？ 異世界の人たちが使っているひみつ道具。今まで大盤振る舞いしているとところから見て、穢れた精霊なんて玩具にそれを使いそうだな、とは思ったよ。あんな風にね」

シルが指を刺した先にはモンスター姿があった。

「コボルトに変な触手がうみようみよしてる……あれが冒険者君のいつてた『コボルトヴィオラス』？」

「ギニャーッ!? 気持ち悪いニャ!?!」

コボルトヴィオラスの登場に警戒する少女たち。

涙目になって叫ぶアーニヤだったが、ふと、あることに気が付いた。

「……ニヤ？ うねうねの先がピカピカしてるニヤ」

「光が反射してる……あれって槍の穂先がくつついてるの？」

コボルトヴィオラスの外見は凡そベルの説明通りだったが、一点だけ違う部分がある。

それは触手の先端についた、金属質な輝き。鈍色の穂先だった。

「鈍色の武器……ひよつとしてこれが呪詛装備カースウエポンってやつ？」

「だろうニヤ。 見てるだけで背筋が冷たくなって尻尾がピンとしちゃうニヤ」

最初に見た時は触手の先に槍の穂先を括りつけたのかと思ったが、そうではないらしい。

触手の黄緑と、槍の鈍色が融合したかのように一体化している。

生物と生物ならば出木杉の言う移植手術でどうにかなるのかもしれないが、生物と無機物をあそこまで完璧に合わせるとはこの世界の技術ではまず不可能。

つまりはひみつ道具の影があるという事だ。

「……元々こんな感じのモンスターを作るのが目的だったのか。それとも何かを作るための試用として作られたのがあのモンスターなのか」

「その口ぶりだとシルは後者だと思っニヤ？」

「だって、あんなのもいるからねえ……」

現れたコボルトヴィオラスは1体だけではなかった。

恐らくは複数体での運用を考えられているであろう闇派閥製のモンスターたちの数は、奇しくも【豊穡の女主人】一同と同じく5体。

しかし、その姿形は1つとして同じものはいない。

コボルトの頭が槍に置き換わっている個体。

全身が金属質になり、鈍色の光を放つ個体。

槍の先端にコボルトの頭と触手が生えた個体。

胴体から鈍色の槍が突き出され、動く度に血が流れ出る個体。

どう考えても、まともに戦えることが出来ない失敗作たちだ。

そんなものが成功作と思いき個体と共に活動しているという事は、闇派閥イヴイルスにとってはこの人造モンスターたちはそれほど大切に扱う気が無いという事なのだろう。

「どんなひみつ道具を使ったのかは分からないけど……穢れた精霊と何かを合体させようとしているのかもね」

「うーわ。流石闇派閥イヴイルス、頭おかしい」

ウンザリとした様子になりながらも、クロエは自身の得物であるバイオレッタを構え



ドラえもんのジト目が痛い。

テンションに任せて飛び出した方がいいが、ここは迷宮都市オラリオ。

ダイダロス通りではなくとも、土地勘のない小学生が迷子になるのに時間はかからなかった。

ドラえもんがいなければ、のび太は完全に現在位置を見失っていただろう。

「それで？ どこに行こうとしたの？」

「ここ、この前にノエルちゃんやベルと一緒に車椅子を試した場所……」

「ここは東側だよ……あそこは北西と西の間の大通りにあるから、反対じゃないか」

「うう……」

しっかりと現在位置を把握しているらしいドラえもんの呆れた視線から目を逸らす。

慌てるると本当に碌なことがないものだ。

「でもあそこって廃墟じゃないっけ。誰か知り合いでもないたの？」

「うん。ベルには内緒にしておいてって言われたけど、ベルやノエルちゃんのピンチに何もしないなんてできないし」

「強いの？」

「凄い強い人たちと戦ったこともあるって言ってた」

「どうやら本当に考えなしではないらしいと悟ったドラえもんは、四次元ポケットから



タケコプターを取り出した。

「今からあそこまで走っても時間がかかりすぎるし、タケコプターで飛んで行こう」

「どこでもドアは？」

「この世界の地図が記録されてないから駄目」

目立つことで余計な騒ぎになったり、闇派閥イギリスに見つかる可能性を減らすために透明マ

ントを纏って空を飛ぶ2人。

眼下に広がるオラリオはいつも通りの日常を送っていた。

「猫の人とミアさんも戦ってるみたいだけど、ここからは見えないね」

「戦いが起きてる様子も無いし、もう終わってたのかも」

オツタルは二人もいれば過剰戦力だと言っていたが、それでも不安は残る。

大丈夫だと良いんだけど、と話し合っているとオラリオ西区のストリートから悲鳴が

聞こえてきた。

何かかと思いい様子を見に行くと……

「ほら全部吐くんだよ！早くしな！」

「ガボガボガボ……ッ!？」

そこにはアレンによって逆さ吊りにされた男が、鼻に酒を流し込まれる姿だった。

どうやら全然大丈夫だったらしい。



そこで、彼は仰天することになる。

そこには数 M<sup>メートル</sup>もの巨体を持つ、植物じみた存在が潜んでいたのだから。

「わっ!!? モ、モンスター!?!」

「アハハ、そんなに驚くことないじゃない。このモンスターはいいモンスターだつてベルは言つてたよ。僕も遊んだことがあるし」

「そうなのかい? モンスターつて皆危ないんだと思つてたよ」

無論、本来は友好的なモンスターなど存在しない。

のび太の言葉は無知な子供の戯言か、狂人の妄想と思われても仕方のないものだったが、この世界のことをよく知らないドラえもんは『そういうもの』で納得したようだ。

「彼? 彼女? を連れていこうつてことだね?」

「うん! ヴィオラスはベルのことが大好きだし、きつと協力してくれるよ!!」

事情を説明すると、ヴィオラスは「いいよー」と言うようにココクコク頷いた。

意思疎通が出来るとは凄いモンスターだ。

なるほど、と頷くドラえもん。

ドラえもんは相手の強弱など分からないが、それでも大きいという事は強さに直結するものだろうとは考えられる。

援軍にはピッタリの存在だと納得する。

実際は全然ピッタリじゃないのだが、この世界住民ではない2人にはそれを想像しろと言うのは酷な話である。

「だけどこんなに大きくちや階段を抜けられないんじゃないかい？」

「……」

「ねえ、のび太く……」

「ドラえもん、なんとかしてえ〜!？」

「ああ、やつぱりのび太はのび太だったか。見直しかけて損した」

「ヴィオラスを援軍にしよう! とは考えついても、どうやって人工迷宮クノッツスに運ぶかまではノープランだったらしきのび太によるお約束いつもの醜態。

ドラえもんはため息を吐きつつ、既に解決策を思い付いていた。

「……色々言いたいことはあるけど、後回しにするよ。今はベル君やノエルちゃんのピンチだから」

「やったあ!」

「説教は後でちゃんとするからね」

「流石ドラえもん!! やつぱり頼りになるなア!!」

「おだててももう遅いよ」

なんとかお説教は回避しようとするのび太を尻目に、ドラえもんは四次元ポケットか

らひみつ道具を取り出した。  
「空間移動クレヨン」

## 嫌な揺れ

時間犯罪者と言えども年がら年中悪巧みをやっているわけではない。

仕事あぐしのない休日……と言うのは改心した今となつては、真面目に働いてる皆に申し訳ない、厚顔すぎて憤死したくなる表現だが、兎に角デンジャにも一般人のように普通の娯楽を楽しむこともあった。

1番は何と言つても野球だったが、それ以外にも流行りの映画を観に行く位のこともしていた。

その中で、戦場に初めて出た主人公が飛び交う銃弾に怯えるシーンが臍げながら記憶に残つてる。確か自分は情けない奴だと笑つていたと思う。

(あの時の主人公に謝りてえ……)

オラリオ東区。

ガネーシャ・ファミリアホーム都市の憲兵の本拠地から少し離れた場所で、この世界には似つかわしくない弾丸の雨あられが降り注ぐ。

(ジャックめ、ころばし屋DXをどれだけ保有しているんだ!!)

デンジャは詳しくは知らないが、怪盗デラックスなる時間犯罪者が逮捕されたときに

一緒に押収された違法改造ひみつ道具だったはずだ。

恐竜ハンターが捕まったことで、自分の余罪も芋づる式に暴かれることを恐れたドルマンスタインが、タイムパトロールを目障りに思っていた殺し屋ジャックの支援者となつた時に、提供されたものと聞いている。

(なんで警察の押収品を持つてるんだよと突つ込みたいけど……金持ちの闇つて奴だよな)

便利ではあるが脅威ではないと思ひ、そこまで危機感を持つていなかったが、十数体いれば話は変わってくる。

一体ならばデンジャー人でどうとでもなるが、数で押されればどうしようもない。

(妙に多すぎる闇派閥の呪詛装備イヴイルス カースウエボンと言ひ……やつぱりフェルミラー持ち込んでやがったな)

一応、味方同士とはなつていたものの悪党同士が信頼し合う事は基本的にない。

裏切り裏切られが当たり前の世界なのだから仕方が無いことだが。

一応大つぴらに裏切りが出来ないように協定のようなもので持つてくるひみつ道具はお互いに見せあい、自分たちの脅威ではないと確認しあつていたが、やはり何らかの手段でこの世界に隠し札を持ち込んでいたようだ。

糞つたれめ、と喋れない口の中で吐き捨てるデンジャ。

しかし、そんな彼が恐怖を覚えていたのはころばし屋DXなどではない。

そんな玩具の弾に怯える精神なら、豪華客船の中でミサイルぶちかましたりしないのである。

デンジャが恐れているもの。それは彼のすぐそばで静かに唄っていた。

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々」

その詠唱文は知っていた。

自分が隠れ潜むことになる世界だ。漫画を流し読みするくらいはする。

主人公を何度も救ってきたこの魔法が分からないはずがない。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を」

ただ、自分は知っていただけなのだと理解せざる得ないだろう。

絵や文と言った情報ではない、確かな現実リアルとして見せつけられると……

冒険者の恩恵に魔法が3つしか刻めないことも領ける。

「汝を見捨てし者に光の慈悲を」

この世界に来てから魔法を見る機会があった。

魔剣と戦う羽目になったこともある。

しかし、この砲撃の前には全てが霞む。

「来れ、さすらう風、流浪の旅人」



魔力が装填された。

五感ではない何処かがそう感じる。

もしもデンジャの身体に人間の様な皮膚組織があつたとしたら、きつと見るに堪えないほどに鳥肌が立っていただろう。

「空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ」

デンジャよりも小さなその体から、濁流のように魔力が流れ出す。

自分たちが隠れている壁の向こうのジャックはどんな顔をしているだろうか。

隣にいる自分の顔は間違いなく引き攣っている。

絶世の美女と評するであろうその容貌は、魔力光によって照らされており、壮絶なまでに美を引き出していた。妖精、と言う原作における表現は誇張でもなんでもなかったのだ。

「星屑の光を宿し敵を討て」っ!!」

トリガー引き金に指がかかった。

14の緑風を纏った大光球が主の号令を待つ。

圧倒的な破壊の嵐が吹き荒れる直前になっても、デンジャの身体は意識から断絶されたように動かなかった。

「ルミノス・ウインド」っ!!」

盾代わりに使っていたレンガの壁を背にしたまま、号令のようにその奇跡まほうの名を呼んだ。

冒険者による特大の砲台を前に、人を転ばすだけの玩具などあつという間に一掃される。

(す、すげえ……)

これがリユー・リオン。

今後『ダンまち』の物語に深く関わることになる、ベル・クラネルを導き続けた者。

恐るべきことに、あれほどの大火力を放っておいて街の被害は最小。精々地面の塗装がボロボロになったただけだ。

(いや、13巻だとダンジョンの壁に大穴をブチ開けてたか。これでもまだ手加減しているんだな)

この時期はまだランクアップしていないと言うのだから驚きだ。

つくづく『ダンまち』の冒険者はバケモノじみている。

「………妙だ。奴は何故逃げない」

自らが行った超高等技術に何かを思う様子もなく、リユーは訝し気にフードの奥から空色の瞳を覗かせる。

その輝きは静かに知性の色を見せた。

「あのマジックアイテムは足止めにくそ最適はず……何故馬鹿正直に我々と戦っているのでしょうか」

「それは多分、俺が原因だ」

心の声スピーカーを付け、喋りかけるとリユーは少し驚いたように目を見開いた。

「……喋れたのですか」

「正確には、心の声を伝えてるだけだ。嘘も言えないから中々に苦労した」

「それで、貴方が原因と言うのは……？」

「簡単なことだ。あいつは裏切り者の俺を粛清しないとピンチなのさ」

何せデンジャは時間犯罪者の仲間として潜り込んでいるのだ。

今後の予定や、取引先などは全てでないとしても把握されている。

タイムパトロールから逃亡生活中のジャックからしてみれば、目障りのこの上ないだろう。

と言うか、そう言った立ち位置になるように仕向けた。

ジャックはフェルミラー等の有力なひみつ道具の持ち込みをしていたが、それはデンジャ対策ではなく、恐竜ハンターを主に警戒していた筈だ。

なにせ、時間犯罪者側にいた時のデンジャは喋れない復讐以外に興味のないキャラを演じ続けていたのだ。

おかげで何度使い走りにされて、ヘトヘトになったことか。

「本当はそうやって得た情報をタイムパトロールに密告する予定だったのに……なんでドラえもんが俺を見つけたんだか」

「ご愁傷様です」

「全く気持ちの籠つてないお言葉ありがとうございます。兎に角、俺をやらない限り、あいつに安息の日々は無いわけだ」

「実際の所、デンジャの持つ情報はそんなに多くないが、ジャックはそんなこと分かるはずもない。」

何処まで情報を掴んでいるのか分からない以上、殺してしまえとなるのは当然だ。

「……向こうが妙に好戦的な理由は分かりました。デンジャ、何かこの状況を打破するひみつ道具はありますか」

「スマン、ここでは使えないような派手なものばかりだ。確実に街に被害が出てくる。隠し札として持って持ったのは心の声スピーカーだけだった……」

「何故、そんなひみつ道具を？」

「タイムパトロールが来てくれるんだつたらこれが最適解なんだよ。偽証してないってすぐに分かるからな」

結局アテが外れて大ピンチだが、などとジョークを言おうとした瞬間、デンジャの高

性能スピーカーが発砲音に届いた。

まだころばし屋DXが残っていたのかとデンジャはため息を吐きそうになり、うんざりとする。

「…………ツ!! 躲せ!!」

「はっ? 何を…………うおっ!?!」

その時、冒険者としての勘ゆえか、リユーが咄嗟にデンジャを突き飛ばす。

同時に、これまでころばし屋DXたちの銃弾から2人を守り続けたレンガの壁は粉みじんに砕け散った。

「な…………!?!」

「攻め手を変えてきた! 注意してください!!」

木刀を構えるリユーに合わせ、デンジャも徒手空拳の構えをとる。

そのまま様子を見ていると、殺し屋ジャックがゆっくりと姿を見せた。

「遊びは終わりだ」

その腕には精霊よびだしうでわが装着されたままであることを確認したデンジャは目を細める。

魔法に劣らない科学による奇跡の再現。これは絶対に喰らえない。

(だが、どうやって壁を壊した? 冒険者の街なだけあつて頑丈そうだったが)



「地震……?」

ふと、出木杉は自分の足元が小さく振動していることに気が付いた。

爆発の揺れかもしれないとも考えたが、それにしても小さすぎる。震度で言えばギリギリ3程度だ。

自分たちは今、地下に建造された建物にいるのだから実際の振動はもつとあるのだろうが。

（オラリオにも地震の原因であるプレートがあつたのか。いや、もしかしたら揺れたのはダンジョンそのものとか……?）

流石は異世界。現実世界の常識には捉われないと出木杉は感心しているが、冒険者たちはそうではなかった。

「これは……嫌な揺れだな」

イレギュラー  
「異常事態でも起こったのか?」

ダンジョンは生きている。

冒険者なら誰でも知っているその定説から考えると、ダンジョンが身じろぎすること等、余程の事件が無い限りはない。

ざわつく団員たちと同じ様に団長であるシャクティもまた、今の揺れに嫌なものを感じていた。





団員たちの進言は正しい。

正しいが、シャクテイには嫌な予感が拭えなかった。

第一級冒険者に至るまでの正義の眷属としての経験が、この揺れの先にある恐ろしい破滅を予感するのだ。

そんなシャクテイを一瞥したオツタルは、団員たちの反応に戸惑う出木杉に声をかけた。

「……子ども」

「は、はい。なんででしょう……」

「俺は揺れの下に行く。お前はここに残れ」

「え……？」

「シル様からの命令ではあるが、イレギュラー異常事態が発生すると分かっている場所に子どもはつれていけない」

そう言ったオツタルは背を向けて歩みだした。

出木杉も「ガネーシャ・ファミリア」も気にせず、ただ敵がいる地を求めて。

「……そこで隠れている連中と行動を共にしろ。孤立することは無いだろう」

オツタルが背を向けながら指さした空間が揺らぐ。

そこには布の様なひみつ道具を持ったドラえもんとおび太の姿があった。

「なんで分かったの……?」

「気配が隠せていない。手練れにはすぐに気づかれるぞ」

「気配ってなんなのさ……」

透明マントをあつさりで見破られたドラえもんのボヤキを無視してオツタルは通路の先に消えた。

【おうじや猛者】も異常事態を重く見たか。私たちも現場に向かう。ハシャーナとモンモンは少年たちの保護をしろ」

「はい! 後、自分はモダーカです団長」

シャクティもこの揺れは無視できないとオツタルの後に続く。

団長の号令に合わせて戦場に向かう憲兵たちを見送ったモダーカは、さてと子どもたちに向き合った。

「酒場の居候どもがなんでここに居るかは後で問い詰めるとして、ここは危険だから俺と一緒に……」

「待って!! それよりもベルが危ないんだ! このままだとヴィトーって人に殺されちゃう!」

「な、お前その名前をどこで!?!」

「2人が何処にいるか聞いたから、逃げる前にそこに行かせてよ!」

## 汚穢の怪物

「へ、これは……?」

クノッツス  
人工迷宮攻防戦から逃亡をしてきた狂信者は、人気のない通路に倒れ伏す極彩色のモンスターたちに絶句する。

怪しげな人物たちとの取引によって手に入れたひみつ道具で、自分たちの直属の上司が造り出した異形、と言うよりは奇形のモンスターたち。

学者の様な知識がなくとも失敗作だと分かるそれらが無残に倒れている。

「殺されたのか? ならば、【ガネーシャ・ファミア】の連中がこの辺りにも!!」  
慌てて辺りを見渡す。

この狂信者は入り口での戦いが劣勢になったとみるや、陣形を捨てて一目散に逃走してきた人物だ。

ここまで来れば一安心だと胸をなでおろしたタイミングで、闇派閥イツイルス以外の存在の痕跡を見れば、心が乱れるのも無理はないだろう。

「ち、畜生! こんなところで!! 折角【おうじゃ猛者】たちから逃げられたのに!」

剣を抜いて辺りを警戒するが、その動きはあくまでも素人に毛が生えた程度。

武神であるタケミカツチが見れば、嘆息と共に言うだろう。モンスターたちの死体に気を取られ過ぎだと。

狂信者の背後から伸びた細い女性の腕は、あっさりとして狂信者に組み付き、拘束する。そして、喉元に冷ややかな刃の感触を感じた時、狂信者は悲鳴を上げて振り返ろうとした。

「おっと、変な動きしたらコレを喉に突き刺すから」

女性の声が耳に息を吹きかけるかのように、小さく囁かれた。

妖艶とも言える美しい声色だったが、今の狂信者には恐怖しかない。

「この迷宮の鍵はどこ？」

「わ、私は持っていない！」

人工迷宮クノツツスの鍵は門外不出の貴重品である。

万が一にも自分から敵の手に渡ったと知れば死罪は間違いない。

故に、狂信者はこう答える。

「嘘」

しかし、その言葉を否定する別の女性の声。

首元にナイフを突きつけている女性より、よっぽど温厚そうだ。

寧ろそれが不気味に感じられるが。



いた。

「でも上手いこと鍵持ちの閻派閥イヴァイルス見つけられてよかったね。これで入り口に通り抜けフープを設置しておけるし」

「デンジャさんから貰った奴以外にも鍵があれば、リユータちが後を追ってくるかは分からないけどここに鍵を置いていけるからね」

どうもこの狂信者を見るに、「ガネーシャ・ファミリア」と閻派閥イヴァイルスの戦いは順当に「ガネーシャ・ファミリア」の勝利で終わったらしい。

ならば彼らの協力も得たいが、今から彼らを探しに迷宮内をうろついている時間はない。

ノエルの安全を確保するためにも、彼女たちは先に進まなければならないのだ。

「じゃ、またミヤーに掴まるニヤ」

「うん。お願い、クロエ」

縄で縛り上げた狂信者を置き去りにして一行は通路を進む。

「この先の出口を抜けたら、中層だっけ?」

「うん。閻派閥イヴァイルスの切り札……穢れた精霊はそこにあるって」

「精霊なんてトンデモチート種族と戦うなんてゴメンニヤ。美少年じゃないらしいしノエル回収したらとつとずらかるニヤ」

既に名高い王国ラキアの騎馬隊よりも素早く走る少女たちだったが、気にすることもなく今後の動きを検討しあう。

「デンジャさんはノエルを連れた闇派閥イヴァイルスの構成員は、恐らく鍵を持たされない下つ端だから人工迷宮クノツソックスを利用できないって話だったけど、今のペースなら追いつけそうかなアーニャ？」

「ニャ。モンスターたちと出くわさないから、びつくりするくらいに下の階層に進めてるニャ。下つ端がどのくらいいのレベルかは分かんないけど、兄様でもない限りはミャーたちの方が早く着くはずニャ」

「元冒険者のアーニャがそう言うなら、そうなんだろうね」

そう言って沈黙したシルは、しかし落ち着かない様子だ。

いつも大人らしい姿ばかりを見せるシルには珍しい雰囲気霧に、クロエは驚いた。

(あのシルがここまで動揺してる……)

思えば、ノエルが攫われたと分かった時も真つ先に飛び出したのはシルだった。

すぐにメンバーにあれこれ指示を出したり、持ち前の頭の回転の良さを発揮していたが、非戦闘員の彼女がこんなところに来る必要性は何処にもない。

自分たちが思っている以上に、シルはノエルに入れ込んでいたのだろうか。

(……ま、今この瞬間までシルが同行することに違和感を持ってなかったミャーたちも

大概だけどニヤ)

あの超が付くほどシルに過保護なリニューですら、勢いのままシルの同行を黙認してしまっていた。

ノエルの存在は知らぬ間に大きなものになっていたということだろう。

だからこそ、その仮定を皆恐れている。

「……」

「アーニヤ」

「な、何ニヤ？ ルノア」

「これから戦いになるって時にそんな沈んだ顔してどうするのさ。気合入れなよ」

「……」

アーニヤも気付いている。

否、同僚たちの中ではシルに次いでノエルと遊ぶことが多かったのはアーニヤだ。

彼女だからこそ、確信にも似た予感を抱いているのではないか。

即ち、ノエルの限界を。

ノエルが精霊である。

その情報を当初クロエたちは飲み込めなかった。理由は単純、ノエルから精霊の気配を感じなかったからだ。





「あうっ……」

「つち、ホントに精霊かよ。鈍間が」

「おいおい、散々精霊様の奇跡とやらに苦勞させられてきただろうが。力は殆ど失っているようだが、コイツは大切な『呼び声』だ。もつと慎重に……」

人工迷宮で「ガネーシャ・ファミリア」を迎え撃つ闇派閥の狂信者たちと比べると、非常に余裕ぶつた態度。

彼らはヴィトーによって防衛が突破されるであろうことを予め知らされていたメンバーだ。

自分たちが安全圏にいると分かっているため、緊張感が全く保てていない。

「人工迷宮が使えないせいでトンだ遠回りだったが、ようやく到着だな」

「いよいよ、厄災のお目覚めってワケだ」

「なあ、ヴィトー様の到着を待ったほうが良くないか？」

「いや、他ならぬヴィトー様の指示では速やかに穢れた精霊の覚醒を促せとの事だ。異世界人を警戒しているらしい」

地面に倒れ伏し、土が混ざった雪の味に呻くノエル。

そんなノエルの頭を狂信者たちは容赦なく踏みつけた。

「精霊の力を使え、と言っても分からないか。さて、どうやって使わせる？」

「痛めつけなければいいだろう。命の危機ともなれば無意識に力を発露することもあるはずだ」

ノエルはそう言いながら布の合間から覗く目に鳥肌が立つ程に怯える。

穏やかな気性の少女には、狂信者たちの暴的思考など理解の範囲外。人が理解の及ばないものには本能的に恐怖を感じてしまうものだ。

「う……うえええつ。おかーさんつ、おとーさん……」

溢れ出す恐怖心に泣き出してしまふノエルだったが、イヴェルス闇派閥に子どもの泣き声を聞いて良心の呵責を感じるような道徳心があるはずがない。

それどころか、一斉に苛立って剣呑な視線の圧を強めた。

「ついでにこの耳障りな声も消せていいだろう。まずは舌でも切つて黙らせて……」

「まあ待て。こうなる前に我々に散々追い掛け回されたんだ。この小娘の中にあるだけの分では足りないかもしれないけどヴィトー様は仰つていた」

「じゃあどうすれば……」

「そのためにこれを授けていただいたのだ」

そう言つて男が取り出したのは、オラリオではあまり見ない形をした容器だ。

中から聞こえる水の音が無ければ、風船か何かだと勘違いしただろう。

「それは、ひみつ道具と言う奴か」

「ああ、「グレードアップえき」と言うらしい。垂らせばどんなものでも1時間だけ強化されるといふ優れものだ」

「つまり、それで精霊の力を増幅させようと言うのか。……いや、待て。それでは強くなった精霊に反撃されかねんぞ」

「ふん、それならば問題ない」

そう言つて、狂信者はノエルを軽く蹴り、仰向けにする。

体の前面に凍てついた空気の感触を覚えていると、非常に嫌な予感がして、気が付くとノエルの視線は自身を蹴り上げた男に向いていた。

「死にかけの直前でグレードアップえきを使えばいい。要は一瞬力が高まればいいのだ。その後はくたばつてもらつた方が助かる」

「なるほどな、悪くない考えだ」

そう言つて、狂信者の一人が剣を抜く。

鈍色の刀身に怯える自分の姿が映し出され、ノエルは必至に逃げようとするが、不治の呪いによつて動けなくなった足は全く思うように動かない。

切っ先の行方を脳裏に浮かべたノエルは、その未来から目を背けるようにきつく閉眼した。

そして、真つ暗な暗闇の中で、光を見た気がした。

「遊んでゐる暇はない。一気に心臓を」

狂信者の声が途絶える。

死刑宣告出会つたはずのそれは、中途半端な状態で霧散した。

「……？」

いつまでたつても来ない死に戸惑つてゐると、強く抱きしめられた。

人の腕に体が覆われることは、闇派閥イヴァイルスに連れ出されたときにも経験したが、今はそれよりもずっと温かい。

「やった、間に合つた……！」

「ル、ノア？」

「このバカ娘め。皆心配したんだからね」

恐る恐る目を開いたノエルの視界に映つたのは、「豊穣の女主人」の従業員たち。

この街でノエルが出会つた『家族』だった。

その足元には顔が拳の形に陥没した狂信者たちが転がっていた。

「あ……う……つ」

安堵のためか。再び涙が零れ落ちる。

しかし、彼女たちはそれを咎めることはなかった。

「ダンジョンに連れていかれたつて聞いた時はヤバイつて思ったけど、無事でよかつた

ニヤ」

「デンジャさんが教えてくれなかったら、大変なことになっていたね」

アーニヤとシルも優しく見守る中、ようやく落ち着いてきたノエルは舌足らずな発音で目一杯の感謝を伝える。

「あ、ありが、とうつ、みんな」

少女の言葉に顔を綻ばせる面々。

ノエルも泣き笑いになりながら、再会を喜ぼうとした。

体の奥から感じる暖かな光を抱いて、不自由の身体でよろよろと皆の下へ近づいていき……

「……待った」

愕然としたクロエの声が再び冷気を思い起こさせた。

「なんで光ってるの……?」

「え……?」

周りの困惑した雰囲気戸惑い、自らの手を凝視するノエル。

その手はクロエの言う通り、淡い光を放っていた。

「なに、これ……?」

体の大きさは変わっていない筈。なのにノエルには自分が大きくなったように感じ

られる。

正確には、雁字搦めからの開放感と言った方がいいのかもしれない。

枷が解けた、と言うよりは外から勝手に解かれた。

「つ精霊の力!?!」

「なんで!?! どこもケガもしてないんでしょ!?!」

防いだはずの最悪。動揺する少女たち。

その中で、真つ先に気が付いたのはシルだった。

「皆、イヴイルス闇派閥の人が何か持つてる!」

シルの言葉に導かれるように3対の視線がある一点を凝視する。

そこには、倒れ伏しながらも手の中に長方形の何かを持ち、嘲りの光を目の奥に浮かべる狂信者がいた。

「つお前!!」

ルノアが咄嗟にそれを蹴り飛ばす。

恐らくは切り札だったであろうそれを失っても、男の笑みは止まらなかつた。

「何を、何をやった!?!」

「ふふふつ……大したことはしてませんよ。私の上司から預かつた【シナリオライター】とやらで精霊の力の暴発を引き起こしたに過ぎない」

(まだひみつ道具が……っ)

失態だった。

ノエルに剣を振り下ろそうとしていた男に注意を向けるあまり、もう一人の危険人物に気が付かなかつたとは。

「失敗した時の保険ですが、上手くいって何より」

ほくそ笑む狂信者を殴りつけようとして、背後から聞こえるより一層大きくなったノエルの悲鳴に拳を止めた。

「ああああああああああっっ！」

「ノエル……ッ！」

ノエルが力を失った精霊であることは既に周知の事実。

そんな彼女が自分たちに知覚できるほどの精霊の力を出鱈目に放出している。力を出し切った後はどうなるか、考えるまでもなく結果は予想できる。

「止め方は!？」

「知りませんよ! 私には『精霊は無理矢理力を放出する』と書かれた紙を燃やせば、こうなると聞かされていたのみ。止める方法など聞かされるはずがない!!」

狂信者は嗤い続ける。

恐怖でその表情を引き攣らせながらも。





## スキル×スキル×クリティカル

ダンジョンの中と外での戦いの大きな違いは民間人の有無だ。

剛力や大魔力を持つ超人たちである冒険者たちが暴れば、周囲が無傷でいることは殆どあり得ない。

ダンジョンならばどれだけ荒らされようが人など「迷宮の楽園」<sup>アンダー・リゾート</sup>以外に住んでいないし、どれだけ破壊されようとも迷宮は勝手に修復される。

何も気にする必要はなく、自由に力を振るえるだろう。

だが、人が住む都市部ではそうはいかない。

敵を倒せても、その過程で街が廃墟になってしまつては無意味なのだ。

そう言った意味では、周囲のこと等お構いなしの敵程厄介なものはない。

敵は自由に力を振るえても、自分は戦い方を制限されるのだから。

「気を付けろ！あのころばし屋Zは無差別に攻撃を仕掛けることで、未来デパートが製造中止にするほど危険なひみつ道具だ！DXとはレベルが違うぞ！」

デンジャの警告によってリユースはそんな厄介な敵の出現を悟った。

同時に自分たちが殺し屋ジャックを追い詰めていた事にも気づく。

(無差別と言うならばここまでの手札を切らなかつた事も頷ける。これほど街で暴れてしまうひみつ道具を使えばオラリオ中から恨みを買うのだから)

ここであんなひみつ道具を使ってきたという事は、本格的に後が無いからだ。ならば、あのひみつ道具を攻略すれば、勝利は確定する。

「……しかし、人がいなくなっていたことが幸いしましたね」

ころばし屋Zによってポロポロになった街の景色を見てリユーは苦々し気に零した。

同系統のひみつ道具であるころばし屋DXの効果からして、敵の弾丸を受け止めるのは愚策。よって回避に専念するしかないが、回避した弾丸の威力は絶大。

風穴があいた街の建物は簡単には直らないだろう。大金をはたいて「ゴブニユ・ファミリア」に依頼しなければならぬのではないか。

「おらあああああつ!!」

大火力を持つ冒険者を警戒してか、リユーへの攻撃が一層激しくなる。

持ち前の敏捷の高さでそれらを回避していくも、徐々にまき散らされる木片が肌を掠める回数が増えていく。

正に乱れ撃ち。人一人に向けられるには余りにも過剰な弾幕。

リユーを追い詰めていくそれは、逆に言えばデンジャに向けられる弾が少なくなつたことを意味する。

薄くなった弾幕を見逃さず、突進するデンジャ。

指を組み、振り上げた両手でハンマーのようにころばし屋Zを叩き潰そうと雄たけびを上げる。

「ぐ……っ!? こんなに硬いのかっ」

しかし、砕けない。

冒険者ともそこそこやり合える程度には高性能なデンジャであつても、ころばし屋Zを一撃では破壊できなかつた。

ならば何度でも殴りつけてやると、左手で捕まえたまま右の拳を振り上げるが。

(なっ、脱皮だど!?)

ぬるり、と生物的な皮がデンジャの左手の中で滑る。

明らかに無機物でできているはずのころばし屋Zが、蛇のように己の皮を脱ぎ捨て、拘束から抜け出したのだ。

(なんでも有りかよ畜生……!)

驚愕するデンジャの鼻先に尽きつけられる銃口。

この弾丸が当たって通常のところばし屋同様に転ぶだけで済む……そんな楽観を持てるはずがない。その程度のひみつ道具なら未来デパートが製造中止になどしないだろう。

サングラスの奥に勝利を確信した眼差しを込めて、ころばし屋乙は引き金に指を掛ける。

「——ふっ！」

「……！」

だが、デンジャの攻防は無駄ではなかった。

一瞬だけでもあつてもころばし屋乙を拘束したことにより、リユーに対する弾幕は途絶えていた。歴戦の冒険者たるリユー・リオンはその一瞬を最大限活用する。

肺を満たすように空気を散り込むと、重心を低く落とす。

そして、その脚にあらん限りの力を込めて疾走した。

故郷【リユミルアの森】の大聖樹の枝から作られた木刀【アルヴス・ルミナ】。

その見た目に見合わぬ頑強さは、レベル4の膂力にも十分に耐えられる。

【疾風】の一閃。

岩すら砕く一撃はミシリツと嫌な音をひみつ道具の奥から響かせた。しかし、ころばし屋乙を破壊するには至らず、弾き飛ばすだけに留まる。

だがそれはリユーの想定通り。デンジャを連れて高速でその場を離脱すると、間髪入れずにデンジャに指示を出す。

「このまま戦いを長引かせるわけにはいかない。【スキル】を使います」

「……は？」

「少し時間がかかる。援護をつ！」

「お、おい！ 訳が分からないから説明を……！」

一方的に告げると、デンジャを離してさらに加速していく。

今からデンジャが走っても絶対に追いつくことは無いだろう。

（敵に作戦を聞かれることを警戒して説明できないのは分かるが……にしたって不親切だろうが！）

しかし、スキルだと？ とデンジャは内心首をかしげる。

リユー・リオンと言えば魔法のイメージがあつたが、スキルの方には余り覚えがない。

「仕方ねえな！」

どのような手を使うのかは気になるが、ここで問答している暇はないだろう。

リユーが何かを仕掛けようと言うのなら、自分はその邪魔をさせないだけだ。

（最も、ころばし屋乙も困るのは承知のはず、半端な攻撃じや見向きもされねえ。本気でぶつ潰す気持ちで行く！）

困をするならばまずは敵の意識を自分に向けなければならぬ。

あまりやりたくはなかったが、こちらが強烈な一撃を持っていると示すべきだろう。

デンジャは体に仕込んだバズーカを取り出すと、そのままころばし屋乙に向けて発射

した。

危なげなくヒラリと躲すころばし屋乙。

しかし、その意識は確実にこちらに向いた。

「いるかも分からない逃げ遅れた奴!! 熱かったらスマン!!」

心の声スピーカーで叫びながらバズーカを連射する。

建物に致命的なダメージが行かないように注意を払いながら、B級映画の様なド派手な弾丸の嵐を見せつける。

時空を操る機能があるのか、転移ワープを繰り返すころばし屋乙だったが、バズーカの弾が途切れるまでは迂闊にデンジャヤリユーに攻撃できないだろう。

爆風の熱を感じながら、リユーはスキルを使うために街を縦横無尽に駆けまわる。

「おらおら! 弾なら腐るほどあるぞ! ジャックとの戦いではほとんど使え……ッ!?」

その時、デンジャヤはあることに気が付く。

否、思い出す。

(待て、そのジャックの野郎は何処に行った?)

そもそころばし屋乙はジャックが放ったひみつ道具だ。

デンジャヤとリユーは殺し屋ジャックと言う時間犯罪者と戦っている。だが、ころばし

屋Zと言う強敵の出現で、いつの間にかころぼし屋Zの攻略ばかりに目がいき、ジャックへの注意が削がれている。その戦法は、正に今デンジャとリユーがやっているものだ。

殺し屋から目を逸らすことの愚かさなど、今更説明するまでもない。

(ヤベェ!?)

慌てて周囲を見渡すと、建物の陰から銃でリユーを狙うジャックの姿。

冒険者の勘の良さならば撃たれた後でも対処できる……そう安堵しかけたデンジャはその銃の正体に気が付き、今度こそ凍りつく。

【原子核破壊砲】だと!?)

デンジャは悟った。これがジャックの冒険者に対する必勝法なのだ。

如何に無双の力を振るう凄腕の冒険者であっても、核の力には抗えない。一方のジャックは核に対応できる何らかのひみつ道具を所持しているに違いない。

ころぼし屋Zと言う無視できない戦力を囿に、一撃必殺を叩き込む気なのだ。

情報が知られているデンジャをジャックは放置できない。その分析は正しい。

だからジャックは都市諸共吹き飛ばす気なのだ。

正気じゃない。一体幾つの命が粉微塵になると思っているのだ。

(ジャックはこの世界の人間を人間と思っていない。だからと言って、こんなにも躊躇



しないのか……!?)

「【星屑の光を宿し敵を討て】 ツ！」

小声で詠唱を口ずさんでいたのか、高速で駆け回るリユートの周囲に星屑の礫つぶてが再び現れる。

魔法種族マジックユーズーに相応しい圧倒的魔力は、殺し屋ジャックにとつては体のいい隠れ蓑でしかない。

「……クツ!？」

デンジヤは咄嗟に駆けだした。

あの男を止めなくては。それが出来るのは今、ここにいる自分だけだ。

「これを借りるぞー！」

「つ!? 何を……」

「一つだけだー！」

デンジヤは待機状態の緑風を纏う魔弾に飛び掛かる。

突飛な行動にリユートが戸惑いの声を上げるが説明している時間はない。

「ピッチャーライナーだー！」

バズーカをバットに見立て、空中に浮かぶ魔弾に渾身の打撃バッティングをお見舞いする。

こんな技術はのび太に教えられないな、と心の声スピーカーから発せられたボヤキを

置き去りにして、現実の試合だったら病院送り確定の突き穿つような剛速球がジャックに襲い掛かる。

「グウツ!？」

間一髪回避するが、魔弾は原子核破壊砲を掠めただけで粉碎する。

会心の成果にデンジャはガッツポーズを取ろうとして、目を見開いた。

「不味……!？」

空中に飛び上がったデンジャの身体は既に当初の勢いはなく、跳躍の力と重力の定めが釣り合つて空中で浮かぶような形になっている。

それは、ころばし屋Zにとっては格好の的だったのだ。

回避は出来ない。反撃しようにもバズーカは魔法を打った反動でスクラップ同然。打つ手はない。

「……助けられたようですね。ならば今度はこちらが」

しかし、デンジャの無力はリユウが埋める。

ころばし屋Zが発砲したと同時に、無数の光が瞬いた。

「【ルミノス・ウインド】ツ!!」

先ほどの倍近い数の弾幕。

そのうちのいくつかはころばし屋Zの弾丸に向かっていく。

しかし、ころばし屋Zに焦りはない。電柱すら破壊する一撃を、街を壊さないように加減した魔法では迎撃できないのだから。

だが、魔法の目的は弾丸の破壊ではない。

数度の交戦でころばし屋Zの攻撃を理解したリユーは、その特性を見切っていた。

「ルミノス・ウインド」の本質は風だ。即ち、空間を直進し、標的を狙い撃つころばし屋Zの弾丸とは極めて相性がいい。

魔力弾に纏われる風は弾丸に干渉し、その射線を僅かに、しかし確実に歪めた。

その結果、必殺必中の一撃はデンジャの命を奪うことはなく、その胴体を掠め、小さな傷を作るに留まった。

「!？」

「デンジャァー！ 失礼します！」

「は……う？」

さしものころばし屋Zも動揺の気配を隠せない中、リユーは空中でデンジャを足場に跳躍する。

リユーの身体は風を切り裂き、緑の閃光となって驀進する。

……「おげっ!？」と絶叫を上げながら蹴り飛ばされた勢いで建物に激突したデンジャがいた気がするがきつと気のせいだ。

すぐさま回避行動を取ろうとするころばし屋乙だが、無数の魔法が周囲に着弾し、身動きが取れない。

ならば転移だところばし屋乙は即座に選択するが、【疾風】はその判断よりも速かった。

サングラス越しに映る空色の瞳はすぐ傍にある。逃がさない、と言う意志を漲らせ。非力なエルフならば先ほどのように一撃を耐えきれば凌げる。そんな思考ごとリユーは切り伏せる。

「——はあっ！」

魔力に長ける代わりにその他の能力値アビリティは他種族に劣りがちなエルフだが、リユーはそんな種族でありながら、嘗ては【劍姫】と並び称された剣士だ。

無論、エルフでは育ちにくい【力】の能力値アビリティはE評価とそこまで秀でてはいるわけではないが、それを補うスキルが彼女にはあった。

【疾風奮迅】  
エアロ・マナ

走行時に走る速度が上昇すればするほど攻撃力により強い補正がかかるスキル。

【精神装填】  
マインド・ロード

精神力を消費することで【力】を強化するスキル。

これらの力で限界まで強化された一撃が、魔法で逃げ道を塞がれたころばし屋乙に直

撃する。

先程の攻防で転ばしやZの構造的に弱い部分を確認したりユーの攻撃は、寸分の狂いもなく急所に入った。

クリティカル・ヒット  
致命的一撃。

ドワーフすら凌駕しかねないユーの全力に、ころばし屋Zの耐久力も遂に崩される時が来た。

「……ッ!？」

断末魔の叫びすら上げられずに爆散するころばし屋Z。

散らばる鉄屑スクラップの雨を浴びながら、油断なく残心するユーは、やがて木刀の切っ先をジャックに向けた。

「これで、貴方を守る物はない」

「……」

「( )までです」

リユアの降伏勧告を無視して逃走しようとするジャック。

「いや、手前エは( )で終わっつけ」

「ギャッ!？」

しかし、その先に現れた槍に弾き飛ばされ、再びリユアの前に戻された。

顔に灼熱の痛みが走り、苦痛にあえぐジャックの視界に入ったのはミアとアレンだ。

「街がボロボロじゃねえか。どんな教育してんだ糞ババア」

「問題ないさ。修繕費はリユ어의給料から引くからね」

「……これは私ではなくその男がやりました」

「へえ？ この道にいくつもある丸っこい穴や辺り一面に広がってる魔素もその男の作業かい？」

「……私はいつもやりすぎてしまう」

暫く金欠生活が確定したリユ어의目が死につつ、ミアとアレンは油断なくジャックを拘束した。

こうして、この世界に混乱をもたらした全世界指名手配犯は異世界にてお縄となったのである。

# 絶対勝利をもたらすモノ

精霊。

神々に最も近い種族と言われ、神の子の名を持つ神秘の種族。

モンスター。

古代の大穴より溢れ出した絶対悪にして、人類の敵。

両者に存在する共通点がある。

それは、一目見ただけでそうと分かる存在感だ。

神聖さか、邪悪さかと言う違いはあれど、人間ならば誰もが感知できる。

だからこそ、どちらの気配も感じ取れる歪な怪物の姿から、アーニヤたちは目を離すことが出来なかった。

「あれが、穢れた精霊……?」

「ふっぎげんな。あんなのなんで存在しているんだよ!」

デンジヤから聞かされていたその名を苦々しく呟くクロエ。

隣で吐き捨てるルノアは咄嗟にノエルを庇った。

「ノエル!? ノエル!」





少女たち……特に聴覚に優れるアーニヤとクロエが耳を抑えて苦しむ中、穢れた精霊の叫喚は広間全体を振動させた。

突如として首根つこを掴まれて水の中に顔を叩きつけられたかのような息苦しき。

それは狂信者すらも例外ではない。

「……は……は……あ………」

狂笑は冷や水と共に洗い流され、熱に浮かされていた瞳に恐怖が浮かぶ。

モンスターと精霊の融合。その冒流的脅威をようやく理解した狂信者であつた者は、再び狂気の笑みを纏おうとして失敗する。

ただでさえ寒かつた温度がまた下がつた。

なのに流れる冷や水が積もつた雪に落ち、精霊は笑いながら矮小な人間たちを流し見る。

そして、ピタリと声は途絶えた。

「………」

生きた心地がしないまま、穢れた精霊を睨みつけるクロエ。

嫌な予感が頭の中で警鐘を鳴らし続ける。

誰もがこの時間に恐怖し、変化を望み、変化を恐れた。

「……アハッ」

神聖さなど欠片もない邪悪な笑み。

それが戦いの合図だった。

弾かれるようにアーニヤ、クロエ、ルノアの三人が穢れた精霊に向かう。

シルとノエルの護衛には付けない。魔法を使われたらそれで終わりだと分かったから。

手加減などない本気の一撃をそれぞれ喰らわせるが、強靱な防御力が悉くを無為に帰した。

「畜生……っ!?!」

皮の奥、手の骨にまで響くずっしりとした重みに顔をしかめるルノア。

その表情は穢れた精霊の巨体から溢れ出した魔力で引き攣られることになる。

「【荒<sup>スサ</sup>べ天<sup>テン</sup>ノ怒<sup>イカ</sup>りヨ】」

「精霊の魔法……!?!」

「離れるニヤ!!」

超短文詠唱からなる魔法。

その速読に仰天しながらも、少女たちは咄嗟に飛び退いた。

一瞬の判断が彼女を救う。

「【カエルム・ヴェール】……【放<sup>ディスナル</sup>電】!」

穢れた精霊の身に雷が纏われ、途端に弾けるように四散した。

あたりが雷の雨によって焼かれるのを見て、アーニヤは叫んだ。

「フニヤニヤ〜ッ!? ミヤールの尻尾がボサボサするニヤ〜!?」

「乙女が時間かけて毛繕いした尻尾を台無しにするとか……! トンだ腐れモンスターニヤ〜!」

「言ってる場合か! あれじゃ近づけないよ!」

雪が高熱で蒸発したことによる湿度の上昇でサウナが如き熱気を感じながら、ルノアは穢れた精霊はデンジャの情報通り厄介な敵だと認めざる得なかった。

「こ、ここうなつたら……一旦逃げてるニヤ」

「エルフ以上の魔法種族に距離を取るとか自殺行為ニヤ! 魔法は一瞬で使えるわけじゃないから、ヒットアンドアウェイで削っていくしかないニヤ!」

「どの道、広域魔法なんて使われたらシルもノエルも守れない! やるしかないか!」  
散開した少女たちは交互に攻撃を試みる。

レベル4の連携を前に中々標的を捉えられない穢れた精霊は苛立つ様子だが、ダメーシは全く感じ取れない。

「こいつ、深層で兄様たちが束になる様な強さだニヤ!」

余りの耐久に悲鳴を上げるアーニヤを尻目に、クロエはまだまだ向こうが本気ではな

いことを看破する。

（さっきの魔法……【カエルム・ヴェール】が魔法名なら【放電】デイステルは爆散鍵。スベルキ雷を最初に体に纏ってたってことはあれは本来付与魔法エンチャントってこと。もう一度あれを使われる前に……！）

懸命に穢れた精霊の情報を解析しようとするクロエだったが、穢れた精霊は3人から目を離し、その視線をシルとノエルに向けていた。

【アイシクル・エツジ】

「なっ……!?」

精霊が大きく口を開くとそこに現れる巨大な氷の柱。

投擲槍のように鋭く尖った切っ先はシルに照準を定め、発射される。

穢れた精霊は3人に押されて詠唱できなかつたのではなく、初めからシルを狙って詠唱を隠していたのだ。

「シル!!」

ルノアの絶叫じみた声が響く。

ノエルを抱きしめ、毅然と穢れた精霊を睨むシルの額に氷の柱は吸い込まれるように直進する。

凄惨な光景を誰もが脳裏に過らせる中、氷の柱はシルの数Mメートル前まで到達した。

「あ……」

魔力を使い果たし、朦朧としていたノエルが夢から醒めるように目を見開く。そんな彼女を心配させないよう小さく微笑んだシルが呟いた。

「——大丈夫」

その言葉に導かれるように、広間<sup>フロア</sup>の奥から轟音と共に現れた槍。

地面に並行するように長距離を驀進した投擲は、穢れた精霊の氷の柱<sup>まほう</sup>を粉々に粉碎した。

「……間一髪、間に合ったか」

凜とした女性の声。

雪を踏みしめる大人数の足音が轟く。

「何故、部外者がこの場ににいるのかは後で問い詰めさせて貰うが……今は手を貸そう」

現れたのはシャクティだった。

クノツソス入り口を攻略した「ガネーシャ・ファミリア」を引き連れ、強大な気配を検知したこの場に到着したのである。

そして、第一級冒険者の脅力で投擲した槍で、シルへの攻撃を破壊したのだ。

「げっ……」

何故かいそいそとフードを深く被るクロエ。

顔を見られては不味い事でもあるのだろうか。

「お前にももう少し手伝って貰うぞ、オツタル」

「……好きにしろ」

そんな黒猫を尻目に、シャクティは睨むようにオツタルを見た。

一人でありながら、その存在感は「ガネーシャ・ファミリア」たちと並べても食われることはない都市最強は、今まさに氷の魔法に貫かれかけていた少女に咎めるように視線を飛ばす。

しかし、それをシルはえへへと笑って流した。

「……はあ」

「どうした？ お前らしくない溜息だが」

「こちらのことだ。詮索するな」

珍しく溜息を零したオツタルは、気を引き締めて穢れた精霊を睨みつけた。

その瞳に僅かに憤怒を見せながら。

「……う？」

これまであらゆる有象無象人間たちを見下してきた穢れた精霊が初めて動揺を見せた。

自分の混沌となった心が今更何に動じているのか理解できない彼女は、笑みを消して初めて戸惑いの表情を浮かべる。

「どの程度のものか。まず、試すか」

そんな穢れた精霊を傍から見ると無感動に、しかしその実は瞳の奥に炎を燃やしなが  
ら一瞥したオツタルは背中から大剣を引き抜いた。

鈍い光を放つ、分厚い鉄の塊。それがどうした。

死体ダイタン・アルムの玉花と言う深層域に生息するモンスターに寄生した自分にとつては、人間相手  
には巨大でも石ころと大差ない。そう判断した穢れた精霊は再びニヤリと笑った。

「閃光センコウヨ駆ケ抜ケヨ闇ヤミヲ切り裂ケ代行者タル我が名ハ光精霊ルクスヒカリ光ノ化身ヒカリ光ノ女王オウウ」  
広間を圧する魔力。

大魔法発動の予感を受けて、一斉に「ガネーシャ・ファミア」が構えるが、そんな  
彼らを穢れた精霊はせせら笑った。

貧弱な人類では、いくら防御を取ろうとも抗うこと等できない。  
生まれながらの強者である彼女はそう確信する。

「ライト・バー……っ!？」

その口が魔法名を紡ごうとした時、穢れた精霊に驚愕が走る。

何となく目を離せなかつた猪耳の人間の姿が急に消えたのだ。

慌てて周囲を見渡そうとした時、男は突如として目の前にいた。

「遅い」

振るわれる轟音。

咄嗟にシャッターのように体を防護壁に包む。

自身の様な振動に呻く穢れた精霊は、一撃でひび割れた防護壁越しに睨む獣の目に戦慄した。

「あの方に向けた無粋な凶刃……償うがいい」

「~~~~~ツツ!!」

その時、穢れた精霊が覚えたものは何だったのか。

恐怖か、それとも屈辱か。

凶悪な相貌を貼り付け、声にならない叫びと共に身を振るように暴れ始める。

オツタルに傷つけられた部位は瞬時に癒え、死体の<sup>ダイヤモンド・アルム</sup>王花が塵殺の意を持つてその巨体を震え上がらせた。

「【<sup>おうじや</sup>猛者】に続けっ!!」

「ミャーたちも行くニャ!!」

「……逃げ時は見極めないとね。私たち見つかつたら不味いし」

「つてか、ミャーたちもう帰つて良くね? もう勝ち確だニャ。はー、やってらんねー」

勢いに乗つた眷属たちが一斉に穢れた精霊に殺到する。

そんな有象無象を睨む穢れた精霊は高速詠唱を開始するのだった。





「なら隠れていくぞ。中の状況も分からないんだから」

モダーカの提案に一理あると感じたらしきドラえもんは、それなら透明マントよりいい物があると四次元ポケットからあるひみつ道具を探し始める。

一同がドラえもんのひみつ道具を待つ間、ふとのび太はあることが気になってドラえもんに尋ねた。

「通り抜けフープは使えないの？」

「生憎、シルさんに貸したやつしか今はないんだ」

「それじゃあどうやって中に入るのさ」

「こんな時は……四次元三輪車」

飛び出たのは三つの車輪が付いた乗り物。三輪車だ。

一見するとのび太たちの時代で売られている自転車よりも簡易な乗り物に見えるが、そこはひみつ道具らしく凄まじい性能が加えられている。

「四次元……ということとはこれで壁をすり抜けるんだね」

「君は理解が速くて助かるよ出木杉君。のび太もそうであつてくれればいいのに……そうじゃないから未来から僕が来たんだけどさ」

「うるさいー！」

プンスカと怒るのび太を三輪車に押し込め、出木杉も四次元三輪車に乗せる。

四次元三輪車はその名の通り四次元に入ることが出来る三輪車だ。そのおかげでどんな分厚い壁でもスイスイ行けてしまおうし、三次元である現実世界からは観測できない……つまり、見えないのだ。

ヴィトーの私室に入り込むという目的と、姿が見られるのを避けたいというモダーカの要望をどちらも叶えられる優れものなのである。

「あ、これ以上は危ないからモ……モナガンさんとハシャーナさんはそっちを使ってね」

「……………」

指示を出したドラえもんはしかし気付いていなかった。

野郎2人組の三輪車と言う絵面の見苦しさに。

子どもがやる分には微笑ましくても、ハシャーナは冒険者らしい筋肉質な中年。モダーカは半裸男である。

余りの居心地の悪さにモダーカは己の名前を訂正する余裕すらない。

「……………早く行くぞ」

「……………」

キコキコと四次元三輪車をこぎ始めるハシャーナ。

子供用であるため、折れ曲がった足を小刻みに動かすしかない。

歩いたほうが速いであろうペースで進んだ四次元三輪車は、カツツン……と情けない音を立てて扉に激突した。

「あ、そのボタン押さないと四次元に入れないですよ」

「……………」

先に言えよこの野郎。

2人のドラえもんを見る目は冷たかった。

そんなこんなでヴィトーの私室に侵入した5人はそこで異様な光景を目の当たりにする。

「……………ジオラマ?」

「あのでっかい建物って、この国のでっかい塔じゃない?」

「ああ、バベルの塔の模型らしいな」

極めて精巧に作られたオラリオのジオラマ。

一体何人の職人を使えばこんな精巧なものが出来上がるのかと目を見開いていると、小さく剣戟の音が聞こえた。

「戦っている……………? だがこの部屋に人は……………」

「ハジャーナさんっ、このジオラマの中……………!!」

冒険者たちはそこで箱庭の中の廻り殺しを目撃する。

建物のサイズに合わせたかのように小さくなったベルが、ヴィトーに蹂躪される光景を。

「あそこのガリバートンネルを使つたんだ！」

「おい、ドラえもん！ 坊主をなんとか戻せないのか!?」

「ビッグライトを使えば……!」

慌てて四次元ポケットに手を入れるドラえもん。

ようやく見つけ出したベルの姿は悲惨の一言に尽きる。

体中に傷を付け、血は全く凝固する気配を見せない。

おまけに何度も殴られたのか、目元が腫れており、右目はもうまともに見えていないのかもしれない。

息は絶え絶えで、そんな彼をヴィトーは何度も噛みながら殴り飛ばした。

「この野郎……!!」

ハシャーナが怒気を発する。

ここが四次元空間で良かった。これを見せつけられたら自分たちは平常心を保てず、すぐに気配を漏らしていただろう。そう、モダーカは歯を食いしばりながら思った。

「こ、こんなのあんまりだよ！ このままじゃベルが死んじゃうー!」

「ビデオで録画している……なんて酷い!」

のび太は異世界の友人の無惨な姿に涙交じりの悲鳴を上げる。

そして、一方的な戦いをレンズに収めるカメラを見た出木杉が嫌悪感をあらわにした。

イッパイルス

闇派閥は邪神を崇める破綻者の集まり。酒場に来ていた客たちが散々に言っていた言葉を、彼は今日、最悪の実感と共に理解したのだ。

そしてドラえもんは。

焦る手を狂わせながらも、ビッグライトを探していたが、出木杉の呟きを偶々聞き取り、その悪趣味なカメラに顔を上げた。

そして、その顔をより一層蒼くする。

「……違う」

「え？」

「ドラえもん」

「違う！ これは、ただのカメラじゃない！」

なんてことだ、とドラえもんが狼狽える姿にのび太と出木杉が困惑の声を上げる。

怒りに我を忘れかけていたハシャーナとモダーカも何事かと振り返った。

「このカメラはひみつ道具だ！ それも、最悪な部類だ！」

余りにも入念なヴィトローの悪意。

ドラえもんはロボットであるにもかかわらず、思わず立ち眩みの様な感覚を覚える。  
「これは……カチカチカメラだ！」

## これが今まで歩んだ物語

後頭部に走る痛みで再び現実引き戻された。

何度繰り返したか、もう自分では判別できない強制覚醒。朦朧とした意識の断片が、続く攻撃の迎撃を辛うじて行う。

無我夢中で盾にした右腕が血飛沫を飛ばしながらヴィトーの拳打を防御する。

ヴィトーの持つ呪詛装備カースウェポンを破壊して一段落とはならず、むしろ致命的攻撃が少なくなつた分、蓄積されるダメージは増えつつあった。

もしも、強いイシで予め自分の意識を保つための細工をしていなければ、自分はある程度倒れ伏していただろうとベルは思う。

「諦めない。希望を信じる。……なるほど？ 実に主人公的だ。しかし、嗚呼、嗚呼！

それは無意味なのですよ！」

哄笑が止まない。

ぼやけた視界に映り込む昏い緋色の髪の毛は身を振って笑っている。

彼が作った箱庭も彼と一緒に笑っている。そんな妄想を抱いた。

「貴方は美しい！ 『英雄』とは、正しく貴方の別名だ！ そんな愚かな足掻きはきつと



この先多くの者を救うはずだったのでしよう。この物語はそうであれと綴られたのだから!!」

鳩尾に突き刺さる痛み。

頭を守るのに必死でその下はガラ空きだったのだろう。全くの無警戒で受けてしまった一撃に再び意識が飛びかけて、強いイシによつてまた現実に引き戻される。

「だからこそ……貴方には汚す価値がある!」

足に力が入らない。

重心はブレにブレて紙風船になったよう。

それでも倒れ込むようにヴィトールにナイフを持った左手を叩きつけようとした。

「あああああああつっ!!」

「弱者の咆哮ですか? 知ってますとも。それも小説の重要な要素だ」

しかし、不安定な足元をヴィトールは簡単に引っ掛けて見せた。

踏ん張りなど効くはずもなく音を立ててベルは倒れ込む。

中の骨子を抜かれた人形のようにだらんと力が入らない腕を懸命に動かし、立ち上がろうとする。それをヴィトールは上から足蹴にした。

「所詮この世は作り物! 一人の作家が生み出した頭の中の妄想に過ぎない!」

「あ、が……つっ!」

頭を踏みつけるヴィトリーの足の感触。

勝利を完全に確信した動きだ。しかし、それを隙と思うことは出来ない。

しあわせトランプの罠が、絶好の機会すら奪う。

「しかし、それはどうでもいいことです」

「……？」

「この世界が大いなる創造主によつてできたこと等、既に誰であつても知っている。その対象が神々から人間になつただけだ。今更動じなどしませんとも」

思考が鈍い。血を流し過ぎたようだ。

カースウェボン

呪詛装備の効果は破壊と同時に亡くなつたようだが、意地の悪いことにあの刃は返しが付いていたせいでもともと傷が治りにくくなる代物だつたらしい。

要するに、依然ピンチと言うワケだ。

「何故、私がこつちも憤りを覚えるか。分かりますか？」  
リトル・ルーキー 【未完の少年】？」

相手はレベル4で自分はレベル2。尚且つ満身創痍。

こんな状態でもまだ戦えているのは強いイシのおかげか、それとも目の前の男が今もまき散らしている異常な執着によるものなのか。

聞き覚えのない名前自分で自分を呼ぶヴィトリーに恐怖を感じながら、ベルは踏みつける足を振り払おうと弱弱しい声で魔法を放つ。

「はあ、はっ……【ファイアボルト】！」  
「くっ!？」

至近距離からの速攻魔法。

レベル差が開いていようとどこまで隙だらけならば直撃させることは出来る。

一発逆転は期待できなくても、その布石としての効果は十分。

力を振り絞ってナイフを振るうベルは、しかし、予定調和のように組み敷かれた。

「う……っ!？」

「厄介な魔法だ。作中で散々対人に効果があると言われただけはある。しかし、無意味です。貴方をこれまで守って来た主人公見えざる神の手補正はもう通じない!」

「なにを、言つて……?」

「貴方と言う主人公の物語を描くためにこの世界はあるという事ですよ。」

【未完の少年】

そう言つてヴィトーはベルの首を絞めつけながら耳元で囁いた。

「先日ミノタウロスとの戦いが話題になったばかり……と、いう事は今は鍛冶師と出会った頃合いででしょうか? それとももう中層で【タケミカツチ・ファミリア】に怪物贈呈をされて黒いゴライアスと戯れたのでしょうか? 流石に【イシユタル・ファミリア】から娼婦を奪うまでには話は進んでいないと思えますが」

「……」

息を切らしながら、ベルはヴィトーがまき散らす情報に眩暈を感じる。

この人が何を言っているのかまるで分らない。

「分かりませんか？ 貴方が、この世界が今後歩む物語ですよ。娼婦を救った後は王国ラキアの襲撃を経て、竜の娘との邂逅、そして異端児ゼノスと交流し、彼らを殲滅しようとする「ロキ・ファミア」と敵対することになる。ミノタウロスとの再会の後は下層への遠征、その最中に「疾風」を追うことになり、ジャガーノートと戦うことになる。【女神祭】では美の女神と……っ」

【英雄願望】を起動。

「どうやら物語としてのこの世界を読んでいるらしきヴィトーにはこのスキルのも当然バレているだろうが、蓄力チャージは一瞬で良い。

組み伏せられていてもほんの少し手を動かすくらいはできる。

自分に照準を向けさせるようなヘマはヴィトーはしなくても、地面に向かって魔法を撃つのは可能だ。

強化された炎雷が発射される直前、ヴィトーは話を打ち切って飛び退いた。

遅れて紅蓮の華が咲く。手を焦がされる熱を感じながら、衝撃で吹き飛んだベルは薄れゆく意識を何度も頭を叩く強いイシによって保ちながら、ヴィトーとの距離が開けた

ことを確認する。

(こんなに石に頭を叩かれて後遺症とかは大丈夫かな……)

負けないための手段とは言え、そこは気になった。

ポーション  
回復薬で完治するのだろうか。

「……つ成程、自爆ならば自分が負けつつ私を倒せるという事ですか。土壇場では頭が

回る様ですね。【未完の少年】  
リトル・ルキー

「……っ」

あの言い様。やはり相手は『必ず勝てる』ひみつ道具を使っているらしい。

あっさりバラしたのは分かったところで攻略法などないという自信か。

「ああ、やはりあなたには可能性がこれでもかと秘められている……! 貴方と言う人

間の価値がこの世界の価値なのですよ」

「そんな、こと……っ」

「そんなことありますとも! これは貴方の眷属ファミリア・ミイスの物語なのだから!」

この世界はベル・クラネルを主人公とした物語だ。

そうドラえもんやのび太はかつて言った。

(この人はそれが許せないから、だから僕にこんなに執着するのか……?)

さきほどから彼が発する言葉はこの世界が物語であると揶揄するもの。

彼の怒りもそこに起因するのか。そんな考えを目の前の人物自身が否定した。

「ああ、勘違いしないでいただきたい。先ほども言ったでしょう？ この世界が作り物であること自体はどうでもいいと。私が怒っているのはこの世界に私と言う存在が生まれた理由ですっ！」

「あぐっ!?!」

血飛沫が舞う。

一体自分の何処からそれが出たのか、ダメージを受けすぎて感覚が鈍感になったベルには判断できなかつたが、それを見てヴィトーが愛おし気に頬を緩めていることははっきりと分かつた。

「いい加減勘づいているのではないですか？ 私と言う人間が人の血や苦しみに悦を見出すと」

それは何となく気が付いた。

瞬殺できるはずの自分を騙る理由など、それ以外には考えられない。

「正確には、私にはそれしか美しいと感じられないのです。どうも感覚に異常がある様  
でして、視界に映る者は全て灰に見え、耳に入る全ての音は耳障りな雑音ノイズ。舌に触れる  
すべては痺ましき異物。香りに至っては他者に話を聞くまで存在すら知りませんで  
した」

今まで感情を込めて発せられたヴィトリーの言葉は、この時ばかりは淡々としていた。明かされたのは地獄の様な男の異常、しかし、それだけならばまだ『マシ』だったとヴィトリーは言う。

「私が唯一美しいと感じたのは他者の傷と血なのです。自分のものではだめでしたが……これを『欠陥』と言わず何と言いましょうか。私は神を、世界を恨みました。こんな世界の『瑕疵』でしかない私を生み出したそれらに、自分の生まれた意味を問い続けられました」

そんな時に彼は唐突に世界の真実を知らされた。物語の外側から来たという異世界人たちによって。

「この世界は英雄譚。貴方と言う主人公のためのもの。それを知った時、私はどう思ったか分かりますか？」

「……憎みましたか？」

「いいえ、歓喜しました」

英雄らしい主人公の成長物語。

ならば自分はその前に立ち塞がる悪役で、救世の英雄の糧になる存在なのだ。

世界に愚かにも抗い続ける『英雄』を信仰してきた（自称）ヴィトリーにとって、それは福音ですらあったのかもしれない。

自分の『欠陥』には意味があった。

自分の様な世界の『瑕疵』はそのために生まれてきたのだと。

「しかし、結論から言えばそんなものは勘違いでしたよ。『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』、その物語の中に私の名は何処にもなかった」

その絶望は如何ほどのものだっただろう。

生涯悩み続けてきた『欠陥』、それに何の意味もないのだと突き付けられたのだから。或いは作者の中だけに存在する設定がヴィトローなのもかもしれない。

兎に角、ヴィトローの『欠陥』は、間違いなく世界に必要なものだったのだ。

「それこそが私の怒り。私と言う世界の『瑕疵』は無意味な苦しみだったのです。異世界の方々からは「名無し」、などと言う仇名を付けられた時には本当に怒りで頭がどうにかなっていました」

絶望に打ち震えるヴィトローはしかし辿り着いた。

自分が本当に為すべきことを。

「世界是正……結局やることは変わらない。しかし、そのための大切な要素を見つけた。それが、貴方だ」

この世界の価値がベル・クラネルと言う主人公によって決まるのならば。

ベル・クラネルを残酷に、惨たらしく殺すことこそヴィトローの取るべき是正なのだ。





作ることだったのだ。そのためだけにオラリオを再現する執念には脱帽するしかない。「坊主はしあわせトランプの道化師ジョーカーも持つている。これで勝ち目なんざあるはずがないだろうが！」

憎々し気にヴィトローを睨みつけるハシャーナ。

そのまま衝動的に殴り掛かりそうになる己を必死に抑えた。

「まず、カチカチカメラは破壊しよう。これがある限りベルさんは絶対に勝てない」

「僕、デンジャにくうき砲貫つてるから、それでなんとかなるよね？ ドラえもん？」

「うん、カチカチカメラ自体には戦うことは出来ないはずだから」  
のび太は早速くうき砲を腕に取り付ける。

基本的に出来ない子なのび太だが、射撃の腕ならば自信があるのだ。

「……」

「出木杉君？」

意気揚々とするのび太だが、出木杉の表情は険しかった。

「ドラえもん、本当にこのままカチカチカメラを破壊できると思うかい？」

「カチカチカメラにくうき砲の威力を耐えきる硬さは無いと思うけど……」

「だからこそ、こんな貴重なひみつ道具を放置するかな？」

幹部の私室にあるから安心、そう思ってくれればいいが出木杉は樂觀できなかつた。

「なにより……」

出木杉はカチカチカメラに近づいた。

四次元空間の中ならば現実世界から感知される心配はない。

ヴィトーとベルが戦っているそばを通り過ぎ、出木杉は脚立に取り付けられたカメラを見てあることを確信する。

「見て、ドラえもん」

「これは……」

「脚立に埃が付いている。この脚立はだいぶ前からここに取り付けられていたみたいだ。だけど、カメラ本体には埃が付いていない」

「つまり、これは最近取り付けられたものってことだね」

「それを取り付けた人はこの幹部の人かな？ それとも……」

出木杉の言葉に周囲を強く警戒するモダーカとハシャーナ。

「気配を感じ取ることが出来ないがひみつ道具を知っている以上、油断はできない。」

「闇派閥の隠密程度なら見破れると思うが、ひみつ道具を使われたらな……」

「俺もひみつ道具を使った隠密は見破れません。それで一度痛い眼見てますし」

ベルが石ころ帽子を使った一件を思い出すモダーカ。

闇派閥が石ころ帽子を使っている可能性を考えれば、のび太を迂闊に攻撃させるわけ



相変わらず息は絶え絶えで、少し押ししてしまえば簡単に倒れてしまうことが予想できるほどにその足下は頼りなかった。

しかし、その深紅ルブライトの輝きは決して絶えることなく。

歯を食い縛つてもたれかかるようにベルは挑み続けた。

(このしごときは一体、どこから……?)

その本性ゆえ、ヴィトーは数えきれない程の人間を壊してきた。

だからこそ、どの程度突けば限界が来るかは分かるのだ。

ベル・クラネルは当に限界を超えている。

脆いレベル2を壊し続ければ、ヴィトーの『欠陥』が満足する前に再起不能になるものだ。

途中まではいかに壊さないかにヴィトーの思考の大半を割くことになっていた位である。

(だが、壊れない。確実に傷は増え、その体はガタが出始めるはず……なのに、何故立ち続けられる!?)

カチカチカメラで勝利は確実。

しあわせトランプの道化師ジョーカーで方が一を呼び込む【幸運】を封じ込めている。

そもそも素の力の差が開きすぎている。

(動ずることなどないはず……これで終わりですっ！)

芽生え始めた悪寒を振り払うように蹴りを叩き込む。

少年の脇腹に深々と刺さった脚部は、度重なるダメージによって酸化したように脆くひび割れていた肋骨を粉碎した感触を感じ取った。

終幕を確信し、弧を描くヴィトローの唇は、ピクリと動く白い手を前にひきつった。

「……………」

「馬鹿な……………これで動けるわけが……………」

立ち上がる。

崩れかけた蠟の上に辛うじて灯る焰のように。

今にも倒れてしまいそうによるめきながら、ベルは立ち上がる。

(そうか！ ひみつ道具！ ……こんな不可思議な現象はそれしかあり得ない!! ……どんな効果だ？ カチカチカメラとは真逆の絶対に負けない効果なのだとすれば……………)

ゾンビのように立ち上がり続けるベルの様子を、ひみつ道具の力に違いないと思ったヴィトローが考えを張り巡らす。

そんな男に対し、少年は問いを投げ掛けた。

睨み付けるように相手を凝視しながら。

「どこを、視ているんですか」

「……はい？」

「つつ！ 貴方はっ！ どこを視ているんだって、そう言ってるんだ！」

激しく叫ぶベルに、ヴィトーは珍しく困惑した様子だ。

質問の意図が解らない。何故、ベルがこうも怒っているのか。

その理由が欠片も思い至らなかつた。

それがベルの思考を白熱させ、意識を保たせ続ける。

「最初に会った時からずっとそうだ。貴方は僕を通して違う人を……いいや、ありもしない幻を睨み付けていた！」

「何を的外れな。私はずっと貴方を……」

「僕は『未完リトル・ルーキーの少年』なんて知らない！」

ヴィトーはいよいよベルを不可解なものを見る目で見た。

殴りすぎて頭がやられてしまったのだろうか、とすら考えた。

「貴方が読んだ小説の僕の二つ名がきつとそうなんでしょう。でも、それは僕じゃない」「何を……貴方は『未完リトル・ルーキーの少年』のはずだ。女神フレイヤの口添えで、神々から賜りし名がそれのはずだ」

「……そんなまともな二つ名ならどんなに良かったか」

掠れるように笑う。

そして、やはりヴィトーは自分を見ていなかったのだな、と再確認した。

「……フウー」

正直この二つ名は言いたくない。

授けてくれた神々には申し訳ないが、完全な黒歴史なのだから。

だけど、ベルの考えが正しければ、これがヴィトーの隙を作り出す。

彼は断腸の思いでその忌々しい二つ名を絞り出した。

「口、ロリコン・アナウサギ【幼女好兎】……」

「は……?」

完全に虚を突かれ、間の抜けた声を零すヴィトー。

その様子が癪に障ったベルはややくそのように叫んだ。

「だからっ、ロリコン・アナウサギ【幼女好兎】ですよ！ 酷い名前でしょう!? 僕だって美の女神さまの口添

えが欲しかったですよ！」

リリを助けた時の噂を放置していたツケがこんな形で降りかかるとは。

いつそ原作の自分の二つ名らしい「リトル・ルークィー未完の少年」を勝手に名乗ってやろうかと考えつ

つも、ベルはヴィトーが見せるであろう隙を待った。

「……」

ヴィトーは絶句していた。



無理もない。余りにも馬鹿らしい二つ名だ。悪乗りここに極まりである。

しかし、どんなに馬鹿らしい理由であっても隙は隙。ベルが躊躇する理由はなかった。

「っ！」

「……!!? クツ!!?」

左腕を突き出し、ヴィトーに掴み掛るベル。

呆然としていたヴィトーもベルの闘志を受けて我に帰り、迎え撃つ。

（虚を突かれたところでカチカチカメラによる運命からは逃れられない！ 無駄なこと

……!?!）

「うわあああああっ!!?」

カチカチカメラによる因果の操作が行われ、再びベルに予定調和の敗北が課されようとした時、この場に似合わぬ子どもの声がヴィトーの私室に響いた。

ヴィトーの視界には、偽りのオラリオの向こう側に突如現れた巨人。のび太の姿があった。

（何時からこの部屋に……? しかし無駄です。潜ませた私の部下がすぐに対処する！）

カチカチカメラの弱点はこのひみつ道具事態に防衛能力がないことだ。

万が一ベルがそれに気付いてカメラを直接攻撃する可能性が残っていた以上、その弱点を放置するはずがない。

カチカチカメラの傍には、石ころ帽子で気配を隠した部下護衛として潜んでいる。器の昇華も果たしている狂信者を、あの子供が持つくうき砲では倒せるはずがないのだ。

(そもそも私の部下が何処にいるのかも分からないはず。気にすることは……)

「ドカンッ!!」

のび太がくうき砲を放つ瞬間、姿なき狂信者はその息の根を止めるため刃を走らせる。

戦闘の心得もなく、超人的な索敵能力もないのび太にその刃から逃れるすべはなく、刃は空気砲の攻撃を弾き、続けてのび太の喉元を刈り取ろうと唸る。

しかし、それを遮ったのは二つの影。

「うおおおおおおっ!!」

モダーカとハシヤーナである。

姿の見えない敵の攻撃を二人掛かりで凌いだ二人の脳裏には、出木杉の作戦説明が蘇っていた。

『カチカチカメラの護衛がないならのび太君がそのままくうき砲で破壊する。もしも

姿を隠しているなら、必ずのび太君を始末しようとするはずだ』

『それ僕死んじゃうじゃん!』

『そうはさせないためにお二人には野比君を守って欲しいんです』

『……しかしだな、今もまるで気配を感じられないんだぞ? 襲い掛かれても居場所が分からなければ対応できない。3人まとめて搔っ捌かれて終わりだ』

『ヒイイイツツ!』

『ハシャーナさん、子どもを怖がらせてどうするんですか』

『それに関しては僕にも考えがあります』

出木杉の考えた作戦は至極単純。

まず、のび太は壁際に出現し、背中をびったりと壁につける。

これで背後からの奇襲は避けることが可能。

続いて、くうき砲を発射。

一撃で破壊できるなら良し。だが、護衛がいるのであれば、それは防がれるだろう。(だが、防がれれば、防がれた位置から逆算して隠れている護衛の位置を計算できる) そうすればのび太を襲おうとする護衛の攻撃を防ぐこともできる。

念のためにモダーカとハシャーナの二人掛かりで防御し、デンジャ特製のくうき砲で護衛の注意を奪う。

「っ!？」

何もない筈の前方から困惑した雰囲気が伝わる。

それもそのはずだ。のび太のくうき砲から早すぎる次弾が発射されたのだから。

くうき砲は22世紀ではメジャーなひみつ道具だ。異世界人からひみつ道具を仕入れていた闇派閥も当然その能力は知っているはず。イッパルス

そう、こんなにも早く次弾が撃てるはずがないと知られているからこそ、デンジャの改造というイレギュラーが効果を発揮し、奇襲は成り立った。

誰にも邪魔されない空気の砲撃は、無防備なカチカチカメラを粉碎した。

「なっ、馬鹿な!？」

(今だっ!)

ヴィトーが驚愕し、護衛が任務の失敗に硬直する中、出木杉は動く。

その手に「スーパードン」を纏った彼は、モダーカとハシャーナに攻撃が阻まれている人物がいるであろう空間に渾身の打撃を放つ。

ファルナ

恩恵を持たない出木杉の鈍い動きでは奇襲をしても対処されるかもしれない。だから造り出した。任務の失敗と言う動揺からできる大きな隙を。

カチカチカメラの破片が散らばる音と共に、気絶した男が虚空から現れる。

その頭から石の様な帽子が零れたのを確認した出木杉は、それを遠くに蹴飛ばしつ

つ、叫んだ。

「教会の崩壊を思い出してっ！」

それはベルに教えてもらった最初の失敗談。

彼に近しい人しか知らない事件を起こしたひみつ道具がここにあると言うメッセー  
ジだ。

「……ッ！ あああああああああっっ！！」

その意図を正しく理解したベルは吠える。

カチカチカメラの破壊に気を取られるヴィトーの後頭部を掴み、右手のヘステイア・  
ナイフを勢いよく納刀する。

（お願いっ、ヴェルフ！）

カチパッチン  
納弾鞘を発動。

勢いよく放たれた神の刃の勢いに任せて、弾かれるように逆刃に構えたことで柄が  
ヴィトーの顔面に減り込んだ。

ポーン  
回復薬で表面だけは塞いでいた傷が、また血をぶり返す痛み<sub>に</sub>表情を歪めながら、ベ  
ルは炎のように燃え盛る紅い瞳を輝かせて砲声した。

「【ファイアボルト】ッ！！」

「があああああっっ!?!」

びよんきゅー  
兎肉球を装備した左手が炎雷を纏う。

ヴィトーの後頭部を掴み、固定していた手から突如放たれた魔法に流石のレベル4も初めて絶叫した。

カチパツン  
納弾鞘によるテレフオンパンチじみた拳打と、びよんきゅー  
兎肉球による零距离速攻魔法の挟撃。  
ベルは今出せる最高の連<sup>コシネーション</sup>撃をぶつけた。

「くっ……舐めるなっ!!」

しかし、ヴィトーは倒れない。

常人ならば頭蓋を粉碎される連撃を受け、一瞬意識を遠くに飛ばしていても。

即座に立て直して、ベルの顎を蹴り上げた。

(……っ？ 手応えが軽い？ 予め蹴り飛ばされる方向に飛んで衝撃を和らげた……いや、違う！ これは元からそう言う作戦!?)

ヴィトーはベルの右足に収斂する光の粒子を見て、ベルの意図に気付く。

ベルは敢えて隙を晒し、蹴り上げと言う選択肢を誘導したのだ。

それはヴィトーが連撃を耐えきると予想した上で、ヴィトーの次の行動を限定し、ベルに襲い掛かるダメージを軽減。尚且つ、ヴィトーをその場に留まらせるための罠。ベルが仕掛けた『駆け引き』だ。

ベルは右足を振り上げてヴィトーを睨む。

(しかし、この短時間の蓄力の威力はタカが知れている。レベル2で死にかけてある状況も加味すれば、大した一撃にはなり得ない！)

小説を読み込んでいるヴィトーはベルのスキルの特性を本人以上に理解している。その情報を基に耐えられる、と結論付けた。

これこそがレベル差の理不尽。圧倒的スベックの違いには何人たりとも抗えない。(なのに、この予感は何だ!?)

絶対に勝てるという確信。

しかしヴィトーの胸にはそれ以上の感情が渦巻いていた。

負けてしまうかもしれない、と言う恐怖が。

それを振り払おうとヴィトーはベルを睨み、ベルもヴィトーを負けじと見返し、血反吐と共に声を発した。

「ドラ、えもんさ、んっ!!」

「ビッグライト〜」

その声と呼応するように、光がベルを包んだ。

ガリバートンネルによって体が小さくなっていたベルは、身体を大きくするひみつ道具によって元の大きさを取り戻していく。

小さな箱庭を空中から見下ろし、少年は必勝を期す。

そして、小さくなったままのヴェイトーにその一撃は振り下ろされた。

鈴の音と共に。

兎弾びよん弾足の衝撃も合わさったかかと落とし。

5秒の蓄力チャージと共に放たれた脚撃は、ミニチュア群を吹き飛ばし、偽りのオラリオを崩壊させた。



# 物語の終わりが始まる瞬間

ふつ、と先程まで漲っていた力が霧散する。

ベルのスキル【英雄願望<sup>アルゴノウト</sup>】の反動。体力と精神力<sup>マインド</sup>の消費だ。

高火力と引き換えのこのデメリツトはベルも重々承知のつもりだった。

正し、それは半死半生の状態で放ったことのない故に不十分だったのかも知れない。

(あ、不味……意識ト　ブ……)

消えた体力と精神力<sup>マインド</sup>に引きずられるようにベルの意識が遠のく。

強いイシの発動条件は『ヴィトローを倒すこと』。つまり、ヴィトローを倒すことに成功した今となつてはもう飛んでくることはない。

もう頭をガンガンやられないのはいいことだが、本来意識を失うようなダメージを受け続けた所を、強いイシによる強制覚醒で誤魔化してきたのだ。タダで済む筈がない。

戦闘不能どころか、このまま永眠してしまつても一向に不思議ではないのだ。

「やったあ！　ベルが勝ったあ！！　後はしあわせトランプを【アベコンベ】で……つて、えええッ!?　ベルが死んじゃう!?」

「ちよつと待てこれヤバいだろ!?　泡吹いてんぞ!!」

「坊主!! 寝るな!! 起きろおおおおおっ!?!」

勝利に沸いていた一同もベルの様子に気付いてパニック状態だ。

「ど、ドラえもん!?! なにかひみつ道具をつつ!?!」

「ええく!?! な、何かって言われても……あれじゃない。これじゃない。それでもない……」

切羽詰まった様子が出木杉に急かされて、慌ただしく四次元ポケットをひっくり返すドラえもん。

「よ、よし!! こうなったらあれを使おう!!」

やがて、何を使うか決めたらしきドラえもんは、例の声でそのひみつ道具を取り出した。

「タイムふろしきく」

(あれは……神様に髪飾りを送る時に……)

かつて【四次元衣囊】フォース・デイメンション・ポーチから具現化させたことがある、極東にあるという風呂敷型のひみつ道具を思い出す。

その効果は時間の逆行。

風呂敷に包んだ物の時間を巻き戻すのだ。

壺を割ってしまったとしても、これに包めば新品同然……どころか、加減しなければ

作ってる最中、固まる前の状態になるかもしれない。

それを怪我人にかければどうなるか。

「このくらいでよし。どうベル君？ 身体、痛いところはない？」

「……大丈夫です。痛みも疲れもさっぱりなくなるなんて……」

これが普及すれば冒険者は大助かりだが、薬師は大赤字だろうな、とベルは何となく思った。

凄いジト目で見てくるナーザーの幻影を振り払いつつ、ベルはドラえもん<sup>に</sup>礼を言う。

「ありがとうございます。助けてもらっちゃって……」

「お礼なんていいよ。前に僕たちが助けてもらったから、そのお返しだよ」  
体を小さく動かしても全く痛みが無い。

暫くは療養生活覚悟していたが、これならば問題なく今まで通りの生活が出来そう  
だ。

その時、ようやくベルはドラえもんたちがここにいることに疑問を持った。

「そう言えば、みんなはどうしてここに？」

「そのことなんだけど……」

ドラえもんが語ったのは、ベルたちが人工迷宮<sup>クノッソッス</sup>に侵攻した後の話。

精霊であつたノエルを闇派閥イヴィルスに連れ去られ、それを「豊穡の女主人」の面々や、「フレイヤ・ファミリア」の冒険者たちと追つてきたという経緯にベルは愕然とした。

「ノエルが……?」

「ごめんなさい。僕がもつとちゃんとしていれば……」

「あ、いや!?! 出木杉君は何も悪くないよ! 悪いのはノエルを攫つた人たちなんだから」

目の前でノエルが連れ去られてしまった出木杉はかなり気にしているらしい。

動揺してないでしっかりしないと! と自分の頬を叩いて気を引き締める。

「僕も行きます。その、穢れた精霊つてモンスターのところにもノエルはいるんですよ」

「おいおい、怪我が治つたとはいえ、お前はもう退却したほうが……」

ベルの言葉をモダーカは至極真つ当な意見で否定する。

その意見の正しさはベルにも分かつている。だけど、頷くわけには行かなかつた。

「あの娘は、ノエルは僕のことをお父さんと呼んでくれているんです。なら、何もしいなんてできない」

「……」

「ごめんなさい。【ガネーシャ・ファミリア】を信じてないわけじゃ決してないんです。

あの娘が苦しんでいる時は一緒にいてあげたい。あの娘が泣いている時はその涙を拭

いたい。そんな、我儘なんです」

「……っ。しかしだなあ」

モダーカは苦々しそうに首を振る。

ベルと距離が近かったモダーカだ。彼の気持ちは痛いほど分かった。

心情的には許してやりたいのだろう。だが、情に流されてベルを危険な戦場にこれ以上引つ張りまわすわけには行かない。

そんなモダーカの思いが伝わったのか、ベルの表情も曇る。

ここで彼らを見捨てて勝手に行動をとれるほど、少年は自分勝手にはなれなかった。

双方が沈黙し、少年たちが心配そうに見つめる中、ハシャーナがため息を吐いた。

「……あのな、坊主？ 付いて行きたいなら自分の感情をいくら説明したって意味がねえ。ここは自分が穢れた精霊の戦いに付いて行って、どう活躍できるかを言うべきだぜっ」

「……ハシャーナさん？」

「なにを……」

「頭が固すぎんだよ。坊主もモダヤンも」

「自分の名前はモダーカです。こんな時まで間違えんな」

ハシャーナはそう言うのとベルから一枚のカードを取り上げた。

「あ、それはっ」

「不幸が次々と降りかかる呪いのカードか。異世界人はなんでこんなものをつくったんだか」

ハシャーナの身に起きる厄災を想像して身を竦めるベル。

しかし、ハシャーナは不敵に笑うと、矢印のついた棒を素早くカードに突き刺した。

「か、返してください!! それは……っ」

「おう、ほらよ」

「うわあ!! ……あれ?」

本当にあつさりと返したハシャーナの行動に悲鳴を上げるベルだったが、その絵柄の変化に気付く。

ニヤニヤと笑う道化師ジョーカーの絵は、いつの間にか不貞腐れたように体育座りで背中を向ける道化師ジョーカーの絵に変わっていた。

「アベコンベだったか? これで触った物は性質やら外見が入れ替わるつつうひみつ道具らしい。こいつでこのふざけたカードをあべこべにした」

「えっと、つまり」

「今のこいつは持ち主に次から次へと幸運を持つてくる良いひみつ道具ってわけだ」

自分の悩ませていたひみつ道具があつさりと対処されたことにベルは目を丸くする。

「そして、そんな超幸運男が戦場にくれば……俺たちは大助かりだろうな！」

「ハシャーナさん……」

「そう怒んなって。実際、これで穢れた精霊の攻略は楽になるだろう？」

「あーあ。絶対後で団長に怒られますよ、俺たち」

モダーカはそう言うが、どこかその表情は安心した様子だった。

ベルも参戦することが許されて、改めて気合を入れ直す。

「まあ？ 他にも良い要素があるなら言ったほうがいいぞ、坊主」

「うーん。ちよつと今日のひみつ道具はあんまりいいものが無いんですよ。と言うか、最後の一つは使い方がよく分からないですし」

「どんなものなの？」

「あ、のび太君には言ってなかったっけ。今日僕が使えるひみつ道具は【チョーダイハンド】【強いイシ】そして……【機械化機】だよ」

「うーん。確かに使えないかも」

「どんな機能なんだ？」

ハシャーナの質問に対し、実際にひみつ道具を実演することで答えることにしたドラえもん。

ベルにひみつ道具を取り出して貰う。

「機械化機〜」

「僕って傍目から見るとこんな感じの声を出してるのかな？」

収束する光を見つつ、ドラえもんが呟いた。

やがて、機械化機を具現化したことを確認し、それをベルに渡してもらおう。

「これは色んな機械の力を人間に写せるんだ。例えばこのアベコンベの力をベル君に写せば……」

リモコン型のひみつ道具をいじり、ベルに向ける。

ちよつとのび太を触つてみて、と言う指示通りのび太の頭を人差し指でちよんと突く。

「のび太君。ちよつと円周率を計算してみて」

「馬鹿にして!! そんなの幼稚園児だつて分かるだろ! 3. 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5

8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2 7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6

9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4 9 4 4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4 0 6 2

8 6 2 0 8 9 9 8 6 2 8 0 3 4 8 2 5 3 4 2 1 1 7 0 6 7 9 ……」

「こんな風にアベコンベの能力をコピーしてるから、ベル君に頭を触られた頭の悪いのび太君は逆に天才になったんだ」





「っ!?」【突キ進メ雷鳴ノ槍代行者タル我方名ハ雷精靈雷ノ化身雷ノ女王】  
 誰一人として当たることが無かった砲撃の砂塵に目を見開き、続いて忌々し気に表情を歪めた。

驚くのは一瞬、その後に繰り出す超高速詠唱。

魔法の使い手として生まれながらの最上位者である精霊としての本領を遺憾なく発揮する。

「[サンダー・レイ]」

黄色の魔法円が展開され、雷の槍を射出。

人類の投擲では到底再現不可能な破壊の矛先が向けられたのは、最も脅威性の高い猪耳の人間。

「……っ!」

オツタルはその矛先を見据え、上体を逸らす。

決して急いだように見えない行動は槍の空振りと言う形で格の違いを見せつけた。

「魔法種族としては俺の知るエルフたちを凌駕している。だが、魔導士としては……」

【九魔姫】やヘディンの足元にも及ばんな」

冷徹なまでの分析。

魔法のスペック頼りのゴリ押しなど、【猛者】には通じない。

「そしてこの速さならば……お前には追い付けん」

「何を当たり前のことをグダグダ言つてやがる糞猪」

オツタルの言葉に反応したのはこの場に到着したアレンだ。

その脚の速さと協調性の無さを存分に活かし、他の面々を置き去りにしてきたらしく近くに他のメンバーは見えない。

ちらりとシルを見て、非常に不機嫌そうに表情を険しくした男はオツタルの言葉も鬱陶し気に返す。

「都市最強だと謳われておきながら、いつまであの耳障りな魔法こえを垂れ流させていやがる」

「シル様の安全を優先したまでだ」

「笑わせんな。こうなる前にふん縛つてホームにでも転がしておくべきだったんだ。テメエらは好き勝手にさせすぎなんだよ」

「……」

一応、オツタルは自派閥の団長なのだが敬意の欠片もない。

難しそうな顔をして黙りこくったオツタルから目線を外したアレンは、穢れた精霊とそれを相手にヒットアンドアウトアウェイを繰り返す「豊穣の女主人」の従業員たちを睨みつけた。

「どいつもこいつもかったるい……目障りだ愚図共」

冷え冷えと通るアレンの声。

それが聞こえたわけではないだろうが、ビクリと反応したアーニヤが振り返り、焦つたように叫んだ。

「兄様……!?! ルノア、クロエ! 離れるニヤ!?!」

「はあっ!?!」

「轢き殺される!」

アーニヤの尋常ではない様子に二人も振り返り、尋常ではない殺気に慌てて飛び退いた。

三人を吹き飛ばし、直進する黒い影。

それを確認した穢れた精霊は即座に迎撃を行った。

「永遠ノ凍土ノ如ク氷結セヨ数多ノ刃代行者タル我ガ名ハ水精霊水ノ化身水ノ女王」

短文詠唱を高速で唱える。

水色の魔法円を展開した穢れた精霊は口を大きく開いた。

「アイシクル・エッジ」

先程シルを貫こうとしていた氷の柱がアレンに向かう。

それを見たアレンは顔色を変えずに更に加速する。

「なっ、速い!？」

ルノアの驚愕の声が耳に届く事すらない。

音も、景色も、魔法すらも、全てを置き去りに駆け抜ける姿は正に都市最速。

「前に躲すか、アレン」

オツタルが言うように最短の回避行動を取ったアレン。

最早その頭には穢れた精霊の首を獲ることしかなかった。

しかし、それを黙って見ることに等閑派閥イヴィルスがするはずがない。

「行け、化け物共!!」

「あー、あの狂信者完全に忘れてたニヤ」

シナリオライターによって穢れた精霊を呼び起こした張本人である狂信者の号令で、

極彩色のモンスターたちが広間フロアに集結する。

知ったことかと駆け抜けようとするアレンだったが、狂信者のある指示で足を止めざる得なかった。

「芋虫を殺せ! コボルトヴィオラス!!」  
ヴィルガ

首に付けられた魔道具マジックアイテムが怪しく光ると、狂信者の指示通り近くの芋虫たちをその触

手で攻撃するコボルトヴィオラス。

弾けたその体液は結界となってアレンの前に現れた。

「っち」

「ははは！ そのまま溶解液に突っ込めばいいものを!! だがこれで迂闊に近寄れまい

!!」

「……だから何だ。気持ち悪い色の化け物共を先に皆殺しにしてから、改めてデカブツを仕留めればいい話だ」

「……っ。ひひっ」

アレンに睨まれ、怯む狂信者だが掠れたように笑う。

「いいや? 一瞬でも誰も近寄れなければいいのだ。それで最悪の厄災は誕生する!!」

それこそが世界是正!! 物語の終わりが始まる瞬間だ!!」

狂信者は役目は果たしたとばかりに無防備になった。

もう、この先の展開。闇派閥イヴイルスの勝利は見えていると言わんばかりに。

その話を怪訝そうに聞いていた冒険者たちだったが、穢れた精霊から突如として発せられた悲鳴と威圧感に身構えた。

一見すると何も変わっていないように見える穢れた精霊。

しかし、何かが違う。場の誰もがそれを感じ取る。

そして、その存在は笑った。



## それは人を殺すモノ

立ち込める砂ぼこり。崩壊した偽りの箱庭。

これは随分と懐かしい光景だ。

殺戮と破壊の限りを尽くした暗黒期を彷彿とさせる。

「(こ)ほっ、(こ)ほっ。……がつ……」

ズタボロの身体を這わせるように、ヴィトーは息を潜めながら進んだ。

口に広がる不快な感觸。やはり自分の血は駄目だ。

(運が良かった。いや、彼の運が悪かった、が正解でしょうね)

あとほんの少しの蓄力チャージで自分は再起不能だっただろう。

その一秒の差が彼にチャンスをもたらしていた。

念のために、と言うよりは嫌がらせのような意味で持たせていたしあわせトランプの

道化師ジョーカーに救われたようだ。

(しかし、あのひみつ道具は無効化される。異世界の存在がいたようですしね。これ以

上は期待できない)

後は彼の不幸がどこまで続いていたか。



流石に偽りのオラリオとともにあれが破壊されていけば、もうやれることはない。

ベル・クラネルの一撃は、ヴィトールの箱庭をグチャグチャにした。そこに隠していたひみつ道具まで壊されている可能性は……残念ながら高いだろう。

しあわせトランプの道化師ジョーカーの効果は不幸をもたらずだけ。

今のヴィトールが大ダメージを受けているように、勝てる戦いを無理矢理ねじ曲げることはない。

あくまでも、勝ちの中から不幸の要因を追加させるだけなのだ。ヴィトールが生きていると言う不幸がトランプの限界かもしれない。

(いや、希望はある。街が粉微塵になっていない限り、あれが壊れていない可能性はある。ならば、その可能性を道化師ジョーカーが手繰り寄せていけば……)

ヴィトールが向かうのは原作における「ヘステイア・ファミリア」最初のホーム。寂れた廃教会。

目立たず、地下に隠し部屋のあるこの建物は、隠しものをするには打ってつけだ。地下室への階段を慎重に降りる。

ポツポツ地下室による再現だか、そのお陰で頑丈だ。

階段を降りきり、それが安置してある場所を確認したヴィトールは。

「……は、はははっ」



穢れた精霊が先程までのままであったらそのまま仕留めていただろう。

しかし、敵に明らかな異常事態イレギュラーが発生している以上は迂闊な行動はとれない。

そう、数多の視線を潜り抜けた第一級冒険者たちは感じているようだ。

「火ヨ、来タレ——」

「詠唱かつ！」

「止めるニヤー！」

先程と変わらない声色。

立ち昇る魔力から広域に影響を及ぼすと判断したアレンが駆ける。

続くようにアーニヤも動いた。

2人の猫キャットヒール人による縦横無尽な攻撃。

銀と金の閃光が幾十、幾百の格子となつて穢れた精霊を囲む巨大な檻と化す。

「……つち」

アレンの動きに合わせて槍を振るうアーニヤを見て、不快気に舌を打つアレンだったがそれ以上は何も言わなかった。

正確には、言つてる状況ではなかった。

「タケ猛タケヨタケ猛タケヨタケ炎タケノタケ渦タケヨタケ紅蓮タケノタケ壁タケヨタケ業火タケノタケ咆哮タケヨタケ突風タケノタケ力タケヲタケ借りタケ世界タケヲタケ閉タケザタケセタケ燃タケエルタケ空タケ燃タケエルタケ大地タケ燃タケエルタケ海タケ燃タケエルタケ泉タケ燃タケエルタケ山タケ燃タケエルタケ命タケ全タケテタケヲタケ焦タケ土タケトタケ変タケ工タケ怒タケリタケトタケ嘆タケキタケノタケ

号咆ゴウホウヲ我が愛セシ英雄カレノ命トキノ代償トキヲ一代行トキ者ノ名ニオイテ命トキヅル」  
詠唱が止まらない。

アーニヤの攻撃のみならばそれは変異する前もそうだった。

しかし、アレンの攻撃を受けても穢れた精霊は止まらなかった。

否、正確にはアレンの攻撃は当たっていない。

(奴に槍をぶち込んでも届かねえ、何かが弾きやがる)

単純な装甲の厚さではない。

不可視の壁が穢れた精霊の周りに展開されている。

「ニヤッ!」

「ちィ……っ」

おまけにその不可視の何かは攻撃にも転用できるらしい。

段発的に襲う謎の攻撃の前では得意の高速戦闘も本領発揮とはいかない。

どうしても、未知の攻撃の防御のために攻め手を犠牲にするしかなかった。

「やっば、これどう考えても超長文詠唱……!」

「シルとノエルを守れ!」

クロエとルノアが2人を連れて可能な限り距離を取る。

オツタルはそんな少女たちと穢れた精霊の直線状に立ち、大剣を上段に構えた。

それに合わせて「ガネーシャ・ファミリア」も陣形を組み、シルとノエルを防備する。  
 「<sup>アタ</sup>与エラレシ我ガ名ハ<sup>サラマンダー</sup>火精靈炎ノ<sup>ケシン</sup>化身炎ノ<sup>オウ</sup>女王」

詠唱を完成させた穢れた精霊は魔法を放つ直前。  
 眼下で慌ただしく動き回る<sup>ニン</sup>下等種族を見下ろし、醜悪に嗤った。

「<sup>フ</sup>アイアーストーム」

特大の炎風が巻き起こる。

<sup>ファイアボルト</sup>ベルの速攻魔法など比較にもならない業火が巻き起こり、煌々とした焰の輝きが眷属たちを照らす。

そのまま炎は<sup>フロア</sup>広間を飲み込まんと荒れ狂うと思われたが。

「……」

業火は届かない。

不発ではない。防がれたわけでもない。

それによって眷属たちが助かったわけでもない。

空中を渡り、爆発しようとしていた炎の魔素が空中で留まっていたのだ。

「<sup>サイコキネシス</sup>念動力……？」

シルの愕然とした眩き。

その言葉の意味を正確に理解できたものはいなかったが、尋常ならざる業だとは誰の

目にも明らかだった。

「こんなことがあり得るのか……?」

シヤクテイの呆然とした声が雪景色に響く。

迷宮の中に現れた小さな太陽。

人を焦がすことが無かったそれに、誰もが嫌な予感を覚えた。

「魔法が形を変えて……!」

やがて、時が止まったように静止していた炎は形を変え始める。

ゆつくりと、ゆつくりと球体に丸められていた炎の嵐は円錐状に変形していく。

まるで子供が粘土細工をいじるように不格好な姿になったそれは、より効率的に人を

殺すためのものなのだろう。

「ギシッ」

青ざめる人間たちを嗤う悪意。

オツタルの中で危機感は大最大限となり、遅きに失したことを自覚しながら彼は詠唱を

開始した。

「銀月の慈悲、黄金の原野、この身は戦の猛猪を拜命せし」

並の冒険者からすれば十分に速い詠唱。

しかし、穢れた精霊の前ではいくら時間を引き延ばしても足りない。

本来はその筈だ。

(既に魔法の変形は成った筈。こちらの詠唱を待っているのか)

それは魔法種族マジックユーズとしての自負か。

それとも怪物モンスターとしての加虐か。

「駆け抜けよ、女神の真意を乗せて」

オツタルの詠唱が完成する。

同時に、待つてましたとばかりに円錐から炎が溢れ出した。

「コレデ、オシマイ」

より人を殺す形となった炎の嵐だったものが人間たちに迫る。

狙いは人間たちの無視できない存在であるらしい、嘗て同胞だった者。

唸り上げる炎の鎌が人々の姿を照らした。

「おうじや猛者」っ！」

誰かの叫ぶように彼を呼ぶ声。

オツタルはそれに呼応するように魔法を口にした。

「……【ヒルデイスヴィーニ】っっ!!」

穢れた精霊の必殺を真っ向から迎え撃つ。

精霊の奇跡と人の絶技。ぶつかり合う両者の拮抗は一瞬。

「キシシシ」

「ぬっ………！」

やがて徐々に穢れた精霊の魔法が押し始めた。

板に炎フレイアーストームの嵐をそのまま使えば、オツタルは魔法を使うまでもなく吹き飛ばしていただろう。

炎フレイアーストームの嵐を念動力で円錐状に凝縮させた所でヒルデイスヴィーニならば押し切れた。

しかし円錐を更に念動力サイコキネシスで押し込まれれば、流石のオツタルでも難しかった。

(防ぎ、切れん………！)

自分が死ぬことは無い。

後ろの眷属たちも同様だろう。

しかし、耐久が一般人並しかないシルは話が別だ。

「構えろ、後ろに通すな！」

シヤクテイもオツタルのみでは防ぎきれないと判断。

付与魔法エンチャントや防護魔法で固めた前衛たちに指示し、オツタルと共に穢れた精霊の攻撃を

防ぐ。

「アレんツ！」

「何やってんだテメエは?!」



オツタルの指示にアレンは怒号と共に応えた。

都市最速の名の通り、オツタルが拮抗させている一瞬で最後尾であるシルの下に辿り着くと、シルとノエルを連れて問答無用でその場を離脱したのだ。

「来るぞ！ 耐えろっ！」

シルとノエルが離脱した直後、シャクティの声と共に冒険者たちは炎に飲み込まれた。

オツタルの一撃で殆ど相殺されたことで死者こそ出ていなかったが、それでもダメー  
ジは大きい。

「ぐ……っ」

「熱い、熱い……っ」

のたうち回る前衛たち。

シャクティの指示で後方に待機していた回復役ヒールラーや荷物持ちサポーターが慌てて手当を行う。  
しかし、それを穢れた精霊が黙って見ているはずがなかった。

「地ヨ、唸レ——」

「また魔法!？」

「一体幾つあんのさ!？」

アーニャとルノアの焦りに満ちた声。

まだ、体勢が立て直せていない冒険者たちを今度こそ抹殺しようと思ふと精霊は何度目とも分らない高速詠唱を開始する。

「来タレ来タレ来タレ大地ノ<sup>カラ</sup>黒鉄ノ宝閃ヨ星ノ撤退ヨ開闢ノ契約ヲモツテ反転セヨ空ヲ焼ケ地ヲ碎ケ橋ヲ架ケ天地ト為レ降りソソグ天空ノ斧破壊ノ厄災―代行者ノ名ニオイテ命ジル与エラレシ我ガ名ハ地精霊大地ノ化身大地ノ女王」

「アーニヤ、ルノア！ 守るニヤ！ ここで他がやられたらミヤーたちも死ぬ！」

「シルヤルノアは……っ」

「【女神の戦車】に任せればいい！」

自分たちでは詠唱を中断するのは無理と判断したクロエの指示が飛ぶ。

さつきまで楽勝ムードだと思えばすぐこれだチクシヨー！ と心の中で騒ぎつつ、アーニヤやルノアは兎も角、耐久の低い自分は今度こそ終わりかもしれないと身震いした。

魔法を使えば自分だけは逃げられるかもしれないが、それをやったところで寿命が雀の涙ほど伸びるだけですぐ後に死ぬだろう。

「アーニヤは【象神の杖】！ ルノアは【猛者】！」

最優先で守るべき最強戦力と指揮官を2人に任せ、クロエは回復役を守ろうと覚悟を決める。

丁度そのタイミングで穢れた精霊の詠唱も完了した。

「メテオ・スウォーム」

（うっわ、でつかい岩ばつかり。ミヤーと相性最悪）

はいやっぱむりー、と諦め状態のクロエ。

マジックサークル魔法円から現れた隕石群が不自然なまでに自分たちの所に向かつて来ている。

シルが言うところの念動力サイコキネシスと言う奴なのだろう。つまり、自動追尾する広域殲滅魔法だ。

（シヨタに囲まれてイチャイチャしたいだけの人生だったニヤ）

眼前に迫る隕石。

思い返すのは血塗られた記憶ばかりで泣きそうになる。

まあ、最後はいいところに流れ着けたし良しとしよう。

走馬灯が流れ始めていたクロエだったが、彼女の運命はここでは終わらない。

「——【ルミノス・ウインド】!!」

「ニヤ？」

無数の隕石群。

それに対抗するような凜とした声に付き従うのは、無数の緑風を纏った大光球だ。

次々と碎かれる穢れた精霊の魔法を、夢見心地に見るクロエの横に降り立ったのは一

人の妖精<sup>エルフ</sup>だった。

「遅くなりました」

「……やー。これでリユーがシヨタだったら惚れてたニヤ」

「ふざけていられる程度には余裕があるのでしたら援護は不要ですね。次からは一人で何とかしてください」

「スンマセンシタ単ナルジョークデス」

軽口を叩きながら、クロエはへたりこみそうなほどに安堵していた。

リユーは「豊穡の女主人」の戦力の中でも頭一つは抜けている実力者だ。加勢してくればありがたい。

「援軍は私だけではありません」

「みたいだニヤ」

リユー以外にも援軍はいた。

まず1人は赤い鉄の身体のデンジャだ。

「頼む、雪の精霊!!」

殺し屋ジャックから取り上げた精霊よびだしうでわによって、呼び出した雪の精霊の力で雪の壁を作り、「ガネーシャ・ファミリア」たちを守っていた。

そして、もう1人。

「デカくなったのは図体ばかりかい、このバカタレが」

「ミア……」

オツタルに降りかかる隕石を粉碎して振り返るミア。

その瞳に都市最強への畏怖はなく、手のかかる子供に向けるものだった。

「そら、さっさと反撃するよバカタレ共!! 夕餉時は近いんだからね!」

## 鐘の音と共に

圧倒的暴威。

無差別な破壊。

現実離れた光景を見た時、世の中は2種類の人間に分けられる。

即ち、恐怖を持つ者とカタルシスを感じる者だ。

「……ヴィ、ヴィトー様！ ヴイトー様!?」

ノエルの力を引き出した狂信者は後者であろうとした。

例え、そうでなかったとしても、今までの道筋を変えること等できないのだから。

心の底から湧き上がる感情に蓋をして、半狂乱になりながら変異を為した男の名を叫

ぶ。

「うっ!?」

やがて、頭上には巨大な魔法円マジックサークルが展開され、そこから次々と隕石が生み出されてい

く。

一つでも当たれば自分など軽く消し飛ぶであろう破滅の礫。

「ひい、ヴィトー様！ ヴイトー様ア!?」

いよいよ取り繕えなくなりながらも、狂信者は必至に雪景色の中を走り続けた。やがて、ボロボロになりながら仰向けに倒れているヴィトーを見つけると、一目散にその下に駆け寄る。

「……」

「ヴィトー様！」

「……ああ、貴方ですか。御覧なさい、あの威容を。あれこそ正に世界を破滅させる力」  
「浮かれるような言葉に狂信者は何も返せない。」

あんな恐ろしい物のどこに心惹かれるのか、まるで理解できなかつた。

ただ、闇派閥イヴィルスとしてはその反応が正しいのだろうとも理解できたため、狂信者は己の本心を隠し、同調する。

「……あれだけの力があれば世界是正を為すこともできます」

「ええ。苦勞した甲斐があつたというもの」

「あの存在が我らの支配下になれば恐れる者など最早いなしでしょう」  
狂信者にとって幸運だつたのは自分が闇派閥イヴィルスだという事だ。

組織を裏切らない限り、あの力が自分に向くことは無い。そう信じていた。

「いいえ？ 別にあの怪物を支配などしていませんが？」

「……ええ？」

「あれに〔合体ノリ〕で融合させたミュータントは〔人間製造機〕で造り上げた存在ですからね。異世界でジャックさんが陽動のために使ったそうですが、到底人の言うことなど聞かない……と言うよりは、人間に対して無条件で殺意を持つようですよ」

「お、お待ちください!? あれは我々の兵器として生み出したのではないのですか!」  
 ヴイトーの言葉により自分が安全圏にいるという錯覚がガラガラと崩壊する。

抱き起そうとしていたヴイトーを突き飛ばし、愕然とした様子で傷だらけの男を見下ろした。

自身を嫌悪の視線に晒しながら、それでもヴイトーは何でもないように告げた。

「この歪み切った世界……神々や人間がいる限り、是正されることなど有り得ません。ならば、闇派閥イヴィルスとして例外ではない。そうでしょう?」

その声色は何処までも透明で。

虚飾だらけだった男の真意であることは嫌でも分かった。

【メテオ・スウォーム】

遠くで声が聞こえた気がしても、狂信者は動けない。

呆然と虚空を見つめるだけ。

「おっと、ここで死ぬのは考えものです。私も是正されるべき歪みに違いありませんが、全てを見届ける必要がある。それがあの怪物を生み出した責任と言うモノでしょ





その空色の瞳を認識しようとはしなかった。

「……力を貸してくれるか、名も知らぬ妖精<sup>エルフ</sup>」

「……ええ。既にファミリアもエンブレムも持たない身ですが、この剣<sup>かたみ</sup>に誓うことはきつと許してもらえませんか？」

「その少女たちを頼む。回復魔法が使えるならば、その精霊を治療してほしい」  
シャクティはそれだけ言うのと部隊を再編するために駆けだす。

それを黙って見送ったリユーはシルとノエルを連れ、戦線から離れる。

「今は遠き森の歌。懐かしき生命<sup>いのち</sup>の調べ。汝を求めし者に、どうか癒しの慈悲を——  
ア・ヒール」

詠唱を完了させ、手から零れる光がノエルを包む。

「……ん」

苦しそうに瞳を閉じていたノエルだったが、徐々にその息遣いが穏やかになっていく。

「……ノエルは大丈夫そう？」

「分かりません。私は精霊の生体には詳しくない。私の魔法は即効性に乏しいですし、気休め程度に考えてください。そもそも、シルの方こそ大丈夫なのですか」

恩恵<sup>フェルナ</sup>を持たない人間にとって、埒外の怪物のいる戦場など、いるだけで毒だ。

そう思い、心配するリユーだったが、シルは消耗した様子を見せることは無かった。

「……私とノエルをある程度遠くまで運んだら、リユーは皆の手伝いをして?」

「できません。シャクテイの頼みだけではない。非戦闘員をダンジョンで孤立させるなど持つてもの他です」

シルの言葉をリユーはにべもなく切り捨てた。

確かにあのモンスターは危険だ。総力戦で当たるべきだろう。

しかし、シルを放置したら高い確率でモンスターと遭<sup>エンカウント</sup>遇する。

冒険者でもない街娘にはゴブリンだつて危険な相手だ。足手まといになる瀕死のノエルを連れているとあつては尚のこと。

「でも、リユーはあそこにはいないと駄目だよ! 魔法を使える人がいないと……!」

「……?」

そんなことは聡いシルならば承知の上だろう。

しかし、それでもリユーを加勢させようと言っている。

それは、遠慮などではないようにリユーには思えた。

シルには時折自分たちには見えていないものが見えている時がある。

まるで神々のような洞察力を見せるのだ。

今回も、何かが分かっているのだろうか。

(……いや、やはりできない)

シルを誰よりも深く信頼しているリユーだったが、盲信はしていない。

ここでシルの護衛を止めることなどできない。

少なくとも、代わりに護衛できる存在がいない限りは。

「シャクティは「フレイヤ・ファミリア」を囿とした意識外からの攻撃を行っています。

私が行かずとも、善戦できるはずです」

リユーがシルから遠方の戦いに目を移せば、ミアやデンジャを援軍に加えた冒険者た

ちは優位に戦いを進めていた。

ハナから協調が期待できないオツタルとアレンを囿に、いくつかの隊に分かれた散発

的な攻撃。

穢れた精霊の念動力サイコキネシスは強力だが、あくまでも意識的行為アクティブアクション。

敵の動きが分からなければ十全にその力を発揮できない。

「頼む、火の精霊!!」

「戯れよ」

特に活躍が著しかったのはデンジャとクロエだ。

デンジャは精霊よびだしうでわで火の精霊を呼び出し、熱によって辺りの雪原を蒸発

させることで目くらまし。

クロエは幻影を生み出す魔法により、穢れた精霊を混乱させている。

変異により知能が発達した穢れた精霊であったが、駆け引きとは知能だけでなく、経験もモノを言う。碌な戦闘も熟さず、スペック頼りの攻撃を繰り返す穢れた精霊に優秀な冒険者たちの裏はかけない。

そう説明しても、シルの表情は晴れなかった。

「リユー。あの穢れた精霊は子どもなの。変異してからはその傾向がより強くなった」「変異してから？ 私には寧ろ、変異してから知能が発達したと……」

「頭じゃなくて、感情面での話。あんなに表情豊かになってる。だから危険なの」

シルの言わんとすることが理解できずにリユーは戸惑う。

「感情的なことにはどうしてそこまで危機感をも？ 駆け引きにおいては感情的にさせることは悪くない筈」

「うん。感情的になれば行動は単純化されるから、頭はより回らなくなる。それは分かっているよ。でもね、リユー？ そもそも単純な行動が最適解なのだとしたら？」

「……っ!?!」

「駆け引き何て無視して力尽くで辺りを攻撃すればいい。あの穢れた精霊にはそれが出来る。時間を使う魔法に頼らなくても」

シルの回答に正解を告げるように。

穢れた精霊は徐に手を上げた。

「ゼンプ、溶<sup>トケ</sup>チャエー！」

赤子じみた声と共に芋虫<sup>ワイルガ</sup>たちが浮かび上がる。

混乱するようにバタバタと短い足を空回りさせながら、身を振る極彩色のモンスターたち。

左右に体を振っていた芋虫<sup>ワイルガ</sup>たちだったが、その体はやがて全て右方向によじれ始めた。

「ピギイイイイイイツツ!？」

芋虫<sup>ワイルガ</sup>の小さい口部から耳障りな声が叫ばれる。

無数のそれらが不協和音を醸し出す中、声に紛れてミチミチと嫌な音が紛れ込んだ。

まるで水を吸い込んだ雑巾を絞るように、細く捻じれに捻じられた極彩色のモンスター。

「ガ……ピュ……イイ……ピヤツ」

断末魔はかすれ声。

一斉に破裂した芋虫<sup>ワイルガ</sup>から溶解液が溢れ出し、滝のように流れ落ちる……前に空中で静

止した。

「また念動力<sup>サイコキネシス</sup>かつ」

アレンが吐き捨てる。

そのまま溶解液をぶつけるつもりか、と警戒する一同だったが、溶解液は空中で弧を描き、穢れた精霊の周りをぐるりと囲み円になった。

円状の溶解液は更に薄く引き伸ばされ、壁のように穢れた精霊を覆い隠す。

「行つて！ リューー！」

「シル!？」

「あれは魔法でしか防げない！ でも、オツタルさんのじゃダメなの！ リューのルミノス・ウインドじゃないと!？」

シルの必死の剣幕に、リューも考えが揺らぎ始める。

（あれは壁？ いや、シルの慌てようからして攻撃？ あの壁を広げて範囲攻撃を……いや、あれだけ薄められていれば溶解液と言えど、冒険者たちの武器で防ぐことは出来るはず……!?!）

その時、リューの視界に飛び込んだのは奇妙な光景だった。

冒険者たちの手元から一斉に武器が飛んで行つたのだ。

それらが空中で静止していることから、穢れた精霊による念動力サイコキネシスだと理解したり、は青ざめる。武器が無ければ、素手ならば溶解液は防げない。

「っ！ 【今は遠き森の空】 ——」

魔法でしか防げないとはこういう事かとようやく理解する。

武器を失った冒険者が溶解液に触れずに守るにはステイタスに刻まれた魔法しかない。

【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちは奪われた武器たちが空中から襲い掛かるのを防ぐので必死。魔法を使えても、高度な並行詠唱を習得している者はいないようだ。

安全圏にいるリユーが詠唱するしかない。

(しかし、私の魔法は長文詠唱。間に合うか……つ)

【無窮の夜天に鏤む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を】

リユーが魔法を詠唱している間にも、溶解液の壁は膨張を続け、冒険者たちにせまる。

【猛者】の後ろへっ!? 急げ!」

【駆け抜けよ、女神の真意を乗せて】ツ!!」

穢れた精霊が溶解液の壁を作り出した時から、詠唱を始めていたオツタルが魔法を完成させている。

流石は都市最強だとリユーは感嘆するが、ここでシルの言葉が脳裏を過る。

【猛者】の魔法では駄目? それは一体……)

【ヒルデイスヴィーニ】!!」

迫る溶解液の壁を前に、魔法を炸裂させるオツタル。



念動力サイコキネシスで形作られたとはいえ、耐えきれぬはずもなく、溶解液の壁には一筋の割れ目が生まれた。

「ギシシシシ……」

その間を潜り抜ければ、切り抜けられる。そう信じた冒険者たちの耳に入る特徴的な笑い声。

割れ目の先には醜悪に嘲笑う穢れた精霊がいた。

「[ライト・バースト]」

溶解液の壁に囲まれている間に詠唱を追っていた穢れた精霊による砲撃魔法。

回避しようにも周りは溶解液の壁。防ごうにも武器も盾も手元にはない。

必殺の魔法を叩き込むための清々しいまでのスペックによるゴリ押し。

(魔法で相殺をつ、[猛者]おうじゃの再度詠唱は間に合わない!?)

リユーは必至に魔法を詠唱するが、どう考えても間に合わない。

穢れた精霊の念動力サイコキネシスが届かないほどの距離。

それは、自分の攻撃も簡単に届かないという事。

すでに詠唱が完了した穢れた精霊の魔法を相殺など、している時間はない。

万事休すかと思われた時、音が、響いた。

——リン

(……う？　これは鐘の音？)

或いは聞き逃してしまふような小さな音。

しかし、ダンジョンの中で自然に発生することが無い音。

それは希望の到来を告げる音色だ。

「ファイアボルト」　ツツ!!

吹雪の中から現れたベルが砲声する。

光の粒に包まれ、巨大化した炎雷が雪景色を緋色に照らす。

驀進する速攻魔法は穢れた精霊の轟雷を打ち消し、顔面に着弾した。

「アアアアアアアアッ!?!」

焼け焦げた臭いが充満する中、顔を抑えて絶叫する穢れた精霊。

間髪入れずにベルは次の手を繰り出した。

使うひみつ道具はチョーダイハンド。

「皆から奪った武器を頂戴!」

「ウツ!?!」

ベルの言葉に従い次々とベルの近くに突き刺さる武具たち。

荒く、息を乱しながらベルはすぐ傍のリユーに話しかけた。

「リユーさん!　皆の所へ行ってください!」

「クラネルさん？」

「シルさんとノエルは僕の仲間が引き受けます！　お願い、ヴィオラス!!」

ベルは後ろを見上げながら叫ぶ。

援軍を連れてきたのかと、リユも後ろを振り返り。

「……あの、クラネルさん」

「はい！　何ですか!？」

「これはモンスターでは？」

どう見ても今まで散々倒した極彩色のモンスターにジト目になった。

## 初陣のヴィオラス

ノエルたちの下へ向かうために通路を駆けている間。

僕は妙な熱を感じていた。

(背中が熱い。これは、「幸運」のスロット……?)

体に支障があるわけじゃないんだけど、妙に気になる。

まるで、何かに対して気付け、と警告されている気分だ。

「……って、うえ!?!」

これは何だろうと思いつつも、のび太君たちから聞いた話では状況はあまり良くない。  
い。

今は考えずに通路を抜けようと考えると、ポーチが勢い良く引かれた。

巨体の男の人に引つ張られるような力。思わず声が出してしまった。

「どうした坊主!?!」

「し、しあわせトランプが急に引つ張って……っ」

「何、まさか効果がちゃんと反転してないのか?」

足を止め、勝手に飛んで行きそうなポーチの中身。しあわせトランプの道化師ジョーカーを抑え

る。

（僕にまた不幸をばら撒こうとしてる？ いや、そんな感じじゃないと思うけど……）

不幸の前に何時もあつた啜られる感覚はない。

だから何だと思われるかもしれないが、何かを訴えようとしているしあわせトランプまで僕は無視する気にはどうもなれなかつた。

（背中疼きも強くなつてきた。あつちに何か……なつ!?)

しあわせトランプが飛んで行こうとする先を見て仰天した。

そこにはコボルトヴィオラスらしき影があつたのだ。

ただし、<sup>シルエット</sup>姿形が妙だ。小さな人狼型のモンスターに触手が生えているのはいい。だけ

ど、よく見ると顔から細長い棒が生えているような……

「ひっ」

人工的な灯による燐光がそのモンスターの姿を浮かび上がらせた時。

小さく、のび太君は悲鳴を上げた。

「な、なんだコイツ!?!」

「コボルトヴィオラスの口から……槍が生えている……?」

（コボルトヴィオラスは闇派閥が弄つたモンスターなのは分かつてたけど、こんな異様な姿の個体まで!?)

そのコボルトヴィオラスの口には鈍色の槍が生えていた。恐ろしいことに、槍と口の結合部近くの色は青っぽい。

これは、舌と同化しているという事なのだろうか。

「そうか！ 合体ノリだ！」

「ど、ドラえもん分かるの？」

「槍とモンスターを掛け合わせたんだよ、ひみつ道具で!!」

本当に恐ろしいことだ。

こんなことを出来るひみつ道具が異世界では簡単に売られている事も。

それを闇派閥は買い付けているという事も。

「……………いつは無視していいな」

「え？ モダーカさん？」

「見ろ、変に槍をくつつけられてるせいで首が上向きに傾いてやがる。きつと碌に目が見えてないぞ」

モダーカさんの指摘通り、コボルトヴィオラスは前が見えていないようだ。

その証拠に、人類の敵たるモンスターならば人間を前にしたらすぐに襲い掛かる物なのに、僕たちに無反応。

前に進もうとしても、槍が壁に突つかかってガンガンとぶつかっている。

「こっちは急ぎなんだ。出来損ないに構ってる余裕はない」

そう言つて興味を失つたようにモダーカさんは背を向けた。

他の皆も彼の言葉に従い、離れていく。

けれど僕は、穂先に付着した黒い汚れから目を離せなかつた。

(……)

明確な理屈があつたわけじゃない。

ただ僕は、背中の熱に押されるようにコボルトヴィオラスに向けて一步踏み出した。

ヘステイア・ナイフ  
神様の刃を握り締め、息を吐き出すのと並行して槍を切り裂く。

万全の状態。且つ、相手が動かないのが幸いした。

鈍色の棒が切り裂かれ、甲高い音が偽りの迷宮に木霊した。

「……ガ？」

突然自分の視界を覆っていた槍が消えて、間の抜けた声をだすコボルトヴィオラス。

僕はコボルトヴィオラスが状況を把握する前に、振り抜いたナイフを逆手に持ち替

え、その顔面に尽き刺した。

「ギャアアア……ッ!？」

「【フアイアボルト】」

悲鳴を最後まで叫ばせることなく魔法で顔を吹き飛ばす。

厄介な触手が働かなければ、耐久はコボルトよりちよつと上程度でよかった。

(……これで、いいの?)

既に【幸運】の疼きも、道化師ジョーカーの導きもない。

この異様なコボルトヴィオラスを倒したところでどうなるか、今のベルには分からなかった。

「ベル!! 早くしないと置いて行かれちゃうよ!」

「うん。今行くよのび太君」

今度こそ通路を抜けるために走り出した。

「やつと来たか坊主!」

「すいません!」

「よし、坊主は今のうちに蓄力チャージしておけ」

「え?」

「安全に溜めてられるのはここくらいだろう。来たと同時にデカいのぶちかましちまえ」

ハシャーナさんの提案になるほどと頷いた僕は【英雄願望アルゴノウト】を発動させる。

走る速度は遅くしないといけなけれど、周りも合わせてくれるようだ。

「ヒイ、ヒイ、ゼエ……」



「どうしたののび太君。陸に上がったフグみたいに面白い顔して」

「ぼ、僕、走るの……もう、無理……」

「情けないな君は」

ドラえもんはそう言うのと、四次元ポケットからノエルの車いすを取り出した。

「ほら、これに乗りなよ」

「た、助かった……」

「ドラえもん、僕たちも乗ろう。冒険者の人たちの速さには付いていけないし」

コントローラーによって自動で動く自作の車いすに子どもたちは乗り込んだ。

「相変わらず便利なポケットだな。ダンジョンで使えれば随分と楽できるんだが」

「ないものねだりはよしませう。ちよつと先に様子を見てきます。ヴィオラスを出さなくていい戦況かもしれないですからね」

モダーカさんはそう言うのとグングンと速度を上げて先行した。

やつぱり上のレベルともなると違うな。ちよつと自信無くすかも。

そんな風に思いながらも3分の最大蓄力フルチャージを終える。

溜め終えてすぐにモダーカさんも戻ってきた。

「魔法で荒れ放題でしたけど、少なくとも到着してすぐに消し飛ばすような状況じゃない」

「そりゃ結構」

「それと、見慣れない瓶が転がっていったんだが、ひよつとしてこれもひみつ道具か？」  
「えつと……これはグレードアップえきだね」

戦況を確認した僕たちはいよいよ目的の広間フロアに突入した。

「坊主は入ったらすぐに発射しろ！ ドラえもんはタイムふろしきとやらで回復だ！  
坊主のスキルは消耗が激しいからな！」

「はい！」

「うん！」

ハシャーナさんの指示が飛び、僕は射線上に人がいないか注意深く確認する。

味方に誤射したら上級冒険者と言えども不味い。今の魔法はそのくらい強力だ。

長い通路は終わり、暗闇に慣れた眼球に光が入る。

一瞬、真っ白な光景が視界を覆う。ダンジョンに雪？ と疑問に思うのも束の間。

爆発が連鎖する戦いの音が鳴り響いた。

「戦ってる！」

「あの面子相手にまだ倒されてなかったか。半信半疑だったが、穢れた精霊とやらの力は本物らしいな」

モダーカさんの言う通り、第一級冒険者たちが集まって尚、倒されないモンスターがいた。

……ノエルと同じ、精霊だったもの。

「でも、冒険者側が優勢みたいだ」

「何で？」

「さつきから穢れた精霊の攻撃は外れてるのに、冒険者たちは上手く連携してる。このままいけば……!!？」

出木杉君の解説が止まる。

穢れた精霊の回りに集まる妙な液体が、これまた奇妙に広がったのだ。

その液体がなんなのか。散々苦しめられた記憶が答えを教えてくれた。

「溶解液……」

冒険者たちを飲み込まんと広がる溶解液の壁を魔法が迎撃する。

その威力に圧倒されていた僕は、溶解液の壁の向こうで魔法を発射しようとしている穢れた精霊と、その直線上にいるシルさんとノエルを見つけた。

「あっ!!？」

どんな魔法か分からない。

もしかしたら、第一級冒険者の誰かが止めるかもしれない。

それでも、僕は気が付けば動いていた。

「【ファイアボルト】 ツツ!!」

撃つと決めれば即座に発動する速攻魔法。

【英雄願望<sup>アルゴノウト</sup>】による威力の増幅が合わさってその破壊力は絶大だ。

否、絶大過ぎた。

「うっ、ぐううううっ!？」

腕がブレる。

暴れ馬の手綱を握っているように、見えない強い力で腕が左右に揺れた。

まるで制御が効かない。

(高火力の魔法ってこうなるのかっ!)

「坊主!」

運良くハシャーナさんが近くにいて、支えてくれなかったら大暴投も良いところだった。

でも、お陰で雷炎は光の粒子を撒き散らしながら精霊の魔法に向かい、消し飛ばした。

魔導師でもない僕がそんなことを成し遂げた代償は大きい。巨大な爪で削り飛ばされたかのように消えた体力と精神力<sup>マインド</sup>。

さつきまで明瞭だった意識も途端に霞始めて……

(あ、これ駄目だ。初めてだけど、きつとマインドダウン……)

「ドラえもん! タイム風呂敷!!」

ぐったりと力を失っていく僕の体を支えるハシャーナさんが、唾を飛ばす勢いで指示を出す。

すぐにバサツ、と布型のひみつ道具をかけられた僕の視界に再び雪景色が写る頃には虚脱感はずつかり拭かれていた。

「ありがとう、ドラえもんさん」

「いきなり魔法を使うから焦ったよ……」

溜め息を吐くドラえもんさんにごめんなさいと謝りつつ、僕は自分の右手に視線を落としました。

そこには魔法を打つ前と同じ、【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>の光があつた。無論、最大蓄力<sup>フル・チャージ</sup>で。

「タイム風呂敷でスキルを使う前まで戻す……上手くいったね」

出木杉君も僕の腕を見て、満足そうに頷いた。

これが出木杉君の考えたタイム風呂敷と【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>のコンボ。

先に限界まで力を溜めて放った後にタイム風呂敷を使えばあら不思議。また【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>を満タンまで溜まった状態で即座に使えるのだ。

これを聞いた時、冒険者側は戦慄したものである。

会心の成果。しかし、浮かれている余裕は僕にはなかった。

「リユーさん！」



「あ、えっと、あのーそのーう……」

駄目だ、誤魔化せる気がしない。

(どどどどどどどうしよう!?)

一応考えていた言い訳が動揺のあまり完全に消し飛んだ。

吸い込まれるような空色の瞳に見つめられると、全てお見通しだと言われてる気分になる。

(友好的なモンスターですと正直に言っても信じられないだろうし、調教テイムしたって言うのも無理があるし……)

ああでもない、こうでもないと考えていると横から見ていたシルさんが話しかけてきた。

「ひみつ道具ですよね？」

「え？」

「さつき、ベルさんが細長いなにかを地面に使ってたのが見えていたので……それで作った『偽物』なんですよね」

これは、誤魔化してくれてるのだろうか？

何故シルさんが助け舟を出したかは謎だが、ここは藁にも縋る気持ちで飛びつくしかない。

「そうなんです!! えーと……く、空気クレヨンでヴィオラス書いてみました!」

「何故、態々<sup>ヴィオラス</sup>食人花を……」

「な、なぜ? えっと、その、ああああ……か、可愛いからですよ(?)」

「そ、そうですか」

前に使ったことのあるひみつ道具がそれらしい効果だったから、何とか誤魔化せた。リユーさんの中で僕の評価はガタ落ちしてるだろうけど。

……誤魔化せたって言えるのかなコレ?

「とは言え、そのモンスター……らしきものを全面的には信用できません。いざという時は貴方の魔法で吹き飛ばせるように、貴方もシルの下にいてください。その方がシルもノエルも喜ぶでしょう」

僕も監視役として残ることを条件にリユーさんも穢れた精霊との戦いに参戦した。

確かに何の枷もなくいきなり現れたヴィオラスを信用は出来ないだろうし、僕が魔法で遠距離攻撃できるなら前線に出る必要もない。

これが妥協点としては良い所だろう。

「分かりました」

「それでは失礼します」

少し、ノエルを見た後、リユーさんは前線に向かった。



「そんなわけで、ちよつと慣れないかも知れませんが、お願いします」

「……詳しくは聞きませんか？ さつき、皆をカツコよく助けてくれたお礼です」

このヴィオラスが、闇派閥イヴィルスが使役する極彩色のモンスターと同種であることは勘づいているはずだ。

だけど、見逃してくれると言うシルさんには感謝しかない。

シルさん相手だと全部見抜かれそうだったから、一安心だ。

僕は視線を背後の上方に移し、語り掛けた。

「ちよつとゴタゴタしちやっただけ……力を貸して、ヴィオラス。シルさんやノエルを守るために」

「オオオオオオオオオオツツ!!」

僕に応えるように咆哮したヴィオラスが縦横無尽に触手を振るう。

穢れた精霊の指示か、僕たちに向かい始めていた芋虫ウィルガやコボルトヴィオラスたちが圧

倒的射程リッチによって空高く吹き飛んだ。

## ノエルの願い

境界が曖昧になっていく。

この世界における『ノエル』と言う個。

内と外とを隔てる心の壁。

(もどつて……いくみたい)

そう思った時、ふと脳裏に浮かんだのはいつかの光景。

しんしんと降り注ぐ雪の中、一人ぼっちで団欒の灯を見つめ続ける『 』。

同じ神々の子でありながら、強すぎる神秘と希薄な自我によって人々と共存できない定めをノエルはやつと思いつ出した。

きつと、力を出し切りかつての『 』のように希薄な存在となったことで、自分の中の核心に触れることが出来たのだろう。

そして、夢とも言えない透明な空間は役目を終えたように沈黙し、ノエルの意識は覚醒に向けて急速に浮上した。

「……あ」

「ノエル、起きたか？」

泥の様な微睡みを抜け、真っ先に感じたのは肌寒さ。

鉛が変わってしまっただと思うほどに重い瞼を開ければ、この世で誰よりも信頼する少女の顔が映り込んだ。

「おカーさん」

「……………もう、思い出した？」

「……………」

シルの言葉に目を丸くする。

そんなノエルを見て、シルは寂しそうに笑った。

炎雷の光に照らされながら、ノエルを抱きしめたシルは囁いた。

「分かるよ、お母さんだからね」

「……………」

息苦しさにノエルの目尻から涙がこぼれた。

精霊である自分を気持ち悪く思われないか、それが怖かった。

だから、そんなことないよと抱きしめる熱が温かくて、人間の子供のようにノエルは泣いた。

「皆、ノエルを心配してきたんだよ？ リューも、アーニヤも、ルノアも、クロエも、ミアお母さんも、のび太君も、ドラえもんさんも、出木杉君も。そしてベルさん……………お父

さんも」

シルが顔を上げる。

つられて彼女の視線の向く先を見れば、脂汗を流しながら巨大な炎風を連射するベルの姿があつた。

それだけではない。遠く、大きな怪物の下で「豊穣の女主人」のウエイトレスたちは戦つていて、のび太たちはベルと一緒に迫りくるモンスターをそれぞれのひみつ道具で倒している。

「……あ」

じわりと浮かんだ涙の先で巨大な怪物は啞つた。

空に描かれる魔法円<sup>マジックサークル</sup>。紫の輝きと共に現れた隕石群が殺到する。

「不味い、全部撃ち落とすのは……」

「……そうだ！ お願い、ヴィオラス!!」

余りの出鱈目な威力に圧倒されていたベルたちだったが、何かを思い付いたのび太が駆け出す。

のび太は手に持つ容器から出た液体をベルが寄り掛かっていた大きな植物にかけた。

「！ オオオオオオオオオオオオオツツ!!」

「これは……」

「グレードアップえきでパワーアップしたんだよ！ 効果は一時間しか持たないから気を付けて」

ドラえものの言葉を証明するように、ヴィオラスはその触手で降りかかる隕石全てを粉砕した。

パラパラと破片が降り注ぐ中、ベルは再び魔法を発動する。

「[ファイアボルト] !!」

冒険者たちを襲う隕石を薙ぎ払いながら、一直線に進む速攻魔法。

それに対し、穢れた精霊は付与魔法で対抗した。

「【荒<sup>スサ</sup>べ天<sup>テン</sup>ノ怒<sup>イカ</sup>りヨ】」

短文詠唱による雷の強化。

更に無数の触手を盾に「[ファイアボルト]」を防ぐ。

無論、最大蓄力まで溜めた魔法はそれだけでは防ぎきれず、炎風は守りを突破して穢れた精霊の寄生する死体<sup>タイタン・アルム</sup>の王花の花弁を燃え散らした。

「~~~~ツツ!! フフツ……」

そのダメージに表情を歪めた穢れた精霊だったが、それでも彼女は余裕だった。念動力により十数体のモンスターを浮かび上がらせる。

「『ギューイイイイ!』」

「グギャツ……!?!」

それらは血管を浮かび上がらせて苦しみ始めたと思うと、体内から極彩色の魔石を飛び出させた。

魔石を抜かれたモンスターたちが灰化していく中、穢れた精霊は空中に浮かんだそれらを口に運び、美味しそうに咀嚼する。

「魔石を食べて……まさか!?!」

「……アア」

モンスターの力の源を取り込んだ穢れた精霊の身体がブルリと震えると、黒く炭化していた花卉が生え代わる。

「回復薬代わりに魔石を食べたのかー!」  
ポーション

この広間フロアにいるだけでも数えきれないほどのモンスターがいる。

厄介な特性を見せた穢れた精霊を苦々しく見つめる冒険者たち。

「……!?!」

戦い、傷ついていく彼らを見たノエルは決心する。

自分に来ることをやると。

「おかしさん」

「それでいいの? ノエルの身体はもう……」

「わたし、もうみんなにきずついでほしくない」

シルにも、ベルにも、のび太たちにも、「豊穰の女主人」の皆にも、冒険者たちにも。そして、変わり果ててしまった同族にも。

「だから、わたしのぜんぶをつかって、おわりにする」

戦いで竦んでばかりだった少女の願い。

そのためにノエルは自分を使い切ることを選択した。

「……………」

それに対して、シルは叫ぶように何かを言いかけ、それをしてはならないと自分の口を噤んだ。

溢れ出る想いを抑え込み、ベルを見る。

「……………？ ノエル、何を……………」

シルの視線に気が付いたベルが振り向き、ノエルの様子に声を上げそうになり、ノエルを抱くシルの視線で全てを理解した。

止めたいと言う想い、止めてはならないという葛藤。

それらをベルとシルから感じ取ったノエルは微笑み、二人の耳には届かない小さな声でありがとう、と呟いた。

「【ファイアボルト】！」

炎雷はモンスターではなく、ベルたちの目の前の地面に突き刺さり、雪が熱されることによって発生した蒸気がその場にいた者たちを包み込んだ。

それは目くらまし。ノエルのやろうとしていることへのベルのせめてもの援護。

「ノエル……！」

ベルはノエルを見た後、再び迫りくるモンスターたちに向き直った。

視覚を封じられれば、穢れた精霊もコボルトヴィオラスも様子を伺うしかない。

しかし、目の無い芋虫ヱイルガはお構いなしに進んでくる。

速攻魔法を使えるベルに休んでいる暇などない。

だからその瞳に焼き付けた。ノエルの戦いを。

「……………」

ノエルの身体が光る。

もしもベルが蒸気の目くらましを作ってなければ、薄暗い空間で目立ちすぎていただろう。

かつて、数多の英雄たちを導き、切り開く力を授けたように。ノエルは穢れた精霊を打倒するための力を顕現させようとしていた。

「う……………く……………」

苦悶に表情を歪ませるノエルをシルは静かに抱きしめる。



青い輝きに仄かな銀の燐光が重なり、ノエルの手の中で細長い物体を形成していった。

「!?」

冒険者たちを触手で振り払っていた穢れた精霊が弾かれるようにノエルを見る。

未だに蒸気は晴れず、彼女の眼に映るのはかすかな光のみ。

しかし、モンスターの本能か、それとも同じ精霊であつたからか。

ノエルによつて自分に通用しうる必殺が形成されていることは理解できたらしい。

「クツ!?」  
 「猛タケヨ猛タケヨ炎タケノ渦タケヨ紅蓮タケノ壁タケヨ業火タケノ咆哮タケヨ突風タケノ力チカラヲ借り世界トヲ閉トザ

セ燃ナゲエル空燃ゴウホウエル大地燃ワレエル海燃ウミエル泉燃イヌミエル山燃ヤマエル命イノチ全イノチテヲ焦土イノチト変工イカ怒リイカト

嘆ナゲキノ号咆ゴウホウヲ我ワレガ愛カセシ英雄カノ命トキノ代償トキヲ一トキ代行者トキノ名トキニオイテ命トキヅル与アタエラレシ我

ガ名サラマンダーハ火精靈ケシン炎ケシンノ化身オウ炎オウノ女王オウ」

高速詠唱。

所々聞き取れた炎に関する単語から放たれる魔法を予測した冒険者たちは慌てて防御の構えをとる。オツタルもいざとなつたらス切りキル札を使うべきかと思考を巡らせる。

（皆の警戒心が上がった？ これから来る魔法はそんなに強力つてことだ！）

遅れて参戦したベルにはその魔法は分からないが、第一級冒険者が身構える魔法だ。

悔めることは出来ないといざと言う時のため、グレードアップえきをのび太から譲り受

ける。

これで魔法の威力を更に底上げできるはずだ。

「ファイアーストーム」

しかし、穢れた精霊の繰り出した魔法は冒険者たちが考えていたものとは少し違っていた。

「念動力で凝縮しない……？」

先ほどの円錐状ではなく、その名の通る炎の嵐として現れた魔法。

強力ではあるが、先程とは違い貫通性がない魔法では万全の態勢を敷いた冒険者たちは倒せない。

なんのつもりだと訝しんでいたリユーは、やがてその狙いに気付いた。

「!? 炎が引き延ばされて壁に……いや、これはシルたちを囲もうと!」

弱った精霊を殺すのに脅威力の貫通性は必要ない。

必要なのは得物を逃がさないための檻だと言わんばかりの非情な策。

(駄目だ、「ファイアボルト」じゃ防げない!?)

ベルの速攻魔法は直線的な魔法だ。

炎の壁を突破したとしても、それはただ穴を開けただけ。

四方から迫る炎はノエルを殺すには十分すぎる。

ヴィオラスであつても守り切れない。

グレードアップえきで強化されていても、魔法が苦手であることには変わらないのだ。

ならばドラえもののひみつ道具で……と考える前に炎の壁はそこまで迫っていた。  
恩恵フエルナを持たないドラえもんでは反応できない。

「一か八か、空いた穴から突破するしか……！」

それをすれば先ほどのオツタルたちの二の舞だと理解しながらも、やるしかないと腹を括る。

しかし、砲声しようといった瞬間、飛び込んできた影があつた。

「させないニヤっ！」

「な、アーニヤさん!？」

炎の壁を飛び越えて現れたアーニヤは、高速で槍を回転させて炎を散らす。

誰もが意表を突かれる中、真っ先に動けたのはアーニヤだつた。

敵の狙いに気付けたわけではない。そんなアーニヤは賢い猫キャットヒューブル人ではない。

ただ、何よりも『家族』を大切にしている彼女だからこそ、真っ先に無力な『家族』であるシルとノエルに意識を飛ばし、その危機を察知できたのだ。

この瞬間だけは、彼女は都市最速よりも速かつた。



し、詠唱を続ける。

「……相変わらず大した並行詠唱だ」

シヤクテイはそんなリユウの姿を確認すると、団員たちに指示して遠距離攻撃による穢れた精霊の詠唱の阻止に動く。

リユウを魔法で薙ぎ払おうとしていた穢れた精霊は、「ガネーシャ・ファミリア」の妨害に怒りの声を上げた。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火せいの加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人とも。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ——星屑の光を宿し敵を討て」

レベル4でもトップクラスの敏捷を活かした助走によつて、リユウは高く、高く飛んだ。

マントが羽のように広がる中、その体から緑の光を迸らせ、号令と共に魔法を放つ。

「【ルミノス・ウインド】！」

無数の魔力弾が炎の壁を削り取る。

薄く、引き延ばされた炎など、妖精の風の前には無力だ。

ノエルを殺す魔法は完全に消滅し、ノエルを隠していた蒸気も完全に晴れた。

そして、ノエルはシルの腕の中で『氷の槍』を創造し終えた。

「……ベルさん。これを使ってください」

「これを、僕が？」

「念動力サイコキネシスで武器が奪われる以上、他の人たちじゃ穢れた精霊に辿り着く前にこの槍を奪われてしまう。ひみつ道具で奪い返すことが出来るベルさんが使うべき何です」

「……なら、シルさんはこれを持っていてください」

ベルが渡すのは機械化機のリモコンだった。

「チョーダイハンドを奪われたら元も子もないですから、チョーダイハンドの能力を自分にコピーしておきます。これはそのため大切なものだから、シルさんが持っていてください」

「……分かりました」

シルに機械化機のリモコンを渡したベルは、膝を折ってノエルの持つ槍を掴んだ。

それは見た目通りひんやりと冷たくて、見た目よりずっと重かった。

「こんなに、重いんだ……」

噛み締めるように目を瞑る。

この重さを忘れないように。自分の中に刻み込んだ。

「おとーさん……」

「ノエル……」



## 『穢れていた』精霊

ノエルが造り出した『氷の槍』。

穢れた精霊に終焉をもたらす為に造られたその力は一目瞭然だった。

「アアアアアアアア!!」

当然、それを向けられた穢れた精霊自身の目にも。

不遜にも自分に害しようとする者への怒りか、それともはつきりと感じる死の予感への恐怖か。叫びながら<sup>サイコキネシス</sup>念動力によって<sup>ヴィルガ</sup>芋虫たちを捻りつぶし、大量の溶解液を大地に溢した。

これではベルがああ雪原に足を踏み入れた途端、その足からドロドロに溶かされてしまっただろう。

「また溶解液かニヤ!?!」

「ちよつと、冒険者君のステイタスでアレに当たったら流石に不味いんじゃない?」

「向こうも『氷の槍』を持てるのは少年だけって分かってるほいニヤ。ここまではするってことは『氷の槍』の威力を裏付けできたとも言えるけど」

穢れた精霊の指示を受け、襲い掛かる頻度を増したコボルトヴィオラたちを撃退



し、3人は如何にベルを穢れた精霊の下へ送り届けるか考える。

「つて……ニヤニヤ!? 雪がせり上がってるニヤ!?」

しかし、その答えを得る時間を悠長にくれてやる道理は穢れた精霊にはない。

どれだけ圧倒的な力を持つ眷属が集まろうと、防ぎきれない大質量ならばベルだけを殺すことが出来る。

大火力を持ちながら、全く前線に出るそぶりを見せずヴィオラスに守られていることから、この地に集った冒険者たちの中ではベルは身体能力ステイタスは決して高くないと穢れた精霊は見破っていたのだ。

「こいつ、どんだけ力があるんだよー」

「うっわ、念動力サイコキネシスマジ反則チート。もう何でもありニヤー」

平野に現れる雪雪崩。

明らかに不自然なそれは、穢れた精霊の念動力サイコキネシスは自然現象すら再現するという事には他ならない。白色の波がベルを『氷の槍』ごと押し潰そうとした時、ヴィオラスは咆哮と共に迎撃した。

「オオオオオオオオオオオオツツ!!」

グレードアップえきによって強化された巨体でベルやのび太たちを守りつつ、雪雪崩を正面から受け止めた。

無論、サイコキネシス念動力によって生み出された雪雪崩が自然に消滅するはずがない。ヴィオラスのやっつていることは時間稼ぎに過ぎない筈だった。

「撃てっ!!」

しかし、ヴィオラスの稼いだ時間の中で冒険者たちは適切に対処して見せる。

シャクテイの指示の下、「ガネーシャ・ファミリア」の団員たちが雪雪崩に後ろから攻撃を仕掛ける。

ベルしか狙っていない雪雪崩は、背後の「ガネーシャ・ファミリア」に全く害を及ぼすことはなく、無抵抗にその形を崩した。

「普通に走っていくのは無理だね……だったらこのひみつ道具を!!」

ベルを穢れた精霊の下に送り届ける。

そんな役目を果たせそうなひみつ道具を、急いで脳内で選定し終えたドラえもんは四次元ポケットを弄った。

「どこでも大ほう〜」

取り出したのは武骨な大砲とモニター。

【どこでも大ほう】は、どこでも狙った場所へ人や物品を飛ばして送れる大砲型のひみつ道具だ。空中に弧を描いて飛ぶことが出来るこれならば、地面に足を付けて移動するより格段に安全だろう。

なにより、発射されたものは新幹線に追いつくほどの速度で飛行できるのだ。穢れた精霊が何かを企む前に到着できる筈。

「ベル君!! この中に入って! これで飛ばすから!」

「分かりました!」

大砲に入れられる等、普通の人間は拒否するだろうが、そこは異世界人。

そもそも大砲を知らないらしく、抵抗もなく入り込んだ。

「よし、後は目標地点を設定して……」

「ドラえもんさん。もし飛んでる最中に攻撃が来たらどうするの?」

「シルさん……?」　だ、大丈夫だよ。どこでも大ほうは飛ばされた人は建物に当たっても傷一つないんだ」

「それは穢れた精霊の攻撃でも守り通せる?　もしくは、単に雪の塊を顔にぶつけて窒息されるような攻撃でも大丈夫なの?」

「……」

「ごめんなさい。意地悪してるわけじゃないの。ただ、私はベルさんに万が一もあつて欲しくない。だから——オツタルさん、アレンさん」

「(ト) (ト) (ト)」

「……」

シルが呟くように2人の名を口にすると、彼らは当然のようにそこに現れた。まるで姫君に付き従う従者のように。

「お願いします。ベルさんを守って下さい」

「……承知しました」

「つち」

シルの言葉にオツタルは表情を変えずに返答し、アレンは露骨なまでに不機嫌になった。

しかし、異論はないようで黙って槍を肩に担ぐ。

因みに、2人が相手していたモンスターや穢れた精霊の攻撃は、2人が急に抜けたことでデンジャー一人に集中していた。

「畜生つ、あいつら全部俺に押し付けやがった!」

「ちよつ、彼を援護しないと突破される!」

「デンジャー!?! 頑張つてー!?!」

精霊よびだしうでわと内蔵してある改造火器によってそれらを殲滅するデンジャと、慌てて彼をひみつ道具で援護する出木杉とのび太によって戦線は維持された。

「ヴィオラス……だったよね。貴女はベルさんが発射されたら、同時にこの2人をその触手で飛ばして。出来る?」

シルの問いにヴィオラスは頷くように体を揺らした。

「目標、設定したよ！」

「お願いします！」

「3、2、1……発射！」

ドラえもんの掛け声によつて発射されるベル。

続いて、跳躍したオツタルとアレンはヴィオラスの触手に足を掛ける。

そして、穢れた精霊に向かつて思い切り踏み込むための足台として利用した。

タイミングを見てヴィオラスが押し出したこともあり、2人はベルに随伴するように空を跳ぶ。

「ッー」

シルの読み通り、ベルを殺そうと雪の塊が飛んでくる。

それらをそれぞれの得物で切り払い、オツタルとアレンはベルに一切の攻撃を届かせない。

「【猛<sup>タケ</sup>ヲ猛<sup>タケ</sup>ヲ猛<sup>タケ</sup>ヲ炎ノ渦ヨ紅蓮ノ壁ヨ業火ノ咆哮ヨ突風ノ力ヲ借り世界ヲ閉<sup>ト</sup>ザセ燃エル  
ソラ燃エル大地燃エル海燃エル泉燃エル山燃エル命全テヲ焦土ト変<sup>イカ</sup>工怒リト嘆<sup>ナゲ</sup>キノ  
ゴッホウ我ガ愛セシ英雄ノ命ノ代償ヲ一<sup>ト</sup>代行者ノ名ニオイテ命<sup>アタ</sup>ジル与<sup>アタ</sup>エラレシ我ガ名ハ  
サラマンダー火精靈炎ノ化身炎ノ女王一<sup>オウ</sup>ファイアーストーム】」

これまで以上の高速詠唱。

炎の嵐を召喚した穢れた精霊は念動力サイコキネシスによって炎を束ね、壁とした。

「こんな弱火で防ぎきれると思うかつ！」

そんな脆弱な守り轆き潰してくれる。

そう吠えるアレンだったが、穢れた精霊の狙いはそこではなかった。

「来タレ来タレ来タレ大地ノ殻カラヲ黒鉄ノ宝閃ヒカリヨ星ノ撤退カイビヤクヨ開闢ノ契約ヲモツテ反転セヨ空ヲ焼ケ地ヲ碎ケ橋ヲ架ケ天地ト為レ降りソソグ天空ノ斧破壊ノ厄災―代行者ノ名ニオイテ命ジル与エラレシ我方名ハ地精霊大地ノ化身大地ノ女王」

「!?」

炎の壁を維持したまま新たな詠唱。

頭上に現れた巨大な魔法円マジックサークル。

そこから隕石が到来する。

「メテオ・スウォーム」

念動力サイコキネシスによって真つ直ぐとベルたちに飛来した隕石たちは、途中、炎の壁を通過し、

粉々になった。そして、炎の壁から無数の炎を守った岩の礫が襲い掛かる。

（多い！）

（面倒な小細工使いやがつて！）

オツタルとアレンがそれらを迎撃せんと瞳を吊り上げる中、妖精の詠唱が響いた。  
「ルミノス・ウインド！」

幾千の礫に対抗するのは無数の大光球。

数だけで大した硬さの無いそれらは、あつさりとその光に飲み込まれた。

「リユーさん……！」

遠方から魔法による援護を行ったりユーは、ベルの視線を受けて頷いた。

行きなさい、と。

「っー」

残る僅かな散弾はオツタルとアレンによつて切り払われる。

穢れた精霊の攻撃は破片一つたりともベルへは届かなかつた。

既に穢れた精霊はその愕然とした表情が確認できるほど近い。

最大蓄力の「英雄願望」の輝きが槍に纏われていく。

もう穢れた精霊の隠し玉を警戒する必要もないのだ。

ここまで援護してくれた皆のためにここで全てを出し尽くす。

「ああああああつ！！」

青白く発光する『氷の槍』。

その冷気は空気を冷やし、穢れた精霊にも伝わった。

「イヤッ、イヤッ、イヤアアアアアアアアアアアッ!?」

半狂乱になりながら、かつてない死の予感を遠ざけるべく出鱈目に触手を振りまく。しかし、それが都市最強と都市最速に及ぶはずがない。

全てを切り払われ、ベルと穢れた精霊の間に空白の空間が与えられた。

『氷の槍』の穂先から目を離せない穢れた精霊が、最後の足掻きとして己の腕で振り払おうとする。レベル2の冒険者等瞬く間に塵と化す一撃は、槍に触れた途端に消し飛ばされた。

「――」

目を見開き、信じられない様子でベルを見つめる穢れた精霊。

その表情はこれまで見せた凶悪な能力が嘘のように幼くて……

「キシシ……」【アイシクル・エッジ】

パカリ、と口が開かれ、隠されていた魔法円マジックサークル。

超至近距離の一撃。槍で迎撃しように腕撃を防いだ姿勢では急には動けない。

穢れた精霊はこんな時でも狡猾だった。

逆転勝利を確信し、喜色を滲ませるその瞳に歯を食い縛るベルの姿が写る。

この詰みの状況で、ベルが選んだのは叫ぶこと。

「その魔法を頂戴っ!」



「…………エ？」

意味不明な言葉。

戸惑う穢れた精霊は、しかし構わず魔法を発射しようとするが。

「!?」

動けない。

まるで命令を受信するかのようになり、穢れた精霊の体は彼女の意思を裏切った。

(賭けだったけど、上手くいった)

チョーダイハンドによる命令は絶対。

ならば、放たれようとしている魔法を要求したらどうなるか。

命令を受けた穢れた精霊は、何とか渡す方法を考えようとして、無理だという結論に至り命令を施行しない。

その結論に至るまでに目に見えるほどの時間を要すれば、穢れた精霊の魔法のタイミングをずらすことが可能。

根拠のない賭けだったが、今のベルは最高に運が良かったのだ。

「——シッ！」

『氷の槍』を持たない左手で神様ヘステイアネイフの刃を抜き放ち、氷の魔法を弾き飛ばした。

今度こそ手は無い。呆ける穢れた精霊の胸に『氷の槍』を叩き込む。



悲しいことにこの不健康な感覚にもヴイトーとの戦いで慣れてしまった。

(……待つて、強いイシが反応?)

この戦いにおいてベルは新たに強いイシの条件を設定し直していた。

則ち、『穢れた精霊を倒す』と言う目標に。

そんな強いイシが飛んできた? 例え気を失おうと目標が達成されていれば強いイ

シは飛んでこない。だと言うのに飛んできた。それはつまり……

(穢れた精霊はまだ倒れていない!?)

全く思い通りに動かない体を無理矢理動かして後ろを見た。

そこには、空中に浮かべた無数の極彩色の魔石を貪る穢れた精霊の姿があった。

「ハア、ハア……オギヤアアアアアアアアアア……ア……」

赤子の様な鳴き声と共に噛み砕いた魔石の破片をボロボロとこぼす。

間違いなく致命傷。それを無理矢理延命するその姿は何処までも冒瀆的だった。

だが、それを傍観するわけにはいかない。ここで穢れた精霊を叩く。

まんまと回復されたら、ノエルの命懸けの想いが無駄になるのだから。

「動、け……!」

体力も精神力も失った今のベルに出来ることは無い。

天高く飛ぶことも、炎雷を発することも。

……それでも、手を伸ばす程度は出来るとベルは右腕を伸ばした。

「やれるはずだ。役立たずの身体でも！ できる筈なんだ！」

身体は十全に動かない。

ならば、自分で動かさずに穢れた精霊の下に向かえばいい。

そのための手段はここにある。

「お願い、動いてくれ……」

右腕の装備にレッグホルスターから取り出したグレードアップえきを掛ける。

ヴィトーとの戦いでは本来の力を発揮できなかった。

しかし、それはしあわせトランプの道化師ジョーカーによるもの。効果が反転している今なら

ば。

運よく動くはずだ。

「行け、伸蛙ノビエール!!」

ベルの想いに応えるように飛び出すキラアンの牙。

グレードアップした装備は本来の射程以上にロープを伸ばした。

ロープに引かれ、再び空を切った。

冷めきった空気が痛いほど顔に当たるが、それらを燃やし尽くすような赤い瞳で穢れ

た精霊を凝視する。

「オンギヤアアアアアア!!」

今の穢れた精霊を支配している者は何か。

下等種族に殺されかけていることへの憤怒か。

怪物としての人類への敵意か。  
モンスター

それとも、混ぜられた何かの悪意か。  
ミュータント

それを打ち崩す。

勝算などない。無謀も無謀。

「それでもつ、僕なんかをお父さんと呼んでくれたあの娘の為に!!」

残りかすような力を左腕に。

『氷の槍』はない。あるのはその手に握るナイフだけ。

レベル2のベルでは神の武器の力は引き出せない。

彼は負けるべくして負けるだろう。奇跡でも起こさない限り。

しかし、穢れた精霊は万が一の奇跡も許さなかった。

念動力サイコキネシスによってベルのナイフは無慈悲に手元を離される。

穢れた精霊は目と鼻の先。今からチョーダイハンドを使っても間に合わない。

「……………!! うわああああああああああつ!!」

ベルは吠えるしかできなかった。

吠えて、頼りない左腕を振るうことしか。

ペチン……と情けない音がベルと穢れた精霊にのみ伝わった。

「いや、今だー！」

その時、出木杉が動く。

シルの下へ駆け出した少年は彼女の持つリモコンのあるボタンを押した。

それは、ベルが登録したもう一つのひみつ道具の能力を目覚めさせる。

「アベコンベだー！」

ベルの身体が纏う機械の能力が、チョーダイハンドからアベコンベに切り替わる。

ベルの身体は今や巨大なアベコンベとなったのだ。

（どんな効果でもいい。ギリギリの所で崩壊を間逃れている穢れた精霊の注意を奪うだけの変化があれば、そのまま穢れた精霊は倒れるはずだ！）

アベコンベと化したベルの攻撃は、その強弱に関わらず対象にあべこべな変化をもたらす。

巨大な怪物である穢れた精霊と言えども、例外ではないのだ。

「……あ？」

反転する。

そもそも穢れた精霊とはモンスターとの融合により、その在り方を反転させた存在

だ。

仮にアベコンベにより更にそこから反転させたとすれば……

「荒すさべ天てんの怒いかりよ」

「付エン与チ魔法ヤント!?!」

「離マれろ、坊主!」

精霊の魔法詠唱。

動揺と警告の言葉が錯綜する中、ベルはその瞳に彼女の表情を刻み込んだ。

「ベル!」

時間を忘れ、その身を重力に委ねていたベルは幼い声によって我に帰った。

「のび太君!?!」

頭にタケコプターを付けた異世界の友人に咄嗟に手を伸ばす。

自分よりも身長があるベルを抱えたことで、のび太は空中で一瞬ふらつくも、すぐに踵を返した。

2人の動きに気付かない。或いは気に止めない彼女はまるで天を抱くように手を広げ、その祝まほ詞うを紡いだ。

「カエルム・ヴェール」

雷鳴に包まれる巨体。

短文詠唱でありながら、遠く離れた位置にいる出木杉にも感じ取れる圧倒的な魔力。自分が考えた悪足掻きは失敗したかと齒噛みした時、シルに抱かれるノエルの微かな眩きを聞いた。

「……………ごめん、ね」

「……………え？」

思わずノエルの方へ振り返る。

少女の頬に流れた涙の意味は分からず、出木杉には戸惑うことしかできなかつた。

「【放電】」  
ディスプレイ

唱えられた爆散鍵。  
スベルキ

雷鳴は爆音へと変化し、冒険者たちの目を光でくらませた。

「くっ……あれ？」

その爆発が自分たちに向けられたものと考え、齒を食いしばって衝撃に耐えようとす。冒険者たちだったが、いつまで経っても爆発の振動は届かない。

やがて、冒険者たちの視力が正常に戻ると、飛び込んできたのは業火に包まれた敵の姿だった。

「え……………」

「何、自滅したの……………」



戸惑いが冒険者たちの間に広がっていく中、リユーは呟いた。  
「魔力暴発……まさか、敢えて魔力の制御を放棄した……？」

天に両腕を掲げた姿のまま、炎に包まれるその姿は天罰を受け入れる殉教者の様で。

ボロボロと崩れていく体は今度こそ完全なる終焉を意味していた。

しかし、冒険者たちに歓声はない。

そして、怪物の慟哭もなかった。

誰もが静かにその最期を見届ける中、熱気を感じながら、のび太の腕の中で意識が遠ざかるベルは声を聞いた気がした。

それはかつて、英雄と共に迷宮の底で運命を共にしようとした誇り高き精霊の最期の言葉。

「ありがとう」

幻聴かも判別することが出来ないまま、ベルの意識は遠のく。

今度はもう、痛みが走ることもなかった。

## 望まぬ結末

金と言うものは力だ。

世の中のありとあらゆるものを歪める資格。

金があるからこそ、恐竜標本と言う法に触れる趣味すらやっていける。

例え逮捕されたとしても、金持ちの自分がいなくなつて困るのは政府の人間だ。

少し多めに積み立てておけば、世間に波並を立てることなく娑婆シヤバに出ることもできた。

「ヒーローごっこに一生懸命だったお子様諸君には悪いが、これも大人の知恵だ」

そう嘯いた男……ドルマンスタインだったが、何もかも思い通りと言うワケではない。

一度逮捕されたことによつて多くの恐竜コレクションは押収され、自慢だった屋敷は見事なまでにスツカラカんだ。

早急にコレクションを集め直さなければならぬ。しかし自分の馴染みのハンターは既にすべて捕まっている。釈放される前にドルマンスタインがあつさりと情報を吐いたからだ。

そしてあちこちの恐竜ハンターに恨みを買ひ、最早自分の依頼など受けてもらえないだろう。

あの時、一緒に捕まった恐竜ハンター以外は。

そこで恐竜ハンターを再び雇うことにしたのだ。

(外の情報をまるで知れない奴ならば、今のわしの悪評は知るまい)

とは言え恐竜ハンターを釈放するのは難しい。

さてどうしたものかと悩んでいた時に、殺し屋ジャックがタイムパトロールへの攻撃を企てると情報が入ったのだ。

これ幸いと資金や販売停止のひみつ道具を支援し、まんまと恐竜ハンターを脱獄させたドルマンスタイン。

ついでに妙なロボットも拾っていたようだが、ようやく過去の子どもたちによって台無しにされた絶滅動物ライフを再開できるという時だった。

過去の世界に逃げ込んでいた殺し屋ジャックと恐竜ハンターがやられたと情報が入ったのは。

「役立たず共め！」

報告した部下をタイムテレビ越しに怒鳴りつけて委縮させながら、ドルマンスタインは再び自分の娯楽に水を差した子どもと猫型ロボットに敵意を燃やした。



「……………ル……………起きてっ、ベル！」  
 「う……………っ」

闇に落ちていた意識が再び浮上する。

目を開けると、必死に肩を揺らすのび太と自分にタイムふろしきをかけるドラえもん。

【英雄願望<sup>アルゴノクト</sup>】の反動でまた気絶した自分を治してくれたらしい、覚醒しても未だ鈍い頭がそう判断し、ベルは2人は何故こんなにも悲し気なのだろうかと思っただ。

「ノエルちゃんが……………」

「」

のび太の言葉に目を見開く。

ノエルは長い時の中で徐々にその存在を摩耗し、力を失った存在だ。

闇派閥<sup>イウイルス</sup>によって、残る力を強制的に使われた彼女の命は風前の灯火だった。

そんな彼女が、穢れた精霊なんでものを打倒する武器を生み出せばどうなるのか。

「ノエル……………」

タイムふろしきを振り払い、ベルは雪原を駆け抜けた。

穢れた精霊による流星群染みた攻撃によって、雪原は荒れ放題。

焦げ臭いクレーターを足場に進めば溶解液もない。

いや、仮に足場が無かったとしても。溶解液にまみれていたとしても。

ベルはノエルの下に向かっただろう。

冷たい空気が痛いほど喉の奥で擦れるのを感じながら、ベルは必至になって走る。

「……………あ」

「ベルさん……………」

やがて、シルに抱かれるノエルの姿を見て絶句する。

ベルはノエルから精霊の気配など感じたことは無かった。『氷の槍』を形成する瞬間でさえ。

それは彼女が残り滓程度の力しか持たなかったからだ。

だから皆、ノエルのことをヒューマンの子どもだと誤解した。

しかし、今のノエルからはヒューマンとも感じ取れない。

「おと……………さん??」

それは無だった。

確かにそこにいるはずなのに、気配を感じ取れない。

もう、ノエルはヒューマン並の力すら持っていないのだと理解させられる。

それが嫌で、ベルは伸ばされたノエルの手を取った。大切な少女の存在を少しでも確かめたくて。

「うん。ちゃんと……戻ってきたよ」

「あのこを、ありがとう」

どこか夢心地な様子でノエルはベルにお礼を言う。

そんな姿にベルは唇を噛み締めた。

(助けたいって思っても……結局、僕にはなんの力も)

ノエルを治すことは出来ない。

オラリオの医師では勿論、何でもありなひみつ道具でさえ。

アルカナム神の力に準じる精霊の神秘と悍ましい呪詛。カース

それらが妙な力場を作り、完治を妨げている。

そんなことはドラえもんたちからとうに説明を受けている。

それでも、何か方法は無いのかと必死に頭を回した。

不可能であるという堂々巡りの結論が分かっていながら。

「わたし、かなしくないよ……う？」

「えっ……」

「おかーさんがいて、おとーさんがいて……アーニヤも、クロエも、ルノアも、リユーも、

ミアも、ひでおも、のびたも、ドラえもんも」

ぼんやりとノエルは周囲を見渡す。

【豊穰の女主人】の面々も、数日の間に出来た異世界の友達も、全てがノエルの宝。

「……こんなにいっぱい、わたしをしてくれている。すごい、しあわせなんだあ」

ノエルの言葉は優しさだ。

今も、無力感に苛まれるベルに握られた手を赤子のような力で握り返し、慰めようとしている。

「……そっか」

だからベルも笑う。

一度、涙に滲む視界を手で覆い、口元に笑みを作つて。

悲しい顔なんてきつとノエルは見たくないから。

不格好な笑みを浮かべるベルに、ノエルを抱くシルは微笑んだ。

その表情はこれまで見たこともないほど張りつめていて、いつも心の内が読みづらいシルが必死に悲しさを押し殺していることが伝わった。

シルはノエルの頬を優しく撫で、子守唄を謳うように囁いた。

「よく頑張つたねノエル。私たちの、自慢の娘」

ノエルはその言葉に溶けるような笑みを浮かべる。

「わたし、ずっとそとでみてるだけだった」

神々が降臨し、その役目を終えることになった大精霊。



希薄な自我しか持たない筈だった彼女はいつしか、街並みに灯る団欒の明かりに焦がれるようになっていた。

ノエルがヒューマンだと誤解されていたのは、精霊としての力が薄まっていたからだではないのかもしれない。彼女の皆と同じように生きてみたい、そんな蓄積された願望の発露だったのかもしれない。

「でも、もうさむくないよ」

ノエルの名を与えられて、「豊穡の女主人」に行きつき、様々な人と交流したのは彼女の長い生から見ればほんの僅かな時間の話だ。

しかし、ノエルに人生があるとすれば、その一週間にも満たない生活のことを言うのだろうか。

ノエルは自分の満足をこれ以上なく誇りに思っていた。

「ありがとう」

最期の力を出し終えたように目を瞑る。

その存在はいよいよ希薄になっていき、ノエルの輪郭に淡い光が零れだす。

精霊が最期を迎えようとしている。

誰に説明されたわけでもなく、そう理解した一同はそれぞれの反応を示した。

ベルとシルはより一層にノエルを感じようと抱く力を強めた。

アーニヤは目の端に涙を溜め、悲嘆に暮れる。

ルノアはノエルの儂い笑みから目を逸らし、クロエは瞑目し言葉を発しない。

リユーは沈痛な面持ちで3人の親子に何か声をかけようとして、結局何も言わなかった。

ミアはそんな面々を静かに見守っていた。

「……」

そして、出木杉は何もできなかった。

例え出会って少しであってもノエルは友達だ。その死が悲しくないはずがない。

だが、年不相応に聡明な少年はここで悲嘆に暮れることがノエルの意志に反することも理解していた。ならば、他の人たちと同じように笑みを纏えばいい。

彼女が心置きなく旅立てるように。安心して目を閉じていられるように。

(無理だ、出来ない……)

しかし、どれだけ聡明であろうと出木杉英才と言う少年はまだ子供だった。

自分の感情を完璧に抑え、偽ること等、出来はしない。

彼には親しい者を失った経験などない。平和な国の人間なのだから。

感情と理性の板挟み。

石像になってしまったような自分に失望する出木杉の耳に、もう一人の少年の声が

入ったのはそんな時だった。

「ノエルちゃんっ！」

タケコプターで空からやって来たのび太が、傍にいたドラえもんを突き飛ばすように一目散に降りてきた。

大粒の涙をボロボロと眼鏡の端から溢しながら、その声はみつともなく震えている。

「死んじゃダメだ！ もつと、もつと生きてなきやダメなんだ！」

「のび、た……？ でも、もうわたしはまんぞくだよ……？」

「そんなわけない!!」

誰もがノエルの死を受け入れていた中で、のび太だけは受け入れることが出来なかった。

「ずっと一人ぼっちでっ、ちよつと会っただけの僕たちと一緒にだった日だけがノエルちゃんの思い出なんて間違っている！ もつと楽しいことしようよ！ もつと美味しいものを食べようよ！ もつとっつ、もつともつと、もつと……」

それは、その場にいたノエル以外全員の本音だっただろう。

ノエルが一体何をしたというのだ。彼女にはもつと幸せになる権利がある。

この結末に誰が納得すると言うのか。

けれど、それは言うてはならない心の内だ。

ノエルの望む結末に、その言葉は雑音にかなり得ないのだから。

この時、のび太の感情的な言葉を聞いて出木杉が思ったことは2つ。

『なんてことを』と『羨ましい』だ。

自分には言えなかったノエルの想いを台無しにするその言葉を。

(本当に狡い。そんなの、僕だって……)

のび太の喚きたてる声に引きずられる様に、目頭に熱いものが溜まり始める。

偽りの笑顔は次々と砕け、悲しみが広間を支配した。

「……い」

「おかー、さん……?」

「別れたくない……」

もつと一緒に居たいよ、と。

決して大きくはない。しかし、無かったことにはできない彼女の本音。

母の様に慕う彼女の言葉に、遂にノエルはその表情をくしゃりと歪めた。

「あつ……う、うう……うわああああ……っ」

必死に声を抑えながら涙を流し始めるノエル。

そんな少女の姿を見て、ああ、死にたくないのだなと出木杉は当たり前前することを悟った。

もつともつと、やりたいことがあるはずだ。

もつともつと、みんなと居たいはずだ。

だけど、諦めるしかないから。だから物分かりが良くなったふりをしていたので。

「……………」

出木杉は神も悪魔も、運命だつて信じない。

世界は計算によつて紐解けるもので、奇跡と呼ばれる事象にも必ず理屈があると疑わない。

だが、この時だけ、この瞬間だけ彼は祈つた。

(誰か、この娘を……………)

「ノエルをつ、救つてよー！」

のび太の叫びと出木杉の心がリンクする。

だが、時間が巻き戻ることは無い。

力を失つた精霊が限界以上に力を使えば消滅するのは避けられないことなのだ。

ひみつ道具が無い限り。

(タイムふろしきが使えれば……)

ベルの体力と精神力マインドが尽きる度に補充させた時間逆行のひみつ道具。

あれならば、ノエルが精霊の力を使う前の状態に戻せるはずなのだ。

呪詛<sup>カース</sup>などと言う、訳の分からない力が無ければ。

ノエルの治療を邪魔する呪いの傷を睨もうとした出木杉は、そこであることに気が付いた。

「……え？」

「出木杉君？」

「ノエルちゃんの……足の傷が消えている」

「な、なんだって!？」

出木杉の言葉にその場の全員の視線が、傷があつた場所に向けられた。

ドラえもののいかなる治療でも治せなかつた傷が、夢幻の様に消えてしまっていたのだ。

「あれ、ノエルちゃんの足元に落ちているのって」

「タイムふろしき？ さっきのび太君がドラえもんさんにぶつかった拍子に落ちた？」

ベルが拾つたのは、ドラえもんがベルを目覚めさせるために使つたタイムふろしき。

急いでノエルの下へ向かうために四次元ポケットに入れる手間すら惜しんだのだから。

素直に考えれば、のび太がぶつかったことでタイムふろしきがドラえもんの手から離れ、ノエルの足に被さって治療できたという事だろう。

だが、これまで呪詛カースに阻まれていたというのに、何故今回ばかりは大丈夫だったのか。困惑するベルの懐からはらりとカードが落ちた。

それは、ベルがこの短時間で嫌と言うほどに見慣れてしまったカードだった。

「しあわせランプが……」

不幸をこれでもかと浴びせてきた道化師ジョーカーのカード。

アベコンベによって不運ではなく、幸運を誘うようになっていたそれがベルから離れた。

今までは何が何でもついてきたのに。

それが意味することは一つ。効果切れだ。

（今、最後の幸運が与えられたってこと？ それは多分ノエルの足が治ったことに気が付けたことだろうけど……まさか、呪詛カースが無くなっているのも!?）

思い浮かんだのはこの戦場に来る直前の光景。

道化師ジョーカーと「幸運」のアビリティに導かれて戦った、異形のコボルトヴィオラス。

その舌に直結した槍は呪詛カース装備。

更にその先端には黒い汚れが付いていた。もしも、それが「豊穡の女主人」に来る前のノエルを傷付けたものだとしたら。

異形のコボルトヴィオラスに相対した時、ベルは槍を断ち切った。





まさにハッピーエンド。英雄譚に相応しい光景だろう。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな  
けるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな  
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな







つまり、恩恵に蓄積されていく戦いの記録、経験値も巻き戻される。

この戦いがベルの成長に寄与することはない。

「何という傲慢!! 世界の中心に私の様な歪みは必要ないと!」  
断つておくが全て偶然である。

そもそもタイムふろしきはドラえもんのみみつ道具で、使用したのはベルの意志ではない。

もつと言うならばはこの副作用に気が付いていない。

この後、もしかしたらレベルアップしてるかも! と意気揚々とステイタス更新を行い、アビリティ上昇値オール0と言う悲しい結果にいじけて布団に包まる運命だ。

「そちらがその気ならば、こちらにも考えがあります」

しかし、ヴィトーの中で結論は固定されている。

主人公を貶めることが、自分の存在証明だという結論が。

「捻じ曲げますとも、こんな物語など。喜劇を悲劇に変え、その先に世界是正を……つ」  
戦いは終わった。

誰一人として欠けることなく、少女は無事助けられた。

だが悪意は未だ健在。

闇の奥で、光を引きずり込もうと今も牙を研いでいる。

## それはなんてことは無い日常となった一幕

小学校にチャイムが流れて暫く経った頃、靴箱の前で二人の少年がぼったりと顔を合  
わせた。

「野比君？」

「あれ、出木杉」

いつも通り遅刻&宿題忘れ&テスト0点の波状攻撃により、担任の堪忍袋をズタズタ  
にして放課後に説教を頂いたのび太。

次の授業の予習のために図書室に行き、幾つかの調べ物をしていた出木杉。

全く異なる理由で放課後の小学校に残っていた二人は、偶然にも下校のタイミングが  
ピッタリと重なったのだ。

せつかくだから一緒に帰ろうと出木杉が提案するのも当然だろう。

こうして二人は、既に人が全くいない通学路を歩いていた。

「しかし、僕と野比君が二人で帰るのは珍しいね」

「そう言えば、いつもはしずかちゃんとか、ジャイアンやスネ夫が一緒だもんね」

下校中の会話は大して意味のないものになりがちだ。

今日はずっと廊下に立たされて辛かったとか、給食のハンバーグが美味しかったとか、ジャイアンがまたリサイタルをやるうとしていているらしいとか。

一部命にかかわる内容もあったが、常々ありふれた日常を振り返った。

「そう言えばさ」

やがて、のび太が思い付いたように話題を変えた。

「あのビデオテープ。あれは家族の人たちに見せた？」

「いや。エルフのリューさんと猫キヤットヒール人のアーニャさんやクロエさんが映ってるから

ね。ちょっと慎重になっちゃう」

二人にとって共有の話題。数日前の『ダンまち』世界での冒険。

やはり刺激的な内容だったのか、日常の話の時よりも互いに熱が入る。

「もつと居たかったなあ」

「楽しかったからね。でも、こっちが僕たちの世界だから、やっぱり別れるべきだったんだらうね」

少しの寂しさを見せながら、出木杉はそれでも晴れ晴れとした表情だ。

「そうだ、少しに気なっただけけど、あの後デンジャさんがどうなったか知っているかい？」

戦いが終わった後、ドルマンスタインを逮捕したタイムパトロールが『ダンまち』の





【豊穰の女主人】に戻った一同は、戦いの後にクタクタになりながらも営業を再開していた。

ベルや護衛役の二人も巻き込んで、何とかその日の客を捌き切ったことで灰と化していたわけだが、そんな彼らに山の様な料理の数々をミアは振舞った。

それはノエルを無事に救い出すことが出来たお祝いでもあったのだろう。

全員が疲れを忘れて大騒ぎだった。

「見て見てドラえもん！ こんな大きなケーキ僕初めて見たよー！」

「パパが買ってくる奴は精々一切れを4つとかだもんね！ 美味しそうー！」

「これはブツシュ・ド・ノエルだね。クリスマスに食べる木を模したフランスのケーキだよ」

「ノエル……？ わたしとおんなじー！」

特に子どもたちのはしやぎぶりはすごかった。

色とりどりの食べ物重ねられている様は、子どもたちが持つ共通の夢と言っても過言ではないのだ。

小皿に思い思いの品を乗せて食べていると、同じように小皿に料理を盛ったベルがのび太の隣にやって来た。

「ハグツ!! ハフツ、ハグツ!!」

「そんなにかき込むと危ないよ。焦らなくても料理はなくなるから」「んっ！……ゴクン。だけどこんなにあつたら食べないと勿体ないよ！」

「はははっ。確かにね。あつちにチーズ一杯のピザがあつただけど、良かったら食べる？」

「食べる！」

ベルからピザを受け取つたのび太は美味しそうにそれを頬張つた。

そんな少年を微笑まし気に見ていたベルは、やがて呟いた。

「やつぱり君は凄いね」

「？」

「皆が諦める中で、君だけは諦めなかった。だからこそ、ノエルはああして今も笑つてい  
る」

頬についたケーキのクリームをシルに拭つてもらうノエル。

二人を見守るベルは、それを守つてくれた少年に感謝を再度伝えた。

「僕はやつぱり弱いや。のび太君やドラえもんさんみたいになろうつて頑張つただけ  
ど、まだそうなれていないみたい」

ベルは悔し気に呟く。

周りの人たちを何よりも大切に思う彼だからこそ、その命を諦めてしまったことが堪

えているのかもしれない。

彼の姿を見て、ピザを食べるのを止めたのび太はうんうんと唸った後、言葉足らずなから話し出す。

「確かにベルはあんまり強くないって言うか、いつつもボコボコにやられてる感じだけど……」

「ぐふっ」

薄々自分でも思っていたことを友達に言われてしまい、へこむベル。

ストレート過ぎて吐血しそうなダメージを受けた。

「だけど、そんなベルが必死に戦うのは格好良かったよ」

「……ありがとう」

のび太の慰めに、ベルは少しの間顔を伏せた。

ガヤガヤと酒場に楽し気な声たちが響く中、二人の間だけは奇妙な沈黙がある。

少し気まずくなり、何か言おうとのび太が思い頃、ベルは顔を上げた。

「のび太君たちはさ、これが終わったら帰っちゃうんだよね」

「……うん。本当はずっと居たいけど、これ以上はダメだつてドラえもんが」

「そっか。だったら、今のうちに言っておかないと」

そう言つてベルはのび太を正面から真っ直ぐと見た。



臚げに思い返す。

のび太やドラえもんはご馳走に夢中だったというのに、流石の気配りだ。のび太は相変わらずそう言うところはいいけど好きなあとへそ曲がりな感想を抱いたが。

「本当はもつとオラリオを見て回れたかったけどね」

「恐竜ハンターとかがいなければ良かったのに」

「そうだね」

元々ファンタジーな世界観に興味を持っていたわけだから、そう考えると消化不良だ。

ただ、あの日別れる時にはのび太も出木杉も、満足感が何故かあった気がした。

それはきつと、あの世界の人々と交流できたことが大きな刺激だったからだろう。

「……僕さ、やっぱりあの世界に行けてよかったよ」

のび太の漫画の続き探しから始まったおかしな冒険だったが、出木杉にとっては驚きと発見の連続だった。

「この世界の常識は全然通じないし、有事には全く役に立ってなかったけど、そんな苦い経験はこの国にずっと居たら味わえなかったしね」

「嫌なことを経験したのに良かったの？」

「うん。変な話だけど、そう思えるんだ。ノエルちゃんの時に何もできなかった時のこ

となんかは特に」

漫画の世界でおかしなことだが、自分の身の丈と世界の大きさを知れたと思うと出木杉は語る。

のび太にはその意見はイマイチ賛同できなかつたが。

「そういうもの？」

「うん、野比君にはあんまりピンと来ないかもしれないけど、君がドラえもんが来てからちよつとずつ立派になつてる理由も、今回分かつたかもしれない」

「立派とか出木杉が言つても嫌味にしか聞こえないよ」

「嫌味じゃないんだけどね……」

あんな風に、様々な人や様々な価値観と出会う機会が多いのび太が、出木杉は羨ましかつた。

たった一回の冒険でも学ぶところがたくさんあつたからこそ、そう思う。

「僕も色んな所に行つて見識を広めていかないとね」

「スネ夫みたいに海外にでも行くの？」

「流石にあんな気軽に海外に行くのは無理だよ。でも、ペンフレンドのスマスクんとか、繋がつてるものはいくつかあるから」

そう言えば出木杉は海外の友人と文通しているのだつたか、とのび太はだいぶ前の記

憶を引つ張り出した。

本当にのび太と同じ小学生なのだろうか。

「それに、将来の夢についてもちよつとだけ勇氣を持てた」

「夢？」

「僕、将来は宇宙に行ってみたいって思ってるんだ。出来るなら火星辺りまで」

「アメリカが月に行けたのが何年か前だったよね」

「うん、だから難しいって思ってた他の人には言えなかったけど。あの時ノエルちゃんを助けたって言う勇氣を持つことに比べたら全然簡単だって思えたんだ」

宇宙に行く。

そんな夢を語る出木杉は、普段の大人びた様子とは打って変わってのび太と同じ無邪気な少年だった。

「……やっぱり、おかしいかな？」

「そんなことないよ！ 応援する」

しずか関連のことを除外すれば、のび太も出木杉のことはいい奴だと思ってる。

そんな彼が難しい夢を追いたいというのなら、応援することをためらうことは無かった。

「まあ、僕は馬鹿だから協力は出来ないけど。出来ることなんて精々留守番程度だよ」





年齢的に犯罪である。某世界最速兎レコード・ホルダーの同類呼ばわりされるだろう。

「あ、ヒゲのおじさんだー。いらつしやいませー。ごちゅうもんは、おきまりですか？」  
 「おう！ 嬢ちゃん、今日のお勧めはなにかな？」

「??:……おす、すめ？ えつとね……え、つと……」

まだまだ未熟で、お水は溢し、料理はひっくり返し、メニューも覚えきれない。

そんな小さな店員だが、ひたむきに頑張っている姿に好感を抱く常連客は多いよう  
 だ。

「い、いやつ、いい!! 俺はいつものステーキに決まってるよな!」

「うん! すてーき5こ!」

「お、おお……なんで増えたのかなー? 流石に多くないかなー?」

「……」

「いや、おじさんお腹減ってたわ!! ステーキ5個とか楽勝だったわ!! よーし、ノエルちゃん! 持ってきてくれええええええええつ!」

「うん! 6こ!」

「つてあれー!? また増えたねえー!? あはははー! お金大丈夫かなー!」

とてとてとテーブルの下を縫うように進む小さな姿にはらはらするかもしれないが、じつと見守っているよう。

「周りの従業員たちの助けもあって大事には至らない筈だ。

「ほらっ、注文のステーキだよ！ 落っこすんじゃないよ、ノエル！」  
「うん！ これにのせれば、だいじょーぶ!!」

もう料理を落とさないように手作りの車いすに料理を乗せる。

ちよつと大きめだが、料理をいくつも持って行けるのが自慢の一品。

小さな店員によると、遠くにいる友達からの贈り物なんだそうだ。

「わ、わー、ノエルちゃんすごいなー。……俺、食べられるかな」

よいしょ、よいしょと車いすを押して注文のあったテーブルへ向かう。

従業員や他の席の客たちが見守る中、小さな店員は落とすことなくテーブルに到着した。

額を汗で照らしながら、幼い少女は曇りのない笑顔を見せる。

「おまたせ、しましたー！」

それはある日から日常となった一幕。

異世界の少年たちとの冒険の末に守り通すことが出来た幸福な結末。<sup>ハッピーエンド</sup>

奇跡によって与えられた日常は続いていく。ずっと、ずっと。